馬鹿で臆病で最強の生き残り奮闘記

健康に生きる尾床

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
馬鹿で臆病で最強の生き残り奮闘記

【Ｎコード】
Ｎ９８６７Ｒ

【作者名】
健康に生きる尾床

【あらすじ】
平民その他だったロスト。だが，神の血を受け継いでいたという何だか分からない経緯で最強の力を手に入れてしまった。無理矢理戦場で戦わされ、英雄として祭られてしまう羽目になってしまう。しかし，ロストは最強の力を手に入れてしまったが、馬鹿で臆病で、天下を取ろうや英雄になろうとする気概の無い腰抜けだった。最強らしくない最強系主人公の成長物語です。

※これは作者の自己満足と妄想が詰まった超絶御都合主義のハーレ

ムファンタジーです。

※この物語は全五章で構成される予定です。『ブリュンスタッド編』『ヴァルキリア編』『アースガルズ編』の三編は出会いと巻き込まれて戦い。『未来編』は絶望と苦悩と闘争。『完結編』はそれがどうした！終わりよければ過程はどうでもいい！御都合主義万歳！です。本当に本当の御都合主義なので御注意してお読み下さい。

第0話：ロスト（前書き）

つい衝動で最強系を書きました。俺様主人公の最強系を描きたかったですけど、作者の気質上無理でした。へたれな主人公ですけど、成長させるように出来れば描きたいですけど、どうなるのでしょうか…。最後までへたれかもしれません。不定期更新です。

第0話：ロスト

私の名はロスト。

畑を耕すことで何とか生計を立ててる平民その他だ。

だけど，実は私の中に遙か昔の神々の血肉が授けられたか何とかでとにかく他者を圧倒する力があることが判明したのだ。

周囲は私を担ぎ上げ、無理矢理に国を守る兵士に仕立て上げられてしまった。

とりあえず、周囲に言われるがまま戦うことになってしまう。

戦場は恐ろしい血のシャワーが降り注ぎ、人肉のステーキが出来上がるような本物の地獄絵図だった。

失禁しそうになったのは一度や二度でない。

私は死にたくなかった。

死にたくない一身で逃げまくったのだ。

魔法や矢の嵐が吹き荒れる中は私はただ走り回った。

本当は後方でひっそりと観戦して場を済まそうとしたのだけど…。

「前線に出なければ、一家郎党皆殺しだ！」

…という非情な命令があり、死の嵐が吹き荒れる戦場で命がけの追いかけっこする羽目になってしまったわけだ。

ただ、どうしても逃げれない時もあった。

だから、破れかぶれでつい敵を殺してしまう。

幸か不幸か殺してしまった敵は戦での一番首と言われる者だったらしい。

まさか、初陣でいきなり一番の手柄を立てることになってしまった。

この日から私は英雄と呼ばれることになってしまったのだ。

「ロストよ！此度の働き，見事であった！汝に切り込み隊長の任を命じよう」

「はっ！有り難き幸せ！今後も陛下の剣となり、敵を討ち滅ぼして見せましょう！」

私は陛下の前では感無量にむせび泣く顔を演じていたが、頭の中で

は灼熱の炎が煮えたぎるが如く怒りに燃えていた。

全然有り難くも無い。

こちらの気も知らずに陛下は満面の笑みを浮かべている。

高い地位を与えられれば、それだけ危険が伴い、死ぬ確率も高くなるものなのだ。

しかも切り込み隊長。

最前線まっしぐらの死者の国に最も近い場所に立たされる危険な地位。

陛下の健康的で艶のある顔が憎くてたまらない。

出来れば敵ではなく陛下を討ち滅ぼしてやりたい気分だ。

「ロストよ。今後も励みなさい」

王女殿下からも労いの言葉がかけられる。

王女殿下の名はセシリア・ブリュンスタッド様。

私が住まう国、ブリュンスタッド王国の白い華と称えられる絶世の美女だ。

常に白を基調としたドレスを好まれ、肌も雪のように白く、髪は太陽の如く黄金に輝く長髪。

まさに美の女神が現世に舞い降りたかのような、そんな現実離れをした美貌であった。

こんな権力闘争の坩堝と言われる王宮の中、王女殿下の美貌は私にとって唯一の癒しだ。

彼女のためだったら喜んで死ぬという輩も沢山いるだろう。

だが、私は死にたくはない。

確かに癒しになるけど、さすがに喜んで死ぬのは御免被る。

死ねば、癒しも糞も無い。

無になってしまうだけだ。

英雄になるよりは良い女に囲われ、美味い酒を浴びる方がよっぽど幸せだ。

まあ，英雄になれば、良い女も美味い酒も選り取り緑だが、代償が自分の命になるのは勘弁だ。

こうなれば、出世して高い地位を得て、安全な場所で後方指揮が出来ればいいなと思う。

いや、駄目だ。

陰鬱な謀略の渦に巻き込まれてしまい、果てに謎の遺体となって人生終了を告げられる恐れがある。

八方塞がりだ。

私はただ他の者よりも力が強いだけにしか過ぎない。

力有る者は過酷な試練を与えられるのが定めなのだろうか。

私の問いに答えてくれる者は誰もいない。

私の名はロスト。

自らの最強無比の力を持て余し、将来に悩んでいる臆病者。

衣食住が保証された生活を楽しく満喫したいのが、私の夢だ。

後，出来れば良い女と美味い酒を特典につけていきたいものだ。

強い力を持っているなら、大きな夢を抱けと人は言うかもしれない。

だが、危険な綱渡りはしたくない。

それでもって楽しく過ごしたい。

我が儘と言いたいなら言えばいい。

腰抜けと罵りたいなら罵ればいい。

それが私の矜持なのだ。

それがロストという者なのだ。

第1話：エリー

今は戦乱の世だ。

軍人になれば、死ぬ確率が物凄く高い。

その中で私は極めつけの立ち位置だ。

死神の鎌でいつでも首が切られてしまいそうな切り込み隊長。

代わりたい者がいれば、喜んで代わってあげたい。

特典は可能な限り付けてやってもいい。

誰か代わってくれ。

空しい。

無い物ねだりほど空しいことはない。

現実は時に残酷で無情なものだ。

私の体は神の血肉によって最強の力を得てるが、無敵ではない。

さらに言えば、不死身でもない。

どうせなら最強の力よりは不死身の力を授けて貰いたかった。

兵士達の情報では近いうちに戦が始まるとのことだ。

もうすぐ敵国ヴァルキリア帝国が攻め入ってくるらしい。

ヴァルキリア帝国は好戦的で戦争好きなのが、有名だ。

とにかく如何なる難癖を付けてでも戦争を仕掛けてくるという傍迷惑な国。

お陰で私が戦に出る迷惑なきっかけを作ってくれるのだから本当に迷惑極まりない国だ。

まあ、考えても仕方ない。

とりあえず、受け持つことになった隊員達と顔合わせをしよう。

そして、如何にも有能そうな者がいれば、そいつを副隊長に任命し私はお飾りの隊長として君臨するのだ。

それでもって副隊長に全てを投げ出して私は後方で安全待機。

素晴らしい。

完璧だ。

我ながら惚れ惚れしてしまう。

少し浮き足だった足取りで私は隊員達がいる広場に向かっていった。

「ロスト隊長！貴方様の勇姿に惚れ込み、麾下に加わりたいと馳せ参じました！」

隊員達の広場に着いて、いきなり暑苦しい挨拶が私に降り掛かってきた。

いや、相手は女性だから暑苦しいは失礼と言うべきなのか。

女性は王女殿下と同じような黄金に輝く髪を肩まで切り揃えており、美青年と言っても良いような風貌の女騎士だった。

美貌は王女殿下が綺麗と言うならば、この女騎士は凛々しいという表現がとにかく相応しいだろう。

「私はエリアルト・リリエンフェルトと申します。親しい者はエリーと呼びます。閣下、どうぞ，エリーとお呼びいただけないでしょうか…」

初対面でいきなり愛称で呼んで欲しいと言うとはかなり情熱的だ。

しかも、まるで女性を誘うような流し目で言ってきている。

私が女性だったら心臓が貫かれていただろう魔性の瞳。

さすがはエリアルト、いや、エリー。

最強と呼ばれた私を初対面で殺そうとしてくるとは末恐ろしい。

「では，エリー。君は私の勇姿に惚れ込んだと言っているが、具体的に教えてくれるかね？」

正直言って私は戦には一度しか出ていないし、戦場では逃げ回っていただけだ。

たまたま一番首を仕留めただけで華々しい活躍をしたなどとは微塵も思わない。

おそらくエリーの方が何度も戦に出ていて経験豊富であるに違いない。

そんなエリーが私の勇姿に惚れ込んだと言っている。

さて、エリーは私のどのような勇姿に惚れ込んだのだろうか。

「閣下は魔法や矢が嵐のように飛んでくる戦場を悠然と駆け抜けて、敵の首級を挙げるという英雄絵巻に語り継がれるような勇姿。あのお姿に見て、私の心臓が貫かれたのです。私は閣下に仕えるために生を受けたのだと悟ったのです」

何と言うことだ。

壮絶なほどまでに美化されている。

逃げ回っていた姿を駆け抜けていた姿と勘違いしているらしい。

確かに魔法や矢が雨のように降り注ぐ中、走り回っていた私の姿は勇ましく見えたのかもしれない。

なぜならば、ほとんどの者が流れ矢や魔法に直撃して天に召される中，私だけが平然と生き残って走り回っていたからだ。

これも神が授けてくれた最強の力の成せる業なのだろう。

私は敵が放つ魔法や矢を容易に回避できるのだから。

自慢ではないが昔から逃げるのだけは得意だったのだ。

「私も閣下のように戦場を悠然と駆け抜けて敵の首を討ち取りたいです！」

エリーの眩しすぎる目が私に向けられていく。

このような純真な瞳で私を見ないで欲しい。

私が悪魔だったら見つめられるだけで浄化されてしまいそうな穢れ無き瞳だ。

私はただ逃げ回っていただけなのだ。

ここまで慕われてしまったら罪悪感を感じてしまう。

相手が男だったら単なる暑苦しい野郎だと斬り捨ててやるというのに。

凛々しいような美女に期待されてしまったら、つい頑張りたくもなってしまう。

だが、これは落とし穴だ。

ここで調子に乗って戦場に突っ込んでいってしまえば、全てが終わってしまう。

けど、目の前の女性を失望させたくない。

これは私の人生で重要な岐路だ。

行き着く先は栄光か。

それとも絶望なのか。

エリーの前で格好付けるか。

それとも失望させてでも命を優先させるか。

自分の命か。

自分の名誉か。

どちらか一つ。

悩むまでもなかった。

答えはもう決まっていたのだ。

命も名誉も勝ち取ってみせる。

東洋の偉大なる先人は言っていた。

二兎を追う者は一兎も得ず。

だが、私は違う。

二兎を追う者全てを得る。

それが私の流儀だ。

安全な位置で名誉を得る。

これこそが生を受けた者の至上の夢ではなかろうか。

まあ、最悪の場合は自分の命を最優先にさせるとする。

何事も引き際が肝心なのだから。

とりあえず、エリーを副隊長に任命しようか。

まずは戦場での安全確保が最優先だ。

最強の力を手に入れたからと言って私は決して自惚れたりはしない。

私は力が強いだけで、斬られたら痛いし、血も流れる普通の人間だ。

私は最強の力を持っていても臆病者だ。

臆病者は危険を敏感に察知していくものだ。

名誉は落ちても命は落とさない。

この戦乱の世を必ず生き延びてやる。

そして、平和に衣食住が保証された生活を満喫してやるのだ。

私の情けないほどのささやかな野望の炎が全身を煮えたぎっていた。

「閣下、どうされたのですか？」

エリーが心配そうな目で私を労ってくれている。

これで壮絶な勘違いをしてくれてなければ素直に喜べるのだが，非常に残念だ。

「何でもない。ただ次の戦についての考え事をしていただけだ」

「何と閣下はすでに次の戦について思案なされていたというのですか。閣下の崇高な考えを止めてしまったことをお許し下さい！」

ただ，どうやれば安全に生き延びれるかを考えていたのにどこまで勘違いするのだろうか。

美女でなかったら張り倒しているところだ。

まあいい。

賽は投げられた。

「エリー、君には副隊長を命じる。私を支えて欲しい」

「感激です！閣下のような英雄に支えて欲しいと仰られるとは…。私はいつ死んでも悔いはありません！」

死んで貰っては大いに私が困ってしまう。

「私に断りもなく死ぬことは許さん！いいか、皆、よく聞くがいい！私の麾下に入ったからにはお前達の命は私の者だ！ゆえに私以外の何者にも殺されてはならない！これが我が隊の唯一にして絶対なる掟となるのだ！覚えておけ！」

私は隊員達に檄を飛ばす。

何だか格好良いような言い回しになってしまったが、あまり深読みして勘違いしないで欲しいと思う。

お前達が死ねば、私の死ぬ確率も高くなるだから生き残って貰わないと困るのだ。

だから、頑張って生き残って欲しい。

「「うおおおおおおおっ！」」

割れんばかりの歓声だ。

それほどまでに格好良かったのか。

少し照れてしまう。

「みんな聞いたか！隊長殿は俺達みたいな屑でも掛け替えのない命だと仰ってくれている！」

「隊長のためなら例え火の中水の中です！」

「隊長がいればワシ等は無敵の部隊じゃて！」

あまり持ち上げないで欲しい。

ただ生き延びたいだけに過ぎないのに引くに引けないところまで自分から突き進んでいるような気分だ。

「隊長…」

エリーが天使の如き瞳で私を見つめてくる。

元はといえば、エリーに持ち上げられてしまって調子に乗ってしまったのだ。

エリーの瞳はまさしく魔性だ。

いつかこの純真無垢な瞳で老若男女全てを惑わして国を滅ぼすのではなかろうか。

「私のこの身も心も、つま先から髪の毛の一本、血の一滴に至る所までの全てを隊長に捧げていきます…」

エリーは私の手を取り、手の甲に騎士の接吻を落としてきた。

ごほっ！

一瞬、私は毒入りのワインを飲んで吐血した夢を見てしまった。

思わず目眩がしてくる。

これは悪魔の接吻だ。

エリーは私を囚えたのだ。

やばい！

私はエリーに惑わされ、近い将来に英霊として祭られていくかもしれない！

それは否！

断固として否だ！

私は英霊になるよりは現世で大俗物になることを選ぶ！

エリー。

今回は負けを潔く認めてやろう。

ここまで私を嵌めていったことは見事だと褒めてやる。

だが、二度とお前の悪魔の瞳で私の海よりも深く、山よりも高い意志は崩されはしない。

お前は天使の皮を被った悪魔だ。

私は悪魔に絶対に屈したりはしない！

「隊長…私、隊長のためだったら何でもします。何でも…」

ぐはっ！

くっ…。

エリー！

何でも、だと！

どこまでも容赦の欠片も無い女だ…。

戦場以外で私を本気で殺すつもりらしい…。

どうやらエリーは私にとって天敵と呼ばれる存在のようだ。

全く神も乙な相手を用意してくれたものだ。

まあいい！

戦いはこれからだ！

私は決して負けはしないぞ！

第2話：悲劇の調練

隊を持たされたからにはまずは調練を開始しなければならない。

と言っても私はついこの間までは畑を耕すしか能が無かった平民その他だ。

いきなり兵の訓練なんて高度なことなんて出来るはずもない。

全くどこの誰が私を隊長なんて任命したのか。

思い出した。

あの幸せ太りした憎たらしい陛下だった。

あの陛下は私の幸せのためにいつか抹殺しなければなるまい。

さて、どうしたものなのか。

「隊長、いったいどんな高度な訓練して頂けるのでしょうか？」

無駄に目を輝かせてるエリーがここにいる。

私が副隊長に任命して以来付きまとってきている。

高度な訓練だと？

私が元平民その他だと知っていて言ってるのだろうか。

せいぜい少し悪知恵が働く程度だ。

まあいい。

ここは正直に話すとしよう。

一応他の隊員達も私の出自を知っているはずだ。

「皆の者、私はついこの間までは畑を耕していただけの平民しか過ぎなかった。戦では手柄を立てることが出来たが、それはたまたま私に幸運の女神が微笑んでくれたに過ぎない。故に戦術戦略は愚か、戦のイロハも知らない素人なのだ」

とりあえず正直に話す。

嘘は言ってないし、これで失望してくれるのならば、それでいい。

私の指揮に不満があると直訴して隊を追放してくれれば、万事めでたし、肩の荷が下りるというものだ。

だいたい隊長は私であるが、多分、この隊員等全員高貴な貴族出身の輩共だろう。

純粋な地位としては私は底辺に位置するものだ。

英雄と呼ばれていなかったら誰がこんな底辺身分の下に付きたがるものか。

私だったら絶対に反乱を起こして締め出してやる。

さて、隊員達の反応はどうだろうか。

「すいません、隊長。余りにも華やかな活躍ぶりについ隊長が初陣であることに失念していました…」

うむ、エリーは申し訳なさそうな目をしている。

これで失望したと喚いていたら美女でも殴り飛ばしていたかもしれない。

「私もすいません…」

「申し訳有りません、隊長…」

何だかしんみりした雰囲気になってきている。

喚かれなかったが、これはこれで苦痛だ。

期待はずれだった私が罪悪感を感じてしまうではないか。

しかし、これで私が隊を纏めるのが不可能と思ったはずだ。

名誉は得ることはできないのは残念だが、命あってのものだねというやつだ。

それに最強の力を手に入れたのだ。

いくらでも使い道はあるはず。

何もこんな権力闘争や戦場が渦巻く王宮で費やす必要も無い。

さらば、英雄だった頃の私。

この経験は私の人生で宝になる思い出となるであろう。

幸せな人生を送り、平和な茶の間でこんな経験をしたものだと笑って話す時がいつかやってくるはずだ。

私はその日を目指し、逞しく生き抜いてみせよう。

「隊長…」

新たな決意を胸に秘めていた私に水を差すようにエリーが話しかけてくる。

何だというのだ、いったい。

そうか、私の後任の引継についての話なのだな。

だが、私はまだ自己紹介をしただけで引継になるようなことを何一つしていない。

ひょっとして別れの挨拶をしろというのか。

よし、最後に涙腺崩壊させまくるような熱い別れの言葉を唄ってやろうではないか。

「諸君！私の力不…」

「隊長は私に副隊長を命じられたときに私を支えて欲しいと仰られ

ました…」

おのれ、感動的な別れの言葉を述べようとしたのに又しても水を差してくるエリー。

まあいい。

最後だから話を聞いてやるとするか。

「私はその言葉を頂いた時、胸が熱くなりました。英雄と仰られても私達と同じ人間。より身近な存在として私に希望を与えて下されたのです。私も励めば、英雄になれるのだと…」

いや、無理だろう。

私は神の力を得て英雄になったわけだし、人間だけど普通の人間ではない。

エリーは本当にどこまでも前向きに解釈してくれるものだ。

少しエリーの将来が心配になってきた。

エリーのご両親もきっと手を焼いているに違いない。

「私はすでに隊長に身も心も捧げ得ております！力不足ながらも立派にお役目を果たしとうございます！」

くっ！

何て健気な娘なのだろうか。

危うく私の涙腺が崩壊しかけてしまったぞ。

やはり天敵と認めただけあって手強いものだ。

エリーは身も心も捧げると言ってるが、私に言わせたら身も心も縛られそうな危ういものを感じさせてしまう。

私には重たすぎて潰されてしまいそうな忠誠心だ。

一度エリーとはじっくりと腰を据えて話し合わなければいけないだろう。

「隊長！私の命をすでに隊長のもので御座います！何でも言ってください！」

「戦術や戦略なんて関係ねえ！俺達は隊長だからこそ納得して付いていくんだぜ！」

何とも頼もしい連中だ。

これで変に私のことを勘違いしてくれてなければ，尚も言うこと無し！

とりあえず、私に出来ることをするしかない。

戦術や戦略はエリーを初めとして他の隊員から教えて貰いながらやり過ごそう。

私に出来ることは隊員達と模擬戦を行うことだ。

模擬戦は命のやり取りが無い安全な訓練。

これだ。

私はこれを待っていたのだ。

生死が分かれるような物騒な戦争でなければ、全然平気だ。

これならば、私は遠慮無く力を振るえる。

隊員達に私の偉大さを思い知らせる時が来たのだ。

とりあえず美形な顔の奴に対しては特に念入りに力を振るわせて貰おうか。

決して僻んでいるわけではない。

ただ、世の中の厳しさを教えようと愛の鞭を振るうだけだ。

決して僻んではいないぞ！

隊員達とは一人ずつ行うことになった。

隊員の中には三体一で行ってくださいと無茶な要求をする馬鹿者がいたが、無視した。

一対多数でも勝つことは出来るかもしれないが、思わぬ手痛い攻撃を喰らうこともあるのだ。

私は痛いのは嫌いだ。

可能な限り安全に無傷で過ごしていきたい。

隊員は全部で四百人。

一日かけて一人ずつ丁寧につき合っていった。

やるからには丁寧にしなければならない。

もちろん命の保証がされている限りのことだが。

隊員の攻撃はのろい。

余所見をしながらでも尚も余裕がある。

これも最強の力を持つが故のことなのだろう。

さすがに四百人を一人ずつ相手にするのは疲れる。

だが、後一人で終わりだ。

これでやっと解放される。

最後の一人は…。

「エリアルト・リリエンフェルト！宜しくお願いします！」

現れたな、天敵よ。

やはり最後に立ちはだかるのはお前か、エリーよ。

だが、今の私は少々優しくないぞ。

そこはかとなく軽く揉んでやろうではないか。

私は木刀を構えようと…。

「少々お待ちを！隊長一つお願いがあります！」

つくづくお前は私の出鼻を挫くのが好きなようだな。

「何だ？お願いとは？」

「私、隊長と真剣で打ち合ってみたいです！」

なぬ。

真剣で私と打ち合いたいだと…。

……。

……。

…。

冗談ではない！

思いっきり命のやり取りではないか！

エリー、最後の最後で私を陥れようとしているのか…。

さすがは私が認めた天敵だ…。

敵はヴァルキリア帝国でも陛下でも無くエリーだと改めて認識させられたようだ。

ならば、非常に、そう、非常に不本意極まりないが命をかけさせて貰おうか。

男だったら叩き斬ってやるが、女ならば再起不能で勘弁してやろう。

ついでにもっと操作しやすいような者を代わりに副隊長に任命してやるぞ。

「良かろう！真剣を手に持て！存分に相手してやろう！」

エリー、お前を天敵と呼ぶのは今宵限りだ。

後は暖かいベットで数ヶ月間健やかに眠るといい。

お前は降板となって私の舞台から下ろされることになるのだ。

「さあ、かかってこい！」

エリー、お前の最後の時だ！

神に祈るがいい！

「行きます！隊長！」

格好いいほどまでに凛とした声を発して斬りかかってくるエリー。

少々腕に覚えがあるかもしれないが、所詮は普通の人間だ。

神の力を持つ私に敵いはしない。

……。

おっと危ない。

危うく慢心するところだった。

今のはまるきり悪人が正義の味方に対して蔑んでいる感じではないか。

古来より敵を蔑んでいた悪人は須く惨めで呆気ない最後を遂げていると聞く。

私が悪人でエリーが正義の味方の構図が完成され、与えれた役割をこなすことになれば…。

私は惨めな最後を遂げ、不名誉という特典付きで死者の国にご招待されしまう！

断じて否だ！

私は運命を変えるべく己に打ち勝ち、目の前の敵にも打ち勝ってみせるぞ！

エリーの斬り込みはさすがに他の隊員よりも鋭かった。

だが、私に他の隊員とエリーとでは，じゃが芋に毛が生えた程度の違いでしかない。

私は油断無く最小限の動きでエリーの斬撃を交わしていく。

もう少し遊びたい所だが、私は慢心しないのだ。

だから、お休み、エリー。

せいぜい私という偽りの英雄に幻想を抱いて眠るがいい。

目が覚めれば、お前の妄執は綺麗さっぱりと浄化されていくのだ。

美女を傷つけるのは不本意だが、それ以上に私が傷つくことが不本意なのだ。

だから、許せ！

私は力の限り手加減を、だが、常人では重傷を負うぐらいの一撃をエリーの腹部に見舞ってやった。

「がはっ！」

私の顔にエリーの吐血が降り掛かる。

お伽噺に出てくる敵役の黒騎士のような気分だ。

こんな自分が嫌いになれないのが恐ろしい。

終わったか…。

戦いとは常に空しいものだ…。

だが、何とも言えない充実感がしてくる。

これで天敵は葬れたのだから、嬉しいのだ。

まずい。

また涙腺が崩壊しそうだ。

さて、新しい副隊長は誰に…。

「さ、さすが…です…。凄いです！隊長！」

何ですと！

私は確かに常人では二ヶ月はベットで宜しくの重傷を負わせたはずだ！

それが何だ！

食事の取りすぎで少し腹を壊してしまったわって笑って誤魔化すような乗りで復活してるではないか！

エリーが屍人の化け物のように立ち上がってくる…。

戦場では味わえない恐怖に私は対面している…。

「た、たい…ちょう…」

普通美女に迫られるのは男の本懐だと泣いて喜ぶべきなのだろう。

だが、私は泣いて逃げ出したい気分だ。

「私を…受け取って…ください！」

恐怖で動けない私をエリーが押し倒してきた。

むぐっ！

これは…エリーの唇。

ああ、私は唇の純血を散らしてしまったのだ…。

「うぅ…ちゅ…はいちょう…ちょぱっ…お慕い申し上げます…」

しかも認めたくないが気持ちよかった。

さらに相手は美女と来ている。

だが、素直に喜べない。

私はエリーに敗北の証を刻み込まれてしまったのだ。

まさに試合に勝って、勝負に負けたと言ってもいい。

「おめでとうございます！隊長！エリアルト殿！」

「戦場では鬼姫と恐れられたあのエリアルト様を落とすとはさすがは英雄ロスト様だ！」

「これは国を挙げて式を挙げたらいいかもしれないぞ！」

もうどうでもいい。

とりあえずもうベットで眠りたい。

「だったら私と一緒に…」

「謹んで遠慮させてもらおう…」

まだ童貞はやらんぞ！

今日はもう疲れてた…。

いっそのこと国が攻めてこないか…。

そんな不吉な想いに直に叶えられることになるのだ。

神はかなり捻くれているらしい。

私はもう神は祈らない！

私は私自身に祈るまでだ！

第3話：空しい戦い

あの悲劇の調練から随分と時が経った。

エリーはあの強姦接吻以来前にも増して過剰に付きまとってくる。

何度も言うがエリーは美女だ。

そこらの美女とは比較にならないほどの絶世の美女と言っていい。

だが、性格が残念過ぎる。

思いこみの激しさは尋常ではない。

しかも、中性的な容貌だから、下手すると儚げな美少年に迫られているような倒錯的な想いに駆られてしまう。

私が好みなのはセシリア様のような正統派の美女だ。

断じて男色家ではない！

「隊長！おはようございます！」

頭痛の種であるエリーが清々しく挨拶をしてきた。

「今日も一日宜しくお願いしますね、隊長…ちゅ」

私の頬にエリーが朝の口づけをしてきた！

「ちゅぱっ！」

しかも強く吸い付いて唇を離してきた！

後で鏡で自分の顔を確認しなければ…。

「隊長はもう私の者ですよ…ふふっ…」

恐い！

少し病んでいる感じだぞ！

思いこみの激しい奴が一途になると恐ろしいものだ…。

だが、私は一人の女性に縛られるつもりは毛頭無い。

多くの美女を侍らし、美味い酒を飲むという、酒池肉林が私の大いなる夢なのだ！

エリー一人に心を許してしまえば、最後、私は人生の墓場へと直行してしまう。

それだけは避けねばならない。

私は自由で優雅な生を歩んでいくのだ。

そういえば陛下との謁見に向かう予定だ。

間もなくヴァルキリア帝国が侵略してくることは耳に入っている。

おそらくその話なのだろう。

私は玉座の間へと向かっていった。

「いよいよ，ヴァルキリア帝国が進軍を開始してきた。ロストよ！汝の働きに期待しているぞ！」

何が期待してるぞ、だ！

陛下は相変わらず清々しいほどに脂肪をひけらかしている体型だ。

灼熱の砂漠に放り投げて何日でモヤシになるのかが非常に興味がある。

いつか実現させてやると私は心に誓った。

「ロスト、どうか御武運を…」

セシリア様！

貴方様こそが私の心のオアシスです！

エリーのような病んでる雰囲気が微塵も欠片も無い。

まさにセシリア様こそがこの荒みきったブリュンスタッド王国を照らす大いなる光！

死にたくはありませんが、可能な限り貴方様を守ってご覧に入れましょう！

「はっ！殿下のお言葉、まさに宝石をも勝る者でございましょう！」

セシリア様、酒池肉林が完成した暁には貴方様を第一夫人に迎え入れて見せましょうぞ！

そして、陛下、貴方様には豚鍋で煮込んで狼共の餌にしてみせよう！

私は敬礼して謁見の間を後にしようとした。

「ふふっ、それにしてもロストよ。汝もなかなかに盛んなものだな…」

陛下は嫌みったらしいような含み笑いを私に投げかけてくる。

なかなかに盛ん？

何のことだ，いったい。

「ロストに鏡を与えよ」

陛下の小間使いが私に手鏡を手渡してくる。

そして、私は鏡で自分の顔を見て、体の時を止めてしまった！

……。

……。

……。

……。

……。

……。

……。

時が動き出す！

私の頬に…。

私の頬に！

「謁見の間で口紅で顔を清めているとはなかなかのものよ、ほっほっほっほっ…」

エリアルト・リリエンフェルト！

貴様の悪魔の刻印が私の顔に刻まれていた！

私としたことが何たる失態！

「も、申し訳ございません！」

「よいよい、余も若かかりし頃は盛んだったものよ、ほっほっほっほっ」

この時ばかりは陛下の寛大さに感謝せねばなるまい。

私は心を込めて陛下に敬礼をする。

エリー。

調練の模擬戦の時はたっぷりと可愛がってやれねば…。

私は怒りの炎を元凶者にぶつけるべく全身に煮えたぎらせていた。

とりあえず、エリーを絞り込んだ雑巾のようにボロボロにしてやった。

そのとき、私に僅かの油断が生まれてしまった。

エリーは私が勝利に浸っている隙を見て、背後から押し倒してきた

のだ。

どこにそれだけの力が残っていたのだ!?

エリーは私を仰向けに寝返らせ、馬乗りになるという暴挙を起こしてきた。

隊長に向かって馬乗りなど前代未聞だ!

私の両頬を万力で締めるが如く手で挟み込んでエリーは顔を近づいてきた!

「じゅるり…」

舌なめずりをしてやがる!

このままだと私が汚れてしまう!

「おい!勝負はすでについたのだぞ!いい加減に離れないか!」

「ふっふっふっふっ…」

不気味な笑顔で私の顔に接近してくるエリーの顔。

美形だからこそ余計に恐く感じてしまう。

何が彼女をそんなに追い詰めたのだ!

「隊長、盛るのならベットの上だけにしてくださいよ」

「副隊長は情熱的だなあ。俺、隊長が羨ましくてたまらないよ」

隊員共はのんびりと私とエリーのやり取りを観賞してやがる！

お前等全員後で半殺しだ！

「たいちょう…ちゅ…ちゅば…」

「むぐっ…もごごごっ！」

エリーは私の口を覆うように口づけをかましてきやがった！

私の口内にエリーの舌が進入してきている。

凄く気持ちいい。

エリーめ，かなり場慣れしているな…。

「副隊長は何人もの女性を手込めしてきましたからねえ…」

しみじみと言っている隊員其の一。

親切な解説ありがとう。

お礼に後で全殺しの刑だ！

なるほど、その王子も斯くやの容姿で何人もの女を誑し込んだと言う訳か…。

それで今まで培ってきたスキルで私を手込めようとする魂胆だな。

だが、今回は相手が悪すぎたな。

最強の私を陥落出来るものならば、してみるがいい！

私はそう簡単にはいかないぞ！

……。

……。

…。

まずい！

気持ちよすぎる！

このままでは私は人生の墓場に直行となってしまう。

さらには男としての沽券にも関わってくる。

三度目の正直。

次は負けはしないぞ！

エリー！

「あむぅ…ぴちゃちゅ…」

「…っ！」

ここからが華麗なる反撃の時だ！

今までの屈辱を百億倍にして返してやろうぞ！

……。

……。

…。

ふぅ…。

何とか勝った…。

エリーは見事に昇天してもらった。

だが、失った物は大きかった。

戦いとは斯くも空しいものなのか…。

夜風が目に染みてくる…。

帰ろう…。

明日は本物の戦場が私を待っているのだ…。

私は私の幸せのために戦い抜いていかねばならないのだ。

気持ちよさそうに眠っているエリーを見る。

こいつはこのままにしておこう。

死にはしないだろう。

私は調練場を後にする。

まずはシャワーを浴びよう。

それから神に祈るのだ。

明日、無事に戦場から帰れますようにと。

もう神には祈らないと宣言したが、やはり神頼みは落ち着くものだ。

明日はいよいよ戦場だ。

必ず生き延びてみせる。

第４話：アイリ

私は軍事会議に招集に駆けつけていた。

いよいよヴァルキリア帝国との戦いが始まるのだ。

ヴァルキリア帝国は女尊男卑の国であり、敵対する男共を全て去勢にして放置すると言われてるらしい。

その話を聞いて思わず私は股間を押さえてしまう。

いや、私だけでない会議に出席している野郎共全てが股間に手を当てているのだ。

自分もやっている行為なんだが、客観的に見て、物凄く見苦しい行為だとつくづく思った。

だが、仕方ない。

これが男が持つ業というものなのだろう。

「それでは第一陣は…で第二陣は…」

小難しい会議が始まってきた。

私にはさっぱり分からない。

いっそのこと代理に副隊長のエリーを立てていけば良かった。

エリーはあの時以来、私の奴隷になったのだ。

朝起きたときにはいつの間にか私に口づけて起こしに来たり、危うく童貞喪失の危機になったりして…。

あれ？

エリーは奴隷になったのでは無かったかな？

以前よりもさらに酷くなっているのは気のせいだろうか。

まあいい。

とりあえずは会議の内容はさっぱり理解できないことを理解した。

これだけが分かっただけでも収穫だろう。

私は意気揚々と会議室から出ようとした。

「ちょっと待ちなさい，ロスト隊長」

いきなり呼び止める無粋な輩がいた。

誰だ、せっかく気分良く退室しようと思っていたというのに。

振り向いて私は背筋が凍るように直立してしまう。

アイリウス・アストレイリア将軍。

私が苦手とする女将軍様だ。

「ロスト隊長、貴方はきちんと作戦について理解できたというの？」

いえ、全然理解していません。

退屈だったから、空気になって溶け込んでいました。

……。

何て言えるはずがない！

「は、はあ…私は学の無い平民でして…その…」

この女将軍様はエリーとは違う意味で厄介な女なのだ。

「戦場に出る以上、そのような言い訳が通用すると思っているの？」

「はっ！申し訳有りません！」

全く、ついこの間まで私は平民その他だったというのに容赦も欠片も無い女だ。

「全く仕方ないわね…。いい、今回の作戦…」

……。

……。

……。

…。

女将軍様はこれでもかっていうほど手取り足取り丁寧に教えてくれた。

何だかんだといって基本的に良い人なのだろう。

神の力があるとはいえ、元平民出身の私にこれほど目をかけてくれる人はそうはいない。

だが、非常に申し訳ないのだが…。

……。

さっぱり分からん！

私の脳は興味の無い知識は受け付けない絶対防壁が敷かれているのだ！

嘗めてもらっては困る！

これが私、ロストという人間なのだ！

分かったか！

……。

誰に物を言ってるのだろうか…。

とても空しい…。

「どう？分かった？」

再度、女将軍様が私に理解したかどうか促してくる。

ここは嘘でも理解したと言うべきなのだろうか。

いや、私の浅はかな嘘は女将軍様は見抜くだろう。

……。

そうだ！

いっそのこと女将軍様に私が軍人として不的確だというお墨付きを頂こう！

そうすれば、あの恐ろしい戦場に出ることも無くなる！

平和で安全な緩い生活に戻れるのだ！

「今回の戦、私のような学が無い卑しき平民では荷が重すぎると思います…」

「ロスト隊長…」

さあ、私に失望するのだ！

そして、私を臆病者と罵り、軍人失格を言い渡すがいい！

何しろ私は本当に臆病者で軍人失格なのだからな！

どんな罵詈雑言も痛くも痒くもないわ！

「どうか私を隊長の任から下ろしてください。そして、優秀な…」

「馬鹿っ！」

へぶしっ！

いきなり私の頬を女将軍様が引っぱたいてきた！

それになぜか女将軍様は泣いていた。

なぜ泣くのだ？

ぶたれた私の方が泣きたいぐらいなのに…。

私はぶたれた頬を撫でているといきなり女将軍様が向かってくる。

臆病者の私を修正するつもりなのだろうか。

まあ、戦場に出なくて済むと思えば、少々痛い目に遭うのも我慢できるというものだ。

よし、覚悟を決めたぞ！

さあ、女将軍様！

私を殴り飛ばしてくれ！

そして、罵ってくれ！

……。

……。

…。

誤解するかもしれないから言っておこう。

私は至って普通だ…。

決して勘違いはしないように…。

「馬鹿…」

女将軍様は私を殴り飛ばすと思いきや抱きしめてきた！

いったい何を企んでいるのだ！

いや、理解した…。

東洋の相撲という格闘技の必殺技である鯖折りを炸裂させるつもりだな！

さすがは女将軍様だ。

やることがえげつない。

だが、女将軍様のような美女に形はどうあれ、抱きしめられただけ

でも良しとしよう。

実際、女将軍様は戦の女神と称えられるほどの英雄なのだ。

腰まである銀色に輝く髪、彫りの深い鼻立ち、氷のような切れ長の目、セシリア様が暖かく包み込むような春ならば、女将軍様は冷たくて涼やかなる風を運ぶ冬と言うべきであろう。

そんな絶世の美女に摂関の名目とは言え、抱きしめられているのだ。

国中の野郎共は血の涙を流して悔しがるに違いない。

私は至って普通だが、つかの間の至高の温もりを堪能するとしよう。

例え、この先に地獄が待ち受けていようとも…。

男は敢えて女のために地獄に落ちていくのが甲斐性だというものだ！

まあ、本当に地獄に落ちるつもりは毛頭無いがね。

さて、気合いを入れて、女将軍様の熱烈な鯖折りに耐えるとしようか…。

……。

これも私が幸せになったときには茶の間での笑い話になっていくのだ…。

……。

…。

あれ？

鯖折りが炸裂されてこない。

どうしたのだろうか。

どうした、女将軍様！

来るなら来い！

でなければ、私はいつまでもこの至高の温もりを堪能してしまうぞ！

それでもいいのか！

私はもちろん良いぞ！

「ロスト隊長…」

女将軍様の凍えるような低い声が私の脳髄に浸透していく。

やっぱり痛いのは恐い！

どうか少しは手加減してください…。

「貴方は自分の価値が分かってないのよ…」

女将軍様は私の頭を押さえ込み、さらに強く抱きしめてきた。

私の顔を包んでいる柔らかいものはやっぱり…。

神よ、私は地獄に落ちてもいいように思えてきました…。

この柔らかさ！

弾けるような弾力！

人間が味わえる快楽の極致に私は今、到達しようとしている！

私は生きながらも天に召されようとしているのだ！

これは不憫な私に与えてくれた神の慈悲なのだろうか。

神よ、感謝いたします。

神に祈ることを止めなくて良かった。

私はいつまでも神の僕です。

だから，神よ！

今しばらくこの瞬間を永遠にして欲しい！

「貴方は自分が思っていたよりも凄いのよ，ロスト…」

私の顔から快楽が離れていく。

視界に移ったのは潤んだ瞳で見つめてくる女将軍様だ。

背筋が振るえるほどの美しい瞳だ。

エリーとは違うような魔性の瞳だな。

そういえば，女将軍様は私をロスト隊長ではなく，ロストと言っていた。

「貴方ならやり遂げられるわ。私は知っている。あの時，私は敵将に討ち取られようとしていたわ。だけど，貴方が颯爽と飛び込んでいき，瞬く間に敵将の首を討ち取った姿を…」

何だか，既視感を感じてきた。

なぜだろうか。

途轍もなくまずい予感がしてくる。

女将軍様の冷たい手が私の頬に触れてくる。

「御免ね，貴方の頬を叩いたりして…れろぉ」

ぞくっとしてきた！

女将軍様が叩いた私の頬を舌で舐めてきたのだ。

非人間的な美しさを持つ女将軍様の舌はどこまでも人間らしく生暖かかった。

私の直感が告げている。

間違えない！

女将軍様はエリーに続く危ない女其の二だ！

「将軍閣下なにを…むぐぅ」

「ん…ちゅぱっ…アイリと呼んで…ロスト…貴方なら出来る。私が保証するわ…」

何てことだ…。

女将軍様，改めアイリの官能的な唇が私の口の周りを這っていらっしゃる！

まずい！

私の男の証が輝き始めてくる！

だが，素直には喜べない。

アイリは何の根拠か分からないが，私が何でも出来る英雄だと思いこんでしまっている。

おそらくエリーと同じく私の本当は情けないはずの姿が凄まじく美化されてしまい，完璧な英雄象としてアイリの脳裏で理想化されてしまっているのだろう。

これはある意味，エリーよりも厄介の女だ！

アイリは間違えなく途方もないほどの無理難題を私に押しつけて，

その度に貴方なら出来ると囁きかけてくるに違いない！

何てことをしてくれたのだ，ブリュンスタッド王国め！

よりにもよってこんな危ない女を将軍に祭り上げてしまうとは…。

この戦，負けてしまうかもしれない…。

どこか亡命する国を考えておく必要があるだろう。

「ちゅぱっ…ふぅ…私が貴方に勇気を与えてあげるわ…」

アイリが私を押し倒してくる。

また私の貞操の危機がやってきたのだ。

「貴方は私の無敵の英雄なのよ，だから軍を辞めることは許さない…ちゅう」

「むぐぅ…むごもごっ！」

私の舌が引っ張られていく！

痛い！

舌に噛みついてきたぞ！

息が出来ない！

冗談ではない！

これならば，まだ鯖折りの方が良かったぞ！

「むぐぐぐ…ぷはぁ…はぁ…はぁ…アイリ…」

ようやっと解放してくれた…。

本当に死ぬかと思った…。

「ふふっ，覚えときなさい。貴方が軍を辞めることは決して許さない。なぜならば，貴方は私の英雄なのだから…もし，逃げようとしたら……殺すわよ…ちゅ」

果てしなく物騒な言葉を言って，再び私の唇にアイリ様のそれが重なる。

気持ちいい…。

いや…。

やっぱり痛い！

死ぬほど痛いぞ！

何てことだ！

アイリ様はまた私の舌を噛んで引っ張ってきてやがる！

「んぐぐ！」

「はなひて…ふらはい！」

離してください！

舌が噛まれて引っ張られているため上手く言葉に出来ない！

女に舌を噛みちぎられて天に召されていく…。

……。

こんな結末は嫌すぎる！

神よ！

助け給え！

……。

……。

…。

もう終わってしまう矢先だった…。

死者の国に旅立つ手前に私の舌が解放されたのだ…。

助かった…。

「ぷはぁ…ふぅ…ごめんね…痛かったかしら？でも，思い知らせてあげたかってたの…。もし，逃げたらどうなるかということを…ち

ゆ」

再度アイリ様は軽く触れる程度に口づけてきた。

今度は舌を噛んでこなかった。

「…ね」

何が，ね，だ…。

アイリ様の唇には血がこびり付いていた。

現世に降臨した恐怖の吸血鬼だ！

いや，実際に吸血鬼は存在するらしいが，アイリほどの恐怖を抱くことは無いと断言出来るぞ！

「大丈夫…貴方は何も心配しなくても良いわ…貴方が私の英雄である限りにね…。作戦は，その場で伝えることにするわ。さあ，戻りなさい，ロスト隊長…」

「はっ！失礼します！」

私は逃げるように会議室を立ち去っていった！

エリー，お前が天使のように思えてきたぞ！

あのアイリと比較すれば，エリー，お前はまさに天使だ！

調練のときには出来る限り優しくしてあげよう。

それでもって本物の悪魔であるアイリを浄化するように仕向けてやるぞ！

私は転んでもただでは起きないのだ！

アイリ。

私の幸せを阻む絶対悪よ。

いつかこの手で滅ぼしてやるぞ！

覚えておけ！

……。

最近，戦場よりも多く命のやり取りをしているようだ。

何だか戦場の方が身の安全が保証されそうな気がしてきた。

私がおかしくなってしまったのだろうか。

それは否だ。

おかしいのはこのブリュンスタッド王国だ。

いつか内通者が現れるかもしれないな…。

まあいい。

とりあえずは…。

戦場に行くとするか…。

第5話：決戦前

私は戦場の大地に佇んでいる。

ここはブリュンスタッド領土のリストリア平原。

ブリュンスタッドは国を守るために幾度もこの平原で血と汗と涙を流したらしい。

ここら一帯に生い茂っている草花は戦死者の血肉を養分として育ったと言っても過言ではない。

私もこの草花の養分にならないようにしなければいけない。

少し身震いしてきたな。

もうすぐしたらヴァルキリア帝国軍が押し寄せてくる。

ヴァルキリア帝国は生粋の女尊男卑の国であり，政治，経済，軍事全て，女が統括しているという希有な国だ。

まさに女による女のための国。

だが，男にとっては地獄の果てとも言うべき恐怖の国であるらしい。

男は牛や馬以下の家畜扱いをし，まずは去勢させられることで男の尊厳を根刮ぎ奪ってしまうという。

まさに男にとっては究極の恐怖だ…。

想像しただけでも思わず股間を押さえてしまいそうだ…。

正直ブリュンスタッドのことは別にどうでもいいが，掴まった男は去勢されてしまうというのが頂けない。

私の夢は衣食住が保証された安穏として生活を送ることだ！

そして，特典付きで世界中の美女を侍らして，美酒を浴びていくという酒池肉林の世界を実現させること出来れば尚も良し！

ヴァルキリアはそんな私の野望に立ちはだかる敵である！

女は男がいてからこそ成り立つもの！

逆もまた然り！

男と女の交わりにより愛を育むからこそ人類は進化繁栄を築き上げていくものなのだ！

これはブリュンスタッドを守るなんていう小さな戦いではない！

男の尊厳を守るため？

否！

人類の繁栄をかけた，いわば聖戦なのである！

故に負けるわけにはいかない！

……。

というわけで我が隊には粉骨砕身の思いで頑張ってもらわなければな…。

主に私が無傷で生き残るためにも…。

これが一番重要なことだ。

今回の戦では我が隊は奇襲部隊として配置される。

とりあえずアイリの指示の元にブリュンスタッド軍と交戦しているヴァルキリア軍の横っ腹を不意打ちで抉っていくという作戦らしい。

不意打ち…。

大いに結構なことだ！

戦いに綺麗も汚いも無い！

勝って生き残れば正義なのだ！

真正面から戦えば，どんな危険に合うのか分かったものではない！

私は痛い目に合うのが嫌いだ！

……。

まあ，アイリの作戦通りに私が指揮し，後は隊員共の肉の盾で安全に戦況を把握していけばいい。

私は作戦の最終確認のために陣営に足を運んでいく。

足取りが重い…。

これから最恐の女と顔合わせしないといけないからな…。

アイリに逢いたくない…。

しかも一人で来いとの命令だ…。

これではエリーを盾にすることができないではないか…。

気が重いな…。

「遅いわね，すでに作戦会議での最終確認は終わった後よ。全く女を待たせるものではないわよ，……ロスト…」

ぞくっ！

いきなりロスト隊長ではなくロストと呼んできやがった！

何て馴れ馴れしい女だ。

舌が不意に疼いてくる。

私はアイリに舌を喰いちぎられそうになったことを思い出す。

あの恐怖の接吻なぞ愛の営みでは無い！

断じて否だ！

さあ，アイリ！

私は以前のように怯んだりはしないぞ！

「何か弁解はあるのかしら？ロスト…」

「いえ，申し訳有りません…」

とりあえず，恐いからまずは素直に謝りましょう。

……。

やぶ蛇をつつくのは愚か者がすることだ。

私は賢く小利口に生きていくのが信条。

こんなの屈辱でも何でもないわ！

「とりあえずは許します。最終確認をするけど，貴方達の軍は私の合図を受けて奇襲をかけてくれればいい。ただ，それだけよ。けど，一番重要な役目なのだから，失敗は許されないわ。いい？ロスト…」

「はっ！肝に命じて謹んで任務を遂行して参ります！将軍閣下」

「……」

「ア…アイリ…」

「ふふっ…励みなさい，ロスト…」

私が愛称を呼ぶことで今まで不機嫌だったアイリは満面の笑みを浮かべてくる。

普段のアイリを知っている野郎共が見たら悶絶すること間違え無しの女神の微笑みだ。

だが，私には残念ながら悪魔の微笑みでしか見えない。

全く，これでセシリア様並に清楚な性格だったら非の打ち所が無かったと言うに…。

非常に残念過ぎるぞ！

「ふふっ，ロスト。私の愛しい英雄様。この戦で私を再び魅せて欲しいわ…」

アイリが私にしなだれかかってくる。

恐い女とはいえ，やはり美女にしなだれられるのは悪い気分ではない。

だが，同時に言いしれぬ恐怖も特典付きで迫ってきている。

まだ戦いは始まっていないのになぜ命の危機を感じてしまうのか…。

早く戦が始まって欲しい。

「必ず私に至高の勝利を捧げるのよ，愛しいロスト…ちゅ」

首筋にアイリの唇が吸い付いてきた。

私の男の証が元気になってきている。

このまま気持ちいいままでやり過ごしていきたいものだ。

「でも，もし，無様な姿を晒したら，あむっ！」

ぎゃあああっ！

今度は私の首筋に噛みついてきやがった！

物凄く痛いぞ！

私は今，アイリという吸血鬼に血を吸われているのだ！

なぜ，戦場以外の方が命の危機に晒されるのが多いのだ！

……。

……。

…。

「ちゅぱっ…ふぅ…分かったかしら？ロスト…」

「わ，分かりました…であります…アイリ…」

まさに天国と地獄だった…。

私の首筋から血が少し流れている。

何てことだ…。

無傷で戦場から帰るという私の崇高な目論見が早くも崩れ去ってしまうとはな…。

しかも，よりにもよって味方の手で傷を負わされてだ…。

舌は噛まれ，次は首を噛まれるときたか…。

次に噛まれるとしたら…

私はふいに股間を押さえる！

ここだけは絶対に死守するぞ！

ヴァルキリアと一戦交える前に去勢になったと知れば，末代までの恥だ！

「期待してるわよ，ロスト隊長」

おのれ，アイリ…。

いつか必ず調教してやるぞ！

首を洗って待っていろ！

私は逃げるように陣営から去っていく。

……。

とても恐かった…。

とりあえず早く隊員と合流しよう。

「隊長，どうでし…その首はどうしたのですか！」

エリーは私の首筋の傷を見て驚いているようだ。

ここはアイリのことは言わない方がいいだろう。

間違えなく士気に関わってしまうからな…。

絶対に言わない方がいい…。

「凶暴な野犬に絡まれてしまってな…」

「何て痛々しい。私が癒して差し上げます！ちゅ」

うおっ！

今度はエリーが私の首筋に吸い付いてきた。

「ちゅぱ…ぴちゃ…ちゅ…れろぉ…ちゅう」

……。

うむ，確かに癒されるぞ。

エリーの暖かい唇と舌が私の首からアイリにされた仕打ちを，恐怖を洗い流してくれているようだ。

これからはエリーを少し大事にしてやらねばなるまい。

対アイリ戦用兵器としてだけでなく，一人の女性として…。

私の酒池肉林の世界が成就した暁には一員として迎え入れてやろう。

ふいにエリーの愛撫が止まる。

どうしたのだ？

まだ，私は満足していないぞ。

「ふぅ…隊長…首筋から…知らない女の香りがしています…」

……。

……。

…。

エリー。

やっぱり一員に迎える話は無かったことにさせてもらえないか…。

正直，心臓が止まりそうなほどの殺気を感じてしまったぞ！

「ふふっ…隊長とは…後でゆっくりと…話し合う必要がありますね…」

アイリの影に隠れていて忘れてしまっていたが，エリーも危ない女だったのだ。

エリーにアイリのことは絶対に教えられない！

教えてしまったら私がどうなってしまうのか見当が付かない！

「だから，必ず生きて帰りましょうね，隊長…」

感動的な台詞のはずなのに死の宣告に聞こえてしまうぞ！

戦場で見事生き残ったら本気で脱隊しようか…。

このままでは命が幾つあっても足りない…。

真剣に亡命しようかどうか悩んでいたとき，ラッパの音が鳴り響くのが聞こえてきた。

これは敵が見えてきたという合図だ。

いよいよヴァルキリア軍とのご対面の時が来たというわけか…。

「隊長！」

エリーのせっぱ詰まった声が私の妄執を打ち払ってくれる。

「全隊配置に付け！戦が始まるぞ！」

私は隊員に命令を下し，戦の準備に取りかかっていく。

エリーとアイリの問題は後回しだ。

目の前に危機に対処しないといけない。

つくづく神は私に試練を与えるのがお好きなようだ。

だが，神の試練を乗り越えた先に待っているのは栄光だ。

私は必ず栄光をつかみ取り，夢を叶えてみせる！

……。

だから，エリー，隊員共よ！

どうか，私を守り抜いてくれ！

第6話：出陣

軍隊が一斉行進してくる足音が重々しく響いてくる。

さてと，いよいよ戦闘開始というわけか。

だが，少々気が乗らないな。

痛い目に合うのが嫌だから当然なのだが，問題は相手が女だということだ。

ヴァルキリア帝国は女が中心の国だ。

だから，軍隊も女が中心で構成されているのだろう。

生き残るためとは言え，女を斬り捨てるのは忍びない。

私の夢は酒池肉林なのだからな…。

出来れば，戦いは避けたいものだ。

……。

これが戦乱の世である所以なのか…。

つくづく難儀なことだ…。

まあ考えても仕方がない。

とりあえずはヴァルキリアの乙女達の華が戦場で咲き誇る光景をじっくりと見物するとしよう。

荒んだ戦場の中ではさぞ目の保養になるに違いない。

ただし，遠くで眺めるだけで満足しなければいけない。

うっかり近づき過ぎてはこちらが血の華を戦場で咲き散らせることになってしまうからな…。

周りの隊員達も期待しているようだ。

共に戦場の美しき幻想を眺めようではないか。

私が大いに許すぞ。

「隊長…」

エリーからは黒い炎が燃えさかっている幻想が見えてくるが無視だ。

もうすぐだ！

歴史的瞬間をこの目に焼き付ける時が今，近づいてきている！

さあ，私の目を潤してくれ，ヴァルキリアの乙女達よ！

我等を天国に導き給え！

神よ！

アリルイヤ！

……。

……。

……。

……。

…。

私は目を擦った。

何だ，あの生き物共は…。

どう見ても野郎共ではないか！

いや，違う！

よく見てみれば，女の象徴である胸が膨らんでいる。

だが，あれは胸というよりは大胸筋が異常発達しただけの代物にしか見えないぞ！

ごほっ！

私は思わず吐瀉物を吐いてしまい，膝を折ってしまった…。

周りの隊員達も同様な状態に陥っている。

何て物を見せてくれたのだ，ヴァルキリアよ！

くっ！

なるほど，理解したぞ！

これがお前達の策略というわけなのか！

ならば，見事としか言いようがない！

一戦交える前に我が隊は既に虫の息と成り果ててしまっている…。

おそらく他国もその策略に陥ってしまい，成す術もなく滅びてしまったのだろう…。

げに恐ろしきはヴァルキリア帝国なり！

私は美人ではない女性達に対しても紳士的であることを自負してきた。

だが，物事には限度があるぞ！

あのような生き物共を私は女とは断固として認めない！

あれは神が作り損ねた出来損ないだ！

男もどきだ！

突然変異体だ！

これはもはや人類の繁栄云々ではない！

人類の存亡の危機だ！

あのような突然変異体が地上で繁栄すれば間違えなく人類は滅びてしまう！

これはもはや聖戦にあらず！

神が下した最終戦争である！

人類の双肩は我等の手に委ねられている…。

小太鼓が戦場で響き渡っている。

終末を告げる天使のラッパが鳴り響いているかのようだ…。

もうすぐ神の審判が下される…。

女の突然変異体が野太い声を発して戦場の大地を振るわせている。

突然変異体が発する声は耳障りな上に気力が萎えてしまいそうだった…。

これが神が私に与えた大いなる試練だというのか…。

駄目だ…。

挫けてしまいそうだ…。

「隊長，大丈夫ですか…」

おお，エリー！

私は美の女神を見た！

これこそが人類が育んでいく愛なのだ！

私は思わず涙を流してしまった…。

エリー，お前は私の天使だ！

私はエリーを思わず抱きしめてしまう。

「あ，あの…隊長…」

「エリー，私に勇気を与えてくれないか…」

美青年風の容貌であるエリーだが，体は華奢で柔らかかった。

これがエリーの温もりなのか…。

エリー，私は悔い改めよう…。

お前の存在がこの荒んだ戦場に希望という名の光をもたらしてくれる…。

私はお前のために戦うことをここに誓おう。

「あの…だったら，隊長…」

「なんだ?」

「接吻を…私にも…勇気を下さい…」

ぐっ！

私は間違っていた…。

このような慈愛に満ちた女神を悪魔だと罵っていた自分が恥ずかしい！

私は心から愛を込めてエリーに接吻を捧げた。

「ん…」

萎えかけた私の体に大いなる力が漲っていく！

これが愛の力だと言うのか！

「あぁ…隊長…愛しています…」

荒んだ戦場で私とエリーは愛の世界を築き上げていた。

もはや恐れるものは無し！

私はエリーを腋に抱きかかえながら，地面に蹲っている兵士共に声をかける。

「立ち上がるのだ！ブリュンスタッドの戦士達よ！我等の働きが国に栄光をもたらしていくのだ！さあ，共に戦おうではないか！大いなる栄光をこの手に！勝利をセシリア様に捧げるのだ！」

ここで陛下の名を出さなくても罰は当たるまい。

虫の息だった兵士達は立ち上がっていく。

彼らの思いが一つになってきたのだ。

誰もが人類の存亡をかけた戦いに立ち向かおうとしている。

突然変異体の威圧的な足音が近づいてきている。

「隊長，必ず生きて帰りましょう！」

エリーが私の手を握りしめてくれる。

「分かっているさ，お前も死ぬなよ…」

そして，私もエリーの手を握り返してやる。

「はい！隊長！ちゅ」

私の頬に勝利の女神の接吻が与えられた。

この戦，もはや勝ったぞ！

「弓兵部隊！撃ち方用意！」

「法術部隊！詠唱開始しろ！」

「投石を放て！」

アイリの命令が全軍に響き渡っていく。

アイリもまさに戦の女神だ。

彼女の声で兵士達がまるで一つの生き物のように目まぐるしく動いていく。

「放てぇ！」

魔法や矢が突然変異体に集中豪雨が如く降り注いでいく。

もうすぐ突撃の命令が全軍に下される時だ。

だが，我が隊はアイリの合図があるまでは待機だ。

突然変異体が嵐を物ともせずに突撃してきている。

さすがは規格外の化け物共だ。

そろそろ突撃の命令が下されるな。

「全軍突撃！」

「「うおおおおおっ！」」

ついにブリュンスタッド軍がヴァルキリア軍に突貫していく。

我が隊はまだ待機だ。

「ぐおおおおっ！」

獣のような雄叫びを挙げて，巨大な棍棒や斬馬刀を振り回してくる突然変異体。

女云々を抜きにしてもとても同じ人類とは思えないほどの馬鹿馬鹿しい戦いぶりだった。

しかも突然変異体が身につけている悪趣味な黄金に輝く鎧が協力な魔法耐性を備わっているためか，攻撃魔法が弾かれてしまう始末だ。

瞬く間にブリュンスタッド軍が劣勢を強いられてくる。

まだ，アイリからの合図は無い。

まだ，待たなければいけない。

少しずつだが，突然変異体の聞き苦しい声が大きくなってきている。

……。

早く合図をしてくれ，アイリ！

気持ちが少しずつだが，萎えかけてしまっているぞ！

こんな時は精力補給に限る。

私はエリーを抱きしめる。

「はあぁ…たい…ちょう…あなたの童貞…」

身の危険を感じた私は即座にエリーから離れた。

「うぅ…隊長のいけず…」

何とでも言え。

私はまだ童貞を捨てるわけにはいかないのだ。

とりあえずは精力補給は完了した。

だが，もうエリーで補給するのは危険だな。

女神だと思っても，やはりエリーはエリーだ。

油断をすれば終わってしまう。

「良い男はいねえか…」

うおおおっ！

背筋が凍ってくるぞ！

突然変異体の声が鮮明に聞こえてきている！

アイリ，早く合図をしろ！

もはや我慢の限界だぞ！

……。

……。

…。

「今よ！ロスト隊長！」

魔法の念話でアイリの声が私の脳裏に響いてくる。

待っていたぞ！

もはや突然変異体の存在自体が私の精神衛生上に害悪なのだ！

皆の気持ちも同じのはずだ！

「よし！ロスト隊！これより突ぜ…ヴァルキリア軍に奇襲を開始する！全隊私を中心に円陣を展開させろ！」

「「うおおおおっ！」」

瞬く間に私を中心に円陣が展開されていく。

私が皆に支援魔法をかけて，全隊の能力を強化し，周囲の敵を薙ぎ払う戦法だ。

これならば，私が傷つくことも無く戦場を駆け抜けることが出来る。

エリーは私の傍らに配置させている。

エリーは万一のための私の最終防衛線でいてもらう。

突然変異体よ！

貴様等に地上の支配権を渡しはしない！

私の精神衛生上の安寧のためにも絶滅してもらうぞ！

「ロスト隊！出陣だ！」

いくぞ，突然変異体！

さてと…。

後は任せたぞ！

私の肉の盾達よ！

第7話：獲物

ロスト隊は戦場で蠢く鉄球が如く，ヴァルキリア軍を蹴散らしていっている。

アイリの作戦通り，ヴァルキリア軍の横っ腹を抉ることに見事成功したのだ。

それにしても素晴らしい！

我が隊は優勢ではないか！

それに私がかけた強化魔法も攻を成している。

あの馬鹿げた力を持つ突然変異体とも互角に打ち合えるほどの身体能力を隊員達が獲得しているのだ。

さらに言えば，全員が戦い慣れをしている。

もはや鉄壁というべきではなかろうか。

さてと，突然変異体よ。

貴様等が地上に繁栄する時代に終わりが告げられるのだ！

速やかに絶滅して，人間界から消え去るがいい！

「死ねや！サンダーストーム！」

下品な声で攻撃魔法を放ってくる突然変異体。

だが，無駄なことだ！

私は即座に魔法障壁を展開して，攻撃魔法を弾いていく。

私がいる限り，飛び道具や魔法に関しては我が隊には届きはしない！

残念だったな！

隊員共は次々と突然変異体を捌いていっている。

これで世界は浄化されていく。

正常なる生態系が取り戻せるのだ。

「さあ，一気に畳みかけるぞ！」

「「うおおおっ！」」

私のかけ声と共に隊員達も勢いに乗ってくる。

乗りの良い奴らだ。

この戦に勝利した暁には酒でも奢ってやるか。

劣勢に立たされていたブリュンスタッド軍も盛り返していき，ヴァルキリア軍を押し返していっている。

もはや勝利を約束されたも同然であろう。

アイリもこれぐらいの戦果があれば，納得してくれるに違いない。

我が隊は調子に乗って敵軍の前線を次々と突破していく。

……。

……。

…。

いくら優勢とは言え，少し調子に乗りすぎただろうか。

かなり深追いしている気がする。

そろそろここが引き際ではなかろうか。

何だか嫌な予感がしてくる。

この予感はかなりの確率で良く当たってしまうのだ。

「我等の役目は終わった。そろそろ引くぞ！」

私は全隊に撤退命令を出す。

もう十分に暴れ回ったはずだ。

後はアイリがいる本隊に任せておけば問題ないだろう。

だが，私の目論見をまたしても崩す奴がいた。

「何を言ってるのですか！隊長！このまま突っ切りましょうよ！」

エリー！

貴様は勝利の女神ではなかったのか！

「これ以上は危険だ。我等はあくまで奇襲部隊だ。正面から戦うのが任務ではない」

私は努めて冷静にエリーに言い聞かせてやる。

我ながら大した忍耐力だ。

これが野郎だったら，上官反逆罪で即刻処刑していたところだったな。

「私達を守ってくださるのはとても嬉しいです。ですが，隊長は英雄なのですよ！ブリュンスタッド軍の誰もが貴方様のご活躍を見たがっておられます！」

くっ！

アイリほどではないが，エリーの中でも私が完璧な英雄像として理想化されているようだ。

他の隊員の野郎共も突然変異体を捌きながらも頷いてる。

こんな時まで乗りが良くなくてもいいぞ！

仕方ない。

どれか適当な奴を血祭りに上げて，皆に英雄像を示すしかないだろう。

さて，誰を獲物にしようかな？

「隊長！あれをご覧になってください！」

私はエリーが指し示した方向を見た。

……。

……。

……。

…。

何だ，あの化け物は…。

「弱い奴は俺の前に立つんじゃねえ！」

鎖に繋がれた鉄球，モーニングスターと言われる武器を竜巻のように振り回している突然変異体がいた。

いや，突然変異体にしてはかなり細身の体だ。

全身は黒い鎧に覆われており，顔は仮面を被っていて分からないが，体型的には普通の人間に近いものだ。

しかも，声からして低いが魅惑的な声でもある。

私は自分に相応しい獲物を見つけたことに歓喜に震えた！

少なくとも人間らしい女だ！

……。

だが，私の歓喜は瞬く間に露となって消えていく。

ブリュンスタッド軍の兵士共をまるで塵屑のように薙ぎ払いながら前進してきている仮面兵士。

全身は返り血を浴びて黒い鎧が紅い鎧に変色している。

さらには仮面の奥にある瞳は野獣のようにぎらつかせている。

……。

あれはやばすぎるぞ！

即座に目標を変えるべきだ！

「隊長！あれを倒せば，英雄としてさらに名を馳せることになります！彼女の名はヴァルキリア帝国第二皇女タナトス・ヴァルキリア。今回の一番首ですよ！」

よりにもよって，皇族なのか！

それとエリー！

余計な解説をどうもありがとう！

「うぐっ！」

私はエリーを黙らせるために溝に拳をめり込ませて気絶させる。

気絶したエリーを抱き留めて，私は考え込む。

……。

隊員達が期待に満ちた目で私を見つめてくる。

冗談ではない！

あの歩く破壊兵器に立ち向かえというのか！

だが，引くに引けない状況になってしまった。

既にブリュンスタッド軍全てが私に注目している。

もし，ここで断ったら確実にアイリの耳に入ってくるだろう。

そうなれば，私はアイリに殺されてしまう…。

それは絶対に嫌だ！

だが，どうする！

あの仮面兵士は先ほどまでに隊員達が捌いてきた突然変異体達よりも遙かに強そうだ。

私の最強の力を持ってれば，勝てるかもしれない。

だが，万一という場合もある。

というよりは恐い！

命のやり取りはしたくない！

痛いのは嫌だ！

……。

私は究極の選択が迫られていた…。

あの仮面兵士を始末して生き延びるか？

それともアイリを暗殺して軍を抜け出すか？

二つに一つ…。

さて，まずはアイリを暗殺して軍を逃げ出した場合はどうなるのであろうか？

アイリはブリュンスタッドの英雄だ。

それを暗殺したとなれば，ブリュンスタッドは国を挙げて犯人を見つけだし，始末してくるはずだ。

そして，私はブリュンスタッドの国賊となり，生涯命の危険に付きまとわれることになる。

まさに絶望的未来だ…。

故にこの選択肢は否だ！

一方，あの仮面兵士を始末して生き延びた場合はどうであろうか？

私の名声は一段と高まり，ブリュンスタッドでの地位も上がっていく。

さらには沢山の美女を侍ることも可能になるに違いない！

……。

どうやら迷うまでもなかったようだ。

私は痛い目に合うのは嫌だ。

だが，どちらを選んでも痛い目に合うのであれば，確実に栄光が約束された方を選ぶ！

さらに言えば，私には最強の力があるのだ！

慢心するつもりは無いが，使うべき場所で使わねば同じことだ！

今こそが使うべき時なのだ！

幸いなことにあの化け物は仮面を被っているから美女かどうかは分からない。

ひょっとしたら暑苦しい野郎もどきが女装したかのような見苦しい顔なのかもしれない。

顔が不明であるが故に私はあの化け物を現時点では女とは認めぬぞ！

仮面の突然変異体とでも考えよう。

いや，単なる鎧の化け物とでも思っておこうか。

ともかく私に栄光を与えてくれる賞金首だということだ。

「あ，あれ，私はいったい…」

私の腕の中でエリーが早くも復活していた。

何て頑丈な娘だ…。

常人であれば，三日間ぐらいは昏睡状態に陥っているはずなのに…。

「敵の不意打ちを受けて気絶していたのだよ。大丈夫か，エリー…」

とりあえず，誤魔化すためにエリーを気遣うように声をかけておく。

「は，はい！大丈夫です！それの隊長の腕の中で目覚めるなんて…はぁ…」

……。

平気そうな様子だから，捨てておこうか。

「あうっ！もう隊長は…どこまで…いけずなんだから…」

……。

さて，あの鎧の化け物は私の栄光への道に辿るための踏み台とさせてもらおう。

「私があの化け物を始末する。お前達は血路を切り開いて欲しい！」

全隊は円陣を解除し，私があの鎧の化け物に至るまでの露払いをしてくれるよう動き出してくれる。

隊員達が開いた血路を私は悠然と歩いていく。

その堂々とした姿はまさに英雄像に相応しいであろう！

自分の姿を褒めてやりたいぐらいだ！

さあ，鎧の化け物よ！

我が栄光の糧になるがいい！

「へえ…。久々に生きがいい獲物に巡り会えたようだぜ…」

人を見つめるだけで殺してしまいそうな眼光が私を捉えてきた！

「それになかなか良い男じゃねえか！食いがいがありそうだぜ…」

尋常では無い殺気が私の心臓を締め付けてくる！

「おら！おら！退きやがれ！あの男は俺の獲物だぜ！」

敵味方関係無く兵士共を塵のように弾きながら私の元に向かってくる怪物…。

……。

……。

…。

逃げてもいいですか？

……。

うおおおおっ！

やっぱり恐いぞ！

誰か助けてくれ！

「隊長，相手は王族ですから生け捕りにしてください！」

エリー！

こんな化け物を生け捕りにしろというのか！

私に死ねというのか！

何てことだ！

この戦場に私の味方は誰もいなかったのだ！

神よ！

哀れなる私を助け給え！

第8話：一騎打ち

怪物が私の前にやってくる。

私を殺しにやってくる。

死神が私の前にやってくる。

私を迎えにやってくる。

……。

……。

…。

よし，逃げよう。

……。

名誉を落としても命は落とさない。

それが私の流儀だったはず。

私は喜んで臆病者と罵られよう。

私は喜んで卑怯者となろう。

それで命が助かるならお安いご用だ！

アイリのことはもう後回しだ！

とりあえず目の前の危機から脱するのが先決！

未来への道を切り開いていくのだ！

……。

……。

…。

何だ，これは…。

いつの間にか私と怪物を取り囲むようにして兵士共の円陣が出来上がっている…。

何の真似だ，貴様等！

「おお！皇女殿下が一騎打ちをなされようとしている！」

「ならば，我等は決闘の邪魔が入らぬように見守るのみ！」

「皇女殿下は九百九十九人もの勇者を血祭りに上げられているぞ！」

「ならば，今回で記念すべき千人目ということか！」

突然変異体共が何やら勝手に盛り上がっている。

それに九百九十九人もの勇者を血祭りにしただと…。

しかも私が記念すべき千人目に血祭りにされる勇者だというのか！

「我等が英雄ロストがヴァルキリアの英雄に戦いを挑むぞ！」

「私達は今，歴史的瞬間をこの目に焼き付けようとしている…」

「吟遊詩人が唄に取り上げられるような場面だな…」

「ロスト，無様な姿を見せたら…分かっているのでしょうね？」

ブリュンスタッド軍の連中も一緒にいる。

しかも，なぜかアイリまで駆けつけている…。

軍の指揮官が何をやっているのだ！

「隊長，準備は完了しました！思う存分に戦ってください！」

エリー！

貴様が元凶なのか！

……。

くっ！

もはや退路は塞がれたというのか！

目の前には私の首を狩ろうと死神が鎌を構えている…。

私に辞世の句を考える暇も与えないつもりか…。

……。

これが私の辿る結末だというのか！

応えろ！

神よ！

……。

神は私の問いに応えてくれない…。

「くっくっくっ，準備は出来たか？坊や…ふはははははっ！」

代わりに目の前の怪物が笑って応えてくれる…。

モーニングスターを私を威嚇するように振り回し始めてきた。

「逃げるなら今の内だぜ，坊や…」

……。

「震えてるのか？安心しろ，俺が優しく慰めてやるぜ，坊や…」

……。

「お前みたいな可愛い家畜が前から欲しかったんだぜ…」

……。

「俺の者にしてやるぜ，かかってきな，坊や…」

ぶちっ！

……。

今，私の中で恐怖を凌駕する感情が芽生え始めた…。

それは怒りだ！

考えてみれば，なぜ私がこんな目に逢わねばならんのだ！

許さんぞ！

私の平穏を乱した者全てを等しく滅ぼしてやる！

微塵になるまでに引き裂いて畜生共の餌にしてやる！

覚悟しろ！

貴様は私の姿を思い出す度に恐怖に打ち震えることになるのだ！

「くっ！何だ！この凄まじい殺気は…」

目の前にいる鎧の化け物は後ずさっている。

もう遅い…。

貴様は私の眠れる獅子を呼び覚ましたのだ…。

「隊長，何だか恐いです…」

「少し厳しすぎたかしら?これからはもっと優しくしないと…」

エリー。

アイリ。

貴様等にも後で存分に思い知らせてやるぞ。

「我が名はヴァルキリア帝国第二皇女タナトス・ヴァルキリア!汝がブリュンスタッドの英雄ロストで相違ないな?」

「だから，どうした?私はこれ以上敵と交わす言葉は持ち合わせてはいない…」

突然変異体の大将に人間らしい会話をする言葉など微塵も無いわ!

「言ってくれたな!ならば貴様を力ずくで屈服させて言葉を吐かせるとしよう!」

鎧の化け物は鉄球を振り回すのを止め，静かに私を見据えていく。

如何にも油断はしないという真剣な出で立ちだ…。

それにしても近くで見てみると何という体格をしているのだ…。

鎧の上からでも分かる。
無駄な脂肪が無い，しなやかな筋肉。
それでもって私の頭一つ分以上に高い身長。
体格以上に滲み出ている圧倒的な威圧感。
これがヴァルキリアの英雄。
……。
これがタナトス・ヴァルキリアという輩なのか！
……。
…。
私の中で怒りを凌駕する感情が芽生え始めた。
それは恐怖だった。
やはり感情に身を任せることは良くないな。
これは貴重な教訓として胸に刻んでおこう。
「行くぜ！ロスト！」
もはや，覚悟を決めるしかない！

怖がっていたら本当に死んでしまう！

凄まじいほどの砂煙を舞わせて，私に突っ込んでくるタナトス。

だが，私に言わせれば，鈍いものだ。

私は最小限の動きで鎧の化け物が繰る出す鉄球を回避する。

地面が震えて私は思わずよろけてしまう。

……。

鉄球が地面を陥没させている…。

しかもかなり深い…。

こんなものを喰らってしまったら一瞬で死者の国へと直行してしまう！

「へっ，よく今の一撃を交わしたな，褒めてやるぜ…」

褒めて貰っても全然嬉しくない！

「次は本気でいくぜ！見事凌いでみせな！」

うおおおっ！

今まで鈍く見えていた鉄球が少し早く見えるようになったぞ！

私は体をくねらせて必死に交わしていく！
日頃から柔軟体操していた自分に感謝だ！
「くねくねと逃げやがって！蛸のような奴だな！」
蛸で結構！
死んだら終わりだ！
「その程度か…」
ささやかな抵抗として少し格好付けてみた。
「野郎，嘗めやがって…」
ますます速度を上げて鉄球を振り回してくるが私には当たらない。
……。
何だかんだと言って結構余裕ではないか！
よし，ここは私の最強の剣で鉄球を粉々に打ち砕いてやろう。
それで武器を失ったタナトスは戦意を削がれてしまうのだ。
「当たりやがれ！この蛸野郎！」
怒りで大降りになった鉄球が私の脳天に目掛けて襲いかかってくる。

遅すぎるな…。

喰らえ！

我が最強の剣！

光栄に思うがいい，タナトス！

これで貴様はロストの英雄叙事詩の中で敗れ去る敵として永遠に語り継がれていくことになるのだ！

私の剣が鉄球に炸裂していく！

これでタナトスの戦意と一緒に鉄球が砕かれるのだ！

私は大いなる夢に一歩近づいていける！

……。

……。

…。

何故だ…。

砕かれたのは私の剣だった。

「やっぱり，安物の剣だったかしら？」

アイリ！

私に安物の剣を持たせたというのか！

何てことだ…。

これでは私の戦意の方が削がれてしまうではないか…。

タナトスはゆっくりと鉄球を振り回しながら近づいてきている。

「覚悟しな，蛸野郎…」

うおおおおおっ！

かなり頭に来ているのか，異常なほどの殺気を撒き散らしているぞ！

それに勝利の笑みを浮かべ，舌なめずりもしてきている。

私が武器を失ったことで自分の勝利を疑っていないのだろう。

だが，甘いな。

私は両の拳を振り上げて構える。

「何のつもりだ？」

「武器は失ったが，まだ私は生きている。戦いはこれからだ…」

さらに少し格好付けてみせる。

このような状況で敢えて格好付けれる自分がたまらなく好きだ。

「とことん嘗めやがって！だったら，今度こそぐちゃぐちゃに叩き潰してやるぜ！蛸野郎！」

蛸野郎はもう止めろ！

嘗めているのは貴様だ！

それを思い知らせてやるぞ！

今までで一番早い速度で鉄球が私を砕かんと迫ってきている。

私の黄金の拳が唸る！

我が拳に砕けぬものは無し！

神の拳を喰らうがいい！

私の繰り出した拳が鉄球を木っ端微塵に砕いていく。

「馬鹿な！」

タナトスが唖然とした表情が目に浮かんでくる。

仮面で顔が確認できないことが残念だ。

思い知ったか！

これでも私は村では喧嘩大将として名を馳せていたのだ！

私の拳で顎を砕かれた者は数知れない！

覚悟しろ，タナトス！

私の腕っ節を骨の髄まで染み渡らせてやるぞ！

「ははははははははっ！」

突然，タナトスは笑い出した…。

私の拳の恐ろしさに気でも触れたのか？

「参ったぜ，俺をここまで追い詰めたのは貴様が初めてだな…」

何やらタナトスは不敵に笑っているぞ。

これは何となくまずい前兆だ。

「貴様はまさに俺が血祭りに上げてやる千人目の勇者に相応しいようだ。故に誰にも見せたことが無い俺の本気を見せてやる。光栄に思うがいい…」

タナトスはそう言って，腕を無造作に横に振るってきた。

「ぎゃあああああっ！」

「ぐあああああああっ！」

何故，周囲に悲鳴が？

悲鳴を聞いた方向を見てみると何と兵士共が肉片になっているではないか！

肉片になった兵士共がいたのはタナトスが腕を振るった方向だ！

まさか…。

タナトスは腕を振るうことで起こした風圧が兵士共を肉片に変えたというのか！

「貴様と同じ，俺の本当の武器はこの身一つだぜ…」

ひょっとして私はタナトスの眠れる獅子を呼び覚ましてしまったわけなのか…。

タナトスは指を鳴らしながら近づいてきている。

「俺の血を滾らせてくれよ，ロスト…」

……。

……。

…。

ここが私の人生の終着点かもしれない…。

まだ，やり残したことは沢山あるというのに…。

「隊長，頑張ってください！」

「ロスト，負けたら許さないわよ」

エリー。

アイリ。

少しは黙っていてくれ。

「さあ，殺し合おうぜ，ロスト…」

死神が迫ってくる！

もう嫌だ！

早く家に帰りたい！

夢なら醒めてくれ！

第9話：死闘

恐怖の生体兵器が近づいてくる！

神は何という危険な生物を作り上げたのだ！

人間は今まさに自然の生態系の頂点から引きずり下ろされようとしている！

人類に成す術は無いのか！

これが神の定めた残酷な運命なのか！

定められた運命？

断じて否だ！

運命とは神が切り開くのではない！

人が切り開くものなのだ！

「おら！おら！おら！」

タナトスの大砲のような拳が次々と繰り出されてくる。

私はくねくねと体を動かして何とか避け続ける。

一発でも食らったら人生終了になってしまう！

……。

ぐはっ！

腰に激痛が走ってきた！

体を捻り過ぎたのがいけなかったのか…。

これでは満足に体を動かせないぞ！

くっ！

タナトスの拳の風圧が私の鎧を裂いてくる。

「ははははっ！どうした！蛸のような動きはもう終わりか？」

タナトスの憎たらしい笑いが私の怒りを煮えたぎらせてくる。

おのれ，タナトス！

「いい加減に楽になれ！運が良く生き延びれたら，俺の飼い猫にしてやるぞ！」

ますますタナトスの繰り出す拳の速さが増してくる。

私の鎧は既に砕かれ，服までも引き裂かれようとしている。

やばい！

このままでは戦場のど真ん中で素っ裸を晒してしまうことになって

しまう！

一旦，タナトスの間合いから離れねば！

私は腰痛に耐えて体を後方へと飛び立たせた。

ぐっ！

目眩がする…。

腰が余りにも痛すぎるぞ…。

私は思わず膝を折ってしまう。

「何してるのよ！立つのよ！ロスト！」

「そうです！立ってください！隊長！」

アイリ。

エリー。

暢気に応援している貴様等がたまらなく憎い！

「どうした？もう終わりなのか？だったら少し期待はずれだな，ロスト」

人が腰痛で苦しんでいるというのに…。

「ならば，終わりにさせてもらうぜ！」

タナトスがこっちに向かって拳を振り上げてくる。
私は咄嗟に横に飛ぶようにして倒れた。
……。
地面が抉られている…。
後一歩避けるのが遅れていたら私も抉られて終わっていたのかもしれない…。
周囲を見渡して見るといつの間にか観客共が姿を消していた。
私を見捨てたのか，アイリ…。
この戦いが終わったら私は軍を抜けるぞ！
そのためにはこの怪物を何とかしなければ…。
「そろそろ，終わりにしようぜ，ロスト…」
間合いを離したのは失敗だったかもしれない。
タナトスは拳を振って必殺の風圧を飛ばすことで敵を粉砕してくる。
いわば無限の間合いだ。
逆に距離を離したことで私の攻撃がタナトスに届かなくなってしまったのだ。

これでは勝機がほとんど無い！

どうすればいいのだ！

……。

……。

…。

考えてみれば，私は最強のはずなのだ…。

なぜ，ここまで苦戦しなければならない…。

それに最強であるのならば，タナトスの出来ることは私にも出来るはずだ！

私は腰痛に耐えながらも拳を振り上げる。

私の腰よ，持ちこたえてくれ！

喰らえ，タナトス！

私は腕を思いっきり横に薙いだ！

「なっ！」

どうだ，タナトス！

仮面で顔を隠しても動揺している顔が目に浮かぶぞ！
私も貴様の真似して必殺の風圧を飛ばしてやったぞ！
最強の私に出来ないことは無い！
「きゃあああああっ！」
……。
……。
…。
きゃあああああ？
何だ，その黄色い悲鳴は？
それが突然変異体が出す声なのか！
……。
一瞬ときめいてしまったぞ！
許さん！
これほどの屈辱は初めてだ！
突然変異体如きが一瞬でも私の心に揺さぶりをかけさせたことが…。

貴様は私の消してやりたい過去をまた一つ増やしたのだぞ！

おのれ，腰が痛いが，それ以上に私の心が痛い！

私の繊細な心を傷つけた罪を購って貰うぞ！

私は無茶苦茶に腕を振るって風圧を飛ばしまくった。

「あぁ！ちょっと！やめろ！あぅ！」

可愛い悲鳴を出しおってから，ますます許せん！

突然変異体ならば，突然変異体らしく，おぞましい悲鳴を上げろ！

人間の悲鳴を上げるな！

聞き苦しいわ！

くたばれ！

……。

……。

……。

…。

もう駄目だ…。

腰が痛くて力が入らない…。

だが，これでタナトスはくたばっただろう…。

苦しい戦いだった…。

後で医者に腰を見てもらわねば…。

私が風圧を滅茶苦茶に起こしたことで視界を埋め尽くすほどの砂煙が舞っていた。

傷ついた体を癒すために早く戻ろう。

そして，傷が癒えたら私を見捨てたエリーとアイリに制裁を加えることにしよう。

「許さん…」

……。

何だ，このおぞましい声は…。

「許さんぞ！貴様…」

途方もなく凶悪な殺気…。

「貴様は俺の手で必ず殺す！」

まだ，生きていたというのか！

タナトス！

砂煙の中で人影が見えてくる。

砂煙が少しずつ晴れていき，タナトスの姿が見えてくる。

そして，見えてきたのは…。

大きな胸？

……。

……。

……。

…。

胸！

しかも，大胸筋が異常発達したようなおぞましい胸は無く…。

人間の女性らしい見事なまでに美しい胸！

さらに言えば巨乳ときている！

私は思わず腰を折ってしまう…。

男の証がこれでもかと言うぐらいに元気になっているのだ…。

そして，タナトスの素顔も私は拝むことになる。

エリーとはまた違う種類の美青年風の容貌だ。

短く切り揃えられている燃えるような炎のような紅い髪。

野性的な色黒の肌。

妖艶な紫色の口紅に彩られた唇。

とんでもない美女だ…。

これがあのおぞましい突然変異体を纏める大将だというのか！

「ロスト！貴様を殺してやる！」

砂煙を切り裂くような速さで私に迫ってくるタナトス。

私は辛うじてタナトスの繰り出す拳を交わしていく。

ぐはっ！

私は思わず鼻を押さえてしまう。

血が止まらない…。

タナトスは鎧が砕かれ，服も破れかけていた。

おそらく私が繰り出した風圧に切り裂かれたのだろう。

タナトスはもはや全裸に近い状態なのだ！

タナトスが拳を振るう度にあの巨乳が揺れてくる！

拳を交わしても，この巨乳の威力が私の精神を確実に蝕んでいく！

既に私の顔は血まみれになっていた。

ぐあああああっ！

腰が痛い！

股間も痛い！

鼻息が出来ない！

何という三重苦！

まさに絶体絶命！

このままでは私の物語が終わってしまう！

「殺す！殺す！殺す！殺す！」

タナトスは呪詛のように殺すと言いながら拳を振るってきている。

美女が怒った顔は途轍もなく恐い！

恐い美女はエリーとアイリでもう充分だ！

「死ね！ロスト！」

タナトスの怒りの拳を私は交わし，反撃しようと構える。

ぐっ！

もう体が持たない！

だが，その前にタナトスを私の黄金の拳で伸してやるぞ！

私はがら空きになったタナトスの溝に向けて拳を振り絞ろうとする。

もはや美女を殴り飛ばすのに躊躇はしない！

エリー，感謝するぞ！

貴様のお陰で私は美女にも容赦無く鬼になれるのだ！

いい加減に眠れ，タナトス！

私の拳がタナトスの溝にめり込もうとした瞬間に腰に激痛が走ってきた！

ぐおおおおっ！

こんな肝心な時に腰痛が！

私の拳はタナトスの溝から逸れてしまい，体が蹲いてしまう。

腰の痛いで体が支えれない！

私は前のめりになってしまい，何とタナトスの胸の谷間に顔が埋まってしまう。

……。

地獄の中に一条の光が照らされた…。

気持ちいい…。

「ロストぉおおおお！」

むぐっ！

私の背中にタナトスの両腕が回されていく。

ぬおおおおおっ！

背骨がぎしぎしと軋んでいく！

しかも，タナトスの弾力豊かな巨乳が私の頭蓋骨を潰そうと挟み込もうしてくる！

これこそが本当の鯖折りだ！

私の体がタナトスの巨体にめり込んでいっている！

地獄と天国が共存しているぞ！

「ふはははははっ！俺の胸の中で眠るがいい！永遠にな！」

……。

もう駄目だ…。

私はタナトスの腕の中で潰されて終わってしまうのだ…。

思えば，ろくな人生ではなかったな…。

だが，最後が美女の胸の中で終わるのだから悪くないのかもしれない…。

今度生まれ変わるときはもっと平凡な人生を歩みたいものだ…。

……。

……。

……。

……。

…。

やっぱりこんな所で終わりたくない！

せめて死ぬならば酒池肉林の果てに腹上死することを望む！

たかが，一人の美女の腕の中で死ぬのは以ての外だ！

私は死なないぞ！

必ず生き延びるのだ！

全ての力を引き出すのだ！

最後の力を振り絞れ！

命を燃やせ！

魂の叫びをあげるのだ！

うおおおおおっ！

「何っ！」

私は強引にタナトスの抱擁を振りほどく。

私の最強の力を嘗めるな！

これは意趣返しだ！

喰らえ！

鯖折り返しだ！

「は，離せ！ぐっ！あ，あああああっ！」

今度は私からタナトスに抱きつき，手加減しつつ締め上げていく。

私の頭は再びタナトスの巨乳に谷間に埋まっていた。

散々苦しめたのだ。

少し堪能させて貰うぞ。

やはり巨乳の感触は気持ちいいものだ。

「あああぅ…うぐぅ…あはぁ…」

タナトスの苦悶する声が私の脳を活性化させていく。

私の苦労もこれで少しは報われるというものだ。

タナトスの体から力が抜けてきた。

よし，そろそろだな。

私は名残惜しいがタナトスの巨乳から頭を離し，拳に力を入れる。

今度こそ眠れ，タナトス…。

私の拳が綺麗にタナトスの溝にめり込んでいく。

「がはっ！」

タナトスの吐血が私の顔にかかってくる。

終わったか…。

私は倒れてきたタナトスを抱き留める。

王族は確か生け捕りだったな。

戦場はいつの間にか私とタナトスの二人だけになっていた。

私とタナトスの戦いに巻き込まれたくなかったから全軍逃げたな…。

……。

まあいい。

私は早く休みたい。

腰も痛いし，もう限界だ。

私はタナトスを背負い，戦場を後にする。

まずはこの物騒な女を早く軍に引き渡さなければならない。

私の命が幾つあっても足りないからな…。

厄介事は速やかに処理する。

これが長生きの秘訣というものだ。

……。

少し年寄り臭かったかな…。

第１０話：褒美

レストリア平原の戦いは引き分けという形で決着が付いたらしい。

ヴァルキリア帝国は第二皇女であるタナトスが捉えられたとのことで一旦全軍に撤退命令を出したという。

物は言い様だな。

ただ，私とタナトスの戦いに巻き込まれたくなかっただけだろう。

それと聞いた話によれば，あのおぞましい突然変異体共は実は去勢された野郎共の成れ果てだったらしい。

主にタナトスに打ちのめされた元勇者共で構成された使い捨ての奴隷部隊が突然変異体共の正体だったわけだ。

私はその話を聞いて心底安心した。

使い捨ての奴隷部隊とはいえ，元勇者で構成されていたわけなのだから，あの馬鹿馬鹿しい戦いぶりも納得できるというものだ。

……。

あのような突然変異体共を女だと認めなくて本当に良かった。

人類の危機は見事回避されたわけなのだ。

私は思わず泣きそうになってしまった…。

だが，使い捨ての奴隷部隊を率いて侵略してきたヴァルキリア帝国がこのまま引き下がるとは思えない。

今回のヴァルキリア軍は突然変異体もとい奴隷部隊による侵略戦争だった。

近い内にヴァルキリアは正規軍を率いてブリュンスタッドに向けて逆襲してくるだろうとのブリュンスタッド軍上層部の見解だった。

ヴァルキリアの正規軍か…。

今度こそは麗しの美女軍団であることを心の底より祈っておくとしよう。

あのおぞましい突然変異体もとい奴隷部隊と戦うのはもう懲り懲りだ…。

タナトスは王族であることから軍上層部，ブリュンスタッド王家に引き渡すことにした。

願わくば，二度と顔合わせしないことを切に願っている。

恐い美女とはもう関わり合いになりたくないのだ。

……。

だが，あの巨乳は捨てがたいものだったな…。

しかも絶世の美女ときている。

あの美女との天国と地獄が共存した熱烈な抱擁は私の美しい思い出の一つとして永久に残るであろう。

しかし，美しい思い出といえど，もう一度体験することは全力で御免被る。

私は美女に抱き締められることは好きだが，抱き潰されることは激しく勘弁だ。

命と引き替えてまで体感したいと思うほど私は勇者では無い。

思い出は思い出のままだからこそ美しいものなのだ。

タナトス，私は貴様との戦いを決して忘れないだろう。

だから，私のいる世界にはもう出てこないでくれ。

……。

わたしはとりあえず，腰を医者に見てもらい，当分の間養生することにした。

王宮は私の凱旋を国を挙げて歓迎してくれた。

如何にも途中で私を見捨てたことに対してこれで目を瞑ってくれと言わんばかりの歓迎だ。

もはや怒る気にもなれない。

腰が完治したらこの国ともおさらばだ。

もはや未練も何も無い。

だが，問題はいかにして脱国するかだ…。

アイリは決して私を逃がそうとしないだろう。

しかもエリーは四六時中付きまとっている訳だからな。

……。

腰が治ったら，アイリとエリーに制裁を加えようと思ったが，いざやろうと思えば，なかなか恐くて出来ない。

私の怒りの力は全て，タナトスとの戦いで使い切ったしまったのだろう。

アイリは私の顔を見た途端に涙を流して私に抱きついて熱烈な口づけをしてきたからな…。

あの唇は気持ちよかったな…。

……。

やばい！

これはアイリの罠なのだ！

危うくアイリの術中に嵌るところだったな…。

エリーも腰を痛めた私に気持ちいい指圧をかけてくれたな…。

……。

どうやら私はエリーとアイリを憎み切ることができないようだ…。

我ながら難儀なことだ…。

まあいい。

もう少しこの国にいてもいいかもしれないな…。

とりあえずは謁見の間に行かねばならない。

今回の戦で私は十二分の戦果をもたらしたはずだ。

故に褒美もかなりの物だと期待できる。

ひょっとしたら美女の掴み取りも叶うかもしれない！

思わず笑いが止まらなくなったぞ！

私の苦労が今ここで清算される時が来たのだ！

そう思えば，あの陛下の憎たらしい顔も我慢できる！

待っていてください，セシリア様！

今，私めが貴方様の元へと馳せ参じます！

「ロストよ！此度の働き誠に見事であったぞ！」

陛下が早速いつもの決まり文句で労いをかけてきた。

そんな紙屑以下の労いの言葉なぞどうでもいい。

早く褒美を渡すのだ。

貴方様の存在価値はただそれだけなのだからな。

「レストリア平原での戦いぶりは後世に語り継がれるほどの苛烈なものであったと聞く。中でもあのヴァルキリアで最強の武力を誇っていたタナトス・ヴァルキリアを生け捕りにした功績は目に見張るものがある。汝の苦労に報いる相応の褒美を余は使わそう」

いよいよ私の栄光の道が始まるのだ。

美女の掴み取りなのか，宝石の掴み取りなのか，いずれにせよ私の灰色の人生を薔薇色に染めてくれるものに違いない。

「まずは汝に千騎長に地位を拝命しよう。今後の働きも期待しておるぞ！」

「はっ！有り難き幸せ！我が身は全て陛下の物でございます」

又しても危ない地位をくれるとは陛下はどこまでも私を苦しめることがお好きなようだ。

だが，今は許そう。

この程度の褒美はまだ前菜に過ぎないのだろう。

さあ，早く私に本命の褒美を与えろ！

私は気が短いのだ！

焦らすのではないわ！

「さらには此度の汝が入手した戦利品，すなわちタナトス・ヴァルキリアを汝に下賜してやろう。末永く幸せになるといい。国を挙げて祝福してやるぞ，ほっほっほっほっほっ」

……。

……。

……。

……。

……。

……。

……。

…。

何ですと？

……。

私は陛下の隣にいる女性を見る。

セシリア様以外にもう一人いた。

威圧的な漆黒の軍服で身を固めた女性だった。

手には戦で被るのであろう憤怒の顔を形作っている仮面を持っていた。

如何にも戦場で生きる女の出で立ちだ。

……。

美青年風の麗しき容貌。

肩よりも少し短く切り揃えた燃えるような紅い髪。

野性的な色黒な肌。

妖艶な紫色の口紅に彩られた肉感的な唇。

……。

しなやかで均整の取れた肉体美。

私よりも頭一つ分以上に高い身長…。

私の頭蓋骨を潰すほどに弾けた巨乳…。

私を射抜いてきた鋭い眼光…。

……。

あの地獄のような戦いが走馬燈のように私の中で過ぎってくる…。

何もかもが懐かしい…。

私と壮絶な死闘を演じた恐怖の美女。

その女性の名は確か…。

タナトス・ヴァルキリア…。

……。

タナトスは私の視線に気づいたのか，魅力的な笑顔を振りまいてくれる。

……。

ぬおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおっ！

神よ！

私に何の恨みがあるというのだ！

私に人生の墓場へ直行しろとの天命なのか！

酒池肉林の夢が遙か彼方までに遠ざかっていく！

「私からも祝福させてもらうわ，おめでとう，ロスト」

ぐはっ！

セシリア様…。

貴方様の祝福の言葉で私の心臓が刃で抉られていきます…。

何のために私は死ぬ思いで戦場を駆け回ってきたのか…。

私は絶望の余り涙を流してしまう…。

「そうか，涙を流すほどに嬉しいと申すのか！余も嬉しいぞ，ほっほっほっほっ！」

私の手が勝手に動いている…。

まずい！

気を強く持たねば，この手で陛下を殺してしまうことになる！

私は腰に掛けている剣を掴もうとしている手を必死に押さえつける。

……。

私を恐怖のどん底に陥れた美女が傅いている私にゆっくりと近づいてくる。

エリーやアイリを凌ぐほどの凶悪な女が私を人生の墓場へと誘おうとしている！

私は世界中の美女と共に酒池肉林の世界を実現させたいのだ！

一人の美女に縛られるのは死んでも嫌だぞ！

まだ完治していない腰が疼いてくる。

考えるのだ，ロスト！

このままでは私の自由の翼がもぎ取られてしまう！

私は飛べない鳥に成り果ててしまうのだ！

そんなの絶対に嫌だ！

私は自由でありたいのだ！

第11話：タナトス

私は今，崖っぷちに立たされている。

このままでは本当に人生の墓場へと直行してしまう！

しかも相手は九百九十九人もの勇者を血祭りに上げた最恐の女。

私は記念すべき千人目の勇者としてタナトスに捧げられ，血塗られた婚礼式が催されてしまう…。

……。

ぬおおおおおおおおおおっ！

究極にして最悪の結末だ！

これが死ぬ思いで戦場で戦い抜いた私への仕打ちだと言うのか！

……。

いや，冷静に考えるのだ，ロスト。

彼女にとって，私との戦いは屈辱に満ちたものだったに違いない。

何しろ私は彼女の鎧を壊し，服を破って半裸にさせた上に鯖折り返しで巨乳を存分に堪能させてもらったのだ。

タナトスにとって私は自分を辱めた死ぬほど憎い男であるはずだろ

う。

だから，これは公式の場での単なる形式であるに過ぎない。

この場では陛下の御前であるのだからこそ，心ならずとも祝福を敢えて受け入れる。

そして，私的な生活に入れば，仮面夫婦となり，やがては離縁という形で別離する手筈となるわけだ。

何も心配することは無い。

私の夢は潰えたわけでなかったのだ。

……。

だが，離縁する過程に置いて私が五体満足でいられるかどうかはこの際敢えて考えないことにしよう。

あの地獄のような戦場で生き抜いてきたのだ！

きっと何とかなるはずだ！

……。

何とかなるはず…。

切にそう願いたい…。

……。

タナトスが私の前に立ちふさがってくる。

良かろう，タナトス。

私は敢えて貴様の茶番劇に乗るとする。

互いに非常に不本意であるだろう。

だが，ここは陛下の目を欺くために仮面夫婦を名乗ろうではないか。

タナトスは潤んだ瞳で私を見つめている。

演技にしては少し過剰ではないか。

まるで恋いこがれる乙女のような瞳だ。

これは演技なのだ。

何も恐れることは無い。

「ロスト…」

タナトスが近づいて私の手を握ってくる。

あの物騒な鉄球を振り回していたとは思えないほどに柔らかい手だ。

「貴様は俺を完膚無きまでに叩きのめしてくれた初めての男だ…」

そうか，初めての敗北だったわけか…。

ならば，ますます私が憎くてたまらないのだろうな。

……。

離縁するまでに無事に生き延びれるだろうか…。

「俺はあの時の貴様の情熱的な抱擁が今でも忘れられない…」

タナトスが私の頭に両腕を回して引き寄せてくる。

むぐっ！

私の頭がタナトスの巨乳に埋まってしまう。

演技にしてはやりすぎだぞ！

気持ちいいが，頭蓋骨が軋む音が聞こえてくる…。

相変わらず天国と地獄が兼ね備えたかのような強烈な巨乳だ。

それにしても女性ながら，私よりも背か高いので抱き締めるときにどうしても頭が胸に埋まってしまう。

役得ではあるが，男としては少し格好悪いな…。

……。

少し息苦しくなってきたな…。

……。

息苦しいぞ！

私はタナトスの抱擁から逃れようと必死に藻掻いた。

だが，巨乳の官能的な感触が私の力を根刮ぎ奪っていく。

図ったな，タナトス！

まさかこのような公式の場で私を窒息死させる狙いだったとはな…。

これが私の辿る結末だったというのか…。

……。

……。

…。

そんな結末，私は断じて認めんぞ！

うおおおおっ！

私は火事場の馬鹿力を発揮して死の抱擁から逃れる。

……。

何とか九死に一生を得たようだ…。

「すまないな，つい強く抱き締めてしまった。大丈夫か，ロスト…」

本当に心配そうに私に声を掛けてくれるタナトス…。

貴様はどうやら演技の才能があるようだな。

軍人を止めて，女優を目指したらどうなのだ。

貴様の演技力ならば世界を狙えると思うぞ。

……。

おのれ，腰が再び痛くなってきたぞ…。

だが，私は負けるわけにはいかない…。

私はよろける体に鞭を打って平然としてみせる。

タナトス，貴様があくまで演技をしてみせるというのならば，私にも考えがある。

私はタナトスを抱き寄せる。

「あっ…ロスト…」

艶めかしい声を出して隙あらば私を殺すつもりなのだろうが，そうはいかないぞ！

貴様にはもう一度屈辱を味わって貰おうか…。

「私は戦場でお前の姿を見た瞬間に運命を感じた…」

私はタナトスの頬に手を添えて恋人に囁くような甘い声を出していく。

どうだ，タナトス。

身も毛も弥立つ思いであろう。

貴様に屈辱を与えた私が愛の言葉を囁きかけるのだ。

これほど苦痛なのものはあるまい。

残念なことは私の背がタナトスよりも低いから背筋を伸ばして見上げねばならないことだ。

……。

実は私の方が屈辱的なのかもしれない。

だが，それ以上にタナトスは内心，怒りで煮えたぎっているだろう。

そして，私はタナトスに止めを刺してやるのだ。

「私の妻になってくれ，タナトス…」

私は爪先を伸ばしてタナトスの唇に自分をそれを重ねたのだ！

殺したいほどに憎い男に自分の唇が奪われてしまう！

まさに筆舌し難い屈辱だ！

さらに言えば，私はこの魅惑的な唇を存分に堪能できる！

私には快楽を！

貴様には屈辱を！

これこそが私が貴様に与える究極の屈辱なのだ！

自分の卑劣さに惚れ惚れしてしまうな…。

突然、私の背中が抱き寄せられる！

「あむぅ…ちゅぱっ…ちゅちゅる…れろぉ」

ぬおっ！

舌が入ってきた！

しかも私の舌を自分の口内へと引きずり込もうとしてきている！

演技にしてはいくら何でもやり過ぎなのではないか？

だが、気持ちいいから堪能させてもらうぞ！

「ちゅぱちゅぱちゅうちゅうぅぅぅ」

……。

「ちゅちゅちゅるちゅるちゅう」

……。

「ちゅぱちゅぱちゅぱちゅぅちゅ」

……。

そろそろ止めて欲しい…。

息苦しくなってきたぞ！

「ちゅうぅぅぅぅぅ」

ぐおおおおっ！

快楽が苦痛に変わり果て、私を苛んでいく！

まさか屈辱を更なる憎しみの糧にして私を殺すつもりなのか！

だとしたら、見事としか言いようがない！

私はタナトスの狡猾なる罠に陥ってしまったのだ！

この勝負、私の負けなのかもしれない…。

だから、殺さないでくれ！

……。

酸欠で体の力が抜けていく…。

私は為す術も無くタナトスに蹂躙されているのだ…。

「ぷはぁ…ふぅ…貴様の愛、確かに受け取ったぜ…」

私はタナトスの腕の中で力無く項垂れた状態だ…。

これでは黒騎士に囚われたお姫様みたいではないか！

何たる屈辱だ！

これがタナトスの狙いだったのか…。

「お熱いことよのう、ほっほっほっほっ」

陛下。

貴様は絶対に殺す！

「羨ましい限りだわ…」

セシリア様。

貴方様にだけはこの血塗られた婚礼を祝福して欲しく無かった…。

「さあ、俺と愛を育もうか…」

私はタナトスにお姫様抱っこされて寝室に連れ去られてしまう。

誰か私を助けてくれ！

このままでは私はタナトスに食われてしまう！

私はタナトスに寝室へと拉致されるのだった。

いったいどうなってしまうのだ…。

どこで私は間違ったのだろうか…。

その問いに答えてくれる者は誰もいない。

最強の力を得ても余り良い思いをしていない。

力を手に入れても喧嘩する相手がいなければ，何の意味も無い。

喧嘩をしても殺し合いが嫌いな私には宝の持ち腐れと言っても過言ではない。

だが，この力を手に入れなければ，美女と知り合うことも無かった。

世の中常に等価交換によって上手く成り立っているようだ。

強い力を手に入れたならば，相応の対価を払えとの神のお告げなのだろう。

相応の対価が自分の命にならないように最強の力と上手くつき合わねばならないな。

さてと…。

「ロスト，愛しているぞ…」

目の前の危機にどのように対処してよいのやらか…。

二人きりになれば，演技をする必要が無いはずだ。

それなのにタナトスはこうして私に愛を囁いてきている。

演技ではなく地だったということが判明したのだ。

ここで実はその場の方便でしたと謝るべきか…。

……。

多分，今度こそ本気で殺されるだろうな…。

ここはタナトスの愛を受け入れるべきか…。

……。

縛られる愛を覚悟せねばならないな…。

では，どうする？

このままではどちらにせよ私の今後の人生設計が狂わされてしまう。

実は心に決めていた人がいたと言うべきか…。

……。

謁見の間での嘘が露呈され，制裁を喰らわされてしまうな…。

これも却下だ…。

では，私は実は遊び人で多くの愛人を侍らして，皆平等に愛していると言うべきか…。

……。

ふむ，嘘は付いてはいないな…。

現にエリーやアイリが愛人みたいな者だ。

それに皆平等に愛しているという言葉で謁見の間での言葉も嘘ではなくなる。

だが，これもかなり危険な言葉だ。

タナトスは武人で如何にも質実剛健を旨としているような人種だ。

遊び人のような軟派な輩を相手にどう思うのか?

私だったら，即刻叩き斬っているだろうな…。

だが，待て…。

タナトスも多くの男を家畜にして侍らしていることもあり得る。

それならば，私の放蕩に口出しすることはできないはずだ。

「今まで出会っていた男は皆俺よりも弱くて相手にしなかったが，貴様が俺の初めて男だ。だから，宜しく頼む…」

……。

タナトスは意外に純情だった…。

まずい！

遊び人も却下だ！

退路が断たれてしまった！

このままでは明日の朝には撲殺死体として発見される羽目になってしまう！

せっかく過酷な戦場を生き延びたというのに暖かいベットの上で殺されてしまうのか…。

いや，もうここはタナトスの愛を受け止めるしかない。

最低限命の保証はされるはずだ。

自由と引き替えに命が保証される…。

これが等価交換というものなのか…。

悩んでも仕方ない。

腹をくくって覚悟を決めるとするか…。

「わ…」

「分かってるさ…」

何だ?

これから感動的な愛の言葉を囁こうとしたのに…。

それに何が分かってるさ，なのだ?

「貴様を愛している女性が幾人もいることをな…」

なぬ。

「俺との一騎打ちで応援している女共がいたからな。彼女達は貴様の想い人なのだろ?」

「なぜ，それを?」

確か，私とタナトスの決闘でエリーとアイリが耳障りな野次を飛ばしていたな。

それをタナトスは気が付いたということか。

ならば，なぜこれほどまでに落ち着いているのだ？

かえって不気味だぞ。

「俺を叩きのめしたのは貴様だけだ。だが，貴様には俺と出会う前に関係を持った女性がいる。そのことは謹んで受け入れよう。ただし…」

タナトスが私の肩にいきなり掴んできた。

痛い！

肩の骨が砕けそうだぞ！

「正妻は俺だ。くっくっくっ，俺を一番に愛してくれれば，側室を何人持とうともかまわん…」

何て話が分かる妻なのだろうか！

理解してくれて嬉しいが，早く私の肩から手を離してくれ！

「俺が物分かりがいい妻であることに感謝するのだな。相手が貴様でなかったら，くびり殺していたところだ…」

何ということだ…。

恐い女其の三がここにいる。

しかも，一と二を凌ぐ怖さだ…。

「何を企んでいる！」

私はつい悪態を付いてしまった。

やばい！

私の素がばれてしまう！

「くっくっくっ，なるほど。それが貴様の本性か…」

ばれてしまった！

ぐほっ！

タナトスに押し倒されてしまう。

おのれ，私を押し倒すとは…。

押し倒すのは男の役目だ！

私はタナトスを押しのけて起き上がろうとする！

ここで負けてしまっては尻に敷かれることになってしまう！

それだけは避けなければならない！

「ふふっ，いいぞ！そうこなくてはな！俺は貴様に戦いでは負けた。

だが，こちらでは負けはしない…ちゅ」

ぬおっ！

タナトスが私の顔を覆うように口づけを炸裂させてきたぞ！

まずい！

あまりの気持ちよさに力が入らない…。

タナトスは力が抜けた私を再びベットに押し返してくる。

「ちゅぱっ…ふふっ，抵抗する男を押さえつけるのも乙なものだな…。たっぷりと味見させてもらおうか…」

服が破かれてしまう！

このままでは私の貞操が危ない！

私はまだ綺麗な体のままでいたいのだ！

力の限り抵抗させてもらうぞ，タナトス！

「貴様の首筋に噛み傷があるな。しかも女の香水が微かに匂う。悪い旦那様だな。妻としてお仕置きをしてやる！あむっ！」

ぎゃあああっ！

アイリが付けた噛み傷にタナトスが噛みついてきた！

痛いが，気持ちいい！

力が抜けてしまうぞ！

最強の私が床では成す術も無くタナトスに翻弄されている！

「おや？まさか，貴様は童貞だったのか，はははははっ！嬉しいぞ，旦那様。ならば，ここは可愛い妻が筆下ろしをしてやるのが役目だろうな…」

「やめろ！私はまだ…」

ぐほぁあ！

私の童貞が…。

「ぐっ！これが…貴様の愛なのか…」

かなり苦しそうな表情だ。

ここは一つ，打ち止めということで…。

「はは…はぁ…良い心地だ。これで貴様と一つになれたのだ。はは…ははっ」

苦しみながらも笑っている…。

しかも，私の首に噛みついて紅く染めた唇が壮絶なほどに恐いぞ！

「では，貴様を貪るとするか…」

食われてしまう…。

「覚悟するがいい…」

……。

やめて…。

……。

……。

…。

「貴様に俺の愛を刻みつけてやるぞ！」

ぐはぁあ！

「覚えとけ！貴様は俺の者だ！」

あぐぅ！

「裏切れば，貴様を殺して俺も死ぬ！」

ぐぇえ！

「貴様の愛を俺に捧げろ！」

がはぁあ！

「俺が貴様の一番だ！」

ぬはぁあ！

「誰よりも貴様を愛し抜いてやる！」

ぐあぁぁ！

「俺がどれだけ貴様を愛しているのかを思い知らせてやる！」

うげぁあ！

「俺の愛を貴様に死ぬほど味あわせてやる！」

はぅあぁ！

「俺の愛を受け入れろ！ロスト！」

うはあああああああああああっ！

……。

……。

……。

……。

……。

……。

……。

「ふふっ，気持ちよかったぜ…」

……。

……。

神は死んだ…。

私の体は汚れてしまったのだ…。

さらば，愛しき童貞よ…。

さらば，綺麗だった頃の私…。

「俺はまだ満足してないぞ，ロスト…」

もう勘弁してくれ！

腰が痛くてたまらないのだ！

……。

あああああああああああっ！

……。

燃え尽きてしまった…。

第１２話：恋敵

……。

腰が痛い…。

このままでは慢性になってしまう…。

あれからタナトスには骨の髄まで搾り取られることになってしまった。

私は手鏡で自分の顔を確認する。

……。

我ながら壮絶な人相になってしまっているな…。

水気の無いげっそりとした顔にそれを彩るような無数の紅や紫の口紅の跡…。

戦場帰りの負傷兵みたいに見えてしまうぞ…。

とりあえず顔を洗わねば…。

……。

…。

しかし，この腰痛はどうにかならないのだろうか？

まだ私は年寄りではないのだぞ…。

……。

考えてみれば，私は最強の力を持っている。

ならば，これぐらいの物を容易く治せるはずだ。

私は最強の力を得ているから魔法も得意なのだ。

よし，この厄介な腰痛を治してやる。

私は魔力を込めて腰痛が完治するように念じてみる。

……。

治ったぞ！

なぜ，今まで気づかなかったのだ！

私の最強の力はまさに万能だ！

もし，いや，万が一に戦場に出ることになったら後方から魔法攻撃することにしよう。

最強の力を持っているのだ。

攻撃魔法はきっと戦略兵器並の破壊力を秘めているに違いない。

後方で楽にしながら，敵を殲滅させる。

敵とは言え，皆殺しにするのは気が引けるが所詮は関わり合いが無い奴らだ。

戦場では殺らねば，こちらが殺られてしまう。

見ず知らずの奴のためにこちらの命を危険なぞ晒したくない。

死ねば，全てが終わってしまうのだ。

自分が終わるくらいなら，相手を終わらせてやる！

とにかく，後方で攻撃魔法を連発していれば，安全だ。

そうすれば，痛い思いをせずに済むし，戦果も挙げられる。

まさに完璧だ。

これで戦場はもう恐くないぞ！

ヴァルキリアでも神でも何でも来るがいい！

私の神の力で一網打尽にしてくれるわ！

「おはよう，ロスト…」

「あ，ああ，おはよう…」

……。

戦場よりも恐い場所にいたのを失念していた。

タナトス・ヴァルキリア。

ヴァルキリア帝国で最強の武力を誇り，九百九十九人もの勇者を血祭りに上げた最恐の女だ。

何の因果か私はタナトスと夫婦になる羽目になってしまった。

実はこの話には軍上層部が大いに絡んでいたのだ。

軍上層部はタナトスをヴァルキリア帝国に対する人質として政治的に利用しようとする予定だった。

だが，タナトスは軍上層部が考えていたよりも遙かに凶暴で危険な女だった。

タナトスは瞬く間に拘束具を引きちぎり，軍施設を破壊し回ったらしい。

手に負えない凶暴な猛獣相手に軍上層部が困り果てていたところにタナトスはある条件を出したという。

つまり，自分を唯一敗北させた私を夫として献上せよとのことだった。

さもなければ，このままブリュンスタッド王国を破壊し尽くすとの脅迫を仕掛けてきたのだ。

それにどうやらタナトスは自分に見合う男を捜すために他国に戦争を仕掛けていたことも判明した。

何とも史上最も傍迷惑で物騒な婚活をしてくれたものだ。

軍上層部は私をタナトスに捧げることを快諾し，ブリュンスタッドの滅亡を阻止したらしい。

私はブリュンスタッドの厄介物処理班ではないぞ！

とりあえず，私の尊い犠牲の下でブリュンスタッドは平和を勝ち取ったのだ。

まさに私は救国の英雄というわけだ。

故に私は千騎長の地位と子爵という貴族の爵位，ついでにタナトスという妻を頂いたわけだな…。

タナトスには私の本性を知られてしまったが，酒池肉林の夢は容認してくれるらしい。

これが不幸中の幸いというものだな。

「よし，ロスト，早速朝練をしよう」

タナトスが何かを提案してきている。

果てしなく嫌な予感がするぞ。

「朝練とは具体的に何を？」

何となくだが，予想はできる。

だが，当たって欲しくない！

「もちろん，貴様との模擬戦闘だ」

……。

命をかけろというのですか？

「いや，殺し合いでもかまわないかもしれないな。何しろ貴様は最強なのだからな。俺が殺す気でかかっても平気だろ？」

……。

ぬおおおおおおおっ！

命がけの訓練なんて嫌だ！

「遠慮させ…」

「さあ，行くぞ！ふふっ，これで毎日が楽しくなるな…」

毎日が恐怖で打ち震えてしまうわ！

やめろ！

私を引きずるな！

やめて！

……。

うおおおおおおおっ！

……。

……。

……。

…。

「やはり貴様は強いな。惚れ直したぜ！むちゅうぅぅぅ！」

疲れ果てた私を強引に抱き寄せて熱烈な口づけを浴びせてくるタナトス。

何とか生き延びることができたぞ…。

こんな綱渡りのような日々をこれから過ごして行かねばならないわけなのか…。

……。

それにしてもタナトスの情熱的な口づけは気持ちいいな…。

これも等価交換というものなのだろうか？

まさに天国と地獄だな。

「あああ！公の場で何をしているのですか，隊長！それに女！貴様は何者だ！」

長時間に渡るタナトスの接吻により酸欠状態になりかけた私に聞き覚えがある声が聞こえてくる。

この声は確か，エリーだったな。

それにしても初めてエリーの怒りに満ちた声を聞いた気がする。

「ちゅぱっ…名を聞きたいのであれば，そちらから名乗るがいい…」

タナトスもまた怒気に満ちた声を出してきている。

天国と地獄の接吻から解放されて九死に一生を得た私だが，生きている心地がしないぞ！

何しろ私は怒りに満ちているタナトスの腕の中にいるのだからな！

「これは失礼した。我が名はエリアルト・リリエンフェルト。貴公が捉えているロスト隊長の副官である。さあ，そちらも名乗られよ！」

何だかエリーが凛々しい女騎士をやっているぞ。

いつもは発情期丸出しの残念な女であったはずなのに…。

「ならば名乗ろうか。俺の名は元ヴァルキリア帝国第二皇女タナト

ス・ヴァルキリアだ。そして，今はロストの妻となっている」

「なななななな，何ですってぇえええええ！」

エリーの絶叫が訓練場で声高に響いてくる。

なんて声量なのだ。

鼓膜が破れるかと思ったぞ。

そういえば，エリーは私のことを愛していると言っていたのを忘れていた。

だったら，エリーにとってタナトスは…。

「そうだ，俺とロストは夫婦だ。ふふっ，俺達は愛し合っている。証拠を見せてやるぜ…ぶちゅうぅぅぅ！」

ぬおっ！

タナトスはエリーに見せつけるようにして，私に接吻を炸裂させてきたぞ。

「ちゅぱっ…くっくっくっ，もはやロストは俺に骨抜きにされている。貴様の出る幕はもう無いんだよ。疾く消え去るがいい…」

「貴様，隊長に何て言うことを…」

構図からして，お伽噺で黒騎士が王子から姫君を取り上げ，高笑いしているような場面である。

ちなみに黒騎士がタナトス，王子がエリーで不本意ながら姫君が私だ。

「私は貴様が隊長と知り合う前から副官として支えてきたのだ！貴様こそ消え去るがいい！」

「だから，どうした？過ごしてきた時間の長さよりも，いかに深く愛し合ってきたかが重要だ。何しろ俺はロストの初めてを頂いたんだぜ，ふふっ」

何という爆弾発言してくれたのだ，タナトス！

「……っ！」

エリーが声にならないほどの絶叫をあげている！

貴様は私の酒池肉林計画を容認してくれたのではなかったのか！

「どういうつもりだ？」

「悪いな，旦那様。いざ，他の女を目の前にしてみると我を忘れてしまうらしいな。これが嫉妬というものなのか。新鮮なものだな」

タナトスは唖然とするエリーに挑発するように笑いかけている。

頼むから余りややこしい事態を引き押さないでくれ。

厄介事の後始末するのは私なのだぞ。

「旦那様だと！よくもぬけぬけと…。隊長に最初に目を付けたのは私だというのに…」

「くっくっくっ，ならば，どうする？」

火に油を注ぐようにタナトスはエリーを挑発してきている。

貴様，それほどまでに戦争をしたいのか！

うおっ！

エリーがこちらに向けて剣先を向けてきたぞ！

俺ごとタナトスを殺すつもりなのか！

「タナトス・ヴァルキリア！貴公に決闘を申し込む！」

貴様も戦争がしたいというのか！

「貴様の申し出，受けてやるぜ！エリアルト・リリエンフェルト！」

タナトスが獲物を見つけたかのような猛獣のような恐ろしい笑みを浮かべている。

嫉妬に燃えた女とは斯くも恐ろしいものなのか…。

タナトスとエリーはこれから殺し合うのだろうな…。

……。

二人の女が一人の男を巡って争い合う。

物騒ではあるが，ある意味，男の憧れの展開ではなかろうか。

残念な性格ではあるが，エリーも絶世の美女に違いないのだ。

さらにタナトスも絶世の美女だ。

そんな女達が私のために争い合っているのだ。

もてる男は罪であるというが，まさしくそうだな。

私が目指す酒池肉林の縮図が今まさにここにある。

さあ，タナトス，エリー。

せいぜい争い合うがいい。

私は悠然と高見の見物をするとしよう。

私の魅力が女達を争わせてしまう…。

何とも罪な男だな…。

「私は隊長を殺してでも奪い返してみせます！」

「貴様に奪われるぐらいなら俺が殺してやるさ！」

……。

やはり争いは良くないな。

人は手と手を取り合って平和に生きていかなければならない。

戦いの果てに得るものは何も無いのだ。

……。

要するに私が得るものが何も無いのだ！

それどころか何もかも失ってしまう！

嫉妬に燃えた女は果てしなく恐ろしいぞ！

第13話：嫉妬

「なるほど，要する貴方が原因のわけね…」

「はっ！申し訳ありません！」

私は腕を組んでいるアイリの前で正座して縮こまっていた。

あれからタナトスとエリーが激突して，訓練場は更地になってしまった。

その後，アイリ率いる治安部隊が出くわして何とか場を収めることができたのだ。

その時に被った犠牲者は約百人弱。

私が命がけで何とか間に入ることで二人は剣を収めてくれたわけだ。

それにしてもタナトスはともかくエリーがあそこまで強かったとはな…。

力ではタナトスに遙かに劣るが，それを補う速さ，巧みに操っていく魔法を持って何とか互角の勝負に持ち込んでいたのだ。

だが，あのまま続けていたらタナトスが勝っていただろう。

タナトスの力は技や魔法を物ともしないほどに凄まじいからな…。

単純な力ほど恐くて，対処に難しいものは無い。

全くあれほどの規格外の化け物に私はよく勝てたものだ。
それだけ私の最強の力が偉大だということなのだろうか。
まあいい。
今はアイリの説教を聞き流さねばならない。
それにしても今回の説教はまた一段と切れがあるな。
言葉の一つ一つが私の心を抉っていくような鋭さだ。
「聞いているの？ロスト隊長！」
「はっ！猛省しております！」
それにしてもアイリはやけに機嫌が悪いようだな。
何か悪い知らせでもあったのか。
機嫌が悪いのは結構だが，私を巻き込まないようにして欲しい。
「それにしても，ロスト…」
「はっ！何でございましょうか？」
ロストと名前で呼んできたぞ！
禄でもない目に合ってしまう前兆だな。

ここは一つ仮病でも使って回避しようか。

「すいません，少し体調不良でして，申し訳ありませんが…」

「体調不良ね…。誰かさんとやりすぎて腰を痛めたのかしらね…」

……。

なんで知っているのだ。

いや、一人だけ心当たりがある…。

「隊長はあの女に騙されているのですよ！」

エリー！

どこから沸いて出てきたのだ！

それと、やはり貴様が機密情報を漏らしたのか！

「ふっふっふっ、全てはエリアルト殿から聞いているのよ、ロスト…」

「いえ、私はそんな…」

くっ！

それにしてもエリーとアイリは知り合いだったのか…。

「エリアルト殿は貴方が来るまではブリュンスタッドの英雄だったのよ。戦場を駆ける殺戮戦姫として国内外で恐れられていた傑物なのよ…」

殺戮戦姫…。

果てしなく物騒な二つ名だ…。

道理であのタナトスと張り合えるわけだ。

「ちなみに私は氷葬の死神と呼ばれていたわね」

氷葬の死神…。

如何にもアイリに似合うような恐ろしい二つ名だ…。

……。

どうして私の知り合い女は危険な人種が多いのだ…。

美人なだけに果てしなく残念だぞ！

「さて、申し開きはあるのかしら？」

アイリは説教から尋問へと変えていった。

申し開きか…。

……。

考えてみれば、私とタナトスの関係について、別にアイリに弁解する必要は無いな。

アイリは私を完璧に英雄だと思いこんでいるに過ぎない。

さらに言えば、私の最強の力しか見ていないのだ。

エリーもまた私を英雄だと理想化しているに過ぎない。

なぜ、私が二人に言い訳しなければならない。

……。

……。

…。

だが、二人とも私のことを形はどうあれ愛していることは確かだ。

それに何だかんだと言って二人のお陰であの殺伐とした戦場でも何とかやっていけたのだ。

だから、むしろ二人には感謝すべきだろう。

例え、私のことをただの理想化された英雄像として認識されているだけにしてもだ。

私も美女と縁のある人生を謳歌させて貰っているのだ。

これが等価交換であるというならば、謹んで受け入れよう。

少し切ない気持ちになってきたが仕方が無い。

これも全ては私の大いなる夢のためだ！

頭なら幾らでも下げてみせるぞ！

このロストの生き様を見よ！

「言い訳はしません。すいませんでした」

くっ！

堪え忍ぶのもまた男の甲斐性なのだ！

私は美女とは良い関係を築きたい。

そのために私は自分のなけなしの誇りを喜んで捧げよう。

そして、私は痛い思いをしなくても済むのだ。

「あら？呆気なく謝罪したものね。てっきり何か弁解すると思っていたけどね…」

アイリは私が素直に謝罪した様子を意外そうに驚いていた。

せいぜい言っていろ。

これは今まで世話になった身としての私なりのけじめだ。

だが、これ以上はもう謝罪はしないぞ。

後の文句は私にタナトスを押しつけた軍上層部に言って貰おうか。

「まあ、貴方はあの凶暴女を止めるために与えられた生贄になったようなものだし、これ以上言っても仕方ないわね」

アイリはため息をついて尋問を終了してくれた。

話が分かる上司で助かった…。

「しかし、隊長はあの凶暴女に貞操を奪われたのですよ！」

まだ、納得していない女が一人いた。

あれは本当に不可抗力だ。

タナトスは床ではまさしく最強だった。

私が赤子の如く手も足も出なかったのだからな。

……。

だが、気持ちよかったな。

あの締め付けはきつかったが、癖になりそうな中毒性があった。

私の頭蓋骨を潰すぐらいの弾ける巨乳もまた凄まじい破壊力だった。

まさしく男を喜ばせるための至上の名器であると言っても過言では

ない。

実は素晴らしい童貞喪失の体験だったかもしれないな…。

……。

まずい！

思い出していたらつい男の証が元気になってきてしまった！

「過ぎてしまったのは仕方ないわ。けど、追いつくことはまだ可能よ…」

アイリが邪悪な笑みを浮かべて私に少しずつ接近してきている。

「そうですね。戦いはまだこれからですからね…」

エリーもまた不気味な笑みを浮かべて近づいてきている。

何をするつもりだ？

「隊長、私の処女を受け取ってください…」

「私の初めてもあげるのよ。光栄に思いなさい…」

なぬ。

いきなりどうしてこんな展開になった？

「私は隊長の副官として誠心誠意尽くしてきたつもりです…」

「タナトス殿よりも私達の方が早くロストと知り合ったのよ…」

私の両腕がエリーとアイリに掴まれる。

「私はただ隊長からご褒美を頂きたいだけです…」

「私達にも貴方の愛を味あわせて貰うわよ…」

私は二人に寝室に引きずられていく。

又してもこのような展開になってしまったな。

だが，ここは喜ぶべきところだろう。

私はこの状況を謹んで受け入れていくぞ！

既にタナトスと初体験は済ませてしまっている。

もはや私に迷いは無いのだ！

酒池肉林の世界を実現させるまでは清らかな体でいたかったが，今となっては些細なことだ。

目眩く体験を堪能させて貰おうではないか…。

……。

……。

…。

体が縛られて動けない。

なぜこのような状態になっているのだ？

「私達は初めてだから，乱暴されたくないのよ。だから，動かないでね」

「初めは慣らし程度でいきたいから我慢してください，隊長」

何て事だ…。

せっかく攻めていけると思っていたのに…。

これでは生殺しではないか！

「さあ，受け取って下さい！私の処女を！」

ぐぼぁああ！

エリー…。

いきなり準備もなくやってくるとは…。

「……っ！」

エリーは悶絶しているようだった…。

「ぐっ！でも，私はがんばります！隊長！」

復活するのが早すぎるぞ！

「さあ，いきますよ！私の愛を受け取ってください！」

無理をするな！

体を壊すぞ！

「エリアルト・リリエンフェルト！押して参る！」

急に凛々しくなるな！

「はあああああっ！」

ぐおおおおおおおっ！

……。

……。

……。

…。

何とか凌いだぞ…。

エリーは力尽きて倒れたようだ。

タナトスの荒腰に耐えた私だ。

この程度ではまだ悶絶はしたりはせん！

「次は私かしら…」

次は手強いかもしれない…。

「さてと，いくわよ…くぅぅ！」

アイリも悶絶している。

「私は…負けはしないわ！」

アイリも復活が早いぞ！

「さあ，私の中で果てなさい！ロスト！」

ぬあああああああああああっ！

……。

……。

……。

……。

…。

私は何とか縛っている物をほどき，ベットから抜けだして自分の部屋に戻っていく。

タナトスに鍛えられたお陰で何とか耐えることが出来た。

だが，危なかった。

もう少しで本当に昇天してしまうところだった。

余りやりすぎるのも体に良くないな。

何事もほどほどにしないといけない。

私はまた一つ教訓を得ることが出来たのだ。

さてと，後はゆっくりと寝るとするか。

今晩は良い夢が見れそうな気がするな。

私は意気揚々と自分の部屋に入っていった。

「待ちくたびれたぜ，旦那様…」

……。

「そういえば，旦那様の体からは女の香りがしてくるな…」

……。

「容認するとは言ったが，それは俺を一番に愛してくれることが条件だ…」

……。

「だから，今夜は寝れると思うなよ…」

……。

「骨の髄まで食い散らかしてやるぜ…」

……。

今夜は宿に泊まるとしようか。

……。

ぐえぇ！

首を締め上げられてベットへと引きずり込まれていく！

「逃がさないぜ，ロスト…ちゅ」

むぐぅ！

タナトスの官能的な口づけで体の力が抜けてしまう…。

「貴様の愛を絞り尽くしてやる！」

ぐはあああああああっ！

「俺の愛に溺れて逝け！」

がはあああああああっ！

……。

……。

……。

……。

…。

見事に昇天してしまったぞ…。

さすがにもう限界だ…。

「まだ夜はこれからだぜ…」

このままでは腹上死してしまう…。

「俺の愛を思い知りな，ロスト…」

ぎゃあああああああああああっ！

……。

又しても燃え尽きてしまった…。

第１４話：常在戦場

とりあえず，何とか腹上死をせずに済んだな…。

命の綱渡りをする日々を過ごしていくのは辛いが，引き替えに至上の快楽をも味わえるのだから難儀なことだ…。

私の朝の日課は柔軟体操をして，体を解すのだ。

もう二度と戦いで腰痛に悩まされることの無いように念入りにやれねばならない。

腰痛が原因で戦場で命を落とすなんて笑い話どころか恥以外の何物でもない。

あの時の腰痛は言葉通り本当に死ぬほど辛かったかなら…。

……。

「精が出ているな，旦那様。では，早速戦闘訓練を開始するか。今度こそ負けないぜ」

タナトスが清々しい笑顔で挨拶してきている。

今度こそ負けない，か…。

こちらも負けるわけにはいかない。

何しろタナトスは私を殺す気で攻めてくるからな…。

敗北は即ち死を意味することになる…。

どの世界を探してみても夫を毎日殺しにかかる妻など，そうお目にかからないだろう…。

「隊長！私も参加しても宜しいでしょうか？」

エリー，また貴様なのか…。

最近，タナトスと一緒にエリーも戦闘訓練を受けてきている。

まあ，それは調練の時でも行っているから別に構わない。

だが，問題は…。

「また，貴様か…。俺と旦那様との朝の触れあいを邪魔するとは良い度胸だな…」

「ふっ，タナトス殿。私は隊長の副官です。ならば，隊長の身の回りの世話するのが副官としての務めです」

朝から胃に穴が空きそうな話のやり取りは止めて欲しいものだ。

このままでは私は胃潰瘍になりかねない。

戦場でも私生活でも私は常に命の危険に晒される星の下で生まれてしまったのだろうか…。

まあいい。

人間はどんなに過酷な環境でも適応していくような逞しい生き物だ。

私もその内，慣れてしまうのだろうな…。

……。

断じて否だ！

命の危険に晒された生活が習慣付くのは戦いを生業とした傭兵や暗殺者で充分だ！

私は最強の力を持っただけの元平民その他に過ぎない！

人の慣れとは時にして危機感を無くし，油断を生じさせてしまう危険な落とし穴でもある。

危ないところだった…。

危うく命の危機に対して鈍感になるところだった。

私は痛い思いをすることは嫌いなのだ。

さらに言えば，痛い思いをせずに良い思いをしたい。

虫のいい話からもしれないが，私にはそれを叶える力がある。

それは神が私に与えてくれた最強の力だ。

最強の力を手に入れて以来，命の危険に晒されるこたが多くなった

ことは遺憾ともし難い。

だが，美女という至高の特典も付いてきてくれるのだから必ずしも悲観すべきことばかりではない。

「俺は旦那様の妻だ。ならば，私生活での夫の世話をするのは妻たる俺の役目だ。たかが副官如きが旦那様の私生活にしゃしゃり出るとは…図々しいにも程があるぞ！」

「軍人とは常在戦場。いつ如何なる時も油断せずに過ごすことが務めです。ですから，副官である私が隊長の身の安全のために付き従うのは道理。妻は大人しく家で家事でもしておけばいいのです」

これで性格が良かったら尚も言うこと無し！

……。

本当にお淑やかな性格だったら毎日が至上の楽園であるというものを…。

途轍もなく残念過ぎるな…。

「だったら，俺と貴様のどちらかが，旦那様に手傷を負わせたら今日一日は旦那様を独り占めできるというのはどうだ？」

「面白いですね。その勝負，受けて立ちましょう。殺す気でかかれば，何とか隊長に掠り傷一つは負わせることができるかもしれませんね」

何やら危ない話に纏まってきているぞ…。

「だが，一人では旦那様に手傷を負わせるのは非常に困難だ。不本意ではあるが，ここは協力して戦うのはどうだ?その上でどちらかが先に傷を負わせても恨みは無しだ」

「確かに隊長の防御は神の領域に達していますからね。良いでしょう。貴方と協力して隊長を追い詰めてみましょうか。あるいはこれで更なる高見を望めるかもしれません」

……。

ここで少し戦力を分析してみようか。

片や神の力を受け継ぎし最強の戦闘力を誇る私。

片や九百九十九人もの勇者を血祭りに上げた歩く破壊兵器ことタナトス。

さらには殺戮戦姫という物騒な二つ名を持ち，タナトスと同等に近い戦闘力を持つエリー。

それが二人がかりで私を殺そうとしてくる。

……。

敵前逃亡しても誰も責めないだろう…。

故にこれは戦略的撤退である。

私の辞書に蛮勇と無謀の文字は書かれていない。

「将軍閣下に用事があるので…」

ぐわっ！

頭を鷲づかみされたぞ！

「旦那様，釣れないではないか。せっかくの妻との触れあいを無為にするつもりか…」

くっ！

タナトスには私の本性が知られている！

私を嬲るつもりなのか！

「隊長はいつもいけずなのですよ。私の誘いを断るばかりだし…」

「ほほう，女の誘いを無下にするとは許し難いな。ここは少しお仕置きを兼ねた訓練に付き合ってもらうか，なあ，旦那様…」

状況が悪化しているぞ！

しかもお仕置きを兼ねてだと！

私を本気で殺すつもりなのか！

……。

私は頭を鷲づかみしているタナトスの手を振り払って剣を構えた。

良かろう，エリー，タナトス。

副官を修正するのもまた隊長の務めだ。

妻に威厳を示すのもまた夫の務めだ。

貴様等に私の偉大さを思い知らせてやるぞ！

「やっとやる気になってくれたか，嬉しいぜ，旦那様…」

モーニングスターの風圧で周囲の草花を散らしながら近づいてくる
タナトス。

「隊長，私の成長を見てくださいね…」

剣を振るって，小さな羽虫を切り落としながら近づいてくるエリー。

……。

隊長は副官を大切にするべきだな…。

夫は妻を立たせるべきだろうな…。

……。

「やはり将軍閣下の用事を優先…」

「今度こそぶちのめしてやるぜ！」

「問答無用です！」

やっぱりこうなるのか！

タナトスの恐怖の鉄球が私の頭蓋骨を粉砕しようと迫ってくる。

これでは戦場と変わらないではないか！

私を頭を下げ，死の風が頭上を通り越していく。

今のは当たっていたら死んでいたぞ！

鉄球を避けた矢先，エリーが間合いを詰めて私に斬撃を見舞ってくる。

しかも私を一刀両断するかのような必殺の一撃だ。

私はいつも通り，最小限の動作で回避してエリーを昏倒させようと剣を振りかぶる。

しかし，それを阻止するかのようにタナトスの鈍器のような強烈な回し蹴りが襲いかかってくる。

私は海老剃りになって，タナトスの回し蹴りを交わしていく。

……。

交わした先にある木々や城の壁が吹き飛んでいた…。

タナトスの蹴りの風圧が薙ぎ払ったのだろうな…。

さすがは歩く破壊兵器…。

存在自体が自然災害にも匹敵するぞ！

「隙ありです！」

海老剃りになっている私にエリーが上空から刺突を繰り出して急降下している。

エリーの剣先が向かっているのは私の心臓の位置だ。

私は海老剃りから逆立ちするようにして，エリーの強襲を蹴りで撃退していく。

「ぐっ！さすがは隊長です…」

当然だ！

殺されそうにでもなれば，嫌でも火事場の馬鹿力が発揮されるのだ！

「それでこそ旦那様だぜ！出なければ殺し甲斐が無い！」

タナトス…。

貴様，明確に殺意を示してくれたな！

私を愛しているのではなかったのか！

「旦那様！殺したいほど愛しているぜ！」

物騒極まる愛など激しく願い下げだ！

「タナトス殿に殺されるぐらいなら，私が隊長を殺します！」

エリー！

貴様は副官として少しは隊長を守ろうとする気持ちが無いのか！

「隊長が死ぬことでもう二度と傷つくことはありません！これこそが私のせめてもの愛です！」

確かに傷つくことは無いが，女も抱けないし，酒も飲めない！

まさに究極の禁欲生活になってしまう！

貴様は私に死者の国で出家しろとでもいうのか！

……。

エリー。

貴様の言うとおり，まさに常在戦場だ。

だが，それでも私は生き延びてやる。

神が下した試練なぞ笑って乗り越えて見せようではないか。

私は剣を捨て，拳を構える。

元平民その他である私に騎士のような優雅な剣術なぞ満足に出来るわけがない。

だが，拳での殴り合いならば，負けはしないぞ！

「どうやら本気になったようだな，旦那様」

「ご託はいい。さっさとかかってこい…」

また貴様を私の拳で眠らせてやる。

「隊長，凄い気迫です…」

貴様には再教育を施してやる。

エリーとタナトスが油断無く私を見据えてくる。

今度こそ有無とも言わせないほどに叩きのめしてやるぞ！

痛い目に合う戦いは嫌いだが，将来を見据えてでの戦いならば，致し方ない！

この物騒極まる女共を見事屈服させ，かつ調教してやる！

貴様等は私を怒らせたのだ！

覚悟しろ！

エリー！

タナトス！

第１５話：木乃伊取り

エリーとタナトスが動いてこない。

どうやら私の本気を前にして震えているのだろうな。

この機に乗じて貴様等は私の奴隷と成り果てるのだ。

もはや私には道徳観念なぞ存在しない。

ただ私の中にあるのは圧倒的なまでの支配欲のみだ。

これは力に溺れたわけでも油断したわけでもない。

全力でエリーとタナトスを伸してやるのだ。

それで私は命がけの日常に終止符を打つことになる。

私はエリーとタナトスに向かって不敵な笑みを見せてみた。

「どうした，かかってこないのか？」

私は如何にも弱者を嬲るような笑みを浮かべているだろう。

演劇をするとしたら私は確実に敵役になるだろうな。

「野郎！嘗めるな！」

タナトスが神速で私に迫ってきている。

だが，私には止まって見えるぞ！

タナトスの拳や鉄球，蹴りを織り交ぜた連撃があらゆる角度から私に迫ってくる。

しかし，私の体はあらゆる角度から対応できるような柔軟性が秘められているのだ。

私は体をくねらせてタナトスの猛攻撃を回避していく。

これこそが私の神技というべき鉄壁の防御だ！

地上の何者にも私に触れることは叶わないのだ！

「相変わらず蛸のような動きをしやがって！」

タナトスの腹ががら空きだな…。

私はタナトスの連撃をかいくぐるようにして腹部に拳を撃ち込む。

「がふっ！」

タナトスが吐き出した胃液が私の顔に降り掛かってきた。

少し目に染みてしまったぞ！

「タナトス殿，この！」

エリーがタナトスを庇うようにして私に斬撃を見舞ってくる。

仲が悪いように見えて結構連携をやっているようだ。

私はエリーの剣を交わして二人から距離を取る。

とりあえず，タナトスに掛けられた胃液を拭わないと。

これで私の強さを思い知らせたはずだ。

後は二人が戦意喪失してくれれば，完璧だ。

タナトスには殴って胃液を吐かせてしまったことは後で謝るとしよう。

でなければ，後が恐いからな…。

……。

何故謝る必要があるのだ！

私は屈服させるために戦ったのだぞ！

自分が悪いと思って謝ってしまっては本末転倒だ！

まずい！

私の体に奴隷根性が染みついてしまっている！

実は私の方が潜在的に調教されてしまっているぞ！

このままではいけない！

自分自身に打ち勝つためにもタナトスとエリーを屈服させなければ！

さあ，タナトス，エリー！

さっさと降参するのだ！

今ならまだ優しく扱ってやるぞ！

「さすがは俺の旦那様だぜ，以前よりもさらに体の動きに切れが増していたな…」

毎日欠かさず柔軟体操をしていたからな…。

何となくだが，タナトスが不気味なほどに落ち着いているな。

まだ奥の手があるというのか？

魔法でも使うつもりなのだろうか？

だが，魔法攻撃は私には通用しないぞ！

それこそ鉄壁の防御魔法を常に体にかけているのだからな…。

もはや私に死角なぞ存在しない！

まさに私は最強なのだ！

「いつもなら，ここで打ち止めだが，今回はエリアルトとの勝負が

かかっているからな。だから，旦那様の弱点を付かせてもらうぜ…」

私に弱点だと？

慢心するつもりは無いが，敢えて言わせて貰おう。

私に弱点など微塵も存在しない！

苦し紛れの負け犬の遠吠えとでも受け取っておこうか。

「どうするつもりだ？」

どうしようもないだろう？

「エリアルト，周囲に結界を貼ってくれ。さらに不可視の特性も付加してくれ。旦那様の弱点を付くための下準備だ」

周囲に結界を貼ってどうしようとするつもりだ？

戦略級の魔法攻撃でも仕掛けてくるつもりか？

いや，それだけなら不可視の特性も付けないはずだ。

「何を企んでいる？」

「見てのお楽しみさ，旦那様…」

タナトスが不敵な笑みを浮かべている！

これは猛烈に嫌な予感がしていきたぞ！

「結界を展開させましたよ，タナトス殿。それに不可視の特性も付けましたよ。何か策があるのですね」

私の最強の力でどんな策をもねじ伏せてやるわ！

かかってこい！

「これだけは使いたくなかったが，旦那様に勝つためだ，致し方ない。見るがいい！俺の体を！」

いきなりタナトスが自分の胸の服を引き裂いてきた。

その下にあったのものは…。

ぐほぁあああっ！

私から大量の血が噴き出してくる。

ぐっ…。

私の最強の力にも弱点が存在していたというのか…。

太陽の光に反射するかのような滑らかな曲線。

突き抜けるような攻撃的な出で立ち。

至高の芸術家が認めても到達し得ないような美の極致。

……。

タナトスの巨乳が陽光の下に晒されていた。

破れた服が被っていて重要な部分が隠れていたがそれでも戦略兵器並の破壊力だった…。

……。

鼻血が止まらないぞ…。

「初めて戦ったとき，旦那様は俺の胸に釘付きだったからな。ほら，旦那様の大好きな俺の乳だぜ…」

タナトスが巨乳を見せつけるように私の近づいてきている。

なるほど，このために不可視の特性を結界に付加させたのか！

「俺に勝たせてくれたら，これは思いのままだ。旦那様の好きなようにいじってくれても構わないんだぜ…」

私の足が勝手に動いていた。

目の前には私を抱き締めようと両手を広げているタナトスがいる。

甘い香りを漂わせてくる美しき食虫植物が目の前にいる。

私は甘い匂いに誘われていく羽虫だ。

快楽の果てにある死の扉を私は開こうとしていた。

……。

……。

…。

惑わされないぞ！

私は何とか踏みとどまった。

危なかった…。

私の心が壊されるところだったな…。

「ちっ！」

タナトスが舌打ちしてきた。

私の心もまた鉄壁なのだ！

これで打つ手が無くなったはずだ！

「隊長！私のも見てください！」

ぐほあああああっ！

伏兵がそういえばいた…。

エリーもタナトスに倣うようにして服を破って胸を晒してきた。

破けた服が掛かっているがエリーの胸もタナトスほどでは無いがかなりの巨乳だ。

まずい！

このままでは私は出血多量で天に召されてしまうぞ！

「こうなれば仕方ない！このまま攻めさせてもらうぜ！」

タナトスは胸を晒したまま悠然と拳を構えてくる。

「私も最後まで戦い抜きますよ！」

エリーもまた凛として胸を晒したまま剣を構えてきた。

良かろう！

ならば，私も最後まで戦い抜いてやるぞ！

私は血で染まった顔を拭い，腰を折りながら拳を構えてみせる。

「今度こそ俺の胸で眠らせてやるぜ！覚悟しな！旦那様！」

「私の胸で昇天させてあげますよ！隊長！」

こうして私とエリーとタナトスの果てしない戦いが始まったのだ。

……。

……。

……。

……。

……。

……。

…。

「はぁ…はぁ…，ここでもう打ち止めにしないか？タナトス，エリー…」

私は膝を折って息切れをしていた。

戦いは互いに決め手を打つことが出来ず延々と続く羽目となってしまった。

私は鉄壁の防御を持ってタナトスとエリーの猛攻を凌いでいた。

私もエリーとタナトスに一撃を加えるべき攻撃を仕掛けようとしたが…。

……。

攻撃する度にエリーとタナトスの巨乳に釘付けになってしまい，腰を折ってしまう始末だったのだ。

つまり，互いの攻撃が当たらないまま決着が付かなかったわけだ。

「はぁ…確かにこれ以上続けても決着は着きそうにも無いな…」

「私はもう疲れてしまいましたよ…」

やはり戦いとは斯くも空しいものだな…。

結局，今日一日私達は何をしていたのだろうか…。

さすがに疲れてしまったぞ…。

さて，帰るとするか…。

「とりあえずは癒しが欲しくなったな…」

「そうですね，私も癒しが欲しいですね…」

エリーとタナトスがいつの間にか迫ってきていた。

何だ？

戦いはもう終わったのでは無かったのか…。

しかも獲物を前にした猛獣のように舌なめずりもしてきている。

「エリアルト，結界の効果はいつまで持つ？」

「はい，後五時間は確実ですね…」

結界がいつまで持つ？

五時間は確実？

何を言っているのだ？

「旦那様…」

「隊長…」

「何をするつもりだ？」

エリーとタナトスが不気味に笑っている。

何だか物凄く恐ろしいぞ！

「決まっているだろ，旦那様…」

「何が決まっているというのだ？」

「こういうことだ！」

タナトスはいきなり胸にかかっていた破り掛けた服を引きちぎってくる。

……。

ぐはあああああああっ！

私の鼻から欲望が吹き荒れてしまう！

「今だ！確保するぞ！エリアルト！」

「大人しくしてくださいね！隊長！」

ぐほっ！

私が瀕死の重傷を負っている隙にエリーとタナトスが二人がかりで体当たりをかましてきた。

瞬く間に私はタナトスとエリーに地面に押さえつけられてしまう。

まさかここで情事を行うつもりなのか！

「先ほどはよくも俺の腹に拳を入れてくれたな…」

何やら凄むような顔で私を威圧してくるタナトス。

「訓練だったらから仕方なく…ふがっ！」

鼻を噛られてしまった！

「ちゅる…言い訳するな！貴様の子供を産めなくなればどうするつもりだ！」

そんな理不尽だ！

だったら無抵抗のまま死ねというのか！

しかも子供を作るだと！

まだ私は親になりたくはないぞ！

「少し強く嚙りすぎたか。血が出てるな。れろぉ…」

ぬおっ！

今度は鼻を舌で舐められてしまった！

「ぴちゃ…れろぉ…あむぅ」

何だか癒されてくるぞ…。

これが飴と鞭というものなのか…。

……。

まさか…。

私は調教されているというのか…。

「ぴちゃ…くっくっくっ，気持ち良いか?旦那様…」

タナトスが私の鼻を舐めるのを止めて宛然と笑っている…。

「隊長！私も気持ちよくさせますよ！あむっ！」

ぎゃあああああっ！

思いっきり耳を嚙るな！

「旦那様，俺無しではいられないような体にしてやるぜ…あむっ！」

ぎぇえええええっ！

反対側の耳を噛られてしまった！

「ちゅる…隊長…墜ちてくださいね…」

「ぷちゃ…旦那様…溺れさせてやるぜ…」

……。

木乃伊取りが木乃伊になる…。

……。

いやあああああああああっ！

……。

……。

……。

……。

……。

…。

私は身も心も墜ちてしまった…。

……。

「今度は優しくしてやるぜ…旦那様…」

「天国に連れて行ってあげますよ…隊長…」

……。

ぬおおおおおおおおおおおおおっ！

……。

……。

……。

……。

…。

私は男としての尊厳をタナトスとエリーに根刮ぎ奪われてしまった…。

それに物凄く気持ちよかったのが悔しいぞ…。

「愛してるぜ，旦那様…ちゅ」

「お慕い申し上げます，隊長…ちゅ」

……。

毎度の事ながら燃え尽きてしまったな…。

第１６話：心の揺らぎ

タナトスと夫婦になって早一ヶ月が過ぎた。

私は相変わらず毎日が命がけだ。

そんな物騒な日々を楽しいと思っている私もいた。

最強の力を手に入れて，日々が波瀾万丈ではあったが，美女達との出会いが私を癒してくれたのだ。

痛い目に合うのはもちろん嫌いではあるが，それ以上の者を私は手に入れている。

願わくば，このままもう何事も無いことを祈るのみだ。

厄介事はタナトスとエリーとアイリで充分だ。

私を恐い目に合わせるのは美女だけでいい。

セシリア様のようなお淑やかな美女がいたら尚のこと良い。

早く酒池肉林の世界を実現させたい。

欲望のままに生を謳歌したい。

それでもって安全が保証された生活を送りたい。

だが，神はそんな私に更なる試練を与えようとしていた。

そして，これが長い悪夢の始まりだとも知らず私は浮かれていたのだ…。

「近い内にヴァルキリア軍が再度攻めてくるらしいですよ」

調練の時にエリーをそう呟いていた。

相変わらず情報が早い女だ。

エリーの前では迂闊なことは言わない方がいいだろうな。

「ロスト隊長，貴方には再び戦場に出て貰うことになるわね…」

アイリが神妙な様子で私に話しかけてきた。

いつもの不敵な笑みはどうしたのだ？

風邪でも引いたのか？

「将軍閣下のご威光があれば，恐れることは無いでしょう」

私は形式的な文句を返してやった。

アイリとは私生活でも親しくさせてもらっているが，一応公の場だからけじめはつけないとな。

「今回ばかりはどうなるかは分からないわ。何しろあのヒュプノス殿下が指揮を取るらしいしね…」

ヒュプノス殿下。

初めて聞く名だな。

「まあ，隊長はまだ軍に入って間もないですか，知らなくても当然ですね…」

エリーは少し震えるように呟いていた。

何だか皆どこかそわそわしている様子だな。

ヴァルキリア軍が襲撃してくるがまた以前のように撃退すればいいのだろう。

しかも今度は正規兵として美女軍団も期待できるわけだしな。

さらに言えば，ヴァルキリア軍最強であったタナトスも私の中にいる。

もはや恐れることでもないだろう。

「以前のように撃退すればいい…」

そして，美女軍団を私の酒池肉林計画の構成員に迎えあげていきたい。

「隊長，以前戦ったヴァルキリア軍は本当に使い捨ての軍隊にしか過ぎなかったのですよ。正規兵は隊長が思っているよりも遙かに恐ろしい集団なのですよ…」

エリーが地獄で鬼を見てきたかのような恐ろしい顔をしてきた。

正直，エリーの方が恐ろしいと思うぞ。

「彼女達は薬物を投与して過剰な身体強化を施されているのよ。その力は並の男性を遙かに凌ぐものだわ。さらに言えば，人格崩壊をしていて凶暴性を秘めた極めて危険な強化兵士でもあるの。はっきり言って，正規兵はあの奴隷部隊が霞むぐらいの戦闘力を備えているわけなのよ」

……。

要するにタナトス並の凶悪な女が揃っているわけなのか…。

確かにエリーの言うとおり，恐ろしい集団なのかもしれない。

「ロスト，貴方も気を付けてね。特にヒュプノスは貴方を狙っているのかもしれないのだから…」

なぬ。

「どういうことでしょうか?」

なぜ，逢ったことも無い輩に目を付けなければならないのだ。

「隊長，ヒュプノスは隊長の自称妻であるタナトス殿の姉君なのですよ」

何ですと！

それと自称妻とはなかなか手厳しいことを言ってくれるではないか。

「気づかなかったのね。ヴァルキリア帝国第一皇女ヒュプノス・ヴァルキリア。ヴァルキリア帝国の実質の指導者にして，科学兵器開発部門統括，帝国軍師，そして，タナトス殿の姉君という肩書きなのよ…」

肩書きの多さから凄い女傑であることを伺わせる。

確かタナトスの肩書きは第二皇女だったわけだから，その上の第一皇女がいるのは当然のことか。

しかし，なぜタナトスは今まで姉のことについて話さなかったのだろうな。

後で聞いてみるとするか。

「ロスト，くれぐれも気を付けるようにね。私はヒュプノス以上に恐ろしい女は他に知らないのだからね…」

アイリがそれほど恐れているとは…。

ヒュプノスとはいったいどんな人物なのだろうか…。
何だか猛烈に嫌な予感がしてきたぞ！

「そうか，旦那様は姉上の話を聞いたのだな」
私は早速タナトスに姉についての話を聞くことにした。
タナトスは苦虫を潰したかのような表情をしているな。
……。
ひょっとしてまずい話を聞いてしまったのではなかろうか…。
だいたい過去の身の上話は暗いと相場が決まっているからな…。
ここは話を逸らして有耶無耶にするべきだろう。
聞いてしまったら後戻りが出来なくなる危険があるからな。
必要以上に感情移入しないことが円滑な人間関係が構築できるのだ。
「今日は良い夜だ…」

「姉上はまさにヴァルキリアの恐怖の象徴だ」

せっかく気を利かせて別の話題に変えようと思ったのに結局，暗い過去話をするのか！

「ヴァルキリアは女尊男卑で有名な国だ。国民も皆，男を蔑む，女と尊ぶ教育を受けている。だが，姉上は違う」

姉上は違う？

違うと言うことは男好きなのか？

だったら大いに歓迎するぞ。

「姉上にとって男と女とかは重要でない。役に立ちそうな実験体かそうでないかなんだ…」

実験体…。

これ以上聞いたらやばい気がしてしまう。

やはりここは別の話題を…。

「今晩は良い夢が見れ…」

「姉上は科学兵器部門統括で人体実験をしている狂科学者だ。捕虜になった兵士を実験体として解剖したり，殺し合わせたりするような恐ろしい女なんだ…」

そんな恐い話聞きたくなかったぞ！

だから別の話題を振ろうとしたというのに…。

それほどまでに私に話したかったのか！

人体実験？

殺し合いをさせる？

世の中にはとんでもない女がいたものだ…。

なるほど，アイリやエリーが恐れるわけだ。

確かにそんな恐ろしい女とは私も絶対に関わり合いにはなりたくない。

実験体になるなんて死んでもお断りだ！

「ロスト！」

ぬっ！

タナトスが急に抱きついてきたぞ！

だが，いつもの荒々しさが無い。

むしろ縋り付くような感じだ。

「ロスト，俺は恐い…」

私の胸に頭を押しつけているタナトスが震えている。

……。

あのタナトスが震えているだと！

これは一大事だ！

よほどタナトスの姉は危ない存在だということなのか！

「姉上は間違えなく貴様を俺から奪ってくる。何しろ貴様は俺の旦那様だからな…。だから，恐い…」

……。

冗談ではない！

奪われる身になる私の方がよほど恐いぞ！

タナトスが震えるほどに恐ろしい姉。

その姉に囚われてしまうかもしれない私。

……。

私は姉に徹底的に解剖され，ついにはあのおぞましい突然変異体の仲間入り…。

……。

うおおおおおおおおおおおっ！

そんな身も毛も弥立つ未来なんて死んでも嫌だ！

しかもヴァルキリアは正規兵を率いてブリュンスタッドに攻めてくる。

アイリは勝ち目があるかどうか分からないと言っていた。

負ければ，捕虜。

捕虜になれば，実験体。

実験体から突然変異体。

分かりやすいほどの破滅的未来に流れる道筋だ。

……。

要するに戦に勝てれば問題無いとのことだ。

負けなければいいのだ。

タナトスは一応私の妻だ。

ならば，妻は夫を守る立場にあるはずだ。

情けない話，私ではどうにもならない。

最強の力を持っても正規の軍人ではないからな。

戦う意志が強くなければ，それまでの話だ。

だから，戦いの中に生きる者に頼るべきだろう。

「ロスト，俺は貴様を失いたくない…」

……。

くっ…。

縋っている女に私は頼ろうとしているのか…。

どうすればいいのだ？

私は痛い目にあるのが嫌いなのだ。

だが，私に縋っている女は痛い目に合っている。

これからも痛い目に合おうとしているのだ。

私はそれを見て見ぬ振りをするというのか？

見ず知らずの者ならば躊躇いもなく斬り捨てるところだが…。

タナトスは私の妻になっている。

タナトスだけではない。

副官であるエリーや上司であるアイリ。
私を守ってくれた肉の盾である隊員達。
そんな奴らが痛い目に合おうとしてる。
私は見捨てることができるのか？
……。
答えが出てこない。
私は不意に縋っているタナトスを抱き締めていた。
「やはり旦那様は優しいな。だから，柄にも無く縋りたくなってしまう…」
タナトスはやんわりと私をベットに押し倒していく。
私はされるがままだ。
「今夜は旦那様に奉仕させてくれ。俺が旦那様を気持ちよくさせたいんだ…ちゅ」
タナトスの魅惑的な唇が私の唇を優しく包んでくれる。
今日のタナトスはとても優しい感じだ。
「ちゅぱっ…どうだ，気持ちいいか，旦那様…」

私はタナトスのことが急に愛しくなり，思わず胸に抱き締めてしまった。

「ろ，ロスト…」

「……タナトス，私はお前を置いて死んだりはしない。安心しろ…」

「ロスト！」

……。

……。

……。

……。

……。

……。

タナトスが私の胸の上で寝息を立てている。

……。

何て事を私は言ってしまったのだ…。

私は必要以上に感情移入しないことが流儀ではなかったのか…。

こんなの私らしく無いぞ…。

私は痛い目に合うのが何よりも嫌いなはずだ…。

これは気の迷いに過ぎない…。

明日になれば，元通りの私になるはず…。

だから，何も問題は無い…。

第17話：正規兵

私は目覚める。

実に気持ちいい朝だ。

今日は何か良いことはあるかもしれない。

私は起き上がろうとして胸に重みがあることに気づく。

「むぅ…」

そういえば，私はタナトスの胸枕になっていたのだ。

「ロスト…」

不意にタナトスが私の名前を言ってくる。

起きたのだろうか？

いや，単なる寝言だな。

もう少しこのまま寝ておこうか。

……。

何だか私では無い気がしてしまうな…。

……。

…。

「起きろ，旦那様」

……。

「起きろ，ロスト」

ん？

「仕方ないな…」

何だ？

「愛しい妻の接吻で目覚めさせてやるぜ…ちゅ」

むぐっ！

「んぅ…」

……。

「ぅん…」

……。

「ん…」

息苦しいぞ！

私はあまりの息苦しさに飛び起きてしまった。

「おはよう，旦那様」

「あ，ああ，おはよう…」

私は一瞬目を疑ってしまった。

タナトスはこれほどまでに美しかったのか…。

まずい！

平常心を保て！

感情に流される者は愚か者だ！

……。

とりあえずは落ち着いたな…。

私はいつも通り，日課である柔軟体操をするために外出しようとした。

「少し待ってくれ，旦那様」

急にタナトスが呼び止めてきた。

いったい何だというのだ？

「どうした？」

「忘れ物だ…ちゅ」

私の頬にタナトスの唇が押しつけられた。

……。

一瞬時が止まってしまったぞ…。

「ちゅぱっ…ふふっ，朝の口づけだ」

タナトスは魅惑的な紫色の唇を見せながら，微笑んでいる。

……。

男の証が猛烈に元気になり，思わず腰を折ってしまった。

「行ってくる！」

私は逃げるように部屋から出ていった。

タナトスが急に可愛く見えてしまっている。

確かにタナトスは絶世の美女だ。

だが，こんな気持ちになるのは初めてだ。

……。

とりあえず難しいことを考えるのは止そう。

私は雑念を払って柔軟体操に勤しんでいく。

「隊長，おはようございます！」

副官であるエリーが元気良く挨拶をしてきた。

「おはよう」

私もまた挨拶を返す。

何気ないやり取りだが，平和だからこそ何気ないことが出来るものだと，ふと私は思った。

「あああああああっ！」

エリーがいきなり大声で叫んでた。

何だというのだ。

清々しい朝の雰囲気がぶち壊しだぞ。

「隊長！その顔に付いているものは何ですか！」

私の顔に付いているもの？

……。

まさか！

私は即座に自前の手鏡を取り出して自分の顔を見た。

……。

私の唇と頬に紫色の口紅が付いていた…。

……。

ぬあああああああっ！

これこそがタナトスの罠なのか！

私はどうやら少しタナトスを見誤っていたようだな…。

だが，次はそうはいかないぞ！

「隊長！私も朝の接吻を！ちゅ！ちゅ！ちゅ！」

ぬはっ！

エリーが私の顔に接吻の嵐を炸裂させてきたぞ！

エリーの柔らかい唇が何度も私の顔に押しつけられている。

……。

これもなかなか悪くないな…。

「朝から何いちゃついているのよ…」

朝の心地よい空気を冷やすような声が聞こえてくる。

「ちゅ！……あっ！おはようございます！アイリウス将軍閣下！」

エリーが接吻の嵐を中断させてアイリに敬礼をしていく。

「おはようございます！将軍閣下！」

私もエリーの倣い，アイリに敬礼する。

「…まあいいわ。それよりも来なさい。全軍招集がかかってるわよ」

全軍招集。

ということは…。

「ついにヴァルキリア軍がブリュンスタッドに進軍してきたわ…」

私の平穏の日々に終わりが告げられてしまったな…。

「その前にロスト隊長…」

「はっ！何でございましょうか？」

何やら物凄く不機嫌な口調だ。

「顔を洗ってきなさい…」

……。

私は再び手鏡で自分の顔を見た。

……。

顔中に紅い口紅が塗りたくられていた…。

「では，お先に言って参ります！隊長！」

……。

上手く逃げたな，エリー。

「ロスト，貴方は後方で魔法攻撃に専念すればいいわ」

……。

アイリが私の作戦を採用してくれた。

いったい何の罠が待ち受けている？

「宜しいのですか？」

「ヒュプノスの狙いは貴方かもしれないのよ。獲物をみすみす最前線に出させたりしないわ」

……。

アイリが私を心配してくれている…。

……。

騙されないぞ！

きっと何かを企んでいるのだ！

さあ，本音を言え！

私は如何なる真実も受け止めてやるぞ！

「ヴァルキリアは本命を見つけない限り，本腰を入れてブリュンスタッドを攻め滅ぼしたりはしないはず。あの国はヒュプノスの最も役に立つ駒に過ぎないのだからね…」

なるほど，それが理由なのか。

それにしても国すらも駒にしか過ぎないとはタナトスの姉はどれだけ厄介な女なのだ…。

「大丈夫だ。旦那様には姉上といえど，手出しはさせない！」

タナトスは勇ましく私を守ることを宣言してくれた。

「安心しろ，旦那様。姉上からは俺が守ってみせる」

タナトスは私よりもよほど男らしいな。

だが，男としてここは見栄を切りたいところだな。

「私のことは大丈夫だ。タナトスも気を付けるのだぞ…」

「旦那様…」

タナトスが熱い目で私を見つめてくる。

……。

止めてくれ…。

その純真な瞳で見つめられてしまうと自分がいかに汚れているのかを自覚してしまうではないか！

「ロスト…」

アイリもまた熱い目で私を見つめてきた。

「貴方は私の英雄。だから，死ぬことは許さないわ。だから…必ず生きて戻ってくるのよ…ちゅ」

むっ！

アイリがいきなり抱きついて口づけてきたぞ！

しかもエリーやタナトスがいる前で！

「ああっ！将軍閣下！何をやってるんですか！」

「妻の前で堂々と夫に接吻をかますとは良い度胸しているな！アイリウス！」

エリーとタナトスから凄まじい殺気がしてくる！

既に戦場に立っているような錯覚がしてくるぞ！

「ちゅぱっ…うるさいわね。だったら，貴方達も参加したらどうなの？戦前の景気づけよ」

「景気づけか…。それは悪くはない提案だな。ならば，参加するぞ。俺が一番旦那様を愛しているのだからな…ちゅ」

今度はタナトスが口づけてきた。

如何にも自分の者だと主張するような荒々しく，情熱的な口づけだぞ！

……。

私は今，生きながらに天国へと旅立っているな…。

「隊長！私の愛の接吻を受け取ってください！むちゅうぅ！」

タナトスの口づけに割り込むようにエリーの唇が私のそれを捉えてくる。

……。

私は今，とても幸せだった。

世の男共が果たせなかった夢を今，現実のものにしているのだ。

「私もまだ参加させてもらうわよ…ちゅ」

小さいが確実に酒池肉林の世界が構築されて来ている。

私は夢に一歩一歩近づいてきているのだ！

この夢を手放さないためにも生き延びてみせるぞ！

うおおおおおおおおおっ！

……。

……。

……。

……。

……。

……。

…。

戦場に行く前に危うく夢を手放すところだった…。

三人とも気合い入れて私を貪り尽くしてくれたからな…。

「必ず生きて帰るぜ！旦那様！」

「頑張りましょう！隊長！」

「励みなさい，ロスト」

三人とも実に艶やかな顔だ。

私は手鏡で顔を見る。

……。

私の顔には紅と紫の口紅が斑点のように至る所にあった…。

疫病に感染したみたいに壮絶な人相になってしまっている…。

再び顔を洗わねばならないな…。

これでは士気に関わってしまうぞ…。

私は再びリストリア平原の立っていた。

いよいよ美女軍団もといヴァルキリア正規軍とご対面するときが来たのだ。

ロスト隊は緊張と期待が入り交じった表情をしている。

貴様等も私と同じく期待しているのだろうな。

今度はおぞましい突然変異体ではないだろう。

我等はこの世の絶景を拝むことが出来る選ばれし者達なのだ。

この幸運を胸にこれからも強く生きていけるだろう。

「隊長，変な期待をしないでください。敵はそんな生易しいものではありませんよ…」

「旦那様，今度の相手はさすがに目に叶う女性はいないと思うから期待しないほうがいい…」

エリーもタナトスも神妙な顔つきで言っているが，関係ない。

少なくともタナトス以上の凶暴な女は存在しないだろう。

少々の奇天烈な所は許容してやるぞ。

ラッパが戦場で鳴り響いてくる。

ついに私達の前に降臨してくるのか，美女軍団よ！

野郎共も目を血走らせて凝視しているぞ！

この殺伐とした戦場を美しく彩る麗しき戦乙女達よ！

我等を天上界へと誘い給え！

さあ，戦場に絢爛豪華な花弁を散らしてくれ，天使達よ！

我等を至上の楽園へと導き給え！

神よ！

アリルイヤ！

……。

……。

…。

「ひゃひゃはははあはっ！血の酒を浴びるわよ！新鮮な男の血酒

を飲み干すわよ！」

「獲物だ！死に体だ！いい男共の血風呂に浸りたい！ひひひひひひっ！」

「男共の恐怖に満ちた目玉を収集してあげるわ！きゃはははははははっ！」

「男，殺す，死ね，殺す，死ね，殺す，死ね，殺す，死ね，殺す，死ね…」

……。

……。

…。

確かに見た目は麗しい美女達だ。

……。

野郎共は顎が外れるほど口を開けて固まっていた。

……。

確かアイリは言っていたな。

投薬により人格崩壊していて凶暴性を秘めた極めて危険な強化兵士だと。

さらに並の男性の力を遙かに凌ぐとも。

そして，突然変異体共が霞むほどの戦闘力を秘めていると。

……。

あれは断じて戦乙女でも天使でも無い！

地獄から現世に降臨した恐怖の魔女共だ！

あるいは地獄に行き損ねた女の亡者共だ！

酒池肉林の世界どころではない！

魑魅魍魎の世界が実現してしまうぞ！

「全隊！持ち場に着け！」

私は戦々恐々として隊員共に指示を飛ばす。

冗談ではない！

見た目が綺麗なだけに質が悪すぎる！

ヴァルキリア軍にはまともな女性はいないのか！

タナトスが一番まともに見えてきてしまう！

あんな美女共に囲まってしまえば，手慰みになるどころではない！

ぼろ雑巾のように嬲り殺しにされてしまうぞ！

野郎共もまやかしの幻想を消し去って武器を構えている。

ここは戦場だ。

殺さなければ，こちらが死んでしまう！

美女に手をかけるのは忍びないが，致し方ない！

全力で応戦させてもらうぞ！

ヴァルキリア正規兵よ！

「狩りよ！遊戯よ！男共をどれだけ狩り殺せるか楽しみよ！私の愛の矢で男共の心臓を撃ち抜いてあげるわ！あはははははっ！」

……。

肉の盾共よ，出番だ！

どうか，私を守ってくれ！

余りにも恐すぎるぞ！

第17話：正規兵（後書き）

私生活が忙しくなるので，次回から週に一回更新していくことになります。すいません。主に土曜深夜か日曜に更新していくつもりです。

第１８話：原点復帰

地獄の女亡者共が生者を食い尽くそうと迫ってきている！

「貴方達の綺麗な臓腑をくれない…。私達の飼い猫にご馳走したいのよおおおおおっ！」

「全隊！ありったけの矢や魔法をぶち込め！」

私の指示の下、隊員達は鬼気迫る勢いで魔法や矢を亡者共に放っていく。

これでは女性恐怖症になってしまいそうだな…。

よし、安全な位置で攻撃魔法を連発しまくるぞ！

私は魔力を込めて、両手を掲げる。

頭上には太陽とも言えるほどの巨大な光球が出現してくる。

城一つを呑み込むほどの大きさだ。

「エクスプロージョン！」

地獄に還るがいい！

光球は女亡者共を呑み込み、焼き尽くしていく。

「ぎゃあああああああっ！」

「熱い！熱い！おかあさあああん！」

「ははははっ…あははははははっ…気持ちいい…」

「これで…やっと…楽になれる…ありが…とう…」

……。

……。

…。

何故だ…。

痛くないはずなのに痛い…。

これが戦争というものなのか…。

突然変異体を相手には何も感じなかったというのにな…。

……。

そうか…。

そういえば、前回のヴァルキリアの戦いでは一度も人を殺したことが無かったな…。

最初に殺した相手にしても無我夢中の思いで分からなかったのだ…。

そして、今回は明確な意志を持って人を殺めたのだ…。

……。

考えるな…。

考えてしまえば、墜ちてしまう。

堕ちれば、死ぬことになる。

相手は見ず知らずの者共だ！

躊躇うな！

殺される前に殺せ！

私は何が何でも生き延びるのだ！

もう一度頭上に光球を作り出し、亡者共に向かって投げつけてやる。

「何もかも燃え尽きていくわ！きゃはははは…ぎゃあああああああっ！」

許してくれとは言わん！

地獄で私を存分に恨むがいい！

貴様等の分まで私は生き抜いてやる！

それがせめてもの手向けだ！

私は何度も光球を作り出しては投げつける。

その度に美女共の断末魔の叫びが私の胸に突き刺さってくる。

この戦いが終わったら問答無用で軍を抜けよう。

もはや、ここは私のような元平民その他がいていい場所ではない。

タナトスとは離縁してしまうことになるが致し方ない。

私の心が痛すぎるのだ。

痛い思いは絶対にしたくない。

これこそが私の矜持なのだ。

「隊長！魔法はもう止めてください！味方を巻き込んでしまいます！」

この声はエリー。

「大丈夫か，旦那様…」

この声はタナトス。

二人には私がどのように映っているのだろうか…。

まあいい。

まずはこの地獄の戦場を生き延びることだけを考えよう。

「私は後で行く…」

「分かりました，隊長…」

「分かったぜ，旦那様…」

二人は私にそれ以上言うこと無く地獄の戦場に向かっていく。

情けない姿だと失望したのだろうか。

いや、二人は私を気遣ってくれたのだ…。

エリーは私のことをまだ隊長と呼んでくれている。

タナトスは私のことをまだ旦那様と呼んでくれている。

……。

どうやら私には出来すぎた女だったようだな…。

「みーつーけーたー！」

私は殺気を感じて思わず、頭を下げた。

頭上に斬馬刀が通り過ぎていく。

物凄く危なかったな…。

背後には狂った笑みを浮かべた美女がいたのだ。

少し油断しすぎたのかもしれないな。

まさか背後までとられてしまうとは…。

これがヴァルキリア正規兵の実力なのか…。

「貴方の胃袋を私にちょうだい！ねえお願い！お願いよ！くれよ！渡しやがれ！」

耳を塞ぎたくなるような言葉を言ってくる美女だ。

私の手足が震えている。

恐くて失禁しそうだ。

「胃袋が増えたら沢山食べ物が食べれるわ。凄くすごーく幸せになれるの…。だから、早く渡せよ…。出ないと腹をかっさばくぞ！うひひひひっ…あははははっ！」

くっ！

美女であるはずなのに何ておぞましいのだ…。

今は肉の盾共は全員出払っている。

ここは踏ん張るしかないのか…。

恐くてたまらないぞ！

だが、今は恐怖に震えている時ではない！

怖がっていたら死んでしまう！

恐怖を戦う力に変えていくのだ！

私は生き延びると殺してきた女共に誓ったはずではないか！

私は私のためだけに戦い、そして、生き延びる！

手足の震えよ、止まるがいい！

「さあ，大人しくちょうだい…。くれたら少し可愛がってあげてもいいわよ…。ふふっ…ふはははっ！」

……。

魅力的な提案だが、代金が私の胃袋では割に合わないな…。

「お前の腹を引き裂いて頂いてあげるわ！ひゃはあああああっ！」

狂った美女が斬馬刀を振り上げて凄まじい速度で私に迫ってくる。

生憎私の胃袋を渡すわけにいかないわ！

私は一瞬で美女の間合いを詰めて腹部に拳をめり込ませてやる。

「ぐはぁああっ！」

美女の吐いた胃液と血が私の顔に降り掛かっていく。

貴様の大好きな胃袋を傷つけてしまったな、許せ…。

私は気絶した美女を地面に横たわらせた。

遠距離の魔法攻撃ならまだしも、近距離で直接手に掛けるにはさすがにまだ勇気がいるな。

戦場では女亡者共の嘲笑と悲鳴が耳障りなまでに響いてきている。

エリーとタナトスは無事なのだろうか…。

「見事です。正規兵を物ともしない実力。さすがはタナトス様をうち負かしただけはあります…」

またしても油断していたのか?

どこの場所から声を出している。

いや、気配は何も無いはずの草花から発されている。

私は落ちていた矢を草花に向かって投げつけた。

何も無い場所に向かっていた矢は突如として弾かれる。

「姿を見せろ…」

「まさか，姿まで見破られてしまうとは感服しました…」

何も無い空間から紙が剥がれるようにめくられていく。

めくれた先には漆黒の装束に固めた女性が現れてくる。

「お迎いに参りました、ロスト様。さあ，ヒュプノス殿下がお待ちです」

女性は覆面を被っていた。

「初めから確定事項のように話を進めているな。私が断ることを考えていなかったのか？」

この覆面女は私が来ることを前提に一方的に話を進めている。

「私はただヒュプノス殿下に貴方様をお迎えに行くよう命じられたのみ。貴方様の意志までは考慮していません」

どこまでも感情を伺わせないような無機質な声だ。

だが、先ほど伸した美女と比較すると人格崩壊には至ってはいないようだな。

「返答する前に頼みたいことがある」

どうしても見ておきたいものがあるのだ。

「何でしょうか？」

「その覆面を取って顔を見せてくれないか？」

そうだ。

私はこの無機質な女の顔を拝見したい。

久々に私の食指が疼いているのだ。

「分かりました」

覆面女は覆面を脱ぎ捨てた。

……。

肩までに切り揃えた暗褐色の髪。

摩訶不思議で美しき金目銀目。

雪のように白い肌。

血のように紅い唇。

……。

……。

そういえば、胸も大きい。

……。

完璧だ。

……。

ようやく私は巡り会えたのだ！

ヴァルキリアでタナトスに続く，絶世の美女を！

「ははははははははっ！」

「何がおかしいのですか？」

思わず笑いが込み上げてしまったな。

美女はそんな私を眉一つ動かさず、見据えている。

「済まない、笑ってしまって…。返答に答えようか，答えは否だ！」

誰が魔女の巣窟になぞ行くものか！

それにしても感謝するぞ！

貴様は私に思い出させてくれたのだからな。

そうだ、私は酒池肉林の世界を築き、安全な生活を送ることが夢なのだ。

そして、痛い思いをせずに楽して良い思いをしていくことだ。

そのためにはやはり生き残らないといけない。

この地獄のような戦場から生還して美女を思う存分に抱くのだ。

まともそうな美女に会えたことでそれを思い出したわけだ。

いわゆる原点復帰というものだな。

「では、ヴァルキリアに来るつもりは無い。それが貴方様に意志と言うことで宜しいでしょうか？」

「くどい！同じ事は二度も言わん！」

見ず知らずの他人の生き死にいちいち悩んでいたら命が幾つあっても足らん！

揺るぎない意志を見せろ，ロスト！

ここが正念場なのだ！

「致し方ないですね。ヒュプノス殿下は私にこうも命じしました。死体でも構わないと…」

美女は小太刀を構えてきた。

凍えるような殺気が恐いほど私の体に打ち付けてくるな。

先ほど伸した美女とは比較にならない程の戦闘力があると見た。

……。

やはり恐くてたまらないぞ！

原点復帰したのは良いが、それで人生が終わってしまったら本末転倒だ！

……。

格好付けずに提案を受け入れて、その後で逃亡するという形を取れば良かったかもしれん…。

よし、少し情けない気がするが、提案を受け入れよう。

生き残るためには私の紙屑以下の誇りなぞ糞にも役に立たないからな…。

「やはり…」

「我が名はエル・パラディスム。貴方様の命を頂戴します！」

もはや聞く耳持たないつもりなのか！

本当は私を殺したくてうずうずしていたに違いない！

戦闘狂はタナトスだけで十二分だ！

……。

タナトスに続いて危ない女とまたしても死闘を演じなければならないのか…。

そういえば，初対面の美女とはほとんどが拳で語り合う事ばかりだった気がする…。

たまには平和的に語り合いたいものだ…。

つくづく難儀なものだな…。

第19話：ロット

「御覚悟を！ロスト様！」

冷静そうに見えて実は意外と短気なのかもしれない。

それに無駄にやる気が満々だな。

だが，表情は彫像の如く固まったままだ。

いわゆる鉄面皮というものなのだろう。

あくまで平静を装うつもりなのか…。

こういう表情一つ変えることなく、戦いを挑んでくる相手が一番厄介だ。

この手の相手は冗談を言っても表情一つ変えることなく、受け流してしまうだろう。

挑発しても怒ることなく、氷のような精神で冷徹に任務を遂行してくる輩だ。

……。

ひたすら熱血に戦いを挑んでくる相手の方がまだやりやすい…。

さて、どうしたものか…。

エルが私に向かって突進してくる。

…と思いきや，迂回するようにして、私の背後に回り込もうとしてきた。

後から私を切り裂こうとするつもりか！

だが、好都合だ…。

真正面に敵がいなくなれば、私のやることはただ一つ…。

……。

とりあえず，走り抜いてやるぞ！

つまり！

逃げてやるのだ！

私の背中に風圧が通り過ぎる。

おそらく剣で背中を切り裂こうとしたところ外したようだな…。

「ちょっと逃げる気なの！」

先ほどの無機質な声とは異なり、やたらと直情的な声になってきたな。

裏をかかれたことに腹を立てているのだろう。

だが、私には愉快痛快である。

無機質だったエルの声を直情的な声に変えてやることが出来たからな。

「逃げるな！卑怯者！」

卑怯者？

褒め言葉として受け取っておこうか！

私の優先順位を教えてやる！

一番は自分の命！

二番は自分の欲望！

三番は美女だ！

まあ，二番と三番は似たような物だが，細かいことはどうでもいい！

何よりも死の危機に脱することができたのだ！

早く肉の盾共と合流して私を守って貰わねばな…。

これこそが私の流儀！

これがロストだ！

分かったか！

……。

どうやらいつもの調子を取り戻せたようだ。

あのエルという美女はなかなかの好みだったな…。

だが，残念なことは非常に危ない女だということだ…。

それに背後から襲いかかるような戦い方をしてくる輩は特に危険だ。

おそらく暗殺者なのだろうな。

暗殺者、それは言葉通り暗殺する者。

暗殺する相手は国の要人、すなわち大貴族や王族に当たる者達だ。

暗殺とは防ぐことがかなり困難であるらしい。

どれほど用心しても、ある日、呆気なく殺されてしまうのが落ちだ。

私はまやかしとは言え、ブリュンスタッドの英雄だ。

つまり最重要人物だ。

……。

これは速やかに対策を立てていく必要があるな…。

暗殺者に狙われ続ける生活なんて恐ろしすぎる…。

とりあえず、アイリと合流して後方待機の許可を貰おう。

戦場は最強の力を持っていても臆病な私には荷が重すぎる。

どうせなら除隊させて貰おう。

その際にアイリとの決戦になるが、自由を得るための聖戦と思って挑むしかないな…。

何とも気が重いぞ…。

……。

「逃がしませんよ…」

……。

何ですと！

目の前には撒いたはずのエルがいた…。

馬鹿な！

最強たる私の健脚を追い越して、尚かつ回り込んだというのか？

あり得なさすぎるぞ！

エルの二本指が私の両目に目掛けて伸びてくる！

私は咄嗟に首を捻ってエルの指突を回避した。

……。

危うく失明するところだったではないか！

エルはそんな私の動揺を無視するように回し蹴り、後回し蹴り、短刀の横薙ぎ等の流れるような連撃を繰り出してくる。

連撃の技術，速度はタナトスよりも凌いでいるな…。

つまり，強いという意味だ。

私はつくづくか弱くお淑やかな女性に縁が無いものだな…。

とりあえず，戦闘技術や速度は並では無いようだが，所詮は並以上の程度のこと。

最強たる私の鉄壁の防御には敵わないはずだ。

「面妖な動きをしますね…」

エルは呆れ半分，冷たさ半分という声で私の動きを評価してくる。

大抵の相手はこの蛸の如き回避方法に対して激高するのだがな…。

エルは嫌みなほどに冷静だった…。

……。

ますますやりにくい相手だぞ…。

私は辟易としてエルの連撃を回避し続ける。

突然、エルは私に向かって何かを投げつけてくる。

黒い球体のようなものだが、危ない物であることは確実なはずだ。

だから，いつものように避けたのだが、それが間違えだった。

「くっ！煙幕か！」

黒い球体から煙が吹き出し、周囲が煙幕に包まれていく。

これはまずい！

暗殺者特有のせこい技の一つだ！

私の額から汗が流れてくる。

とりあえず、第六感を総動員させろ！

全身の細胞一つ一つ漏れなく全てを持って感じ取れ！

私の命がかかっているのだ！

こんな陰惨な戦場の中で死んでたまるか！

まずは左だ！

私は体を反らし，左からの攻撃を避ける。

「ちっ！」

どうやら当たりのようだな…。

次は上と左だ！

私は体をくねらせて上と左からの攻撃を避ける。

……。

上と左？

……。

おかしい…。

何か重要な事を見落としているような気がする…。

私は腕を振るって、タナトス風に風圧を出してみた。

この邪魔な煙幕を吹き飛ばしてやらなければ何も始まらない。

「タナトス様並の規格外の力ですね…」

エルが上空から剣を私に向かって斬りつけようとしてくる。

いい加減にうっとおしくなってきたな…。

しかし、直に殺すのは躊躇いがあるし、平和的な解決が出来ないものなのか…。

……。

一つだけあったぞ！

これは私にとって得することでもある！

幾ら強かろうと女であることに変わりは無い！

エル、貴様が恥辱で震える姿を私の眼にとくと焼き付けてやる！

覚悟するがいい！

「凄まじい殺気ですね。どうやら貴方様の本気を拝見できるようです…」

私の本気？

何のことだかさっぱり分からんが、思い知らせてやるぞ！

私は剣を捨て、手刀を構える。

「これで貴様の戦意は削がれるのだ…」

如何にも格好つけるように言ってみせる。

いつ如何なる危機の時も余裕を崩さないように見せるのが、もてる男の秘訣なのだ。

……。

願わくば、儚げで守ってやりたいようなか弱い女性にもてるような男になりたい…。

私に群がってくる女は危険な香りを漂わせている者が多すぎる。

危険な女と末永くお付き合いできるほど私には甲斐性なぞ欠片も無いのだ！

文句あるか！

……。

とりあえず、現実の危機を乗り越えるか…。

エルとやら、私の秘拳を喰らうがいい！

タナトスを辱めた我が一閃を！

私はエルに向かって，手刀を横薙ぎにするように振るってみせる。

刃となった風圧がエルの胸元の服を切り裂いていく。

見えてきたのは輝かんばかりの白く美しい形をした乳房…。

私が求めていた美がまさにここにあった…。

思わず涙が出てしまいそうだった…。

これこそが陰惨な戦場で咲き誇る可憐な華だ！

……。

まさに眼福であったぞ…。

これで私の美しい思い出がまた一つ増えたのだ。

エルは呆然として私の顔を見ていた。

あまりの恥辱に声も出せないようだな…。

さてと，男の証が程良く元気なったことだし、戦場から離脱するとしようか。

エリーもタナトスもこれぐらいに初々しい反応を見せくれれば良いものを…。

「待ってください…」

感情が感じられないエルの声が私の心臓に響く。

……。

やはり，胸を隠すための服を与えたほうがいいかもしれんな…。

私はマントをエルに向かって投げた。

恨まれて後から刺し殺されるのは勘弁だからな…。

エルは私のマントを受け取り、神秘的な金目銀目で見つめてくる。

「なぜ、私を殺さないのですか？貴方様の力を持ってすれば、容易かったはずです。なぜですか？」

……。

どう答えるべきなのだろうか？

「人を直に殺すのが恐いからです」と正直に答えるべきか？

あるいは「無駄な殺生は私の趣味ではない…」と嘘大げさに格好つけて答えるべきか？

……。

後者を答えとするとしよう。

前者は情けない上に「こんな奴に負けたのか！いつか必ず復讐してやる！」と激怒されるのが落ちだ。

後者であれば「器が違う。私如きが勝てないわけだ…」と諦め半分に納得してくれるに違いない。

さらに言えば，私の格好良さが世に広がり，美女が群がってくるかもしれない！

思わず笑いが込み上げてきたぞ！

私には見えた！

酒池肉林の世界で腹上死寸前となっている私の姿を！

エル、貴様には私の夢の踏み台になって貰ってもらうか…。

「無駄な…」

「姉者を殺させるものか！」

突然の殺気を感じ、私は思わずしゃがみ込む。

そして、私の頭上に物々しい風圧が通り過ぎるのを感じた。

いい加減に私が話すのを中断させるのは止めてもらいたい…。

なぜ，格好良い弁舌を述べようとした瞬間にいつも邪魔が入るのか…。

まあいい。

私の邪魔をしてくれた不届きな輩の顔を拝見するとしよう。

……。

肩までに切り揃えた暗褐色の髪。

摩訶不思議で美しき金目銀目。

雪のように白い肌。

血のように紅い唇。

……。

そういえば、胸も大きい。

……。

いや，エルと顔は同じだが，違うな。

エルは右目が金目で左目が銀目だ。

だが，目の前のエルと同じ顔の者は左目が金目で右目が銀目だ。

……。

私はマントをくるんでいるエルを見る。

……。

私に刃を向けたエルと同じ顔の者を見る。

……。

もしかして、双子なのか？

だとしたら，先ほどの戦いで有り得ないと思ったことも納得できる。

最初に逃亡しようとしたときでは，私の健脚を凌ぐ速さで追い越し

て回り込んだのではない。

予め，前に回り込めるように付かず離れずで待機していたわけだ。

それに途中で冷静な声が直情的な声に変わったり，殺気が複数の方向から同時に感じ取ることができたのも全て…。

そう，全てエルとエルと同じ顔の二人が襲撃していたことで成り立っていたわけだ…。

「アビス、下がりなさい。貴女が敵う相手ではないわ」

「しかし、姉者！」

二人は何やら盛り上がっているようだな。

今のうちに逃げるとするか…。

何やら厄介事の臭いが漂っている。

これに関わったら私は不幸になってしまう予感がする。

それぐらいの危険区域に達した臭さだった。

私は喧嘩している二人を置いて、足音を立てずに去ろうとした。

「お待ち下さい！ロスト様！」

エルの感情を帯びた声に私は思わず足を硬直させた。

なぜ，私は足を止めてしまったのだ！

感情を伺わせないエルが感情的に私を呼び止めたことに食指が動かされたというのか！

……。

これが男の悲しい業というものなのだろう…。

……。

ふと思いついた。

これから出てくるであろう暗殺者への対処法を…。

この案はエルが双子だったことで思いついたものだ。

早速、実行するとしよう。

「エル…」

私は自分が思う渋い声で格好つけるように振り向いてみせる。

これは演技力が物を言う作戦だ。

「何でしょうか、ロスト様…」

エルは僅かに怯んだような声を出してくる。

……。

ぐっ！

一瞬どきっとしまったではないか！

だが，あくまで冷静に通すのだ！

私は色よりも命が惜しい！

これからの栄達を見据えて今は我慢するのだ，ロストよ！

私は未来を切り開くための大いなる策を見せてやるぞ！

……。

「私の名はロストの双子の弟、ロットだ…」

……。

「二度と間違えるな…」

……。

……。

……。

……。

……。

…。

「えっ？」

エルは少し間の抜けた声を出してきた。

余りの衝撃の事実に言葉を失ったのだろう…。

これは意趣返しだ。

エルは双子であることを黙って私を翻弄してきたのだ。

ならば、私は双子であると偽り、自分はロストの弟であると騙せばいい。

笑いが込み上がるのを私は必死に我慢する。

目には目を！

歯には歯を！

双子には双子を！

我ながら素晴らしすぎる作戦だ！

「あんた！そんな下手な嘘が通せると思っているの！」

……。

ちっ！

妹の方は姉とは違って口やかましい感じだな…。

だが、騙し通して見せる！

私がいずれ辿り着く輝かしい未来のために！

何よりも命を狙われ続けるというお先真っ暗で絶望的な未来を回避するために！

私はしばらくの間、ロットと名乗り続けるぞ！

第１９話：ロット（後書き）

何とか更新できました。忙しい生活が続いてますが、やはり好きなことは体を壊さない限り苦しくても実行していきたいと思います。しかし，次回も同じように更新できるかは微妙です…。それでも更新できるように頑張りたいです。

第２０話：急展開（前書き）

今回はさらにぐたぐたの話かもしれません。申し訳ないです。まあ，主人公ロストの考えや行く道は常にぐたぐたですからどうか大目に見てください。

第２０話：急展開

幸有る未来のために私は自らを偽っていく。

何とも泥沼に嵌っていく気分だ。

だが、栄光を手に入れるためには敢えて泥沼を泳いで行かねばなるまい。

泥沼を沈むことなく泳ぎ切った者にこそ栄光への道が約束されるのだ。

私は必ず泳ぎ切ってみせるぞ！

「そんな子供のような嘘で騙せると思ってるの？」

ぐっ！

エル妹は痛いことを言ってくる。

私の硝子の心が砕けてしまいそうだ。

だが、子供のような嘘でも嘘と突き通せばいい。

いくら情報が行き渡っても所詮は噂か紙片上でのことに過ぎない。

実物との違いを教えてやろう。

「兄ロストは貴様等の英雄タナトスを死闘の末に捕らえることがで

きた。だが，その戦いで兄は致命傷を負ってしまったのだ…」

私は悲しげにロストの行く末を語り出す。

口やかましい妹は黙って私の話を聞いている。

一方の姉のエルは表情を変えることなく聞いていた。

「兄はタナトスを捕らえた後，力尽きるようにして永遠の眠りについてしまった…」

タナトスには私を殺してしまったという嘘の設定を加えてしまった。

……。

嘘がばれたら間違えなく殺されるだろうな…。

「私は偉大なる英雄である兄の遺志を継いでこの戦場に出た。ただ，それだけの存在だ」

偉大なる兄の遺志を継いで戦う弟ロット。

我ながら格好良い設定だ。

それにしても自分の命を守るために自分が死んだと偽るのは複雑な気分だな。

「あんたも苦労したんだね…」

妹が同情的な視線を私に向けてきている。

しかも涙ぐんでいるぞ！

嘘とは言え、私を心底心配している様子だった…。

……。

私は敵なのだぞ！

そんな目で私を見るな！

私の汚い心が抉れてしまいそうだ！

一方、姉の方は感情の揺らぎを感じさせない表情で私を静かに見ていた。

エルは私を疑っているのかもしれないな…。

単純な妹と違い、姉はどこまでも冷静なようだ。

まだまだ油断はできない。

「帰ってヒュプノスに伝えろ。兄は死すとも魂は潰えることは無いとな…」

ぼろが出ないうちに話を打ち切らないとな。

この双子には私が死んだことを大将に伝える役目になって貰おうか。

そうすれば、もう私の命が狙われる危機は無くなっていくのだ。

後はアイリとの聖戦を挑むのみ。

「残念ながら、出来ません…」

なぬ。

「我等パラディスム家はヴァルキリア帝国に英雄ロストを討ち取るか、生け捕りにするかの命，即ち契約をしています」

そうか、契約はしたが、目的のロストは既に天に召されていましたでは格好が付かないだろうな…。

「それがどうした？」

だが、私には微塵も関わりないことだ。

「子供のお遣いのように目標が既に死んでいましたから得る者がありませんでした済みませんではいかないのです。だから、貴方様には来ていただきます」

何だか雲行きが怪しくなってきたな…。

「私はロストの双子の弟ロットと名乗ったはずだがな…」

白を切る私にエルは意味深な目で私を見てくる。

……。

そんな全てを見透かすような目で私を見るな！

「存じております。ですが、貴方様は私達を打ち負かすほどの武勇があります。故人となられたロスト様の代わりとしては十二分にヒュプノス殿下のお目に叶いましょう」

本当は私がロストであることを見抜いて言ってるのかもしれない。

「私はロストとは姿形が似ても魂までは同じではない。故に断る」

あるいは私をロストの偽物と称してヒュプノスに売り渡す算段だな。

「違います！貴方様をロスト様の偽物に仕立てるつもり毛頭有りません！」

ぬおっ！

冷静なエルが初めて声を荒げた。

何をそんなに怒っているのだ？

「そのようなこと、貴方様にするはずもありません…」

……。

何だ，このいじらしい女性は？

それに熱を帯びた声…。

「貴方様にこのような願いをするのは不義理であると承知で言います。どうか殿下の下に来てください。何の成果も無く、帰還すれば

我が一族は無能者と蔑まされるか皆殺しにされてしまいます。卑怯な物言いですが、どうかお願いします！」

……。

何なのだ、この展開は？

「私からもお願い！どうか私達と一緒に殿下の所に来て！お願い、いえ、お願いします！」

あの勝ち気な妹も縋るような声を出して私の頼み込んでいる…。

……。

私はどうすればいい。

もし、ここで私が断れば、この双子の一族は皆殺しにされるかもしれないという。

しかし、ここで双子の願いを聞き届ければ、あのおぞましい魔女の巣窟へと招待されることになってしまう。

エルと妹のアビスは地面に擦るつけるほどに土下座をしている。

……。

相手は私を殺そうとした者達だぞ！

見ず知らずの者の生き死に悩んでいたら命が幾つ有っても足りないと思ったはずなのに…。

私は途方に暮れて、空を見上げた。

空には花火が上がっていた。

戦場には不釣り合いな綺麗な花火だな。

どこかでお祭りでもしているのだろうか？

私が現実逃避していると土下座していたエルが顔を上げて花火が上がった空を見つめる。

「どうやら、ヴァルキリア帝国はブリュンスタッド王国を降伏させたようですね…」

……。

……。

……。

…。

何ですと？

「あの狼煙はブリュンスタッド王国が降伏したという合図です、ロット様…」

エルは無機質な声で説明してくる。

……。

ブリュンスタッドがヴァルキリアの負けたというのか？

いくらなんでも早すぎるぞ！

アイリ！

私との聖戦を迎える前に負けてしまっては笑い話にもならんぞ！

エリー，タナトスはどうしたのだ？

陛下はどうでもいいが、セシリア様はご無事なのか？

頭痛が起こり、私は頭に手を当てる。

余りにも急な展開で私のなけなしの脳が処理しきれないでいる…。

……。

とりあえずは私がこの双子に構っていた間に戦争が終わってしまったのだな…。

ブリュンスタッドの敗北という形で…。

「悪いことは言いません。どうか、私達と共に来てください、ロット様」

頭を抱えていた私を気遣うように声を掛けてくるエル。

私は思わずエルの胸ぐらを掴んだ。

「これが貴様等の狙いなのか？」

私を勧誘するためだけにこの双子が差し向けられたわけではない。

戦略兵器並の火力を持つ私を引き留めている間に早期決着を促していくのが、真の狙いだったわけか…。

「貴様等が言った一族が皆殺しになるという話も私を引きつけるための偽りだったというのか？」

嘘付いている私が責める筋合いは無いが，それでも私の良心を苛んだことは許し難い行為だ！

「いいえ、私は貴方様には嘘を付きません。お気に召さなければ、どうぞお殴り下さい。私は一切の抵抗もすることなく喜んで貴方様の罰を受け入れましょう…」

エルは胸ぐらを掴まれているにもかかわらず無機質ながらも澄んだ目で私をただ見つめてくる。

くっ！

なぜか怒るに怒れなくなってしまう…。

「まって！姉者を傷つけないで！殴るなら私を…。だから、どうか止めて！お願い…」

アビスが私とエルの間に割って入り、エルを庇うようにして涙ながらに懇願してくる。

……。

これでは私が悪者ではないか！

私はエルの胸ぐらを離し、申し訳程度に胸元を治していく。

ついでにさりげなく胸を触るのも忘れずに…。

……。

真面目な雰囲気は好かんのだ！

それによく考えてみれば、ブリュンスタッドが崩壊したのは私にとって好都合ではないのか？

私はこの戦いが終わったら軍を抜けると決めたはずだ。

ならば、これで後腐れも無く軍を抜けれる。

万々歳ではないか！

……。

だが，余り嬉しくないと思ってしまうのは何故だ？

エリー。

タナトス。

アイリ。

ついでに肉の盾共。

私にとってはただの他人ではない連中。

彼らが果たして無事なのか？

それだけが私の心に重くのし掛かっている…。

「ロット様の部隊は逃げ延びたと聞きます」

エルは私の心情に察して声を掛けてきてくれる。

私はエルを見る。

「部下からの念話で確認しました。ロット様の大切な方々は無事です」

「なぜ，それを私に教える？」

さては、私を懐柔する魂胆なのだな！

だが、等価交換にはまだまだのようだな…。

私は元々ブリュンスタッドを抜けるつもりでいる。

それに仲間が無事であるならば、何の憂いも無く去ることはできる。

エルには感謝するが、対価が私の自由では割に合わない。

故にエルが私に献身的な理由が如何なるものであろうとも私はこう応えるだろう。

それがどうした？

この台詞によって全ての時が止まるだろうな。

エルの固まった顔を思い浮かべてしまい、私は笑いが込み上げてくる。

さてと、どんな理由を応えてくれるだろうか…。

「貴方様が我が主になられる御方だからです…」

……。

……。

…。

幻聴が聞こえてしまったようだ。

どうやら私は相当に追い詰められているらしい。

これが戦争に染まっていく者の定めなのか…。

それにしても私の時が止まってしまうとは…。

エル、かなり出来るな…。

「主！どうか私達と一緒に来てよ！」

……。

これは幻聴で無い！

生の声だ！

しかも話の脈絡が全く掴めん！

いつの間にこの双子共と主従関係が築かれるほど親しくなったのだ？

私にはさっぱり分からんぞ！

第２１話：契約

「いつ、貴様等と私が主従関係となったのだ？」

私は思わず疑問を口にしてしまった。

やばい！

これは突っ込んではいけない話題に違いない。

もし、ここで訳を聞いてしまっては後戻りが出来なくなってしまう恐れがある。

そんな私の苦悩を関係無いかのようにエルの無機質な声が告げていく。

「掟だからです…」

……。

掟？

何のことだ？

「我がパラディスム一族の女は自らを打ち負かした男に対し、絶対的な服従と永遠の忠誠を誓うことが掟なのです…」

……。

絶対的な服従。

永遠の忠誠。

……。

重い…。

途轍もなく重すぎるぞ！

……。

「私には必要が無いものだ」

とっさに切り返した私を褒めてやりたい。

氷のように冷徹な雰囲気を醸し出すエル。

炎のように暑苦しい雰囲気を吹き荒らすアビス。

こんな二人と主従関係を結べば、息苦しい日々を送ることになるに違いない。

それは断じて否だ！

躾や掟なぞ糞喰らえだ！

私はただ欲望のままに生きていきたい！

……。

エルとアビス。

真に美しい双子だ。

こんな形で出会わなければ、迷わず酒池肉林の構成員に迎えていただろう。

惜しいことだ…。

「ロット様、お願いします。どうか私達と契約を…」

エルの縋るような声が私の心臓に響くが耐えるのだ、ロストよ！

「くどい」

私は小事よりも大事を見る遠大な考えを持つ男だ。

双子の美女を従者に出来るのは非常に魅力的だが、酒池肉林という壮大な夢には及ばない。

ここは涙を呑んで堪え忍ぶのだ…。

「私は孤高に生きる者だ…」

言ってやったぞ！

……。

しかし、聞きようによっては凄く痛い言葉だな…。

まあいい。

この双子との縁もここまでとなる。

痛い男だと思われるのも一時的なことだ。

「そうですか…。では、仕方有りません…」

エルが痛々しいほどの悲しい顔して俯いてくる。

……。

ぐっ！

物凄く良心が痛んでしまうぞ…。

だが、情けを見せるな…。

それは破滅への道の招待券だ！

心を鬼にしろ！

私は手段を選ばない非情で冷徹な悪魔なのだ！

「疾く去れ。でないと殺すぞ…」

さらに言ってやった…。

これで縁が切れるだろう。

「では、殺してください…」

……。

……。

…。

エルは今、なんて言った？

「私も殺してよ…」

アビスも同じ事を言っている。

どうしてそうなるのだ？

「打ち負かした相手に拒絶されれば私達はもう死ぬしか無いのです。それが掟だから…」

また掟か…。

だが、私には関係な。

「姉者、私もお供します。私の命は姉者と共にあるのだから…」

……。

「ごめんなさい、アビス。駄目な姉で…」

……。

「駄目なんかじゃない！姉者はいつだって私を…」

……。

美しい姉妹愛だ…。

それに比べて私は何だ？

姉妹の絆を引き裂こうとしている外道なのか？

なぜだ！

命を狙われて、無理矢理主従関係を迫られて…。

どう考えても私が被害者のはずだ！

それなのに第三者視点で見れば、完全に私が加害者に見えてしまうではないか！

エルは私に近づき、小太刀を差し出してくる。

「さあ，これで私の首を斬り飛ばしてください」

……。

凄く重いです…。

いくら夢のためとはいえ無抵抗の女を殺すほど私は冷酷にはなりた

くはないぞ！

「断る」

これ以上重い空気を出すのはやめてくれ！

「ならば、自害します」

エルは差し出していた小太刀で自分の首を裂こうとする。

「っ！」

……。

「ロット様…」

「あんた…」

痛い…。

私はとっさにエルの首を切ろうとした小太刀を鷲づかみにして止めたのだ。

馬鹿な！

私は痛い思いをするのが死ぬほど嫌だったはずだ！

なぜ、こんな愚かな行動に走ってしまったのだ…。

「勝者の断りも無く敗者が勝手に自己完結するな」

……。

どうすればいい？

ここで小太刀を離してしまえば、間違えなくエルは自害してしまうだろう。

それは即ち間接的には私が殺したことになる。

何とも後味の悪い結末を迎えることになってしまう。

……。

まあいい！

その場凌ぎだ！

「貴様の覚悟は分かった。私の従者になれ…」

「ロット様…」

……。

厄介事を背負ってしまった…。

これで美女でなければ、いくらでも切り捨てれていたものを…。

「有り難う、あんた、いや主！私達の主になってくれて…。最初は冷たくて恐い人だと思ったけど、そうでないみたいね」

私のことを激しく誤解したアビスが私の腕に抱きついてきた。

……。

ふむ、心安らかな感触だ…。

アビスの胸が私の腕を呑み込まんとするほど包んでくれている…。

辛いことがあっても生きていれば、いつか良いことがあると誰かが言っていたが本当のようだな…。

「有り難うございます、我が主殿。…主殿！お手を！」

エルは小太刀を握っていた手を引っ張ってくる。

痛い！

アビスの胸の感触に溺れていてすっかり忘れていたぞ！

「申し訳有りません。すぐに消毒を…あむっ…れろぉ」

ぬおっ！

血が滴っている私の手にエルの舌が這っている！

少し疼くがそれ以上に気持ちいいものだ…。

「姉者、ついでに契約を済ませようよ。せっかく血が出てるいるし…」

……。

せっかく血が出ているだと？

「そうね。では、主殿。契約をさせていただきます…」

エルは嘗めるのを止めて私の指を掴んでくる。

私の指は血に汚れていた。

「では、契約を…」

エルは血に塗れた私の指先を自らの唇に押し当てる。

「これで私は貴方様の者…」

……。

私の指を自分の唇に沿わせている…。

エルの唇はたちまち私の血で染まっていく。

これは血の口紅なのか…。

エルは血に塗れた唇を私に向けて笑った。

初めて見るエルの笑顔。

だが、初めての笑顔が見れて感動するよりも恐怖を感じてしまうの

はなぜだ…。

「私も契約をさせてよ」

アビスもまたエルに倣うようにして私の指を自分の唇に沿わしていく。

「これで私達はいつも一緒だね…」

アビスもまた唇を血に染めながらも晴れやかな笑顔を私に向けてくる。

……。

まあいい。

これはその場凌ぎだ。

後は機会を見て、適当に撒けばいいことだ。

「いっとくけど、絶対に逃がさないからね…あむっ！」

私の考えを読んでいるのか、アビスが沿わせていた私の指を甘噛みをしてくる。

だが、もし私が不審なことをすれば指を噛みちぎると言わんばかりに僅かに強く噛んできた。

……。

とんでもない悪霊に取り憑かれた気分だ。

払ってくれる祈祷師がいたら是非紹介して欲しい…。

「主従の契約を結んでくれたことには感謝してもしきれるものではありません。しかし，申し訳有りませんが、ヒュプノス殿下の下には来ていただきます…」

なぬ！

「私の従者になってもヒュプノス殿下との契約は無効にはならないのか？」

それが重要だ！

私の従者になれば、ヴァルキリアとの契約を無効になると考えたからこそ、敢えて主従関係を結んだのだぞ！

「契約が一度でも行われてしまえば、完遂するか、遂行不可能であると判断するまで無効にはなりません…」

「それが私達パラディスム一族の掟だから…」

またしても掟なのか…。

「それに任務を達成させないと一族が皆殺しにされてしまう…」

……。

「その話は本当だったのか？」

エルは疲れたような笑みを私に向けてくる。

「言ったはずです。主殿には嘘を付かないと…」

……。

私は責任が大嫌いだ…。

それで人の生き死にが関わるのなら尚更だ…。

だが、私には選択肢が残されていない。

もうこの双子には深く関わりすぎてしまったからな。

私の心の安寧のためにも、この双子を見捨てるわけにはいかなかった。

まだ私には夢のために身近な人の命を踏み越えていくような覚悟が無かったからだ。

この甘さをいつか修正せなばならないな。

でなければ、命を落としかねん…。

「分かった。私をヴァリキリアに連れて行ってくれ。エル、アビス」

私が平穏の生活を送るのは当分先のようだな。

何とも前途多難な人生だ…。

「有り難う！主！ちゅう！」

アビスは私の頬に唇を強く押しつけてくる。

最初は敵愾心剥き出しだったのに味方となれば天真爛漫で可愛い者ではないか。

「止めなさい、アビス。はしたない」

エルは私からアビスを引き離してくる。

「ああん！姉者も素直になればいいのに…」

「私はロット様の従者。ただそれだけです。さあ、主殿、お拭き下さい。それでは凛々しいお顔が台無しですよ」

エルは布でアビスが口づけた頬を拭ってくる。

……。

何だか口うるさい母に世話を焼かれているような気分だ。

「主殿、ヴァルキリアは男にとっては危険な国です。ですが、ご安心ください。私とアビスが命を賭しても主殿をお守り致します」

「主は私達の命の恩人だから、絶対に守ってみせるから！」

エルとアビスが私の両腕に抱きついてくる。

まさに両手に華だ。

……。

これで行く先がヴァリキリアでなかったら完璧だったのだがな…。

ヴァルキリア。

野郎共にとってはこの世の地獄と唄われている恐怖の国。

この双子共に情けをかけてしまったがために行くことになる魔女の巣窟。

双子共とヒュプノスの契約は私をヒュプノスに突き出す所までのはずだ。

ならば、ヒュプノスとお目通りを叶えた暁には速攻でヴァリキリアから脱国してみせる！

酒池肉林の世界は大歓迎だが、魑魅魍魎の世界は激しくお断りだ！

……。

私を束縛するブリュンスタッドが滅びてしまったのに新たな敵に出くわすかのようだ。

タナトス等が無事だったことが分かったからブリュンスタッドのことで悩むことはもう無い。

後は私がこの逆境から如何に五体満足で生還できるかによる。

まだ私は泥沼を泳いでいる最中だ。

溺れることなく陸と言う名の栄光に必ず辿り着いてみせるぞ！

第２２話：地獄の君主

私は双子に連れられるままヴァルキリアの本陣へと向かう。

「あら、良い男ね…」

「今晩のおかずになるのかしら？」

「今回の獲物は長持ちしそうだな…」

物騒なことを口々に言っている女共がいる…。

私は見せ物ではないのだぞ！

「アビス…」

「分かっているわ、姉者…」

私の両腕に抱きついていた双子は申し合わせたかのように離れ、風を巻き起こして消える。

「があっ！」

「腕が！私の腕が！」

いつの間にか私に下品な言葉を言っていた女共の首から鮮血が吹き、切断された腕を持って泣き叫ぶ様子があった。

「我が愛しい主殿を愚弄するこの口。永遠に塞いでくれましょうか

？」

初めて出会ったときと同様に冷徹な口調で目の前の惨劇に呆然とした女に小太刀を突きつけるエル。

「私の主を馬鹿にするなんて。ここで人生終わらせたいの？」

凄みのある声で組み伏せた女を震え上がらせるアビス。

……。

エルとアビスは単なる優秀な暗殺者ではない…。

飼い主を侮辱する者に対して、容赦無く牙を突き立てる凶暴な番犬だったのだ…。

「主ですって！貴様等パラディスム家が主を持つなんて…ぎぁあああ！」

エルは小太刀を引き、女は血飛沫を上げながら倒れていく。

「ぐえええ！」

アビスは組み伏せた女の首を鈍い音を立てて絞め殺していた。

……。

あれほど冷やかす声が絶えなかった本陣は今や沈黙していた。

「聞き苦しい雑音は消えました。どうかお怒りをお鎮め下さい、主

殿…」

「小五月蠅い雑音が消えたから気分が良くなったでしょう、主？」

……。

なるほど、理解できた…。

私が不機嫌そうな表情をしていたからエルとアビスはその元凶を何の躊躇いもなく殺したのだ…。

全ては主の安寧を考えて…。

……。

これは今後の言動や仕草に気を付けねば…。

それとエルとアビスに有る程度の教育を施さねば要らぬ恨みを買うことになってしまう…。

「エル、アビス、貴様等の好意は嬉しい。だが、次からは私の指示以外で無闇に殺すな。無用な争うを巻き起こすことになる」

とりあえず私は注意する。

私が不機嫌になる度に血の海を作られてはたまらないからな…。

「その心配には及びません。このヴァルキリアでは力有る者こそが正義なのです。故に弱き者は何されても文句は言えないのです。あちらをご覧下さい…」

私はエルに指を指した方向を見る。

……。

美女が首輪に繋がされて四つんばいに歩かされている。

「ふん！弱い女の癖に舐めた口を聞いてくれて…。ほら、お前には犬の餌がお似合いでしょう。さあ、食べな！ご主人様からの餌なのよ！」

鎖を持った女性は首輪に繋がれた女の髪を掴み、残飯が置かれた皿に向かって顔を無理矢理押しつけさせていた。

……。

「ひぃぃぃ！助けてくれ！」

「卑しき男の分際で私に汚らしい視線を向けてくるとはな…。だが，後悔はしていないだろう。最後に焼き付けた光景が私の美しい姿だったのだからな…」

「お、お許し…ぎゃあああああああああっ！目が！目がぁあああああ！」

美女はナイフを一閃し、男は血の涙を流していた。

……。

私は…。

私は…。

とんでもない世界に迷い込んでしまった…。

魔女の巣窟なんて生易しいものではない…。

悪鬼羅刹が蔓延っている現世にある地獄だ…。

私はこれからその地獄を支配する王に逢わねばならないのか…。

やばい！

足が震えてしまっている！

これでは格好悪いではないか！

「主殿…」

「主…」

無様に震えてしまっている私に声を掛けてくれる双子がいる。

震えている私を見て失望したのだろうか…。

……。

ならば、もう未練は無い。

今すぐ、この人外の世界から逃げるまでだ。

そんな後ろ向きな考えている私の体に柔らかい物が挟み込んでいく感触がした。

「主殿には私達が付いています。どうかご安心を…」

「主には指一本触れさせないわ。だから安心して…」

エルとアビスは私を失望する所か、身を案じてくれていた…。

……。

なぜだ…。

体が熱くなってきている。

この熱さは女性と交わっても尚も味わえないほどに心地良い熱さ…。

「さあ、行きましょう。我が主殿」

「さっさと行くわよ。主」

この熱さの正体は分からない。

だが、知ってしまったら終わりかもしれない。

何故か漠然と私はそう思ってしまったのだ…。

私はエルとアビスの豊満な胸に挟まれるかのように連れられていった。

「よく来たな、ロスト殿」

本営に辿り付き、最初に言葉を発したのが、上座にいた女性だった。

タナトスと同様に燃えるような紅い髪。

野性的な色黒の肌。

そして，青色の妖艶な口紅。

体格ではタナトスよりも低いが、それでも私よりも高い身長を誇っていた。

彼女こそがヴァルキリア軍最高司令官にして、悪鬼羅刹が蔓延る地獄の君主。

そして、タナトスの実の姉であるヴァルキリアの恐怖の象徴。

ヒュプノス・ヴァルキリア。

……。

ヴァルキリアの支配者と名乗るだけあって凄まじい威圧感を放っていた…。

これがあのタナトスが震えるほどに恐れられている恐女なのか…。

「恐れながらこの方はロスト様ではありません…」

エルが一歩前に出て、ヒュプノスに報告していく。

ヒュプノスは無言でエルの前に立ってくる。

「もう一度言ってみろ…」

「この方はロスト様では…っ！」

……。

「ほう、さすがはパラディスム家の中でもやり手を言われるだけはあるな…」

ヒュプノスは抜刀し、エルを斬りつけようとしたところ間一髪でエルは小太刀を抜いて凌いでいた。

それにしてもいきなり斬りつけるとは、エルで無かったら一瞬で死者の国へと直行だった…。

どうやら気性の激しさではタナトスと同等かそれ以上のようだな…。

「私は言ったはずだ。ロスト殿を連れてくるようにとな。これはパラディスムに依頼し、正式に契約したことだったはず。申し開きが

あるのならば聞こうか、エル」

ヒュプノスが剣を払い、エルは距離を取って頭を垂れた。

「では、申し上げます。ブリュンスタッドが誇る英雄ロストはタナトス様のとの一騎打ちにより致命傷を負われ、タナトス様を捕縛してしばらく他界されたとお聞きしました」

「その話の信憑性は如何に？」

「この御方こそがロスト様の双子の弟ロット様で御座います。兄君の遺志をお継ぎになり、戦場ではヴァルキリア正規兵を物ともしないほどの武勇の持ち主。我等二人もロット様の武勇に屈し、永遠の忠誠を誓わせて頂きました…」

エルの弁解が終わると周囲が急に騒がしくなり始めた。

「なんと！あの暗殺者の総本山と呼ばれたパラディスム家の刺客を打ち負かしたというのか？」

「あの冥王の御使いと唄われたパラディスム一族を…」

「そんな化け物を打ち負かして従者にするなんて信じられないわ…」

……。

エルとアビスはそこまで凄い暗殺者だったのか…。

これはたまにご機嫌取りをしなければな…。

何とも物騒な双子を従者にしたものだ…。

「その言葉に偽りは無いだろうな、エル・パラディスム」

ヒュプノスが再び剣先をエルに向けてくるが、エルは至って平然としている。

「パラディスムの名誉に誓って」

ヒュプノスは剣を収めて、今度は私の顔を見てくる。

美女に見つめられるのは悪くはないが、子供が新しい玩具を見つけたかのような目で見つめられても嬉しくはないぞ…。

「ロットと言ったな。愚妹のお陰で偉大なる兄を失ったこと、お悔やみ申し上げる。パラディスムを疑っているわけでは無いのだがな。それでも貴様の実力をこの目で見たいのだ。ニーメよ」

「はっ！ここに…」

ヒュプノスの隣に大柄な女が現れる。

体格はタナトスよりもさらに大きい。

額や頬、至る所に無数の古傷が刻まれた逞しい体。

野獣のように歯を剥き出しにして荒い息を吐いている。

血走った目は常に獲物に飢えている狩人の目つきだ。

……。

傷だらけの顔でも一応美女の範疇には入る、ようで入らない…。

タナトスやエルのように私の食指が疼くことは微塵も無かった…。

……。

私の許容できる女の領域を僅かだが越えているようだ…。

「このニーメはタナトスの後釜と言われた屈強なる戦士。さあ、ロットよ。貴様の実力が本物と言うならば、見事打ち勝って見せよ！」

ニーメと呼ばれた女は私の向かってくる。

手には穂先が錆びた槍を持っている。

「いひひひ、殿下、このような美しい獲物を与えていただき感謝します。もし、私が勝てば、この獲物を好きにして宜しいでしょうか？」

「好きにしろ。慰み者でも玩具でも貴様の思うがままだ。私は弱い者には興味が無いからな…」

ニーメはヒュプノスの言葉を聞き、醜悪な笑みを私に向けてくる。

……。

駄目だ！

あの女は生理的に私には受け付けない！

こうなったら従者の出番だ！

「主殿！」

「主！」

頼りになる双子が私に駆けつけてくる。

後は任せたぞ！

「女に庇って貰うつもりなのかえ？どうやら貴様はとんだ臆病者らしいね…。ひひひひひっ…」

ニーメが憎たらしい笑いを私に向けている。

挑発のつもりだろうが、そうはいかないぞ。

本当のことを言われても私には痛くも痒くもない。

貴様と戦っても何も得るものがなさそうだからな…。

「パラディスムも落ちたものだね。こんな臆病者に負けたとなってはパラディスムの先も見えているわね…」

……。

「何だと貴様！」

「挑発に乗らないで！アビス！」

「今度から冥王の御使いでは無く、臆病者の御使いと呼んでやるさ。相応しい呼び名だろ。ひゃはははは！」

「くっ！」

「畜生！」

エルとアビスは屈辱に身を震わせていた。

「臆病者に腰を振るう情けないパラディスムには私が直々に修正してやろうかねえ。それでもって私の奴隷に仕立ててやるさ。感謝するがいい、ひひひひひっ…」

……。

不意に私の足が動いていた。

私は庇ってくれているエルとアビスを押しのけてニーメと対峙する。

「下がってろ、エル、アビス…」

「主殿？」

「主？」

エルとアビスは心配げに私を見つめてくる。

「心配するな…」

私は安心させるためにエルとアビスの頭を撫でる。

「ほう、やる気になったというのかい？」

ニーメは舌なめずりして槍を構えてくる。

……。

私は拳を構える。

なぜだろうか？

恐い敵のはずなのに自然と前に立つことが出来た。

それに体が熱かった。

ある感情が私の体を奮い起こしているのだ。

この感情が何であるのかは分からない。

感情に身を任せるのは愚か者がすることだ。

冷静になれ！

これは義憤に駆られたから行う戦いではない！

ヒュプノスに失望されて殺されることが恐いから仕方なく戦うのだ！

決してエルとアビスが馬鹿にされて怒りを覚えたなどでは無い！

そうだ！

そうに決まっている！

これは私の夢を実現させるための戦いだ！

ならば震えている暇なぞ無い！

我が野望のために戦うのだ、ロストよ！

「やっとやる気になったようだな。私を魅せてくれよ、ロット…」

やる気になった私に妖艶な笑みを投げかけてくるヒュプノス。

……。

ヒュプノス、今は貴様の言いなりになってやる。

だが、その余裕の笑みをいつか絶望の空笑いに変えてやる！

そして、酒池肉林の世界が実現したときには底辺の構成員として扱ってやるぞ！

「さて、可愛がってやるよ…」

ニーメは槍を振り回し、徐々に間合いを詰めてくる。

……。

やはり恐い…。

格好付けなければ良かったな…。

だが、もう腹をくくるしかない！

とりあえずはこの黄金の拳で目の前の敵を伸してみせる！

輝かしい未来を歩むためにも私は戦い続けるしかないのだ！

「もし、私が勝ったらお前は飽きるほどに可愛がってやるよ。丁度玩具が壊れてしまって退屈していたところだったからねえ、ひひひひひっ…」

……。

私は分布相応の望みを持つべきでは無かったのかもしれない…。

「さあ、血の宴を始めるがいい！」

地獄の君主のかけ声と共にニーメの槍が私に差し迫ってくる！

絶世の美女とならともかく、それ以外の敵と命がけの戦いなんて冗談では無い！

意地でも死んでたまるか！

第２３話：悪魔の祝福（前書き）

いつもぐたぐたの文章ですが、宜しくお願いします…。

第２３話：悪魔の祝福

……。

私もとうとう不毛な戦いに身を投じることになってしまったのか…。

最強の力を持つ前の平穏な日々がふと懐かしく感じた…。

こうなってしまえば、酒池肉林の世界を実現させねば、平穏な日々を失ってまで手に入れてしまった最強の力に何の意味があるというのだ。

だから、私はここで死ぬわけにはいかない。

「お前の四肢を切断してから弄んでやるよ！」

ニーメの剛槍が私の肩を叩き斬ろうと迫ってくる。

力はありそうだが、タナトスよりも単調な攻撃だな…。

それで私を捉えようなどとは片腹痛いわ！

私は体をくねらせて容易にニーメの槍を回避する。

「出ましたね、主殿の十八番が…」

「あの動きで攻撃が避けられると腹が立つのよね…」

双子はしみじみと私の動きを解説している。

何だか私の方が腹が立ってきたぞ…。

「くっ！ふざけた動きをする奴だねえ！」

私以上に腹を立てて、ニーメは槍を振り回してきている。

……。

慣れとは恐いものだ…。

あれほど殺し合いを怖がっていたはずなのに私は冷静にニーメの斬撃を回避している。

今もこのように悠長に思考する余裕すらもあった。

相手はタナトスの後釜と言われているが，明らかに格下の相手だ。

私は戦いを観戦しているヒュプノスを見る。

彼女の狙いは至極単純。

私の力を見極めようとする魂胆だな！

ならば，貴様の思惑と逆のことをすればいい。

即ちわざと負ければいいのだ。

しかも限りなく善戦しての敗北として。

敗北はしたものの捨てるには惜しい逸材だ、と思わせていく手筈だ。

さらには私が敗北することで私に対するヒュプノスの評価が英雄から一兵卒に格下げされること間違いないだろう。

私はその他大勢の個性無き雑兵として、埋没していき、平和な日常を謳歌していくのだ。

「主殿、わざと負けようとは考えないことです…」

私の考えを読んでいるのか、エルが忠告してくる。

……。

なぜ、私の考えが分かったのだ？

「なぜ分かったのだ、という顔をしているよ。主」

エルはともかくアビスまで私の考えが読めるというのか！

何だか屈辱の極みだな…。

「考え事をしている余裕があるのか！貴様！」

私が全く相手にしていないことでニーメが怒り狂って剣を振り回していく。

だが、ニーメには悪いが、考え事をしている余裕があったのだ。

まずいな。

命がけの戦いに慣れてしまえば，命の危機に鈍感になってしまいかねない。

だが，それでも尚余裕が出てしまうほどに敵が弱いのだ…。

……。

いや、敵が弱いのではなく私が強くなっているのか？

今までがタナトスやエリー、エルとアビスの双子という規格外の存在と命のやり取りをしてきたからだろう。

だから、水準以下の敵と戦えば、考え事をするほどの余裕のある戦いが出来てしまう。

……。

まあいい。

実力差があれば、それだけ上手く立ち回りやすいはずだ。

口うるさい双子が何を言おうと私はわざと負けて、目立たなくするぞ！

「ニーメ、負けたらどうなるか分かっているのだろうな？ケールが空腹で食事を待っているぞ…」

いつまでも戦いに進展が無いのに苛ついたのかヒュプノスがニーメに何かを言っていたのを聞こえた。

ケールが空腹で食事を待っている？

話の脈絡が掴めんぞ。

「ケールの食事…。嫌だ！彼奴の餌なんて死んでも御免だ！うあああああああっ！」

ニーメが突如、半狂乱となって叫び、危機迫る勢いで槍を振るってきたぞ！

よほど恐いにか、攻撃に気合いが込められていて私の余裕の思いが消されていく！

どうやら、よほどケールが恐いらしい。

おそらくケールとはヒュプノスが飼っている猛獣の名前なのだろう。

負けたら猛獣の餌にするとは噂通りヒュプノスは残酷な奴だ。

……。

負けたら猛獣の餌？

それは私も含めているのだろうか？

「言っておくが、私は弱者は死ぬほど嫌いだ。嫌いな奴はケールの食事になってもらうぞ…」

ヒュプノスは私が考えていた疑問に答えるように笑みを浮かべて応

えた。

……。

負ければ、猛獣の胃袋にようこそ…。

……。

私は犬の餌ではないぞ！

家畜の排泄物に生まれ変わるなんて死んでも御免被る！

「どうやら、主殿に気合いが漲り始めましたね…」

「やっぱり命がかかれば嫌が尚も気合いが入るんじゃない？」

双子め、冷静に解説をしおってからに…。

「私の槍に貫かれろぉおおおおっ！」

ニーメの激しい槍の嵐を私は危機迫る勢いで避け続ける。

生憎、私も猛獣の餌になんかなりたくない…。

それに貴様は私との接点も無い赤の他人だ…。

さらに言えば、美人の範疇にも入らない！

故に…。

遠慮無く犠牲になってもらうぞ！

「いい加減に斬り刻まれろぉおおおっ！」

ニーメは槍を回転させ業風を生み出す。

発生した竜巻が私を包み込もうと迫ってきている。

……。

腐ってもタナトスの後釜か！

だが，貴様程度の出来る手品を私が出来ないはずがない！

なぜならば、私は最強なのだからな！

私は剣を振るいニーメと同様の竜巻を巻き起こす。

「馬鹿な！お前如きがそんな力を…」

ニーメが私の力に驚愕しているぞ…。

思い知ったか！

私は他人の技を真似るのが得意なのだ！

私が生み出した竜巻はニーメの竜巻をかき消し、ニーメをも呑み込む。

「ぎゃあああああああっ！」

ニーメの金切り声の悲鳴に誰しもが声を失っている…。

あの不敵な笑みを浮かべていたヒュプノスすらも言葉を失っていた。

皆、私の偉大さを認識しているみたいだな…。

……。

……。

…。

我ながら何たる馬鹿なことをしてしまったのだ！

ヴァルキリアに私の偉大さを認識させてどうする！

余計に目立ってしまうではないか！

「ふはははっ、エル！貴様の見立ては間違えなかったようだな！素晴らしい力だ！」

ヒュプノスが私をすっかり注目していた…。

「ぐっ！殿下…」

竜巻に巻き込まれてずたぼろになったニーメがヒュプノスの足下に這いずっていた。

「殿下！今一度機会を！私に名誉を…むぐっ！」

ヒュプノスは足下で懇願しているニーメの顔を踏みつけていた。

「ニーメ、私は弱い奴は嫌いと言ったはずだ。故に貴様と同じ空気を吸うことすらも不快を覚える…」

ヒュプノスは踏みつけたニーメの顔に唾を吐き付ける。

「どうか！どうか御慈悲を！殿下！」

「ケールがお腹を空かせている。早くこの食事を連れて行け…」

正規兵等が喚くニーメを引きずっていく。

「嫌だ！死にたくないよ！助けて！助けてぇえええええっ！」

……。

「さて、見苦しい物を見せてしまったな。偉大なる英雄の弟ロット殿。ヴァルキリアは貴方を歓迎しよう」

ヒュプノスはニーメに向けていた冷徹な表情を一変させ、見る者を虜にするような笑顔を私に向けてきた。

……。

とんでもない者に目を付けられてしまったようだ…。

それにしても哀れなのはニーメだ。

彼女は彼女なりにヒュプノスに尽くしていたのだろう。

だが，そんな彼女が最後に向けられたのは塵でも見るかのような目。

哀れだと思うが、後悔はしていない。

私も同じ結末を迎えてしまったのかもしれないのだからな…。

むしろ哀れむよりも感謝すべきだろう。

彼女は私の代わりに猛獣の胃袋の住民になってくれるのだから…。

ニーメ、貴様は美人では無かったが、私は決して忘れはしない…。

私は貴様の分まで立派に生き抜いてみせる…。

悲鳴を上がて引きずられていくニーメに私は黙祷を捧げるのだった。

「ロット殿…」

目を開けた先にヒュプノスがいつの間にかいた。

「私からのささやかな祝福だ。受け取ってくれ…んっ」

「むぐっ！」

「主殿！」

「主！」

……。

なんとヒュプノスは公衆の面前でいきなり私を抱き寄せ口づけをかましてきた！

エルとアビスの驚く声が私の耳に響いてくる。

「ちゅぱっ…んっ…ちゅる」

ぐおっ！

しかもかなり深く生々しい接吻だ！

……。

タナトスと似た攻撃的で甘美な口づけ…。

そして，息苦しくて頭が朦朧としそうな所も似ている…。

……。

酸素不足で本気で頭が朦朧としてくるぞ！

意識を失う寸前にようやっとヒュプノスは唇を解放してくれた。

情けないことに私は体の力が抜け、ヒュプノスに身を預けたままだった。

「私の祝福にその身を酔わせたのか？可愛い奴だ…」

ヒュプノスは私を抱き締めながら耳元で囁いてきた。

断じて違うぞ！

ただ酸欠になって体に力が入らないだけだ！

……。

大いに訂正してやりたいところだが、声が出なかった…。

「貴様には期待しているぞ、あむぅ」

ぬおっ！

ヒュプノスは私の耳を舐めしゃぶってくる。

ますます体の力が抜けてしまう…。

「ちゅぱっ…貴様は私の実験体だ…」

……。

「ロスト」

「…っ！」

力が抜けている体が瞬時に硬直していく…。

「主殿！」

うなだれている私をエルが介抱してくれるが、そんなことよりも！

「ふっふっふっ…」

介抱されている私を楽しげに見てくるヒュプノス。

彼女は最初から私がロストであることを見抜いていたのだ！

「それではまた後ほどに、ロット殿…」

それにも関わらず、敢えて私の猿芝居に乗って見せているわけか…。

どうやら私はヒュプノスの前ではとんだ道化師に見えていたようだな…。

だが、道化師で結構だ！

道化師だろうが、英雄であろうが、私が私であることに変わりはしない！

貴様には絶対に屈したりはしないぞ！

……。

だが、気持ちいい接吻だった…。

お陰で男の証が元気になってしまったぞ…。

体は悲しいほどに正直なものだな…。

「主殿、これを…」

そんな複雑な思いに駆られている私にエルは布巾を渡してくる。

「何だ?」

その布巾でどうしろというのだ?

「失礼ながらいつまでもそのような汚れた顔を公衆に晒すのは恥ずかしいと存じますれば…」

エルは若干棘があるかのような冷静な声で応えてくる。

汚れた顔だと?

……。

まさかっ!

私は自前の手鏡を取り出して自分の顔を見た!

ぬおおおおおおっ!

私の口元は青色の口紅が塗りたくられていた!

「早く拭った方がいいわよ」

驚愕している私にアビスはしれっと言ってくる。

「なぜ、早く言わなかった?」

「主殿が嬉しそうな表情をしていたもので言いそびれました…」

エルが如何にも申し訳なさそうに弁解している。

だが、私に分かる。

間違えなくわざと黙っていたに決まっている。

私は渡されて布巾で口を拭いながらも立ち去っていくヒュプノスを見る。

これは貴様の宣戦布告と受け取っておこうか…。

ここまで私を辱めたのだからな…。

必ず借りを返してやるぞ！

「主殿…」

「何だ？」

人が折角新たなる敵に対して打倒を決意していたというのに…。

「耳も拭かれたほうが宜しいかと…」

エルは新しい布巾を私に渡してくる。

私は手鏡で自分の耳を確認する。

唇と同様に青く染まってた耳を見て愕然とする。

おのれ…、又しても私に恥をかかせるつもりか、ヒュプノス！

……。

だが、気持ちよかったから勘弁してやるぞ！

「主殿、嬉しいのは分かりますが、気を付けた方が宜しいかと…。主殿は殿下の祝福を受けてしまわれたのですから…」

「そうよ。あの殿下から祝福を受けたのだから、きっとただでは済まないはずよ…」

エルとアビスは神妙そうに言ってくる。

ヒュプノスの接吻を受けてしまったのがそんなにまずかったのか？

ヒュプノスの熱烈な信者に暗殺でもされるというのか！

それは確かに恐ろしいぞ！

「殿下から祝福を受けたのはタナトス様，私と姉者。そして、ケール…」

……。

少し待って欲しい…。

今とんでもなく聞き捨てのならないことをさらっと言っていたよう

な気がしたが…。

……。

ヒュプノスは実の妹にも接吻していたというのか！

「お前達もヒュプノスと口づけを受けていたのか？」

さらにこの双子共もあの窒息しそうなほどの接吻を受けていたことになる。

衝撃的な新事実だ。

まさかヒュプノスが両刀使いだったとはな…。

さすがはタナトスの姉というだけはある…。

「不本意ながらも…確かに私達は殿下から…その…接吻を頂いています…」

「けど、主のようにあそこまで生々しくは無かったわよ」

エルとアビスは余り良い思い出では無かったのか苦々しい口調になってきていた。

「主殿、万一の時は私が命をかけてもお守りします…」

「いずれ、あの狂犬ケールと鉢合わせになってしまうことだしね…」

そのケールというものも凶暴な猛獣ではなく、人間の女であるらし

い。

さらにタナトスや双子と同じように祝福を受けているならば、かなりの実力者と伺わせるな…。

「タナトス様がヴァルキリアの表舞台の英雄であるのに対して、ケールは…」

「ヴァルキリアの裏を暗躍する恐怖の執行者よ…」

恐怖の執行者…。

英雄よりもよほど恐い存在だな…。

ともあれ、今まで以上の波瀾万丈な生活が待ち受けているのは確かだ…。

その過酷な生活に耐えるためにも胃薬を調達しなければならないな…。

これから先、私はいったいどうなっていくのやらか…。

第２４話：新しい生活

目の前にブリュンスタッド城とは比較にならないほどの居城がそびえ立っている。

私と双子は今、ヴァルキリアの首都ジークリンネにいた。

質素だが気品溢れる家々。

侵略されたときに万全の対応できるように施された城下町。

何もかもがブリュンスタッドが発展途上だと思わせてしまうほどの発達した文明がそこにあった。

「見るがいい。ここが私が造り上げた国の有りようだ」

隣で自慢げに言い放つヒュプノス。

下々の者に任せれば良いものを私の案内役に自らがかって出てきたのだ。

「だが、これは実験体によりよい実験を施せるための慰安所でしかない」

……。

これほどの平和な町も全ては実験のためだというのか…。

「ん？気に入らないのか？私はただやりたいようにするだけだ」

ヒュプノスはそう言って私の腕に絡んでくる。

「離せ…」

どうせ私も体の良い実験体と思っているはずだ。

籠絡しようとしてもそうはいかないぞ。

だが、腕に伝わる胸の感触がたまらんな…。

「一国の主が下手に出ているにもかかわらず良い度胸だな。なるほど、タナトスが執着するわけだな…」

ヒュプノスは呆気なく私の腕を解放する。

胸の感触は惜しかったが、それ以上に命が惜しい。

この女に付き合っていては命が幾つ有っても足りん。

「まあいいさ。次に貴方の住処に案内しよう。付いて来たまえ…」

私はヒュプノスに腕を引かれるままに付いていった。

「ここが貴方の住む家だ」

……。

これは住む家という代物ではないぞ！

まるで砦ではないか！

私にこの国の防衛戦でも任せるとでもいうのか！

「驚いて声が出ないようだな。貴方はここでゆくゆくはヴァルキリアの盾となって馬車馬の如く働いて貰うつもりだ…」

……。

私は無言でヒュプノスを睨み付けた。

私とヒュプノスは砦の中に足を運んでいく。

城の中は敵が攻めてきたことを想定したのか無骨な作りになっていた。

だが、私室は王侯貴族並の絢爛豪華な装飾に彩られている。

「後で侍女を沢山使わしてやろう。この城の主は貴方なのだからな…」

……。

おかしい。

いくらなんでも待遇が破格すぎる。

私は仮にも敵国の将だったはず。

「なぜ、そこまでしてくれる？私はお前の妹を傷物にし、正規兵を殺してきたはず…」

ヒュプノスは戸惑う私に微笑み、胸ぐらを掴んで引き寄せてくる。

「これは投資だよ。そう遠くない未来で私に栄光をもたらしくれる実験体へのね…」

面と向かって私に実験体と言うとはこの女も良い度胸をしているな…。

私もまたヒュプノスの胸ぐらを掴み返す。

「私は貴様の実験体には決してならないぞ…」

私の体は私だけのものだ！

私が体を明け渡すとしたら、床の上で愛する女を抱き締めるときのみ！

例え、ヴァルキリアの恐怖と呼ばれている女傑であろうとも御免被る！

「いいや、貴様は私が求めていた至上の実験体だ、ロストよ…ちゅ」

「むぐっ！」

ヒュプノスは胸ぐらを引き寄せて貪るように口づけてくる！

私を貶めようとしてくる女だが、唇は驚くほどに柔らかくて気持ちいい…。

それが無性に悔しくてたまらないぞ！

「ちゅぱっ…貴様はもう私からは逃れることはできぬ。そういえば、貴様の部隊は無事に逃げ延びたようだな。おめでとう…」

「なぜ、知っている？」

なぜ私の部隊が逃げ延びたことを知っているのだ？

「欲しい物を手に入れるために入念な情報を仕入れることは当たり前だ。私は昔からタナトスが気に入った物を横取りをしていたからな、くっくっくっ…」

ヒュプノスは不気味に笑っていた。

改めて私はアイリがなぜこれほどまでにこの女を恐れているのかが分かった気がした。

「貴様は私に身も心も屈してしまうのだ。そして、私無しではいられない体にしてやろう…」

私は薬漬けになってしまったヴァルキリアの正規兵のことを思い出す。

この女に屈してしまえば、私もあの狂人共の仲間入りになってしまうかもしれないのか…。

「私の機嫌を損なわせたら、貴様の大切な者が肉片となって再会を果たすかもしれないな…」

私に取引を持ちかけるつもりか！

だが、すでに縁切れた者を人質に取ろうとも関係無いことだ！

「私にはもう関わりない者達だ。故にどうなろうとも知ったことではない…」

そうだ、関係無いに決まっている！

タナトスもエリーもアイリも今頃は新しい野郎共を見つけて人生を謳歌しているに違いない！

……。

だから、関係ないはずだ…。

「そうか。ならば、貴様を慕っているあの双子の従者達はどうなのかな？」

「…っ！」

エルとアビスのことか！

「ふふっ、聞いてるぞ。あの冷徹だった双子の暗殺者が貴様に熱を

上げていることをな…。さて、彼女達も貴様には関わりない者なのだろうかね？」

ぐっ！

ヒュプノスが嬲るような目で私を見つめてくる！

「彼女達は私には関わりの…」

エルとアビスは確かに私の従者だ…。

恐怖に震えている私を甲斐甲斐しく心配をしてきてくれた…。

さらに私を命をかけて守ってくれるも言ってくれた…。

……。

私は安全が保証された生活が欲しいのだ！

その代わりに私を心底慕ってくれる女の安全が損なわれてしまう…。

私を純粋に慕ってくれる女を見捨ててまで安全な生活を手に入れたいのか！

それでも私は自分の命が惜しい！

だが、エルとアビスを見捨ててしまえば、安全な生活が手に入れても心安らぐことは永遠にないだろう…。

……。

初心に戻れ！

私の流儀を思い出せ！

そうだ！

こういうときは…。

……。

……。

…。

「彼女達は関わり有る者だ…」

安全な生活とエルとアビスの安全。

両方を手に入れればいいのだ！

二兎を追う者全てを得る。

それが私の流儀だったはずだ！

「認めたようだな。ならば、彼女達のためにも私に誠心誠意尽くすがいい…」

ヒュプノスは勝ち誇ったかのように笑ってくる。

「覚えとくといい。屈服させるには相手の最も大切なものをつつけば良いということをな。ははははははっ！」

せいぜい馬鹿笑いをしているがいい！

いずれ貴様が私に屈服させてやるぞ！

そのためにはこのヴァルキリアで自分の地位を確立させなければならない。

そして、多くの手駒を手に入れて後にこの物騒な国とおさらばするのだ。

「明日は貴様のために素晴らしい催し物をする予定だ。楽しみにしとくがいい。侍女達ももうすぐ到着する頃だろう。せいぜい鋭気を養っておくことだ。では、さらばだ…」

ヒュプノスはそう言って砦を後にした。

……。

かなり神経を使ったぞ…。

剣を交わす以外でこれほどまでに気をすり減らしたのは初めてだ…。

私は私室にあるソファーに腰を下ろして伸びる。

とりあえずは乗り切ったと言うべきなのか…。

ヒュプノスは私のために楽しい催し物をしてくれると言っていたが、

どうせ禄でもないことだろう。

それにしても…。

……。

私は部屋を見渡した。

これが私の住処となるのか…。

元平民その他であった私には広すぎる部屋だ…。

古くさかった木々で出来た山小屋が懐かしい…。

最強の力を手に入れてから美女と遭遇する確立が高まっているが、失ったものが確かにあったのだ…。

……。

どうやら、私は感傷にふけているようだな…。

今まで戦場にいたためか、じっくりと考える暇が無かったからな…。

そう言えば、一人になるのは久しぶりだ…。

今まではいつもタナトスやエリーが側にいてくれたからな…。

タナトスは私の妻でエリーは私の副官。

そして、二人が喧嘩しているのを私の上官であるアイリがいつも仲

裁していた…。

騒がしくて命がけだったが、そんな日々を私は嫌いではなかった…。

……。

失って初めて価値あることだと気づくことがある…。

思えば、あれが私の求めていた酒池肉林の世界だったのかもしれないな…。

絶世の美女と面白可笑しく過ごしていく日々…。

幸せだと気づかず分布相応な夢を追いかけていく愚かな私…。

幸せなことを幸せだと気づかない限り、いくら夢を追いかけても同じではないのか？

……。

ええい、私は何を悩んでいるのだ！

夢なぞいくらでも追いかけて実現させればいいものだ！

私はまだ生きているのだ！

夢を叶える可能性は無限大に備えている！

肯定的に物事を捉えよ、ロスト！

それにヒュプノスは私のために沢山の侍女を用意してくれると言っていた。

さらにもうすぐこの砦に到着するとも言っていた。

酒池肉林の未来の構成員達がもうすぐ私の前に集結するのだ！

生きている限り、夢はいくらでも叶えれる！

誰かが階段を上がっている足音が聞こえてくる…。

ついにお早うからお休みまで世話をしてくれる麗しの侍女軍団が私の元に馳せ参じるのだ！

部屋のドアを叩く音が脳髄に響いてくる。

この控えめで辿々しくドアを叩く者は絶世の美女に違いない！

いつの間にか悲観的に悩んでいたときの私は消えていた。

「失礼します…」

……。

何だか聞き覚えが有る声だが、冷たいようで澄んだ美声だ…。

この砦の主たる私が盛大に歓迎してやろうぞ！

「入れ…」

さあ、早く麗しの姿を私に見せるがいい！

「入るわよ、主」

「主殿、ご奉仕致します…」

……。

……。

……。

……。

……。

……。

…。

「どうしましたか？主殿…」

「何固まっているの？主」

……。

「なぜ、貴様等がここにいる？」

貴様等はヒュプノス直属の暗部では無かったのか！

「これは異な事を…。私達は貴方様の従者です。任務を完遂した今、もう殿下との契約は終了しました。それに暗部はもう辞しました…」

エルは無感情にあっさりと衝撃の告白をしてきた。

「もう私達は主だけのものということよ。だから、これからも宜しくね！」

アビスはあっけらかんに言い、固まっている私に抱きついてくる。

「私達は主殿のために生き、主殿のために死ぬ従者。もはや仕えるべきはヒュプノスに非ず。ロット様だけでございます…」

エルは床に膝を付き、私に向かって頭を垂れてくる。

しかもヒュプノスを殿下と呼ばず、呼び捨てで言っていた。

……。

相変わらず暑苦しくて重々しい忠誠心だな…。

それはまあいい！

だが…。

「侍女達がここに来ると聞いていたが、見なかったか？」

双子共の暑苦しい忠誠心よりもそちらが最優先事項だ！

麗しの侍女軍団はどうしたのだ！

「それならば、全員お引き取り願いました…」

なぬ。

「主殿には私達二人がいれば事足りると思いしたが故に…」

エルはあっさりと独断専行を告白してくる！

しかも全然悪びれた様子が無い！

どうやら、私の大いなる夢を阻む大敵が身近にいたようだ…。

よりにもよって私の最大の足枷になっているこの双子共だとはな…。

ここで今後のことも考えてきっちりとこの双子と話をする必要があるようだ。

さてと、弁解のほどを聞かせて貰うぞ！

エル！

アビス！

第２５話：エルとアビス

エルとアビス。

貴様等とは今後のためにも立場をはっきりさせておく必要がある。

「主たる私の許可無く、ヒュプノスが派遣した侍女を全て帰したというのか…」

私は少し怒気を混ぜてエルに詰問する。

「それが答えです、主殿」

何が答えだというのだ？

話の脈絡が掴めんぞ。

「どういう意味だ？」

「侍女等はヒュプノスが寄越した者達です。ならば、彼女達の中に患者が紛れ込んでいる可能性があります。それ故に勝手ながら全員にお引き取りを願いました」

……。

確かにエルの言うとおり、あり得ることだ…。

だが、それを承知で引き入れることが男の甲斐性であるものだ！

故に許すわけにはいかない！

「だが、それでも私に断りも無く進めたのだ？それを分かっているのか？」

「分かっております。だから、この生意気な従者たる私にお仕置きをしてください、主殿…」

エルは私の前に近づき、両腕を頭の後に回してくる。

いかなることをされても無抵抗でいる構えなのだろう。

「私も姉者と一緒にお仕置きをして！」

アビスもまた両腕を頭の後に回し、私の前に立ってくる。

……。

これは新手の虐めなのか？

私は官能小説に出てくるような鬼畜な主人公ではないぞ！

美女をお仕置きをして喜ぶような特殊な性癖など持ち合わせてはおらん！

私はため息をつき、エルとアビスに両腕を後に回すのを止めさせる。

「主殿、どうして？」

「主に黙ってやったのに？」

双子は不思議な者をみるかのような目でいる。

私を思っての行動になぜ罰することができようか…。

軽く苦言を呈するだけだったはずなのに…。

これだから暑苦しい忠誠心は嫌いなのだ…。

だが、やはり侍女軍団の存在は惜しい。

「貴様の独断専行は許す。だから、侍女達を呼び戻せ。貴様等なら誰が患者かは見極めれるだろう？」

いくらなんでも百人が百人ともヒュプノスの回し者ではないだろう。

それにエルとアビスは元暗部だ。

患者であるかどうかの目利きぐらいは持ち合わせているに違いない。

そして、彼女達に直接に命令を下したのだ。

もはや従うしかないだろう。

エルよ、私はただでは引き下がらないぞ。

「謹んでお断りします…」

「お断りするわ…」

……。

なぜだっ！

貴様等は私の忠実なる従者ではなかったのか！

あの暑苦しくて重々しい忠誠心は嘘偽りだったと申すのか！

「一応、理由を聞こうか…」

冷静になれ、ロストよ…。

ここはエルがどんな言い訳を述べるのかを聞こうではないか…。

断罪するのは後でも遅くない…。

「私は主殿の従者、しかし、隷属しているわけではありません。主殿の魂胆はお見通しです」

ぎくっ！

「何のことだ？」

もしかして、私の大いなる野望が気づかれたというのか！

「女を沢山侍って爛れた生活をしようとなさっているのでしょう。従者としてそのような愚行を容認できるはずがありません…」

「そんな退廃的な生活は確かに頂けないわよ、主…」

……。

愚行？

退廃的？

上等だ！

「貴様等との主従関係をここで断ち切ってもいいのだぞ…」

我が夢を阻む者は誰であろうとも許しはしない！

さすがの私にも譲れないものはあるのだ！

「私達の契約を断ち切るのであれば、私達は貴方様の命を断ち、私達も後を追います…」

「出来ると思うのか？」

私は挑戦的に言ってやる。

この暗殺術を極めた双子とは正直な話、恐くて殺り合いたくない。

だが、夢を阻む大敵ならば、致し方ない！

男には戦わなければならないときがあるのだ！

……。

それでも死ぬかもしれない戦いは極力避けたい…。

さあ、どう出るのだ？

出来れば穏便に事を進めたいぞ。

「おそらく無理でしょう。私達では貴方様に傷を負わせること無く、ただ殺されるだけになります。でも、それでもいいのです…」

エルは諦めとも取れる声を出してくる。

「確かに私達ではあんたには敵わない。けど、それでもいいよ。どうせ、私達には帰る場所がもう無いのだから…」

アビスもまた諦めとも取れる声を出して項垂れる。

何だか私の苦手な暗い話に発展しつつあるようだな…。

「主殿の夢は沢山の女を侍らせることなのですか？」

エルが唐突に私に質問してくる。

そんなことを貴様に教える必要はない。

「質問に答える必要はな…」

「答えてください」

ぐっ！

なぜだかエルの言葉は育ての母のように抗いがたいように響いてく

る…。

「そうだ…」

つい素直に答えてしまったではないか！

「まあ、主も立派な男だしね…」

アビスはやれやれと言わんばかりにため息をついてきた。

その悟ったかのような顔が物凄く腹が立つぞ…。

「私は別に主殿の夢をただ否定している訳ではありません。ただ主殿は侍らした女の数だけ平等に愛し抜く御覚悟はあるのでしょうか？女をただの性欲処理として侍らすのであれば、命を持って否定させていただきます…」

「主は沢山の女を全員愛し抜くことができるの？」

……。

即答出来ない…。

私はただ沢山の女と面白可笑しく、そして、気持ちよく過ごしたいだけなのだ…。

気持ちよくが性欲処理も含まれているのは否定できなかった…。

「私は知っています。主殿が本当はとてもお優しいことを…」

エルは突然抱きしめてきた。

「なぜ、私が優しいと思う？」

私は自分のことしか考えていない優しいとは真逆の人間のはずだ。

「失礼ながらヒュプノスとの話を聞いておりました。主殿は私達を関わりの有る者だと言い、心ならずともこの国に仕えることをヒュプノスに誓ったことを…。女を性欲処理としか見なせていない方であれば、私達なぞ躊躇いもなく見捨てていたはずです…」

「そうよ。この国に来たことも契約を結んだことも全て掟に縛られている私達を助けるためにしてくれたことなんでしょう。だから、主は冷徹なんかじゃないわ」

……。

「違う。全ては私自身のためだ。貴様等のためではない…」

……。

「貴様等を見捨てたら、目覚めが悪くなってしまうと思った。ただそれだけだ…」

そうだ、あくまで私の心の安寧のためだ。

誰のためでもない。

「やはり、主殿は優しいお方です…」

どこをどう捉えれば、優しい奴だと評価できるのだ！

さっぱり分からんぞ！

「目覚めが悪くなるというのはそれだけ他人のために悩んでくれているという証拠です。それにブリュンスタッドが敗北したときに自分の部隊の心配もしたではありませんか…」

……。

「主はきっと自分の気持ちを誤魔化しているんだね。格好付けていても本当は臆病で寂しがり屋な甘えん坊さんなのだから…」

アビスもまた私を抱き締めてくる。

……。

「そんな優しい主殿ですから、無作為な火遊びは容認できないのです。確かに一時は快楽に浸ることはできましょう。しかし、お優しい主殿は決して関係を持った皆を見捨てません。そして、その責任感に押し潰されてしまい、最後に苦しむのは結局は主殿なのです…。私は苦しむ主殿を見たくはありません…」

「姉者は主の夢を否定しているわけではないわ。全員を愛し抜く覚悟があれば、幾らでも女と関係を持っても良いとも言ってるのよ…」

……。

説教をされたのは久しぶりだ。

そういえば、最強の力を持って説教されたことは一度も無かったな。

……。

だが…。

「私は改めるつもりは無い…」

エルとアビスは沈黙する。

……。

「だが、今回は貴様等の進言を受け入れる。もう侍女は迎えなくてもいい…」

……。

「主殿…」

「主…」

そんな嬉しそうな顔をするな！

貴様等のためではない！

あくまで私自身のためだ！

これはただ有り難い説教をくれた借りを返しただけだ！

ただ、それだけに過ぎない！

「勘違いするな。これも私自身のためだからだ…」

私は抱き締めてくれているエルとアビスの胸に強く顔を押しつける。

「ご安心を主殿。今宵は私達がお慰め致します…ちゅ」

エルは私の顔を上げ、血のように紅い唇を私のそれに押しつけてくる。

「今晩は主が飽きるほどにたっぷりとご奉仕してあげるからね…ちゅ」

アビスは私の首筋に口づけてくる。

「ちゅ…主殿…貴方様には決して裏切る事の無い女がいることを…ちゅる…お忘れ無きよう…ちゅぱっ」

「ちゅぅぅぅ…そうよ…私達は…あむっ…最後まで…んぐっ…主の味方なんだからね…ちゅる」

……。

美女の双子との濃密な情事…。

これはこれで悪くは無い！

いや、むしろ良いぞ！

「ちゅぱっ…はあ…はあ…主殿…どうか私の初めてを…受け取って

いただきたいです…」

エルは服を脱ぎ、雪のように白い肌が露わになる。

……。

美しい肌だが、傷もいくつかあった。

だが、その傷もまた美しさを際だたせるものにしか見えない。

……。

それにタナトスほどではないが、かなりの巨乳だ。

体が細いからこそ余計に際だって見えてしまうほどに強烈な光景だった。

「貴様の初めてが欲しい…」

私は思わず欲望を口にしてしまった。

今までは一方的に初めてを捧げられていたが、自分から求めたのはこれが初めてだ。

「ああっ…嬉しい！主殿が私を求めて下さっている！」

いつもの無感情な声では無い…。

女の喜びを帯びた生々しくも艶のある声だった…。

「ちゅ…姉者のこんな声…ちゅぱ…初めて聞いたわ…んっ」

アビスも私の首に熱烈に吸いながらもエルの変化に驚いているようだった。

「では、私の初めてを主殿に捧げます…あうっ…くぅぅぅっ！」

ぬおっ！

早速きたのか！

「姉者！大丈夫なの！」

「平気よ…これは主殿が与えてくれた痛み…これで私達は真の主従関係を結ぶことになる…」

エルは凄みがある笑顔を私に向けてきた…。

これが女の強さというわけなのか…。

私は苦しんでいるエルを解放しようとする。

だが、エルは私の胴体に両足を締め付けて離そうとしなかった。

「主殿、遠慮しないでくださいませ！痛みには慣れております！さあ、存分に来てください！」

ぐおっ！

いや、むしろエルが存分に向かっているかのようだが…。

「私の血肉の全ては主殿の物で御座います！それを分からせてあげます！」

がはっ！

エル、貴様…。

「主殿は誰にも渡しはしませぬ！」

ぐほっ！

それが貴様の本音なのか…。

「姉者…」

アビスは唖然としてエルを見ていた。

唖然としてないで暴走したエルを止めろ！

「主殿は私だけの主殿だ！」

ぐへぁ！

口調が変わっているぞ…。

「主殿を私の体で骨抜きにしてくれる！」

ぐはっ！

完全に暴走している…。

「姉者が心を解き放っている…」

アビス、感動してないで助けろ！

「骨の髄まで愛しているぞ！主殿！」

ぐほあああああっ！

……。

……。

……。

…。

「まさかあの氷のように冷徹な姉者にこんな情熱的な側面があったなんてね…」

アビスは気絶したエルを私から引き離し、ベットの横にそっと寝転ばせた。

私は干からびていた…。

エルに精気を根刮ぎ吸い尽くされたのだ…。

もう一発やれば、私は腹上死しかねないぞ…。

「主には感謝しているわ。だって、私にこんなにも弾けた姉者を見せてくれたから…」

「そ…う…か…」

もはや満足に声も出せない状態だ…。

「だから、私も愛と感謝の気持ちを込めて、初めてを主に捧げるわ…」

何だと？

アビスもまた服を脱ぎ、体を露わにして見せる。

……。

姉に劣らず美しい体だった。

胸はやや姉よりも小さいと言ったところか…。

だが、それでも十二分に巨乳の範疇だ…。

……。

「私も姉者に負けないほどに主を愛していることを主に分からせないといけないしね…」

いや、アビスの気持ちは十二分に伝わっていると思うぞ！

だから…。

「次の機会に…」

「悪いけど、その命令は聞けないわ…はあああっ！」

ぐおっ！

「くぅぅぅっ！痛いけど、耐えられない程では無いわ…」

アビスは壮絶な笑みを私に向けてくる。

「ふふっ…仮にも酒池肉林を夢見ているのでしょ？だったら、これぐらいで音を上げないでよね！いくわよ！」

ぎぇえええっ！

「ほら！ほら！私は満足してないわよ！姉者と同じように私を喜ばせ見せなさいよ！」

ぐはあああっ！

「情けないわね！それでも私の主なの！少しは男を見せなさいよ！」

ぶちっ！

……。

この女、言わせておけば…。

「ふふっ、さあ、私の愛しい主様。この小生意気な従者をどうして

くれるのかしらね？」

「戒めて…くれるわ！」

私はあらん限りの男の力を発揮してアビスに反撃を浴びせ掛ける。

「あうっ！いいわ！それでこそ私が愛する主よ！」

これは男の尊厳を守るために聖戦だ！

覚悟しろ、アビス！

「激しすぎるわ！申し訳御座いません！生意気なことを言ってしまって！あうっ！」

私は最後の力を振り絞り、アビスにとどめを刺す！

「果てろ…」

「あああああああああっ！」

アビスは絶叫を上げて私の胸に倒れてくる。

……。

……。

……。

……。

……。

……。

……。

…。

この恐るべき双子は床でも充分に暗殺できるほどの精力の持ち主だった…。

しかも交わっているときは性格が少し変わってしまうという危ない側面があった…。

だが、この程度で腹上死してたまるものか…。

私は酒池肉林を目指しているのだ…。

「主殿、私はまだ足りぬぞ…」

「もっと私を満足させなさいよ、主…」

後から復活した死食鬼の如く抱きついてくる双子…。

「主殿、私と共に逝こうか…」

「私の中で逝きなさいよ、主…」

私はまだ逝きたく無いぞ！

やめろ！

やめてくれ！

「往生際か悪い主殿ですね。けど、そこが愛しく感じてしまう…ちゅ」

「そうね。つい虐めてしまいたくなるほどに愛しく感じてしまうわ…ちゅ」

ぐぎゃあああああああああああああっ！

……。

……。

……。

…。

久しぶりに燃え尽きてしまったぞ…。

……。

もはや骨と皮だけの存在に成り果ててしまった…。

……。

無事に明日の朝日が拝めればいいな…。

第２６話：束の間の平和

『君は本当に往生際が悪い男だね…』

誰だ？

『貴方はいつまで自らを偽る気なの？』

見渡す限り純白に満ちた世界。

無の世界…。

私はそんな世界にいつの間にか佇んでいた。

「貴様は何者だ？」

目の前には純白に彩った軍服を身に纏い、肩までの長さの白髪を靡かせる女性がいた。

背丈は私よりも頭二つ分ほどの高い。

『ふふっ、貴様とはご挨拶ですね…。私の名はアーテー。俺のことをアーテと呼ぶことを許してやるぞ。光栄に思ってね…』

口調がはっきりしない女だ…。

しかも、一人称と二人称が統一されていないぞ…。

『だったら、どの口調にして欲しいの？私？僕？俺？それとも妾か

しら？お前のお好みに変えてあげるよ…』

私の思考を読んでいるというのか！

『妾の前では心を解き放つがいい…。隠し事は無意味だよ…。汝は我の玩具なのだからな…』

男のように獰猛な笑みであり、女のように妖艶な笑みを見せてくる存在…。

貴様にはどうやら言葉は必要ないようだな…。

名乗るのが遅れたようだな，貴様なら既に知っていると思うが、敢えて名乗らせてもらう。

我が名はロスト。

元平民その他にして亡国ブリュンスタッドの落ち武者であり、今はヴァルキリアの囚人だ！

『ふふっ、僕に向かって啖呵を切るなんて本当に面白い男だな…。まあ、それでこそ嬲り甲斐があるというものよ…』

私は嬲られて喜ぶ趣味は持ち合わせておらん！

逆に貴様を嬲って楽しんでやるわ！

『私を嬲るだと？面白い。いつかその機会が出来たら是非やって見せてくれ。楽しみにしているわ…。最も…』

……。

『俺の前に辿り着けたらの話だがな…。くっくっくっ…』

その言葉、死ぬほど後悔させてやるぞ…。

首を洗って待っているがいい、アーテ！

『これでもかというぐらいに首を綺麗に洗って待っているよ、ロスト…。だが、まずは大いなる試練を乗り越えてもらわなければのう…』

大いなる試練だと？

『我が汝のために用意した運命の手札、ケール。タナトス以上の力に特化した人形だ。くっくっくっ，私は期待しているよ…』

……。

何を期待しているのだ？

……。

答えろ、アーテ！

『それは勿論…』

……。

『君がケールを殺してくれることだよ…』

……。

『貴様が狂って墜ちていく姿が楽しみじゃのう…』

……。

『あはははははははっ…』

……。

……。

……。

…。

私は目を開ける。

最高に胸くそ悪い夢だったな…。

私は起き上がろうとしたが動けなかった。

眠っているエルとアビスに私は拘束されているのだ。

私は健やかに寝息を立てるエルとアビスの髪を撫でる。

主たる私よりも寝坊するとは従者の風上に置けぬ者共だ…。

「んっ…うっ」

「むにゃ…あ…るじ？」

エルとアビスがようやっと目が覚める。

「おはよう、エル、アビス…」

「あっ、お早う御座います、主殿」

「お早う、主…」

目を擦り、半分夢の中に漂っているかのような双子…。

「早速だが、早く起きろ…。こちらが動けなくて体が痺れそうなのだがな…」

エルとアビスに拘束されて、私の体が痺れかかっているのだ…。

早く解放して欲しいぞ…。

「すいません！ただいますぐに！」

エルは残像が見えるほどに迅速に起き上がって身支度を整えていく。

さすがは元暗殺者だな。

日常生活においても身のこなしが早い。

「私はもう少し、このままで…」

アビスはしぶとく私を拘束していた…。

いい加減に叩き起こそうかと考えた矢先…。

「アビス、主よりも寝坊するとは何事ですか。さあ、早く起きてなさい…」

「痛い！痛い！ちょっと姉者！耳を引っ張らないで！」

エルは無表情でアビスの耳を引っ張って無理矢理起こしていっていた。

朝からぐうたらなアビスに容赦無いエルの姿はかなり恐かったな…。

「それでは、失礼しました、主殿…」

「姉者だって主よりも寝坊って…痛い！痛い！ご免なさい！もう口答えしません！姉者！」

騒がしい双子は出ていき、寝室は静寂に包まれる。

……。

私は夢の内容を思い返す。

あれはただの夢ではなかった。

アーテーと名乗る女性。

彼女はいったい何者なのか？

私が狂っていく姿を楽しみにしていることから禄でもない女であることは確かだな…。

さらにケールを自分が用意した手札とも言っていた。

ケールはヒュプノスの配下のはずだ。

だが、アーテは自分の手札とも言っている。

ならば、ヒュプノスとアーテに何か接点があると考えた方が良いだろう。

いずれにせよ、厄介な展開が待ち受けているだろうな…。

全く難儀なことだ…。

私は朝食を取りに台所に向かっていく。

そう言えば、今日はヒュプノスが言っていた催し物があるらしい。

どうせ禄でもない催し物に違いない。

仮病でも使って欠席できないものなのか…。

台所では良い匂いがしてくる。

「さあ、主殿。あり合わせで申し訳ありませんが、どうぞ召し上がってください…」

食卓には香ばしい匂いがした焼き魚にご飯と呼ばれる東洋の食事が並ばれていた。

「これはみそ汁という物です。我が故郷では一番のおかずとして食されているものですよ」

私は食器を取り、みそ汁を啜った。

体が心地よい辛さと体が温まるかのような懐かしい味だ…。

そう言えば、女の手料理を食べたのは故郷を出て以来久しぶりだった…。

家族は元気にしているのだろうか？

「どうかしたの、主？」

アビスが無邪気そうな目で私の顔を覗き込んでいる。

……。

エルとアビスは故郷の掟に縛られて過酷な人生を歩んできたのだ。

うっかり家族の話題を持ちかけない方がいいだろう。

「何でもない。ただ、余りにも作ってくれた食事が上手かったから固まっていただけだ…」

私は誤魔化すように用意した食事を褒めた。

誤魔化すと言っても本当に美味しかったから問題無いだろう。

「本当！味噌の味付けをしたのは私なんだよ！もっと褒めてよ！主！」

アビスが背中から勢いよく抱きついてくる。

背中に当たる感触は最高だが、あまり揺さぶるな！

みそ汁が零れるではないか！

「離れろ、食事の邪魔だ…」

「素っ気なくして…。もしかして、照れてるの？本当に可愛いわ、私の愛しい主、んっ！」

アビスが後から顔を寄せて、私の頬に唇で吸い付いてくる。

最初の頃は蛇蝎の如く嫌っていたのに今では過剰なほどに愛情表現をしてくるようになったものだ。

それだけアビスが私に心を開いてくれているのだろうか。

「止めなさい、アビス。食事中にはしたない。主殿も困っているではありませんか…」

「ちゅぱっ…本当は姉者も自分が作った食事を主に褒められて舞い上がっているんでしょ？姉者ももう少し素直になればいいのにな」

騒がしいが、嫌いではないな…。

「食事を美味しく頂いて貰うのは当然です。それで褒めて貰おうなどとは浅ましいにもほどがあります…」

「『どうすれば主殿に喜んでもらえるのかしら?不味いと思われたもう生きていけません』なんて戦々恐々としていたのは誰だったのかな?」

……。

「……。どうやら貴方にはもう一度念入りに修正しておく必要がありますね…。武器を取りなさい、アビス…」

「やる気なの、姉者?いつまでもやられっぱなしの私だと思わないことね!」

私はテーブルを強く叩きつけた。

「あ、主殿?」

「あるじ?」

……。

「食事中にはしたないぞ、エル、アビス…」

……。

「申し訳御座いません…」

「ご免なさい…」

騒がしいのもほどほどにしないといけないな。

だが、これが平和な生活というものなのだろう…。

いつまでもこんな日々が続けばいいと思ってしまう。

……。

……。

…。

「私の膝に頭を預けてください。耳掃除をします」

私は素直にエルの膝に頭を預ける。

エルの膝は柔らかくて暖かい。

まさに至上の枕と言うべきだろう。

私は世の男が夢見た美女の膝枕を体験しているのだ！

「なぜ、涙を流しているのですか？」

エルが無表情ながらも心配そうに私の顔を覗き込んでいた。

感動の余り、うっかり涙を流してしまうとは思わぬ失態だったな。

「あくびで涙が出ただけだ…」

我ながら上手い誤魔化しだ。

「そうですか。では、このまま眠ってもかまいませんよ」

エルが僅かながらも微笑をした顔を見せてくれる。

エルはまるで母が子供を甲斐甲斐しく世話しているようだ…。

「私は主の足を揉んで上げるよ」

アビスが柔らかい手が私の固くなっている下腿を包み込むように揉みほぐしていく。

アビスは構いたがりな妹と言ったところか。

……。

余は満足じゃ、と一言言いたくなるほどに極楽だ…。

これほどの美女二人に甲斐甲斐しく世話される男は世界広しいえど、そうはいないだろう。

私は今まさに幸せを噛みしめているのだ。

この幸せにさらなる幸せをもたらすためにはこのヴァルキリアから何としても脱出しなければならない。

あの恐女ヒュプノスの庇護下にいる限り、真の意味での幸せは掴め

ない。

ついでにヒュプノスをこれ以上に無いほどに屈服できたら尚も良いのだがな…。

触らぬ神に祟り無しという東洋で素晴らしい格言があることだし、手を出さない方がいいだろう。

とりあえずはヴァルキリアから脱出することが最優先事項だ。

「主殿、私は幸せです。このように主殿を世話で出来て、食事を用意して、そして、共に同じ布団で寝うることが出来て…。パラディスム家に生まれてから女の幸せを捨てたはずなのに…」

私の頬に熱い滴が落ちていく。

「泣いているのか？エル…」

私は腕を上げて、エルの柔らかい頬に手を添える。

「いいえ、主殿と同じように眠気による涙で御座います…」

エルは添えている私の手を愛おしげに頬ずりしてくる。

「主殿の御手は温かいですね。どうか、冷たくなった私にその温かさを分けて頂き等御座います…ちゅ」

うおっ！

エルは私の掌の自分の唇を押しつけてきた！

眠気がさしかかっていた私の脳が一気に覚醒した気分だぞ！

「主、下腿の筋緊張が高まっているよ。私の体全体で揉みほぐしてあげるわよ」

アビスは私の足を豊満な胸に抱き締めるようにしてくる。

何のつもりか分からんが、それでは余計に筋緊張が高まっていくと思うぞ！

さらに言えば、私の男の証が弾けんばかりに自己主張することになってしまう！

「あら？どうやら主は朝からやる気になっているみたいね…」

アビスは不気味な笑みに私は体を硬直させる！

まさか、また性格が豹変したではないだろうな！

「アビス、朝っぱらから何を…」

「ねえ、姉者も一緒にやろうよ。主の興奮を収めるのもまた従者の務めだしね…」

エル、良識がある貴様ならアビスの暴走を止めて見せろ！

「そのような理由でしたら致し方ありませんね…」

エル、妹の口車にあっさりと乗ってどうする！

私の爽やかな朝が…。

「主殿、早速朝の運動を始めましょうか…」

「主、軟体動物のように気持ちよく筋肉がほぐせると思うわよ…」

……。

「さてと、朝の散歩に…ぐえっ！」

私の首にしなやかな腕が回される。

「逃がしませんよ、主殿…」

「男なら潔く受け入れなさいよ！主！」

……。

ぬおおおおおおおおおっ！

……。

……。

……。

…。

「すいません。いささか調子に乗りすぎました、主殿…」

「羽目を外しすぎて御免ね、主…」

干からびている私に向かって綺麗に揃って土下座する双子。

「次…から…は…気を…付けろ…」

年を取りすぎた老人のようにしわがれた声で双子をたしなめる私。

これからヒュプノスの催し物に出席するのにとんだ体力を使わせたものだ…。

しかも、ご丁寧に一人で来るようにとの言付けも入れてくるとはな…。

これではエルとアビスを共に出来ないではないか…。

一人であの恐いヒュプノスの下に行くには余りにも心細い…。

「お気を付け下さい。ヒュプノスはきっと何かを企んでいるはず。でなければ、一人で来いという言付けをしないはずです」

「そうよ。彼女は何たってヴァルキリアの恐怖の象徴なんだから。何されるか分かったものじゃないわよ…」

それは十二分に承知してる。

出来れば、今すぐにでも国外逃亡したいぐらいだ。

私は気配を探ってみる。

数人が私を監視しているのが分かる。

エルとアビスも分かっていると思うが、敢えて気づかない振りをしているのだろう。

私達に逃げ場は無いのだ。

ならば、突き進むしかない。

「必ず戻ってくる…」

私は双子を安心するために笑顔を見せる。

敵国に放り出されてからというものの、真剣に考えてしまうときが増えてしまったな…。

いつもの軽い乗りに戻りたいものなのだが…。

「御武運を…ちゅ」

「必ず帰ってきてね…ちゅ」

エルとアビスがそれぞれ両頬に口づけ、布巾で頬を拭ってくれた。

なかなか良い判断だぞ。

さすがに両頬に口紅の後を付けた状態でヒュプノスと顔合わせしたら不敬罪で即刻処刑にされかねないからな…。

「行ってくる…」

私は砦を後にし、ヒュプノスがいる居城に向かっていく。

足取りが重い。

ヒュプノスはいったいどんな禄でもない歓迎をしてくれるのやらか。

今の内に辞世の句を考えた方が良いのだろうか。

だが、一番注意すべきことは何とかケールと鉢合わせしないようにすることだ。

あの夢に出てきた女アーテの言うとおりならば、ケールはタナトス以上の戦闘力の持ち主であると言うことになる。

そうであれば、鉢合わせしたら最後、死闘になるのは確実だ。

……。

どうか、せめて五体満足に帰れますように…。

そして、帰ったらエルとアビスに思いっきり慰めて貰おうか。

帰る場所とご褒美さえ考えれば、生存本能が高まるはずだ！

ヒュプノスが如何に企んでいようと関係無い！

私は必ず生きて帰り、床の上で天国を堪能してみせるぞ！

第27話：残骸の世界

私はヒュプノスの居城の前に辿り着く。

相も変わらず絢爛豪華な作りの城だな。

素材一つで山小屋が何件も建てれそうなほどに価値があるだろうな。

脱国する際にはくすねていくのも面白そうだ。

「これはロット様。さあ、こちらへ。ヒュプノス様がお待ちになっています」

「案内しろ…」

思わず私は傲慢にヒュプノスの使いに命令を下す。

ここは嘗められたら負けだ。

正々堂々と悠然に乗り込んでみせるのが、私なりのせめてもの抵抗だ。

ヒュプノス、貴様が何を企んでいようと私は物ともしないだろう。

仕掛けてみるのならば、仕掛けてみるがいい！

「よく来てくれたな。歓迎するよ、ロット殿…んっ」

ヒュプノスは鉢合わせで、いきなり抱きついて接吻をかましてきた！

「ちゅ…あむっ…ちゅうぅぅ」

ぐおっ！

足に力が抜けてくる！

これはヒュプノスの先制攻撃なのか！

だが、いつまでも乗せられている私ではないぞ！

「ちゅる…ちゅぱちゅぱ…ちゅ」

……。

もう少し乗ってやろうではないか…。

……。

これは相手の出方を伺うための戦略だ！

決して気持ちいいからもう少し堪能したいからではない！

……。

「ちゅ…ちゅる…ちゅぱ…」

だが、そろそろ酸素不足になってきたな…。

……。

うおおおおおっ！

苦しいぞ！

「きゃあっ！」

私は苦しさの余り、思わずヒュプノスを突き飛ばしてしまった。

……。

何て事をしてしまったのだ、私は…。

ヴァルキリアの主たるヒュプノスを突き飛ばして待ったのだ…。

不敬罪どころでは済まないぞ！

周囲の兵士殿が私を包囲するように槍を突きつけてくる。

早くも命の危機が到来してきたようだ…。

ここはもう強行突破しか方法は無いのだろうか…。

「下がれ、私のことは良い…」

ヒュプノスは立ち上がり、手を挙げて兵士を引き下がらせる。

「朝の挨拶がお気に召さなかったのかな，ロット殿？」

突き飛ばされたにもかかわらず、ヒュプノスは妖艶な笑みを向けて

くる。

「そんなつもりは…」

……。

何を弁解しようとしているのだ！

相手は私を陥れようとする悪魔なのだぞ！

毅然とした態度を取れ、ロストよ！

「そうか、良かった。危うく女として自信を失うところだったよ。私の挨拶をお気に召して何よりだ。望むなら毎日でもしてやるが？」

……。

一瞬心が揺らいでしまったではないか！

流されるな！

これはヒュプノスの罠に違いないのだぞ！

……。

それにしても突き飛ばしたときには可愛い悲鳴を上げていたな。

そう言えば、タナトスの服を引き裂いたときもこんな可愛い悲鳴だった。

これも姉妹ゆえに似ているところなのだろうか…。

……。

そんなことはどうでもいい！

「殿下のご挨拶、喜んで承ります。して、何用でしょうか、殿下？」

朝の挨拶については断われば不敬罪になるから喜んでご好意を受けてやるぞ。

そして、本題に入るために修正せねばなるまい。

いつまでも脳内桃色でいるわけにはいかないからな…。

「ヒュプノスと呼び捨てでかまわん。付いてくるがいい。貴様に見せたい物があるのだ…」

ヒュプノスは私の腕を組み、案内をしてくれる。

豊満な胸が心地よいぞ…。

危険な香りがするが、それを敢えて受け止め、乗り越えて見せるが男の甲斐性なのだ。

「貴様等はここまででいい。待機しろ」

付き従っていた兵士に待機させ、私とヒュプノスは威圧的で巨大な扉の前に立っていた。

「ここから先は私の世界だ。光栄に思うがいい。実験体以外で私の世界に招くのは貴様が初めてだ…」

ヒュプノスは扉に手を添えた瞬間、扉全体に紋章が浮かび上がっていく。

「私の世界にようこそ。ロスト…」

ここでは関係者以外誰もいないのだろう。

ヒュプノスが私の本名を言ってきた。

扉が重々しく開き、濃厚な血の匂いが私の鼻に吹き付けてくる。

思わず吐瀉物を吐き出しそうになってくる！

これほどの濃密な血の匂いは戦場でも嗅いだことがないぞ！

「さあ、来たまえ…」

ヒュプノスはお気に入りの庭を紹介するかのように平然と私を案内してくれている。

……。

……。

…。

「薬を…薬をくれぇぇえええええっ！」

「もう嫌だ…。殺して…。もう死にたいよぉ…。誰か私を殺してよっ！」

「お母さん、何で返事しないの？何でそんなに体が冷たいの？返事してよ！ねえ、お母さん！」

……。

ここがヒュプノスの世界…。

あの逝かれた正規兵が育成される狂気の世界なのか…。

ぐっ！

吐き気がしそうだが、耐えるのだ！

ここでヒュプノスに弱みを見せたらお終いだ！

「後五十六人を殺せば、私は天国に行ける！うひひひひっ！だから、エルム…死んでくれない？」

「目を覚まして！アンナ！そんなことしたってヒュプノスの思う…きゃあああああっ！」

「やったぁあああっ！ヒュプノス様、見てくださいましたか？これで残る後五十五人です！」

牢獄の中で女は狂ったように歓喜し、自分を心配してくれた女の死体を切り刻んでいた…。

……。

何という光景だ…。

おそらく薬で正気を失っているのだろう。

切り刻んでいる女は元は仲が良かった親友だったのかもしれない。

ヒュプノスはアンナの頬に優しく手を添えて微笑んでみせていた。

「見ていたぞ、アンナ。後五十五人を切り刻んだ暁には貴様は正規兵として配属させてやる。それまで精進するがいい…」

「あああああっ！ヒュプノス様！私は貴方様のためならば、喜んでこの命を捧げましょう！」

アンナは感無量に涙を流し、ヒュプノスの手に縋り付いていた。

異常過ぎる光景に私は目眩を覚えてしまう。

ヒュプノスは私にここで何をさせたつもりなのだ！

「ふん！馬鹿な家畜を相手にするのは疲れるな…」

ヒュプノスは不機嫌そうにアンナに触れた手を布巾で入念に拭いていた。

「もう帰っても宜しいでしょうか？」

私はヒュプノスに伺いを立てた。

この世界がヴァルキリアを恐怖の国に成立させた理由の全てが詰まっている。

それだけが分かっただけでも収穫物だ。

もう一秒たりとも居たくは無かった。

「駄目だ。貴様にはやって貰いたいことがあるからな…」

ヒュプノスは強引に私の腕を取って歩いていく。

……。

……。

…。

ヒュプノスが案内した場所は入り口の同様に巨大な扉がそびえていた。

「貴様にはこの部屋に入って貰おうか…」

「この扉の先に何が？」

私は身構える。

これは絶対的な確立で罠だ！

誰が罠だと分かっている場所に飛び込むものか！

「ただちょっとした遊戯に参加してもらうだけだ。これこそが私が貴様に送る催し物だ」

「断る」

いくら一国一城の主の命令といえど、遊戯の駒になるなんて死んでも御免だ！

「いいや、貴様はこの遊戯に参加しなければならない。見るがいい」

ヒュプノスが手をかざした瞬間、虚空に映像が映し出される。

映し出された映像には私の砦を包囲する正規兵が多数いた。

「遊戯に参加しなければ、貴様の大切な双子の従者は正規兵一万と殺し合う羽目になるな…」

……。

私を遊戯の駒にするためにそこまでやるのか！

……。

『主殿、私は幸せです。このように主殿を世話で出来て、食事を用意して、そして、共に同じ布団で寝うることが出来て…。パラディスム家に生まれてから女の幸せを捨てたはずなのに…』

エル…。

『本当！味噌の味付けをしたのは私なんだよ！もっと褒めてよ！主！』

アビス…。

……。

くっ！

つくづく貴様等は私に足枷になっているようだな…。

……。

だが、認めたくないが、そんな足枷が私には心地よく感じてしまうのだ…。

「遊戯に参加させろ…」

「遊戯に参加させてください、ヒュプノス様、だろ？」

ヒュプノスは私を嬲るような笑みを浮かべてくる。

おのれ、ヒュプノス！

今すぐにでもお仕置きしてやりたいぐらいだ！

だが…。

映し出された映像を再度目を向ける。

もし、ここでヒュプノスを修正しても、あの正規兵が止まる保証が無い。

……。

ここは血の涙を呑んで耐え忍んでやる！

「遊戯に…参加させてください…ヒュプノス様…」

「聞こえないな…」

「遊戯に参加させてください！ヒュプノス様！」

「ははははははっ！そうか！それほどまでに私の催し物に参加したいというのか！ならば、参加させてやる。泣いて喜ぶがいい！あははははっ！」

おのれ、性悪女め！

いずれ目に物を見せてくれるわ！

「さあ、地獄の扉を潜るがいい…」

扉が開いていく…。

そこは見渡す限り、血の跡と残骸が散らばっていた。

まさしく死の世界だった…。

「ここは私が作り出した亜空間であり、ヴァルキリアの戦闘訓練所だ。聞こえないか？強者共の泣く声がな…」

泣くように吹き荒ぶ風が血と汗と涙の匂いを運んでくる。

私を誘った扉が突如閉まっていく。

閉じた扉は虚空に消え、私は一人荒野に取り残される。

「ここで私に何をさせるつもりだ！」

私はあらん限りの声を出して、遠くから眺めているだろうヒュプノスに問いかける。

『ふふっ、至極単純なことだ。ただ生き延びればいい。それだけだ…』

虚空からヒュプノスの声が響き渡ってくる。

生き延びればいいだと？

そんな詰まらん遊戯に誘うために正規兵一万を動員させたとでも言うのか！

『勿論、ただ生き延びるだけならば、家畜にでも出来る。さあ、貴様以外に参加する挑戦者を召喚してやろう！出でよ！』

当たり一面に魔法陣が出現してくる。

送還魔法陣なのか！

魔法陣からここまで来るまでに見てきた牢獄の逝かれた女共が姿を現してくる。

「お母さん、待っててね。すぐに薬を持って戻ってくるから…。だから、今度こそ起きて私に笑顔を見せてね…」

「ここが私の死に場所。これで今度こそ私は死ねる！死ねるのよ！あははははっ！」

「ヒュプノス様！見ていてください！今度こそ残り五十五人を血祭りに上げて、貴方様の下に馳せ参じます！」

残骸が散らばっていた荒野があっという間に狂戦士共の群れに埋め尽くされていく。

……。

かつて無いほどの危機だ…。

私は一人孤独にこの荒野で狂戦士共と殺し合わなければならないのか…。

恐い…。

恐い…。

助けてくれ…。

こんな地獄のような世界で戦って死ぬのは嫌だ！

……。

……。

…。

ここで泣いても何も始まらない！

思い出せ！

私は何のために遊戯に参加したのだ？

……。

エルとアビスを助けるためだ！

これ以上に無い程に認めてやる！

エルとアビスは既に私の酒池肉林の構成員だ！

即ち私にとって大切な家族に他ならない！

家長たる私は家族を守るために命をかけねばならないのだ！

これは私と私の家族のための戦いだ！

故に負けるわけにはいかないぞ！

「ヒュプノス、さっさと遊戯を開始させろ」

『どうやら、やる気が出てきてくれたみたいだな。やはり貴様は骾り甲斐がある。では、大いに楽しんでくれたまえ！』

「「うおおおおおおおおおおおっ」」

世界が震える程の歓声が響いてくる。

『死の宴を始まりだ！血の酒を思う存分に貪るがいい！』

大地が震え、狂戦士達が一斉に血の華を咲かせてくる。

肉片が所々に飛び散っていき、大地は瞬く間に深紅に染め上がっていく。

『さあ、戦いがいい！ロスト！』

生憎、重大決心をしたとはいえ、ヒュプノスの思惑に完全に乗るのは面白くない。

だから…。

「死ねぇえええええええっ！」

私は体をくねって狂戦士の凶刃をひたすら避ける！

避けて、避けて、避けまくって…。

背を向けて逃げるのだ！

『なっ！貴様！敵前逃亡をするつもりか！』

違うな！

「これは戦略だ…」

何も馬鹿みたいに全員を相手にする必要は無い！

共倒れするまでにひたすら逃げ延びればいい！

そして、少なくなった所を適当に始末すればいいとのことだ！

『ロスト、貴様…』

ヒュプノス、何もかもが貴様に思惑通りになぞさせはしないわ！

私は全力を持って逃げ続けるぞ！

『ふふっ、つくづく私を楽しませてくれるな…。ならば、逃げ延びるといい。どうせ、この戦いは前座にしか過ぎないのだからな…』

負け惜しみにつもりか！

ならば、遠慮無く逃げ延びてやるぞ！

『何しろ、最後まで生き延びた者には我がヴァルキリアが誇る最強の狂戦士ケールへの挑戦権が与えられるのだからな。せいぜい逃げ延びてくれ…』

……。

……。

……。

……。

…。

何ですと！

狂犬ケールへの挑戦権がこの遊戯の優勝賞品だというのか！

そんな至上最悪な優勝賞品なんて激しくいらんわ！

どうすればいい！

勝っても地獄！

負けても地獄！

こんな死の世界で朽ち果てるなぞ御免だ！

とりあえずは逃げ続けるしかない！

「お前の命を私に譲ってくださらないかしら！」

うおっ！

追いついてくるな、化け物共め！

やはり格好付けずに何もかもを捨てて逃げ延びれば良かったのかもしれない…。

だが、もう今更どうしようも無い！

必ず生き延びてエルとアビスの下へと帰るのだ！

第２８話：戦争交響曲

「薬をよこせぇえええっ！」

「切り刻んでくれるわ！」

「貴女の心臓を頂くわ！」

私は走りながらも耳を塞いでいた。

この狂戦士共の呪詛を聞き続ければ確実に発狂出来る自信がある！

早く共倒れして、この馬鹿げた遊戯を終わらせて欲しいぞ！

頭上から矢の雨が降り注いでくる。

ぬおっ！

私は蛸の如くの体捌きで矢を避け続けていく。

遠目から手に何十本もの矢を束ねて弓を弾く狂戦士が居る。

「みんな、みーんな、あたいの獲物よ！ひゃはははははっ…がはっ！」

「ひひひひっ！これで後三十人！さあ、次に殺されるのは誰なのかな？」

弓を構えていた狂戦士を後から刺し貫いたのは親友を殺し、ヒュプノスに狂信的な忠誠を誓っている狂戦士アンナだった。

あの狂戦士はとにかく不味い！

私はアンナから遠ざかるように走っていく。

突如、無差別に氷刃が飛来してくる。

「ぎゃあああああっ！」

「痛い！痛い！」

……。

氷刃に串刺しにされていく狂戦士を目の当たりにしながらも私はただ走っていった…。

まさに自分以外は全て敵だというのか…。

走っている私に二人の狂戦士が立ちふさがってきた。

「ぐがぁあああああっ！」

「きぇえええええっ！」

二人の狂戦士が耳障りな気合いを入れて同時に私に向かって刃を振り下ろそうとしてくる。

喰らうものか！

私は地面を転び周りながら振り下ろされていく二つの刃を回避して

いく。

「震えよ！大地！アースクエイク！」

すかさず別の狂戦士が魔法を唱えてくる。

私が寝転んでいる大地が裂け、私を奈落へと誘おうとしてくる。

まずい、このままでは地面に呑み込まれてしまう！

私は拳を壁に突き刺して、必死に裂け目から這い上がっていく。

どんなに無様に這い蹲ろうとも私は生き延びてみせる！

私は地面の裂け目から這い上がった先に見えたのは狂戦士が鈍器を振る下ろそうとする姿だった。

「蛙のように磨り潰してやるよ！」

その前に私の黄金の拳で伸してやるぞ！

「ぐぼぉおおおっ」

私の拳が綺麗に鳩尾にめり込み、狂戦士は力無く倒れる。

狂戦士が持っていた鈍器が地面に落ち、大地を震わせていく。

丁度良い獲物だ！

私は鈍器を拾い、近づいてくる狂戦士共を一斉に蹴散らしていく。

「ぎゃあああああっ！」

「ぐはあああああっ！」

これでさらに容易に逃げ回ることができるぞ！

「私の行く道に立ちふさがるな！」

さらに群がってくる狂戦士共をひたすら弾き飛ばしていく。

これで逃げ場は確保した！

私は鈍器を背負って力の限り走っていくのだった。

……。

……。

…。

「はあ…はあ…はあ…」

どれだけ戦いが続いているのだろうか…。

もはや私の体内時計は麻痺しているようだ…。

この作られし空間の中では時間感覚が曖昧になるのかもしれないな…。

『なかなか粘るではないか、ロスト…』

虚空から憎たらしい女の声が響いてくる…。

「ヒュプノス…」

『ふふっ、私は貴様を応援しているのだぞ。是非とも期待に応えて欲しいものだな…』

どこまでも腹が立つ女だ！

「貴様の期待には見事応えてやる…」

『それでこそ私の実験体だ，ふっふっふっ…』

ヒュプノスの愉悦に満ちた声が重々しく私の頭にのし掛かってくる。

「何もかも消し飛ぶがいいわ！」

遠目にいる狂戦士の体が禍々しく輝き始めている。

『あはははははっ！』

ヒュプノスの嘲笑と共に巨大な閃光が狂戦士を中心に全方位に放出されていく。

「くっ！魔法防壁最大展開！」

私は鈍器をかざして自分の周囲に結界を展開させ、迫り来る閃光を弾いていく。

周囲にいた狂戦士は成す術もなく、次々と閃光に焼き尽くされていた…。

「ぎゃあああああっ！ぐるじいよぉおおおおおっ！」

「熱い！体が溶けるっ！あああああああああっ！」

『これこそが死の宴だ！どうだ！楽しいだろう！あはははははっ！』

狂戦士の痛々しい悲鳴とヒュプノスの腹が立つ声。

史上最低最悪の二重奏だ…。

歴史的な駄作として後世に語り継がれるかもしれないほどだな…。

「消えろ！消えろ！消えろぉおおおおっ！」

閃光を無差別に放ってくる狂戦士に目が留まる。

まずはあの暴走女を何とかしないといけない。

私は鈍器に力を溜め込んでいく。

そして、鈍器を思いっきり振りかぶる。

目標は出鱈目に魔法を放つ暴走女。

「これで消え去れ！ミッシング・レイ！」

暴走女から巨大な白の波動が解き放たれていく。

「ぎゃあああ……」

狂戦士共を悲鳴諸共呑み込んでいき、鈍器を振りかぶっている私をも呑み込もうと迫ってくる。

だが、私は呑み込まれたりはしないぞ！

聖なる鉄槌を喰らうがいい！

「トールハンマー！」

私は鈍器を迫り来る白い波動に向かって投げつけた。

鈍器は光り輝き、全てを呑み込む白い波動をも突き破り、暴走女に迫っていく。

「馬鹿なっ！馬鹿なぁあああああっ！」

自分の魔法が打ち破られたのが衝撃的だったのか暴走女は混乱したかのように喚く。

「ごほぉおおおおっ！」

暴走女の腹に見事鈍器がめり込み、血反吐を吐きながら倒れた。

これで嵐が止んだ…。

さて、逃げよう…。

「ねえ、私に死に場所をくれない？」

ぬおおおおっ！

いつの間にか背後の前髪で目を隠している女性がいた…。

馬鹿な、一切の気配を感じなかったぞ…。

此奴は牢獄で「殺して」とひたすら叫んでいた女だ。

「君なら私を殺してくれると思うの？だから、殺して。お願い…」

何を根拠に私ならば、殺してくれると思っているのだ？

焦げ茶色の髪を靡かせて首を傾げてくるあどけない表情をしてくる女。

こんな状況でなければ胸をときめかせていただろう。

「なぜ、私ならば貴様を殺せると思っている？」

「君があの女に選ばれし者だから…。私は大切な人をあの女から守れなかった。だから、死にたい。お願い、私を殺して…」

女は私の胸に縋って涙を流してくる。

男としては慰めたいところだが、自殺の手伝いなぞしたくはない。

「そんなに死にたいなら私が手伝ってやるよっ！」

「その野郎諸共殺してあげるわ！あはははははっ！」

自殺女に構っていたら狂戦士共が集ってきたか！

私は自殺女を押しのけて剣を構えようとした。

「邪魔よ。貴方達…」

「あぎゃあああああっ！」

「がああああああああっ！」

……。

襲いかかってきた狂戦士二人は瞬く間に上半身と下半身がお別れしていた。

「貴方達如きに殺されたいと思うほど落ちぶれてはいないわ」

自殺女の手には血が滴る大剣があった。

「ねえ、私を殺して？」

……。

私は返事することなく背を向けて走り出す。

休憩は充分に取った。

何としてもこの戦い、生き延びねばならんからな。

「釣れないわね。私を殺してくれないの？」

私は何も聞こえないぞ！

「だったら…」

……。

「貴女を殺してやるわ！」

やはり自殺女も立派な狂戦士だ！

「殺してやる！私を殺してくれるまで殺し尽くしてやる！」

殺すのも殺されるのも謹んで遠慮するぞ！

「獲物！私の獲物だ！」

正面から別の狂戦士が襲いかかってくる。

「殺してよ！お願いだから！」

後からも自殺女がやってくる！

私は咄嗟に頭を屈める。

「ぎゃあああっ！」

正面にいた狂戦士が盛大に血飛沫を上げて崩れていく。

「あら？外してしまったわ。けど…次こそは殺してやる！」

もはや見境無しだ。

自殺女は凄まじい速度で私に向かって大剣の振ってくる。

最強の力を持つ私でなかったらとっくの昔に胴と首が何度も別離している。

なぜ、恐すぎる女ばかりに付きまとわれ無ければならないのだ！

「殺して！殺してやる！殺して！殺してやる！」

……。

いい加減に鬱陶しいぞ！

「何っ！」

……。

私は両掌で挟むようにして自殺女の大剣を受け止めていた。

これぞ古代の東洋に伝わりし秘術、真剣白羽取りだ！

「死にたければ、一人で死ね。私には関わりのないことだ…」

「なぜ殺してくれないの！君だったら私を殺してくれると思ったの

に！」

自殺女は泣き叫び、あらん限りに力を込めて剣を私に振り下ろそうとしてくる。

まずい！

自殺女の剣は血でぬるぬるしていて今にも滑りそうだ！

このままでは私の手から剣がすり抜けてしまう！

そして、私の意識は身体ごと一刀両断にされること間違いなしだ！

「私はもうどうしようもない！守るべき者を守れなかった力無き者！生きる資格なんて無いのよ！」

ふざけたことを抜かしおって！

私は死にたくないというのに…。

「私は貴様とは違って死にたくはない！」

私は掴んだ剣を自殺女ごと投げ飛ばす。

「私は死にたいのよ！」

投げ飛ばされた自殺女は宙返りして地面に着地し、剣を構えてくる。

「私には守るべき家族がいるのだ！」

私の酒池肉林の構成員であるエルとアビス。
彼女達を助けるためにこんな禄でもない遊戯に参加したのだ。
「私には守れなかった！もう手遅れなのよ！」
自殺女は剣を振りかぶって凄まじい速度で迫ってくる。
生憎、私はまだ手遅れではないからな！
故に意地でも死ぬわけにはいかない！
それに…。
「生きている限り、手遅れでは無い！」
「えっ？」
自殺女は一瞬驚いたかのように剣を振るう速さが鈍くなってくる。
これは勝機だ！
私は振り下ろしてくる剣を避け、流れるように自殺女の懐に入って拳を繰り出す。
「がはっ！」
拳が自殺女の胸にめり込み、胃液が私の顔にかかっていく。
「これが生きたいと思う者の力だ…」

これはかなり決まった台詞だと我ながら思ってしまったぞ！

「生きたいと…思う…ち…か…ら…」

自殺女は私に寄りかかるように気を失っていく。

恐ろしい女だったな…。

私は自殺女を静かに横たわらせ、再び走り出す。

荒野は新鮮な屍に散々と埋め尽くされている。

時々屍に足を取られそうで冷や冷やしてしまう。

早くこんな馬鹿げた遊戯を終わらせて欲しい。

「元気なお母さんをもう一度見るために負けられない！」

今度は死んだ母親を生きていると思い込んで泣いていた女を見かける。

群がる狂戦士を者ともせずに次々と葬っていく姿はまさに鬼気迫っていた。

……。

無視して通り過ごすべきだろう。

私は奮戦している女の横を通り過ぎようとした。

「待って…」

……。

「ヒュプノス様が言ってたの？この戦場でロストという男を見つけだして見事討ち果たせば、お母さんが元気になるって。だから…」

……。

「死んで貰うわ…」

女が二本の剣を構えてくる。

……。

ヒュプノスめ…。

死んだ者が元気になることなぞ有り得ない。

「貴方が死ねば、お母さんが元気になれる！」

女が二本の剣を閃かせる。

私はただ無言で避けていく。

……。

恐怖を通り越して哀れみさえも感じていく。

死んだ者が笑顔を見せてくれることは絶対に有り得ないのだ。

だが、それに縋り付くしか女には残されていないのだろう。

『エイラよ、その男を殺せば、貴様の母親は元気になるのだ…』

ヒュプノスの声が再び戦場に響いてくる。

女の名はエイラというのか…。

「はい、ヒュプノス様…」

エイラはどこまでも私を追い詰めて斬撃を繰り出してくる。

死んでいるはずの母親のために死ぬまで私を追い続けてくるのだろう。

こんな物騒な女に何時までも追いかけ続けられるなんて冗談ではない！

遊戯が終わるまで眠って貰うぞ！

私は閃く刃を避け…エイラの鳩尾に拳をめり込ませる。

これで終わりだ！

『甘いな、ロスト…』

ヒュプノスの嘲るような声が響く。

何が甘いというのだ？

「私は…お母さんの笑顔を…見るまでは…決して負けないっ！」

急所を当てたはずなのに落ちていないだと！

私は咄嗟にエイラから離れようとする。

「お母さんのために死んでよ！」

くっ！

微かだが、エイラの剣が私の腕に掠ってしまった。

戦場で初めて敵から手傷を負わされてしまった。

『特に強い狂戦士は薬によって痛覚が麻痺されているのだ。さて、ロスト。地獄はまだまだこれからだよ…』

突如、体が痺れて動き辛くなってくる。

これはいったい…。

『狂戦士が扱う獲物には全て毒を仕込んでいるのさ。如何に最強の力を持つ貴様でも内側から蝕む毒には果たしてどうかな？』

目が霞んでくる…。

意識が富んでいきそうだ…。

「お母さんの笑顔を取り戻すために私は殺し続けていくわ…」

エイラが私の前に立ち、剣を振りかざしてくる。

これが絶体絶命というものなのか…。

体を苛む痺れがますます強くなってきている…。

だが…。

私は…。

死にたくはない…。

「お母さんのために死んで、ロスト」

うおおおおおおっ！

私はあらん限りの力を込めて剣を翳してエイラの死の斬撃を受け止めてみせる。

このような物騒な世界で潰えてしまうほど私は柔では無いわ！

「お母さんの敵！私の敵！」

エイラの剣が私の刃を浸食するかのように食い込んできている。

凄まじい気迫だ…。

母を思うが故なのだろうか…。

だが…。

「私が守るべき者はまだ生きている…」

こんな過去の妄想に縋った女になぞに負けるわけにはいかない！

私は強引に剣を振るってエイラを弾き飛ばす。

「きゃあっ！」

最強たる私は万能なのだ！

私は魔法で体内を蝕んでいた毒をあっという間にかき消していく。

そして、私は再び背を向けて走り出す。

この遊戯、強いや弱いは関係無い。

生き残った者こそが正しいのだ！

私は私の正しさを証明するためにも生き延びてみせようではないか！

……。

逃げることで己の正しさを証明しようとするのは我ながら滑稽だな…。

だが、正しさの証明と共に命がかかっているから致し方ないのだ…。

第２９話：Ｓｔａｂａｔ　Ｍａｔｅｒ

走り続けてどれぐらい時が経ただろうか…。

荒野で暴れ回る狂戦士の数も大分減ってきたような感じがする。

だが…。

「逃がさないわ！貴方を殺せばお母さんは私に…」

エイラは私一人を目標と定め、未だに追いかけてくる。

しかも…。

「貴様等を始末してヒュプノス様に認め…ぎゃあああああっ！」

「邪魔よ！私達に構わないで…」

群がる狂戦士共をエイラは容赦無く斬り捨てているのだ。

……。

これでは追いかけられている私が余計に目立ってしまうではないか！

早くこのおぞましい追跡者を何とかせねば…。

私は走るのを中断し、エイラと向き合う。

「何？やっとお母さんのために私の刃を受けてくれる気になったの

？」

「目を覚ませ。貴様の母親はもう死んでいる…」

些か残酷だが、彼女には真実を知ってもらおう。

いい加減に追いかけっこされるのは勘弁して欲しいからな…。

「お母さんが死んだ？」

「そうだ。だから、私を殺しても無駄だ。ヒュプノスは貴様を利用するために嘘を付いているに過ぎん…」

発狂するか、絶望に苛まれるか？

いずれにしろ無気力になって戦闘不能に陥ることだろう。

私は自分が助かるために彼女に残酷な事実を突きつけている。

非難されようとも私の命がかかっているのだ。

誰にも文句は言わせないぞ！

さて、どう出るか？

……。

「嘘、貴方は嘘を付いている…」

「嘘ではない…」

「私はそんな現実を認めない。だから、貴方は嘘を付いている！」

……。

雲行きが怪しくなってきたぞ…。

「私を嘘で惑わしてお母さんを殺そうとしているのね！許さない！私とお母さんを引き裂こうとしている悪魔め！」

目を覚まさせるどころかますます病的に悪化してきてしまったぞ！

しかも、私は悪魔に認定されてしまっている！

『人とは悲しいものだ。己が願望している現実を真と肯定し、認めたくない現実を嘘と否定する。救いがないものだな…』

くっ、ヒュプノス！

「救いの無い現実に陥れた貴様が言うことか！」

私は虚空に響くヒュプノスに思わず罵倒を浴びせていく。

『誤解しないでもらおうか。私は彼女の母親を救おうと奔走したよ。だが、私の下に来たときにはすでに母親は息絶えていたのだ…』

「何だと？」

『さすがの私も死人をどうこうすることは出来ない。彼女は薬で狂ったのではない。すでに彼女は嘘の世界で生きた狂戦士だったのだ

よ…』

ますます持って救われない話だ！

「私を陥れようとしてくる悪魔め！」

エイラの凶刃を私は剣で何とか受け止める。

力負けをしていないはずなのにやけに重々しく感じる。

『私は彼女を救うために彼女の嘘の世界を肯定した。そして、希望を与えたのだ。貴様を殺せば母親に会えるとな…』

「私を殺してもエイラの母親は戻ってこない！それのどこが希望なのだ！」

私はエイラの剣を捌きながらもヒュプノスに真意を問う。

『いいや、貴様はエイラの希望なのだ…』

「貴様は私とお母さんを絶望に陥れる悪魔だ！」

エイラの世界を呪うかのような言葉と刃が私に容赦無く切り裂かんとしてくる。

『貴様の手で彼女を母親の元に逝かせばいい。それで彼女が救われるのだ…』

……。

ヒュプノスの言いたいことが分かった…。

私を希望と言って彼女をけしかけたのは嘘をついて利用するためではない。

嘘の世界に生きる彼女を私の手で解放させようとしているのだ。

それが彼女の救いであり、私は希望だということか…。

『エイラは母親を失って狂う前は私に尽くしてくれた有能で強靱な戦士だった。これが私に出来る彼女への手向けなのだよ…』

「それは偽善だ！貴様は結局己の目的のために彼女を利用しているに過ぎない！素直に言え！私の力を引き出したいために彼女を生贄にしたのだと！」

『あはははははっ、それは認めよう。だが、それで彼女は救われるのだ。貴様の刃でもってな…』

私はエイラの剣を受け流し、鳩尾、顎と拳を浴びせて気絶させようとする。

だが、それでも彼女は立ち上がり再び刃を向けてくるのだった。

『これは驚いた。薬で痛覚を麻痺しているとは言え、それでも閾値というものがある。それを越えてもなお立ち上がってくるとはな。くっくっくっ、これは貴重な実験結果が得られそうだな…』

「私は…負けない…。お母さん…お母さん…」

エイラの刃に先ほどまでの勢いは無くなりつつあった。
それでも私を葬るには十二分の刃で攻め立ててくる。
……。
私はこれ以上彼女と刃を交えたくない…。
彼女の存在自体が私にとって余りにも痛すぎるのだ…。
いつの間にか荒野には私と彼女だけとなっていた。
いや、狂戦士等は私とエイラが手に負えない獲物だと認知し、他の獲物を貪っているだけだろう。
まだ周囲には阿鼻叫喚の如くの悲鳴や怒声が響き渡っている。
「お母さん、私に力を！」
周囲に散らばっている血肉から光のようなもの溢れだし、それらがエイラを中心に渦巻いてくる。
『死者の魂を一時的に自分の力へと変換する禁忌術ネクロバース。代償は術者の魂だ…』
ヒュプノスはやや痛ましげに解説してくる。
代償が自分の魂だと？
では、彼女は！？

『これほどの規模の死者の魂を取り込んだのだ。このままだと彼女は永遠に死者共の慰み者となって生き続けることになるだろうな…』

「あぐぅ…あああああああっ…ぐげえええ…」

エイラは人間を止めようとしているのだ…。

そして、死者共の永遠の贄になろうとしている。

しかも、それが死んでいる母親のためだから救われない。

「オカアサン…オ…カ…ア…サン…」

全身に黒い靄を出しながらも顔を向けてくるエイラ。

その目は血のように紅く、人間の眼では無かった。

「憎イ！私…カラ…オ母サンヲ…奪オウトシル…悪魔メ！」

エイラの姿が消える。

「滅ビロ…」

いつの間にか私の眼前に刃を振り下ろそうとするエイラの姿があった。

馬鹿な、早すぎるぞ！

「死ネ！死ネ！死ネ！死ネェエエエエエエエエッ！」

敵の攻撃が早いと感じるのは初めてだった。
私は必死にエイラの凶刃は弾いていく。
『ははははっ！これがネクロバースの力なのか！あのケールに迫る勢いだな！』
ぐっ！
ケールはこれをさらに凌ぐ強さだというのか！
「滅ビロッ！悪魔メェエエエエッ！」
エイラの刃が私の肩に掠ってしまう。
やばい、身体がまた痺れてくる！
私は地面に膝を付いてしまう。
万事休すか！
「コレデオ母サンハ救ワレルノヨ！アハハハハハハッ！」
最強の力を手に入れても所詮はこの程度なのか…。
格好付けたのが運の尽きだったようだな…。
私は覚悟を決めて、眼を瞑る。

せめて、苦痛のない死に方でありますように…。

……。

『お願い…エイラを…止めて…』

この声は？

『エイラに…私の娘が…これ以上…罪を重ねて…欲しくない…』

私の娘？

この声はエイラの母親？

ひょっとしてエイラのネクロバースに紛れて母親の魂が呼び寄せられたのか？

『ごめんさない…私が…ふがいない…母親だったばかりに…』

エイラの悲しみに満ちた声が私の身体に染み渡っていく。

身体が軽くなるのを感じた。

これはエイラの母親の魂が私の身体を苛む毒を癒したというのか！

『馬鹿な！貴様もネクロバースを使えるというのか！』

ヒュプノスの驚愕に満ちた声がやかましく響く。

「滅ビロォオオオオオオッ！」

振り下ろされるエイラの刃を軽く剣を振るって受け止める。

「…っ！」

どうやら死ねない理由が一つ追加されたようだ…。

私に想いを託して力を与えたからには応えなければならない…。

エイラの母親の魂の助力が無ければ私は死んでいたかもしれないのだからな…。

私は殺すのも殺されるのも勘弁だが、今回は致し方ない…。

エイラ、私の手で貴様に引導を渡してくれる！

私は震える手を押さえつけ、剣の柄を握りしめる。

「ナゼ私ノ邪魔ヲスルノヨ！コノ悪魔！私ハ貴様ガ憎クテタマラナイ！」

だが、これはエイラの母親のためではない。

あくまで私が命惜しさにやることだ！

エイラ、だから遠慮無く貴様の蒙昧を永遠に断ち切ってやる！

「今度コソ死ネェエエエエエッ！」

「母親の元に逝け…」

私の刃が振り下ろしてくるエイラの刃を叩き折り、そのまま薙いでいった。

「グハァアアアアアッ！」

刃がエイラの胸を一閃し、鮮血が私の身体に降り注いでいく。

……。

人の血とはこれほどにも熱かったというのか…。

「アアアアアッ…アア…ア…あ…あぁ…お母さん…」

胸から血を流しながらも私に向かって歩いてくるエイラ。

「お母さん…そこにいたんだね…逢いたかったよぉ…」

エイラは私の胸に縋り付いてくる。

私の中にいる母親の魂を感じ取ったというのか…。

「お母さん…私を…抱き締めて…もう二度と…離さないで…」

私はエイラを抱き締めた。

なぜか、そうしなければならないと思ってしまったからだ…。

「これは…お母さんの…温もりじゃない…。けど…暖かい…」

エイラが私の顔を見上げてくる。

「そうか…お母さんは…もう死んだんだ。けど、貴方から…お母さんの想いが…伝わってくる…」

エイラが私の頬に手を添えてきた。

「ごめんね…辛い役目を…押しつけてしまって…ごほっ…」

私は崩れようとしたエイラを抱き留める。

なぜ、謝る必要がある！

私はただ自分が助かりがために貴様を…。

「優しいのね…。お母さんが想いを託した優しい貴方…もし、違う形で…出会えたら…私は…貴方と…」

「仲むつまじい恋人になれたかもしれないな…」

エイラは眩しすぎるほどに綺麗な笑顔を私に向けてくる。

「ありがとう…ロスト…」

エイラの身体から力が抜けた…。

……。

なぜか私の眼から涙が零れてくる。

私が彼女を死に追いやったというに滑稽なものだ…。

これではヒュプノスと同じく私も偽善者ではないか…。

死んだ母親の愛を求めた哀れなる女、エイラ。

貴様の魂は私の描く酒池肉林の構成員として永遠に抱いておく…。

これが私からのせめてもの手向けだ…。

私はエイラの遺体を静かに横たわらせ、炎の魔法で燃やしていく。

この寂しい荒野でエイラを野放しにはしておきたくなかった。

エイラ、天国で今度こそ母親と共に幸せに暮らすがいい…。

私は貴様と貴様の母親の分までしぶとく生き延びてやる…。

「ひひひひっ、これで後一人、後一人殺せば私は幸せになれる…」

やはり貴様が残ったというのか…。

周囲には悲鳴一つも聞こえなかった。

見渡す限りに屍の山が築かれている。

生々しいほどに新鮮な血の香りが充満している。

私は燃え尽きていくエイラに背を向け、耳障りな声がしてきた方向に身体を向ける。

「貴様を殺すことで私はヒュプノス様の配下になれるのだ！ひゃはははははっ！」

ヒュプノスの愛を求める狂戦士アンナ。

心配してくる親友を躊躇うことなく殺し、薬に狂った哀れなる女。

私は貴様に同情するが、助けたいとは微塵に思わない。

なぜならば、私も命が惜しいからだ。

そして、助けたいと思うぐらいだったらエイラも救っていた！

もはや、殺したしまったエイラのためにも私は死ぬわけにはいかないのだ！

ここで死んでしまえば、全てが無駄になってしまう！

「遊戯はもう終わりだ…」

私は剣を強く握りしめ、アンナに向き合う。

「ひゃはぁあああっ！最後の獲物だ！念入りに丁寧に殺してあげるわ！」

アンナは一足で瞬く間に私の間合いに入ってくる。

エイラ以上に早いぞ！

私は何とかアンナの刃を捌いていく。

『アンナの持つ剣は血肉を吸う度に力を所有者に与える魔剣フェンリルを手にしている』

何だと？

アンナが振るう黒光りする剣が私の眼に留まっていく。

何という禍々しい気配を出す剣なのだ…。

『アンナはすでにケールに次ぐ強さを秘めているぞ。ふっふっふっ、果たして貴様はアンナに打ち勝つことは出来るかな？』

後にケールが控えているのだ！

この程度の奴には負けてられるか！

私はアンナを押すようにして斬撃を繰り出す。

「ぐっ！」

アンナは顔をしかめて私の斬撃を捌いていく。

……。

もし、私が本当にその気になって刃を振るえば、とっくにアンナは切り刻まれていただろう。

それが出来ないのはまだ私が甘いということなのか…。

……。

これではケールどころかアンナにすらも勝てないぞ！

私はエイラに誓ったはずだ！

どんなことをしても生き延びてみせる！

そして、生きて帰ってエルとアビスと存分に床で楽しむのだと…。

「私はお前を殺して、ヒュプノス様の愛を！」

アンナが巻き返すように剣を打ち返してくる。

迷っている私に対して、アンナは迷いがない。

その想いの強さが剣筋に現れ始めている。

このままではアンナにやられてしまう。

ふいに目が霞んでくる…。

目の前で剣を振るっているアンナが二人に見えてくる。

「動きが鈍くなってきているようね！これは勝機よ！」

逆にアンナの斬撃が激しく私の剣に打ち込まれていく。

そういえば、私はどれぐらい走っていたのだ？

あれから何日過ぎているのだ?

私の身体はとうに限界を迎えていたのだ…。

最強の力を持っていても所詮は元平民その他…。

……。

私はいつの間にか慢心をしていたのだ…。

その付けが今まさに支払われそうになっている…。

これが平民その他如きである私が力を得たために迎える結末なのか…。

愉悦な笑みを浮かべて近づいてくるアンナを目の前にして私は力が抜けたかのように動けなかった…。

……。

……。

…。

諦めてたまるものか!

動け、私の身体よ!

今こそ根性を見せるときだ!

私には酒池肉林という大望があるのだ！

欲望深い者のしぶとさを教えてやるぞ！

第30話：Dies irae

私は何とか立ち上がり、アンナに剣を向ける。

とりあえずは体力回復が先決だ。

「まだ頑張るというのかい？」

アンナは追い詰めた獲物に対して舌なめずりをしている。

……。

追い詰められた獲物が最後に捕食者に牙を向けることを知らないようだな…。

とりあえずは毎度のことだが…。

「この期に及んで逃げるのか！」

私は清々しいほどに全力でアンナに背を向けて走り去っていく。

これが私の最後の全力疾走だ…。

ある程度アンナを引き離したら体力回復のために隠れる。

幸いなことに隠れる場所はいくらでもある。

……。

……。

…。

本当はこんな形で死者を冒涜するのは不本意だが、致し方ない…。

私は現在、死体の山の中に息を潜めていた。

固くなりかけた肉の感触と血の匂いが呪いのように私の精神を苛んでいく。

気を強く持たねば、自分もこの屍と同じではないかと錯覚してしまうほどだ。

「私の最後の獲物！どこにいる！」

アンナの苛立たしい怒声が戦場に響いてくる。

後一歩というところで獲物を逃してしまったことに頭に来ているのだろう。

だが、私の知ったことではない。

私は目を開けたまま絶命している女の顔が目に留まった。

薬に狂うことがなければ、世の男性が目に向けずにはいられないほどの美女だったに違いない…。

私は死んでいる女の目を閉じさせ、死体の中を這いずり回っていく。

この戦いが終わったら、この残酷な亜空間を焼き払ってやる…。

そのためにはアンナを、そして、ケールを倒さなければならない。

『君がケールを殺してくれることだよ…』

不意に私の夢に中に現れた女、アーテの言葉を思い出す。

彼女は私がケールを殺すことで絶望していくことを期待している。

だが、絶望も何もケールを倒さなければ、私には未来が無いのだ。

ケールを倒したところで私が絶望に苛まれるなんてことはまずありえん。

逆に新たな希望の道を切り開けたと感動にむせび泣くことだろう。

「んっ…むっ…」

誰かの呻き声が聞こえてくる。

どうやら死に損なった輩もいるようだな。

ここは敢えて助ける必要はない。

この戦いが終わるまで、そこで呻いてくれた方が好都合だ。

「死に…たい…死にたいよ…」

……。

この聞き覚えがある声は…。

「誰が…私を殺してよ…」

あの恐怖の自殺女の声だ！

「私は…ケールを…救えなかった…だから、死にたい…」

ケールを救えなかっただと？

この自殺女とケールは何かしらの関係があるというのか？

まあ、今はそのことはどうでもいい！

問題は今ここでこの自殺女が目覚めたらまずいということだ！

自殺女が目覚める前に何とかこの場から離れるのが先決だ！

ここで目覚めて騒がれたらアンナに見つかってしまう…。

そうなれば今度こそ終わりだ…。

ぐっ！

死体が固くなっているのか、なかなか動かせない！

血肉が私の行く手を阻もうとは笑止千万！

私は強引に死体の肉をかき分けて這いずり回ろうとする。

「ぐっ！」

かき分けた死体が自殺女の身体を揺さぶったためか、目を覚まそうとしてくる。

「貴方は…」

……。

私と自殺女と目が合う。

……。

……。

…。

「私は貴方を…」

うおおおおっ！

私は恐怖の余り、死体の山から勢い良く飛び出してしまった。

「ふふっ、やっと出てきてくれたわね…」

眼前には魔剣フェンリルに舌を這わせて笑うアンナがいる。

私は再び逃げようとするが、足が思うように動かすことができなかった。

もう私は満足に走る力も残されていないというのか…。

「これで私はヒュプノス様の愛を得られるわ！」

「彼には手を出させないわ！」

……。

私は目を疑った…。

何とあの恐怖の自殺女が私を庇ってアンナの凶刃を受け止めていたのだ。

「早く逃げて！この女は私が食い止めるから！」

「この死に損ないが、私の大望を阻もうとするのか！」

アンナの怒り狂った声が寒々と響いてくる。

自殺女の真意は掴めないが、ここは有り難く逃げさせてもらうしかない！

私は這いずるようにして死地から離れていった。

……。

……。

…。

もう結構離れたのではないだろうか…。

どうして自殺女は私は助けてくれたのかは分からない。

それにしても女に庇われ、這いずり回る様に逃げていく有様とは、我ながら情けない限りだ…。

……。

それでも私はこうして生きている…。

自分の有様に嘆くのはこの危機を脱した後でいい。

一刻も早く体力を回復させ無ければ…。

私は屍が散らばる大地で一人佇む…。

……。

早く元の世界に帰りたい…。

エリー…。

アイリ…。

タナトス…。

今頃何をしているのだろうか？

エル…。

アビス…。

あの双子は今でも私の帰りを待っているのか？

彼女達に会いたい…。

エイラ…。

今の情けない私を見て、それでも恋人になってくれるというのだろうか？

一人だと否定的な考えが出てきて押しつぶされそうになってしまう…。

……。

もう生きるのが疲れてきた感じだ…。

これ以上の孤独にはもう耐えられない…。

「やっと追いついたわ…」

血に塗れた魔剣フェンリルを担いで笑うアンナがいた。

自殺女はやられてしまったのか…。

望み通りに死ぬことができたのだろうな…。

……。

だが、もうどうでもいい。

もはや戦う力は一片足りとも残っていない。

身体が指一本も動けない状態だ。

これが私の結末なのだろう。

今度生まれ変わったときには平凡だが、平和な日々を謳歌していきたい。

そして、素朴で穏和な女性と寄り添って暖かい家庭を築くのだ…。

「さあ、もう逃げ場はないわよ…」

アンナは動けない私に近づき、剣先を向けてくる。

剣先は私の心臓に向けられていた。

さあ、手っ取り早く私をこの地獄から解放するがいい！

これでもう孤独の苦しみを感じずに済むのだ…。

ふと自殺女のことを思い出す。

彼女はどんな思いで死にたがっていたのだろうか？

今となってはもう分からない。

あの世で会えば、分かるかもしれないな…。

「私の勝利でもって遊戯は終了する！賞品はヒュプノス様の愛だ！ひゃはははははっ！」

アンナは優勝賞品がケールとの決闘であることを知らないのか…。

だとしたら、アンナも救われないな…。

全てはヒュプノスの掌に踊る人形だったということか…。

「これで本当に終わりだぁあああああっ！」

魔剣フェンリルが私の心臓に目掛けて迫ってくる。

これでロストの物語が終わるのか…。

何とも締まらない結末だ…。

……。

不意に私の前に横切る影が見えた。

「貴方はここで死ぬべき人では無いわ！」

……。

血の滴る剣先が私の胸の手前にあった…。

私の心臓は貫かれなかったのだ…。

自殺女が私の前に立ってくれたお陰で…。

「まだ生きていたというのか！貴様！」

アンナの驚愕に満ちた声が響く。

「この男は…私が託す…最後の…希望…だから、貴方如きに殺させはしない！ギガウインドウ！」

「きゃあああああっ！」

自殺女は至近距離でアンナに魔法を喰らわして、遠くへと弾き飛ばしていく。

「ふふっ、これで…やっと…死ぬことが…できる…」

自殺女は胸から血が吹き出し、崩れ落ちようとしていた。

私は疲れていることを忘れたかのように駆けだして自殺女を抱き留める。

彼女は重責から解放されたかのように安らかな微笑みを浮かべていた。

「なぜ、私なんかを助けたのだ！」

私は孤独に絶望して死を選ぼうとした弱い存在だというのに…。

「私は…すでに…諦めた存在…。だけど、貴方には…守るべき人が…いる…」

彼女は私に頬に手を添える。

「私には…そんな力なんか…無い。ただ臆病で…孤独が嫌いな…弱い人間だ…」

「そう…それが人…。それが人の弱さ…。でも、その弱さを強さに変えることが出来るのも人…」

「弱さを強さに変える？」

「だから貴方は強いわ…諦めていた私なんかよりもすっと…だから…託すの…」

何を私に託そうとするのだ、自殺女！

「お願い…ケールを…私の親友を…救って…」

ケールを救えだと？

「誰よりも…優しく…強かった…彼女を…助けて…」

自殺女は泣いていた。

自分が救えなかったケールのために涙を流しているのだ…。

彼女はただの死にたがりでは無かった。

自分の代わりにケールを救ってくれる存在が現れるのを待っていたのだ。

そして、私は自殺女の目に叶った存在ということなのか…。

だが、自分の命を救うのに精一杯だ…。

「私には無理だ…」

「ふふっ、心配しないで…貴方は…今まで通りに…戦えばいいのよ…」

「今まで通りに、だと?」

自殺女は何を言ってるのだ?

「貴方の感じるがままに…思うがままに…生き延びばいいの…それが貴方の戦い…違うかしら?」

……。

感じるがままに…。

思うがままに…。

生き延びる。

……。

それが私の戦い…。

……。

雷に打たれたかのような衝撃だった…。

そうだ。

それが私の戦いだったはず…。

私は欲望のままに生き、しぶとく生き延びていくのが信条だったはずだ！

疲れ果てた身体に精気が漲っていくのを感じる。

「私の名はロストだ。貴様の名は…」

まだ、名前を聞いていなかったな…。

何時までも自殺女だと呼称していくのは失礼だろう。

「私の名はエリス…」

エリス。

不思議な響きがある名前だった。

「貴様の想い、このロストが受け取る…」

私はエリスの想いを受け取る。

これが自分を見失いかけた私を奮い起こしてくれた女性へのせめてもの感謝だ。

「ロスト…貴方みたいな人に…出会えて…良かったわ…」

「それは私の台詞だ。ありがとう、エリス…」

エリスは透き通るような綺麗な微笑みを浮かべ、首飾りを渡してくる。

「これを…ケールに…」

私は首飾りを受け取る。

「ロスト…貴方の…顔を…見せて…」

エリスが言うがままに顔を近づいたときに唇にエリスのそれが重なった。

唇は冷たい死の味がした…。

「エリス…」

「ふふっ…ケールを…宜しく…ね…」

……。

エリスは私に腕の中で眠るように逝った…。

私はエリスから託された首飾りを握りしめる。

血が滾るような熱い思いが全身に駆け巡ってくるのを感じる。
私はエリスをエイラと同様に燃やしていく。
エリスの魂もまた私の酒池肉林の構成員として永遠に想い続けるのだ…。
……。
……。
…。
静寂を破るかのような爆音が突如響いてきた。
「よくも！よくも私の狩りを邪魔してくれたものね！」
エリスの魔法で遠くへ弾き飛ばされたアンナだった。
「今度こそ最後の獲物を仕留めてあげるわ！もう逃がさないわよ！ひひひひっ！」
……。
「覚悟はいいかしら？私の可愛い獲物…」
……。
「このフェンリルの錆びにしてあげるわ…」

……。

「貴様は勘違いしているぞ…」

「何を勘違いしているのかしらね…」

……。

「…っ！何？この威圧感は？」

私の全身の血を滾らせる源は怒りだ。

『何だ！この途轍もない力は！私が作った亜空間に軋みが出ている！』

ヒュプノスの恐怖に駆られた声が聞こえてくる。

私の怒りに応えるかのに大地が揺らいでいく。

この馬鹿げた遊戯を今こそ終わりにしてやるぞ！

「うおおおおおっ！」

私は天に向かって咆吼を上げる。

空間に亀裂が生じていく。

「何なの！貴方はいったい何なのよ！」

アンナは恐怖の余り、後ずさっていく。

逃がしはしない…。

私は腕を振るった。

その瞬間、周囲は灼熱の炎が燃えさかっていく。

散乱した狂戦士共の遺体が炎に包み込まれる。

天に召されていくかのように優しく誘うように…。

薬に狂わされた哀れなる狂戦士共よ…。

貴様等の命を弄んだこの世界を必ず終わらせてやるぞ…。

それが貴様等への私からの供養だ…。

……。

全ての終わりを告げるかのように世界は炎の海に包まれていく…。

「貴様は勘違いしている。私が最後の獲物ではない。貴様が…そう…貴様が…」

「ひいいいいいっ！」

アンナは脱兎に如く私の前から逃げ出していく。

……。

「私の獲物だ…」

私は一瞬で逃げるアンナの手前に回り込んだ。

「獲物になった気分はどうだ？アンナ…」

「お願い！許してっ！助けてよ！死にたくない！死にたくないよ！」

死にたくない、か…。

私はアンナに背を向ける。

「とっとと消えろ…」

……。

「なんて命乞いするとでも思ったの！甘いわよ！」

「思ってないさ…」

私は背後から斬りかかろうとしてくるアンナのフェンリルを素手で鷲づかみして止めてみせる。

「なっ！」

私はそのままフェンリルを取り上げ、アンナに近づいていく。

「命乞いをしたと見せかけて背後から不意打ちか…。感謝するぞ、アンナ。これで貴様を躊躇い無く…」

「嘘よ！今のは冗談！だから…」

……。

「地獄へ送ってやれる…」

私はフェンリルを振るった瞬間、アンナの首が地面に落ちていく。

さすがに貴様は酒池肉林の構成員には迎えれないな…。

「あの世で親友に詫びるといい…」

私はアンナの遺体を燃やしていった。

……。

戦場で生き残っているのは私だけとなった。

私はこの残酷な遊戯の勝者となったのだ。

辛くもあり、悲しい戦いだった…。

『まさかここまでの力とはね…。さすがは私が見込んだだけはある！さあ、勝者は狂女神ケールの生贄に捧げられるのだ…』

燃えさかる炎の中、ヒュプノスの声に応えるように威圧的で巨大な扉が現れる。

私は背筋が震えるのを感じた。

この扉の先には想像を絶する化け物が待ち受けている…。

『扉を開けて入りたまえ。ケールが首を長くして待っているぞ…』

いよいよ最強の狂戦士ケールとのご対面の時が来たというわけか…。

私は崩れゆく世界を背に扉に向かって歩いていく。

その時、扉に寄り添うように立つ女が目に映る。

白い軍服を身に纏い、白髪を靡かせる女。

『ついにこの時が来たんだね…』

……。

『汝が狂う姿を心待ちしていたぞ…』

……。

『楽しみだわ。絶望に打ち拉がれる貴方の姿を見るのは…』

アーテ…。

『ふふっ、覚えてくれてたのか、ロスト。嬉しいね…』

エリスは言っていた。

大切な人をあの女から守れなかったと…。

あの女とはヒュプノスではなく、貴様だったということか…。

そして、貴様はケールを私のために用意した手札だと言っていた…。

いったい何が目的だ、アーテ！

『それはケールとの戦いに生き延びれたら教えてやるさ…』

……。

『だけど、果たして生き延びれるかな？』

……。

『ケールは私の血肉を受けているのだから…』

……。

『貴様やタナトスと同様にな…』

何だと！

『さあ、決戦の時が来たよ、ロスト…』

私とタナトス、それとケールが貴様の血肉を受けているだと？

『君の嘆き狂う姿を見せてくれ…』

どういうことだ、答えろ！

『あはははははっ…』

「アーテぇえええええええっ！」

私の咆吼に応えるかのように扉が重々しく開いていく。

こうなれば、意地でもケールとの戦いに生き延びてアーテに真意を問うしかない！

それに…。

『ふふっ…ケールを…宜しく…ね…』

エリスとの誓いを果たさなければならない…。

アーテの言う通り、ここが決戦の時だ。

開かれた扉から目映い光が放たれていく。

光が私をケールが待ち受ける決戦の場に誘おうとしている。

……。

感じるがままに…。

思うがままに…。

生き延びる。

……。

それが私の信条であり、戦う理由だ！

絶対に生き延びてみせるぞ！

第３１話：Ｋｙｒｉｅ

私は光の中を漂っていた。

ふと私の耳に心地よい音色が響いてくる。

この音色はマンドリン。

遙か昔、芸術が栄えた時代に愛好されていた古楽器だ。

光の中、ある映像が映し出される。

その映像は教会でマンドリンを奏でる少女とそれを静かに聴く少女の姿だった。

……。

……。

……。

……。

……。

……。

…。

「本当にケールが弾くマンドリンの音色は綺麗だわ」

「ありがとう、エリス。君だけだよ。僕の弾く演奏に喜んでくれるのは…」

エリスとケールは本当に姉妹であるかのように仲むつまじく寄り添い逢っていた。

マンドリンを弾いているのは灰色の髪を靡かせ、小麦色の肌をした少女だった。

男のような口調の少女の名はケール。

教会に務める若きマンドリン奏者。

「そんなことは無いわよ。知ってるの？この古びた教会に参拝に来るほとんどの人が神父様の説教でも教徒が歌う聖歌でも無く、貴女の演奏を聴きに来ているのよ」

「そんなことは無いさ。君こそ知っているのかい？誰もが皆、君が歌う聖歌の虜になっているのをね。教会の聖なる歌姫の名声は今や王宮の貴族達にも知れ渡るほどになっているのだよ」

ケールに懐いているのは焦げ茶色の髪を振るわせて気の強そうな青色の瞳を持つ少女だった。

勝ち気な少女の名はエリス。

教会が誇る聖なる歌姫。

「私の歌に惹かれるなんて芸術の感性が知れてる連中ね。ケールの演奏こそが芸術の女神に愛されている至高の芸術なのよ。私には分かるわ」

「それは失礼だよ。美しいものを美しいと褒め称えることに罪は無いのだから。僕は君の歌声が好きだよ。だったら、僕の感性も知れたものになるということなのかな?」

ケールは大人びた口調でエリスを優しく諫める。

「そんなことは無いわ!そうね、確かに失礼だったわ…。だから、ケールの感性は知れたものではないわよ」

諫められたエリスは憮然と、けれど反省した様子で項垂れる。

「分かればいいよ。今度、孤児院で演奏会がある。君の歌声と僕の音色で戦争で苦しんでいる人達に少しでも笑顔を取り戻せたらいいね…」

「そうね。私達のように戦争で親を亡くした子供が出てくる時代が一刻も早く終わりになればいいのにね…」

ケールは残酷な時代を憂うエリスを優しく抱き寄せた。

「その日が来るまで、僕はマンドリンを奏で続けるよ。少しでも早く平和な時代が来るようにと、祈りを込めてね…」

「だったら私も歌い続けるわ。貴女が奏でる調べに乗せていけば、

世界の果てまで響き渡らせることも出来るわよ…」

エリスもまたケールの胸に顔を寄せていく。

「ははっ、エリスとなら本当に出来そうに思えてくるから不思議だね」

「私は何時だって本気よ、ケール。私と貴女がいれば、世界制覇だって夢じゃないわ」

「世界制覇はさすがに物騒だよ」

「ふふっ、それもそうね」

二人は平和な時代が来ることを信じ、音楽を奏で続けた。

……。

……。

……。

…。

『君達二人には大いなる力が眠っているのだよ…』

ケールとエリスの前に立っているのは白い軍服を身に纏った女性だった。

『音楽を奏でるよりも早く平和な時代を作る術を教えてあげよう…』

白髪を靡かせて微笑む女性の名は…。

……。

……。

……。

…。

『貴様等は今日から生まれ変わるのだ。ははっ、ヴァルキリアのためにその身を粉にして尽くすがいい』

二人の少女を傲然と見下ろす女性の名はヒュプノス・ヴァリキリア。

ヴァルキリア帝国の恐怖の象徴。

戦乱を巻き起こしている元凶だった。

……。

……。

……。

…。

「嫌よ…ぐすっ…もう誰も傷つけたくない…。古びた教会で過ごしたあの頃に戻りたいよぉ…」

傷つき絶望するエリスをケールは力強く抱き締めていく。

「大丈夫、生きていればいつか必ず…いつか必ず、その時がくるはずさ…」

「ケール、私の希望はもう貴女だけ。例え、歌うことが出来なくなっても貴女さえいれば…」

二人は暗闇の中、必死に寄り添うのだった。

……。

……。

……。

…。

エリスとケールは荒野の大地に背を寄り合わせていた。

周囲には薬により強化された狂戦士達がいる。

「ケール、今日も何としても生き残るのよ！」

「エリスといれば、何時までも生き残れるさ！」

二人は長年寄り添った夫婦の様に息を合わせ、流れるような連携で群がってくる狂戦士達を次々と葬っていく。

荒野の大地は何時しか二人だけの世界となっていた。

なぜならば、二人以外に生き残る者が存在しえなかったから…。

そんな二人にヒュプノスは言葉を掛けてくる。

『見事な連携だ。特にエリス、貴様の能力には目を見張るものがある。このまま精進をするがいい。それとケール、貴様はもう少し自分を出すことだな…』

エリスには褒めの言葉を掛け、ケールには苦言を呈してくるヒュプノス。

「殿下は見る目が無いわね。ケールの方がずっと凄いのに…」

荒野の世界を後にして、真っ先にエリスは不満を言い募っていた。

「凄くなくても良いのだよ。人を殺す力で凄いと言われても全然嬉しくはないからね…」

ケールの言葉にエリスは何かに打たれたかのように沈み込んでいく。

「ご免なさい、こんな力を身につけても人を不幸にするだけなのに…。何を考えているの私ったら！」

自分の言葉に恥じているエリスをケールを抱き寄せていく。

「こんな残酷な世界にいるんだ。誰だっておかしくなるものさ。僕は君が側に居てくれるからこそ自分を保てるんだ。だから、エリス。君はいつまでも君のままで居て欲しい。例え、僕が僕でなくなった

としても…」

「何よ！まるで別れの言葉みたいじゃない！私は嫌よ！ケールが居ない世界なんて！私は変わらないわ！だから、ケール。貴女も変わらず私の側にいてよ…」

エリスはケールの腕の中で肩を震わせていた。

「すまない、エリス…」

「謝らないでよ、ケール…」

……。

……。

……。

…。

「エリス、貴様は実に優秀だ。私が開発した新しい薬の実験体になる名誉を与えてやる。光栄に思うがいい…」

ヒュプノスの宣告にエリスは震えていた。

彼女が開発する薬は人間に絶大なる力を及ぼす引き替えに精神崩壊を起こす恐ろしい代物だった。

もし、その薬を打ち込まれれば、自分が自分では無くなる。

何よりもケールと過ごした掛け替えのない日々を忘れてしまう。

それはエリスにとって死よりも残酷なことだった。

エリスはヒュプノスから後ずさっていく。

「どうした？私の栄誉ある実験を拒むというのか。ならば、貴様には用はない。役立たずは処分するのみだ」

ヒュプノスは震えるエリスに刃を振り下ろそうとしたときだった。

「お待ち下さい！殿下！」

刃がエリスの頭に振り下ろされる寸前だった。

「ケールか。貴様もまたエリスに劣らず優秀だったな。そうか、貴様が実験体になってくれるのか」

ヒュプノスに申し出た者の名はケール。

暗闇の中、エリスに希望の光をもたらしてくれた存在だった。

エリスは庇い立てたケールの存在にヒュプノスに対する恐怖を掻き消す。

「先ほどは申し訳ありません！私は喜んで殿下の栄誉ある実験にこの身を捧げとう御座います！ですから…」

「ケールを実験体にするのは止めて欲しい。そういうことか、エリス。ふふっ…」

ヒュプノスは庇い合う二人を嬲るような目つきで見る。

「良いことを思いついたぞ。貴様等、これから二人で殺し合うのだ。生き残った者を私の実験体に仕立ててやろう…」

更なる残酷な命令が二人の少女に突きつけられる。

「そんな！それではどちらにしても…」

ケールは絶望的な提案に異議を申し立てようとしたが、ヒュプノスの側に控えていた兵士に取り押さえてしまう。

「ケール！」

エリスもまた兵士に捉えられて身動きが取れなかった。

「エリス…」

二人は互いに手を伸ばそうとする。

「ならば、二人とも実験体にしてもいいのだぞ。さあ、どうする？」

手を伸ばそうとしている二人は兵士によってさらに引き離されていく。

どちらにしろ、二人に待ち受けているのは苦痛の生か、安息の死のみだった。

だが、どちらかを選ぶとしたら間違えなく安息の死だった。

自分を見失ってまで生き延びたくはなかった。

そして、自分が大切に思っている者にそんな地獄を味わって欲しくない。

二人は同じ思いを抱いた。

だから…。

「やります…」

「やらせてください…」

二人は同時にヒュプノスの残酷なる提案を受け入れるのだった。

……。

……。

……。

…。

『今宵は面白い催し物が見れそうだな…』

エリスとケール。

互いに背中を預けていた二人が敵対するかのように互いを見据えている…。

二人が立つ場所はいつもの屍が散乱する残骸の世界。

エリスは剣を携え、ケールは鉤爪を構える。

「この戦い、僕が勝たせてもらう…」

「いいえ、勝つのはいつも通り私よ…」

エリスとケールは訓練で何度も模擬戦をやり合っていた。

そして、最後に勝つのはいつもエリスだった。

「今度も勝たせてもらうわよ！ケール！」

「今度は負けはしない！エリス！」

……。

……。

……。

…。

残骸の世界では延々と金属が激突する音が鳴り響いていた…。

「はぁ…はぁ…どうしてなの？」

エリスの身体からは無数の裂傷が刻まれていた。

いつもならエリスが勝つはずだった。

だが、追い詰められているのはエリスの方だった。

「私は負けるわけにはいかないのよ…」

エリスが負ければ、ケールがあの恐ろしい薬の実験台にされてしまう。

ケールが苦しむことになるのはエリスにとって死よりも辛いことだ。

虚空に飛ぶケールが巨大な魔法陣を生み出していく。

「エリス！君には絶対に負けない！ミッシング・レイ！」

魔法陣から大地を覆い尽くすかのような白い波動が放出され、エリスに目掛けて押し寄せてくる。

「嘗めないで欲しいわ！ケール！ギガウインドウ！」

エリスもまた巨大魔法陣を生み出し、全てを薙ぎ払う強風が白い波動を押し返そうとしていく。

二人の魔法がぶつかり合う余波で大地に亀裂が生じ、空間が軋んでいく。

「地獄を味わうのは私だけで充分よ！」

「地獄を負うのは僕の役目だ！」

二人のぶつかり合う魔法は渦を巻いて戦場に嵐を呼び起こす。

「ケェェエエエエエエルッ！」

「エリィイイイイイイスッ！」

嵐の中、二人の刃が何度もぶつかり合っていく。

……。

……。

……。

…。

「これで終わりよ！ケール！」

うずくまるケールにエリスの剣が振る下ろされようとする。

「まだまだだぁ！」

ケールは鉤爪を振るってエリスの剣を何とか受け止める。

二人の戦いは三日三晩続いていた。

「お願い…もう抵抗しないでよぉ…ケール…」

「ごめんね…こればかりはエリスの願いでも…聞けない…」

二人は互いに一定の距離に離れていく。

「相変わらず頑固なんだから…ケール…」

「それはこっちの台詞だよ…エリス…」

エリスとケールは互いに笑う。

「エリス、もう終わりにしよう…」

「ええ、私の勝利でもって終わらせてあげるわ…」

互いに最後の力を振り絞ろうとしていた。

「はあああああっ！」

「うおおおおおっ！」

二人の影が交差していく。

……。

……。

…。

「僕の勝ちだ…」

悠然と立つケールとその足下に倒れ伏すエリス。

「ケール…」

血だまりに横たわったエリスは必死にケールに向かって手を伸ばそうとする。

「ははははっ！やっと自分を出したようだな、ケール」

ヒュプノスが拍手の音と共に姿を現していく。

「自分を…出す…」

エリスは力無くケールを見上げる。

『ケール、貴様はもう少し自分を出すことだな…』

ヒュプノスは確かにケールにそう言っていた。

「ふふっ、まだ気づかないのか、エリス…」

横たわるエリスをヒュプノスは嘲るかのように見下していた。

「ケールは貴様よりも遙かに優秀だったということだ」

ケールは悲しげにエリスを見下ろしている。

「ケール…」

「エリス、ごめん…」

エリスはもう一度ケールに向かって手を伸ばそうとしたところをヒュプノスに踏みつけられる。

「あぐっ！」

「汚らわしい手で私の愛しい実験体に触れるな！」

ケールは踏み付けられているエリスを助けようとはしなかった。

「貴様はケールの力を引き出すための当て馬にしか過ぎなかったのだ！身の程を弁えよ！」

「もうお止めください！殿下！」

エリスをさらに踏みつけようとしたヒュプノスにケールが止めにかかった。

「殿下とは他人行儀だな。ケール。貴様には名で呼ぶこと許してやろう。私をヒュプノスと呼ぶが良い…」

ヒュプノスはエリスへの冷たい対応とは打って変わり、恋人に向ける様な微笑をケールに向けてくる。

「お願いです、ヒュプノス。エリスをこれ以上傷つけないでください…」

「ふふっ、愛しいケールの願いならば、仕方ないな。さあ、私の祝福を受けるのだ…」

ヒュプノスはエリスに見せつけるようにケールに口づけていった。

「ちゅば…ふぅ…もうケールは私の者だ。エリス、貴様はお払い箱なのだ、あははははははっ…」

「いやぁあああああああっ」

ヒュプノスの嘲笑とエリスの絶叫が虚空に響き渡っていった。

……。

……。

……。

…。

「ケール…」

エリスは虚ろなまま残骸の世界に佇む。

もう自分の背中を預ける相手は居ない。

「その首もらったっ！」

エリスの背後から狂戦士が襲いかかってくる。

「貴女如きに私の命はあげないわ…」

「ぐぇえっ！」

エリスは後ろを振り向かず剣先を後ろに振るっていた。

「つまらない…」

『ならば、とっておきに相手を紹介してやろう…』

残骸の世界にエリスにとって憎き女の声が響く。

「今度はどんな相手ですか？殿下…」

エリスは慇懃無礼に聞いてくる。

だが、ヒュプノスはそんなエリスを歯牙にも掛けないかのようにあざ笑う。

『貴様にとって懐かしくも愛しい相手だ。私に泣いて感謝するといい…』

突如、残骸の世界が震えてくるのをエリスは感じる。

『グオオオオオオオオオッ！』

エリスは震えていた。

かつて無いほどの暴悪な殺気が世界全体を覆い尽くしている。

だが…。

「なぜなの？これほどまでに恐ろしい威圧感を感じるのに…」

エリスの目から涙が零れていた。

恐ろしくも懐かしい気配。

目の前の空間が歪み、姿を現したのは全身を銀色の鎧に身を固めた者。

「ケール…」

銀色の鎧に対してエリスは愛しい人の名を呟く。

間違えるはずもない。

鎧に包まれている者はケール。

「ケール！ねえ、ケールなんでしょう？」

「グルルルルルッ…」

鎧を纏う者はエリスの呼び声に応えなかった。

「忘れたの！あの古びた教会で私の歌声と貴女のマンドリンで…」

「グガァアアアアアッ！」

咆吼と共に空が裂け、大地が崩れていく。

「もう私の声も届かないの！」

「ゲェアハァアアアア！」

ケールは一瞬にしてエリスの眼前に立ってくる。

エリスは微塵もケールの速さに対応ができなかった。

「グオアアアアアアアッ！」

「ケー…ル…」

血を咲かせ、虚空に舞うエリス。

「私では…もう…貴女を…救えないの…」

そして、絶望の大地に叩きつけられる。

「グアハアアアアアッ！」

エリスの問いに応えるのは人の心を失ったケールの咆吼だった。

……。

……。

……。

…。

「もう死にたい…」

牢獄の中、エリスは無力な自分に絶望する。

もう自分ではケールを救えない。

誰もケールを止めることは出来ない。

だったら、もう自分に生きる意味は無い。

誰か自分を殺して欲しい。

「誰か…私を…殺して…」

絶望に打ち拉がれるエリスはふと首に掛かっている物に気づく。

「これは…」

それはケールから貰った誕生日の贈り物。

古びた安物の首飾り。

「ケール！」

エリスは首飾りを握りしめる。

「逢いたいよぉ…」

暗闇の中でエリスは涙を流し続けるのだった。

『人の絶望を眺めるのは楽しいわね…』

暗闇の中、透き通るような美声。

「誰？」

白髪を靡かせ微笑する女。

『ふふっ、君を絶望に導いた者さ…』

エリスは何も応えない。

『ならば、言い換えてやる…』

女はエリスに嗜虐的な笑みを見せてくる。

『貴様からケールを奪った者だ…』

「…っ！」

エリスは憎悪に満ちた目で女を睨み付ける。

『暗い炎を宿した瞳…。私はそんな瞳を見るのが大好きなのさ…』

「何が目的なのっ！」

女はただ笑っている。

「答えなさいよっ！」

『いずれ汝の絶望を肩代わりする者が現れよう。即ち汝の命を絶つ

者なり…』

女は唄うようにエリスに語りかけていく。

「どういうこと？」

『つまり予言よ…』

女は肩にかかる白髪を払い、笑みを消す。

『お前が殺されたいと心の底から願った相手こそがケールを救う者となるのだ…』

「私が心の底から殺されたい相手…」

エリスは握りしめた首飾りを見る。

自分が殺されてもいい相手。

即ち、自分の想いを託せる相手。

自分が出来なかったことが叶えられる相手。

エリスの瞳に暗い炎が消え、力強い紅き炎が宿っていく。

いつの間にか女は消えていた。

「私はこの絶望の世界で何時までも待ち続ける。いつかきっと私の想いを託せる相手が来ることを夢見て…」

エリスは暗闇の中で聖歌を歌い出す。

いつかこの絶望の世界に希望の光を照らされることを祈って…。

……。

……。

……。

……。

……。

……。

……。

…。

これはエリスとケールの過去の幻影なのか？

『そう、これが私が貴方に託す想い…』

「エリス…」

光の中、エリスは悲しげな笑みを私に向けている。

『ご免なさい。本来なら貴方には関わりのないこと。でも、もう貴方にしか…』

私はエリスの言葉を遮るように抱き締めていく。

「私は馬鹿で臆病だ…」

『ロスト…』

エリスは縋るように私を見つめてくる。

「だが、こんな弱い私でも頼ってくる女を無下に出来るほど度胸は無い…」

『優しいのね。こんなにも震えているのにそれを受け入れようとしている…』

エリスは震える私を癒すかのように抱き締め返してくる。

『例え、貴方が逃げても私は責めない。だから、気負わないで。あるがままに感じて生きて…』

「私が逃げるのは高度な戦略に基づくものだ。最終的には勝って、いや、生き延びてみせるさ…」

私のなけなしの決意にエリスは微笑んでくる。

『それでいいのよ。もうすぐケールの世界に辿り着く…』

エリスの身体が薄くなってくる。

「エリス…」

『貴方の持つ希望の光でケールを照らしてあげて…』

私は消えていくエリスに手を伸ばす。

「エリスっ！」

『私は貴方のために歌い続けるわ…』

伸ばした手は空しく虚空を掴む。

『さようなら、ロスト。貴方に出会えて良かった…』

エリスは光となって私を包み込んでいく。

……。

私の耳に歌が聞こえてくる。

これはエリスの聖歌。

悲しみの中に力強さを秘めた気高い歌声。

歌は私をケールが待ち受ける戦場に誘っていく。

……。

……。

……。

…。

私は古びた教会の祭壇の前に立っていた。

マンドリンの音色が聞こえてくる。

「ケール…」

銀色の鎧に身を包んだ狂戦士の王が祭壇に佇んでいた。

途方もないほどの威圧感に私の思わず後ずさってしまう。

エリスはとんでも無いことを私に託してきたものだ…。

「グオオオオオオオオオッ！」

ケールの咆吼で空間が歪み、教会の硝子が砕け散っていく。

……。

ケールを救うどころではない！

私の方が逆に救われたいぞ！

エリスに誓ったなけなしの決意が霧散してくる勢いだ！

「グルルルルルッ…」

ケールが祭壇からゆっくりと降りて、私に近づいてくる。

身長は私の頭二つ分以上もある。
腕には身長以上に巨大な鉤爪が威圧的に光っていた。
威圧感だけで私は悟った…。
ケールはタナトス以上の力を秘めている…。
つまり最強の敵だということだ…。
余りの威圧感に私は膝を折ってしまう…。
……。
ケールの恐怖に私の心が折れそうになったときだった。
荘厳な教会を彩るかのような壮麗な歌声が私の耳に心地よく響いてきた。
恐怖に震えていた私に勇気を与えてくれるかのような力強い歌声。
この歌声はまさか…。
『私は貴方のために歌い続けるわ…』
私は思わず涙ぐみそうになってきた。
これは私の幻聴なのかもしれない…。

だが、それでも…。

……。

エリス…。

貴様の言うとおり、私は私のままに生き続けてやる…。

だから、私のために歌い続けてくれ…。

でなければ、恐くて挫けてしまいそうだ！

勇気を振り絞って何とか立ち上がり、近づいてくるケールを私は見据える…。

私が今まで歩んできた人生の中で最大級の生き残り合戦だ！

ここが踏ん張り所だぞ、ロスト！

第３２話：Ｒｅｃｏｒｄａｒｅ（前書き）

毎週土曜深夜か日曜日に更新と宣言しましたが、ゴールデンウィークということで更新します。少々長文でかなり読みづらいかと思いますが、どうか大目に見てください。では、どうぞ。

第32話：Recordare

古びた教会の祭壇で私とケールは対峙していた。

私の史上最大の戦いが今まさに始まろうとしている！

「ガァアアアッ！」

ケールは巨大鉤爪をその場で無造作に振るう。

私は生存本能に従って床に倒れ込む。

凄まじい風圧が私の背中を横切っていき、爆音が響いてくる。

私は立ち上がり、後ろを振り向く。

……。

巨人の鉤爪で抉られたかのような壁を見て私は背筋が震える。

もし、身体を倒していなければ今頃は…。

私は抉られた壁の向こうへと飛ぶ込む。

訂正しよう！

これは史上最大の戦いではない！

史上最大の逃亡劇だ！

当てが外れたな、アーテ…。

貴様は私がケールを殺して絶望すると言っていたが、現実は違う…。

私の方がケールに殺される勢いだ！

これでは絶望も何も関係無いぞ！

飛び込んだ先は奈落の底だった。

うおおおおおおっ！

いきなり投身自殺となって終わってしまうのか！

虚空の中で浮遊している岩に目が留まる。

私は空を泳ぐように軌道修正して岩に飛び移る。

そう言えば、この場所は人為的に作られた疑似世界だ。

元の世界の物理法則を無視するように考えた方がいい。

「グガァアアッ！」

ケールの咆吼と共に嵐のような閃光が私に目掛けて飛来してくる。

私は別の岩へと飛び移りながら飛来してくる閃光を回避する。

浮遊している岩は次々と閃光に呑み込まれて消滅していく。

……。

消滅させられてたまるか！

ケールは岩に飛び移り、鉤爪を掲げてくる。

鉤爪が血のように紅く染まり、禍々しい光を灯している。

いったい何をするつもりだ？

「ガッ…グッグッ…デッド…ムーン…」

ケールは鉤爪を振り下ろた瞬間、紅く染まった三日月のような凝縮体が生み出され、私に向かって放たれていく。

眼前に迫るは空に浮かぶ三日月の如くの凝縮体。

避ける暇が無い！

「防御結界最大級展開！」

私が展開した結界に三日月が激しく打ち付けてくる。

結界に亀裂が生じてくる。

何という力だ…。

これが私と同じ神の血肉を受けた者だというのか…。

これ以上は結界が持たない！

結界が崩壊する前に私はその場から離れる。

結界を打ち砕いた三日月は空間を軋ませるほどの爆風を巻き上げてくる。

ぐおっ！

凄まじい爆風に私の身体が弾き飛ばされていく。

滅茶苦茶で出鱈目な威力だ！

元の世界だったら国一つが消し飛んでいるぞ！

吹き飛ばされている私に向かってケールが猛然と迫ってきている。

猛獣に懐かれる趣味は無いわ！

私を切り裂かんと巨大鉤爪が振り下ろされてくる。

あの巨大鉤爪は非常にまずい！

あれだけ巨大だと私の蛸の如き体術を持ってしても避けられない！

私はアンナからくすねてきた魔剣フェンリルで迎え討つ。

甲高い金属音が空間に高々と鳴り響く。

……。

腕が痺れるぞ…。

「グガァアアアアッ！」

ケールは再度打ち付けようと鉤爪を振るってくる。

連続で受けたら私の腕が持たない！

ケールの間合いから何としても離れなければ！

だが、ケールの鉤爪を振るう速度は尋常では無かった。

私は再度フェンリルで受け止めるしか無かった。

うぐっ！

「グルルルルルッ！」

手が砕けそうだ…。

ケールの勢いに押されたまま、私の背中が浮遊している岩に叩きつけられる。

「がはっ！」

口から熱い物が溢れてくる。

ケールの鉤爪が私の顔に迫ってきている。

……。

おのれ、何だか頭に来たぞ…。

私とて最強の力を持っているのだ…。

相手がヴァルキリアが誇る生きた最終兵器であろうとも知るものか！

ここは作られし世界だ…。

しかも周囲には巻き込まれるような者共もいない…。

ならば、私も遠慮無く弾けさせてもらうぞ！

私は迫り来る鉤爪を押し返していく。

「グガッ…」

私の変化に野獣と成り果てたケールが戸惑いを見せてくる。

誇るが良い、ケール…。

まだ一度も振るったことのない私の本気を…。

「うおおおおっ！」

「ガッ！」

見せてやるぞ！

強引にフェンリルを振るい、鉤爪ごとケールを弾き飛ばす。

弾き飛ばされたケールは即座に体勢を直し、鉤爪を掲げてくる。

鉤爪が血のように紅く染まり、禍々しく輝いてくる。

馬鹿め、その技は一度見せてもらったわ！

私もまたフェンリルを掲げ、禍々しい光を灯していく。

「グガッ？」

ケールは私が同じ技を繰る出そうとしているの見て、驚いてるようだな…。

覚えとくがいい、ケール…。

貴様に出来て、最強たる私に出来ないことは無い！

「デッド…ムーン…」

先ほどよりもさらに巨大な紅い三日月が私を呑み込もうとしてくる。

貴様が三日月ならば…。

「デッドフルムーン！」

私は満月で迎え討ってやろう！

頭上に紅い満月が生み出されていく。

作られし世界だったら器物破損も環境破壊も関係無い！

破壊衝動の従うままに暴れ倒してやる！

私の放った満月は三日月を呑み込んでさらに巨大化し、ケールを呑み込もうとしていく。

すまない、エリス…。

私はどうやらケールを助けれなかったようだ…。

エリスとの誓いよりも何も私は命が惜しいのだからな…。

だが、これが私の生き様なのだ…。

「グゲァアアアアアッ！」

ケールは鉤爪を振るい、迫り来る満月を半月にして切り裂いていた…。

「グフフフッ…」

猛獣が笑っている…。

「グフフッ…君ハ…強イナ…」

……。

「僕ノ…待チワビタ…敵…」

……。

「君ノ肉ハ…サゾ上手イダロウネ…」

……。

「タップリト味ワッテ…喰ラッテ…アゲルヨ…」

……。

さて、逃亡劇の再開だ…。

やはり弾け過ぎるのは良くないな…。

人間慣れないことはするものでない…。

私はまた一つ教訓を得ることは出来たのだ…。

「僕ノ愛シイ獲物…」

……。

ケール、貴様に見せてやろう…。

……。

私の全身全霊全存在を掛けた逃げ足をな！

「絶対ニ…逃ガサナイ…」

ぬおおおおおっ！

猛獣に好かれても嬉しくも何ともないぞ！

私は必死に岩に飛び移って当てもない空間の彼方まで逃げていく。

「ブラッド…スター…」

背後から強大な魔力を感じる！

私は走りながらも後ろを振り返って見る。

……。

視界を覆い尽くすほどの無数の光球が浮遊している…。

「グフッ…挽肉ニシテ喰ラッテヤル…」

無数の光球は猛吹雪が如く私に目掛けて飛来してくる！

挽肉どころか跡形も残らなくなってしまうわ！

もはや逃げていても仕方がない！

ここは閉ざされた世界なのだ。

あの猛獣を倒さない限り私に未来は無い！

私の華麗なる逃亡劇を披露できないのは遺憾ともし難いがな…。

とりあえずは目障りな球を叩き落とす！

私はフェンリルを振るって飛来してくる光球を次々と弾いていく。

そういえば、いつの間にケールの姿が消えている。

……。

この攻撃は私を挽肉にするためではない！

ケールが姿を消すための隠れ蓑だったということか！

光球を打ち消しながらも周囲を見渡す。

ケールはどこにいる？

「僕ハ君ノ後ロサ…」

……。

振り向きざまに薙ぎ払ってやる！

「無駄ダヨ…」

うぐっ！

私の必殺の一撃が容易くケールの鉤爪に阻まれてしまう…。

「モウ逃ガサナイ…」

がふっ！

ケールは私の首を締め上げて岩に叩きつけていく。

おのれ、タナトスに続き又しても女に押し倒されるとは…。

眼前には無機質な銀色の兜が見えた。

顔が隠れているから押し倒されても楽しみようがないぞ…。

「邪魔ナ服ダナ…」

ケールが私の服を掴み、引き裂こうとしてくる。

女に服を引き裂かれて裸にされるなぞ屈辱の極みだ！

必死に藻掻こうとするがケールの腕力は物ともしなかった。

そのとき、服を引き裂こうとしたケールの手が硬直したかのように止まる。

「ソノ…首飾リハ！」

私を押さえつけているケールの力が僅かだが弱まるのを感じる。

今だ！

「どけっ！」

私は腹筋に力を込めて馬乗りになっているケールを弾き飛ばす。

「グッ…」

弾き飛ばされたケールは宙返りして戸惑った様子を見せてくる。

「ソノ…首飾リ…エリス…ナゼ…グッ…アアア…」

いったい、どうしたというのだ？

ケールが突然頭を抱えて苦しみ始めている。

……。

これはケールを倒す絶好の機会ではないのか…。

なぜ苦しんでいるのか知らんがその隙をつかせてもらうぞ…。

首飾りか何だか言っていた気がするが、この際無視するとしよう。

エリスも思うがままに生きればいいと言っていたことだからな…。

私は蹲っているケールの前に立ち、フェンリルを振り上げる。

いささか外道なやり方のような気がするが、それ以上に私は死にたくない。

ここは戦場なのだ。

敵に隙を見せた者が悪い。

恨み言ならあの世で聞いてやる。

私の安寧のためにここで終わらせてやるぞ！

蹲っていたケールが突然身体を起こしてきた。

……。

ここはやはり正々堂々と勝負すべきだろう…。

だから、お手柔らかにしてくれ！

「僕は…いったい…何を…」

……。

ケールが正気に戻っている…。

これは何かの奇跡なのだろうか…。

とりあえず、私はケールに話しかける。

「貴様はヒュプノスに薬で操られていたのだ…」

もう少し言いようがあったが、今はそんな余裕は無い。

これで戦いが終わるのならば、強引にでも押し進めるべきだろう。

私はこれまでの経緯をケールに告げる。

「そうか、僕はそんなことを…」

ケールが苦しげに俯いていた。

何だか非常に良心が痛むぞ…。

だが、真実を告げねば、何も始まらない。

これが私なりのやり方なのだ…。

「エリスは？」

「……」

私は無言で答える。

「そうか…」

ケールの声が震えている。

「その首飾り…エリスは…君に想いを…託したんだね…」

落ち込むケールに私が出来ることは何もない。

ただ、エリスがどのように死んでいったのかを伝えるだけだ…。

「ありがとう、僕の代わりにエリスを看取ってくれて…」

ケールの泣いている声が私の胸に痛々しく響く。

くっ！

泣いている女を前にして私は何も出来ないのか…。

分かっていたが、改めて自分が情けないと思ってしまう…。

「君の名を教えて欲しい…」

泣く声から毅然とした声となり、私に名を問うケール。

「ロストだ…」

「ロストか…。君に僕の最後の願いを聞いて欲しいんだ…」

ケールの最後の願い…。

最後とはもしかして…。

「君の手で…」

止めろ…。

「僕を…」

それ以上言うな！

「殺してくれないか…」

……。

「このままでは僕は無為に命を貪り続けるだろう…」

……。

「それは耐え難いことだ…」

……。

「だから、僕を終わらせて欲しいんだ…」

……。

「エリスに想いを託された君の手で…」

……。

「僕が僕で無くなってしまう前に…」

……。

私はフェンリルを振り上げる。

振り下ろす先はケールの頭。

ケールは受け入れるように沈黙している。

これで全てが終わる…。

私は危機から脱することができるのだ…。

……。

……。

…。

何故だ？

私の身体が動かない…。

ここでケールを殺せば、私の命が助かるはず…。

それなのに私はケールを殺すことを拒んでいるというのか！

「は…早く…僕を…」

ケールが楽にして欲しいと私に懇願してきている…。

「このままでは…僕は…グッ…あ…ァ…アアア…」

そうだ！

ケールは苦しんでいる！

ここは引導を渡してやるのが情けというものだ！

終わらせてやる！

貴様を殺し、私は生き延びる！

ただそれだけだ！

「うおおおおっ！」

私は雄叫びを上げて、剣を振り下ろそうとした。

『貴方の持つ希望の光でケールを照らしてあげて…』

私は不意にエリスの言葉を思い出してしまう。

剣先がケールの頭上に触れる寸前に止まってしまった。

「グガァアアアアアッ！」

呆然とした私に再び正気を失ったケールは鉤爪を振るってくる。

私はすかさずフェンリルを盾にして鉤爪を受け止めるが、身体ごと弾き飛ばされてしまう。

「ぐっ！」

弾き飛ばされながらも体勢を整える私にケールは容赦無く追撃を仕掛けてくる。

ケールは縦横無尽に鉤爪を振るい、私は成す術もなく受け止めるだけ。

立て続けにケールの鉤爪を受けたフェンリルに亀裂が生じていく。

馬鹿な！

私は自分の命が惜しいはずだ！

それなのに相手の命を気遣っているというのか…。

「カタストロフ…サン…」

ケールの頭上に漆黒の太陽が出現してくる。

余りの熱さに意識が朦朧としてくる！

何故、私はケールを殺すことを躊躇った？

私はいったいケールに何をしたいというのだ？

ケールは鉤爪を振り下ろし、漆黒の太陽が私に迫ってくる。

「防御結界！」

ぐっ！

結界が燃えている！

太陽は私の結界ごと焼き尽くそうとしているのか…。

元の世界だったら間違えなく世界を火の海に沈ませるほどの威力だ…。

太陽は結界を焼き尽くし、私を呑み込んでいく。

「ぐあああああああああっ！」

死ぬほど痛い！

なぜこれほどの苦しみを受けねばならない！

嫌だ！

私は死にたくないぞ！

死んでたまるか！

「ぐおおおおおおおっ！弾けろぉおおおおおっ！」

私は魔力を全身から放出し、漆黒の太陽を霧散させた。

……。

身体の至る所が焼けただれている…。

「はぁ…はぁ…はぁ…」

何故、痛い思いをしてまで私は悩んでいるのだ…。

私は自分の思うがままにして戦うと誓ったはず…。

自分が生き延びるためにケールを殺せばいいだけのこと…。

何故、それが出来ない？

教えてくれ、エリス！

視界が歪んでいる中、ケールの鉤爪が迫ってくる。

私は傷つく身体に鞭打ってフェンリルで迎え討とうとする。

「グガァアアアアアアアッ！」

「がはっ！」

ケールの鉤爪は亀裂の走ったフェンリルを打ち砕き、私の胸を切り裂いていく…。

胸から血を吹き出し、私は力尽きるようにして奈落の底へと落ちていく…。

私の物語はここまでなのか…。

これが馬鹿で臆病な私が最強の力を得てしまったがために迎えた結末なのか…。

いや、違うな…。

馬鹿で臆病なのが原因ではない…。

自らの流儀に迷いが生じたがために招いた結果だ…。

だが、もうどうでもいい…。

既に終わってしまったのだからな…。

何とも締まらない最後だった…。

……。

……。

……。

…。

歌が聞こえてくる…。

エリスはまだ私のために歌っているというのか…。

……。

エリス…。

貴様はまだ私に戦えというのか…。

まだ私に…。

……。

生きろというのか…。

……。

走馬燈のように私の脳裏に思いが駆け巡ってくる。

私は平民その他で平凡に過ごすはずだった。

だが、最強の力を覚醒させ、私は無理矢理徴兵されてしまったのだ。

私は英雄となり、エリー、アイリという絶世の美女と出会った。

ヴァルキリアとの戦争の最中でタナトスと壮絶な死闘を演じ、私は勝利を得た。

勝利の立て役者となった私はタナトスを生涯の妻として下賜されたのだったな…。

タナトスが妻となって以来、私の私生活は毎日が命がけとなった。

物騒だが、愉快な毎日となったのだ。

そんな愉快な日々も長くは続かず、再びヴァルキリアとの戦争が始まってしまう。

ブリュンスタッドは滅亡し、私はヴァルキリアの囚人となったのだ。

そのときに出会った美しい双子、エルとアビスがヒュプノスに人質にされ私は…。

……。

私が死ねば、あの双子はどうなる？

そもそもあの双子も私の命を狙った刺客だったはず…。

それでも命を助け、従者にして…。

……。

命を助ける？

自分の命を終わらせようとした相手なのに？

……。

エルとアビスは私の従者。

そして…。

私の…。

家族だ…。

……。

家族であり、私が目指す酒池肉林の構成員だ！

思い出した！

私はその構成員を守るために戦っているのだ！

ケールを殺すのを何故躊躇っていたのか？

そんなことは決まっている！

ケールも私の酒池肉林の構成員に迎えたいがためだ！

決して可哀想だから助けたいわけでは無い！

……。

あくまでも私の夢を実現させたいから助けるだけだ…。

でなければ、痛い思いをしてまで戦おうとは思わない…。

そのはずだ…。

……。

これが私の思うがままに戦えということなのか…。

エリスの言葉が理解できた気がした…。

私の意志に呼応するかのように焼けただれた身体が修復されていく。

自然と笑いが込み上げてきた…。

ここは敢えて慢心してやる…。

最強の私に敗北という文字は存在しないのだ！

待っているがいい！

今まで受けた仕打ちを何億倍にして返してやるぞ！

覚悟しろ、ケール！

私は魔力を放出し、奈落の底から彗星の如く飛び立っていく。

……。

……。

…。

ケールが浮遊する岩の上で佇んでいた。

私の気配に気づき、視線を向けてくる。

「ロ…ス…ト…」

獣になっても私の名を覚えているというのか…。

「ロスト…君ヲ…喰ラウ！」

ケールは常人ではおそらく視認できないほどの速さで私に猛然と襲いかかってくる。

「ならば、喰らってみせろ…」

私は拳を構えて、迎え討つ。

「ガァアアアアアアッ！」

「猛獣を調教してやるのもまた男の甲斐性というものか…」

私は迫り来る鉤爪を受け流し、ケールとの間合いを詰めていく。

「グガッ？」

ケールは私を眼前にして戸惑う。

この間合いでは自慢の鉤爪も届くまい…。

私は拳を握りしめる。

喧嘩番長と呼ばれた私の拳を存分に味あわせてやろう！

だが、その前に…。

「ガハッ！」

私は喚くケールを余所に装着している暑苦しい兜を無理矢理引きはがす。

……。

艶のある肩まで伸びた灰色の髪。

血のように紅い瞳。

草原のような緑色の口紅。

健康的な小麦色の肌。

……。

顔は完璧だ…。

後は…。

私が腕を振るった瞬間にケールの纏っていた鎧が砕け散る。

……。

巨体に相応しく肉感豊かな巨乳だった…。

……。

男の証が覚醒してくる！

俄然やる気が出てきたぞ！

「グガァアアアアアアッ！」

ケールは怒る様にして私に向かって拳を繰る出す。

あれほど速く見えたケールの攻撃が今や遅く見えてくる。

最強たる私が気分が乗ったのだ！

もはや貴様の攻撃なぞ恐れるに足らん！

ケールの腰の入った拳を避け、頭を鷲づかみにしていく。

確か薬漬けになった狂戦士は痛覚が麻痺しているとヒュプノスは言っていたな…。

ならば…。

「痛みを思い出させてやろう…」

私は魔力をケールの脳髄に流し込む。

失った痛覚を呼び戻してやる！

「ギャアアアアアアッ！」

ケールが鼓膜が破れるほどの絶叫を上げていく。

私はケールから手を離し、様子を見る。

「痛イ！痛イ！痛イ！痛イィィィッ！アガァアアアアアッ！」

……。

少しやりすぎただろうか…。

だが…。

「それが生きている証だ…」

私はケールの腕を掴み思いっきり投げ飛ばす。

「ギャハッ！」

投げ飛ばされたケールは浮遊した岩に激突する。

私は岩にめり込んだケールにゆっくりと近づいていく。

なぜ、これほどの力をもっと早く発揮できなかったのか…。

もし、発揮していればエイラやエリスも…。

……。

過ぎ去ったものに仮定を求めるのは止めよう…。

私は神では無い…。

ただの馬鹿で臆病に過ぎない元平民その他だ…。

だが、目の前の脅威を何とかすることは出来る…。

ケールはよろけながらも立ち上がってくる。

エリス、貴様の想いを今こそ背負ってやる…。

私の最強の力を持ってケールの悪夢を打ち砕く！

ケールの右手から炎、左手から氷の剣が生み出される。

魔法剣の二刀流か…。

「上等だ。かかってこい…」

「ガァアアアアアッ！」

ケールは二本の魔法剣のみではなく、蹴りも繰る出してくる。

理性を失った猛獣の癖に的確な攻撃を放つとは生意気な！

私は柔軟な身体を駆使して避け続ける。

「グオオオオオッ！」

攻撃が当たらないことにケールは苛立っているようだ。

猛獣でも頭に来ることはあるのだな…。

私は魔力を込めた手刀でケールの氷の魔法剣を切り落とす。

「ガァ！」

氷の魔法剣が砕かれてケールは一瞬戸惑うが即座に炎の魔法剣を振ってくる。

私は眼前に迫ってくる刃を素手で鷲づかみして止まる。

「グルルルルルルッ！」

ケールが必死に剣を動かそうとするが、私の手を微塵も動かない。

貴様は私が大嫌いな痛みを散々に与えてきたのだ…。

躾の悪い猛獣は徹底的に調教してやるぞ！

私は魔法剣を握りつぶすとケールの身体に打撃を連発していく。

「グハッ！ガハッ！グオッ！」

「もう眠れ…」

私の正拳突きでケールを弾き飛ばされていく。

「グガハァアアアアアッ！」

ケールは再び岩にめり込んでいった。

……。

やはり怒りにまかせて暴力を振るうのは気分的に悪いな…。

だが、何億倍には届かなくても充分に溜飲は下がった…。

後はケールを蝕んでいる物を…。

「ギェアアアアアッ！」

ケールが咆吼を上げながら起き上がってくる。

痛覚は感じているはずなのに何て頑丈な奴だ！

「カタストロフ…サン…」

ケールの頭上に漆黒の太陽が出現し、私に向かって放たれていく。

私を丸焼きにした技か…。

だが、同じ技が通じるほど私の最強の力は浅くはないぞ！

こんな紛い物の太陽なぞ私の黄金の拳で打ち砕いてやるわ！

唸れ、我が拳よ！

「はあああああっ！」

私は裂帛の気合いを上げ、迫り来る太陽に拳をめり込ませる！

太陽は私の拳に弾かれ、ケールの方向へと向かっていく。

まずい！

これではケールが丸焼きになってしまうではないか！

私は即座にケールの前に回り込んで太陽を再び拳で弾いていく。

虚空の果てに太陽が飛んでいき、彼方から爆音が微かに聞こえた。

何とか危機が回避されたな…。

「グガァアアアアッ！」

私の背後からケールの咆吼が聞こえてくる！

振り向いて見えたのは口を開けて噛みつこうとしてくるケールがいた…。

油断してしまったか！

咄嗟に離れるよりも早くケールが私の両腕を締めて、肩に噛みついてくる！

「ぐぁあああああっ！」

「ガゥ！アグッ1グジュ！グチュ！」

私の肩がケールに貪られている！

「があっ！は、離せ！」

ケールは肩から顔を離し、私の顔を見てくる。

緑色だった口紅が紅く染まっていた…。

「美味イ…君ノ…肉…グフフッ…」

血に染まった唇を歪め、ケールは凄絶な笑みを見せてくる。

……。

私は猛獣に自分の血の味を覚えさせてしまったのだ…。

今まで乗っていた気分が一気に冷めてしまう感じがした…。

このままでは私は再びケールの恐怖に押しつぶされてしまう！

「モット…食ワセロ！アグッ！」

「ぎゃあああああっ！」

今度は反対側の肩が噛られていく！

「グヂュ！ハグッ！グチャ！グヂャ！」

しかも血も吸われているぞ…。

……。

急速に意識が薄れていく…。

敢えて慢心したことが仇となってしまったのか…。

貪られている肩から感覚が無くなっていく…。

このまま私はケールの餌に成り果ててしまうのか…。

何とも情けない結末だったな…。

……。

……。

……。

……。

…。

そんな結末は断じて否だ！

私の死に場所はケールの胃袋の中では無い！

美女の腕の中で天国を夢見て死ぬことだ！

火事場の馬鹿力を発揮するのだ！

死ぬ思いでやれば道が開ける！

「うおおおおっ！」

万力のように締め付けていたケールの両腕を私は振りほどいていく。

「いつまでも調子に乗るなっ！」

私はがら空きになっているケールの腹部に何度も拳をめり込ませてやった。

「ガハッ！」

ケールは私の肩から血を吐きながら離れていく。

私は全身に魔力を漲らせていく。

貴様の身体をじっくりと堪能させてもらうぞ！

私はケールの巨乳に顔を埋めるようにして抱きついていく。

この位置ならば噛みつくことも出来まい！

必殺の鯖折りをタナトスに続き、貴様にも喰らわせてやるぞ！

私はケールの意外にも細い背中を締め上げていく。

「グゲェアアアアアアアアッ！ガァァアアアアアアッ！」

そして、貴様を苛む悪夢の全てを消し去ってやろう！

私の全身を通して、ケールの体内に魔力を流し込んでいく。

ケールを蝕む毒を全て除去するために…。

「グガァアアアアアッ！アガガガガッ！アアアアアッ！」

ついでにケールの豊かな胸の感触も存分に楽しませてもらう…。

傷ついた身体が癒されるような柔らかさだ…。

「アアア…ア…ア…ああ…ぼ…く…は…」

猛獣の唸り声から人間の声に戻ってきたな…。

名残惜しいが胸から頭を離し、正面からケールを見据える。

「ロ…ス…ト…」

ケールが掠れた声で私の名を言ってくる。

どうやら調教は完了したようだな…。

「悪夢から覚めた気分はどうだ？」

「えっ？僕は…」

ケールはまだ思考が混乱しているようだ…。

「気分は良いようだな。ならば…」

「ロスト…僕は…がふっ！」

ケールの溝に私の拳がめり込んでいる。

「眠れ…」

ケールの巨体が私を押しつぶすかのようにもたれ掛かってくる。

やっと終わったか…。

私は両肩に出来た噛み傷を癒し、ため息を付いた。

丸焼きになったり嚙られたりと散々な目に合ったものだ…。

『まだ決着は着いてないぞ…』

今まで静観していたヒュプノスの声が響いてくる。

「決着は着いたはずだ…」

『いいや、まだだ。ケールはまだ生きているではないか…』

……。

ヒュプノスは私にケールを殺せと言いたいわけか！

『この空間は一人しか生きて出られないのだ。さあ、その世界から出たければケールを殺せ』

なるほど…。

これがアーテが言っていた絶望なのか…。

私がケールを殺すことで自分の無力さに嘆き絶望するということか…。

『さあ、どうするの？』

いつの間にかアーテが嫌みな笑顔を向けて私の前に立っていた。

ヒュプノスにはアーテの姿は見えていないようだ。

彼女はいったい何者なのだ？

『せっかく助けた命を殺すことになるなんて悲しいね…』

彼女は嬲るように楽しげに語ってくる。

この地獄のような世界から脱出するにはケールを殺さなければならない。

だが、それはアーテの予言通りに行ってしまうことに他ならない。

『ここで諦めて全てを委ねたら楽になれるぞ…』

アーテが甘い誘惑で私の心を揺さぶってくる。

くっ！

駄目だ！

考えるのだ、ロスト！

これが最後の難関なのだ！

下らない予言なぞに惑わせれはしない！

私は絶対にケールを殺さずに生きて帰ってみせる！

第３３話：Ｂｅｎｅｄｉｃｔｕｓ

『さあ、君の応えを聞かせてもらおうかな？』

アーテは私が絶望に打ち拉がれるのを恋い焦がれているかのようだ…。

『さあ、早くケールを殺せ』

ヒュプノスの催促する声が虚空に響く。

……。

私は思わず笑みを浮かべてしまう。

『何が可笑しい？』

ヒュプノスの不機嫌な声が響いてくる。

「これは失礼…。先ほどの貴方様の命令についてですが、それに対する答えはただ一つ…」

……。

暫しの沈黙が過ぎってくる…。

私は息を深呼吸をした。

……。

「断る…」

『何だと?』

私は虚空に向かってはっきりと言ってやった。

『ならば、貴様は永遠にその世界の住民となるわけだな…』

「それも御免被る…」

アーテは楽しげに私を見てくる。

『果たしてどうするつもりなのかしらね?』

そんなアーテを私は感慨もなく見据える。

「貴様がここにいるのが答えだ…」

『どういう意味?』

私の答えにアーテの笑みが消える。

アーテは元の世界でもこの作り物の世界でも姿を現した。

それは世界を自由に行き来できる術があるということだ。

そして、ヒュプノスが声だけをこの世界に響かせている。

つまり元の世界からこの世界への中継点が存在しているということ

だ。

『けど、その中継点はヒュプノスの意志無くしては通過できないよ…』

アーテは私の思考を読んで問題点を指摘してくる。

「できるさ…」

『何を根拠に言っている？』

訝しげにしているアーテに私は意趣返しとして笑みを見せてやる。

根拠は私の最強の力をある。

貴様に出来て、最強たる私に出来ないことは無い！

すでにヒュプノスの声を通じて中継点を特定できた。

後はそれに辿るだけだ…。

空間が突如割れていき、その先にはヒュプノスが立っていた。

『馬鹿な…』

ヒュプノスは驚愕に満ちた表情をしていた。

私の魔力がヒュプノスの魔力を逆探知していき、通路を無理矢理こじ開けていったのだ。

そんな私を見て、アーテはため息を付き、再び底知れぬ笑みを浮かべてくる。

『敗因は私が君を侮り過ぎたことか…。初めてだ。我が予言を覆されるとはな…』

私もまた不敵な笑みをアーテに投げかける。

アーテの正体は何となく分かった気がする。

至極簡単で奇天烈な存在だったということだ。

自分の血肉によって私は最強の力を得ているとアーテは言っていた。

『そう…僕は神さ…』

神ならば、どんな理不尽なことでも簡単に説明が付くものだ…。

だが、相手が神であろうとも関係は無い。

私の道は私自身が決める！

神が下した預言如きに私の道を決めさせはせぬ！

覚えとくがいい！

『ふふっ…神たる私に又しても啖呵を切るとは生意気だね…。だが、覚えとこう。さてと、また新たな手札を用意するとしようかしら？貴様に新たな試練を与えるためにな…』

……。

いや、啖呵を切ったのは謝ろう…。

だから、もう試練は勘弁して欲しい…。

『ははははっ！もう遅い！それに俺はどうやら貴様を愛してしまったようだ…』

突如、鼻先にアーテが現れ、私は思わず息を止めてしまう。

アーテの銀色の口紅が妖艶に輝いていた…。

『神の祝福を与えてあげる…ちゅ』

ぬおっ！

『んっ…ちゅ…ちゅる…』

……。

これが神の祝福か…。

なかなかに悪くない…。

だが…。

『ちゅぱ…ふぅ…それは何よりだ。これでお前は将来、私に伴侶になるべき運命が刻まれたのだ…』

……。

……。

……。

……。

……。

…。

何ですと？

『私の性癖を教えてあげるわ。愛する人の苦悩に満ちた顔を見ることだ…』

貴様とは絶対に結婚しないぞ！

『我が婚約者よ。汝の未来に永久の絶望が有らんことを…あははははははっ…』

アーテは狂笑を響かせながら虚空に消えていく…。

……。

手鏡を取り出し、自分の顔を見る。

私の唇には銀色の口紅が塗られていた。

まったくとんだ疫病神に気に入られたものだ…。

私は口を拭って倒れているケールを背負う。

「ここまで凄まじいものなのか…」

ヒュプノスが怯えた目で私を見ていた。

「遊戯は私の勝ちだ。この女は私の奴隷として貰い受ける…」

もはや貴様に対して猫を被る必要もない。

私の力を充分に思い知ったはずだ。

ケールを奴隷と言ったのはヒュプノスに啖呵を切るための建前だ。

私には従者が間に合っているし、奴隷を持つ趣味は無い。

「ヒュプノス。私は貴様の思い通りにはならない。覚えとけ…」

呆然としているヒュプノスに私はそう言い放ち通り過ぎようとする。

「待てっ！」

ヒュプノスの呼び止める声に私の足が止まってしまう。

……。

やはり王族に喧嘩腰になるのは不味かっただろうだろうか…。

それならば、即座に謝罪有るのみだ！

「申し訳…」

「貴様こそ覚えとくがいい…」

ヒュプノスが私の謝罪の言葉を遮ってくる。

いったい何を覚えとけと言うつもりだ？

「貴様は私の者だ！故に手放しはせぬぞ！絶対にな！」

……。

私は無言でその場を去った。

……。

……。

……。

…。

私はヒュプノスの居城を後にした。

……。

不意に私に膝が折れてしまう。

立ち上がろうとしたが力が入らなかった。

……。

どうやら腰が抜けてしまったようだ…。

私はあの残骸の世界で味わった恐怖体験を思い出した。

恐かった…。

物凄く恐かった…。

それと生きて帰れて本当に良かった…。

私は思わず涙が出そうになる…。

世界の空気はこれほどにも美味しいものだったのか…。

……。

感動に打ち震えるのは後にしようか…。

とりあえずは私の身体を覆うように倒れている者を何とかしないとな…。

……。

抜け出せない…。

身長が私よりも頭二つ分以上高いだけあってそれなりに重たいぞ…。

仕方ない。

少々情けない気がするが、最強の力を使って…。

「僕の身体の下で何をしているの？」

……。

「大丈夫？ロスト」

……。

「目が覚めたのなら退いてくれ…」

「あっ！ごめん！」

ケールはすかさず私の上から離れていく。

……。

「貴様はもう自由だ。何処へでも行くといい…」

私はケールにそう言い放つ。

酒池肉林の構成員しようかと思ったが、ケールを見るとあの地獄のような戦いを思い出してしまう。

私の心的外傷を回復させるためにも遠くに行って欲しいのだ。

さらに言えば、抜けた腰を治す姿なぞ見られたくないのだ。

……。

……。

…。

「ええと…」

「何だ？」

なぜ立ち去らない！

「どうして動かないの？」

「悪いのか？」

私はケールを睨み付ける。

あの地獄のような戦場を思い出し、腰が抜けただなんて恥ずかしくて言えるものか！

「私のことは気にせず疾く去れ…」

冷たく言えば立ち去るだろう。

「君を気にせずなんて…いられるはずが無い！」

ぬっ！

何故か怒鳴られてしまったぞ…。

「君は僕の命の恩人なんだ。そんな君を置いて去るなんて出来ないよ…」

恩人だと思うなら、尚更ほっといて欲しいぞ…。

「それに君は僕を奴隷として貰い受けると言ったはずだ…」

……。

今何て言った？

もしかして貴様は…。

そんな私の様子に気づいたのかケールはばつが悪そうに舌を出す。

「ごめん、実は狸寝入りしてたんだ。ヒュプノスが僕を殺せと言っていたときには既に起きていたよ」

……。

何ですと？

「君があのヒュプノスに啖呵を切っていたのを見て、僕はときめいたよ。さすがはエリスが見込んだ男のだけはあるとね…」

ケールは私に流し目を送ってくる。

エリーと同じ人種をここに見た…。

しかも口調までも男だから完全に貴公子然としている…。

野郎だったら確実に半殺しにしてやるところだ…。

ケールは動けない私を抱き上げてくる。

「何のつもりだ?」

「ご主人様の家まで運んであげるよ。遠慮することはないさ。僕は君の奴隷だからね」

これは何の虐めだ?

男である私が女に抱き上げられている姿は公衆の面前に晒せと言うのか!

「離せ!私は一人でも平気だ!」

私は声をつい荒げてしまう。

ケールの腕の中で必死に藻掻くが腰が抜けているためか力が入らない。

かと言って治癒術を使用すれば確実に腰が抜けていたことが悟られてしまう。

「ふふっ…最初は冷たい印象だったけど、こうして見るとご主人様は可愛いね。照れ屋なのかな?けど、そんなに嫌がる姿を見てしま

うと…」

ケールの口が耳元に近づいてくる。

「つい虐めたくなってしまうよ…」

……。

私の身体が硬直してしまった…。

「あれ？急に大人しくなってしまったね。冗談のつもりだったのにね…」

冗談には全然聞こえなかったぞ！

「怖がらないで僕のご主人様。僕はご主人様の奴隷だから酷いことはしないよ」

「その自分が奴隷だと自称するのは止めろ…」

ケールは足を止め、私を地面に下ろしていく。

腰が抜けて動けないため私は地面に座り込む姿勢になってしまう。

「何故？君は僕を奴隷として飼ったのではないのかな？」

「あれはヒュプノスに啖呵を切るための方便に過ぎん。私は奴隷はいらない」

……。

ケールは暫し沈黙し、重々しく口を開く。

「だったら僕はもう要らないの？僕は君の奴隷になるしか生きる術は無いのに…」

……。

「エリスは確か貴様の親友だったな…」

「うん。エリスは僕にとって家族とも言える存在だったよ…」

ケールは誇らしげにエリスのことを家族と語る。

エリスが見せた過去の幻影からケールとエリスが如何に強い絆が結ばれているかが分かる。

「エリスはもうこの世にはいないが、私にとっては既に家族も同然となっていた…」

心的外傷となったあの忌まわしい戦場の中でエリスと交わした最後の口づけは甘い思い出となっている。

母親の幻影に惑わされていたエイラと最後に心を通じ合わせたことも同様だ。

そして、残骸の世界ごと焼き尽くしていった狂戦士達。

私は首飾りを握りしめる。

あの悲しき狂戦士達が生きた証は確かに私が抱いている…。

「ご主人様にとってエリスは家族だったんだね…」

「そうだ。私は奴隷はいらない。だが…」

私は俯いているケールを見る。

「共に生きる家族は欲しい…」

ケールは俯いたまま答えない。

私はケールの沈黙が破られるのを待ち続けた。

……。

……。

…。

「僕も…」

ケールはついに沈黙を破る。

「何だ？」

「僕もエリスと同じように…」

……。

「家族になってもいいのかな?」

私は俯くケールの頭に手を添える。

「そのために私は貴様を引き取ったつもりだがな…」

「…っ!」

ケールの身体が震えてくる。

私は震えるケールの頭を撫でていく。

さらさらする灰色の髪が私の指に心地よく絡んでくる。

「貴様は奴隷では無い。私と共に生きる家族だ…」

「ロストっ!」

ぐえっ!

座り込んでいる私に向かってケールは頭突きを胸にかますように体当たりしてきた。

私は押し倒される形でケールに抱きつかれる。

「ありがとう…こんなにも…心が温かくなったのは…エリスと分かれて以来…初めてだよ…」

ケールが私の胸に顔を埋めて泣いていた。

私は無言でケールを抱き締める。

公衆の面前で恥ずかしいが今は謹んで我慢しよう。

「僕は君に永遠の愛を捧げることをこの場で誓うよ…」

ケールは潤んだ目で私を見つめてくる。

貴様の気持ちは嬉しいが、ここが公衆の面前だということを完全に忘れてないか？

……。

周囲を見渡すといつの間にか人が集まってきている！

「これが小説でしか存在しないはずの許されざる愛なの？」

「男同士の愛、困難があるほど、その愛は燃え上がるのね！」

「上にいる男が攻めで下にいる男が受けなのかしら？」

何だか聞き捨てならない言葉が聞こえているが、ケールは女だ！

さらに訂正をすれば、私は受けでは無いぞ！

「僕の愛を受け取ってくれないか？」

ケールは頬を染め、魅惑的な緑色の唇を近づけてくる。

ここが公衆の面前でなければ、大いに結構な展開だ！

現に私の男の証はこれでもかと言わんばかりに元気になってきている！

だが、ここは自重して欲しい…。

周囲には人盛りが、女性陣が集結しているのだ！

女性の情報網ほど恐ろしいものは無い！

瞬く間にヴァルキリア全土に噂が広がること間違え無しだ！

「愛してるよ、ロスト…んっ」

……。

「ちゅぱ…んむ…ちゅる…」

気持ちが落ち着いてくる…。

女の唇はやはり気持ちいいものだ…。

周囲に響く黄色い悲鳴さえ無ければ尚も良し…。

これで私はヴァルキリア全土に男色家として名が知れ渡ってしまうのだろうな…。

何事も完璧にはいかないものだな…。

「ちゅぱ…ふぅ…では、僕達の家に帰ろうか、ご主人様…」

ケールは満面の笑みを浮かべ、再び私を抱き上げて歩き出す。

私は無言で頷く。

もう好きにしてくれ…。

私はケールに抱き上げられたまま自分の居城に帰っていく。

……。

……。

……。

…。

「主、私の目が悪くなったのかしら？なぜ、女に抱き上げられているの？」

玄関にはアビスが待っていた。

その表情は涙ぐんでいて、今にも抱きつきそうな勢いだった。

だが、私がケールに抱き上げられている惨状を見た途端に絶対零度の視線を向けてきたのだ。

……。

さて、どう言い訳したらいいものか…。

「僕はご主人様の家族に迎えられたケールといいます。家名はありません。ただのケールです。以後お見知り置きを…」

ケールは私を下ろし、アビスに向かって優雅にお辞儀していく。

下手な男共よりも様になった仕草だ…。

「これはご丁寧に。私はアビス・パラディスム。この家の侍女をしている者です」

ケールの丁寧な挨拶につられるようにアビスも丁寧に挨拶を返していく。

「ここでは何だから、上がっていって。色々話が聞きたいことだし。それにケールさんは家族として迎えたと言ってるし…」

アビスはケールが家族だと言ったことに何か思うことがあったのか、これ以上言うことなくケールを城に迎えてくれた。

そういえば、エルはどうしたのだろうか?

エルの性格からしてアビスよりも真っ先に飛び出してくるはずだが…。

「さあ、行こうか、ご主人様」

ケールは動けない私を抱き上げて、城の中を移動していく。

「ねえ、主」

「何だ？」

アビスはケールに対しては友好的な視線を向けているが、私に対しては依然として絶対零度の視線を向けてくる。

「何で抱き上げられているの？」

「動けないからだ…」

……。

腰が抜けたからとは死んでも言いたくはない！

「ねえ、主…」

「何だ？」

まだ質問があるというのか？

しかし、アビスの声が底冷えになってきているのは気のせいだろうか？

「何でケールさんと同じ緑色の口紅が主の唇の周りに塗られているの？」

……。

私は手鏡を取り出して自分の顔を見る。

唇を中心に緑色の口紅がべったりと彩られていた…。

……。

「ご主人様に僕の愛を捧げたからだよ。もう僕の身も心もご主人様の者だと誓ったからね…」

無言の私の代わりにケールは夢見心地にアビスに説明をしてくれるのだった…。

「へえ、それは良かったですね。ケールさん…」

「ケールでいいよ。僕にとってアビスさんは先輩だからね。色々とご指導を承りたいよ」

「私もアビスでいいわ。あんたは主の家族なんだから。だったら、私にとっても家族も同然よ」

「ありがとう、アビス。君とは仲良くできそうだよ」

どうやらアビスとケールは仲むつまじく語らっているようだ。

「主には後で話をじっくりと聞かせてもらうからね…」

アビスはケールへの対応とは打って変わって、凍えるような冷たい声で私に死刑宣告をしてくる…。

これは不可抗力だと言い訳してもアビスは聞く耳を持たないだろうな…。

今夜は徹底的に絞られそうだ…。

「全く、これで早く顔を拭きなさいよ」

アビスは布巾を持って、私の口元を痛いほど擦ってくる。

「色々聞きたいことはあるけど、とりあえずは…」

アビスは不機嫌そうな表情から僅かに笑みを綻ばせた。

「お帰りなさい…」

……。

胸に熱い物が込み上げてくる…。

これが家族を持つということか…。

「ただいま…」

私はついアビスから顔を逸らして返事を返してしまう。

「まったくご主人様は照れ屋だからね…」

そんな私とアビスのやり取りにケールは笑みを浮かべる。

「本当に変な所で主は素直じゃないのよ…」

アビスもまた苦笑するのだった。

何とでも言うがいい！

私はただ男としての威厳を保ちたいだけだ！

だが、女に抱き上げられている姿で何を言っても説得力は出ないだろうな…。

まあいい…。

ともあれ…。

私は生きて我が家に帰ってきたのだ…。

それについては素直に喜んでおこう…。

第３４話：ケール

「それで、エルだけは返されなかったと…」

「ご免なさい、主…」

いきなりの話に私の脳の処理が追いつかなかった。

私はエルとアビスを人質にされたことでヒュプノスの遊戯に付き合った。

そして、私は見事遊戯の勝者となり、人質は解放去れる手筈だった。

「けど、突然ヒュプノスが来て、姉者だけは置いていけと命令を下したのよ…」

アビスは申し訳なさそうに項垂れる。

……。

原因は見当がついていた。

ヒュプノスが私の力を恐れたからだ。

ヴァルキリアの最終兵器であるケールを打ち倒すほどの戦闘力はもちろんのこと、あの亜空間を脱出した力はヒュプノスの想定を越えたものだったかもしれない。

だからこそ、ヒュプノスは私が手に余る存在だと認識し、足枷をか

けてきたのだ。

詰まるところ、私が原因なわけだな…。

「謝るな。アビスは何も悪くはない…」

とりあえず落ち込んでいるアビスの頭に手を添える。

無理もない。

エルとアビスはいつも二人で一つと言えるほどに一緒にいたのだ。

それが引き離されたのだから、アビスの不安は言葉では表せないほどに深いものだろう。

それにしてもヒュプノスも抜け目が無い女だ。

よりにもよって頭脳労働担当のエルを人質に取るとは念入りなことだ。

せめて、力仕事担当のアビスを人質に取れば、まだ対策が立てられたものを…。

ん?

何故かアビスが私を睨み付けているな。

「今、姉者よりも私が人質にされたほうが良かったなんて考えてなかった?」

……。

鋭いな…。

「そんなことは無い。貴様もエルも私の大切な従者だ…」

「あ、ありがと…」

アビスの方がよほど照れ屋で素直では無いとつくづく思うぞ…。

「口惜しいだろうけど、今は静観すべきだよ。ヒュプノスが警戒しているはずだからね」

ケールが冷静な意見を出してくる。

どうやらエルの代わりを埋めてくれる頭脳労働担当は決定したようだな。

「分かってるわ。姉者は緊急事態の時こそ冷静でいるようにと言われてるしね…」

アビスは自分に言い聞かせるように納得する。

そんなアビスをケールは抱き寄せる。

「苦しいと思うけど我慢して。大丈夫、必ず機会が来るはずだから…」

今は亡きエリスと共に生きてきたケールにはアビスの気持ちが痛いほど分かるのだろう。

「ありがとう、ケール」

アビスはそのままケールの豊かな胸の中に顔を埋めて、静かに泣くのだった。

……。

この光景も悪くはないな…。

……。

……。

…。

今夜の月は雲に隠れているな…。

私は寝室からベランダに出て、夜空を眺めていた。

あの地獄のような戦いが夢のような出来事に思えてくる。

今や私はヴァルキリアの住民だ。

こうして過ごしてみるとブリュンスタッドと大して変わることはない。

最初は去勢されると思い、戦々恐々としていたが、住めば都とはよく言ったものだ。

私はこれから何処へ行くのだろうな…。

酒池肉林を実現させることが夢なのだが、その仮定を考えたことは無い。

ただ流れに身を任せていたらいつの間にかこの場所にいただけのことだ。

……。

ふと気配を感じる。

アビスはすでに寝込んだはずだ。

だったらこの気配は…。

「お邪魔してもいいかな？」

「かまわん…」

ケールは酒瓶とマンドリンを持って私の寝室に訪れてきた。

私の隣にケールが無言で腰掛ける。

「帰る場所があるのはいいね…」

ケールはそう言って私の肩に持たれてくる。

「帰る場所が無ければ自分で作ればいいだけのことだ…」

私はぶっきらぼうに答える。

「君の立場から考えて、その言葉は説得力があるね…」

私は仕えていた国は滅亡し、敵国にこうして身を寄せている立場だ。

そして、自分の城を持ち、従者をも従えている。

「僕の居場所はエリスだけだった。でも…」

ケールは夜空を見上げて、儚げな笑みを見せてくる。

「今は君が僕の居場所だ…」

夜空を見つめるケールは幻想的な美しさを讃えていた…。

冷たい風が吹き抜けていく。

「そうか…」

私はケールから顔を反らして答える。

「私はいつかこの国を脱出する…」

「それで…」

ケールは私の首に腕を回してくる。

「居場所はいつか失うかもしれない。それでも貴様は私を居場所というのか？」

「愚問だね…」

ケールはそのまま私の膝の上に乗りかかっていく。

少々重いぞ…。

私よりも大柄なケールが膝に乗ってきたのだから当然か…。

「僕の居場所は僕が守る。だから、僕は君を守ってみせるよ…ちゅ」

ケールは私の覆い被さるように軽く口づけをしてくる。

「もう僕は二度と失いたくないから…」

普段は口調も振る舞いも男らしいというのに今は妙に妖艶に見えてきてしまう。

「ヴァルキリアの最終兵器と呼ばれた僕はもう死んだ。僕は新しく生まれ変わったんだ。君の手によってね…」

ケールの紅い瞳が私の姿を映していく。

……。

何だか真面目な雰囲気になってきている。

今までの展開からして私を散々に弄んで、枯れるまで搾り取られるという流れだったのだがな…。

「君は僕にとってご主人であり、父であり、兄であり、弟でもある…」

最後の弟は激しく余計だ…。

「そして、何よりも僕が愛する男性なのだから…」

……。

ケールが女らしく見えてしまうぞ…。

「ふふっ…僕は男みたいだとよく言われるけど…」

ケールが妖艶な笑みを浮かべ、私の膝の上で服を脱ぎ始める。

「身体には結構自信があるよ…」

……。

磁気のように滑らかな肌…。

弾けんばかりの巨乳…。

艶めかしい緑色の唇…。

幻想的に靡かせる灰色の髪…。

……。

美の女神が現世に降臨してきた…。

「この身体はもう君の者だ。好きにしていいよ…」

私の理性は弾け飛び、一心不乱にケールの身体を貪っていく。

「きゃっ」

ケールの可愛らしい悲鳴を聞きながらも私は野獣と化していく。

「お願い、優しくして…」

今こそ私こそが攻めだということを思い知らせてやるぞ！

私は充分に下準備をし、ケールを男の証で貫いていく。

「あぐっ…これが…君の…男だというのか…」

ケールは苦しげに顔を歪めていく。

私はケールの顔を見て理性を取り戻していく。

そんな私の身体にケールの両足が巻き付いてくる。

「僕のことは…大丈夫…だから…ロスト…ちゅ」

ケールが私の頭を引き寄せて口づけていく。

「ちゅぱ…来てっ…」

私は再び野獣と化していく。

……。

……。

……。

……。

……。

「はぁ…はぁ…はぁ…」

とりあえずは楽しんだ…。

ケールの身体はまさに名器だった…。

だが、ケールの巨体を動かすには物凄い力がいる。

最強の力がなければ、潰されていたかもしれない…。

さてと、充分に欲望を発散させたことだし、眠るとするか…。

私はケールの身体から離れようとする。

「何処に行くつもりかな?」

絡みついていた両足が頑丈な鎖のように私の身体を拘束してくる。

「私はもう寝…ぐっ！」

ケールが両足がさらに私の身体を締め上げてくる。

あばら骨が悲鳴を上げてるぞ！

「まだ僕は満足していないよ。だから、君を解放するわけにはいかないね…」

「貴様…」

ケールは私と身体を入れ替えるようにして動く。

私はケールの下に組み敷かれてしまう。

「初めてだからと言うことで最初は君の顔を立てたけど…」

ケールは凶悪な笑みを浮かべて私を見下ろしてくる。

「もう慣れたから僕の思うがままにいかせてもらうよ…」

夜の怪物がここに降臨してきた！

だが、私はあくまで攻めが専門だ！

貴様の好きにはさせぬぞ！

「良い表情だ。昼間は冗談だと言ったけどね…」

ケールは魅惑的な緑色の唇を私の耳に近づけて囁く。

「君を虐めたくなってしまうのは本当さ…」

……。

「ぐっ！離せっ！」

冗談ではない！

私は虐められて喜ぶ趣味は持ち合わせてない！

「そんなにも嫌がると逆に傷ついてしまうよ。大丈夫、君は自分から僕に虐めて欲しいと望んでいくよ…」

そんなこと死んでも望まんわ！

ケールの手が私の両腕を押さえつけていく。

「力づくというのも悪くないね。君は戦場では無双を誇ってるけど、床の上ではまるでか弱い少女みたいだ…」

身体が動かせない！

「あの閉ざされた空間で君の綺麗な肌を見たとき思ったよ。君を食べてみたいと…」

ケールは口を僅かに開き、八重歯を煌めかせる。

……。

「私は貴様の中にある毒を完全に除去したはずだが…」

「薬の影響ではないさ。純粋にそう思っただけだからね…」

尚のこと質が悪いわ！

ケールは私の肩に唇を付けていく。

「では、いただくよ…あむっ」

ぬおっ！

痛いが、柔らかい…。

「あむっ…ちゅ…んぐっ…」

気持ちいいが、あの恐ろしい戦場のことを思い出してしまい…。

「止めろっ！」

「きゃあっ！」

私はケールを突き飛ばしてしまう。

……。

「私に触れるなっ！」

……。

ケールが怯えた表情になっている。

「ごめん、僕は…ただ君に…」

……。

私は慌ててケールを抱き寄せる。

「すまない…」

私は何てことをしてしまったのだ…。

だが、ケールに噛まれてしまうとあの時の死にそうだったことを思い出してしまうのだ…。

「謝るのは僕の方だ。僕は君を殺しかけていたことを忘れていた。いや、忘れようとした。僕が無神経だったんだ…」

どうすればいい…。

このままではケールとの関係が悪化してしまう。

……。

考えてみれば過ぎ去ったことにいつまでも恐怖に怯えるのは私の流儀ではない。

この体たらくで酒池肉林を目指すとは我ながら片腹痛いというものだ。

ならば…。

「ケール、もう一度貴様の思うとおりにやってくれ…」

誤解するようだが、私は決して特殊な性癖は無い！

これはケールに味あわされた心的外傷の治療のためだ！

「いいのかい？少し痛いと思うが…」

「かまわん…」

私は覚悟を決める。

ここは戦場ではないのだ。

私が天国に浸れる楽園だ。

「ふふっ…だったらいただくよ…あむっ」

うぐっ！

反対側の肩が噛まれる。

「はぐっ…あむっ…ちゅ…」

恐怖が蘇って痛いが、気持ちいいことは確かなのだ。

耐えるのだ、ロスト！

「君が僕のために必死に耐える表情を愛しく感じるよ。僕にもっと見せて欲しい…あぐっ」

ぐおっ！

今度は頬を噛まれたぞ！

「あむっ…ちゅ…れろっ…」

……。

……。

……。

……。

……。

…。

あれから体中にケールの噛み傷が刻みつけられた。

私はどうやら荒療治に成功したらしい…。

恐怖が快楽に塗りつぶされていくのを感じる。

私はケールを抱き寄せる。

「僕のために耐えてくれて嬉しいよ。ずっと君を愛し続けるよ…ちゅ」

ケールと私は口づけを交わす。

とりあえずは克服したようだ。

「後は君が枯れるまで絞り尽くすだけだね…」

……。

もう勘弁して欲しいぞ！

「僕の愛を君に存分に捧げるよ！はあっ…」

ぐおおおおおおおおおっ！

……。

……。

……。

……。

…。

何とか生き延びた…。

ケールは隣で私に顔を微笑みながら見ている。

この女の体力は底無しなのか…。

まだ余裕があるようだ…。

「これで僕達は本当の家族になれたんだね…ちゅ」

ケールは私の噛み傷が残っている頬に唇を寄せてくる。

「そうだな…」

私は頬からケールの唇の感触をただ感じていく。

「ちゅば…アビスやエルという女性ともこうやって関係を持っているんだね…」

……。

「沈黙は肯定と受け取るよ。こう見えても同じ女だからね。分かってしまうものさ…」

ケールは私の胸に顔を埋めていく。

「僕はアビスも好きだから問題無いよ。けど、ふと思うことがあるんだ。エリスがもし生きていたらこうして君と一緒に楽しめたかもしれないとね…」

私はケールの首にエリスからもらった首飾りを嵌める。

「エリスの魂は貴様と共にある…」

「ロスト…」

「そして、二人とも私の家族だ…」

「あり…がとう…ロスト…ぐすっ…ああ…あああああああっ！」

ケールは今まで我慢してきた分を解き放つかのように私の胸に縋って大声で泣いたのだった…。

……。

……。

…。

ケールは夜空を背にマンドリンを手に取った。

「エリスにしか聴かせたことがなかった曲を君に聴かせるよ…」

私は黙ってケールの演奏を待つ。

「悲しみの中にある希望の光を…」

マンドリンの音色が夜の静寂を包み込んでいく。

悲しみを乗り越える力強さを秘めた音色。

ケールの祈りの唄が心地よく響いてくる。

……。

その時、聞き覚えがある歌声が聞こえてくる。

この歌声はエリス…。

『ケールを宜しくね…』

これは幻聴なのだろうか…。

確かにエリスの声が私の耳に届いた。

……。

エリス…。

貴様もまた私の家族だ…。

『ありがとう、ロスト…』

雲に隠れていた月が見えてくる。

月の光がマンドリンを奏でるケールを優しく照らしていく。

まるでエリスが祝福してくれているように…。

ケールの音色とエリスの歌声に二重奏は見事なまでに美しく、世界を彩っていく…。

……。

これでケールによって全身に付けられた噛み傷で疼かなければ最高の気分なのだが…。

ケールの手前、この噛み傷を治すわけには行かないだろうな…。

まあいい…。

当分は惰眠を貪りたい気分だ…。

不謹慎だが、エルがいない間に羽目を思いっきり外すのも良かろう…。

とりあえずは色んな意味で今日一日、燃え尽きたな…。

第３４話：ケール（後書き）

ようやくシリアスな話が一旦は完結しました。次回から緩い話に戻りたいと思います。しかし、今の主人公を取り巻く環境が緩い展開を許すかどうか…。

御感想お待ちしています。

第３５話：親衛隊

「主、もう朝よ。起きなさい」

誰かが身体を揺さぶってきている。

「もういくら疲れたからって昼間まで寝るなんて怠け過ぎよ」

口うるさい女だ…。

親の顔が見てみたいものだ…。

「もっと寝させろ…」

「ちょっといい加減にして！」

私の身体を心地よく包んでいる布団が取られていく！

「何をする！」

私は思わず起き上がって布団の盗人に怒鳴りつける。

目の前には顔を真っ赤にしたアビスがいた。

……。

さてと、もう一寝入りするか…。

私はアビスから布団を取り返して芋虫になろうとした。

「主、誤魔化さないで起きなさい！何なの！その体中にある噛まれた怪我は？」

「それは僕がご主人様に与えた愛の刻印さ、アビス」

敷き布団の下から這い上がってきたケールが冷静に説明してくる。

そんな私とケールにアビスは頭を抱えてため息をつく。

「姉者の苦労が分かった気がしたわ。それにしてもやっぱり関係を持ったわけなのね…」

「僕はロス…」

私は神速の如き速さでケールの口に手を当てて言葉を遮る。

「どうしたの？主」

「ケールがくしゃみをアビスに目掛けてやりそうだったのでな。阻止した…」

「むぅ！うぅ！うぅ…」

私はケールの背中にナイフを突きつけて黙らせる。

「何だかケールが震えているように見えるけど…」

「風邪で悪寒が走ってるのだろう。アビス、ケールに薬を用意してくれ…」

「分かったわ。待ってて」

アビスは薬を取りに行くために寝室から出ていく。

「いいか、ケール。ここでは私の名はロットだ。覚えておけ…」

私はナイフの先を軽く背中に当てていく。

ケールは何度も頭を縦に振ってくる。

「分かればいい…」

私はケールを解放する。

「はぁはぁ…どうしてアビスに黙っているの？」

「もう隠すつもりは無かったが、言う機会を逃してしまったのだ…」

……。

ケールは無言で私を呆れた目で見てくる。

「やれやれ、君らしいというか。それにしてもあれほど手際よく私を無力化するなんてね。その力をあのときに出されていたと思うとぞっとするよ…」

「何のことだ？私はただばらされたくなかっただけだ」

「無自覚とは末恐ろしいよ。けど、それが愛しいところなんだろう

ね…ちゅ」

ケールは苦笑し、私の頬に口づけてくる。

「おはよう、ロット…」

「お…おはよう…」

私は何故かケールから顔を逸らしてしまう。

「ふふっ…相変わらず照れ屋だね…ちゅ」

ケールは私が顔を逸らした頬に再び口づける。

「ちゅば…だからこそ、つい虐めたくなってしまうよ…」

……。

おのれ、ケール…。

だが、悔しいことに戦闘以外では勝ち目が無さそうだ…。

「薬を持ってきたわよ」

アビスが寝室に入ってくる。

「ケールは相当に重病のようだ。世話をしてやってくれ…」

「やっぱり今まで囚われていたから、その反動なのかしら？いいわ、ケールの看病をしないとね。それと…」

アビスは私に布巾を渡し、手鏡を向けてくる。

手鏡に映った私の姿はまさに恐怖そのものだった。

体中に刻まれた噛み傷と緑色の口紅の跡…。

しかも、寝る前よりも酷くなっている…。

怪物に貪られて負傷したかのような凄惨な姿だ…。

そういえば昨夜は体中に犬が噛みついてくる夢を見たな…。

夢にしては痛いと思ったが、まさか…。

私はケールに目線を向ける。

「ごめん、少しやりすぎたかな?」

ケールは舌を出して、可愛らしく笑ってみせている。

……。

私は無言で剣を取り出す。

ここは修正してやるべきだろう…。

「あははっ、ごめん」

「待て、ケールっ!」

私は笑いながら逃亡するケールを追跡していく。

「ちょっと、その無惨な身体で剣を振り回しながら走るんじゃないわよ！」

背後からはアビスの怒声が響き渡っていく。

……。

……。

…。

私の全身には包帯がぐるぐる巻きになっていた。

アビスに治癒術の使用を禁じられたためだ。

重傷ならともかく軽傷ならば自然治癒に任せるべきだと言われたのだ。

私は手鏡で自分の姿を確認する。

……。

戦場帰りの兵士でもここまで凄惨な姿にはならないと思う。

まるで呪術によって蘇った木乃伊男だ。

私は寝室を後にして、自分の城を見渡していく。

無骨な作りだと思う。

王宮のような華美な装飾品は一切無く、あくまで敵の侵入を阻むことを前提とした作りになっている。

いずれここの城自体が戦場になってしまうのだろう。

ここが一度でも戦場になれば、もうここに住むことはできない。

敵味方の血が染みついてしまった家には住みたくないからな…。

「主」

アビスが私を呼んでいる。

もうケールの看病が終わったのか…。

「ヒュプノスから言伝があったわ。主の部隊がもうすぐここに派遣されてるって…」

「私の部隊か…」

ヒュプノスめ。

私をこの国の歯車に埋め込もうとする算段だな。

だが、そうは行かないぞ！

すぐに追い出してくれるわ！

「部隊は元ヒュプノス親衛隊の連中らしいわ」

ヒュプノス親衛隊か…。

ならば、美女軍団ではないのか！

「丁重にお持て成しをしろ、アビス…」

「何言ってるのよ！ヒュプノスの元親衛隊よ！元親衛隊なのよ！分かってるの！」

アビスは唾を飛ばしながら私に顔を近づけて怒鳴ってくる。

エルが人質に囚われて以来、依然として口うるさくなってしまったな…。

「本当に分かってるの。私達、監視されることになるのよ…」

確かに監視されるのは非常に不味い。

何か名案は無いものなのか…。

こんなときにエルがいれば妙案が出てくるはずなのだが…。

「そうだ！良いことを考えついたわ！」

神妙にしていた表情とは打って変わって笑顔を見せてくるアビス。

何だか猛烈に嫌な予感がしてきたぞ…。

「ふふっ…泥船の乗ったつもりで私に任せなさいよ、主」

アビスは豊かな胸を叩いて自信満々に宣言してきた。

泥船は沈んでしまうぞ…。

「昼間に部隊が到着する予定よ。それまでに準備をしないといけないわね」

アビスは無駄に盛り上がっていた。

こうなれば私には止められない。

エルがいれば上手くアビスの手綱を引いてくれるのだが…。

「なんだか盛り上がっているようだね、二人とも」

ケールが寝室から降りてきた。

「聞いてよ、ケール。私良いことを思いついたのよ！」

無駄にはしゃいでいるアビスを見て、ケールは私を呆れた目で見てくる。

「ご主人様はアビスにいったい何を吹き込んだのかな？」

「私は別に…」

アビスはケールに抱きついて、内緒話のように小声で話している。

なぜ、私に聞こえないように話しているのだ？

「悪くは無い…案だろうかな…と思うが…大丈夫なのかな？」

ケールは何故か哀れむような視線を私に向けてくる。

アビスは私に何かをさせようとしているのか！

「さあ、善は急げと言うし、準備するわよ！」

アビスはいつの間にか取り仕切っていた。

「まあ、付き合うしかないだろうね…」

ケールは諦めの心境でアビスに付いていく。

私もまたアビスに続くのだった。

……。

……。

…。

「なかなかのものだな…」

「でしょ？パラディスム家の秘中の装備品よ！」

私とアビスは作戦の要である装備品を見て、感嘆の息を漏らしてい

た。

「君達本気で言ってるのかい？」

ケールは信じられないような目で装備品を見ていた。

「何言ってるのよ、ケール。これさえ着ていれば、主の正体は晒されることもなく、畏怖を持って讃えられるのよ！」

私はアビスの言葉に大いに頷いた。

「確かに素顔は見えないし、畏怖を持たれるという点は確かだけど、畏怖というよりは…」

「主、午後までに時間がないわ。急いで装着するのよ」

ケールの言葉を遮るようにアビスは押し進めていく。

この装備品が私の晴れ舞台を飾る戦装束になるのか…。

なかなか格好良いではないか…。

美女軍団に素顔を見せれないのは残念だが、さらなる栄光を掴むために致し方ないだろう。

だが、せめて私の荘厳なる出で立ちを見せて、美女軍団に感嘆のため息を漏らさせるのもまた一興というものだ。

私はアビスにされるがままに装備品を装着していく。

「僕は知らないからね…」

ケールは頭を抱えてため息を付いていた。

おそらく私の格好良さに感嘆の息を漏らしたのだろう。

……。

……。

…。

装着は完了した。

……。

アビスとケールは私の姿を見て、何故か黙り込んでいた。

「私、実はこの装備品を着た姿を見るのは初めてなのよ…」

「アビス、君が正常人の感性を持っていて安心したよ…」

二人の声はどこか震えているようだった。

余りの畏怖を感じて声が震えているに違いないな…。

「この姿で戦場で相まみえていたら、私は家の掟に関係無く敵前逃亡していたと思うわ…」

「奇遇だね。僕も戦場でこの姿を見かけたら、本気で死を覚悟する

と思うよ…」

二人はどこか通じ合うものが出来たみたいに同調していた。

「部隊はもう到着するのか？」

私の晴れ姿をいつ披露できるのか…。

「は、はい！もうすぐ到着すると思われます！」

アビスは急に畏まったかのような口調になっている。

やはりこの鎧の効果なのだろうか？

「ご、ご主人様！とりあえずは控え室にてお休み下さい！後は僕達で準備しておきますので…」

ケールもまた私にへりくだったような言葉で答えるのだった。

二人とも、やっと私の主としての威厳に気づいたようだな…。

これも鎧のお陰なのだろうな…。

……。

……。

…。

私はケールに言われるがままに控え室に待機するのだった。

「親衛隊が到着したみたいよ」

「そうか…」

控え室にアビスが訪れてきた。

どんな部隊なのか影ながら覗いてみるのもいいかもしれないな…。

私は重々しく椅子から立ち上がり調練場に足を運ぼうとする。

「ちょっとまだ主の出番は後なのよ」

「ただ覗くだけだ…」

私はアビスの静止を振り切って歩き出す。

「待ってよ！主」

アビスは私に後を追いかけてくる。

……。

……。

…。

「親衛隊長エクリア・レイラント以下３０名只今到着致しました！」

調練場では一糸乱れぬ動きで敬礼する美女軍団がケールの前で整列

していた。

「よく来てくれたね。エクリア。元気そうで何よりだ」

「兵士とは常在戦場を慣わしとするもの。体調は常に万全です」

親衛隊の隊長は如何にも兵士という出で立ちで暑苦しい対応をケールにしていた。

茶髪を肩までに切り揃えていて漆黒の瞳は周囲を油断無く見据えているような眼差しだった。

胸も大きく、顔立ちも整っていることから十二分に美女の範疇に入ると言ってもいい女だな…。

後の付き従う女兵士達も種類は違えど美女の部類には入っている。

彼女らは狂戦士でもなければ突然変異体でも無い。

まさに完全なる美女軍団。

……。

これほどの人材の集まりを前にして、私は姿を隠して接せねばならないというのか…。

もはや拷問にも等しい仕打ちだな…。

「僕は副隊長のケールだ。宜しくね、みんな…」

ケールは片目を瞑って、女兵士達に微笑んで見せた。

「ケール様！私は貴女様に憧れて軍に志願したのです！」

「貴女様の下で働けて光栄です！」

「我が命はケール様と共にあります！」

女兵士達は黄色い悲鳴を上げていた。

……。

ケール、貴様が男だったら今頃は百万回は全殺しの刑に下していたぞ…。

「静まらないかお前達！副隊長殿が困っているであろう！申し訳有りません、副隊長殿…」

エクリアの一喝で隊員達は静まりかえる。

そんな生真面目なエクリアにケールは苦笑している。

「喜んでくれるのは嬉しいけど僕は副隊長だからね。隊長の命令に従わないといけないよ」

「失礼ですが、小官はケール様こそが隊長に相応しいと存じます。あのタナトス様と並び称された狂女神ケールの名を知らぬ者など、このヴァルキリアには存在しません。どこの馬の骨とも知れぬ輩に隊長が務まるとは思えませんが…」

エクリアはケールこそが隊長に相応しいと明言してくる。

……。

確かに知名度が高いケールの方が隊長に相応しいと私も思う。

それにこのままケールが隊長になれば調練も何もかもをケールに丸投げすることが出来るのだ。

でかしたぞ、エクリア親衛隊長！

この際、私を馬の骨呼ばわりにしたことは聞き流してやる！

そのままケールに隊長になるように押し切るのだ！

「彼は一応、元ブリュンスタッド将兵であの冥界の御使いと唄われたパラディスムを付き従えているわけだけどね」

ケールの言葉に静まりかえっていた兵士達が騒ぎ出してくる。

「何とあのヴァルキリアの暗部であるパラディスムを従えているのですか？ヒュプノス殿下でさえも雇うことは出来ても従えることが叶わなかったあの…」

冷静な出で立ちを見せていたエクリアでさえも取り乱していた。

私は隣で一緒に覗いているアビスを見る。

「な、何よ…」

この女があの親衛隊にここまで畏怖されるほどだとはな…。

私は視線を再びケールに向けていく。

ケール、もうこれ以上は余計なことは言わないで欲しいぞ…。

だが、私の思惑とは別にケールはさらなる爆弾発言をしたのだった。

「ちなみに僕も彼に付き従う者さ。何しろ一騎打ちで負けてしまったからね」

……。

騒いでいた女兵士達が静まりかえる。

エクリアでさえもケールの言葉に固まったようだ。

ケールは同姓でも惹かれるような妖艶な笑みを親衛隊に向けて止めを刺してくる。

「ふふっ…僕は自分よりも強い彼に身も心も捧げたのさ。彼の身体の味は今でも忘れられない。もう一度味わいたいとも思っているよ…」

……。

世界が沈黙していた。

……。

「誰ですか、貴女様を惑わす不届きな隊長は…」

沈黙を破ったのは親衛隊長エクリア。

世界を焼き尽くさんばかりの怒りの炎が全身に漲っているのが感じられる。

他の隊員達も睨まれるだけで灰になりそうなほどの怒りの炎を瞳に宿していた。

……。

「私は病に伏せたと伝えろ…」

私はその場から立ち去ろうとする。

「駄目よ！彼女達は親衛隊なのよ！そんな言い訳通用しないわ！」

アビスが逃げようとしている私を引き留めようと必死に縋り付いてくる。

「離せ…」

美女軍団にちやほやされたいとは思っても、私刑されるのは御免被る！

ケール、貴様は後で絶対に修正してやるぞ！

私は縋り付くアビスを引きずってその場から去ろうとする。

だが、間の悪いことに私の足下に子犬が座り込んでいた。

何故、子犬がここにいる！

「あっ、ガルム。どうしたの？」

アビスは私にしがみつきながらも子犬に声を掛ける。

この子犬にガルムとは物騒な名をつけたものだ…。

それよりもいつの間に犬を飼っていたのだ？

ガルムは私の兜に飛びつき、貪るように舐め回してくる。

「や、止めろ…」

私はガルムを振り払おうとして体勢を崩して、地面に倒れてしまう。

金属音が盛大に鳴り響いてしまった。

「そこに隠れているのは誰だ！」

エクリアの怒声が聞こえてきた。

……。

見つかってしまった…。

どうすればいい…。

私はこのまま親衛隊に私刑されてしまうのだろうか？

……。

考えてみれば、何故怯えなければならない！

私は一応隊長なのだ！

隊長の私生活に口出しなぞさせてたまるか！

嘗められたら終わりだ！

私はアビスとガルムを振り払い、悠然と親衛隊の前に姿を見せようと歩き出す。

今こそ私の威厳を示すときだ！

「ケール様を惑わす隊長なんか小官は絶対に認めない！」

エクリアの怒りに満ちた声が木霊してくる

……。

いざとなったらケールを盾にして言い逃れようか…。

第３６話：隊長の威厳

私は意を決して調練場に姿を見せる。

「何者だ！き、貴様は！」

エクリアは剣を私に向けて威嚇してくる。

何故だか分からないが、身体が震えているように見えるのは気にせいだろうか…。

「人に名を尋ねるなら、まずは自分から名乗られよ…」

「曲者に…教える名は無い！大人しく…縄に…付くがいい！」

エクリアは声を震わせながら私に剣を突き付けてくる。

嘗められないために決まり文句を使ってみたが、相手は完全に私を曲者扱いしている。

ここは素直に自分から名乗るべきだろうか…。

エクリアにどう対応すべきか悩んでいたとき、ケールが間に入ってくる。

「エクリア、彼こそが君達の隊長になるロット様だよ…」

「この方が隊長なのですか…」

エクリアは私から後ずさっていく。

私は親衛隊を見渡す。

隊員一同は調子が悪いのか、顔面蒼白になっていた。

「何なの？あのおぞましい鎧は…」

「ヴァルキリアの恐怖の象徴は殿下だと言われているけど…」

「これが殿下の秘蔵と呼ばれた悪魔なの…」

聞き捨てならない発言をしている女兵士がいた。

私はその女兵士に近づいていく。

「私は悪魔ではない。ロットだ…」

「ああ…あ…」

女兵士は顎をがくがくとして何も答えようとしなかった。

相当に調子が悪いのかも知れない。

風邪でも引いているのだろうか？

「アビス、ここへ…」

「はい、主」

私に呼びかけにアビスは音も無く姿を現す。

「この者を医務室へ…」

「畏まりました」

アビスは震えている女兵士に「もう大丈夫よ」と声を掛け、肩を貸して連れて行った。

私は再び隊員一同を見渡す。

隊員達は全員震えていた。

風邪が流行っているのかもしれないな…。

「自己紹介だけにしておこうか。ケールが紹介したように私が隊長のロットである。この城は貴様等の家だと思えばいい。何かがあれば、アビスに言え。部屋は空いている所を好きに使ってかまわん。今日はとりあえず全員風邪気味みたいだから解散とする。身体をしっかりと休ませろ。以上だ…」

私がそう言って、背を向けると隊員達が一斉に息を吐き出すのが聞こえてくる。

ヒュプノスに仕えていて心労が祟ったのだろう…。

「小官は貴方を…隊長とは認めません！」

私は不平の声が聞こえた方向を見る。

震えながらも私に剣を向けているエクリアだった。
鋭い漆黒の眼光で私を睨めつけてくる姿は凛々しいの一言だった。
まさに出来る女の雰囲気を漂わせる。
現在人質に囚われているエルも冷たさの中に凛々しさを兼ね備えた女だったな…。
……。
何だかエルに無性に逢いたくなってしまった…。
エクリアを見るとエルを思い出してしまう。
私はエクリアに背を向ける。
私に反抗的とはいえ、一応は部下だ。
面倒事はケールに全て丸投げにするとはいえ、無下にする必要もない。
「とりあえず好きな部屋を使え。身体が震えてるぞ…」
彼女も風邪を引いてるのだろう。
しかし、軍人ゆえに弱音を吐いてはいられないということか…。
気丈ではあるが、まずは養生するべきだろう。

私はそのままエクリアを放置してその場を去っていった。

……。

……。

…。

「ご主人様、明日、親衛隊と顔合わせするときはその鎧は脱いだ方がいいと思うよ…」

「何故だ？」

私が鎧の手入れをしているときにケールが突然そんなことを言ってきた。

アビスに頂いたこの鎧を私は気に入ってたのだ。

何故、着るのを止めねばならないのか？

「まあ、ここは戦場ではないわけだから、着ていない方が身軽でいいと思うけど」

「だが、私の素顔が晒されてしまう。それに…」

私は無言で自分の身体に視線を向ける。

そこにはケール曰く愛の刻印が原因で私の全身が包帯ぐるぐる巻きの状態だった。

「ははっ、ごめんごめん。でも、包帯撒いている姿もそそるものがあるね…」

ケールが指先で包帯が巻かれている私の首筋に沿わせてくる。

「…っ！」

一瞬ぞくっとしたぞ！

ケールはそんな私の様子を見て妖艶に微笑んでくる。

「ふふっ、また僕の刻印をつけてあげようか？」

「遠慮しておこう…」

私は首筋に触れてくるケールの手を払う。

ケールの刻印は嫌いではないが、さすがに生傷が癒えない内には止めて欲しい。

「そうよ、ケールはもう少し自重をしたほうがいいわよ」

ぬおっ！

いきなりアビスの声がしてきた。

いつの間に部屋に入ってきたのだ？

さすがはヴァルキリアの暗部と言ったところなのか…。

「アビス、愛する人に消えない愛を刻むのも乙だとは思わないかな？」

ケールは私の肩に抱きついてアビスに流し目を送ってくる。

「主の回復力は規格外だから、傷跡なんて残りはしないわよ」

アビスは私の身体に巻き付いている包帯を解いていく。

……。

確かに傷は無くなりかけているな。

「凄いな。あれだけ入念に噛んだというのにもう消えかけているね」

……。

ケール、貴様はどれだけ入念に私の身体に噛みついたというのだ？

だが、残念だったな。

最強たる私は治癒術に頼らずとも快復力も並ではないのだ。

「少し残念な気がするけど、傷が残らないのなら、いくらでも噛みついてもいいということだね…ふふっ…」

……。

「ちょっと、ケールはもう充分にやったでしょう。今度は私がやってあげるわよ」

……。

アビス、貴様何を言ってるのだ？

何だか不味い方向に話が進んでいるぞ…。

「だったら、二人でどちらがより多く、ご主人様の身体に愛を刻めれるか勝負といかないか？」

「面白いわね。受けて立つわよ。最近、私もご無沙汰だったしね…」

……。

私は部屋から音を立てずに脱出しようとした。

「何処に行こうというのかな？」

「何処に行くつもりなのよ？」

逃げようとした私の肩に二人の手が食い込んでいく。

無駄な言い訳だろうが、敢えて言わせてもらおう。

「親衛隊等が粗相を働いていないかを見回ろうと…」

「エクリアがいるから心配いらないと思うよ。それこそヒュプノス直属の親衛隊なんだからね」

私の言い訳は瞬殺されたようだ…。

戦場であれば、私が瞬殺してやるというのに…。

ぬおっ！

アビスがいきなり、背後から身体に腕を回してきたぞ！

「今宵は姉者の分まで絞り尽くしてあげるわ。覚悟しなさいよ、主…」

アビスは私の背中に自分の胸をすりつけるようにして甘い吐息を吹きかけてくる。

……。

私の男の証が急成長しつつあった…。

むふっ！

顔が柔らかい何かが包み込み、視界が真っ黒になった。

「僕を忘れてもらっては困るね、ご主人様。君のいやらしい顔を僕の胸で修正してあげるよ」

むぐっ！

ケールの質感豊かな胸が私の頭を覆い尽くしていく。

……。

気持ちいいが、息が出来ないし、頭蓋骨が悲鳴を上げているぞ…。

これはタナトス並の死の抱擁だ！

急いで脱出しなければ、私は本当の意味で昇天してしまうぞ！

私はケールの胸の中で必死に藻掻いていく。

だが、胸の感触の気持ちよさと元々の体格差もあって思うように力が入らなかった。

「ちょっと、私も忘れないでよね、主」

ぐおっ！

アビスが私の後頭部に胸を押しつけてきたぞ！

……。

気持ちいいが、こちらも強烈な圧迫だった。

まるで万力に頭が挟まれている気分だな…。

完全に退路が断たれてしまった…。

もはや逃げ場は無い…。

だが、最後まで悪あがきをさせてもらうぞ！

私は頭を必死に動かして、胸地獄から脱出しようとした。

「あぁん…ご主人様、そんなに…うぅ…がっつかないでくれ…。んぅ…感じてしまうではないか…」

「んっ…まるで赤ん坊ね…あぅ…こんなにも…私の胸の中で…ふぅ…暴れるなんてね…」

ぐおっ！

二人がますます力を込めて抱き締めてくるぞ！

気持ちいいが、もはや頭蓋骨が限界だ…。

私はケールの肩を何度も叩いて、止めるように訴える。

「もう少しこのままでいてくれ、ご主人様。どうやら招かれざる客が訪れたようだからね…」

招かれざる客だと？

扉が開かれる音が聞こえてくる。

「昼間は申し訳有りません、閣下。あの時の小官は…あ…」

……。

入ってきたのは親衛隊長エクリアだった。

……。

なぜ、黙ったままでいるのだ？

……。

ケールとアビスの胸の感触はともかく、この沈黙は心地悪いぞ…。

「ふ…」

ふ？

笑っているのか？

……。

「不潔です！失礼します！」

乱暴に戸を閉める音が響く。

……。

不潔とは失礼な。

私は常日頃、身体を清潔にしているぞ。

それにしても…。

「まずい、私が鎧を脱いでいる姿が見られてしまった…」

私はエクリアに自分の素を見られてしまったのだ。

「心配する必要は無いよ。顔は見られていないわけだしね」

「主の顔は私達の乳の中に埋められているから見えてないわ」

「むぐっ…んむむっ…」

なるほど、それは助かった。

……。

そろそろ解放して欲しい。

「さてと、前戯は済ませたことだし、本番にいくとしよう」

ケールはようやく自分の胸から私の頭蓋骨を解放してくれた。

アビスはそのまま後ろから胸を私に押しつけたままだ。

「そうね。まずはどちらから先にするの？」

「まずは君がやるんだ、アビス」

私を差し置いて二人で勝手に話を進めている。

「えっ？いいの？」

「そのかわり僕は…あむっ…ご主人様の身体に愛の刻印を刻みまくるけどね…」

ぎゃっ！

ケールが私の首筋に噛みついてきた！

「その好意は遠慮無く受け取るわ。さあ、主…」

ぐおっ！

男の証がアビスに呑み込まれていく…。

「思いっきり貪るから気合いを入れてよね！」

アビスに容赦なく締め付けられていく…。

「今度も私に男を魅さなさいよ。夜では主が私の従者になるんだからね」

「いつ、そんなことが…むぐっ」

アビスは黙らせるように唇で私のそれを塞いでくる。

「ちゅぱっ…男がいちいち細かいことを気にしなくていいの！いくわよ！」

ぐおおおおおっ！

アビスが解き放たれた野獣の如く私の男の証を咀嚼してくる。

「僕は君の身体を食べ尽くすから気にせずに楽しんでくれ…あむっ！」

はぐっ！

鼻をかじられた…。

しかもかなり強く…。

「私を満足させるまで眠らないでよ、主」

「たっぷりと味見させてもらうよ、ご主人様」

ぬわぁあああああああああああっ！

……。

……。

……。

……。

……。

…。

「もう朝か…」

腰が痛い…。

身体がひりひりする…。

私は手鏡を取り出し、自分の身体を見た。

緑色の口紅と噛み傷が自己主張するように所々に刻みつけられている…。

また、体中に包帯を巻かなければならないな…。

アビスもケールも私が泣こうが喚こうが容赦無く絞り尽くしてきた…。

とりあえず、顔を拭いて、適当に包帯でも巻いておくか…。

私は包帯を顔に巻き、再び手鏡で確認する。

……。

現代に生きる木乃伊男の誕生だな…。

そのとき、戸を叩く音が聞こえてきた。

朝早くから誰だ?

私は戸を開け、訪問してきた人物を見た。

……。

「おはよう…ございい…ます?」

「おはよう、エクリア元親衛隊長…」

訪ねてきたのはエクリアだった。

ん？

死後硬直したように固まっているぞ…。

「ば」

ば？

「化け物っ！」

エクリアはそう叫んで走り去っていく。

……。

不潔の次は化け物呼ばわりか…。

随分と失礼な部下だ…。

……。

私は手鏡を見る。

顔面を覆うように巻かれた包帯。

全身に刻み込まれた緑色の口紅と噛み傷。

……。

なるほど、確かに化け物呼ばわりされても仕方ないな…。

私は後ろを振り向くとすでに起きて、着替えを済ませた二人がいた。

「おはよう…ちゅ！今日も気合いを入れて行くわよ」

アビスは私の口紅と噛み傷が無い部位に口づけて部屋から去ろうとする。

「主、治癒術は駄目よ。当分は木乃伊男でいてね」

軽快に戸を閉めて去っていくアビス。

……。

「大丈夫、すぐに慣れるさ。それよりも少し強く噛みすぎたか血が滲んでるね」

ケールが噛み傷に指先を沿わせていく。

「うっ！」

私は思わず呻き声を出してしまう。

「あまり色気がある声を出さないでくれ。また襲いたくなってしまうよ…ふふっ…」

ケールはそう言いつつ、指を沿わせるのを止めようとしない。

「僕は吸血鬼ではないけど、君の血を見ていると興奮してしまうよ

…れろっ」

「うお…むぐっ！」

ケールの舌に傷口を嘗められて叫び声を上げようとした私の口が塞がれる。

「僕の舌で君の傷口を消毒してあげるよ。遠慮は無用だ…」

「むぐっ…」

……。

私は大人しくした。

ケールの舌で消毒ならば噛みつかれるよりも何倍も良いだろう。

それに幼い頃、母親にもそうして傷に消毒してもらった記憶があった。

大人しくしていくとケールは妖艶な笑みを浮かべて私の口から手を離していく。

「どうやら期待しているようだね。君の身体を隅々まで綺麗にしてあげるよ…あむっ…」

私の身体はケールの舌によって清められていった。

……。

……。

…。

私は素顔を隠すために漆黒の兜を被り、服は黒を基調としたものを羽織っている。

服から晒されている肌は包帯に隙間無く巻かれていた。

すれ違う隊員達は私の姿を見ると皆廊下の端に立って震える様子だった。

「ケール…」

「何だい？」

私は震えている隊員を見渡す。

「なぜ、私は恐れられている？」

隣に歩くケールはため息をついて私の肩を叩く。

「まあ、君が隊長として畏怖と敬意を持たれているからだよ…」

「そうか…」

まあ、隊長が嘗められては話にはならないからな。

私はとにかく崇められているのだと思っておこう。

……。

震える隊員を余所に私を恐れずに向かってくる隊員が一人いた。

向かってくる隊員の名は元ヒュプノス親衛隊隊長エクリア・レイラント。

「閣下！小官と手合わせをしてください！」

……。

何ですと？

「閣下の爛れた私生活に口出しするつもりはありません。しかし、それでも小官は…とにかく受けて頂けますか？受けて頂けますよね？」

エクリアは据わった目をして私の兜に顔を近づけてくる。

体調は万全なのか、昨日とは別人のように覇気がみなぎっている。

私はエクリアの気迫に押されてか、思わず後ずさってしまった。

「さすがはエクリア様。気迫で隊長を圧倒しているわ…」

「それにしてもあの禍々しい様相の隊長に恐れずに立ち向かうなんて…」

「これは血の雨が降るかも知れないわね…」

外野は随分と好き放題に言ってくれるものだ。

「まったく早速問題を起こしてくれて…。仕方ない主様ね…」

いつの間にか横にいたアビスがため息を付いて私に冷たい視線を向けてくる。

私は何も問題は起こしてないぞ！

「これはまた面白くなってきたね」

ケールは完全に他人事なのか傍観者気取りになっている…。

「小官が勝てば、閣下の私生活を正して頂きます！」

……。

何だと？

「貴様、私生活に口出ししないのでは無かったのか？」

私が後ずさっていた足を前に踏み出してエクリアに近づいていく。

エクリアは顔面蒼白になって後ずさろうとするが、それでも何とか踏みとどまって私を睨んでくる。

「ひっ！も…もちろん、小官も…対価を…用意します！閣下が…もし…小官に勝てば…」

「私が勝てばどうする？」

エクリアは何故か頬を紅く染め、俯く。

……。

……。

…。

私が勝てばどうするのだ！

早く言え、エクリア元親衛隊長！

「私が勝てば…」

「閣下が小官に勝ったときにはこの身を捧げます！」

……。

……。

……。

…。

アビスが私の肩に優しく手を添えてくる。

「主、当分眠れない日々が続くと思ってね。くれぐれも逃げないようにね。逃げたら殺す…」

天使のような微笑みをしているが、目には灼熱の業火が燃えさかっているぞ！

ケールは私の首に腕を回して、耳元に緑色の唇を近づけていく。

「ご主人様、毎晩君を夜食として頂かせてもらうよ。もちろん拒否は認めないよ。拒否したら殺す…」

天使のような微笑みをして、私の耳に悪魔の吐息を吹きかけていく…。

「受けて頂けますか、閣下」

私の苦悩を余所にエクリアは決闘を挑んできている…。

……。

私の身体は果たして保つのだろうか…。

だが、この程度の危機を乗り越えれなくて何が酒池肉林だ！

この大いなる試練に私は見事乗り越えてみせようぞ！

故に…。

「受けて立つ…」

勝てばエクリアとの上下関係を改めて知らしめることができるし、何よりも身体を捧げてもらえる！

まさしく上手すぎる一石二鳥だ！

これを受けて立たねば、男では無い！

「では、調練場でお待ちしています…」

エクリアは顔を赤く染めながらも颯爽と立ち去っていく。

……。

決闘の約束をしてみたものの、エクリアの戦闘力は未知数だ。

ヒュプノスの親衛隊長を務めていたからかなりの実力者なのだろう。

何だか不安になってきたな…。

それに何だかエクリアのような人種に関わってはいけないという私の勘が叫んでいたのだ。

少し早まってしまっただろうか…。

そんな私の不安に感づいたのかケールが私の耳を噛んでくる。

「んっ…エクリアの実力は良くてあの閉ざされた世界で戦った狂戦士に辛うじて及ぶかどうかだ。もちろん僕には遠く及ばないよ。ただ、エクリアに目を付けられると…」

ケールは何か言いかけて口を閉ざし、笑みを浮かべてくる。

「それは後のお楽しみさ…」

物凄く気になるぞ！

「主、相手はケールのように化け物じゃないんだから手加減しなさいよ」

「全く酷いな、アビスは。僕はこう見えてもか弱い女だというのにね…」

「あんたがか弱い女になるのだったら、タナトス様はお淑やかな女になってしまうわ」

「反論の余地を許さないほどに説得力がある言葉だね。大いに参考にさせてもらうよ」

ケールとアビスの仲むつまじい様子を余所に私は調練場に足を運んでいく。

どうか、エクリアが普通の女性でありますように…。

……。

私は布巾を取り出し、ケールに噛まれた耳を拭く。

エクリアに不潔呼ばわりされないように清潔にしておかなければ…。

隊長は威厳を持って隊員に示さねばならないからな…。

第37話：求める楽園

私はエクリアが待つ、調練場に向かっていく。

後ろからはケールとアビスを初めとする無責任な観客共が群がってくる。

……。

まあいい。

早めにこの茶番を終わらせよう。

……。

……。

…。

調練場では剣を片手に静かに佇んでいるエクリアがいた。

私が来たことに気づいたのか、感情の読めない瞳を向けてくる。

……。

これが私を不潔や化け物呼ばわりして慌てふためいていたエクリアなのか？

全然雰囲気が違うぞ！

「さあ、閣下。剣を抜いてください…」

エクリアは私に剣先を向け、剣を抜くように促す。

「私に剣を抜かせてみせろ…」

ここは隊長の威厳を見せつけるために敢えて挑発してみるのもいいだろう。

私がここでエクリアを倒せば、隊長としての威厳が鰻登りとなるはずだ。

それが出来たら、後は全部ケールに丸投げとしよう。

私には戦闘力があっても部下の教育なぞ無理だからな…。

「その言葉、後悔させてみせます！」

エクリアが剣を掲げた途端に稲妻が降り注いでくる。

私は一歩後ろに下がって稲妻を避け、エクリアを見据える。

……。

かなり危険な魔法を使ってくるようだ…。

相手が私でなければ、死んでいたな…。

「よくかわしましたね。では、これはどうですか！」

エクリアが掲げている剣に稲妻が降り注ぐ。
剣に稲妻の力が宿り、目映く輝いていく。
「エクリアの得意技の魔法剣か。まあ、教えたのは僕だけどね…」
ケール、何て物騒な技を教えたのだ！
これでは触れただけでも感電死してしまうぞ！
剣を抜かなくて正解だったのかもしれない…。
剣で受け止めたら、感電死は間違えないだろう。
「では、参る！」
エクリアは物騒な魔法剣を振るって突撃してくる。
本当は逃げまくって相手が疲れたところを畳みかける戦法を取りたいところだが…。
私は観客共を見渡す。
隊員達が見ている前でそんな無様な戦法を取れば、勝利を収めても尊敬されないことは確実だろう。
正々堂々と正面からエクリアを討ち破らねば意味が無いのだ。
……。

痛いのは嫌いだが、致し方ないか…。

魔法剣の威力はどう考えてもケールの方が遙かに上だ。

だから、私は敢えて痛い目に合うことにする。

隊長としての威厳をエクリアに骨の髄までに染みこませていくためだ…。

「はっ！」

エクリアが剣を振るい、稲妻が刃となって私に迫ってくる。

私は僅かに身体を反らして稲妻の刃を回避し、エクリアに向かって迫っていく。

「なっ！」

エクリアは猛然と迫ってくる私に息を呑み、斬り捨てようと剣を魔法剣を振るってくる。

両断しようと迫ってくる魔法剣に私は息を呑む。

ケールとの戦いで発揮した火事場の馬鹿力を今ここに！

私は魔法剣を鷲づかみして止める。

身体に凄まじい痺れが襲ってくるが、耐えられないほどではない！

「そんな！私の魔法剣を素手で…がふっ！」

「終わりだ…」

私の拳がエクリアの溝にめり込んでいた。

「馬鹿な…くぅ…」

エクリアは力尽きて私の身体に覆い被さる。

そう言えば、エクリアの体格も私よりも大きかったのか…。

つくづく背丈が欲しいと願ってしまうものだ…。

「本当に君は規格外だね。僕のときといい、普通、魔法剣を素手で受け止めようとはしないよ」

「まあ、主が一番の化け物だということは分かっていたけど…」

何故、可哀想な者を見るような目つきでいるのだ？

私は観戦していた隊員を見渡す。

その目に映っているのは尊敬の眼差しではなく、突然変異体を見るような訝しげな目つきだった…。

私は何を間違っていたというのだ…。

これでは規格外のただの変態ではないか！

「うっ…閣下？」

私に寄りかかっていたエクリアの意識が戻っている。

随分と復活が早いな…。

「目が覚めたか？」

「あっ…小官は閣下に負けたのですか…」

私は無言で頷き、エクリアを立ち上がらせる。

さてと、今晩のために念入りに身を清めないといけないな…。

「小官の完敗です。ですが…」

何だかエクリアの目から怒りの炎が垣間見えたぞ…。

「何だ？」

「何て無茶なことをしているのですかっ！」

ぬおっ！

いきなりのエクリアの怒声に心臓が止まりそうになったぞ！

「閣下が規格外の実力者であることは認めます。ですが、魔法剣を素手で受け止めるとは自殺行為にも等しいです！失礼ですが、お手を拝見させてもらいます！」

エクリアは焼けただれている私の手を見て唖然とし、さらに激しい怒りの瞳で私を睨みつけてくる。

「こんな酷い傷を負ってしまって…。閣下！普通の方々では剣を持てなくなるほどの重傷なのですよ！分かっているのですか！これは戦争ではありません！ただの模擬戦に過ぎないのです！戦場では名誉の負傷だと讃えるでしょうが、模擬戦でこのように負傷するのはただの馬鹿です！大馬鹿です！」

面と向かって馬鹿を連呼されたのは初めてだ！

しかも、訂正されて大馬鹿とまで言われてしまったぞ！

「いいですか、閣下！貴方様が平気でもこのような無惨な傷を負えば、兵士達の士気に大いに関わります！貴方様は小官を始めとする隊員三十名の命をお預けしているのです！そこをもっと自覚してください！さらに言えば、ヒュプノス殿下に秘蔵と言われていることから今やヴァルキリアの中枢を担っていると言っても過言では無いのです！貴方様の安否が国の行く末に…」

……。

私はエクリアの前でいつの間にか正座をしていた…。

何故かそうしなければいけない気がしたからだ…。

「そもそも閣下のそのお姿は兵士達に無駄に恐怖を与えてしまうことを理解しているのですか！兵士達に希望をお与えするどころか恐怖を与えて、士気を下げるとは言語道断です！他にも副隊長に対しても私生活であるならともかく、せめて兵士達の前では毅然とした

態度で…」

誰か助けてくれ…。

身体から魂が抜け出てしまいそうだ…。

それにしても私の服装はそれほど恐かったのか？

私には格好良いと思ったのだが…。

「聞いているのですか！閣下！」

「はい…」

何故、私はここまで怒られなければならないのだ？

だが、不思議と逆らうことが出来ない…。

私はケールを見る。

ケールは私を見て、意地の悪い笑みをしている。

『それは後のお楽しみさ…』

これが貴様の言っていた後のお楽しみというものなのか！

「副隊長、何を笑っているのですか…」

ケールが私を見て笑っているのに気づいたのかエクリアの矛先が私から逸れていく。

エクリアの冷たい視線が向けられ、ケールの笑みが消えていく。

ケール、貴様にも地獄へと付き合ってもらうぞ…。

「えっ…僕はただ…」

「ケール副隊長、本来なら貴女様が閣下の暴走をお止めする役目なのですよ！そういえば私が閣下に決闘を挑むときでもお止めすることなく傍観していましたね！副隊長は部隊の中で誰よりも冷静に戦況を見定めて、隊長を支えるものです！それにもかかわらず傍観して混乱を助長させるとは何事ですか！副隊長は昔から…」

……。

私の隣にはケールがいつの間にか正座をしていた。

「閣下も副隊長もヒュプノス殿下と同様にこのヴァルキリア帝国を支える柱となっているのです！柱が崩れれば、国が崩れるには必定！もはやご自分だけのお命では無いのです！お二人の双肩はヴァルキリアに住まう民の命がかかっているのですよ！小官等隊員一同は剣となり、盾となってお二人のお支えする所存です！ですから閣下も副隊長もその身をヴァルキリアに尽くすように誠意を持って…」

……。

「小官は閣下と副隊長に心より忠誠を捧げているからこそ申し上げているのです。上官たる者は時に優しく、時に厳しく接することで部下と信頼関係を構築していくのです。副隊長が親しみの持てる態度で部下と接するのは大いに結構なことです。小官もそんな副隊長

の態度は嫌いではありません。むしろ好意が持てます。しかし、何事もけじめをつけることが大切です。無用な甘さは部下に堕落を与えてしまい、軍紀の乱れに繋がります。そうなれば…」

……。

足が…。

痺れる…。

「閣下が漁色家であることはこの際何も申しません。互いの同意があれば、いくらでもご自由にしてもかまわないでしょう。ですが、公私の区別は付けてください。この国は女尊男卑が色濃く浸透しています。男性である閣下の視点からすれば、実に下らなく古臭い伝統だとお思われることでしょう。しかし、それがこの国の実態なのです。今でこそヒュプノス殿下のご威光で見逃されていますが、余り度が過ぎると最悪の場合、去勢させられ、生涯男の喜びとは無縁になってしまうことになります。ご理解頂けますか？」

私は思わず股間を押さて何度も頷き、隣で正座しているケールを見る。

……。

いつも不敵な笑みを浮かべているケールも憔悴した表情で項垂れているぞ！

あの狂女神ケールをここまでの醜態に晒させるとは…。

げに恐ろしきはエクリア・レイラント元親衛隊長…。

さすがはヴァルキリアの恐怖の象徴ヒュプノスの片腕なだけはある…。

もしかしてヒュプノスはエクリアの説教に耐えかねて私の元に左遷させてたのではなかろうか…。

十二分にありえる話だ…。

「さてと前置きはこれぐらいにして本題に入らせて頂きます…」

今の今までの説教が前置きだと！

ケールの表情には絶望が彩っている…。

「まずはヴァルキリア帝国の歴史についてご説明します。建国者であり、初代皇帝となられたカオス・ヴァリキリアは当時の男尊女卑の仕組みに疑問を抱き、女性による女性のための楽園を築こうとしたのが、そもそもの始まりでした。カオス様は世界の半分を占める男性に対して宣戦布告し、付き従う女兵士と共に世界に戦乱をもたらしました。それが世界を二分する大いなる戦い、後に聖戦と呼ばれるものでした。数十年にも及ぶ激戦を経て、ついにカオス様は女性による楽園を造り上げたのです。それが今のヴァルキリア帝国となります」

なぜ、いきなり歴史の話になってくるのだ！

「カオス様はまさしく神の如き、力を持っていたと言われています。当時、カオス様はこう仰いました。『我は神を見た。白く美しく、男でも女であるような不思議な存在を…。彼女は我にアーテーと名

乗ったのだ』アーテーという存在が果たして神なのかどうかは誰も分かりません。民の支えとなる信仰を生み出すためにカオス様が造り上げた偶像とも言われています。ともあれ、アーテーという存在はヴァルキリアが信仰する神として崇められることになったのです。つまり小官が言いたいことは閣下と副隊長は偉大なる先人が築き上げた歴史を背負うことに…」

私はもうエクリアの説教は聞こえていなかった。

ヴァルキリアが信仰している神がまさかアーテだったとはな…。

まさか、私がその崇拝されている神に無理矢理婚約者に仕立てられてるとは天地が裂けても誰も思いつかないだろう…。

建国者のカオスはもしかしたら私と同様に最強の力を得ていたのかもしれないな…。

……。

ふと思った。

カオスはその最強の力を持って女の楽園を築き上げたと仮定しよう…。

そして、私もまた最強の力を持って酒池肉林の世界、即ち私が求める楽園を築き上げようとしている。

果たしてカオスが造り上げた楽園と私が造り上げようとする楽園に違いがあるのだろうか？

まさか私は自分が造り上げる酒池肉林の世界が第二のヴァルキリア帝国となることを恐れているのか？

……。

何を恐れることがある！

私は私による私のためだけの楽園を造り上げるのみだ！

ヴァルキリア帝国のような物騒極まる国を造り上げるつもりは毛頭無いぞ！

……。

私は絶対にカオスと同じ楽園を作らない…。

私はカオスとは違う…。

違うのだ…。

……。

……。

……。

……。

…。

「以上です。ご理解頂けましたか？閣下、副隊長…」

エクリアの地獄の説教はついに終焉を迎えたのだった…。

「はい…」

「猛省しています…」

ケールには生気の欠片も残っていなかった…。

そこにいるのはただの生ける屍のみ…。

「あの…閣下…」

先ほどの覇気がある声とは打って変わっての汐らしいエクリアの声だった。

「夜を…お待ち…しています…」

「そうか…」

エクリアは顔を赤く染め、背を向ける。

「では、失礼！」

走り去っていくエクリアの姿を見送り、私とケールは空を見上げた。

いつの間にか日が暮れかけていた…。

観戦していた隊員達は既に城の中へと帰っていた…。

烏の鳴き声が何とも哀愁を感じさせてくれる…。

「勝負に勝って、戦いに負けた感じね…」

足が痺れて動けない私とケールを呆れた目で見つめてくるアビス。

「とりあえず、お疲れ様…」

アビスはお茶を差し出してくれた。

私はお茶を啜り、ため息をついた。

ケールはお茶を受け取っても魂が抜けたように呆然としたままだ…。

よほどエクリアの説教が応えたと見える…。

当分は大人しくなることを期待しよう。

それよりもエクリアだ。

彼女はエル以上に厄介な存在になることは間違えないだろう。

不謹慎だが、この時ばかりはエルが人質になってくれて良かったと思ってしまう。

エルとエクリアが一緒になった光景なぞ想像もしたくない！

……。

まあいい。

まずは目先の楽園についてを考察するとしようか。

今宵はエクリアと共に閨で過ごすことになる…。

願わくば、彼女が受けのままでいてくれることだ…。

そろそろ床でも私が最強であることを示さねばならないからな…。

隊員であるエクリアにはせめて優位に立ちたいものだ…。

私が今宵の夢に馳せていている間にアビスはケールを背負って城の中へと歩いていた。

「アビス、私も運んで…」

「ケールを運ぶのに精一杯よ。悪いけど、一人で何とかして。それと今夜はエクリアとせいぜい楽しんでね！」

……。

仕方ない…。

自力で城の中に戻るとしよう。

……。

足の感覚がまだ戻らない。

這いずっていくしかないのか…。

目の前の城が遠く見えてしまう。

城の中にはエクリアが待っているのだ！

全身の皮がすり切れても這いずって見せようぞ！

……。

風が冷たく私に吹き付けてくる…。

楽園への道は果てしなく遠いな…。

第３７話：求める楽園（後書き）

次回もいつも通りに日曜か土曜深夜に更新するつもりですが、万一出来なかったら場合はすいません。御感想お待ちしています。

第３８話：エクリア

「はぁ…はぁ…」

何とか寝室まで辿り着いたぞ…。

……。

気のせいだが、やけに障害物が多かったのが気になったな…。

私が這いずっていく先になぜか元気になったケールが私を拉致したり…。

不機嫌になっているアビスにはその場で搾り取られたりと…。

……。

まあ、それはそれで悪くはない…。

いささか腰が痛くなったが…。

さらに言えば、全身が気だるくて仕方ない…。

……。

実はあまり良くないのかも知れない…。

今の私には全身を構成する命の液が限りなく不足している。

このままエクリアとの約束を果たしてしまえば、二度と戻れぬ天国へと旅立つのは確実だ。

仕方ない…。

今夜は打ち止めにしようか…。

天国を味わいたいが、天国へと旅立つのは御免だからな…。

この機会を逃すのは遺憾ともし難いが、エクリアは一応私の部下だ。

生きていれば、いつか再び機会が訪れることを私は信じている。

その日のために私は生き続けようではないか！

……。

さて、自己完結したところで寝るとするか…。

エクリアには明日に詫びでも入れよう。

まあ、エクリアも初対面の私に処女を捧げなくても良いと思い、泣いて喜ぶことだろう。

あれはヒュプノスの所で積み重なった心労によるものだ。

ここで養生すれば正気に戻ることになる。

それからゆっくりと交流を深めるとするか…。

……。

……。

……。

…。

「これが閣下の…素顔…」

……。

「こうして…見てみると子供ですね…」

……。

「この方が…私の…初めて…」

……。

「閣下。もしかして…寝てる？」

誰だ？

「ふっ…ふふふっ」

この不気味な笑いはいったい？

「まさか寝ているとは…。小官がいかに気合いを入れて、閣下の部屋に突貫したというのに…」

エクリアの声だ！

「寝ていたとは…ふふふふふっ…ははははははははっ…」

……。

ここは起きて謝るべきなのか？

さて、ここで選択肢を提示しようか。

まず第一にこのまま寝たふりをする。

……。

一応、部下だからいくらなんでも寝首をかかれることはないだろう。

次の日には…。

『女性の約束を忘れるとは何事ですか！閣下はもう少し女心を学ぶべきです！いいですか、閣下！かつて女性はこのヴァルキリア帝国が建国される以前は…』

早朝の説教地獄が待ち受けているだろうな…。

第二に素直に起きて謝る。

……。

『女性が一大決心をして部屋に訪ねたというのに寝ているとは何事

ですか！それは女性に対して失礼というものです！いいですか、閣下！女性というものは…』

寝室で説教地獄を受けてしまうだろうな…。

……。

これではどちらを選んでも説教地獄を受ける未来は変わらないぞ！

考えるのだ、ロスト！

これから先にある精神的安寧を勝ち取るためにも！

……。

第三に言葉を交わさず無理矢理やって有耶無耶にする。

……。

これはかなり勇気がいる…。

下手すれば、いや、これをやると私は人として堕落してしまいそうな気がするからだ。

ん？

人として堕落だと？

私は酒池肉林を目指している男だぞ！

私の夢は人として堕落していると自らで認めてしまうことになるのだぞ！

それは否！

断じて否だ！

……。

愛があれば、結構なことなのだ！

百人だろうが、千人だろうが、愛さえあれば問題無い！

それに…。

「済まないな、貴様を抱けることを夢見ているうちに寝入ってしまったのだ…」

「閣下？きゃあ！」

私は怒り心頭しているエクリアを強引に抱き寄せる。

「夢の中の貴様はなかなか激しかったぞ…」

「えっ！あ、あの…」

そして、恋人にささやきかけるような甘い声…。

……。

やっていて苛々してきたぞ…。

なぜ私がこんな軟派野郎の真似事をせねばならないのだ…。

だが、これも私の命の液を守るためだ。

私の大いなる命の液はケールやアビスの搾取され、もはや風前の灯火となっている。

ここは絶対死守なのだ！

「貴様に私の子種を身ごもって欲しい…」

逢ってからまだ一日目だというのにこれほどまでに厚かましい言葉を吐く男はそういないだろう。

しかも、子種とは我ながら生々しいものだ…。

だが、その生々しさにエクリアは女としての恐怖を覚え、部屋から立ち去ってくれることだろう。

「閣下…本気で…言ってるのですか？」

エクリアは恐怖に震えながらも気丈に答えてくる様子だ。

さすがは元親衛隊長というべきか…。

だが、これで止めだ！

「冗談だと思うのか？貴様は今宵生まれ変わるのだ。私の者として

な…」

低く威圧的な声。

圧倒的な存在感。

まさに完璧だ！

今の私であれば、役者で世界を狙えるかもしれないな。

さて、どう出るか？

……。

「構いません。小官は今宵より閣下の者、髪の毛の一本から血の一滴まで全て閣下の者です…」

凛とした清々しいほどの明瞭な答え。

……。

これは予想外の展開だ！

確かに、いや、非常に嬉しいことだが、今の私は命の源が薄れつつあるのだ…。

下手すれば、ここで腹上死となり、生涯が閉じられてしまう。

何か企んでいるのか？

良かろう！

ここは一つ、本音で語り合おうではないか！

「本気で言っているのか？」

私は探るようにエクリアに問う。

そんな私にエクリアは宛然と笑っていた。

「閣下はどうやら小官を見くびっているようですね…」

エクリアの手が私の肩に触れた途端にいきなり押し倒されてしまう。

「…っ！」

「小官は酔狂で自分の体を賭けたりはしません。以前から閣下のことは存じていましたよ。ロット様、いえ、ロスト様…」

……。

なぜ、ばれたのだ？

いや、彼女はあのヒュプノスの直属だった者だ。

知らない方がおかしいというわけか…。

「そう、殿下に閣下がロスト様であると告げたのはこの小官。小官は閣下があのタナトス様と一騎打ちをされたお姿を拝見しているのですから…」

「何が目的だ？」

エクリアの漆黒の瞳に私の姿が映る。

彼女の真意はいったい何のだ？

私を籠絡するつもりなのか？

籠絡されるのは大いに歓迎だが、対価が大きければ話は別だ。

「ご心配なく。これは小官の個人的な興味です。あのヴァルキリアで最も勇猛果敢で有らされたタナトス様を討ち倒した男。それに興味を抱いた、それだけです」

「興味を抱いた、か…」

興味を持った程度でここまで歓迎してくれるのだろうか？

ますます怪しいな…。

「閣下への興味は尽きることがなかった。あの冥府の御使いであるパラディスムを従えたこと。そして、何よりもあのケール様をも虜にした閣下の強さにいつしか惹かれていたことに気づいたのです…」

エクリアの艶やかな唇が私の鼻先に近づいてくる。

……。

枯れかけた私の命の源が再び溢れてくるのを感じた…。

「ケール様は小官が知る中で一人を除く限りでは最強の戦士。しかも、強豪揃いであるあの閉ざされた空間で見事勝者となられたのです。閣下に敵う者はもはや地上には存在しないでしょう…」

「それは買いかぶりだというものだ…」

実際、あの地獄のような戦場では何度か死にかけたことがあった。

ケールとの戦いでもエリスの歌声が無ければ、恐怖に押しつぶされていただろう。

私は土壇場の火事場の馬鹿力を発揮して、危機を脱しているに過ぎないのだ。

「小官は買いかぶってはおりませぬ。ケール様やアビス殿を見ていれば分かることです」

「どういうことだ？」

エクリアの吐息が鼻先を湿らせていく。

今でもエクリアの唇が私の鼻に触れてしまいそうだ。

「ケール様はエリス様を失われてからは残酷な狂女神としてヴァルキリアで畏怖された存在。そして、アビス殿はヴァリキリアの暗部として反乱分子を冷徹に刈り取ってきた暗殺者。その二人がこうして日の光を浴びて、笑顔を見せている。そして、以前よりもさらに美しくなられている。二人を変えたのは紛れもなく閣下なのです…ちゅ」

とうとうエクリアの唇が私の鼻を包み込むように口づけていく。

そして、枯渇してはずの私の命の源は充満し、男の証が復活する。

「ちゅば…小官が尊敬する方はエリス様、タナトス様、そして、ケール様の3人でしたが、今宵一人付け足されることになります。ちゅる…」

エクリアは私の鼻の頭を唇で包み込み、吸い付いていく。

「ふぅ…しかも、尊敬する人が男となれば、やることはただ一つ」

エクリアは押し倒されている私の腰に跨り、服を脱ぎ捨てていく。

「もう言葉は不要でしょう、閣下…」

……。

溢れんばかりの豊満なる胸。

磁気のように滑らかな肌。

男を誘う流し目。

……。

命の源が尽きようとしているだと?

目の前にこれほどの美の化身が降臨しているのだ!

男には命を賭けてでも挑まねばならぬ戦いがある…。

今まさに私はその戦いに直面している…。

命がけの戦いに全力を尽くしてやろうではないか！

この程度の戦いに生き残れずにして何が酒池肉林だ！

「言葉は不要と申しましたが、一つ覚悟していただきたいことがあります…」

「何だ？」

早く言え！

私の男の欲望は今まさに弾けんばかりに膨張しているのだ！

「乙女が重大決心をして訪ねたにも関わらず、閣下が眠り惚けていた件についてです…」

自分で乙女と言い切るところが侮れないな…。

「小官は軍人である前に女です。ですから、このような屈辱は到底看過することはできかねます。故に…ふぐっ！」

ぬおっ！

私の男の証がいきなり、エクリアの中へと監禁されてしまう！

「ふっ…ふふっ…これがケール様やタナトス様を貶めた閣下の剣ですか。なるほど、女泣かせとはこのことですね…しかし…ふぬっ！」

ぐおっ！

男の証がエクリアの中で締め付けられていく。

「苦しいですか、閣下。小官の中で存分に泣き叫ぶといいですよ…」

うぐっ！

私の腰に跨り、凶悪な笑みを浮かべている女がいる…。

「これは懲罰です。閣下に惚れた哀れな女が下す甘美で苦痛に満ちた懲罰。謹んでお受け下さいませ…」

ぐはっ！

「良いことをお教えします。ヴァルキリアでは男の飼い主となる女は男をこのようにして去勢していくことを慣わしとします…」

……。

……。

……。

……。

……。

…。

何ですと？

「これで男は自らの証と心がへし折られ、生涯飼い主に忠誠を誓うことになるのです。良かったですね、閣下。小官が閣下に忠誠を誓っていて。そうでなければ、すでに私の下のお口に噛みちぎられていたことでしょうね…」

……。

エクリアはやはりあのヒュプノスの側近だ…。

途轍もなく恐いぞ！

私の怯えに気づいたのかエクリアは一層強く締め付けてくる。

「毅然となさいませ、閣下！それでは部下が付いてきませぬぞ！」

ぐえっ！

そんな物騒な部下になんぞ付いてもらわなくて結構だ！

「小官の上官になったからにはせめて殿下以上の威厳溢れる方になってもらわねばないけませぬ！」

あの恐女以上に威厳溢れるとは冗談ではないぞ！

「ヒュプノス殿下も教育の成果があって、今では見違えるほどに立

派になっています。さあ、閣下も殿下に続くのです！」

ぐはぁあ！

ぐっ、何たることだ…。

私はこの女を甘く見すぎていたのかもしれない…。

あの残虐無道を地でいくようなヒュプノスを育て上げた者が目の前にいる…。

戦乱の世を導いた元凶が私の腰に跨っている！

「エクリア、待て…」

「教官と呼べ！」

へぶしっ！

いきなり頬を叩かれてしまったぞ！

「ここでは貴様が下士官で私が上官だ！口を慎め！ロスト！」

口調が変わっている！

しかも、私が下士官にされてるぞ！

「私には信託された名がある。オネイロス、アーテー神より賜し、神聖なる名。貴様だけには教えてやろう。光栄に思え…ちゅ」

むぐっ！

エクリア、いや、オネイロスに唇を貪られながらも私は考える。

今更ながら、なぜヒュプノスがあそこまで冷酷な女になれたのか…。

目の前にいる女が全てを仕組んでいたからだ…。

これもまたアーテに送り込まれた手札の一つということか…。

つくづく油断のならない神様だな…。

だが、正体が分かったからには負けるわけにはいかない！

私は跨っているオネイロスを引き倒して、逆に押し倒していく。

「きゃあ！な、何をするか！貴様！私は貴様の上官…」

「黙れ…」

エクリア、改めオネイロスは唖然とした目で私を見ている。

私が戦場のみならず床の上でも隊長であることを示さねばなるまい…。

「私こそが貴様の上官だ。異論は認めん」

私の尽きかけた命の源を限界までぶち込んでやるぞ！

「ぐっ！生意気な！私こそ貴様の…あぐっ！」

男の証が容赦無く、オネイロスを貫き続けていく。

これこそが隊長の威厳というものだ！

涙を流して思い知るといい！

「ああっ！そんな、激し…過ぎる！あぁ…あああああああああっ！」

……。

……。

……。

……。

…。

「申し訳有りません、閣下。つい悪乗りが過ぎました…」

エクリアは私の胸にしなだれかかってくる。

私は何とかオネイロスに勝利した。

危うく私はヒュプノスと同じような性格に矯正されかかったのだ。

「閣下はやはり殿下とは違う。アーテ様が目を付けただけはあります…」

「アーテは何が目的だ？」

オネイロスはアーテーでなく、愛称のアーテと言った。

だとすれば、オネイロスとアーテはただならぬ関係であることに間違え無いだろう。

「アーテ様の目的は小官も存じません。ただ…」

「ただ…何だ？」

オネイロスは少し体を震わせていた。

「あの御方は常に何者かと肩を震わせながら戦っているように見えました…」

あのアーテが肩を震わせながら何者かと戦っていたこと。

それはすなわちアーテよりも恐ろしい存在がいるという意味だ…。

いったい何者なのだ？

これ以上私の心労を増やす相手が出て来て欲しくないぞ…。

「アーテ様は小官以外にもすでに三つほどの手札を用意しています。一つ目はオイジュス、戦闘力に関しては恐れるに値しませんが、不思議な力を秘めていると言われています。次にモーモス、彼女は…ケール様とタナトス様を打ち負かした閣下であれば、何とかなると思われます。そして、三つ目は正確にはアーテ様の手札ではありま

せん…」

オネイロスは一旦言葉を句切ってしまう。

何を勿体づけている？

「先ほど小官が言っていたことを覚えていますか？ケール様について話していたことを…」

私はオネイロスがケールについて話していた内容を思い返してみる。

『ケール様は小官が知る中で一人を除く限りでは最強の戦士。しかも、強豪揃いであるあの閉ざされた空間で見事勝者となられたのです。閣下に敵う者はもはや地上には存在しないでしょう…』

……。

聞き逃してはならない言葉が見つかったぞ…。

ケール様は小官が知る中で一人を除く限りでは最強の戦士。

一人を除く限りでは最強の戦士。

一人を除く限り…。

……。

つまり、ケール以上の化け物がその三つ目の手札なのか？

私の無言の視線に気づき、オネイロスは頷く。

「私とケール様、今は亡きエリス様、殿下、タナトス様は少なくともアーテ様の加護を受けて、人から神格化された存在です。ですが彼女は…」

オネイロスは震えているのを感じる。

これは寒さで震えているのではない。

恐怖により震えているのだ…。

「モロスは神でありながら、敢えて人としての生を歩んでいる者です。いわば、アーテ様と同格の存在なのです…」

……。

モロスはアーテと同格の存在…。

気が付いたら私もオネイロスと同様に震えていた。

「彼女はヴァルキリア帝国が唯一屈服させられた国ビフレスト皇国の将軍であり、一人軍隊、戦争屋、殺戮自動人形、戦場の人形使い、白い断罪者と恐れられた存在です。何よりも…」

オネイロスは再び口をつむぐ。

まだ、言い辛いことがあるのか…。

「ヴァルキリア帝国はモロス一人に敗北したようなものです。なぜならば、ヴァルキリアが誇る女傑、タナトス様とケール様の二人が

かりでも歯が立たなかったのですから…」

あの化け物が擬人化した存在のタナトスとケールの二人がかりでも敵わなかった相手だと！

モロスとはそこまで危険な存在だというのか！

「彼女がなぜ神でありながら人として生きているのかは分かりません。ただ、彼女は何かを探し求めているとアーテ様は仰いました…」

「私には関わりないことだ…」

出来ることならば、一生お目に掛かりたくない女だな…。

ケールやタナトス以上の化け物女なぞ恐ろしすぎるぞ…。

「いいえ、閣下はモーモスとオイジュスはともかく、少なくともモロスとは必ず出会うことになります」

「なぜだ？」

よりにもよって一番逢いたくない者と必ず出会うことになるだと！

アーテめ！

どこまで私を嬲るつもりなのだ！

「言ったはずです。モロスはビフレスト皇国の将軍であると。そして、ヒュプノス殿下はいずれビフレスト皇国に宣戦布告するつもりでいるようです」

「敗北を味合わせれた国に対して随分と強気だな…」

モロスに辛酸を嘗めさせられたはずなのになぜ宣戦布告をするのだ？

ヒュプノスは何か策を考えているのだろうか？

「殿下がビフレストに宣戦布告する決心がついたのは閣下が原因ですよ」

「何？」

私が原因だと？

ビフレスト相手に国際問題を起こした覚えは無いのだが…。

そんな私を余所にオネイロスはため息を付いて理由を説明してくれる。

「本気で分からないのですか？ヴァルキリアを代表する女傑二人を打ち負かし、かつ殿下で育成していた狂戦士等が集う閉ざされた世界で生き残った傑物。それが今の閣下の評価なのですよ。いずれ閣下はモロスに対抗しうる対ビフレストの切り札として祭り上げられることになるでしょう」

私がヴァルキリアの旗頭として担ぎ上げられるだと…。

それでは脱国することがますます出来なくなってしまうではないか！

なるほど…。

それでヒュプノスは私の実力を図るためにあの禄でもない遊戯に参加させたわけなのか…。

私がモロスに勝てるかどうかを見極めるために…。

「閣下の実力は間違えなくモロスと同等あるいはそれ以上のものでしょう。さらに言えば、例えモロスに及ばなくても足止めするぐらいの戦闘力があれば、それだけでヴァルキリアの勝利が約束されます。軍全体の練度は我が国の方が圧倒的に上ですからね」

何て事だ…。

私はビフレストの最終兵器モロスを打ち倒すためにこのヴァルキリアに囚われたわけなのか…。

ヒュプノスは宿敵ビフレストを討ち果たすと同時にケールやタナトスに代わる私という最終兵器を手に入れるために事を進めていたわけだ…。

私に残された時間は少なくなりつつある…。

何とかヴァルキリアとビフレストとの戦争が勃発する前に脱国しなければ…。

そのためには人質として囚われているエルを何とかして救出しないといけない…。

ここでエルを見捨てるという選択肢もあるが、それを選ぶと私は二度と酒池肉林の夢を抱けなくなってしまう気がする。

だから、エルを見捨てるという選択肢は除外する。

私は馬鹿で臆病だが、家族は決して見捨てはしない。

……。

ふとオネイロスが私を抱き寄せてくる。

「申し訳有りません。このような場に相応しくない話をしてしまいました。どうも小官は無駄に口が動いてしまうようです。どうか、無駄口の多い小官の口を塞いでいただけないでしょうか？」

オネイロスは目を閉じて、私に口を寄せてくる。

「小官はもはや閣下に従うのみです。戦場でも、床の上でも小官がお慕いする閣下の御心のままに…」

私は言われるがままにオネイロスに口づける。

オネイロスは私の頭を掴んで夢中に唇を擦り付けていく。

「あむっ…びちゃ…ぷちゅ…ちゅぱ…」

……。

オネイロスの唇が私の不安を包み込んでくれる。

これは極上の唇だ…。

「ちゅ…閣下、あむっ…今までの無礼を…ちゅぱ…お許し下さい。んっ…小官の体はお好きに扱おうとも…はぁ…抵抗致しませぬ…ちゅう」

「ここには小官も閣下もいない。ただの男と女がいるだけだ…」

精力がみなぎってきた男の証を思いっきりオネイロスに刻みつけていく。

「あうっ…くぅ…私を…どうか…今まで通り…エクリアと…オネイロスはあくまで信託名ですから…」

「ならば、今は私のことをロストと呼び捨てろ…」

最強の力ゆえか、急激に溢れてくる力がエクリアの体を容赦無く打ち付けていく。

もはや誰も私を止められぬわ！

「あぁ…閣…ロスト！ああ！ロスト！愛しています！運命なんて関係無い！小…私は貴方に一生付いていきます！あああああああっ！」

「うおおおおおおおおおおっ！」

……。

……。

……。

……。

……。

…。

私は危ない女に目を付けられることが多い。

だが、裏切られたことは一度として無かった。

例え、この出会いが神によって仕組まれたものであっても、それは単なる切っ掛けに過ぎない。

私は神から与えられた最強の力があるからこそ絶世の美女と出会えるのだと既に割り切っているのだからな…。

それならば神が紡いだ運命をも飲み込み、私の色に染め上げればいいだけのことだ。

神の手札であろうと、関係ない。

感謝するぞ、アーテ。

貴様は私の酒池肉林の構成員をわざわざ斡旋してくれているのだからな…。

私に何をさせたいのかは分からないが、利用しようと企んでいるのは確かだ。

ならば、私も貴様が紡ぐ運命を利用しようと文句は無いだろう。

「ロスト…愛しています…」

私は隣で可愛い寝言を言うエクリアの茶髪を撫でる。

エクリアも私の大切な家族として迎えよう。

酒池肉林の世界実現へと着実に進んでいる。

私はこのまま突き進むのみだ。

とりあえず、恒例の台詞で魅惑的な夜を締めくくろうか…。

……。

燃え尽きたな…。

第３９話：団欒

『手札は再び動き出す…』

……。

『次は三つの手札よ…』

……。

『だが、一つ目はさしたる問題ではない…』

……。

『問題は二つ目…』

……。

問題は二つ目だと？

問題は三つ目ではないのか？

『ふふっ、三つ目の手札モロスと比較してしまえば、どの手札も大したこと無いよ…』

……。

『そう、例えばケールやタナトスの手札すらもね…』

あのケールやタナトスすらも大したことが無くなるほどモロスは強大なのか…。

『言ったはずじゃ。彼女は儂と同格であるとな。そして、神でありながら人として生きている希有な存在だとも…』

……。

モロスのことはもういい。

残りの手札二つのことを教えるのだ…。

『平たく言えば、オイジュスは貴方の理想の女性かもしれないわね…』

何ですと！

『慎み深く、儚げな雰囲気を漂わせた深窓の麗女。まさに貴様の理想の女だな…』

アーテ、貴様もたまには粋な女性を用意するではないか。

貴様が用意してくる女性と言えば物騒な女ばかりだからな…。

タナトスもケールも国一つは平然と滅ぼせるほどの生物兵器と言っても過言ではない。

『くっくっくっ、汝曰く物騒な女は二つ目の手札がまさにそうだ…』

……。

『二つ目の手札モーモスは貴様が最も苦手とする面倒な女だ…』

面倒な女だと、どういうことだ？

『百聞は一見しかず。君の大好きな東洋の諺だったね…』

聞くよりは自分の目で確かめろということか…。

『そういうことだ。さて、そろそろ眠り姫は目覚めるときだな…』

突如、目の前にアーテが現れ、体格的に劣る私を抱き寄せてくる。

『ほら、王子様の目覚めの口づけだ…んっ』

ぬぐっ！

アーテの銀色の唇が私の唇を覆い尽くしていく。

『あむっ…ちゅぱ…ちゅる…ぢゅる…ちゅう』

抗えがたい甘美な唇の感触…。

これが神の口づけなのか…。

アーテの唇に吸い込まれるような感覚に陥ってくる…。

不味い！

このままでは私が私では無くなってしまうぞ！

相手が神の女であろうとも私の酒池肉林の世界では皆平等だ！
神であろうとも例外は認めん！
『きゃあ！』
私は口づけてくるアーテを強引に引き離す。
間一髪だった…。
危うくアーテに落とされるところだったな…。
『さすがは僕の血肉で最強の力を手にしただけはある。いいや、私の血肉は既に貴様の血肉に変質しているようじゃのう…』
アーテは唾液で濡れた銀色の唇で舌なめずりをしてくる。
……。
アーテのその仕草を見て私は思わず前屈みになってしまった…。
『汝の力は神をも越えよう。あるいは原初の神々にすらも…』
原初の神々？
これ以上聞けば、もう後戻りが出来なくなる予感がしてくる。
『そろそろ、お楽しみの時間は終わりか。残念だね…』

周囲がひび割れていく。

『また、逢いましょう、愛しい婚約者…ちゅ』

アーテは私の頬に口づけて崩壊していく世界と共に消えていく。

二度と会いたくないと思いたかったが、アーテもまた絶世の美女だからな…。

これが男の悲しい業というものか…。

だが、悪くはない…。

……。

……。

……。

……。

…。

私は心地良い眠りから目を覚ます。

目の前には険しい表情をしたエクリアが視界を支配していた。

……。

「お早う御座います、閣下…」

……。

なぜか分からないが、物凄く不機嫌な様子だ。

何かがあったのか？

「隣で私を侍らせながらも実に良い度胸をしていらっしゃいますね。さすがは閣下。あの閉ざされた世界の勝者であらせられますね…」

「何のことだ？」

エクリアは私に手鏡を渡してくる。

なぜ、手鏡を？

……。

猛烈に嫌な予感がしてきた…。

私はおそるおそる手鏡で自分の顔を見る。

……。

私の唇と頬に銀色の口紅が付いていた…。

さすがは神だ。

夢現の世界での出来事を現実世界に投影してくるとはな…。

「主は私達に断りも無く浮気をしていたわけなのね…」

いつの間にか部屋の中にはアビスがいた。

さすがは元暗殺者だな…。

「これはなかなかに許し難い行為だね…」

ケール、貴様もか！

「申し開きは有りますか、閣下…」

……。

夢の中で女神に接吻されたからと言っても頭が逝かれたとしか思われないだろう。

ならば、ただ一つ…。

戦略的撤退だ！

「逃がさないよ、ご主人様…」

ぬぐぁあっ！

瞬く間にケールに背後を取られ、絡みつかれてしまう。

「私の後ろを取るとはな…」

「違うよ、ご主人様。今いる位置がどこか分からないのかい？」

私のいる位置？

私はいる位置は床の上…。

まさか！

「ふふっ、ご主人様は戦闘では無双を誇るけど、床の上では最弱だからね…あむっ」

ケールに耳を噛まれ、私の背筋が震えてくる。

「ケールに耳を噛まれて感じるなんてだらしがない主ね。ほら、あんたの分身は私が世話してあげるからさっさと出しなさいよ！」

アビスが私の上に跨り、男の証を呑み込んでいく。

「閣下、これは訓練です。男たる者、床の上でも強者足り得なければなりません…ちゅ」

エクリアは私の唇に噛みつくように口づけていく。

「ちゅぱ…朝食の前菜には丁度良いね…」

「主の血肉は別腹だから心配いらないわ」

「では、閣下。御覚悟を…」

私の身体が三匹の野獣に覆われていく…。

「貪ってあげるよ、ご主人様…」

ケールは魅惑的な緑色の唇から八重歯を光らせた…。

ぎゃあああああああああああああっ！

……。

……。

……。

……。

……。

…。

「ふふっ、素晴らしい目覚めの朝を提供してくださり感謝致します、閣下」

エクリアは実に艶の良い肌を見せて爽やかな笑みを見せてきた。

「朝の準備体操としてはまあままね。気が向いたらたまにお願いするわ、主」

アビスは不機嫌ながらもどこか晴れ晴れとした表情で身支度を整えていく。

その肌はやはり艶が良くなっていた。

「ふぅ…実に美味だったよ。あやうく狂戦士だった頃に戻りそうな勢いだったね…」

ケールは実に恐いことを爽やかな笑顔で言ってきている。

あの恐ろしい狂戦士に戻るのは激しく勘弁だ…。

ケールは耳元に緑色の口を寄せて、囁いてきた。

「一度僕に食べられてみないかい？みんな最初は嫌がっていたけど、最後には自分から食べて欲しいと僕に泣いて縋ってきたりしたからね…」

……。

「ご主人様だったら最高の快楽でもって、僕の胃袋に招待してあげるよ。どうかな？」

……。

「ちょっと待ちなさいよ！そうなったら私が主を虐めることが出来なくなるじゃない！」

「小官の生き甲斐の一つは閣下を生涯に掛けて改造していくことであります…」

アビスとエクリアが庇ってくれたが、全然嬉しくないのは何故だろ

うか？

ケールは私の頬に口づけて離れていく。

「冗談だよ。ご主人様が僕の胃袋の住民になるのは魅力的だけど、二度とふれあえなくなるのは寂しいからね」

とりあえず一難去ったか…。

「食べるのは許可できないけど、五体満足ぎりぎりまでに主を食べるのはかまわないわ。そうなったときは私が看病してあげるしね…」

……。

アビスは恐ろしい提案をケールに持ちかけていた。

それ以前に私の意志はどうでもいいのか？

「小官も参加して宜しいでしょうか？」

「いいわ、私が許すから」

二人で勝手に話を進めるな！

「私は遠慮したいのだが…」

「朝食抜きにするわよ」

……。

「素晴らしい提案だ、アビス。やはり君とは仲良くなれそうだよ」

「私もよ、ケール、それにエクリア。三人で主を調教していきましょう」

……。

調教だと？

もはやこれ以上は捨てておけぬ…。

私はアビスを強引に抱き寄せていく。

「きゃあ！主、ちょっと何するのよ？」

「調教するのは私だ…」

アビスを組み伏せて無理矢理服を脱がせてやる。

「ご主人様…」

「閣下…」

私は後ずさるケールとエクリアの腕を引き寄せて両脇に抱き寄せていく。

「ごめん、調子に乗りすぎたわ！朝食抜きは無しにするから…んっ！」

私は弁解するアビスの口を塞ぎ、思うがままに男の証を貫いていく。

そして、両手でケールとエクリアの巨乳を鷲づかみして感触を楽しむ。

「閣下、お許しを…あぅ！」

「ご主人様、優しくして…ああっ！」

私は弄ばれるのはともかく侮られるわけにはいかないのだ！

酒池肉林を目指す者は女に頭が上がらなくても嘗められてはならない！

「主、私が悪かったわ！だからもう許して！」

「だめだ…」

もはや私は止まらないぞ！

はあああああああああああっ！

……。

……。

……。

……。

……。

…。

腰が痛い…。

アビスは口では「許して」と言いつつも腰使いは途轍もなく激しかった…。

ケールとエクリアはまさに戦場に生きる女として、筋力が発達しているためか、私を去勢させる程のきつい締め付けだった…。

それに噛み傷が疼いてくる…。

ケールは私に傷だらけの人生を歩ませるつもりなのか…。

私はよろける身体を鞭打ってベッドから這い出ていく。

アビスが気絶しているから朝食は無理だな。

仕方ない…。

私が朝食を作るとするか…。

最強の力を得る前までは家の台所の大将として猛威を振るった者だ。

久しぶりに故郷の料理を作るのも悪くないだろう。

さて、食料庫を漁るとするか…。

……。

……。

「何かいい匂いがするから来てみたら、主！」

アビスは私が用意した料理に驚いているようだ…。

…。

もっと驚くがいいぞ…。

「どうしたのかな？アビス。ん？これはまた…」

ケールもアビスと同様に驚いている。

これを機に私よりも料理に食欲を向けて欲しいものだ…。

「閣下にこのような人間らしい特技があるとは知りませんでした…」

エクリア、貴様には懲罰をくれてやるぞ…。

私は皆の目に見えないようにエクリアが座るであろう席にある料理にある調味料を混ぜていく。

「私の故郷に伝わる料理だ。堪能してくれ」

三人は即座に席に着いて食事を取っていく。

「この料理は私の故郷に通ずるものがあるわ。今度から交代制で食事当番にしても…いいですか…主…」

アビスは調教が利いているのか少々敬語で私に伺ってくる。

少しやりすぎただろうか…。

「口調はいつも通りでいい。そうだな。私も料理が好きだからそうしようか」

「やったぁ！これで私も楽に出来るわ！ありがとう、主！ちゅ！」

アビスは私に抱きついて頬に吸い付くように口づけてきた。

どうやら機嫌が直ったようだな。

「確かにご主人様の食事は美味しい。だからといって…」

ケールもまた私の身体に抱きついてくる。

「ご主人様への食欲は変わることはないよ…ちゅ」

ケールの口づけを頬に受けながらも私はため息を付く。

当分は傷だらけの人生を歩むことになるのか…。

だが、不思議と嫌な気分ではなかった…。

……。

誤解するようだが、私は断じて苦痛から快楽を求める性癖は無いぞ！

「はらい！はらい！はっは！ないをいへたのれふか！」

エクリアは口を押さえて、私に不満を言ってきている。

翻訳すると「辛い！辛い！閣下！何を入れたのですか！」だな…。

「エクリア、貴様の食事には歓迎を兼ねて、東洋の秘伝ワサビという高級品で混ぜておいた…」

「ちゅば…聞いたことがあるわ。物凄く辛い調味料として有名ね」

アビスは私に口づけながらもエクリアに解説していく。

「はっはぁあああ！」

エクリアが声にならない怒声を発していく様子を私は心地よく見ていた。

これで少しは心を入れ替えてくれれば問題無しだ。

「ゆるひまへん！はっはぁ！」

ぬおっ！

エクリアが憤怒の形相で正面から私に抱きついてくる。

「はっはもほないめにあっへもらいまふ！ちゅう！」

ぐおっ！

エクリアが私の唇に自分のそれを押しつけてくる！

「ちゅる…むぐっ…もごっ…」

ぬあっ！

しかも、口内に含んでいたワサビ入りの食塊が私の口内に流し込まれているぞ！

舌に焼けるような辛さが広がっていく！

両脇にはケールとアビスがいるからエクリアの唇を引きはがせない！

さすがは我が故郷に伝わる東洋の秘伝、物凄く辛いぞ！

「ちゅぱっ…ほもいひりまひたか？はっは…」

涙目になりながらも勝ち誇った笑みを見せてくるエクリア。

「ほのれ、えふりは…」

呂律の回らない口で何とか答える私。

何とも締まらない光景だ…。

そんな光景に呆れながらもアビスは私から離れ、些か真面目な顔をする。

「主、和んでいるところ悪いけど、もうすぐヒュプノスが訪ねてくるわよ…」

……。

和やかな食卓に時間凍結の吹雪が到来してくる…。

厄介事を運ぶ女王様が来るとは、束の間に平和もこれまでなのか…。

「はっは…えんひをらひてくらはい…」

翻訳とすると「閣下…元気をだしてください」だ。

エクリアが呂律の回らない口で健気にも私を慰めてくれている。

だが、そんな間抜けな声で慰められても別の意味で食卓が寒くなってしまうな…。

まあ、ヒュプノスのことだから禄でもない用件であることは確かだが、話を聞かない内に悩んでも仕方がない。

とりあえずは…。

「あひふ、みひを…」

面倒だが、翻訳すると「アビス、水を」だ。

まずは腹ごなしをしなければならない…。

腹が減っては戦は出来ぬと偉大なる先人が言っていたからな…。

それに早くこの間抜けな話し方を修正したいものだ…。

第４０話：不条理な選択

「はっは、れんはがとほひゃふさへらようれふ」

翻訳は「閣下、殿下が到着されたようです」だ。

とりあえず、エクリアは下げておこうか…。

「今回は特別に治癒魔法でその噛み傷を治すことを許可するわ。早くして！身なりを整えるわよ！」

平和な朝を迎えた城は今や慌ただしくなっている。

ヒュプノスはつくづく平和を壊すことを趣味としているようだな…。

私はアビスに治癒してもらい、包帯を解いていく。

「僕の愛の刻印が消されてしまうのは残念だよ…」

ケールは残念にそうに言ってるが、目は私の裸体を追い、口には涎が出かかっている。

ヴァルキリアの貴公子と呼ばれた女のこの浅ましい姿を国民が見たらどう思うだろうか…。

「隊長、急いでください！殿下が苛ついておられます！」

親衛隊員の一人の焦った声が聞こえてくる。

事前に連絡もせずに勝手に訪ねてきたあげく、苛つくとは良いご身分だな…。

……。

まあ、王族ならば良いご身分で当然のことなのか…。

だが、女を待たせるのも男の甲斐性というものだ…。

じっくりと焦らせるのも良かろう…。

……。

……。

…。

「随分と遅かったな…」

ヒュプノスは如何にも不機嫌そうに髪を掻き上げてくる。

「麗しき殿下を迎え入れるために入念な準備をしていまして、平にご容赦を…」

私は慇懃無礼に一礼をして見せる。

客室にいるのは私とヒュプノスのみだ。

「ふん、心にも無いことをよくもいけしゃあしゃあと言ってくれるものだな。貴公で無ければ、即刻猛獣の餌にしていたところだ」

「その猛獣は私によく尽くしてくれますゆえに…」

尽くしてくれる猛獣とはケールのことである。

「猛獣使いに何を言ったところで堪えぬわけか。さてと、社交辞令はもう結構だ。素となって話し合おうではないか、ロストよ…」

ヒュプノスは手を挙げ、周囲に結界を張り巡らせる。

「何の用件だ、ヒュプノス…」

私もまた不機嫌にヒュプノスの問いに応える。

「ふふっ、貴様はやはりそうこなくてはな…」

ヒュプノスは私の頭にしなだれかかってくる。

出来れば胸にしなだれかかって欲しかったが、体格の違いからそうなってしまう。

私は顔に押しつけられている豊か胸の感触を楽しむ。

……。

不味い！

これでは色仕掛けに引っかかっている駄目な男ではないか！

ヒュプノスは今回も私に物騒な事をさせようとしているに違いない

のだ！

ここは毅然とした態度で立ち向かわねばならない！

「何の用件だと、聞いているのだが…」

「凄んでも無駄だ。貴様の身体はどうやら素直な反応を示していることだしな…」

ヒュプノスは私の男の証を刺激するように大腿を私の腰に絡みつかせていく。

……。

相手が稀代の悪女だろうが、敏感に反応する男の証を褒めてやりたい気分だ…。

「ふふっ、まあいい。用件は貴様に神聖アースガルズ王国に行ってもらいたい」

神聖アースガルズ王国。

確か戦乱が蔓延る中、絶対的中立の立場を貫いてきた宗教国家だと聞いたことがある。

丁度、ヴァルキリア帝国と宿敵ビフレスト皇国を挟む位置にある小国だ。

教養が無い私でも知っているほどの常識だった。

「私が近い将来、ビフレスト皇国に宣戦布告することは貴様でも知っているだろう。だが、そのためには大儀が必要だ。長年中立を保ってきたアースガルズが付くことでヴァルキリアに大儀があることを世界に知らしめることになる。アースガルズが信仰するガイア神は世界の半分を占めるほどの信者を従える最大規模の宗教だからな。その影響は計り知れないはずだ…」

男の証が一気に萎んでいくのを感じる。

それほどまでにヒュプノスの用件は途方も無かったからだ。

つまりヒュプノスは私に戦争を起こすために切っ掛けを作れと言ってきているのだ。

ヒュプノスは本気で私をヴァルキリアの一部に組み込もうとしてきている…。

だが、言わせてもらいたいことがあった。

「私にそのような大役が務まるとは思えないのだがな…」

自慢ではないが、私の脳には学問などという高尚な物を記憶した脳細胞は皆無と言っていい。

そんな私に世界情勢に関わる政治的な外交が務まるとは微塵も思わない。

その程度のことはヒュプノスも百も承知のはずだ。

……。

「安心しろ。貴様には政治的手腕を求めていない。それよりもさらに重要なことをやってもらう手筈だ。ふふっ、それは貴様にしか出来ないこと、いや、貴様にとっては何よりも得意なことだ…」

何だか猛烈に嫌な予感がしてくる。

私の得意分野。

荒事であることは確定的だろうな…。

「具体的には何だ?」

「アースガルズに行けば自ずと分かるはずだ。それに貴様なら喜んでやってくれることだろう。まあ、手がかりは聖女オイジュスに逢え、だ…」

……。

聖女オイジュスだと!

アーテは私に言っていた…。

私が求める理想の女性であると…。

……。

菱みかけた男の証に生気がみなぎってくる。

だが、待て!

私は戦争の片棒を担ごうとしているのだぞ！

さすがに理想の女性を追い求めるために戦乱を拡大させるのは非常に不味い！

酒池肉林の世界を作るどころか阿鼻叫喚の世界を作ることになってしまう…。

……。

途轍もなく惜しいが断るしかないだろう…。

私はどれだけ重大な事であろうとも、大局を見据えてのことでも嫌なことはやりたくない主義なのだ。

良いと思うことをやって偽善者と呼ばれるのは大いに結構だ。

だが、嫌だと思うことはやって善人と呼ばれるのは断固として否だ。

何よりも私の流儀に反する。

だから…。

「その用件、断らせてもらう…」

私の返答にヒュプノスは不気味に笑ってくる。

「やはり貴様なら断ると思った。だが、これを見ても貴様は断ることが出来るかな？入ってくるがいい…」

「はい、ヒュプノス様…」

……。

ヒュプノスの声に応えて虚空から声が響いてくる。

それにこの声は聞き覚えがあった…。

空間が紙がめくれるようにして剥がれていく。

……。

そのめくれた先には暗褐色の髪を靡かせ、覆面で顔を覆っている女。

初めて出会った時と同様の姿で私は彼女と再会する。

……。

「エル…」

アビスの双子の姉であり、私の酒池肉林の構成員となったはずの女…。

エルの無機質な瞳が私の姿を捉えている。

「エル、元気だったか？」

私はエルの頬に触れようと手を伸ばそうとする。

「…っ！」

咄嗟に私は伸ばした手を引く。

エルは小太刀を構えていた。

「私の身体はヒュプノス様の物…」

「エル！私が分からないのか！」

エルの瞳には私の姿が空しく映し出されている。

まるで私のことを忘れているかのような冷たい瞳…。

……。

まさか！

私は不気味に笑っているヒュプノスに視線を向ける。

「お察しの通り、エルには私が処方した薬が施されている。閉ざされた世界で見た闘争本能を高める薬とは違う、ひたすら私に隷従する人形を作り出す薬だ…。ふふっ…ははははははっ…」

「ヒュプノス、きさまぁあああ！」

私は瞬時にヒュプノスの胸ぐらを掴む。

その様子にエルが小太刀を向けようとするところをヒュプノスは手を挙げて制する。

ヒュプノスは私に吊し上げられても尚笑みが消えることはなかった。
私がこれ以上自分に手出しが出来ないことを確信しているからだ。
「ははははっ…貴様がいずれこの地から去ろうと考えているのは察していた。だからこそ、私はエルを貴様の首輪として繋いでいくのだ。言ったはずだ。貴様を手放さぬと、そして、貴様は私の者であるとな…ははははははっ！」
……。
何ということだ…。
私は既にこの鬼女に鎖をつけられてしまったということなのか…。
もう私に安息の時は二度と来ないのか…。
エルは小太刀を構えたまま彫像のように固まっていた。
ヒュプノスの命令に従い、身体を動かさないのだろう。
まるで寝取られてしまったような気分だ…。
「言っておくが、貴様の最強の力で治癒させようとしても無駄だ。貴様が治癒しようとした瞬間に自害するように命令を下しているからな…」
何処までも狡猾な女だ…。

「さあ、どうする?」

ヒュプノスが選択を迫ってきている。

用件を断るか…。

用件を引き受けるか…。

二つに一つ…。

まず、ヒュプノスの用件を断った場合。

世界的宗教国家として名高いアースガルズを味方につけたとき、ヴァルキリアは戦争を仕掛ける大儀を得ることになる。

それは更なる戦乱が世に渦巻き、多大なる犠牲が払われることになるだろう…。

世界はヴァルキリアを中心に阿鼻叫喚地獄と成り果てていくに違いない…。

一方、ヒュプノスの用件を断った場合。

ヴァルキリアは世界制覇に乗り出す切っ掛けを掴めず停滞し、戦乱の世がやがては治まることになるかもしれない。

だが、私の最愛なる家族エルを永遠に失うことになるだろう。

家族と認めた者を守ることが出来なかった私は二度と酒池肉林の夢を抱くことは出来なくなってしまう。

それは即ち私の世界の終わりを意味することになる…。

……。

どうすればいい…。

どちらを選択しても私は自分の大切な何かを失ってしまうことになる…。

……。

家族を取るか…。

……。

平和を取るか…。

……。

私はエルを見る。

最初に出会った頃よりもさらに冷たくなっている雰囲気だ。

だが、私は知っている。

エルは誰よりも情が深く、熱い女であることを…。

私に酒池肉林の主としての何たるかを諭してくれた女。

私に忘れていた母の温もりを感じさせてくれた女。

私の掛け替えのない家族となってくれた女。

今はヒュプノスの人形と成り果ててしまった女…。

……。

私は…。

……。

エルを…。

……。

「さあ、答えを聞こうか、ロストよ…」

……。

世界中の名も顔も知らぬ者共よ…。

……。

許してくれと言わない…。

……。

私は家族を守るために世界の平和を売り渡すことにする！

「その用件、引き受けよう…」

……。

私は…。

……。

エルを…。

……。

助ける！

「さすがはロストだ。貴様ならそう言ってくれると信じていたぞ…ちゅ」

ヒュプノスの青色の唇が私のそれを覆い尽くしてくる。

「ちゅ…ちゅ…ちゅる…ちゅう」

気持ちいいが、空しい…。

それに男の証が反応してしまうのも悲しい…。

エルを人形に変え、世に戦乱を引き起こそうとする女の唇は何処までも柔らかく暖かかった…。

「ちゅば…ふふっ…貴様はもう二度と私の手から逃れれないのだ。覚えておくがいい…ちゅ」

遮断された世界の中、私はヒュプノスに為すがままに口づけを受け続けた…。

人形と成り果てたエルの視線を感じながら…。

……。

……。

…。

「用件は伝えた。ロット殿、今日は実に有意義な時間が取れた。それと忘れていたが、エクリアは役に立っているのか？」

忘れていたが、エクリアはヒュプノスの元親衛隊長だったな…。

さらに言えば、エクリアはヒュプノスの教育係だったことを思い出す。

遠回しに言えばエクリアが諸悪の根元だと言っても過言ではない…。

当分の間は虐めてやるとしよう…。

今はワサビで悶え苦しんでいるがな…。

「問題無い…」

「エクリアは私の恩師だからな。役に立って何よりだ。では、また…ちゅ」

城門で見送る私に軽く口づけをして立ち去っていくヒュプノス。

「全く敵である女にまでデレデレしてだらしないわね。それでは姉者が帰ってきたときに何を言われるか…」

アビスは私の様子に呆れたようにため息を付いてくる。

姉者。

エル。

『はい、ヒュプノス様…』

ふいに無機質なエルの声が脳裏に響く。

私はアビスを無視するように城の中に入っていこうとする。

「ちょっとどうしたのよ！何か機嫌が悪いようだけど…」

アビスが追いついてきて私の顔を伺おうとしてくる。

私の視界に映るアビスの顔が人形となったエルの顔と重なっていく。

『私の身体はヒュプノス様の物…』

「少々疲れただけだ…」

私は思わずアビスから顔を背けて立ち去ろうとする。

「ねえ、何で私の顔を見て話そうとしてくれないの！」

立ち去ろうとしていた私の腕を掴んでアビスが問いかけてくる。

アビスの感情の籠もった声を聞く度にエルの無感情な声が頭に響いてきてしまう。

「離せっ！」

「あうっ！」

私が強くアビスの手を振り払ったことでアビスは尻餅を付いてしまった。

「あっ…」

私は何て事をしてまったのだ…。

アビスは何も悪くはないのに私はいつの間にか苛立ちをぶつけていたのだ。

「すまない…」

私は呆然として尻餅を付いているアビスを手を引いて立ち上がらせる。

「ヒュプノスに重大な用件を言われて気が立っていたのだ。許してくれ…」

今の私の姿をアビスの目にはどのように映ったのだろうか…。

「主…」

「用件については明日には必ず話す。だから今少し時間が欲しい。まだ整理がついていないことがあるからな…」

私はアビスの服に掛かった砂埃を払い、今度こそ、その場から立ち去っていく。

「食事は要らない。今日はもう休む。部屋には誰も入るな…」

あからさまに悩んでいる姿を見せるとは情けないものだ…。

だが、明日には元通りの私に戻るはずだ。

どのような選択肢を選んでも自分が正しいと思えば、それが最良の選択肢になるのだ。

迷いこそが如何なる選択肢だろうと最悪の選択肢に成り果ててしまう…。

必ず何か光明があるはずだ…。

何事も肯定的に物事を捉えねば、この戦乱の世で生きてはいけないからな…。

第４１話：血の決意

私は床に横たわって目を閉じた。

……。

……。

……。

…。

ん？

何者かの気配を感じるぞ。

私は目を開けて周囲を見渡す。

そして、寝室の戸の前に人影が見えてくる。

「アビス…」

「主…」

私の寝室にアビスが侵入してきたのだった。

「部屋には誰も入るなと言ったはずだがな。貴様は私の従者でありながら命令に逆らうのか？」

思わず心に無いことを口走ってしまう。

どうやら私はまだ元通りになっていないようだ。

「申し訳有りません、主。でも、私は主の真意が知りたいのです。いったいヒュプノスとの間に何があったのですか？」

アビスの口調がエルと同様に敬語になっている。

これは本気になっているという意思表示なのか？

それとも私を見限る前兆なのか？

見限るならばそれでいい。

アビスがヒュプノスに目を付けられなくて済むからな…。

「それも明日には話すと言ったはずだ。何度も言わせるな…」

私はアビスから顔を背けて布団を被る。

「主こそ何度も言わせないでください。私の顔を見て話してください…」

……。

「私の姿を見て！ロット、いえ、ロスト！」

「…っ！」

私は布団をめくり上げて、アビスの姿を見る。

アビスは裸体になっていた。

……。

私は息を呑む…。

アビスの裸体は何度も見たことがあるはずだ…。

それなのに初めて見たかのような感動を覚えていた…。

……。

いつまでも見とれているわけにいかない。

「いつから気づいた?」

私の問いにアビスは微笑む。

「いつからだと思う?」

質問を質問で返してくるとは失礼な…。

だが、いつから気づいていたのだろうか?

「答えは今気づいてた、よ…」

……。

何ですと！

「気づいたのは今だけど、疑っていたのは以前からずっとよ。そう、あんたを見たときのヒュプノスの反応を見てね…」

……。

「あの方は例えロストと同等の実力者を連れてきても契約を違えた者には処刑はされずとも何らかの制裁は加えてくるはず…。それなのに私達は何もお咎め無しだった…」

アビスは窓際に立ち、月夜を眺める。

その姿も神秘的で美しいと思った。

「それで思ったの。本当は双子の弟のロットは架空の人物で、目の前のロットが探し求めていたロストではないのかとね…」

月夜を眺めていたアビスが私の方に振り向いて微笑んでくる。

「疑っているのなら、なぜ糾弾しなかったのだ？貴様が気づいているということはエルも気づいていたはず…」

そうだ。

今まで共に生活している間にいくらでも聞き出すことはできたはずだ。

それなのに何故？

「何故問いつめなかったって顔をしているわね。そうね、平たく言うとどうでも良かったからよ…」

私は唖然とした。

どうでもよかっただと？

「どういうことだ？」

「言葉通りよ。あんたがロストだろうとロットであろうと関係無い。重要なのはあんたが私と姉者が仕える大好きな主であるということ…」

……。

「あんたが例え私と姉者を欺いたしてもあの契約は変わることは無いわ。それこそ未来永劫ね…」

私は改めて契約の重みを肌で感じた。

彼女は例え私が死んでもその思いを貫くのだろう。

「あの燃えさかる戦場の中で結んだ契約を今でも鮮明に脳裏に浮かぶわ。例えば、命を絶とうとした姉者を止めるために血を流した主の姿を…」

あの時は無我夢中だったからな…。

さすがに目の前で自害されるのは目覚めが悪すぎる。

「それと契約時に主の血に濡れた指を唇に這わせた感触、そして、熱く苦かった主の血の味を…」

アビスは自らの唇を舌で湿らせ、指を這わせていく仕草を見せてくる。

いつも不機嫌なアビスが妖艶に見えてくる。

「名前を偽っても、あの契約を偽りだとは言わせないわ…」

アビスがゆっくりと私の床に近づいてくる。

私は何故か金縛りにかかったかのように動くことが出来なかった。

アビスは置物のように動かない私の肩に優しく手を添えてくる。

「主が何に悩んでいるのかは分からない。けど、忘れないで。私と姉者は最後まで主の味方だから…」

アビスはそっと私の頭を胸に抱き寄せてくる。

アビスもエルも最初から言っていた。

最後まで私の味方でいてくれると…。

思わず涙腺が緩みそうになってくる…。

私もまたアビスを抱き締め返していく。

「主が私達を家族のように思ってくれているのは知っているわ。そ

して、主が本当に悩むとしたら家族に関わること。姉者に何かがあったのね…」

私はアビスの胸に顔を埋めたまま無言で頷く。

「エルは…ヒュプノスによって感情無き人形にされてしまった…」

「主…」

あの無機質な目で私を見つめてくるエルを今でも鮮明に思い浮かんでくる。

「エルは私のことを忘れていた。ただ、路上の石ころを見るような目で私を見ていたのだ！」

「主」

私はアビスの胸を思わず強く掴む。

「私を主殿と言っていたエルはいなくなり、ヒュプノス様と呼び、隷従する人形と変わり果てていたのだ！」

「主！」

むぐっ！

私の唇がアビスのそれによって塞がれる。

「んっ…ちゅぱ…ちゅ」

激情に駆られた心がアビスの柔らかい唇で急激に冷めていく。

「ちゅぱ…ふぅ…落ち着いた？」

「ああ…」

……。

我ながらみっともない姿を見せたものだ…。

「姉者はまだ消えていないわ。双子の私には分かるのよ」

私が知っているエルはもういない。

最強の力を持ってしても救うことは出来ない。

それなのにエルがまだ消えていない？

「姉者はきっと主に助けを求めていたはずよ。何か心当たりは無いの？」

心当たりか…。

……。

ヒュプノスに口づけをされていたとき、確か…。

「何か思い出したの？」

そうだ！

あの時確か…。

エルの無機質な瞳から涙が流れていた…。

……。

『あ…る…じ…どの…』

……。

私には聞こえていたのだ…。

エルが私に助けを求める声を…。

「エルはまだ消えていない…」

アビスは私を抱き締めてくる。

「やっといつもの調子に戻ったわね。本当に世話が焼ける主ね…」

「すまない…」

そうだ。

私は酒池肉林を作り出すために歩んできている。

エルも今や酒池肉林には無くてはならない構成員だ。

エルだけではない。

アビス。
ケール。
アイリ。
タナトス。
エリー。
エクリア。
誰一人とて欠けてはならないのだ。
「アビス、私は必ずエルを救い出す。例え、どんな結果になろうとも…」
「私は主がどんな道を歩んでも共にいるわよ。もちろん、姉者も…」
私はアビスを床へと押し倒し、男の証を叩きつけていく。
「ふふっ、今夜も私を泣かせるつもりなの？ちゅ…」
アビスの口づけを受けながらも私の理性ははち切れんばかりだ！
力の限り泣かせてやる！
今はいないエルの分まで思う存分にな！

「あぁぁ！来て！あんただけよ！私を泣かせても良い男は！」

アビスは私を抱き寄せて、激しく乱れていく。

私も人であることを忘れて理性を力の限り崩壊させてやるぞ！

うおおおおおおおおおおっ！

……。

……。

……。

……。

…。

身も心も解き放った私とアビスは抱き合うように眠っていた。

アビスの寝顔を見ながらも私は思った。

いずれ私の中にある臆病で馬鹿な部分を消す時がやってくることを…。

馬鹿な私が今まで生き残れてこれたのは臆病だったからだ。

臆病だからこそ誰よりも命の危機を感じ取り、回避することが出来た。

だが、エルを救い出すためにはそれが枷になるかもしれない。

その時が来たら私は…。

「起きていたの、ロスト…」

考え事をしていたらいつの間にかアビスが起きていた。

「考え事をしていたの？ふふっ、あんたには似合わない事ね…」

「時には似合わないことをしなければ、道が開けないこともある…」

似合わないことをする。

馬鹿で臆病でなくなる。

それは私にとって…。

……。

自ら進んで命を賭けていく時だ…。

「私はその時が来ないように主を守るのが従者の務めね…ちゅ」

アビスは私の頬に口づける。

全く持ってその時が来ないことを切に祈りたいものだ…。

「主、指出して」

不意にアビスは起き上がる。

「なぜだ？」

「いいから出しなさいって」

ぐっ！

アビスは私の手を取り、いきなり指に噛みついてきた。

「何をする？」

「決意の意味を込めて再び契約をするのよ」

私の血が僅かに付着している唇でアビスは提案してくる。

「契約は既にしたはずだがな…」

「ええ、けどそれはロットとして。まだ、ロストとしての契約はしていないわ。それにこれは命の契約。血の契約よりも深く、そして尊いもの…」

命の盟約。

血の契約とは違うのか？

「これはパラディスム家の掟とは関係無い。私があんたと契約したいと思ったから。これは私自身の掟に基づく契約よ」

掟に関係無く、自らの意志で契約を求める。

確かに掟に縛られた契約よりも重いものだろう。

「さあ、私の唇をあんたの血で染め上げて。私がロストの者であるという証を刻む想いを込めて…」

私は血が滴る指をアビスの唇に寄せていく。

これは決意表明だ。

必ずエルを助け出し、アビスの元へと返す。

例え、私の嫌いな苦痛に苛まれようとも…。

アビスの柔らかい唇に私の指がなぞられていく。

私の色にアビスが染まっていくのだ。

アビスの唇は私の血で紅く染まっていった。

「これは従者以上に深淵で神聖なる証、私はあんたの伴侶になったのよ…」

……。

何ですと?

……。

何ですとっ!

「何固まってるのよ？男女で主従関係よりも深い関係なんて夫婦しか無いに決まってるでしょ」

これはある意味詐偽に等しいのではなかろうか？

私は単なる決意表明の証だと思っていたのだがな…。

いや、私が勝手に思いこんでいただけなのか…。

まあいい。

それよりも私はアビスに言わなければならないことがある。

それによっていきなり離縁を言い渡される可能性が無きにしも非ずだが…。

「貴様と夫婦になるのは良いが、私は一応既婚者だぞ…」

「女を侍らかすことが趣味のあんたが既婚者だからって別に驚かないわよ。それであんたの妻になった物好きな女は誰なのよ？」

物好きな女と来たか…。

確かにそうかもしれん…。

「確か私が双子の弟と偽り、ロストがヴァルキリアの英雄タナトスと一騎打ちをしたことを話したことを覚えてるか？」

「ええ、確かに死闘の末にタナトス様を捕虜に出来たけど、その戦

いの負傷が原因で亡くなったとか…まさか！」

アビスは私の話を思い出しているうちに気づいたのか、固まってしまったようだ。

……。

「もしかして、信じたくないけどもしかして、あんた…タナトス様と結婚してたの？」

アビスの予想に私は無言で頷いた。

「どうするのよ！私、タナトス様に殺されたくないわ！」

アビスは本気で怖がっているのか涙目で私にしがみついてくる。

それにしても異常なほどの怯えだな。

過去にタナトスとの間に何かがあったのか？

非常に興味深いが命の危険が伴いそうだから、止めておこう。

「安心しろ。タナトスは私の姿勢に深い理解を示してくれた。だから、殺されることはないだろう…」

自分を一番に愛せば、側室を何人持とうと構わないと言っていたしな…。

まあ、相手が私でなければ、くびり殺していたとも言っていたが、それは言わないでおこう…。

「それを聞いて安心したわ。以前、タナトス様と姉者が喧嘩したときは本当に恐かったんだからね…」

タナトスとエルが喧嘩だと？

「なぜ、二人が喧嘩したのだ？」

「私と姉者はタナトス様が失脚する前まではヒュプノスの直属ではなく、タナトス様の直属だったのよ。直情的なタナトス様と冷静沈着な姉者なのよ。何度城が崩壊しかかったことか…」

なるほど…。

アビスは喧嘩するタナトスとエルの仲裁役だったわけか…。

私は無言でアビスの肩に手を添えて頷く。

もう何も言うな。

私達は同志だ。

同じ厄介事に悩まされる者として…。

それにしても新事実が発覚した。

まさかエルとタナトスが喧嘩友達だったとは…。

二人はなるべく会わせない方がいいかもしれないな…。

「もう寝ましょう、ロスト…」

アビスは伴侶となったことで私のことを主とはもう呼ばなくなってしまった。

名前で呼ばれるのは嬉しいが、主と呼ばれるのも嫌では無かったから少し複雑な気分だな。

そんな私の心情を読んでなのか、アビスが耳元に口を寄せてくる。

「私がロストと呼ぶときは閨のときだけだから、明日からはいつも通り私の主でいてね…ちゅ」

……。

危うく床での戦いを再び始めそうになってしまったぞ…。

親しく名前で呼ばれるのも嬉しいが、やはり主として崇められて優越感に浸りたいのもまた心情だ。

何とも身勝手ではあるが、これが私なのだから仕方ない。

さて、今度こそ寝るか…。

……。

「ご主人様、アビスとだけ契約を結ぶとはいささか不公平ではないのかな？」

うおっ！

いきなり眼前にケールの顔が視界を埋めていたので驚いたではないか！

「いきなり何のよ！ケール！」

さすがのアビスも驚いている。

いつの間に入ってきたのだ？

「びっくりした顔もなかなか良いけど、僕とも契約して欲しいものだね。君は綺麗な女と沢山愛して楽園を築きたいのだろ？だったら君は必然的に僕を迎えなければいけない…」

「その心は何で御座いましょうか、ケール様…」

どさくさに紛れてエクリアもいるではないか！

エクリアの言葉にケールは灰色の髪を掻き上げて、不敵に笑う出す。

如何にも「愚問だね」と言わんばかりの気障な仕草だった。

これが男であれば、全殺しにしていたであろうな…。

「決まってるじゃないか。僕が美しいからさ…」

自分で恥ずかしげもなく美しいと言い切るとは侮れないな…。

だが、実際に美しいから文句のつけようがない。

「小官はただ…閣下が…だらけないかと思い…ええと…とにかく指を出してください！早く！」

私はエクリアの迫力に押されて、思わず手を差し出してしまう。

エクリアは私の手を掴み、指を噛んでくる。

うぐっ！

結構痛いぞ！

「ちゅぱ…閣下は小官が立派な軍人に仕立て上げて見せます！さあ、早く小官を閣下の色に染めて下さい！」

エクリアは目を閉じて唇を差し出してきた。

彼女もまた私の構成員であり、家族の一人だ。

ならば、遠慮することはあるまい。

「あ…」

私の指は唇に触れた途端にエクリアの艶めかしい声が響く。

くっ！

男の証が暴れるから変な声を出さないで欲しいものだ…。

エクリアの唇もアビスと同様に深紅に染まっていく。

「ふぅ…これで小官は閣下の一生のお目付役になります。覚悟しておいてくださいね」

「ああ…」

説教地獄を喰らわされない程度には覚悟しておこうか…。

「ふふっ、次は僕の番だね。君の指を二つ嚙らせてもらうよ」

ケールが舌なめずりしながら身を寄せてくる。

「なぜ二つの指なのだ？」

「一つは僕に、もう一つはエリスのためさ…」

……。

閉ざされた世界で私にケールを託して死んでいった女。

ケールにとって唯一無二の親友だった女。

私は無言で二本の指をケールの唇に寄せていく。

「ありがとう、ご主人様…あむっ！」

二本の指にケールの歯が突き立てられていく。

「ちゅぱ…ちゅる…ちゅ」

ケールは私の指を甘噛みしながらも指を唇に這わせていく。

鮮やかな緑色の口紅が瞬く間に深紅に染まっていく。

「ちゅぱ…ちゅぱ…ちゅちゅう」

……。

「ちゅるちゅるちゅるちゅるちゅうううう！」

……。

「じゅるじゅるじゅるじゅるるるるうっ！」

ぬおおおおおおおおおおおおっ！

手が冷たくなってきたではないか！

私は強引にケールの唇から指を引きはがした。

「いつまで私の血を吸っているつもりだった？」

「すまない、僕としたことがつい夢中になってしまったよ。君の血の味は癖になってしまってどうもね…」

私の問いかけにケールは深紅に染まった唇から無邪気に舌を出して応えてくる。

そのあどけない表情に私は身震いしてきた。

確かに自分から食べて欲しいとねだる獲物の気持ちが少しは分かる

気がした。

ケールはまさしく魔性の女だ…。

彼女の微笑みに何人もの獲物が命を捧げたことなのか…。

さらに私の血の味を覚えて、かつての食人鬼と恐れられていた感覚を取り戻そうとしている…。

これは迂闊に血を与えない方がいいかもしれないな…。

「ふふっ、何か心配しているようだけど、安心して。僕は君以外の血を吸うつもりは無いし、貪り尽くしてしまおうなんて考えていないよ…」

ケールは妖艶な笑みを浮かべてくる。

「もっとも君が望めば、その限りではないけどね。まあ、そのときは死の一歩手前までの快楽に溺れさせてあげるよ…」

「謹んで遠慮しておこうか…」

死をも厭わずに快楽の扉を開くほど、私は勇者ではない…。

私は生き延びて快楽を味わい続けたいから控えることにしよう…。

「残念、でも、いずれ君が求めてくることを期待しているよ。なにしろ僕は君を誘惑し続けるからね…」

ケールは弾けんばかりの巨乳を私に向けてくる。

ぐほっ！

鼻から熱い欲望が…。

「ちょっと、何いつの間に私を差し置いて和んでるのよ！」

ぐえっ！

アビスが後ろから私の首を裸締めをしてきた。

「ふふっ、けど、これが私達らしい乗りかもしれないわね…」

「嘆かわしいことですが、其の通りかと…」

「僕は楽しければ、それでいいさ…」

三人とも私に抱きついてくる。

「主、自分の思うとおりに進んでいって。私達はどこまでも一緒よ」

「間違えでもすれば、小官が閣下を修正しますゆえに…」

「僕はご主人様が行く道をどこまで付いていくだけだよ…」

アビス。

ケール。

エクリア。

私の掛け替えのない家族。

「そう言えばアビスにはもう本名を教えたみたいだね」

ケールはアビスの様子を見て言ってくる。

「ええ、遅ればせながらも主に教えて頂いたわ。後は姉者だけ…」

「アビス殿の姉君ですか…」

そうだ。

後はエルに自分がロットではなく、ロストと伝えるだけだ。

そのためには何としても助け出さなければ…。

「アビス殿、姉君を必ず助け出しましょう」

「同じ妻として、僕も喜んで協力させてもらうよ」

「エクリア、ケール…」

アビスは涙ぐんでいた。

そんなアビスを抱き寄せて、私も宣言する。

「必ずエルを助け出し、また、あの美味しいみそ汁をご馳走してもらおう。今度はエクリアとケールも一緒に…」

「主、ありがとう。愛している！ロスト！ちゅ！」

アビスは私を押し倒して唇を奪ってくる。

「いつになく積極的だね。これは僕も負けてられないね…」

「まあ、たまには羽目を外すのもいいでしょう。まだ、夜は長いですし…」

エクリアとケールもアビスに続いて抱きついてくる。

確かに夜はまだ長いな…。

……。

果たして明日まで私の身体が持つだろうか…。

まあ、考えても仕方ない…。

今宵もまた燃え尽きるとしよう…。

第４２話：聖女

私の身体は骨と皮だけに成り果てている。

だが、不思議と清々しい気分だ。

何だか魂が身体から抜けていくような浮遊感を感じてくる。

「ちょっとケール。あんたが絞りすぎたから主が瀕死になってるわよ！」

「いや、エクリアがご主人様を去勢させる勢いで締め付けていたのが原因だと僕は思うが…」

「小官はアビス殿が一番絞り立てていたと見ていますが…」

何を朝から騒いでいるのだろうか？

それにしても何故か清々しいはずなのに眠気が出てくる。

もう一寝入りするか…。

「主！寝たら終わりよ！起きて！意識を保つのよ！」

ぶべっ！

あべしっ！

アビスが私の頬に往復張り手を喰らわせてきている。

私が何をしたというのだ！

「痛いわっ！」

「きゃあっ！」

往復張り手をしてくるアビスを押しのけて私は起き上がる。

頬がひりひりするぞ…。

「全くご主人様は底知れない体力だね…」

「閣下は体力だけが取り柄の方ですからね…」

ケールとエクリアはなぜか納得したかのようにしみじみと頷いてる。

朝から本当に騒がしい連中だな。

……。

……。

…。

さて、今日はいよいよアースガルズへと出発しなければならない。

まずは人員を決めることから始まる。

ヴァルキリアの特使の人員は私の裁量で良いとのことらしい。

誰を連れて行こうかと悩んでいるときだった。

「私は残るわ」

開口一番にアビスが特使の人員からの離脱を宣言をしてくる。

一応、理由を聞くとしようか…。

「その理由は？」

「ここには姉者がいるわ。私は姉者が万一のために残りたいの…」

アビスはエルがどのような状態になっているかを直接的には知らない。

だが、双子ゆえに感じ取るものがあるのだろう。

「私が離れることで姉者の心が消えてしまいそうな予感がするの。だから、ここから離れることはできないの。ごめんね、付いていけなくて…」

私は俯くアビスを抱き寄せた。

「謝ることはない。どうかエルの心を感じていてくれ。私には出来ないことだからな…」

「そんなことは言わないで。主には主にしか出来ないことがあるわ。私はここに残るけど…」

アビスが私の頭を胸に埋めていく。

「どうか無事に帰ってきて…」

「わかった…」

私とアビスは軽く口づけを交わし、再会を約束するのだった。

……。

……。

…。

「今回は少数精鋭で行こう。僕とエクリアがいれば事足りると思うよ」

「そうですね。無駄に兵士を連れて行けば要らぬ警戒を抱かせることになりますからね」

私は二人の提案を受け入れ、エクリアとケールの三人でアースガルズへ向けて出発することに決めた。

「では、私は馬の手配をしてきます」

「僕は…何もすることはないね…ご主人様はどうするのかな？」

私は…。

「防具を装着していく…」

ケールの表情が強ばってくる。

「ご主人様、本気でまたあの鎧を着るつもりかい？」

「本気だ…」

私は言い切る。

あの鎧はお気に入りと同時に正体を隠すためのものなのだ。

行き先は世界規模の宗教ガイア神教の総本山。

その場所で下手に有名にでもなれば、私の名が良い意味でも悪い意味でも全世界に広まってしまう。

それだけは断じて避けねばならない。

「エクリアからはこの鎧が恐ろしいことは聞いている…」

「だったら…」

「ケール、貴様が特使の代表者になれ」

「えっ…」

ケールの表情が固まってきた。

今日はどうやら私の方がケールに対して攻勢に立てれているようだな…。

ヒュプノスは私にアースガルズに行くことは命令してきたが、特使の代表になれとは一言も言っていない。

ならば、それを利用させてもらうまでだ。

我ながら頭が冴えているな。

「貴様が代表となり、エクリアはその補佐、私は少し変わり者の従者ということにしろ」

「了解したよ」

……。

どういうことだ？

ケールがこれほどまでに呆気なく了承するとは…。

私はケールの顔を見てみる。

……。

笑っている。

しかも悪戯を思いついた無邪気な子供のように…。

「ご主人様が僕の従者になるのか。これは旅が面白くなりそうだね」

「本当にケール様の仰るとおりですね」

いつの間にかエクリアが戻ってきている。

「でしたら、小官は閣下の上官となるわけですね。それは実に楽しみですね、ふふっ…」

……。

「やはり、私が特使の代表で…」

「なりません、閣下。いえ、ロスト」

私が方針を変更しようとしたところをエクリアが待ったをかけてきた。

「君のその鎧を装着した姿で特使の代表なんて名乗られたら即刻外交が失敗してしまうよ」

「ケール様の言う通りです。観念なさいませ、ロスト」

くっ！

正体がばれないためにも致し方ないか…。

「早速だけど馬車に乗ったときに僕の肩を揉んでもらうよ、ロスト」

「小官の肩も揉んでもらおうか、拒否は認めんぞ、ロスト…」

瞬く間に職権乱用と来たか、貴様等！

この件が終わった後のことを覚えておくといいぞ！

その後、用意された馬車に乗り込んだ私はケールとエクリアの肩を揉むことになってしまった…。

……。

……。

…。

私は馬車の窓から遠ざかっていくヴァルキリアを眺める。

あれほど脱出したかった魔の巣窟から私は今外に出られている。

このまま逃げればあるいは…。

……。

それは断じて駄目だ。

私はアビスと約束したのだ。

必ず戻ってくると…。

ふとマンドリンの音色が私の耳に心地良く響いてくる。

「今難しいことを考えても何も変わらないよ」

ケールは持参していたマンドリンを演奏していた。

相変わらずの綺麗な音色だ。

「ケール様の演奏は身に染みるものがありますね。さすがはヴァルキリア随一のマンドリン名手と呼ばれただけはありますね…」

「名手だなんてとんでもないよ。僕はただ戦争で家族を亡くした子供達に喜んでもらいたいと思って演奏していただけさ…」

ケールは遠い目をして語っていた。

エリスのことを思い出しているのだろう。

ケールは確かに戦災孤児のために演奏していただろうが、元々はヴァルキリアの歌姫と謳われたエリスの歌の伴奏をしたことがきっかけだったはずだ。

「あれほど戦乱の終わりを夢見て、マンドリンを奏でていたはずが、今では進んで戦乱を巻き起こそうとしている。人生ままならないものだね…」

そうだ。

私はケールに戦争が始まる切っ掛けを作る片棒を担がせているのだ。

誰よりも平和を願ってマンドリンを奏でていた女神を…。

そんな私の視線に気づき、ケールは苦笑する。

「すまない、愚痴を言ってしまったようだ。どうやら難しいことを

考えているのは僕のようだね…」

「いや、謝らなくていい。むしろ私が…んむっ！」

私が言いかけたところをケールが唇を押し当ててくる。

「ちゅぱ…僕は君に付いていくと決めたんだ。だから、それ以上の言葉はいらないよ…」

「ケール…」

私とケールは互いに見つめ合う。

そして…。

「おほんっ！お二人で世界を作るのは真に結構で御座いますが、もう一人ここにいることをお忘れ無きように…」

エクリアが途轍もなく不機嫌に苦言を申し出てくる。

「ごめんなさい…」

「すまない…」

そんな私とケールにエクリアは苦笑する。

「別に怒っているのではありません。小官もいることをお忘れ無きようにと申したまでです。つまり…」

エクリアは私とケールを抱き寄せる。

「小官もお二人と共に歩むということです。一人では困難なことでも二人、三人で挑めば乗り越えれるはずです…」

仲間とは良いものだ。

如何なる困難でも乗り越えていけると思えてくる。

……。

まあ、今回はケールが代表だから私は影でひっそりとそこはかとなく頑張らせてもらうとしようか…。

「エクリアの言うとおりだね。さて、景気づけにもう一曲奏でさせてもらうよ」

ケールの音色が馬車から世界へと響き渡っていく。

……。

……。

……。

……。

……。

…。

鐘楼の音が聞こえてくる。

「アースガルズにある大聖堂の鐘の音ですね」

エクリアは鐘の音のことを説明してくる。

「つまりアースガルズに近づいてきたというわけだね」

「はい、今はお祈りの時間に入っている時と存じます」

馬車の窓から見えてくる荘厳なる建造物が並び立つ都。

アースガルズ神都ユグドラシル。

世界的宗教ガイア神教の中心地。

神々の聖地とも謳われる約束の地。

元平民その他の私には恐れ多い場所だ…。

「何気後れしているのですか！これからその聖地の象徴とも言える存在、聖女オイジュスと交渉するのですよ！」

「聖女オイジュスはまさに世界で希望の女神と讃えられているからね。彼女に何かがあれば間違えなく世界が血に染まる時だ」

二人の言い分がますます私に重圧がかかってくる。

今まで関係を持ってきた女性のほとんどが戦場で殺し合うという物騒な方法で関係を持ってきた。

だが、今回の聖女は特別な環境下で保護されてきたという生粋のか弱い女性らしい。

殴り合って生まれてくる男の友情とは訳が違う。

果たして、どのようにして聖女様と切っ掛けを作ればいいのやらか…。

そう考えている内に馬車はついにユグドラシル内へと入っていく。

荘厳で慎ましいという先入観を裏切るかのように都は活気づいている。

商人達で出回り、子供等が町で遊び回っている。

町は平和そのものだった。

「アースガルズへようこそ！」

町の人々は神都に入ってきた異国の馬車に歓迎の声を掛けてくる。

宗教の中心地と言えば、もう少し気位が高く、敷居が高いものだと思っていたが…。

「話は聞いております。ヴァルキリアの特使の方々ですね。さあ、こちらへ」

町人は私達が乗っている馬車を引き、都の案内を務めてくる。

私達は他国へと侵略をする悪辣な国で有名なヴァルキリアの使者だというのに随分と友好的だな…。

ケールは代表として先頭にエクリアは補佐として付きそい、私は最後尾で続いていく形で歩いていった。

周囲の目線が私達に向けられている。

ケールやエクリアの向けられる視線には羨望と感嘆の眼差し。

対して私には…。

「あれは悪魔の化身なのか？」

「しかし、あのような美女の方々の従者というらしいぞ」

「まさに美女と野獣だな。いや、天使と魔獣と言ってもいいぐらいだ」

好き勝手なことを言ってくれるものだ…。

それにしてもケールやアビスが言うようにこの鎧はそこまで恐ろしく見えるのだろうか？

私は格好良いと思うというのに…。

……。

……。

…。

案内された場所は圧倒するほどに神々しい雰囲気を漂わせる大聖堂だった。

その扉の奥から聖歌が聞こえてきた。

「綺麗な歌声…」

いつも凛とした表情を崩すことが無いはずのエクリアがうっとりとした顔で呟いてた。

確かに綺麗な歌声だ…。

この歌声はまるで…。

「エリス…」

今度はケールが呟いていた。

エリスもまたヴァルキリアでは教会の歌姫として有名だったのだ。

ケールは聞こえてくる歌声をエリスのそれと重ねているかのようだった。

「これは聖女オイジュス様の祈りの歌です。彼女は戦乱が渦巻く世に大変憂いています。少しでも早く戦争が終わり、これ以上犠牲が出ぬようにと日々欠かさず歌い続けているのです」

案内人は誇らしげに聖女様のことを語っている。

私は案内人の話を聞いて思ったことがある。

聖女様はケールとエリスと同種の人物だ。

エリスもまた戦乱の世を憂い、誰もが犠牲にならない世が来ることを信じて歌い続けていた。

ケールにとって聖女様に何か思うことがあるのだろう。

アースガルズにとって聖女様はまさに神の代行者と言っても過言でないほどに崇拝されている。

対して私達は戦争の大儀で得るためにアースガルズをヴァルキリアに引き込もうとしているのだ。

……。

何だか途轍もなく気が重いぞ…。

ケールもエクリアもそう思っているのか、表情が暗く見えてくる。

「もうしばらくで聖女様のお祈りが終わりますので、控え室にてお待ち下さい」

私達は重い足取りで控え室に案内されていく。

……。

……。

…。

「僕達は間違っているのだろうか？」

ケールは開口一番にそう言ってきた。

「ケール様、小官等は覚悟してきたはずです。必ずアースガルズをヴァルキリアに引き込むと。それがエル殿を救い出す切っ掛けになるのだとも…」

「しかし、それでエルが救われるという保証は何処にも無い！あの狡猾なヒュプノスが今回の任務を果たしたところでエルを手放すとは思えない！」

ケールとエクリアは言い争いをしている。

私は他人事のようにその様子を見ていた。

確かにケールの言うとおり、今回の任務が成功したとしてエルを解放してくれるとは思えない。

だが、それでも私は…。

「お二人ともお止め下さい…」

「ご主…ロスト」

「閣…ロスト」

二人はどこか縋るように私を見てくる。

私に答を求めているのだろう。

その問いに対する答は決まっている。

「私はただ任務を遂行するのみです…」

どれだけ可哀想だと思っても、優先順位を変える訳にはいかない。

それを迷えば、自分の命すら危うくなる。

私は浅ましいほどに自分の命が大切なのだ…。

そして、家族以外の命に対しては無関心を貫くつもりでいる。

可能で有れば、助けてやりたい気持ちはある。

だが、自分の大切な者と天秤をかけるならば、躊躇うことなく斬り捨てる。

それが私という人間なのだ。

さらに言えば、それが私の弱さなのか…。

「少し散歩に行きます…」

「ご主人様！」

ケールは私に手を伸ばそうとしてきている。

私はその手を避け、逃げるようにして控え室から出ていった。

……。

……。

…。

大聖堂の廊下で私の足音が空しく響いている。

ケールはさぞ私を冷たい人間だと思っているかもしれない。

私もアースガルズを戦争には巻き込みたくはない。

だが、もはや立ち止まることは許されないのだ。

私はエルを救うと決めたのだからな…。

幸福になる者がいれば、不幸になる者もいる。

全ての者が幸せになることが出来ないのであれば私は自分の身近な者だけを幸せにすることに腐心する。

悲壮な決心をしていたときにふと気づく。

私の横に通りすがる者達は皆怯えていて顔を逸らしていた。

やはりこの鎧を着ては目立ちすぎるのだろうか…。

まあ、充分に散歩したことだし、控え室に戻ろうか。

ケールとも面と向き合って本音を語り合わなければならないからな…。

……。

……。

…。

私は道に迷ってしまった…。

この大聖堂は無駄に広すぎる。

さぞ維持費が掛かることだろう。

私は通りすがりの人から道案内を頼もうとするが皆怯えて逃げてしまう始末だ。

非常に困ったことになってしまった…。

エクリアは今頃怒っているだろう…。

また、説教地獄を喰らわされることになってしまうな…。

とりあえず大聖堂の出入り口を探そう…。

そこで先ほどの案内人を見つけるとするか…。

……。

……。

…。

私は道に迷いながらも何とか出入り口まで辿り着く。

出入り口付近には神の間と呼ばれる祭壇がある。

そこには聖女様の歌声がまだ響き渡っていた。

エリスの歌声に勝るとも劣らない美声だ。

聖女様のご尊顔を拝見したいところだが、今の私の立場はケールの下っ端従者だ。

従者如きが聖女様の前に立つことは出来ないだろう。

それに下手すると国際問題に発展しかねないかもしれない。

ただでさえ、戦争に巻き込むことで気が重いというのにこれ以上の厄介事を作るわけにはいかない。

これ以上胃薬の世話にはなりたくないのだ。

私は静かに通りすぎようとする。

しかし、またしても神は私に意地悪な試練を課してくるのだった。

「不審者め！何者ぞ！」

私に剣を向けてきたのは青銅の鎧に身を固めた兵士。

下っ端従者という立場とはいえ、不審者呼ばわりするとは無礼な兵士だな…。

「どうかしましたか？モーモス」

モーモスだと！

目の前にいる青銅の鎧に身を包んだ暑苦しい兵士がモーモスだとは…。

……。

それと先ほど聞こえてきた美声の持ち主はもしかすると…。

私は青銅の兵士から視線を逸らし、美声が聞こえた方向へと向けていく。

純白の聖衣を着こなし、肩にまで掛かる白銀の髪を靡かせている女が立っていた…。

上品な薄紅色の口紅に透き通るような青色の瞳…。

しかし、その瞳には光が灯っていなかった…。

彼女は私を見ても怯える様子は無かった。

さらに手には杖を持っていて、それで床を探るようにして歩いてきていたのだ。

おそらく盲目なのだろう。

それよりも私は戦慄していた…。

目の前にいるこの絶世の美女こそがアースガルズの希望の女神オイジュスなのか…。

もし、私が心臓が悪い老人であれば、その場で死者の国へと旅立つこと間違え無しと思えるほどに傾国の美貌を誇っている…。

「オイジュス様、下がっていてください！こやつは私が討ち滅ぼしてみせます！」

神々の手札の一つと呼ばれているモーモスが私の横で何やらか喚いているようだが、もはや眼中に無い。

私の視界はただ一人の聖女様に向けられている。

「私はこの大聖堂で司教を務めておりますオイジュスと申します。お名前をお聞かせ頂けないでしょうか？」

聖女様は大人びた美貌を子供のようにあどけない笑みを浮かべて私に名を尋ねてきている。

ぐはっ！

私の心臓は見事に撃ち抜かれた…。

思わず私は聖女様の前に跪き、頭を垂れる。

「私はヴァルキリア帝国特使ケール様の従者が一人ロースで御座います。以後お見知り置きを」

とりあえず、ロットからさらなる偽名で正体を隠す。

ロットという存在は一応、ヴァルキリアの兵士として名が残っているからな…。

それよりも私の理想の美の女神がまさに目の前にいる！

これほどの胸の高鳴りはブリュンスタッドの王女セシリア様以来だ！

いや、セシリア様以上に胸が高鳴り弾けそうな思いだ！

これが神が用意した運命の手札ならば、私は神に泣いて感謝するだろう！

「おい！無視するな！私もいるのだぞ！」

隣にもう一つの神々の手札を司る女がいるようだが、どうでもいい！

私はオイジュス様に出会うためにこのアースガルズへと来たのだ！

戦争の大儀やアースガルズの心情やらと考えることが沢山あるが…。

「これはご丁寧にロース様」

オイジュス様の輝くばかりの笑顔に私の荒んだ心を癒されてくる…。

彼女が希望の女神と謳われるだけはある…。

今はこの大いなる出会いを堪能していくことにしよう…。

難しいことを考えるのはそれからだ！

第４３話：食事会

私はオイジュス様と青銅の鎧に私室に案内される。

「久しぶりのお客様で緊張してしまうわ。モーモス、お菓子を用意して」

「オイジュス様、このような奴にそんな持て成しなど…」

「駄目なの…」

オイジュス様はこの世の終わりのような悲しげな表情になる。

「そんなオイジュス様！ええい！貴様！オイジュス様のお菓子を有り難く頂かなければ承知しないぞ！」

どうやら青銅の鎧、もといモーモスはオイジュス至上主義のようだ。

今更気づいたが、この青銅の鎧も女で手札の一人だった。

だが、如何なる女であろうとオイジュス様の前では霞むに違いない。

私は青銅の鎧から視線を外し、オイジュス様を見つめる。

ため息をつかんばかりの美貌と包み込むような慈愛に満ちた聖女様だ…。

これほどまでに心を奪われたのは生まれて初めてかもしれない…。

思えば、他の女との出会いはどれもが物騒で危険な出会いばかりだったからな…。

……。

だが、そんな物騒な彼女達にも惹かれていたのも事実だ…。

それにもう私は複数の妻を囲っている者だ…。

彼女達は私の掛け替えのない家族だ。

そして、私はエルを救うために今ここにいるのだ。

……。

どうやら少し浮かれ過ぎたようだ…。

確かに目の前の女性は私の理想を体現していると言っていい。

しかし、天秤をかけるとしたら私は残念ながら聖女様よりも家族を取るだろう。

初心に還るのだ、ロスト！

私は聖女様と逢い引きするためにアースガルズに来たのではない！

アースガルズをヴァルキリアに引き込むために来たのだ！

……。

だが、束の間の逢い引きを楽しんでも罰は当たらないだろう…。

ここで格好付けても男の本能には逆らえないのだ…。

少しばかり発散させねば身体に毒だ…。

私の目の前にモーモスが持ってきたお菓子が置かれていく。

「さあ、有り難く頂け！」

モーモスが不機嫌そうに言ってくる。

私は目の前のお菓子を頂こうとして気づく。

食べるには兜を外さなければならないのだ！

兜を外せば素顔が晒されてしまう。

オイジュス様は盲目だから問題無いとして、モーモスが非常に危険だ…。

彼女は私を目の敵にしている。

この会合を終えた後に闇討ちしてくる可能性もある。

しかし、聖女様の好意を無下にすることは…。

いったい、どうすればいいのだ！

「おい、黒いの！」

苦悩している私にモーモスが話しかけてくる。

それに「黒いの」とは私のことなのか？

「私は外に出ていくから、その兜を外してお菓子を頂くといい。私はオイジュス様の悲しみお顔は見たくないからな…」

モーモスはそう言い、退室していく。

……。

なんて良い奴なのだ！

私は自分の見る目の無さに恥じた。

オイジュス様の従者を務めるほどなのだ。

それなりの人格者でなければ務まらないだろう。

私はモーモスを単なる暑苦しい鎧女から良い鎧女へと評価を改めていく。

「モーモスは私にとって従者としてだけでなく親友でもあります…」

オイジュス様は嬉しげにモーモスのことを語ってくる。

「それにロース様のことも気に入られたようだし…」

……。

何処をどのようにして私がモーモスに気に入られたのか激しく疑問なのだが…。

「私はモーモス殿には好意的でないと思いましたが…」

「いいえ、確かに貴女様を気に入っておられるはずですよ。そうでなければ、あの場で有無も言わず叩き出されていたはずですから」

やはりさっぱり分からん！

誰が見ても私はモーモスに嫌われていると思うはずだ。

オイジュス様は外界から隔絶された方だから常識を求めてはいけないのかもしれないな…。

「ふふっ、モーモスは人を見る目があるのですよ。それに私にも分かります。ロース様は何か強い意志を持ってここにいられることを…」

オイジュス様の表情が一変する。

光無き瞳が私の全てを見据えるように見つめてくる。

「さあ、召し上がってください。今回の物はかなりの自信作ですから」

私にお菓子を求めてくるオイジュス様はいつの間にか元の軟らかい表情になっていた。

とりあえずモーモスが去ったことだし、兜を脱ぐとしようか…。

私は兜を脱ぎ、肌に空気が触れるのを感じる。

「私には貴女様のお顔を見ることは出来ませんが、さぞ素敵なお顔なのでしょうね」

オイジュス様はそう仰ってくれるが、生憎私の顔は美形ではない。

不細工とも思えないが、平々凡々の顔と言ったところだろう。

まあ、私の悩みといえば、背丈だな。

今目の前にいるオイジュス様と比較しても私の方が僅かに背が低いのだ。

さらに言えば、先ほど退室したモーモスに至っては頭二つ分ほどに背が劣ってしまう。

顔は平凡なのは仕方ないとして、最強の力を手に入れた今、後少し背があれば完璧だというのに…。

「ロース様、お手が動いていないようですが、ひょっとしてお口に合わなかったのでしょうか？」

オイジュス様は悲しげな顔をされていた。

不味い！

考え事をしていてお菓子に手をつけていなかった！

私はお菓子を手に取って食してみた。

……。

オイジュス様らしい上品な甘さだ…。

甘すぎず、かといって薄すぎないような何とも絶妙な味だ…。

私は基本的には辛党であるが、この絶妙な甘さ加減であれば、甘党にでも宗旨替えできそうな気がする。

「美味しいです…」

「良かった。ロース様のお口に合ってなによりです。まだありますから遠慮無く召し上がってください」

私とオイジュス様の食事はつつがなく進行していく。

この時間がいつまでも続いて欲しいと願うほどに充実したものだった…。

「これほど楽しい時間を過ごしたのは久しぶりでした。私にこのような時間を与えてくださり感謝致します、ロース様」

「とんでもありません。私如き者がオイジュス様とお過ごしなる栄誉を与えてくださったことに感謝しております。私の一生の思い出として刻まれることでしょう」

オイジュス様が頭を下げたことに私は慌てた。

彼女はどこまでも慎み深い女性だった。

「まあ、ご自分のことを私如きとは言ってはいけませんよ。貴方様を信じて付いてくださる方の失礼というものです」

「はあ、すいません…」

なぜか、説教されてしまった。

しかし、エクリアのようにくどくどと説教されるわけではないので苦痛でもない。

「貴方様には強い力を感じます。それも世界を揺るがすほどに強大な力を…」

オイジュス様の表情が再び鋭いものに一変する。

「世界を揺るがすほどの強大な力とはいったい何のことでしょうか？」

私は敢えてとぼけてみせる。

彼女から私をそう思う根拠が知りたいからである。

「私は非力ながらも感じ取ることができるのです。人の運命、辿るべき未来を…」

運命、辿るべき未来…。

これは予知能力というものなのか？

エクリアは確か言っていたな。

オイジュス様は戦闘力は無いが、不思議な力を秘めていると…。

「先ほど貴方様と同様に世界を変える力を持つ者と話していましたから…」

「私と同じ世界を揺るがす力の者とはいったい？」

何となくだが、想像は付く。

それどころか私の想像が外れて欲しいとも願う。

だが、運命は非情なものだ…。

「ビフレスト皇国の将軍モロス様です…」

嫌な予感は意地悪なほどに的中するものだ…。

彼女もまたこのアースガルズに訪問してきたというのか…。

「モロス様は貴方様と同等の力をお持ちですが、力の本質はまるで違います。彼女の力は虚無です」

「虚無？」

虚無とは空しいこと。

この世に存在する全てのものに価値や意味を認めない意味だと私の脳細胞に辛うじて記憶している。

「彼女は力には喜びも怒りも哀しみも楽しみも有りません。私の心の目でもってしても何も感じ取ることができなかったのです…」

要するに無感動で無機質だということか…。

「ロース様、宜しければお顔に触れさせていただけないでしょうか？」

「はい、私の顔で宜しければ…」

私はオイジュス様が振れやすいように顔を前に差し出す。

彼女の白い手が私の両頬を包み込む。

何て柔らかくて冷たい手なのだろうか…。

掌を通して彼女の御心に触れるような気分だ…。

「貴方様のお力はとても暖かいです。全てを包み込み、全てを許し受け入れる力。まるで聖人の如き高潔で神聖なる力…」

オイジュス様が私の頬を撫で回してくる。

頬を撫で回されてるだけなのに男の証が元気になっていく…。

「しかし、貴方様には過酷な運命が待ち受けています。この世界を歪んだ未来へと導く存在との果てしなく、苦しみと哀しみに満ちた

戦いが…」

……。

世界を歪んだ未来へと導く存在。

私はそんな大それた存在と戦うというのか？

「ですが、貴方様はお一人ではありません。その高潔なる力に惹かれ、多くの運命の星々が貴方様を守護すべく集うことになるでしょう。そして、その星々と共に世界に歪みをもたらす存在に戦いを挑むことになるのです…」

まるでお伽噺に出てくる勇者のような話だな。

だが、私は勇者では無い。

最強の力を除けば己の衣食住を確保しつつ酒池肉林の夢を抱く何処に出もいるような男だ。

「申し訳有りませんが、私はそのような偉大なる存在ではありませぬ。ただ、平凡な日々を夢見るしがない元平民でございます」

「その平凡な日々を手に入れるために貴方様はヴァルキリアに組みして、このアースガルズを引き込もうとなさっているのでしょう…」

……。

「だとすれば、どうしますか？オイジュス様…」

もはや私の企みなどとっくにばれている。
下手に取り繕う必要は無いだろう。
オイジュス様には軽蔑されてしまうのだろうか…。
そう思うと胸が痛い…。
「どうも致しません。ただ、私がヴァルキリアに付くことは無いと申しておきましょうか」
「そうですか…」
やはりそうなるのか…。
普通に考えれば、世界の希望たる聖女様が他国を侵略する国などに組みするはずがない。
任務は失敗だ…。
さて、どうやってエルを救い出すべきか…。
「ですが、ロース様には付いていこうとは考えています」
なぬ！
「私も貴方様を守護する運命の星々の一つ。いずれ来る世界に歪みをもたらす者との戦いのために力添えするのが私の宿命…」
……。

あくまで私自身では無く、最強の力に惹かれてのことか…。

まあ、今はそれでいい。

ともあれ希望が見えてきた。

「ただし、条件があります」

「条件とは？」

私は身を乗り出す。

ともかくオイジュス様を引き込めるならば、何でもするつもりだ。

聖女様であることから悪辣な条件は出さないだろう。

「私としてはこのまま貴方様の従者となるつもりでありますが、これでも公的な立場にいます。皆が納得する形を示さなければなりません」

「では、どうすれば周囲を納得させれる？」

焦っていたのか、口調が素に戻ってしまっている。

だが、もはや止めることは出来ない！

納得する形とはどういう方法なのだ！

「落ち着いてください。アースガルズは年に一度神々への祝いを兼

ねて神武闘式を開催しています。神武闘式とは世界中から勇者が集い、神々への使徒となるべく、力を競い合う武術大会です。その大会で見事優勝できた勇者に私が祝福を捧げることが慣わしとなっています」

「つまり、私がその大会で優勝して、オイジュス様の祝福を受けることが条件なのだな？」

オイジュス様は頷く。

気づけば私とオイジュス様の距離は鼻が接触するほどに顔を近づけていた。

……。

うおおおおおおっ！

私は聖女様に不敬罪を働いてしまっている！

急いで謝罪せなば！

「申し訳御座いません！オイジュス様に何という口の利き方を！」

「ふふっ、いいのですよ。それに先ほどの話し方のままでもかまいません。むしろそちらの方が素敵だとと思いますから」

私は聖女様が放ってくる慈愛の光で浄化されようとしている…。

彼女は称号や肩書きでの聖女ではない。

まさに彼女の本質そのものが聖女だ。

「それに私は何も宿命に従って貴方様に付いていこうと決心したわけではありません。先ほど私が条件を出すときに感じさせて頂いた気迫で確信しました。貴方様はヴァルキリアのために私を引き込もうとはしていない。誰か大切な人を救いたいがために必死になっていると感じさせられました…」

……。

「それに私は貴女様の力に惹かれたわけではありません。貴方様の持つ力の暖かさに惹かれたのです。力の属性は持ち主に作用します。回りくどいことを申し上げましたが、私はロース様、貴方様自身に惹かれたのです。ですから必ず神武闘式を優勝してください。私は貴方様に祝福捧げれることを心待ちにしています…」

究極の殺し文句だ…。

私は生涯この瞬間を忘れることは無いだろう…。

「必ず優勝してみせる。そして、オイジュス様の祝福をこの手に！」

かつて無く私は熱くなっていた。

そして、これほどまでに戦闘意欲を見せるのも初めてだった。

今の私は臆病者ではない！

オイジュス様の愛を勝つ取るために戦いを挑もうとする勇者となったのだ！

「期待しておりますよ、ロース様…」

オイジュス様が私の顔を引き寄せてくる。

「これは祝福の前払い、残りは優勝した後にて。貴方様にガイアの加護が有らんことを…ちゅ」

オイジュス様の可憐な唇が私の額に触れられている！

ぬおおおおおおおおおっ！

私の全身に至る細胞の隅々までがオイジュス様のご加護を承ったぞ！

もはや私に敵なぞいない！

神であろうとも悪魔であろうとも来るがいい！

私は女神の祝福を受けて無敵となったのだ！

……。

いや待て、ロスト。

今しばらく冷静になれ…。

神武闘式と言えば、世界中の強豪共が集う化け物共の饗宴だ。

毎年、参加者の死者が絶えないと言われるほどの地獄の殺し合い大会とも言われている。

その修羅場へと私は足を踏み入れようとしているのだ…。

そう言えば、ヒュプノスが言っていたな。

私にしか出来ないことがアースガルズにあると…。

それは神武闘式に出場して優勝することを指していたということか…。

……。

とりあえずは代役としてケールに出場させるとしようか。

私は現在ケールの従者という立場だ。

従者よりも格好付くだろうし、なによりも彼女はこの手の修羅場には慣れているだろうからな…。

適材適所というものだ。

オイジュス様には悪いが、理想の女性を前にしても私はあくまでも命が惜しい…。

ここは涙を呑んで諦めるしかない。

「やはり申し訳…」

「ロース様、神武闘式の戦いは熾烈を極めます。だから、せめて貴方様のために歌を捧げます…」

オイジュス様は立ち上がり、歌い始めた。

……。

どれほど困難になろうとも諦めずに立ち向かう力強さを感じさせる歌だった…。

臆病な気持ちが吹き飛ぶ…とまではいかなかったが、力が溢れてくるような不思議な響きだ…。

もはや腹をくくるしかない…。

オイジュス様にここまでされてしまったらもう後には引くことができない…。

優勝するかどうかはともかく生き残るために踏ん張らねば…。

全く難儀なことだ…。

……。

……。

…。

「今日はとても楽しい時間でした。またご一緒にお食事をしたいですね…」

「オイジュス様が良ければいくらでもご一緒しよう…」

そんなやり取りをして私はオイジュス様の私室を後にする。

さてと、随分時間をかけてしまったな…。

エクリアには何て言い訳をすればいいのか…。

これは説教地獄を受ける覚悟を決めねばならないな…。

「話は終わったのか？」

部屋の出口にはモーモスが立っていた。

「ああ、外で待たせて済まなかった…」

「かまわない。オイジュス様はご機嫌でいる。むしろこちらが感謝するべきことだ」

何処までもオイジュス至上主義ではあったが、それが好ましく思えてくる。

彼女はオイジュス様を愛しているのだろう。

だが、決して自分の感情を押しつけてはいない。

オイジュス様が喜ぶのであれば、例え自分が気に入らない相手でも認めてくれているのだ。

彼女が本当にオイジュス様のことを思っているのだと感じさせられる…。

「それよりもお前も神武闘式に出場するのか？」

「お前も、と言うことは貴様も出場するということか？」

質問を質問で返すのは失礼なのだが、私は気になってしまう。

彼女もまたタナトスとケールと同様にアーテが用意した手札の一つだ。

さらにオイジュス様とは違い、戦闘に特化したものであるとこに違いない。

「無論私は出場する。前回では私がオイジュス様の祝福を承ったのだ」

つまり前回の優勝者ということか…。

これは一筋縄ではいかないだろう…。

「私はお前が出場することを歓迎するぞ。久々に手応えのある男と見たからな…」

青銅の兜の奥で獰猛な笑みを浮かべているのが容易に想像できるぞ…。

「私はただの従者に過ぎない…」

「謙遜するな。私には分かる。なにせオイジュス様が認めた男なのだ。私は期待しているぞ。お前ならば、あるいは私の…」

モーモスは不意に言葉を止めて、背を向ける。

「また逢おう。次は戦いの舞台でな…」

モーモスは颯爽と私の前から去っていく。

……。

これは宣戦布告ということか…。

私とモーモスのオイジュス様の祝福を賭けての勝負を持ちかけたというわけなのか！

受けて立つぞ！

オイジュス様の祝福は私の物だ！

……。

そんな乗りで行きたいものだが、相手は前回の優勝者だ…。

それなりに血を流す覚悟をしなければならない…。

これもまた難儀なことだな…。

とりあえずエクリアの説教地獄を受けるために控え室に戻るとするか…。

第４４話：モロス

私はエクリアの説教地獄を喰らわされることを想像し、重い足取りで控え室に戻ろうとしたときだった。

硬質な鍵盤の音が大聖堂に響いてくる。

この音色はチェンバロ。

ケールが奏でるマンドリンと同様に遙か昔の時代に愛好されていた古楽器の一つだ。

いったい誰が演奏しているのだろうか？

生憎だが、ケールのマンドリンとは比較にならないほどの聞いていられない音色だった。

ただ音が世界に響いているだけの何の感慨も沸かない無味乾燥な音色。

この音を出している演奏者は恐らく途轍もなく無感動で無機質な奴に違いない。

私はいつの間にか音が聞こえてくる方向へと足を運んでいた。

単なる興味本位だった。

これほどまでに味気ない音を出す者に何となく興味を抱いたに過ぎない。

無機質な音に耳を澄ませながら、ある一室の扉まで辿り着いた。

扉は開いていた。

私は扉の隙間から部屋の中を覗き込んでみる。

……。

そこには純白の鎧に身を包んだ者がチェンバロを演奏していた。

その光景を見た途端なぜか私は身震いをした。

何故か分からない。

敢えて言うならば、天敵に出会い、原始的恐怖を感じたというべきなのか…。

ともかく一刻も早くその場から立ち去りたい思いに駆られてしまった。

あの純白の鎧は不味すぎる！

だが、立ち去ろうとしたとき運悪く手が扉の端に当たってしまうのだった。

純白の鎧が演奏を止めて音がした方向へと振り向く。

「誰…なの？」

純白の鎧が発した声は無機質な演奏者に相応しい無機質な響きだが、透明感がある美声だった。

声質からして女なのか…。

「済まない。余りにも無機質な音だったから気になって…」

……。

何て事だ！

つい本音を漏らしてしまったではないか！

オイジュス様との出会いで気が緩み過ぎていたのかもしれない…。

「済まない…」

「気にしてない。本当のことだから…」

純白の鎧は無機質ながらも何処か憂いを秘めた声を響かせてくる。

無骨な鎧に反して儚げな雰囲気を漂わせていた。

「私はこの世界に何の価値も見出せていない…」

彼女は独り言のように語り出してくる。

「この世界は私にとって紙に描かれた風景画のようなもの。あるいは有機物と無機物が出鱈目に混在しているだけの歪な集合体…」

……。

どうやら純白の鎧はかなりの学者肌で変人のようだ…。

「しかし、無価値で無意味な世界の中でついに確かなる存在を私は発見することが出来た…」

純白の鎧が私に視線を向けてくる。

何だか嫌な予感がしてきたぞ…。

「貴方の名前は？」

「ロースだ…」

なぜ素直に答えてしまったのだ？

ここは「相手に名を聞くときはまずは自分から名乗ることが礼儀だ」と言うべき場面だったはずだ…。

「それは嘘。貴方は偽っている。心臓の鼓動が僅かに速くなっている。それに体温も上昇していた。私の前では虚言は無意味…」

「私の名はロースだ…」

……。

不気味な女だ…。

私の全てを見透かそうとしているのか…。

「貴方の偽りの名を告げる行為に私は哀しみを覚える。なぜ偽る？なぜ誤魔化す？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ貴方はロース？本当の貴方は何処にいる？」

不気味を通り越して恐すぎるぞ！

「貴様には関わりないことだ…」

このような輩には関わらない方がいい…。

命の危険すら感じるぞ…。

私が部屋を出ようとしたときだった。

「私は貴方と関わりたい。話したい。知り合いたい。触れ合いたい。そして、寄り添い合いたい…」

純白の鎧は情熱的とも言える告白を私に言ってきた…。

なぜ出会ったばかりの私にそのようなことを言ってきているのだ？

彼女とは以前何処かで出会ったことがあるというのか？

呆然としている私を余所に純白の鎧は再びチェンバロを演奏する。

先ほどの無味乾燥な音色とは違う。

熱情が迸る力強い響き…。

無機質で無感動と思った純白の鎧から初めて感情が垣間見えた気がした。

私は時間を忘れて思わず聞き入っていた…。

……。

……。

…。

「私は世界に意味を見出した…」

純白の鎧を演奏を止め、再び語り出す。

声に僅かだが感情が入り交じっている。

「貴方という存在が私を世界に繋ぎ止めてくれる。それは甘美な束縛。私は貴方に縛られたい。絡め取られたい。そして、貪られたい…」

……。

かなり生々しいことを平然と言うとは侮れないな…。

別の意味で身震いしてきたぞ…。

純白の鎧は兜を取り、椅子から立ち上がった。

……。

肩まで切り揃えた深い夜のような漆黒の髪。

深遠なる闇を映し出す漆黒の瞳。

全てを黒く塗りつぶすかのような漆黒の口紅。

それらを全て際立たせるかのような病的なほどの純白の肌。

……。

およそ人間離れした美貌に私は圧倒される。

しかもやはり私よりも頭一つ分ほど背が高い。

「私は貴方が欲しい…」

ぐっ！

何て事だ…。

傾国の美女がここにも存在していた…。

それになぜか私を求めていると来ている…。

「貴方の真実を見せて欲しい…」

……。

私は催眠術に掛かったかのように兜を脱いでしまう。

「これで私は貴方という存在を記憶に留めることが出来た。貴方の真実は永久に私の中で保存されることになる…」

純白の鎧は手甲を脱ぎ捨てて私の頬に雪のように白い手を沿わせてくる。

「これで私は貴方という知覚を認識することができた。この感覚は私の一部となる…」

オイジュス様の手触りとはまた別次元の甘美な感触に私は苛ませていく…。

男の証が弾けてしまいそうだ…。

純白の鎧の無表情ながらも圧倒的な美貌が私の鼻先へと近づいてくる。

「貴方を味見したい…」

むぐっ！

うおっ！

純白の鎧の漆黒の唇が私のそれを覆い尽くしてくる。

「んっ…ちゅる…ちゅぱ…じゅるじゅるり…ぢゅぱちゅちゅう」

舌が吸われている！

初対面の私にここまで深い口づけをするものなのか！

まるで私を自分の所有物と言わんばかりに唇を押しつけてくる…。

「ちゅぱ…これで私の味蕾は貴方の唇、歯、舌、口腔内全ての味を記憶した。そして、貴方の味は私の嗜好物であることを認定した…」

私は力無く純白の鎧の腕の中で項垂れている。

不味い…。

このままでは行くところまで逝ってしまうぞ…。

いや、非常に魅力的なことなのだが、今は不味い気がする…。

今ここで流されたら奈落の底へと突き進む予感がするのだ…。

「しかし、まだ情報が不十分。貴方の情報を開示することを要求する。私は貴方の全てに渇望している」

ぐおっ！

純白の鎧は私をチェンバロの台へと押し通し、不協和音が鳴り響く。

「思考は不要。受動的になることを推奨する…」

どのような魔法を使ったのか、私の鎧が脱がされていく。

これは逆陵辱というものではなかろうか…。

私の男としての矜持が危機に晒されているぞ！

「待て！何をするつもりだ！」

私は必死に純白の鎧を押しのけようとするが、力が入らない！

「抵抗は無意味。貴方は無意識に異性の身体を渇望している。心拍数、血圧、体温共に上昇している。そして、生理的反応も顕著。すなわち私という異性を貴方は要求していると解釈する…」

純白の鎧が消えていく。

そこに映ったのは髪と瞳と口紅と同様に闇よりも深い黒衣を着飾った女性がいた。

ぐはっ！

最初に目に映ったのはその豊満な胸と透き通るような白い脚だった…。

この女は何処まで私を戦慄させるつもりなのだ！

「私の循環機能も乱れている。私も貴方を異性として求めている。理性が崩壊してきている。本能が支配しようとしている。私が私でなくなろうとしている…」

「落ち着け！ただの気の迷いだ！」

この女はオイジュス様と同様に傾国の美貌を誇っているが、本質は真逆だ！

無表情で無感動に見えて、誰よりも欲望に忠実で貪欲だ！

このままでは為すがままに蹂躙されてしまうぞ！

「貴様は何者だ！」

「私という有機物の固有名詞はモロス…」

……。

モロス。

ヴァルキリア帝国の不倶戴天の敵であるビフレスト皇国の将軍であり、アーテが言っていた三つ目の手札…。

さらに神でありながらも人として生を歩んでいる希有な存在。

生粋の神であるアーテと同格と呼ばれし者。

『モロス様は貴方様と同等の力をお持ちですが、力の本質はまるで違います。彼女の力は虚無です』

……。

『彼女は力には喜びも怒りも哀しみも楽しみも有りません。私の心の目でもってしても何も感じ取ることができなかったのです…』

オイジュス様の言葉を思い出す。

彼女は虚無というだけはない…。

虚無ゆえに誰よりも満たされない思いに駆られ、貪欲に全てを求め続ける無限の欲望を具現化したような存在だ…。

「私を感じて。貴方を感じさせて…」

むほあっ！

モロスが私の腕を掴んで、あろう事か自らの豊満な胸を鷲づかみさせてきたのだ！

「あぁ…感じる…貴方の握力を通して欲望を私は感じ取る…うっ…貴方は私の胸を通して私の想いを…そして…私の渇望を貴方が感じ取れる…はぁ…相互の認識が関係を構築していく…それはとても素晴らしいこと…あぁん…」

……。

私の思考が麻痺してきそうだ…。

これがモロスの本性だというのか…。

不意にモロスの喘ぎ声が途切れる。

「異臭を感じる。れろっ」

ぬあっ！

モロスがいきなり私の首筋を舐めてきた…。

「これは貴方の体液の味ではない…あむっ…異物の臭い…れろっ…異物の味…ちゅ…一つ、二つ…ちゅぱ…」

モロスは私の服を破り、首筋だけでなく、胸元や腕にも舌を這わせていく…。

これでは本格的な陵辱ではないか！

だが、気持ちいいから抵抗できない…。

何とも悲しい男の本能だ…。

「まだある…四つ、五つ、六つ、七つ、八つ…あむっ！」

ぐっ！

モロスが私の肩に齧り付いてきた。

「あむっ…貴方は八体以上の異物と接触している…んっ…これは怒りの感情…んぐっ…私は貴方に報復することで感情を制御する…ふぐっ」

ぐあっ！

私の胸にモロスの爪が食い込んでくる。

それにしても八体の異物とは、エリー、アイリ、タナトス、エル、アビス、ケール、エクリア、そして、多分ヒュプノスのことを指しているのか？

それにしても凄まじい感覚の鋭さだ…。

もし、彼女を妻にした場合は迂闊に浮気をすることができないだろうな…。

ぐおっ！

私の意識を自分に向けさせるかのようにモロスの爪が頬に食い込んでいく…。

「貴方の苦悶に満ちた表情を見ることで怒りの感情が制御されていく。貴方の苦痛に満ちた表情を見ることで喜びの感情が芽生えている。不思議な感覚、中毒性のある感覚、支配欲を満たす感情、独占欲を満たす感情、その全てを貴方が与えてくれる…」

意識が朦朧としてくる…。

モロスは自分が付けた噛み傷や刺傷から流れ出る血を夢中で啜っていた。

「これは生体維持するために必要な体液…あむぅ…血液と呼ばれる物…ぴちゃ…貴方の命の源…私はそれを飲み干す…ちゅる…苦く…甘く…熱い…貴方の命の味…じゅるるっ…貴方の全てが…私に還る…」

私はモロスという獣に成す術もなく貪られている…。

彼女が繰り出す猛毒の如き甘美なる感触に抗えずにいるのだ…。

「まだ異臭を感じる。貴方の額から異物の体液の臭いがする…」

私の額から臭い…。

それはオイジュス様から祝福の接吻を頂いた位置だ！

「この異臭、オイジュスという異物の臭いと一致する…」

モロスは身体を起こして立ち上がる。

「これより貴方を汚染する異物を除去する…」

……。

何だと…。

「待て…」

「なぜ止める？」

モロスが無表情で私を睨み付けてくる。

正直逃げ出したいほどに恐い…。

だが、オイジュス様には手を出させないぞ…。

私は敗れた服を脱ぎ捨てて拳を構える。

「私は貴方との戦闘を望まない…」

私も本当は戦いたくないぞ！

だが、このまま行けばモロスはオイジュス様を殺しに行くに違いない。

例え、相手が希望の女神と讃えられる存在であろうとも彼女は微塵も躊躇わないだろう。

オイジュス様にはモーモスが付いているが、おそらくモロスには歯が立たない。

アーテ以外では私しか彼女を止める者がいないだろう…。

だが、果たして神である彼女に何処まで太刀打ちできるのやらか…。

モロスは沈黙したまま私を見据えてくる。

……。

「二つ条件がある…」

奇跡的にもモロスが妥協案を提示してきたぞ！

私は一息つく…。

このような神聖な場所で血みどろの戦いにならなくて心底良かった…。

だが、安心するのはまだ速い…。

モロスの出す条件が無理難題かもしれない可能性もある。

例えば…。

『貴方を監禁する…』

そんな条件が出されたら却下だ！

私はまだ自由でいたい！

『オイジュスの代わりに他の異物七体を排除する…』

その条件が出された場合も激しく却下だ！

首里肉林の夢が潰えてしまう！

『貴方の殺して私の物にする…』

もはや論外だ！

モロス様…。

後生ですから限りなく容易な条件を出してくれることを望みます…。

……。

この困難を乗り越えるために私の誇りなんぞいくらでも捨ててやるぞ！

「条件の一つは…」

来るがいい！

「貴方の真実の名を教えて欲しい…」

……。

……。

…。

本当にその程度のことでいいのか？

何だか拍子抜けだ…。

「もう一つは貴方の遺伝子を提供してもらいたい…」

……。

さっぱり分からん！

遺伝子の意味とはいったい…。

学の無い私でも分かり易い説明を希望する。

「具体的にはどうすればいい？」

「私と性行為をすればいい…」

……。

……。

……。

……。

…。

何ですと？

モロスが私の肩に手を添えてくる。

……。

少し待って欲しい…。

余りの急展開で私の脳細胞が破裂しそうな勢いだ…。

私と彼女が出会ってから僅か一刻も経ってもいない…。

それでいきなり男女の営みを育もうとするのか！

「私と貴様は逢ってからまだ間も無いが…」

「私が貴方を認識した。それで充分…」

いや、彼女もまた私の最強の力に惹かれたということに違いない！

だが、生憎力に惹かれただけで愛の無い行為に及ぶことはさすがの

私でも許容できないぞ！

「貴様は私の力を欲しているだけだろう。生憎それだけの動機で私は貴様と交わるつもりはない…」

「力は属性、あるいは付属に過ぎない。私は貴方の個性に興味がある。興味、違う。その表現は適切ではない。異性を求める感情、その感情は恋愛、熱愛、求愛、愛欲、愛、愛、愛…」

モロスが私に頬を掴んで引き寄せてくる。

「感情を制御した。そして、解答が得られた。私は貴方という個性に愛を感じている。私は貴方を愛している…」

ぐほっ！

ここまで真っ直ぐに愛していると言われてしまうとは男冥利に尽きるが、恐すぎるぞ…。

「私は感情の制御を放棄する。本能のままに貴方を補食する…んちゅうううううっ！」

モロスは本能に目覚めたかのように私を激しく口づけて、再びチェンバロの台へと押し倒していく。

チェンバロの不協和音と共にモロスの唇から出てくる卑猥な音が響いていく。

「あむっちゅぱちゅばちゅるじゅるるっ！」

モロスは私の唇のみならず頬や鼻や目全てに自らのそれを擦り付けてくる。

自分の色に染め上げようとするかのように…。

「ちゅぱ…私の最終目標は貴方を私の属性へと上書きする…そして、私以外の有機物全てを失認させ…ちゅ…私だけしか認識できないようにする…ちゅう…これは確定事項…ちゅぱ…異議は認めない…ちゅ」

ぐおっ！

モロスは途方もなく病んでいる…。

彼女は私以外を認識しようとは微塵も思っていないのだろう。

私以外の世界に存在する全てを彼女は異物としか認知していない。

間違えなく今まで出会ってきた女の中で最大級に危険な女だ…。

果たして私はこの女の重すぎる求愛に生き延びることが出来るのだろうか…。

モロスは黒衣を脱ぎ捨てて純白の肌を出してくる。

……。

病んでいる女とはいえ、最大級の美貌を誇っている。

私の男の証に力がみなぎってきた。

「私と貴方が結合することで遺伝子交換を開始する。私の中に貴方が、貴方の中に私が挿入される…」

分かっていることだが、生々しい説明は止めて欲しい…。

「これが貴方という男性の象徴…恐怖の感情が芽生えている…。恐怖の感情を…制御する！これより挿入を開始…うぐっ！」

うごっ！

凄まじい締め付けだ…。

「はぁはぁ…痛覚が私の思考を乱していく。活動困難により一時休止する…はぁはぁ…」

モロスはしばらく動きを止めるのだった。

私はモロスが涙目になっている表情を感慨深く眺めていた。

……。

……。

…。

「体力は回復した。これより活動を再開させる」

ぐあっ！

モロスが無表情ながらも激しく私を攻め立ててくる！

「貴方の情報の全てを私が管理する！」

がはっ！

「私以外を認識することは許容しない！」

ぐえっ！

「私は貴方を構成する細胞の一欠片も残さず認識する！」

ぐほえぇ！

「私の愛が貴方の全てを上書きさせる！」

ぎゃあああああああああああっ！

……。

……。

……。

……。

……。

…。

「ちゅぱ…ふぅ…貴方の真実の名を私に告げて…」

「はぁ…はぁ…ロスト…だ…」

私の名前を知り、モロスは僅かだが、笑みを見せた。

「ロスト、私は貴方の真実の名を記憶できることが嬉しい。ありがとう…ちゅ」

モロスは干からびている私の頬に口づけて立ち上がる。

裸体になっていたはずがいつの間にか純白の鎧に包まれていた。

「もうこの国に滞在する必要性は皆無。さようなら、ロスト。次に再会したときは貴方を私の半身にすることを宣言する。これは決定事項であり、異議は認めない。そして、貴方を汚染する異物を次こそは完全に排除し、根絶させる…」

……。

「ロスト、私は貴方を渇望する…愛している…」

無機質な中に悲しげな色を含ませた別れの言葉…。

とんでもなく危険な女に愛されてしまったのものだ…。

これは男の甲斐性云々の次元を越えてしまっているぞ…。

……。

指一本も動かせない。

今回は完敗と言ったところか…。

正直手も足も出なかった…。

私はどうやら床の上では最強にはなれないようだ…。

とりあえず今は腹上死することなく生還できたことを素直に喜ぶとしよう。

後はケール達に殺されないことを祈るのみだ…。

……。

モロス…。

今回は成す術もなく強姦されてしまったが、次はそうはいかないぞ！

……。

非常に不本意な結果に終わったが、燃え尽きたな…。

第４５話：神武闘式

控え室に戻るのに随分な道のりだった気がする。

とりあえず破れた服は鎧を来て誤魔化すことにした。

「ご主人様、僕はアースガルズを戦争に巻き込むことはしたくない。けど、エルの命が掛かっているという。どうすればいい？」

ケールはかなり重症だった。

いつもの不敵な笑みを零しているときとは段違いだ。

「貴様は馬車に乗っていたときに私に言ったことを覚えているか？」

「あっ…」

『僕は君に付いていくと決めたんだ。だから、それ以上の言葉はいらないよ…』

確かケールは私にそう言って口づけてくれた。

あの時の決心を思い出してもらいたいものだ…。

「そうだったね。僕は何を迷っていたのだろうか。もう決めていたはずなのに…」

私はケールを抱き寄せる。

「貴様は私に付いていくだけでいい。全ては私の進めることだ…」

私は大切な者を守るためならば、犠牲を厭わない…。

だが、大切な者にはそのような思いはさせたくない。

だから私が背負えばいいだけのことだ。

構成員が悲しめば、酒池肉林が色あせてしまうからな…。

私は馬鹿で臆病者ではあるが、構成員への責任だけは果たすつもりだ。

それ以外の責任は断固として御免被る。

「僕は君に付いていって良かったと…ん？この匂いは？くんくん…」

ケールは私の首元に顔を寄せて、何か匂いを嗅いでいる様子だった。

「女の匂いがする。ご主人様、鎧を脱いでもらえないかな？」

ケールは実に良い笑顔で私に鎧を脱ぐことを促してきた。

……。

その実に良い笑顔が言いしれぬ恐怖を感じるのは何故だろうか…。

「そう言えば閣下、散歩に行くとは言われましたけど、一日中何処へ散歩をしていたのですか？小官に教えて頂きたいものですね…」

エクリアもケールと同様に実に良い笑顔で詰問してくる。

……。

「私は神武闘式に出場することになった…」

ここは強引に話題を変えて、矛先を反らすのだ。

「まさか、閣下があの神武闘式に出場するというのですか？」

エクリアが驚いている。

どうやら話を逸らすことに成功したようだな…。

「世界中の猛者共が集い、毎年死人が絶えない血みどろの大会に出場するとは正気の沙汰としか思えませんね…」

それほどまでに危険な大会なのか…。

「いや、その心配には及ばないと思うよ。ご主人様はヒュプノスの遊戯に耐え抜いたのだからね」

ケールが私の意見に追随してくれている。

当然のことだろう。

私はあの一騎当千の狂戦士共が群がっていた世界で生き残ってきたのだ。

今でも思い出すだけ身の毛がよだつな…。

よくあの地獄を生き延びれたものだ…。

それに悲しい別れもあった…。

エイラ…。

エリス…。

彼女達のことは昨日のことのように思い出すことが出来る。

私が今ここにいるのは彼女達のお陰なのだからな…。

「まあ、ご主人様だったら優勝は問題無いさ。それにこの大会に軽く優勝出来るほどの強さでないとあのビフレストの将軍には太刀打ちできないからね…」

ビフレストの将軍…。

私の中で最大級に危険な女であると認識しているモロスのことだ…。

あの甘美で屈辱的な強姦がまだ記憶に新しい…。

しかも病的なまでに私に執着していると来ている…。

もう少しお手柔らかな対応をしてくれるのならば問題無いのだが…。

「私はあの時の戦には参加していませんでしたが、モロス将軍はそこまで強いのですか？」

エクリアはどうやらケールのようにモロスとは面識が無いようだ。

いや、エクリアはオネイロスとしてはモロスのことを知っているはずだ。

だが、知っているだけで実際に見たことは無いということなのか…。

「かつての戦争で僕やタナトス様率いるヴァルキリアの正規軍はビフレストの首都レーヴァテインまで進軍して後一歩のところでビフレストを討ち滅ぼせる所まで来ていたんだ。けど、首都の前に立ちはだかった者がいた。それがモロスだった…」

ケールは一息つく。

よほど思い出したく無いのだろうか？

「モロスの繰り出す神懸かり的な力の前に正規軍はあえなく全滅。僕とタナトスも瀕死の重症を負い、何とか死地から脱することが出来たんだ。恥を晒すようだけど、まるで歯が立たなかったよ。生き延びるのがやっとだった。ヴァルキリアは彼女一人に敗北を喫してしまったわけだよ…」

……。

ケールは苦笑してモロスに惨敗したことを語った。

彼女はそこまで強大だというのか…。

いや、それは当然のことだろうな…。

ケールはモロスの力を神懸かり的と言っていたが、実際は違う。
神懸かり的では無く、神の力そのものなのだ。
モロスはヴァルキリアが信仰するアーテーと同格の神なのだから…。
恐らく私が酒池肉林の世界を実現するために立ちふさがる最大の敵となるだろう。
彼女は私以外を決して認識しようとはしない。
さらに私が彼女以外を認識することも決して許容しないはずだ。
私は果たして彼女に勝てるのだろうか…。
そして、無事に生き延びることが出来るのか…。
……。
今はそれについて考えるのは止そうか…。
「まあ、モロスへの対策は今後にしておくとして、当面の神武闘式については問題無いだろう。ご主人様だったら優勝は間違いないと思うよ。ただし…」
ケールはいきなり私の兜を剥ぎ取る。
「女の色香に惑わされなければ、だけどね…ふふっ…」
ケールが笑みを浮かべて私に手鏡を渡してくる。

私は何気なく手鏡を受け取って自分の顔を見る。

……。

私の体内時計は止まってしまった…。

顔には黒い口紅がこれでもかというほど塗りたくられていた…。

「閣下、失礼します…」

私が自分の顔を見て呆然としている隙にエクリアの鎧を脱がされてしまう。

「これは何とも壮絶ですね。戦場でこれだけの傷を負えば、名誉の負傷というところなのですが…」

ぐっ！

エクリアはモロスに付けられた刺傷を指先で押さえている…。

「この神聖な大聖堂の中で誰と火遊びをしていらしたのでしょうか、閣下？」

「僕の緑色の口紅もそうだけど黒い口紅もまた珍しいね。誰と情事を楽しんでいたのかな、ご主人様？」

うぐっ！

ケールは噛み傷を鷲づかみしてきたぞ…。

ここは素直に白状するしかないのか…。

それに今回は私が完全に被害者なのだ。

神に強姦されたのであれば、致し方ないだろう…。

「モロスにやられた…」

……。

ケールとエクリアの時間が止まったように感じられた。

まあ、先ほどまでモロスの恐怖の武勇伝を語っていたのだから当然だろう。

だが、何度も言うが私は被害者だ。

「はあ…僕は今日ほど君に驚かされた日は無かったよ。確かにモロスがこのアースガルズに来ているとの情報はあったけど…。ご主人はもう少し相手を選んだ方がいいと思うよ…」

それについてはケールにだけは言われたく無かったと私は思うが…。

「まあ、閣下にしてみれば、相手が敵国の将軍であろうと関係無いのだと思います。ですが！それでも敢えて言わせて頂きます！もう少し相手を選んでください！このままでは本当に女で身を滅ぼされますよ！分かっているのですか、閣下！私は別に閣下に火遊びをするなとは言っていません！閣下も男ですからたまには迸る性欲を発散させたいのだと理解しております！それを考慮しても今回の相手

は不味すぎます！相手はヴァルキリア帝国の宿敵ビフレスト皇国、その中でも怨敵とも言えるモロス将軍と一夜を過ごしたと知られてしまえば、瞬く間に反逆者に仕立て上げられた果てに処刑されることは確定的です！閣下はどこまで私の心労を増やせば気が済むというのですか！これは私に対する嫌がらせという訳ですか！だとしたら私は悲しいです！私は閣下のことを思って尽くしているというのに…。私の何が不満だったのですか？やはり口やかましいからでしょうか？私よりも敵国のモロス将軍の方が好みだったのですか？分かっていました…。閣下が女に見境無い方だということを…。それでも私は閣下を見捨てることはできないのです。なぜなら、私は閣下を愛しているのですから…」

エクリアは説教地獄を発動したと思いきや、何だか愛の告白へと変わりつつあった。

「私は閣下が例え、敵国の将軍と禁断の愛に突き進もうとかまいません。しかし、それならば、私も今後より一層容赦無く閣下を修正していくことをここに誓います！私は閣下を心から愛しています！そして、愛しているからこそ嫌われることも厭いません！これは神が私に与えた大いなる試練なのです！閣下を真人間へと更正せよとの…。さて、覚悟は宜しいですか、閣下？懐かしいですね、昔はこれでよくヒュプノス様を教育してさせていただきました…」

エクリアは指揮棒を持って私に近づいてくる…。

尋常ではない殺気を散乱させているぞ！

私はケールに助けを求めようとした。

ケールは私を見て肩を叩き、首を横に振った…。

「エクリアの愛の鞭を受け取るといいよ。もしかすると新たなる性癖に目覚めるかもしれないしね…」

そんな性癖なぞ死んでも目覚めたくはないわ！

エクリアが笑顔で、ただし、目が笑っていない表情で私に近づいてくる…。

「私の愛あるお仕置きを受け取ってくださいませ、閣下！」

ぐはっ！

「泣けっ！」

へぶしっ！

「喚けっ！」

ぬはっ！

「悶えろっ！」

ごほっ！

「叫べっ！」

ぎゃっ！

「いい声だ！」

ひでぶっ！

「まだ足りない！」

ぬはぁあ！

「泣き叫べっ！」

あべしっ！

……。

……。

……。

……。

……。

……。

……。

燃え尽きた、ではない…。

洒落にならないほどに危なかった…。

もう少しで私が私で無くなるような、そんな喪失感を…。

……。

いや、考えるのは止そう…。

それは危ない何かに目覚める切っ掛けになってしまうものだ…。

「小官としたことが少々やりすぎたみたいですね。さあ、閣下。小官が傷を癒して差し上げます。こちらへどうぞ…」

「有り難い…」

エクリアは何だかんだと言って優しいのだな…。

今後はエクリアへの評価を改めねば…。

「申し訳有りません、閣下。小官が責任を持って看病を務めさせて頂きます。ですから、全てを小官に任せてくださいませ…ふふっ」

「頼む…」

ケールは私とエクリアのやり取りになぜか身震いしていた。

「ご主人様、見事に調教されているよ…」

ケールが何かを言っているようだが、私の耳には何を言っているのか聞き取れない。

それよりもエクリアに手厚い看病してもらわねばな…。

明日の神武闘式に差し支えが出てくる。

……。

……。

……。

……。

清々しい朝だ…。

今ならば世界制覇も夢ではない、そう思えるほどに気分がみなぎっているぞ…。

「お早う御座います、閣下…ちゅ」

エクリアはいつにも増して美しくなっていた。

私はそんなエクリアの口づけを受けてさらに気分が高まってくる。

しかし、気分は高まっているが、身体が妙に重いのは気のせいだろうか？

私はエクリアを見るが、彼女はただ笑っているだけだった。

そんな時、ケールが寝室へと訪れてきた。

「やあ、お早う、ご主人…さま…」

ケールは私の顔を見て、何か驚いているようだった。

いったい私の顔に何かがついているというのか？

「エクリア、いくらなんでもやりすぎではないか？」

「ほほほっ…申し訳有りません。閣下が余りにも可愛か…ごほん…いえ、体調が優れていなかったもので、つい張り切りすぎました…」

ケールとエクリアは何か話しているようだが、今の私には関係無い。

身体が妙に重いが、心は軽くなっている…。

今ならば空でも飛べそうな気がしてくるな…。

……。

……。

…。

「閣下！小官がやりすぎてしまいました！申し訳有りません！ですから早まった真似はお止め下さい！」

「ご主人様！僕を置いていかないでくれ！君がいなくなった世界なんて考えられないよ！だから、正気に戻ってくれ！」

私はいつの間にかケールとエクリアに両脇を掴まれていた。

冷たい風が私の身体を撫でつけている。

ここは何処だ?

私は周囲を見渡した。

綺麗な空だ…。

それに下から風が吹いてきている。

ん?

下からだと?

私は下を見下ろした。

人ごみが見えてくる。

建物が小さく見えてくる。

ここは…。

大聖堂の最上階…。

私は今立っている位置は最上階の屋上の端…。

……。

ぬおおおおおおおおおおおおおっ！

なぜこんな物騒な場所に立っているのだ？

「私はなぜここにいる？」

私の両脇にいるケールとエクリアに訪ねた。

「閣下が正気に戻られた…良かった！良かった！うあああっ…」

「もう何も言わなくても良いよ…。僕がずっと君の側にいるから…ぐすっ」

二人は私の胸に縋って泣き始めていた…。

何がなんだか分からないが、雨降って地固まるというものなのだろうか…。

それよりも早くこの危ない場所から去りたいのだが…。

「うあああぁ…閣下…ごめんなさい…ごめんなさい…」

「ううぅ…僕は…もう二度と…ぐずっ…君を離さないよ…だから…うぅ」

今しばらく二人が泣き止むのを待てねばならないな…。

……。

……。

…。

ケールとエクリアは泣き止み、私は私室に戻って身支度を整える。

素顔が晒されないように漆黒の鎧で身を包み、ケールとエクリアの従者として会場へと足を運んでいく。

いよいよ神武闘式が始まるのだ。

世界中から並み居る強豪共が集う殺し合い大会と呼ばれている物騒な催し物。

いくら物騒とはいえ、戦場とは違い、命乞いや降参も出来る戦いだ。

危なくなれば、素直に白旗を揚げればいい。

無理をしなければ安全が保証されるのだ。

とりあえず命の危険が無い程度に優勝出来てオイジュス様の祝福を受けれたら言うこと無しといったところだろうか。

会場には暑苦しい野郎共が異様な空気を醸し出していた。

「おいら、聖女様の祝福を受けて、結婚を申し込んでやるんだ…」

「はぁ…はぁ…この日を待っていた。オイジュス様はボクちんのもんだ！」

「ぐへへへっ…あの聖女の綺麗な顔におれっちの欲望をぶちまけたいぜ…」

……。

さて、エルを助け出す良い方法が他に無いか考えるとしようか…。

「閣下、ではなくてロース！気持ちは分かるが踏みとどまれ！」

「ご主人ではなくてロース、僕だって立ち去りたいのを我慢しているんだ！だから従者の君は耐えないといけない！」

ケールとエクリアは私の身体のしがみついて必死に踏みとどまらせようとしてくる。

だが、私は二人を引きずって会場を後にしようとする。

正直、あの野郎共と同じ空気を吸いたくもない。

「待て、ロース！想像してみろ！もし、貴様が去ったら聖女様はあの暑苦しい男共の慰み者となってしまうのだぞ！」

「そうだ！君は兎を豚共の群れに放置したまま去るというのか！このままでは聖女様は豚共の餌に成り果ててしまうぞ！」

……。

オイジュス様があの野郎共の慰み者に…。

『きゃああっ！止めてください！どうか！どうか乱暴にしないでく

ださい！』

『げへへっ…痛いのは最初だけだよ。すぐに気持ちよくなって昇天するぜ…ぐへへっ！』

『止めて！あぁ…あああああああああっ！』

『これで聖女様の祝福を頂いたぜ…御利益間違え無しだな。がははははははっ！』

……。

私は足を止めた。

「ロース…」

「ロース！」

私は縋り付いてくる二人を見る。

「オイジュス様をお救いせねば…」

私は颯爽と会場へと引き返していく。

豚共の魔の手からオイジュス様を救い出すのだ！

野郎共の熱気に耐えながらも私は会場の再び足を運んだ。

会場の壇上には清楚な空気を発している聖女様が立っていた。

その隣には青銅の鎧ことモーモスが付き添っている。

「勇者様方、はるばるとよくお越し下さいました。ガイア教会の代表して私オイジュス・リージェがお礼申し上げます」

「うおおおおおおおおっ！」

「オイジュス様！」

「我等が女神よ！」

オイジュス様の挨拶を受けて野郎共が熱血している…。

「さて、年に一度の神武闘式が開催されますが、毎年帰らぬ人が出てきて非常に悲しいことです。私としては危険なことはして欲しくないのですが、この大会を心待ちにしている人もいます。ですから、どうかご自愛を…。そして、悔いの無いように戦ってください。優勝者には祝福を捧げることになっておりますが、私としては力を尽くした全ての方々に祝福したい気持ちでいます。では、第五十六回神武闘式の開催を宣言致します！全ての勇敢なる戦士達にガイアの御加護が有らんことを！」

「ぐおおおおおおおおおおおおおっ！」

大地が震えるほどに野郎共の絶叫が木霊していく。

この暑苦しい熱気の中で私は戦わなければならないのか…。

「ロース、がんばれ…」

「ロース、僕達が付いているさ…」

このむさ苦しい空気の中、ケールとエクリアが私の癒しだ…。

とにかく優勝してオイジュス様を救い出さないといけない…。

何とも気が重いものだ…。

これでもう少し、美女の戦士が出場しているのであれば救いがあるのだが…。

「おおっ！ロース！やはり出場してくれたのか！」

この暑苦しいが艶のある声は？

「お前が出場してくれて私は嬉しいぞ。なぜ、顔を見せなかったのだ？」

青銅の鎧が手を振って私の元へと駆けつけてくる。

オイジュス様の従者モーモスだった。

「ロース、誰だ？この方は…」

「是非、僕に紹介してもらいたいものだね…」

何となくだが、二人の周囲の空気が凍えてきたのは気のせいだろうか…。

「ん？何だ？彼女達は？もしかするとお前の愛人なのか？」

ケールとエクリアは私を押しのけて、青銅の鎧の前に立ちふさがる。

「愛人とは無礼だな。小官はこのロースの上官であるエクリア・レイラントだ」

「僕はロースの主人に当たるケール、ただのケールだ。何のようなのかな？」

二人は極寒の吹雪が吹き荒れたのかと錯覚を起こすほどに冷たい空気を醸し出してモーモスに自己紹介をしていた。

これはもしかすると嫉妬というものなのか？

だが、私としてはモーモスは女性というよりも仲がいい男友達のような感覚なのだが…。

「これは申し遅れた。私はオイジュス様の従者を務めるモーモス・ロードハルトと申す。ロースとは大聖堂で知り合ったのだ」

モーモスはケールとエクリアに挨拶をする。

そこはかとなく棘があるように思えるのは気のせいだろうか…。

「ロースとは同じ従者として仲良くしてもらっている」

モーモスは何故か「同じ従者」と「仲良く」を強調して言っていた。

「ロース。私はお前が勝ち上がってくることを心待ちにしているぞ。では…」

モーモスは言いたいことを言って颯爽と去っていった。

私は非常に残念に思った。

彼女がもし男であれば、良い友達になれたのかもしれない…。

「ロース…」

「ロース！」

ケールとエクリアがいきなり私の肩を鷲づかみしてきた。

「何で御座いましょうか？」

二人とも憤怒の形相になっている。

正直恐すぎるぞ…。

「必ず優勝しろ！」

「必ず優勝するんだ！」

二人の迫力に私はただ頷くしかなかった…。

……。

よく考えてみれば、モーモスがいるわけだから何も私が出場しなくても良かったのではないか？

モーモスがいる限り、オイジュス様が豚共の毒牙に掛かることはまず有り得ないだろう。

……。

もう少し早く気づくべきだった…。

これでは痛い目に合うために出場したようではないか！

それにケールを代わりに出場させる手もあったのだ…。

どうやら私はオイジュス様やあの恐ろしいモロスに遭遇したことで思考が鈍ってきたかもしれない…。

この大会が終わったら休養を取る必要があるかもしれないな…。

もっとも無事に大会をやり過ごせたらの話だが…。

つくづく厄介な事だ…。

第４６話：波乱の予選

神武闘式が開催され、私はケールとエクリアと別行動を取ることになった。

私は今、このむさ苦しい空気の中でただ一人なのである。

何とも心細いぞ…。

「そこのお前」

耳障りな声が聞こえてくるが敢えて聞こえない振りをする。

「おい！そこの貴様！」

私は何も聞こえない。

「そこの黒いの！貴様だ！耳が聞こえないのか！」

「何だ？」

私は余りにもしつこくうるさかったので苛立たしげに振り向く。

しつこく呼んできたのは金色の長髪に目鼻立ちが整った優男だった。

如何にも上流家庭で育ったと思わせる絢爛豪華な出で立ちで、おぼっちゃまといった風情だった。

「ふん！やっと聞こえたか。趣味の悪い鎧をつけていることから貴

様の教養が知れているな。まあいい。貴様、先ほど連れていた女二人がいただろ。それを私に捧げるがいい」

何だと…。

「貴様のような趣味の悪い鎧がいてはあの二人の美貌に陰りが差すというものだ。ああ、下賤な貴様に特別に名乗ってやろう。我が名はアルセイヌ王国第二王位継承者たるグレイブ・アルセイヌである。彼女二人には私の妻となる栄誉を与えるのだ。感謝するがいい」

何とも自己中心的な野郎だ。

この世の全てが自分の思い通りになると思っているのだろう。

まさに甘やかされた坊ちゃんだな。

「私はあのお二方の従者に過ぎません。お求めならば、当人に直接伺えば宜しいかと…」

普段なら叩き斬るところだが、私も大人だ。

公私の分別を持って対応することが出来るのだ。

それにこの程度の坊ちゃんにあの二人が靡くとは微塵も思わない。

せいぜい軽く受け流されのが落ちだろう。

「貴様、私を馬鹿にしているだろう。ただの金銀に身を固めた安い男だと…。だが、私には分かるぞ。貴様は従者ではない。貴様こそがあの二人の主人であるのだろう…」

私は男を再び見る。

まさか初めて出会ったはずだというのに見破ったというのか…。

どうやらただの坊ちゃんではなさそうだな…。

「ほう、雰囲気が変わったな。私とてどろどろとした陰謀渦巻く宮廷で生き延びてきたのだ。人を見る目はそれなりにある。貴様の名を聞こうか…」

「ロースと申します…」

坊ちゃんは私の名を聞き、嘲笑した。

「下賤に相応しい凡庸な名だな。まあ、今は貴様にあの二人を預けておこう。せいぜい別れの挨拶でも済ませておくのだな、ははははははっ！」

坊ちゃんは馬鹿笑いをしながら立ち去っていった。

ここまで言われれば普通は怒るところなのだが、際物揃いの参加者の中でも比較的まともな野郎だったことで耐性が身に付いていた。

慣れとは恐ろしいものだ…。

……。

……。

…。

「あ…あの…これで決まりますので…くじを…引いてください…」

受付係が声を震わせながら応対してくる。

私の鎧がそれほどまでに恐いのだろうか。

まあいい。

私はくじを引くのだった。

参加者は八百四十八名だった。

くじは十六の団体に分別され、それぞれの団体の中での生き残り合戦が予選となるらしい。

そして、それぞれの団体から勝ち残った者、計十六名で本選が始まるという。

私はどうやら第十二団体に属するようだ。

「あの…宜しいでしょうか」

ん？

このむさ苦しい空間の中で一条の光を思わせるような可憐な声が私の脳髄に響いてきたぞ…。

私は声が聞こえた方向に振り向くとそこには大柄な黒髪の女性が立

っていた。

顔立ちからして東洋系のようだな…。

「私に何かご用でしょうか?」

私は形式上とは言え、ケールの従者なのだ。

主に恥をかかせないように丁寧に対応せねばならない。

「私、フェイロン共和国から来ました。リー・ロンファンと申します。先ほどモーモス様とお話されていたのを見かけましたが、お知り合いなのでしょうか?」

「モーモス殿のことですか。彼女とは昨日知り合ったばかりです。ですが、親しい関係を持たせて頂いています。リー殿と申しましたか、貴女様こそモーモス殿とお知り合いなのでしょうか?」

彼女は実に初々しかった。

まだ穢れを知らない少女といった雰囲気だった。

少女と言っても私よりも大柄なわけだからその表現は相応しく無いのかもしれない。

「いえ、前回の大会でお手合わせして頂いただけの関係ですか。あの…私…モーモス様に憧れているのです!彼女の凛とした佇まい!如何なる時でも聖女様を守ろうとする不屈の闘志!まさに聖騎士の名に相応しい御方!女戦士であれば誰しもが模範とされるほどなのです!」

……。

とりあえず彼女はモーモスの熱血な心棒者というわけか…。

その気持ちは大いに分かるぞ。

彼女は女にしておくのが惜しいくらいに出来た男女だ。

男女の格としてはケールと良い勝負が出来るかもしれないな。

「私はあれほど親しげにモーモス様が誰かと話される様子を見たことがありません。貴方様の名を聞いても宜しいですか？」

「私の名はロース、ただのロースで御座います」

私は素直に名を名乗った。

彼女は私を睨み付けてくる。

そこはかとなくだが、嫌な予感がしてきたぞ…。

「ロース殿、私は貴方様には負けません。必ず貴方様を打ち倒してモーモス様の愛を勝ち取って見せます！」

……。

彼女はモーモスの心棒者ではない。

モーモスの狂信者のようだ。

しかも、不毛な愛に目覚めている。

いや、愛の形は人それぞれだから否定しているわけではない。

ただ私には合わない。

それだけだ…。

「お手柔らかにお願いします…」

私は彼女に一礼して、その場から去る。

……。

……。

…。

今まで私は色んな美女と出会ってきたが、まともだと思ったのはセシリア様とオイジュス様のみだ。

しかし、まともでない女性達でも決して魅力が無い訳では無い。

むしろ、その破天荒な所が魅力をより一層引き立てていると言っても過言ではなかった。

そんな彼女達に私は不本意で残念ながらも惹かれている。

だが、それでもだ！

それでもたまにはまともな女性とも巡り会いたいものだ…。

オイジュス様は聖女としての立場があるから余り気安く接するには躊躇いがある…。

セシリア様もまた然り。

気安く話すことが出来て、和やか時間を共に過ごせる女性と知り合いたいものだ…。

先ほどのリー・ロンファンは良い所まで行っていたのだが…。

……。

百合は観賞用としては最適だが、付き合うには障害がありすぎる…。

私に女装でもしろというのか…。

そんな趣味は断じて無いぞ！

……。

さて、気を取り直して第十二団体が配置されている闘技場へと急ぐか…。

……。

……。

…。

身体の力が抜けそうだ…。

この暑苦しい空間はその場にいるだけで体力が削り取られていくぞ…。

「聖女様の可憐な唇が愛しいぜ…ぐへへっ…」

「もうおれっちの欲望が疼いてたまんねえぞ…さっさと戦いを開始しろや！」

「やれやれ、野蛮な…。綺麗な花は優しく愛でるのが醍醐味というものですよ…」

「ボクちんのオイジュス様は誰にも渡さないぞ！彼女はボクちんのお嫁さんのなるんだ！」

このような野郎共に私の自慢の黄金の拳なんぞ振るいたくもないわ！

さらに言えば、アビスから頂いたこの鎧に触れさせたくもない…。

何か獲物が無いだろうか？

ん？

あそこに死にかけているご老人がいるぞ。

私は項垂れているご老人の元に駆けつけていく。

「もう年には勝てんのう。やはり棄権するか…」

ご老人は重々しい六角棒を危なげに背負って闘技場を後にしようとしていた。

「大丈夫ですか…」

「おお！儂を心配してくれてるのか！世の中捨てたもんじゃないのう…」

私はご老人の身体を支えて、一緒に闘技場を後にする。

……。

……。

…。

「ふぅ…助かったわい。感謝するぞい、若いの。ん？随分と物騒な鎧で身を固めとるのう。何か訳ありと見たぞい。そうじゃ、お主にこの六角棒を授けよう。儂が若い頃に世話になった獲物じゃ…」

「いいのですか、このような大切な物を頂いて…」

私はご老人から六角棒を手渡される。

かなりの重量感がある獲物だった。

「いいのじゃよ、今の儂には杖代わりにもならん代物じゃからな。お主に使われた方がこの獲物も喜ぶじゃろう…」

ご老人は何処か哀愁が漂う笑みを浮かべていた。

「儂も聖女様の祝福を受けたかったが、是非にも及ばずじゃ…。これを使って儂の分まで祝福を受けてくれぬかのう。何となくじゃが、お主ならやり遂げそうな気がするんじゃ…」

「さすがはご老人。その予感は当たりますよ。必ずご老人の分まで祝福を受けて見せますよ…」

私はご老人のしわがれた手を握る。

ご老人は人生の先輩であり、敬うべき存在だ。

私は村にいた頃はよく近所のお爺さんに世話になったものだ。

「どうやら最後の最後で儂は当たりくじを引いたようじゃな。では応援しているぞ、若い者よ。さらばじゃ…」

ご老人はおぼつかない足取りで去っていく。

私は六角棒を振るってみる。

まるで最初から私の武器であったかのように手に馴染んでくる。

これはまさに聖剣にも勝る拾い物だ！

名も知らぬご老人よ！

私は必ず貴方の分まで聖女様の祝福を勝ち取ってみせます！

私は去っていくご老人に敬礼をして、再び闘技場へと戻っていく。

……。

……。

…。

『お待たせしました！待ちに待った予選がもうすぐ始まります！お前達！聖女様の祝福を受けたいか！』

「うおおおおおおおおおおおおっ！」

闘技場は焦熱地獄もかくやというほどの熱気に包まれていた。

『今年も盛り上がってきています！果たして誰が聖女様の祝福を勝ち取るのでしょうか！それに辿り着くまでの幾つもの物語がまさにこの瞬間始まろうとしています！希望か！絶望か！まさに神のみぞ知る！実況はこの私、ガルシアが担当させていただきます！解説者には前回の優勝者モーモス殿にお越し頂いています。モーモス殿、今大会は如何なる展開が待ち受けているでしょうか？』

『うむ、皆面構えが良い。ただ一つ言えることは今年も波乱の展開が待ち受けているということだ…』

『有り難うございます！では、そろそろ血と汗と涙が渦巻く熱すぎる戦いの時が大聖堂の鐘楼の音により告げられます！鐘が鳴るまで後十、九、八、七…』

いよいよ始まるのか…。

「六！」

まずは雲隠れして数が減るのを待つか…。

「五！」

野郎共とは極力戦闘を避けたいからな…。

「四！」

「三！」

「二！」

私は必ず勝ち残るぞ！

「一！」

大聖堂の鐘楼が闘技場全土に響き渡る…。

『戦うがいい！勇者達よ！』

モーモスが予選開始を宣言する。

「うおおおおおおおおおおおおおおっ！」

闘技場が振るえ、野郎共が一斉に動き出す。

「ぶち殺してやらぁ！」

「聖女様は渡さねえぞ！」

「我が剣の錆びにしてくれるわ！」

野太い怒声と肉と金属がぶつかり合う音が闘技場を支配していく…。

とりあえず私は戦略的撤退を試みるぞ！

『ついに始まりました！今年の予選も本物の戦争のように壮絶ですねえ！私は実況をして十年になりますが、何度見ても新鮮味を失うことがありません！第十二闘技場では、おおっと！早くも十名が脱落！ロドリゲス・ランズバード選手の勢いが凄まじいです！今回も撲殺王の名は健在のようだ！さすがは前大会の八強の一人と言ったところでしょうか！』

全く空気が悪すぎるぞ！

余りの熱気で酸素不足にでもなりそうな感じだ…。

それに目が潰れそうだ！

見渡す限りに暑苦しい男の肉ばかり！

一刻も早く脳細胞から記憶が消えて欲しい思いだ…。

「とったぞ！」

野郎の一人が私に向かって金棒を振り下ろそうとしてくる。

野郎の分際で私の道を塞ごうとは許すまじ！

私はご老人から頂いた六角棒を振り払って野郎を場外の果てまで殴り飛ばしていく。

「ぐはあああああっ！」

野郎を殴る感触は実に嫌なものだ…。

だが、触れられるのはもっと嫌だ！

「生きのいい獲物じゃねえか！」

「ぶちのめしがいがある奴だぜ！」

野郎共が何故か私の方に群がってきているぞ！

私に群がっていいのは美女だけだ！

近寄るな！

「ぐほぁあああっ！」

「ぎゃはあああっ！」

私は六角棒を薙いで野郎共を次々と弾き飛ばしていく。

逃げているつもりだったが、いつの間にか真面目に戦ってしまっている。

『これは凄い！漆黒の鎧に身を包んだ謎の男が奮起しています！彼はいったい何者なのでしょうか！』

『あの者はヴァルキリアの特使代表ケール殿の従者ロースだ。やはり彼はただ者ではなかったということか…』

『これは何とモーモス殿が一目置く存在なのか！謎の黒騎士ロース！彼こそが今大会の穴馬となるのだろうか！これは大いに注目です！』

ぬおおおおおっ！

モーモス！

余計な事を言いおってから！

これでは私が的になってしまうではないか！

「前大会優勝者が一目置いている奴なのか！」

「いざ尋常に勝負しろ！黒騎士ロース！」

暑苦しい奴はお断りだ！

「ぬはぁあああっ！」

私の前に立ちふさがるな！

「ごほぁあああっ！」

『凄まじすぎるぞ！黒騎士ロース！群がってくる強豪共を歯牙にも掛けない勢いだ！まるで漆黒の旋風が闘技場に吹き荒れているかのような光景！近づく者は容赦無く薙ぎ払われていく！この暴風を止められる者はいないのか！』

うるさすぎる実況だ！

これでは私がますます注目されるではないか！

鎧を着て戦うのは初めてだから息が上がってたまらないぞ！

闘技場は広いようで狭い。

何処へ逃げてもすぐに野郎共が嗅ぎつけてくる。

まるで砂糖菓子に群がる蟻だ。

これで美女が群がるのならば、いくらでも砂糖菓子にでもなるのだが…。

「どけ！どけ！貴様等！」

「ぐげっ！」

「ふぎゃ！」

何だ？

野郎共が塵のように場外へと散乱している。

私の身体が勝手に震えてきている！

今まで感じた中で最大級の暑苦しい空気が私に接近してきているぞ…。

『おおっと！ついに前大会の八強が一人、撲殺王ロドリゲスが黒騎士ロースに食指を伸ばしてきた！彼の暴風を止めるのはこの方を置いて他にいない！これは予選で一番の見せ場になるに違いないでしょう！黒騎士ロース！果たしてどこまで撲殺王に食いつけるのか！モーモス殿、この戦い、どうなるのでしょうか？』

『うむ、ロドリゲス殿は強い。だが、ロースは底が知れない。私にも想像がつかない戦いとなるだろう…』

『有り難うございます！モーモス殿でさえ予想が付かないとなると、これは壮絶なる戦いが予感されます！私も実況していて心躍る気分です！さて、勝利の女神が微笑むのは撲殺王ロドリゲスか！それとも黒騎士ロースなのか！一世一代の一騎打ちが始まろうとしてます！』

野郎共が弾け飛んでいく中に筋骨隆々とした大男が私の前に立ちふさがってくる。

「貴様の快進撃はここまでだ。残念だったな。もし、俺がこの団体にいなかったら予選突破も夢ではなかったというのにな…」

大男の手には巨大な金剛が携えていた。

「俺の名はロドリゲス・ランズバード。人は俺のことを撲殺王と呼

んでいる。黒騎士ロースと言ったな。素直に降参しろ。貴様はまだ強くなれる。ここで終わるには余りにも惜しい男だ…」

私に降参を求めているのか…。

暑苦しい風貌をしているが、かなりまともな人種だ。

彼ならば聖女様に毒牙をかけることはないだろう。

お言葉に甘えて、素直に白旗を揚げるとしようか…。

もはや、この空気には耐えれそうに無い。

オイジュス様には悪いが、私の精神衛生上を考慮しての英断だ…。

「降さ…」

「ロース！勝ち残れたら手厚い褒美をくれてやるぞ！」

「ロース、勝ち残ったら僕の熱い祝福を与えてあげるよ」

……。

エクリア。

ケール。

貴様達の応援は私に大いに活力を与えてくれるが…。

「ほほう、美女二人に黄色い応援とは良いご身分だな。気が変わっ

た。貴様を叩きつぶす！」

大男には見事に別の活力を与えてくれたようだ…。

「地獄で美女を侍らすのだな！黒騎士よ！」

大男は金剛を振り回し、周囲につむじ風が巻き起こってくる。

『おおっと！ロドリゲスが怒っています！硬派な彼には美女から応援を受ける黒騎士が許せないのでしょう！私も許せません！あんな美女二人に応援されるなんて羨ましいぞ！この色男！ふぅ…私としたことが失礼しました。さて、この窮地に黒騎士ロースはどうするのか！』

大男は竜巻を起こしながら少しずつ私に近づいてきている。

「俺は貴様のような軟派な奴が大嫌いだ。捻り潰したくなる。せめて遺言は聞いてやるぞ。言ってみろ」

「私は貴様のような暑苦しい奴が大嫌いだ。殴り飛ばしてやりたくなる。今の口上が貴様の遺言なのか？言い直すのなら今の内だぞ…」

私は六角棒を背負い、拳を構える。

「言ってくれるな。ならば、それが貴様の遺言だ。あの世で後悔するがいい！黒騎士ロース！」

大男は金剛に竜巻を纏わせて私に振り下ろそうとしてくる。

まともに喰らえば、肉片一つ残ることは無いだろう。

だが、それは相手が並の戦士だった場合の話だ。

私の黄金の拳が唸る！

私の繰り出す拳が大男の振り下ろす金剛を纏う竜巻を突き破り、金剛を砕いていく。

「なっ！馬鹿な！」

「それが貴様の遺言だ…」

金剛を砕いた拳はそのまま大男の顎を突き上げていく。

「ごはあああああああああっ！」

大男は空高く舞い上がり、場外へと消えていく。

……。

周囲は静まりかえっていった。

『実況よ。決着がついたぞ…』

『はっ！失礼しました！第十二闘技場の勝者は黒騎士ロースとなりました！これはとんでも無い番狂わせだ！優勝候補の一人と謳われた撲殺王ロドリゲスがまさかの予選敗退！いったい誰がこんな結末を予想できたでしょうか？モーモス殿！』

『間違えなく今大会は荒れるだろう。ふふっ、久々に血が滾ってい

るな、楽しみだ…』

『鉄面皮で有名なモーモス殿が笑っています！新たなる強者の誕生に歓喜しているのでしょう！これは確かに波乱の展開となってきそうだ！波乱の中心となるのは間違えなく謎の黒騎士ロース！彼は何処まで行くのだろうか！』

私は脱力感を伴って闘技場を後にした…。

いくら野郎相手だと強気になれるとしてもやりすぎたと今更ながら後悔した。

あの大男が強いのは分かっていたが、まさか優勝候補の一人だったとは…。

「よくぞ勝利したな、ロースよ！」

「君が勝つことを信じていたよ、ロース」

エクリアとケールが駆けつけてくる。

二人は私を挟んで兜を脱がしてきた。

「心配しないで、素顔は見えないさ…」

「兜を外さないと褒美を与えれないからな…」

二人は私の顔を隠すように自分の顔を寄せてくる。

「小官からの手厚い褒美を受け取れ…ちゅう！」

「僕からの熱い祝福を受け取ってくれ…ちゅう！」

二人は私の両頬に吸引する音が響くほどに強く唇を吸い付けてきた。

「うおおおおおおおおおっ！」

野郎共の殺意を滲ませた怒声が耳に痛いほどに響いてきた。

『私は今猛烈に殺意が芽生えています！あれほどの美女達を従えながらもさらに聖女様の祝福を我が物にせんとしてきている！黒騎士ロース！彼は何処までこの大会を掻き乱すのでしょうか！誰か奴を止める勇者が現れないのか！モーモス殿！』

『彼には地獄を見てもらう必要があるようだ…』

『有り難うございます！彼にはいずれ正義の鉄槌が下されることになるでしょう！さて、予選はこれで終了と致します！勝ち残った選手の紹介後ほどに…。では、休憩時間に入ります！実況はこの私ガルシアと解説にはモーモス殿でお送りしました！』

……。

「ちゅぱ…済まない、敵を作ってしまったようだ…ふふっ」

「ちゅば…君の勇姿を久しぶりに見れたからつい羽目を外してしまったよ…くすっ」

「わざとやったのか…」

二人は私に兜を被せて微笑んでくる。

「これで貴様は退路が断たれたのだ。もう勝ち残るしかない…」

「わざと負けようとしてもそうはいかないよ。君には勝ち続けてもらわないとね…」

見事に止めを刺されたな…。

これで会場の全てが敵となってしまったぞ…。

「故意にしたことだが、手厚い褒美は本心だ。勝ち残れたら、さらに手厚い褒美を貴様にくれてやる…」

「わざとしたことだけど、熱い祝福は本物さ。勝ち続けていけたら、もっと熱い祝福を君に捧げるよ…」

もはや逃げ場は無いのか…。

しかし、勝ち続ければ手厚い褒美や熱い祝福が頂ける…。

地獄に天国とはまさにこのことだな…。

何とか地獄から這い上がるように踏ん張らねば…。

……。

とりあえずは休憩するか…。

少しでも養生しなければ、身が持たないぞ…。

第47話：O mio babbino caro

予選を無事通過が出来たのは良いが、体力よりも精神が摩耗してきている…。

閉ざされた空間とは別の意味で修羅場だったな…。

本選は出来れば、明日に回して欲しい…。

私には美女成分がこれでもかというほど不足してきているのだ…。

会場全員を敵に回してしまったが、あの時、ケールとエクリアから手厚い褒美と熱い祝福を貰わなければ、過労で倒れていたかもしれない…。

まさか二人はそれを見越して、実行したのだとすれば、私は今後一生二人には頭が上がらないだろう…。

男が立身栄達するのは女次第とはよく言ったものだ…。

もっとも私は英雄になるつもりはさらさらないのだが…。

しかし、今大会では私の名は良い意味でも悪い意味でも知られてしまっている。

あのやかましい実況中継もあるが、解説者として観戦しているモーモスが非常に厄介な存在だ。

彼女の言動一つ一つで私の今後の運命が左右すると言っても過言で

は無い。

今更考えても仕方がないのだが、もう少し出方を考えねばならないだろう。

とりあえずは大会を棄権するという選択肢は閉ざされていることは確定だ。

ケールやエクリアはもちろん、会場の連中全てが決して許さないだろう。

私にはオイジュス様の祝福を受ける以外に生き延びる術が無いのだ。

会場の連中を刺激させないためにもケールとエクリアの祝福と褒美を止めさせるか…。

いや、男には例え、その先に破滅が待ち受けているとしても止められないものがこの世にはあるのだ！

美女の祝福と褒美を無下にするなど、男の資格は無い！

故にその選択肢は完全に除外する。

あるいは鎧で素顔を隠しているからケールかエクリアと中身を入れ替わるのはどうだろうか？

いや、これも無理だろう。

日常ではともかく、世界中の並み居る強豪共との戦いの最中だ。

さらに言えば、私は今大会で注目されている。

私の仕草一つも丸ごと観察されている可能性がある。

相手が達人であれば、中身が入れ替わったことなど瞬く間に打破してくるに違いない。

そして、私は世界が注目する大会の中で女を代わりに戦わせていたことで情けない男の烙印が押されてしまうだろう。

それでは私の今後の人生計画が修正不可能まで瓦解してしまい、酒池肉林の夢を永遠に見れなくなる！

その選択肢も絶対的に却下だ。

……。

打開策は今だ思いつかない。

やはり為すがままに身を任せるしかないのか…。

「ロース、もうすぐ本選が始まるぞ」

控え室の外からエクリアの声が聞こえてくる。

私は椅子から立ち上がり、首や手の関節を鳴らしていく。

さて、老体に鞭打って働くとしようか…。

私はまだ若いが、そう思ってしまうほどに疲れていたのだ…。

……。

……。

…。

『さて、勇者達よ！暫しの休息は取れたのか！いよいよ本選が始まろうとしているぞ！ここからが真の戦いが始まるのだ！こんにちわ！みなさん！実況はお馴染みのガルシアが務めさせて頂きます！今大会はかつて無いほどの波乱を予感させます！それもそのはず！優勝候補の一人である撲殺王ロドリゲス・ランズバードが予選敗退というまさかの出来事が実現したからでしょう！その奇跡を起こしたのは今大会随一の胡散臭さを誇る謎の黒騎士ロースの存在にある！』

「ぐおおおおおおおおおっ！」

会場に出てから早々に濃密な殺気を私は一身に受けることになる。

まるでこの世の全ての罪を一身に背負った救世主が如くの扱いだ。

後世には私を崇める宗教が広まるのかもしれない。

『対するは勇敢なる十五の勇者達です。彼らの健闘は必ず多くの人々に勇気と希望を与えることとなるでしょう。注目すべきは今大会初出場のグレイブ・アルセイヌ殿下だ！』

「きゃあああああああっ！」

会場にいる女性達の黄色い声援が響き渡ってくる。

私にケールとエクリアを献上するように言ってきた坊ちゃんのことなのか…。

どうやら実力もただ者ではなかったようだ…。

指名された坊ちゃんは気障な仕草で女性達の声援に応えている。

ふと気づいたが、いつの間にか私と他の出場者という二分化された構図が出来上がってきている。

さらに言えば、あの坊ちゃんも私と同様に美女を侍らせているにも関わらず誰も非難していない。

やはり高貴な身分出身は少々のことは許される立場なのだろうか…。

分かっていたことだが、世の中は実に不平等で不条理に満ちているものだ…。

「ロース、気合いを入れるのだぞ！」

「ロース、君なら出来る！自分を信じて！」

この世の不条理に嘆いていた私に黄色い声援を与えてくれる者達がいた。

ケールとエクリアだった。

今や私の味方は彼女達だけだ…。

「勝てば、貴様には愛ある褒美が待っているぞ！」

「僕からも愛の祝福を君に捧げることを心待ちにしているよ！」

……。

「ぐおおおおおおおおおおっ！」

更なる殺意の波動が私を打ち付けてくる…。

応援は大変有り難いがもう少しささやかにお願いしたいものだ…。

私の精神は既に瀕死状態に陥ってるのだぞ！

『さて、早速ですが、本選を開始していこうと思います！まず、八組に分かれて、それぞれ対戦していただくことになります！組み合わせはモーモス殿がくじを引くことで決めていきます。モーモス殿、宜しくお願いします！』

『うむ、しかと承った。ん？これは！くっくっ…またしても波乱の予感をさせるな。早速、面白い組み合わせが決まったようだ…』

『それはどういう組み合わせなのでしょうか？おおっ！これは確かに波乱の予感をさせまくるぞ！何とフェイロン共和国の英雄リー・ロンファン様と今大会最大の番狂わせの黒騎士ロースが組合わさっているぞ！ちなみにリー・ロンファン様は前大会の準優勝者だ！黒騎士ロースの命運も今度こそ尽きてしまうのか！あるいはさらなる番狂わせを演出するのか！これは見逃せません！』

「うおおおおおおおおおっ！ロンファン！ロンファン！ロンフ

ァン！ロンファン！」

会場はリー殿の声援一色となっている。

まさに魔王を打ち倒す英雄を待ちわびていたと言わんばかりの声援だ。

それにしてもまさかリー殿が準優勝者だったとはな…。

彼女は前大会でモーモスと手合わせしたと確かに言ってたが、決勝戦で行っていたということだったのか…。

私は持参している胃薬を服用する。

運命の女神はどこまで私に嫌がらせをするのが趣味なのだろうか…。

リー殿が敵意剥き出しに私を指刺してくる。

「ロース殿！モーモス様の愛を賭けて、いざ尋常に勝負を願います！」

『おおっと！ロンファン様がいきなり黒騎士ロースに宣戦布告を言い放つ！さらにモーモス殿への愛を賭けて！これは非常に燃える展開が期待できます！モーモス殿！二人の勇者が貴女様の愛を賭けて争おうとしています！』

『えっ？うむ、まあ…期待している…』

『有り難うございます！モーモス殿からお墨付きを頂いたところで早速本選に入らせて頂きます！リー・ロンファン様、黒騎士ロース、

両者闘技場へと上がってください！』

さて、救世主となるために茨の道を歩むとするか…。

髑髏の丘が私を待ち侘びている…。

……。

髑髏の丘もとい闘技場には私を磔の刑にせんと執行者もといリー殿が待ち受けていた。

「覚悟はいいですか！ロース殿！」

「覚悟はしていません…」

生憎私は磔の刑にされる覚悟は持ち合わせてはいない！

神となって崇められるよりも、現世で欲望のままに生きる俗物であることを私は望む！

ロスト教なぞ死んでも御免被るぞ！

「何を言っているのですか？ここは普通覚悟はしていると宣言して、腹をくくる場面ですよ！」

どうやらお約束が好きな人種のようだ。

百合であることがますます残念だ…。

「負ける覚悟をしていないということです…」

「あっ…そうだったのですか、良かった…って紛らわしいですよ！私をからかっているのですか？」

さらにお笑いの才能もありそうだ。

ますます惜しい逸材だな…。

「私はいつでも本気です…」

「私だって本気ですよ！」

私は闘技場の上に立ち、リー殿を見据える。

戦闘力はもちろん、タナトスやケールには及ばないだろう。

だが、ここは戦場ではない。

規則で縛られた殺し合いの大会だ。

しかも、観客がいる。

その環境下で如何に立ち回るかで戦況が大いに変わっていくのだ。

『さあ、いよいよフェイロン共和国の英雄とヴァルキリアの黒騎士が激闘が始まろうとしています！これはどんな結末となるかは誰も予想がつかない！ただ、確かなのは血を見ることは間違えないでしょう！では、試合開始だぁあああああああっ！』

「はぁあああああっ！」

実況の合図と共にリー殿が裂帛の気合いを入れて突進してくる。
なかなかの速度だ。
手には私と同じ六角棒が握られている。
「はいやぁあああああっ！」
リー殿が凄まじい速度で六角棒を振り出しくる！
私はご老人から授かった六角棒を合わせ、互いに打ち合っていく。
『これは凄まじい打ち合いです！両者全くの互角！これは神武闘式の歴史に残る名勝負になること間違えないでしょう！モーモス殿はこの勝負をどうご覧になられますか？』
『これは互角の戦いではないな。ロースはまだ本気を出していない。その証拠に見ろ。ロースは平然と獲物を振っているのに対して、ロンファンは息切れをしている。自力の差が出始めているのだ』
『自力の差が出ている？つまり、黒騎士ロースが優勢と言うことなのでしょうか？』
『それは違う。彼女もまだ本気を出してはいない。だが、同じ土俵の戦いではロースの方が一日の長があることは確かだ。もうすぐ彼女は土俵から出て戦うことになるだろう』
リー殿は私との打ち合いに飽きたのか、距離を取ってくる。

「はぁはぁ…さすがはモーモス様が目を付けただけはありますね。ですが、私も負けるわけにはいきません！全力を尽くさせていただきます！はぁあああああっ！」

リー殿が持つ六角棒が折れていく。

いや、折れているのでない！

分離しているのだ！

分離した間には鎖が仕込まれている。

これは三節棍か！

「参る！はっ！」

三節棍が鞭をしなるように私の首に目掛けて襲ってくる。

くっ！

私は紙一重で回避するが、三節棍はまるで蛇のように追尾してくる。

これは得意に柔軟体操避けでもっても回避することは困難だ！

「まだまだっ！迅雷蛇咬鞭！」

三節棍に雷の力が纏っていく。

これは魔法剣と同じ原理なのか！

飛び去って三節棍を回避していく。

紙一重で避けても余波を喰らえば同じことだ。

素手で受け止めようとすれば、絡め取られて身動きが取れなくなってしまう危険性がある。

三節棍の纏っている雷が蛇の姿を形作り、私を咬み砕かんと迫ってくる。

闘技場には瞬く間に蛇の傷跡がなぞられていく。

「私の迅雷蛇咬鞭には逃れられませんよ！それにこれだけではありません！」

リー殿は手を掲げ、頭上に光球を生み出してくる。

『不味い！審判に結界を張るように指示を！戦略級の結界だ！』

モーモスが焦った声を出しているのが聞こえてくる。

ん？

闘技場を囲うように薄い光の膜のようなものが覆ってくる。

「波動剛龍列破！」

リー殿が腕を振り下ろし、目の前には極大の光球が接近してくる。

正気なのか！

これほどの大規模な攻撃を繰り出せば、周囲に被害が出るぞ！

もはや勝敗云々なぞにかまってられん！

戦略的撤退を敢行するぞ！

……。

光の膜が邪魔して出られない。

この光の膜はいったい…。

『不味い！審判に結界を張るように指示を！戦略級の結界だ！』

そう言えば、モーモスが言っていた言葉を思い出す。

結界。

戦略級。

……。

戦略級防御結界！

なぜ、そんな高等魔法が闘技場に掛けられているのだ？

ぬおっ！

光球が迫ってくる！

神は何処まで私に試練を与えてくるのだ！

……。

……。

…。

『ロンファン様が殲滅級の攻撃を繰り出したことで戦略級防御結界を展開させて頂きました！闘技場は砂埃が蔓延しています！先ほどご覧になったところ黒騎士ロースはロンファン様の技に直撃した模様！果たして黒騎士ロースの生死は如何に？』

『ロースがこの程度で死ぬとは思えないな…』

「ロースがこの程度で終わるはずがない！」

「ロースは僕との戦いでも生き延びたんだ！平気なはずだ！」

……。

……。

…。

ぬおおおおおおおおっ！

そう簡単に死んでたまるか！

私は瓦礫を押しのけて立ち上がる。

『黒騎士ロース奇跡の生還です！ですが、私の目では確かにロンファン様の技に直撃したはずです！それなのに何故生きているのか？それどころか全然問題無しに見えるのは気のせいでしょうか？』

『気のせいではない。彼は直撃したにもかかわらず全くの無傷だ…』

それにしても鎧が汚れてしまったな…。

アビスに何て言い訳すればいいのだろうか…。

ん？

何だかやけに静かだな。

目の前にいるリー殿は私を優麗でも見るような目つきをしている。

どうやら私が死んだはずだと思っていたようだな…。

「そんな！私の必殺技を直撃して無傷なんて…」

リー殿は後ずさっていく。

「私はここでこうやって立っています…。鎧は少し汚れてしまいました…」

「貴方は本当に人間なのですか？信じられませんよ！」

私は人外扱いするつもりなのか。

自慢ではないが、私はケールの必殺魔法を直撃しても生き延びたのだ。

この程度のこと如何ほどでもないわ！

「ロース、生きているのならさっさと姿を見せろ！心配させた罪で後でお仕置きしてやるぞ！」

「君はどうやら僕を心配させることが趣味なのかい？後でたっぷり貪らせてもらおうかな？」

ケール様…。

エクリア様…。

どうかご容赦してください…。

……。

気を取り直して、私はリー殿を見据える。

リー殿は項垂れていた。

どうしたのだろうか？

私が頑丈だから戦意喪失したのか？

だったら手間が省けて非常に有り難いのだが…。

「認めない…」

何ですと？

「黒騎士ロース！私は貴方を認めない！認めるものか！はあああっ！」

リー殿が三節棍を私に振るってくる。

ぬおっ！

三節棍が打ち付けられた床が陥没しているぞ！

「私にさらなる力を！迅雷龍牙鞭！」

ロンファンは三節棍を天の投げ上げる。

天空から膨大なる稲妻が降り注ぎ、その全てが三節棍に集約していく。

『グオオオオオオオオッ！』

三節棍を核として巨大な雷龍が誕生したのだった…。

……。

その規格外の必殺技は何でしょうか？

『おおっと！ロンファン様の武器が巨大な龍に変化してしまったぞ！前大会ではこんな技は見たことはありません！おそらくモーモス

殿打倒に編み出した技だと思われます！モーモス殿！』

『凄まじい技だ。さすがに私でもあの技を前にすれば危ういだろうな…』

『有り難うございます！モーモス殿でさえも一目置くほどの危険な技のようです！果たして黒騎士ロースはロンファン様の技を前にして如何に立ち向かうのでしょうか？』

冗談ではない！

ケール級の規格外の技ではないか！

リー殿は飛翔する雷龍の頭部へと飛び移っていく。

「はぁ…はぁ…薙ぎ払えっ！」

雷龍が大口を開け、雷を超圧縮させた巨大光球を吐き出してくる。

私は上空へと跳躍して巨大光球を回避する。

巨大光球は闘技場に直撃し、跡形もなく消し飛ばしていった。

直撃していたら間違えなく肉片残らず空気になっていたな…。

……。

これは本当に洒落にならないぞ！

「逃がすかぁああっ！」

跳躍している私に雷龍の牙が迫ってくる。

噛み砕かれてたまるか！

雷龍が私を捉えて、顎を閉じようとしたところを六角棒を立てて、間一髪噛み砕かれるのを回避する。

『アグォオオオオオオッ！』

「ぐあっ！」

雷龍の頭が戦略級防御結界に激突し、凄まじい衝撃が私の身体を打ち付けていく。

『これは余りにも現実離れした規格外の戦いになってきているぞ！それに龍が激突したことで結界に亀裂が生じている！これは危ない！観客の皆さん！急いで避難を！万一にも結界が崩壊すれば、最悪、会場一帯が焦土と化してしまいます！警備隊！観客の皆さんを誘導してください！』

『よもやここまでの戦闘になるとはな…』

何だか周囲が騒がしいぞ…。

観客が警備隊に誘導されて会場から出ていっている…。

これはどういうことだ？

『グゴオオオオオオッ！』

ぐほっ！

またしても雷龍が結界に頭突きをかましてきている！

「何故なの！何故、貴方なの！私は貴方が羨ましい！そして、憎い！」

六角棒で顎を支えている私に雷龍の舌が巻き付いてきた。

「ぐがあああああああっ！」

凄まじい激痛が私を苛んでくる。

ぐっ！

意識が朦朧としてくる…。

モーモス…。

貴様もまた厄介な女に愛されているものだ…。

だが、少しも羨ましくはないぞ！

「ご主人様！」

「閣下！」

ケール…。

エクリア…。

今は貴様達が私の主人なのだぞ…。

身分がばれたらどうするというのだ…。

まあ全てはこの戦いを生き延びてから考えればいい。

ケール！

貴様の技を借りるぞ！

「カタス…トロフ…サン…未完全超縮小版！」

私を覆うようにして、漆黒の炎が形成され、球体となって膨張していく。

『グゴゴゴゴゴゥガァアア！』

私に巻き付いていた舌は瞬く間に焼き尽くされ、炎の球体は漆黒の太陽となって、雷龍を内側から焼き尽くしていく。

「そんな！私の迅雷龍牙鞭が！モーモス様に認めてもらうために編み出した私の最高の技が貴方に！あああああっ！」

『グガァアアアアアアアアアッ！』

雷龍の頭部と共に戦略級防御結界も弾け飛び、凄まじい爆風が会場一帯を巻き込んでいく。

……。

まさか雷龍だけに止まらず、戦略級防御結界まで消し飛ばしてしまうとは…。

カタストロフ・サンを未完成超縮小版で放ったのだが、それでも尚この威力なのか…。

我ながらよく直撃して生き延びたものだ…。

「モーモス様…申し訳…ありません…ロンファンは…」

ぬっ！

リー殿が空中に投げ出されているぞ！

このままでは地面に激突して重傷を負ってしまう！

私は飛び散っていく瓦礫を飛び移りながら、宙に舞っているリー殿を受け止める。

「ロース…殿…」

「しっかり掴まっていてください…」

リー殿は私を見るなり、力尽きたかのように眠りにつく。

私は眠ったリー殿を抱きかかえながら瓦礫を飛び移っていき、地面に着地していった。

……。

……。

…。

『戦いはまたしても黒騎士ロースの勝利でもって幕を閉じられてしまいました。ロドリゲスに続き、前大会準優勝者のロンファン様までもが…。私はもうこの先、何が起こっても驚くことはないでしょう。神武闘式が開催されるようになって五十年以上になりますが、ここまで奇天烈で馬鹿馬鹿しいほどに規格外の展開は歴史上類を見ない出来事だと確信しております。この事態の中心にいるのは今大会、いや、神武闘式の歴史上最大の番狂わせの男、黒騎士ロースです！彼のお陰で会場が崩壊してしまいました！いったい何処まで私達を掻き乱せば気が済むのか！会場の修繕費用は全てヴァルキリア帝国へと請求することをここに宣言致します！ぐっ…すいません…胃薬を…。ええ、これからの予定ですが、会場が崩壊したことで本選は明日以降と致します！では、皆さんお疲れさまでした！』

……。

胃薬が欲しいのは私の方だ…。

ヒュプノスにどう言い訳したらいいのやらか…。

「んぅ…うう…」

地面に布を敷いて横たわらせていたリー殿が目を覚まそうとしている。

「私は…ここは…」

「目が覚めましたか？」

リー殿は起き上がり、私を見つめてくる。

「そっか…私…負けたんですね…」

「はい…」

……。

沈黙が続く。

……。

まだ沈黙が続く。

……。

さらに沈黙が続く。

……。

誰か来てくれ！

私には耐えられないぞ！

「私は軍人になる前はとある小さな村でひっそりと暮らすただの力の無い娘でした…」

やっと口を聞いたと思いきや、いきなり身の上話ときたか…。

しかもかなり重い話のような感じがしてくるな…。

「父様が病死して母と二人暮らししていて、貧しい生活でしたけど、満たされていました。けど、そんな生活も長くは続きませんでした。それは嵐が吹き荒れていたあの夜の時でした…」

リー殿は身震いするように自分の胸を抱いてくる。

「当時、フェイロン共和国を荒らし回っていた山賊が村を襲ってきたのです…」

……。

何となくだが、落ちが読めてきた。

だが、私が予想する落ちは女性にとって残酷で耐え難い苦痛のもので…。

「男は殺され、女は犯されていく地獄の光景が視界一杯に映ったのです！母が山賊の男に服を破られ、組み伏せられて、そして…」

私はリー殿を抱き締める。

「私はその光景をただ見つめることしか出来なかった。元々身体が弱かった母はそれが原因で…」

……。

同じ男として耳が痛すぎる話だ…。

「野獣と化した男の手が私の身体に触れようとしたときでした。それはまるで夢の様な出来事。颯爽と現れた青銅の鎧を着た騎士が瞬く間に山賊達を切り伏せていったのです。それがモーモス様との初めての出会いでした。今でもあの光景を忘れることはありません。後に聞いたところをアースガルズの大使として滞在していたらしいです。国を視察していたところを偶然に見つけてくれたとのことでした…」

……。

「それから私は村を出て、軍に志願しました。男にも負けない力を手に入れて、モーモス様に追いつくために…」

「そうだったのですか…」

それで男嫌いになって百合に走ったわけなのか…。

モーモスも随分と重い過去を背負った女に好かれてしまったものだ…。

正直、私には荷が重すぎるな…。

今の私にはエルのことでやっとなのだ…。

「私はそんなモーモス様が男である貴方と親しげに話すことが許せなかったのです。分かっています。それは私の勝手な感情の押しつ

けであることが…。でも、それでも、私は…」

リー殿は私の胸に縋り付いてくる。

「悔しかった。女である私では所詮男には敵わないのだと…」

「私は男女を区別はしますが、差別はしません。貴方が女であるから男に敵わなかったのではありません。貴方自身が弱かった。ただそれだけです…」

リー殿は唖然とした顔で私の顔を見てくる。

「ふふっ、厳しいのですね。普通はここで優しい言葉をかけるものだと思いますけど…」

「私は必要以上に感情移入をしない主義なのですよ。だから、落ち込んでいる女性に対しても平然と厳しい言葉を掛けることができるのです」

女のことで何度も死にかけたのだ。

必要とあらば、絶世の美女であろうとも私は容赦はしない。

「私の話を聞いている時点で充分に感情移入していると思いますけどね…」

「そんなことはない、いや、ありません…」

不味い！

つい素が出てしまったではないか！

「ふふっ、無理はしなくてもいいのですよ。ロース殿、あの…少しお願いがあるのですけど…いいですか？」

私は無言で頷く。

「父様と…呼んでも…いいでしょうか？」

……。

「あっ…すいません。けど、私を助けるために抱き留めてくれたとき、亡くなった父様のことを思いだしてしまったのです。父様はいつだって泣いていた私を抱き締めることで慰めてくれました。だから…いいえ、忘れてください！迷惑ですよね！今まで散々と貴方様を私は…あっ…」

リー殿の言葉が途切れる。

なぜならば、私が彼女を抱き締めたからだ。

ここで気を利かせねば、男が廃るというものだ…。

「リー殿こそ遠慮するな。私は過去のことは気にしない。リー殿が望むのであれば、私は父にでも兄にでもなろう」

私の胸にリー殿の身体がもたれ掛かっていく。

「図々しいようですが、もう一つお願いがあります…」

「何だ？」

「ロンと…呼んでください。父様が…そう呼んで…私を…抱き締めて…」

私はより一層強く、リー殿、いや、ロンを抱き締める。

「ロン…辛かっただろう…」

「とう…さま…父様…父様！ううっ…あああぁあああああ…」

堰を切ったようにロンは私の腕の中で泣き出す。

私はロンが泣き止むまで、いつまでも抱き締めるのだった。

いつの間にか、私の後ろにはケールとエクリアがいた。

「良いものを見せて頂きましたから、お仕置きは帳消しに致します…」

「僕もそうやって君に慰めてもらったね。やれやれ、今の君を見せられてはさすがに貪ることは止めにしないと罰が当たりそうだよ…」

「すまない…」

ロンは泣き疲れたのかいつの間にか寝息を立てていた。

ケールとエクリアは私に兜を外していく。

「お疲れさまでした、閣下。では手厚いご褒美です…ちゅ…ちゅぱ

…ちゅううううっ！」

「よく頑張ったね、ご主人様。僕の熱すぎる祝福を捧げるよ…ちゅぱ…ちゅば…ちゅるるうっ！」

ケールとエクリアは私の顔全体に口紅を塗りつけるかのように唇を吸い付けたり、這わせたりしてくる。

疲れ果てた私には最高の労いなのだが、胸にはロンが眠っているのだ。

手厚いご褒美と祝福を受けているときにロンが目が覚めないことを切に願う。

これ以上精神的負担が蓄積されれば、廃人になることも夢ではないだろう。

……。

とりあえず今日の戦いは終わった。

私は今回も無事に生き延びれたのだ。

今はそれだけでいい…。

第４８話：突然の来訪者

幸か不幸か会場が大破したことで私は待ち望んだ休養を取ることが可能となった。

しかし、私の悪名はこの試合でより一層広まる結果となってしまった。

泣く子も黙る恐怖の黒騎士ロース、それが今の私の肩書きだ。

廃墟と化した会場を後にして、控え室に戻る時に待っていたのは畏怖の視線だ。

誰もが私に恐怖を抱き、英雄の凱旋とも言わんばかりに道を広げてくれる始末だった。

よく考えてみれば、会場が大破したほとんどの責任はロンにあると思うのだが…。

まあ、英雄と呼ばれている美女と鎧で素顔を隠した素性の知れない者とを天秤にかければ、万人が後者を悪人と呼ぶのは必定なのだろう。

つくづく世の中、世知辛いものだ…。

その英雄と呼ばれている美女はというと…。

「父様、ため息を付いていては幸せが逃げますよ」

私の腕に寄り添って、親しげに話しかけていたのだった。

彼女、いや、ロンはいつの間にか私の娘という立ち位置に収まっていたのだ。

しかし、背は私よりも高く、寄り添うよりは抱き寄せられていると言った方が正しい表現なのかもしれない。

大柄な女に抱き寄せられている黒騎士か…。

余りにも締まらな過ぎる光景だな…。

「ふふっ、ロンの言うとおりだよ、ご主人様。何事も前向きに行かないとね」

ケールはロンに抱き寄せられている私を微笑ましげに眺めていた。

「ほら、ケール姉様もそう言ってますよ。もう少し元気を出してください、父様」

驚いたことにロンは初対面でケールと瞬く間に打ち解けていたのだ。

しかも、ロンはケールを姉様と慕い、ケールはロンと愛称を呼び合うほどに仲を深めている。

まあ、これは必然的な出来事なのだろう。

ケールは私から見ても、そこらの男共よりも凛々しく、格好が良い。

さらに戦闘力ではあのモーモスをも凌いでいるわけだから、百合成

分で構成されているロンの食指は当然伸びることだろう。

ケールとの仲は問題ない。

問題なのは…。

「ロン、閣下が歩きにくいように見えます。今一度身体を離した方が宜しいかと…」

「嫌です。それよりもおばさんは父様の何なのですか？閣下なんて呼んで暑苦しいし…」

……。

時が止まった。

ロン。

エクリアは確かに口うるさくて、年齢よりも少し、そう、少し「大人びて」見える。

しかし、いくらなんでも言って良いことと悪いことを判別して欲しいものだぞ…。

「ふふっ…閣下。どうやら子供の教育を失敗したようですね…」

……。

私はロンを育てた覚えは無いのだが…。

「私はもう子供ではありません。ねえ、父様。私の身体は充分に女なんですよ。ふふっ、分かるでしょ…」

ロンは小悪魔的な笑みを浮かべて、私の腕に胸を押しつけてくる。

……。

ロンの容姿を分析してみようか。

短く切り揃えた東洋の神秘を象徴する艶やかな黒髪。

戦いで鍛え抜いてきた躍動感溢れる身体。

私の腕を圧殺せんとばかりに締め付けてくる豊満な胸。

大人だが、子供のようにあどけない可憐で無邪気な笑顔。

……。

見た目が大人で中身が子供の不釣り合いな部分がまた魅力となっている希有な絶世の美女。

それが私の分析結果だ…。

結論を言おう。

完璧だ。

「ほら、父様も喜んでいます。だから、おばさんの出る幕は無いのです。おばさんは大人しく山に登って、洗濯でもしていてください」

「私は東洋の昔話に出てくるお婆さんではありません！閣下もでれでれしてないで、何か言ってください！子供を甘やかしても為にはなりませんよ！」

……。

いがみ合っているように見えるが、仲が良いようにも見えるな…。

「閣下！」

「父様！」

仲が良いのは結構だが、騒がしいのは玉に傷か…。

「はいはい、そこまで。ご主人様が困っているよ」

ケールが仲裁に入ってくる。

「ご免なさい、ケール姉様」

「申し訳有りません、ケール様」

ケールはどうやら私に次ぐ立ち位置として定着しているようだ。

「ご主人様、疲れが取れる指圧をしてあげるよ」

ケールは私の腕を引いて部屋へ入ろうとしてくる。

「ああっ！ずるいですよ！ケール姉様！」

「抜け駆けは感心しませんよ！ケール様！」

私は三人に身体を引っ張られながらも思う。

平和でなによりだ…。

「あっ、忘れていました。あの…父様…」

ロンは私の身体を引っ張るのを止めて、伺いを立てるようにもじもじとしてくる。

「どうした、ロン…」

私は努めて、ロンに優しく応えるようにする。

経緯はともかく彼女は私を父として慕ってくれている。

さすがにぶっきらぼうに応えるわけにはいかないだろう。

「顔を見ても…良いですか？」

……。

そう言えば、まだ素顔を見せていないな…。

私はエクリアとケールに視線を向ける。

彼女達はなぜか私の手を引っ張っていく。

「ロンに見せる前にまずは洗顔です」

「今の君の顔は絵の具の落書き状態になっていると思うしね」

私は別室で鏡を見て、なるほど確かにと思った。

顔には紅と緑の口紅の跡が出鱈目に羅列していた。

これは早く綺麗しないといけないな…。

私は急いで洗顔して、兜を被った。

そして、ロンが待っている控え室へと足を運んでいく。

「あの…どうしたのですか。父様…」

「顔が汚れていたから洗っていたのだよ…」

不安そうに見つめてくるロンを安心させるように声を掛けていく。

彼女はまだ私と知り合ってから僅かしか経ってない。

無用な刺激は避けなければ…。

「別に汚れていても良かったのですけど…」

「いや、最初に見せるのならば、きちんとした形でなければいけない…」

私は兜を外し、ロンに素顔を晒した。

「これが私の素顔だ…」

ロンは無言で私の頬に手を添える。

「何だか落ち着く顔をしています…」

「そうか…」

落ち着く顔の定義について議論したいところだが、ロンが別に嫌がっている様子が無いことから問題無いのだろう。

……。

戸を叩く音が聞こえてくる。

誰かが私の控え室に訪ねてきたようだ。

「私が出よう…」

私は兜を被り、戸の前に立つ。

黒騎士として恐れられている私を訪ねてくる物好きがまだアースガルズにいたのだな。

さて、どんな勇者が私に会いに来たのやらか…。

私は戸を開けた。

「久しぶり、主…」

……。

私は戸を閉じた。

どうやら私は幻覚が発症したようだ。

かなり疲れているらしい。

戸を激しく叩く音が響いてくる。

……。

幻覚の分際でうるさいぞ！

私は戸を再び開ける。

「ちょっと、いきなり顔を見るなり閉めるなんて酷すぎるんじゃないの！」

「実体なのか…」

実体の名は確かアビス・パラディスム。

確か洗脳されたエルの心を感じ取るためにヴァルキリアに残ったはずなのだが…。

「実体ってどういう意味？」

「気にするな。それよりどうした？」

アビスは私の問いに応えることなく俯く。

……。

「入れ…」

とりあえず私はアビスを控え室に迎え入れる。

言い辛いことなのだろう。

いずれにしろ私の心労が増すことは確実だ。

……。

……。

…。

「あの…この方はどなたなのですか？」

「私の家族だ…」

ロンの問いに私は即答する。

彼女は一応、私の娘という肩書きになっている。

隠し事はしなくてもいいだろう。

「だったら父様の奥方ということなのですか…」

……。

「何で黙るのよ！その子の言う通りでしょ」

アビスが元の調子で話してくれたみたいだ。

「間違えではない…」

「そこははっきりと私の妻だと言いなさいよ！」

唾を飛ばしながら私に怒鳴ってくるアビス。

どうやら元気になったようだ。

「ちなみに僕もご主人様の妻だよ」

「失礼ながら小官もです」

便乗するようにケールもエクリアも言ってくる。

「父様の国は一夫多妻制なのですか…。だったら、私にも……ですね…ふふっ…」

ロンが小声で何か言っているようだったが、聞き取れなかった。

「私はアビス・パラディスム。あんたは？」

アビスは自己紹介し、ロンに名前を聞こうとする。

だが、ロンは表情を凍らせたまま黙っていた。

「どうした、ロン」

「あっ…いえ！私の空耳だったかなって…あの…もう一度お名前を伺っても宜しいですか」

アビスは何か怯えている様子だった。

「いいわよ。アビス・パラディスムよ」

「パラディスムって！あのパラディスムなのですか！」

ロンが身を乗り出して、アビスに詰め寄ってくる。

「数多の要人を暗殺し、常に歴史の裏で暗躍していたと呼ばれる伝説の暗殺集団、冥府の御使いとして恐れられていた、あのパラディスム家なのですか？」

不味い！

パラディスム家は国内外に知れ渡るほどに有名であることを失念していたぞ…。

「ええ、その通りよ。私は元パラディスムの一員。今は主の妻兼従者を務めているただの女よ」

アビスはあっさりとロンに自分の正体を告げるのだった。

「ええと…元パラディスム家なのですか？」

「そうよ、元。もう暗殺稼業からは足を洗っているわ。パラディスムを名乗っているのは過去を忘れないため。今の私がいるのは紛れもなくパラディスム家の、頭領のお陰でもあるのだから…」

私は思った。

アビスは途轍もなく強い女だ。

だが、先ほどの俯いて悩んでいた様子は何だったのだろうか？

「そうなんですか。いえ、話してくれて有り難うございます、アビス姉様」

「えっ？ええと…姉…さま？」

アビスが唖然としている。

「そうです、姉様です。だって父様の家族なのですから、私にとっては姉様です」

「私が…姉様か…何だか新鮮ね…」

アビスは身を乗り出していたロンを抱き寄せる。

「アビス姉様？」

「こんな…私で良ければ…宜しくね…ええと」

「リー・ロンファンです。ロンと呼んでください、アビス姉様」

「ふふっ…じゃあ宜しくね、ロン…」

アビスはロンの黒髪を愛おしげに撫でていくのだった。

その光景はまさに本当の姉妹のように仲むつまじく見えた。

やはり百合は観賞用には最適なものだな…。

私は感無量で頷くのだった…。

……。

……。

…。

「じゃあ僕は眠っているロンを寝室に送っていくよ」

「閣下、余り夜更かしをしないようにしてくださいね」

私はケールとエクリアに眠りについたロンと共に部屋から出ていってもらった。

今部屋にいるのは私とアビスの二人きりだ。

アビスは俯いていた。

……。

私から話を切り出すか…。

「どうし」

「姉者の心がヴァルキリアから消えたのよ…」

……。

せっかく雰囲気作りのために粋な言葉を掛けようと思ったのに…。

もしかして狙っているのか？

……。

まあいい。

「それはつまりエルがヴァリキリアからいなくなったということなのか？」

アビスは頷く。

エルも元パラディスムの一員だ。

しかし、今はヒュプノスの洗脳を受けてしまっている。

彼女の命令で再び暗殺に手を染めている可能性もある。

「いつから消えた？」

「主がヴァルキリアを立った直後…」

私がヴァルキリアからアースガルズに辿り着くまでに七日間かかった。

エルが他国へと破壊工作するには充分すぎる期間だ。

「私の元に来ているかと思ったのか？」

「ええ…けど、違っていた。何も感じないわ…」

私を監視するため、あるいはオイジュス様の勧誘の失敗を前提にした拉致監禁のためにアースガルズに送り込まれたという線はこれで除外された。

やはり他国への破壊工作の任務なのか…。

ならば、どこの国に送り込まれた？

「もしかしてビフレスト皇国に行ったのかな？」

ビフレスト皇国。

ヴァルキリア帝国の宿敵。

十二分にありえる話だ。

「かもしれない…」

アビスは立ち上がり、部屋から出ようとする。

「何処に行くつもりだ？」

「決まってるでしょ！姉者を連れ戻すためにビフレストに行くのよ！」

私は即座にアビスの背後に回り込んで腕を掴み上げる。

「な、何するのよ！離して！」

「行くな。不確定の要素が多すぎる…」

アビスは必死に私から逃れようと藻掻いてくる。

どうやらアビスは冷静ではいないようだ。

「情報不十分で独断行動を実行しようとする今の貴様をエルが見たらどう思うだろうか…」

「離して！姉者は私の唯一の肉親なのよ！姉者がいなくなったら私は…んむっ！」

私はアビスを無理矢理抱き寄せて口づけで黙らせる。

我ながら何て気障な行為なのだろうか…。

だが、久しぶりのアビスの唇の感触だ。

落ち着かせるついでにその感触を楽しむのもまた一興だろう。

……。

……。

「ちゅば…はぁ…はぁ…」

アビスは力尽きたように私に寄りかかっていた。

…。

「少しは落ち着いたか？」

「はぁ…ごめんなさい…」

どうやら落ち着いたようだな…。

ビフレストにエルが行っているかどうかは分からないが、どちらにせよアビスを行かせるわけにはいかない。

ビフレストにはあのモロスがいるのだ。

モロスは私の匂いと味を把握している。

そんなモロスにアビスが鉢合わせをしたらどうなるのだろうか。

モロスは間違えなくアビスから私の匂いを嗅ぎ取り、殺しにかかるだろう。

それだけは断じて避けねばならない。

心情的には私も神武闘式を放棄して、ビフレストに向かいたい。

しかし、私は良い意味でも悪い意味でも注目され過ぎてしまった。

さらにヴァルキリアの特使代表の従者という肩書きもある。

下手に放棄してしまえば、国際問題にも発展しかねない。

そうなれば、ヒュプノスの心証を悪くしてしまい、エルの無事が保証されなくなる恐れがある。

それに何よりもエルがビフレストに派遣されているという確証も無いのだ。

不安要素が余りにも多すぎる。

今の私に出来ることは神武闘式に優勝してオイジュス様の祝福を受ける以外に無い。

何とも度し難いことだ…。

「ごめんね、本当はあんただって飛び出していきたいはずなのに。あんたは我が儘で小心者だけど、家族に対する想いは誰よりも強いから…」

「小心者は余計だ…」

私とアビスは互いに抱き合った。

「エルは私が必ず助ける…」

「ありがとう、ロスト…」

……。

随分と久しぶりに自分の本名を呼ばれた気がする。

『私がロストと呼ぶときは閨のときだけだから…』

……。

「ねえ、ロスト…」

「何だ？」

ぬおっ！

アビスがいきなり私の手を引いて、ベッドに押し倒してきた。

私はアビスの組み伏せられてしまった。

「久しぶりに私を泣かせてよ…」

アビスが妖艶な笑みを浮かべて、私の顔に甘い吐息を吹きかけてくる。

「それとも私があんたを泣かせてあげようか…」

それは断じて否だ！

「きゃっ」

私はアビスの身体を引き寄せて、逆に押し倒していく。

「私のために泣いてくれ…」

「ああぁ…来て、ロスト…ちゅ…ちゅぱ…ちゅぱ…ちゅうううう…ちゅう」

アビスが私の頭を引き寄せて情熱的な口づけをしてくる。

私も男の証をアビスに情熱的に叩き込んでいく。

「ちゅば…ロスト…ロスト…ちゅ…私の…ロスト…ちゅぱ…愛している！」

アビスが私の肋骨をへし折らんばかりに足を胴体に絡みつけてくる。

「あんたを…ちゅ…離さない！ちゅば…私を…ちゅう…離さないで！」

うおおおおおおおおっ！

……。

……。

……。

……。

……。

…。

「ねえ、起きてる？」

「ああ…」

アビスは私の胸を枕にしていた。

私はアビスの暗褐色の髪を撫でていく。

「私、ロンを抱き締めて髪を撫でてている時に思い出したの。姉者も昔は私を抱き締めて、髪を撫でてくれたことを…」

……。

「姉様と呼ばれたことが嬉しかった。姉者はこんな気持ちで私を抱き締めてくれたのかなって思ったの…」

「今度は貴様がエルを抱き締めてやればいい…」

……。

「うん、今度は私が姉者にそうしてあげたい…」

「そうか…」

アビスが起き上がり、私の顔を見てくる。

「そう言えば、ロンに父様と呼ばれていたけど、ひょっとして隠し子なの？」

「なぜ、そうなる…」

ロンが実子であれば、私が赤子の時から小作りに励まなければ物理的に無理な話だ！

「ロンは私を父代わりに慕っているのだ…」

「まあ、それもそうね。どう見ても姉に可愛がりされている弟にしか見えないしね」

「私は人より少し背が低いだけだ…」

「もう拗ねないでよ、仕様がないわね…」

アビスは私の頭を自分の胸に押しつけてくる。

「ほら、あんたの背丈だと丁度いい具合に胸に納めやすいのよ。役得だと思いなさいよ…」

「むぅ…」

アビスはより一層強く私の頭を胸に押しつけていく。

「それに抱き心地もいいし、いっそこのまま私の抱き枕になったらいいのに…」

「んぅ…ぬぐ…むぐぅ…もごぅ…」

「何言ってるのか分からないわよ。それにくすぐったいし…。もう黙って私の胸の中で寝なさいよ…」

「ん…」

私は黙ってアビスの胸を枕にして眠ることにした。

……。

……。

……。

……。

……。

…。

「朝よ、主」

誰かが私の身体を揺さぶってくる。

「ほら、起きなさいよ」

うるさい。

私の体内時計では、まだ睡眠時間だ。

身体が強く揺さぶられる。

だが、私は起きないぞ！

「仕方ないわね。だったら目覚めの口づけをしてあげるわ」

ふごっ！

いきなり鼻がつままれたぞ！

何のつもりだ？

「んっ…」

私の唇が柔らかい物に塞がれる。

……。

これは唇の感触。

……。

……。

いつまで塞いでいるのだろうか？

……。

息苦しいぞ…。

……。

息苦しいわ！

「きゃっ」

私は勢いよく起き上がる。

朝一番に酸欠状態になるところだったぞ…。

「お早う御座います、主」

アビスは実に清々しい笑顔で朝の挨拶をしてくる。

「おはよう…」

窒息の接吻は頂けないが、なぜかいつもの日常に戻ったような錯覚がしてくる。

そういえば、ヴァリキリアにいた頃はいつもアビスに起こしてもらった気がしてくる。

「本当にだらしないんだから。やっぱり私がいないと駄目なのかしらね…」

アビスは文句を言いながらも私の身支度を整えてくれる。

「さあ、みんなが既に会場に行っているわ。行きましょ、主」

「ああ…」

会場は大破したということでアースガルズ城にある調練場を会場と

して本選の続きが行われることとなっていた。

ケール達は一足先にアースガルズ城へと向かっているという。

私はアビスを伴い、アースガルズ城へと出発する。

さてと、戦士の休息は終わりを告げた。

今日も無事に生き延びるように奮闘しなければ…。

私の日常はいつだって綱渡りなのだからな…。

第４９話：前代未聞

私とアビスはアースガルズ本城へと到着する。

アースガルズ本城は宗教国家の城と言われるだけあって、芸術的装飾が仕込まれた絢爛豪華な仕様となっていた。

軍事的有用性の無い作りとも言える。

だが、私はそんな無駄に装飾しているところが気に入っていた。

宗教的で荘厳な雰囲気が包まれた空間が何とも気分的に落ち着かせるのだ。

この城の全ては国民の血税によって建造されたわけではない。

世界中にいるガイア神教というよりはオイジュス様の信者のお布施によって建造されたらしい。

男が女に金を貢いだ結果で造り上げられたものだ。

故に何ら気にすることはない。

「おいおいそんなのありなんかよ…」

「神武闘式の歴史上類を見ない出来事だな…」

「こりゃあ、前代未聞だぜ…」

荘厳なアースガルズ城に相応しくない不穏な空気が流れていた。

「あっ、父様！」

ロンが手を振って、私の元に駆けつけてくる。

「遅刻だよ、ご主人様」

「だらしないですよ、閣下」

ケールとエクリアも待っていた。

「どうかしたのか？」

会場に言いしれない緊迫感が漂っている。

「ご主人様、どうやら前代未聞とも言うべき出来事が起きて、会場が荒れているみたいなんだ…」

「前代未聞って何なのよ？まさか主がまた何かしでかしたの？」

アビスは完全に私が原因だと考えているようだ。

今一度話し合う必要があるようだな…。

「ううん、あながちアビスの言うことは間違えではないと思うよ。今回ばかりはね。もうすぐ実況が説明してくれるさ」

『ええと…大変お待たせしました。実況でお馴染みのガルシアです。皆さん、大変混乱していると思われます。非常に言いにくいことで

すが、残りに出場者十五名の内……十三名が棄権したという情報が入りました…』

「うおおおおおおおおおおおおっ！」

会場は怒声が渦巻いていた。

このままでは暴動が起こりそうだ。

『ここから先は私から説明しよう』

「モーモス様の声です！」

ロンは嬉しげな声を出してくる。

百合は今だ健在なのか…。

『納得いかないのだろうが事実だ。皆の不満は痛いほど分かる。しかし、この映像を見て欲しい』

モーモスの言葉に呼応するように上空に映像が映し出されていく。

映像は私とロンが戦っている場面が映し出されていた。

ロンが雷龍を生み出して、闘技場を消し飛ばしていく場面。

私が雷龍に噛み砕かれそうになり、必死に応戦する場面。

私がカタストロフ・サン未完成超縮小版を放ち、雷龍どころか戦略級防御結界をも突き破って会場を吹き飛ばす場面。

……。

モーモスが言いたいことは痛いほどに理解できた。

確かに出場者の大半が棄権するのも無理はない。

私も逆の立場ならば、間違えなく棄権する。

怒声を発していた観客共も今は静まりかえっている。

あれほどの奇天烈な光景を見せつけられては黙るしかないだろう。

しかし、出場者十五人中十三人が棄権したということは私以外にまだ一人選手がいるということだ。

いったい何処の勇者なのだろうか。

是非、お目に掛かりたいものである。

『非常に残念な結果となってしまったが、大会はこのまま続行することを宣言する。なぜならば、まだ二人の勇者が残っているからだ。黒騎士ロースのことは…まあ、別として…』

私は別腹なのか！

『もう一人の残った勇者を褒め称えようではないか！』

モーモスの紹介と共に観客は歓喜の声を木霊させていく。

この差はいったい何なのだろうか…。

私はただ生き延びるために一生懸命に戦っただけだというのに…。

そんな落ち込んでいる私の肩に優しく手を添えてくれる者がいた。

「父様、元気出してください。私は父様がいつだって一生懸命であることを知っていますから…」

ロン。

慰めてくれるのは嬉しいが、貴様が私を陥れた元凶なのだぞ…。

まあいい。

それよりも私以外に残った選手はいったい何者なのだ？

『この者が残ってくれた勇者、フール殿だ！』

画像にその選手の姿が映る。

全身を黒の法衣で包み込み、素顔を隠している正体不明の者だった。

……。

どう考えても私よりも胡散臭すぎるではないか！

他の選手が棄権したのに素顔を隠して何処の素性も知れない者が残っている時点で陰謀臭を漂わせているぞ！

観客共も微妙に戸惑いながらも歓声を上げている様子だ…。

『はい、ここで再び実況でお馴染みのガルシアが仕切らせて頂きます！さあ、フール殿！貴方様は並み居る強豪達の棄権が続出する中でただ一人残ってくれました！何か譲れない思いがあるように伺わせますが、この大会に対する意気込みとかが有るのでしょうか？もし、宜しければ、答えて頂けませんか？』

映像には実況中継を担当するガルシアと名乗る男が黒の法衣に話しかけていた。

……。

黒の法衣は沈黙したままだった…。

『あの…もしかして…何か言いづらいことを聞いてしまったのでしょうか？』

……。

『意気込みは…言葉にするものでは無いと…解釈して宜しいのでしょうか？』

『私は黒騎士ロースを決して許さない。覚悟しろ…』

黒の法衣から聞こえてきた声は氷のように冷たい雰囲気を漂わせていた。

……。

「うおおおおおおおおおおおおおっ！」

今まで黒の法衣の存在に戸惑っていた観客共が熱狂的な声援を出してきた。

「黒騎士をぶっ殺せ！」

「俺はお前を応援しているぜ！」

「存分にやったれや！」

『おおっと！フール殿は黒騎士ロースに私怨があるようです！これは大いに期待できます！黒騎士ロースの命運も今度こそ尽きることでしょう！私も応援しています！皆さん、フール殿に盛大なる拍手を！』

観客共の盛大な拍手がアースガルズ城全体に響き渡っていく。

……。

同じ正体不明の者とは言え、フール殿とやらは瞬く間に観客共を味方につけたようだ…。

私と奴の何が違うというのだろうか？

軽く嫉妬を覚えてしまったではないか…。

それにしても私は正体不明の輩に恨みを買うようなことをしたのだろうか？

全く身に覚えが無いぞ…。

「ご主人様、いったい何をしたのかな?彼あるいは彼女からは憎悪すらも感じたよ」

「閣下なら何をされても不思議ではありませんからね…」

「まあ、あんたが外道に墜ちても最後まで付いててあげるわ…」

「例え、犯罪者になっても私の父様であることは変わりません…」

……。

最初から私が犯罪者だと決めつけて話を進めていないか?

少しは「彼に限って、そんなことはするはずがないわ!」のように庇う姿勢を見せて欲しいものだが…。

「貴様等は私が何かをしたと思っているのか?」

四人とも一糸乱れない動きで一斉に頷いてきた。

……。

これが私が歩む茨の道なのか…。

……。

まあいい。

今はこれからの戦いについて考えよう。

何事も気持ちの切り替えが長生きの秘訣だ。

柔軟な思考を巡らせることで新たなる選択肢が生まれてくるのだ。

戦う相手はフール殿。

奴もまた私と同じ今大会初出場だ。

実力は未知数。

だが、予選突破したことから相当の実力者であると予想される。

『さあ、盛り上がったところで試合を開始するとしましょうか！両者、闘技場へと上がってください！』

私とフール殿は闘技場に上がる。

フール殿から凄絶なほどの殺気が吹き荒れている。

……。

私はフール殿にここまで殺気をぶつけられるほど酷いことをしたのだろうか…。

喧嘩番長を名乗っていた頃であれば、数え切れないほどの悪戯をやって恨まれたことはあるのだが…。

……。

やはり身に覚えがないな…。

『さて、いよいよ準決勝戦が始まろうとしています！互いに素顔を隠した者同士の戦いですが、確実にフール殿に大儀があることでしょう！果たしてフール殿は黒騎士ロースに私怨を晴らすことができるのだろうか！それとも黒騎士ロースが無情にも返り討ちにしてしまうのだろうか！この戦い、一片たりとも目が離せません！モーモス殿！』

『素性が知れない者同士の戦いだが、素顔よりも実力を示すことが戦士の本分だ。彼らは戦いを通して、私達に語りかけてくれるだろう』

『有り難うございます！波乱続きの今大会ですが、今度こそまともに終わって欲しいと願っております！これ以上は私の胃が持ちません！本当にお願いします…。ふぅ…申し訳有りません…。では、気を取り直して、準決勝戦、開始…の前に魔法師部隊の皆さん、戦略級防御結界を二重、いえ、三重…もう何重でもいいですからとにかくたくさん展開させてください！』

「承知！」

虚空から突如、声が聞こえてきた瞬間、闘技場を囲うように無数の魔法陣が展開されていく。

これは送還魔法陣だ。

かつて閉ざされた世界で狂戦士を召喚するために使用された高等魔法。

魔法陣からは白の法衣に身を包んだ者が無数に現れてくる。

これがアースガルズが誇る魔法師部隊だということか…。

「諸々の刃を防ぐ神なる盾よ！顕現せよ！」

「顕現せよ！」

「顕現せよ！」

「顕現せよ！」

「顕現せよ！」

闘技場に何重もの光の膜が覆っていく。

戦略級防御結界を何重にも展開させるとは何たる贅沢な…。

これほどの大判振る舞いは聖戦時以外では初めてではなかろうか…。

私はどうやら歩く大量破壊兵器だと認知されているようだ…。

周囲は目映い光に包まれていき、フール殿の身を包む黒衣がより一層際立って見えてくる。

フール殿は光の膜が張られている光景をただ眺めていた。

……。

結界の展開は完了され、魔法師部隊は出現したときと同じように送還魔法陣を駆使して消えていく。

……。

周囲はただ光に満ちていた…。

光の世界に迷い込んだかのような錯覚を覚えてくるな…。

光に満ちた世界でフールは悠然と黒の法衣を靡かせていた。

その姿は幻想的に見えるが、それよりももっと深い意志の現れのようにも見えてくる。

まるで自分だけは光に染まることは絶対に無いと言っているかのように…。

フール。

貴様がなぜ私に恨みを持っているのかは皆目見当はつかない。

だが、私にはやるべきことがあるのだ。

『魔法師部隊の皆さん、有り難うございます！この舞台は世界に誇る歴史あるアースガルズ本城なのです！それ故に万全を喫して対応させて頂きました！この環境下であれば、相手が神でも無い限り、殲滅魔法が何十発こようとも破られることはありません！両者共々、悔いの残らないように思う存分戦ってください！では、改めまして、準決勝戦、開始だぁあああああっ！』

実況の開始合図と共にフールの袖から大量の短刀が出されていく。

「蜂の巣になれ」

短刀の雨が猛吹雪が如く私を呑み込もうとしてくる。

どこにそんな大量の武器を仕込んでいたのだ！

私は六角棒を高速回転させて、短刀を叩き落としていく。

フールは袖からは鎖鎌が出し、旋風が巻き起こるほどに振り回していく。

短刀の次は鎖鎌なのか！

……。

それにしても、この手品じみた戦い方。

何処かで見たことがあるような気がするのだが…。

フールが巻き起こしてきた旋風は竜巻となって私に迫ってくる。

洒落臭いわ！

ならば、目には目を！

歯には歯を！

竜巻には竜巻を！

私は六角棒を頭上に掲げて、さらなる高速回転させる。

周囲には私を中心に旋風が巻き起こっていく。

我が精神は竜巻の如し！

フールの竜巻に私の竜巻が激突していく。

『何という常識外れな攻防戦なのか！戦略級防御結界を展開して心底良かったと思います！それにしてもフール殿の力は棄権した前大会の八強を凌いでいると言っても過言ではありません！彼もしくは彼女はいったい何者なのでしょうか？一方、黒騎士ロースはそれ以上に規格外と言ったところでしょうか！彼の力は底無しなのか！非常識を常識に変える自然の摂理から外れた人外と言っても過言では無い！黒騎士ロース！彼は何でもありなのか！』

私の竜巻がフールの竜巻を呑み込もうとしていく。

これで降参してくれれば、平和的に終わるのだが…。

ぬおっ！

竜巻の間隙から鎖鎌が迫ってきている。

私は咄嗟に六角棒を前に掲げて、鎖鎌を防ぐ。

鎖鎌は六角棒に巻き付き、伸びていた鎖の方向から黒衣を靡かせながらフールが迫ってきている。

「お前があの御方を変えたのだ！私はお前が憎い！」

フールの手には刀がある。

周囲にはまだ竜巻が吹き荒れている。

六角棒が封じられている今、避けるしか術が無いのか…。

私は身体を反らして、フールが繰り出す斬撃を回避していく。

「たっ！やっ！はぁあああっ！」

フールの危機迫るほどの気合いが満ちた斬撃が私を追い詰めていく。

このままでは不味い！

鎖鎌を何とかしなければ…。

……。

名案を思いついた。

ロン。

今度は貴様の技を借りるぞ！

私は絡みついている鎖鎌を掴み、力を込める。

「迅雷蛇咬鞭！」

鎖鎌に雷が帯び、鎖を伝ってフールをも巻き込んでいく。

「きゃあああああっ！」

フールの黒衣は雷で焼け焦げ、黄色い悲鳴が私の脳髄に響いてくる。

……。

まさか…。

……。

吹き荒れていた竜巻は消えていく。

私の視界に映ってきたのは男の証に活力をみなぎらせるには充分な光景だった。

雪のように白い美脚。

肩まで切り揃えた空を思わせる水色の髪。

透明感のある碧眼。

氷を思わせる薄青色の口紅。

……。

絶世の美女なのは間違えない。

だが、もっと気になることがあった。

彼女が身につけている黒装束。

その服装はエルとアビスが身につけていた物と同じだった…。

まさか、とは思いたくないのだが…。

「パラディスムの者なのか…」

フールは親の仇を見るかのように私を睨みつけくる。

「そうだ！我が名はフールに非ず！パラディスム家筆頭若頭クロエ・パラディスムだ！」

……。

『あっ、何なのですか？貴女は！押さないで！』

『ちょっとどいてよ！クロエ！なぜ、あんたがこんな場所にいるの！』

アビスが実況に割り込んで、声を上げてくる。

「アビス様、良かった。貴女様はご無事でしたか…。ご安心ください。私めが必ずや一族の無念を晴らしてみせます…」

フール改めクロエは私の時とは打って変わって、アビスには穏やかな笑みを浮かべて応える。

それよりも聞き捨てならないことを言っていたようだが…。

『一族の無念って…。いったいパラディスムに何があったというの？』

一族の無念。

その言葉で推測されるのは…。

「パラディスムの隠れ里ヨツンヘイムはヴァルキリアによって壊滅しました…」

……。

『壊滅ってそんな…。嘘でしょ？』

会場の誰もが唖然としていた。

それも当然のことだ。

パラディスムは伝説の暗殺集団として世界的にも有名だ。

それが壊滅したという事実は余りのも衝撃的だったのだ。

『何かの冗談よ！頭領は無事なの？あの御方がヴァルキリアの雑兵なんかに後れを取るなんてありえないわ！』

アビスの声はかつて無いほどに取り乱していた。

私は余りの急展開で脳の処理が追いつかない。

クロエはアビスの取り乱した声を聞いて、俯いている。

「頭領はご無事です。ですが、かなりの深手を負っています。戦闘員のほとんどは討ち死に…。パラディスムを立ち上げられて百五十一年。これほどの被害は前代未聞とのことです…」

『あのパラディスム始まって以来歴代最強と謳われたレテシア様が負けるなんて、そんな…』

取り乱していたアビスの声が沈んでいく。

アビスはパラディスムの頭領は歴代最強と言っていたが、それほどの者を打ち倒す者がタナトスやケール以外にまだ存在するのだろうか？

……。

奇跡的に私の脳にある閃きが出てきた。

……。

有り得ないと思いたいが、消去法で考えていき、信じたくない者の名を私の脳が告げたのだ…。

『誰が頭領に深手を負わせたのよ！いったい誰が…』

アビスの痛々しいほどに押し殺した声が会場に響く。

出来れば、私の脳が告げた者の名が挙がらないことを切に祈る…。

だが、運命の女神は何処まで無慈悲で残酷だった…。

……。

クロエは沈黙している。

『答えなさいよ！クロエ・パラディスム！』

……。

「エル様です…」

……。

『えっ？何て言ったの？』

……。

クロエは歯を食いしばるかのように悲痛な思いを込めて残酷な真実を語る。

「エル・パラディスム、貴女様の双子の姉君。かつてパラディスム次期頭領として最有力候補として名を連ねていた者です…」

『嘘よ…』

私も嘘だと思いたかった…。

だが、クロエの悲痛な表情が悲しいほどに真実を物語っていた…。

「エル様はヴァルキリアの兵を率いて、ヨツンヘイムに襲撃を仕掛けてきました。頭領レテシア様はそんなエル様を止めるべく単身で挑み、破れたのです…」

『姉者がレテシア様を…』

……。

「里の誰もが憧れたエル様は鬼と成り果ててしまった…」

……。

クロエは言葉はそこで途切れる。

『嘘よ、姉者がそんな…。嘘、嘘、嘘、嘘よぉおおおおおおおおおおっ！』

アビスの絶叫が会場に木霊していく。

私はただ呆然とアビスの泣き声を聞くしかなかった…。

『あの…ここは一旦、試合を中断したほうが宜しいでしょうか？モーモス殿…』

恐慌状態に陥っているアビスの変わり、お馴染みの実況の声が聞こえてくる。

『そうしたいところだが、彼女の気が済まないだろう。このまま試合続行とさせる…』

彼女の気が済まないか…。

私はクロエに視線を映す。

クロエは憎悪に満ちた目で私を見てくる。

「お前のせいだ！お前に関わったから、エル様が鬼となってしまったのだ！私はお前を絶対に許さない！」

……。

私は六角棒を構える。

結果から言えば、確かに私が関わったことでエルが変わってしまったことは事実だ。

だが…。

「クロエ、私はまだ貴様の手にかかるわけにはいかないのだ…」

私はエルが例え鬼に成り果てようとも必ず助け出す。

そのためにここまで来ているのだ。

クロエの手にはあり得ないほどの武器が出てくる。

私の雑学の中で彼女は暗器使いだと告げている。

厄介なものだな…。

「貴様を殺す！」

「やってみろ…」

私は逆恨みなんかで死ぬわけにはいかないのだ。

それにしてもエルが洗脳されたことでここまで大事になってしまうとは…。

……。

思えば、あの燃えさかる戦場の中でエルとアビスを従者にしたことで私の生き残り合戦が始まっていたのかもしれない…。

だが、後悔はしていない…。

なぜならば、この苦難こそが酒池肉林の夢を叶えるための茨の道だからだ！

髑髏の丘なんぞ綺麗に手入れをすればいい！

そして、私と私の家族のための楽園を築き上げればいいのだ！

クロエ・パラディスム。

貴様の憎しみを受け止めてやろう。

ただし、私が死なない程度に限るが…。

やはり死にたくはないからな…。

さて、今回も無事に生き残れるために奮闘するか…。

第５０話：神降ろし

さて、気合いを入れてみたが、どうしたことやらか…。

これほどの恨み辛みを受けて、戦うのは初めてだからな…。

それにしてもどうして私がエルとアビスの主であることがばれたのだろうか？

「戦う前に言っておく！その鎧は代々御館様が身につけるものだ！今すぐ外せ！」

「断る…」

「何だと？」

鎧は外せば、素顔がばれてしまうではないか…。

……。

そう言えば、この鎧はアビスが秘中の装備品だと言っていたな…。

……。

まさか、パラディスムの御館様とやらの鎧を私に贈呈したというのか！

アビス！

よりにもよって何たる物を渡してくれたのだ！

「だったら貴様の死体から鎧を剥ぎ取ってくれる！死ねぇ！黒騎士ロース！」

クロエが手に持っている大量の獲物を私に惜しむことなく投げつけてくる。

あれだけの獲物を売れば、かなりの収入が得られるのではないだろうか…。

何とも贅沢な攻撃だな…。

私は六角棒を高速回転させて飛来してくる獲物を全て叩き落としていく。

自惚れるつもりは無いが、この程度の攻撃では私に傷一つ付ける事は出来ない。

「はぁあっ！」

クロエはまだ獲物を投げつけてくる。

暗殺者でも止めて、武器屋でも開業したらどうなのだろうか。

きっと大儲けするに違いないぞ。

私は再度六角棒を回転させようとして気づく。

飛来してくる獲物の中に黒い球体があることを…。

煙幕か…。

だが、構うことは無い。

私は六角棒を高速回転させて、黒い球体を弾いていく。

ん？

球体から何やらぬるぬるとした油のような液体がぶちまけられたが…。

油…。

……。

不味い！

「燃え尽きろ！昇竜炎舞！」

クロエは鎖鎌を振るい、巨大な炎の竜巻を発生させてくる。

油が掛かった状態で火にでも当たったらいくら頑丈な私でも死んでしまうかもしれない！

目の前の竜巻を迎撃すれば問題無いが万が一ということもある。

私は即座に装着している鎧を脱ぎ捨てた。

露わになったのは全身に包帯が巻かれている私の胴体だ。

私は六角棒を振るって、風圧を起こし、炎の竜巻を掻き消していく。
この風圧を起こす技はタナトスのものなのだが、単純故に有用性が高い。

『おおっと！黒騎士ロースが油が掛かった鎧を脱ぎ捨てた！その下には全身包帯で覆われています！いったいどれほどの戦場を渡り抜いてきたのだろうか！ますます謎が深まってくる！一方、フール殿改めクロエ殿はあの伝説の暗殺集団パラディスム家の一員という衝撃的な事実で会場を賑わせました！彼女の心中は如何ばかりなのだろうか！黒騎士ロースは果たして彼女の想いを受け止めきれるのか！』

実況中継よ…。

私の包帯は戦場では無く、床で得た傷だ…。

体中にはケールの愛の刻印が刻まれているのだ…。

クロエは再び黒い球体を投げつけてくる。

そう何度も同じ手は喰らわないわ！

私は叩き落とした獲物を拾って、飛来してくる球体を撃墜する。

「くっ！」

クロエは再び、両手から獲物を大量に出して、投げつけてくる。

その芸はもう見飽きたぞ…。

私は再び、六角棒を振るって獲物を叩き落とそうとして、クロエが突進してくるのが目に留まった。

遠距離戦では仕留めれないと見て、今度は接近戦ということか…。

六角棒で飛来してくる獲物を叩き落とし、接近するクロエを待ち受ける。

「はっ！」

クロエは二本の剣を舞うように振っていき、蹴りを織り交ぜた体術を繰り出してくる。

私は身体をくねらせて斬撃や蹴撃をかわしていく。

久々に柔軟体操避けを披露できたな。

後は腰痛にならないことを祈るのみだ。

『黒騎士ロース！またしても驚かせてくれます！あのクロエ殿の凄まじい攻撃を難なく避けています！それにしても、あの動きは怪しすぎます！いったい何処の流派に属しているのでしょうか？モーモス殿！』

『おそらく我流なのだろう。怪しい動きだが、無駄のない動きでもある。あれを捉えるのは困難と言えよう。黒騎士ロース、まったく彼はどこまで私を驚かせるのか…』

『有り難うございます！結論からして黒騎士ロースは非常識な存在だということを改めて認識させられましたということです！黒騎士ロース！冗談は存在だけにしろと言いたくなってきます！一方、そんな非常識な存在を相手にしているクロエ殿には同情の余地は十二分にあると言えましょう！おおっと！クロエ殿！攻撃を悉く避けられていることで苛立っている様子です！あの怪しすぎる動きで避けられてはさすがに怒りたくなってくると誰しもが思うことでしょう！さて、いったいどうなるのか！』

「くっ！怪しい動き！貴様は妖怪なのか！」

クロエは私に必死に攻撃を当てようとするが悉く私は避けていく。

見事な連撃だが、エルには及ばないな…。

「おのれ！当たれ！」

冷静さを欠いたのか、攻撃が大振りになってきている。

私は六角棒を振るって、クロエが振るう剣を弾き飛ばす。

「ぐっ！」

クロエは手を押さえて、私から距離を取っていく。

「エルであれば、この程度で冷静さを欠くことはなかったな…」

私はクロエを挑発していく。

ここは限界まで怒らせて、すっきりさせたほうが後腐れがないだろ

う。

そして、冷静になったところで今後のことについて平和的に話し合うのだ。

パラディスム家やエルについてのことを…。

「貴様がエル様のことを言うな！」

クロエの怒りの声が会場に響き渡る。

……。

「なぜ、エル様は貴様を選んだのだ？ヨツンヘイムでは誰も歯牙に掛けることが無かったあのエル様が…。何故だ？」

……。

「それに鎧だ。御館様の鎧はアビス様が管理されていたもの。エル様以外に心を開くことが無かったあのアビス様も貴様を選んでいる…。何故だ？」

クロエが縋るように質問してくる。

……。

ここは誠意を持って正直に答えるとしようか。

彼女が真剣に質問してきているのだ。

「黒騎士ロース！答えろ！」

「分からん…」

……。

周囲の時が止まったかのように感じた。

「はぁ？」

クロエは唖然として私の答えに反応する。

しかし…。

本当に分からないのだ…。

『おおっと！何と言うことでしょうか！クロエ殿の一世一代の問いに黒騎士ロースは恥も外聞も無く、一言「分からん」で済ませました！いくら何でも酷いのではないでしょうか！もう少し言いようがないのか！黒騎士ロース！いったい何処まで悪い意味で期待を裏切らないのでしょうか！ここまで来ると逆に清々しいものでもあります！モーモス殿！』

『空気を読め…』

『有り難うございます！さて、黒騎士ロースの無情な解答に打ちのめされたクロエ殿！心中お察し致します！さて、果たして立ち直れるのでしょうか！』

……。

実況中継に文句を言いたいところだが、確かに空気を読めなかったのは私の不覚と言っていいだろう。

さて、クロエにどう謝罪するべきなのか…。

「認めない…」

……。

打ち拉がれていたクロエが幽霊のように立ち上がってくる。

私は何故か後ずさってしまった…。

「私は貴様を認めない！」

視線で人を射殺せそうなほどに憎悪に満ちた目つきだ…。

これは完全に怒らせてしまったらしい…。

後は峠を越えるのみなのだが…。

……。

果たしてそれまで私は無事でいられるのだろうか…。

ん？

クロエの身体から黒くて嫌な何かが吹き出しているぞ…。

これはいったい？

『あっ！また貴女ですか！分かりました！もう面倒ですから貴女も解説者としてここにいてくれればいいです！モーモス殿！』

『問題無い…』

『有り難うございます！モーモス殿から許可を得られたことで紹介します！特別解説者アビス・パラディスム殿です！さて、アビス殿！この戦いの行方について伺います！』

『クロエは神降ろしを発動させようとしているわ！止めて！クロエ！それはレテシア様からも禁じられた禁忌中の禁忌の秘技！あんたの身体が崩壊してしまうわよ！』

アビス。

元気になって何よりだ。

しかし、非常に物騒なことも言っているようだが、神降ろしとはいったい何なのだ？

私は視線をクロエに向ける。

……。

クロエの身体からは黒い蒸気のようなものが吹き出ている。

その光景に私の足が震えだしてきた。

私は恐怖を感じている…。

しかもこの恐怖は初めてケールに対峙した時と同じものだ…。

これは非常に不味いぞ…。

『クロエ！くっ…。会場のみんな！早くここから逃げて！出来るだけ遠くに！早くっ！』

アビスが会場に退避することを呼びかけている。

それほどまで不味いことが起きるというのか…。

「ぐぐっ…認めない…私は…全てを…認め…ない！火よ…土よ…水よ…風よ…諸々の全てよ…集え…我が身…神の…御身とならん…」

くっ！

この暴悪なる威圧感は何なのだ！

クロエの身体を中心に光に満ちた闘技場に漆黒の蒸気が広がってきているぞ…。

『アビス殿、どういう事なんでしょうか？神降ろしとはそれほどまでに危険なものなのですか？』

『危険なんて生易しいものじゃないわ！あれは最悪なのよ！もうこの話は秘中なんだけどいいわ！神降ろしは言葉通り、神を降ろす術。自身に神を降ろすことで神に匹敵する力を手に入れるものなの！それが出来る者は一握りでパラディスムを名乗ることが許された者だ

けよ！そして、神はその術者によって降ろせる者は違ってくるわ！クロエが降ろす神はパラディスム史上最悪の神と呼ばれるアルゴス！このままだとアースガルズは滅びてしまうわ！』

アビスの不穏な言葉に会場がざわめいている。

アースガルズが滅びるだと…。

『それは真なのか？』

『ええ、過去に発動したことがあるけど、危うくパラディスムが滅びる寸前までいって、御館様とレテシア様の力で何とか食い止めたものなの…』

『会場の皆さん！速やかに退避してください！警備隊、魔法師部隊の皆さん、誘導をお願いします！』

クロエの身体は漆黒の蒸気に包まれていく。

「そこまで私が憎いのか…」

いや、おそらくそれだけではないだろう。

エルが鬼に成り果て、頭領とやらが負けたときに何も出来なかった自分に対する無力感。

それで精神が摩耗していて、気持ちを上手く発散することができなかったのだろう…。

そして、止めに私が空気を読めない発言をして爆発したといったと

ころか…。

……。

私の空気の読めない発言でアースガルズが滅びたなぞ冗談ではない！

何としてもクロエを止めねば、私は史上最大の犯罪者となって後世まで悪名を轟かせてしまうことになる！

「我が名は…アルゴス！」

ぬおっ！

凄まじい威圧感が風となって私を打ち付けていく。

漆黒の蒸気が晴れていく。

蒸気が晴れた先にあったものは…。

『私は夢を見ているのでしょうか？夢でしたら醒めたいです！何なのですか！あれは！黒騎士ロース以上に規格外、いえ、奇怪な存在です！世界の終末を告げる怪物なのでしょうか！モーモス殿！』

『次元を逸脱した力だ。あれは人の手でどうこうできる存在ではない…』

『有り難うございます！結論からして手に負えない存在だと認識できました！ですが、このガルシア、実況者としての意地と誇りに掛けて最後まで実況させていただきます！』

『私は軍を要請するために陛下に伺いを立ててくる！ロース！それまで何とか持ちこたえてくれ！』

モーモス…。

私にこの化け物を相手に持ちこたえろと言うのか…。

闘技場を覆うほどに巨大な漆黒の肉の塊。

その表面には無数の碧眼が斑模様の如く埋め尽くし、その隙間からは無数の触手が磯巾着のように蠢いている。

……。

これがクロエが降ろした神アルゴスなのか…。

話を聞かない狂信者でもこの奇怪で醜悪な神を見れば、瞬時に宗旨替えすること間違えないだろう。

『クロエ！お願い、もう止めて…』

アビスの悲しげな声が私の耳に届いていく。

「申し訳…ゴザイ…セン。クロエは…モウ…止まる…コトガ…出来ません…逃ゲテ…アビス様…」

『クロエぇえええええええっ！』

……。

アビスが泣いている…。

私は化け物になったクロエを見据える。

彼女はアビスにとって家族も同然の者なのだろう。

アビスは私の家族だ。

ならば、クロエもまた私の家族と同義で捉えねばなるまい！

まあ、クロエは怒るだろうと思うが…。

本来ならアースガルズが滅びようとも逃げるところだが…。

家族のためとならば、痛い思いをしてでも助け出すのが家長たる私の義務だ。

私は六角棒をアルゴスに向ける。

クロエ！

貴様を化け物にしたのが、私であるというならば、元に戻すことが出来るのもまた私だ！

これを機会に日頃の鬱憤を晴らすのも良いだろう！

私も責任を持って死なない程度に付き合わせてもらうぞ！

『黒…騎士…ロォオオオオオオオオス！』

無数の碧眼から黒い閃光が放出される。

私は閃光の嵐をかいくぐって、逃げ回っていく。

決意をしたのはいいが、実際どうすればいいのか皆目思いつかん！

周囲には何重もの防御結界が展開されているから逃げ回る範囲も限られてしまう！

ん？

閃光が直撃した結界が黒く変色していている。

『これは何と言うことでしょうか！戦略級防御結界が浸食されています！あの怪物の攻撃の前では何重もの展開された結界であろうとも無意味なのか！このままでは結界が破れてしまう！あの怪物が外に出たら冗談無くアースガルズが滅びてしまいます！あの怪物を何とか出来るのはもはや同様に規格外の存在、黒騎士ロース以外にいないのでしょうか！口惜しい限りです！』

『主！逃げて！』

私をあの化け物と一緒では無いぞ！

しかし、確かにあの閃光を前に防御結界は無意味だ。

アビスは逃げろと言っているが、結界が邪魔で逃げれないのだ。

まあ、強引に結界を破って、外に出ることも出来なくもないが…。

私は閃光を無差別に放出している化け物を見る。

そのときにはあの化け物も特典として付いてくる羽目になる。

そうなれば、私が化け物を解放した犯罪者として指名手配されてしまう恐れがある。

……。

いっそのこと賞金首になる覚悟で逃げるか…。

……。

いや、やはり駄目だ。

それをすれば、アビスの家族であるクロエを永遠に失ってしまうことになる。

さらにこのアースガルズを滅ぼした大量虐殺者という最悪の罪も背負わせてしまうことになる。

そうなれば、アビスの心には一生癒えない傷を残してしまうだろう。

クロエを最終的に壊してしまったの私だ。

私が彼女を何とかすることが筋ではないのか…。

……。

ここはもう潔く腹をくくるべきだな…。

だが、最後の後押しがどうしても必要だ…。

足が震えている…。

私の身体が恐怖に負けようとしている…。

恐くて仕方ない…。

だから…。

「アビス！」

『えっ…何？』

……。

「私に…戦う…勇気を与えてくれ…」

『主…。恥ずかしいけど…生きて帰って…そして、私を抱き締めて！』

……。

力が沸いてきた。

身体の震えが止まる。

最後の後押しはされた。

後は…。

……。

私は変わり果てたクロエを静かに見据える…。

「聞こえるか！クロエ！」

六角棒を化け物に向けて、私は声を出す。

「私は必ず貴様を助ける！」

「ロォオオオオオオオオオオスッ！」

化け物が私の名を呼ぶことで返事をしてくる。

『これは燃える展開です！愛しい人のために強大な敵に挑もうとする黒騎士ロース！私は彼を誤解していたようです！どうかモーモス殿が応援に来られるまで持ちこたえてください！アースガルズの命運は貴方にかかっています！御武運を祈っています！』

『主！必ず生き延びて！』

……。

黒騎士はお伽噺に登場する悪役だ。

私は演劇で悪役を演じるのが大好きだった。

クロエ。

私は貴様に憎まれる悪役を見事演じてみせよう。

だから、貴様が悪役になる必要は無いのだ！

大人しく降板してもらおうか！

「行くぞ！クロエ・パラディスム！」

私は閃光が飛び交う嵐の中を駆け抜けていく。

クロエもといアルゴスは触手を一斉に私に向けて伸ばしてくる。

無数の漆黒の触手が私を指し貫こうと迫ってきた。

私は触手で遊戯をする趣味は持ち合わせてはおらんわ！

六角棒を振るって、迫りくる触手を薙ぎ払っていく。

何としても本体に接近して、叩かなければ…。

私は走り抜けようとしたときに何かが足に絡まっていく。

何が絡まったのだ？

私は足下を見ると落ちた触手に断片が絡みついていた。

ぬおおおおおおっ！

気持ち悪いぞ！

一瞬恐慌に陥った私に触手が容赦無く私に襲いかかってくる。

だから私は触手で遊戯をする趣味は無いのだ！

私は六角棒を振るって触手を切断しようとした。

だが、迫ってくる触手は突然枝分かれをして、六角棒を回避して私の身体に絡みついてきた。

不味い！

動きが止まった私に触手が群がるように迫ってくる。

「ロォオオオオオオオオオスッ！」

くっ！

私の手にある六角棒が触手に叩き落とされてしまう。

さらに兜に触手が巻き付き、脱がそうとしてきた。

不味い！

素顔がばれてしまうぞ！

止めろ！

止めるのだ！

……。

……。

…。

『黒騎士ロースの素顔が今明らかになりました！が、顔まで包帯に覆われていて分かりません！おそらく彼の顔には人に見せられないほどの酷い傷を負っているのでしょう！まさに傷だらけの人生と言ったところなのでしょうか！』

『危機一髪だったわね…って、今でも充分危機じゃない！主！何とか逃げて！』

そういえば、顔もケールの刻印が刻まれていたので包帯を巻いていたのだった…。

彼女には後で感謝しなければ…。

だが、アビスの言うとおり、まだ充分に危機だ…。

いったいどうすればいいのだ！

触手の先端が私の眼前に迫ってくる…。

万事休すなのか…。

我ながら余りにも呆気なさすぎるぞ！

触手の先端が割れて口を開いてきた。

外面が真っ黒に反して、中身は人と変わらない肉の色をしている。

私を丸呑みにするつもりなのか…。

「んぐっ！」

私に口を覆うように触手の口が押し付けられてしまった。

これはまさか…。

※ここから先は奇怪で不快な表現が描写されています。

※以下の線の間にある文章を飛ばすことを推奨します。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

ーーーーーーーーー

…………………………。

………………………。

……………………。

…………………。

………………。

……………。

…………。

ぬおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおっ！

ぎゃあああああああああああああああああああああああああああああああああああああっ！

触手に接吻されてしまった！

怪物に口づけされてしまった！

「ぢゅるぢゅるぢゅるぢゅるぢゅるぢゅるぢゅるぢゅるぢゅる」

おげぇえええええええええええええええええええええええええええええええええええっ！

触手に口内を蹂躙されてしまっている！

怪物に唇を貪られてしまっている！

ふと身体中に唇のような感触が次々押し当てられるのを感じた…。

ぬあああああああああああああああああああああああああああああああああああああああっ！

「ぢゅばぢゅばぢゅばぢゅばぢゅばぢゅばぢゅばぢゅばぢゅば」

私の身体の至る所に触手が吸い付いている！

「ぢゅるぢゅるぢゅるぢゅるぢゅるぢゅるぢゅるぢゅるぢゅる」

「ぢゅうぢゅうぢゅうぢゅうぢゅうぢゅうぢゅうぢゅうぢゅう」

ああっ！

………。

『これは…どう実況すれば宜しいのでしょうか？アビス殿…』

『ご愁傷様としか言いようがないわ…って、何やってるのよ！主は！』

『さすがにあれは不可抗力と言わざるを得ないでしょう…。今まで黒騎士ロースの奇行には悩まされてきましたが、今回ばかりは同情を禁じ得ません…』

………。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

ーーーーーーーーー

身体の力が抜けていく…。

私の力を吸収しているのか…。

だが、それよりも久々に芽生えた感情があった…。

それは怒りだ…。

私の最強の力は限界突破した…。

もはや降板するだけではすまさせない…。

永久追放してやる…。

徹底的にやってやろう…。

考えるのは後回しだ…。

今は理性よりも感情を優先させよう…。

クロエ…。

私は貴様を必ず助ける…。

だが、それ以外は許容してもらう…。

覚悟するがいい…。

「カタストロフ・サン未完成中球版…」

「ギャアアアアアアアアアアアアアッ！」

私を中心に漆黒の炎球が膨張していく。

巻き付いていた触手は瞬く間に焼き払われ、身体が自由になる。

仮にも相手が神であるならば、少々手荒い方法をやっても平気だろう…。

貴様は私の生涯で消し去りたい思い出を刻みつけてくれた…。

しかも少しでも気持ちいいと感じてしまった自分を消してやりたいとまで思わせたのだ…。

覚悟しろ…。

「喰らえ…」

私は本体に目掛けてカタストロフ・サン未完成中球版を放った。

漆黒の太陽はアルゴスを容赦無く焼き尽くしていく。

「グゴエアアアアアオアアアェアアウアアアアッ！」

アルゴスは鼓膜が破れるほどの絶叫を上げる。

『黒騎士ロースが完全に怒ったようです…。彼を敵に回した方がアースガルズが滅びるかもしれません。アビス殿…』

『それよりもクロエはどうなるの！少しやりすぎじゃないの！主！』

私は生きたまま丸焼きにされているアルゴスを眺めていた。

そろそろ身体が動かなくなってきているな…。

……。

もういいだろう…。

私は魔力を断ち切り、カタストロフ・サン未完成中球版の炎を消し去る。

アルゴスは焼け焦げているが、再生してきているのか、火傷が治りつつあった。

だが、完治するまでは時間がかかるだろう。

……。

私は確かに怒りはしたが、これも計算の内だ。

アルゴスを動きを止めるには瀕死になるほどの攻撃を加える以外に思いつかなかったのだ。

決して、鬱憤を晴らすためだけでやったわけではないぞ！

……。

私は脱ぎ捨てていた鎧と兜を装着し、アルゴスの本体に近づいてクロエの気配を探る。

無数にある碧眼の中で一際大きい目にクロエの生命反応を感じた。

さて、どうやって助け出したら良いやらか…。

私は何となくクロエの反応を感じる目玉に手を当てる。

「苦シイ…」

目玉から声が聞こえてくるぞ…。

私は目玉に耳を澄ませた。

「御館様…助ケテ！」

ぬおっ！

身体が目玉に引きずり込まれていく！

触手の次は何の遊戯をさせるつもりなのだ！

『主！』

最後に聞こえてきたのはアビスの声だった…。

私の意識はここで途切れた…。

……。

……。

……。

……。

……。

……。

…。

私は目を覚ます。

ここは何処なのだ?

風のせせらぎを感じる。

虫の鳴き声が聞こえてくる。

豊かな自然に囲まれた辺境の村。

見覚えの無い場所だ。

「何をぼおっとされているのですか?御館様」

鈴の音のように済んだ声が背後から聞こえてきた。

私は振り向いた途端に時間が止まる。

……。

艶やかな漆黒の長髪を風に靡かせている絶世の美女がそこにいた。

何処か儚げで、浮世離れした雰囲気を漂わせていて、東洋に伝わる着物と呼ばれる服を着飾っていた。

透明感のある漆黒の瞳の下には涙黒子があり、それが大人の雰囲気を醸し出している。

……。

完全に成熟した絶世の美女が私の目の前にいる…。

これが女盛りというものなのか…。

是が非でも私の酒池肉林の構成員に迎えたいぞ！

……。

それにしても本当にここは何処なのだろうか？

私は夢でも見ているのか？

……。

「今日も変わらずヨツンヘイムは平和ですね…」

謎の美女は大自然を眺めながらしみじみと呟いてくる。

彼女の横顔に一瞬見とれていたが、聞き捨てならない言葉は言っていた…。

ヨツンヘイム。

確かパラディスム家が根城を建てている里の名前だったはず…。

なぜ、私がそんな場所にいるというのだ?

「ふふっ、何を私の顔をそんなに眺めているのですか?御館様」

美女は私を御館様と呼んでいる。

確かに今の私は御館様の物と言われる鎧を装着している。

それで勘違いしていることも充分にあり得る。

だが、それを抜きにしても彼女はいったい何者なのだ?

……。

私が謎の美女と見つめ合っていた時、何処か見覚えがある少女が駆けつけてくるのが目に留まる。

その少女は私と謎の美女の前に跪いてくる。

「御館様、レテシア様、夕食の用意が出来ました」

「ご苦労様、クロエ。さあ、行きましょう。御館様」

……。

少女は謎の美女のことをレテシア様と呼んでいた…。

謎の美女は少女のことをクロエと呼んでいた…。

ここは…。

この世界は…。

現実世界ではない！

ましては私の夢でも無い！

思い出せ、ロスト！

私は今まで何をしていた？

……。

そうだ。

確か、アルゴスの本体からクロエの反応を探っていて…。

『御館様…助ケテ！』

アルゴスの目玉からクロエの声が聞こえて、引きずり込まれたのだ…。

ならば、この世界は…。

アルゴスの体内、あるいはクロエの世界だ。

私はクロエの夢の世界に迷い込んでしまったのだ。

しかも私は御館様という立ち位置にいる。

「何をしておられるのですか？さあ、早く行きましょう。夕食が冷めてしまいますよ、御館様」

私はレテシアの冷たくも柔らかい手に引かれながらも呆然としたままだった。

今まで色々と命がけの体験をしてきたが、まさか人の夢の世界にまで迷い込んでしまうとは…。

人生、長生きしてみるものだ…。

さて、どうやって脱出が出来るのやらか…。

まあ、とりあえず夕食を頂いてから考えるとしようか…。

無駄に足掻いても体力を消耗するだけだからな…。

第51話：Falsche Welt, dir traue ich nicht

今回の話は作者の解釈により記載が多く、つっこみどころ満載だと思いますが、あまりきつくつっこまないでください。

では、どうぞ。

第51話：Falsche Welt, dir traue ich nicht

私はレテシアとクロエに連れられるままに屋敷の中に入っていく。

「お帰りなさいませ、御館様、頭領」

「ただいま、楽にしていいわよ」

レテシアは艶やかな笑みを使用人に向けて、廊下を歩いていく。

クロエは黙ってレテシアの後に続くだけだった。

ここはクロエの夢のはずだと思うが、かなり精巧に作られた世界だ。

単なる夢であるならば、もう少し自然の摂理に反したような矛盾があってもいいはずだが…。

ちなみに私の夢はいつも不自然なほどに唐突に美女と遭遇して燃え上がる展開だ。

夢は無意識が映像化するものだと聞いたことがある。

矛盾した展開の中でも必ず法則があるはずなのだ。

もう少し様子を見るとするか…。

「今日も味噌汁とご飯なのね。とても美味しそうだわ」

レテシアは嬉しげに食器を取り、私に進めていく。

「さあ、クロエが作った味噌汁よ、御館様」

味噌汁か…。

確か、エルとアビスによくご馳走してもらった料理だったな…。

……。

兜を脱がないと食べれない。

だが、素顔を晒せば、御館様でないことがばれてしまう。

……。

いや、むしろばれるべきだろう。

私が別人であることを晒せば、この夢の矛盾に到達する可能性がある。

これは一種の賭けだな…。

このような奇天烈な展開では本当に雑学は役立つものだ…。

私は兜を外して素顔を晒す。

……。

「召し上がってください」

レテシアには特に反応が無い。

では、クロエはどうなのだろうか？

……。

クロエは沈黙したままだ…。

……。

一つ矛盾に気づいた。

クロエは私の素顔を知らないはずだ。

夢は自身の情報を基盤に出鱈目に羅列した世界を生み出しているものだ。

すなわちクロエの夢の中では私の素顔は描写出来ないはずだ。

私は持参している手鏡を取り出そうとした。

……。

いつも持っているはずの手鏡が無い…。

……。

そうか…。

クロエの情報の中に私の手鏡は存在しないのだ。

これでは自分の顔を確認することができない…。

だが、ここでは私は御館様だ。

おそらく私の顔は御館様の顔に変えられているに違いない。

何て事だ…。

この世界に存在する全てはクロエの情報により構成されているのだ。

クロエの情報こそがこの世界の法則だ。

私の最強の力の全貌はクロエの情報の中には存在しない。

故に最強の力を行使できない可能性もある。

これは非常に不味い…。

私から最強の力を取ったら何が残るというのだ！

ただの酒池肉林を夢見る痛い男ではないか！

私の生涯最大の危機と言っても過言ではない！

何とかこの厄介な世界の法則の抜け道を探らねば…。

「何か考え事ですか？せっかくクロエが作ってくれた味噌汁が冷めてしまいますよ」

そう言えば、レテシアが食器を差し出したままだった。

とりあえず食事を頂いてから対策を立てるとするか。

腹が減ってはただでさえ回らない頭がさらに回らなくなるものだ。

私はレテシアから食器を受け取り、味噌汁を啜る。

……。

美味いな…。

「そういえば、エルとアビスはどうした？」

私はレテシアに訪ねる。

「エル様とアビス様は任務に行っておられます」

……。

レテシアが答える代わりに今まで沈黙していたクロエが答えた。

……。

「何の任務に行ったのだ？レテシア」

私は再びレテシアに訪ねた。

「ヴァルキリア帝国でヒュプノス殿下の密偵として働いています」

またしてもレテシアの代わりにクロエが答えるのだった。

「私はレテシアに聞いているのだが…」

「クロエの言うとおりですよ、御館様」

レテシアがクロエを弁護するように言ってくる。

……。

何故か違和感がある。

そして、この違和感こそがこの世界の矛盾に違いない。

「任務はいつ完了する？」

「ブリュンスタッド王国との戦が終わるまでかと存じます」

……。

なるほど、そういうことか…。

私は食器を置いて立ち上がる。

「食事はもう宜しいのですか？」

レテシアが私に笑みを浮かべて伺ってくる。

……。

「いささか体調が優れない。今日はもう休むとする」

「そうですか。では、クロエ。御館様をお送りしなさい」

私に続いて、クロエが立ち上がろうとする。

「一人でいい…」

「そういうわけにはいきません」

無表情だったクロエの顔に何らかの焦りが生じているかのように見えた。

……。

まあいい。

「では、案内してくれ…」

「畏まりました」

……。

……。

…。

私は淡々とクロエの後へと続いていく。

不思議なことに出迎えていたはずの使用人達を一人も見かけること

がなかった。

私とクロエの足音だけがただ響いていた…。

……。

……。

…。

クロエはいつまで案内し続けているつもりだろうか…。

歩いている際に寝室を幾つも見かけているのだが…。

「今日はこの部屋でいい…」

私は目に付いた寝室の中に入ろうとする。

「あっ！そちらは！」

無表情だったクロエが初めて感情を露わにしてきた。

私は構わず寝室の戸を開けた。

……。

その部屋はまるで子供が遊んだ後のように遊具が散乱していた。

「その部屋は…」

クロエが狼狽えている様子だったが、私は構わず部屋に足を入れる。

……。

私はさらなる違和感を感じた。

この部屋は…。

……。

「クロエ…」

「はい…」

クロエは挙動不審になっていた。

私はクロエの手を引き、部屋にある布団の上に座らせた。

「あっ…」

「少し話をしようか…」

クロエは無言で頷く。

……。

さて、話を持ちかけたが、いったい何の話題を出せばいいか…。

私は周囲に散乱している遊具を取り出す。

「この遊具は何という物だ？」

「はい、これはお手玉と言う物です」

布を編んだ玉をクロエは持って見せてくる。

「では、どうやって遊ぶのか教えてくれないか？」

「は、はい、これはこうして…」

クロエは私にお手玉を軽やかに放物線を描くように投げてみせる。

「上手だな、私も挑戦してみようか」

「はい、どうぞ…」

私はクロエからお手玉を受け取る。

確か両手を使って放物線を描くように投げるのだったな。

……。

「なかなか難しいものだな」

「御館様、もう一度私がやりますので見ててください」

クロエは私にお手本を見せるように再びお手玉をしてくれた。

「今度こそ要領を得た。次は上手くやってみせる」

「ふふっ、期待していますよ、御館様」

クロエが初めて笑顔を見せてくれた。

私も思わず笑みが浮かんでくる。

「馬鹿にしているのか。見ているといい。どうだ。よっと…あっ！」

「惜しかったですね。けど、上達しましたよ。次こそは上手くいくと思います」

クロエが笑顔を見せてくれる度に心が温かくなってくる。

……。

そうか…。

もしかして、これが子を持つ親の気持ちなのかもしれない…。

このクロエの笑顔を見れば、命をかけてでも守りたいという気持ちが芽生えてくる。

私はいつでも自分の命が最優先だ。

だが、私もいずれ子を持つことになれば、自分の命は二の次になるのかもしれない。

……。

遙か先の未来のことを想像しても仕方ないはずなのだがな…。

今の私が夢見る未来は酒池肉林。

子を持つのはその後のことだ…。

……。

「あの…御館様。お強請りしても…宜しいでしょうか？」

「良いとも。何をお強請りしたいのだ？」

クロエは顔を赤くして俯いている。

最初の無愛想な頃の面影は微塵も無かった。

「膝枕…して頂いても…いいですか？」

「こっちに来なさい」

私はクロエを抱き寄せて、自分の膝に横たわらせる。

「これで良いか？」

「はい、御館様のお膝…とても暖かいです…」

私はクロエの水色の髪を撫でていく。

クロエはくすぐったそうに身体を竦めて、私の膝に顔を押しつけてくる。

……。

空気が心地良かった。

この空気にそのまま浸りたいとも思った。

私は膝に心地よく寝ているクロエを見る。

クロエを本当の子のように愛しいとさえ思えてくる。

……。

残念だ…。

これが現実であればどれほど幸せだったのか…。

出来れば、このままでいたかった…。

家族の温もりにこのまま溺れていたかった…。

だが…。

……。

これは所詮夢。

限られた情報で羅列された偽りの世界。

可能性が永遠に閉ざされた明日無き世界。

本来有り得ない世界だ…。

クロエの笑顔を思い浮かべる。

クロエは現実世界では私を憎悪に満ちた目で見ていた。

「どうしたのですか？御館様…」

「すまない、起こしてしまったか？」

クロエは笑顔を私に向けてくる。

夢の世界では御館様と慕ってくれるクロエ。

だが、私は御館様ではない。

黒騎士なのだ…。

黒騎士は悪役を演じることが義務だ…。

私が悪役を演じなければ、クロエが悪役を演じることになってしまう。

……。

子を持つ親は心地良いことばかりではない。

子の成長を促すために敢えて憎まれ役を演じなければならない時がある…。

それも子を愛するが故に…。

私はクロエを愛しいと思っている。

愛しいが故に悪役を演じて憎まれなければならない。

私が悪役を勝ち取り、クロエを降板させなければならないのだ。

そして、この可能性が閉ざされた世界からクロエを永久追放にさせていく。

……。

……。

…。

決着の時だ。

クロエ。

お前の世界を私は壊していく。

「御館様…」

「どうした？」

クロエは膝に心地良く頭を押しつけながら私の顔を見上げる。

「この穏やかな時がずっと続けばいいですね…」

「そうだな…」

……。

「私は御館様とずっとこうしていたいです…」

……。

「それは出来ない…」

「えっ…」

空気が凍り付く。

また空気を読まないことを言ってしまったな…。

つくづく私は空気が読めないようだ…。

だが、この空気は壊されなければならない。

クロエは起き上がって縋るような目で私を見てくる。

その目には哀しみが陰ってきている。

……。

今までのどの痛みよりも堪えてしまうな…。

だが、痛みに耐えてなければ未来を切り開くことが出来ない。

「私は御館様ではない。黒騎士ロースだ」

「何を冗談言ってるのですか！私をからかっておいでなのですか！」

クロエの目が険しくなってきている。

憎まれてこそ悪役の本分なのだ。

私は見事演じきってみせようぞ。

「私はいつだって本気だ。クロエよ。夕食の味噌汁は実に美味だった。あれはお前が作ったのか？」

「当たり前です！私はこの屋敷の食事係なのですから…」

私はため息を付いてみせる。

「それは嘘だな…」

「どういう事ですか！」

私はあの味噌汁の味を知っている。

……。

『これはみそ汁という物です。我が故郷では一番のおかずとして食されているものですよ』

……。

『本当！味噌の味付けをしたのは私なんだよ！もっと褒めてよ！主！』

……。

忘れるはずが無い。

「あの味噌汁の味はエルとアビスのものだ。お前は味噌汁を作ってはいない」

この世界はクロエの持つ情報に基づいて構成されているものだ。

当然、クロエが認知した味覚も情報に含まれる。

クロエはエルとアビスが作った味噌汁のことを知っているし、食べたこともあるのだろう。

だが、自分で味噌汁を作ったことは無いのだ。

自分で作った味噌汁の味という情報が無かったからこそ、エルとアビスの味噌汁の味という情報を利用して補完したというわけだ。

それがこの世界の矛盾の一つだ。

「違う！私はこの屋敷の食事係で…その…」

「それとこの部屋はこの屋敷の部屋ではないな…」

私は畳みかけるようにクロエに言う。

「それは…」

「屋敷とこの部屋の材質が違う。匂いも違う。お前はおそらくこの屋敷の部屋の中身を知らないのだろう…」

そう、クロエはこの屋敷の部屋を知らないのだ。

だからこそ、自分の知っている部屋をこの屋敷の部屋に組み合わせたのだ。

「それとこの屋敷の廊下はどこまで続いている?」

「廊下…」

私はクロエに続くように廊下を歩いていたが、出迎えてくれたはずの使用人には一人も擦れ違わなかった。

さらにどこまで歩いても同じ庭や池を繰り返し見かけるばかりだった。

そして、廊下の先が果てしなく遠くまで続いていて行き止まりが無かった。

「お前はこの屋敷の構造や様子を把握していないのだろう。ましてや食事係でもない。推察するにお前はこの屋敷には住んではいなかったと考えられる…」

「違う!違う!私はこの屋敷に住んでいた!毎日、御館様とレテシア様の世話もしてきたの!」

……。

残酷な真実を告げるのは心苦しいものだ…。

だが、まだ最大の矛盾点を残している。

これはさすがに堪えるかもしれないな…。

「最後に矛盾しているのは私だ。私、いや、御館様はこの屋敷には既に存在していなかったはずだ…」

クロエは身体を震わせている。

「それだけは有り得ない…。御館様はレテシア様と…一緒に…」

「確かお前は言っていた。エルとアビスはヴァルキリア帝国のヒュプノス殿下の密偵として働いていると…。さらにブリュンスタッド王国との戦が終わるまで帰ってこないのだと…」

私はブリュンスタッド王国滅亡時に戦場で相対し、主従関係を結んだ。

そして、そのままヴァルキリア帝国へと移住し、家族のように常に離れることなく過ごしていた。

その最中でエルがヒュプノスに人質として捉えられるという悲しい出来事もあった。

だが、まだ私の側にはアビスがいてくれていた。

「この御館様の鎧はアビスから頂いたものだ。お前も言っていただろう。これは代々御館様が装着するもので今はアビスが管理しているのだと…」

クロエは耳を塞いで沈黙している。

「アビスがヴァルキリアに行っているのならば、御館様の鎧はこの屋敷には無いはずだ。つまり…」

「それ以上言わないでぇえええええええっ！」

……。

「御館様は既に亡くなっていたのだ」

「いやぁあああああああああああああっ！」

……。

クロエは絶望に打ち拉がれるようにして項垂れた。

「お前もこの屋敷にいなかった。本当にいたのはお前ではなく、エルとアビスだったのだろう。そして、この部屋はおそらく、この屋敷の離れにあるはずだ。なぜなら、この部屋は…」

私は言葉は濁した。

さすが私も精神的に参ってしまった。

当事者であるクロエはもっと精神的負担が大きいはずだ。

食事当番もクロエではなく、エルとアビスだったのだろう。

だが、あの食事の雰囲気は真に迫っていた。

おそらくクロエはエルとアビスに夕食に誘われたことがある。

だからこそ、あの食事風景を描写することが出来たのだ。

だが、問題は私の今いる部屋だ。

この部屋は幽閉もしくは軟禁するための場所。

……。

すなわち座敷牢だ。

クロエがこの部屋しか知らないということは…。

……。

もしかするとだが、まだ真実が隠されているのかもしれない。

いや、何となくだが推測は出来る。

だが、それはクロエにとって余りにも残酷な真実だ。

出来れば、私の推測が外れて欲しいと思う。

……。

不意に部屋の戸が開く音が聞こえた。

「何か悲鳴が聞こえたと思えば、クロエが泣いているではありませんか。御館様が泣かせたのでしょうか？」

部屋に入ってきたのはレテシアだった。

……。

そういえば、もう一つ矛盾点があったな。

いや、見つかったというべきなのか…。

「大したことは無い。少し説教しただけだ」

「しかし、女を泣かせるのは良くありません。私からも少し御館様にお灸を据える必要があるようですね…」

私はクロエを庇うようにしてレテシアと向かい合う。

クロエの夢の世界で私とクロエ以外で唯一意志を持って動いている人物がもう一人存在していたのだ。

本来、夢で造り上げられた登場人物は表面上では生きているように演じているようだが、実は違う。

夢の創造主の情報を基に書き上げた脚本に沿う自動人形だ。

この夢の世界に迷い込んで最初に出会ったのはクロエではなくレテシアだった。

私はレテシアに連れられて、この屋敷に来たのだ。

だが、それだけではまだレテシアが自動人形では無い証拠とはならない。

確信したのはレテシアが私とクロエの部屋へと乗り込んできた時だ。

この部屋はクロエの意志に反して私が選んだ部屋だった。

クロエの意志から外れたということは創造主の脚本に書かれていないことを演じたということになる。

その脚本に書かれていない行為で選んだ部屋に脚本通りに動くはずの自動人形が訪ねてきた。

つまり、その自動人形もまた脚本に書かれていない行動を取っていたことになる。

「覚悟はいいですか、御館様…」

レテシアは艶やかな笑みを浮かべながらも凄まじい殺気を放ってきている。

「覚悟はしていない…」

「往生際が悪いですよ…」

私は吐き気を覚えていた。

今まで呼んできた脚本の中でも最も醜悪で悪趣味なのものだ。

「いい加減に正体を現すがいい。レテシア、いや…」

……。

この茶番劇の脚本家であり、矛盾に満ちた世界の真なる創造主。

……。

「アルゴス」

……。

「レテシア様…」

クロエは呆然としていた。

「嘘ですよね…」

狼狽しているクロエにレテシアは微笑みかける。

「あら、ばれてしまいましたか…」

「レテシア様?」

レテシアは微笑を浮かべたまま、クロエに残酷な言葉を告げていく。

「ふふっ、このまま生ぬるい夢に浸れば、快楽の中で安らかに死なせてあげられたのに残念ですわ…」

「レテシアさまぁあああああああっ！」

クロエの絶望の悲鳴が夢の世界に響き渡っていく。

レテシアはクロエが絶望に打ち拉がれている様子を楽しげに見つめていた。

……。

私は馬鹿で臆病で女には弱いが、今回は珍しく脳血管が破裂するほどに頭を使った。

付け加えて私の弱点も限定封印させてもらうとしよう。

私は生まれて初めて殺したいほどに憎い相手に出会えたのだ。

クロエを悪役として抜擢し、思うがままに演じさせてきた醜悪なる脚本家。

貴様はクロエの思い出を面白半分に踏みにじってきたのだ…。

アルゴス。

……。

私は貴様から必ずクロエを救い出してみせる。

……。

そして、私の手で…。

……。

必ず貴様を…。

……。

殺す！

第52話：Aus tiefer Not schrei ich zu dir

私は六角棒をレテシアもといアルゴスに向ける。

六角棒はクロエとの戦いで使用して情報として認知されていたから夢の世界でも有効だ。

「今度は丸焼きでは済まさせない…」

私は必ず殺すと決めたのだからな…。

「ふふっ、お目出度いですね。そちらこそ現実世界と同様に私を何とか出来ると本気で思っておいでですか？そうでしたら滑稽過ぎて楽しいですね…」

アルゴスから強大なる殺気が吹き荒れてくる。

ぐっ！

空間が陽炎のように揺らいで見えてくる。

「ここは夢の世界。そして、私は創造主、すなわち神なのです。矮小な人間如きが神に勝てるとお思いなのですか？」

「御館様…」

私は後ろで座り込んでいるクロエを見る。

お前とはほんの僅か過ごしただけだったが、本当の家族のように思

えて楽しかった。

「心配するな。私がお前を必ず助ける」

「御館…様…」

私は再びアルゴスに視線を移す。

……。

いよいよこの最悪の茶番劇に幕を下ろす時が来た。

この脚本家を倒して、偽りの世界を崩壊させる。

「ふふっ、この世界では私は全能なる神。それを思い知らせてあげましょう。火よ、土よ、水よ、風よ、諸々の全てよ…」

アルゴスの周囲の空間が水を掻き混ぜているかのように歪んできている…。

何だ、この途方にもない威圧感は！

「そんな、まさか…」

クロエもアルゴスの様子に震えている。

そして、アルゴスが唱えている呪文は…。

『火よ…土よ…水よ…風よ…諸々の全てよ…集え…我が身…神の…御身とならん…』

クロエが唱えていた神降ろしの呪文と同じだ！

「きゃぁ！御館様！」

私は咄嗟にクロエを抱き上げて、屋敷の外へと飛び出す。

外に飛び出して目に映ったのは幻想的で美しい桜の木々だった。

東洋に伝わる最も美しい木々の一つと言われる桜だ。

僅かの時に咲き誇り、散っていく様は儚げな美しさがあると言われている。

これもクロエの情報に存在する光景なのか…。

緊迫した状況のはずだが、何故か目を奪われてしまった。

「集え！我が身！神の御身とならん！」

瞬く間に稲妻が降り注ぎ、屋敷を破壊されていく。

ぐっ！

吹き荒れる熱気と爆風に私は思わず後ずさってしまう。

「レテシア様の神降ろし…」

クロエは唖然として、燃えさかる屋敷を見ていた。

なるほど、アルゴスは確かにこの世界の法則に逸脱しない限りでは全能のようだな…。

炎上している屋敷から人影が見えてくる。

……。

東洋に伝わる鮮血の如く真紅に染め上げられた鎧。

全てを威圧する鬼神の如きの仮面。

鎧と同様の東洋に伝わる背丈の倍はある薙刀。

「我が名はゲーラス！」

真紅の鎧は薙刀を払い、身に纏う炎を掻き消していく。

……。

夢の世界とは言え、もしかするとケール以上なのかもしれない…。

身体中が震えていて止まらない。

だが、退くわけにはいかない…。

私の後ろにはそれ以上に震えている女がいるのだ。

「さて、現世に別れを告げましたか？御館様…」

「貴様こそこの世から永久追放してやる」

互いに獲物を同時に構える。

「ふふっ、畏まりました。では、冥府へとお送り致しましょう」

「送られても途中下車させてもらうわ！」

一瞬で互いの間合いに入り、私の六角棒とアルゴスの薙刀が交差していく。

鬼神の仮面が威圧的に薙刀を振るう姿は何とも恐いものだ…。

それに斬撃が恐ろしく速く、そして、重い…。

ぐっ！

打ち合う度に鎧に亀裂が走っていく。

……。

アビスは確か言っていた。

かつてクロエがアルゴスを呼び寄せたことでパラディスムは壊滅寸前まで追い遣られたと…。

そして、御館様とレテシアが何とか食い止めたのだと…。

何とか食い止めた。

つまり全力を尽くして止めたのだ。

アルゴスはパラディスム歴代最強の頭領と呼ばれたレテシアの実力を知り尽くしているということになる。

今目の前にいるレテシアは現実のレテシアの情報に基づいて存在している。

つまり今のアルゴスはレテシアと同等の実力を持っているということになる。

神降ろしが出来たことが何よりの証拠だ。

「どうされたのですか？さあ、貴方の舞い散る姿を見せてください」

「がぁっ！」

アルゴスの遠心力の乗せた一撃を私は何とか受け止めるが、衝撃までは受け止めれず、弾き飛ばされてしまう。

弾き飛ばれていく私の身体は何本もの桜の木を減し倒していき、地面に激突していく。

「がはっ！」

私は吐血しながらも必死に立ち上がろうとする。

何て事だ…。

創造主が持つ情報で制限された世界故にいつもの馬鹿力を発揮することも出来ない…。

桜の花びらが散る幻想的な光景の中、血に飢えた鬼が私を殺そうと迫ってきている。

「桜は散るからこそ儚く美しい。貴方もそうありたいでしょう…」

確かにそれも風情があって良いのかもしれない。

だが、私は断固として否だ。

「私は美しく死ぬよりことよりも醜く生き延びることを選ぶ。私は人だ。桜ではない。醜さこそが人の美しさだと私は思っている…」

綺麗なだけでは人は生きてはいけない。

私は浅ましい欲望に縋って生きているのだからな…。

醜くても結構だ。

そうでなければ、人生を楽しむことは出来ない。

私は六角棒を杖にして立ち上がる。

「醜くなる前に摘み取るのも慈悲というものでしょう。血桜…」

アルゴスは薙刀を横一閃に払ってくる。

私の生存本能が告げる。

地面に伏せろと…。

私は地面に伏せる。

背後にあった桜の木々が一斉に切り飛ばされていく。

あの桜の木々はまだ咲き誇ってから間も無いはずだ。

「そう思いませんか？御館様…」

「桜は散らされるものではない。懸命に咲き誇った後に自然に散っていくものだ」

アルゴスは桜吹雪の中を猛然と駆け抜けて私に迫ってくる。

「人も桜も神の前では等しく散る定めです。クロエも実に美しく咲き乱れてくれました。後は散るだけでしょう」

「クロエは桜ではない！もし、桜だとしても散るのはクロエ自身の意志で行うものだ！貴様の手で散らしていいものではないぞ！」

アルゴスの凄まじい連撃に私は何とか応戦する。

「貴方の吹き散らす真紅の花弁は桜にも勝る美しさですね。貴方は実に美しいです」

アルゴスの薙刀が私の脇腹を掠めていく。

「下手物に美しいと褒められても微塵も光栄ではないわ！」

私は何としてもこの邪神に打ち勝たねばならないのだ！

私はアルゴスの顔面に向かって六角棒を突き出す。

だが、アルゴスはその六角棒を素手に鷲づかみしてくる。

受け止めただと！

「貴方は美しくあるよりも醜くありたいのですか？醜き者は枯れ果てて土に還るだけの価値無き存在だというのに…」

私の腹に熱い物が貫かれる感触がした。

アルゴスの薙刀が私の脇腹を抉っていたのだ。

「ごほっ！」

私の吐いた血がアルゴスの鬼の仮面にこびり付いていく。

「御館様！」

クロエが駆けつけてくるのが目に留まる。

「来るな」と言いたいところだが、喉には血が溢れていて上手く声が出せない。

「あら、寂しくなったのですか、クロエ。では、暫し時間を与えてあげましょう…」

「ごほっ！」

アルゴスは私をクロエのいる場所へと突き飛ばしていく。

「御館様！しっかりしてください！」

クロエは血まみれになった私を抱き起こしてくる。

私は涙に濡れているクロエの頬に手を添える。

自分が大丈夫であることをクロエに伝えるために…。

女を泣かせてしまうとは私もまだまだ修行が足りないようだ…。

「お願い！死なないで！もう私を置いていかないでください…」

……。

そうか…。

クロエは思い出したのだな…。

「懐かしい光景ですね。クロエ、本当の御館様が息を引き取られるときもそのように泣きすがっていましたね…」

アルゴスが涼やかな声を出して、私とクロエの元に近づいてくる。

「レテシア様…」

「ふふっ、レテシアもさぞ貴方を恨んでいることでしょう。なぜなら…」

世界は暗転していく。

……。

……。

……。

……。

…。

光が灯され、世界が再び映し出されていく。

それは多くの兵士達がアルゴスに立ち向かっていく光景。

クロエの夢で見た平和なヨツンヘイムではない。

屍と破壊された家屋の破片が大地を埋め尽くし、死の嵐が吹き荒れているヨツンヘイム。

「ありったけの爆薬を使え！何としても食い止めるのだ！里からこの化け物を出してはならん！」

兵士達を指揮しているのは漆黒の鎧を着ている男、正真正銘の本物の御館様だ。

「御館様！ここは私が食い止めます！」

「レテシア！」

必死に応戦している兵士達の前に軽装の鎧を着た女性が駆け出てくる。

この女性もまた正真正銘の本物のレテシアだ。

「火よ！土よ！水よ！風よ！諸々の全てよ！集え！我が身！神の御身とならん！」

レテシアの身体に稲妻が降り注いでいく。

「我が名はゲーラス！」

稲妻の中から真紅の鎧に身を固めたレテシアが姿を現し、アルゴスの元へと駆けていく。

アルゴスは多量の触手をレテシアに向かって一斉に伸ばしていく。

「下郎め！クロエを返してもらうわ！血桜！」

触手はまとめて薙ぎ払われ、レテシアはアルゴスの本体へと駆け抜けていく。

「クロエハ我ノ器ダ…故ニ離サヌ…消エロ！」

アルゴスは多量の触手の先端から閃光を発射し、さらに全身に付いている碧眼から熱線を放出してくる。

「くっ！夜叉狩り！」

レテシアは薙刀を振り下ろし、無数の真空破を発生させて閃光と熱線の嵐を押しのけるが、動きを止めてしまう。

「ぎゃああっ！」

「目がぁ！目がぁあ！」

「身体が熱いぃいいいいっ！」

兵士達はアルゴスの嵐のような攻撃を回避することが出来ず、次々と倒れていった。

「みんなっ！」

兵士達が瞬く間に死んでいく光景にレテシアは唖然としていた。

「ハハハハハッ！人トハ良イ声デ鳴クモノダナ。汝ハドンナ声デ鳴イテクレルノダ？」

アルゴスは戦場に響く悲鳴に陶酔し、嘲笑していた。

「アルゴス！貴様！血ざく…」

「苦シイ…助ケテ…嫌ダ…嫌ダ…死ニ…タク…ナイヨ…御館様…レテシア様…」

アルゴスからクロエの声が響いてくる。

「クロエぇえええっ！」

「愚カナリ…」

レテシアはクロエの声に気を取られて、迫ってくる閃光の嵐に気づいていない。

「レテシアぁあああああああっ！」

……。

血の花弁が咲き誇る…。

「お前ともあろう者が油断したな、レテシア…」

「御…や…かたさま…」

御館様はレテシアを抱き締める。

レテシアは御館様の背中に腕を回して気づく。

背中には塞き止めることが出来ない程の血が流れていることを…。

「御館様！」

「涙はクロエを取り戻したときに流せ！今は涙を溜めて力に変えろ！」

「冥府デ再ビ契リヲ結ブガイイ…」

抱き合う二人にアルゴスは容赦無く閃光を放ってくる。

閃光が御館様の兜に掠めて砕けていく。
御館様の顔は前髪で隠れてよく見えなかった。
「退くぞ！レテシア！」
御館様はレテシアを抱きかかえて閃光の嵐が届かない場所へと移っていく。
「よく聞け、レテシア。これから私がアルゴスに近づいて動きを止める。お前は動きが止まったアルゴスに止めを刺すのだ！」
「そんなことをすれば御館様までが…あぁ」
御館様はレテシアの身体を強く抱き締めた。
「お前と共になれたことが私の生涯最良の出来事だった。里のみんなを、エルとアビスを、そして、クロエのことを頼んだぞ…」
「御館様…」
呆然としたレテシアを離し、御館様は兵士達を虐殺しているアルゴスを見据える。
「アルゴス、貴様の好きにはもうさせはしないぞ！」
御館様は閃光を嵐を吹き荒らすアルゴスに向かって一直視線に走っていく。
「近寄ルナ！」

アルゴスは迫ってくる御館様にあらん限りの攻撃を放っていく。
しかし、御館様は閃光に貫かれようと熱線に焼かれようと止まることは無かった。

「汝ハ本当ニ人ナノカ！」

アルゴスは怯み、ついに本体への接近を許してしまう。
御館様は刀を抜き、無数の碧眼の中で一際大きいものに突き立てていく。

「ギャアアアアアアアッ！」

「これで暫し動けまい！レテシア！今だ！」

御館様は立ちつくしているレテシアに声を上げる。

「レテシア！」

「はい！今暫し、お待ちを！」

レテシアは薙刀を構えて力を溜めていく。

「死ニタクナイ…助ケテ…レテシア様…」

「クロエ！」

アルゴスが再びクロエの声色を使ってレテシアを惑わしていく。

「惑わされるな！レテシ…ぐあっ！」

刀を突き立てている御館様に触手が次々と絡みついてくる。

「御館様！」

「早く…やるのだ…レテシア！」

「汝ノ愛シイ者ヲ犠牲ニスルノカ？レテシア…」

触手は御館様から流れている血を啜っていく。

「ヤッテミルガイイ！クロエハ返シテヤル！代ワリニコノ者ヲ頂コウ！ヒャハハハハハッ！」

「出来ない…。私には御館様を討つことは…出来ませぬ！」

レテシアの薙刀から力が消えかかっていく。

「ヒャハハハハハッ！人ノ悲シム姿ハ実ニ美シイ！コレダカラ人ヲ殺メルコトハ止メラレヌ！ハハハハハハッ！」

アルゴスの嘲笑が滅びようとしているヨツンヘイムに響き渡っていく。

誰もが絶望し、滅びの時を待とうと諦めようとした時だった。

「レテシア！貴様はそれでもパラディスムの者なのか！」

「御館様…」

触手に全身を貫かれ、いつ息を止めてもおかしくないはずの御館様が絶望に打ち拉がれている全ての者の耳に届くほどの声を上げていた。

「レテシア・パラディスム。お前は頭領として里の皆の未来を守らなければならない。未来ある子供であれば尚さらのこと…」

「御館様…」

……。

「涙を溜めて力に変えろ。それを私への手向けにしてくれ…」

……。

「レテシア・パラディスム！いざ……参る！」

レテシアは薙刀に力を込めていく。

「そうだ。それでいい…」

「止メロ！止メロォオオオオオオオオオッ！」

御館様にさらに大量の触手が群がっていく。

「ごほっ…ふっ…さらばだ…レテシア…」

「くぅ……秘技…修羅雪！」

レテシアの薙刀の先端から巨大な波動が放出され、御館様ごとアルゴスを呑み込んでいった。

「ギャアアアアアアアアアアアアッ！」

アルゴスの断末魔の悲鳴が戦いの終わりを告げた。

……。

……。

……。

…。

「私はいったい…」

クロエは目を覚まし起き上がろうとしたとき、何かが身体にのし掛かっていることに気づく。

それは全身血まみれになっていた御館様だとクロエはすぐに気づいた。

「御館様！しっかりしてください！」

「良かった…元気で…クロエ…」

御館様は涙に濡れているクロエの頬に手を添える。

「私よりも…御館様が…どうして…こんなことに…はっ！」

クロエは思い出す。

エルとアビスが御館様を可愛がっている様子に嫉妬してしまったこと。

少しでも御館様に振り向いて欲しいがために禁断の秘術神降ろしを使ってしまったこと。

そして、自分のせいで里が壊滅寸前に陥ってしまったこと。

……。

「クロエ…過ちを…忘れるな…」

「御館様…」

御館様はクロエの頬をさする。

「糧にしろ…生きろ…全てを…受け止め…ろ…クロ…エ……」

「御館さまぁあああああっ！うあああああああああああっ！」

死臭漂う中でクロエは御館様の亡骸を抱き締めていつまでも泣き続けた。

……。

……。

……。

…。

「ご免なさい、クロエ。貴方を救うためにはここで匿うしか無いのです。私は歴代最強と言われても大切な人を守ることが出来無い無力な頭領。私は貴方にいくら恨まれても構わない。だから、許して、とは言いません…」

レテシアは人形のように何も反応しないクロエを抱き締める。

「いつか貴方の全てを受け止めてくれる方が現れることを私は祈ります…」

レテシアがそう告げて部屋を後にする。

……。

「私は御館様だけでいい…」

座敷牢で一人になったクロエはそう呟いた。

……。

……。

……。

…。

「ヴァルキリアが襲撃してきたぞ！」

「エル様が我等を裏切ったのか？」

「あれはまるで鬼だ…」

襲撃してくるヴァルキリア正規兵。

常人の何倍もの力を持っている狂戦士にパラディスムの兵士達は成す術もなく命を散らせていた。

「なぜ私達を裏切ったのですか！エル様！やはり貴女様とアビス様だけをヴァルキリアに行かせたのは間違えだったのです！私が行けば、こんなことには…」

「今はそんなことを言っている場合ではありません！エルは薬を…魔法科学の力で心を奪われています！ここは私がエルを食い止めます！貴方は早くこのことをアビスに伝えるのです！」

炎上するヨツンヘイムの中、エルはレテシアとクロエの前に佇んでいた。

「私も戦います！今の私ではあれば、エル様でも…」

「なりません！貴方はアビスに伝えるのです！これは頭領としての命令ですよ！」

レテシアはクロエを薙刀で弾き飛ばす。

「レテシアさまぁあああっ！」

……。

……。

……。

…。

「御館様、私はいつだって無力です…」

……。

「レテシア様がエル様と戦っているときでも何も出来なかった…」

……。

「私はエル様とアビス様が妬ましい…」

……。

……。

「妬ましく思う自分が嫌になってしまう…」

……。

「弱い自分が憎い…」

……。

「憎くて消えてしまいたい…」

……。

「そんな醜い私を受け止めてくれる相手なんていない…」

……。

「誰も私を受けて入れてくれるはずが…」

「ならば、私が受け入れよう…」

……。

……。

……。

…。

私はクロエを抱き締める。

「御館様…」

「誰もが醜いものを持っているのだ…」

……。

「私は自分が嫌いです…」

「そんな自分嫌いなお前を御館様を救ったのだ。なぜだと思う？」

……。

「お前の醜い部分を含めて愛していたからだ…」

「醜い私を愛してくれた？御館様が…」

……。

「誰もが醜いものをもっている。そして、自らの醜さを受け止めることで相手を思いやることができるのだ。御館様の言葉を思い出せ…」

「御館様の言葉？」

……。

『クロエ…過ちを…忘れるな…』

……。

『糧にしろ…生きろ…全てを…受け止め…ろ…クロ…エ……』

……。

「あっ…過ちを忘れるな…糧にしろ…生きろ…全てを…受け入れろ…」

「それが答えだ…」

……。

「あぁ…あああああ…」

「受け入れる強さを持つまで私がお前を支える…」

泣きじゃくるクロエを私はあやすように抱き締めた。

……。

世界は再び暗転した。

……。

……。

……。

……。

…。

「受け入れる必要はありません。憎しみも哀しみも全て花のように散らせばいいのです…」

「アルゴス…」

人の命を花のように散らせる邪神。

「レテシア様、いえ、アルゴス。御館様には手出しはさせない…」

クロエはいつの間にか少女の姿から現実世界と同様の大人の女性になっていた。

「私は今まで自分のことが醜いと思っていた。嫌いだった。憎かった。けど、こんな私を御館様は支えてやると仰ってくれた。だから、私は強くなりたい。強くなって御館様に誇れるような自分になりたい。そして、御館様に愛されるようになりたいんだ！」

「だまりなさい。夜叉狩り」

無数の真空破がクロエに迫ってくる。

「カタストロフ・サン未完成超縮小版！」

漆黒の小球が真空破とぶつかり合って相殺する。

「クロエには…もう手出しは…させないぞ！アルゴス！」

私はふらつきながらもクロエを庇うようにアルゴスの前に立つ。

「まだ戦うというのですか？もはや立っているのもやっとなのでしょう…」

「黙れ…私は貴様を必ず殺すと誓ったのだ！」

この邪神を滅ぼさねば、クロエの未来が閉ざされてしまうのだ。

この情報で規制された世界の中で私が使える最強の技でアルゴスを

倒す！

「カタストロフ・サン未完成中球版！」

私は漆黒の太陽を居城以上の大きさに止めて放つ。

「その技は見せていただきました。カタストロフ・サン未完成中球版」

馬鹿な！

「見様見真似は私の方が得意ですよ、御館様…」

アルゴスも私と同様の大きさの漆黒の太陽を形作って放ってきたのだ。

二つの太陽はぶつかり合い、凄まじい爆発を起こす。

「きゃぁ！」

クロエが爆風に巻き込まれて、弾き飛ばされていく。

「クロエぇえええええっ！」

私はクロエの元へと飛び立っていく。

「御館様ぁあああああっ！」

クロエが私に手を伸ばしてくる。

私はクロエに応えるように手を伸ばす。

お前は私が必ず救うと決めたのだ！

そして、お前を支えると約束したのだ！

後少しでクロエの手に届く…。

「がふっ！」

……。

「敵に背を向けると無礼ですよ…」

背後からアルゴスの声が響いてくる。

「ごほっ…アル…ゴス…」

私の胸から刃が突き出ている…。

そうか…。

背後からアルゴスに刺し貫かれたわけか…。

「御館様ぁあああああああああっ！」

クロエをまた泣かしてしまったな…。

女をこうも泣かせるとは甲斐性にもほどがある…。

「美しいですよ、御館様。人ヲ散ラスノハ最高ニ楽シイモノダ、アハハハハッ！」

……。

アルゴス…。

私は絶対に散らされたりはしないぞ…。

貴様が私の手で散っていくのだ…。

花としてではなく…。

塵のように…。

第53話：Wachet auf, rufft uns die Stimme

私の胸は今アルゴスの薙刀に貫かれている。

不幸中の幸いで心臓は僅かだが逸れている。

だが、それでも致命傷には充分のものだ。

相手が通常の人間であるならばな…。

「アハハハハハッ！何か言い残すことは無いですか？御館様…」

「ごほっ…言い残す？私は…生き延びる！」

私は後ろに手を回して、薙刀の柄を握る。

「そのために…貴様を…殺す！いや、散らす！」

無理矢理、薙刀を背中から引き抜き、そのまま薙刀ごとアルゴスをぶん投げていく。

「くっ！まだ、それほどの力を残しているというのですか！」

アルゴスは宙返りして地面に着地する。

「大丈夫ですか！御館様！」

クロエが駆け寄ってくる。

「問題無い…」

「何を言っておられるか！胸を貫かれたのですぞ！大丈夫であるはずがない！」

クロエは涙目で私を睨んできている。

当初は私を憎悪の目で見ていたというのに随分と変わったものだ。

……。

ふと妙案を思いついた。

「クロエ、お前に頼みがある…」

「何でしょうか、御館様」

これがおそらくアルゴスとの戦いで有利に働くはずだ…。

「何があろうとも私が絶対に死なないことを祈っていてれ」

「敵を前にして何を戯れているのですか？」

真空破が私とクロエに目掛けて飛来してくる。

私はクロエを抱き上げて回避していく。

胸を貫かれたのに随分と動けるものだ。

……。

やはり、そういうことか…。

「言われなくとも祈っていますよ！」

「言い直す。首と胴が離れようと八つ裂きになろうとも私が絶対に死なないと信じてくれ」

私はアルゴスが次々と放ってくる真空破は回避しつつクロエに話しかける。

「わ、分かりました！信じています！」

私はクロエを降ろしてアルゴスと向き合う。

「仕切直しだ…」

「いい加減に貴方の花を散らすのも飽きました。もう枯れてくださいな…」

アルゴスは瞬時に間合いを詰めてくる。

私は咄嗟に身体をずらし、肩を指し貫かれる。

「ぐっ！」

「よく避けれましたね。ですが、今度こそ終わりです！」

アルゴスは肩を貫いた薙刀をそのまま心臓の位置まで強引に切り刻もうと力を入れてくる。

させるか！

私は薙刀の柄を持って引き抜こうとしたが、アルゴスの膂力は凄まじいものだった。

まさか、力が増しているのか…。

「どうですか？私は時間が経てば経つほど強くなっているのですよ。それも全て貴方のお陰です…」

「ぐっ！どういう意味だ…」

薙刀の刃が心臓の位置まで近づいてきている。

「貴方は私の体内にいるのです。すなわち貴方は知らず知らずに私の養分に、糧となられています。私は貴方の血肉を吸い上げて力が増しているのですよ…」

「ぐあっ！」

薙刀の刃が心臓に触れてきた。

このままではやられてしまう！

「さあ、今度こそ死に…がぁ！」

「御館様は殺させない…」

クロエ…。

アルゴスはクロエに背後から短刀を突き付けられていた。

「クロエ…貴様っ！」

「あぐっ！」

アルゴスは手を振るい、クロエを弾き飛ばす。

「ヨクモ我ニ傷ヲ負ワセタナ。万死ニ値スルゾ！」

アルゴスは背中の短刀を引き抜き、倒れているクロエに近づいていく。

「死ネ」

アルゴスが倒れているクロエに短刀を振り上げる。

「させるかっ！」

私は倒れているクロエの前に立ち、自らの肩のアルゴスの短刀を受ける。

「ぐっ…うっ！」

私は鎧に付いている脇差しを抜いてアルゴスの胸を貫いていく。

「ガハッ！貴様ッ！」

「肉を切らせて骨を断つだ！」

私は拳を振り上げて、思い切りアルゴスの顔面に拳を叩き込む。

「グハッ！」

顔に付けている鬼神の仮面が弾け飛び、アルゴスは身体をよろめかせた。

「オノレェエエエッ！」

アルゴスの素顔はレテシアのそれではなかった。

無数の目で埋め尽くされた奇怪で醜悪な素顔。

現実世界で見たアルゴスの本体そのものだ。

「貴様に相応しい面構えだな…」

「何故、汝ハマダ戦エル！人ナラバ既ニ死ニ絶エルハズダ！」

確かに私の身体は既に限界まで来ている。

だが、ここは夢の世界。

肉体よりも精神に作用される世界だ。

私の心が折れない限りどれほど傷を負おうと死にはしない。

それに何よりも…。

私は涙目で見守ってくれているクロエを見る。

彼女が祈っていてくれているからだ…。

私が絶対に死なないと信じている限り、私は死なない。

なぜならば、それがこの世界の法則なのだからだ。

情報で無数の組み合わせから成り立つ夢の世界。

だが、真価は実はそうではない。

思い込みの強さで摂理をねじ曲げることが出来る点が夢の世界の真価だ。

酸素が無い水中の中でも長時間生き延びることが出来ると強く思えば、実現できる。

超重量の物を持ち上げれると思いこめば、力が衰えた老人でも実現できる。

保存している視覚的情報を逸脱していない限り、いくらでも可能となるのだ。

「私は貴様を殺すまで死なない。」

私は六角棒を持ってアルゴスと向き合う。

……。

だが、私の最強の力は別だ…。
私は元々最強の力に対して懐疑的だった。
今でもそうだ。
常識外れにもほどがある力なのだ。
その常識外れの力を使うことが出来ると思い込むのは並大抵の精神力では無理だ。
生き延びることについては問題無い。
私の身体は生きる執念で出来上がっているからな。
だが、それではこの邪神には勝てない…。
まだ決め手が欠けているのだ…。
せめて、少しだけでもいい…。
この世界の法則が僅かでも乱れれば…。
……。
「死なないだと？お前はいずれ私の一部となるのだ。それを思い知らせてやろう…」
アルゴスの口調が変わった。

いったい誰の口調なのだ？

アルゴスは兜を脱ぎ捨てた。

その瞬間、肩まで切り揃えた輝くような黄金の髪を靡かせる絶世の美女の顔となっていた。

……。

澄み切った黄金の瞳。

瑞々しい蜜柑のような橙色の口紅。

健康的で美しい白い肌。

……。

私はクロエを見る。

彼女は首を横に振った。

この女性はクロエの情報に存在するはずが無い絶世の美女。

アルゴスが持っていた薙刀が煌びやかに装飾された巨大剣へと変化していく。

「セイントブレイド！」

アルゴスは巨大剣を振り下ろし、光の奔流を私の放ってくる。

この技にも見覚えがないぞ！

私は飛び立とうとするが、傷が疼いて動きが鈍ってしまう。

見知らぬ美女の顔と技を見たことで私の精神に綻びが生じてしまったのだ！

今まで耐えていたはずの傷が凄まじい激痛を持って私を苛んでくる。

私は光の奔流をまともに受けてしまった。

「ぐはぁああっ！」

装着していた鎧が砕け散り、私は遠くへ弾き飛ばされてしまう。

一瞬の心の緩みが思い込みの力をこうも容易く崩してしまうのか…。

私は地面に叩きつけられしまい、激痛で身動きが出来なくなってしまった。

「御館様！くっ！昇竜炎舞！」

クロエは弾き倒れている私に追い打ちするべき迫るアルゴスを塞き止めるように炎の竜巻を放つ。

「ふっ、その程度の技で私を止められのか？見くびるな！」

アルゴスは巨大剣を振るっただけで炎の竜巻を掻き消してしまう。

クロエはそれでも怯まずに刀を振るってアルゴスに応戦しようとす

る。

「御館様は私が守る！」

「身の程を知れ！」

アルゴスが振るう巨大剣で刀は砕かれ、クロエは剣圧で弾き飛ばされてしまう。

「きゃあああっ！」

「クロエぇえええっ！」

私の身体よ！

「動けぇえええええええええええええっ！」

地面に叩きつけられたクロエに巨大剣を振り上げるアルゴス。

「我が剣の錆びとなれ！」

アルゴスの巨大剣が振り下ろされる。

「クロエぇえええええええええええええっ！」

「御館様！」

私は一瞬光となって駆け巡り、クロエを庇うように抱き締める。

「がおぁあああああっ！」

私の背中から熱いものが吹き出してくる。

「馬鹿な！先ほどの動きはいったい…」

私の世界の法則から外れた動きに驚愕しているアルゴス。

隙ありだ！

「クロエから…離れろっ！血桜！」

私は六角棒を横一閃させる。

「ぐあああああっ！」

横一文字の巨大な真空破がアルゴスを弾き飛ばしていく。

「見様見真似は…私の専売特許だ…。覚えておけ…ごほっ！」

「お…館…様…お顔が…」

そう言えば、先ほど攻撃を喰らったときに鎧が大破してしまったのだったな…。

包帯も味噌汁を飲むときに外してしまったままだった。

「確かに御館の顔…だけど…。御館様は死んで…」

クロエが戸惑っている。

当然か…。

私の顔は本物の御館様に変わってしまっているからな…。

だが…。

「そうだ。私は御館様の顔をしているが、御館様ではない。お前が知っている御館様はもうこの世にはいない…」

「やっぱり御館様はもういないんですか…。だったら貴方は誰？」

誰、か…。

彼女はもう真実を受け入れる強さを持っているというわけか…。

「私の名は黒騎士ロース、お前が憎んだ男の名だ」

……。

「だが、それは偽りの名、偽りの世界で偽りの名を名乗るのも滑稽なものだな…」

この世界で偽る意味がないだろう。

ここは夢の世界。

消えゆく運命にある偽りの世界だ。

「私の名はロスト。馬鹿で臆病で、だが、最強の力を手に入れてしまった元平民その他だ…」

「ロスト…」

クロエは噛みしめるように私の名を呟く。

「私は名を偽ったが、お前に言ったことは何一つ偽ったつもりはない。お前をこの世界から救い出し、強くなるまで支える。その言葉は紛れもなく真実だ。もっとも、お前はもう強くなっているようだが…」

私は口下手で余り話すことは得意ではない。

だからこそ、これほど長く話すのは初めてだ。

「だから、後はお前を救うだけだ。それが終われば、私はお前の前から姿を消そう。私は黒騎士なのだからな…」

私は彼女を酒池肉林の構成員には迎えたいと思っている。

だが、今それを望んでしまえば、私が彼女に感じた温もりが偽りだったのかもしれないと思ってしまうからだ。

あの時感じた温もりが私の醜い欲望でもたらされたものだと思いたくはなかった。

以前はそのようなことを感じなかったというのに…。

「貴方は卑怯だ…」

「何だと…」

クロエが私の頬に手を添える。

「私の心をここまで掻き乱しておきながら姿を消すなんて認めない。私は貴方の真実の姿を見なければ、先に進むことは出来ない」

「私の真実の姿を見ても仕方ないだろう」

クロエは私の真実に何を望んでいるのだ?

私の真実を見たところで何の感慨も沸かないだろう。

「ロスト。私から逃げるつもりか?」

逃げる?

私がクロエから逃げると言っているのか…。

「私は貴方が黒騎士だろうと関係無い。貴方は私を受け入れると言った。だったら、今度は私が貴方を受け入れる番だ。貴方の美しい所も醜い所も全て…」

……。

どうやらクロエに一本取られてしまったようだ。

私もまた彼女に自分の醜い部分を見せることを恐れて、逃げようとしたのかもしれない。

「分かった。お前には私の真実を告げる。がっかりするだろうと思

うが、それが筋というものなのだろう。だが、この世界から生きて帰れたらの話だ…」

私は遠くから強大な殺気が迫っているのを感じた。

「やってくれるものだな。だが、この程度では私を殺せないぞ、ロスト…」

なるほど…。

クロエと連結しているわけだから私の名を知ったということか…。

まあいい。

どうせ私が貴様を殺すのだからな…。

「所詮は悪あがきに過ぎない。見るがいい…」

映像が映し出される。

その映像は現実世界の光景。

……。

アルゴスは私が見たときよりもさらに巨大化していた。

闘技場は既に破壊され、周囲は瓦礫に埋め尽くされていた。

アースガルズ本城周辺は炎が燃えさかっており、如何に壮絶な戦闘が繰り広げられていているかを物語っていた。

「アースガルズを守るんだ！」

アースガルズが誇る魔法師部隊が嵐のようにアルゴスに向かって魔法を放っている。

多重戦略級防御結界は既に破壊されていたようだった。

「迅雷龍牙鞭！」

ロンが雷龍を召喚して、アルゴスに向かって突撃していく。

「火炎葬弾！」

アビスは巨大な火球を投げつけていく。

「セレスティアルサンダー！」

エクリアが剣を掲げて天空から稲妻を振り落としていく。

「カ弱キ者共ヨ、無駄ヲ知レ！ハァアアアッ！」

アルゴスの全身から強大な魔力波が放出され、迫ってくる攻撃を全て掻き消していく。

「この化け物め！」

黄金の髪を靡かせて空高く飛ぶ青銅の鎧を身に纏った戦乙女がいた。

あの青銅の鎧。

そして、あの顔は…。

私は映像からアルゴスへと視線を移す。

「モーモスの力を模倣していたというのか…」

このような形でモーモスの素顔を知ることになってしまうとは…。

アルゴスは現実世界で常に情報を更新させているわけなのか…。

私は再び視線を映像に移す。

「滅びよ！バニッシュメントストライク！」

モーモスは巨大剣を掲げて、頭上に巨大な光球を生み出す。

「ソノ光デ我ヲ滅ボスツモリカ？」

アルゴスは触手を一斉にモーモスに向かって伸ばしていく。

「喰らえぇえええええっ！」

モーモスは巨大剣を振り下ろし、光球がアルゴスに目掛けて飛んでいく。

光球は迫ってくる触手を焼き払いながらもアルゴスの本体まで飛んでいって直撃させる。

「ギャアアアアアッ！」

アルゴスの絶叫が轟く。

「今だ！ケール殿！」

「みんな！離れていてくれ！カタストロフ・サン！」

ケールはかつて私を丸焼きにした最強の技を放っていく。

この技は下手すると世界の一割とまではいかないものの国一つを余裕で焦土させるほどの威力はあった。

だからこそ私はわざと未完成版を使用していたのだが…。

城一つどころか三つや四つを余裕で呑み込みそうなほどの規模の漆黒の太陽が出現してくる。

「済まない、ご主人様！はあああああっ！」

ケールは悲痛な表情で漆黒の太陽をアルゴスに放つ。

「我ハ神ナリ！ハァアアアアアッ！」

アルゴスは身体を覆っている無数の碧眼の中で一際大きい瞳から巨大な閃光を放ってくる。

閃光は漆黒の太陽を貫き、背後にあった山々を消し飛ばしていった。

馬鹿な…。

アルゴスはここまで強大では無かったはずだ！
何故これほどまでに強くなっているのだ…。

「消エ去レ！ジャハナム！」

アルゴスは全身から熱線を放出し、周囲を溶解させていく。

「結界は何重でも展開させろ！このままではアースガルズが滅びてしまうぞ！」

モーモスの合図により、エクリア、ケール、ロン、魔法師部隊が一斉に結界を展開させる。

「無駄ナ足掻キヲ！滅ビロッ！」

アルゴスの魔力により何重にも展開されている結界が次々と破られていく。

その度に新しい結界を展開させて持ち堪えていた。

このままだとアースガルズが滅びるのも時間の問題だった。

……。

「もう間もなくアースガルズは滅びるだろう。ロスト、全てはお前のお陰だ…」

アルゴスはモーモスの顔で笑みを浮かべている。

「ロストのお陰とはどういう事だ！」

クロエはアルゴスの言葉に食いついてくる。

「私の力を吸収して、アルゴスが強くなっているということだ…」

私はアルゴスの代わりにクロエの質問に答える。

「その通りだ。そして、私はまだまだ強くなる。いずれ、ビフレストにいるモロスや原初神をも越えることも可能となろう」

「それがお前の望みなのか、アルゴス」

クロエは憎悪に満ちた目でアルゴスを睨む。

「いや、私の望みは地獄だ。死と絶望の花を咲き散らす、美しくも悲しい世界を眺めることこそが私の望みだ…」

「下衆め…」

アルゴスはまぎれもなくパラディスム史上最悪の神だ。

クロエのことでだけではない。

アースガルズや世界のためにもこの邪神を滅ぼさないといけない。

「ふふっ、ロストよ。お前の考えは読めている。例えば、クロエに自分が死なないように思いこませることで自分の死を回避していることなどをな…」

なぜ、分かった？

「なぜ、分かった？それはお前が私の一部となりかけているからだ…」

……。

奴は私の考えを言葉通り読んでいる…。

「その通り、もはやお前は私となりかけているのだ…」

「どういうことだ？私にも分かるように言え！」

クロエが話に割り込んでくる。

「クロエ、もうお前には用済みだ。気づかなかったのか？私がお前を殺そうとしたときに…」

そうだ。

アルゴスはクロエを躊躇いも無く殺そうとしていた。

彼女は神降ろしでアルゴスを現世で具現化しているのだ。

だから、彼女を殺せば現世にいられなくなるはず…。

それを構わず、殺そうとしたことは即ち…。

「正解だ。ロスト、私はお前の血肉で完全なる存在となるのだよ。だからもうクロエは用済みなのだ…」

最低最悪の展開だ…。
それは死ぬこと以上に苦痛のものだ！
「そんなことは無いぞ…」
アルゴスの身体が変化していく。
……。
「私が貴様と成り代わるのだ…」
クロエから頂いた鎧を装着している者だった。
「御館様…の姿なのか…」
「いや、あれは私だ。御館様の鎧を着た私だ…」
鏡を見ているような気分だ…。
この世界は何処まで奇天烈な展開を繰り出してくるのだ…。
「さあ、ロスト！終幕の時だ！」
私は咄嗟に隣にいたクロエを突き飛ばす。
「ロストっ！」
クロエの戸惑う声が聞こえたと同時に私の腹に凄まじい衝撃がくる。

「ぐっ…がほっ！」

「貴様のお得意の黄金の拳だ…」

アルゴスはさらに両脇腹と顔面に拳を次々と炸裂させてくる。

「ごほぁ！がはっ…」

「死なないのであれば、眠るがいい！貴様の意識が消失したときこそが貴様という自我は最後を迎えるのだ！」

アルゴスの拳で私は殴り飛ばされていく。

「ロストっ！」

「貴様はそこで見物しているといい！」

私の元に駆けつけようとしていたクロエの身体にどこから出てきたのか、触手が絡みついてくる。

「ぐっ！ロストっ！」

「クロエ、貴様に見せてやろう。ロストの真実の姿をな！さあ、立て！ロスト！ここからが貴様の最後の花道となるのだ！」

アルゴスは倒れ伏している私を容赦無く蹴り上げる。

「ぐふっ…私の…真実だと…ぐあっ！」

アルゴスの拳が私の顔面にめり込んでくる。

「貴様は多くの女を侍らせているだろう。クロエを救い出すのもそのためではないのか？」

……。

「くっ…だったらどうしたと言うのだ？」

「貴様はそのためだけでクロエを助けだそうとしたわけだ。クロエのことを考えていたわけでもない。ただの自らの欲望のためだけで…」

アルゴスは語りながらも拳を嵐のように突き出してくる。

私は為すがままに殴られていた…。

「私と貴様の何が違う？貴様は肉欲と性欲に満ちた世界を、私は絶望と苦悩に満ちた世界を求めている。己の望む世界を造り上げようとしているのだ」

「ごほっ…確かに…その点では…同じなのかも…しれないな…ぐふっ！」

アルゴスは私の首を締め上げていく。

「ならば、私と貴様は同志というわけだ。素直に身体を明け渡せ。私が代わりに望みを叶えてやるぞ。誰が欲しい？モーモスか？オイジュスか？それとも…」

アルゴスが視線を移す。

視線の先にはクロエがいる。

「ロスト…」

「私の前では嘘は無意味だ。心を解き放て。望むのだ。クロエの身体が欲しいとな…」

クロエの身体か…。

それはとても魅力的なものだ…。

だが、それだけでは足りないのだ…。

「どうした？何を迷っている？素直に望むのだ！クロエの身体が欲しいと！」

「私は…クロエが…」

私はアルゴスに吊り上げられながらも不安げにしているクロエを見る。

「ロスト…」

クロエ。

私の真実を見せる。

ロストという男のつまらない真実をな…。

……。

「欲しい…」

……。

「ははははははははっ！聞いたか、クロエ！これがロストという男の真実なのだ！私と同じだ！欲望のままに己が望む世界を求めているに過ぎないのだ！あははははははっ！」

……。

「家族が欲しい…」

……。

「家族だと？」

「ロスト…」

……。

「たくさん欲しい…」

……。

「性欲も愛も欲しい…」

……。

「抱きたい…」

……。

「温もりが欲しい…」

「もういい…」

……。

「一緒に寝たい…」

「もういいと言っている…」

……。

「笑い合いたい…」

「止めろ…」

……。

「愛が…ごはっ！」

「止めろぉおおおおおっ！」

私の顎がアルゴスの拳に打ち抜かれる。

身体が宙に舞っている…。

不味い…。

脳が揺れてくる…。

意識が消えかかっていく…。

……。

耐えろ…。

耐えるのだ、ロスト！

全身に衝撃が来る。

地面に叩きつけられたのか…。

「はぁ…はぁ…貴様、私の意識を浸食するつもりだったのか…。それにしても家族だと？温もりだと？下らない！実に下らぬ望みだな。貴様とは分かり合えると思ったが、所詮は人だったのか…」

「そんなことはない！」

朦朧とした私の意識の中で凛とした声が鮮明に響く…。

クロエ…。

「ロストは醜い欲望を持っているのかもしれない。けど、私は知っている！夢の世界に迷い込んでいたときに座敷牢で私と一緒に遊んでくれたことを！確かに温もりを感じた。優しさが身に染みた。本

当の家族のように私に接してくれた…。それに私に真実を告げるときにとても辛そうな顔をしていた…」

……。

「黙れ…」

「あぐっ…」

クロエに絡みついている触手が締め上げていく。

「ク…ロ…エ…」

私は立ち上がろうとしたが、足が動かなかった。

なぜ動けない！

クロエが苦しんでいるというのに…。

「ロスト…」

私はクロエに呼ばれて視線を向ける。

クロエは私に笑顔を向けてくれた…。

「ロスト、私は…貴方を…受け入れる…ううん…受け入れたい…。

私も…貴方の…あぐっ！」

「黙れっ！」

クロエの身体に触手が食い込み血が滲んできている。

「クロエッ！」

……。

「家族に…なりたい…」

……。

ぐっ！

私の身体よ！

動けっ！

うおおおおおおおおおおおっ！

「アルゴスぅうううううううううっ！」

「まだ立てるというのか…。ロスト！」

私は立ち上がり、咆吼を上げた。

……。

「ふふっ、だが、もうこれで終わりだ。次の一撃で眠らせてやる…」

アルゴスはゆっくりと近づいてくる。

「安らかに眠れ、ロスト…」

アルゴスの拳が再び私を宙に舞い上がらせた。

「ロストぉおおおおおおおおっ！」

クロエが悲痛の声で私の名を叫んでいた…。

根性出して立ち上がったが、今度こそ終わりなのか…。

「ぐほっ！」

……。

……。

…。

歌が聞こえる…。

……。

……。

エリスなのか？

いや違う…。

……。

この歌は…。

……。

オイジュス…。

……。

「何だ?この歌は?なぜ、私の世界で聞こえてくるのだ!」

アルゴスの狼狽した声が聞こえる。

何だ?

身体が軽くなってきている…。

『聞こえますか、ロース様…』

「オイジュス様…」

これは奇跡なのか…。

『これが私のもう一つの力。戦士を鼓舞するための戦の歌。私の歌は何処であろうとも響きます。例え、世界が違っても…』

異なる世界でも歌を響かせる力…。

『皆様の想いを歌に乗せて伝えます…』

……。

『ご主人様、君の帰りを待っている人は僕を含めて沢山いるから早く帰ってきてくれないかな…』

ケール。

『いつまで下手物の中で油売ってるのよ！早く戻ってきなさいよ！』

アビス。

『今回は特別に説教は無しにします。ですから閣下。どうか戻ってきてください…』

エクリア。

『父様！早く戻ってきてください！私はもう大切な人を失いたくないんです！』

ロン。

『ロース、お前はオイジュス様が認めた男なのだぞ！そして、私も…。ええい！とにかく早く戻ってこい！』

モーモス。

『ロース様、私はレテシア・パラディスムと申します。どうかお願いします。クロエを…あの子を…助けてください。お願いします…』

レテシアもアースガルズに来たのか！

『アースガルズはレテシア様の御助力もあって何とか持ち堪えています。けど、長くは持ちそうにはありません。どうか、アースガルズを、私達を、救って頂けないでしょうか？もう貴方様が最後の希望なのです。お願いします、ロース様…』

……。

「承った…」

『有り難うございます。私は歌います。貴方と私達の想いを繋げていくように…』

オイジュスの歌は偽りの世界に鮮明に響き渡っていく。

私に勝利を約束する女神の歌だ。

「止めろ！この歌は何だ！歌うな！私の世界に響かせるな！」

アルゴスは焦っている。

それはそうだろう。

私の身体の傷が癒えていく。

力がみなぎるのを感じる。

オイジュスの歌のお陰だ。

彼女の歌は現実世界からこの偽りの世界に響いている。
現実世界と偽りの世界の境界線が崩れのだ。
すなわち世界の法則が乱れたことを意味している。
私は取り乱しているアルゴスに近づく。
「さあ、アルゴス。終幕の時だ…」
「ほざけっ！」
アルゴスが私に拳を振るってきた。
……。
遅い…。
私は身体を僅かに反らしてアルゴスの拳を避け、アルゴスの顔面に思い切り殴りつけた。
「ぐぼぉあああああっ！」
アルゴスは吹っ飛ばされていく。
私はアルゴスを殴り飛ばしたのを確認して触手に縛られているクロエに視線を向ける。
私は魔力を発して触手を瞬時に焼却する。

触手は灰になり、倒れてくるクロエを抱き留める。

「ロスト…」

「クロエ、話は後だ。今は待っていてくれ…」

私はクロエから離れようとしたとき、頭を引き寄せられる。

「ちゅ」

……。

「必ず勝って、ロスト…」

私はクロエの唇が触れた頬を押さえる。

「分かった…」

女神の祝福を受けた。

後は邪神を滅ぼすだけだ。

私はアルゴスを殴り飛ばした場所へと駆けていく。

……。

……。

…。

アルゴスは私の一撃が利いていたのか、まだ立ち上がれずに呻いていた。

「何故だ！この世界では私は全能の神のはず！何故だぁあああああっ！」

見苦しいものだ…。

「貴様の一人舞台は終わった。そして、ここからは私の一人舞台が始まる。大根役者は速やかに御退場願おうか…」

「オノレェエエエッ！ロストォオオオッグボォオオオッ！」

私は激高するアルゴスを黙らせるために溝に拳をめり込ませる。

「ゲホッ…ゴホォ…ロス…ト…」

「貴様を花のように美しく散らせたりはしない。塵のように汚く散らかしてやろう…」

アルゴスは腰を折って呻いている。

さて、現実世界ではオイジュス達が頑張っている。

余り時間をかけるわけにはいかない。

花が枯れる前に害虫を駆除せねばな…。

アルゴス…。

今までの借りを千兆倍にしてまとめて返してやる…。

覚悟しろ…。

第54話：Ich will den Kreuzstab gerne tragen

アルゴス…。

宣言した通り、今度こそ貴様を殺す。

「ロストォオオオオオオオオオッ！」

アルゴスが拳の嵐を繰り出してくる。

だが、やはり…。

「遅い…」

私はアルゴスの一見無数に見える拳の中で難なく本物の拳を見切って鷲づかみする。

「馬鹿ナ！受ケ止メタダト！」

「軽すぎる」

私はそのままアルゴスを引き寄せて、頭突きをかます。

「グアアアッ！」

兜が砕けて、素顔が晒される。

蠢く触手を髪の毛代わりにして、顔面には無数の目が見開いている醜悪な素顔だ。

「グッ…」

アルゴスは手から薙刀を出してくる。

「血桜！」

巨大な一文字の真空破が私に迫ってくる。

「微風だな」

私は横に振って風圧を起こす。

真空破は私が起こした風圧に掻き消されていく。

「有リ得ナイ！ナラバコレハドウダ！」

薙刀に魔力が収束していく。

「やってみろ…」

「ホザケッ！秘技！修羅雪！」

アルゴスの薙刀から巨大な光の波動が放たれ、私を呑み込んでいく。

「ハハハハハハッ！思イ知ッタカ！」

「何を思い知ったのだ？」

本調子に戻り、怒りに煮えたぎっている私にはもう貴様の攻撃は届

かない。

「何故ダ！世界ノ法則カラ逃レタトハイエ汝ノ力ヲ吸収シタ我ガ何故コレホドマデニ追イ詰メラレル？」

「笑えるほどに至極簡単で幼稚な解答だ」

私は瞬時にアルゴスとの距離を詰める。

「私が最強だからだ」

さて、人や美女相手には絶対に行使しない方法で追い詰めるか。

「貴様が気持ち良く地獄に行けるように身体を清めてやろう。まずは洗顔だ」

私は五本の指でアルゴスの目で覆われた顔面を突き刺す。

「ギャアアアアアアアアッ！」

アルゴスの顔面から鮮血が吹き出ていく。

「散らされる気分はどうだ？」

アルゴスの頭部にある触手を鷲づかみする。

「地獄で隠居する前に出家もしたほうがいいだろう。次は散髪だ」

私は触手を引きちぎっていく。

「グギャアアアアアアアアッ！」

頭部からも鮮血が吹き出てアルゴスの全身が血に染まっていく。

「濡れた身体を乾かしてやる。昇竜炎無」

クロエの技でアルゴスの全身を炎で包んでいく。

「アギャアアアアアアアッ！」

下手物相手とはいえ、やはり残虐に追い詰めるのは心地良くないものだ。

だが、貴様には償って貰わなければな…。

主に私の気が済まない。

炎が消え、アルゴスの焼け焦げた姿を見せてくる。

「身体が乾いたところで血流を良くするために指圧もしてやろう」

私はアルゴスの全身に抜き手を連打していく。

「アガガガガガガガッガアッガガガガガッ！」

アルゴスは全身から血を吹き出していく。

「これで血の流れが良くなっただろう。すっきりしたところでお待ちかねの就寝時間だ。起床時間までには地獄に無事到着するはずだ」

まだ、やり足りないが、余り時間をかけるわけにもいかない。

そして、現実世界ではおそらく歌を止めさせるためにオイジュスを殺そうと暴走しているはずだ。

一刻も早く殺して、現実世界のアルゴスの動きを止めねばならない。

「ググッ…ジャハナム！」

俯いているアルゴスの全身から熱線が吹き荒れていく。

むっ！

私が一瞬怯んだ隙にアルゴスは飛び立っていく。

現実世界では何重をも展開していた戦略級防御結界を容易く破った技を放ったのか…。

今の私には単なる湯気程度のものでしかなかったが、目眩まし程度には充分だったようだ。

オイジュスの歌を止めるまで時間稼ぎをするつもりか？

歌が響かなくなれば、自分の世界の法則を修正して、優位に立てるとでも思っているのだろう。

ならば、それは大きな間違えだ。

仕組みが知れれば、世界の法則であろうとも関係が無い。

時間が無いのは飽くまで被害が拡大しないことを考慮してのことだ。

……。

逃げたのだろうが、奴の行き着く先は大方知れている。

奴は真性の下衆野郎なのだからな…。

その前に仕込みを済ませるか…。

私は全身から一気に魔力を放出していく。

「はあああああああああああっ！」

空間が揺らめいている。

とりあえず、限界の五歩手前まで魔力を放出し尽くした。

いや、五歩は近すぎるな。

もっと手前から遠いだろう。

私自身まだ自分の力の限界を把握していないからな…。

まあいい。

仕込みは終わった。

後は寄生虫を駆除するのみだ。

私はアルゴスの生命反応を感じる場所へと駆けつけていく。

……。

……。

…。

「やはり、そうするわけか。下衆には相応しい行動だな…」

アルゴスはクロエを捉えて私に対峙していた。

「黙レ！クロエノ命ガ惜シケレバ、大人シクソロッ！」

「断る」

もはや、その必要は無いからな…。

「強ガリヲ言ッテラレルノモ今ノ内ダ！オイジュスハ既ニ追イ詰メテイル！見ルガイイ！」

虚空に映像が映し出される。

……。

その映像はアルゴスが大聖堂に多量の触手を絡ませている場面だった。

「くっ…オイジュス様を何としても守れ！希望の歌を止めさせるな！」

モーモスが迫り来る触手を斬り払いながら兵士達に檄を飛ばしている。

私はオイジュスの歌により綻びが生じている世界の境界線を通して声を送る。

『オイジュス様、もうお逃げください。後は私に全てを任せてください』

『えっ？ロース様ですか？……何かお考えがあるのですね。信じます。ですから、早く戻ってきてください。私は貴方様に祝福を捧げられるのを心待ちにしています…』

オイジュスは私の言葉を信じて、歌を止めてモーモスと共に大聖堂を後にしていく。

……。

私は映像からクロエとアルゴスの方へと視線を向ける。

「ロスト…」

「心配するな、クロエ。アルゴスにはもう未来は無い」

奴はもう終わりなのだからな…。

「ハハハハハッ！コレデ世界ハ修正サレタ！汝ニモウ勝チ目ハナイゾ！サア、神ニ跪ケッ！」

「神だと？貴様如きがモロスやアーテと同格であるとは身の程知らずにも程がある」

この下手物がモロスやアーテと同じ神だと自称するだけで吐き気を覚える。

「マズハ貴様ニ絶望ヲ見セテヤル！」

捉えられているクロエに触手の先端が迫ってくる。

「クロエヲ貴様ノ目ノ前デ殺シテヤル！見ルガイイ！」

……。

「どうした？早くやってみろ。私に絶望を見せたいのだろう…」

「身体ガ動カナイ！力ガ出ナイ！私ハコノ世界デ全能ナル神ノハズダァアアアアッ！」

私は動けないアルゴスを余所にクロエを解放する。

「ロスト…」

解放されたクロエは座り込んでしまう。

何やら呆然としているようだが、まあいいだろう。

「さて、アルゴス。全能の神からただの寄生虫になった気分はどうだ？」

「貴様！何ヲシタ！」

動けないアルゴスに私は悠然と近づく。

「私の情報をこの世界丸ごと上書きさせたのだ。今は私がこの世界の全能なる神というわけだな…」

「ソンナ馬鹿ゲタコトガ可能ナノカ！」

アルゴスは私の言葉に小物のように驚いている。

まあ、驚くのは当然か…。

私はアルゴスを追跡する前に魔力を放出させた。

放出した魔力はこの世界の隅々まで行き渡り、アルゴスの制御下から私の制御下として上書きさせることに成功したのだ。

つまり私がこの世界の神となったわけだ。

「貴様が今身動きできないことが何よりの証拠だ。現実世界でも身動きが取れていないだろう。今頃、貴様の身体はモーモス達の手によって丁寧に解体されていることだろうな…」

「ググッ…貴様ハ何者ダ…」

私はアルゴスの胸に手を押し当てる。

「貴様はもう二度と現世に降り立つことは無い。カタストロフ・サン体内移植版」

「グガガッ…ロ…ス…ト…」

アルゴスの身体を血を吹き出しながらも膨張していく。

私がアルゴスの体内に仕込んだカタストロフ・サンは暴発しているのだ。

もはや、破裂寸前の風船だな…。

私はアルゴスから手を離し、拳を構える。

「私が何者かと聞いたな。ならば、冥土の土産に教えてやる！我が名はロスト！馬鹿で臆病で、最強の力を手に入れてしまった元平民その他だ！地獄に逝っても覚えておけ！アルゴス！」

「ロ…ス…トォオオオオオッ！」

我が黄金の拳が唸る！

派手に散れ！

アルゴス！

私はアルゴスを上空高く殴り飛ばしていく。

上空に殴り飛ばされたアルゴスの全身から鮮血が吹き出し、血の雨を降らしていく。

「ロストォオオオオオオオオオオッ！グボアアアアアアアアア

アアアアッ！」

「塵のように散れ…」

アルゴスの身体は粉微塵に破裂し、アルゴスだった肉片が空から次々と落ちてくる。

血の雨に肉片の飛礫…。

下衆の貴様に相応しい散り様だったな…。

……。

終わったか…。

「ロストっ！」

クロエが駆けつけてくる姿が見えてくる。

「クロエ…」

クロエは私を押しつぶすかのように抱きついてきた。

クロエが頭二つ分背が高いことから私の頭が丁度クロエの胸に納まる。

「ロストっ！お前は私を心臓麻痺させるつもりなのか！」

鍛えられた胸が私の頭蓋骨を潰そうかの勢いだ。

「私はお前の家族になると言った。だったら、これ以上私に心配かけるな…」

御館様と呼ばれていたときの丁寧な口調も良いが、この無愛想な口調の方が本来のクロエなのだろう。

「私を支えてくれるのだろ？男なら自分が言った言葉に最後まで責任を持て…ううぅ…」

私の髪に熱い物が落ちてくる。

泣いているのか…。

私はクロエの胸に顔を埋める。

「済まなかった…」

私とクロエは抱き合うのだった。

……。

……。

…。

「レテシアがお前を待っている…」

偽りの空に亀裂が走っていく。

「レテシア様がアースガルズに…」

偽りの大地に亀裂が生じていく。

「ああ、お前を心配していたぞ…」

偽りの世界が崩れていく。

「私は償わなければならないな…」

偽りの世界が消えていく。

「私が支える…」

偽りの世界に光がもたらされていく。

「ロスト…」

私とクロエは光に包まれていく。

「戻ろう…」

私とクロエは飛び立っていく。

……。

……。

……。

……。

…。

私とクロエは抱き合ったまま瓦礫に埋め尽くされた場所に立っていた。

『おおっと！怪物が光に包まれたと思いきや、いつの間にか黒騎士ロースとクロエ殿が抱き合っている姿が現れました！これはどんな魔法を使ったのでしょうか！ともあれ、危機は去り、アースガルズは救われたのです！この場合の勝者は危険を顧みず怪物の体内に潜入し、見事クロエ殿をお救いした黒騎士ロースにあるでしょう！準決勝戦勝者黒騎士ロース！』

……。

まだ、あの実況者はいたのか…。

確かに実況に対する意地と誇りは並ではないらしい…。

どうやら現実世界に戻ったようだ。

頬を撫でる風が心地良かった。

頬を撫でる…。

私は自分の顔を押さえる。

そう言えば、夢の世界で鎧は大破したのだった…。

どうすればいい…。

このままでは素顔が晒されてしまうではないか…。

「ロスト、これを…」

クロエは私に覆面の布きれを渡してくれた。

「ありがたい…」

私は急いで顔に布を巻き付けていく。

「主！クロエ！」

一番に駆けつけてきたのはアビスだった。

クロエは私から離れ、地面に跪いた。

「アビス様、申し訳ありません。私の暴走によりアースガルズに多大な被害を被らせてしまった責任。如何様な処罰も受けます」

……。

今回の件でアースガルズは甚大な被害を受けたのは夢の世界の映像から見ていた。

「クロエ、私からは何も言わないわ。それに謝罪するべき相手も違う」

アビスは無言でクロエから別の方へと視線を移す。

その視線の先にはオイジュスがいた。

オイジュスだけではない。

モーモスやロン、ケール、エクリア、それにアースガルズの兵士達が続々と出てきた。

皆、アースガルズを守るためにアルゴスに戦いを挑んだ者達だった。

クロエは彼らを見て、改めて自分のしたことの罪を感じて震えていた。

私は震えているクロエの側に立つ。

彼女は確かに罪を犯した。

だから、前に立って庇うべきではない。

せめて罪を受け入れる覚悟が持てるように横から支えるだけだ。

オイジュスは厳かな口調でクロエに告げる。

「クロエ・パラディスム。貴女は重大な罪を犯しました。それは決して許されるものではありません。幸いにも死傷者は出ませんでしたが、それでも罪は罪。よって貴女に課す試練を言い渡します」

……。

死傷者が出なかったとは言え、極刑にするには充分すぎるほどの事態だ。

何とか極刑よりも軽い刑罰にしてもらいたいものだ。

彼女は死んで罪を償うよりは生きて罪を償って欲しい。

彼女は罪を受け止めず、過ちを繰り返す者にならない。

私がそうさせない。

だから、オイジュス。

どうか寛大なる裁きを下して欲しい。

「クロエ・パラディスム。貴女は黒騎士ロース様の従者として今後の人生全てを捧げることを試練を課します。ロース様を支えることこそ己の使命だと受け入れてください」

……。

オイジュス…。

いくら何でもそれは軽すぎるのではなかろうか？

それどころか罪が免除されたようなものだぞ！

周囲の者達も戸惑っているようだ。

「何故ですか？私はこの国に甚大な被害をもたらした。それは大抵許されるものではないはずだ！私がロス…ロースの従者になることで済むことなのか！」

誰よりも試練を言い渡されたクロエ自身が一番驚いていた。

「確かに貴女の言うとおりです。本当はより重い試練を課す話も出ました。ですが、貴女の試練を代わりに背負うことを申し出たのです」

オイジュスの隣に艶やかな着物を着た女性が進み出てきた。

「レテシア様…」

レテシア・パラディスム。

パラディスム家歴代最強の実力を誇る当代頭領。

「息災のようですね、クロエ…」

レテシアは儚げな笑みをクロエに向けてくる。

その微笑みは全てを受け入れた殉教者のように覚悟を秘めているように見えた。

「パラディスムの歴史は私の代で幕を下ろします。里の者達にも納得して頂きました。私はアースガルズにこの身の全てを捧げるつもりでいます。それが私が貴女の代わりに背負う試練…」

……。

クロエの代わりにレテシアが背負う。

私は思った。

これこそがクロエに課せられた真の試練だと…。

自分の大切な存在が自分の犯した罪を代わりに背負う。

それはクロエにとって極刑にも勝る重い試練だろう。

さらに自分の罪を背負わされることでパラディスム家が断絶することになったのだ。

「何故ですか！レテシア様！何故そこまでして私の罪を背負うのですか！」

「クロエ、それは違います。他者の罪を背負うことは誰にも出来ません。背負うべきでもありません。これは私の罪。貴女を救うことが出来なかった弱い私への試練。ですから貴女は何ら気に止めることも無いのですよ…」

レテシアは項垂れているクロエの元へと近づいていく。

「レテシア様…」

「パラディスム家の歴史はこれで終わりますが、私達は生きています。例え、パラディスムが歴史の中から忘れ去られようとも私達が生きた証は残せるはず。貴女はその生きた証を残すのです。ロース様と共に…」

レテシアはクロエを赤子のように抱き締めていく。

「久しぶりね。貴女が泣いた顔を見るのも…。昔はエルとアビスと喧嘩して、泣いたときにはこうやって私に泣きついていたものです。私の可愛いクロエ…」

「母上…ううぅ…うあああああぁ…」

子供のように泣くクロエを母親のように抱き締めるレテシア。

……。

思わず涙腺が緩みそうになってしまった。

レテシアとクロエは血の繋がった親子ではない。

だが、泣きじゃくるクロエを抱き締めるレテシアの様子を見て、本当の家族のように見えてくる。

いや、彼女達は本当の家族なのだ。

レテシアにとってエルとアビスも実の娘のように愛しているのだろう。

私はアビスを見る。

「何よ？」

「羨ましいのか？」

アビスの顔が真っ赤に染まってくる。

「べ、別にそんなわけ…あるわけ無…くもないか…」

「アビス？」

アビスはふと顔を背ける。

「けど、私には…そんな資格は無いの。だって姉者のせいでパラディスムは…」

「エルが確かにやったのかもしれない。だが、少なくともエルの意志ではない。ヒュプノスの意志で行ったことだ。貴様はエルの味方ではないのか？」

アビスは睨むようにして私の顔を見る。

「私は最後までエルの味方だ。貴様が私にそう言ってくれたように…」

私はアビスの頬に手を添える。

「そうね。ごめん、ううん、ありがとう…」

アビスは私の手に自分の手を重ねる。

……。

ざわめいていた周囲もいつの間にか静まりかえっていた。

伝説の暗殺集団パラディスムの頭領が表舞台に現れ、アースガルズに全てを捧げると宣言したのだ。

さすがにクロエへの裁定を追求する者は誰も出てこなかった。

「クロエ殿の件については以上です。各自被害状況を確認してください。負傷者の手当も迅速にお願いします」

オイジュスは先頭立って指揮を執っていた。

彼女はどうやら守られるだけの聖女様ではないようだ。

「ロース様」

いつの間にかレテシアが私に顔を向けていた。

腕の中では疲れているのかクロエは眠りについていた。

「クロエを救って頂き真に有り難うございました。このご恩は一生かけてお返しするつもりでいます」

では、私の酒池肉林の構成員となってくれるか、と思わず口走りそうになったのを私は何とか押さえる。

さすがの私も最低限の空気を読む術は心得ている。

だが、成熟した大人の女性も構成員には迎えたいものだ…。

「それには及びません。エルのことで私も責任を感じていますので…」

レテシアは自分を責めているようだが、私にも責任の一旦があるの

だ。

彼女だけに一方的に謝罪されるのは筋が通らない。

「寛大な心遣い感謝します。どうか、クロエのことを宜しくお願いします」

「わかりました…」

彼女は本当にクロエを自分の娘のように愛している。

羨ましい限りだ。

「後、エルのことはむしろこちらの方が申し訳ありません。エルはもはや人であることを忘れた鬼と成り下がってしまいました。もはや私でも止めることはできません。このようなことを貴方様に頼むのは非常に心苦しいのですが、どうかエルを貴方様の手で…」

「エルは必ず私が救い出します。私は信じています。エルはまだ人の心を失っていないと…」

私はレテシアが言い切る前に言葉を重ねた。

レテシアはエルもクロエと同様に娘のように愛していたはずだ。

その先を言わせてはいけないと思った。

レテシアは目を見開いて私を見つめる。

「レテシア様、主はやると言ったら必ずやり遂げます」

「アビス…」

レテシアはアビスに目を移し、儚げに微笑む。

「素晴らしい殿方に巡り会ったのですね、アビス…」

「はい、主は私の夫でもありますから…」

アビスは臆面もなくレテシアに私との関係をばらしてくる。

頭領が相手でも一歩も退かないようだな…。

「まあ、いつも姉者、姉者と付いていた貴方がそこまで言うなんて…。ふふっ、確かにそう言わせるほどに惹き付ける何かがあるのかもしれませんね…」

レテシアは私を潤んだ目で見てくる。

……。

何だ？

「ロース様、こちらへ来て頂けませんか？」

私はレテシアに言われるがままに近づいていく。

アビスも怪訝そうにレテシアを見ていた。

「ロース様、ああ、何処か御館様と雰囲気が似ている気がしますわ

…」

レテシアが覆面で覆っている私の頬に手を添えてくる。

「レテシア様、何を…」

アビスがレテシアの様子にただならぬものを感じている。

「貴方様を見ていると久しく忘れていた女の疼きを思い出してしまいそうです…」

「なっ！ちょっと！レテシア様！」

アビスが慌てている。

私も正直驚いている。

しかし、何故私が御館様に雰囲気が似ているのだ？

「御館様は子供は作らなかったけど、女性関係は結構凄かったのよ。あんたと同じようにね…」

アビスは疲れたように呟いていた。

「クロエも御館様と関係を持とうと必死だったのよ。パラディスムの女は私と姉者、クロエを除いて全て御館様の愛人と言っても過言では無かったわ…」

何だと？

「なぜ、貴様達は手を出されなかった？」

「単純に子供だったからよ。御館様もそれについては分別があったわ…」

アビスは遠い目をして語った。

まさか、パラディスムは御館様の酒池肉林を体現したものだったとは…。

伝説の暗殺集団と謳われたパラディスムの真実に迫った瞬間だった…。

……。

御館様…。

生きていれば是非お目に掛かりたかったです…。

私は貴方様を人生の師として崇めていたでしょう…。

……。

ぬおっ！

レテシアが私の頬を挟んできた。

「ロース様、側室は何人までお持ちになられるのですか？」

レテシアの顔が近づいてきて熱い息を吹きかけてくる。

ぐおっ！

これが成熟した大人の女性の色香なのか！

「れ…レテシア殿…」

私は何とか声を絞り出す。

ここは公衆の面前だ。

私も物事の分別はあるつもりでいる。

「レテシアとお呼び下さい。ロース様…」

ぬごっ！

男の証が溢れんばかりの欲望を膨張させている…。

「主、あんたは間違えなく御館様以上の逸材よ…」

アビスは呆れた声を出してくる。

「レテシア様、とりあえずここは聖女様の御前だから押さえてください…」

「あら、私ったら…ほほほほっ…。ロース様、改めてお願いします。どうかエルをどうか助けてください…」

レテシアは流し目から真摯な目となって私を見つめてくる。

……。

「エルは私の家族です。家族を助けるのは当然でしょう…」

「有り難うございます。やはり、貴方様は御館様に似ておられます。あの御方も家族を守るためでしたら命すらも厭わない。貴方様と同じでしたから…」

御館様に似ていると言われても別に不快には思わなかった。

むしろ似ていると思われて誇らしいとも思えた。

御館様は私が目指す夢そのものだったからだ。

「では、私は事後処理をして参ります。また後でお会いしましょう、ロース様…」

レテシアは私の顎を撫でるようにして手を離し、クロエを数人の従者に運ばせて去っていった。

……。

アビスは咄嗟に私の身体を支えてくれた。

レテシアの余りの色香に腰が抜けてしまったらしい。

「私も負けていられないわね…」

腰が抜けてしまった私を見て、アビスはため息をついた。

「それは僕の台詞だよ、アビス…」

「父様、私、絶対に負けませんから…」

「あの奥方はかなり出来るようですね…」

ケールとロン、エクリアもため息を私に向けてくる。

どうやらレテシアに妙な対抗心が芽生えているようだ。

……。

ここは今後のためにも言い聞かせておこうか…。

「レテシア殿は大人の色気があるが、お前達もそれには負けてない…」

……。

「ふふっ、嬉しいことを言ってくれるものだね、ご主人様。クロエ殿の件で色々話したいことがあるけど、今は片付けに専念しよう」

ケールは不気味な笑みを浮かべて去っていく。

「閣下、私もこれで…ふふっ…」

「父様、また後でね！」

エクリアとロンも去っていく。

一瞬エクリアが殺気に満ちた笑みを向けていたのは気のせいだろうか…。

アビスは私の肩を優しく叩く。

「後でケールには補食、エクリアには説教地獄を覚悟した方がいいわよ。ついでに私もあんたを絞り尽くすからね…」

……。

後で精力が付く食事を取るとするか…。

私には死と隣り合わせの快楽が待っているのだからな…。

それと説教地獄対策のために胃薬も準備しなければ…。

私の日常はつくづく命のやり取りの連続だな…。

第５４話：Ｉｃｈ　ｗｉｌｌ　ｄｅｎ　Ｋｒｅｕｚｓｔａｂ　ｇｅｒｎｅ　ｔｒａｇｅｎ！

やっと戦闘が終了した…。

戦闘は楽しいけど描写がやはり難しい。

というか全体的に描写は難しい。

それにしても当分はお馬鹿なノリでいくとといつぞやの後書きで宣言していたけど、結局はシリアスになってしまった…。

作者は根暗なのかもしれない…。

どうか御感想をお願いします！

この未熟過ぎる作者に僅かでもいいですから力を与えてください！

おねがいします…。

第５５話：驚天動地（前書き）

ついにあの御方達が再登場します。

では、どうぞ。

第５５話：驚天動地

波乱の準決勝戦を終えた後、アースガルズは国を挙げて迅速に復興作業に勤しんでいた。

戦い終えた後で物凄く疲れていたが、私は作業に参加したのだ。

当事者である私が率先してやらねば、人格を疑われかねないからな…。

それにしても殺し合い大会に出場してから波乱続きだったな…。

この年で父様と呼ばれる羽目になってしまったこと。

他人の夢に入って死闘を繰り広げてしまったこと。

紛い物とは世界の神とまでなってしまったこと。

私の人生はどれだけ波乱に満ちているのだろうか…。

これも酒池肉林の世界を実現させるための試練というものなのか…。

「ロース様、お話したいことがあります。どうか来てください」

オイジュスが透き通るような声で私を呼んでいた。

私は即座にオイジュスの元へと駆けつけた。

……。

オイジュスは兵士達を直接指揮しながら視察していき、側にはモーモスを常に控えさせていた。

モーモスは兜を脱ぎ、黄金の髪を靡かせていた。

彼女もまたオイジュスと勝るとも劣らない絶世の美女だ。

「私にどのようなご用件でしょうか、オイジュス様」

兵士達の手前、私は丁寧に対応せねばな…。

「あっ、ロース様、作業中申し訳ありません。本来ならこのような場で言うべきことではないのですが、今後時間が取れなくなることを考慮して言わせて頂きます。神武闘式はアースガルズ復興のために続行を中止にさせて頂くことになりました…」

……。

何ですと?

「本当に申し訳ありません。次は決勝戦でしたというのに…。貴方様に祝福を捧げる機会を失ってしまいました…」

……。

何てことだ…。

今まで死ぬ思いで決勝まで上り詰めたというのに…。

オイジュスは本当に申し訳なさそうにしていた。

確かにこれほどの被害が出れば、当然の対応なのか…。

……。

オイジュスの祝福を受けることが出来ない。

すなわちオイジュスをヴァルキリアに引き入れることは不可能ということになる。

私はヒュプノスに言い渡された任務を失敗したのだ…。

どうすればいい！

洗脳されているエルを救い出すことも不可能となってしまう！

どうすればいいのだ…。

「中止にする必要はありません、オイジュス様」

何ですと？

私はモーモスを凝視する。

まさか、オイジュス至上主義であるモーモスがオイジュスの決定に異を唱えただと！

これは天変地異の前触れなのだろうか…。

アースガルズはここまでなのかもしれないな…。

「何珍品を見るような目つきで見ている。それほど意外だったのか？」

「意外だった」

……。

不味い！

つい口が滑ってしまったぞ！

また、空気を読めない野郎だと思われてしまうではないか…。

「すまない…」

まずはきちんと謝りましょう。

「いや、かまわない。私自身も意外に思っている。それで大会を中止にする必要が無いということだが、皆の者、作業を中止して話を聞いてもらえないだろうか？」

モーモスが兵士達に声高に呼びかけていく。

兵士や民達はざわめきながらもモーモスとオイジュスに注目していく。

アビス達も様子がおかしいことに気づいて駆けつけてくる。

「主、何の話をしてるのよ？」

瞬く間に私は大多数の聴衆に注目されることになる。

「モーモス、どういうつもりなのですか？」

オイジュスも目を閉じてて分かりにくいが、戸惑っているように見える。

「申し訳ありません、オイジュス様。ですが、私達には時間が無いのです。迫り来る脅威に対して…」

……。

モーモスの何かを決意したような痛々しい声にオイジュスは暫し沈黙する。

そして、諦めたかのようにため息をついた。

「分かりました。貴方に全てを任せます」

「有り難うございます、オイジュス様…」

モーモスはオイジュスに一礼をして、群衆の前へと出る。

「とんでも無いことを言う予感がするね、ご主人様」

「ケール」

ケールが私の隣で微笑んでいる。

「おそらくご主人様の今後を左右することを暴露するだろうね、彼女は…」

「私の今後に左右することだと？」

私のこれからの指針についてのことなのか…。

今の私はヴァルキリアの将校となっている。

いずれヴァルキリアから脱国して自由になりたいと夢見ているのだが、未だに叶う目処が立ってない。

さらにエルが洗脳され、人質として囚われていて逆らうこともできない。

私はこのまま一生ヒュプノスの飼い犬にされてしまう可能性だってある。

……。

果たして私はこのままでいいのだろうかと思ってしまう。

私の夢は酒池肉林の世界だ。

ヒュプノスの元で手柄を立てることで美女を侍ることも可能だろう。

だが、真の自由で得られるものは何もない。

嫌な任務を強制されることもあるだろう。

それは私が求めることに反するものだ。

今の状況下でも私の流儀に反している。

オイジュスをヴァルキリアに取り込んで戦争の大儀を手に入れようと腐心しているのだ。

エルを救うためにとはいえ、戦火を拡大させようとしている。

戦争が始まれば、力無き民が真っ先に犠牲になってしまう。

それに今回の任務が成功したところでエルを洗脳から戻してくれる保証は何処にも無い。

……。

何故、このようなことになってしまったのだ…。

やはり最強の力を手に入れた故の試練だというのか…。

苦悩している私の腕をケールは抱き寄せてくる。

「僕はご主人様がどんな選択をしても最後までついていくよ。今の僕がいるのは君のお陰だからね…」

……。

今だけはケールの優しさが身に染みてくる。

アビスは不機嫌そうに反対側の腕を抱き込む。

「私も忘れないでね。これからモーモス殿が何か言おうとしてるわ」

私はモーモスに注目した。

……。

「皆の者聞いて欲しい。此度の件でアースガルズは甚大な被害を被った。誰もが、神武闘式は続行不可だと思っているだろう。だが、私は神武闘式は続行しようと考えている」

周囲がざわめきだした。

今はアースガルズの復興が先決だから当然の反応だろう。

「皆の思いは分かっている。予算の面から考慮してするべきではないと。だから、決勝戦は中止にすることは変わりない。その代わり、私は大会を棄権したとして黒騎士ロースを今大会の優勝者とすることを宣言したい」

……。

周囲のざわめきがさらに増してきた。

モーモスは何と言ったのだ？

自分が棄権したとして私を決戦戦の勝者としようとしているのか！

私の動揺を余所にモーモスは話を進めていく。

「聖騎士である私が戦わずして負けを認める。騎士失格と罵られても仕方ない行為だ。だが、ロースならば、それでいいと思っている。実際に彼の実力は…悔しいが私よりも上だ。それに彼はアースガルズを救った英雄だ。充分にその資格がある…」

モーモスの話が途切れた瞬間、兵士達と民が騒ぎ出した。

「何故ですか！貴女様は我等がアースガルズの英雄なのですよ！その貴女様が異国の騎士に戦わずして勝利を譲るなんてありえない！」

「そうだ！そうだ！戦って負けるならまだしも、戦わずして勝ちを譲るなんてありえないぞ！」

「私は反対だ！彼は謎が多すぎる！素性も知れぬ相手に我等が英雄の経歴に泥を塗らせてたまるか！」

……。

あらん限りの罵詈雑言が飛び出ているな…。

まあ、当然の反応だろう。

逆の立場なら私でも文句の一つや二つが出てくるものだ。

兵士や民の不満にモーモスは沈黙している。

彼らの不満を一身に受けるつもりなのだろう。

だが、そこまでして私に勝ちを譲るものなのだろうか？

「奴にモーモス様が勝ちを譲るほどの資格があるのか！」

「正体不明の輩にオイジュス様の祝福を受ける資格は無い！」

……。

どうやら私はかなり嫌われているらしい。

まあ、神聖なる神武闘式を混乱させたわけだからな…。

さて、この事態を収拾するにはどうしたらよいのやらか…。

……。

「いや、彼にはその資格はある！」

罵詈雑言の嵐の中、一際大きく声が響き渡った。

いったい誰だ？

民衆は声がした方向に注目する。

……。

絢爛豪華な出で立ちで如何にも高貴な身分だという雰囲気を漂わせる男がそこにいた。

「アルセイヌ殿下…」

坊ちゃんだ。

モーモスは坊ちゃんの出現に驚いていた。

それもそうだろう。

坊ちゃんは今大会で棄権した選手の一人だからだ。

もう既に本国へと帰還しているものだと思ったが…。

民衆等は坊ちゃんを避けるようにして道を空けていく。

坊ちゃんは堂々と歩き、モーモスの隣まで来るのだった。

「ふん、美女が困っている所にグレイブあり。そう、私はアルセイヌ王国第二王位継承者たるグレイブ・アルセイヌである」

……。

恥も外聞も無く、恥ずかしいことを平然と言う所はある意味尊敬できると私は思ってしまった。

さすがは坊ちゃんだ。

「グレイブ殿下、どうして…」

「何も言うな、モーモス殿。あの黒騎士の勇姿に比べれば、今の私は肩書きを持っているだけの者に過ぎん」

坊ちゃんが私を認めているのか？

「皆の者、彼は間違いなく英雄だ。彼の戦いぶりを見ただろう。誰も彼には勝てはしない。私なぞ彼の強さに恐れを抱いて逃げてしまったわけだ。ふっ、我ながら笑ってしまうほどに情けない限りだ。皆も可笑しいと思うだろう。可笑しければ笑えばいい。今なら特別に許すぞ！さあ、笑え！」

……。

兵士も民も誰もが呆然としていた。

ここは笑うべきところなのだろうか？

さすがに分からないな…。

「どうした、遠慮は入らん！笑えばいいのだぞ！笑わないのか…。なら、私が笑おう。ははははははははっ！」

坊ちゃん、いや、アルセイヌ殿下は一人で笑い続けていた。

この空気の中で平然と笑い続けるとはますます侮れない。

相手が出来ないことを平然とやってのける根性は賞賛に値するだろう。

「ははははっ…はぁ…。なぜ、笑わなかった？本当はお前達も分かっているのだろう。口ばかり達者で自分達は何も出来ないことをな。モーモス殿は覚悟を持ってお前達に説いてきた。それに対してお前達は何だ？モーモス殿がどんな思いで話したのかを気にも止めず、出てくる言葉は不平不満！恥を知れっ！」

誰もが言葉を出せずにいた。

アルセイヌ殿下を笑えるほどに自分達は何かが出来たのかと考えているのだろう。

「もし、私を堂々と笑い飛ばせる者がいるとしたら、それはただ一人。黒騎士ロース殿のみだ！」

アルセイヌ殿下は私の元に歩み寄って肩に腕を回してくる。

馴れ馴れしいが、何故か別に不快な思いはしなかった。

「私は見た！彼がクロエ殿を助けるために怪物の体内に侵入する姿を！生きて帰れるかどうか分からない場所へ！彼は確かに強い！だが、人間であることに変わりないのだ！さあ、お前達、彼のように命を厭わず他者を助けるために怪物の体内へと潜り込めたか？恥を晒すようだが、私は恐くて出来ないだろう…」

誤解なのだが、あれはたまたま身体が怪物の体内に引きずり込まれただけであって…。

だが、今更そのようなことは白状は出来なかった。

「もう一つはクロエ殿の裁定の件だ。クロエ殿は結果的にアースガルズに甚大な被害をもたらし、極刑にされても不思議ではなかった。まあ、減刑されたのだが…。問題はそこではない！彼が何処にいたのかだ！お前達、ロース殿がどの場所に立っていたのか覚えているか？」

アルセイヌ殿下の問いに民衆はざわめき出す。

「確か…クロエ選手の隣に…立っていました…」

民衆の一人が申し訳程度の声で返答する。

アルセイヌ殿下はその答えに頷く。

「そうだ。ロース殿はクロエ殿の隣に立っていた。庇い立てするのでも無く、ただ静かにな…。私には分かる。彼は彼女の罪を見届けた上で支えようと決心していたのだ。皆が罪を追求して、取り囲んで震えていたクロエ殿を支えるために！彼ならば、例え全世界を敵に回そうと彼女を支えるために隣に立つだろう！お前達に出来るのか？罵られることを覚悟で罪人を支えることが…」

誰も答えることが出来なかった。

「黒騎士ロースは真の英雄だ。彼にならば、私は命を預けることも躊躇わない。なぜならば、彼は信じて付いてくる者を決して見捨てないからだ！そんな彼だからこそ、聖女様の祝福を受ける資格があると私は確信する…」

周囲は静まりかえっていた。

アルセイヌ殿下の言葉を必死に吟味しているのだろう。

そんな時だった。

「アルセイヌ殿下の言うとおりじゃよ。ロース殿にはその資格はあるぞい」

今度はしわがれた声が民衆の中で響いてきた。

民衆はまたしても声の主のために道を空けていく。

あのご老人は確か私に六角棒を譲ってくれた方だ！

「黒騎士ロース殿は実に良い好青年じゃ。儂が危なしげに歩いていた姿を見かねて助けてくれたからのう。他のもんは誰も見向きもしなかった中でのう。じゃから礼として儂の魂砕きを与えたのじゃからな」

モーモスはご老人の元に歩み出してくる。

「失礼ですが、貴方様はもしかしてアルバート・フォンベルク卿ではなのでしょうか？」

「ふむ、確かにそんな名じゃった気がするがのう」

ご老人がモーモスの問いに肯定をした瞬間、モーモスを初めとした護衛隊が跪き始めた。

いきなり何のだ？

「やはりそうであられましたか。ロースが所有している六角棒、何処かで見覚えがありましたが、フォンベルク卿がお譲りした魂砕きでしたとは…」

「暑苦しいから畏まらんでもよいわ。今の儂はただの爺じゃて」

何だか話に付いていけないぞ。

「このご老人はそれほど偉い人なのか？」

「この御方は、第一回から第十回までの神武闘式を十度連続で優勝された伝説の騎士アルバート・フォンベルク卿であらせられるぞ！彼の振るう棒で叩き伏せられた者は骨に留まらず、魂まで砕かれると言われたことから、その武器は魂砕きと呼ばれたのだ。騎士を志すものであれば、誰しもが聞いたことがあるはずだ」

モーモスが呆れたように私に教えてくれた。

なるほど。

このご老人は途轍もなく偉大であることは理解した。

だが、私にとっては敬うべき人生の先輩の一人に過ぎない。

いや、それだけではない。

このご老人は身内以外では唯一私を応援してくれた恩人でもある。

私にはそれで充分だ。

「フォンベルク殿、六角…この魂砕きは私の手足となって助けてくれました」

とりあえず偉い人であるならば礼を持って対応せねばな…。

尊敬する人であれば尚更だ。

「楽にしててかまわんよ。魂砕きもお主を気に入ってくれたようじゃしな。儂はお主に期待してるのじゃよ。来るべき歪みをもたらす者との戦いにな…」

「歪みをもたらす者…」

歪みをもたらす者か…。

『しかし、貴方様には過酷な運命が待ち受けています。この世界を歪んだ未来へと導く存在との果てしなく、苦しみと哀しみに満ちた戦いが…』

世界を歪んだ未来へと導く存在。

オイジュスは私が超常的な存在と戦う宿命にあると言っていた。

私の生き残り合戦で立ちふさがる最強最悪の敵なのだろうか？

嫌な宿命だな…。

ただでさえ、モロスやアーテという厄介な神に目を付けられているのだ。

その上、超次元の存在と戦う運命となれば、過労死どころでは済まないぞ。

出来れば夜逃げしたいところだが、神相手には無駄な抵抗なのだろう。

……。

まあいい。

得体の知れない者への対策を講じても仕方ないことだ。

今は分かりやすい問題に対して考察することにしよう。

「あの伝説の騎士アルバート様がお認めになられた方だったのか！」

「いや、しかし、奴はあの悪名高いヴァルキリアの回し者だぞ」

「だが、それではアルバート様の慧眼を疑うということになってしまう！」

何やら盛り上がり始めたようだが、当事者である私が何を言ったところで聞いてくれないだろう。

さて、どうなるのやらか…。

「お主等はロース殿の肩書きに拘るかのう？まあ、彼は確かに戦乱を巻き起こしているヴァルキリアの者じゃ。じゃが、大半の者は支配された国から狩り出された戦う奴隷じゃ。彼もそんな境遇の一人じゃろ」

アルバート殿は腰を叩きながらため息混じりで皆に説いていく。

「じゃったら、お主等に納得するような答えを示してやろうぞ。良いな、モーモス？」

「はぁ…しかし、ここで暴露しても宜しいのですか？民衆はまだ混乱しています。それにロースもまた混乱することに…」

モーモスとアルバート殿が不穏な空気を漂わせて話している。

いったい次は何を言うのだろうか？

「穏便に進めることは大切じゃ。じゃが、機を見て強引に事を進めることも然りじゃて。まずは証人に出てきてもらえばいいじゃろ。さすがのロース殿も彼女達の前でどうすることも出来ないじゃろうからのう。ふぉっふぉっふぉっ…」

ぬあっ！

何なのだ、この果てしない程に震えてしまう悪寒は！

私の勘が告げている！

早々にこの場から立ち去れと！

例え、卑怯者と罵られようとも捲土重来を待てと！

私の嫌な予感は百発百中、王室御用達の占術師に転職できるほどの超高確立で当たるのだ！

……。

これは逃亡ではない。

戦略的撤退である。

物を言い様だが、気分の問題だ。

さて、控え室に戻って精力が付く食事を頂くとするか…。

「オイジュス様や」

オイジュスはアルバート殿の呼びかけに頷き、私に声をかけてきた。

「ロース様、どうかこちらへ来て頂けませんか…」

……。

百人が見て百人が罠だと分かるような明らかな罠だった。

脳が筋肉で構成されている私でもこれほど分かりやすい罠に掛かると思っているのか…。

このロストを舐めるではない！

さて、気を取り直して胃薬の調達に向かうとするか…。

「どうかお願いします。もし、来て頂ければ何でも致します、ロース様…」

オイジュス様は祈る仕草で何処か熱を帯びたような声で私を再び誘ってきた。

……。

男は例え、嘘偽りであろうとも美女の誘いを断らないものである。

美女の嘘に敢えて便乗するのも男の甲斐性というものなのだ！

私は誘いに乗るぞ！

この先に奈落が待ち受けようとも！

そもそも美女の誘いを袖にするなぞありえん！

美女想う故に我有り！

私の存在意義に賭けて突貫してやる！

オイジュス様！

このロストめがいざ参りますぞ！

私がオイジュスの元に歩み寄ろうとしたときだった。

……。

ぬっ！

これは殺気か！

私は周囲を油断無く見渡す。

もしや、オイジュス様を狙う暗殺者なのか！

許せん！

私とオイジュス様の愛の営みに邪魔立てしようとするのか！

良かろう…。

何処の馬の骨かは知らんが生まれてきたことを後悔させてやるぞ！

さあ、何処だ？

……。

左だな…。

「そこだ！」

我が黄金の拳で砕けるがいい！

私は右に振り向き様に襲撃者に拳を叩きつける。

「きゃあああああああっ！」

……。

黄色い悲鳴だったな…。

私は拳をめり込ませている相手を見る。

モーモスと同様に黄金の髪を肩まで切り揃えている一見美青年に見える絶世の美女。

……。

「何者だ？」

私の拳をまともに喰らったのだ。

気絶していると思うが、お約束として一応声を掛けてみる。

「もう酷いじゃないですか！隊長！可愛い副官に対して余りもの仕打ちです！」

ぬあっ！

馬鹿な！

私の黄金の拳を喰らって尚も元気良く反応できるとは…。

この無駄に頑丈な美女はいったい…。

それに隊長と言っていたが、私の記憶の中で隊長と呼ぶ美女は…。

……。

エリアルト・リリエンフェルト！

愛称はエリー！

異名は殺戮戦姫！

……。

何故、エリーがいるのだ?

「ちょっと聞いているのですか?隊ちょ…はぐっ!」

エリーの溝に再び私の拳がめり込む。

今度こそ沈没したようだ。

昔からエリーに対してだけは容赦無く修正していたものだった。

私はエリーが本物かどうか武器検査の要領で身体に触れていった。

この肌触り、感触、遺憾ともし難いが間違いなくエリーだ。

「父様、もう少し優しく女性を扱うものですよ」

「ロンの言うとおりです!それに手つきが嫌らしかったですよ、閣下」

エクリアとロンは私を非難してくるがエリーは襲撃者だ。

何ら容赦する必要は無い。

……。

だが、生きていたのだな…。

私は気絶したエリーを抱き締める。

彼女は思い込みの激しさや騒がしさが無ければ文句無しの美女なのだ。

この抱き心地は久しぶりだな。

「主、彼女はいったい何者なの？」

「後で話す。彼女を頼む」

私はエリーをアビスに預からせて再びオイジュス様の元へと歩もうとする。

さあ、今度こそ！

ん？

オイジュス様の隣にいつの間にか大柄な女が立っている。

もちろんモーモスではない。

大柄な女の容姿を分析してみようか。

……。

美青年風の麗しき容貌。

肩よりも少し短く切り揃えた燃えるような紅い髪。

野性的な色黒な肌。

妖艶な紫色の口紅に彩られた肉感的な唇。

……。

エリーがいる時点で気づくべきだった。

そういえば、アースガルズは国籍を問わず移民を受け入れたり、戦災孤児の世話もしていると聞いたことがある。

アースガルズは中立国だ。

敗戦国の難民を受け入れたりもするだろう。

大柄な女性の名はタナトス・ヴァルキリア。

元ヴァルキリア帝国第二皇女。

私の最初の妻だ。

タナトスの目は涙ぐんでいた。

私は思わず身じろぐ。

ヴァルキリアに囚われたとは言え、やはり何らかの形で生きていることを伝えるべきだったか…。

とりあえず声を掛けねば…。

「久しぶりだな…」

……。

タナトスは沈黙したままだった。

何か反応して欲しいのだが…。

……。

「旦那様！」

ぬぐぅおっ！

タナトスは瞬時に私の間合いに入って抱き締めてきた。

ぬぐおおおおおっ！

足が浮いているぞ！

これは抱擁ではない！

必殺の鯖折りだ！

「俺を心配させるとは良い度胸だ！旦那様には誰が一番愛しているのかを俺がまた一から教えてやる必要があるようだな！まずは俺の熱い抱擁を死ぬほど堪能しろ！」

ぐおおおおおおおっ！

頭蓋骨が潰れる！

背骨がへし折られる！

……。

……。

…。

「ふぅ…、久々の愛しい妻の抱擁を味わえて嬉しかっただろう？」

……。

「嬉しかっただろう？旦那様…」

「はい…」

私の身体は軟体動物宜しくの状態となり、やっとタナトスの鯖折りから解放された。

「相変わらず激しいね、タナトス様」

ケールがタナトスに声を掛ける。

タナトスとケール。

ヴァルキリアの二枚看板が揃った瞬間だった。

「タナトスでいい。久しいな、ケール。どうやら薬を止めたようだな」

タナトスはごく自然にケールに応じる。

「お陰様でね。今はそこで軟体動物になっている彼の妻になっているよ。それにしても、まさか君と同じ男性を夫にするなんて思いもしなかったよ」

「ふっ、違いないな」

二人は力強く手を取り合う。

「また会えて嬉しいぞ、ケール」

「僕も嬉しいよ、タナトス」

熱い男の友情を思わせるような再会場面だ。

どうやら同じ男性の妻になっていることに対しては全く気にしていないらしい。

それよりも早く全身骨折の治癒をして立ち去らねば…。

エリーとタナトスがいるのだ。

ならば、必ずあの御方もいるはず…。

身体の傷よ、早く治れ！

うおおおおおおおおっ！

……。

「何、そこで無様に這い蹲っているのかしら？」

広場の空気が凍り付く。

それほどまでに冷たく凍えるような声が響いてきたのだ。

……。

やはり、生きていたのか…。

民衆は畏怖するかのように声を出した主のために道を開いていく。

軽やかながらも脳髄に重く響くような足音。

熱気が漂っていた空気を瞬時に凍りつかせる絶対零度の如くの威圧感。

「この威圧感は…ヒュプノス殿下にも勝るとも劣りません…」

エクリアも氷のような威圧感に圧倒されているようだ。

足音が大きくなり、私の元へと近づいてくる。

女は蹲っている私を見下すようにして佇む。

……。

冷たく涼やかなる風を運ぶ冬を思わせるような颯爽とした振る舞い。

見た物を凍り付かせるような冷たい眼差し。
腰まである銀色の髪を靡かせる姿。
ブリュンスタッド王国の戦の女神。
二つ名は氷葬の死神。
彼女の名は…。
「久しぶりね」
アイリウス・アストレイリア将軍。
愛称はアイリ。
私は見上げてアイリを見る。
アイリは冷たい目で私を見下していた。
「懐かしの上司に再会したのよ。気の利いた台詞の一つも無いのかしらね」
……。
「それとも、感動のあまり声も出せない状態なの？だったら感動に打ち震えてむせび泣くくらいの反応は見せて欲しいわね」
くっ！

アイリめ！

分かっていて言っているのだろう！

我が天敵よ！

「確か今は黒騎士ロースと名乗っているのだったわね。ロース、私は貴方に英雄になるように言い聞かせたはずよ。私の勘違いだったかしら？」

「はっ！確かに仰りました！」

勝手に反応してしまう自分の身体が憎い！

「だったらなぜ黒騎士と名乗っているのかしら？よりにもよってお伽噺に出てくる悪役の代表格を…。これは私に対する当てつけのつもりなの？」

「いえっ！滅相も御座いません！」

これが刷り込みというものなのだろうか…。

だが、私は身体は屈しても、魂は屈しないぞ！

貴様とはいずれ決着を付けてやる！

覚悟しろ！

「さて、申し開きはあるのかしら？」

「申し訳有りません！」

まずは謝りましょう。

人は自らの過ちを認めて前に進むものである。

……。

とりあえず早く身体を全快にして立ち上がろう。

いつまでも地面に這い蹲ったままでは締まらな過ぎる。

このままの状態でアイリに冷たい目で見下されていると危ない嗜好に目覚めかねない。

私は至って普通なのだ。

第５５話：驚天動地（後書き）

この三人のヒロインが戻ったことで最初の頃のお馬鹿なノリに少し戻れた気がします。

御感想をお待ちしています！

第５６話：運命の選択肢

民衆は三人の女性が出現したことで戸惑っていた。

……。

まあ、普通は戸惑うだろう。

エリーはともかく、アイリとタナトスの存在感は強烈だからな…。

「皆の者、色々と混乱していることだろう。少し間を置いて冷静に考えてくれることを期待し、小休止とする。太陽が一番高く登る時にまたこの広場にて皆の納得するように説明することを約束する。だから、一旦解散してくれ」

モーモスの一声により、民衆は散らばっていった。

「まあ、いきなり納得しろと言うのも無理な話じゃ。が、少なくとも種は蒔かれた。後は芽が出てくるのを待つのみじゃ」

アルバート殿は代わらず飄々としていた。

さすが長生きしていることがあって何事にも動じる様子が無い。

私にもその胆力を分けて欲しいものである。

「何、余所見しているんだ？旦那様…」

今、私は正座させられていた。

クロエから頂いた覆面は外している。

民衆が立ち去った今、素顔を隠す必要が無いとアイリに取り上げられたのだ。

隣にはタナトスが私の首に腕を回して寄りかかっている。

「タナトス殿、ロースを怖がらせては駄目よ。あまり怖がらせると尋問が上手く出来ないのだから」

その後、半刻も立たないうちに復活したエリーが私の顔を覗き込むように良い笑顔を投げかけている。

「隊長、いい加減に洗いざらい白状したほうが身のためですよ」

……。

正直、恐すぎるぞ…。

これが捕虜に対する尋問だというのか…。

私では到底耐えられないものだな…。

とりあえず、洗いざらい話そうか。

特に隠し立てをする必要が無いからな…。

……。

……。

…。

「まあ、貴方も貴方なりに苦労していたのは分かるわ。その、エルという娘を人質にされて無理矢理従わされていることも…。それについては何も言わない。女が増えているのも今更ね。だけど…」

アイリは立ち上がり、正座している私を見下ろす。

「黒騎士なんて物騒な名を名乗っていたのは許し難いわ。私は貴方が後世に轟かせるほどの英雄になることを期待して目を掛けたのよ。分かってるの？貴方は私の顔に泥を塗ったのよ」

アイリにとってそれが一番重要なことなのか…。

「将軍閣下も素直ではないですね。神武闘式で隊長の勇姿を見たときは涙を流し…ふごっ！」

アイリの手刀が脳天に炸裂し、エリーは再び沈没した。

「黙りなさい。まあ、度し難いけど、それらを帳消しにするような企画が進行しているらしいし、この件については保留にするわ」

結局、許さないのか…。

「何て言うか、凄い存在感ね…」

アビスはアイリの様子を唖然と見ていた。

「久しぶりだな、アビス。エルのことは気の毒に思う」

不意にタナトスはアビスに話しかけていた。

「あっ…大丈夫です。姉者は死んだわけじゃありませんから、何とかなります。それにタナトス様が悪いんじゃなくてヒュプノス殿下が悪いんですから」

アビスはタナトスがヒュプノスのことで責任を感じていることを気遣い、自分は大丈夫だと言っているように見えた。

「そうか、お前は強いな…」

「アビスは強いよ。何たって彼女が一番ご主人様を支えていたのだからね」

ケールはタナトスの肩を叩く。

そういえば、タナトスとエルはよく喧嘩していてアビスはそれを仲裁する役目だったと聞いたことがあったな。

この場にエルがいないのが残念だ…。

「父様、私にも紹介してください」

ロンが私の顔を覗き込んでくる。

「旦那様、俺の耳が逝かれてしまったのだろうか？この娘は旦那様のことを父様と呼んでいたように聞こえたがな…」

タナトスが私の首筋に息を吹きかけ、首に回している腕に力が籠もっている。

「ロン、リー・ロンファンはフェイロン共和国の軍人で、戦争で両親を亡くしたらしく、今は私が父代わりとなっている…」

「そうか。旦那様は優しいんだな。惚れ直したぞ…んちゅうううぅ！」

タナトスは私を引き寄せて唇を私の頬に押しつけてきた。

彼女は感激すると所構わず愛情表現を遠慮無く行使してくるのだ。

「ちゅうううううっ！」

気持ちいいのだが、頬が唇に抓られて引きちぎられそうな感触もして痛い。

「ちゅぱっ…優しいのは旦那様の美徳だが、俺を一番愛してくれることを忘れるなよ」

「ああ…」

私はひりひりする頬をさすりながら答えた。

「えっと、タナトス殿とエリアルト殿、アイリウス殿もみんな、父様の妻ということなのでしょうか？」

ロンは伺うように私を見つめてくる。

「そうですよ！」

ぬおっ！

エリーが復活した！

「私と将軍閣下、そして、タナトス殿は皆、隊長の妻なのです。ちなみに正室はタナトス殿らしいです」

「エリーの言うとおり、俺が旦那様の一番最初の妻だ。覚えておくがいい」

エリーに呷られるようにタナトスも応じてくる。

確かにタナトスが公式的にも私の最初の妻になったのだ。

「そうですか、だったら私は姉様が三人に増えたって事になるんですね！タナトス姉様、エリアルト姉様、アイリウス姉様。私のことをロンとお呼びください」

……。

ロンの発言に場が静まりかえった。

タナトスがロンに近づいてくる。

「えっ…えっと、何ですか…」

ロンはタナトスがいきなり近づいてきたことで怯えたのか少し後ずさっていた。

「さっきの言葉、もう一度言ってくれないか…」

「さっきの言葉って…ええと…タナトス…姉様…」

タナトスはロンを抱き締める。

「あれっ、タナトス姉様？」

「ロン！お前は何て可愛い奴なんだ！お前は俺の妹だ！姉様が何でも聞いてやるぞ！」

タナトスはロンに頬刷りして愛でるのだった。

さすがはロンだ。

ここでさらに百合要員を増やすとは侮れないな…。

「ちょっと、苦しいです」

「おおっ、済まない。大丈夫か、ロン」

タナトスはロンを解放してロンの頭を撫でている。

……。

私にもあれぐらい優しくして欲しいものだ…。

「妬いているのですか？隊長。大丈夫です、その分だけ私が優しくしますから」

エリーは私を慰めるように抱き締めてくる。

私はエリーを抱き締めて感触を堪能する。

やはり抱き心地は良いものだ…。

ん？

オイジュスがモーモスに導かれるようにして私の元に歩んできている。

私の前にオイジュスは来て、実に良い笑顔で話しかけてきた。

「私は目が見えませんが、甘い雰囲気であることは分かります。かなり多くの女性にもてられているようですね…。もう私の祝福は必要無いと思えるほどに…」

……。

「けど、ご心配無く私は貴方様の全てを受け入れるとガイア神に誓っていますからどうぞ私のことは気になさらずご自由に楽しんでくださいね…」

……。

抱き締めてくれていたエリーがいつの間にか消えていた。

エリー！

貴様だけは私に優しくしてくれるのではなかったのか！

オイジュス、いや、オイジュス様は笑顔を絶やさず優しげに話してくる。

だが、この途方もなく感じてくる威圧感は何なのだ！

「どうされましたか？息づかいが荒くなっていますよ。まるで何かに怯えているかのように…」

……。

私はこの聖女様をどうやら侮っていたようだ。

兵士達を指揮していた姿といい、彼女はか弱い女ではない。

聖女の微笑みを向けながらも裏では汚れたことでも平気で実行する胆力があると見た。

アイリに匹敵するほどの猛者だ。

「あの聖女様、侮れないわね…」

アイリもそれに気づいたのか、一目置いているようだ。

「私はどれほどロース様が女を侍らせようとかまいませんよ。ガイア神は如何なる愚者も見捨てませんからね…」

「どうかお許し下さい！」

私は懺悔をするようにしてオイジュス様の元で跪く。

彼女にだけは絶対に逆らってはいけない。

……。

「ふふっ…」

オイジュス様が笑っている。

「ふふっ、すいません。私としたことが…。ロース様の周りの空気が余りにも楽しく感じましたのでつい嫉妬してしまいました。どうか楽にしてください」

凍り付いていた空気が溶け出した気がした。

危機一髪だったな…。

「さすが、聖女様。寛大なお心をお持ちですね」

空気が和らいだの見計らってか、エリーが姿を見せてくる。

「エリー…」

「どうしたのですか?隊長。そんなに恐い顔をして…えっ…何ですか?何で首を絞めてくるのですか!ちょっと、苦しいです!あううっ…がふぅ…」

私は締め落としたエリーを捨てておき、モーモスの方に目を向ける。

「モーモス、理由を聞いていいか？」

私はモーモスに唐突に話を切り出す。

何の理由についてはモーモスは承知のはずだ。

「お前を優勝者にしようとしていることについてか？」

私は無言で頷く。

どう考えても私を優勝者に仕立て上げても何の利益も無い。

しかも私は自分で言うのも何だがヴァルキリアの回し者だ。

アースガルズの民衆も私達がこの国に来たときは歓迎してくれたが、それは店に来た客を応対する程度の応対にしか過ぎない。

内心では好意的では無いと今回の神武闘式を通して肌で感じた。

モーモスもそれは承知のはずだ。

なぜ、アースガルズの民に好意的に見られていない私を担ぎ上げようとしているのか？

「そうだな、普通では考えられないことだろう。私自身も驚いている。だが、もしお前が本当の黒騎士であるならば、私はお前に勝利を譲ろうとしなかっただろう。アイリウス殿から全てを聞いたよ。黒騎士ロース、いや、元ブリュンスタッド王国斬り込み隊長ロスト殿。それがお前の正体だな…」

……。

自分のことながらも懐かしい肩書きだと思った…。

私の受難の最初の関門だったからな…。

「その名声はお前が思っているよりも世界に広まっているのだぞ。なにせ無敵の快進撃を続けていたヴァルキリア帝国は初めて退けたこと。そして、勇者殺しと呼ばれ、畏怖されていた英雄タナトスを一騎打ちで打ち負かした武勇。まさに伝説とまで歌われているほどの活躍だと当時では持てはやされたものだ」

……。

それほどまでに私は有名になっていたのか…。

あの時は死にたくない一身で戦場を駆け回っていた。

後、アイリの監視がある中で後方支援という楽な位置に立てなかったのも原因だ。

エリーも余計な風評を流して、私をタナトスとの一騎打ちに持ち込んだものだからな…。

「何だか知らないが、お前も苦労したのだな…」

モーモスは同情的な眼差しで見てくれている。

彼女は良い人のようだ。

この手の者は自分のやりたいことを溜め込んで遠慮するのだろう。

だから、私に勝利を譲り、担ぎ上げようとしているわけだ。

もっとも担ぎ上げる理由は分からないが…。

それよりも私の正体をアースガルズ全国民に明かして、優勝者として認めるよう仕向けるのか？

しかし、個人的には余り正体を明かされたくは無いのだが…。

「けど、それだけじゃあ主を担ぎ上げる理由にはならないわよ。何を企んでるの？」

沈黙していたアビスが疑問を投げかけてくる。

「言っておくけど、主の害悪になるようなことだったら私が許さないわよ」

……。

モーモスはアースガルズの要人で、アビスはただのヴァルキリアの工作員でしかない。

そのアビスがモーモスにこのような口の利き方をすれば不敬罪では済まないぞ。

「アビス…」

私はアビスを見る。

「ご免なさい。けど、もう耐えられないの！主が泥沼の世界で主が藻掻いて苦しむ姿に！ただでさえ、私と姉者のために主がヴァルキリアに囚われてしまっているのに…」

アビスは俯いている。

彼女は私にこれ以上の陰謀渦巻く世界に立ち寄って欲しくないと思っているのだ…。

「アビス」

「主…あっ」

私はアビスの頭を抱き寄せる。

「確かに切っ掛けはお前達姉妹だった。だが、私は自分の心に従ってのことだ。陰謀の渦には巻き込まれたが、その代わりお前達という家族を得ることができた。後悔はしていない…」

世の中、何の代償も無く手に入れれる物は無いと私は思っている。

アビスとエルと言う家族を得る引き替えに平和な日常を奪われたのであれば致し方ないものだ。

それに奪われたものは奪い返せばいいだけのことだ。

「アビスこそ私と出会わなければ、エルがヒュプノスに目を付けられることは無かったのだ。私こそ済まないと思っている」

私に出会わなければ、二人は何もなく手を取り合っていけたはずだからな…。

うぐっ！

アビスは私の背中が折れるほどに強く抱き締めてきた。

「そんなことはないわ！私も姉者も後悔なんかしていない…」

「そうか。だったら、この話はもう終わりだ」

私はアビスを解放する。

我ながら気障な行為をしてしまったものだ。

これではグレイブ殿下のことを悪く言えないな…。

「さすがは俺の旦那様だな。惚れ直したぜ！」

タナトスは私の頭を抱え込んでくる。

ぐおおおおっ！

タナトスの腕と胸に圧殺されてしまう！

気持ち良いが、今は御免被るぞ！

「ぬおっ！」

私は無理矢理タナトスの腕を引きはがす。

危うく再び軟体動物に先祖帰りするところだったぞ…。

「ふっ、釣れない旦那様だな」

ただ頭蓋骨が潰れそうだったから引きはがしただけだ！と言いたかったが、我慢する。

……。

とりあえず話を進ませよう。

「タナトス殿の言う通り、お前には惹き付ける何かがあるようだな。だからこそ、頼みたい。黒騎士ロース、いや、ロスト殿。貴方にこの国の王になってもらいたい」

……。

……。

……。

……。

…。

何ですと？

「耳がいかれてしまったのだろうか？もう一度言ってくれないか？」

「いくらでも言おう。ロスト殿、貴方に王になってもらいたい」

私は周囲をモーモスから視線を逸らし、周囲を見渡す。

誰もが驚愕している表情だ。

いや、一人だけ笑みを浮かべている女がいる。

アイリ…。

『黙りなさい。まあ、度し難いけど、それらを帳消しにするような企画が進行しているらしいし、この件については保留にするわ』

あの言葉の意味はこのことだったのか…。

「モーモス、私からも聞いても宜しいですか？」

沈黙を破ったのは油断ならない聖女オイジュス様。

「宗教国家であるアースガルズは王位はありません。ブリュンスタッド王国の英雄ロスト様を担ぎ上げるというのはすなわち…」

「オイジュス様のお察しの通り、アースガルズもまた乱世に乗り出すことが必要だと判断したからです」

……。

「まあ、必要かもしれないわね…」

誰もが、いや、アイリ以外が言葉を失っている。

アースガルズは建国以来、戦争には一切不干渉を貫いていた。
その伝統をモーモスは覆そうとしているのだ。

「それは無辜の民を戦乱へと追いやってしまうことを承知で申しているのですか？」

「承知の上です。ですが、このまま中立を貫いても同様のこと。我が国の北には武力で世界を制圧せんとするヴァルキリア帝国とその支配下にある諸国、南には謎に包まれた大国ビフレスト皇国を中心とする反ヴァルキリア帝国同盟。この二大勢力はいずれぶつかり合います。そう、ヴァルキリア帝国初代皇帝カオス・ヴァルキリアが引き起こしたと言われる世界を二つに分けた忌まわしき戦い、聖戦が今まさに迫っているのです！」

ヴァルキリア帝国初代皇帝カオス・ヴァルキリアが女の楽園を造り上げるために全世界に戦争を仕掛けたと言われる聖戦。

ヴァルキリア帝国と世界が激突した歴史上最も凄惨で壮絶と言わしめた戦争。

……。

ヒュプノスは言っていた。

いずれ、ビフレストに宣戦布告すると…。

ヒュプノスはカオスの意志を継いで再び聖戦を引き起こそうとしているのか…。

「それとヨツンヘイム襲撃事件のことです。パラディスム家は我が国同様に特定の勢力に属さない中立的勢力。そのバラディスムへの襲撃。今回、クロエ殿を通して明るみに出ましたが、おそらく我等への警告も兼ねているとも考えられます」

「曖昧な態度は許さない。逆らえば容赦しない、ということですか…」

モーモスは無言で頷く。

「いずれにしろビフレストとヴァルキリアの戦争が始まれば、両国に挟まれている我が国は真っ先に狙われることになります。だからこそ、我等も英雄を立ち上げて、乱世に乗り出さねばならないのです。でなければ、ただ食われるだけの国となりましょう」

「私は戦の歌を歌いますが、民を戦へ扇動することはできません。それは行えば、私は聖女ではなくなります。別に地位に執着するつもりはありませんが、信者を裏切れません。それを貴女は承知している。だからこそ、聖女を別として英雄であるロスト様を王に担ぎ上げて、戦を扇動するというわけですか…」

……。

つまり私が聖女とは別のアースガルズの象徴となることで乱世に乗りだそうとしているわけか…。

「ご明察のほどを。私はこの国を何としても守りたいのです。これも全てはアースガルズ、貴女様のためです。平にご容赦を…」

オイジュス様は暫し沈黙する。

……。

「私は聖女です。ですが、それ以上にこのアースガルズを愛する民の一人でもあります。モーモス、貴女のアースガルズへの想いは確かなものです。ですが、肝心なことを忘れていますよ」

モーモスは息を呑んで答える。

「いいえ、分かっております。ロスト殿の意志を問うことですね…」

モーモスの答えにオイジュス様は頷く。

モーモスとオイジュス様は私を見つめてくる。

「ロスト殿、唐突なようで申し訳ない。だが、お前に王になってもらいたいという想いは本物だ」

「ロスト様、どうか貴方様の御心に従ってください。大切なのは飽くまで人の意志。貴方様はヴァルキリアに所属する者。エル殿のこともあります。アースガルズの事情は二の次とお考え下さい。それと私は貴方様に祝福を捧げたいと思っています」

私はオイジュス様の言葉に目を見開く。

オイジュス様もまた私を優勝者として認めようとしてくれている。

「貴方様の背景はどうあれ、アースガルズを救った英雄であることには変わりありません。これはアースガルズの王になることとは別

です。私は聖女として英雄である貴方様に祝福を捧げたいのです。ですからどうか貴方様の経歴を民に明かすことをお許しください…」

私の経歴を明かす。

すなわち私がブリュンスタッド出身であることをアースガルズに明かすということだ。

「私は神の前で偽りを装う者に祝福を授けることが許されないのです。民を裏切ることにもなります。もし、経歴を明かし、祝福を受け取って頂ければ、私は貴方様に何処へなりとも付き従いましょう」

「オイジュス様！」

モーモスが声を荒げる。

何処へなりとも付き従うということは私と共にヴァルキリアへと付いていくと言っているようなものだ。

彼女は私にアースガルズの事情は二の次でいいと先ほど言っていた。

だが、それ以上に自分の手札を全てさらけ出すこともして見せたのだ。

さらに私にも自分の手の内を明かすことを要求してきている。

いや、それよりも私がアースガルズとヴァルキリア、どちらを選択してもオイジュス様は私に付き従うことになるのだ。

……。

自分は全てをさらけ出し、覚悟を見せた。

だから、私にも相応の覚悟を持ってアースガルズとヴァルキリア、どちらかを自分の意志で選択しろとのことなのか…。

何て事だ…。

これは人生最大にして超難問の選択問題ではないか…。

「モーモス、太陽が一番高く昇る時に説明すると民にいいましたね。優勝者についてのこと、この国の行く末に関する重大事項を一週間後に発表することを伝えるのです」

オイジュスの壮絶な決意にさすがにアイリも含めて誰しもが言葉を失う。

「モーモス、貴方がアースガルズを想うように、私もまたアースガルズを愛しています。これが私の覚悟です」

「オイジュス様…」

モーモスはオイジュスの前に跪く。

「貴女様こそがアースガルズの女神です。そんな貴女様の従者でいられることを私は誇りに思います」

「アースガルズを想う気持ちに従者も聖女もありません。ロスト様、猶予は一週間です。そのままアースガルズを去るのも良し。誰も貴方様を責めません。ですが、どうか後悔の無いように…」

オイジュス様は侍女に手を引かれていき、去っていった。

その後、モーモスは民衆に一週間後に重大発表することを伝え、解散することになった。

「俺は旦那様がどんな選択をしようと付いていくぜ。じゃあ、また後でな…ちゅ」

「僕もご主人様の選択を謹んで受け入れるつもりでいるよ。君は僕の居場所なのだからね。だから、どこまでも君についていくさ。では、失礼するよ…ちゅ」

タナトスとケールは私の顔を挟み込むように口づけをすると去っていく。

二人はどうやら再会を祝して酒を飲み交わすようだ。

「主…」

アビスは縋るように私を見てくる。

そうだ。

もし、私がアースガルズを選択すれば、エルを見捨てることにも繋がるのだ。

「私のことは大丈夫だから…」

何が大丈夫だというのだ?

「私はあんたがどちらを選んでも付いていく。だから、遠慮しないでね…」

お前はそれでいいというのか？

アビスは地面に寝そべっているエリーの身体を揺する。

「エリアルト殿、ここで寝ていると風邪引くわよ。起きて」

「はっ！私はなぜ寝ていたのでしょうか？あっ！アビス殿、お早う御座います。私のことはエリーと呼んでください！」

エリーの気安い態度にアビスは微笑み、ゆっくりと抱き起こしていく。

「もう夕方よ。お早うどころか、もうすぐお休みになるわ。さあ、身体が冷えるから中に入りましょう、エリー」

「アビス姉様、私もご一緒しても宜しいでしょうか？」

ロンもアビスの元に駆けつけていき、背中から抱きついてくる。

「ちょっと押さないでロン！エリーも押さないでよもう！」

アビスはエリーとロンにじゃれつかれて笑っていた。

妹が二人出来たようだな…。

「主、また後でね…」

アビスは私に儚げな笑みを見せて、ロンとエリーを伴って去っていく。

「では、閣下。私も失礼します…」

エクリアもアビスを追いかけるように去っていく。

そういえば、重要な話し合いをしていたのも関わらずエクリアは口を挟むことは無かったな…。

口が開けば、本一頁分ほど話すほどのエクリアが大人しかったとは…。

何かがありそうだな…。

……。

「ロスト…」

私の隣にアイリが立つ。

「何だ？」

「英雄には二通りあるわ。万人のための英雄、そして、一握りの者のための英雄。私は貴方がどちらを選ぼうと構わないわ。でも…」

アイリは唐突に私の襟を引き寄せる。

「私を失望させたら…殺すわよ…んっ！」

……。

私はアイリと唇を重ね合わせたまま立ちつくしていた。

……。

「お休み、私の英雄殿」

アイリは髪を掻き上げて颯爽と立ち去っていく。

私はアイリの温もりが残っている自分の唇に触れる。

アイリめ…。

またしても退路が塞がれてしまったようだ…。

「青春しとるのう。若い頃を思い出すわい」

アルバート殿が笑いながら肩を叩いてくる。

「じっくりと考えるのじゃ。誰かに相談するのも良し。後悔のないようにするのじゃぞ」

そう言ってアルバートも去っていく。

……。

選択の時が来たのか…。

さて、私を何を持って決めればいいのだ?

「貴公も大変だな。まあ、私も気持ちは分かる」

立ちつくしていた私に話しかけてくれたのはアルセイヌ殿下だった。

「私のことはグレイブと呼び捨ててくれ。あの時は済まなかったな。貴公の女を物のように寄越せと言ってしまって…。どうか、許して欲しい…」

グレイブは私に向かって頭を下げてくる。

「いえ、過去のことは水に流しましょう。私はもう気にしていません」

王族が頭を下げたのだ。

こちらも相応の態度で望まねばならない。

「そう言ってくれて助かるよ。堅苦しい口調もしなくてもいい。貴公とは対等でありたいのだ」

「わかり…わかった。それとあの時は弁護してくれて礼を言う」

グレイブは真摯に私と関わろうとしてくれている。

それにアルバート殿と同様に身内以外で私を色眼鏡無しで見てくれた人物だ。

私も誠意を持って接せねば…。

「気にすることはない。私は貴公のあの姿を見て初心に戻った気分でいる。むしろ、こちらが感謝したいぐらいだ。まあ、堅い話はこれぐらいにして、貴公も大変だな。あれほどの強烈な個性を持った美女達に囲われては腰痛が絶えないのではないか？」

確かに腰痛は絶えないだろう。

「あ、ああ。そうだな…」

それにしても何だか同志に語りかけているような気安さだな。

別に不快ではないが…。

「私もその気持ちはよく分かる。私も本国では百人以上もの愛人を抱えているからな。百人が百人とも個性的で魅力的な女性だから扱いに困っているところだ」

百人以上だと！

「百人以上とは凄いな…」

「何を言っている？私も貴公も溢れる精力を持てあましている時だ。百人どころか千人でも万人でも捌く気概を持たねば男として生まれてきた甲斐が無いぞ！」

グレイブは力強く私の肩を叩いてくる。

……。

私はここで人生の先輩を見つけたような気がした。

彼は私よりも一足も二足も早く酒池肉林の世界を築き上げようとしている。

「この乱世が終わったら、私の国に立ち寄ったらどうだ？貴公ならば、いくらでも女を紹介してやってもいいぞ」

「宜しく頼む」

私は夢を語り合える友に出会えたようだ。

「まかせておけ」

私とグレイブ殿は熱い握手を交わす。

煩悩で結ばれた男の友情がここに生まれた瞬間だった。

「友との出会いを祝して酒を飲み交わそう。良い店を知っているぞ」

私は酒場でグレイブ殿と義兄弟の契りも交わしていった。

……。

……。

…。

私は今後の人生を左右する選択肢を迫られている。

果たしてどのような形で選択するのかは自分でも分からない。

どちらを選択したにせよ、禄でも無い展開がその先には待ち受けているだろう。

だから、今は酒を飲みまくることにしよう。

現実逃避だと罵られるかもしれない。

だが、楽しめるうちに楽しんでおくことも私には必要なことなのだ。

近い将来、戦争が必ず起こる。

そして、毎日が最後の晩餐となるのだろう。

……。

私は変わらない。

何が何でも生き残る。

私の家族と共に…。

それが私の中にある確かな真実なのだ。

第57話：アーテ

ここは何処だ？

私はいつの間にか森の中に佇んでいた。

この森は見覚えがある。

確か私の村の近くにあった森だ。

ならば、ここは夢の世界だということか…。

最近の私は夢の世界につくづく縁があるようだな…。

それに私の身体は幽体となっている。

周囲の物に触れることができない。

私はこの世界には一切干渉が出来ないようだ。

それにしても私はこのような奇天烈な展開を平然と受け止めている
自分に驚いていた。

どうやら私の中で非常識な事態が常識の範疇になりつつあるらしい。

人の順応性の凄まじさには度々驚かされる。

「ははははははっ！どうだ！我が黄金の拳は！思い知ったか！」

子供が無駄過ぎるほどに偉そうに高笑いしているのが目に留まった。
足下には少年が仰向けになって悔しそうに呻いていた。
「くそっ！こいつ喧嘩つええなあ！」
「やっぱりこいつが村で一番の腕っ節だぜ！」
偉そうな少年を中心に子供達が騒いでいる。
……。
何故だ？
何故、昔の私がいるのだ？
「ははははは！私のことを喧嘩番長と呼ぶがいい！」
子供ながら何と恥ずかしいことを私は言っていたのだろうか…。
「喧嘩番長参上！」
「喧嘩番長上等！」
「喧嘩番長最強！」
「ははははっ！貴様等！もっと私を讃えるがいい！ははははは！」
この夢の世界はどうやら私の少年時代を映し出しているようだ。

誰が何の目的で私に少年時代を見せているのかは分からない。

しかし、余りにも痛すぎる少年時代だぞ…。

……。

……。

…。

「よしっ！今日の喧嘩はここまでだ！貴様等解散しろ！」

子供の私のかけ声に周囲の子供達は散り散りになっていく。

「じゃあな、ロスト！」

「次こそぶちのめしてやるぜ！ロスト！」

「ははははははっ！いつでも掛かってこい！貴様等全員漏れなく返り討ちにしてやるわ！ははははははっ！」

もう消えてしまいたい…。

子供の私は一人となり、拳を振るって修行を開始していた。

「男は常に強くあらねばならない！これが喧嘩番長の宿命なのだ！私は今猛烈に輝いているぞ！ははははははっ！」

どこまで昔の私は痛すぎるのだ…。

今でこそ無口になっている私だが、昔の私は自分が思っていることを口に出さずにはいられない性格だったようだな…。

いや、だからこそ今の私は無口になったというわけなのか…。

今更ながら自分がなぜ無口になったのかを理解した私だった。

子供の私、いや、子供ロストと呼ぶことにしよう。

子供ロストは不意に拳を振るうのを中断させる。

「むっ！何だ？この甘ったるい香りは！これは事件の匂いがしてくるな！村の平和を守るために喧嘩番長ロスト様が事件解明に乗り出してくれるわ！待っているがいい！ははははははっ！」

猟犬並の嗅覚だな…。

子供ロストは匂いがしてくる方向へと猛然と駆けていく。

我ながら何て無謀な野郎だったのだ！

恐れを知らないにもほどがあるぞ！

これでよく少年時代を生き延びたものだ…。

思えば、私の運勢は少年時代に全て使い果たしたのかもしれない。

私は子供ロストを追いかけていった。

……。

……。

…。

「私の村を脅かす者よ！何処にいる！例え、神が許そうともこのロスト様の黄金の拳は黙ってはいないぞ！出てこい！男らしくいざ尋常に勝負しろ！」

相手がまだ男だとは決まってはいないだろう！

何故、現在の私が子供ロストに突っ込まねばならないのだ…。

我ながら寒すぎるぞ…。

子供ロストは拳を振るうことで威嚇しながら匂いがしてくる周辺を歩き回っている。

その目は獲物を追い詰めようとしている狩人そのものだった。

年頃の子供がする目ではないな…。

我ながら痛いを通り越して恐すぎるぞ…。

昔の私は勇敢というより無謀過ぎる性格だったようだ。

「さあ、出てこい。今すぐ投降してくるのであれば暖かい食事を用意してやるぞ。私はこう見えて寛大なのだ。本当は辛いのだろう？心を解き放て！」

どこかの怪しい宗教団体が勧誘しているようだな…。

私ならば、絶対に投降しないぞ…。

「ううぅ…」

森の奥から声が聞こえてきた。

その声に子供ロストは目を煌めかせる。

「むっ！この声は女のものだ！しかも、血の匂いまでしてくるぞ！これは殺し合いをしているものと見た！さて、困ったな。私は喧嘩番長であっても殺戮番長ではない。殺し合いに立ち会うのは物騒だから嫌だな。どうしようかな？」

子供ロストは首を傾げて困ったかのような仕草をしている。

私の人格形成はこの時既に完成されていたのか…。

何だか自分が全然成長していないような気がして情けなく思えてきたぞ…。

「誰か…いるの？」

この声は何処か聞き覚えがあるぞ…。

「ぬおっ！この美声は間違いなく絶世の美女だと私の聴覚が告げているぞ！考えるよりも感じるのだ！美女が私を待っている！喧嘩番長ロスト、いざ参らん！」

煩悩が恐怖を越えたのか…。

我ながら今も昔も変わらないようだな…。

私は子供ロストが向かう先へと付いていった。

……。

……。

…。

辿り着いた先に…。

……。

純白に彩った軍服。

肩までの長さの白髪。

銀色の輝く口紅。

消えてしまいそうなほどの透明感ある白い肌。

……。

アーテーだな。

……。

アーテだ！

何故、彼女がこのような場所にいるのだ！

しかも血まみれではないか…。

神であるアーテにここまでの深手を負わせたのはいったい誰なのだ？

……。

まあいい。

さて、子供ロストはどのような反応を示すのか？

「大丈夫ですか？寝たら終わりです。何か話してください。遺言なら聞きますよ」

丁寧な口調だが、最後の一言は激しく余計だ…。

「痛いのですか？少し待ってください」

子供ロストは自分の服を破り、包帯の要領で傷口に巻いていく。

そう言えば生傷が絶えないことで治療する術を近所の医者から伝授されていたのを思い出す。

「本当は血に汚れた服を破って美女の裸を見たいですけど、さすがに不味いでしょう。私は紳士ですからどうぞご安心ください」

丁寧口調だが、やはり思っていることを言葉に出し過ぎているぞ！

「お前は…面白い子供だな…」

アーテらしき女性が初めて言葉にしてきた。

傷が痛むのか掠れた声だ。

「私が面白いかどうかは議論の余地がありますが、人生楽しんでいることは確かですね」

「なるほど…確かに楽しんでいるみたいだな…」

子供ロストとアーテは笑い合っていた。

ここは和む場面だな。

それから子供ロストとアーテは他愛もない話に花を咲かせていた。

……。

……。

…。

「それでどうしたのかしら？」

「ふん、口調がはっきりしない奴だな。私をからかっているのか？」

打ち解けたのはいいが、子供ロストはすっかり丁寧口調から元の偉そうな口調になっているな…。

「これが俺の素だからな。仕方ないだろう」

「貴様は美女だが、そこが非常に残念だぞ。まあ、私は別に構わないがな」

アーテは大分落ち着いたのか、声の調子も安定している状態だった。

だが、まだしばらく動ける様子ではなかった。

「貴方は私のことを魅力的だと思うのかしら？」

「思うぞ。私の酒池肉林の構成員にしてやりたいぐらいだ」

この頃からもう私は酒池肉林を夢見ていたのか…。

「酒池肉林？」

「男が女を沢山侍らせて快楽の渦を巻き起こすことだ。男なら誰しもが夢を見ていると聞いたことがあるぞ」

女性相手に堂々と語る夢ではないな。

子供でなかったら張り倒されているぞ。

「ふふっ、だったら私がその酒池肉林の最初の構成員にしてくれるわけね…」

アーテは何処か懐かしげに、少し悲しげに言ってくる。

何故、そんな顔をしているのだろうか？

子供ロストはアーテの様子に気づくことなく高笑いする。

「ははははははっ！そうか！貴様のような美女なら大歓迎だ！よし、私の名はロストだ！貴様の名は？」

「儂はアーテーじゃ。アーテと呼んでくれ」

互いに自己紹介をする。

あまりにも和んでいたから自己紹介をしているように思ってしまったな。

「アーテというのか。ならば、アーテよ。貴様は我が栄えある酒池肉林の第一構成員にしてやるぞ！光栄に思うがいい！ははははははっ！」

ここは上から目線で言う場面なのだろうか？

酒池肉林の構成員というよりは餓鬼大将が遊び仲間に加えるような乗りで言っているようだな。

「ふふっ、非常に光栄だな。ならば、これはお近づきの印だね…」

アーテが子供ロストの手を引っ張って引き寄せていく。

「むっ！何をす…むぐっ！」

「ちゅ…ちゅぱ…ちゅうううぅ」

アーテは子供ロストに口づけをしてきた。

子供ロストは突然のことで暴れるが、アーテは押さえつけるように抱き締めてくる。

……。

やがて子供ロストは力が抜けたようにアーテに身体を持たれていった。

「ちゅば…これで俺は貴様の構成員だ…」

唾液に濡れた銀色の唇が艶めかしかった。

「はぁ…貴様…私に何をしたのだ?腰が抜けて動けないぞ…」

子供ロストはアーテに抱き締められたまま動くことが出来ていない様子だった。

「接吻しただけさ。好きな者同志が唇を重ね合わせる行為。愛情表現と言ったところかな?」

アーテは身を悶える子供ロストの首筋に息を吹きかける。

子供ロストは身体を震わせていき、アーテはそれを押さえるように抱き締めていく。

……。

私の男の証が元気になってきているぞ…。

他人、いや、子供である私の行為を見て感じてしまうとは…。

「貴様は私のことを愛しているというのか？」

「愛してるぜ。貴様は俺を愛していないのか？」

子供ロストはアーテの告白に沈黙する。

さすがの傍若無人な子供ロストもアーテの言葉に戸惑いを覚えたということか…。

「分からない。だが、嬉しいと思う…」

子供ロストは考え抜いた末にアーテの質問に答えた。

そんな子供ロストにアーテは微笑み、頭を抱き寄せてくる。

「お前は可愛いな。思わず彼女のことを思いだしてしまう…」

彼女？

誰なのだ？

「その彼女は貴様の大切な奴だったのか？」

子供ロストは無意識にアーテの巨乳を堪能しながら質問してくる。

おのれ…。

我ながら何て羨ましい状況だ…。

「そうですね。彼女と私は親友と言ってもいい間柄だった…」

だった。

過去形ではないか…。

「彼女と喧嘩したのか？」

「あぅん…余り強く揉んでくるな！ああ、僕が彼女の大切な男を寝取ってしまったというべきなのか、手を出してしまったのが切っ掛けだったかな…」

初耳だったな。

アーテにも親友がいたということなのか…。

「それで儂はこの有様じゃ。どうにか彼女を止めたいと思うんじゃがな…」

子供ロストはアーテの巨乳から手を離し、起き上がっていく。

「ならば、私が喧嘩番長としてその彼女を制裁してやるぞ！貴様は私の大切な構成員の一人なのだ！構成員の喧嘩は私の喧嘩だ！それよりもその彼女とやらも絶世の美女なのか？」

「君という奴は遠慮が無いね。そうだな。彼女は誰よりも強く気高く美しい女だったな。今の貴様では敷居が高すぎるかもしれんぞ…」

アーテは子供ロストを小馬鹿にするように笑う。

「ふっ、私を舐めるではないわ！喧嘩番長の辞書に不可能という文字は存在せん！見事その彼女とやらを撃沈し、私の元へと跪かせてやるぞ！」

その無駄に根拠の無い自信はいったい何処から出てくるのだろうか…。

それよりも彼女とはいったい何者だ？

「貴様を八つ裂きにした彼女の名前は何だ？」

子供ロストも同じ疑問を抱いたようだ。

「済まないが、この世界では少なくとも私の口からは言えない名前なのだ。それに下手な予備知識は世界を改変させる要因になってしまうからな…」

意味がさっぱり分からん！

「貴様の言うことはさっぱり分からんが、要するに訳ありで言えないということなんだな」

「理解があって助かるな。それよりも…」

アーテは子供ロストの顔を引き寄せて息を吹きかけてくる。

「もう一度口づけてやろうか？」

「何を言っているのだ?んっ!」

戸惑う子供ロストにアーテは軽く接吻をする。

「考えるより感じろ。お前は私の接吻が欲しくないのか?」

「欲しいぞ…。腰が抜けたが、気持ちよかっ…むぐっ」

アーテは子供ロストの言葉を遮るかのように口づけてくる。

これ以上の言葉は不要だと言っているように…。

子供ロストとアーテはしばらく間接吻をしていくのだった。

ぐっ!

羨ましいぞ!

……。

昔の私相手に嫉妬するとは我ながら不毛だな…。

……。

……。

…。

「ちゅば…明日もここに来るといい。もっと良いものをくれてやる

ぞ」

「ふぅ…本当か…。今よりももっと凄い物が貰えるというのか…」

子供ロストは身体中に銀色の口紅が塗りたくられ、息絶え絶えの状態だった。

「もちろんよ。楽しみにしておくといいわ…ちゅ」

「あぅ…楽しみに…しておくぞ…」

ぐったりしている子供ロストに口づけて、アーテは立ち上がる。

「もう身体は平気なのか？」

「ええ、貴方からたっぷりと精気を頂いたからね…」

アーテは子供ロストから精気を取って傷を癒したというのか…。

まあ、快楽と引き替えのようなものだな。

「もうしばらくしたら動けるようになると思うさ」

「ふん、少し疲れただけでもう平気だ！」

先ほどぐったりしていたのが嘘のようにして子供ロストは立ち上がった。

……。

その様子にアーテも言葉を失っていた。

「お前は凄い生命力だな…」

アーテは畏怖を込めて子供ロストにそう言ってくる。

神を驚かせるとは我ながら非常識を通り越して化け物だな。

「喧嘩番長の生命力を舐めるな。例え、人類が滅びようとも私だけは生き延びてみせるぞ」

本当に出来てしまいそうだから恐ろしい…。

「頼もしいね。では、明日にまたこの場所で…ちゅ」

アーテはもう一度子供ロストに口づけて森の奥へと去っていく。

「なかなか強烈な個性を持っている美女だったな。私の酒池肉林の構成員には相応しい者だ。明日が楽しみだぞ！」

子供ロストは意気揚々と家路についていく。

……。

……。

…。

両親は子供ロストの姿を見て、驚愕していたようだったな。

まあ、当然か…。

「ちょっと！ロスト！何されたの？その顔は？」

「謎の絶世の美女と遊んでいたのだ」

「何！謎の絶世の美女と遊んでいただと！ロスト！父さんにも紹介しなさい！」

「あなた！ロストが見知らぬ女に誑かされているというのに何言ってるのよ！」

「誑かされてなんかいないぞ。彼女に抱き締められたり、接吻されたりと気持ちよかったな」

「羨まし過ぎるぞ！ロスト！父さんにもその幸せを分け…ぶべらっ！」

「ふぅ…全くあなたったら…。いい、ロスト。最低限避妊はちゃんとさせるのよ。分かった？」

「とりあえず、分かったぞ」

……。

我が家は騒がしかったが、幸せな家庭だったな…。

それにしても子供の爛れた女性関係に対して大らかすぎるのは気のせいだろうか…。

私の父もおそらく幼少のころから爛れた女性関係を構築していたに違いないな。

それに対して母が諦めの境地に達したのかもしれない。

そして、一日が過ぎていく。

……。

……。

…。

「では、父さん、母さん、行ってくるぞ！」

「行ってらっしゃい。ロスト、くれぐれも腎盂には気を付けるのよ！」

「ロスト！帰ったら父さんに話を聞かせるのだぞ！だから、やりすぎて腹上…ぐほっ！」

「はいはい。あなた、少しお話をしようかしら…。ロスト、身体には気を付けるのよ」

「分かった…」

……。

大らかにも程がある家族だな…。

子供ロストはまたアーテと出会った場所へと行くのだった。

……。

……。

…。

森の奥では綺麗な音色が響いていた。

この音色は楽器の女王と呼ばれたハープのものだ。

森の静けさに彩りをもたらす音色に私は心を奪われていった。

子供ロストはハープの音色に導かれるようにアーテの元へと辿り着く。

「やあ、待っていたよ。ロスト」

演奏を止め、ロストに微笑みかけてくるアーテ。

そんなアーテに顔を赤くする子供ロスト。

さすがの子供ロストも美女の微笑みには弱いと見える。

「さあ、来たぞ。約束通り良い物を頂こうか」

「ふふっ、まあ、慌てるな。楽しみは最後まで取っておくものだぞ」

アーテはおどけるように言ってハープの弦を弾く。

「それよりも私の音色は如何だったかな？」

「なるほど、楽しみは最後まで取っておくか…。その妙な楽器の音色か？物凄く綺麗だったぞ」

ロストの感想にアーテは再びハープを弾く。

「それは良かった。彼女も俺の奏でる音色が大好きでね。よく強請られたものだ」

彼女とはアーテの親友のことなのか。

「よほど彼女のことが好きだったのだな」

「ああ、彼女は我の半身と言っても過言ではなかった…」

アーテは弦を弾く。

「もう元に戻ることは出来ないのか？」

……。

「さあ、どうだろうかね…」

しばし、沈黙した後にアーテは答える。

「本当に仲が良いのなら殴り合って本音をぶつけ合うものだと思うぞ」

アーテは弦を弾く手を止めて、子供ロストを見る。

子供ロストもまたアーテを凝視したまま沈黙する。

……。

「君は強いね…」

アーテは眩しげに子供ロストを見つめ、弦を弾いていく。

「当然だ！私は喧嘩番長だぞ！ははははははっ！」

沈黙した空気を吹き飛ばすように子供ロストは高笑いをしていく。

「違いないな。ふふっ…ははははははっ！」

アーテも釣られるようにして笑い出す。

二人の間に和やかな空気が流れていった。

「ははははっ…これほどまでに笑わせてもらったのは久しぶり…本当に…可笑しいわ…」

アーテは笑いながらも涙を流していた。

「アーテ、泣いているのか？」

子供ロストは心配そうにしてアーテの顔を覗き込む。

「ごめんね…泣いたりして…つい思い出して…しまってね…」

「アーテ…」

子供ロストはアーテの肩に手を掛ける。

「ロスト？」

「貴様は私の記念すべき構成員第一号だ。辛いことがあるのならば、私に相談するがいい。アーテを泣かせる奴がいるのであれば、私のこの黄金の拳で粉砕してやるぞ」

子供ロストの真摯な表情をアーテはしばし見つめて、吹き出すように笑い出した。

「あはははははっ！」

「何が可笑しいのだ！」

突然笑い出したアーテに子供ロストは憤ったときだった。

「人がせっかく心配して…ぬぐっ」

アーテは子供ロストを引き寄せて抱き締めてきた。

「ありがとう、ロスト。しばらくこのままでいさせて…」

「ああ…」

子供ロストはしばらくアーテに抱かれるままでいたのだった。

……。

あの人が苦しむ表情を見ることが好きなアーテにこのような一面があったとはな…。

こうしても見るとただの絶世の美女なのだがな…。

それにしてもアーテの身にいったい何が起こったのだ?

おそらく親友である彼女とやらが原因だろうと思うが…。

その彼女と喧嘩して血まみれになって私が住む森に流れ着いたということになるのか…。

確か彼女の男に手を出したことで喧嘩したと言っていたな。

いわゆる三角関係というやつか…。

アーテと親友の彼女を天秤に掛ける男とはいったい何者なのだ?

何だかけしからん男のようだな…。

もし、お目に掛かるのであれば、子供ロストでは無いが、それこそ我が黄金の拳で制裁を加えてやりたいものだ。

二股をかけるぐらいなら堂々と二人平等に愛することを宣言すればいい。

アーテを泣かせたのは親友の彼女が原因ではない。

その優柔不断な男が原因なのだ。

……。

まあ、見たことがない男に憤っても仕方がない。

とりあえず二人の様子を見よう。

「もういいか？」

「ああ、気分が落ち着いてきたよ。ロスト、少し横になってくれるか？」

アーテは抱いていた子供ロストを横たわらせていく。

子供ロストの後頭部の下にはアーテの膝があった。

いわゆる膝枕をされているのだ。

「アーテの膝は心地良いな。家の枕よりも良いぞ」

「この美女の膝枕を家の枕と比較するとは失礼だな。まあ、貴様だから言っても仕方ないか…」

アーテは不満を言いながらも子供ロストの頭を優しく撫でていた。

……。

これが本当にあの私の絶望した顔を見るのが大好きなアーテなのか…。

余りにも違いすぎるぞ！

「ふふっ、ロスト。汝は何故、喧嘩に明け暮れているのだ？」

「愚問だな。強くなって美女にもてたいからに決まっているではないか」

そこは決まっているものなのかと突っ込みたくなってしまうな…。

「俺のような美女を捕まえておきながらよくもいけしゃあしゃと言ってくれるものだな。俺だけでは不満なのか？」

「不満では無いが、もっと色んな種類の美女を愛でたいぞ」

ここで堂々と別の美女も欲しいと言い切る所は凄いものだ。

汚れた大人の私では言えない芸当だな。

「そこまで言い切ると逆に清々しさを覚えるわね。まあいいわ。ならば、もっと力が欲しいとは思わないか？」

アーテは自分の膝の上で寝ている子供ロストの顔を見つめてくる。

「男であれば力が欲しいと思うぞ。誰にも負けないぐらいの最強の力をな」

「ならば、私が君に最強の力を授けようか？何者にも負けない無敵の力を…」

……。

最強の力。

私の最強の力はアーテの血肉により手に入れたものだ。

では、ここで私は…。

「手に入れれると言うのか？最強の力を…」

子供ロストの息を呑む音が響いてきた。

「君が望めばね。お前の夢は何だ？」

「昨日も言ったが、敢えてもう一度言ってやろう。美女だらけの世界、すなわち酒池肉林の世界を築き上げることだ！私による私のためだけの世界をな！はははははっ！」

子供ロストは自分の夢を語って高笑いをしてみせる。

「君は彼女にそっくりだね。だけど、お前だったら道を違えないかもしれない。ならば、貴様の願いを叶えよう。これが我が汝に与える良い物というものだ」

アーテは子供ロストを抱き起こしていく。

「私はその彼女とは違うぞ。絶対に私はアーテを泣かせたりも、傷つけたりもしない！」

「頼もしい限りじゃな。僕はそんな君を愛しいと感じるよ」

子供ロストを地面に押し倒し、舌なめずりをするアーテ。

「貴様は童貞か？」

「何をいきなり言っているのだ？」

アーテの唐突な質問に子供ロストは困惑していた。

確かにいきなり童貞かどうか聞かれれば混乱するものだろう。

「言い直そうか。お前は今まで女性と肌を交えたことがあるのか？」

「私が肌を交えたことがあるのは母さんだけだ。後は野郎共と拳を交えていたぞ」

子供ロストの言葉にアーテはにやりと笑う。

「な、何なんだ？」

「合格だ。くっくっくっ…だったら私が貴様の童貞を喰らう最初の女ということになるのだな。有り難く頂かせてもらうぜ！」

アーテが子供ロストの来ている服を破っていく。

「私の一張羅が…。貴様、何をするの…むぐっ」

「ちゅる…あむぅ…ちゅぷちゅちゅぅ」

アーテは子供ロストの唇を自分のそれで塞ぎながらも服を破り捨て

ていく。

「ちゅぱ…大人しくしていなさい。ふふっ、すぐ気持ち良くなるわよ…」

「はぁ…はぁ…」

子供ロストは酸欠状態なのか喘ぐだけでアーテに応える余裕が無い状態だった。

……。

これは完全なる陵辱というものではないだろうか…。

だが、幽体である私にはどうすることも出来ない。

それに何となくだが、アーテならば酷いことはしないだろうと楽観視できたのだ。

陵辱されているのは子供ロストなのだが、私も自分のように何だか興奮してきたぞ！

ぐったりしている子供ロストの上に跨って、アーテは思うがままに動いていく。

「うぐっ！何なんだ！この未知なる体験は！もう我慢できないぞ！」

アーテの下で子供ロストは苦痛と快楽の入り交じった表情で喘いでいた。

「ならば、解き放ちなさい！それと引き替えに貴様には誰にも負けない力が手に入るのだ！さあ、来い！私を感じさせろ！」

「ぬあああああああああああああああああああああっ！」

子供ロストの絶叫と共に身体から光が帯びてきていた。

交わっているアーテと子供ロストを包み込むように光の柱が打ち上げられていく。

私は光の目映さから思わず目を伏せてしまう。

これが最強の力を得るための通過儀礼というものなのか！

私の運命の物語はここから始まったのだ…。

それにしても私の初めてはタナトスだと思っていたのだが、まさかアーテだったとは…。

さらに言えば、我が酒池肉林の構成員第一号もエルとアビスではなくアーテだったのだ。

少年時代に神を相手に初体験を済ませた子供は私以外に世界中の何処に行ってもいないだろう。

光が収まってきたな…。

目に映ったのはアーテの下でぐったりとなっている子供ロストと艶の良い肌をしているアーテだった。

アーテが指を鳴らすと破れていた服が子供ロストに集まり、元の服を着ている状態となる。

「お前には大いなる試練を与え、強くさせてやる。そして、私が果たせなかったこと、彼女を君の手で…ちゅ」

アーテは悲しげに微笑んで気絶している子供ロストの唇に自分のそれを重ねる。

……。

しばらくしてアーテは立ち上がり、私の方へと視線を向ける。

「これが貴様の過去だ。感慨深いものだっただろう？」

やはり、アーテが私をこの世界へと招いたのか…。

「衝撃的事実が発覚して脳が破裂しそうな勢いだ…」

「ここで話すのも何だし、現実世界へと帰ろうか。ああ、この子に関しては心配いらないよ。もうすぐ目が覚めて、何も無かったかのようにして家路につくさ。もっとも我のことも童貞喪失も覚えていないだろうがな…」

事後処理も完璧ということか。

「ならば、早く元の世界に返してくれ。これ以上赤裸々な過去が暴露されるのは我慢ならないぞ」

「畏まりました。では、元の世界へとご案内して差し上げましょう」

アーテは慇懃無礼に言って、指を鳴らしてきた。

その瞬間、世界は暗転し、私の意識が途切れてしまう。

……。

……。

……。

……。

…。

私は目を覚ます。

どうやら現実世界に戻れたようだな。

今の私は寝室のベットの上にいる。

確かグレイブ殿と散々に飲み交わして後によろけながらも寝室に戻って爆睡したのだったな。

……。

視界にはアーテの顔があった。

「お早う、眠り姫。王子様の口づけを受けるといい…ちゅ」

私は黙ってアーテの口づけを受けた。

とりあえず気持ちいいことは進んで受け入れるのが私の流儀だ。

それに子供ロストとアーテの情事を見ていて、正直溜まってしまっているのだ…。

「ちゅばちゅるちゅちゅちゅぱ」

何だか激しい口づけだな。

危機迫るかのような勢いだ。

「ちゅぱ…ふぅ…さて、しようか？」

アーテの甘い吐息が私の顔に掛かっていく。

私も大いに歓迎であるが、どうしても聞き出さねばならないことがあるのだ。

これは私の今後の人生に大いに関わることだ。

有耶無耶にするわけにはいかない。

「私に最強の力を与えて何をさせたいのだ？」

私の質問に妖艶な笑みを浮かべていたアーテの表情が固まる。

「い、今は情事の最中なのだから野暮な話はまた後で…きゃあ！」

私はアーテの身体を引き寄せて入れ替わるように私が上になる。
今は私がアーテを押し倒している体勢だ。

「答えてくれ。子供ロストを眠らせているときにも呟いていたが、
もしかして私に貴様の親友の彼女を」

「それ以上言わないで！」

……。

私はアーテを見る。

彼女は涙を流していた。

「お願い、今は何も聞かないで…。その時が来たら全て言うから…。
だから…」

「アーテ…」

これは果たしてアーテの演技なのか？

古来より男は女の涙に弱いという。

私は今、女の涙の洗礼を受けている状態だ。

「もし、もし、全てが終わったら私は貴方の言うことを何でも聞く。
だから、今は…今は何も言わずに私を求めて…お願い…」

アーテの口調が変わらない。

これが本当のアーテの姿なのか…。

……。

ここまで晒されたらもう私にはもうどうすることも出来ない。

例え、嘘偽りでもアーテが必死になっている姿は真実であるはずだ。

私は何も言わずに自分からアーテの唇に自分のそれを重ねる。

「ちゅぱ…ありがとう、私を受け入れてくれて…それとご免なさい…」

アーテの両足が私の腰に絡みつき、男の証が呑み込まれていく。

ぐっ！

凄まじい締め付けだ！

「ああ…ロスト…ロスト！私を求めて欲しい！何もかも忘れさせてしまうぐらいに強く！あああぁ！」

ぐはっ！

「私は貴方に会えて嬉しかった！本当に！本当に…」

ごほっ！

「お願い…今の私を忘れないで…。私は貴方に嫌われる事をしてし

まうから…」

……。

「貴方に嫌われる前の私をどうか覚えておいて欲しいの…」

……。

「私は貴様の全てを覚えておくぞ！」

「ロスト…」

私は涙に濡れたアーテの顔を見つめる。

「貴様が私に何をさせるのかは分からない。だが、貴様は私の栄える構成員第一号なのだ。忘れてたまるものか！」

「ああっ！ロスト…」

私は強くアーテを抱き締めていく。

「私は何が何でも生き延びる！貴様が如何なる試練を与えようともな！覚えておくがいい！アーテ！」

「ありがとう…子供の頃の貴方と出会ってから…私の心はもう既に…貴方のものだった…」

……。

「愛しているわ、ロスト。それとありがとう…もう私は迷わない…

来て！」

うおおおおおおおおおおおおおおおおっ！

……。

……。

……。

……。

……。

…。

「ありがとう、ロスト」

……。

「私はもう迷わない」

……。

「これで私はもう躊躇うことなく…」

……。

「邪神になれる」

……。

「さようなら」

……。

……。

…。

邪神になれる、か…。

どうやらとんでも無いことを後押ししてしまったようだ。

果たして私はアーテが課す試練を乗り越えることが出来るのか？

だが、やらねばならないのだろう。

それが私の宿命らしいのだからな…。

最強の力を手に入れたお陰で絶世の美女達にたくさん出会えた。

その代償を支払う時が近づいてきただけのことだ。

アーテが私に最強の力を与えた理由は何なのか？

アーテは私に何をさせるつもりなのだろうか？

アーテを八つ裂きにした彼女の正体とは？

全てはアーテのみぞ知る、ということか…。

……。

とりあえず、締めくくるとするか。

燃え尽きたな…。

第５８話：卑怯者

頭が痛い…。

酒を飲み過ぎて二日酔いとなってしまったか…。

私はベッドから起き上がり、手鏡を取り出す。

案の定、私の顔は銀色の口紅で彩られていた。

アーテ…。

奴は邪神になると宣言していたが、何を仕掛けてくるつもりなのだろうか？

対策を立てようにも彼奴は神出鬼没だからな…。

……。

まあいい。

どうせ対策を立てようにも相手は神だ。

私の拙い脳で考えたところでどうすることも出来ないだろう。

出たとこ勝負というところだ。

むっ！

殺気を感じるぞ！

この気配は…。

「旦那様！起きろ！」

うおっ！

タナトスが私の寝室に駆け込み、飛び上がって肘を落とそうとしてきているぞ！

私は即座にベッドから床へと転がり込み、タナトスの肘打ちを回避した瞬間ベッドがへし折れる音が響いた。

……。

タナトスの肘落としでへし折れたベッドを見て、二日酔いが一気に醒めた気がした。

「何だ、もう起きていたのか」

タナトスはつまらなそうに言って、へし折れたベッドから起き上がっていく。

私のベッドを壊しておきながらよくもいけしゃあしゃあと…。

「旦那様、女でも抱いていたのか？」

私以上にタナトスも不機嫌に聞いてきた。

おそらく私の顔を見て気づいたのだろう。

早く顔を洗っておけばよかったな…。

「そうだ…」

嘘付いても仕方ないだろう。

証拠は私の顔で挙がっているのだからな…。

「そうか、誤魔化していたら枯れ果てるまで絞り尽くすつもりだったが、まあいいだろう。顔をだしな」

タナトスは布巾で私の顔を拭いてくる。

「まったく俺にこんなことをさせるのは旦那様ぐらいなものだぜ。光栄に思えよ」

「すまないな…」

タナトスは意外と世話好きだったのか。

「よし、綺麗になったところでおはよう、旦那様…ちゅ…ちゅ」

タナトスは私の両頬に軽く口づけて部屋から出ていく。

さて、朝食を取るとするか…。

……。

……。

…。

食卓にはレテシアが東洋の料理をこさえて待っていた。

テーブルにはロンやエリー、アイリがいた。

「お早う御座います、父様」

「お早う御座います、隊長！」

「おはよう、ロスト」

それぞれ挨拶を交わして食事を取ろうとしたところにレテシアが声を掛けてくる。

「ロスト様、申し訳有りませんが、クロエを起こして頂けないでしょうか？」

「分かりました」

レテシアの頼みなら即答で返事をしなければな…。

「随分と素直なのね…」

アイリが毒を吐いていたようだが、無視しておくとしよう。

……。

……。

…。

確かここがクロエの寝室だったな。

クロエとはあの準決勝以来会話をしていなかったな。

私達は準決勝以降、オイジュス様のご好意で城の離れの屋敷を借りることになった。

屋敷には私を初めとしたアビス、エクリア、ケール、タナトス、ロン、クロエ、エリー、アイリ、そして、レテシアと一緒に住まうことになった。

家事全般はレテシアが取り仕切ることになり、アビスとクロエはその補佐という形となった。

アイリとエリー、エクリアは軍事に詳しいことからモーモスがいるアースガルズ兵舎に向かう予定のようだ。

タナトスとケール、そして、ロンは調練場で兵士と共に訓練するつもりらしい。

私の場合はどうしようかと悩んでいるところだ。

軍事には疎いし、タナトスとケール、ロンと一緒に訓練してしまえば命が幾つあっても足りない。

要するに私は役立たずなのだ。

だから、些細な命令でも率先して行わなければ、立つ瀬が無いだろう。

私はクロエの寝室の戸を叩く。

「起きろ、もう朝だぞ」

……。

返事が無い。

まだ、爆睡しているのか…。

ならば、たたき起こすしかないだろう。

私は意を決して戸を開く。

そこには気持ちよさそうに寝ているクロエがいた。

私はクロエを見て、準決勝戦で戦ったことを思い出す。

あの時のクロエは殺意を漲らせていて苛烈だったな…。

今でこそ大人しくなったが、初対面では何度殺されそうになったものか…。

クロエの整った寝顔を見る。

こうして見ると麗しの眠り姫だな。

私はクロエの青色の髪に触れようとした瞬間だった。

クロエは即座に目を開き、触れようとした私の手を掴んで背負い投げをかましてくる。

ぐっ！

私は思いきり床に叩きつけられてしまう。

おのれ！

ただでさえ二日酔いで頭痛がするというのに…。

目の前には倒れている私に馬乗りして短刀を振り上げるクロエの姿があった。

私は短刀を指先で受け止めて、クロエに溝に拳を叩き込む。

「がはっ！」

クロエは呻き声を上げて私の上に倒れ込むようにして気絶する。

ようやく大人しくなったか…。

……。

しまった！

起こすつもりがまた寝かせてしまったではないか！

……。

とりあえず、また暴れたら厄介なので縄で縛り付けておこう。

それにしても刺客が襲撃してきたと勘違いしていたのだろうか？

相手が私でなかったら殺されていたところだったぞ。

「んっ…」

クロエが再び目を覚まそうとしている。

エリー並の回復力だな。

「うぅ…何だか腹部が痛むな。確か刺客が襲いかかってきて返り討ちにしてやろうと…ロスト、なぜ、お前がここにいる？」

「起こしに来たのだ」

クロエは私の返事を聞き、自分の格好を確認して悲鳴を上げた。

「何だ！この格好は！貴様、私に何か恨みがあるというのか！」

「起こしにきたというのに殺されそうになってな。それで縛り上げたのだ」

この際、寝顔に見とれていたことは黙っておこう。

「あっ…それは済まなかった。とにかく早く解いてくれ！もう暴れ

たりはしないから！」

「分かった」

もう暴れないと誓ったのであれば、解かねばならないだろう。

早速縄を解こうとしたが、我ながらかなり念入りに縛ってしまったためか、なかなか解けない。

「おい…そこをあんまり引っ張るな！ああぁ…痛い！もう少し…優しく…しろ！」

……。

聞きようによっては卑猥な感じがしてしまうのは何故だろうか？

とりあえず早く解かねば、有らぬ誤解を受けそうな気がするぞ。

「食い込んでしまう…乱暴に…しないでくれ…痛い…そこは止めて…」

……。

これでは部屋の外から聞いたら間違いなく私は変態扱いになってしまうな…。

私はクロエには少し静かにしてもらうようにお願いしなければ…。

「大人しくしてくれ…」

「あっ…はい…」

クロエは顔を赤らめて大人しくなる。

その表情を見て、男の証が元気になりかけたのは置いておこう。

クロエが大人しくなったお陰で縄を解くことに専念できるようになり、もうすぐ解ける時だった。

「主、いつまで起こすのに時間かけて…いる…の」

クロエの寝室に訪ねてきたアビスは縄に縛られているクロエとそれを解こうとしている私の姿を見て、凍り付いたかのように固まる。

……。

さて、戦略的撤退を敢行するとしようか…。

「おい！まだ縄が解けてないぞ！待て！ロスト！」

「許せ、クロエ」

私は寝室の窓へと身を投げ出す。

「主のへんたいいいいいいいいいいいいいいいっ！」

毎度のことながら朝から命がけだな…。

私はアビスとクロエの悲鳴が響く屋敷から見事脱出したのだった。

……。

……。

…。

さて、窮地から抜け出せたのはいいが、腹の虫が鳴っている。

このままでは半刻もしないうちに餓死することは確実だろう。

せっかくオイジュス様から一週間の猶予を頂いたというのに早くも危機が訪れてきている。

どうしたものか…。

「何彷徨っているのだ？ロスト殿」

「何者だ？」

貴族然とした怪しい優男が私に話しかけてきたぞ。

私は即座に両の拳を構えて、臨戦態勢に入っていく。

「おい！落ち着け！私だ！モーモスだ！」

……。

「その言葉に偽り無いな？」

「お前ではあるまいし、嘘付いてどうするのだ！」

なるほど、確かに偽る必要は無いな。

私は拳を下げて、モーモスを見る。

モーモスは貴族が着るような決して煌びやかではなく、どちらかと言えば地味な服装を着飾っていた。

だが、高貴な雰囲気は失われず、むしろ地味なところが上品さを際立たせているような感じだ。

いつも暑苦しそうに青銅の鎧で身を固めていたので気づく無くても無理は無いだろう。

「いつも暑苦しい鎧を着ていたから気づかなかったな…」

「暑苦しいは余計だ。それよりもお前は何をしているのだ?」

クロエを縛り上げていた場面をアビスに発見させて逃亡しましたとは答えれないな。

「世界の行く末について考察していたところだ」

世界といっても酒池肉林の世界の行く末についてだがな…。

「そうか、お前も色々と考えているのだな。私もこのアースガルズの行く末について考えているのだが、なかなか上手くいかないものだな…」

モーモスは何処か疲れているように言ってくる。

おそらく神武闘式で私を優勝者にすると宣言したことで各方面から苦情が寄せられて心労が溜まっているのだろう。

助けてやりたいには山々だが、実務経験皆無の私では糞にも役に立つことは出来ないだろう。

自分で言っていて悲しくなってくるな。

戦争が終わってしまったら確実に仕事を失ってしまうぞ。

今の内に就職活動でもしておいた方がいいのだろうか。

「それに引き替えオイジュス様は本当に上手く立ち回っておられる。私が言っても聞かない者達もオイジュス様が言えば、首を縦に振ってくれる。私とオイジュス様と何が違うのだろうか…」

何だか空気が重くなってきているぞ…。

「私だってオイジュス様のように歌を歌いたいし、綺麗に着飾りたいのだ！格好良い男と食事をしたり、綺麗な夜景を一緒に眺めたりして…はぁ…」

「生きていれば、いつか良いことがある…」

私は生暖かくモーモスを見つめ、肩に手を添える。

彼女に比べれば、私はまだ幸福だろうと何故か思えてしまう。

他人の不幸は密の味とはよく言ったものだ。

「そうか、お前は分かってくれるのか。ありがとう」

エリーが少し大人びたような貴公子然とした男装風の美女。

そんな縋る目で見つめられてしまうと妙に期待してしまうぞ。

だが、それよりも…。

……。

腹の虫が食料を訴えてきている。

「お前、まだ食事を取っていないのか？」

「考え事をしていたらつい食事を取ることを忘れてしまってな…」

アビスの報復を恐れて屋敷から飛び出して、食事が取れなかったとは言えない。

「そうか。なら、これから店に行って食事をしないか？奢ってやるぞ」

「是非、ご一緒させて頂く」

助かったぞ！

私はモーモスに丁寧にお辞儀をしていく。

そんな私にモーモスは苦笑していた。

「よほどお腹を空かせていたのだな。ついでだ。私に付き合ってくれ」

「いくらでも付き合おう」

私はモーモスと共に食事を取ることになった。

……。

……。

…。

「お前は少しは遠慮したらどうだ！私とてそれほど多く金を持っているわけではないのだぞ！確かに私は奢ると言ったが、気を利かせて普通は男が奢るものだろう。女の奢りでここまで遠慮無く食らう奴は初めてだぞ！」

モーモスは頭を抱えて財布を振り回していた。

「すまない。奢られたら、出来るだけ多く食事を取らなければ勿体ないと思ってしまったのだ」

「それを言うなら私の金の方が勿体なかったよ。お前という奴は全く…」

モーモスはため息を付いていたが、私の腹の虫はどうやら収まったようだ。

これで今日一日生き延びることが出来よう。

「まあいいさ。その代わり今日は一日私に付き合ってもらうぞ。異存は無いな？」

「異存は無い」

異存が有ろうはずが無い。

モーモスは私の命の恩人だ。

今日一日で良ければ、いくらでも付き合うぞ。

それにモーモスも絶世の美女と言っても差し支えはない。

その美女と一日付き合うことが出来るのは男として本望というものだ。

「ふふっ、だったら行こうか…」

モーモスは私の手を握って歩き出していく。

モーモスの手は剣を握っているだけあって皮膚が硬い感触だったが、不思議と心地良いと思った。

……。

……。

…。

私はモーモスに案内されるがままにアースガルズの町を探索していた。

「ここがアースガルズの観光地として有名な噴水広場だ。綺麗だろう」

「虹が見えてくる…」

オイジュス様に似た彫像を噴水が包み込むように幻想的に噴き出している。

周囲にも芸術的な彫像が建ち並んでおり、アースガルズで最も美しい場所とも言われているらしい。

今はまだ誰もおらず、私とモーモスの二人きりだった。

「昔はよくここでオイジュス様と二人で歌っていたものだったよ…」

モーモスとオイジュスは元々戦災孤児で広場で歌うことで金を稼いでいたという。

「オイジュス様は高音域で私は低音域での二重奏。まあ、ほとんどはオイジュス様の歌声に助けられたようなものだけどね。あの頃は毎日の生活が大変だったけど、苦しいと思ったことは一度たりとも無かった…」

モーモスは噴水を見つめながらも懐かしむように語っていた。

噴水で彩る場所に佇むモーモスが何故か儚げに見えた。

私はふとケールとエリスのことを思い出す。

モーモスとオイジュス様もまた同じように深い絆で結ばれているのだと思った。

「私にはオイジュス様がいた。それだけで毎日が充実していたよ。だが、苦しいはずなのに笑顔を絶やさないオイジュス様の顔を見るのは辛かった。もし、私に力があれば、オイジュス様の笑顔が本物になるはずなのに…。いつかそんな力を手に入れることを夢見て私は日々を生き延びてきた。だが、そんな日々も長くは続かなかった…」

モーモスの表情が次第に苦しげなものに変わっていた。

「変わらず毎日、広場で歌って金を手に入れていたときだった。ある男が私達に劇団へ入らないかと誘ってきたのだ。私とオイジュス様は喜びで一杯だった。これで暖かい食事に有りつけれるとね。だが、男と共に裏地に通った瞬間に…」

……。

「まず、私が殴り倒された。それからオイジュス様の服が破かれた。その様子を私はただ見続けるしかなかったのだ…。私のオイジュス様が汚されてしまう！だが、女である私は余りにも非力だったのだ！これほどまでに力を渇望したことは無かったよ。なぜ、私には力が無いのかと…。私達はこのまま為すがままにやられてしまう。そう思った時だった…」

苦しげな表情から何処か病んだような笑みを見せるモーモス。

「颯爽と騎士が現れて、瞬く間に男共を叩きのめしていったのだ！私は感動に打ち震えてしまったよ！ああ、これこそが私が求める力なのだと…。オイジュス様を守ることが出来る絶対的な力だと！歌を歌うだけでは何も守れはしない。圧倒的に叩き伏せる力が無くては生き延びれないのだとな！」

モーモスは一息つく。

「助けてくれた騎士はアルバート殿だった。私はアルバート殿に師事をして頂き、オイジュス様は大聖堂で修道僧として働くことになった。私はアルバート殿の元で必死に力を付けていった。誰にも負けないほどに圧倒的な力を手に入れるために…。やがて、オイジュス様は聖女として祭られ、私もまた聖女を守る聖騎士までのし上がることができたのだ」

モーモスは今の地位を血反吐を吐くほどの努力の末に手に入れたということか…。

彼女はアースガルズ国内では誰よりも強い。

だが、おそらくモーモスはそれだけでは満足しなかったのだろう。

「私はついに絶対的な力を手に入れたのだと思った。だが、私は力を得たことで尚更思い知らされたのだ。いくら凡人である私が努力しても到達できない真の強さというものにな…」

モーモスは私を見つめてくる。

その眼差しは羨望と嫉妬が入り交じったかのような複雑な光を放っ

ていた。

「ヴァルキリアの二枚看板であるタナトス殿とケール殿、パラディス ム家歴代最強と謳われた頭領レテシア殿、ビフレスト皇国の守護神モロス将軍、そして、お前だ…」

「自分の力に限界を感じたということか？」

私は努力して今の力を手に入れたわけではないからモーモスの苦悩を理解することができない。

それに私の最強の力は武人としての高みを目指すためのものではなく、飽くまで絶世の美女と出会うための付属でしか思っていない。

実際にアーテから授けてもらったときも酒池肉林の世界を築き上げたいために欲しいと言ったからな。

まあ、最近は酒池肉林の構成員を守るための力として役立てようと考えているが…。

そのことをモーモスに言えば、激怒すること間違い無しだろうな…。

「限界か…。確かにそう思ったのかも知れない。だからこそお前にこの国の王になるように言ったのだろう。私では無理だからな…」

いや、国の王は私も無理だぞ…。

私は馬鹿力しか取り柄が無いし、政治経済の知識は皆無に等しい。

「それで私を担ぎ上げて戦乱に乗りだそうと考えたのか？」

モーモスはブリュンスタッドの英雄である私をアースガルズの王へと担ぎ上げて戦乱の渦へと乗りだそうと画策している。

それはオイジュス様に了承を得ることのない独断によるものだ。

アースガルズはオイジュス様を中心とする穏健派とモーモスを中心とする強行派に分断するかもしれないとも言われていた。

「その通りだ。私は今のままではいずれアースガルズは滅びると考えている。神を信じるだけでは人を救うことは出来ない。歌うことでは誰も救えないのだ」

歌うことでは誰も救えないか…。

私はオイジュス様の歌でアルゴスとの戦いで助けられたのだが…。

何事も平和が一番だと思うが、乱世の時では如何に戦う力を手に入れるかで腐心するものなのだろうか。

こんな悲惨な時代だからこそ私は娯楽が欲しいと思うぞ。

「私はお前にこの国の王になって欲しいと思う。お前ならばオイジュス様をお守りすることもできるだろうからな」

何だか自分には出来ないから厄介事を押しつけられているような気がしてくるな。

いや、モーモスは心労により自暴自棄になっているのだ。

心労を解消する方法は娯楽の提供に限る。
娯楽が無いから否定的かつ悲観的な考えが出てくるのだ。
もう少し肯定的に物事を捉えた方が良い。
私はモーモスの手を引く。
「な、何をする？」
「モーモスは少し息抜きをした方がいい…」
乗りと勢いで押し切るのも良かろう。
私は無理矢理モーモスを引っ張っていく。
「私はこれから会議に出席する予定があるのだぞ！」
「たまには娯楽も必要だ」
悩みは遊ぶことで吹き飛ばすのだ。
喧嘩番長を名乗っていた頃には悩める子分を無理矢理引き回していたものだ。
何もかも忘れさせるのも情けというものだろう。
「いくぞ」
「ちょっと待て…きゃあああああっ！」

私はモーモスの手を握ったまま走るのだった。

……。

……。

…。

そう言えば私はアースガルズの娯楽場所を知らなかったのだ。

しかも適当に走り回っていたらいつの間にか知らない森へと迷い込んでしまった。

やはりきちんと計画立てて物事を進めていくことが必要だな。

この失敗でまた一つ私は貴重な教訓を得ることができたのだ。

だからモーモスを無計画に連れ回していたことは決して無駄ではなかったのだ。

そう思いたい。

「はぁ…はぁ…結局お前は何がしたかったのだ?」

モーモスは息切れをしながら私を睨んでくる。

さて、どう言い訳しようか…。

……。

「風になりたかったのだ」

私とモーモスの間に冷たい風が吹いてきた。

我ながら言い訳にすらもなっていないな…。

「はぁ？そのために私を散々走り回らせたというのか？」

「そうだ」

こうなれば強引に言い切るしかない。

「風になることで人は自然と一体化して、物事を有るがままに捉えることが可能となるのだ」

「本当にそうなのか？」

モーモスは疑いの目を向けてくる。

さすがに誤魔化せれないか…。

だが、押し切って見せるぞ！

私はモーモスの肩に手を置き、顔を凝視する。

「な、何なんだ？」

「自然に還れ！モーモス！」

自分でも何を言いたいのかさっぱり分からなくなってきたが、とにかく勢いで誤魔化すのだ。

「要するに自然体でいろということなのか？」

「その通りだ」

幸運なことにモーモスは都合の良いように解釈してくれたようだ。

モーモスは森を眺める。

「確かにそうかもしれない。アースガルズにこんな森があるなんて知らなかった…」

心地良い風が吹き、モーモスの黄金の髪が靡いていく。

「気持ちいい風だな…」

私はその姿に思わず見とれてしまった。

確かに自然体になった方がモーモスの魅力が出てくると思った。

「ロスト殿」

「何だ？」

モーモスは私の顔を少し睨んだように見つめてくる。

「本当は何も考えずに走っていたのだろう？」

私の周囲の空気が硬直したかのような気がした。

誤魔化せなかったのか…。

やはり不味かったか…。

私が沈黙しているとモーモスは笑い出す。

「別にいいさ。お前は私を元気づけようとしてくれたのだろう。こんなにも気持ちいい空気を吸えたのは久しぶりだ。礼を言う…」

モーモスは身体全体で森の空気を感じようと腕を広げていく。

彼女は自然と一体化しようとしているのだ。

「ふふっ、これほどに気持ちいい場所があることをもっと早く知っていれば、オイジュス様と一緒に行っていたのにな…」

「ならば、今からでも一緒に行けばいいだろう」

モーモスとオイジュス様は別に死に別れているわけではない。

一緒に歩き回る機会ぐらいいくらでもあるだろう。

「もう無理だ。私は戦争を押し進める強行派、オイジュス様は平和を望む穏健派。私とオイジュス様とは立場が違い過ぎるのだ…」

よく分からないが、モーモスが辛い立場にあることは何となく分かる。

だが…。

「オイジュス様は私に言ってくれた。大切なのは飽くまで人の意志。お前の意志は何処にある？」

「えっ…」

モーモスは驚いたように私の顔を見てくる。

「今のモーモスには意志が感じられない。仕方なく物事を進めているように見える。それでは意味が無いと思うぞ」

「お前に何が分かる！もう後戻りすることができないんだ！私だってオイジュス様と遊びたいし、年頃の女のように振る舞いたい！だけど、もう出来ないんだ…」

モーモスは激高したかと思うと力が抜けたように項垂れていく。

私もそれなりに複雑な立場にいるが、モーモスは複雑な立場で雁字搦めになっているようだ。

弱った女に対してどう対処するべきだろうか…。

まあ、彼女にはアースガルズに来たときにお世話になったのだ。

「辛くなったら私が気張らしに付き合う」

気晴らしに付き合うぐらいは私にも出来るはずだ。

「また、この森に来て冷たい風に当たればいい。私が連れて行くぞ」

「ロスト殿…」

モーモスが急に私の元へと歩んでくる。

顔は物凄く怒っているような感じだ。

何か不味いことを言ってしまったのだろうか…。

「モーモ…ぶべらっ！」

モーモスがいきなり私の頬を張ってきた。

痛い…。

頭の芯まで響いてきたぞ…。

「お前は卑怯者だ！弱った女に甘い言葉をかけてくるとは恥を知れ！」

叱られてしまった…。

まずは謝りましょう。

「すいま…むぐっ！」

私はモーモスに抱きすくめられてしまった。

「どうしてくれる！お前のお陰で柄にもなく縋り付きたくなってしまったではないか！」

……。

「すまない…」

私は申し訳程度にモーモスの背中に腕を回す。

「許さない！許さないぞ！お前は卑怯だ！女の敵だ…責任を取れ…」

モーモスの抱擁は痛かった…。

頭二つ分モーモスの方が背丈があるから、私の頭にモーモスの顎が痛い程に押しつけられていく。

「悔しい…お前に抱きつくことで自分がやはり女であることを思い知らされてしまう…」

頭に熱い物が落ちてきたのを感じる。

これはモーモスの涙なのか。

それに冷たい滴も落ちてくる。

「雨が降ってきたみたいだ。そろそろ戻ろう」

私はモーモスの抱きすくめながらも帰ることを促す。

空はいつの間にか曇っていて小雨が降ってきていた。

「モーモス？」

モーモスは私を抱き締めたまま動こうとはしなかった。

「お前は私をその気にさせておいて帰るつもりでいるのか？」

ぐえっ！

私の背中に回しているモーモスの腕が食い込んできているぞ…。

「お前はどこまで卑怯だというのだ！ロスト！」

ぐえぇえええええええっ！

背骨が折れる！

視界が一瞬真っ白になる。

雷も落ちてきているのか…。

小雨が大雨に変わってきている。

不意にモーモスの鯖折りが緩む。

「モー…モス…」

私は激痛に絶えながらも辛うじて声を出す。

「通りかかるときに洞窟を見つけた。そこで雨宿りをしようか…」

「魔法障壁で雨よけを…ぐへっ！」

モーモスは私の襟を締め上げてくる。

「女の誘いを断るつもりなのか！いいから付いてこい！」

私はモーモスに洞窟まで引きずられることになった。

……。

『ふふっ、モーモスの女としての望みを叶えてあげなさい…』

不意に耳元に声が聞こえた。

この声はアーテ！

『彼女の迷いを取り除くといい…』

「どうかしたのか？」

私の様子に怪訝に思ったのか、モーモスが立ち止まって話しかけてくる。

モーモスにはアーテの声は聞こえていないようだ。

『もうすぐ最後の試練を下されるだろう…』

……。

『せいぜい最後の情事を楽しむのじゃな…』

……。

『いいえ、最後の晩餐と言った方がいいのかしら？』

……。

『あるいは最後の審判と言うべきか…』

……。

『あはははははははっ…』

……。

「いや、何でも…ぐほっ！」

「ならば、黙ってついてこい！」

私は再びモーモスに引きずられていく。

……。

アーテがいつ試練を下すのかは分からないが、用心しなければな…。

それにしてもモーモスは私が出会った女性の中でもかなり難儀な性格をしているようだ。

アイリとは違った人種で苦手と言ってもいいかもしれない。

早く雨に濡れた服を脱いで乾かさねば風邪を引いてしまうな…。

モーモスも服が濡れているから脱いでくれるのだろうか？

中身はかなり凄いものなのかもしれないな…。

想像するだけで男の証が元気になっているぞ！

ここまで引きずり回されたのだ。

それぐらいの役得を期待してもいいと思うが…。

果たして、どうなるのやらか…。

第59話：モーモス

私は服を脱いで雑巾絞りに勤しんでいた。

モーモスは既に裸になって座り込んでいる。

私とモーモスは互いに背を向けて座っている状態だった。

ほんの一瞬だけモーモスの裸体を見たが、まさに我が儘を主張していると言わんばかりの身体だ。

しなやかで鍛え抜いた均整の取れた体型。

大柄な身体に相応の巨乳。

タナトスやケールに匹敵するほどの威力がありそうだ。

洞窟に入って二人きりになって暫く沈黙が続いていた。

空気が重い…。

重すぎるぞ！

早く天気になってくれればいいのだが…。

今のモーモスは触れれば火傷しそうなほどの危険な雰囲気が漂っている。

「ロスト…」

「はい…」

モーモスの射殺すかのような低い声につい私は畏まった返事をしてしまう。

「なぜ、私に手を出さない？」

手を出すということは性交しないかということか…。

「私に女としての魅力はそれほど無いというのか？やはりオイジュス様のような女性を好むというのだな！」

……。

モーモスという女性がいったい何なのかが少し分かった気がした。

この女性は劣等感の塊なのだ。

力に置いては私に及ばない。

女性としての魅力や政治力はオイジュス様には及ばない。

自分には何も無いと思いこんでいる女だったいうことか…。

私としては美女というだけで存在自体に価値があると思うのだが、それではモーモスは納得しないだろう。

それにしてもモーモスは自分に何も無いように思いこんでいるだろうが、他人から見たら実に贅沢な悩みである。

「どうなのだ?答えろ!ロスト!」

彼女に引きずられてこの洞窟に籠もってしまったが、何だか腹が立ってきたぞ…。

『二つ目の手札モーモスは貴様が最も苦手とする面倒な女だ…』

アーテは確か私にそう言っていたな。

なるほど…。

私にとってモーモスは性格的に一番面倒な女だ。

モーモスの変な劣等感に振り回されて八つ当たりを私はされているのだ。

このようないじけた状態では何の楽しみもない。

「ロスト!聞いて…」

「モーモス!」

私は溢れんばかりの煩悩を必死に押さえてモーモスに向き合う。

……。

何たる体つきだ…。

余りの迫力に思わず目眩がしそうだったが、根性で耐える!

私はモーモスを説き伏せねばならないのだ！

「お前はアースガルズの英雄だ！それがお前の全てではないのか！」

「なっ！だが、私には力が…」

私はモーモスの顔を両手で挟み込んで見つめる。

「ロ、ロスト…」

モーモスが動揺しているのが私の手から伝わってくる。

今度こそ力づくで力説して畳み込んでやるぞ！

「力だけでは民は付いていかない！政治力だけでは国を守れない！ならば、何が必要なのか？それは想いの力だ！」

「想いの力だと…」

オイジュス様は確か国を想う気持ちが大切だと言っていた。

ならば、それに焦点を当てていくのだ。

「オイジュス様も言っていただろう。貴様の国を想う気持ちは本物だと！ならば、その気持ちを持ってこれから精進していけばいいであろう！例え、力があろうとも気持ちが伴わなければ、無為なのだ！」

「けど、想いの力だけではそんな単純に…きゃあ！」

私はモーモスを押し倒す。

強姦しているようだが、もはや何降り構ってられない！

「単純だと？それが単純だと言うのか貴様は！私は今までその想いの力を持って今まで戦場で何度も死にそうになった所を生き延びてきたのだ！最強の力だけでは到底生き延びることは無理だった場面でもだ！」

「そういうものなのか…」

モーモスは私の気迫に呆然としてきている。

もう一押しだ！

「私には大いなる夢があるのだ。それを叶えるためにひたすら生き延びてきた。死体の山に隠れたり、憎い敵に頭を下げたりと散々たるものだった…」

「死体の山に隠れたりしていたのか？」

モーモスは息を呑んでいる。

閉ざされた世界での出来事は今でも鮮明に思い浮かべことが出来る。

私にとって一番辛い戦いだったからな…。

「絶望しかけていた私に希望を託して命を落とした女性がいた。彼女は力では私に劣っていたが、私よりも強かった。彼女は最後まで

想いを捨てることなく生き延びてきたのだ。想いを託する相手を見つけるその時が来るまで…」

閉ざされた世界で親友を救ってくれる者を待ち望んでいた一人の女性。

オイジュス様に勝るとも劣らない歌声の持ち主だった女。

ケールの親友である絶世の美女。

エリス。

「私はそんな彼女の強い想いを受け継いで生き延びることが出来たのだ。人の想いは何よりも強い。それを彼女は私に教えてくれた…」

私は一息つく。

モーモスは沈黙していた。

種は蒔いた。

後は…。

「ロスト、私もその彼女のように強くなれるのだろうか？」

「お前のアースガルズを想う気持ちは本物だとオイジュス様も仰っていただろう。私も保証する」

モーモスの表情が穏やかになってきている。

どうやら峠は過ぎたようだな…。

「元気になったみたいだな。ならば、この洞窟から…ぐおっ！」

モーモスは起き上がろうとした私の首に腕を回して引き寄せてくる。

私の鼻先にモーモスの吐息が掛かり、巨乳が身体に押しつけられていく。

ぐほっ！

我が煩悩が破裂しそうになってくるぞ…。

「ふっ、口車に乗せて誤魔化そうとしても無駄だ。責任を取れと言ったはずだぞ…」

モーモスが悪戯じみた笑みを見せてくる。

「だが、お前の言っていることは身に染みた。ありがとう、ロスト…ちゅ」

モーモスは私の頭を引き寄せて唇を重ねてくる。

「ちゅぱ…ふぅ…どうやら身体は正直のようだな。こんな面倒な性格の私を女として見てくれているのか？」

「お前は絶世の美女だ。オイジュス様にも劣らない…むぐっ」

モーモスは黙らせるようにして再び口づけてくる。

「ちゅ…だったら態度で示してくれ。それが男の甲斐性というものではないのか？」

男の甲斐性だと…。

モーモスの唾液に濡れた橙色の唇が挑発的に煌めいている。

ならば、やってやろうではないか！

それどころかもはや我が煩悩が我慢ならんわ！

私はモーモスを組み伏せていく。

「きゃあ！ちょっと待て！ロスト…」

「何だ？」

モーモスは先ほどの威勢とは打って変わって怯えている様子だった。

「お願いだ。もう少し優しくしてくれ。初めてなんだ…」

「わかった…」

モーモスの女の顔に私に男の証が弾けんばかりに唸っていた。

……。

準備は完了した。

モーモスも緊張した息づかいが聞こえてくる。

さて、いよいよだ。

「いくぞ」

「ああ、来てくれ…」

私は腰を前に突き出していく。

「うぐっ…あぐっ…」

モーモスは私に力の限り抱きついてくる。

うぐっ！

身体の隅々までがモーモスに締め付けられていくぞ！

背中に回しているモーモスの手指が食い込んできている。

「うぐっ…あむぅ！」

ぐおっ！

モーモスが私の肩に噛みついてきた。

私は激痛に絶えながらも腰を一気に突き出していった。

「ふぐぅんんんんん！」

モーモスの歯が私の肩に突き刺さる感触を私は感じた。

……。

……。

…。

「済まない。思い切り噛んでしまったようだな…」

モーモスは傷つけてしまった私の肩を見て沈んでいた。

「大丈夫だ…」

ケールにいつも全身を噛みつかれていたから慣れているが、これほど思い切り噛みつかれたのは初めてだった。

モーモスの前だから見栄を張っているが正直痛くてたまらなかった。

「本当に済まない…あむぅ…れろ…」

うおっ！

モーモスは傷口を舐めてきたのだ。

「ぴちゃ…れろ…ちゅぷ…」

モーモスの舌と唇が傷口を包み込んでくれている。

何とも言えない心地良い感触だ…。

「ちゅぱ…そう言えば、聞き損ねたが、お前の夢は何だ？」

この場面でその質問をしてくるというのか…。

さて、どう話したらよいのやらか…。

私が沈黙しているとモーモスは意地悪そうに微笑んでくる。

「そう言えば知っているか？お前と義兄弟の契りを交わしたというグレイブ殿下はとんでもない女誑しであることをな…」

私とグレイブ殿が義兄弟の契りを結んだことは有名になっているというのか！

「そんな女誑しと義兄弟となるからにはお前もその類にいると思うのだがな。どうなんだ？」

「私の夢は沢山の女達と快楽の海に酔いしれる世界、酒池肉林の世界を作り出すことだ」

もはや隠し通せないのならば、潔く白状するのみだ。

自分の夢に対して嘘を付くのは私の主義に反することになる。

……。

私はモーモスと繋がっているから逃げることはほぼ不可能と言っていい。

絶体絶命というやつだな…。

「やはりそうだと思った。お前の周りには女が多すぎるからな。しかも一癖も二癖もあるような者ばかりが揃っているときている。私もその一人にするつもりだったのか？」

「それは…ぬおっ！」

モーモスは起き上がって体位を入れ替えてくる。

私がモーモスの下になって組み伏せられた体勢となってしまった。

「お前は卑怯を通り越して卑劣漢のようだな。だが、安心しろ。私は既にお前の女になったのだからな…」

モーモスは舌なめずりをしてくる。

「何のつもりだ？」

「何のつもりもない。私はもうお前を離さないぞ。お前が私を女であることを思い出させたのだからな。だから、責任を取ってもらうのさ！」

ぐおっ！

モーモスが腰を激しく動かして来た。

「お前が私に優しい言葉を掛けてきたのが運の尽きだと思え！」

がほぉあっ！

「お前がヴァルキリアに行くのであれば、監禁してでも止めてやるぞ！」

ぐほぇえ！

「だから、お願いだ。アースガルズの王になってくれないか…」

モーモスは急に腰を振るのを止めて私の胸に倒れ込むように抱きついてくる。

「モーモス…」

「エル殿のことは分かっている。だが、例え、ヴァルキリアに戻ったところでエル殿が戻る保証は何処にもない。本気でエル殿を取り戻したいのであれば、ヴァルキリアを打倒する以外に方法は無いはずだ」

……。

そんなことは分かっていた。

だが、それでも不安だったのだ。

アビスのこともある。

彼女は私がヴァルキリアとアースガルズ、どちらを選ぼうとも付いてきてくれると言っている。

だが、彼女の内心はどうなっているのかをまだ話し合ってはいない。

「お前は優しい奴だ。だからこそ、皆がお前に付いていくのだろう。私もその中に入りたいと思う。だが、私にはアースガルズがある。それだけは譲れないんだ…」

モーモスは私の胸に自分のそれを擦りつけていく。

弾力のある巨乳に感触が気持ちいい。

モーモスのこの動きは男を誘っているものだ…。

「私も卑怯な女だな。こうやって女の武器を使ってお前を繋ぎ止めようとしている。私はお前にヴァルキリアに行って欲しくないんだ。そのためだったら何だってやってやる！」

モーモスは再び起き上がって腰を動かし始める。

先ほどよりもさらに激しく情熱的に私を攻め立てていく。

ぐおおおっ！

モーモスの悲壮なまでの想いが私の男の証を締め付けていく…。

「私を卑しい女だと好きなだけ軽蔑してもいい！」

がはああっ！

「お前の欲望の捌け口にしてくれてもいい！」

ぐへぇあああっ！

「お前の一生に奴隷になっても構わない！」

ごあああああっ！

……。

不意に動きが止まる。

「モーモス…」

「だが、これだけは信じて欲しい。私は心に無い相手にこんなことは決してしない…」

……。

モーモスはアースガルズのためならば、何だってするのだろう。

彼女の想いの強さを見せつけられた気がした。

それにしてもここまで想いが強いのであれば…。

「モーモス、お前がアースガルズの王になったらどうだ？」

「私がアースガルズの王になるだと？」

モーモスの問いに私は頷く。

私のように政治経済軍事の知識が乏しい元平民その他よりもある程度の英才教育をされてきたモーモスの方が相応しいように思える。

それにモーモスはアースガルズを代表する英雄だ。

民に対する人望も申し分ないだろう。

確かに私はブリュンスタッドの英雄として持てはやされるのかもしれない。

だが、所詮は他国の英雄だ。

他国の英雄と自国の英雄、どちらを王にするとなれば、確実に後者を選ぶだろう。

民の信頼を得ていなければ、力があっても名声があっても意味が無いはずだ。

何よりも私は王にはなりたくはないのだ。

国の王になれば、まさに人生の墓場。

一生、民のために自分を犠牲にして生きていかなければならない。

そうなれば、酒池肉林の夢は永遠の夢となってしまうだろう。

それだけは断じて否だ。

「だが、私にはそんな力が…」

「まだ、そんなことを言っているのか！王は常に堂々としていれば良いのだ！軍事政治経済は専門家に任せておけばいい！王に必要なのは民への信頼と国を想う強さがあれば事足りる！」

そろそろ、この悲観的な考えから脱却してもらって自信をつけてもらいたいものだ。

でなければ、アースガルズを選んだとしても人生の墓場に直行してしまうからな…。

「だったら！」

モーモスが身を乗り出して私の顔を凝視してくる。

「だったら、お前が私を支えてくれるのか？」

なぬ。

「私が王になったとして、お前は私の直属の騎士になって側にいてくれるのか？」

今度はそう来るのか…。

仰いだ手前、一人でやれとはとてもではないが言えないぞ…。

王直属の騎士か…。

これはこれで厄介な役割かもしれないな。

単なる一兵卒ならば喜んで志願するのだが…。

「もし、私が王になるのだとしたら考えておいてくれないか？」

「考えておく…」

モーモスは何だか目を輝かせているようだった。

自分のやるべき事が見えてきたのかもしれない。

「なら仕切直しといくか」

モーモスは再び腰を動かし出す。

「当分足腰が立たなくしてやろう」

ぐおっ！

男の証が潰れてしまうそうなほどに締め付けられていくぞ！

「ふふっ、お前のような堪え性のない奴は私が搾り取ってやらねばな」

どちらかと言えば、女達の方が堪え性が無いと思うのだが…。

それを口にしてしまえば、余計に搾られそうな気がするから敢えて言わないでおこう。

「本当にお前はどうしようもない奴だ！」

ぐはぁ！

「だからこそ放っておけないのだろうな！」

ぐおっ！

こちらも反撃せねば…。

うりゃあああっ！

「ぐっ…まだまだだな！」

ごはぁあっ！

倍返しをされてしまったぞ…。

「大人しく私の下で喘いでいろ！」

ぐぇえっ！

「お前にはそれがお似合いだ！」

ごほっおっ！

「お前にはそれぐらいが丁度いいのだ…ちゅううっ！」

モーモスは腰を振るのを止めて、私の顔を覆うように口づけをしてきた。

「ちゅば…お前に私という枷を繋いでやる！ちゅう！」

……。

「ちゅ…私無しではいられない身体にしてやる！ちゅるちゅうううう

っ！」

「むぐぅんんんっ！」

このままでは私は枯れ果ててしまうぞ！

「ちゅるん…ふふっ、お前が私の欲望の捌け口になっているようだな…」

私は呼吸困難で言葉が出てこない。

一皮剥けばここまで苛烈なのか…。

「騎士よりは奴隷の方がお似合いかもしれないな、くっくっくっ…」

何だと…。

「私は奴隷ではないぞ…」

「ならば、私を屈服させてみろ。今までの女にしてきたようにな…」

……。

今までの女性達相手に対してもどちらかと言えば、やられっぱなしだった気がする…。

「どうした、私の奴隷になってくれるのか？」

「断固として否だ！」

ええい、ままよ！

「うぐぅ…ふっ、それは至極残念だな！」

うごぉおっ！

「ブリュンスタッドの英雄と言えど、床の上ではただのか弱い男だな！」

ぐわぁあっ！

「戦場では屈強でも床では私の下で喘いでいる！良い気味だ！」

ぎゃはあっ！

「だが、それも愛嬌というものだな！嫌いではないぞ！」

あああっ！

「むしろ愛しいとも思えてくる！」

ほげぇえええっ！

「少し休ませ…」

「駄目だ…」

モーモスは悪魔の笑みを見せてくる。

「まずは私を泣かせた借りを返させてもらう…」

……。

「お前の節操無しな所も修正しないとな…」

……。

「ついでに私の財布の恨みも晴らさせてもらおうか…」

まだ根に持っていたのか！

「何よりも私の心を鷲掴みした罪は重い…」

……。

「罰として木乃伊の刑に処す。一滴も残らず搾り取ってやる！往生しろ！ロスト！」

ぎゃあああああああああああああああああっ！

……。

……。

……。

……。

……。

…。

疲れた…。

快楽の果てにあるのは途方も無い疲労感だ。

とりあえず、休もうか。

燃え尽き…むぐっ！

「ちゅるちゅぱちゅば…ふぅ…まだ、眠るには早いぞ、ロスト…」

……。

「往生させて終わらせるつもりだったが、まだ残っているようだな…」

「勘弁して…ごはっ！」

モーモスはさらに腰を動かしてくる。

「徹底的に教育していくぞ！大往生しろ！」

ぐぎゃあああああああああああああああああっ！

……。

……。

……。

……。

……。

…。

「まだやり足らないが暫し休憩をしようか」

まだ終わらないのか…。

私は洞窟の外に目を向ける。

雨はまだまだ止みそうにないようだ。

それにしてもお約束の台詞が破られてしまうとは…。

モーモス、かつて無いほどの強敵だ…。

モーモスは休憩をすると言ってきたが何もすることが無くて退屈だ。

そう言えばモーモスもオイジュス様同様に歌を歌えると言っていたな。

駄目もとで頼んでみるとしようか。

「モーモス、休憩がてらに歌を聴かせてくれないか?」

清々しいほどに率直に頼んでみたぞ。

これで断られてしまえば致し方ないな。

ぬおっ！

モーモスが凄まじい形相で私を睨んでくる！

やはり不味かったかな…。

怯えている私の様子を見てモーモスはため息を付いてきた。

「はぁ…私の過去を聞いても尚も堂々と歌えと言ってくるとはお前らしいな…」

モーモスは服を胸元に巻き付けて立ち上がってくる。

「分かった。財布の件は別としてお前には付き合ってもらったからな。それにここには幸い誰もいないみたいだし、お前のために歌わせてもらおうか…」

モーモスは身を翻して私の方に向き、観客に対するお辞儀をしてくる。

「一生懸命に歌います。どうか聴いてください」

私は拍手で応えた。

そして、モーモスは歌い始める。

……。

オイジュス様の歌は神殿の雰囲気を思わせる神々しい響きだった。

対してモーモスの歌は民家を思わせる素朴な響きだ。

どちらに優劣を付けれるものでもない。

それぞれに個性があって味わい深いものがある。

彼女の歌は苦しみの果ての中で必死に足掻こうとしている力強さがあった。

音楽評論家ではないが、直感的にそう感じさせられたのだ。

だが、彼女の歌う姿は間違いなく天上に降り立った女神の如くの神秘性が全身に発せられている。

濡れた服を胸元に巻き付けている姿は天女が羽衣を纏っているかのような神々しさがあった。

何よりも滑らかな美脚と母性溢れる巨乳が私の煩悩を掻き立てていく。

……。

人間が生きていくのに重要な感覚は視覚と聴覚だ。

彼女はその二つを感覚を通して私に大いなる感動を与えてくれたのだ。

まさに総合芸術と言っても過言ではない。

私はこの歴史的舞台の観客になる幸運を得られたのだ。

これから先、私の掛け替えのない思い出として死が分かつその時まで私の脳に記憶されていくことだろう。

モーモスは歌い終わり、お辞儀をして見せた。

私は彼女に拍手喝采を送った。

そんな私にモーモスは笑顔を浮かべて近づいてくる。

むっ！

彼女の笑顔を見て、何故か震えが出てきたぞ。

「私の歌に聴き惚れてもらえて嬉しいと言いたいところだが、視線は何処に向いていたのだ？」

もちろん、お前の迫力ある巨乳に決まっているだろうが！とは口が裂けても言えないな…。

「お前の全てだ」

一応嘘付いていないだろう。

「まあいい。それよりも払ってもらおうか」

「何を…のあっ！」

モーモスは私を押し倒して馬乗りになってくる。

「歌を披露したのだ。料金を頂くに決まっているだろう」

「これ以上やれば私は腹上…むぐっ！」

モーモスは問答無用と言わんばかりで接吻で黙らせてきた。

「ちゅぱ…本当は別の報酬を頂きたかったのだがな。致し方ないだろう…」

「何のこ…んぅ！」

再び接吻で黙らされてしまった。

「ちゅば…お前は黙って喘いでいればいいのだ。私の胸に視線が向けられていたのだお見通しなんだからな…」

やはりばれていたのか…。

「言葉通り昇天させてやる！神にでも祈れ！」

あぎゃあああああああああああああああっ！

アレルイヤァアアアアアアアアアアアッ！

……。

……。

……。

……。

……。

…。

どうやら私はまだ現世に縋り付いているようだ。

危うく本当に天に召されるところだった。

私の今の身体は骨と皮だけで構成されていると言っても過言ではない。

最強の力を手に入れていなかったら腹上死していただろう。

さて、今度こそ休もうか。

家を空けたことでアビス達に叱られることは確実だが、今の私は満足に動けない。

ここで今日一日は打ち止めとなるのだ。

今度こそお約束の台詞で終わろうか…。

燃え尽き…。

『燃え尽きるのはまだ早いぞ…』

なぬ。

『燃え尽きるのはこれからさ…』

この声はアーテ！

『あはははははははっ…』

またしてもお約束の台詞が阻止されるとは…。

これから何が始まるというのだ。

そう言えばいつの間にかモーモスがいなくなっているぞ！

モーモスの服も無くなっている。

洞窟の外へと出ていったのか？

私は急いで服を着て、洞窟の外へと出ようとする。

ぐっ！

身体が上手く動かない！

それに力が思うように出てこない！

モーモスに搾り尽くされた影響なのか…。

雷が落ちる音が響いてくる。

外はまだ大雨のようだな。

「モーモス！」

私は六角棒を杖にして、息絶え絶えに洞窟から出る。

『ふふっ、モーモスなら私の腕の中にいるよ』

「アーテ！何処にいる！」

周囲を見渡しているといつの間にか白い軍服の女性とそれに抱きすくまれているモーモスの姿があった。

「モーモス！」

「彼女は可愛いね。誰よりも一生懸命に奮闘するその姿、感動で涙が零れそうだよ」

アーテは私に見せつけるようにモーモスの巨乳をまさぐっていく。

「ああっ！」

モーモスはアーテの腕の中で力無く喘ぎ声を上げていた。

「アーテ！モーモスから離れろ！」

「ふっ、慌てるな。彼女の心の枷を外すまで待て…」

アーテはモーモスの頭を鷲掴みして持ち上げていく。

モーモスはされるがままだった。

「さあ、モーモスよ！貴様の欲望を晒け出すがいい！我に示せ！」

モーモスの身体が青白い炎に包まれていく。

「きゃあああああああああああああっ！」

モーモスの絶叫と共に炎の柱が天をも突き破るほどの立ち上っていく。

私はモーモスの元へと駆けつけようとしたが、足がもつれて転倒してしまう。

「うぐっ…モーモス！」

青白い炎の柱が消え、その中からモーモスが姿を現していく。

どうやら炎に焼かれたわけではないようだな。

アーテはいったい何を企んでいるのだ？

私は何とか立ち上がり、モーモスの元へと近づこうとした。

モーモスはそんな私を感情が伴わない無機質な目で見つめ、手に強大な魔力を収縮させていく。

「何のつもりだ、モーモス…」

モーモスの手から煌びやかな装飾が施された巨大な剣が形作られ、

剣先を私に向けていく。

「お前と戦いたい…」

「モーモス…」

雷が周囲の木々に落ちていき、私とモーモスを囲うように炎が燃えさかっていく。

「アーテ！モーモスに何をしたのだ！」

「モーモスは女としの望みは叶えられた。後は武人としての望みを叶えたいと思っているのだよ…」

アーテは笑いながら答えていく。

武人としての願いだと？

不意にモーモスが私に向かって剣を突きだしていく。

私は転がるようにして回避していく。

身体が泥だらけになってしまったな…。

私は六角棒を持って立ち上がろうとする。

今の私はモーモスに搾り尽くされた影響で生まれ立ての子鹿と言ってもいい状態だ。

余りにも分が悪すぎる…。

天国から地獄とはまさにこのことなのか…。

「さあ、神武闘式の主催は俺が引き継いでやる。だが、このまま戦えばアースガルズは塵と化してしまうだろう。とっておきの舞台を用意して差し上げましょう」

アーテが指を鳴らした瞬間、大地が揺らいでいく。

いったい何が起こるのだ！

「戦略級防御結界を多重に展開しても無駄なのだろう。ならば、方法は一つ…」

地面に亀裂が走っていく。

何だか地面が持ち上がっているような感じがする。

……。

いや、地盤が持ち上がっているのだ！

「そう、この森は天へと駈け昇っているのさ…」

地盤を空へと浮上させているというのか…。

これではもう逃げ場は無いし、応援を呼ぶことも出来ない。

八方塞がりということだな…。

森は空へと浮上した影響により嵐が吹き荒れていた。

暴風雨に晒されながらもモーモスは無表情で私に剣を向けていく。

『本当は別の報酬を頂きたかったのだがな。致し方ないだろう…』

情事の時にモーモスが不意に言った言葉を思い出す。

武人として私と戦うことが、お前が望んだ報酬ということなのか…。

「さて、舞台は整いました。空の上であれば、どれほどの力を振るおうとも問題無かろうて。安心して血の雨を降らせたまえ！さあ、神武闘式決勝戦の始まりだ！」

アーテの合図と共にモーモスが剣を振りかぶって突進してくる。

私を叩き潰さんとしてくる巨大剣を六角棒で何とか受け止める。

超重量の巨大剣を受け止めたことで私の全身に凄まじい衝撃が襲ってくる。

足が地面に陥没してきているぞ…。

「くっ！モーモス！」

「私と戦え、ロスト…」

私の膝が折れ、地面に亀裂が走っていく。

「ははははははっ！遠慮せずに殺し合ったらどうなのかしら！なあ、

ロストよ！」

アーテの耳障りな嘲笑が聞こえてくる。

モーモスと散々に愛し合わせた後に殺し合いをさせるとは随分と粋な演出をしてきたものだな…。

これが貴様が私に課した試練というならば、何が何でも乗り越えてやるぞ！

そして、貴様から真意を問いただしてやる！

……。

だが、身体が思うように力が入らない…。

情事の後の戦闘は正直きつすぎるぞ！

生まれ立ての子鹿である私が虎であるモーモスに果たして勝てるのだろうか…。

これは少しどころの問題ではない！

本当に洒落にならないほどに絶体絶命の状態だ！

だが、今回も無事に生き延びてみせる！

それにモーモスを何としてでも救い出さねば…。

第６０話：Ｌｉｂｅｒａ　ｍｅ（前書き）

今回は作者の勝手な解釈に基づきます。

おそらく矛盾した点、要するに突っ込み所満載ですが、どうか乗りと勢いで読んで頂ければ幸いです。

では、どうぞ。

第６０話：Ｌｉｂｅｒａ　ｍｅ

さてと、私はモーモスと言葉通り死ぬほど情事をさせてもらった。

天国を存分に味わったのだから地獄に落ちろと女性に縁の無い野郎共はそう思うだろう。

だが、モーモスとの快楽体験も私にとっては通過点でしかない。

つまり天国への準備段階でしかないということだ。

これも女性に縁の無い野郎共が聞いたら殺意全開で戦争を始めること間違いないだろう。

それでも私には大いなる夢がある。

それは私による私だけのための究極にして最終形態の快楽天国、酒池肉林を実現させることだ。

これこそが私にとっての真なる天国であり極楽なのだ。

故に真なる天国を味わっていない私にはまだ地獄を味わう謂われは無いのである！

だから、私はまだ地獄に落ちたくない！

「ロスト…」

「うぐぐっ！」

現在、私はモーモスの巨大剣に押しつぶされそうで危機的状況に陥っている。

何故、こうなってしまったのだ。

よりにもよってこんな時に試練を下さなくてもいいだろう、アーテ！

私は真なる天国をまだ味わっていないのだ！

こんな空の上、暴風雨に晒された中でモーモスの巨大剣の挽肉になる結末なんて冗談ではない！

私が最後を迎える場所は既に決まっている！

沢山の美女の中で腹上死することだ！

骨と皮の状態になっている私だが、煩悩で構成された私の魂はこれでもかというほどに健在である！

精神は肉体を越えていくこともあるのだ！

「うおおおおおおおおっ！」

私は悲鳴をあげる筋肉に鞭打って折れていた膝を立てて、モーモスの剣を押し返していく。

ここは情報で制御された夢の世界でない。

根性を出すことでいくらでも力が発揮できるのだ。

「モーモス、お前は私と戦いたいと思っているようだが、今のその様で戦おうなどとは片腹痛いわ！」

思い切り剣を振り払ってモーモスの巨大剣ごと弾き飛ばしていく。

アーテの口車に乗って戦おうなどとは言語道断！

「だからお前の意志が何処にも見られないというのだ」

弾き飛ばされたモーモスは木に激突するものの気にすることなく立ち上がってくる。

「ふふっ、そう簡単に彼女は倒れないよ。何しろ俺の手で無理矢理力を引き出してやったのだからな…」

アーテが嫌みたらしく解説をしてくる。

つまり閉ざされた世界に出てきた狂戦士と同様の状態だというのか…。

何とも厄介なことだな…。

モーモスが剣を掲げて頭上に巨大な光球を生み出してくる。

あの技は確かアルゴスにぶつけていたものだ。

まだ戦闘開始して間もないというのに早くも大技を繰り出してくるのか！

「バニッシュメントストライク！」

私を灰にせんと迫ってくる浄化の光。

先ほど無理矢理モーモスを押し返してしまったことで瞬間的に筋肉痛になってしまっている。

これでは回避できない。

「防御障壁」

とりあえず何とか耐え凌ぐしかない。

目映い光が私の視界を埋め尽くした瞬間に凄まじい衝撃が障壁に打ち付けられていく。

だが、身体は本調子でなくとも魔力は問題無い。

私の障壁は見事モーモスの技を弾いたのだ。

束の間の安心も光が止んだ瞬間に斬りかかってくるモーモスの姿を見ることで打ちきられることになる。

あの超重量の剣は受け止めたくはないぞ！

振り下ろされる剣を避けた途端に地面が割れていくのを感じる。

「何故、逃げる？私と戦え！ロスト！」

モーモスは再び剣を振り上げて斬りかかろうとしてくる。

無茶を言ってくれるものだ！

私はささやかな抵抗としてモーモスに脚払いをかける。

「きゃあ！」

モーモスは転倒して私と同様に泥だらけになってしまう。

「おのれ！よくも！」

顔を泥だらけにしながらも怒り心頭に達したモーモスは風圧だけで切り裂いてしまうほどの超重量の巨大剣を縦横無尽に振るってくる。

ささやかな抵抗のつもりが、かえって火に油を注いでしまったか！

私は筋肉痛の身体に鞭打って必死にモーモスの斬撃を回避していく。

周囲はモーモスが大技を放ってくれたお陰ですっかり更地になりかけている。

環境破壊にも程があるぞ。

「何故、本気を出してこない！力で劣る私を哀れんでいるつもりなのか！」

私はモーモスの斬撃を何とか受け止めていく。

「私はいつだって本気だ」

「嘘をつけ！」

本当に本気なのだが…。

ただお前に搾り取られてしまったお陰で思うように力が入らないだけだ。

だが、その理由はさすがに言うわけにはいかないだろう。

「私はお前と本気で戦いたいのだ！例え、どれほどの力の差があろうとも！」

モーモスの必死に気迫に押されてか、私はモーモスが繰り出す斬撃の嵐の前に少しずつ後退していく。

私は武人ではないからモーモスの強さに対する拘りが分からないが、喧嘩番長の視点で見れば少しは分かる気がしてくる。

モーモスは要するに負けず嫌いなのか？

だが、それも違うような気がしてくる。

ならば、彼女を突き動かしているものは何なのか？

分かるはずがない。

彼女の心情については大いに議論をしていきたいところだが、今は如何にこの危機を乗り越えれるかを検討し、かつ実行に移さねばならないのだ。

考えながらモーモスの斬撃を受け続けているうちに後退し続けていた足が何時まで経っても地面につかないことに怪訝に思った。

私はモーモスの剣を六角棒で受け止めたまま後ろを振り返ってみるといつの間にか崖の端に立たされていることに気づく。

いつの間にか追い詰められているではないか！

「本気を出さないのならば、死ね！」

死んでたまるか！

モーモスが剣を振り上げた所を見計らって私は頭からモーモスの胸に向かって体当たりをする。

「ぐっ！」

私とモーモスはもつれ合うようにして地面に倒れていく。

「やってくれたな！」

モーモスは拳を振るって私の頭を何度も殴りつけてくる。

人の頭をぼかすかと殴りおってから…。

まあ、それ以上に私はモーモスの胸の谷間に顔を埋めて感触を堪能しているわけだから痛み分けというべきなのか…。

だが、そろそろ離れなければモーモスの拳で頭蓋骨が破壊されてしまう危険がある。

名残惜しいが致し方ない！

即座にモーモスから離れて六角棒を持って構える。

モーモスは胸を押さえながら立ち上がり、憤怒の形相で睨み付けていく。

「貴様！どさくさに紛れて私の胸を…。もう許さないぞ！」

気づかれてしまうとは不覚。

それでも分かったことがある。

どうやらモーモスは洗脳されているようではなさそうだ。

彼女は感情を制御させる理性を失っただけらしい。

感情を制御できないということは自分の欲望を晒すことに繋がることだ。

ならば、願望を叶えてやれば落ち着くはず。

果たして彼女の願望とは何なのか？

「貴様を絶対に殺す！」

私への殺意が願望に繋がらないことを祈っておこうか…。

この流れで行けば、私と戦うことが願望だと考えるものだが、そこ

まで単純なものではないだろう。

私には及ばないもののタナトスやケールといった強者もいた。

彼女達にも叶えれた願望のはずだ。

モーモスは私と戦うことでしか得られない何かを求めているのだ。

それが何であるのかを早く突き止めなければ…。

「セイントブレイド！」

モーモスが光の奔流を放ってきている。

ならば、こちらもレテシアの技を借用して迎え撃つ！

「秘技！修羅雪！」

六角棒の先端に強大な魔力を集中させ巨大な波動の奔流を放っていく。

互いの波動がぶつかり合い、周囲に凄まじい余波を発して相殺していく。

モーモスが余波に打ち付けられながらも突進してくる姿が見えてくる。

余波で全身から裂傷を負いながらも迫ってくる姿は壮絶であった。

そこまでして望む願望があるというのか…。

「ロストォオオオオオッ！」

「モーモス！どうしてそこまで…ぐっ！」

モーモスの剣と私の六角棒が何度もぶつかり合い、周囲に余波を撒き散らしていく。

「お前には分からない！誰よりも強い力を持つお前には…」

確かに努力して手に入れた力では無いからモーモスの苦悩を理解することはできないだろう。

「ならば、強い力を手に入れた私のことをお前は理解できるというのか？」

強引に押し返してモーモスを後退させる。

「私は最強の力を手に入れて多くの特典を手に入れた。だが、同時に多くの代償を支払われることになった。それが何かはまだ分からない。だが、禄でもない代償が支払われるのだろうな…」

アーテが私に最強の力を持たせることで支払わせる代償が何なのかはまだ分からない。

だが、私はそれに対して恐怖に近い不安を持っているのだ。

「それでも私は力が欲しい。どんな代償が支払われようとも…」

モーモスはふらつきながらも立ち上がろうとしてくる。

「その代償がオイジュス様の命ということになっても欲しいと言うのか？」

「それは…」

代償が酒池肉林の夢を支払えとなれば、私だったらこの世の終わりが来たのかというほどに絶望するだろう。

「私はただ…私は…私…私…」

ん？

モーモスの様子がおかしいぞ。

「あああああああああああああああああっ！」

モーモスは急に頭を抱えて苦しみ始める。

いったい何が起こっているというのだ！

視線をアーテに向けていく。

「愚かな…。君はどうやら彼女にとって理性を司る単語を口にしたようだな…」

理性を司る単語。

『その代償がオイジュス様の命ということになっても欲しいと言うのか？』

オイジュス様の命。

オイジュス。

彼女にとって唯一無二の親友。

モーモスにとっての理性を司る存在。

「モーモスにとってオイジュスというのは理性の象徴するものと同時に欲望の原動力にもなる矛盾した存在。人は矛盾を抱え込むと一種の防衛規制を働かせるものだ…」

「あぐあああああああああぁ！」

アーテの淡々としてた説明を伴奏するかのようにモーモスの絶叫が痛々しく響き渡っていく。

「モーモスはいったいどうなるのだ！」

「私はモーモスに欲望のままに行動するように暗示をかけた。だが、汝はそれに矛盾を突き付けた」

「きゃあああああああああああっ！」

アーテは悶え苦しむモーモスを恍惚の表情で眺めている。

「本来、矛盾を突き付けられた者は防衛規制を働かせて、それを無かったこと、都合良くねじ曲げることで自我を保とうとするのだが、私がかけた暗示はたかが人の防衛規制により、誤魔化せる代物では

ない。ならば、残る道はただ一つ…」

「グルルルルッ…」

絶叫を上げていたモーモスが獣のような唸り声を出してくる。

私はこの様子を以前にも見たことがあった。

そうだ、これは確か…。

狂戦士だった頃のケールと同じ状態だ！

「矛盾をなかったことに出来なければ、自我を崩壊させるしかない。そして、自我が崩壊されれば、残されたの原始的欲求、すなわち畜生の如き本能のみだ。そう、彼女は獣になったのだ」

「ガアアアアアアアアッ！」

モーモスが獣の咆吼を上げていく。

まさか本物の狂戦士となってしまうとは…。

獣の成り果てたモーモスの威圧感は今までとは比較にならないほどに大きい。

獲物を探し求める黄金の瞳が私の顔を映していく。

「ふはははははっ！獣は貴方を獲物と定めたようですね！」

私は咄嗟に武器を構える。

「グオオオオオオオッ！」

モーモスは噛みつくような勢いで剣を六角棒に叩きつけてくる。

「ぐあっ！」

身体中の骨が砕けたのではないかと錯覚させる程の衝撃がやってくる。

獣になったことで無意識に制御していた力も引き出されたというのか！

「さあ、ケールと同様にモーモスも調教したらどうかね？」

「グガアアアアアアアッ！」

モーモスは剣を受け止めている私の腹を蹴り上げていく。

「ごはっ！」

喉の奥から熱い物が溢れだしてくる。

モーモスの蹴りで内蔵を痛めてしまったのだろうか…。

蹴り飛ばされている私に追い打ちを掛けるようにモーモスが跳躍してきて剣を振り下ろそうとしてくる。

今の状態で食らえば確実に挽肉になってしまう！

叩き付けれた背中の激痛を耐えるように横に転がっていき、振り下ろされる巨大剣を回避する。

その瞬間にさらなる衝撃が身体に打ち付けられていき、塵屑のように私の身体が弾き飛ばされていく。

ぐおぁあああっ！

まるで蹴球にでもなった気分だ…。

飛ばされながらも目にした光景は私に激痛を忘れさせるほどに馬鹿げたものだった。

浮遊していた地盤が二つに割れていたのだ。

馬鹿力を越えた馬鹿力だな…。

「ははははははっ！これこそが彼女が背負っている重圧だ！貴様には受け止められるのかね？彼女の心を？」

アーテが何かを言っているようだが、それどころではない！

モーモスは完全に狂戦士と化している。

幸いなことにケール以上の力ではない。

その気になれば、無力化させることも困難ではないだろう。

だが、それでは根本的な解決には程遠いのだ。

彼女が持つ願望は何なんかを紐解いていかなければならない。

それが暴走を食い止める最善の方法なのだから…。

「セイント…ブレ…イド！グオオアアアッ！セイント…ブレイド！ブレイド！セイント！ブレイド！グガアアアアアッ！」

モーモスが出鱈目に必殺技を連発してきている。

浮遊している地盤がまた割れていく。

暴風雨に伴って、必殺技の余波で目が開けられないほどの風が吹き荒んでいる。

狂戦士の本領発揮というところか…。

次々と迫ってくる光の波動を回避しながらも私はなけなしの脳細胞を総動員させて考える。

モーモスはいったい何を私に望んでいるのだ？

彼女と交わした会話の中に必ず手がかりがあるはずだ！

思い出すのだ、ロストよ！

……。

そうだ、最初に出会ったときは何処か疲れていた様子だった。

『そうか、お前も色々と考えているのだな。私もこのアースガルズ

の行く末について考えているのだが、なかなか上手くいかないものだな…』

モーモスは国の行く末について真剣に考えていて心労の極みと言っていい状態だったな。

さらに…。

『それに引き替えオイジュス様は本当に上手く立ち回っておられる。私が言っても聞かない者達もオイジュス様が言えば、首を縦に振ってくれる。私とオイジュス様と何が違うのだろうか…』

オイジュス様に対して劣等感を抱いていた節があった。

そして…。

『私だってオイジュス様のように歌を歌いたいし、綺麗に着飾りたいのだ！格好良い男と食事をしたり、綺麗な夜景を一緒に眺めたりして…はぁ…』

オイジュス様の女性らしい面に憧れを抱いていた面もあった。

オイジュス様に対する羨望と劣等感。

それらは自分がオイジュス様と対等になれる証を渇望する切っ掛けに繋がったのだろう。

だが…。

『私はついに絶対的な力を手に入れれたのだと思った。だが、私は

力を得たことで尚更思い知らされたのだ。いくら凡人である私が努力しても到達できない真の強さというものにな…』

『限界か…。確かにそう思ったのかも知れない。だからこそお前にこの国の王になるように言ったのだろう。私では無理だからな…』

モーモスは現実に自分の力の限界を知り、私に全てを委ねようとしていた。

他にもアースガルズを守るためにオイジュス様と対立してしまったことも悔やんでいた。

最初は単なる心労による否定的かつ悲観的の思考が芽生えていたのだと私は思った。

だからこそ、心労を吹き飛ばす娯楽が必要だと思って連れ回したのだ。

だが、果たしてモーモスが欲しかったのは娯楽だったのだろうか？

……。

「グガアアアアアアアアアッ！」

私の思考を遮るかのようにモーモスの咆吼が轟いてくる。

巨大剣を振るって旋風を巻き起こし、なぎ倒された木々や岩石が飛来してくる。

六角棒を高速回転させて飛来物を弾きながらも私は思考を再開させ

る。

……。

私はモーモスに娯楽を提供することは失敗し、森へと迷い込んでしまった。

それでも彼女は嬉しいと言って笑ってくれた。

単なる私への気遣いによるものだったのかもしれないが…。

『ふふっ、これほどに気持ちいい場所があることをもっと早く知っていれば、オイジュス様と一緒に行っていたのにな…』

ここでまたオイジュス様の名前が出てきたのだ。

アーテの言うとおり、オイジュス様はモーモスにとって理性を象徴するものなのだろう。

いや、アーテは他のも重要なことを言っていたはずだ。

それは…。

『モーモスにとってオイジュスというのは理性の象徴するものと同時に欲望の原動力にもなる矛盾した存在。人は矛盾を抱え込むと一種の防衛規制を働かせるものだ…』

欲望の原動力。

矛盾した存在。

防衛規制。

意味が分からない。

なぜ、理性の象徴であるはずのオイジュス様が欲望の原動力となっているのだ？

欲望とは感情に近いものであり、理性が制御するものだ。

制御するはずの理性が欲望の原動力となっている。

これこそが矛盾ということなのか？

理性というのはおそらくオイジュス様を守るために自分のやりたいことを我慢するという意味だろう。

ならば、欲望の原動力とは何を指しているのだ？

これがおそらくモーモスを苛んでいる何かだ。

そして、防衛規制だ。

自分の否認したい欲求や不快な欲求を持つ自我を再構築させることで心理的負担を軽減させるものだと村の学者から聞いたことがある。

さらに防衛規制が過剰に働けば、自我の再構築から自我の変性、すなわち歪みが生じてくることにも繋がるとも言っていた。

なぜならば、再構築したところで否認したい欲求や不快な欲求が消

えることが決してないからだ。

要するに臭い物に蓋を閉めることで溜め込み、あたかも無かったかのように振る舞っているということなのだろう。

だが、いつもでも臭い物を溜め続けてしまえば、やがて本体そのものが腐っていくのは必定。

例えは下品だが、いずれ臭い物は排泄していく必要がある。

自分の汚い部分と向き合わねばならないということだ。

モーモスの望むことはそれに隠されているはず…。

……。

地盤は割れてもアーテの魔力が行き渡っているのか空中に浮遊したままだ。

空には無数の地盤の欠片が浮遊していた。

私とモーモスはそれに飛び移りながら戦っている。

戦っていると言っても私が逃げて、モーモスが追いかけてくるという形なのだが…。

『死ネェエエエエエエエエエエエっ！』

モーモスが追撃してきて、私はそれは回避することを繰り返す毎に足場が破壊されていく。

このままではいずれ逃げ場が無くなってしまう…。

「さあ、どうするかね？いつまでも逃げ切れるものではないわよ。彼女の重圧をまだ理解できないのか？」

アーテは空中に浮遊して高みの見物と決め込んでいる。

こんなことならば、飛翔魔法を入念に練習しておくべきだったな…。

確かにこのままだと逃げ場はもう無くなってしまう。

……。

モーモスの抱える目を背けたい部分とはいったい何なんだ？

まだ、あるはずだ！

私が聞き流したモーモスの心の根幹を象徴する何かが！

そもそも彼女は何故、私と戦いたがっているのだ？

私を倒すことで自分の力を証明したいためなのか？

違うな。

それこそ、私でなくともタナトスやケールでも事足りることだ。

私に個人的な恨みがあるのか？

ありえそうだが、まさか殺し合いに発展するまで恨まれる覚えはない。

問題は戦い云々ではない。

何故、私なのかということだ。

モーモスは私にいったい何を求めている？

私はモーモスと情事を交わすまでの仲となった。

彼女は私に色々な面を見せてくれた。

『ロスト、私もその彼女のように強くなれるのだろうか？』

『お願いだ。もう少し優しくしてくれ。初めてなんだ…』

『だが、これだけは信じて欲しい。私は心に無い相手にこんなことは決してしない…』

今まで抑圧していた想い。

そのとき、私はある事を提案した。

『モーモス、お前がアースガルズの王になったらどうだ？』

私はモーモスに王になれと言ったのだ。

思惑は私が責任を負いたくなかったから押しつける意味で提案したのだが、もちろんそれだけではない。

責任感が強い彼女ならば、やり遂げられると思ったからだ。

そして、彼女は私に言ってきた。

『だったら、お前が私を支えてくれるのか？』

彼女が私に心を許したと思わせる象徴的な言葉だ。

心を許すとはすなわち自分の全てを晒け出すことを意味している。

私は彼女に選ばれたのだ。

自分の全てを晒しても良いと思える相手として。

ならば、彼女は私に何かを晒したいと思っていると推測出来る。

それこそが私に求めていることだ。

私に何かを気づいて欲しいのだ。

彼女は生粋の武人だ。

きっと戦いの中で自分の思いを伝えようとしているのだろう。

何とも過激な肉体言語というものだな…。

では、それそろ解答を導き出してみようではないか。

早くしないと本気で逃げ場が無くなってしまう。

さて、モーモスの関する重要な言葉を羅列してみよう。

まずはオイジュス様。

責任感。

劣等感。

憧憬。

力の渇望。

責任感、劣等感、羨望、力の渇望、これらの言葉は全てオイジュス様から派生したものだ。

責任感は親友としてオイジュス様、アースガルズを守るという思い。

劣等感はオイジュス様の力になれていないかもしれないという思い。

羨望はオイジュス様の女性としての魅力に憧れている思い。

力の渇望は…。

『まず、私が殴り倒された。それからオイジュス様の服が破かれた。その様子を私はただ見続けるしかなかったのだ…。私のオイジュス様が汚されてしまう！だが、女である私は余りにも非力だったのだ！これほどまでに力を渇望したことは無かったよ。なぜ、私には力が無いのかと…。私達はこのまま為すがままにやられてしまう。そう思った時だった』

『颯爽と騎士が現れて、瞬く間に男共を叩きのめしていったのだ！私は感動に打ち震えてしまったよ！ああ、これこそが私が求める力なのだと…。オイジュス様を守ることが出来る絶対的な力だと！歌を歌うだけでは何も守れはしない。圧倒的に叩き伏せる力が無くては生き延びれないのだとな！』

まさか…。

ふと私を引き留めようとしたときのモーモスの言葉を思い出す。

『私も卑怯な女だな。こうやって女の武器を使ってお前を繋ぎ止めようとしている。私はお前にヴァルキリアに行って欲しくないんだ。そのためだったら何だってやってやる！』

モーモスが私に晒してくれた思い。

『私に女としての魅力はそれほど無いというのか？やはりオイジュス様のような女性を好むというのだな！』

『何のつもりもない。私はもうお前を離さないぞ。お前が私を女であることを思い出させたのだからな。だから、責任を取ってもらうのさ』

モーモスの根幹を司る一番重要な言葉はまだあった。

女。

女の全てを司るのはオイジュス様だ。

それと同時に矛盾を司っている。

矛盾とは相反する物事がぶつかり合い、辻褄が合わなくなることだ。

全ての重要な言葉はオイジュス様から派生したもの。

すなわちオイジュス様は派生した言葉の反対の意味を司るのだ。

派生した言葉とそれ以外の全てを反対に捉えるとどうなる。

……。

責任感の対は無責任。

劣等感の対は優越感。

羨望の対は嫉妬。

力の渇望は求める方向性が真逆であること。

守りたい者の真逆。

掛け替えのない親友の真逆。

彼女が今まで語ったオイジュス様への思いの言葉の数々の全てを真逆に捉えてしまうと…。

……。

想像を絶する程のおぞましい内容になってしまうぞ！

何故、気づかなかった！

私はやはり馬鹿だ！

複雑な計算を公式を使用せずに延々と無駄に地道な計算をして答えを導き出したような馬鹿さ加減だ！

これがモーモスの防衛規制までもして隠したい思いだったというのか！

……。

「バニッシュメントストライク！」

モーモスが放つ巨大な光球が足場の地盤を呑み込みつつも迫ってくる。

「うおおおおっ！」

私は裂帛の気合いを入れて、六角棒を振るって光球を虚空へと弾き飛ばす。

「鬼ごっこはもう終わりだ、モーモス…」

「グゥゥ…」

足場はもう二つしかなかった。

私が立っている場所とモーモスが立っている場所だ。

「モーモスの心の重圧が解けたというのか?」

アーテは私の近くへと寄ってくる。

「ああ、貴様のお陰でな…」

「そいつはどうも。では、決着を付けてくれないかな?そろそろ前座は飽きてしまったのでね…」

アーテは前座だと言った。

この先まだ何か禄でもないことが待っているというのか…。

隣にはすでにアーテはいなかった。

戦いに巻き込まれないために姿を消したというわけか。

私はモーモスを見据える。

「モーモス、もう終わりにしよう…」

お前の心の闇は充分に見せてもらった。

「お前のために少々の痛みは我慢するぞ!」

もう光に照らされても罰は当たらないだろう。

「逃げも隠れもせん!」

私は何処でも掛かってこいと言わんばかりに両腕を広げる。

「さあ来いっ！私を貫いてみせろ！」

モーモスは獣の咆吼を上げて、巨大剣を私の心臓に目掛けて貫かんと横飛びをして迫ってくる。

「私はお前の重圧を受けてみせるぞ！モーモス！」

「グガアアアアアアアアアアッ！」

うおおおおおおっ！

格好つけたものの物凄く恐い！

だが、成せば成る！

咆吼と共に迫ってくる剣先を僅かに身体を反らして避け、脇に抱えて止める。

「ガアアアアアアアアアッ！」

モーモスは止められた剣を必死に動かそうと力を入れるが、私の身体はびくともしない。

「モーモス、誰しもが闇を抱えているものだ。お前のオイジュス様への思い。誰しもが一度や二度抱くことはあるのだ…」

「ガアアゥ…」

私の脇腹から血が流れていく。

物凄く痛い。

だが、モーモスの方がもっと痛いはずだ…。

「愛しているが、憎んでもいる。憧れているが、妬んでもいる。お前がどんな理由で力を求めていたかは敢えて私からは聞かない。だが、お前はもう本当は分かっているのだろう？」

「ガアアゥ…ウ…ル…サ…イ！ウルサイ！黙レ！黙レェエエエエエッ！」

うぐっ！

地面に亀裂が走っていく。

このままだと二人一緒に地上へと真っ逆様になってしまう。

だが、ここは堪えなければ！

「己の感情を認めろ！でなければ、本当の意味で誰とも向き合えなくなるぞ！オイジュス様は愚か、私やアースガルズ全国民とも！それは誰も望んではいない！」

「ワ…タシハ…自分ノ感情ガ汚ラワシイ！醜イ！恐いのだ！だから必死に力を得て、オイジュス様の、アースガルズに尽くそうと思って、だから！」

モーモス…。

「うおおおおおおおおおおっ！」

脇に抱えている巨大剣を握りつぶして、モーモスの元へと駆けつける。

「モーモスゥウウウウウウウウッ！」

「ロスト！」

私は体当たりをするかのようにモーモスに抱きつく。

「お前はよく頑張った。誰よりも努力をしてアースガルズに尽くしてきたのだ。そんなお前を誰が嫌う奴がいようか…」

「ロ…ス…ト…」

モーモスは私の下で組み伏せられたかのような体勢になっている。

暴れ出すかと思っていたが、抵抗は無い。

「それにロンは言っていた。お前のお陰で自分が助かったことを…。それでお前に憧れているのだと…」

「ロンファンが私に憧れる？」

モーモスの目に正気の光が灯ってくる。

「そうだ。ロンだけではない。他にも多くの女騎士がお前に憧れているのだ。お前は認められているのだ。アースガルズの英雄として

だけでなく、モーモス・ロードハルトとして皆が認めているのだ。
私もお前ががんばっていることはわかっている。お前は凄い…」

「ロスト…私は…私は…」

私はモーモスを抱き締めていく。

モーモスは力を得たかっただけでは無い。

全てを晒け出しても尚認めてくれる相手が欲しかったのだ。

そして、行き場の無い自分の思いを誰かに受け止めて欲しかった。

要するに甘えれる相手が欲しかったわけだ。

「お前は今まで頑張りすぎて疲れているだけだ。だから、ゆっくり休め。それから、疲れが取れたときにオイジュス様とも話せばいい…」

モーモスは女として守る立場だけでなく守られる立場、自分の身を委ねれるような安心感をもたらしてくれる相手が欲しかったのだ…。

「済まない…お前には…迷惑ばかり…かけてしまって…傷つけてしまって…」

モーモスは私の脇腹から流れる血を見て、申し訳なさそうな目をしていた。

「構わない。私もお前の胸を存分に堪能させてもらったからな。その代償だと思うことにする。お前は何ら気にすることはない」

「ふっ…お前らしいな。だが、それを含めて私はお前を…愛しいと思ってしまったのだな…」

モーモスの身体から力が抜けていく。

どうやらモーモスの欲望は果たされたようだ。

……。

「ふふっ、おめでとう、ロスト。お前が勝者だ。良かったですね、モーモス。貴方の醜い部分を認めてくれる相手が見つかって。でも、もう少し付き合って欲しいかな？」

アーテの声が聞こえた瞬間に意識が飛ぶほどの衝撃が襲ってくる。

私はいつの間にか弾き飛ばされていた。

「ロスト！貴様、離せ！」

私は弾き飛ばされながらモーモスの方を見る。

彼女は再びアーテに抱きすくめられていた。

「ははははっ！この世に起こる事は全て必然であり、偶然は一つもない。よく真理を突いている格言だと思うよ。なぜならば！」

アーテは抱きかかえながら手を翳してくる。

その瞬間に空間に歪みが生じ、黒い球体が出現してくる。

いや、球体ではない。

何処かへ続く穴のような形状だ。

「全ての事象は神が仕組んだものであるからだ！故に全てが必然となる！」

私はアーテの嘲笑が響く中、浮遊した地盤から落ちていく。

ここまで来て、人生終了なぞ冗談ではない！

アーテ、貴様にはまだ聞きたいことがあるのだ！

私は魔力を全身から放出して、アーテの元へと飛んでいく。

どうやら飛翔魔法が土壇場で使えるようになったようだ。

できれば、早く使えれるようになりたかったものだ。

「アーテ！モーモスを何処に連れて行くつもりなんだ！」

「偶然は無く全てが必然。正直、この女をお前と戦わせる予定は無かったのだ。だが、これも神の気紛れというやつだろう。彼女には欲望を果たす切っ掛けを与えてやった。そして、それが叶えられたのだ。ならば、その代償として利用させてもらうまでだ！ははははははっ！」

アーテはモーモスと共に空間に生じた入り口に向かって飛翔していく。

「この女を帰して欲しくば、私を追いかけてこい！そのときこそ、最後の試練を与えてあげましょう」

「くっ…ロスト、済まない…」

アーテとモーモスは空間にこじ開けられた穴へと吸い込まれていく。

「モーモス！くっ！最後の試練とはいったい何なのだ！」

私の質問に対して、モーモスは獰猛な笑みを浮かべてくる。

「最後の試練？ふはははははっ！そんなの決まってるじゃない！私と殺し合いをすることだ！くっくっくっ、俺はこの日を来ることを心待ちにしていたんだぜ！神武闘式真決勝戦といったらいいのかな？あはははははっ！」

「アーテッ！モーモスゥウウウウウウッ！」

アーテは狂笑を上げながら、モーモスを抱きかかえて空間にこじ開けられた穴の中へと消えていく。

本来なら如何にも物騒そうな場所に足を踏み入れるつもりはないのだが、アーテの手の中にはモーモスがいる。

やはり行くしかないのか…。

それにしても何て事だ…。

最後の試練がよりにもよってアーテと戦うことになるとはな…。

私は最強の力を手に入れている。

だが、最強の力を与えてくれたのはアーテだ。

それにアーテはアルゴスのような三流ではない、正真正銘の神。

……。

私は果たしてアーテに勝てるのだろうか？

物凄く恐いし、逃げ出したい思いもあった。

だが、モーモスが攫われてしまったのだ。

断じて引くわけにはいかない。

何としてもアーテを倒して、モーモスを救い出さねばならない。

そして、アーテから真意を今度こそ聞き出すのだ。

東洋の諺にある。

虎穴に入らずんば虎子を得ず。

とにかくあの穴に飛び込まなければな…。

果たして生きて帰れるのだろうか？

いや、考えるまでもない。

絶対に生きて帰るのだ！

例え、相手が神であろうとも私の流儀は変わりはしない！

待っているがいい、アーテ！

そして、必ず助け出すぞ、モーモス！

第６０話：Ｌｉｂｅｒａ　ｍｅ（後書き）

次回、いよいよ因縁のヒロイン、アーテとの決戦が始まります。

御感想お待ちしています。

また、今後も更新が遅れるかもしれませんが、どうか見捨てないでください。

第６１話：喧嘩番長

私はアーテがこじ開けた穴の中へと飛び込んでいく。

穴の中は暗闇の中で沢山の稲妻のようなものが踊るようにうねっていた。

凄まじい力の放流があることは一目瞭然だ。

ここがアーテが待ち受ける世界なのか？

いや、暗闇の中に一条の光が刺しているのが見えてくる。

私の身体が光に導かれるように飛んでいる。

あの光の先にアーテが待ち受けている世界に通じる道があるのだろう。

待っているがいい、アーテ。

貴様が下す最後の試練を乗り越えてみせるぞ…。

視界は暗闇から光に満ちていき、私は見知らぬ世界へと降り立っていく。

……。

……。

…。

「よっ！兄ちゃん、野菜はいらねえか？安くしとくぜ！」

「誰なの？いきなり現れて気味が悪いわね…」

「おい！ぼおっとつったってんじゃねえよ！」

……。

この世界は何処なのだ？

何ら特筆することのない普通の世界。

アーテは何故、この世界に私を連れてきたのだ？

『ロスト！』

誰かが私の名を呼んでいる。

『ロスト！私はここにいるぞ！』

この声はモーモス！

しかも上空から聞こえてくるぞ。

私は空を見上げてみる。

太陽が二つあるな…。

いや、太陽が二つではない！

もう一つは光の球体のようなものだ。

その球体の中に人影が見えてくる。

『ロスト！』

球体からモーモスの声が聞こえてくる。

私は目を擦って球体をよく見てみる。

球体の中にはモーモスが裸体で閉じこめられている姿があった。

ぐほっ！

私の鼻から熱い物が吹き出しそうになってくる。

非常事態だというのにモーモスの我が儘な裸体を見て興奮してしまうとは…。

全く我が煩悩はつくづく場所を選ばないようだな…。

そんな自分が嫌いではないぞ。

……。

いや、それよりもモーモスが公衆の面前で裸体を晒されているのだ！

これは公序良俗に反する！

少し残念な気もするが、早々に解放せねばならん！

私は飛翔魔法を使おうと魔力を溜めようとしたときだった。

聞き覚えがある楽器の音色が響いてきた。

これは楽器の女王と呼ばれたハープの音色。

「もうすぐ、吟遊詩人アーテー様の唄が始まるぞ！」

「きゃあ！アーテー様は今度はどんな素敵な唄を聞かせて入れるのかしら？」

吟遊詩人アーテーだと？

色々と疑問が過ぎってくるが、今はモーモスを助けることが先決だ。

私は飛翔魔法を使ってモーモスの元へと飛んでいく。

「おい、こんな場所で魔法を使っていかんぞ！」

「法律に反するぞ！おい、警邏隊を呼べ！」

邪魔な野郎共が群がってきている。

「私はただモーモスを助けようとしているだけだ！貴様等、空に女がいるのが見えんのか！」

男達は訝しげに私を見てくる。

「何を言っているんだ？お前は…」

「空を飛んでいるのはお前だけだろう？」

「空に女がいるだと？どうやら精神的にも問題がありそうだな。後で病院に送ってやるから大人しくしろ！」

この野郎共にはモーモスの姿が見えていないのか？

野郎共は私を精神異常者であると断定して捕らえようとしてくる。

こんな訳の分からん世界で野郎共に掴まってたまるものか！

私は飛翔魔法を使って追跡してくる野郎共を振り切ろうとする。

『世界が変わり、英雄は道化へと成り果てていく…』

ハープを奏でながら唄うアーテの声がやけに明瞭に響いてくる。

「食らえ、この異常者め！フレアランス！」

「アイスカッター！」

「ウインドシューター！」

野郎共は魔法を雨霰のように私に放ってくる。

飛翔魔法を使っただけでここまでやるのか！

私は防御魔法を展開して、魔法を弾いていく。

『ロスト！』

モーモスの悲痛な叫びが響いてくる。

「抵抗するならば、死体に変えて病院に移送してやるぞ！」

野郎共にモーモスの悲鳴は聞こえていない。

このままでは球体に閉じこめれたモーモスから遠ざかってしまう。

『道化となった男に対し、世界は残酷に、無慈悲に追い詰めていく…』

アーテの唄が耳障りに聞こえてくる。

そうだ、アーテだ！

彼女の元に向かって直接問い正す。

モーモスのことは後回しになってしまうが、これが最善の解決方法だ！

野郎共が放つ魔法を回避しながらアーテの元へと向かっていく。

『道化を気づく。ああ、この世界は悪意に満ちている…』

「逃がしはせぬぞ！ミッシング・レイ！」

ミッシング・レイだと！

この群衆が溜まっている場所で大魔法を使うとは正気の沙汰では無いぞ！

野郎の放つ光の波動は私を呑み込もうとしてくる。

私の背後には無関係の人達がいる。

『世界がこれほどまでに悪意に満ちているのだ』

普段なら赤の他人を気に掛けないのだが、私の不始末で巻き込んだとなれば具合が悪い。

私は広範囲の防御結界を展開させる。

『きっと邪悪なる神、偽りの神が造り上げた偽の世界なのだと…』

光の波動は防御結界を突き破らんと攻め立てていく。

通りすがりの野郎その他にしてはやけに協力な魔法を放ってくるな…。

「ミッシング・レイ！」

「ミッシング・レイ！」

光の波動が二重、三重と放たれてくる。

これは本気で洒落にならないぞ！

防御結界に亀裂が走ってくる。

これ以上は防ぎきれない！

『偽りの神が私を弄んでいるのだと…』

「死ねっ！ロスト！」

防御結界が硝子が砕けるように破られてしまった。

野郎共は名乗ってもないのに私の名前を言って攻撃してきた。

奴らは普通の人間ではない！

アーテが造りし自動人形だ！

ならば、遠慮はいらない！

六角棒で迫ってくる多重の光の波動を強引に弾き飛ばし、野郎共に向かっていく。

「人形は人形らしく黙っていろ！」

六角棒を一閃して野郎の身体を胴薙ぎにしていく。

大量の血が吹き出し、私は返り血を浴びてしまう。

くっ、人形の癖して生々し過ぎる血の匂いだ！

「ああっ！よくもマイケルを殺してくれたな！」

「許さねえぞ！貴様だけは絶対に許さねえぞぉおおおおおっ！」

『ああ、世界は狂っている…』

野郎共は涙を流しながら剣を抜いて斬りかかってくる。

馬鹿な…。

人形のはずだ…。

私は野郎共の剣を回避しながらも言いしれぬ焦燥感に駆られていく。

人形が人の死を悲しんでいる。

男の怒りの刃が私の首を貫こうとしてきた。

私は咄嗟に六角棒を突き出し、男の胸を貫いていく。

六角棒に男の血が呪いのように伝ってくる。

「この…悪魔…め…ごほっ…」

「ハンクスまでもが…貴様ぁあああああああっ！」

『ああ、世界は病んでいる…』

私は逃げるように男の胸から六角棒を引き抜く。

男の胸から血が噴水にように吹き出し、私の身体を紅に染め上げていく。

何なのだ、これは…。

気分が悪い！

吐き気がしてくる！

この世界は作り物のはずだ！

それなのにこれはいったい何なのだ！

「くそっ！マイケルとハンクスは俺の掛け替えのない親友だったんだ！殺してやる！絶対に殺してやるぞ！ネクロバース！」

ネクロバースだと…。

確か、エイラが使っていた死霊を自らの身体に宿らせて何倍もの力を高めてくる悪魔の秘術だ！

男の身体に二つの魂が乗り移っていく。

先ほど殺したマイケルとハンクスの魂のなのか！

「アア…マイケル…ハンクス…一緒ニ…悪魔ヲ…討チ滅ボシテヤロウゼ！シャアアアアアアッ！」

憎しみの刃が私の心臓を刺し貫こうと迫ってくる。

六角棒で何とか受け止めるものの想像以上に凄まじい衝撃が襲いかかり、私の身体が弾き飛ばされていく。

私は近くの店の窓を突き破って叩きつけられていく。

「きゃあああああっ！」

「何なんだ！いったい！」

店にいる客の悲鳴が脳に響いてくる。

「軍を要請しろ！」

「悪魔が来たぞ！」

「世界を守るのだ！」

何だか私はこの世界を巣くう悪魔だと認定されてしまっているようだ。

立ち上がろうとしたときに身体中から激痛が走ってくる。

ぐっ、身体中に硝子が突き刺さっているのか…。

「悪魔メェエエエッ！滅ビロォオオオオオオッ！」

『道化はついに偽りの神に反旗を翻す…』

私を店に突き飛ばした男が刃を振るって迫ってきている。

動揺するのはここまでだ。

今は自分の命を最優先にするのだ。

私は何とか立ち上がって六角棒を構える。

「今度コソ終ワリダァアアアアアアアッ！」

『偽りの神を倒して、真なる世界を目指すのだと…』

「悪魔と罵るならそれも良かろう…」

六角棒は迫り来る刃ごと男を粉々に吹き飛ばしていく。

血と肉片が店内におびただしく飛び散っていく。

「私は悪魔と罵られようとも生き延びるからな…」

私の周囲に兵隊達が押し寄せてくる。

「くっくっくっ、抵抗は止めて大人しく投降しろ。そうすれば苦しまずに殺してやるぞ」

『哀れなる道化よ！偽りの神の下す試練に紅い布を纏っていくのか！』

「貴様の遊びは辟易したぞ！アーテ！カタストロフ・サン！」

私の身体は漆黒の炎に纏い、周囲の兵隊は薙ぎ払っていく。

「ぎゃあああああっ！」

「神よ！我を救いたみゃあああああああああああああっ！」

嫌みなほどに真に迫った悲鳴だ…。

胸くそが悪い…。

私は炎上する店を飛び出し、周囲を見渡す。

「悪魔め…」

「悪魔め…」

「悪魔め…」

「悪魔め…」

「悪魔め…」

老若男女問わず包丁や鍬を持って取り込んでいる。

「私が悪い悪魔をやっつけちゃうんだからね！」

「そうだ！殺せ！殺せ！俺達の手で世界を救うんだ！」

年場の行かない少女が包丁を持って襲いかかってきた。

悪趣味なことをしてくれるものだ！

私は子供の拙い攻撃を軽く交わしていく。

ぐっ！

頭部に衝撃がやってくる。

「滅びろ！」

「死ね！」

「消えろ！」

群衆が私に次々と石を投げつけている。

馬鹿な！

私のみならず襲ってきている子供にまで石が当たってしまうぞ！

包丁を振るって襲いかかってくる少女を抱き締めるようにして投げつけられる石から庇う。

「暴れるな！お前まで巻き添えを食らうぞ！」

「優しいんだね、悪魔さん。でも、僕は騙されないぞ！」

少女は密着している私に包丁を突き立てようとしてくる。

「私こそ騙されないぞ、アーテ」

私は脇腹が刺される寸前に包丁を握って止める。

「何を言ってるの？アーテなんて名は…」

「最初は私と言っていたのに次は僕。変装するなら一人称ぐらい決めておけ！この大根役者が！」

私は抱きかかえている少女を思い切り投げ飛ばす。

「ふふっ、これは詰まらない癖が出てしまったみたいだね…」

少女は宙返りして地面に着地していく。

姿はいつの間にか少女から大人の女性に変わっていた。

白い軍服に肩までに切り揃えた白髪を靡かせる、およそ人間離れした美貌を誇る女神。

私に最強の力を与えてくれた女性。

アーテー。

「僕の唄はどうだったかな？一応、遙かなる昔に異端認定されてしまった宗教的思想を基にして唄ったのだがね」

「この世界は悪意に満ちていて、故に世界は偽りで創造した神もまた神の偽物であるということか？」

アーテは笑みを浮かべる。

「この世界は作り物の物質で構成された世界。まさに偽りの世界だ。

もっとも俺は偽りの神でなく、真なる神であるがな。君は英雄かな？それともただの道化かしら？あるいは…」

「宗教なぞ興味は無い。信じる神の本性を知っているわけだからな」

群がっている民衆を見渡す。

「貴様も悪魔なのか！」

「魔女よ！火あぶりに刑にしないと！」

「呪われるがいい！悪魔の御子よ！」

群衆はアーテに掴みかかろうと襲いかかってくる。

「アーテ！」

「ふっ、我が造った人形ながらも鬱陶しいことこの上無いな。失せろ」

アーテは塵を払うかのように手を振った。

その瞬間、掴みかかろうとした者達は上半身が吹き飛び、鮮血が吹き荒れていく。

……。

「きゃあああああ…あぐぁあ！」

「耳が痛いわね、黙りなさい」

悲鳴を上げている女の喉笛をアーテの抜き手が貫いていく。

「ああっ！誰か助けてぇ！」

「逃げろ！殺される！」

「主等はただの人形じゃ」

悲鳴を上げていた二人の首が飛び血が吹き出ていく。

「アーテ！何のつもりだ！何故、こんなことをする！」

余りの一方的すぎる虐殺行為にたまらず声を掛けてしまった。

民衆等はアーテの虐殺を恐れて逃げまどっていた。

「邪魔だから、壊していただけさ。お前の推察通り、これらは全て私が造り上げた人形だ。良くできているだろう？」

白い軍服は真紅に染まり、白髪も雪のように白い肌も全身が血に染まっているアーテの姿は壮絶の一言だった。

「あの滓のアルゴスが造り上げた世界とは比較にならないほどに完成度だぞ。見るがいい」

「あっ！た、助けて！お願い！何でもしますから！」

アーテは逃げ遅れた女の首を鷲掴みにして私に見せつけてくる。

掴まれている女性はアーテが造った人形といえ、無為に殺すのは見過ごせない。

彼女はアルゴスの世界の自動人形とは違って生きた反応をしているのだ。

「お前の考えはだいたい読める。生きているように見えるのだろう。だが、紛れもなく私が仕組んだ人形なのさ…」

「お願い…助けてよぉ…まだ死にたくない。せっかく…アランと結ばれて…幸せな家庭が…築けると思ってたのに…」

あそこまで真に迫った反応を示す者が本当に人形なのか…。

「よせ、離してやれ。人形だと仮定しても紛れもなく生きているのだ」

「あはははははっ！喜び、哀しみ、楽しみ、怒り、およそ人間らしい感情を詰め込んでいる完成度の高い人形だ！おい、女。生きたいか？」

女性は一心不乱に首を縦に振ってくる。

「ならば、目の前にいる男を殺せ。そうすれば命だけは助けてやるぞ…」

アーテは恐怖に震えている女の手に包丁を握らせ悪魔の囁きを掛けてくる。

「それで…助けてくれ…頂けるのですか？」

「ああ、私は神だ。神は常に真実を述べる。家族と幸せな日々を送りたいのでしょう?幸せは他人の不幸で成り立つものさ…」

「アーテ、止めろ。けしかけるな…」

女は震える手で包丁を私の方に向けてくる。

「ご免なさい…私には…帰りを待っている家族がいるの。だから死んでちょうだい!」

包丁を持った女は瞬時に私の間合いに入ってきて、包丁を振り上げてきた。

この尋常ではない動きは何だ!

「あはははあはっ!彼女は儂が造り上げてた優秀な人形じゃ。ロストを殺せ…」

「ハイ、我ガ主…」

女は怯えていた声から一変して無機質な声を出して私に斬りつけてくる。

その斬り込みは鎌鼬のように鋭く速いものだった。

「ぐっ!これが貴様が造った人形だというのか!」

女の涙に濡れた無機質な表情は見るだけでも痛々しかった。

「さあ、今度はお前の手で私の人形を処分してみせてくれ…」

「死ネ」

女の包丁が私の喉を切り裂こうと一閃してくる。

くっ、致し方ないというのか…。

私は六角棒を一閃する。

女は包丁を振り上げたまま、胸から血を吹き出しながら地面に崩れていく。

「アア…死ニタクナイ…死ニタクナイ…死ニタクナイ…死ニ…タク…ナイ…死…ニ…タ…ク…ナ……ィ」

譫言のように死にたくないと呟きながら動きを止めていく人形に思わず私は目を逸らしてしまう。

「自動人形とは予め設定された情報を基に動くものだ。人の記憶で保持された情報程度ではそれこそ毛が生えた程度の出来損ないの人形しか作れないが、神である私は違う。無限の知識と悠久の時間がより完全なる人に近い自動人形を作ることが可能なのだ」

アーテは動かなくなった人形を見下ろしながら説明してくる。

何だか今のアーテには違和感を感じる。

そうだ、アーテは表情に違和感があるのだ。

彼女は人の表情が苦しみ姿を見て、楽しむことが好きなはず。
今までの残虐な行為は私に見せびらかすだけで楽しんでいる様子は無かった。
……。
なるほど、そうか…。
「人の一生分の情報など、神の持つ情報に比べれば、本一冊の一文字にも満たない程度のものだ。そして、神たる私はより高度な知性と感情を自動人形に組み込むことが出来るのだ。故に…」
「だから、どうした？アーテ、確かに貴様の言うとおり、私が嫌うことをしているようだが、本当に嫌われたいのなら、そこまで事細かく説明する必要は無いのではないか？」
確かアーテは私と情事をしたときに言ってた。
『お願い…今の私を忘れないで…。私は貴方に嫌われる事をしてしまうから…』
私の言葉にアーテの顔から笑みが消えていく。
「本当に嫌われたいのなら、この偽りの世界を本物の世界だと嘘をつけばいい。そして、貴様に操られている哀れな人形を本当の人間だと告げればいい。そうすれば、私はお前を嫌っていたのかもしれないな…」
「黙れ…」

アーテの表情が憤怒に染まっていく。

『貴方に嫌われる前の私をどうか覚えておいて欲しいの…』

「だが、例え嫌うことになっても私はお前の全てを覚えておくつもりだ。お前と出会ったあの日から今の瞬間の全てをな…。どうだ、安心したか？」

「黙れぇえええええええっ！」

アーテの怒りと共に大地が震えてくる。

嵐が吹き荒び、激しい雨が降り注いでくる。

「図星だったようだな！ならば、私も安心したぞ！今も昔もお前は私の酒池肉林の第一構成員だ！アーテ！」

私は精一杯啖呵を切ってみせる。

少しでも気を抜けば、心が砕けそうなほどの威圧感。

これが悠久の時を生きる神の力の片鱗だというのか…。

本来ならば、震えて逃げ出してしまうだろう。

だが、相手は酒池肉林の第一構成員。

さらに言えば、私に夢を叶える力を与えてくれた恩人、いや恩神か。

故に逃げ出すわけにはいかない。

それに絶対に生き延びてやる。

「神である私に揺さぶりを掛けてくるとは許し難いわ！ロスト！」

アーテの口調が変わらない。

「ついに本性を剥き出したか…。そうだ、それでいい！殴り合いは本音をぶつけ合うものだ！」

私の中でかつての喧嘩番長の血が騒ぎ出してくる。

「今から私は偽りの世界を破滅させる。正確には世界に存在する全生物、私が創造した人形を破壊し尽くすわ。そして、人形が全部破壊されたらモーモスは死ぬ。どう？面白い遊戯でしょう」

アーテの頭上に球体に閉じこめられてたモーモスの姿が出現する。

全人形が破壊されてしまえば、モーモスが死ぬだと…。

『ロスト！私のことは構うな！お前はその女を倒すことだけを考えろ！』

「モーモス！」

くっ、全然面白くない遊戯を提供してくれたものだな！

アーテ！

「あははははっ！この世界の人形全てはモーモスの生命力を基にして作り出した物よ！私は全力で破壊し尽くす！それこそ世界を破滅させる邪神の如くにな！ははははははははっ！」

アーテは狂ったように笑い出し、荘厳な舞台を演じる役者のように両腕を広げてくる。

「神の血肉を受け継ぎし運命の反逆者ロストよ！破壊神アーテーたる我と共に終末遊戯を存分に楽しもうではないか！」

稲妻が降り注ぐ中、私は六角棒を構える。

「モーモス、私のために歌を歌ってくれ！必ず一緒に生きて帰れることを祈ってくれ！」

私は上空にいるモーモスに必死に呼びかけていく。

『ロスト…私の拙い歌で良ければいくらでも歌ってやる！だから、絶対に死ぬな！死んだら地獄の果てまで追い詰めて搾り尽くしてやるからな！』

死ぬほど有り難い激励に感謝するぞ、モーモス！

嵐が吹き荒れる世界で一条の光を思わせる素朴で暖かい歌声が何処まで響き渡っていく。

「世界の終末を唄う鎮魂曲のつもりでしょうか？あるいは絶望を嘆く哀歌と言った所でしょうか、あははははっ！」

「違うな、これは私を絶対の勝利を約束した女神の歌だ。これでも

う私は貴様に決して負けることはないぞ！」

アーテは嘲笑を止めて、忌々しげに私を睨み付けてくる。

「何処までも私を苛立たせるのが得意のようですね！良いでしょう！神の力を死と絶望の果てまで目に焼き付けさせてあげるわ！」

「そちらこそ刮目せよ！例え、神が世界を破滅に導こうとも、全人類を滅ぼそうとも私は生き延びてみせよう！私の生命力は神の力をも越えることを思い知らせてやるぞ！」

偽りの世界とモーモスの存亡を賭けた生き残り合戦の開幕だ。

「我が名はロスト！馬鹿で臆病で最強の力を持ってしまった元平民その他！だが、それは仮初めの姿！その実体は泣く子も黙る酒池肉林の世界を目指す男の中の男、喧嘩番長である！」

そして、これは絶対に負けられない喧嘩だ。

……。

『アーテというのか。ならば、アーテよ。貴様は我が栄えある酒池肉林の第一構成員にしてやるぞ！光栄に思うがいい！ははははははっ！』

あの日、初めて出会った絶世の美女。

『はぁ…貴様…私に何をしたのだ？腰が抜けて動けないぞ…』

『接吻しただけさ。好きな者同志が唇を重ね合わせる行為。愛情表

現と言ったところかな？』

私を喧嘩以外で腰を抜かせた初めての女性。

『ありがとう…子供の頃の貴方と出会ってから…私の心はもう既に…貴方のものだった…』

私も同じだった。

多分、その時から私はお前に心が奪われていたのだと思う…。

『愛してるぜ。貴様は俺を愛していないのか？』

『分からない。だが、嬉しいと思う…』

いや、分からないことはなかった。

本当は既に愛していた。

出会った瞬間から恋に落ちていたのだ。

アーテ。

お前は私の初恋の相手だ。

古来より初恋は実らないと言われている。

だが、私は悲恋に終わらせるつもりは微塵も無い。

故に絶対に負けるわけにはいかないのだ。

例え、お前が破壊神であろうともな。

……。

「破壊神だか何だか知らんが、貴様は私の酒池肉林の栄えある第一構成員であることには変わりはない！故にアーテ！喧嘩番長たる私が貴様を骨の髄まで修正してやるぞ！覚悟しろ！」

臆病な心を勇気に変えろ。

馬鹿な頭は根性で補え。

最強の力で神の力を凌ぐのだ。

アーテ。

最後の決着を付けさせてもらうぞ。

第６２話：ＤＩＥ　ＨＡＲＤ

いよいよアーテとの最終決戦だ。

空気全体、いや、世界全体がアーテの放つ威圧感に震えているような感覚がしてくる。

この圧倒的な威圧感だけでもアーテが生粋の神だと伺わせるには充分すぎるほどものだった。

「では、最終戦争を始めようか」

空気が急激に熱くなってくる。

アーテは上空へと浮遊し、周囲に次々と漆黒の炎球が出現してくる。

私は今、目の前に起きている光景に呆然としていた。

巨城一つを軽く呑み込む程の質量の漆黒の太陽、すなわちカタストロフ・サンが上空を埋め尽くす程に無数に出現していたのだ。

「貴様のその表情、実にそそるものがあるな。ケールが使っていた技は私の技のほんの一部分を借用されていたに過ぎん。これこそが真なるカタストロフ・サンだ」

私は既に防御結界を展開していた。

空間に歪みが生じるほどに無数の太陽は超高熱を発していた。

周囲の建物は溶解し、人々は自然発火して火炙りの刑に処された罪人が如くの悲鳴を木霊させていた。

「熱いいいいいいっ」

「みじゅをぐれぇえええええっ！」

思わず吐き気がしてきた。

まさか生きながらも焦熱地獄をこの目で見ることになるとは…。

それよりもこのままではこの辺一帯の人々が皆殺しにされてしまう。

一刻も早くアーテを倒さねば！

私は浮遊しているアーテの元へと駈け上っていく。

「お前は俺に指一本触れることは叶わぬよ。カタストロフ・サン」

無数に浮遊している漆黒の太陽の一つが私の行く手を遮るかのように放たれていく。

「防御結界！ぐぅぅ！」

防御結界で防ぎつつも押し上げようと私は必死に力を入れていく。

だが、私の奮起をあざ笑うかのように漆黒の太陽は私を圧殺せんと潰しにかかってくる。

ケールの太陽とは比較にならないほどの力だ！

「あはははははっ！どうした？たかだか一個の球に手こずっているようでは到底防ぎ切れぬぞ！そら、さらにくれてやるぞ！」

アーテは嘲笑しながらも一つ、二つの太陽を追加して放ってくる。

「ぬぐおおおっ！」

追加された二つの太陽が私を攻めた立てている太陽と融合し、国の領土全てを覆うほどの巨大な太陽に変形していく。

くっ、私の防御結界が割れかかっている！

「止めの駄目押しだ！神なる業火に燃え尽きよ！ロスト！」

アーテはさらに太陽を放ち、私を攻めている太陽がさらに巨大化していく。

もはや、月に匹敵するほどの体積かもしれない。

防御結界はあえなく破られ、私は漆黒の太陽に包まれていく。

「ぐあああああああああああああっ！」

ケールに丸焼きにされた思い出が蘇っていく。

全身の細胞が残らず焼き尽くされる感覚だ！

「燃えろ！燃えろ！燃えろ！燃えろぉおおおおおっ！ははははははははっ！」

アーテは狂喜乱舞とも言わんばかりに笑っている。

これが破壊神アーテーの力なのか…。

桁が余りにも違いすぎる。

……。

意識が朦朧としていく中、モーモスの歌声だけが鮮明に聞こえてくる。

このような地獄の光景が展開されているのに関わらず途切れることなく歌声がただ響いている。

モーモスも圧倒的な神の力に恐怖を覚えているはずだ。

だが、それでも耐え忍んで歌い続けている。

やはり、モーモスの想いの力は凄まじいものだ。

意識が暗闇の底に落ちようとする中で歌声が私に光を指し示してくれる。

私はその光に縋るようにして意識を繋ぎ止め、焼かれている身体に治癒魔法を掛け続けていく。

初っぱなから伸されてたまるか！

喧嘩はまだ始まったばかりなのだ！

「ぐおおおおおおおおおっ！」

獣の咆吼を上げ、魔力を放出して漆黒の太陽を吹き飛ばしていく。

「ほう、さすがは喧嘩番長と言ったところかな？」

アーテは焼け焦げている私の姿を見て嘲笑を浮かべてくる。

笑いたければ、笑うがいい！

私の取り柄は気合いと根性だ！

力や技、戦略、戦術なぞ知ったことでは無い！

最後の瞬間まで折れない強固なる意志こそが喧嘩番長伝説たる百戦百勝を支えてきたのだ！

「貴方の不屈の魂は認めます。ですが、神の力の前では児戯に等しいものです。世界の終末というものを教えて差し上げましょう！」

アーテが両手を掲げた瞬間に大気が震えてくる。

「スルト」

無数の漆黒の太陽が隕石の集中豪雨の如く乱雑に降り注いでくる。

「うおおおおおおおっ！」

私は火事場の馬鹿力を発揮して幾度も迫ってくる漆黒の太陽を弾き

ながらもアーテの元へと向かっていく。

もう既にこの辺一帯の人々は全て死に絶えている。

この超殲滅魔法が何度も使われてしまえば、この偽りの世界の全人類を皆殺しにされてしまうのも時間の問題だ。

そうなればモーモスが死んでしまう。

モーモスは私を信じて絶えず歌い続けている。

だから、私は負けるわけにはいかないのだ！

爆音と熱気に晒される嵐の中で私はアーテの元へと駆けつけていく。

アーテは顔全体を血で濡らし、愉悦の笑みを浮かべている。

「アーテェエエエエエエッ！」

私の黄金の拳が唸る！

必殺の拳をアーテの溝に目掛けて食らわせようとする。

「オーディン」

アーテの前に白銀に輝く魔法陣が出現し、私の黄金の拳を防ごうとしてくる。

防御結界なのか？

ならば、防御結界ごと打ち砕いてやるわ！

私は白銀の魔法陣に黄金の拳をぶつけた。

「ははっ！黄金の拳は我には届かぬわ！」

アーテの嘲笑と共に私の全身に凄まじい激痛が襲いかかってきた。

まるで全身が殴られたかのような痛みだ！

殴られただと？

「オーディンは絶対防御結界である共に防御した攻撃を行使者に倍返しする攻撃魔法だ。自らの拳の味はどうかね？」

アーテの言葉に応える余裕が無かった。

全身の骨が砕けてしまっている。

どうやら全身にオーディンの倍返しで黄金の拳が何十発も撃ち込まれてしまったわけなのか…。

モーモスの歌声はまだ聞こえている。

「まだ…負けるわけに…は…いかないのだぁあああっ！」

私は根性を振り絞って再び黄金の拳を繰り出す。

だが、黄金の拳はアーテのオーディンに空しく防がれ、全身に激痛が襲ってくる。

「ぐあああああっ！」

「無駄よ。オーディンには死角は無い。所詮、神に敵うはずがないのよ…」

アーテは何処か諦めたかのような声で告げていた。

「貴方はそのまま業火の海に溺れているといいわ。私が全てを破壊し尽くすその時までね…」

「待て…アー…テ…」

立ち去っていく瞬間に見えてアーテの表情は何処か悲しげだった。

私は背を向けて虚空へ飛んでいくアーテに手を伸ばしながら業火の海へと落ちていった。

……。

……。

……。

…。

身体は再び焼かれていく。

もう何度火炙りの刑にされたのだろうか。

私は異端者では無いのだがな…。

いや、私は異端者なのかもしれない…。

アーテという破壊神を愛してしまったのだからな…。

私は痛いのが、死ぬほど嫌いだったはずだ。

だが、今は死ぬほどの痛みを与えられている。

私は知ったのだ。

自分が痛い思いをするよりももっと痛いものがあることを…。

去っていくアーテの顔は泣いていたように見えた。

『貴様は私の記念すべき構成員第一号だ。辛いことがあるのならば、私に相談するがいい。アーテを泣かせる奴がいるのであれば、私のこの黄金の拳で粉砕してやるぞ』

いや、私がアーテを泣かせてしまったのだ。

私が弱いばかりにアーテを苦しめて泣かせてしまって…。

何が喧嘩番長だ…。

好きな女を泣かせてしまって、何も出来ずにやられてしまって…。

この地獄の業火は情けない私を断罪しているのだ。

ならば、喜んでこの苦痛を受けよう。

喜んで、か…。

随分と私は変わってしまったのものだ。

だが、そんな自分を嫌いではないと思ってしまう。

我ながら難儀なことだ。

……。

さてと、己を省みるのはここまでだ。

そろそろ焼かれるのも飽きてきた。

いや、焼かれるのが慣れてきたと言うべきか。

我ながら規格外な身体を持ってしまったものだ。

さすがはアーテがくれた最強の力だと感謝すべきだな。

待っているがいい、アーテ。

私は今から不死鳥となってやる。

何度やられようとも不屈の精神で蘇る永久不滅の不死鳥にな！

全身から魔力を放出し、私は火の海から飛び立っていく。

……。

偽りの世界は今や燃えさかっている。

まさに世界の終末とも言うべき壮絶な光景だ。

奴は終末遊戯とやらの勝者になるため、自分の造った人間もどきを虐殺しているはず…。

アーテが人形を虐殺している光景を思い出す。

人間の感情を精巧に再現させた人間に近い人形。

あれらは人間ではない。

助ける相手を間違えるな。

助けるのは私に力を与え続けてくれている歌姫モーモスだ。

そして、破壊神を演じている大根役者のアーテだ。

私の中にある神の血肉がアーテの居場所を教えてくれている。

早くこの狂った舞台から大根役者を降板させてやらねばな…。

……。

……。

…。

「ぎゃあああああっ！」

「世界の終わりだ…」

「天罰じゃ！これは愚かなる人間に下された天罰なじゃあああああああっ！」

広場でアーテが白銀の刃を煌めかせて人形を切り刻んでいる。

「夜叉狩り！」

レテシアの技を借用し、無数の真空破をアーテに向かって繰り出していく。

「第二幕の始まりだということか！ロストよ！」

アーテは手を掲げた瞬間、周囲に逃げ回っていた人形が一斉に引き寄せらていく。

「ぎゃあああああっ！」

「腕がぁ！腕がああああっ！」

「痛いよぉ！おかああさんっ！」

よりにもよって人形達を盾にして技を防ぐとは…。

「ははははは！礼を言うぞ！殺す手間が省けたからな！」

アーテはさらに手を下ろし、死体になった人形達を私に向かって投げつけてくる。

血と肉片が視界を遮ってくる。

何て最悪な目眩ましなのだ！

血で目が霞む中で白銀の煌めきが目に留まる。

反射的に六角棒を構えると甲高い金属音と衝撃が身体に響いてくる。

「ぐっ！」

「よくぞ受け止めたな。ほら！終末遊戯はまだ始まったばかりだぞ！楽しめ！」

アーテは血飛沫を撒き散らしながら白銀の剣を振るっていく。

繰り出す斬撃は美しさとおぞましさが合わさった凄惨なる死神の剣舞。

斬撃の威力に相まって、気を強く持たねば、瞬く間に死の恐怖に囚われそうなほどに恐ろしい。

喧嘩は恐怖に呑み込まれた負けだ！

はったりでも虚勢でもいい！

がむしゃらに突っ込むのだ、ロストよ！

私は六角棒を片手で持って、構える。

貴様が死神の剣舞を繰り出すのならば、こちらは喧嘩番長必殺の喧嘩乱舞で応戦してやるぞ！

「うおおおおおおおっ！」

六角棒を片手で振り回し、拳や蹴り、頭突き等とあらゆる角度から打撃を繰り出す。

「ぐっ！貴様！ぐあっ！」

次第にアーテの手数が少なくなり、私の打撃が次々と当たっていく。

どうやら殴り合いでは私の方が分があるようだな。

「喧嘩番長を舐めるな！」

「おのれっ！オーディン！」

白銀の障壁が出現し、喧嘩乱舞が受け止められていく。

「ぐっ…またそれか…」

身体中に私が繰り出して打撃の数十倍の衝撃が襲ってくる。

アーテは私が怯んだ隙に距離を取っていく。

「喧嘩番長を舐めるな、か…。ならば、喧嘩番長の根性とやらを見せてもらうではないか！」

空間が歪み、上空を覆い尽くす程の魔法陣が出現してくる。

「ヘル」

魔法陣から人が次々と出現する。

「薬をくれぇえええええっ！」

「うへへっ、あら、いい男ね。新鮮な肉ね」

「後、一人殺せば、あの方に愛してもらえる！」

そんな馬鹿な…。

お前達は確か死んだはず…。

「そうだ、貴様が閉ざされた世界で皆殺しにした哀れなる狂戦士共だ。それに死者だけではない…」

「デッド…ムーン…」

三日月型の魔力の凝縮体！

この技はケールのもの！

飛来してくる三日月を六角棒で弾いた瞬間に視界が巨大な鉤爪に埋め尽くされていた。

「グガアアアアアアアッ！」

馬鹿な、ケールだと！

迫ってくる鉤爪を受けきれず、私はあえなく弾き飛ばされていく。

「あはははははっ！狂戦士だった頃のケールだ。懐かしいだろう？」

アーテの狂笑と共に地獄から蘇った狂戦士等は一斉に魔法を放ってくる。

魔法攻撃の嵐が私を呑み込まんと吹き荒れていく。

「喧嘩番長よ！貴様の果てしなき闘争とやらを私に見せてくれ！」

冷静になれ、ロスト！

これらは全て人形だ！

まやかしだ！

迫り来る魔法攻撃を必死にいなしながら体勢を立て直し、アーテの元へと駆け上がろうとする。

「そう、人形だ。だが、人形といえど戦闘力は本物と何ら変わることは無い。いいや、死の恐怖が無くなっている所が変わっているのかな？」

「ひゃはははあああああああああっ！」

「きぃえええええええええええっ！」

「うりゃあああ…ぎゃあああああっ！」

何て奴らだ…。

魔法の嵐の中を死ぬことも厭わずに突っ込んで私の所へと特攻しているぞ…。

魔法攻撃で視界が狭まっている私は特攻してくる狂戦士に体当たりを成す術も無く食らってしまう。

「ぐはっ！は、離せ！」

「一緒に死にましょう、坊や！」

体当たりしてきた狂戦士は私を羽交い締めにしてくる。

そして、目の前には羽交い締めにしている狂戦士ごと私を両断しようと別の狂戦士が剣を振りかぶってきていた。

「死ねぇあああっ！」

私は羽交い締めをしている狂戦士だけが両断されるように身体をずらした。

「ぐぎゃあああああああああっ！」

両断され、肉片となった狂戦士を振り払い、防御結界を展開して、魔法攻撃を弾いていく。

魔法攻撃だけではない。

手や足が千切れても止まることなく突貫してくる狂戦士共を弾きながらもアーテの元へと駈け上っていく。

この凄惨すぎる饗宴を終わらせるためには早く主催者を倒さねば！

後一歩でアーテに届く所でケールもどきが立ちふさがってきた。

「グオオオオオオオオオオオッ！」

「我の元に近づくことあたわず…」

ケールもどきが巨大鉤爪を振り下ろし、再び私は弾き飛ばされてしまう。

弾き飛ばされていく私に狂戦士達が群がっていく。

「いひひひひっ！獲物だ！獲物だ！獲物だぁあああああっ！」

「新鮮な肉の躍り食いだ！祝いだ！血酒を飲ませろぉおおっ！」

狂戦士が次々と私の身体に齧り付いてきた。

「ぎゃあああああっ！」

余りの激痛で意識が飛びそうになってくる。

ケールの優しい甘噛みとは全然違う。

肉食動物による獲物を補食するための噛みつきだ。

肉が食いちぎられ、血が啜られていく。

このままでは本当に食べられてしまう…。

「グフフッ…ロスト…貪ラセテ…」

いつの間にか目の前に兜を脱ぎ捨てたケールもどきがいた。

緑色の唇を湿らせて甘い吐息を掛けてくるケールもどき。

その淫靡な表情に身体中が激痛に苛まれているにも関わらず不覚にも男の証が元気になりかけていく。

だが、所詮は人形だ。

私には既に本物が妻になっているのだ！

「断る！」

「ジャア、無理矢理ニモ食ラワセテモラウヨ！ガゥン！」

「ぐぎゃあああああああああっ！」

ケールもどきは首筋に噛みついて、おびただしい血が吹き出てくる。

不味い！

頸動脈が噛みちぎられてしまったら終わりだ！

「無様だね…」

「ぐあぁっ…アー…テ…」

アーテは侮蔑の笑みを浮かべながら白銀の剣を天に向けてかざしていく。

「一思いに私の手で終わらせてあげるわ…」

かざした白銀の剣は天をも突き抜けるほどに超巨大化していく。

「さようなら、ロスト…」

アーテは無慈悲に超巨大化した白銀の剣を狂戦士の食事にされている私に振り下ろしていく。

「ヴィーザル」

私に食らいついていたケールもどきを初めとする狂戦士は粉々に吹き飛び、私の全身からも血が噴き出していく。

「ごほぉ…ああっ…」

痛みを通り越して熱い感覚しか感じてこない。

アーテは今度こそ始末したと思ったのか、飛び去っていく。

……。

油断したな、アーテ…。

私は意識を刈り取らない限り、何度でも復活する。

我が生存能力は神の領域すらも収まらないものなのだ。

ついでに足枷になった人形共もまとめて破壊してくれたものだし、むしろ感謝したいぐらいだ。

モーモスの歌声はまだ聞こえる。

人形はまだ全滅していない。

今度こそが反撃の時だ。

もはやアーテの力は見切った。

次こそが最終幕だ、アーテ！

超回復で傷を癒してアーテの元へと再び飛び立っていく。

……。

……。

…。

アーテの反応がしてくる上空では無数の漆黒の太陽が浮遊していた。

また、スルトを使って皆殺しにするつもりなのか！

そうはさせんぞ！

既にその殲滅魔法の対策はケールの技を借用することで解決できるわ！

「ブラッドスター！」

上空に煌めく無数の星々の如く光球が生み出され、猛吹雪の如く放たれていく。

光球に大量に貫かれた漆黒の太陽は爆発していき、周囲にあった太陽も次々に誘爆していく。

自分が生み出した太陽が破壊されていく異常事態にアーテは周囲を見渡し、私の存在に気づいてくる。

「ぐっ！ロスト！まだ生きていたというのか！」

「何度も言わせるな！私の生命力は神の力をも凌ぐのだ！」

アーテは憤怒の形相で腕を掲げ、無数の魔法陣を生み出していく。

「ヘル」

魔法陣に現れたのはタナトス、モーモス、ロン、レテシア、クロエだった。

「ははははっ！貴様の愛する女共と共食いをするがいい！」

タナトスもどき達が私に群がってくる。

「バニッシュメントストライク！」

「迅雷龍牙鞭！」

「秘技！修羅雪！」

「昇竜炎舞！」

洒落臭いわ！

それらの技はもう見切っているぞ！

黄金の拳よ、唸れ！

「人形遊びは終いだ！」

拳を連打して、必殺技を跳ね返していく。

偽物共は跳ね返された必殺技で消滅していった。

「馬鹿な！人形共の力は本物と同等のはずだ！それが何故だ！」

アーテは驚愕していた。

確かにこの人形共は本物と同等の力を持っていたのだろう。

だが、それだけだ。

タナトスもどきが接近して拳を振り上げてくる。

「所詮は人形だ。感情や思考は似せても魂は模倣出来ないだろう。そんな抜け殻にやられる喧嘩番長ではないわ！」

同等と言っても魂無き者など恐れるに足らん！

ただの私の拳の的だ！

タナトスもどきの拳を交わし、黄金の拳で胴体を突き破っていく。

「年貢の収め時だ！アーテ！」

拳を振り上げてアーテに向かって突貫していく。

「馬鹿め！貴様の拳は私には届かぬと言ったはずだ！オーディン！」

アーテの前に白銀の魔法陣が展開されていく。

それでも私は構わず黄金の拳を繰り出していく。

「形あるもの全てが壊れるのが定めだ！それを思い知らせてやるぞ！」

黄金の拳が魔法陣に激突し、全身に激痛が走っていく。

もはや、この痛みにも慣れたわ！

「うおおおおおおおおおっ！」

再度拳を黄金の拳を魔法陣に打ち付けていく。

魔法陣に亀裂が走っていく。

「そんな！私の完全なる盾、オーディンに亀裂だと！」

「我が黄金の拳に砕けぬものは無いのだぁあああっ！」

黄金の拳は白銀の盾を砕き、アーテの胸にめり込んでいく。

「ぐはぁ！」

アーテは弾き飛ばされ、地上へと叩きつけられていく。

私はアーテを追って地上へと降り立つ。

「きゃあああっ！何が起こっているの？」

「悪魔がやってきた！逃げろぉおおっ！」

降り立った私とアーテを見て、民衆は散り散りになっていた。

「ぐほっ…がはぁ…なぜだ…なぜ、オーディンが破られた…たかが、私の血肉を受けて強くなっただけの輩に…何故だ！」

アーテは未だに立ち上がれずに血を吐いていた。

「今までお前に立ち向かった相手は玉砕精神が足らなかった連中ばかりだったのだろう。私はただ痛みを我慢して砕けるまで殴っただ

けだ」

「答えにはなっていないぞ！お前は私の力の一部分を受け継いだだけに過ぎない！それが何故、本体である私を圧倒できるのだ？」

私は別にアーテを圧倒できたとは微塵も思っていないのだが…。

相手がお前でなかったら圧倒できなかったかもしれない。

モーモスの勝利の歌が無ければ負けていたのかもしれない。

だが、それだけではない。

「強いて言えば、成長したからだろうな…」

「成長だと？」

そうだ。

私はここに至るまでに随分と変わってきたかもしれないと思っている。

昔の私だったらアーテの苦悩なぞお構いなしに逃げ出していただろう。

当時の私は自分の命が最優先で例え、絶世の美女の願いでも自分に危険があれば迷わず逃げていた。

それが今はどうだ？

破壊神と名乗る禄でもない女にこうして喧嘩を吹っかけている。

火炙りの刑にされたり、凶暴な女共に補食されたり、八つ裂きにされても果敢に挑んでいるのだ。

昔の私では考えられない出来事だ。

そして、今は破壊神を跪かせ、私は悠然と立っている。

ここまで到達できたのは良い出会いに恵まれたからだろう。

エリー、アイリ、タナトス、エル、アビス、ケール、エクリア、オイジュス、モーモス、ロン、レテシア、クロエ、そして…。

「最強の力を手に入れたお陰で私は良い女達に巡り会えた。そして、彼女達が私の成長を促してくれた。彼女達のお陰で私は成長できたのだ」

彼女達が自分の命よりも大切だと思えたことで変わることが出来た。

「だから、私を圧倒できたとでも言うのか…」

「いいや、それだけではない…」

蹲っているアーテに私は近づいていく。

「その全ての切っ掛けをくれたのはお前だ、アーテ。お前と出会えたからこそ私は成長できたのだ」

アーテともし出会わなければ、平凡な人生を送れていたかもしれな

い。

だが、それ以上のものを得ることは出来なかっただろう。

最強の力を手に入れて何度も死ぬ思いをしたし、後悔もしたことがあった。

それでも絶世の美女と多く出会い、掛け替えのない家族を得ることが出来たのだ。

その全ての切っ掛けを与えてくれたのはアーテだ。

「ふふっ…ふふふっ…ははははははっ…あはははははははっ！」

アーテは咳を切ったかのように突然笑い出す。

「成長しただと？その台詞はこの終末遊戯に勝ってから言うのだな。まだ私は負けてはいない！ヴィーザル！」

アーテは白銀の超巨大剣を生み出し、無造作に横薙ぎをしてくる。

私は海老ぞりになって、斬撃を交わす。

「ぎゃあああああっ！」

「あぎゃあああああっ！」

周囲から悲鳴が響いてくる。

まさか！

「人形共を皆殺しにすれば、モーモスは死ぬ。そうなれば、私の勝ちだ！ロスト！あはははははっ！」

「どうやら修正はまだ足りないようだな！アーテ！」

アーテは飛び立って、大量の魔法陣を出現させてくる。

私もまたアーテを追うために再び上空へと飛んでいく。

「フレイア」

無数の魔法陣から極大の閃光が嵐のように放出されていく。

地上は爆音と悲鳴の合唱が痛いほどに聞こえてくる。

「我は破壊神アーテー！破壊することこそが我が喜び！破滅させることこそが我が使命なり！」

「違う！貴様は私の酒池肉林の第一構成員であり、初恋の女性でもあるアーテだ！」

六角棒と拳で閃光は弾きながらもアーテに接近していく。

「うるさい！黙れ！何処まで私を苛立たせれば気が済むのよ！さあ、モーモスを救いたければ、私を殺せ！そうすればお前は私から全ての力を受け継ぐことが出来る！言葉通り最強になれるのよ！」

「その最強の力を手に入れて、親友である彼女とやらを倒させるのが貴様の魂胆なのだろうが！そんなやり方を私が受け入れるとでも

思っているのか！」

アーテは接近してくる私にヴィーザルを振り下ろそうとしてくる。

一度は私を八つ裂きにした技か…。

ならば、こちらは久しぶりに東洋の神秘を見せてやろうぞ！

迫り来る超巨大な白銀の刃を私は両手を合わせて受け止める。

秘技真剣白刃取りだ！

「そうよ！それが私の望み！私ではもう彼女を止められないの！貴方に託すしかもう方法が無いのよ！だから、私は貴方にさらなる力を与えたいの！全力で私を戦うことが出来るほどの力を出るように試練を与えて、成長を促して…」

ヴィーザルを手放して、アーテは距離を取ってくる。

手放されたヴィーザルは虚空へと消えていく。

「ロキ」

アーテの全身が銀色の光に包まれていく。

いったい今度は何をするつもりだ？

「ごはぁ！」

いきなり腹に拳が撃ち込まれたかのような衝撃が来たぞ！

私は飛ぶ意識を繋ぎ止めて目を見開く。

いつの間にか白銀に輝いているアーテが私の腹に拳を叩き込んでいたのだ。

なるほど…。

ロキとは限界までに身体能力を上げる補助魔法だというわけか！

アーテは超高速で動いて、あらゆる角度から打撃を加えてくる。

「貴方は私が成長を促して私が全力で戦えるように強くなるどころか、私をも越えようとしている。何故、こうも貴方は私の思い通りにならないのよ！」

「ぐっ！アーテ、それが貴様の本気だというのか…」

身体の至る所の骨が砕かれていく。

だが、生憎全身粉砕骨折も慣れているのだ！

なにしろ私は日常的にタナトスの愛情が籠もった抱擁で言葉通り骨抜きにされているのだからな！

僅かな空間の揺らぎで私はアーテの白銀の拳を受け止めていく。

「なっ！」

動きを止められたアーテは唖然とした表情で私の顔を見る。

「喧嘩番長である私に殴り合いで挑んでくるとは笑止千万、飛んで火にいる夏の虫だ！アーテ！」

私はアーテの頭に思い切り頭突きをかましてやる！

「きゃあああっ！」

まだまだだ！

のけぞっているアーテの軍服の襟を掴んで背負い投げの要領で地上に向けて叩きつけていく。

「あぐぅあああっ！」

地上に叩き付けれたアーテは地面にめり込んでいた。

「これが…喧嘩番長の力だ。思い知ったか…」

「まだ…まだよ！まだ終わらない！」

ふらつきながらもアーテは立ち上がり、またしても上空へと飛んでいく。

私は彼女を追わなかった。

おそらく最後の力を振り絞っての攻撃を放ってくるだろう。

人形共だけでなく、この地上諸共消滅させるほどの最強の一撃を…。

「貴方は私を殺して…力を手に入れ…彼女を討ち滅ぼす！それが…貴方の…宿命なのよ！」

アーテは両手を掲げ、白銀の光球を出現させていく。

光球は大きく膨れあがり、日の光を遮るほどに巨大になり、やがて空は白銀で覆い尽くされていく。

これは地上どころではないぞ！

世界全てが灰燼と化してしまうほどの威力がありそうだ！

さらに言えばアーテも巻き添えになって死んでしまうことになる！

「その技を放てば、貴様も巻き添えを食らうのだぞ！」

「さあ、私の最強の技を見事受け止めてみなさい！喧嘩番長ロスト！」

アーテは聞く耳を持っていない。

いや、アーテは勝敗に関係無く自らの命を絶つつもりでいるのだ。

技を放つことで自らの死と引き替えに生き残るであろう私に力を受け継がせる魂胆に違いない。

だが、さすがの私もあれを食らえば、細胞一つ残さず消滅して終わってしまうだろう。

いや、例え生き延びたとしても人形共は死滅し、モーモスは確実に

死んでしまう。

それではこの終末遊戯は私の負けとなってしまう。

だから、まともに受け止めては駄目だ。

ここが最後の踏ん張り所だ！

一か八かあの技を見様見真似をしてみるのだ！

アーテは腕を振り下ろしていく。

「フレイ」

銀色の光が世界を押し潰さんと迫ってくる。

「これで私は永遠に貴方の者となるわ…」

アーテは解放されたかのような恍惚とした笑みを浮かべ、自分を呑み込もうとしている白銀の光を見つめていく。

「貴様の思い通りにはさせないぞ！アーテ！」

私は全速力でアーテの元に駆けつけ、抱きかかえていく。

「何のつもりなのかしら？早く自身を守るための結界を展開したらどうなの？そうすれば貴方だけは生き残れるわよ…」

「黙れ！私は生き残る！だが、それはアーテ！貴様とモーモスと一緒にでだ！」

全てに滅びをもたらす白銀の光。

だが、全てが滅ぼうとも私と私の大切な者だけは必ず生き延びさせるぞ！

「オーディン！」

アーテの絶対防御魔法を借用したが、それだけではない。

白銀の障壁を大陸丸ごとを覆わせる程に展開させていく。

これほどまでに魔力を放出させたのは初めてだ。

「まさか、この大陸ごと守ろうとするつもりなの！出来るはずがない！破壊神である私が全身全霊を込めた…」

「黙れと言っている！それに貴様は破壊神ではない。私の記念すべき酒池肉林の第一構成員のアーテだ。何度も言わせるな…」

銀色の障壁に滅びの光が激突していく。

その反動の影響か、身体から血が吹き出ていく。

くっ、何たる圧力だ！

それでも耐えてみせるぞ！

「何故、そこまでして…貴方は…欲しくないの！真なる最強の力を！そうすれば世界は思うがままなのよ！貴方が目指す酒池肉林だっ

て何もかも！それなのに…」

「確かに思うがままに…なるだろう。酒池肉林も…実現する。だが、完成されることはない。なぜならば、その世界にお前がいないからだ！アーテ！」

アーテだけではない！

終末が近づきつつもあるにも関わらず信じて歌い続けているモーモスもだ！

アーテやモーモスがいない酒池肉林に何の意味も無い！

何の意味も無いのだ！

必ず誰一人欠くことも無く生き延びて、酒池肉林を実現させていく！

それが私の最優先事項だ！

「馬鹿よ…貴方は本当に馬鹿よ…こんなにもぼろぼろになってまで…私の命を救おうとして…真なる最強の力を手に入れる機会を…不意にしようとするなんて…」

「ふん、私が馬鹿なのは…今に始まったことではない。お前と出会ったあの日から今に至るまで変わらず…馬鹿で臆病な平民その他だ…」

私は涙を流しているアーテに安心させるように笑みを向ける。

かなり引きつった笑みになっていることだろう。

「ロスト…」

アーテは血まみれになっている私の身体を支えるように抱きついてくる。

「私と…一緒に…生き延びて…」

……。

女神からの願いを私は受け入れた。

これでもう何の憂いも無い！

モーモスの歌も最終楽章へと入った！

終末遊戯を今度こそ終わりにしてやるぞ！

これで最後だ！

全精力を振り絞れ！

生命を燃やせ！

私の全身全霊全存在を掛けた正真正銘で全力全開の最大最強最後にして絶対無敵なる究極の力よ！

今ここに示すのだ！

「うおおおおおおおおおおおおおおおおっ！」

白銀の障壁は黄金の障壁へと変わり、滅びの光を世界から締め出すが如くに何処までも広がっていく。

世界は黄金の光に包まれていった。

……。

……。

……。

……。

……。

……。

……。

……。

私は今、アーテとモーモスの下敷きになっている。

球体から解放されたモーモスが地上へと落下してきたので、下敷きになって受け止めたのだ。

お姫様抱っこして受け止める力も残っていなかったのだ。

モーモスは歌い疲れたのか、眠りについていた。

アーテも全ての力を使い果たしたため、眠ってしまったようだ。

モーモスは私の胸の上、アーテは私の膝の上で寝ている。

二人とも安心しきったかのような寝顔だ。

アーテのいう私の宿命とやらについては気になるが今聞くのは野暮というものだろう。

それに私も疲れたから早く寝たい。

幸いにもアーテとモーモスという極上の布団が掛かっている。

敷き布団が地面なのは不満だが、この際我慢しよう。

とりあえずはアーテの最後の試練は乗り越えた。

今はこれで満足して存分に眠ろう。

……。

さてと…。

今回は本当の意味で…。

燃え尽きたな…。

第６３話：因縁の彼女

「おい、起きろ、ロスト」

誰かが私の頬をぺちぺちと叩いてきている。

「ああ…」

頬を叩いてきたのはモーモスだった。

私は目を覚まして、周囲を見渡す。

確かモーモスを連れ回して迷い込んだ森だ。

おかしい。

確か地盤ごと森が浮上して、モーモスとの戦いで崩壊したはずなのだが…。

それに傷だらけだった身体も完治しているし、破れていた服も元通りだ。

「森なら私が元通りに修復しましたよ、ロスト」

私を覗き込んでくる白髪を靡かせている美女の顔があった。

アーテだった。

そうか、アーテが森を以前の状態に修復したということなのか。

さすがは神、何でもありなのだな。

アーテもまた元の純白の軍服を身に纏い、美しい白髪と雪のように白い肌を見せており、綺麗な状態に戻っている。

私は起き上がろうとして身体に力が入らないことに気づく。

「動けないぞ…」

指先一つ動かすこともままならない。

いったいどうしたというのだ?

「貴方は力を使い果たしたから身体機能が一時停止してしまったのです。でも、安心してください。暫くすれば動けるようになりますよ」

「そうなのか…。アーテ、お前その口調は?」

私の疑問にアーテは微笑んで見せてくる。

「これが私の地ですよ。永い時を生きていると色々な話し方をしてくるものなのです。もっともモロスとかは特殊なのですけどね」

あれほど相手の絶望に歪む顔を見るのが大好きだったアーテとは思えないほどのお淑やかな口調だった。

「まあ、ロストが驚いているのも無理は無いですね。お望みならば、口調を変えてみせてもいいんだぜ」

アーテは露悪的に顔を歪めて見せてくる。

「どちらでも構わない。アーテであることには変わりないのだからな…」

「そうですか。なら、好きにさせてもらおうかのう」

アーテは再び特定しない口調へと戻っていく。

永年その調子で話をしていることで慣れてしまったのだろうな。

ん？

今更ながら気づいたが、私は地べたに寝転んでいる。

だが、後頭部がやけに暖かく心地の良い感触を感じるが、これはいったい？

首を動かすことが出来なかったから目線を上に向けていく。

目線の先にはモーモスが私を見下ろすかのように覗き込んでいた。

モーモスが私に膝枕をしてくれているのだと遅ればせながら気づく。

「ふん、アーテ様の方が良かったというのか？」

モーモスは私の視線に気づき、そっぽを向く。

「いや、モーモスの膝枕は家の枕よりも気持ちいいぞ」

「なっ！お前は私の膝枕を家の枕と比較するというのか！」

モーモスが私の両頬を掴んで顔を寄せてくる。

「ははははっ…変わらないね、本当に…。我が膝枕をしてやった時も家の枕と比較したものだったな…」

アーテは懐かしげに笑う。

「アーテ様もそう言われたのですか。ふふっ、本当にロストは女性に失礼だな」

それにしてもモーモスはアーテのことを様づけで呼んでいたが、いつの間にそんな仲になったのだろうか？

「アーテ様は私の中にあったわだかまりを出す切っ掛けを与えてくれた方だ。やり方はどうであれ、私は感謝する」

モーモスは私の視線で疑問を嗅ぎ取ったのか、答えてくれた。

「ロスト、君は数日間は動けないだろう。だから、動けるようになったら、またこの森に来てくれ。その時こそ貴様にやってもらいたいことを告げる」

アーテは人を食ったかのような顔から真剣な表情になる。

「それは断れないことなのか？」

断るつもりは無いのだが、一応聞いてみる。

「断って欲しくないね。なぜならば、断ればお前はこの世界から消えてしまう。いや、正確には君が別の君になってしまうということなのか…。無論、僕が君をどうこうするということではない。そうなってしまうのだ」

和んでいた空気が冷えていく。

「どういうことだ？」

せっかくアーテの試練を乗り越えたというのに消えてしまうなぞ冗談ではないぞ！

アーテが私に頼もうとしていることは試練よりも物騒なことなのか？

「詳しいことはまだ言えない。だが、汝が変わるだけには留まらない。世界そのものが全く別物へと変わり果てることもありえるのだ」

「それは一大事だ！すぐにもオイジュス様にも相談して…ううぅ…」

モーモスは眠るようにして気絶していく。

アーテは瞬時にモーモスの額に指を押し当てて眠らせてしまったのだ。

「済まないが、眠ってもらうよ。ついでに私のことも含めて先ほどの会話の記憶も消去させてもらった」

アーテはモーモスを抱いてゆっくりと横たわらせる。

「なぜ、お前のことも忘れさせなければならないのだ？」

「俺は神だ。神が不用意に人間社会に介入してしまえば、秩序の崩壊をもたらしかねない。それについては身をもって体験しているからね。それとさっきの会話は貴方以外に聞かせると不都合が生じてしまうのよ」

私はアーテの表情が何処か何か嫌な思い出があって、それを思い出してしまったかのように見えた。

「身をもって体験したというのは彼女に関係しているのか？」

アーテは無言で私の顔を見る。

……。

「そうさ。その通りだよ。彼女が大いに関わっている」

アーテの親友である彼女。

アーテを八つ裂きにした彼女。

その彼女とやらが何に関係しているのだろうか？

「貴様は既に彼女の名だけは聞いたことがあるはずだ。なにしろ今の世界情勢の根幹を作り出したのが、彼女なのだからな」

彼女が今の世界情勢の元を作り出しただと？

それに私が既に聞いたことがある名だともいう。

「私の口からは彼女の名は言えない。そして、お前も例え気づいたとしても不用意に名を出すな。それに調べたりもするな。まあ、例え誰かに聞いたとしても、あるいは調べたとしても正確な情報が得られることはおそらく無いだろう。だが、それだけでも世界は歪に変容してしまう可能性がある」

その彼女の名を出すだけで世界が変わってしまうというのか…。

どれだけその彼女は物騒な存在だというのだ。

それに歪に世界が変容するとはいったいどういうことなのだ?

歪だと?

歪。

歪み。

『しかし、貴方様には過酷な運命が待ち受けています。この世界を歪んだ未来へと導く存在との果てしなく、苦しみと哀しみに満ちた戦いが…』

オイジュス様の言葉を思い出す。

そうだ、歪んだ未来へと導く存在。

彼女こそが歪みをもたらす者だということなのか…。

「その彼女が私が戦う歪みをもたらす存在だということか?」

私は思いついたことを言葉にしてアーテに伝える。

「歪みをもたらす存在か。だけど、彼女は違う。彼女はそれよりも厄介な存在だよ」

アーテの身体が震えだしてくる。

「いいや、その表現は正しくないかもしれない。正確に言えば、君に対してという意味だ。確かに歪みをもたらす者は強大だ。およそ私でも歯が立たないほどのものだろう。だが、お前の持ち前のしぶとさと火事場の馬鹿力で戦えば、勝てるかもしれない。だが、彼女は違う…」

その彼女とやらは私にとって歪みをもたらす存在よりも厄介な者だと言いたいわけなのか…。

「彼女はいわば貴方のもう一つの未来、可能性と言うべきなのでしょうか。お前にとって目を背けたい存在だということだ。これ以上はもう言うことは出来ない」

アーテは口を閉じる。

もうこれ以上は何聞いても答えてくれないのだろう。

とりあえず、その彼女は私にとって一番苦手となる敵だということだ。

アーテがして欲しいことはその彼女を倒すことなのだろう。

だが、その彼女はアーテの親友であるはずだ。

それに何故、私でなければならないのだという理由も分からない。

いや、待て。

私が目を背けたい相手。

私のもう一つの未来。

私の可能性の一つ。

今の世界情勢の根幹を司る者。

アーテは悠久の時を生きる神。

そのアーテの親友にして、八つ裂きにするほどの戦闘力の持ち主。

……。

まさか…。

そういうことなのか！

彼女はあの彼女だというのか！

確かに彼女の名前は聞いたことがあるぞ！

それどころか、この世界で彼女の名前を知らないものは物心が付いていない赤子ぐらいだというほどに有名だ！

だが、彼女はすでに…。

いや、だからこそ世界が変容してしまうという説明も付く。

彼女の名を不用意に出してはいけないという意味。

彼女について調べてはいけないという意味。

誰にも知られてはいけないという意味。

全ての辻褄が合ってしまう。

アーテは神だ。

神の力を持ってすれば、彼女が存在する場所へと旅立つことも可能なのだろう。

だが、それでもまだ説明が付かない点がある。

何故、私なのだ?

アーテは悠久の時を生きる神だ。

おそらく私以外でも最強の力を手に入れた者が一人や二人いてもおかしくはない。

何故、よりにもよって私なのだ…。

押し黙っている私を見て、アーテはため息をつく。

「その様子だと気づいたようなのですね。ですが、貴方でなければ彼女を倒せません。いいえ、貴方がやらないといけないのです。そこから先は私の口で説明したら世界が変わってしまいます。貴方自身が見つけないといけません…」

アーテの説明に私は言葉を失ってしまう。

何と言うことだ…。

確かに歪みをもたらす者よりもよほど厄介な存在だ。

さらに言えば最悪の相手にもなりかねない。

そういえば彼女がどのような結末を迎えたのかは知らない。

著名である彼女のことだ、調べれば分かるのかもしれないし、誰かに聞けば分かるかもしれない。

いや、おそらくそれはアーテの言うように正確な情報ではないのだろう。

全ては何者かがでっち上げた嘘偽りのものだという可能性がある。

それを仮定で考えるとして、誰が偽りの情報を流したのかはアーテか、あるいは当事者か、それに準ずる者だ。

余りの荒唐無稽な真実であることから歴史から覆い隠すために偽りの情報を伝えたに違いない。

確かに彼女の結末を私が万が一にも知った瞬間、世界が変容してしまう恐れがある。

だからこそ不用意に名を出すことも調べることもしてはいけないということなのか…。

それにしてもまだ何か思い出せていないこと、何かもっと重要なことを忘れているような気がしてならない。

いったい何だったのか？

「考えるのはもう止した方が宜しいでしょう。それで下手に何かに感づいてしまったらその瞬間に世界が変わる恐れがあります」

私の思考を途切らせるかのように話しかけてくるアーテ。

「ならば、私の記憶をその時が来るまで消してくれ。悶々として過ごすのは嫌だからな」

「残念ながら出来ません。貴方の力は既に私を凌いでいます。私が貴方の身体を不自然に操作しようとする魔法を掛けても弾かれてしまいます。本人にその気がなくても…」

私の生存能力はもはや脊髄反射級だということなのか…。

これは果たして喜ぶべきところなのだろうか。

それだけ過酷な日常を送ったことで進化したのかもしれない。

薬物に対抗するために耐久性を持った突然変異の菌と言ったところ

なのだろう。

私はもはや人間を超越してしまったのだろうな…。

我ながら何処までも規格外な身体になってしまったものだ…。

とにかく、彼女の名も思い浮かべないようにしよう。

固有名詞を思い浮かべるだけでも不味い気がしてくるからな。

飽くまで便宜上、彼女という代名詞で心の留めておくのだ。

「ううぅ…」

モーモスが目を覚まそうとしている。

「彼女がもう目覚めそうだし、私はもう行くとするよ。また五日後にここに来てくれ。それまでに家族ともお別れをしておくようにね…」

私はアーテの言葉に身体が硬直してくる。

家族とお別れをしておけだと？

何を言っているのだ、アーテ…。

それに五日後とはモーモスとオイジュス様が国民に重大発表する前日ではないか！

「言い方は悪かったな。君の家族とは会えなくなるかもしれないか

ら、万一のためにお別れをしておくようにとのことだよ。儂が頼むことはそれほどのものだということじゃからな」

……。

私の想像通りの場所に連れて行かれるとしたら恐らく家族と再会することは困難であるかもしれない。

それでも私は…。

「私は家族にお別れを言うつもりはない。いつも通りに日々を過ごすだけだ。なぜならば、必ずこの世界に戻ってくるのだからな」

アーテは私の言葉を聞いて微笑んでくる。

「お前ならそう言うと思ったよ。安心したまえ。六日後には何か重大な催し物があるようだが、全てを終わらせた時にはその日に戻るようにしてやる。私も出来うる限りの下準備は整えているつもりだ。だからこそ、私がこの世界に来れたのだからな。そして、貴様に力を与えることも出来た。何よりも…」

アーテは動けない私を起こして、抱き締めてくる。

「私は貴方の目指す世界での第一構成員にもなれたのだから…。それが私の誇り…」

……。

「また五日後にここで…ちゅ」

アーテは私と軽く口づけを交わして、虚空へと消えていく。

ヴァルキリアかアースガルズのどちらかを選べという人生の分岐点に立たされたと思いきや、今度は世界の消失を阻止するための救世主となれと来たわけか…。

これも最強の力を手に入れて、絶世の美女と仲良くなれたことへの代償だというのだろうか？

些かぼったくりに近いような気もしてくる。

だが、アーテによって既に賽は投げられてしまっている。

私にはもう進むしか道が残されていないのだ。

この世界の情勢や何よりもエルのことが気になるが、世界が消失してしまっては全てが無意味になってしまう。

それに全てを終えた時には六日後のその時までに戻れるように計らってくれるとアーテも言っている。

もはや優先順位は考えるまでもない。

私は彼女がいるという場所へと旅立つ。

そして、この世界の消失を阻止してみせる。

今の世界は困難な課題が山積みだが、確実に私が望む世界にもなってきているのだ。

死ぬ思いで関係を造ってきた絶世の美女達。

彼女達と家族となれた出来事。

酒池肉林への夢に確実に近づいてきている！

それら全てを無駄にさせないためにもこの世界を消失させるわけにはいかないのだ！

……。

ここまで格好良く意気込んだが、現実では私は指一本も動かすことができない。

今の私は生まれ立ての赤子以下の無力な存在だ。

アーテは時間が経てば元通りに動けるように言っていたが、このまま森で動けぬままで過ごすわけにもいかない。

さてと、どうすればよいのやらか…。

「うう…ロスト…」

おおっ、救いの女神モーモスが目覚めたぞ！

早く私の体力を元に戻してくれるように懇願しなければ！

「すまない、ロスト。私の決闘の付き合わせてしまって…」

モーモスは申し訳なさそうに項垂れている。

どうやらアーテと遭遇してからの記憶は綺麗さっぱり消去されているようだ。

私と決闘して気絶したということになっているみたいだな。

「謝らなくてもいい。それよりも治癒魔法を掛けてくれないか？身体が動かないのだ」

「それは大変だ！今すぐ掛けてやる！」

モーモスは私の額に手を当てて治癒魔法を掛けてくる。

身体中に暖かい何かが駆け巡ってくるのを感じる。

これですぐに動けるかもしれ…ないわけではなかった…。

動けない！

「どうだ、ロスト。動けるか？」

「駄目だ。全然動けないぞ…」

これは治癒魔法ではどうこうできるような状態ではないようだ。

自然治癒を待つしかないというのか。

「はぁ…仕方ない。私がお前を背負っていこう」

モーモスの提案に嫌々ながらも同意するしかなかった。

女性に背負われてしまうのは格好が悪いが、現実にそれしか方法が無い。

「すまない、モーモス…」

「構わない。切っ掛けはお前だったが、私が迷惑をかけてしまったことには変わりないのだからな」

こうして私はモーモスに背負われて、家路につくのだった。

……。

……。

…。

「主、気のせいかしら？前にもこんなことがあったような気がするんだけど？」

屋敷で待っていたのはアビスの絶対零度にも匹敵する冷たい目だった。

「ふふっ、そういえば以前は僕がご主人様を抱き上げていたところをアビスに見つかったわけだったね。僕にとっては忘れられない良い思い出だよ」

ケールは懐かしげに語ってくる。

あれのせいで私はヴァルキリアで男色家であるという言われ無き噂

が持ち上がったのだったな…。

「済まない、ロストが身体が全然動かせないことで私が運んだわけだが…」

モーモスは私を弁護してくれるようにアビス達に説明してくれている。

やはりモーモスは良い人だ！

「ふーん、どうやら腰を痛めたなんてことではなさそうね。まあいいわ、モーモス殿も上がりますか？」

「いや、遠慮しておこう。私はオイジュス様と話をしたいことがあるからここで失礼させてもらうよ」

モーモスは私に微笑み掛けてくる。

どうやらモーモスの中にあるわだかまりを解消したことに関しての記憶は消去されていなかったようだ。

おそらく彼女はオイジュス様と本当の意味で向き合うために話をするつもりなのだろう。

何とも頼もしいことだ。

「では、また今度。ロスト、お前には感謝している…ちゅ」

むぐっ！

「はあ？」

「えっ？」

アビスとケールはモーモスの行為に唖然としていた。

「ちゅば…ちゅる…ちゅううううっ！」

モーモスは私を前に抱き上げて熱烈に口づけをしている。

「ちゅ…あむぅ…はぐぅ…」

ぐおおおおっ！

私の鼻や顎を甘噛みし、口の周りを滑らせるように唇を擦り付けているぞ！

「何なのよ？これはいったい！」

「ふむ、なかなか情熱的な口づけだね」

アビスは戸惑い、ケールは冷静に観察している様子だった。

そして、暫くして…。

「ちゅば…ふぅ…私は公務で忙しいことで滅多に会えないからな。これは補充と言うやつだ。では、また時間が出来たときには私に付き合ってくれ。ご機嫌よう、ロスト…ちゅ」

モーモスは艶めかしい橙色の唇を見せつけるようにして私にもう一

度軽く口づけし、颯爽と立ち去っていく。

どうやら洞窟での情事した記憶も消去されていなかったらしい。

それにしても情熱的で気持ちいい口づけだった。

顔にはモーモスの生暖かい唾液がこれでもかというほど残っている。

モーモスの迷いが吹っ切れたことであのアビスとケールに見せつけながら口づけをするという大胆な行為をすることができたのだろう。

だが、困ったことになってしまったな。

「ケール、主を丁重に連行、いえ、運んでくださりますか？」

「畏まりました、アビスお嬢様」

アビスとケールは何処かの気位の高い貴族のお嬢様とそれに付き従う執事のような乗りで言葉を交わしてた。

ケールは私を抱き上げていく。

「どうやら本当に動けないみたいだね、ご主人様…じゅるり…」

じゅるり？

何でしょうか、その大好物な獲物を目の前にした肉食動物みたいな舌なめずりは？

「ふふっ、大切な商品だから丁重に扱うのよ」

アビスは活きのいい奴隷を見つけたか闇商人のような恐い笑みを浮かべているぞ！

「ヴァルキリアから出て、暫くだったからね。久しぶりのご馳走になりそうだよ、ふふっ…」

「ケール、食べ過ぎて身体を壊さないようにね。それに犠牲になった生き物にきちんと感謝することも忘れてはいけないわ」

……。

「大丈夫さ、僕は胃袋は鋼鉄の処女よりも頑丈だからね。それに僕は犠牲になった生き物には感謝どころか、愛情すらも感じているよ」

「だったら、きちんと丁寧にゆっくりと味わって食さないといけないわ。私も食べやすいように綺麗に捌いてあげるから、ふふっ…」

……。

待ってくれ！

私は全然動けないのだぞ！

それに…。

……。

駄目だ、良い言い訳が思いつかない。

私がモーモスと関係を持った時の状況は特殊だったが、三回戦ほどもやったからな…。

ケールは私を屋敷の中へと運び、寝室へと連れて行こうとしていた。

「ご主人様、いや、ロスト。今夜は僕の胃袋の中で眠ってもらおうかな？」

「駄目よ、せめて骨と皮は残しなさいよ。活かさず殺さずが私の主義なんだから」

……。

「お手柔らかに頼む…」

「駄目よ。許さないわ、主」

私の僅かな願いをアビスは笑顔を浮かべて断罪してくる。

「ケール、主を絞り滓にしてあげて。遠慮はいらないわよ」

「元から遠慮するつもりはないさ。ロストの生命力を限界まで試させてもらうつもりだよ」

そして、寝室の扉は重々しい音を立てて閉じていく。

……。

私の世界はここで終わるのかもしれない。

だが、女の腕の中で生涯を終えるのならば、本望というものだ！
このロストの最後の花道を見事に散らせて見せようではないか！
「では、頂くとするよ」
「私の分も残して置いてよ」
……。
やっぱりまだ終わりたくないぞ！
私には大なる夢があるのだ！
それは…ぐほっ！
そこは駄目だ！
止めろ！
私はまだ…がはっ！
「歯ごたえがあっていいね…特にこの辺りが…あむっ…がぶっ！」
ぐほぁあああっ！
「よくも朝は逃げ出してくれたわね。その落とし前はつけてもらうわよ！この変態主！」
がはあああっ！

「まだまだ終わらないわよ、変態主！」

変態主はやめ…あぎゃあああああっ！

「ご主人様には僕の椅子になってもらうよ。生意気な従者にたっぷりとご奉仕するんだ」

ぬおおおおおっ！

ケールが私の顔に腰掛けてきたぞ！

顔が押しつぶされそうだ！

「従者である僕がご主人様の顔を椅子にする。どこか背徳的な気分になってしまうね。病みつきになりそうだよ…」

ケールは私の顔に尻を擦り付けるように動かした後、両大腿を挟む込むようにして締め上げてくる。

ぐおおおおおっ！

痛いが大腿と尻の感触が心地良くもある。

この感覚は非常に不味すぎる！

「素直になればいいよ。僕は例えロストが変態でもこの世の誰よりも深く愛しているからね」

「ふふっ、変態主には似合いの様ね。やっぱり主はこのやり方が好

きだったの？」

私はケールの椅子にされているから話すことができない状態だ。

「沈黙は肯定と見なすわ！覚悟して、ロスト！」

うぎゃあああああああああああああああああああっ！

……。

……。

……。

……。

……。

……。

……。

…。

「少しやりすぎたかな？でも、ご主人様が無事で良かったよ。身体が動けなくなるなんてどう考えてもただ事ではないからね」

「そうね。まあ、お仕置きはこれくらいにして、あんまり心配かけないでよね、主…」

アビスとケールが骨と皮、ついでに傷だらけになった私の身体を左右から優しく抱き締めてくる。

どうやら二人にはかなり心配かけてしまったようだ。

だが、アーテについては話をすることはできない。

「済まないが、身体が動けなくなった理由は話すことはできない。別にお前達を信用していないわけではない。理由を話すとそれだけで不都合が生じてしまうのだ。難しいだろうが、分かってくれ」

とりあえず誠意を込めて話した。

嘘も言ってはいない。

「まあ、主がそこまで真剣に話したのなら仕方ないわ。けど、全てが終わったら話してよ。約束だからね」

「僕もこれ以上聞くなんて野暮なことはしないよ。全てはご主人様の意志に従うさ。従者としても、妻としてもね」

何とか二人は納得してくれたようだ。

些か心苦しいが仕方ないのだ。

後はタナトスやアイリ達にも話さなければな…。

「まあ、主の身体が動かないのだとしたら、当分は誰かが付きっきりで世話しないといけないわね」

「確かにそうだね。でも、今夜は僕達で付きっきりで添い寝していこうか」

二人は私を挟み潰すように強く抱きついてくる。

苦しいが気持ちいい感触でもあった。

「では、お休み、ご主人様…ちゅ」

「お休みなさい、主…ちゅ」

アビスはケールは私の顔を挟み込むように口づけしてそのまま眠りについていく。

アビスとケールのお仕置きは痛いようで気持ちいい感じで複雑な気分だったが、終わりよければ全て良しというところだな。

私があれほど痛みを嫌っていたのは案外このような普通でない嗜好が明らかになることを無意識で恐れていたのかもしれない。

そんなどうでもいい新事実の発覚はともかく、彼女達と過ごす時間は残すところ後五日。

別に今生の別れというわけではないが、万一ということもある。

後悔の無いように今までに通り過ごさねば…。

……。

アーテの親友であるという彼女。

私が最強の力を手に入れる切っ掛けを作ったいわば因縁の相手。

そして、世界を消失させてしまうかもしれないという超常的な存在。

彼女が私に何をもたらすかはまだ分からない。

だが、確かな、いや、確かだと思いたいことがある。

私は彼女とは違う。

違うのだ。

私は彼女とは違う道に進んでいくのだ。

そうでなければ、私の歩んできた道が全て間違いになってしまう。

……。

今考えても仕方ないか…。

もう彼女のことを考えるのは止めよう。

考えて、感づいて、世界が変容させてしまっては笑い話にもならない。

アーテとの約束の時を迎えるまで忘れることにする。

……。

とりあえずは考えるよりは感じることだ。

私の両側には絶世の美女がいるのだ。

それだけを感じて眠るとしよう。

私は両頬から女神の吐息を感じながら眠りについていく。

さて、最後に定番の台詞で締めくくるとするか。

今日、何度も使った台詞でくどいと思うことだろう。

おそらく一日当たりの新記録更新となるに違いない。

それに男の証も老衰死一歩手前の末期状態と成り果てている。

何もかもが疲れ果ててしまっているのだ。

だから、最後にもう一度敢えて言わせてもらう。

燃え尽きたな…。

第６３話：因縁の彼女（後書き）

ここでクイズです。

因縁の彼女とはいったい誰のことでしょう？

アーテの言う通り、実際にロストは彼女の名を何度か耳にしたことがあります。

勘の良い、あるいは記憶力がある読者様でしたら既にお気づきかも知れません。

まあ、クイズと呼ぶのもおこがましいような問題ですけど…。

もし分からなければ、読み返してみてください。

作者はベタで王道でお約束な展開が大好きです。

おそらくは「ああ、この人のことか」と容易く答えに辿り着くことができると思います。

では、御感想をお待ちにしています。

第６４話：命懸けの朝（前書き）

この話は作者の超自己満足で描いています。

そして、この６４話は飛ばしても物語の進行上にほとんど影響はありません。

純粋に物語の続きが気になるのであれば、この話を飛ばして、６５話から読むことを推奨します。

作者なりにかなりアレな内容なので、その事を踏まえてお読み下さい。

第６４話：命懸けの朝

私は目を覚まして身体を動かそうとしたが、僅かに四肢が動くだけで起き上がるには程遠い状態だった。

本当に身体が動くようになるのだろうか？

何だか不安になってきてしまったぞ…。

このままもし動けなくなってしまったら私は何を糧に生きていけばよいのだろうか…。

「ご主人様、そんな不安な顔をしないで欲しい。僕は例えご主人様が動けなくなったとしても決して見捨てないよ。なぜならば、僕はご主人様の妻なのだからね…」

「私も主を見捨てることなんて天地が裂けても有り得ないことだから安心して…」

ケールとアビスは私の不安を感じ取ったのか普段では考えられないほどの優しい声で慰めてくれる。

正直、涙腺が少し緩みかけてしまったぞ！

私はケールにされるがままに抱き上げられていく。

「ご主人様は当分動けないようだし、今後の方針について話し合おうか」

「そうね、みんなからも意見を聞いてみないとね」

「宜しく頼む…」

こうして、私はケールに運ばれて皆が集まる食卓へと向かっていった。

……。

……。

…。

「旦那様の面倒は俺が見てやるぜ！」

「父様のお世話は私がやります！」

「隊長の身辺警護は副官たる私の役目です！」

誰が私の世話をしてくれるかについて議論が難航していた。

私はケールの膝の上に座らされるような姿勢になっていた。

この姿勢は結構恥ずかしかったが、ケールがこの姿勢でないと駄目だと言ってきた。

アビスには明日の朝食では自分の膝に私を座らせる事を取り決めていたことで了承済みだった。

「君は身体を動かさせないから、座位姿勢を保てるようにこうして

僕が抱いているのさ。まあ、役得でもあるけどね」

確かに恥ずかしいが、私の後頭部はケールの豊満な胸の谷間に埋まっている。

なかなかに心地良いものだった。

そんな私にケールは私の身体を少し持ち上げて、耳元に唇を寄せてくる。

「昨日晩は君が僕の椅子になってくれたからね。だから昼間は僕が君の椅子になるのさ…ちゅ」

ケールは淫靡な声で囁いて、耳たぶに軽く唇を押し当ててきた。

私はケールの唇の感触に思わず身震いしてしまう。

ケールの言っていることは恐らくあの顔面椅子のことだろう。

正直、気持ちよかったが、あんな屈辱的な遊戯はもうしたくはないぞ…。

「ちゅば…ご主人様は本当に可愛いね。思わずこのまま食べてしまいたいぐらいだ、ふふっ…」

「ケール様、ここは食卓ですよ。どうか控えてください」

エクリアが不機嫌そうな声でケールの行為を窘めてくる。

そういえば、最近エクリアと話をしていない気がする。

いや、エクリアに避けられているのだ。

思えば、あの神武闘式準決勝戦が終わって以来に…。

「エクリアの事が気になるのかい？」

ケールは私がエクリアを見ていることに気づき、耳たぶに唇を押しつけたまま囁いてくる。

唇を押しつけたまま耳元で囁かれるのは気持ちいいが、くすぐったくもあってもどかしい気分にさせられる。

「彼女は複雑なのさ…ちゅば…君がどちらにつくかを考えてね…れろぉ…」

「うっ…複雑とは…くっ…どういうことだ…」

最初は唇を軽く押し当てるだけだったが、舌を出して舐め回したりと大胆な行為になってくるケール。

「あむっ…忘れたのかい？エクリアはヒュプノスの元教育係で元新鋭隊長だ…ちゅ…いわば最もヴァルキリア側に近い人間なんだ…ちゅるるっ！」

「ぐおっ…ここは食卓だぞ！少しは…自重を…」

耳から伝わる刺激が余りにも快感であることから身じろぎをしたかったが、身体が動かないのだ。

「ケール殿は大胆ですね。隊長はまさに為すがままのぬいぐるみです」

「父様がまるでか弱い女の子のようです」

エリーとロンは目を輝かせて物珍しげに見ているだけで助けようとはしてこなかった。

「くっくっくっ、ケールは俺よりも冷静な分、いざというときは俺よりも歯止めが利かなくなるからな」

タナトスは親友であるケールの邪魔をしないことが暗黙の了解になっているのか、にやけた顔で私を眺めていただけだった。

そんなときであった。

「静まりなさい」

……。

アイリの極寒の冬を思わせる冷徹な声が騒いでいた皆を一瞬にして静まらせていく。

さすがは女将軍様だ。

ケールは私の耳を舐め回すのは止めてくれたが、唇は押しつけたままだった。

何もしないのなら、唇を離して欲しい。

かえって焦らされているような感じがしてもどかしいぞ。

そんな私の様子を冷たい目で一別してアイリは話を進めていく。

「誰が世話をするかを考えても埒が飽かないわ。ここは誰が世話をすることではなく、誰が世話を出来るかを考えた方が現実的とだと思うわね」

誰が世話ができるかということか…。

「貴方達の中で例えば、身体が一切動けない人に対して食事から下の世話までした経験があるというのかしら？」

アイリの質問に答えるものは誰もいなかった。

確かに言葉通り、身の回りの世話を一から十までしたことがある者は皆無だろう、と思った矢先だった。

「私はあります」

「えっと、私もだ…」

「私はあるわよ」

三者三様で質問に答えた者がそこにいた！

答えた順番で名前を挙げてみようか。

レテシア、クロエ、アビス以下の三名だった。

パラディスムの三人娘だ。

まあ、レテシアは娘かどうかは激しく疑問ではあるが…。

レテシアはアビスやクロエの少女のような可憐さが無いだけで見た目は若々しい。

他の絶世の美女と並んでも遜色無いどころか、おそらく色香では一二位を争うほどのものだろう。

レテシアは私の視線に気づいたのか、微笑するように目を細めてくる。

ほんの僅かな流し目だけでも男の証が元気なってきたぞ。

恐るべき大人の魅力、色気の怪物だ。

「パラディスムの女は御館様がご存命の時、任務で重傷を負い、日常生活を自力で過ごすことが困難になった際には交代で一日の身辺のお世話をさせて頂きました。故に経験は豊富であると自負しております」

レテシアは全ての者に染み渡るかのようにしっとりとした声を出して話してくる。

アイリのように威圧的ではないが、穏やかながらも何処か有無とは言わせないほどに従わせるかのような抗い難い響きがあった。

オイジュス様に少し似たような感じだな。

「ですから、私達に任せて頂けますね」

レテシアは思春期の少女では出せないような艶やかな笑みを浮かべて、周囲を見渡す。

その笑みの中には皆に安心させるような穏やかさもありながらも、素人は口出し無用という容赦無き威圧感も含まれているように見えたのは気のせいだろうか？

「それならロストの身辺の世話はレテシア殿が中心となって行うこと。みんな異論は無いわね」

途中までレテシアの威圧感に押されていたアイリは持ち直すように取り仕切って、場を収めてくる。

「ロスト様のお世話係、このレテシア・パラディスムが命を賭けて遂行して見せましょう。では、朝食の準備をして参りますので失礼致します」

レテシアは笑みを絶やすことなく物騒な決意表明をしてみせて台所へと去っていく。

「あれはただ者じゃないわ…」

アイリは額を拭いながらも忌々しげに呟いていた。

「何となくだが、あの女には絶対に逆らわない方がいいみたいな気がするぜ」

タナトスは僅かながらも不機嫌そうに言ってくる。

「レテシア様はパラディスムで歴代最強と謳われた元頭領だ。エル様には負けてしまったが、決して実力では負けてはいなかった」

クロエは何処か誇らしげに語っている。

彼女はレテシアを実の母親にように慕っているのだ。

「あの時のエル様はヴァルキリアの身体強化処置で普段なら途轍もない体力を要する神降ろしを難なく使いこなせるようになっていた。それが勝敗の分かれ目になってしまったが…」

アビスはクロエの話をやや苦しげに聞いている様子だった。

「レテシア様は神降ろしを長時間行使することが出来るほどの強靱な肉体と精神力を持っている。今でもあの御方が歴代最強であることには変わりないと私は思う」

確かにクロエの言うとおりかもしれない。

レテシアはアルゴスの悪夢の中で偽物として戦ったことがあったが、その時の威圧感はケールやタナトスをも凌いでいた。

現実世界のレテシアはそれよりももっと凄まじい威圧感を放つに違いない。

神であるアーテやモロスを除けば、おそらく私が知り合った絶世の美女の中で最強と言えるのは間違いなくレテシアだ。

実力もさることながら技術、経験、何もかもが抜きんでていると言

っても過言ではないだろう。

確かにタナトスの言うとおり逆らわない方がいいのかもしれないな…。

……。

……。

…。

レテシア、アビス、クロエが配膳していき、食事の準備が整う。

「はい、どうぞ召し上がってください」

レテシアの料理はアビスとエルが用意してくれた東洋に伝わる精進料理と呼ばれるものだった。

私は手足が動かないため、食事介助してもらうことになった。

……。

「ほら、ロスト。あーんしろ」

今、私はケールに抱きすくまれた状態でクロエから食事介助を受けていた。

クロエはスプーンでご飯をすくって私の口元へと運んできている。

……。

これは何かの罰なのか？

あーんは少し恥ずかしいぞ！

「何を恥ずかしがっている？レテシア様から聞いた話だと殿方はこうすると喜ぶと言っていたぞ」

くっ、クロエに良からぬことを吹き込んだのはレテシアなのか！

私はレテシアを睨むが、彼女は私を見て、ただ微笑んでいるだけだった。

彼女の目は私の全てを見透かしているような何とも落ち着かない気分にさせられてしまう。

恐らく私は恥ずかしがっているが、本心では嬉しいに違いないと確信しているかのような笑みだった。

実際に否定できない。

恥ずかしいと思いつつも嬉しいとも私は確かに思っていた。

こんな嬉し恥ずかしの体験は全身麻痺している状態でないと味わえないことなのだろう。

無論、このままの状態でいるのは御免被りたいが…。

「どうした？ひょっとしたら口が満足に動かせない状態なのか？だったら待ってろよ。今食べやすいようにしてやるからな」

クロエは何を思ったのか、私の口元に寄せていた食塊を自分の口の中に入れて咀嚼する。

何のまねだ？

自分が食べる場面を見せて、私に食欲を沸かせるつもりなのだろうか。

レテシアは食卓を少し引いていき、クロエは私の左大腿に跨るようにして座ってきた。

私の左大腿にクロエの両大腿や臀部の感触が伝わり、少し男の証が元気になりかけていた。

クロエは私の大腿を椅子にした姿勢で口に食塊を含んだまま顔を寄せてきた。

「ふひをあへろ」

口を閉じたままのため、声を出しにくい状態だが、何とか聞き取れた。

翻訳すると「口を開けろ」だ。

私はクロエの促されるまま口を開いた。

……。

ぬおおおおおおっ！

クロエは口移しをする形で私の口腔内に食塊を入れてきた！

「ちゅば…これはクロエ殿も大胆にやってきたものだね」

ケールは私の耳から唇を離して感心したようにクロエの行為を賞賛してくる。

「ちゅぷ…くちゃぷちゃ…あむっ」

ぐおおおおおっ！

クロエは舌を入れてきて、私の口腔内に入っている食塊を柔らかくするように舐め回してくる！

しかも、零れないようにクロエの唇が私の口の周りを覆い尽くすようにしてべったりと張り付いていた！

とりあえず私はクロエの舌で柔らかくなった食塊を軽く咀嚼して喉の奥に押し込んでいった。

自分の味覚が麻痺したのではないかと思うほどに訳の分からない状態だった。

これは夢なのだろうか…。

「どうだ、美味しく食べれたか？」

クロエは薄青色の唇から唾液の糸を伸ばしながらも心配げに伺ってくれている。

「あ、ああ…上手かった…」

私は喘ぐようにして、答えるのが精一杯だった。

そう言えば、いつの間にか食卓が静かになっていた。

桃色になっている頭を活性化させて周囲を見渡すと賑やか担当のエリーとロン、アビスにエクリアがいなくなっていた。

「ロンファン殿はエリアルト殿に朝の調練に連れて行ってもらったわ。エリアルト殿はともかくロンファン殿には刺激が強すぎると思ったのよ」

アイリは冷徹ながらも呆れた口調で説明をしてきた。

まあ、ロンファンは大人の体型だが、精神的にはまだ幼いような気がする。

確かに今の行為は些か刺激は強いのかもしれない。

アビスはもう付き合ってられないと思って去っていったのだろう。

それにしても気がかりなのはエクリアだ。

彼女ならこの爛れた食事光景に真っ先に批判し、説教地獄という連撃を食らわせてくるはずなのに何も言うことなく立ち去っていった。

私の余りにも爛れた状態を嫌ったと仮定しても元上司のケールもいるのだ。

ケールの行為をしつこく咎めずに去っていくのは明らかにおかしい。

やはり私がヴァルキリアとアースガルズを天秤に掛けて迷っていることが気がかりなのだろう。

アビスのこともあるし、エクリアとも一度じっくりと話し合わなければならないな…。

問題は山積みだが、今は食事を済ませるだけを考えようか。

栄養を取らねば、ただでさえ悪い脳がさらに劣化してしまう恐れがある。

「旦那様、そうやって食べさせる方法だったら俺にも出来るぜ！」

タナトスは持っていた焼き魚を食べ、私の元へと近づいてくる。

クロエが跨っている左大腿に対してタナトスは右大腿に跨っていく。

タナトスの逞しくも弾力のある太股と臀部が力強く締め付けるように私の右大腿を挟み込んでくる。

私の小柄な身体はケール、タナトス、クロエと魅惑的な女体の中に埋まっていく。

世界中の野郎共が見たら、即座に殺しにかかるほどに魅惑的な状態となっているぞ！

身体が思うように動けないのがこれほどもどかしいと思ったことは

ない！

感動に打ち震えている私にタナトスの紫色の唇が迫ってくる。

むごっ！

タナトスは私が口を開く暇も与えずに口づけてきた。

そして、私の口を舌で無理矢理こじ開けて、食塊を流し込んでくる。

「ちゅぶじゅるぢゅぷ！」

ぬおおおおっ！

タナトスの舌が食塊を私の喉に無理矢理押し込めようと伸ばしてきている。

これはかなり苦しいぞ！

思わず涙目になってしまい、レテシアの方に視線を向ける。

レテシアは私の視線に気づき、苦笑しながらも近づいてくる。

「あらあら、タナトス殿。無理矢理食べ物を喉に押し込めてしまうと窒息の恐れがあります」

「ん…ちゅば…そうなのか？」

タナトスはレテシアの注意を受け入れるかのように唇を離していく。

「ここはクロエのやり方を見ていてください。その後に実践されれば宜しいかと思いますよ」

「そうだな。ご忠告感謝する」

あのタナトスがレテシアの言葉を素直に受け入れているぞ！

やはりレテシアは色んな意味でただ者ではないな…。

「食べさせるから口を開けろ」

クロエが再び口の中に食塊を含み、顔を寄せてくる。

それにしてもクロエはこの行為に対して羞恥心は持たないのだろうか。

「ロスト様、クロエは御館様にご奉仕するためにあらゆる訓練を進んで受けたのです。だから、何ら遠慮することはありません」

私の口を覆い尽くすように唇を張り付けて、食塊を流し込んでいくクロエ。

「んっ…あむぅれろぉちゅぷ」

クロエの舌が食塊を潰して私の喉に通るように流し込んでくる。

「自分の舌で食塊を磨り潰して少しずつ咽喉へと流し込んでいくのです。そうすれば咽せることもなくなりますよ」

レテシアは教師のように説明している。

それに対して熱心な生徒になったかのように聞き入っているタナトス。

タナトスは意外と勤勉なのかもしれない。

「僕も後で挑戦してもいいかな？」

私を椅子になってくれているケールがレテシアに伺いを立ててきた。

タナトスが熱心にご教授受けている姿を見て補食専門を自負するケールに火を付けたのだろうか。

食べさせてもらうつもりが食べられないかが心配だ。

「くちゅぷちゅぐちょちゅぱ」

それにしても食べ物の味覚はもう分からない。

ただクロエの唇と舌の感触を感じるだけだった。

「ちゅぱ…美味しく頂けたか、ロスト…」

クロエは頬を赤らめ潤んだ目で私に伺ってくる。

「美味かったぞ…」

「そうか、良かった…」

安堵したかのように息をつくクロエ。

彼女は羞恥心云々よりも私に美味く食べさせれたどうかを考えていてくれている。

邪な考えを抱いている自分が恥ずかしくなってきたな…。

「それにしても随分と美味く食べさせてくれるな…」

「まあ、訓練をしていたからな」

クロエは誇らしげに答えてくれる。

誰かと訓練をしていたのだろうか？

ひょっとして御館様相手に実践済みなのだろうか…。

僅かばかりに胸が痛くなる気がしてきた。

しかし、元はと言えばパラディスムの女は全て御館様のものだ。

嫉妬するのは筋違いなのだろう。

だが、理屈と感情は別物だ。

……。

我ながら何て心が狭いのだろう。

私とて浮気の一つや二つをしているのだ。

彼女達を束縛する権利は無い。

だが…。

……。

これ以上考えるのはもう止めよう。

袋小路に入ってしまいそうだ。

クロエは私を本当に心配してくれてやってくれているのだ。

それにひたすら感謝することこそが大切だ。

「ロスト様、クロエは私を相手にして訓練して上達したのですよ。実践する殿方はロスト様が初めてですのでどうぞご安心してください」

レテシアは私の不満を察したのか、クロエの初めての相手が私であることを明かしてくれた。

私の胸の痛みが急激に和らいでいくのを感じる。

我ながら醜い感情を持ってしまったのものだ。

さすがにこんな自分を好きになることはできないな…。

それにしてもレテシアはごく自然に聞き捨てならないことを言っていた。

クロエの練習相手がレテシア。

だとすれば…。

……。

『さあ、クロエ。私を御館様だと思ってやってみなさい』

『しかし、レテシア様。私はとてもそんな恥ずかしいことは…』

『だったら私が見本を見せて差し上げます。ほら、お口を開けなさい』

『ちょっとレテシア様！待ってください！むぐっ…ちゅちゅううっ！』

……。

うおおおおおおおおおっ！

鼻とは言わず身体中から血が吹き出そうなほどに刺激的な光景になってしまうぞ！

百合はロンだけで十二分に満腹のはずなのに新境地が開けそうな気がしてきたな…。

「やり方が分かった。今度こそ旦那様に俺の口で美味しく食べさせてやるぜ」

再び口に食べ物を含み、私の元に近づいてくるタナトス。

タナトスは私の顎に手を添えて、口を開けるように促してくる。
私が口を開けた途端にタナトスの唇が優しく包み込むように覆ってくる。

「あむぅ…くちゃぷちゃねろぉ」

先ほどとは違い、タナトスの舌は丁寧に食塊を潰しつつ私の喉に添えるようにして流し込んでくる。

タナトスの舌使いは驚くほどに優しく心地良かった。

相変わらず食べ物の味は分からなかったが、タナトスの唇と舌の感触を楽しむことはできた。

「ちゅぱ…ふぅ…美味しく頂けたか、旦那様？」

いつもの自信ありげではない少し緊張した表情でタナトスは私の感想を聞いてくる。

「美味かった…」

私は単純に一言告げる。

もう少し言いようがあるかと思ったが、これぐらいしか言えなかった。

「そうか！美味かったのか！良かったぜ！」

タナトスは感激したのか椅子になっているケールごと私を抱き締めてくる。

私の頭は瞬く間にケールとタナトスの巨乳に埋もれてしまう。

巨乳に感触は気持ちいいが頭の隅々まで張り付いてしまって息をする余裕が無いぞ！

しかも満足に呼吸ができもしない！

「タナトス、君の素直な愛情表現は美徳だと思うけど余り強く抱き締めすぎるとご主人様が本当に天国に逝ってしまう。僕も少々苦しくなってきたよ」

ケールがやや苦しげに言い、タナトスの背中を叩いていく。

私は既に酸欠状態で頭蓋骨に亀裂が生じる寸前になっていた。

「済まないな、ケール。つい嬉しくなったからな」

私への謝罪は無いのだろうか？

まあいい。

苦しかったが、気持ちよかったのは確かだからな。

「ロスト、食べかすが頬についているぞ。今取ってやる…ちゅぱ…れろぉ」

ぐおっ！

クロエがいきなり私の頬に唇を押しつけて舌で舐め取ってきたぞ！

「今のは何だ？」

私は思わずクロエに今の行為について聞いてしまう。

「レテシア様が言ったのだ。顔についている食べ滓は舐め取ることで殿方が嬉しがるのだと。ロストは嬉しくなかったのか？」

「いや、嬉しかった…」

自分の欲望には素直になりましょう。

この期に及んで潔癖ぶるのは女々しいというものだ。

「そうか、お前に喜んでもらえて良かった…」

クロエは嬉しそうな顔をして言ってきた。

普段は凛々しい表情をしているクロエが笑顔を見せてくれて私は思わず微笑んでしまう。

「クロエは御館様にご奉仕しようと思って一生懸命でしたから、夢が叶って喜んでいるのでしょう」

レテシアは娘の成長を喜ぶ母のようにしみじみと語ってくる。

「レテシア様！ロストは御館様ではありません！私はただ…」

「ただ、何ですか？クロエ、ふふっ…」

レテシアは慌てふためくクロエをからかうように聞いてくる。

「素直じゃないね」

「俺のように素直になれよ」

ケールとタナトスもレテシアに釣られるようにクロエをからかっていく。

「ケール殿にタナトス殿まで言うのか！もういい！ロスト、さっさと口を開けろ！食事を早く済ませるぞ！」

クロエは叩くようにして私の両頬を手で挟み込み、唇を押しつけてくる。

照れ隠しのつもりなのか少し乱暴気味にクロエの舌が私の口腔内で動いていた。

「ふぐぅ…ちゅううぅ！」

クロエは食塊を呑み込ませた後、私の舌を唇で加えて引っこ抜くかのように吸引してくる。

私の舌がクロエによって吸われている！

気持ちいいが痛いほどに舌が引っ張られていく。

「ちゅぱ…ふぅ…お前のせいで私はからかわれたのだぞ。身体が動

けるようになったら覚えていろよ」

やっとのことで私の舌は解放されていく。

これはクロエなりのお仕置きだったのかもしれない。

舌が甘く痺れるような刺激の余韻が残っている。

「済まない」

とりあえず私の世話をするためにクロエは恥をかいたのだから謝ろう。

「馬鹿、謝るな…」

クロエは顔を赤くしてそっぽを向く。

「喉をそろそろ潤した方がいいだろう。僕が水を飲ませてあげるよ」

ケールは自分の胸から私の頭を引きはがして自分の方に向けていく。

コップに注いでいる果汁を口内に含んで顔を寄せてくる。

ケールは私の鼻をつまみ、私の顎に掴んで口を開けさせて口づけてきた。

口腔内に果汁が流されていく。

私とケールの唇の間からはあふれ出てきた果汁が顎を伝って流れていく。

「れろぉ…ちゅぱちゅるる」

「ちゅぱあむぅ…ちゅうううぅ」

タナトスとクロエはあふれ出てくる果汁をすくい取るかのように私の顎を両側から甘噛みして吸ってくる。

果汁で濡れていた口の周りが瞬く間に美女達の唾液で塗りたくられていく。

私は三人の美女から熱すぎる接吻を受けて私の男の証は臨界点に達してた。

しかも私の胴体は三人の巨乳に押しつけられている状態だ！

何故、身体が動かないのだ！

それだけが物凄く残念だぞ！

「あらあら、食べさせてもらっているつもりが食べられているようですね、ロスト様」

レテシアは私の様子を愉快そうに眺めている。

「私は後にとっておくことにするわ。せいぜい今の内に楽しんでおきなさい」

アイリは不機嫌どころか何処か楽しむように私の様子を眺めていた。

何だか猛烈に嫌な予感がしてくるな…。

だが、その不安も束の間で三人の唇と舌が私の顔中に張っていき、正常な思考が即座に溶解していく。

もう既に果汁は飲み干して、零れた分も舐め取ってもらったはずだが、三人の接吻はまだ終わらなかった。

その内、クロエは一人抜けていった。

「私はまだお前に全てを捧げていない。だから今はここまでにしておくとする」

クロエは名残惜しそうに私の左大腿から降りていく。

「では、また後で…」

去っていくクロエを見届けながらも意識は瞬く間にケールとタナトスの唇の感触に向けられていく。

「ちゅ…じゃあ、そろそろお返しさせてもらおうかな?」

「ちゅば…そうだな、今度は俺達が食べさせてもらう番だな」

タナトスはクロエがいなくなって空いた左大腿にも跨り、正面に回り込むようにして座ってきた。

「旦那様の身体を貪るのは久しぶりだぜ。歯止めが利かなくなってしまったら止めてくれよ、ケール」

「僕に遠慮することなく存分にやればいいと思うよ、タナトス。ご主人様は少々のことでは壊れても元通りになるからね」

何だか二人とも物騒なことを言ってきているぞ…。

「程々にしときなさいよ。まだ、後がつかえているのだから」

「ロスト様のお身体は動けないことを除けば、丈夫で健康なので心配には及ばないでしょう。これは如何でしょうか、アイリウス殿」

「ありがとう…これは美味しいわね。何という野菜なのかしら？」

「ほうれん草です。栄養がありますからどうぞ召し上がってください」

アイリとレテシアは私の様子を余所にして食事を平和的に取っていた。

一方、私は…。

「さらに引き締まった身体になっているな。さすがは俺の旦那様だ。惚れ惚れするぜ」

「ご主人様の身体はますます食べ応えが出てきて嬉しい限りだ。僕こそ歯止めが利かなくなりそうだよ」

ヴァルキリアを代表する二匹の雌豹が舌なめずりをしながら私の小柄な身体を挟み込んでいく。

そして、無理矢理脱がされて裸になった私の身体を撫で回し始める。

タナトスとケールは実に繊細な手つきで私の身体に触っていき、気持ちよさと悪寒が同時に感じていく。

さらに二人は前と後ろから巨乳を擦り付けるようにして身体を動かす。

「ふふっ、興奮してきているようだね。ご主人様のあそこが激しく自己主張してるのを肌で感じるよ」

「指一本動かせず為すがままに俺に抱きつかれている。くっくっくっ、戦場で旦那様と殺し合った時を思い出してくるぜ…」

そういえば、確かタナトスには戦場で始めてであった頃には鯖折りを食らわされて危うく命を落とすところだったな…。

「僕も初めて出会った時はご主人様の血肉を死ぬほど貪っていたからね。今でもあの味は忘れられないよ…」

ケールとの戦いでも油断したことで危うく食い殺されるところだったのが今でも鮮明に覚えている。

あの時は心的外傷になりかけたほどにケールに恐怖を覚えたからな…。

「まず俺から頂くとするぜ。いいな、ケール」

「お先にどうぞ。その代わり僕の分まで残しておいてくれよ」

「くくっ、前向きに検討してやるさ…」

タナトスは既に私の男の証を食べようと準備していた。

「俺の中でたっぷりと締め付けてやるぜ。覚悟しな、旦那様！はあああああっ！」

うごぉあああっ！

男の証が潰れてしまいそうなほどの締め付けだぞ！

ぐっ、以前よりもまたさらに力が増したようだな…。

「僕はタナトスが満足する間にご主人様の素肌を味わっておくかな、ちゅ」

ケールが私に首筋に唇を押し当ててきた。

「ちゅうううううっ！」

ぬおっ！

肉がちぎれるほどに強く吸い付いてきている！

痛いが、それ以上に気持ちいい感触だ…。

甘噛みされるのとはまた別の快感をもたらしてくるぞ…。

「ちゅば…ふふっ、君の身体中に僕の愛の刻印をつけてあげるよ。ちゅううううっ！」

ぐおおおっ！

ケールは首筋から背中にかけて吸い付いてくる。

まるで私の身体がケールに唇の中へと吸い込まれそうな感じだ。

「こっちを忘れてもらっては困るぜ、旦那様！」

ぬあああっ！

タナトスの下の口が男の証を容赦なく食らってくる。

「身体が動かなくても俺が満足するまで我慢することはできるだろう。途中で萎えでもしたら死ぬ寸前まで搾ってやるぜ！肝に命じて踏ん張りな！」

「それは勘弁し…むぐぅ！」

タナトスが問答無用とばかりに言葉通り口封じのために私の顔に巨乳を押しつけてくる。

「さあ、吸え！俺の胸を吸って精力を付けていけ！」

……。

もはや成るようになれだ！

「ああっ…そうだ！いいぞ！旦那様…はぁ…」

タナトスの恍惚とした声が響いてきた。

「あの苛烈なタナトスが女の声を出すとはね。これは僕も後が楽しみになってきたよ。ちゅう」

ケールはタナトスの様子を羨ましながらも私の肩甲骨当たりに唇を押し当ててくる。

「ああっ！いい！旦那様！もっと…」

タナトスはますます強く私の顔に胸を押しつけてくる。

それに伴って、私の両膝が軋むほどタナトスの両足に挟み込まれ、顎が外れるのではないかというほどに胸を顔に押しつけられていく。

とにかく早くタナトスを伸さなければ私は冗談抜きに窒息死してしまう！

腹上死ではなく、窒息死するのは激しく御免被る！

私は力の限りタナトスの胸に吸い付いていった。

……。

そして、しばらく経って…。

「あああああああああああっ！」

タナトスが絶叫を上げていき、倒れ込むようにして気絶する。

……。

壮絶なる死闘を終えた気がした…。

気絶したタナトスの胸に埋まりながらも安堵のため息をつく。

タナトスは暫く見ない間にまた一段と力が増したような感じだ。

私も何発ほど搾り取られたのか分からないぐらい果ててしまった。

「どうやらタナトスは満足したようだね。次は僕の番だ…」

だが、まだ血に飢えた獣が一匹残っているのだ。

冷静ながらもタナトス以上に貪欲なるケール。

彼女を相手にして私の残り僅かの精力が何処まで持つのだろうか？

気絶したタナトスはレテシアが介抱し、ケールは私を抱き上げて正面に向き合わせてきた。

「今度は僕が君を食らってあげるよ！ううっ！」

ケールはそのまま私の男の証を食らっていく。

うがああっ！

タナトスとは勝るとも劣らない激しい締め付けだ！

ケールの下の口が獰猛に食い荒らしているような感覚がする！

「ふふっ、さすがに歯ごたえがあっていいね。先ほどはタナトスの胸を吸っていたけど、僕は君の胸を吸わせてもらうよ。ちゅううううっ！」

ぬおおあああああああっ！

これは余りにも恥ずかしすぎるぞ！

「ケール！いくら何でも…」

「ちゅぱ…恥ずかしがらなくてもいいよ。男も感じても何らおかしいことではないさ。次の機会には僕の胸を吸わせてあげるから…ちゅううううっ！」

ぬあああああああああああっ！

男の証と胸がケールに貪られていく！

気持ちいいがそろそろ脳の血管が破裂しそうなほどに臨界点に達しているぞ！

「ちゅば！もっと僕に味あわせてくれ！あむぅ！君の血肉は僕を酔わせてしまう！ふぐっ！」

ぎゃあああああああっ！

とうとう噛みつかれてしまったぞ！

ケールはたかが外れたかのように私の胸と言わず、首筋や腹部や脇を貪るように噛みついてくる。

まるで屍食鬼に貪られているような感じだ

私は今やこの世で最も美しい屍食鬼に食い散らかされている。

身体の至る所に血の滲んだ噛み傷が残されていく。

これで私は再び木乃伊男へと転生してしまうのだろう。

とりあえずケールが満足するまで耐えるしかない！

「はぐぅもぐっじゅるじゅるぢゅば！」

ケールが噛み傷から流れている血を貪るように吸ってくる。

どうやら狂戦士だった頃の感覚が蘇ってきているようだ。

「じゅばじゅるじゅるじゅるるるるっ！」

……。

本気で洒落にならない状況になってきたぞ！

レテシアとアイリは優雅に食事を楽しんでいて見もくれていない。

「ふふっ、もっと君を味あわせて…がぶっ！」

ぐあああああっ！

生きる執念を持て！

これは通過儀礼だ！

この快楽補食に耐え切れれば私の精力はまた一段と強くなっていくのだ！

耐えるのだ、ロストよ！

うおおおおおおおおおおおおおっ！

……。

……。

……。

……。

……。

……。

身体中が痛いし、気持ちいい。

どうやら私の生命力がケールの食欲よりも勝ったようだ。

アーテのフレイを受け止める時よりも苦労したのは気のせいだろうか…。

私の身体は血まみれになって干からびていた。

ケールは私を抱き締めたまま綺麗な笑顔を浮かべて寝ている。
狂戦士の本能が完全に満足したのだろう。

「酷い様ね…」

いつの間にかアイリが私を見下ろすかのに近くで立っていた。

「ケール殿はよほどお腹を空かせていたのでしょう。それにしてもさすがはロスト様、御館様に勝るとも劣らない絶倫ぶり。思わず感嘆のため息が零れそうです…」

レテシアは艶めかしい息をついて頬を押さえてくる。
仕草の一つ一つに色気を漂わせるとは恐るべきはレテシア！

「ふふっ、それよりもそろそろ朝のお通じに行きたくなってないかしらね、ロスト…」

アイリは邪悪な笑みを浮かべてくる。
朝のお通じ？
まさか！

「身体が動けないから自力では無理なのよね。レテシア殿、ロストがこれから便を達したいそうよ。介助しなければいけないでしょう」

「そうですね。我慢してしまっては身体に毒ですから。では、ロス

ト様。一緒に連れて行って差し上げます」

レテシアの見た目の儚げな容姿からは想像できないほどに凄まじい腕力で私を担ぎ上げて便所へと向かって行こうとする。

ちょっと待て！

まさかこれから下の世話までされてしまうのか！

せめて専門の介護者にでも頼んで…。

「ロスト様を見ず知らずの他人に触れさせるわけには参りません。それに私は一向に気にしていませんよ。御館様のお世話をしていることが思い出せて寧ろ嬉しいぐらいですから、ふふっ…」

レテシアは艶やかな笑みを浮かべて、私を悠然と運んでいく。

この時ばかりはレテシアの笑みに恐怖を覚えてしまったぞ！

御館様！

レテシアにいったい何処まで仕込んだというのだ！

「後学のために私もご一緒しても良いかしら？」

アイリはレテシアの同行を求めてくる。

「何故、貴様まで一緒に来る必要があるのだ？」

「あら、私もロストのことが心配ですもの。それこそお早うからお

休みまで全てね。悪いかしら？」

やはり貴様は天敵だ！

「では、ご一緒してください。アイリウス殿」

「ご一緒させて頂くわ、レテシア殿」

止めろ！

連れて行くな！

私の男としての、いや、人としての尊厳が！

便所の戸が近づいてくる。

「大丈夫です。私はロスト様の世話が出来ることに誇りを感じてますから…」

非常に嬉しい言葉だが、その代わりに私の誇りが失われてしまうぞ！

「安心してやりなさい。貴方の映像は私の魔法で記憶させてもらうから…」

尚も安心して出来るか！

「往生しなさい、ロスト。私をのけ者にした罰よ。本当に貴方はどうしようもない愚者だわ。……貴方が望めば私もしてあげたのに…」

アイリの最後の言葉は聞き取れなかったが、激しくご立腹なのは理解できた。

おのれ、身体さえ動ければ…。

「では、始めましょうか、ロスト様…」

レテシアが優しげに微笑みながらも私の身体を容赦無く便所へと引きずり込んでいく。

嫌だ…。

嫌だぁあああああああっ！

そして、戸は固く閉ざされていく。

……。

……。

……。

…。

「ロスト様、車椅子の座りましょうか」

私はレテシアによって丁寧に車椅子に座らされていく。

体幹には重傷者の如く包帯がぐるぐる巻きになっている。

「安心しなさい。さすがにこれで貴方を脅迫しようなんて浅ましいことなんてしないわ。私の品性が疑われるしね」

アイリは苦笑して私の肩を叩いてくる。

「だったら何故除いてきた？」

「愚問ね。貴方の全てを見るために決まっているわ」

全てと言っても程があると思うが…。

「人として大切なものを失ったような顔をしていたみたいだけど、本当に大切なものを失ってしまっていたら私に悪態をつく元気すらも無くなってしまうはずなのよ」

アイリは車椅子の後ろから私を包み込むように抱き締めてくる。

「人の英雄はどこまでいっても人でなければならない。神になろうとしてはならない。貴方は人なのよ。どれほど強大な力を持っていても…。だから、貴方が身動きできなくなって心配したと同時に安心もしたのよ。不謹慎だと思うけど…」

「アイリ…」

だから、アイリは私の全てを見たいと言ってきたわけか…。

確かにあの場面を見られてしまえば、いくら神懸かりな力を持っても者でも嫌でも同じ人間だと感じることができるのだろう。

「もう一度言うわ、ロスト。貴方は人よ。どれほど強大な力を持とうとも、泣いたり笑ったりすることが出来る、何処にでもいるような人。だから貴方は飽くまで人として英雄になりなさい。それが貴方が大切に思う者を守る力になるはずよ」

アイリは私の天敵だ。

だが、たまに身に染みるようなことを言ってくるので、ますます持って頭が上がらなくなってしまう。

だがら、アイリは私の天敵だ。

どうしようもなく愛しく感じてしまうような…。

「それでは私はタナトス殿とケール殿を部屋までお送りしてしまいます」

レテシアは含み笑いをして見せながら去っていく。

残されたのは車椅子に座った私とアイリだけだ。

レテシアは気を利かせて去っていたのだろうか。

考えても仕方ない。

アイリは車椅子を動かしていく。

「さあ、部屋に戻りましょう。私が直々に引いてあげるのだから光栄に思いなさい、ロスト隊長」

「はっ、光栄であります！アイリ将軍閣下！」

私はアイリに車椅子を引かれて部屋へと戻っていく。

人として英雄になれか…。

英雄になりたいとは思わないが、人で居続けることは確かに重要なことかもしれない。

私は強い力を持っているが、紛れもなく人なのだ。

だから、人であることを忘れてはならない。

私は馬鹿で臆病で最強で、元平民その他のロストなのだからな…。

……。

……。

…。

「部屋に戻ったら今度は私と一戦交えてもらうわよ」

ここで綺麗に締め括らせてくれない所がやはりアイリが天敵であるが故なのか…。

「いいわね、ロスト」

「はっ、承りました！」

こうして、私とアイリは部屋の中へと入っていく。

……。

さてと、最後の精力を振り絞るとしよう。

だが、ここで燃え尽きるわけにはいかない。

まだ、一日は始まったばかりなのだから…ぬごぁあっ！

アイリは私を乱暴にベッドへと放り込んでいき、飢えた野獣の如く跨ってくる。

「特別に私が奉仕してあげるわ。泣いて感謝しなさい…ちゅ」

アイリは口づけをして仰向けになっている私の身体の上に身を寄せてくる。

「ちゅば…さあ、始めるわ」

アイリは無表情ながらも威圧的な口調で戦闘開始しようとしていた。

やはり燃え尽きてしまうかも…うごおおおおおおっ！

「私を満足させる前に萎えたりでもしたら殺すわよ！」

あぐあああああああっ！

「床の上では人以下のようね！」

ぐほあああああああっ！

「せめて猿程度の力を見せてみなさい！」

ぬがぁあああああああっ！

……。

「愛しているわ、私の英雄殿…」

やはり、アイリは私の…。

……。

……。

……。

……。

……。

…。

燃え尽きる…わけにはいかない。

アイリは満足したのか、部屋から去っていった。

何とか激戦は制することは成功した。

……。

とりあえず、誰かが来くまで待つとするか。

せっかく後五日間はゆっくり過ごせるのだ。

有効活用しなければ勿体ない。

早く誰か来て欲しい。

寂しくてたまらないぞ…。

……。

それにしても朝からかなり精力を消耗してしまったな…。

それだけ刺激的な朝だったということか…。

今日一日果たして私の精力は持つのだろうか？

そこはかとなく不安だな…。

第６５話：贖罪

私は現在、車椅子を引かれて町を散歩していた。

一人寂しく部屋で寝ていた私を呼び覚ましてくれたのはクロエだ。

まさに何百年も忘れ去られた遺産が掘り起こされたかのような感動を覚えさせられた瞬間だった。

今の私は現代に蘇った木乃伊男そのものである。

無論、発掘者に呪いを賜るような物騒な存在ではない。

寧ろ物騒なのは私を木乃伊男にした連中だ。

私はアーテとの戦いで力を使い果たした影響により身体がほとんど動けない状態と成り果てていた。

当然、日常生活を自力で過ごしていくのは困難だった。

そこで介助に身を乗り出してきたのは私と関係を持った美女達である。

だが、朝食の時間に彼女達に食事介助してもらったのが運の尽きだった。

暴走した彼女達との殺人的な快楽地獄を味わった記憶は全身の噛み傷と痣と共に深く刻まれている。

アビスからはやはり治癒魔法を使うことは許されずに全身に包帯ぐるぐる巻きのままで安静にするように言い渡されてしまった。

それにしても怪訝なのはクロエだ。

初めて出会った時から暗殺者の黒装束を身に纏っていたクロエが今は何故か修道僧の衣を着ているのだ。

彼女曰く、アースガルズに多大な迷惑を掛けた贖罪のために着たとのことだが、実際はレテシアから殿方が喜ぶと言われて渋々と着たらしい。

何とも罰当たりな破戒僧である。

それにクロエが僧衣を纏ったからといって私が喜ぶとでも思っているのだろうか…。

私は部屋に訪ねてきた時のクロエの姿を思い返してみる。

……。

悔しいが普段の凛々しい雰囲気を放つクロエが神秘的で荘厳な修道僧の姿で訪ねてきたときは悶絶ものだった。

さすがはレテシア、完全なる熟女の名は伊達ではないようだ。

だが、実際にクロエはアースガルズに申し訳なく思っていることで復興作業の際には率先して活動をする等となかなかに精力的であった。

その精力的な活躍はアースガルズに瞬く間に広がり、黒の聖女として讃えている者もいるという。

黒の聖女がクロエであるならば、白の聖女とはオイジュス様のことだ。

私としては外見はともかく内面はオイジュス様の方が黒いような気がするが、それを言葉にすることは永遠にないだろう。

言葉にしたら最後、世界中に蔓延しているオイジュス様の狂信者共に吊し上げられて救世主も真っ青な盛大なる処刑大会が開催されるに違いない。

処刑大会の主催者はオイジュス様で実行委員長はモーモス、運営はアースガルズだ。

それに最近ではクロエの隠れ狂信者が急速に勢力を拡大しているという不穏な噂が飛び交っている。

ガイア神教はいずれオイジュス派とクロエ派と二分され、宗教改革が成されるとのことが最近の識者の見解らしい。

まあ、それはいくら何でも有り得ないだろう。

ちなみに識者というのはレテシアである。

……。

レテシアが何を企んでいるのかは置いておいて、私はクロエに連れ添ってもらっている。

木乃伊男を介助する黒の聖女。

第三者から見れば、哀れなる子羊に手を差し伸べる慈悲深い聖女だと見えてしまうだろう。

実際、クロエは今の私にとっては聖女だった。

ぶっきらぼうな男口調で素っ気ないように見えて、その実は献身的に世話をしてくれているのだ。

その献身ぶりはアビスやエルに彷彿されるものがあった。

彼女達も苦言や不満を言いつつも世話好きで自堕落な生活を送っていた私には大変有り難い存在だった。

これもレテシアの教育の賜なのだろう。

「何故、みんなは私を聖女と崇めてくるのだろうか？私がこのアースガルズを滅茶苦茶にしたというのに…」

クロエがふとぼやくように最もな疑問を口にしていく。

確かにクロエは神降ろしでアルゴスという最悪の神を召喚したことでアースガルズに甚大な被害をもたらしてしまった。

民は当然、最初はクロエを毛嫌いしていたらしい。

だが、クロエは決して泣き言一つ言うことなく黙々と復興作業を率先して活動していったのだ。

それにしてたった一日でここまで信頼を勝ち得ることが出来るのだろうか？

アースガルズの国民性もあるが、何と我が心の友グレイブ殿が裏で手回しをしてくれたらしい。

美女は人類の宝なのだと公言している生粋の王室御用達の遊び人としてはクロエの状態を捨て置けない事態だと憂慮し、神懸かり的な対応を施したという。

そして、即座にクロエに対して冷たい目で見るものが少なくなっていった。

美女に対する迅速な対応や戦歴といい、まさにグレイブ殿は私にとって酒池肉林の匠と言っても過言ではない存在だった。

グレイブ殿には是非、酒池肉林の世界について師事を仰ぎたいものだ。

「今日はここで子供達に私の笛の音を聞かせる予定だ」

クロエが行き着いた所は大きな古びた教会だった。

そこでは神父と思われる老齢の男とその周りではしゃいでいる子供達がいた。

「これはクロエ様、さあ、こちらへどうぞ。子供達も喜びます」

神父はクロエがいることに気づき、笑顔を浮かべて迎えてくれた。

「あ、いえ、そんなに畏まらないでください。私は…」

「クロエ様、貴女様の経緯は私には分かりません。ですが、子供達が貴女様を笑顔で迎えてくれる。それだけで充分でありましょう。さあ、子供達が首を長くして待っていますよ」

私の頭頂部に熱い滴が落ちてきたのを感じた。

「あ…ありがとう…ございます…」

私はクロエの震える声を聞きながら車椅子を引いてもらった。

……。

……。

…。

「わあ、黒いお姉ちゃんだ！」

「くろえーが来たぞ！」

「また笛を聞かせてよ！」

子供達は無邪気にクロエの元に群がっていく。

「こら、慌てるな。よい子にしていたら聞かせてあげるから。まずはお手玉をみせてやるぞ」

クロエは夢の世界で私に披露してくれたお手玉を子供達に見せている。

お手玉はまるで魔法でも掛かっているかのように軽やかにクロエの手の上で飛び跳ねていた。

どうやら腕はあの頃から微塵も衰えていないようだ。

それにしても普段はきつめの表情のクロエが信じられないほどに慈愛に満ちた眼差しで子供達と触れ合っている。

何という癒される光景だ。

心が洗われていくようだな。

「私はこの教会に勤める神父サラディスと申します。貴方様のことについてお聞かせ頂いても宜しいですかな？」

サラディスと名乗った神父が車椅子で待機してる木乃伊男こと私に話しかけてきた。

「私は…ロース…いや…ロストと申します…」

クロエを優しく出迎えてくれた神父には本当の名を告げた方がいいような気がしてしまったのだ。

「ロスト？貴方様はもしかしてブリュンスタッド王国の英雄ロスト殿なのでしょうか？」

……。

ここは素直に答えるべきところなのか…。

私の名声がアースガルズでどのように伝わっているかを把握していないからな…。

押し黙っている私を見て、神父様は微苦笑を浮かべる。

「あの子供達はヴァルキリアの侵略によって国を失い、両親を失った子供達なのですよ」

神父様はクロエの僧衣を引っ張って遊んでいる子供達を眺めながら話してくる。

「無敵の快進撃で次々と諸国を蹂躙していたヴァルキリアが敗北を喫す歴史的瞬間を実現させたのが、今は亡きブリュンスタッド王国で英雄と呼ばれたロスト殿だったのです。子供達は皆、ロスト殿に憧れて英雄ごっこもしておられるのですよ」

……。

「クロエ様はここに来てまだ一日目ですが、一生懸命に尽くしてくれています。相当に深く暗い過去をお持ちなのでしょう。彼女は御自分を深く責めているように見えます。ですから、ロスト殿、どうかクロエ様のことを見守ってやってください」

「何故、私にそのようなことを…」

神父様は私の疑問に柔和な笑みを見せてくる。

「クロエ様が貴方様の車椅子を引いてる姿が一番献身的に尽くしているように見えたからですよ。きっと貴方様のことが…おっと、これ以上言うのは野暮というものでしょう。さあ、私が引きますのでクロエ様の隣に参りましょう」

「いや、私はこの姿だから…」

神父様は慌てる私に構わず車椅子を引いていく。

「おっ！今度は木乃伊男だ！」

「現代に蘇った悪魔め！このロストが成敗してくれる！」

子供達は口では物騒な事を言いながらも笑顔で包帯だらけの私にじゃれついてくる。

私は子供達に突かれたり叩かれたりもして少し痛かったが、不快に思うことはなかった。

なぜならば、私の名前を使って英雄ごっこをして遊んでいたのだから可愛いものだと思ったのだ。

それにしても私の名声がこんな所まで轟いていたとは…。

自分としては功名を上げたいが為に戦っていたわけではないから複雑な思いだったが、こうして子供達の希望として謳われているのは悪い気がしなかった。

「もうみんな、何やってるのよ！相手は怪我人なんだよ！」

子供達の中で少し大人びたような少女が仲裁に入ってきた。

肩まで伸ばしている薄茶色の髪。

健康的な小麦色の肌。

大人びたように桃色の口紅を塗っている所は愛嬌なのだろう。

胸は年相応に慎まやかな形であり、将来に期待すると言ったところか…。

身体がまだ未成熟だが、将来はきっと美人になることが期待できる少女だった。

「ごめんなさい、包帯のおじさん。私からみんなに言い聞かせておくから。身体大丈夫？」

少女は心配げに私の顔を覗き込んでくる。

「大丈夫だ。それに子供は元気な方がいい…」

「そう、おじさん優しいね。私、包帯のおじさんが気に入っちゃったからお詫びにこれをあげちゃう」

少女が手渡してきたのは不思議な輝きを持つ石が嵌められた首飾りだった。

「これは神様が使っていた何とかという石なんだって。私はもう一個持っているからお揃いだよ」

少女は天真爛漫な笑顔を見せて私に首飾りを付けてくる。

「もし、そのまま怪我を治らないで寂しい人生を送ってしまうのだったら私の所に来てよ。私がお嫁さんになってあ、げ、る…んんんんっ！ちゅううううっ！」

少女は私の両頬に自分の唇をぺったりと情熱的に押しつけてきた。

「ちゅぱ…これがお母さんに教えてもらった口づけだよ。こうするとお父さんも元気になったんだよ。そして、これは…むちゅうううっ！」

少女は今度は私の唇に自分のそれを重ねていく。

「ちゅぱ…愛の契りの口づけね。これでおじさんは私の先約済みだよ。じゃあね！」

少女は子供ながらも妖艶な笑みを浮かべて私の元から去っていく。

……。

最近の子供はどうやらかなりませているようだ。

それに包帯の私を恐れることなくこれほどまで愛情表現を振りまいてくるとな…。

お母さんに教えてもらった口づけか…。

おそらく両親は戦争で亡くなっているのだろう。

それを表面に見せることなく怪我人である私を気遣っていたのだ。

天使というものが本当に存在しているとしたら恐らくは彼女のような子なのだろう。

名前を聞いておけば良かったな…。

「何鼻の下を伸ばしている？」

いつの間にか私の隣には冷たい目で睨んでいるクロエが立っていた。

「全くお前はただでさえ美女が囲っているにも飽きたらず、今度は美少女まで手を出そうとしているのか。いったいお前は何処まで無節操なんだ…」

「私は別に手を出していないぞ…」

クロエは私の服の中に手を入れてある物を取り出していく。

それは私の自前の手鏡だった。

クロエはそれを無言で私の前に出していく。

私の両頬と唇にはそれぞれ桃色の口紅が鮮明に付けられていた。

「随分と情熱的な口づけをされたみたいだな。お前にそんな趣味があるとは知らなかったぞ…」

「だから違う…」

まあ、将来が楽しみだと思うのは確かだがな…。

だが、その時まで包帯のおじさんである私を覚えていることはまず無いだろう。

子供の頃に交わした淡い約束というところか…。

「ふふっ、冗談だ。それにしてもお母さんの口づけか…。私もよくレテシア様にしてもらってたな…」

クロエはレテシアをパラディスムの頭領としてだけでなく実の母親以上に慕っている。

私はクロエの夢の世界に入り浸っていたから如何にレテシアを慕っていたのかが分かる。

それに御館様を実の父親、それどころか一人の男性として愛していたことも知っている。

彼女の介助技術は全て御館様の世話をするためにレテシアに仕込まれていたものだからな。

ん？

クロエが私の首についている物を凝視しているのに気づく。

「それにしても綺麗な首飾りだな。私も一度はこういう物を貰いたいものだ」

クロエは羨ましげに私の首飾りを見てくる。

そうか、クロエも女性だから綺麗な装飾品で着飾りたい願望があるに違いない。

「今度、お前に贈り物を出す」

女性の思いに気を配って贈り物を渡すことを宣言するべきだろう。

「何！それは本当か？本当だな！約束だぞ！破ったら許さないからな！」

クロエが急に機嫌が良くなり、私に抱きついてくる。

「ちゅううううっ！んちゅうううううっ！」

クロエは先ほどの少女がしてくれたことを真似るように私の両頬、少女が口づけた所よりも少し上側に熱烈に口づけてきた。

「ふぅ…お母さんの口づけだ。いいか、約束したからな。じゃあ、子供が待ってるから行ってくる」

クロエは見とれるような笑顔を私に向けて子供達の輪の中へ入っていく。

「お盛んですな。いや、羨ましい限りですね。私も若い頃を思い出しますよ」

神父様は笑顔を浮かべて、私に手鏡を見せてくる。

私の両頬には薄青色の口紅がさらに二つ追加されていた。

……。

私は視線をクロエに向けていく。

そういえばクロエは子供達に笛の演奏を聴かせるのだったな。

子供達に囲まれたクロエは早速笛を取り出す。

取り出した笛は東洋に伝わる篠笛と呼ばれる古楽器だった。

クロエが笛に口を付けた瞬間騒いでいた子供達は静まりかえっていく。

そして、クロエは笛を奏でるのだった。

……。

それは軽快で華やかな音から怒りに満ちたおどろおどろしい音が奏でられていき、さらに悲しげな音色から、それを払拭させるかのような力強い音色と多種多様な響きだった。

通りがかってきた人達も立ち止まり、クロエの奏でる音色に魅了されていた。

古びた教会は今やクロエの演奏会場となっている。

私はかつて初めてクロエと対峙した時のことを思い出す。

あの頃のクロエは闘技場が光に包まれる中で自分だけは光に染まら

ないと言わんばかりに刺々しい雰囲気を漂わせていた。

それが今では、みんなに希望の光を照らすような存在となっている。

「クロエ様は本当に良い娘ですよ。私も四十年前でしたら放っておかなかったでしょうね」

神父様は眩しげにクロエが演奏している姿を眺めていた。

私もクロエが演奏している様子を眺めてみる。

今のクロエは私には些か眩しすぎるように見えてくる。

身体が思うように動けないことで少し卑屈になっているのだろうか？

いや、そんなことを考えてはいけない。

彼女はせっかくみんなと打ち解けてこうして懸命に尽くしているのだ。

私の個人的感情は二の次にしなければ…。

それにしても、私も何か出来ることは無いのだろうか？

『それにしても綺麗な首飾りだな。私も一度はこういう物を貰いたいものだ』

……。

私は隣に立っている神父様を見る。

他力本願になるが、致し方ない。

「神父様、一つお願いしたいことがあるのですが…」

「何で御座いましょうか？」

私は神父様にあることを頼んだ。

……。

……。

…。

「待たせたな、ロスト。あれ、神父様は何処かに行かれたのか？」

演奏が終わって戻ってきたクロエは私の隣に神父様がいないことに気づく。

「ああ。神父様は少し用事があると出て行かれたぞ」

「そうなのか。だったら神父様が戻ってこられるまで教会の中を案内してやるよ」

クロエは私の車椅子を引かれていき、教会の中を散策することになった。

……。

教会の内部はまるで何十年もの前の時代に迷い込んだかのような不思議な空間がそこにあった。

教会には錆びているが、何処か神秘的な雰囲気を漂わせている銅像や古いながらも輝きを失っていない煌びやかな装飾品が至る所に飾っていた。

教徒達が礼拝を行っているのだろうか、賛美歌が玲瓏に響いている。

クロエの話だと、教会は歴史あるものであるらしくアースガルズが建国される以前から建てられたものであるらしい。

だから、アースガルズでは文化遺産として認定されているということだ。

そして、その教会を管理しているのがあの物腰が柔らかな神父サラディス様である。

さらに言えば、オイジュス様が修道僧をしていた頃に師事をしたこともあり、実はガイア神教の中でも地位がかなり高い聖職者でもあるという。

なるほど、確かに金と権力に溺れた似非聖職者とは桁違いの雰囲気だった。

それに私とクロエのやり取りを見ても動じることもなく、大らかに見守ってくれる様子から包容力もあり、まさに徳の高い聖職者だと伺わさせられた。

「ここは暖かい場所だ。私は暗殺者を生業に生きてきたが、こんな

場所で子供達の世話をして生きていくのも有りなのかなと思ってくる…」

クロエは車椅子を引きながらしみじみと語っていた。

「それもいいのではないか。それにお前の笛の演奏は凄く良いものだったし、教会専用の演奏者でもなれると思うぞ」

「それは褒めすぎだ。ただ私は笛を吹くことが大好きだったからな。私が笛を吹くことでレテシア様や御館様、それにアビス様やエル様も喜んでくれたし…」

もしかすると、戦闘技術ではアビスやエルに劣るクロエにとって笛の演奏は唯一誇れるものだったのかもしれない。

それに戦う姿よりも笛の演奏を子供達に聞かせている姿の方が何倍にも輝いて見えていた。

「神父様が帰ってきた！」

「何かお土産を買ってるみたいだぜ！」

外から子供達のはしゃぐ声が聞こえてくる。

「神父様が戻ってきたみたいだから、そろそろ戻ろうか、ロスト」

「そうだな…」

クロエは子供達がいる場所まで車椅子を引いていくのだった。

……。

「こらこら、押さないでください。そんなに慌てなくてもお土産は逃げませんよ」

神父様は子供達に玩具を与えていた。

「ありがとうございます！神父様！」

「私、これ一生の宝物にするわ！」

ぬいぐるみを貰って喜んでいる子供の頭を優しげな手つきで撫でている神父様。

神父様がお土産を子供達に振る舞っている姿を見ると私も混ざりたくなってしまうような気分になってしまった。

「何を物欲しげに見ているのだ？」

クロエがからかうような目で私を見てくる。

「そんなことはないぞ…」

私は照れくさくなってそっぽを…向けなかった。

そう言えば身体がまだ動かないのだ。

「いや、ごめん。お前の気持ちはよく分かる。私もあの中に混ざりたいと思ってしまったからな…」

クロエもまた羨望の眼差しで神父様にお土産を貰っている子供達を眺めていた。

そういえばクロエの幼少時代はアルゴスの事件があってからは座敷牢での生活が中心だったのだ。

あの子供達のように笑顔で誰かに甘える時期がほとんど無かったのだろう。

だから、羨ましいという感情が芽生えてもおかしくはないはずだ。

だとすれば、早く計画を実行しなければな…。

「おや、クロエ様。これから昼食を取るつもりですが、子供達とご一緒にいかがでしょうか？」

「お気持ちは有り難いのですが、私はこれでお暇させていただきます。どうか私の分まで子供達に振る舞ってください」

クロエは神父様の誘いを丁重に断る。

「それは仕方がありませんね。子供達は残念がるでしょうが、私から上手く言い聞かせておきます」

神父様は身体を伸ばしクロエの頭に触れてくる。

体格では老齢の神父様よりクロエが勝っているのだ。

純粋な若者である私よりも頭一つ分背が高いからな。

「神父様？」

クロエはきょとんとした目で自分の頭に手を添えた神父様を見つめる。

「クロエ様、例え、どれだけの善行を積み上げようとも、人の罪は決して消えることはありません。大切なのは罪を犯したことを忘れずに日々精進していくことです。罪を償うことと消すことを混同してはいけません。それに貴女様の身体はご自分だけのものではないのですよ」

クロエは神父様の言葉に雷でも打たれたかのように目を見開く。

神父様の言葉はあの御館様の言葉と少し似ていたのだ。

『クロエ…過ちを…忘れるな…』

『糧にしろ…生きろ…全てを…受け止め…ろ…クロ…エ……』

罪を忘れることなく受け入れて生きていくこと。

神父様の説教と御館様の最後の言葉は類似していた。

神父様とクロエの様子を見て、何かに気づいたのか子供達が駆けつけてくる。

「ねえ、くろえー、一緒に食べようよー」

「そこの包帯のおじさんもついでに誘ってやるぜ！」

「お姉ちゃん、まだ居るんでしょう？」

子供達がクロエの僧衣を引っ張ってお強請りしてきている。

「お前達…」

唖然としているクロエの頭を神父様ば優しげに撫でていく。

「どれほど罪にまみれようとも、こうして貴女様を必要としている人達がいます。貴女様が罪を償おうとして努力した成果なのです。それを無下にすることこそ罪深いものだと私は思います。ですから、どうか貴女様を必要としている子供達にためにもご自愛してください」

「神父様…」

クロエは身体を震わせていた。

「あれ、クロエ泣いているの？」

「どっか痛い所があるの？だいじょうぶ？」

「神父様、お姉ちゃんを泣かしたらいけないんだ！」

子供達は神父様がクロエを泣かしたのだと思って責め立てていく。

「違う！神父様が悪いんじゃないんだ！」

クロエは子供達を抱き締めていく。

「ただ…嬉しく…泣いていただけだ。だから…神父様は何も悪くないんだ…」

抱き締めてくるクロエに無邪気な瞳で見つめてくる子供達。

「そうなの？クロエ」

「だったら神父様に謝らないいけないな」

「ご免なさい、神父様」

子供達は次々と神父様に謝っていく。

「さあ、席に戻るんだ、お前達」

そして、クロエに促されるままに子供達は食卓へと戻っていった。

クロエは子供達が戻るのを見届けて再び神父様の方へと向く。

「神父様、あの…やっぱり食事をご一緒しても…宜しいですか」

クロエの辿々しいお願いに神父様は満面の笑みを浮かべて頷く。

「歓迎しますよ、クロエ様。さあ、ロスト様もどうぞご一緒に食事を頂いてください」

こうして、私とクロエは神父様が振る舞った昼食を頂くことになった。

……。

神父様は私が食べやすいように食べ物を刻んで用意してくれた。

これで私はスプーンで運ばれた食塊を口に含ませてもらうだけで食べれるようになったのだ。

それにしても解せない。

レテシアならば、この方法を知ってもおかしくなかったはずだ。

なぜ、わざわざあのような形で食事介助を行わせたのだろうか？

その理由は何となく予想出来たが、敢えてクロエに理由を聞いてみることにした。

そして、クロエは予想通りに答えを言ってくれたのだった。

「あのようにすることで殿方が喜ぶとレテシア様が仰っていたからだ」

またしてもレテシアなのか…。

……。

まあいい。

今は食事を楽しむことにしよう。

私はクロエに食塊を口元に運んで貰うことで恙なく食事を取っている。

実に平和な食事風景だ。

朝食もこうでありたかったぞ。

快感があるのは良いが、命がけにまで発展してしまうのでもう一度経験したいかと問われれば、即答できないものだ。

夕食や明日の朝食もこうして平和的に食事を取らせてもらうことを私は固く誓った。

「包帯のおじさん、一人じゃあ食べれないの？だったら私が口移しで食べさせてあげようか？」

私に首飾りをくれた少し大人びた美少女がやってきた。

「ねえ、おじさん。私すっごく上手いんだよ…」

美少女はあどけない表情で桃色の唇を舐めて見せてくる。

何が上手いのかは激しく疑問だが、子供の癖にやけに色気あるな…。

将来が末恐ろしいぞ…。

「此奴には私がついているから心配しなくてもよいぞ。お前は自分の食事をきちんと取るのだ」

クロエが私を美少女から庇うようにして立ちはだかっていく。

「クロエお姉ちゃん、ひょっとして嫉妬してるの？」

「なっ！」

美少女の問いにクロエは顔を真っ赤にして硬直していく。

「そんなことはないぞ！此奴は私のただの恩人だ！断じてそんなことは…」

クロエは声が小さくなり、俯いていく。

美少女はクロエの様子に小悪魔的に笑い、私の方に向いてくる。

「そういうことだから、おじさんの世話は私がするね」

美少女はちぎったパンを口に含めて、顔を寄せてくる。

「ふふっ、どうぞ、おじさん。私を召し上がってね、んー」

美少女の桃色の唇が私の口元に近づこうとした瞬間だった。

「ロストの世話をするのは私の役目だ！んんっ！」

クロエは私の顔を強引に振り向かせてぶつけるように口づけていく。

私の中にクロエが咀嚼したパンが押し込まれていく。

「ぴちゃぷちゃちゅるちゅぱ」

クロエは食事介助を忘れたのか無我夢中で私の唇を貪っていた。

まるで自分の所有物だと主張しているかのように…。

美少女は顔を赤らめて私とクロエの様子を見てくる。

他の子供達も唖然として様子を見入っていた。

「ちゅば…ふぅ…」

私から唇を離したクロエは冷静になったのか、周囲を見渡して愕然としてしまう。

「わ、私は子供の前で何て事を…あああっ！」

クロエは顔を覆い、その場にしゃがみ込んでしまう。

……。

さて、この事態にどう収拾を付けたら良いのだろうか…。

そんな途方に暮れていた私と落ち込んでいたクロエに救いの手を差し伸べてくれたのが現代に生きる正統なる聖職者サラディス様だった。

「こらこら、あまりクロエ様をからかってはなりませんよ。彼女とその車椅子に座っている御方は夫婦なのですからね。だから、その御方を世話をするのは妻であるクロエ様の役目なのですよ」

神父様はクロエを暴走させた美少女の頭を撫でながら優しく言い聞かせていった。

それにしても神父様には申し訳ないことしてしまったな。

あの場を乗り切るためとは言え、神に仕える身である神父様に私とクロエが夫婦であると嘘を付かせてしまったのだから…。

「ふーん、そうだったの。でも、不倫とかも有りかも…」

神父様に説教されたにも関わらず堪えている様子はなかった。

それどころか新たなる決意に燃え上がっている等と悪化したような感じでもあった。

それにしても不倫なんて言葉を何処で学んだのだろうか？

本気でこの子供の将来が心配になってきたな…。

クロエはまだ俯いてぶつぶつ何かを言っている様子だった。

「申し訳有りません、ロスト様。クロエ様もあのご様子なので、宜しければ私が食事介助を致しましょうか？」

「宜しくお願いします…」

男の世話になるのは大嫌いだが、神父様ならば抵抗は無く御厚意を頂くことが出来た。

これも神父様の人徳なのだろう。

クロエには悪いが、食欲には勝てないのだ。

それに…。

「お姉ちゃん、元気だして」

「ほら、姉ちゃん。ウインナーだよ」

「旦那を大事にしてやれよ、クロエ」

クロエは子供に差し出されたウインナーを頬張りながら涙を流していた。

「ありがとう…もぐもぐ…お前達だけ…むぐむぐ…私の味方だ…ごっくん！」

どうやら上手く子供達に慰められているようだ。

しかし、大人の美女が子供達に慰められている光景はなかなか貴重な場面だ。

美女は何をやってもそれなりに見栄えがある良い見本だと記憶に留めておくことにしよう。

……。

……。

…。

そして、昼食が終わり、教会からいよいよ立とうする時がきた。

今は昼食の時間なのか、誰も通りがかる人はいない。

「またな、姉ちゃん」

「くろえー。今度も遊んでねー」

「旦那と幸せになりな、クロエ」

子供達は笑顔で見送りに来てくれている。

「良い子に…ぐずっ…してるんだぞ…」

クロエは涙ながらも応えていた。

一方、私は神父様からある物を頂き、密談をしていた。

「またお越し下さい、ロスト様」

「有り難うございます、神父様。それと申し訳有りません。私とクロエが夫婦であると嘘を付かせてしまって…」

神父様は動かない私の手を優しく握ってくる。

「私は嘘を付いたつもりはありませんよ。本当に長年連れ添った夫婦のようにも見えましたからね。それに貴方様が嘘を真にすれば万事解決です」

嘘を真か…。

確かにそうなれば万事解決だ。

「改めて有り難うございます、神父様」

「汝にガイアの加護が有らんことを…。御健闘をお祈りします、ロスト様」

私と神父様の密談が終わった直後にクロエが駆けつけてくる。

「ごめん、待たせてしまったか？」

クロエはすっかり元通りの状態に戻っていた。

子供達に慰められたお陰なのだろう。

私は安堵しようと思った矢先のことだった。

「包帯のおじさん！」

「ぬっ！」

あの問題の美少女が私の元に駆けつけてきた。

クロエはまるで宿敵に出くわしたかのように油断無く身構えていく。

子供相手に暗殺者のように身構えるのはどうかと思うぞ…。

「おじさん、また遊びに来てね！んちゅうううっ！」

「あああああっ！」

美少女は私の唇を貪るように口づけてきた。
隣ではクロエは美少女の行為に驚きの声を上げている。
「あむぅれろぉぷちゃ」
ぬおっ！
舌まで入れてくるとはいったい何処で覚えたのだ？
……。
「ちゅぱ…ふぅ…次はもっと凄いことをしてあげるよ。また来てね、おじさん…ふふっ、じゃあね！」
美少女は唖然としているクロエに勝ち誇ったような笑みを浮かべて去っていく。
神父様も苦笑しながら一礼して、美少女を追うようにして去っていた。
それにしてもあの美少女の名前を結局聞けなかったな。
まあ、あれほどの個性的な美少女だったのだ。
いずれまた逢うことがあるだろう。
それに将来どんな美女になるのかも楽しみだからな。
「ロスト…」

クロエが地獄の底から這い上がった亡者のような暗く威圧的な声を出してきた。

せっかく綺麗にお別れする場面を壊されてしまったのだ。

子供相手に怒るわけにはいかないから私に八つ当たりする算段なのだろう。

だから、私は保身のためにも予定よりも早く切り札を出すことにした。

「クロエ、車椅子の物入れに入っている物を取り出してくれ」

「いきなり何のつもりだ？」

クロエは私の突然の指示に訝しげに思っている。

「いいから取り出せ」

「わ、分かった。ん？これは！」

取り出した物は青色の宝石をつけた首飾りだった。

クロエば驚いた顔で私を見つめてくる。

「神父様に頼んで密かに買って頂いたのだ。本当は直接買いたかったが、私はこの状態だからな…」

クロエが笛の演奏している最中に私は神父様に頼んで首飾りを買っ

てもらったわけだ。

神父様も子供達にお土産を買う予定だったので快諾してくれた。

そして、神父様は子供達の土産と共にクロエへの贈り物も買いに出ていき、私とクロエは神父様が帰ってくるまで散歩するという形になったのだ。

私は真相を告白したが、クロエは沈黙したままだった。

もしかして黙っていたことに怒りを覚えてしまったのだろうか？

「黙っていたことに腹を立てているのか？だったら済ま…むぐっ！」

クロエは無言で私の頭を抱え込んで抱き締めてきた。

「ありが…とう、こんなに感激したことは…今まで無かった…」

……。

「これは私の…一生の宝だ！ありがとう！ロスト！本当にありがとう！」

かつて無いほどの力で私の頭を抱き締めてくるクロエ。

息苦しいがそれ以上にクロエの愛情が染み渡ってくる。

窒息死までに至らないだろう。

そう信じて抵抗することなくクロエの抱擁を黙って堪能するのだっ

た。

……。

……。

…。

クロエは少し落ち着いたのか抱擁を解いてきた。

私の呼吸はぎりぎりまで持ったようだった。

クロエは私の両頬に手を添えて、潤んだ目で見つめてくる。

「私は今日という日を決して忘れない。ありがとう…ちゅ」

私の唇にクロエのそれが包み込むように重ねられていく。

「ん…」

クロエは唇を重ねたまま動かなかった。

……。

暫くしてクロエは唇を離し、艶めかしくため息を付いてくる。

「これはお母さんの口づけなのか？」

「分かってるだろう？愛の契りの口づけだ。これ以上言わせるな…ちゅ」

クロエは黙らせるかのように再び口づけてくる。

「ちゅぱちゅちゅ…ちゅうううう…ちゅぱちゅう」

唇と言わず、私の顔の至る所に接吻の雨が降らせていく。

「ちゅぱ…ちゅ…ちゅちゅ…ちゅぱちゅば…ふぅ…私は子供に負けるつもりはないからな…ちゅううっ」

どうやら先ほどの美少女の行為に対抗するかのように接吻の嵐をお見舞いしているようだった。

クロエの唇で私の顔が舐め溶かされているかのような心地良い快感があった。

私の顔はもうクロエの薄青色の口紅で真っ青になっているだろう。

木乃伊男だから案外違和感がないのかもしれないな。

それにしても今が昼食の時間帯で良かったものだ。

客観的に見れば、修道僧が木乃伊男に求愛している場面に見えてしまうから、有らぬ誤解を受ける危険性がある。

この運の良さは神父様の施してくれたガイアの加護によるものだろう。

あの神父様はまさしくアースガルズを代表する聖職者だ。

オイジュス様も良い師に恵まれたものだ。

彼女が聖女と讃えられるのも神父様のお陰に違いない。

私も心入れ変えて今後はガイア神教のためにお布施を出すとしよう。

「ちゅぱ…ふぅ…これであの子供に勝ったぞ…」

クロエはようやく満足したのか、接吻の嵐が収まった。

私の顔はクロエの唾液でべとべとだった。

そこまでして、あの美少女に対抗したかったのか…。

クロエはとんでもなく負けず嫌いらしい。

「そうだ、レテシア様からも許可を頂いていることだし、この首飾りのお礼に私からも取って置きの事を教えてやるぞ」

どうやら首飾りのお礼としてクロエは私に何かを教えてくれるようだ。

レテシアの名が出た時点で激しく不安なのだが、クロエの御厚意を無下にするわけにはいかないだろう。

「ロストは私の夫になるのだから、あれを教えても問題無いだろう」

クロエは嬉しげにそう言って、車椅子を引いていく。

神父様、どうやら貴方様が仰った嘘はそう遠くない未来に真となり

そうです。

それにしてもレテシアから許可をもらい、取って置きのことを教えるとはいったい何のことなのだろうか？

まあ、いくら何でも命の危機に晒されるものではないだろう。

さすがに今の状態で絶体絶命の状況に陥れば、横道に逸れることなく死者の国へと直行することになるのは間違い無い。

頼むからそんな最悪な展開になるような物騒なことを教えないようにして欲しいぞ。

アーテから猶予を頂いた五日間の内でまだ一日目の昼間なのだ。

切に平和に過ごしたいと願っているのだ。

これ以上の厄介事は断じて避けたい！

……。

だが、私の切なる願いは斯くも空しく踏みにじられることになっていく。

クロエから教えてもらうあることがまさか今の世界情勢を激変させる事件を勃発させる引き金になるとはいったい誰が予想できようか？

平穏に過ごせるはずの五日間がまさか私の果てしなき生き残り合戦に塗りつぶされていくことになってしまうとは夢にも思わないだろう。

そして、今まで止まっていた歯車の全てが一斉に回り始めていくのだ。

目眩がするほどに激しく、全てを巻き込むかのように…。

第６６話：神の恩恵

クロエは意気揚々に車椅子を引いている。

いったい何を私に教えてくれるのだろうか？

激しく不安だが、楽しみでもあった。

まあ、少なくとも酒池肉林が実現させる百の方法等という類ではないのだろう。

それについてはグレイブ殿にご教授を願えばいいことだからな。

「よし、ここでいいだろう」

車椅子は止まり、私は周囲を見る。

そこはモーモスと蜜月を過ごし、アーテとの約束の地である森だった。

何だか異様に嫌な予感がしてきたな…。

この場所はモーモスと情事をしたこと以外で良い思い出は一つも無かった。

モーモスとの浮遊大陸での死闘、アーテとの疑似世界でも終末遊戯。

いずれも寿命が縮むどころか生涯を終えてしまうには充分すぎるほどの過激な出来事だった。

私にとっては曰く付きの場所なのだ。

とりあえず、クロエが何を教えてくれるのかを確かめねば何も始まらないな…。

「クロエ、私に何を教えてくれるのだ？」

私が訪ねるとクロエは得意げな笑みを浮かべてくる。

「ロスト、お前は非常についているぞ。なにしろパラディスムの秘中の秘を伝授してやるのだかな」

パラディスムの秘中の秘か…。

物凄く物騒なものである予感がしてきたぞ…。

「聞いて驚け。それは…」

「それは？」

クロエは勿体ぶるように一息つく。

……。

「神降ろしの秘技だ！」

……。

何ですと？

私は神降ろしでの忌まわしい思い出が走馬燈のように蘇ってくる。

……。

アルゴスに触手で陵辱されてしまったこと。

アルゴスの夢の世界でレテシアの神降ろしの戦闘形態でほぼ全殺しにされてしまったこと。

アルゴスによって自分の恥ずかしい思いをクロエに告げてしまったこと。

……。

神降ろしで良い思い出は一欠片も無かった。

寧ろ自分の消したい過去が大幅増加したことぐらいだ。

「夕食はほうれん草が食べたいものだ」

とりあえず夕食のことを考えようか。

「おい！何無視している！神降ろしの秘技だぞ！凄い秘技なんだぞ！」

「黙れ、神降ろしでこの国が滅茶苦茶になったのを忘れたのか？」

クロエは口を閉じて俯く。

そうだ、神降ろしなんて禄でもない秘技だ。

そんな秘技を私に体得させるとはクロエはいったい何を考えているのだろうか？

「確かに私が降ろした最悪の神アルゴスによってアースガルズは被害を受けてしまった。けど、それは私が未熟だったからだ。私は御館様に気に入られているアビス様とエル様に嫉妬していた。だから、あのような醜い神を呼び寄せることになってしまった…」

元気だったクロエが急に落ち込んでしまった。

私は掛ける言葉が思いつかなかった。

だが、仕方ないことだ。

神降ろしは自分に神を宿らせて人を越えた力を発揮させる人外の秘技。

悪魔の秘技と言っても過言ではない代物なのだからな…。

「それに神降ろしを行えば、その神の加護によってロストの身体が全快すると思ったから…」

……。

なるほど、クロエは私の動けない身体を思って神降ろしの秘技を教えようとしたわけなのか…。

私は俯いているクロエを見る。

身体さえ動ければ抱き締めたり頭を撫でたり等して慰めれるのだが…。

自分の動けない身体に口惜しさを感じてしまう。

仕方ない。

甘すぎると思うが、クロエが元気を出させるためにも提案を受け入れよう。

それにクロエが教えたことで私の神降ろしが成功すれば、自信も付くことだろう。

どんな神が降りてくるかは分からないが、問題無いはずだ。

何しろ私は破壊神アーテーをも制することが出来たのだ。

アルゴスのような三流の神や少々力のある程度の神が降りてきても恐れるほどでもない。

身体は動かないが、魔力だけならば好き放題行使できる。

今の状態でもタナトスやケール級の実力者ぐらいならば、後れを取ることはない。

根拠はないはずなのに何故か、出来てしまう気がしてくるのだ。

私は少し自惚れてしまっているのだろうか…。

油断は常に死と隣り合わせだ。

……。

とにかく気合いを入れていくとしよう。

万が一の時は他力本願になってしまうが、アーテを何とか呼んで協力を仰ぐとしよう。

それにしてもクロエを元気づけるために少々度が過ぎているのかもしれない。

考えることは色々有るかもしれないが、もし、神降ろしが成功して身体が動くようになったら儲けものだ。

そうだ、私は身体を動かせるようになりたいためにクロエに神降ろしの秘技を教えてもらうようにせがんだことにするのだ。

そうすれば最悪の場合、私が責任を取ることになる。

「クロエ、神降ろしの秘技を教えてくれ。私は早く身体が動けるようになりたい」

クロエは縋るような顔で私を見つめてくる。

「本当にいいのか？」

「私は早く身体が動けるようになって、美女を自分の手で抱きたいのだ」

ここは敢えてふざけたことを言ってクロエの調子を取り戻させるのもいいだろう。

「動けるようになったら私も抱きたいと思っているのか？」

なぬ。

そこで真面目に返してくるとはな…。

ここはどう答えるべきだろうか？

いや、これは期待しているのだ！

これで失望して神降ろしの話が無かったことになるのであれば、それはそれで良い。

物騒な秘技を教わらなくなるだけだ。

だから、私は自分の欲望に従って正直に答えるぞ！

「お前を抱きたいと思っている。だから、早く動けるようになりたい」

……。

クロエは驚いたかのように見つめ抱き締めてくる。

「クロエ…」

「私もお前に抱かれたいと思っている。だから、早くお前の身体が

動けるようになって欲しい…」

私は暫くクロエに抱かれるがままになる。

……。

そして、クロエは私から名残惜しげに離れていき神降ろしについて説明してくるのだった。

「神降ろしは言葉通り、神を降ろす術だ。神を自分の身体に宿し、人を越えた力を発揮させることが基本である。だが、別に自分の身体に宿さなくても相棒や使い魔のようにして、共に戦うことも可能だ。他にもレテシア様のように神の力を武具に変換させて利用する手もある」

……。

「降ろせる神は術者の気質、力、波長、様々な要素が含んでくる。簡単に言えば、邪なことを考えている術者だったら邪悪な神を、清らかな心を持つ術者であれば、聖なる神が呼び寄せれるということだ。私の場合、あの頃は嫉妬心や功名心にあったためアルゴスのような邪悪な神を呼び寄せてしまったけど…」

なるほど、術者の力量と性格に反映された神が降ろされるということなのか…。

クロエの場合は御館様に認められたいという焦りからアルゴスという醜悪な神を呼び寄せてしまった。

レテシアは確かゲーラスというあの鬼のように恐ろしい形相の鎧の

神だった。

あれがレテシアの思いに反映した神だというのか。

いつも笑顔を絶やさないレテシアの裏の顔が垣間見えた気がした。

……。

あまりレテシアを怒らせないようにしよう…。

「そして、降ろした神を使役する方法は三種類ある。一つは自分の身体に宿して力を高めること。二つ目は神の力を物質化、レテシア様のように武具に替えて使用すること。三つ目は従者として戦わせること。けど、これは好きに出来るわけではない。神の能力にもよるが、何よりも術者の技量がものをいう」

……。

「一番術者にとって負担が少ないのは神を身に宿す一つ目だ。二つ目は神の力を実際に現世に呼び起こすものだから術者の膨大な魔力、もしくは生命力を要することになる。三つ目は限りなく神の元の姿に近い形で現世に呼び起こすため、人の身で有り得ないほどの莫大な力が必要となってくるのだ。実際に三つ目を行使できたものはパラディスムの歴史上一人もいなかった」

「つまり、パラディスムは二つ目の力を行使することがやっとだということなのか」

クロエは私の質問に無言で頷く。

「ほとんどの者が私と同様に神の力を宿して戦うことが主流だった。二つ目の力を扱えるのはレテシア様を初めとして、御館様、アビス様、エル様の四人のみだった。実力が足りない者だと私のように神を宿すどころか神に乗っ取られてしまい、自我を失っていく者もいた…」

まさしくそれでパラディスムの悲劇が生まれたということか…。

クロエも苦しげな表情をしている。

彼女は自分の神降ろしの力で御館様を亡くしているのだ。

その思いは計り知れないものだろう。

「そこで少し話が変わるが、パラディスムは暗殺集団として世界に知れ渡っている。けど、本質は実は少し違う。私達パラディスムは鬼墜ちを狩っていたのだ」

鬼墜ち？

初めて聞く単語だ。

「それは具体的にどういうことだ？」

「鬼墜ちとは神降ろしに失敗して神に身体を乗っ取られてしまった者、つまり、神武闘式で私のような状態になってしまった者のことだ。パラディスムはそういう輩を鬼墜ちと呼んでいる。そして、私達はそんな鬼墜ちを狩る。いわゆる鬼狩りがパラディスムの使命だったのだ」

まさか暗殺集団と呼ばれたパラディスムが実際は鬼墜ちになった者を狩ることが使命だったとは…。

それが何故、暗殺集団と呼ばれるようになったのだろうか？

「何故、暗殺集団と呼ばれてしまったのだ？」

「鬼墜ちとは大体が時の権力者もしくは軍の将校が多かったからな。鬼墜ちとなった要人達を狩っていく内にパラディスムは世界に名を轟かす暗殺集団となったというわけだ」

神の力を利用する悪人共を狩っているのに正義の味方どころか暗殺集団呼ばわりされてしまったということか…。

何ともやりきれない話だな…。

「歴史上で英雄や暴君と呼ばれた者のほとんどは神降ろしの術者だったと言われている。高名な預言者や巫女、占術師が行った神のお告げや未来を予知する能力もまた神降ろしの力を行使していたらしい」

まさに人類は神の恩恵を至る所で受けていたということか…。

それにしても英雄と呼ばれた者のほとんどが神降ろしの秘術が使えたわけなのだな。

……。

ふと私は思った。

もしかしてアーテの親友である、あの彼女とやらも神降ろしをつかえていたという可能性があるのか？

……。

駄目だ！

今そんなことを考えてはならないのだ！

下手すると世界が改変されてしまう恐れがある！

「どうした？顔色が悪いぞ」

クロエが心配げに私の顔を覗き込んでくる。

「大丈夫だ。問題無い…」

私は深呼吸してざわめいた気持ちを落ち着かせる。

今はクロエから神降ろしの詳細について話をしているのだ。

あの彼女のことは考えないようにしよう。

「パラディスムは初代御館様が世を乱す鬼墜ちを討ち取るために創設したもので同時に神降ろしの資質があるものを集めて、戦闘訓練を施し、神の力を悪用しないように教育していく養成所でもあったわけだ」

これでパラディスムの全貌はほぼ把握したわけだ。

要するにパラディスムは世界が思っているような暗殺集団では無く、人知れず悪人を始末してきた必殺処刑人ということなのだな。

だとすると、もう一つ気になる点があった。

「エルとアビスがヴァルキリアに潜入したこともヴァルキリアに鬼墜ちになった何者かがいるということなのか？」

「鬼墜ちかどうかは分からない。だが、あの明らかに自然の摂理を越えた力を持つ狂戦士といい、人の手では到底行使できないような技術が使われていることに頭領を初めとするパラディスム上層部が不審に思ったわけだ。だからこそ、里で一番の使い手であったエル様とアビス様が派遣されたとのことだ」

てっきりヒュプノスが鬼墜ちしているのだと思ったが、そこまでパラディスムは把握していないということなのか。

「神降ろしができる神にも格というものが存在している。アルゴスのような下級神や中級神、そして、上級神。さらに神の中の神と謳われる原初神が存在している。ちなみにレテシア様が行使したゲーラスは中級神だ。そして、人が従えることが出来るのは中級神までだと言われている」

「ゲーラスの力はどれほどのものなのだ？」

人が従えることが出来る神が中級神で限界だというならば、それがどれほどのものなのかが気になるところだ。

あの下級神と呼ばれたアルゴスでさえもアースガルズに甚大なる被害をもたらしたのだ。

中級神であるならば、国の一つや二つを軽く滅ぼせる力はあるのだろう。

「レテシア様の使役するゲーラスは中級神の中でも最強の部類に属すると聞いたことがある。おそらく、その気になれば、単体で国を攻め落とすことは容易いのだと思う。下級神だったアルゴスでさえもそれほどの力を持っていたのだからな…」

中級神はやはり一筋縄ではいかないほどに強大であるらしい。

ならば、それのさらに上位に当たる上級神や原初神はどれほどの力を持っているというのだろうか…。

「上級神や原初神については何か知っていることはあるのか？」

「レテシア様が使役しているゲーラスの話によると自分は中級神であり、その上に上級神と原初神が存在していると聞いただけだ。その詳細については謎に包まれているらしい」

確かに上級神や原初神を誰も見ていなければ、詳細は分からないだろう。

「その代わり、下級神についてはいくつか分かっていることがある。まず一つは下級神は動物の類が多いとのことだ。これはアルゴスがその類に当たるだろう。二つ目は元人間が神格化した存在もいると言われている」

元人間が神格化だと？

「人が神になれるというのか？」

「これも宗教でよくある話だ。生前に善行を重ねて神の加護が得られた者が死後、神として讃えられるという話は有名だろう」

救世主の話のことを言っているのか？

その物語はある男が全人類の罪を背負い、髑髏の丘で処刑されたという人類最大の悲劇として語り継がれているものだ。

だが、処刑された男は奇跡の復活を遂げていき、永遠なる存在として人々に崇められるらしい。

「人から神になった者は実際にいるのか？」

「ゲーラスは確かにいると言っていた。だけど、実際には見たことが無いとも言っていた。一応、人から神になった存在は便宜上下級神と呼ばれているが、少なくとも下級神を越えるほどの力を持っているらしい。だから、並の人間では使役できないほどに強大であることから実際に見たことは無いのだということだ」

とりあえず神降ろしについては大体分かった。

下級神か中級神かはともかく扱いやすい神が使役できれば良いと思う。

アルゴスのような醜悪な神は論外だ。

下級神は動物の類が多いらしいから出来れば中級神で容姿が絶世の美女であったらいい。

さらにお早うからお休みまで甲斐甲斐しく世話をしてくれるお淑やかな女性であれば尚も言うことは無し！

「とりあえず、神降ろしの仕組みについてはここまだ。後はやり方だが、そんなに難しいことではない。ただ全力で魔力を込めて念じればいいだけだ。そして、魔力に引き寄せれた神と契約をすればいい。ただし、込める魔力が少なければ神を引き寄せることはできない。その点ではロストは大丈夫だろう」

「待て、それでは魔力が高ければ誰でも使えるのではないか？」

もし、魔力が高いことが条件というのであれば、私が関係を持っている全ての美女が神降ろしを使えることになってしまう。

それではパラディスムの秘技とは言えないのではなかろうか。

「無論、神降ろしの秘技が使えるようになる条件はまだある。神を呼び寄せるほどの魔力があること以外には神あるいは神降ろしの術者の承認が必要となる。それについては私が承認するので問題は無い。後もう一つは神の中には試練を下す者もいて、それに合格出来なければ、契約が出来ないこともある」

神の下す試練か…。

生憎私はアーテに死ぬかもしれないほどの試練を下されたことがある。

正直、試練はもう勘弁して欲しいものだ。

「では、これから承認するぞ」

クロエは私の胸に手を添えてくる。

「我クロエ・パラディスムは汝ロストに神降ろしの儀を受けることを承認する」

ぬおっ！

クロエの掌から何か暖かいものが流れてくるのを感じてくる。

これが承認というものなのか…。

暫くしてクロエは手を離して息をつく。

「さあ、これでお前の魔力に神が反応するはずだ。いいか、くれぐれも邪念を捨てて祈るのだぞ。お前ならきっと良い神に巡り会える…と思う…」

何だ、その僅かな間は！

「分かった、邪念を捨てて祈ってみせるぞ」

そうだ、邪念を捨てて純粋に絶世の美女の神に巡り会えるように祈ってみせる！

私の煩悩に一点の曇りも無いのだ！

「何だか不安になったけど、大丈夫だろうか？けど、レテシア様が許可をくれたから心配はないはず…」

クロエは気分を持ち直すように頬を叩き、私の方に向いてくる。

「よし、これから神降ろしの儀を執り行うぞ。まず深呼吸をして心を落ち着かせろ。頭を空っぽにするのだ」

いよいよ神降ろしの儀が始まるのだ。

流行る心を落ち着かせるように深呼吸をしていく。

クロエとの戦いで神降ろしに関しては嫌な思い出しか無かったが、それ以外で考えれば魅力的に思える能力だと思った。

美女で従順な神と契約できたら私専用のお世話係兼酒池肉林構成員を同時に迎えることが出来るのだ。

そう考えれば、今までの苦労が劇的に報われるような気がしてきた感じがするぞ！

感謝するぞ、クロエ！

お前に最初出会った時は今まで出会った中で一番の不幸体質の美女だと思っていたが、訂正しよう！

お前は私に幸運を運んでくれる女神だ！

ガイア神教がオイジュス派とクロエ派に二分したら私はクロエに票を入れてやるぞ！

「これから私が言う言葉を復唱するのだ。火よ、土よ、水よ、風よ、

諸々の全てよ」

「火よ、土よ、水よ、風よ、諸々の全てよ」

私はクロエが唱える呪文を復唱していく。

絶世の美女よ！

私はいと美しき汝が欲しい！

「我が名はロスト。我は汝の器なり」

「我が名はロスト。我は汝の器なり」

お淑やかで家庭的で従順で包容力がある私の理想の美女よ！

哀れなる子羊たる私に愛の手を差し伸べ給え！

「我が声に耳を傾けよ。我は汝の血肉とならん」

「我が声に耳を傾けよ。我は汝の血肉とならん」

色気があって魅惑的な我が儘な体つきならば尚も良し！

私の耳に魅惑的な声で囁き、甘い吐息を吹きかけてくるような妖艶な美女もさらに良し！

ふと教会で出会ったおませな名も知らない美少女のことを思いだしてしまう。

子供ながらも色気を振りまいていて将来が楽しみな美少女。

あの色気が伴った大人な女性でもこの際良しとするぞ！

さらにお淑やかで儚げで慎まやかな女性であればいい！

「神なる者よ！我を求めよ！現世の降り立ち給え！」

「神なる者よ！我を求めよ！現世の降り立ち給え！」

とにかく私の欲望を叶えてくれる美女よ！

我が元へと降り立ち給え！

……。

さあ、来い！

……。

早く、来てくれ。

……。

お願いですから来てください…。

……。

「何も起こらないな…」

「そうだな…」

クロエは気まずそうに話しかけてくる。

邪念を捨てて純粋に煩悩の従うままに祈ったことがいけなかったのだろうか…。

何だか涙が出そうになってきた…。

これでは私はただの痛い人ではないか…。

やはり神相手に高望みしてしまったのが駄目だったのだろう。

まあいい。

失敗したが、私は別に何も失ってはいない。

私には世の男共が羨む絶世の美女が既に沢山いるのだ。

神は私に今ある幸せを改めて教えてくれたのかもしれないな…。

「神降ろしは失敗した。どうやら私には荷が重すぎたようだ…」

「そんなことは無い。もう一度やれば…」

それに私には甲斐甲斐しく世話をしてくれる美女は既にいるのだ。

「神がいなくてもお前が私の側にいてくれる。それだけで充分だ」

「ロスト…」

クロエは私の頭を抱き締めてくれる。

些か臭い台詞を言ってしまったが、確かに私には神がいなくても十二分に女神がついてくれているのだ。

「私はお前の側にずっといるぞ。だから、安心しろ…ちゅ」

クロエは私に洗礼を授けるかのように額に唇を押しつけてくる。

唇の感触に私は全てが報われるかのような心地になってくる。

これはこれで綺麗に話が纏まりそうだ。

今日はクロエと親睦を深めることが出来た。

十二分の成果が得られた一日だったのではなかろうか。

「ちゅば…ふぅ…帰ろうか、ロスト」

私の額にずっと押しつけていた唇を離して微笑みかけてくるクロエ。

「ああ…」

私もクロエに微笑み返し、これから家に帰ろうと思った時だった。

森に住む鳥達が何かを感知したかのように一斉に羽ばたいていく様子が目に留まる。

風がざわめきだしている。

それに身体が何かちりちりしてくる。

これは何かの前兆なのだろうか…。

「ロスト、これは…」

クロエも何かを感じ取ったのだろうか、周囲を警戒している。

まさか、失敗したと思っていた神降ろしの儀が実は成功していたということなのだろうか？

森の木々が揺れている。

……。

いや、地面が揺れているのだ！

クロエは車椅子が転倒しないように支えてくれている。

真っ青だった空が夜になったかのように深い闇に染まっていた。

さらに稲妻が鳴り響いていき、嵐が吹き荒んでくる。

これは天変地異の前触れなのか！

やはりお約束と言わんばかりに綺麗に終わらせてくれるつもりは無いらしい。

だが、同時に私は期待に胸を膨らませていた。

神は私の声に耳を傾けてくれたようだ。

登場する演出としては些か物騒すぎるが、これこそが神が降臨する前触れなのだろう。

「まるで世界全体が震えているかのようだ！これほどのものは今までに前例は無いぞ！」

クロエは前例が無いと言っている。

まさか、禄でもない神が現世に降り立とうとしているのだろうか…。

「降り立とうとしてくる神が一つ、いや、二つ感じるぞ！」

何ですと！

二つの神が私の声に耳を傾けてくれたというのか！

「過去に複数の神を呼び寄せたという術者はいたのか？」

「歴史上でただ一人いたとは伝えられているが詳細は分からない」

とりあえず、前代未聞の出来事なのは確かなのだろう。

いずれにしろただ事では済まないのだろうな…。

「どちらも信じられないほどの力を秘めている神だ。少なくともレテシア様のゲーラスを遙かに越えている…」

ゲーラスは中級神だ。

そのゲーラスを越える力を持っているということは上級神だということなのか…。

「二つの内、一つは中級神以上の力を持っているのは分かるが、問題はもう一つの方だ。正直、恐い。恐くて逃げ出したい…」

車椅子が震えている。

いや、車椅子を支えるクロエが震えているのだ。

……。

またしても不味い事態を引き起こしてしまったようだ。

私はとんでもなく恐ろしい神を二つも現世に寄越してしまったらしい。

さらに呼び寄せた二つの神の内、少なくとも片方がクロエ曰く逃げ出したいほどに恐い存在だという。

平和な日々は斯くも呆気なく崩れ去るものなのか…。

……。

もうこの際だから神とは契約できなくてもいい。

最低限、無事に済めばいいと切に願う。

どうせ無事には済まないと私の百発百中の勘が告げているが、願うぐらいは自由だろう。

さらに願わくば、アルゴスのような下手物の神ではなく絶世の美女の神であって欲しい。

性格は最悪でも容姿が絶世の美女であるのならば、まだ救いがあるというものだ。

最悪な性格と言えば、出会った当初のアーテよりも酷くなければ何とかなるだろう。

そうでなければ、世界は終焉を迎えるかもしれない。

……。

つくづく私は波瀾万丈を司る神に愛されているようだ…。

第６６話：神の恩恵（後書き）

とりあえず二日か三日ごとにこつこつと更新していくつもりです。

作者のこんな自己中でベタな作品に付き合ってくださって感謝の念が絶えません。

いつかノクターンノベルで規制無しの色話でも執筆しようかなと思うこの頃です。

まあ、作者の拙い文章力で実行に移す勇気が湧くかどうか…。

とりあえず、御感想お待ちしています。

第６７話：愚者（前書き）

今回登場する二人のヒロインはどちらもそれなりの経歴の持ち主です。

では、どうぞ。

第67話：愚者

それにしても私の欲望に耳を傾けてくれた酔狂な神が二つもいたとはな…。

いったい何者なのだろうか？

楽しみ半分、怖さ半分と言った思いが交錯していく。

とにかく平和的な話し合いが出来れば良いのだが…。

夜空から黄色の光が私の元へと降り立ってくる。

まずは一人目の神が降臨してきたということか…。

黄色の光は周囲の空間を歪ませるほどに強大な魔力を放出していた。

もしかするとアーテ並の実力者なのかもしれない。

「あの黄色の光を放つ神は恐い方のものではない。だけど、油断はするな。それでも中級神の力は越えているのだ。ひょっとすると上級神なのかもしれない」

クロエが私を庇うように黄色の光の前に立ちはだかっていく。

恐怖に震えながらも私を守ろうとしてくれるとは…。

クロエは私の想像を遥かに越えた強い女性だったようだ。

彼女はもう私の家族も同然の者だ。

身体が動けなくとも家族を守るよう最善を尽くさねば…。

契約を実行するために降り立ってくれたのだろうが、アルゴスのような邪悪な神である可能性がある。

最大限に警戒をもって対応しても尚も足りないぐらいだ。

私は魔力を身体全身にみなぎらせていく。

降り立った黄色の光から人影が見えてくる。

……。

私は言葉を失っていた。

まさかお前が私の声に耳を傾けてくれたのか…。

……。

風に靡いている肩まで伸ばした焦げ茶色の髪。

心が洗われるような澄み切った空を思わせるような青色の瞳。

夕暮れの太陽を思わせるような黄色の口紅。

健康的な豊満な胸と持ち合わせた我が儘な身体。

……。

以前出会った時は血に塗れた古びた鎧と無骨な大剣を持っていた。
今は高位の神官を思わせる青色の法衣を身に纏い、錫杖を持って佇んでいた。

「お前は…」

「知り合いなのか、ロスト」

警戒心を解くことなく神官の女性の前に立ちふさがっているクロエが私の様子に怪訝に思ったようだ。

「クロエ、心配要らない。彼女は大丈夫だ…」

私の涙腺は今や崩壊寸前となっている。

もう二度と会えるはずがない女性が目の前に存在していたのだ。

「久しぶり、ケールは元気にしている?」

神官の出でだちをした美女は涼やかな笑みを見せてくる。

「ああ、元気にしているぞ…」

「そう、良かった…」

彼女は錫杖の音を立てながらゆっくりと近づいてくる。

「まさか、神になっているとはな…」

「アーテが私を鍛えてくれたのよ。あの時の償いをしたいと言ってね。それに私も貴方やケールのように神の血肉を受けし者だったから…」

彼女もまたアーテの血肉が授けられし者であり、私の試練のために利用されてあの地獄の世界に入ったのだったな…。

「今ではアーテに感謝しているわ。私は大切な人を、貴方とケールを守ることが出来る力を手に入れたのだから…」

クロエは彼女に畏怖したかのように道を空けていく。

「私は貴方が呼んでくれるのをずっと心待ちにしていた…」

彼女の青色の瞳から涙が零れている。

「彼女とは知り合いなのか?」

クロエは私と彼女の様子に怪訝に思ったのか、聞いてくる。

「ああ、彼女がいたからこそ今の私がここにいるのだ…」

クロエは私を見て、唖然とする。

「そうか…」

クロエは私に背を向けて、それ以上何も聞こうとはしなかった。

蔑ろにするような形になって済まない、クロエ。

だが、私の迸る激情は止められないのだ。

神官の美女は私の目の前に立ってくる。

「逢いたかったわ、ロスト…」

美女は車椅子に座っている私を覆うように抱き締めてくる。

柔らかな法衣と顔に当たる胸の感触が心地良かった。

「私もだ…」

そして、私は感無量の思いを込めて彼女の名を呼ぶ。

「エリス」

ヒュプノスが行った非人道的な実験の犠牲者であり、死にたがりの狂戦士。

アーテの試練により利用された神の血肉を受けし者。

ケールの掛け替えのない親友であり、絶望していた私を死と引き替えに呼び起こしてくれた女性。

そして、ある教会の歌姫と讃えられていた聖女。

エリス。

私は神となって蘇ったエリスと再会をしたのだった。

……。

「感動の再会に浸っている所済まないが、もう一つの神が接近してくるぞ」

クロエの声が震えている。

もう一つは恐くて逃げ出したいほどにやばい神だと言っていたな…。

「貴方はロストの愛人なの？」

エリスは私を抱き締めたまま、いきなりクロエに問いかけてくる。

かなり高圧的な態度だ。

「いや、違うぞ！私はただの…そう、世話人だ！」

クロエは慌てふためくようにして答える。

「だったら、早く逃げたらいいわ。あれはおよそ人の手でどうこう出来る存在ではないから…」

エリスはクロエから視線を外し、かつて無いほどの暴悪な力を漂わせて接近してくる者に目を移す。

それは黄緑色の光を纏い、目に映る空間全てを歪ませるほどの強大な力を放ちながら近づいてくる。

「命が惜しければ逃げなさい。ロストは私が守るから…」

エリスは私に向けていた慈愛の笑みとは正反対にクロエに対しては冷淡な態度を取っていた。

そういえば私は思い出した。

彼女は確か心を許した相手以外には極端に冷たいのだ。

つまり、エリスにとっては私やケール以外はその他大勢の取るに足らない存在に過ぎないということか。

「そんな…。私だってロストを守ってみせるぞ！お前こそいったいロストの何だ？」

クロエが負けじとエリスに食って掛かる。

そんなクロエをエリスは鼻で笑い、蔑んだ目で見つめてくる。

「私はロストの守護神よ。ロストを守る者は私とケールのみで充分すぎるわ。だから貴方はお払い箱。理解した？」

かなりきついことを言ってのけるものだ。

エリスは私とケール以外にはとことん冷たいようだ。

「何だと！この…」

「来る…」

エリスはもはやクロエに眼中は無いと言わんばかりに私達の前に降

り立ってくる黄緑色の光に目を向ける。

クロエもまた黄緑色の光に目を移して、身体を震わせていく。

光は薄れていき、人影が見えてくる。

果たして神か悪魔か…。

「やあ、君かい？僕を呼んでくれた素晴らしくて食べ応えがありそうな人間は…いや、訂正しよう！愚かで哀れで淫らな雄よ！いや、これも違うかな？強くて我が儘で恐がりでいて狡賢そうな、けれど寂しがり屋な男よ！これが君に当てはまるかな？まあいいさ。それよりも、よくぞ僕を呼んでくれた！僕はガイアだよ！そう、聞いて驚いて欲しいけど、神の中の神、すなわち神の頂点たる原初神とは僕のことさ！ん？驚いて声も出ないようだね。いいよ、その反応、実にいい！僕の気分はまさに心臓破りの如くだよ！何故かって？それを話したら百年も二百年も語り尽くしてしまうことになるよ！愚かで賢い人は言いました。時は金なり、とね！金なんて神である僕には無意味だけど、ついでに言って時間なんて永遠に生きる僕にとっては単なる経過でしかないよね。だけど、限られた時を愚かしくも醜く足掻いて懸命に生きている君達は違う！僕の世間話に付き合うだけで貴重な人生を棒に振ってしまうことになるんだよ！それはいくら何でも酷すぎる！僕は超が付くほどに博愛精神豊かな神なのさ！何たって神の王者なんだからね！いや、ここは神の女王と言った方がいいのかな？女王に跪くが良い！苦しゅう無いぞ！偉そうに言ってみたけど、何か恥ずかしいよね？思わず赤面してしまったよ。だけど、恥ずかしがっては駄目だ。恥を捨ててこそ得られるものがあるのだ！それは何か？何だったけ？もしかすると実は恥しか残らないかもね。ついでに言って恥ずかしい思い出だけが脳に刻まれてしまうよ！けど、それを言ってしまっては全てがお終いだ！これは

大変だ！痛すぎるほどに惨めだよ！ならば、どうする？楽しくて面白くて忘れられないような刺激的な夢を見ていくのさ！憎い奴を殺すのも良し！綺麗な女を犯すのも良し！金と権力の海を延々と泳ぎ続けるのも良し！世界の全てを手に入れて高笑いをするのも良し！苛立たしい思いを晴らすために大量虐殺することも、未来に絶望して全ての摂理、事象、何もかもを壊し尽くして泣き叫ぶことも良きことかな！欲望こそが世界を改革させていく最高の原動力となるのだ！さあ、僕を呼んでくれた君は何を望むのかな？力か？金か？権力か？それとも僕？僕はこう見えて身体には自信があるよ！髪の毛から爪先の至る所全てが超絶的に素晴らしすぎる名器なのさ！僕の美しさに目が眩んで、世界が滅んだことは一度や二度では無い！まさに悲劇だ！もし、歌劇にしたら涙と笑いが絶えない不朽の大傑作になってしまうこと間違い無しだ！何て事だろうか！僕は自分の美貌が恐ろしくも愛しくて仕方がない！これはまさに極刑判決が下されること確実の大重罪だよね。だけど、僕は罪人にはならない！裁判沙汰にも発展しない！無条件で不条理なまでに無罪放免だ！なぜならば、罪と罰を与えるのは神である僕の役目だからさ！不公平だと思う？理不尽だと思ってしまう？思うだけなら自由だよ！無料で無意味でもって無駄だけどね！なぜならば、神とはそういう存在だと僕が全力で開き直ってしまうからだ！仕方ないと潔く格好良く諦めることこそが賢者になる第一歩だよ。いや、この場合は愚者だったかな？さてと、君の名前を聞こうか？君がロストであることは知っているけど、一応形式に拘るのも一興だというものさ。下らないことでも娯楽を求めないと神の仕事は勤まらないからね。前置きが少し長くなったけど、僕は君のような存在を退屈で無為なる時間を掛けて求めていたのだよ。釣った魚には餌を与えないといけないよ。でないと釣り人が餌になってしまう。君は釣り人かな？それとも餌か？僕はどちらでも構わないよ。選択肢は二つに一つだ。これは運命の分岐点だと思って考えてくれ。そろそろ君に言葉を紡ぐ時間を与えてあげよう。このままだと君の命の砂時計がひっくり返ってし

まうだろうからね。それは僕の本意ではない。さあ、遠慮無く話してみたまえ！君の話ならば、世界中の雑音を丸ごと消し去ってでも聞き留めてあげるよ！何たって僕は君に一目惚れしてしまったのだから！理由を説明しろだって？愚問だね！恋は何時だってある日突然の脈絡皆無で不可解なものさ！理屈や辻褄なんて必要無い！考えるよりも感じろだ！それよりも早く僕に愛を囁いてくれ！それとも僕を焦らして楽しんでいるのかな？だとしたら、君は加虐性欲を持つとんでもない変態だ！でも、そんな危ない変態的性欲を持つ君も最高に素敵で不敵だよ！それとも溜まっている？我慢できない？問答無用で順番を飛ばして本番を迎えたいのかい？ならば、性交しようではないか！遠慮はしないでくれ！君の視線は僕の胸に釘付けになっていることは百も千も承知さ！そんなに僕の母性溢れる胸に貪りたいというのか！全く君はとんでもなく助平だね。だけどそんな君を誰よりも愛しているよ。それにしても、これは天変地異を軽く凌駕する程の憂慮すべき歴史的大事件だよ！よもや原初神たる僕が君の愛奴と成り果ててしまっているのだからね。愛とは神でも人でも関係無く等しく盲目の子羊へと変えてしまうものなのか…。さて、今度こそ話を進めようか。ロスト、これが僕の気持ちさ。良く吟味して考えて欲しいね。私と一緒になるか？その成り上がりの神と一緒に世界諸共心中するのか？途方もない愚者でも即答出来る簡単明瞭な選択肢だろう。だから、迷うことは無いよ。僕を選ぶんだ。そして、一緒に面白可笑しく遊んで暮らしていこうよ。きっと毎日が楽しいはずさ…」

……。

とりあえず、疲れた…。

目の前に現れた神はエクリアをも越えるお喋り好きなようだ。

まず、容姿を確認しようか。

全体的に赤を基調とした騎士が脱いでいる時に着ていそうな動きやすさを重視した服装だ。

髪は肩まで切り揃えてた緑色の髪を優雅に靡かせていた。

頭には三角帽を被っており、顔には仮装大会でも被りそうな仮面を付けている。

仮面を付けているので美女かどうかは分からないが、本人曰く傾国の美貌を誇っているらしい。

声質により女性だと分かるが、それ以上に服を破りそうな勢いで飛び出ている巨乳が印象深い。

是非、あの谷間に顔を埋めてみたいものだ。

全体的な印象として遠い昔に流行った二十二枚の絵札からなる占いで零番目の絵札にある愚者の姿を思わせる格好だった。

一言で言えば、彼女は道化師だ。

それも最強にして最悪なる、まさに切り札と言っても過言ではない、道化師にして愚者たる存在。

そして、何よりも重要なのは彼女の名前と神格だ。

彼女は神の中の神と謳われる原初神でもあると名乗っていた。

それにまさか、オイジュス様を初めとしたアースガルズ、いや、世界的に広まっているガイア神教が崇める主神であるガイアだとはな…。

世界中に蔓延しているガイア教徒達が神の実体がこんな逝かれた道化師だと知ったらどう思うやらか…。

オイジュス様やサラディス様が知ったとなれば、即倒すること間違い無しの衝撃的事実だろうな…。

確かなのは熱心なガイア教徒達が想っているような慈悲深い女神とは真逆の存在であることだ。

聞き苦しいまでに長くお喋りしていたが、台詞の端々には破滅的で下品な言葉の数々を並べていたことからまともな思考の持ち主ではないだろう。

おそらく人間が重んじている道徳的観念は全く通じないだろう。

要するに彼女に人間が唱える善悪について語っても無駄だということだ。

行動基準は楽しいか、詰まらないかの清々しいほどに簡単で残酷な思考の持ち主だと思える。

「ロスト、君が考えることは手に取るように分かるよ。そう、僕は無知蒙昧たる諸君が思うような慈悲深い神ではないのだ！楽しければ結構！面白ければ全てを許そう！そういうお気楽極楽愉快痛快な思考の神なのさ！それに人如きが自分勝手に都合の良い偶像を押しつけること自体がそもそもお門違いなんだよ。僕の本当の姿を知ら

ない癖に知ったかぶりで盲目なる子羊の血肉を貪っていく聖職者の皮を被った薄汚い畜生共の醜い生き様を見よ！実に滑稽だ！涙が出てしまうほどに可笑しい！喜劇にしたら史上最低の駄作として歴史の闇に葬り去れていくこと間違い無しだね！そんな醜悪なる愚者共に僕の真実の姿を知られたところで何が変わるのか？予言者を雇うまでもない！空しさを覚えるほどに変わらないはずさ！なぜならば、誰も真に神なんて信じていないからだよ！だから、僕は君達が織りなす愉快で愚かしい群像劇を笑い飛ばしてやるのさ。人の命なんて神に言わせれば、道端に咲いている雑草のようなものだ。誰にも気づかれることなく踏みつけられ、引きちぎられ、枯れ果てていき、犬の糞にまみれても尚しぶとく生い茂っていく無駄に反骨精神豊かで往生際が悪い、そんな存在さ…」

彼女の言葉に否定する要素が見つからない。

私もまたその通りだと思ってしまったからだ。

「原初神だが、何だか知らないけど、貴方は生憎お呼びでは無いのよ。ロストの神には私がなる。貴方のような逝かれた道化師に出る幕は無いわ」

エリスが私を庇うように猛然とガイアを見据えていく。

いくら神へと転生したとは言え、今回は相手が悪すぎる。

「エリス、彼女を余り怒らせるな。あれは正真正銘やばい存在だ」

私はいきり立つエリスを止める言葉を放つ。

今の私に出来ることは言葉でもって彼女を諫めるしかないのだ。

「分かっているわ。あれが禄でもなく危ない神であることはね。でも、女としてはどうして引けない戦いというものがあるのよ。私は決して屈したりはしない。あんな道化師にロストは渡さないわ」

エリスは錫杖をガイアに向けていく。

そんなエリスにガイアは拍手喝采してくる。

「素晴らしきかな！その恐れを知らない馬鹿馬鹿しいまでの蛮勇ぶり！それともただの虚勢なのかな？演技だとしたら目から鱗が落ちてきそうだよ。もしかすると君は演劇の才能があるのかもしれないね。神を廃業して女優を目指したらどうだい？君なら絶対に世界を狙えるよ。何？そんなこと死んでもお断りだって？ならば、死ぬしか道が残されていないよ。エリスと名乗っていたっけ？いと麗しきエリスよ。君の悲しい程までに圧倒的な力の差にもめげずに立ち向かっていく姿勢は認めてあげよう。だが、現実は非情なのだよ。心苦しいが、僕は涙を呑んで君の中に潜在的に眠っている幻想を木っ端微塵に打ち砕くことで再教育をしてあげなければならない。そう、もしかしたら勝てるかも知れないという甘く儚い幻想をね。信じれば成せると思っているのかい？頑張れば奇跡が起こると信じているのかな？もっと分かりやすい例えで言えば、君は鼠が根性出して戦えば、獅子にでも勝てると思っているのか？甘すぎる！青臭すぎるよ！僕の視点から言えば、君はまさに鼠だ！獅子に立ち向かうのならせめて野良猫を食い殺せるようになってからにして欲しいものだね…」

「鼠かどうか試してみるといいわ！ギガ・ウインドウ！」

巨大な竜巻が高笑いをしているガイアを包み込んでいく。

「そこの愛人！早くロストを連れて逃げるのよ！」

エリスは必死に形相を浮かべて震えているクロエに呼びかけていく。

「私が食い止めている内に早く！」

「わ、分かった！」

クロエはエリスの言われるがままに私の車椅子を引こうとする。

「駄目だよ。まだ僕の口説き文句は終わっていないよ、ロスト」

ガイアはエリスが放った竜巻に巻き込まれながらも高笑いをしていた。

「私のギガ・ウインドウをまともに食らわせても笑いを止めることすらできないというの…」

エリスは悔しげに呻く。

「心地良い風を提供してくれてありがとう、エリス。まさに自然の息吹を感じさせるね。だけど、残念ながら心地良い以外何も感じないよ。もしかして君は僕を喜ばせるために清廉なる風の洗礼を送ってくれたというのかい？だったらお礼をしてあげないといけないね。僕はこう見えてもお礼は百倍返しにする主義なんだ。感謝する必要はないさ。僕がお礼をしたいだけなのだからね。だから、僕を恩着せがましい卑しき諸人共と同一に見ないでくれよ。よし、これから本当の神の祝福というものをご教授してあげよう。受講料はもちろん無料だ！なぜならば、僕は博愛主義者だからね！これも僕の高潔

なる奉仕精神というものさ！えっ？謹んで遠慮したい？恐れ多くて受け取れない？それは駄目だよ！神の御厚意は素直に受け取り給え！自然災害になるかもしれないけど、これも運命さ！神の御業だと思って感謝感激感無量で噎び泣くといいよ！」

ガイアを包んでいた竜巻はさらに巨大化していき、エリスの方に向かって迫ってくる。

「くっ！聖なる光よ！ホーリー・レイ！」

エリスの周囲に多量の魔法陣が出現し、閃光を嵐のように放出していく。

アーテのフレイアと似た技だ。

「あはははは！今度は猿真似のつもりかい？ならば、君を鼠から猿だと見てあげよう。おめでとう、エリス。君は最短記録で進化を果たしたんだ。生物学者が泣いて喜ぶような偉業を成し遂げたのだよ！大いに誇ってくれ給え！だけど、悲しいかな。それでも百獣の王たる獅子には遠く及ばないよ。気の棒を使って立ち向かっても足で一撫でされてお終いさ！」

ガイアが放った竜巻はエリスが放つ閃光を呑み込んでいき、ますます巨大化となって迫ってくる。

「それと良いことを教えてあげよう。君の師匠である破壊神アーテーは僕の愛弟子だったのさ。だから、弟子の技は師匠である僕の技でもある。君のその技ホーリー・レイはアーテーのフレイアを基にして、自分用に改良しているようだね。工夫しているようだけど、悲しいかな。哀れなほどに弱すぎるよ。残念だけど、君の放つ閃光

の嵐よりもアーテーが放つ閃光一つの方がまだ威力があるね。君の場合は数撃つよりも一点集中型で放った方が効率が良いと思うよ。以上が僕からの特別講義さ。ん？そんなに教えてくれてもいいのかって？万事大丈夫さ！何処までも奉仕精神豊かな僕だから感謝は要らないよ！ついでにもう一つ教えてあげるよ。元々破壊神の名は僕のものだったのだよ。そう、何を隠そう、アーテに物を壊す喜びや人を殺す楽しみを教えたのはこの僕なのさ！彼女を調教するのは実に楽しかったよ！僕の足に縋り付いて許しを請う姿は身の毛の弥立つ思いだったね。だけど、僕にも加虐性欲の素質があったのかな？泣き縋る彼女を虐め抜く度に背筋が震えるような快感を覚えてしまったよ。それにアーテの支離滅裂な会話も僕が教え込んだものさ。彼女には色んな種類の自分を演じてもらって楽しませてもらったよ。それで痛めつけてあげると演じている彼女によって違う反応して見せてくれるのさ。アーテは本当に僕を飽きさせることがなく楽しませてくれたよ。そして、アーテは私の世界に革命をもたらしてくれたのだ！僕に次々と新たなる性癖を目覚めさせてくれたのだからね！アーテはまさに最高傑作と言っても過言でないほどに素晴らしい玩具だったよ！僕の一番のお気に入りさ！あはははははっ！」

……。

「クロエ、お前だけでも逃げろ…」

「えっ？けど、お前は身体が…」

私はクロエに無言の圧力をかける。

クロエはそんな私の様子を察して引き返していく。

「分かった。だけど、私も一緒に行く。お前を置いて逃げたとなれ

ば、パラディスムの名折れだ」

「済まない…」

私はガイアに応戦しているエリスの様子を見る。

エリスの放つ閃光があえなく竜巻に呑み込まれていき、今でも迫り来る状況だった。

「ロスト、どうして来たの?早く逃げて!あの道化師は本物の怪物よ!」

エリスは防御結界を展開させて、何とか竜巻を食い止めていた。

だが、結界には既に幾つもの亀裂が生じていて何時破られてもおかしくない状態だった。

「これは真打ち登場か?やっと僕の愛を受け止めてくれる覚悟が出来たのかな?それとも僕の魅惑的な身体が欲しくなったというのかい?だったら、いつでも受け止めてあげるよ。君の男の証で僕を貫いてくれ。それで僕は君の物になって万事目出度し、感動の結末さ。終わりよければ全て良しということだね。何だって?泣くのはまだ早いよ?おいおい僕にこれ以上何を楽しませてくれるというんだい?それともまだ出し惜しみしている?美味しい物は最後まで取っておけ?これは一本取られてしまったね。君だけだよ。僕をそこまで焦らしてくれるのはね。他の奴だったら内蔵引きずり出して、畜生共の餌にしてやっているところだよ。ん?それは残酷すぎる?無惨で奇怪すぎて目も向けられない?こんなのはまだ序の口さ。人間の方がよっぽど残忍で野蛮な卑怯者だからね。そう、あの無知蒙昧なる愚者共は僕にはとても真似出来ないことを平然とやってのける品

性下劣にして無能低脳な下等生物なのさ！だが、君は違う！君こそが言葉通り神に選ばれし…」

「黙れ！はあああああああっ！」

エリスの結界を打ち付けている竜巻を私は全身から魔力を放つことで消し去っていく。

「貴様の長話はもう飽きた。それと単刀直入に言おう。私は貴様とは契約しない！」

「ロスト！」

エリスは感極まって私に抱きついてくる。

むぐっ！

「やっぱり私を選んでくれると思っていたわ、ロスト…ちゅううっ！」

エリスは嬉しさの余り、危機的状況を忘れたのか、私の頬に熱烈に唇を押し当ててくる。

私の頬に心地良い感触が伝ってくる。

それに私に魔力が流し込まれている。

エリスは唇と通して、私に力を与えてくれているのか…。

「ちゅぱ…残念だったわね。いと高き原初神ガイア様。それとも哀

れなる振られ道化師とでも呼びましょうか？貴方は振られたのよ。大人しくガイア神教の信者を侍らせてお猿の大将のようになって馬鹿みたいに高笑いをしてればいいのよ」

「言ってくれるね、エリス。なるほど、確かに僕は振られたようだ。だが、一度や二度振られたぐらいで引き下がるほど僕は聞き分けが良くなくてね。その程度で揺らぐほど僕の愛は安くはないつもりだよ。ロスト、君はどうやら徹底的に調教する必要があるようだね。何？そんなの嫌だって？嫌よ嫌よも好きの内さ！アーテも最初はお転婆だったけど、しばらく経てば子犬が尻尾を振ってじゃれつくように従順になってきたよ。君も僕のことしか目に入らなくなるぐらいに変えてあげる！拒否は認めないよ！ロスト、君は僕の物だ！世界の全てを売り渡してでも君を手に入れてみせるよ！そうだ！これは君の愛を勝ち取る大いなる戦いなのだ！あはははははははっ！血が滾ってくるね！破壊神であった頃を思い出すよ！やはり僕は原初神よりも破壊神の方が性に合っているね！欲しければ力付くで奪え！手に入らないのなら壊せ！気に入らないのなら殺せ！詰まらないのなら消し去れ！そして、要らなくなったら全てを無に還せ！だけど、君は特別だ。僕の全てをあげよう。僕の口も乳房も何もかもが漏れなく君の物になるのさ。えっ？恐れ多くて貰えないだって？これは決定事項だ。是が非でも僕の愛を受け取ってもらうよ。それが君の定めだからね…」

ガイアの周囲の空間に亀裂が生じていく。

「ロスト！」

クロエは私の車椅子を支えて、いつでも戦えるようにしていた。

空は硝子が割れたかのように崩れていき、亀裂の先には極彩色の空

間が見えてくる。

「この世界を壊すつもりか！ガイア！」

「あはははははっ！心配いらないよ！君に振られてしまって自暴自棄になっているわけではないから安心してくれ！ただ舞台を変えるだけさ。僕による僕のための神の世界へと君達を招待してあげるよ！」

ふと浮遊感を感じてくる。

上空を見上げると割れた空が近づいてきている。

いや、アーテの時と同様にこの森全体が浮いているのか…。

森全体がガイアの世界へと引きずり込まれているのだ！

「ご免なさい、ロスト。せっかく召喚してくれたのに貴方を守りきれないかもしれないわ…」

エリスは絶望したかのように俯いている。

ガイアの発した暴悪なる力に当てられ、震えてしまっているようだ。

クロエに至っては顔面蒼白も状態に陥っている。

「安心しろ。私がクロエとエリスを守ってみせる」

この身体が動けば、抱き締めて慰めれるのだが、口惜しいものだ。

密かにエリスの口づけを通して回復魔法が掛けられたが、結局は身体が動くようにはならなかった。

クロエとエリスには守ってやると豪語してみたものの実は全く自信が無い。

身体が動けなくとも魔力を発することは可能だが、それだけで勝てるほどあの道化師は甘くはない。

アーテがあの忌まわしい道化師に調教されたと知って頭に血が上ってしまったのが運の尽きなのか…。

頼みの綱のエリスでも全く歯が立たないようだし、絶体絶命の状態と言ったところだ。

せめて、アーテがいてくれればな…。

だが、相手はアーテに心的外傷を植え付けた奴なのだ。

アーテに助けを求めるのも無理というものだろう。

それにしても何て厄介な女に目を付けられてしまったのだ。

せっかくエリスが私の守護神となってくれるはずだったのに何故、こんな物騒過ぎる道化師まで呼び寄せてしまったのか？

いや、実はこれ以上にないほどに理由は分かってしまっている。

念じている途中で教会で会ったあのおしゃまな美少女の小悪魔的な笑みを思い浮かべてしまったからだ。

その時におそらく潜在的にあの美少女を私の者にしたいという欲望が生まれてしまったのだろう。

子供ながら無邪気さと妖艶さを併せ持った美少女への邪な思いがあの破滅的なまでの逝かれた道化師を呼び起こす引き金となってしまったのだ。

私は性格は最悪でも容姿が絶世の美女であるのならば、まだ救いがあると思っていた。

ガイアは仮面を被っているため、美女かどうかは分からないが、あの我が儘な体つきは得も知れない危ない魅力を漂わせてくる。

まるで私を破滅に導こうと誘いかけているかのような魔性の色気を醸し出していた。

確かにガイアの言うように傾国の美貌を誇っているのだろう。

だが、例え絶世の美女であったとしても物事には限度がある。

誘いに乗れば、抜けることが出来ない快楽と苦痛を伴う生き地獄に晒されてしまうことが目に見えている。

正直、モロスが最大級の危険な女であると今までは認知していたが、改める必要がありそうだ。

それとオイジュス様やサラディス様には悪いが、私はやはりガイア神教に帰依することはできない。

今目の前にいる逝かれた道化師のお陰で僅かばかりの信仰心も打ち砕かれたのだからな…。

さて、今の私達は圧倒的に戦力不足だ。

私は今でも身体を動かすことが出来る状態ではない。

さらに神に転生し、アーテに弟子入りして力を付けたエリスが全く歯が立たないときている。

クロエが神降ろしをしたところで状況が一変することも無いだろう。

まさに絶望的状況だ。

……。

これは年貢の収め時なのか？

今度という今度は生き残れないかもしれない…。

あるいは生き残ったとしてもあの道化師の玩具として永遠の生き地獄を味あわされることだろう。

生き残りたいと願うどころか殺して欲しいと願ってしまうほどの残酷な生が待ち受けているに違いない。

私を地獄へ引きずり込もうとしている道化師は狂ったように笑い続けていた。

圧倒的な恐怖と絶望に私は今まさに押しつぶされようとしている…。

第67話：愚者（後書き）

今回、登場した二人のヒロインでエリスの方を覚えている読者様が果たしてどれほどいらっしゃるのか…。

もう片方は作中で主人公を除けば、一二位を争う最強にして、最凶最悪のヒロインのつもりで描写しました。

作者なりに逝かれた感じに描いたのですが、この程度ならいくらでも見たことあるのでしたら、それもいいかと思います。

それと彼女の無意味に長い台詞に辟易とした読者様がいらっしゃるでしょうか？

あるいは長い台詞にうざくなって読む気が失せたのでしたら申し訳有りません。

御感想をお待ちしています。

感想が欲しいです。

だけど、お手柔らかな形で…。

第６８話：黙示録

ガイアが招待してくれた世界は空が極彩色に染まっていた。

周囲には正体不明の建造物が至る所に建てられている。

この世界はいったい何なのだ？

上空に浮遊しているガイアは舞台を紹介する道化師のようにおどけて一礼してくる。

「ようこそ、忘れ去れし世界へ。いや、失われし世界と言って方がいいのかな？まあどうでもいいさ。この世界は君達が存在している世界の遙か昔に存在していた世界だよ。そう、今ある世界の先祖というべき古き良き世界と言ったところだね。あれ？意味が分からないって？そうだろうね。僕がこんな世界に招待しなければ永遠に知ることは無かった代物だからね。そういう意味では君達はついているのかもしれない。君達は考えたことがあるかな？自分達が生きている世界とは異なる世界が実は存在しているかもしれないことを…。普通は有り得ないよね。そんなことを考えるだけで異端審問に掛けられて火炙りに刑に一直線なわけだしね。だけど、実は存在しているのだよ。それがこの世界さ。驚いただろう。うん？まだこんなものでは驚かない？それは困ったな。僕にとって数少ない話題の種だというのにね。だったら素晴らしい悲劇をご披露してあげよう。この僕ガイアの監督、脚本、演出、主演による壮大なる破壊と殺戮の叙事詩をとくとご覧有れ！」

道化師が舞台の開幕を告げ、世界が暗転していく。

……。

視界に映った世界には怯え逃げ待とう人々の姿があった。

建造物の多くは炎上し、荒廃している大地。

「何だ、この世界は？」

クロエは突如変わった世界を前に戸惑っている。

対照的にエリスは苦しげな表情でガイアを睨み付けていく。

「これはこの世界の過去の映像に過ぎないわ。ガイアは私達の戦意喪失を狙って見せつけているのよ。本当に悪趣味な道化師だわ」

エリスはガイアが私達の戦意喪失を狙って見せつけていると言っている。

ガイアはいったい私達に何を見せようとしているのだ？

ふと軍隊とおぼしき者達が空中に浮遊している人影に一斉に魔法を放っていく光景が目に映る。

『何として奴を倒すんだ！愛する家族を守るために！』

『アーガイル軍、スールート軍、ランズベルト軍、全て壊滅しました！』

兵士達が悲痛の声で将校に状況報告している。

『もうここは持ちません！将軍！退避命令を！』

『何処に退避する場所がある？ここで奴を倒さねば、どの道滅びるしかないのだ』

将軍らは沈痛な面もちで上空を見上げている。

ただ一つの人影に幾万幾億もの兵士が群がり、無惨に命の花びらを散らせている光景だった。

『あはははは！君達の玉砕精神には本当に脱帽する思いだよ！だから、敬意を評して、苦しまずに命を散らせてあげよう。僕の慈悲深い心に感謝して泣き叫ぶといいさ。それにしても群がる愚者共を寂しくないように仲良く冥府へと案内している僕はなんて奉仕精神豊かなんだろうか！僕は自分で自分を褒めてやりたいくらいだ！えっ？それは自画自賛ではないかって？それは違うよ。本当なら僕に逆らった愚者共には数え切れないほどの苦痛と絶望を与えてから殺しているはずなんだからね。これは前代未聞とも言える譲歩なのさ。冥府の業火に焼かれながらも彼らは思うだろう。あの時は苦しませずに殺してくれて本当に有り難うございました、とね…』

上空には仮面を血に濡らした狂気の道化師が虫を振り払うように手を振り、兵士達を八つ裂きにしていた。

『くっ！悪魔の道化師め！貴様の仮面を剥がしてやるぞ！おりゃあああああっ！』

軍を率いる斬り込み隊長が果敢に道化師に向かって飛翔してくる。

手には身長を遙かに超える大剣が鈍く光っていた。

『駄目だよ。僕の素顔は心に決めた男以外には見せないことにしているのさ。その点、君は役不足だね。ということで不合格で退散！』

道化師が指を鳴らした瞬間、斬りかかっていた男の身体が風船のように膨張していく。

『あがががっ…お…の…れれれれれ…』

男は怨嗟の言葉を吐き、身体が弾け飛んでいった。

『はい、ご苦労様！一名様冥府へとご案内しますってね！このままだと、冥府は満員になってしまうかも？でも、大丈夫！根拠が無いけど心配無いさ！さあ、みんなでお気楽極に逝こうよ！それ！団体様ご案内だ！あはははははっ！』

道化師は血の雨を降らしながら空の上を軽やかに踊りながら、お手玉を落とすようにして超巨大光球を地上へと放っていく。

数万の軍勢が一瞬にして灰燼と化していき、道化師の笑いが響いていく。

その光景を見て、軍の首脳が恐慌状態に陥っていく。

『まさかラクール王国の英雄バルトス殿が一撃で…もう世界は終わりだ！』

『狼狽えるな！嘆くのは死んでからでも遅くはない！出来ることをやり尽くすんだ！まだ我等には奥の手があるはずだ！』

『まさか、フルンティングを使用なさるのですか？ですが、あれは余りの超広範囲に味方まで巻き込まれる恐れが…』

『あの道化師の周りに私達以外に生存者がいるのか？』

将軍の問いにどの将校も異を唱える者はいない。

『これはもはや種の存続を掛けた戦いだ。我等の命であの道化師を倒し、誰かが生き延びれば我々人類の勝利だ！我等の命を人類繁栄の糧にしてやろうではないか！』

『そうだ！俺達の命で子供達に輝かしい未来を与えてやるんだ！』

『あのふざけた道化師をぶっ殺して英雄になってやろうぜ！』

兵士達は士気を最高潮まで高めて、一斉に上空へと駈け上っていく。

『やっと出てきたね。さて、どんな手品を見せてくれるのかな？僕の審査は厳しいよ。詰まらない魔術だったら即刻退場死んで出直して来いってなってしまうよ。だけど、諸君等の涙ぐましい活躍は決して無駄にはならない。なぜならば、これから僕が制作する予定の舞台演劇の糧になるのだからね。だから、遠慮無く掛かって来たまえ。ほら、ふざけた道化師をぶっ殺したいのだろう？僕の耳は地獄耳さ。だからといって気にしていないよ。ほんの少しだけ怒りで煮えたぎっているけどね。ふふっ、怖がらなくてもいいよ。だからといって特別扱いはしないからね。安心して死んでくれ…』

道化師は取り囲んでくる兵士達に絶望と笑い声を浴びせてくるだけだった。

『笑っていられるのも今の内だ！総員全魔力を解放！私に繋げ！』

将軍の指示の下で兵士達は魔力を解放し、一斉に将軍へと全ての魔力を注ぎ込む。

限界まで魔力を解放した兵士達は力尽きて地上へと落下していく。

フルンティングとは周囲にいる者達の魔力生命力諸共を全て搾取し、爆発的に術者の力を上げるものなのだろう。

兵士達に命の力を注ぎ込まれた将軍は黒髪を白髪に染め、鬼の如き形相で嘲笑する道化師を睨む。

『我等が命の一撃、とくと受けてみよ！道化師！』

将軍は空間に亀裂を生じさせるほどの力を解放する。

私は将軍の勇姿を見て、驚愕する。

今の力ならば、アーテとも互角以上に戦えるのではないかと思うぐらい将軍の発した力は凄まじかった。

『あはははははっ！素晴らしいよ！うん！合格だ！君は実に運が良い！僕が合格を与えるなんてこの数百年一度も無かったんだよ！まさに歴史的瞬間と言って良いぐらいだ！では、君の勇姿に敬意を評して少し真面目に相手をして差し上げよう…』

『ほざけ！我等が怒りの一撃を思い知れ！』

将軍は両手を突き出して、極大の波動をガイアに向かって放ってい

く。

発射速度もさることながら防御も回避も不可能なほどの威力と広範囲の攻撃だ。

ガイアは受け止めるしか術が無いはず…。

だが、迫り来る波動を目の前にしても道化師の嘲笑は止まることは無かった。

『…と思ったけど、止めることにするよ。君はやはり期待外れだ。あははははっ！残念でした！君は速やかに退場さ。まずは手品を破っておかないとね…』

ガイアは迫ってくる波動に向けて、指先を向けていく。

そして、指先をそのまま横に向けると迫ってきた波動が不自然すぎるほどにガイアが向けた指先に従うように逸れていった。

『馬鹿な…』

『この程度で驚いていては一流の魔術師にはなれないよ。ほんの少し念動力を働かせて、軌道を反らしただけなのにね。でも、これで手品は破れたよ。よって似非魔術師の存在価値は失われたわけだ。ご愁傷様！舞台から速やかにご退場してください！係員である僕がご案内致しますので！行き先は冥界です！あははははっ！』

ガイアがあざ笑うと共に呆然としていた将軍は弾け飛んでしまった。

『あれほど大がかりに披露してくれた手品だったのに実に呆気ない

ね。まるで人間のように儚いよ。だけど、君達の活躍は永遠に語り継がれていくだろう。僕の武勇伝の引き立て役としてね。あははははっ…ふぅ…そろそろ飽きてしまったな。だったら、もうこの世界は用済みだね！でも、僕の骨董品として保存しておくのもいいかな？ならば、そうしよう！善は急げだ！最後の盛大な花火を打ち上げて終わりにしよう！それっ！』

ガイアは全身から銀色の光を放ち、それが視界に映る物全てを焼き尽くしていく。

光はやがて世界の隅々まで広がり、全ての生物は塵へと還っていった…。

世界は再び暗転し、元の極彩色の空の世界へと還っていく。

……。

「以上で世界は終末を迎え、僕の骨董品になったわけさ。どうだい？素晴らしい愛と感動の活劇物語だっただろう！えっ？思ったほど面白くなかったって？実は僕もそう思っていたんだよね！あの将軍がもう少し粘ってくれていたら、より盛り上がっていたのに惜しい！大傑作に一歩及ばずだね！拍手喝采はいらないよ！詰まらなかったら鼻で笑って退場大いに結構さ！少し屈辱的だけど次回作に向けて意欲が湧いてくるからね！ん？次回作なんて必要ない？お前の劇はもう二度と見ないって？それは困ったね。客が無くなれば商売上がったりだよ。だったら、金が無くなってしまう。そうなれば、もはや強盗して生き延びるしか術がなくなってしまうね。だけど、大丈夫！僕は神だから一生飲まず食わずで平気なのさ！思わず心配してくれた？嬉しいよ！それほどまで僕のことを愛してくれてるんだね！もう君の身体を隅々まで貪り尽くしたい気分だよ！やっぱり僕

と君は相思相愛だったんだね。ならば話は早い！今すぐ結婚しよう！そして、性交しまくろう！例え百億光年先だろうとも、全次元が滅び去ろうとも永遠に愛し合っていこうではないか！」

……。

ガイアは一人芝居を演じるように悦に浸って喋り続けていた。

相変わらずこちらの都合を考えずに延々としゃべり続ける奴だ…。

エリスとクロエはガイアに目を離すことなく警戒している。

エリスの言うとおり、ガイアは私達に抵抗しても無駄だという思いを植え付けることに成功したようだ。

はっきり言って絶望的なまでに勝ち目が無い。

あの映像で戦ったいた者達はいずれもヴァルキリアで見た狂戦士にも劣らないほどの精強な兵士達だった。

だが、ガイアの前では煩わしい羽虫にも劣るほどに無力だった。

ガイアにとって片手間にもならないほどに勝負にならない一方的な虐殺。

勝ち目は無い戦いだが、引くわけにはいかない。

なぜならば引いた瞬間に未来が閉ざされてしまうからだ。

「実に魅力的な提案だが、やはり断らせてもらう。貴様が途方もな

く絶世の美女であろうとも一人に縛られるわけにはいかないのでな…」

悦に浸っていた道化師は一瞬身体を固めて後に私の方へと仮面を向けていく。

仮装大会に付ける常に笑顔を見せているような仮面だが、それ故に不気味さを醸し出している。

「僕が途方もなく絶世の美女であろうとも、ね…。そうか、僕が仮面を被っているから決心が鈍っているというのかい？だったら、僕の顔をお見せしよう…」

道化師が指を鳴らした瞬間、ざわめいていた空気が凍るのを感じた。

……。

何かがおかしい。

私はふとクロエとエリスを見る。

……。

彼女達が…固まっている…。

まるで時間が止まったかのように…。

いや、時間が止まっているのだ！

私とガイア以外全部が！

「やっぱり君には通用しないみたいだね…」

突如、私の耳元に声が響いてきた。

上空を見るといつの間にかガイアがいなくなっている。

ガイアは私の車椅子にしなだれかかっていて耳元に顔を寄せているのだ…。

私の額から冷や汗が流れていく。

「ふふっ、驚いた?でも、僕の方がもっと驚いているんだよ。君にも時間凍結魔法を掛けたつもりだったけどね。どうやら効果が無いみたいだ。初めてだよ。僕の魔法が通じない相手に出会ったのは…。やっぱり君は僕の夫に相応しい。ますます惚れてしまったよ…ちゅぱちゅるちゅちゅうう」

耳がガイアの唇に啄まれている。

恐怖が快感に塗りつぶされていくような感じだ。

「あむっれろれろぉちゅぱちゅぱ」

ぐっ!

何もかもから解放されたいという思いが過ぎってくる…。

ガイアの口や舌で私の矜持が全て舐め溶かされていくような抗いがたい感覚…。

……。

だが、それでも私は抗うぞ！

「や…め…ろ…」

拒絶の言葉を吐いた瞬間、ガイアの唇が私の耳から離れていく。

ガイアはそのまま私の正面へと回り込んでくる。

私は息を呑み込んだ。

……。

陶磁器のような透き通るような滑らかな処女雪の肌。

毒のようでいて妖しい光を放つ深緑の左の瞳。

全てに輝きをもたらすような神々しい光を放つ黄金の右の瞳。

その二つの光が合わさったかのような得も知れない妖艶な黄緑色の口紅。

……。

およそ人間離れした美貌に私は思考停止してしまう。

これが神の中の神と謳われた原初神の素顔だというのか…。

「凄いね。僕の口撃に抗うその強靱な精神力。君がなぜ最強と呼ばれるのかが分かった気がしたよ。君はアーテの力を得て強くなったと思っているけど、実はそうではない。君は元々強大な力を持っていたのだよ。そう、はぐれ神というのか。君は元々神の血を受け継いでいる人間だったのさ。でないと、アーテを打ち負かしたことに関して説明が成り立たない。どう考えてもアーテの血肉を受け継いだぐらいで僕の愛弟子である彼女に勝てるなんて信じ難いからね。記憶喪失になった高位の神だったのか。あるいは突然変異で受肉して人間として転生した神なのかはこの僕でさえも分からない。でも、そんなことはどうでもいいさ。重要なのは今。僕は君を愛しているという確かな思いが存在していることだよ。君もそうだろう?例え自分が何者であれ、それで何かが変わることでもない。結局は今何がしたいのかが大切なのさ。過去がどれほどのものだろうとね。だから、君も遠慮することはない。君が僕を原初神でも破壊神でもない一人の女性として見てくれることを期待しているよ。それよりも僕の素顔はお気に召したかい?時間凍結したのは君以外に僕の顔を見せたくなかったからだよ。そして、先ほど君の耳を舐め回していたのはこの口さ。今度は直の味見させてあげるよ…ちゅう」

ぬおっ!

ガイアの魅惑的な唇が私の唇を覆い尽くし、容赦無く吸い付いてきた。

「ちゅばじゅるじゅるちゅうちゅうちゅうううううっ!」

何だか身体が脱力していくようなむず痒い感覚に陥っている。

「ちゅば…ふふっ、君の顔を僕の唇と舌で舐め溶かしてあげるよ…」

ガイアは唇と言わず、頬や鼻の頭、瞼や額等と至る所に唇と押しつけて舐め回してくる。

「れろぉちゅるちゅぱ…ちゅちゅうちゅぱぢゅるぢゅるるるっ！」

抗おうにも身体が動けないし、動けたとしてもこの甘美な感触に抗うことが出来ないだろう。

私のなけなしに理性がガイアの唇に吸い尽くされていき、抗う心がガイアの舌で舐め溶かされそうになっていく。

……。

うおおおおおおおおおっ！

私が私で無くなってしまうのは断じて否だ！

喧嘩番長の気合いと根性を舐めるな！

「ちゅば…これは驚いた。まさかここまで粘ってくるとはね。君は本当に落とし甲斐があるよ。だったら、もう本番を迎えようではないか。実はもう僕が我慢できなくなっている。君の精気は僕を酔わせてしまう魔性の美酒の如しだからね。抵抗しても無駄、と言うよりは君は動けないんだったか。これは好都合だね！僕に万事任せてくれるといいよ！たっぷりとご奉仕してあげるさ！君の心を僕の身体で鷲掴みにしてあげるよ！あははははははっ！さあ、始めようか…」

「そうはさせない！」

動けない私をガイアが犯してきそうだった寸前に虚空から声が響いてくる。

ガイアは仮面を被って私から離れ、声が響いた方へと向いていく。

「師匠、例え貴方が相手であろうとも、その人に、ロストに手を出すのは許さない！」

空間が硝子のように割れていき、その亀裂の中から純白の軍服を纏った女性が現れる。

「ようやく餌に食らいついたようだね。僕のお気に入りの玩具で愛弟子である可愛いアーテ…」

アーテが私や世界の異常を察して駆けつけてくれたのだ！

まさに救いの女神が降臨してきたと言っても過言では無いぞ！

「さてと、誰が誰を許さないと言っているのかな？もう一度言ってくれないか？哀れなるアーテ…」

ガイアは嬲るようにアーテに問いかけていく。

アーテは俯くようにして口を閉じている。

よく見てみるとアーテの身体が震えていた。

やはり、ガイアにかなりの仕打ちを受けて心的外傷を煩ってしまっているのだろうか？

「アーテ、良い子だから疾く去ってくれないか？それで僕への無礼を許してあげよう。君は運が良いよ。今の僕はすこぶる気分がいいんだ。だから、僕の気が変わらない内に消えてくれると嬉しいね…」

ガイアは声は聞き分けのない子供を優しく説いているようなだったが、一切の容赦も妥協もしない冷徹な響きにも聞こえてくる。

……。

しばしの沈黙が続いたかと思いきや俯いていたアーテが顔を上げ、手を横に振っていく。

「ガイア、いつの間にここにいるの？」

「ロスト、何だ！その顔は！」

突然、咳を切ったかのようにクロエとエリスが喋り出してきた。

時間凍結が解除されたのか！

ガイアの笑いの仮面が何処か底知れぬ威圧感を放ってアーテの方に向けてくる。

「愚かなるアーテ。それが僕に対する君の答えだというわけだね。どうやらまたお仕置きが恋しいと見えるようだ。思い出させてあげるよ。僕への絶対なる服従心と言うものをね…」

どうやらアーテがガイアの時間凍結魔法を解除したらしい。

ガイアは無造作に手を振った瞬間、私の側にいたクロエとエリスが

弾き飛ばされていく。

「うあああっ！」

「きゃああっ！」

遠くへと弾き飛ばされていくクロエとエリスを余所にガイアは私の車椅子と共に浮遊していく。

「君には特等席を用意してあげるよ…」

「ロスト！」

アーテの悲痛な叫びに異に返すこともなくガイアは私の車椅子を最も高い建造物の屋上へと運んでいく。

何と言うことだ…。

これでは私が囚われのお姫様的な立場ではないか！

ガイアが降ろした場所は屋上からさらに高くそびえ立つ針のような塔の頂上だった。

「ふふっ、君が今いる場所はこの世界を支配していた王が座る場所、すなわち玉座だよ。僕の花婿に相応しい特等席だ…」

ガイアは仮面を外して顔を寄せてくる。

「今から僕は彼女達を嬲り殺しにいくよ。原初神たる僕に逆らったのだからね。だから、君はここで彼女達の最後を見届けてくれると

いい…」

ガイアが手を振ると映像が出現し、私の顔が映る。

私の顔はクロエの唇によって真っ青に染められていて、先ほどのガイアの接吻の嵐によって、青と黄緑の斑模様に彩られていた。

「この映像は僕の目で映しているものが流れるようにしている。彼女達が嘆き苦しむ姿を見て興奮するといいさ。そう、君は誰にも渡さない。僕だけのものだ…ちゅぱちゅちゅぱ」

ガイアの唇が顔の至る所に押し当てられていく。

「ちゅうううっ…ちゅぱっ…ふぅ…これで充電完了だ。ふふっ…ははははっ…君の精気は本当に美味しいよ。まさに傾国ともいうべき美酒だね。ますます君を手放したくなくなってしまったよ。くっくっくっ…君を手に入れるために女達の醜くも浅ましい戦いが始まるんだ。君はこの王座で高笑いしているといい。そして、哀れなる道化師に慈悲の手を差し伸べてくれ。僕は道化師、そして、君は王だ。道化師は王を慰め、笑いをもたらす者。王に哀しみをもたらす者には死神となり、制裁を下す者さ！あはははははっ！そうさ！君を苛むもの全てを僕が消し去ってあげるよ！それが僕の役目だ！んうぅぅ…ちゅぱちゅちゅうううっ…ちゅぱっ…ふぅ…ああ…ロスト様…ちゅ…僕の愛しい王様！ちゅぱっ！貴方様の御威光の前では原初神などという肩書きも紙屑同然でありましょう！ぢゅるぢゅばっ！僕は貴方様の忠実なる下僕です！ちゅうううっ！足を舐めろと言えば、喜んで舐めましょう！んっれろぉあむぅ！僕の血の一滴全てが貴方様の物なのです！ぢゅるるるるっ！どうか、この卑しい道化師めに貴方様のお情けを賜りとう御座います！ちゅううっ…ちゅちゅ…ぢゅるるるっ…ふはははははっ！何か良いよね

！この主従ごっこというものは！思わず我を忘れてしまうところだったよ！だけど、全部丸ごと本音を含めて言ったから演技ではないんだよね！だから、僕は君の道化師で下僕で花嫁なのさ！えっ？花嫁は言ってないだろうって？あはははは！細かいことは気にしないでくれよ！僕と君との仲じゃないか！何？少し馴れ馴れしいって？そんな釣れないことを言わないでくれないか…。思わず悲しくなってしまうよ…。それとも実は照れてる？何て君は可愛いんだ！やはりアーテには勿体ないよ！だから、招かれざる客には速やかにご退場願おうかな？待っていてくれ、ロスト。僕と君の愛の営みを邪魔する輩を始末してくるからね。面倒事を済ませた暁には末永く犯し合おう。愛しているよ、ロスト…ちゅ」

唾液の糸を伸ばしたガイアの黄緑色の唇が離れていく。

映像には黄緑に染め、唾液に濡れた私の顔が映っており、唇から唾液の糸を伸ばしていた。

「さてと、天罰を下しに行くとするか…」

ガイアは仮面を被って飛び立っていく。

そして、映像にはすぐアーテとエリス、クロエの姿が映し出される。

『私が師匠に攻撃を加える。エリスは防御を、クロエは補助を頼む！』

『分かったわ、先生。愛人もそれでいいわね』

『愛人と呼ぶな！異論は無い！』

アーテを主砲としてガイアに戦いを挑むつもりなのか…。

だが、私にも会話が筒抜けであるということは当然ガイアにも知れ渡っている。

視覚だけでなく聴覚も映像の音声として聞こえるのか…。

『やあ、お待たせしたね。さて、どんな作戦で僕を攻め立てていくのかな？僕は非常に楽しみだよ…』

ガイアめ、アーテ達の会話を聞いていたというのによくもぬけぬけと言えたものだ。

『楽しみとはよくも言えたものですね。どうせ、師匠には全てが筒抜けなのでしょう。だから、単純な陣形でけど、それしか方法が無い作戦で貴方に戦いを挑むのです。私が攻撃、エリスが防御、クロエが補助という形でね！』

アーテもまた師匠と弟子という関係上、ガイアのことを有る程度把握しているようだった。

『奴には全てが見通せるというのか、アーテ』

クロエがアーテに戦慄したような表情で聞いてくる。

『言葉通り全てを見通せるわ。私達が見通せない未知なる世界も…。師匠は原初神だから…』

『先生にそこまで言わせるなんて…。これは本気で不味い状況というものなんですね…』

アーテを先生と呼ぶエリスもまた苦虫を潰したような顔をしている。

『充分話し合ったかな？どうせ無駄だと思うけどね。まあ足掻くのは自由さ！だけど、ロストは渡さないよ。特にアーテ、君にだけは絶対にね。そう、僕は君の言う通り、全てを見渡せる。君がロストをどう利用しようと企んでいることも僕には筒抜けさ。僕はね、本当にロストを愛しているんだ。だから、彼に苦行をもたらそうとしている君だけは一切の容赦をしない。僕は君を苦しませながら殺す方法を少なくとも百通り思いつくよ。刺殺、焼死、斬殺、絞殺、圧殺、その他諸々ね。例えば、斬殺でも色々とある。手から切り刻むか、足から切り落とすか。それでもう二通りだ。時間を掛けて切るか、初めから無かったかのように呆気なく切るか、これで四通りだ。ゆっくり切ることを前提にして鋸のように滑らせて切るか、じわじわと押さえつけて切るか、早く切ることを前提にして潰すようにして切るか、綺麗に切るか、それで八通りだ。刃に毒を塗るか、熱を伝えるか等々と斬殺の中でも驚くほど豊富な種類があるのさ。百通りなんてあっという間に思いつくよね。それとも生ける屍になって永劫の苦痛を味わうか、殺して欲しいと懇願してくるほどに無様で醜悪な仮初めの生を謳歌させていくことも捨て難い方法だね。だけど、残念ながらそんな気持ち悪い方法を行使するつもりはないよ。そんなことをすれば、僕の愛しの花婿が怒ってしまうからね。そうだろう？ロスト…』

ガイアは三人に向けてではなくいつの間にか私に言っていた。

それにしてもアーテが私を利用している？

いや、利用されているのは分かっていた。

それはもう今更のことだ。

だが、何かが引っかかる。

私はまだアーテから何をするべきかの全容は聞いてはいない。

多分、アーテの親友である彼女をどうにかすることだろうと思う。

だが、ガイアの話しぶりからするとそれだけでは無いような気もしてくる。

それに私がただの人間でも無いようなことも言っていた。

神の血肉を得ただけでは神であるアーテには普通は敵うはずが無い。

確かにガイアの言葉に一理がある。

だとすれば、私の力はアーテの血肉以外にも何かがあるのだろうか?

謎が深まるばかりだ。

『ロスト、ご免なさい…』

アーテが私に謝ってきている。

何かやましいことを隠しているのだろうか?

『必ず話すから!だから…きゃああっ!』

アーテが不可視の力で弾き飛ばされ、建造物へと激突していく。

ガイアがアーテに向かって力を放ったのだ。

『黙れ、虫酸が走るな…。まるでこうするしか方法が無かったのよ、だから許して、と懇願してるような白々しい謝罪だね。やはり君だけは惨たらしく嬲り抜いて殺してやろうか。それと君の口からロストに真実は告げさせはしないよ。こういうのは第三者である僕が主観性の無い有りの儘の事実で語った方がより確実で有用性があるからね。真実を知ったロストは果たして何を思うんだろうね？少なくとも喜びや楽しみを感じないことは確実だ。卑劣なるアーテ、君にはたっぷりとお仕置きをくれてあげよう。それで僕のロストを誑かした罪を骨の髄まで購わせてやるよ…』

不味い！

ガイアが何故か知らないが、物凄く怒ってしまっているぞ！

このままだと私限定でのガイアによるアーテ達の公開処刑が始まってしまう！

助けに行きたいが身体がまだ思うように動くことが出来ない！

自分の動けない身体に腹立たしさを覚えてしまう！

……。

何とかならないものなのか…。

第６８話：黙示録（後書き）

ガイアの台詞による文字数の方が多い気がする…。

どうか愛嬌だと思って見過ごしてください。

第６９話：真実（前書き）

矛盾点があったらどうかご容赦を。

乗りと勢いで読んで見逃してください。

では、どうぞ。

第６９話：真実

アーテは瓦礫の中から飛び出し、ガイアと再び対峙する。

『ロストは必ず…貴女から…取り戻して見せる！』

額から血を流しながらも目には強い光を灯すアーテ。

『ほう、大口を叩いてくれるものだ。まずは格個撃破とするかな。雑魚には用は無いからね…』

『あぅ…』

突然、クロエが糸が切れた人形のように崩れ落ちる。

『愛人！』

エリスは咄嗟にクロエを抱き留める。

クロエの目には光が灯っていなかった…。

……。

馬鹿な…。

あっけなさ過ぎるぞ！

これは何かの悪い夢だ！

……。

クロエ…。

『瞬殺だね。まずは一人目だ…』

ガイアの愉悦の声が無情に響いてくる。

クロエっ！

クロエぇえええっ！

「クロエぇえええええええええええええええええっ！うあああああああっ！」

ぐおおおおおおおおおっ！

何故、こんな時に身体が動かない！

「ガイアぁあああああああああああああっ！」

『悲しまないで、僕の愛しいロスト。彼女からは魂を抜き取っただけさ。まだ完全に死んだわけじゃないよ』

ガイアは私に慟哭の声に答えるようにして、手に持っている青白い光の球を画像に映してくる。

あの光の球、もしかしてあれが！

『そう、あそこで倒れ伏している女の霊魂だ』

まさか人間の魂を抜き取る術をガイアは持っているということなのか…。

何てえげつない力を持っているのだ…。

『さて、彼女には戦場から離脱してもらおうか』

『きゃああっ！』

エリスが弾き飛ばされ、抜け殻となったクロエが空中へと浮いていく。

『これは僕の王への献上品だ』

クロエは光に包まれたかと思うと私の足下へと瞬時に送られた。

……。

クロエは目を開いたまま身じろぎもせず横たわっている。

「クロエっ！ぐっ…」

抱き寄せたいのに身体が動かない。

「早くクロエを元に戻せ！ガイア！」

私の要求にガイアはただ笑っていた。

『駄目だよ。この戦いが終わるまで彼女には眠ってもらわないとね。

さて、後二人だ。君達は元々霊体だから奪魂術は通じないようだから別の手で始末してあげるよ。小さな羽虫の手足を時間を掛けて丁寧に切断してやるようにね…』

「ガイアぁあああああああああっ！」

映像に映るのは恐怖に怯え、後ずさっているエリスだった。

『さて、次は君だ。僕の愛弟子のさらに弟子に当たる新しき女神よ。くっくっくっ…』

『手を出させないわ！ロキ！』

アーテは全身から銀色の光を放って迫ってくる。

うおおおっ！

ガイアの視点で映像が映っているから、まるで私に襲いかかってくるような迫力があり、つい驚いてしまう。

『はあああああっ！』

アーテは拳を凄まじい速度で連打していく。

だが、ガイアはアーテの連撃を鼻歌を響かせながら避けている。

『駄目駄目、鈍すぎるよ。はい、減点だね』

ガイアは人差し指がアーテの額を軽く突いた瞬間、アーテは殴り飛ばされたかのように吹っ飛んでいく。

『あああああああああああっ！』

アーテは建造物を次々と貫くように飛ばされていった。

まさかロキで身体能力を極限まで上昇させたアーテを指一本であしらうとは…。

改めてガイアの強大な力を見せつけられたような気がした。

『破壊された建造物は自動修復するから存分に暴れ回るといいよ。もっとも立ち上がれたらの話だけどね』

上空に無数の魔法陣が出現してくる。

『フレイアを使ってくるつもりだね。くっくっくっ、なかなか根性があるじゃないか、アーテ。勝てないと分かっていて尚立ち向かっていく姿はとても美しいよ。ロストもさぞ喜んでいるだろうね』

血まみれになりながらも姿を現すアーテ。

既に満身創痍の状態だ。

『真実は私がロストに話します！師匠、御覚悟を！フレイア！』

幾重もの魔法陣から極大の閃光が次々と放たれていく。

『君にそんな資格は無いよ。フレイア』

迫り来る閃光の嵐をさらなる強大な閃光の嵐が瞬く間に迎撃してい

き、アーテの方へと迫っていく。

『ぐっ！あぅ！』

アーテが展開した魔法陣が次々と破壊されていき、閃光がアーテの身体を掠っていく。

『不肖なる僕の愛弟子アーテよ。君に教えた技全ては僕にとっては手品程度の物さ。その手品を駆使して僕をどうにか出来ると思ったのかい？だとしたら君も道化師の才能が有るかも知れないね。なぜならば、僕をこんなにも笑わせてくれるのだからな！あはははははっ！滑稽だね！哀れだよ！無様で見苦しくて吐き気がしてくる！死ぬがいい！肉片残らず消し去ってやろう！』

『うぅっ！』

極大の閃光が一斉にアーテ目掛けて放たれていく。

『負け…ない…オーディン！』

『むっ！』

ガイアの笑い声が止まる。

アーテの前に銀色の魔法陣が展開され、無数の閃光が魔法陣に引き寄せられるかのように収束していく。

『まだまだ、これからよ！ホーリー・レイ！』

いつの間にかアーテの隣にエリスが現れ、無数の魔法陣を展開させ

ている。

展開された無数の魔法陣は一つに収束して、巨大な魔法陣が形成されていく。

『貴女に教えてもらった方法を早速試してあげるわよ！講師である貴女に向かってね！』

収束された魔法陣から映像が真っ白になるほどに凄まじい閃光が放たれていく。

さらにアーテがオーディンで倍返しした閃光と重なり合い、超極大閃光がガイアに目掛けて迫ってくる。

あの威力はおそらくアーテの最強の技であるフレイ並に違いない。

さすがのガイアもまともに食らえばただでは済まないはずだ…。

『あはははははっ！良いね！まさに燃える展開だ！けど、空しくもあるよ。この程度で僕を傷つけられるとでも思っているのかな？君達の渾身の手品を破ってあげるよ』

ガイアは迫り来る閃光に人差し指を向けて、手首を返すようにして指先をもう一度向ける。

その瞬間、閃光は不自然すぎるほどにねじ曲がるようにして正反対に軌道を変えていく。

あれはガイアが見せた過去の映像にあった相手の攻撃をねじ曲げる念動力か！

行く先は閃光を放ったアーテとエリスの方向だ。

アーテとエリスの青ざめた表情が映ってくる。

『あはははははっ！さあ、奇跡の生還を僕に見せてくれ！アーテ！』

映像から目映い光が放たれ、目を細める。

さらに地響きがなり、凄まじい衝撃が私のいる建造物を激しく揺らしてくる。

「ぐあっ！」

車椅子が倒れ、私は地面に寝そべる姿勢となってしまった。

手足が僅かに動くだけで自分で起き上がることすらままならない。

我ながら何て無様なのだろうか…。

私がこうして地面に這い蹲っている間にもアーテは傷つき打ち拉がれているはずだ。

だが、私は地面に這い蹲ることしかできない。

目の前には生気の無い目を開けたまま横たわっているクロエがいる。

「笑ってくれ、クロエ。喧嘩番長と呼ばれた私は斯くも無様な姿を…」

クロエは目を見開いたまま何も答えない。

私は力を振り絞って、首を動かす。

映像には傷つきながらもエリスを庇って、何とか生き残っているアーテが映っていた。

「良かった。無事だったのか、アーテ…」

『あっはははははっ！おめでとう、アーテ！君は奇跡の生還を見事成し遂げたのだ！しかも、足手纏いを守ってでの快挙！素晴らしいね…。さてと、そろそろ終わりにしようか。エリス、君は見逃してあげるよ。僕が罰したいのはそこの愛弟子だけだからね。さあ、無様な師匠を見捨てて疾く去り給え。誰も君を臆病者や卑怯者だと罵ったりしないさ。僕は君の勇気ある撤退に心から敬意を評するからね。だから、師匠を見殺しにすることを悔やむ必要は無いよ。ロストのことは僕が責任を持って御奉仕するから君は遠慮することなく逃げるがいい…』

くっ、ガイアはエリスを嬲るように言って挑発している。

元々エリスを逃がすつもりは無いつもりだな…。

『どうして…』

『ん？何なのかな？』

エリスは気絶しているアーテを庇うようにして前に出て、気丈にもガイアを睨む。

『何故、ここまで容赦無く傷つけることができるの！貴女と先生は師弟関係を結んだぐらいに仲良かったのでしょう！破壊神の二つ名も先生に譲ったぐらいだったんだし…』

確かにエリスの言う通り、仮にもアーテはガイアの愛弟子だ。

だが、ガイアは元々アーテには虐待じみた訓練を施していたとも言っていた。

それでも、今は虐待どころか本気で殺そうとしている。

アーテは私に何かを黙っていて、ガイアがそれで怒っているというのだが、いったい何に対して怒っているのか？

『エリス、どき給え。彼女は君に庇ってもらうような価値のある者ではないんだよ。何故ならば、君の恩人であるロストを貶めようとしているのだからね。そうだ、丁度良い。君達に彼女の罪を明かしてあげよう。君はともかくロストには知る権利があるからね』

ガイアは指を鳴らすと映像が途切れる。

私の目の前にはアーテを抱いているエリスと佇んでいるガイアがいつの間にかいた。

また、瞬間移動したというのか…。

「すまない、ロスト。戦いにかまけて君の異常事態を感知出来なかった僕を許して欲しい」

ガイアは私が倒れている姿を見ると即座に駆けつけてきて抱き起こしてくる。

ガイアはアーテ、いや、他の者には対しては残酷なほどに嘲笑う狂気の道化師だ。

だが、私には対しては愛する男を気遣う普通の女性のように振る舞っている。

原初神であるガイアが私をそこまで溺愛する理由が今一分からない…。

ガイアは私を抱き上げて、車椅子へと座らせ直してくれた。

「ありがとう…」

ガイアのお陰で転倒したのだが、余りにも真摯に心配してくれたのでつい礼を言ってしまった。

「かまわないさ。僕は君の者だからね。遠慮することはないよ」

ガイアは驚くほどに慈愛に満ちた声を出してくる。

「貴様はなぜ私にそこまで尽くすのだ?貴様とは初対面でまだ逢ってから間も無いのだぞ」

「そうだね。まず、彼女の罪を教えてあげるよ。だけど、その前に君達にとって未知なる世界があることを講義しなければならない。さて、僕は世界の全てを見渡せる。過去、現在、未来。そして、可能性の数だけ存在する世界、いわゆる平行世界というものもね」

「平行世界？」

初めて聞く単語だ。

それがアーテの罪と何か関係しているというのか？

「例えば、エリス。君は人としての生を終え、神としての生を受けている。それはアーテと関わってしまったことが原因だ。だが、もし君がアーテと関わっていなかったら、今でも人としての生を謳歌し、歌姫として讃えられていたことだろう。さらにアーテと出会って君が狂戦士として生きていき、ロストと出会わなかったとしたらどうなっていたのだろうね？」

「そんなの私に分かるはずがないわよ！だけど、無様に生き続けていたのかもしれないわ。私を殺してくれる誰かを見つけるまで…」

エリスの答えにガイアは哀れむように笑ってくる。

「何がおかしいと言うのよ！」

それに対してエリスはガイアに食って掛かった。

「いや、すまない。君が余りにも思っていた通りの解答を答えてくれたので、思わず笑ってしまったのだよ。だけど、残念ながら不正解だ。君はその内、ケールを殺して、ヴァルキリアで史上最悪の狂戦士として名を馳せることになっていたのだよ。そうだ、君はヒュプノスに薬漬けにされて自我を失い、ケール以上の化け物になって、無差別に敵を食い散らかすことになっていく。あのアンナのように親友であるケールをも食物だとしか認識できず、躊躇いもなく食ら

って、それで叫ぶのさ。ケールを必ず助けてみせるってね…。ロストに改めて感謝することだね。もし、本当にロストと出会っていなければ君は身も心も畜生に成り果てていたのだから…」

ガイアはどこまでもエリスを哀れむように笑っている。

「そんな！もし、ロストと出会っていなければ私がケールを殺していたというの？嘘よ！私がそんな…」

「あの陰惨な世界で、そうならないと言い切れるのかな？そう、君はケールを殺して完全なる狂戦士となる可能性があった。君がその道を歩んだ世界を見渡せたからこそ言えることだ。そして、これが平行世界だ。可能性の数だけ存在する世界は君達の認識できない次元で同時進行している仕組みなのさ。ロストが神降ろしをして、もしかすると僕と出会わなかった場合の世界ももちろん存在する。ロストが最強の力を得ることなく、ただの平凡な村人として歩んでいた世界もある。今こうして私と君達が対話してるのも無数にある平行世界の一幕にしか過ぎない。だが、僕だけは例外だ。可能性の数だけ存在する平行世界の中で私は唯一無二の可能性なのだよ。故に僕は原初神なのさ。だからこそ、僕は世界の全てを見渡せる。だけど、僕と同等以上の力を有して、世界を見渡す権利を手に入れることが可能な存在が他にも現れた。それがロスト、君なのさ」

ガイアはエリスから私へと視線を向けてくる。

私がガイアと同等の力を得て、全ての世界を見渡すほどの者になるのだと…。

「貴様は私をはぐれ神と言っていたな。だったら、私は貴様と同様に原初神だというのか？」

「それは分からない。君だけは僕でも完全に見渡すことが出来ないのだよ。だからこそ、僕は君に惹かれたのもある。君の事がもっと知りたい。君がどんな結末を辿るのかを知りたいと…。僕は神降ろしで君に呼ばれる以前からずっと見ていたのさ。君が喧嘩番長と名乗って、子供達と仲良く戯れていた光景や力を手に入れたが故に苦悩する君の姿を…。もっとも、きっかけはアーテだったのだけどね…」

ガイアは気絶しているアーテに目を向ける。

仮面を被っている故にどんな表情で見ているのかが分からない。

だが、複雑な表情をしているように思えた。

ガイアはアーテを愛弟子と呼んでいたのだ。

虐待することはあっても殺したいほど憎んでいたわけではないのだろう。

「アーテは僕が課した修行を終了し、破壊神の名を受け継いだ。アーテは破壊神として原初神である僕に次ぐ力を秘め、世界を渡り歩く能力も有するほどになっていた。彼女は彼女なりに世界を混沌の渦に貶めていったよ。まさに破壊神の如くにね。一番好んで世界を破滅させていた方法が心弱き者に最強の力を与えて、世界を自滅させることだった。実にアーテらしい回りくどいやり方だと当時の僕も感心したほどだったね。だけど、アーテは一人の女性に出会うことで変わってしまった。その女性は…」

「止めてぇ！」

ガイアの言葉を遮るように叫んだ者がいた。

気絶したはずのアーテだった。

「その名を言ったら世界が改変してしまう！ロストに言ってしまったら…あぐっ！」

ガイアは手で何かを鷲掴むような動作をしている。

アーテの首筋が何かに掴まれたかのように凹んでいた。

念動力か何かでアーテの首を絞めているのか！

「世界が改変しようが、どうなろうと僕の知ったことでは無いよ。どうせ、君達が生きる世界はいずれ歪みをもたらされることになるのだからね。それが早いか、遅いかの問題だ」

ガイアは手を開き、首筋に凹んだ後が消え、アーテは咳き込む。

「ごほっ…世界が改変したらロストが今まで囲っていた女達も消えてしまう可能性があるのよ！」

……。

何だと？

私の妻達が、酒池肉林の構成員等が消えてしまうだと…。

「どういう事なんだ！アーテ！」

私は思わず声を荒げてしまう。

アーテはそれに怯えたように身を竦める。

「どの道、君達の世界は改変されることになるさ。なぜならば、ロストの手で世界を改変させることこそがアーテの真の目的だからね…」

私の手で世界を改変させる？

いや、私の手で自分の大切だと思っている家族が居る世界を変えさせようとしているのか！

それがアーテの目的だというのか！

私は呆然としてアーテを見る。

アーテは悲しげに私の顔を見ていた。

嘘だと思いたい…。

それにまだアーテの口からは何も聞いてはいないのだ。

「アーテ、ガイアの言っていることは本当なのか？」

……。

「答えてくれ、アーテ…」

……。

「答えろ！アーテ！」

……。

「ご免なさい、ロスト…」

……。

アーテ、何故なのだ…。

何故、私に力を与えたのだ…。

「ロスト、先ほど僕は平行世界とアーテの過去の話をしたけど、それを踏まえて続きを話そう。アーテは自分の血肉を普通の人間に分けて世界を混沌に落とすことが当時の流行りだったことを話しただろう。だけど、それだけでは飽き足らなくなったアーテは考えたのさ。最強の力を与えた者を過去の世界へと飛ばした時、今いた世界がどのように変わっていくのかをね。いわば実験みたいなものだ。それとも神の暇潰しと言えばいいのだろうかな？いずれにしろ、アーテは次に目を付けたのは野心に満ちた幼い子供だった。彼女はその子供を右も左も分からない過去の世界に飛ばして放置して様子を見た。だが、その子供は実は馬鹿で臆病だったことからせっかく与えた最強の力を行使しようとはしなかったのさ。アーテにとってはまさに想定外だったらしいね。世界に何も影響を与えることなく無為に過ごしていた子供をアーテはやがて見限り、別の玩具を過去の世界で探し始めたわけだ。それこそが例の彼女。彼女の名は…」

アーテは俯いて何も言おうとはしない。

私はアーテの親友の彼女の名を聞く。

いや、既に分かっているのだ。

まさに今の世界情勢の根幹を作った張本人なのだからな…。

「カオス・ヴァルキリア、男尊女卑だった当時の世界を憂い、世界に聖戦をもたらした稀代の英雄にして梟雄、ヴァルキリア帝国の建国者にして初代皇帝だった歴史上最も有名な女傑だ」

……。

やはり彼女とはカオスのことだったのか…。

エクリアの話でも聞いたことがあったのだ。

そして、アーテがヴァルキリア帝国が信仰する神であったということも…。

カオスの女の楽園を作るために聖戦を引き起こした悪魔だと言われている。

そして、私はカオスのような楽園を作りたくない、もしくは作らないように心がけている。

私にとってカオスは最大の反面教師なのだ。

「どうやらロストは既に知っていたようだね。カオスはアーテに力を与えられ、その力で持って破竹の勢いで奴隷にされていた女達を

解放し、奴隷制度を唱えていた国々を降伏させていったんだ。カオスはまさに女性にとって救いの女神であり、聖女として崇められていた。カオス自身もまた男女が同等の権利を有し、対等に共存出来る世界を目指そうとする理想家であり、誰であろうとも分け隔ても無く接する人望に厚い女性だった。だからこそ、彼女に惹かれた者は大勢いたさ。奇しくもアーテもその一人だったわけだ。カオスはアーテが神であろうとも物怖じずに接し、その度にアーテは混乱していたよ。その時のアーテは実に可愛かったね。やがてカオスとアーテは親友と呼び合う程の仲になっていった。だけど、運命の輪は思わぬ人物によって狂わされることになった…」

「アーテが見限った子供か…」

ガイアは無言で頷く。

アーテは何も応えない。

エリスはもはや話に付いていけないのか、呆然としている。

「その子供は馬鹿で臆病のように見えて、実は違っていた。彼は異常に用心深く、自分の野心を決して他者に悟られる事の無いように装っていたらしい。力を与えたアーテすらも欺くほどにね。彼は女性解放を掲げていたカオスに取り入ろうと軍に志願していった。そして、武勲を上げ、やがて彼女の右腕とも言われるほどに頭角を現していったのだよ。一方、カオスとの出会いで心を入れ替えたアーテは彼の存在を恐れた。だけど、既に彼はアーテの手に負えないほどの力を有していたんだ。アーテはもはや強大になりすぎた彼の力に手を打つようがなかったのさ。まさに飼い犬に噛まれた気分だっただろうね。いや、今まで自分がしてきたことのしわ寄せがやってきたと言うべきなのかな。手出しが出来ないアーテを余所に彼はカ

オスと同様に人望を集め、武勲も相まってやがて彼女と並び称されるほどの英雄として名を轟かせていった。そして、カオスもまた彼に惹かれていき、やがて愛するようになっていったのさ。いや、愛するというよりは妄信してしまったというべきか…。カオスの心を射止めたことを知った彼は次第に本性を見せ始め、カオス以外の多くの女性と関係を結んでいくことになっていくんだよ。彼は途方にも無いほどに女好きで世界の全てを女を自分の手中に収めることが夢だったことがついに発覚したわけだ。そして、カオスは彼の愛を得たいが為に自分の掲げていた女性解放の理想を次第に歪ませていった。彼の愛を得るにはどうすればいいのか?彼は稀代の女好きだ。ならば世界中に居る男を全て滅ぼせば、女達は全て彼の者になる。そうなれば、彼は喜ぶだろう。彼の夢を叶えた私は一番に愛されるに違いない。彼女の想いはやがて狂気に満ちていった。そして、彼女はついに壊れてしまう…。世界全てに戦いを挑み、目に留まる男達を虐殺する悪魔に成り果てていったのだよ。いつの間にかカオスの理想である女性解放が男性絶滅へと変貌してしまったわけだ。そう、これこそが歴史上最も凄惨で残酷なる戦争、聖戦の始まりなのさ…」

……。

何て生々しい話なのだ…。

ヴァルキリアで神のように崇められていたカオスが酷く人間臭いように思えてくる。

だが、その話では聖戦の実行者はカオスなのだが、根本的原因を作ったのは彼女を誑かした彼だ。

それにしても、ガイアが敢えて代名詞を用いて説明している彼とい

うのは何故か誰かに似ているような気がした。
それは決して認めたくない誰かだ…。

「そして、カオスを歪ませ、世界を血の海に沈めた真なる黒幕である彼の名はエロス、エロス・ヴァルキリア。だけど、それは過去の世界に渡った時に名乗った偽名だ。本当の名は…」

止めろ！

分かっているのだ！

これ以上は聞きたくない！

「ロスト。そう、君なんだ。正確には君の数ある可能性の一つ。アーテに与えられた力を切っ掛けにして原初神にも匹敵するほどの絶大なる力に目覚め、欲望のままに女を陵辱し、男を虐殺していった最も凶悪で残忍な可能性を秘めたロスト。実はカオスではなく君がヴァルキリア帝国建国者にして初代皇帝であり、ヴァルキリアの歴史上唯一の男性の皇帝だったわけだ。そして、聖戦とは君が掲げる夢、酒池肉林が歪んだ形で引き起こされた悲劇だったのさ…」

……。

何て事だ…。

最低最悪の戦争と呼ばれた聖戦がまさか私の歪んだ思いがもたらしたものだったというのか…。

世界中の女を自分のものにするために男を全員皆殺しにするなんて

正気の沙汰では無い！

余りにも狂った楽園だ！

私は断じてそんな楽園を求めていない！

……。

そして、私が、いや、私の最悪の可能性がカオスを悪魔へと変えてしまった…。

カオスの愛に付け込み、彼女を狂わせてしまったのだ…。

「エロスはさらに僕と同様に全てを見渡す力を有し、さらには平行世界を自在に行き渡る能力を秘めているのさ…」

「平行世界を自由に行き来する力も持っているというのか？」

何処まで私のその可能性とやらは規格外の力を持っているのだ！

……。

いや、待て…。

平行世界を行き来する能力があるということは、もしかして…。

「察したようだね。そう、エロスは君達のいる世界にも存在している。そして、彼こそが未来に歪みをもたらす者だ…」

まさかそんな馬鹿な…。

私のもう一つの可能性が歪みをもたらす者だと！

『しかし、貴方様には過酷な運命が待ち受けています。この世界を歪んだ未来へと導く存在との果てしなく、苦しみと哀しみに満ちた戦いが…』

オイジュス様が言っていた予言を思い出す。

私は自分のもう一つの凶悪で残忍な可能性と戦う運命にあるということだったのか…。

何故、私でなければならなかったのかが分かった気がした…。

私でなければ、その可能性を滅ぼせないからだ…。

「エロスこそが君達がいる世界を戦乱の渦に陥れた張本人だ。そして、その戦乱を巻き起こしているヴァリキリアの王族はエロスとカオスの子孫だというわけだね。つまりヒュプノスとタナトスは時を越えた君の孫なのさ。もう察していると思うが、アーテの目的は歪んだ愛に目覚めたカオスと歪みをもたらす者であるエロスを君の手で倒してもらうことだ。いや、アーテとしてはエロスの方を倒してもらいたいと思っているかもしれないね。カオスは愛に狂う前は紛れもなくアーテの親友だったわけだし、諸悪の根元は紛れもなくエロスだというわけだからね。いずれにせよ、もう君しか彼らを倒せる者がいない。そして、彼ら二人、あるいはどちらかがを倒されれば、世界は改変されていく。なぜならば、彼らがいなくなれば、ヴァルキリア自体が無くなってしまうからね。そうなれば、ヒュプノスはもちろん、君が娶ったタナトスも存在しえなくなる。さらにエルとアビスとも出会わなかったことにもなり、彼女達の縁も無かったこ

とになってしまう。つまり君が今まで築き上げてきたもの全てが無かった世界へと変わってしまうということだ。それがアーテの目的の全貌ということだよ」

……。

余りのも荒唐無稽な真実にどう応えたらいいのかが分からない。

それよりももう一つの可能性が孕ませたこととは言え、まさかヒュプノスとタナトスが私の遠い子孫だったとはな…。

アーテの目的は親友であるカオスをエロスから救い出すことなのだろう。

だが、アーテではエロスに太刀打ちすることが出来ない。

だからこそ、違う可能性である私を自分の都合の良いように育て上げ、エロスを倒すように仕向けたと言ったところか…。

……。

アーテは確かに私を自分の都合の良いように利用したのかもしれない。

だが、それでも私は彼女を恨むことはできなかった。

結局、最強の力を得ようとしたのは私の意志だからだ。

絶世の美女達と出会い、次々と関係を結ぶことが出来た。

……。

アーテの目的であるエロスもしくはカオスを倒すことを実行すれば、過去の歴史が変わる。

ヴァルキリア帝国が栄える可能性が無くなってしまうわけだ。

そして、私が築き上げた酒池肉林の構成員達の絆が断ち切れてしまう…。

それは断じて嫌だ！

せっかく死ぬお思いで関係を築き上げたというのに全てが無かったことになるのは…。

だが、私のもう一つの可能性であるエロスが居る限り、安息の日々が訪れることはない。

いったいどうすれば…。

……。

いや、方法はあるぞ！

エロスを倒しても尚かつ酒池肉林の構成員達と関係性が保たれている平行世界に旅立てばいいのだ！

「ロスト、君の考えていることは手に取るように分かるよ。だけど、それは無理だ。今の君では僕やアーテの力添えで過去、現在、未来の世界を行き来することは出来ても平行世界には手が届かないんだ

よ。それに例え、平行世界を行き来することが可能になっても無駄だよ。エロスはもう君とは別の個体として存在していて、僕と同様に可能性に囚われない唯一無二の存在となっている。だから、エロスを倒してしまえば、エロスが引き起こした可能性に属するもの全て、君達が今まで生きてきた世界が消失し、君の愛しい彼女達との関係は確実に絶たれていく。悲しいことだけど、それが現実だ。それにエロスは唯一無二の存在であると同時にどの平行世界、過去、現在、未来に置いて全て存在する。だから、どの世界も未来が確定してしまっている。そう、君達が言う歪んだ未来さ。今から君にその未来を見せてあげるよ…」

ガイアはアーテとエリスが見ているにもかかわらず仮面を外し、私の前へと跪いてくる。

その素顔は傾国の美貌を誇っているが、何処か悲しげな表情をしていた。

「済まない、ロスト。君にはさらなる残酷な真実を見てもらうよ。全てに絶望し、僕だけしか見れないようにするためにね…ちゅ」

……。

ガイアの唇が私のそれに重なった瞬間意識が急に遠のいてきた。

私の意識がガイアの唇に吸い込まれるようなそんな感覚…。

余りにも受け入れ難い真実を知り、これ以上に目を背けたいものをガイアはさらに見せつけようとするつもりなのか…。

果たして歪んだ未来とはいったい何なのか?

それをどう受け取るかによって私の選択肢が確定してくる。

私はガイアに身を委ねるようにして意識を手放していく…。

……。

第７０話：歪んだ世界

……。

ん？

私は目が覚めて、周囲を見渡す。

生気が感じられない無機質な空間に放置されたかのような孤独感を感じた。

ここはいったい何処だ？

私は確かガイアと対峙して、それから…。

今更ながらも身体が動けることに気づいた。

心細かった私の心は歓喜と開放感に瞬く間に塗りつぶされていく。

今まで当たり前のように身体が動けていたことがこれほどまでに有り難いものだったとは…。

思わず涙が零れそうになったほどだった。

身体には包帯が巻かれたままで、車椅子が無いこと以外に特に変わったことはない。

身体が自由に動けるようになれば、何処であろうとも何とかなるだろう。

それよりも情報収集だ。

ガイアに得体の知れない世界へと飛ばされたのは分かっている。

この世界は見たことが無い金属で建造された物が幾つもそびえ建っている。

ガイアが最初に招待した世界と何処か似ていた。

私が既存していた世界とは違う文明が発達した世界なのだろうか？

ガイアは私に何かを見せたいのだと言って、この世界に送ったのだろうが、右も左も分からない状態だった。

この世界の意味を考えるよりは衣食住を確保することが先決だ。

さて、まずは人を捜さねば…。

「おい、貴様は誰だ？」

いきなり私の周囲に人が群がってくる。

黒装束を身に纏い、見たことがない金属の鎧で身を固めている、兵士とも言える鋭い雰囲気を漂わせた連中だった。

手には見たことが無い武器を構えている。

その武器は私の方へと向けて構えていることから何らかの飛び道具の物なのだろうか。

「私はただ散歩しているだけですが？」

とりあえず事を荒立てたくないから無害な者だと思わせよう。

相手がどんな奴か分からずに喧嘩を仕掛けるのは愚の骨頂だ。

これも生き残るための術というものだ。

兵隊と思わしき連中が戸惑いを見せてきた。

私の存在に驚愕しているかのように…。

「馬鹿な！まだ動いている奴がいたというのか！」

動いている奴だと？

何を言っているのだろうか？

「あの、私に何かあるのでしょうか？」

兵隊達は恐れるかのように武器を私に再度向けてきて、ゆっくりと近づいてきている。

「質問に答えろ。貴様は男なのか？」

……。

この連中は何を言ってるのだろうか？

見てのまま私が男だと分かることだろうに…。

だが、何故、わざわざ男であるかどうか質問してくるのだろうか？

もしかすると男装している女と間違われているのか？

……。

いや、それは無いだろう。

私の顔立ち、服装や髪型にしろ、女だと思わせるような中性的な部分は欠片も見られないのだ。

それでも男だと質問してくることには何か意味があるはずだ。

試しに意表をついて女だと言ってみるか…。

「私は…女…です」

……。

兵隊達は静まりかえっている。

やはり、無理があったのだろうか…。

何だか私が痛い奴かと思われている感じがするぞ…。

「女か…。ならば、服を脱いで裸になれ。女であるなるならば股間に何も付いていないはずだ」

……。

またしても何を言ってるのだ、この連中は…。

見ず知らずの連中の前で裸体を晒すという羞恥心を痛く刺激するような行為を行えと言うのか！

それどころか私を人とも思わず実験動物の状態を確認しているような物言いだ。

「どうした？早くしろ！」

相手は正体不明だが、一つだけ分かったことがある。

連中の常識と私の常識には決定的な溝が存在しているということだ。

要するにまともな話し合いが通じない連中だ！

ならば、取る手はただ一つ！

「防御結界発動！」

私は瞬時に防御結界を発動して、兵隊を弾き飛ばすように突進して包囲網から脱出する。

とりあえず逃げるのだ！

情報も何も無い状態で闇雲に暴れるのは得策では無い！

「奴は男の生き残りだ！捕まえてエロス様に差し出すのだ！」

エロスだと！

それに男の生き残りが何たるかを言っているようだ。

防御結界に凄まじい速さで連打されている衝撃音が響いている。

どうやら私の知らない未知なる武器で攻撃しているようだな…。

もし、咄嗟に防御結界を展開させてなかったらやられていたかもしれない…。

そう思うと身体が震えそうになり、思わず立ち止まりそうになってしまう。

震えるのはこの物騒な連中を巻いてからでも遅くは無い。

今は生き延びることだけを考えろ！

私が通った道筋から爆音が響いてくる。

さらに正体不明の武器で爆裂魔法に似た何かを使ってきたというのか？

未知なるものに対する恐怖が私を襲ってくる。

原初神や破壊神も恐ろしかったが、それよりも案外このような身近な危機こそが一番の大敵だ。

身近であるが故に油断が生じ、気づかない内に死者の国へと御招待

が一番洒落にならない！

それにしてもこんな物騒な事が私の身近になってしまったことが逆に悲しいとも言える…。

目の前に薄汚れた紺色の装束に身を包んだ連中が立ちふさがってくる。

回り込まれたのか？

「俺達はお前の味方だ！伏せろ！」

紺色の装束の連中はいきなり私の味方だと言ってきた。

とりあえず、藁をも縋る思いで私はその場に伏せる。

私の味方だと言った連中もまた見たこと無いような武器で黒装束の連中に応戦していた。

「奴らが怯んだぞ！今だ！」

紺色の服の一人が駆け寄ってきて伏せていた私を立たせるとそのまま手を引っ張って走り出す。

敵の敵は味方だと思って、とりあえずは従うしか無いだろう。

それにもしかするとこの世界についてのことが聞き出せるかもしれない。

一番気になるのはエロスの存在がこの世界でどのような役割を果た

しているかだ。

様付けで呼ばれていたことからかなりの地位を持ってることが伺わせられる。

いったいもう一人の私は何をしでかしたというのだ？

考えれば、いくらでも疑問が出てきてしまう。

……。

思わずため息をついてしまった。

何も考えることなく喧嘩に明け暮れた日々が酷く懐かしい。

私はアーテから最強の力を受け取って酒池肉林を目指すと誓った。

代償は有るにしても、それでも少しは平和的に蜜月を過ごして時間を掛けて築き上げたいと願っていた。

だが、私の思惑を余所に一歩でも足を踏み外せば、死者の国へと真っ逆様な綱渡りな日々を過ごす羽目となってしまっている。

さらに大切な者達が出来てしまったが為に危ない日常から逃げ出せないようになってしまった。

それに引き返す機会ならいくらでもあったのだ。

それでも私は自分の夢と悪運を信じ、あるいはなけなしの良心に従ってそのまま突き進んでしまった。

何処かで大丈夫だろうと楽観していた思いがあったのだろう。

事実、私は今の今までこうして生き延びてきた。

それでも最近は心休まる時がほとんど無いような気がしてくる。

アーテとの試練を乗り越えて、一段落したと思いきや、死んだはずのエリスとの再会した。

それだけなら万々歳だったが、さらには逝かれた道化師で原初神である女に熱愛され、挙げ句の果てに未知なる世界へと飛ばされてしまったわけだ。

そして、その世界で始めに遭遇したのが物騒な黒装束集団で武器を突き付けられて裸体になれと脅されると来た。

正直、いい加減にしろと罵倒したい気分だ。

最強の力を手に入れての代償がこれでは余りにも割に合わな過ぎると思うぞ！

さらなる追加特典を是が非でも希望したいものだ！

でなければ、挫けてしまいそうだ…。

……。

絶世の美女との縁が出来たことに関しては私の人生に置いて驚くべき僥倖だと言っていい。

野郎にとっては過分な出来事であるが、それを全て帳消しにしてしまうような真実をガイアから告げられてしまった。

エロスの存在だ。

私の与り知らぬ所に平行世界というものが無数に存在し、各々に辿る可能性の数だけ別の自分がいるという事をガイアは語ってくれた。

そして、私の数ある可能性の中で最強の力に溺れた最凶最悪の鬼畜野郎であるもう一人の私が存在していること。

さらにそいつこそが未来に歪みをもたらす存在で私の住む世界に戦乱をもたらした諸悪の根元であるらしい。

もう一人の私の名はエロス・ヴァルキリア。

私が私であるためには何とかしておかなければならない敵、まさに宿敵とも言ってもいい存在だ。

だが、相手は原初神にも匹敵するほどの力を持ち、あらゆる世界を行き来することで歴史を自在に変革させることも出来る反則級の能力を持っている。

おまけにあのヴァルキリアを建国し、実力も権力も兼ね備えており、公的にも私的にも絶大な力を有している正真正銘の怪物だ。

それに何よりも同じ私であるが故に手の内も知られおり、経験値が圧倒的に違い過ぎる。

……。

もしかすると私が奴に勝てる要素が何一つ無いということなのか？

となれば、私の夢を実現させるのは無理と言ってもいいほどのものになってしまう。

なぜならば、エロスが居る限り私に安息が訪れることは決してないからだ。

絶望的な事実に気づかされ呆然としている私の手を紺色の装束の者が引っ張り、基地らしき所へと入っていった。

どうやら黒装束連中を上手く撒けたらしい。

その基地は教会らしき様式だった場所であり、所々が破壊されていて見る影も無かった。

「ここなら、平気だ。おい、周囲を警戒を怠るなよ」

「へい！それにしてもまさか本当に男がまだ生き残っていたとはな…」

「まさかエロスの野郎が見逃した男がいたとはね…」

基地でくつろいでいる者達が私を珍獣を見るかのように眺めてくる。

男がそれほどまでに珍しいというのか？

それにしても紺色の連中の素顔を見たが、揃いも揃って美形揃いだ。

貴婦人等がいたら逆の酒池肉林でも起こしたくなるほどだろうな…。

その美形揃いの野郎共の中にいる包帯男である私はさぞ滑稽に見えるに違いない。

不快感は出てくるが、助けてもらったのだから感謝しなければならない。

美形な野郎共は基本受け付けないが、グレイブ殿のこともある。

話し合えば、案外に気持ちが良い連中かもしれない。

「助けてくれたことは感謝する。ありがとう」

「気にするな。俺達だって思惑があってお前を助けたわけだしな」

男は何かの物を口に加えて吸っているようだった。

私の視線に気づいたのか、男は私に自分の吸っている物と同じ物を差し出してくる。

「お前も吸いたいのか？」

私は男が差し出した物をまじまじと見た。

食べ物ではないように見えるが、美味しい物なのだろうか？

「おい、何じろじろ見てるんだ？お前、ひょっとして煙草を知らないのか？」

男の問いに私は肯定の意を取って頷く。

男は差し出した物を引いて、ため息をついて見せた。

「じゃあ止めといたほうがいいな。お子様には不味い物かもしれないからな、くっくっくっ」

男は小馬鹿にしたように含み笑いしてくる。

美形な野郎の馬鹿にした笑いは見ていてかなり腹立たしい。

通りすがりの野郎だったら喧嘩を売っていたかもしれない。

だが、相手は命の恩人だ。

ここは我慢するのだ、ロスト。

「そう膨れた面をするなよ。この世界には似合わない小綺麗な奴に出会えて嬉しいんだぜ…」

男は妙に色気がある流し目で私を見てくる。

……。

生憎私は女が大好きなのだ…。

野郎と友達にはなってもそれ以上の関係を結ぶことは断じて否だ！

「おい、モイラ！何色目を使ってんだよ。幼気な子供を誑かすつも

りなのか？」

「ふん、少しからかっただけだ。だけど、少し本気になってしまったかもな…」

男は馴れ馴れしく私の首に肩を回して耳元に息を吹きかけてきた。

ぐおおおおおおおおおおっ！

思わず、背筋が震えてしまったぞ！

「俺と一発やるか？」

このモイラという野郎はあちら側の趣味なのか！

だが、私にはそんな趣味は持ち合わせてはいないわ！

「遠慮しておく。私は女が好きだからな…」

……。

何だ？

気のせいか、空気が凍った感じがしてきたな…。

「お前、それ本気で言っているのか？」

私の首に回していた腕が締め付けるようにして強くなってくる。

この美形野郎は私に振られたことで怒っているというのか？

もし、殴りかかってくるのならば、さすがに命の恩人とは言えど応戦させてもらうぞ。

無抵抗なまま痛い目に有るのは嫌だからな。

「ああ、悪いが私は野郎には興味は無い。だから…」

「俺は女だ！」

……。

……。

…。

何ですと？

……。

いや、私を騙してからかう算段だろうがそうはいかないぞ！

「また私をからかうつもりなのか？その手にはもう…ぐえっ！」

「俺は女だと言ってるだろうが！この野郎！」

自称女の野郎は私の首を締め上げてきた。

これはもう純粋な敵対行為と見なし、反撃させてもらうぞ！

私は野郎には一切の容赦はしない！

締め上げていた腕を強引に引き離し、肘鉄を溝に炸裂させる。

「あぐっ！」

そして、止めに東洋の神秘である格闘術、柔道の背負い投げで食らわせる。

「きゃあっ！」

可愛らしい悲鳴と共に地面に叩きつけられた音が響く。

可愛らしい悲鳴？

……。

「てめー！モイラに何しやがる！」

掴みかかった野郎に私は反射的に溝に拳をめり込ませる。

野郎は身体を折って崩れていく。

「良い度胸じゃねえか…」

「少しお灸を据えてやるよ…」

野郎共が手指を鳴らしながら近づいてきている。

あの正体不明の武器を使わずに素手でやり合うつもりのようだ。

ならば、こちらも遠慮することないだろう。

私も指を鳴らし、野郎共と向き合う。

喧嘩番長の血が騒いでくるぞ！

貴様等全員漏れなく返り討ちにしてやるわ！

そして、私は黄金の拳を振るって、喧嘩に勤しんでいくのだった。

……。

……。

……。

……。

…。

「どうだ、喧嘩なら負けたりはしないぞ！」

私の周囲には野郎共が眠っているかのように倒れている。

一人一人なかなかの手練れだったが、命のやり取りはともかく殴り合いに置いて私が遅れを取ることは微塵も無い。

襲いかかってきた者全員を見事漏れなく返り討ちにしてやったぞ。

一応、怪我をさせないように手加減はして溝に拳を入れて気絶させる程度にしていった。

野郎共は私の命の恩人等ではあるのだ。

手加減はしたとは言え、これで私の力を思い知らせたことは確かだ。

力づくで私を思い通りには出来ないことを悟ってくれたに違いない。

……。

我ながら何たる愚かな事をしでかしてしまったのだ！

これでは恩を仇で返したようなものではないか！

いけ好かない美形野郎共とはいえ、危ない連中に追われていた私を助けてくれたのだ。

果たしてこの償いはどうすれば良いのか…。

死んでお詫びするのはさすがに御免だが、とりあえずはまず謝罪してからお伺いを立てよう。

もしかすると有る程度痛めつけられるかもしれないが、殺されない程度でならば、無抵抗に受け入れるしかないか…。

痛いのは嫌だが、致し方有るまい…。

そして、最初に伸してやった、確かモイラと呼ばれる野郎がいつの間にか目を覚ましていた。

モイラは気だるそうに私に目を向けてくる。
美形に睨まれるとかなりの迫力だ。
後ろめたい気持ちも相まって、正直かなり恐かった。
「おい、てめえ…」
「はい…」
これは相当怒っているようだ…。
骨の一本や二本は覚悟しないといけないのか…。
せめて平手打ち一発で許してくれると最高に嬉しいのだが…。
モイラは鬼の形相を浮かべて私に近寄ってきて、胸ぐらを掴んできた。
私はこれから来るであろう痛みに備えて目を瞑った。
骨を折ったり、肉をひきちぎったりするようなことは勘弁して欲しいぞ！
不意に私の唇に柔らかい何かが覆ってきた。
な、何だ、これは…。
私は目を開くと美形野郎の目を閉じている顔が私の視界を塞いでい

た。

……。

モイラの顔が近くにあって、唇の柔らかい感触がする。

これすなわち…。

私はモイラに接吻されている？

……。

のおおおおおおおおおおおおおおおっ！

野郎に口づけされてしまった！

野郎に口づけされてしまったぞ！

野郎に…嘆いている場合ではない！

急いで引きはがさねば！

私はモイラを引きはがそうと力を入れようとした瞬間に口の中に何かが侵入してくるのを感じた。

ぐはあああああああああっ！

これはモイラの舌だ！

しかも野郎の癖にとろけるように柔らかくて気持ちいい！

身体の力が抜けてしまう…。

私は女が大好きなのだ！

それなのに野郎に蹂躙されようとしている。

もはや歪んだ未来や宿命やらとか小難しいことを考えてる場合ではない！

今そこにある危機を回避せねばならない！

「くちゅ…ぴちゃちゅぱちゅ」

だが、私の力はモイラの唇と舌によって根刮ぎ奪われつつあった。

私はついに膝を折ってしまい、モイラはそれに気づいたのか足払いを掛けて私を地面に押し倒していく。

「ちゅぱ…ふぅ…てめえ、気に入ったぜ！俺の男になれよ…」

モイラは唇から唾液を糸を垂らし、荒い息を吹きかけてくる。

「くっ…何度も言わせるな。私は男には興味…へぶしっ！」

モイラは私は頬を強烈な平手打ちを食らわせてきた。

一瞬、星が見えてしまった…。

なかなかの一撃だったぞ…。

私でなかったら意識が飛んでいたかもしれないな…。

「てめえこそ何度も言わせるな！俺は女だ！証拠を見せてやるよ！」

モイラは無造作に私の手を掴み、自分の胸に押し当ててくる。

……。

柔らかいな…。

私の手がモイラの胸の中に埋まっていきそうだ…。

……。

ん？

男の胸はこれほどまでに柔らかくないはずだ。

モイラは体型的に痩せているから脂肪が充満してるようではない。

ならば、この胸の膨らみは…。

……。

この胸は乳房だ！

ではモイラは…。

女？

「まさか、貴様は女だ…ひでぶっ！」

モイラは再び私の頬に平手打ちを食らわしてきた。

かなりの一撃だった。

「さっきから言ってるだろ！てめえ、俺にあんまり恥をかかすんじゃねえぞ、おい…」

「すいません…」

モイラの迫力に私は思わず震え上がり、敬語で謝ってしまった。

「ふん、分かればいいんだよ。ふふっ、さっきまで無双してたのに何縮こまってやがるんだ？」

改めて見てみるとモイラは薄茶色の髪を靡かせており、彫りの深い整った顔立ちだった。

野郎としてではなく、女性と見れば、なるほどモイラは美人と言っても良い部類だ。

私が背負い投げをした影響で胸元が破れており、深い胸の谷間も見えてくる。

野性味を帯びた美しい雌猫とでも呼べばいいのだろうか。

何処かタナトスと似たような雰囲気を持っている。

特に気性の荒さはそのままタナトスだ。

「ひょっとして俺の口づけで腰を抜かしてしまったのか？案外だらしないんだな。まあ、いいさ。俺が鍛えてやるよ…」

モイラはそう言って艶めかしい唇を近づけてくる。

そんなときだった。

「おい、モイラ。抜け駆けしようとするつもりか？」

「そうはいかないぜ。俺達も此奴を助けるために苦労したんだからな」

私が先ほど伸した連中が次々と起き上がってくる。

死人が屍食鬼として蘇ってきたかのような光景だ…。

「関係ねえよ。俺だって此奴を助けるために奮闘したんだからな。いわば、早い者勝ちだ…ちゅ」

モイラは不満を言ってる者達に歯牙も掛けずに構わず私に口づけてくる。

それよりも気になることがある…。

心地良い唇の感触を理性全開にして引き離して、モイラに問いかける。

「ちゅぱ…おい、何のつもりだ？まさか、今更嫌になったなんてふ

ざけたことを言うんじゃねえだろうな？」

「そうではない。お前達もしかして皆女性なの…ぶべっ！ぶべらっ！あべしっ！」

今度は往復で平手打ちされてしまったぞ！

脳みそが揺れてしまって危うく意識が闇に墜ちるところだった。

「目の前にこんな良い女を目にしながら別の女に目を向けようとするとは良い度胸じゃねえか！てめえ！」

「ま、待て、落ち着け！私が聞きたいことはそうではない！この世界に私以外に男は存在するのか？」

私の問いに憤怒の形相をしていたモイラは蝋燭の火が消えたかのように無表情になる。

それどころか騒ぎ立てていた周囲の者達も静まりかえっていた。

私は周囲にいる連中を見渡す。

男のような身なりはしているのだが、全員が女だということなのか…。

ならば、男は何処にいる？

あの怪しい黒装束集団が男の生き残りが云々と言っていた。

「てめえ、何も知らねえんだな。この世界にエロス以外の男なんて

生き物は存在しねえよ。いや、違うな。生きている男はいないって言った方がいいんだろうか…」

エロス以外の男が存在しないだと…。

「どういうことだ？」

「どうもこうもねえさ。そんまんまだぜ。世界中の男共は皆エロスに殺されるか、脳死されて種馬として飼育されてしまってる。要するに人類の半分がエロスによって絶滅されてしまったんだよ」

……。

何だと？

世界中の男が殺されているか、種馬として飼育されている？

「世界中の女は自分の者だから、他の男は不要というのがエロスの考えさ。全く逝かれているとしか言いようがないぜ。当然、人類の半分を占める男を皆殺しにしてしまっては新しい女を増やせないとのことで女を増やす種を確保するために辛うじて男を生かしているわけだ。それで女が生まれれば、自分の愛玩人形のように育てていき、男だったら四肢を切断して種を製造するための道具として活かすという最低最悪の下衆野郎なのさ！あのエロスは！」

モイラは吐き捨てるようにエロスの所行を暴露してくる。

……。

モイラの罵倒はまるで私に向けられているかのように痛いものだっ

た。

もう一つの可能性とは言え、エロスは私でもあったのだから…。

干渉に浸るのはもう一つ聞いてからだ。

「モイラ、今ここはどういう場所なのだ?」

今居る場所は何処かによってこの世界が何であるかが大体分かってくる気がする。

いや、もうほとんど分かっているつもりだが、直に聞かなければ受け容れ難いからだ。

「ここはかつてアースガルズと呼ばれていた場所さ。今では単なる掃き溜めだけどね…」

「オイジュス様は?モーモスはどうしたんだ?彼女達は今どうしている!」

今は掃き溜めになっているだと!

だったら、オイジュス様やモーモスはどうなっている?

彼女達がこんな状態を許すはずがない!

私は起き上がってモイラの肩を掴む。

「ちょ、ちょっと!てめえ!うぐっ…」

「いいから答えろ！モイラ！」

オイジュス様とモーモスはいったい何処に居るのだ？

彼女達ならエロスの暴挙に全力で抵抗し続けるはずだ！

「お、おい！少し落ち着けよ！」

周りの者達が私の肩を掴んでモイラから引き離そうとするが、私はその手を払っていく。

「邪魔だ！」

「きゃあっ！」

掴みかかろうとした者は手を払われた勢いで弾き飛んでしまい、周囲の者が受け止める形になる。

私はそれを見て、急激に頭に昇っていた血が下がっていくのを感じた。

モイラに視線を向けると怯えたような目で見ていることに気づく。

「すまない…」

私は我を忘れてモイラに掴みかかっていたことに気づき、居たたまれない気持ちになった。

だが、それ以上に命の恩人であるモイラや皆を怯えさせてしまった。

これでは私はエロスと変わりがないではないか…。

「気にするな…。それでよ…。オイジュス様とモーモス様はエロスに殺されてしまったよ…」

……。

やはりそうなのか…。

「どんな最後だった？」

「聞かない方がいいと思えるほどの内容だぜ。それでも聞くのか？」

エロスは私が辿る可能性の一つでもあるのだ。

耳を塞ぎたい内容だとしても自分を戒めるために聞かなければならない。

私はモイラの問いに首を縦に振った。

「分かった。エロスは公開処刑としてオイジュス様を皆が見ている前で散々と陵辱していき、最後にはギロチンで…。モーモス様はそれを見て、舌を噛んで自殺して、それに憤慨したエロスがモーモスの死体で屍姦してみて…」

モイラも言い辛い内容なのか話が途切れ途切れになってくる。

「もう充分分かった。済まない、嫌なことを思い出させてしまって…」

この世界ではオイジュス様とモーモスはエロスに殺されてしまっている。

……。

ふと私は安心してしまっている自分に気づいた…。

自分の世界のことでなくて良かったと…。

何て事だ…。

私はどうかしてしまっているのか！

この世界で起きたことは今私が生きている世界の未来の出来事なのだ！

それを別の世界だと切り離して考えてしまうとは…。

……。

エロスと私は別物なのだ！

だから、私がそんな非道なことをするはずがない！

オイジュス様とモーモスにそんな非道なことを私が…。

……。

駄目だ、自分でも支離滅裂で何を考えてるのかが分からなくなってきた…。

落ち着け、ロスト！

冷静になって考えろ！

今すべきは何だ？

……。

さっぱり分からない！

こんな時に頭が働かないとは…。

「色々と混乱してるんだろう？少し落ち着いてから考えろよ…」

……。

いつの間にかモイラは私の頭を抱いていてくれていた。

モイラの胸の感触が熱くなっている私の頭を冷やしてくれる。

……。

そうだ…。

今はとりあえず落ち着こう。

高ぶった気持ちを落ち着かせるのだ。

今まで通り、考えても仕方ないことは今は考えるな…。

まあいい、で受け流せ。

……。

まあいい。

今は現状を受け容れてることに専念するのだ。

この世界ではオイジュス様とモーモスはもういない…。

いないのだ…。

なぜだろうか？

目から熱い物が溢れてくる。

「泣けよ。ほら、顔は隠してやるからさ…」

モイラは私の顔を隠すように頭を自分の胸へと押しやってくる。

今はモイラの優しさに身に染みてくる…。

雑念を追い払うためにも涙を精一杯流すのだ…。

涙を流し尽くしてから冷静になってこれからのことを考えよう…。

私はモイラの胸の中で恥も外聞も捨てて思い切り泣いたのだった。

……。

ここはエロスの欲望が叶えられてしまった世界だ。

如何にしてこのような歪んだ未来へと変貌したのかを私は突き止めなければならない。

そして、私の残忍な可能性が引き起こした悪夢の楽園を終わらせなければ…。

この世界のオイジュス様とモーモスの死を無駄にしないためにも…。

第７１話：死神

私はモイラの胸の中で涙が枯れるまで泣いた後、改めて皆に謝罪をした。

全員が「気にするな」の一言で済ましたことで改めて自分が如何に酷いことをしてしまったかを実感させることになった。

本当にもう少し冷静に周囲を見ていかなければな…。

それにしても皆下手な男よりも遙かに男らしい性格をしている連中だとつくづく思う。

私が女で皆が男であれば、逆の酒池肉林で狂喜乱舞していたこと間違いないだろう。

一応、男である私一人とモイラを初めとする全員が女であるわけで酒池肉林を目指せる環境なのだが…。

「安心しろよ。俺達がてめえを守ってやるぜ！」

「お前は私達の希望なんだ。エロスの野郎なんかに渡したりはしないさ」

「甘えたくなったら何時でも胸を貸してやるよ…」

この方々が余りにも凛々しくて気後れしてしまうのだ…。

戦闘ではともかく人生経験では明らかに圧倒的な差がある…。

とにかくこの世界は私の居場所では無い。

だから、ここで酒池肉林を起こしても仕方がないと割り切るのだ！

モイラは私の下に寄ってきて手を差し出してくる。

「そう言えば、てめえの名を聞いてなかったな？改めて名乗らせてもらうぜ。俺の名はモイラ。てめえは？」

そう言えば名乗りのを忘れてしまっていたな。

「ロストだ」

私はモイラの差し出した手を握る。

「そうか、ロスト。てめえはこの世界の者なんかじゃねえんだろ？」

……。

いきなり切り出してくるわけか…。

ここは正直に答えるべきかもしれない。

私は彼女達にとっては見ず知らずのよそ者なのだ。

少しでも自分の情報を明かして信用を得なければならない。

「そうだ。私は別の世界からやってきた」

「やっぱりな。そうか、それが分かればいいんだ。じゃあな…」

モイラは私を悲しげにだが、嬉しげに見るような顔を見せて、去っていく。

彼女は私の中で何かを見たのだろうか？

思慮の浅い私如きでは知る術も無い。

……。

……。

…。

「これが機関銃って武器だ。細かいことを言えば、その名前は総称で色々と種類があるんだが、それはいい。何よりも重要なのは如何に使いこなして敵を殺せるかだ」

私は今モイラに正体不明だった武器についてを教えてもらっている。

この武器は弓矢よりも早い速度で遠距離の敵を殺傷出来るという便利というよりは恐ろしい武器だった。

「ここが安全装置だ。これを動かさない限り、不用意に弾が飛び出ることはない。だからといって冗談で銃口を向けるんじゃねえぞ。それで殺されたって文句は言えねえからな」

モイラは手取り足取りに私に武器の扱いを教えてくれる。

まさに個人授業と言ってもいいと思えるほどの美味しい状態だ。

後ろから私の手に自分の手を添えて撃つ姿勢や敵を狙うときの視線や角度を的確に言ってくる。

だが、私は彼女の有り難いご教授が脳に記憶されることは無かった。

それ以上の感覚が脳髄に刺激していたからだ。

「この武器は魔法や弓矢を扱えない者にとってはこれ以上にないほどの武器だ。だけど、子供でも簡単に扱えて、大の大人を簡単に殺せる恐ろしい武器だ。引き金の重さが命の重さと感じてしまう代物だからな…」

真剣に語ってくれるモイラには悪いが背中に当たる巨乳の感触で私の頭の中は煩悩で埋め尽くされてしまっている。

こんな時間が末永く続いて欲しいものだ。

「おい、てめえ、ちゃんと人の話を聞いてんのか？」

全く聞いていません。

貴女の胸の感触を堪能しています。

心の中ではそう思っていてもきちんと良い言い訳で返さないと平手打ちを食らわされてしまう。

「あ、ああ、聞いている」

「だったら説明してみろよ？」

……。

とにかく危ない武器だから気を付けろとのことだろう。

それしか分からない、というよりは聞いていない。

どうしようか…。

言い訳なんて思いつくはずもない。

大人しく愛の鞭を受けるしかないだろう。

「すいません。実は聞いてません…ぐえっ！」

「俺が直々に教えてやってんのに聞いてねえだと！良い度胸じゃねえか！ああん？」

モイラはそのまま背後から首を締め上げてきた！

だが、同時に胸が私の背中に潰れるように押しつけられていく！

これは天国と地獄ともいうべき状態だ…。

「てめえ、俺の話を聞いてないで何を考えてたんだ？」

「モイラの胸の感触が気持ちよくてつい…済まない。次はきちんと話を…ぐおっ！」

モイラは私の頭を鷲づかみにして自分の方へと向かせていく。

「どうやら少しは元気が出たみてえだな。あんときのてめえは悲壮感が出まくっていたからな…」

どうやら私が元気出たのだと思ってくれたみたいだ、これならば…。

「けどな、だからと言って俺の話を聞いてないことに関しては許してやらねえぞ…」

モイラは獰猛な笑みを浮かべて、掌を上げてくる。

やはりそうなってしまうのか！

「歯を食いしばれ！」

「ぶべっ！ぶべらっ！はべらっ！もべらっ！」

モイラの熱い平手打ちが往復で私の両頬を張られていく！

脳が揺れて意識が飛んでいきそうだった…。

……。

……。

…。

「いいか？これは命に関わることなんだ！雑念を払って俺の話をちゃんと聞けよ。分かったな？」

「はひ…」

私は膨らんだ両頬を押さえながら返事をした。

後で回復魔法を掛けておかないと食事が出来ないかもしれないな…。

「まあ、分かればいい。それにてめえが溜まっているのに気づかなかった俺にも落ち度があるわけだからな…」

モイラは私の首に腕を回して引き寄せてくる。

「最初に言ったよな。俺の男になれってな。あれ、本気なんだぜ…」

モイラは私の足を払い、最初の時のように押し倒してきた。

「私の力に惹かれたのか？」

「腕っ節もそうだけど、それだけじゃないぜ…」

モイラとは黒装束に襲われている所を助けてもらうという劇的な出会いを果たした。

だが、私は喧嘩が強い以外で取り立てて良い所を見せた覚えは無いのだが…。

モイラは何故、私を好いてくれるのかが疑問だ。

「だったら何だ？」

「教えてやらねえよ。自分の胸に聞いてみな。少し強く張りすぎたか。癒してやるよ…ちゅ…ちゅちゅぱ」

モイラは私の両頬を交互に唇を押しつけていき、時折舌で舐めて痛みを和らげてくれた。

回復魔法では無いが、これは大いに癒されるぞ。

「ちゅ…俺はこの時を夢見たんだ…ちゅ…てめえとこうやってやるのをな…ちゅぱ」

「私とやることを夢見ていたとはいったい…むぐっ」

モイラは私を黙らせるかのように唇で塞いでくる。

私はモイラと以前何処かで出会っていたのか？

これほどの美女であれば忘れるはずはないのだがな…。

モイラは口づけをしながらも私の身体に巻いてある包帯を解きにかかっている。

私と早くも一戦を交えるというのか…。

ならば、私もただの野獣となって…。

「モイラ！奴らが襲撃を仕掛けてきたぞ！」

「何だと！敵の規模は？」

モイラは私を放置して即座に立ち上がって武器を手に取っていく。

……。

この振り上げた欲望は何処に吐き出せばいい？

せっかく燃え上がるとことだったというのに…。

おのれ、エロス…。

この恨み、晴らさせてもらうぞ！

私もモイラを追うように機関銃とやらを手に取って起き上がる。

……。

……。

…。

モイラは教会の中心である祭壇に駆けつけていく。

祭壇では皆が敵の侵入を防ごうと窓際にバリケードを敷いて応戦している様子だった。

『無駄な抵抗は止めろ！反乱軍の残党共よ！』

壁が破壊され、私を追いかけてきた黒装束集団が侵入しようとしてくる。

「いくぜ、ロスト！」

モイラは果敢に機関銃と剣を両手に持って黒装束集団に立ち向かっていく。

他の者達もモイラに続いて突撃していった。

……。

神武闘式のような大会では無い、久しぶりの戦場、殺し合いの舞台…。

私は汗に濡れる掌で機関銃を握りしめて、震える足で戦場に立つ。

元々私の居場所では無い世界での戦いだが、私は確かにこの世界に今存在しているのだ。

歴史の改変やエロスの陰謀やらと考えることは沢山あるが今を生き延びねば全てが無駄になってしまう。

生き延びるためには屍を乗り越えて戦い抜くしかないのだ！

「うおおおおおおおっ！」

私はいつの間にか雄叫びを上げて敵軍に向かって突っ込んでいた。

モイラと交わりかけていたせいなのか、気分が異様なほどに高まっていたのかもしれない。

手に持っていた機関銃は火を吹き、襲いかかってくる敵達が次々と

血の花弁を散らしていく。

「きゃああっ！」

「ああっ！エロス…様…」

声質からして、どうやら黒装束集団も全員の女のようだ。

顔を隠してくれていたことが私にとっては幸いだった。

もし素顔が見えて、相手が絶世の美女でもあったら、戦意が逸れていたかもしれないから…。

……。

それにしても本当にこの世界には男が私とエロス以外には存在しないようだな。

ならば、エロス以外は全て女が敵だということになる。

女達を侍らして酒池肉林を目指す私が生き延びるために女を殺していく…。

私にとっては何とも皮肉に満ちた、言葉通りに歪んだ世界だ…。

黒装束の何人かが弾幕を抜けて、私に向かって剣を振り上げてくる。

私は応戦しようと機関銃の引き金を引くが、弾が発射されない。

ちっ、弾切れなのか！

ここは味方が密集しているから殲滅魔法のような広範囲の攻撃を繰り出してしまえば確実に巻き添えさせることになる。

私は弾切れになった機関銃を振って、襲いかかってくる敵を薙ぎ払っていく。

だが、いくら薙ぎ払っても敵の勢いが止まることが無い。

味方が黒装束の弾丸に貫かれて次々と倒れていく光景が目に映っていく。

モイラも肩から血を流しながらも死にものぐるいで銃を乱射している様子だった。

このままいけばいずれ全滅してしまう。

最低限、私が生き延びることが出来たとしても右も左も分からない世界を一人で渡り歩くは危険過ぎる。

今後、私が生き延びるためには彼女達が必要なのだ！

殲滅魔法が駄目ならば、機関銃のような小規模な魔法を使えばいい。

機関銃のような目にも留まらない弾丸を速射できるように想像するのだ！

掌に魔力を弾丸の如く圧縮された弾が大量に生み出されていく。

さあ、私と味方である彼女達に刃を向けてくる全ての敵に向かって

飛んでいけ！

敵を皆殺しにするのだ！

私の思いが込められた魔力弾は一斉に黒装束集団へと飛来していく。

魔力弾は正確無比に敵の脳天を貫いていき、瞬く間に絶命させていく。

敵とは言え、女なのだ。

せめて苦しませずに瞬殺するのがせめてもの情けだ…。

敵達は声も出すことなく、頭から血を吹き出して倒れていく。

……。

本当に敵の素顔を見えなくて良かった…。

とりあえず、この調子で敵を殲滅させよう。

『ほほう、なかなか活きの良い獲物が忍んでいるようじゃのう…』

凍てつくような殺気を感じ、反射的に防御結界を展開させる。

その瞬間に敵味方関係無く戦っていた者達が粉微塵に切り裂かれていった。

……。

何が起こったのだ、これは…。

後方で射撃をしていたモイラ等は無事だった。

血溜まりの中を悠然として歩いてくる人影が見えてくる。

黒衣を装い、手には巨大な鎌を持っていた。

その姿はまさに現世に降り立った死神そのものだった。

『初めましてかのう。儂の名はカロン。主エロスの使いっ走りの神とでも言えばよかろう…』

嗄れた老人の声、しかも男の神なのか…。

フードの奥からは皺が刻まれた口元が見えてくる。

どうやらエロスは神に関しては男の勘定を入れていないようだ…。

それよりも…。

私は切り刻まれたモイラの仲間だったものを見下ろす。

彼女達とはそれほど親しく話したわけではない。

それでも時間をかけて付き合えば、もしかすると仲良くなれていたかも知れない。

もはや考えても仕方ないことだ。

なぜならば彼女達はもう死んでいるのだから…。

……。

エロスの使いっ走りの神だと自称した敵カロン。

神降ろしでは確か、自分の従者として使役する方法があるとクロエは言っていた。

だが、それを行うためには人の身では有り得ないほどの莫大な魔力を要するとも聞いた。

それでもエロスならば容易いことなのだろう。

原初神にも匹敵するほどの力を有していると原初神であるガイアが言っていたのだからな…。

「お主がこの世界に紛れ込んだ男だというのか？力といい申し分ないのう。お主、エロスにその優れた遺伝子を捧げるがいい。さすれば、これ以上の戦いは止してやるがのう。どうじゃ？」

カロンは鎌を私に向けて言ってくる。

「ふざけるな！一時は見逃しても忘れたようにすぐに狩りをするつもりなんだろ！この狩人め！」

私が口を動かそうとした瞬間に割り込むようにしてモイラが私の前に出て、カロンに啖呵を切ってくる。

「俺は忘れねえぞ！てめえがクロエお姉ちゃんを切り刻んだことを

な！」

「ふぉっふぉっふぉっ、黒の聖女と呼ばれていたあの愚かな女のことか。大人しくエロスに腰を振っておけば良かったものを。愚かな女じゃったのう…」

……。

今何と言ったのだ？

目の前のこの死神がクロエを切り刻んだと…。

「てめえ等にロストは渡さねえぞ！うおおおおっ！」

モイラはカロンの向かって銃を乱射していく。

だが、カロンは不可視の防御結界で弾丸を弾き、嘲りの笑みを浮かべる。

「ふぉっふぉっ、ならばお主でも構わぬのじゃぞ、反乱軍副頭モイラよ。エロスはお主の美貌を大変高く評価しておる。お主にその気があれば、このような薄暗い所に引き込まなくとも…」

「うるせえ！死神じじい！俺が腰を振る相手は惚れた野郎の前だけだと決めてるんだ！最低鬼畜野郎なんて死んでも御免だぜ！」

モイラに続くように他の者達も銃をカロンに向けて発射していく。

「それほどの美貌があるというのに死に急ぐというのか…。残念じゃのう。なれば、黒の聖女と同様に地獄の亡者共を相手に腰を振る

が良かろうて…」

カロンは鎌を向けてくる。

その穂先には強大な魔力が収束し、黒球が形作られる。

「デッドリィ・バースト」

黒球は急激に巨大化していき、モイラ達は撃ち出す弾幕をも呑み込んでいく。

「消え去るがよい」

カロンは鎌を振って巨大化した黒球が基地である教会丸ごと呑み込むように迫ってきた。

……。

「貴様がクロエを殺したというのか…」

私は啖呵を切っていたモイラを退かせて前に出ていく。

「ロスト！」

「下がっていろ、モイラ…」

これは生き残り合戦ではない、クロエへの弔い合戦だ！

「オーディン！」

銀色の光を放つ魔法陣が出現する。

迫り来る黒球が魔法陣へと吸収されていき、倍以上の大きさの黒球がカロンの方に向かっていく。

「何と！反射魔法を使いよるのか、お主は！」

クロエは私の酒池肉林の最有力候補に上げていた女だ！

それに私に家族の暖かさを教えてくれた掛け替えのない人だった…。

この世界のこととはいえ、クロエを殺した貴様だけは！

「カロン！貴様を殺す！」

「ふっ、抜かしたな小僧！己の技でやられるほど儂は間抜けではないわ！」

カロンは鎌を振って、迫ってくる黒球を真っ二つにして霧散させていく。

その隙に私はカロンの間合いに瞬時に詰める。

「お主！」

瞬く間に目の前に来た私を見てカロンは驚愕した顔を見せてくる。

その間抜けな面に黄金の拳を炸裂させていく。

「ぐぼぉあああっ！」

カロンは顔から盛大に血を吹き出しながらも私から距離を取っていく。

「ぐっ…ぬかったか。なれば、これはどうだ！フォーリング・ゾーン！」

「きゃああっ！」

「なんだこれは！」

後ろから悲鳴が聞こえてくる。

振り向いて見るとモイラ達が地面の黒い影のようなものに呑み込まれていく光景がそこにあった。

「隙ありじゃ！小僧！」

「ぐあっ！」

背中に熱い痛みが感じる。

油断してカロンに背中を切られてしまったか！

「ふぉっふぉっ、守る者が多ければ大変じゃろうて。お主は一足先に冥府へと旅立つがよいぞ！」

止めの一撃と言わんばかりにカロンが鎌を振り上げていく。

「貴様に構っている暇は無い！」

私はカロンの斬撃を交わして、沈んでいこうとするモイラ達の元へと駆けつけていく。

「ぐふっ！」

背中に何かが突き刺さったかのような激痛がしてくる。

今度は魔法の矢が背中に突き刺さったのか…。

「愚かじゃのう。弱き者なぞ見捨てればよいものを…。あの黒い聖女もそうやって童共を守りながら戦って無様に死んだのじゃからな、ふぉっふぉっふぉっ！」

「ぐあぁっ！」

カロンが背後から放ってくる矢が背中や足に次々と刺さっていく。

それでも私は沈んでいくモイラ達の元へと立ち止まることなく走る。

背中の激痛もカロンの嘲笑も弔い合戦も今はどうでもいい！

彼女達を助けないと！

クロエを殺した相手だということで頭に血が上ってしまった私の責任だ！

彼女達の側から離れずに防御魔法を展開するなり補助する役目に徹するべきだったのだ！

私は大量の縄の形を想像し、掌から縄を彼女達に向かって伸ばしていく。

「早くその魔法の縄に掴まれ！」

本当なら影を吹き飛ばしてやりたいところだが、それをすればモイラ達も巻き込んでしまう恐れがある。

「馬鹿野郎！俺達に構わずさっさと逃げろ！」

モイラの罵倒する声が響いてくる。

「黙れ！お前等を見捨てて逃げたとあってはクロエに逢わせる顔が無いのだ！」

彼女達はクロエが命懸けで守った者達だ！

ならばクロエの死を無駄にしないためにも彼女達をこれ以上死なせるわけにはいかない！

それに私のもう一つの可能性のせいで起こった悲劇なのだ…。

影から刃物のようなものが出現し、私の作った魔法の縄を切断されていく。

馬鹿な、この影は生きているのか？

私は切られないように縄の強度を上げていった。

だが、切れないと見るや刃は縄を掴んでいる女の腕を切断して引き

ずり込もうとしてくる。

腕を切断された者は悲鳴を上げて瞬く間に影に呑まれていく。

これでは縄の強度を上げた方が事態を悪くさせてしまうではないか！

「ふぉっふぉっ、無駄じゃ。その影は儂の一部じゃからのう。呑み込んだ者は儂の養分となって消えていくのじゃよ…」

「カロン、貴様！」

綱や腕が切られたことで彼女達は影の中へと呑み込まれていく。

「ロスト…早く…逃げろ…」

モイラは見てみると既に首元まで沈んでいる。

他の者達も完全に呑み込まれる寸前となっている。

もはや、どうすることもできないのか…。

……。

いや、一人だけぐらいならば何とか助け出せるかもしれない。

だが、それは他の者を見捨てる形にもなってしまう…。

……。

済まない、みんな…。

私は残酷な決断を下そうとしている…。

この世界で生きていくには誰かが私には必要なのだ…。

そして、一人しか助けることが出来ないのならば、一番親しくなれたモイラを助ける！

モイラだけを助けて、他の者は見捨てることにする！

……。

クロエ…。

お前の方が最強の力を持ってる私よりもよほど強かったのだな…。

私はお前のようにみんなを守ることができない…。

最強の力を持っておきながら何て情けないのだと私を怒鳴り散らしてくれ…。

もし、この世界で死んでしまったときにはお前の怒りを甘んじて受けよう！

「ロキ！」

私は身体能力を最大限に強化し、今まさに沈もうとしているモイラの元へと一直線に飛び込んでいく。

影は私を排除しようと剣や槍などを出して斬りかかっていくが、ロ

キで強化された私の身体には刃が通ることはなかった。

同時に彼女達に刃を突き立て、息の根を止めようとしてくる。

獲物を横取りされる前に殺してしまおうとするつもりなのか！

そうはさせんぞ！

モイラの頭に切り刻もうとする刃を私が神速の速さで受け止め、そのままモイラを影の中から引きずり出していく。

「ロスト！おい、俺よりも他の奴を！」

「無理だ！お前だけを助ける！」

私は暴れるモイラを抱き締めて影の中から飛び立っていく。

「ひぃいい！やだ！じに…だく…ない！」

済まない…。

「助けて！私にはまだやり…がはっ！」

済まない！

「わたしも…だずげでぇえええええっ！」

済まない、みんな！

「離せ！ロスト！彼奴等が！彼奴等が！」

「無理だ！もう助けれないのだ！」

モイラを抱きかかえて飛んでいる私の前にカロンが立ちふさがってくる。

「誰一人とて逃がさぬよ。儂は狙った獲物は全て仕留めるのが主義なのじゃ」

「オーディン！」

カロンが鎌を振りかぶった瞬間にオーディンを展開させるが、背後から殺気を感じた瞬間に凄まじい激痛が襲ってくる。

いつの間にか背後から斬りつけられてしまっていた。

後ろにはカロンがいた。

だが、目の前にもカロンがいる。

カロンが二体もいるというのか…。

「ふぉっふぉっ、儂は影で分身を作り出すことができるのじゃ。儂は戦闘よりも暗殺の方が得意なのじゃよ」

二体のカロンが繰り出してくる斬撃を避けながらも何とか逃げ出す方法を考えていく。

……。

不意に意識が飛びそうになってくる。

そう言えば、回復魔法を掛けるのを忘れていたな…。

だが、回復魔法を自分に掛けてしまえば、必ず隙が出来てしまう。

回復する過程で注意がどうしても自分の身体に向いてしまうからだ。

それに忘れがちだが、最強の力を持っていても戦いに関しては私は素人の域には脱していないのだ。

今までの敵は駆け引きを持っていても、それを全て帳消しにできるほどの力の差があったから勝てていたのだ。

もし、私と同等の力を持っていて、尚かつ駆け引きが出来る者と戦えば、確実に負けてしまう。

「ロスト…てめえは…」

身体は満身創痍でモイラを抱えた状態では分が悪すぎる。

カロンがどれほどの神格であるかは分からないが、油断出来ない相手であることは確実だ。

「お主等はここで儂に狩られるのじゃ」

「そして、儂の養分となり、生を全うするが良い」

「ふぉっ、ふぉっ、ふぉっ…」

カロンがいつの間にか三体にまで増えている。

このままの調子でいけば、四体でも五体でも増えてきそうだ。

そうなってしまえば、もはや手に負えなくなってしまう！

その前に何ともしても逃げなければ！

このような火事場では総じてこの技で強引に脱するのがお約束だ！

私はモイラに防御結界を掛けていく。

「何をするつもりなんだ？ロスト？」

「黙っていろ！」

これで準備は完了した。

後は技を発動させるのみだ。

とくと食らうがいい、カロン！

根暗野郎である貴様等に灼熱の太陽を拝ませてやるぞ！

「カタストロフ・サン！」

私とモイラを包むように漆黒の炎が出現し、それが瞬間的に巨大な太陽の如くの炎球へと形成していく。

包囲していたカロン等は巨大化した太陽に呑み込まれていく。

「ぐあああああああああっ！」

「おのれぇえええええええっ！」

三体の内、二体のカロンは断末魔の悲鳴を上げて燃え尽きていった。

だが、残念なことに辛うじて一体のカロンが何とか太陽の外へと離脱していくのが目に留まった。

ちっ、肝心な本体を仕留め損なってしまったか…。

「ロスト！モイラ！この痛みは忘れぬぞ！お主等は儂が必ず殺す！冥府の果てであろうとも追い詰めて、追い詰め抜いて、追い詰め尽くして殺してやろうぞ！覚えておくがいいわ！」

カロンは炎を身に纏いながらも凍えるほどの怨嗟の言葉を吐いて、虚空へと姿を消していった。

……。

何とも厄介な奴を仕留め損なったものだ…。

だが、一時的とは言え、窮地を脱することは出来た。

私は最後の力を振り絞って地上へと着地していく。

「おい、しっかりしろ！ロスト！」

崩れようとしていた私をモイラが支えてくれる。

「済まない、モイラ。みんなを助けられなくて…」

私の身体はもう紅に染まっていない所が見当たらないほどに血を流していた。

……。

とりあえず、モイラだけは救うことは出来ただけでも良かったと理納得しよう。

無理矢理にでも納得しなければ気が狂いそうだ。

それにしても痛いのは嫌いなはずなのに、最近の私は進んで痛い目に逢ってばかりだな…。

もしかしすると恥ずかしい性癖に目覚めてしまったのかもしれない。

……。

「せっかくまた逢えたってのに…」

モイラの声が震えている。

泣いているのだろうか？

それよりも何だか眠たくなってしまったな…。

意識が闇へと墜ちていく…。

「絶対に！絶対に死なせねえからな！てめえは俺の…」

最後に目にしたのは涙に濡れたモイラの泣き顔だった…。

……。

第72話：モイラ

当たり一面は闇一色だった。

私は闇の世界の中で一人佇んでいた。

寂しい。

一人は嫌だ。

孤独になるのは耐えられない。

だから、私は腕っ節を上げていって、誰かに構ってもらいたかった。

喧嘩番長という恥ずかしい名前を上げて注目されたかったのだ。

だが、世の中には自分よりも強いものなぞいくらでもいる。

所詮、私は井の中の蛙。

小さな森でお山の大将を気取っている馬鹿な子供に過ぎなかったのだ。

それを悟った時に私は戦いに恐怖を抱き、衣食住が保証され、女と酒があればと夢に逃避するようになってしまった。

その時、私は自分に世界を変革させるほどの力が眠っていることなぞ露ほどに思ってもない。

ある日、無駄な夢を見ながら無為に過ごしていた私に純白の軍服を纏った女将軍が率いる軍隊が村に押し寄せてきた。

そして、女将軍は私に言ってきたのだ。

『貴様には神の血が流れている。その力をブリュンスタッドに捧げるがいい』

今思えば、私を誘ってきた純白の女将軍はアーテだったのかもしれない。

私の人生はアーテによって大きく変革されていくことになっていく。

最初は恐いと思っていた殺し合いもいつしか慣れていき、私は英雄と呼ばれるほどまでにのし上がってきた。

沢山の美女とも知り合いになり、関係も結んできた。

全てが順調に進んでいたのだ。

例え、誰かの掌に踊っていたとしても…。

例え、誰かが用意してくれた道だとしても…。

私にはそれに拘るほどの誇りは微塵も持ち合わせていなかったので、夢を与えてくれた神に大いに感謝した。

このまま私は夢を叶えていき、沢山の美女に囲まれ、やがて腹上死という華麗なる最後を迎えるのだろうとこれからの人生に期待を寄せていた。

だが、世の中には必ず何らかの代償を支払わねばならないことがあるということも同時に悟ってしまったのだ。

アーテは私に自分の尻ぬぐいをさせるために力を与えてくれた。

尻ぬぐいとは可能性の数だけ存在するという平行世界に存在するというもう一人の私を始末すること。

戦乱を巻き起こしているヴァルキリア帝国の建国者にして、初代皇帝であり、今の世界情勢を造り上げた諸悪の根元であるエロス・ヴァルキリア。

アーテに力を頂いたことを足がかりに人類の半分を占める女を全て我が者にし、もう半分を占める自分以外の男を全て虐殺もしくは家畜にするという絵に描いたような悪逆非道な男。

エロスの力は原初神にも匹敵しており、もはやアーテではどうしようも出来ないほどまでに成長していた。

だから、別の可能性である私に目を付けていき、エロスとは別の方面で私を育て上げてることにしていったらしい。

すなわち、神の試練と言う名の修行。

理不尽かつ悲惨な修行は私に何度と臨死体験をさせてくれるという有り難くもない経験を何度ももたらしてくれた。

それでも私は浅ましいほどに生きる執念があったことから何とか生き延びることが出来たのだ。

やがてアーテの力をも凌ぐほどに私の力は成長していくのだった。
そして、私はアーテの師匠でもある原初神ガイアと遭遇して…。
……。
そうだ、私はガイアによって歪んだ世界と成り果てた未来の世界へと飛ばされたのだ。
エロスの欲望が満たされた狂った楽園。
その楽園を築き上げるために犠牲になった者達。
オイジュス様。
モーモス。
そして…。
……。
ふと耳に懐かしい音色が響いてくる。
これは確か、クロエが吹いていた篠笛の音色。
クロエは確か、あの死神によって八つ裂きにされたのでは…。
暗闇の世界の中に一条の光が灯っていた。

その光の中では天真爛漫に騒いでいる子供達とその中心にいる黒い僧衣を纏っている女性がいた。

『クロエっ！』

クロエがある少女に篠笛を渡していた。

渡された少女はあのおませで大人顔負けの色気を放っていた少女だった。

クロエは少女に篠笛を渡し、闇の中へと消えようとしていく。

私は消えようとしているクロエに手を伸ばすが届かなかった。

『待ってくれ、クロエ！』

私の声が聞こえたのか、クロエは振り向いてきた。

『クロエ…』

クロエはただ私に微笑みかけていき、闇に消えていく。

私は消え去っていくクロエをただ呆然として見送るしかなかった。

『包帯のおじさん、悲しまないで…』

目の前に篠笛を渡された少女が私の裾を掴んでいた。

『私がクロエお姉ちゃんの分までおじさんを守るから…』

少女はそういって私を抱きついてくる。

『おじさんが一人寂しくしていたらお嫁さんになるって約束したもんね…』

少女は太陽のような笑顔を見せ、首飾りの石が光り出してくる。

闇夜に包まれていた世界は光に満ちていき、光に目を眩ませて私は…。

……。

……。

…。

「眩しい…」

私は目を覚ます。

先ほどの出来事は全て夢だったのか…。

私は見知らぬ部屋のベットで寝込んでいた。

窓からは日の光が差し込んで眩しかった。

「ロスト！目が覚めたのか！」

日差しを遮るかのようにモイラの顔が覗き込んでくる。

首元には夢の少女がつけていた首飾りが垂れていた。

「お陰様でな…」

「馬鹿野郎！心配したんだぞ！」

モイラは涙声で抱きついてくる。

抱きつかれたことで身体に激痛が走ったが、気合いで何とか我慢していく。

「すまない。それにしても、お前がまさか、あの時の少女だったとはな…」

私は胸元に隠してあった首飾りを取り出して、モイラに見せる。

「今頃気づいたのかよ。おせえんだよ、この野郎…」

モイラは私の胸に埋めていく。

……。

それにしてもあれほど蠱惑的な色気を放っていた美少女が男装の麗人に変身しているとは…。

月日の流れとは恐ろしいものだ…。

あれほどの慎まやかな胸が私の身体を押しつぶすとも言わんばかりに強調されている。

さらに私の胸の高さまでしかなかった背丈が今や私よりも頭二つ分以上までにも成長していると来ている。

……。

男としての尊厳がまたしても打ち砕かれたような気分だ…。

なぜ、神は私の成長をここで止めてしまったのか…。

思わず涙が流れてしまったぞ…。

「何泣いてるんだよ。そんなに俺に会えたことが嬉しいのか？」

モイラは私の涙を自分と再会したことで感涙しているのだと勘違いしていた。

まあ、本当は自分の尊厳が著しく損なわれたことに対する悲哀の涙なのだが、敢えて否定することもないだろう。

「ああ、そうだ…」

「そっか、俺も会えて嬉しかったんだぜ。最初は偽物かもしれないと思ったけど、別世界からやってきたんだったら納得したよ…」

最初は偽物と思っていたのか…。

それにしてもモイラはどのような経緯でこれほどまでに矢探れてしまったのか…。

この世界での私はいったいどうなってしまったのだろうか？

「この世界の私はいったいどうなったのだ?」

……。

モイラは私の胸に顔を埋めたまま沈黙していた。

……。

もしかすると…。

「この世界の私はエロスに殺されてしまったのか…」

モイラの身体が震える。

これは肯定ということなのか…。

「そうか、ならば、私が偽物だと思われても仕方なかったわけか…」

この世界での私はエロスに敗れ去ってしまったのか…。

何故か実感が湧かなかった…。

私と言えども、私では無い私の死だ。

話したことも無ければ見たことも無い。

何も感慨が湧くことは無かった。

だが、このモイラにとっては唯一無二の存在だったのだろう。

「てめえが死んでから、オイジュス様とモーモス様もエロスに特攻をしかけたんだけど、囚われてしまって、俺達はクロエ姉ちゃんに連れられて何とか逃げ延びたんだ。だけど…」

エロスが使役する死神カロンの手にかかってしまったということか…。

タナトスやケールも恐らくエロスか、その取り巻きにやられてしまったのかもしれない…。

アイリやエリー、ロンやエクリアもまた同様に…。

エロスによって、この世界の私とそれに関わる者達はやられていったのだ…。

……。

この世界の私はエロスに負けてしまったが、この私はまだ負けたわけではない。

私が育った世界ではまだ守るべき者達がいる。

まだ酒池肉林の夢を果たしてはいない。

それに…。

「な、何だよ。人の顔をじろじろ見やがっ…てっ…いきなり何するんだ！」

暴れるモイラにしがみつくようにして私は抱きついた。

「よく生き残ってくれた、モイラ…」

……。

モイラは私の背中に腕を回してくる。

「てめえが救ってくれた命だ。もし、あの時、助ける奴を誰か一人にしないと全滅していたよ。ありがとうな…」

私はモイラの身体が僅かに震えるのを感じる。

彼女は仲間を全て失ってしまったのだ。

おそらく私が気絶した間に人知れず泣いていたのかもしれない。

私とモイラは暫く抱き合ったままになった。

……。

……。

…。

「ここまで運んでくれたことに感謝する。早速だが、ここは何処だ？」

「ここは隠れ家さ。反乱軍の隠れ家は各地にいくつも点在してるんだぜ。宿の店員も皆同志だから安心しな」

どうやら私は反乱軍の一員が経営する宿に泊めてもらってらしい。

モイラの仲間はまだ沢山いるようだ。

私は改めてモイラを見る。

そういえば、カロンはモイラを副頭目を呼んでいたな。

「死神が言っていたが、お前が反乱軍の副頭目だったのか？」

「まあ一応、俺には反乱軍の副頭目という肩書きがあるけど、飽くまで肩書きさ。俺が補佐についた方が纏まると頭目は言ったから引き受けてるに過ぎねえよ。それと頭目が誰かはここでは話すことはできねえから、悪しからずってな。その代わり、どうやってこの糞みてえな世界になったかを教えてやるよ。俺も当時は餓鬼だったけど、救護班として従軍していたからな…」

……。

モイラの話によると五年前にアースガルズを母体とした反ヴァルキリア同盟がヴァルキリア帝国と戦争を交えたとのことだった。

いわば第二次聖戦が勃発したのだ。

アースガルズの総大将としてモーモスが先頭に立ち、指揮官の一人として私も一軍を率いることになった。

その他にアイリ、エリー、ケール、タナトスもアースガルズの将軍として戦ったらしい。

最初のうちは同盟軍が押していたらしい。

だが、突然背後からビフレスト皇国軍に襲撃され、戦況は一変していく。

ビフレスト軍への応戦で同盟軍は陣が乱れていき、ヴァルキリア軍に付け入られる隙を与えてしまったのだ。

ビフレスト軍を率いていたのはモロス将軍であることから同盟軍は震え上がり、士気が瞬く間に低下していき、絶望的な状態だった。

そこで私が単身でビフレスト軍を食い止めることになり、同盟軍はヴァルキリア軍に応戦する形を取ることにした。

……。

これはおそらくアイリの作戦かもしれないな…。

あるいは私自身が言いだした作戦とも考えられる。

おそらくビフレスト軍が襲撃した理由は私を捉えることが目的だろう。

なぜならば、ビフレストにはモロスがいる。

彼女はガイアと同様に過剰なまでに私に執着していたからな…。

戦争が起こったことでどさくさに紛れて私を攫おうと考えたに違いない。

いささか自意識過剰かもしれないが、何故かそうであると断言できてしまう。

「てめえは見事ビフレスト軍を追い払い、モロス将軍を捕虜にして同盟軍へと参戦し、再びヴァルキリアを追い詰めていった。だけど、ヴァルキリアの背後から突然黒くて巨大な何かが現れたんだらしいんだ。前線から遙か後方に控えていた俺でさえも見えるほどに巨大な黒い化け物だった。それが現れてから同盟軍はあっという間に追い詰められてしまったんだ…」

……。

その正体不明の黒くて巨大なものによって同盟軍は全滅してしまい、私を初めとする将軍等も全て討ち死にとなってしまった。

そして、聖戦はヴァルキリアの勝利でもって幕を閉じた。

私やタナトス、ケール等が全てが討ち死にとは…。

それほどまでにその黒くて巨大な何かは絶大な力を持っていたというのか…。

おそらくエロスの何らかの力だと思うが、エロスが直接手を下すまでもなく私がやられてしまったことに私は衝撃を受けてしまった。

私とエロスの間にはそこまでの差があったことに…。

そして、誰一人守ることが出来ず、やられてしまったという結末に…。

……。

現実逃避するようだが、今エロスに勝てるかどうかを考えても仕方がない。

まずは現状把握だ。

「その後、どうなった？」

「最悪さ。ヴァルキリアの残党狩りが始まったんだよ。その時の指揮官が俺達を襲撃してきた死神カロンだ。カロンに目を付けられたら最後、必ず殺されていった。奴は不死身でどんな攻撃しても、通用しねえし、総力を挙げて、何とか倒したとしても、いつの間にか何事もなかったかのように現れてきて、皆殺しさ。奴に獲物と定められて生き残っているのは今のところ、俺とてめえだけだ…」

つまり、今までで誰一人としてあの死神に狙われた者は生きていないということなのか…。

「これがクロエ姉ちゃんの形見の笛だ。死神から俺達を逃がす時に託してくれたものなんだ…」

私はモイラからクロエの笛を受け取る。

「クロエお姉ちゃんはてめえのことを最後まで思っていたぜ…」

「そうか…」

この世界でクロエが如何に活躍して死んだのかはモイラの言葉でし

か分からない。

だが、確かにクロエがこの狂った世界に憂いて戦ってきた証がここにある。

この世界で私に出来ることはほとんど無いかもしれない。

だが…。

「どうしたんだよ、ロスト…」

せめてモイラだけでも生き延びさせるようにしなければ…。

モイラは私にとってもこの世界で最も頼りになる女なのだ。

「何でもない…」

私は自身に回復魔法を掛けて、立ち上がる。

「お、おい！もう身体は大丈夫なのかよ？」

「回復魔法は掛けた。問題無い。それよりも腹が減った。食事にしたい」

慌てるモイラを余所に私は部屋から出ていこうとする。

「おい、待てよ。俺がいないとてめえはただの不審者なんだからよ！」

モイラは私の腕を抱いて付いてくる。

胸の感触がたまらないぞ…。

「そんなに引っ付かなくてもいいだろう…」

「嫌なのか？」

モイラが上目遣い、私の方が背が低いので、ここでは下目遣いというべきなのか、そんな目で私を見つめてくるモイラがいた。

……。

「嫌ではない…」

「ふふっ、素直に嬉しいって言えばいいのによ。まったくてめえは俺が面倒見無いと危なっかしくて見てられねんだからな」

モイラは小悪魔的な笑みを浮かべて、私の頭をぐりぐりと撫でつけてくる。

おのれ、モイラ…。

私を子供扱いするつもりなのか！

以前会った時は私よりも背が低い子供だった癖に…。

「ほら、行くぜ。包帯のおじさん…」

モイラは私に聞こえないような小声で何かを言った後に台所へと連れて行くのだった。

……。

……。

…。

「よう、目を覚ましたかい！食事は用意してるからたんとお食べ」

台所には気の良いおばさんが食事を用意して待っていた。

「あら、モイラの思い人が目を覚ましたんだってね。あの糞野郎を除いて、この世界で唯一の男よ。大事になさいよ」

「もう、おばちゃんたらっやめろよな！」

モイラは顔を赤くしておばさん達に突っかかっていく。

これが反乱軍の副頭目だとは誰も思わないだろうな…。

いや、だからこそ彼女が副頭目として選ばれたのかもしれない…。

頭目とやらも彼女の人を惹き付ける所を買って、補佐として選んだのだろう。

私は用意された食事を遠慮無く平らげる。

何となくだが、食べられる時に思い切り食べておかなければ機会が無くなってしまうと思ったからだ。

腹が減っては戦は出来ぬと偉大なる先人が語っていた。
食事こそが何よりも生き残るための活力となる。
「良い食べっぷりね。ほら、いくらでも食べると良いよ」
おばさんは追加で食事を出してくれる。
「あいあとおおあいあふ」
翻訳すると有り難うございます、だ。
「食べるか、お礼を言うかはっきりしろって！まったく頬に食べ滓が付いてるぜ」
一心不乱に食べている私の頬に付いている食べ滓を頬に手を伸ばして取っていくモイラ。
その様子を見て、にやにやと笑みを浮かべるおばさん衆。
「何じろじろ見てるんだよ…」
モイラはおばさん達の視線に気づく。
「何でも無いさ。旦那をしっかりつかまえとくんだよ。それこそ首根っこに縄でも括り付けてもね」
「な、何言ってるんだよ！俺とロストはその…」
おばさん達がモイラの顔を覗き込んでくる。

「その何だって？言ってご覧？ん？」

……。

「うるせえ！ロストは俺の男だ！文句あるか！」

モイラは開き直ったかの如く叫び、ご飯をやけ食いしていく。

女らしくもない男らしい豪快な食べっぷりだった。

そんなモイラをおばさん達は笑っていく。

平和な団欒がそこにあった。

「沢山食べておくれ。それとここをあんたの家だと思ってくれてもいいんだからね」

おばさんは私を誰かと重ね合わせているのか、懐かしいような悲しいような目で見ていた。

……。

彼女もまたエロスによって大切な者を奪われた犠牲者ということなのか…。

私は居たたまれなくなって食事を取った後、速やかに台所を出ていこうとする。

「モイラのことを宜しく頼むわね…」

去っていこうとする私の背中におばさんの声が響く。

私は軽く頷き、台所を後にした。

「おい、ちょっと待てよ！」

モイラも私を追うようにして台所から出ていく。

私とエロスは別物だと言い聞かせても何処かで私がやったのではないかという思いに駆られてしまい、申し訳なく思ってしまう。

やはり私にも心の何処かでエロスと同じ欲望が眠っているからなのだろうか？

だからエロスの所行を自分のことのように罪悪感を感じてしまうのではないか…。

……。

またしても考えても仕方ないことを考えてしまった。

とにかく今を何とかすることだけを最優先に考えるのだ。

あのカロンがあのまま諦めるとは思えない。

しかし、カロンの能力を把握していないことから対策を立てようがない。

分かっていることは奴がまともな戦いを挑んでくることは無いこと

だ。

あれは戦士ではなく、暗殺者。

搦め手で攻めてくるはず。

本格的に攻めてきたら当分は眠れない日々を迎えそうだな…。

その時のために今は出来るだけ眠っておこう。

私はベットに寝転んで瞼を閉じたときだった。

「おい、俺の存在を忘れてねえか？」

耳元からモイラの声が聞こえてくる。

考え事をしていたお陰でモイラの存在をすっかり忘れていた。

「私はもう寝る。お前も寝たほうがいいぞ」

「じゃあそうさせてもらうぜ…」

私のお腹の上に何かが乗ったような重みを感じる。

目を開けるとモイラが私のお腹に馬乗りになっていた。

「あの時の続きをしねえか？」

モイラが私の頬に甘い息を吹きかけてくる。

あの時か…。

あの時でモイラは多くの仲間を失ってしまったのだ。

私は無言でモイラを抱き寄せる。

彼女が仲間達の死を何とも感じていないことは有り得ない。

「お、俺を受け容れてくれるのか？」

「美女の誘いは断らない主義だ…」

モイラは私の反応に戸惑っているようだ。

「軽蔑しないのかよ！仲間が死んだ後だってのによ。こんな…」

「こんな時だからこそ、抱きたいと思うときがある。お互いに明日をも知れない身だからな…」

そうだ、私とモイラはいつ死んでもおかしくないほどの窮地に立たされているのだ。

エロス直属の殺し屋であるカロンに付け狙われてしまったのだから…。

「俺は恐かったんだ。あの影に呑み込まれそうになったときに正直死にたくないと思った。口ではみんなを助けろと言っていたのに死ぬ瞬間になったら自分だけでも助かりたいと思ってしまったんだ。挙げ句の果てにこうしててめえに慰めてもらたくて女の武器を遣おうとしている。我ながら最低な女なんだぜ…」

「お前が最低な女ならば、私も最低な男だ。いや、畜生とでも言っても良いだろう。私はお前のそれを知っていても尚抱きたいと思ってしまったのだ。道徳も理性も人間の三大欲求の前では紙屑も同然だな…」

モイラの気持ちは何となく理解できる。

愛や友情などは綺麗事は戦場では糞にも役に立たない。

それよりも如何に生き延びれるかがを冷徹なまでに考え抜いて実行することが重要だ。

そのためには手段は選ばない。

悪鬼羅刹と罵られるような行為でも平気で行えるようになる。

だからこそ、理性から外れて本能に忠実になり、畜生にも墜ちることが出来る。

戦場では火事場で略奪や女を強姦する話はよく聞いたことがある。

女を強姦するのは身の危険を感じてるが故の代償行動ではないのかと思ってたりする。

万一に自分が死んでも子孫を残すことで種の存続させる人間の本能ではないのかと…。

私は人一倍に生に対する執着は強いと自負している。

その生に対する執着の強さの代償が酒池肉林の夢を抱くことになったのではないかとふと考えてしまうことがあった。

人並みに学問に打ち込んでおけば、その仕組みについて分かっていたのもしれないと思い、自分の学の無さを少し後悔したこともあったな…。

モイラもまた自分の命がいつ尽きるか分からない不安を抱いているからこそ、このような行為に走ってしまったのではないかと思った。

だから、少なくとも私がモイラを軽蔑することは絶対に無い。

それに誰にもモイラを軽蔑させはしない。

平気で軽蔑する連中は本当の地獄を味わったことが無い生温い者共だ。

だが、モイラは自分の行為に対して良心の呵責に耐えかねている状態だ。

おそらく死んだ仲間達を思い、申し訳なく思っているのだろう。

このままだと不発に終わる恐れがある。

「モイラ、これから私はお前を獣のように貪る。モイラは私に成す術も無くやられてしまうのだ」

そうだ、これは私の欲望が爆発してモイラは仕方なく交わったことにすればいい。

それならば、私が悪者となることで言い訳がつくことだろう。

私は瞬時に体位を逆にしてモイラにのし掛かっているような姿勢を取る。

モイラの心証を思いやるには私の理性が余りにも不足していたのだ。

もはや私は我慢できなかった。

「抵抗してもいいぞ…」

私はモイラの服を破りたいところだったが、服が勿体ないので丁寧に脱がすことにした。

こんな時にいきなり自分の貧乏性が発揮されてしまうとは…。

「何か手こずってるようだけど、服を破かないのかよ?」

モイラの服を脱がせようとしたが、勝手が分からなくてなかなか脱がすことができなかった。

「服を破ってしまっては勿体無い」

……。

しばらく沈黙が続いた。

そして、咳を切ったかのようにモイラが笑い出す。

「ふふっ…あはははははっ！ここは服を破って俺の胸にむしゃぶ

りつくところじゃないのかよ。全くこんなところで貧乏性を発揮させるなよ！」

モイラは瞬時に体位を入れ替えさせ、私は再びモイラに馬乗りされた姿勢となった。

「どういうつもりだ？」

「やっぱり受けに回るのは性に合わねえと思ったんだよ。俺はてめえ一人を悪者にしてよがるつもりはさらさらねえよ。てめえが卑怯者になるつもりなら、俺も卑怯者になる。それでお互いに対等になれる…」

モイラは私が脱がせかけていた服を自身で豪快に破り捨てて豊満な胸を剥き出しにしてくる。

「服ぐらい替えを用意してやるよ。だから、てめえも生まれたばかりの姿になりな」

モイラに包帯を引き千切られ、服を破り捨てられていく。

今度こそ攻めに入れると思ったのだが…。

「俺は処女だけど、やり方なら分かってるつもりだぜ。まずはお互いに気持ちを高め合うんだろ…」

モイラは私の手を取って自分の胸に掴ませてくる。

「あぁ…どうだ。大きいだろ。俺の胸で握力を鍛えろよ…うっ…あん…ちゅ」

モイラは私に胸を揉まれながらも倒れ込んでいって唇を重ねてくる。

「ちゅちゅぱ…これが…情愛の口づけだぜ…んっ…ちゅちゅちゅちゅばちゅううううっ！」

顔の至る所のモイラの唇が押しつけられていく…。

モイラの唇で顔が舐め溶かされていきそうな感覚だ…。

「ちゅばちゅば…おら…ちゅ…手がお留守になってるぜ…ちゅう…もっと揉めよ…ちゅる！」

不味い、モイラの唇に溺れて手が動かなくなっていた。

私は一生懸命にモイラの胸を鷲づかみして揉んでいく。

「ああん…ちゅぱ…そうだ…ちゅ…その調子だぜ…ロスト！」

モイラは私の男の証を掴んで、自分の股間へと導いていく。

「はぁはぁ…これから俺の処女をてめえに食わせてやる…覚悟しな！うぐぅうう…うああっ！」

ぬおおおおおおっ！

私の男の証がモイラの中へと一気に押し込まれていく。

「どうだ？はぁ…はぁ…俺の中は？」

「き…気持ちいい…」

モイラは私の感想に満足し、顔に口づけの嵐を見舞ってくる。

「ちゅちゅちゅば…俺もてめえに捧げれて…ちゅば…嬉しいよ…これでいつ死んで…うっ！」

私は口づけてくるモイラを顔から引き離す。

「ロスト？」

「その先は言うな。縁起が悪い。絶対に二人で生き延びるのだ」

モイラはきょとんとした目で私を見て、やがて苦笑する。

「そうだったな。俺としたことが後ろ向きな考えだったぜ。てめえと一緒なら生き残れそうな気がするよ！」

うぐっ！

モイラはさらに私の男の証を締め付けていき、身体を上下に振ってきた。

「俺にてめえの子種をぶちまけろよ！」

ぬあああっ！

モイラは私の頭を掴んで身体を無理矢理起こさせて抱きついてくる。

「はむっ！」

ぐおっ！

私の首筋にモイラが噛みついてくる。

「ああっ！ちゅぷ…もっとだ！あむぅ…もっと俺にぶちまけろよ！ちゅぱ」

私は何度も欲望をモイラの中へと吐きだしていく。

それにも関わらずモイラはまだかまだかと要求してくるのだ。

モイラの体力は底無しなのか…。

いや、モイラもまた私と同様に生きる執念があるからこそ貪欲に求めてくるのだろう。

私はモイラの求めに応じるべく必死に身体を奮い立たせる。

「いいっ！ちゅう！最高だぜ！ロスト！ちゅううううっ！」

モイラは上の口で私の身体の至る所に吸い付いて貪り、下の口で私の精力を搾り取っていく。

「ちゅううううっ…俺はもうてめえを離さねえぞ！」

ぬあああああああああああああああっ！

私は何度目かの欲望をモイラの中へと吐き出していく。

「はぁはぁ…もう疲れ…へぶしっ！ぶべらっ！」

モイラは寝ようとした私の両頬を叩いてきた。

「俺よりも先に満足して眠るなんて許さねえぞ…」

「だが、私にはもう…あべしっ！」

問答無用とばかりにお仕置きしてくるモイラ。

「男が言い訳するなよ。女を満足させてこそが男の甲斐性だろ？」

男の甲斐性か…。

それを言われてしまえば、やるしかない！

私はモイラの腰を持って身体を奮い起こす。

「ちゅちゅ…ごめん…ちゅう…どうしても…れろっ…俺はてめえと何もかもが…ちゅぱ…溺れていきたいんだ…ちゅぱ」

モイラは冷静になったのか、それとも飴と鞭のつもりなのか、叩かれて腫れてきた私の頬を癒すように何度も唇と舌を這わせていった。

狙ってやっているのか、自然にやっているのかは分からないが、モイラは男らしくなっても本質的には初めて出会った頃とは変わっていない気がする。

私を困惑させるほどに誘惑してきた小悪魔的な美少女の頃と変わらず、抗い難い魅力で私を呑み込もうとしているからだ。

「俺は餓鬼だった頃…ちゅ…てめえと肩を並べて戦っているクロエお姉ちゃんが羨ましかった…ちゅぱ…俺も隣で一緒に戦いたいと思った…ちゅば…」

モイラは狂おしいほどに腰を振って私を攻め立てていく。

「てめえが戦死し、クロエお姉ちゃんがまでもやられてしまって、神父様も力尽きて…明日も知れない身で毎日が恐かった…」

……。

モイラは涙に濡れた顔を私に見せてくる。

「だけど、死んだはずだったてめえと再会できてこうやって交わっている。夢みたいな出来事だぜ。目が覚めたらてめえがいなくなるのかもしれないと思って…」

「私は夢ではない。ここに存在している。お前の中でな…」

私はモイラが流した涙を拭い、頬に触れる。

「ああ、感じるぜ！ロストの暖かい手の感触が！それに俺の中で暴れ回っているこのてめえの証が…ちゅ！」

モイラは私の身体に貪るように口づけて身体を激しく振ってくる。

「大好きだぜ…ちゅ…ロスト！俺を…ちゅば…絶対に…離さないでくれ！ちゅううううっ！」

「ああ、絶対に離さないぞ！」

私はモイラが気絶するまで力の限り精力を振るっていった。

……。

……。

……。

……。

……。

……。

腰が痛い…。

私が出会う女性は皆、野獣並の貪欲さを誇っているとつくづく思う。

モイラはとりあえず満足したのか私の胸に倒れ込むようにして眠りについていた。

反乱軍の副頭目という重責を負っている中で久しぶりにただの女に戻れたことに満足したのだろう。

私もまたただの獣になって存分に貪れたことでこれ以上無いほどの充実感に満ちている。

精力はモイラに搾り尽くされてしまったが、活力もとい美女成分は

これでもかというほどに補充された。

私は気持ちよく眠っているモイラを起こさないようにやんわりと抱き締める。

この世界は私の居場所では無く、いずれモイラと別れる時が来る。

だが、その間はモイラを私の酒池肉林の構成員として勝手に迎えることにしよう。

……。

カロンは近い内に襲撃を仕掛けてくるだろう。

奴は私に恨みを吐いて消えていったのだからな…。

だが、これは良い機会でもある。

カロンがエロスの神降ろしで契約を結んでいるのならば、おそらくエロスと同様に唯一無二の存在となっているはずだ。

だから、この世界でカロンを倒せば、私の世界に影響を干渉することは出来なくなると考えられる。

私の世界のクロエがカロンに殺されるとは無くなるのだ。

カロン、いつでも来るがいい。

私は貴様の狩られるだけの獲物では無いことを思い知らせてやろう。

獲物の狩人に牙を剥いた時にどうなるのかを存分に教えてやる。

そして、貴様を必ず殺す。

……。

とりあえず眠るとするか。

カロンとの戦いに備えるために体力を少しでも回復させとかなければ…。

絶対にモイラをカロンに殺させないためにも…。

彼女はこの世界のクロエが残した最後の希望なのだからな…。

私はいつも通りの言葉を脳内に浮かべて、束の間の休息を取る。

……。

燃え尽きたな…。

第７２話：モイラ（後書き）

ぐだぐだですいません。

とにかく、必ず完結させますのでどうか最後まで見捨てないでください。

物語に矛盾が生じても力づくで完結させます。

ですが、決して打ち切りのような形の無理矢理完結の形にはしないので、安心してください。

少し遅れて更新しましたが、三日以内に更新させるようにしていきます。

どうか最後まで宜しくお願いします。

第７３話：ＨＡＲＤ　ＴＡＲＧＥＴ

地響きが聞こえ、私は覚醒する。

この地響きはおそらくカロンの仕業だ。

いよいよ戦士の休息に終わりが告げられたか…。

「モイラ、起きろ。逃げるぞ！」

私にのし掛かるように眠っていたモイラを揺さぶって起こそうとする。

ここから理不尽な生き残り合戦が始まるのだ。

「まだ、足りねえなのかよ。仕方ねえな…ちゅううううっ！」

ぬおおおおおおおっ！

モイラは私にしがみついて窒息するような口づけをかましてきた！

完全に寝ぼけているぞ！

私は力を振り絞ってモイラを引き離して、呼びかけていく。

「モイラ！情事は終わりだ！早く起きろ！私はまだ死にたくないぞ！」

「ああ…ロストか…。身体が痛くて…動けねえ…」

モイラは立ち上がろうとするが、腰が痛くて動けないようだ。

あれほど激しく動いて私の精力を搾り取ったのだから当然か…。

ならば、仕方ない！

「私がおぶってやる！さっさと脱出するぞ！それと武器を抱えていろ！」

私はまだ完全に覚醒していないモイラにありったけの武器を無理矢理抱えさせておぶり、部屋を出る。

それにしてもモイラがこれほどまでに朝に弱いとは…。

「ロストさん、モイラは目を覚ましたかい？」

おばさん達は既に機関銃を窓際からぶっ放して応戦していた。

「いいえ、おばさん。お世話になりました！狙いは私とモイラです。ですから、ここから立ち去ります！」

「いいってことよ！それよりもこれを持っていきな！」

おばさんから大量に黒くて丸い何かを渡され、さらに機関銃よりもさらに大きい大砲のような物を背負わされる。

「手榴弾とバズーカよ！手榴弾はこのピンを外したら三秒後に爆発するから気を付けるのよ！バズーカは撃つ時の衝撃に気を付けな！」

「何から何まで有り難うございます！」

モイラに数丁の機関銃、手榴弾を詰めた袋にバズーカ、正直かなり重たい…。

だが、この程度で機動力が低下するロストではない！

私は防御結界をかけて宿から出ていき、銃弾の嵐の中を駆け抜けていく。

外には例の黒装束集団と後方には服が焼けただれ、一層死神らしい様相になっていたカロンがいた。

「お主等の安息の時は終わったのだ。潔く冥府への導きを受け容れるが良い…」

「断固として否だ！」

奴の狙いは私とモイラだ。

私は全速力で宿から離れるように駆け抜けていく。

宿のおばさん達なら何とかやってくれることを祈るしかない。

「逃がさぬぞ！」

カロンの足下にある影が地を這うようにして迫ってくる。

影の中に引きずり込むつもりか！

だが、甘いな！

戦場で培ってきた私の逃げ足に敵うとでも思っているのか！

私はさらに加速を上げて、迫る影を突き放すように駆け抜けていく。

「早いじゃねえか、ロスト！このまま突っ走れ！」

ようやく覚醒したのか、モイラが私の頭に顎を乗せて指示を飛ばしてくる。

「目を覚ましたのなら降ろしても良いか？」

「俺にてめえと同じ脚力があると思ってんのかよ！このままおぶったまま走っていけ！」

確かに降ろして一緒に走ったところでモイラが私と同じ速度で走れるはずがない。

このままおぶって走った方が早いぐらいだ。

それにしても何処まで走っても人一人見かけない場所だ。

見渡す限り、自然の暖かみが無い無機質な何かで作られた建物ばかり…。

これがエロスが造り上げた楽園なのか…。

「おい、後ろから沢山の死神が押し寄せてくるぜ！」

「何だと?」

私は速度を下げず、身体が傾かないようにして後ろを振り返って見た。

……。

鎌を持った恐怖の死神が大量に私を蹂躙せんと迫ってきている…。

うおおおおおおっ!

影で自分の分身を大量に生み出してきたのか!

これは洒落にならないほどに恐すぎるぞ!

カロンは本気で私達を冥府へと無理矢理招待しようとするつもりだ!

「儂は」

「狙った獲物は」

「決して」

「逃がさぬ」

「お主達の」

「希望は」

「もはや」

「尽きた」

空気が震えている。

奴らは一斉に魔力をぶっ放してくるつもりだ。

私はより一層強化した防御結界を展開して走っていく。

「「「「「「「「「デッドリィ・バースト」」」」」」」」」

激しい炸裂音が至る所から木霊していき、周囲の建造物が崩れてくる。

背中からも凄まじい衝撃が襲ってくる。

「うぐっ！」

モイラの呻き声が聞こえてくる。

「大丈夫か？モイラ！」

「平気だ！それよりも無茶苦茶やりやがるぜ。あの逝かれた死神はよ！」

カロンは私達を始末するために周囲の如何なる被害も感知することなく遂行しようとしてくるだろう。

とりあえず私とモイラは建物の影に隠れてから戦闘準備をしていく。

私はモイラを降ろし、バズーカを手にする。

「これで死神共を一網打尽にしてやるぜ！」

モイラは両手に機関銃を二丁携える。

機関銃は撃った時の反動が激しいので両手で一丁持った方がいいと思うのだが、大丈夫なのだろうか？

重火器の扱いはモイラの方が一番よく分かっているはずだから、私が心配しても仕方がないか…。

私は建物の影から出て、迫り来る死神共にバズーカを構える。

「吹っ飛ばしてやるぞ！」

死神の群れの向かってバズーカを発射する。

身体にかなりの衝撃がやってくるが何とか耐える。

凄まじい爆発で死神等は吹き飛んでいくが、回避した死神数体が押し寄せてくる。

「ロスト！伏せろ！」

モイラの声がして、私は咄嗟に地面に倒れ込む。

「おらおら！蜂の巣にしてやるぜ！糞野郎共！」

二丁の機関銃が火を噴いて死神共を蜂の巣にしていく。

反動の大きい重火器を平然と二丁操るとはモイラはかなりの馬鹿力のようだ。

ただの人間相手ならば無双を誇っていたのかもしれない。

だが、相手はエロス直属の執行者で死神だ。

この程度でやられるはずがない。

死神共は蜂の巣になりながらも果敢に押し寄せてくる。

「ちっ！不死身というのは本当のようだな！」

モイラは手榴弾を二三個投げて後退し、耳を塞ぐ。

私が耳を塞いだ瞬間に爆音が響き、地響きが鳴ってくる。

爆風で飛び散ってきたのだろう。

身体に何かが当たってくる。

私は落ちた物に目を向いて思わず後ずさる。

カロンの身体の肉片、いや影の一部だった。

飛び散った影は見る見るうちに膨れあがり、人の姿へと形成していく。

「儂は不滅じゃ」

「お主等に万一にも勝ち目は無い」

「無駄を悟るがいい」

アルゴスと同様に増殖する下手物の神だということか！

私はカロンの分身が鎌を振るって襲いかかってくるのをバズーカを振るって蹴散らしていく。

何処かに必ず本体が潜んでいるはずだ。

第六感を駆使して、全神経でカロンの本体を探ろうとしたが、見つからない。

さすがにこの程度で見つかるほど都合は良くないということか…。

「此奴等、死神というよりは蛆虫野郎共だ！いくら叩き潰しても集ってきやがる！」

モイラは舌打ちをせんばかりに銃を乱射し、ナイフを振るって応戦するものの屍食鬼のように集ってくる死神共に辟易しているようだ。

「いい加減に往生するが良い…」

死神の一体が鎌を振るって、凄まじい風圧を放ってくる。

あの攻撃は不味い！

私はモイラを抱えて、その場から飛び立っていく。

先ほどまで私達が立っていた大地に巨大な亀裂が走っていく。

「モイラ、闇雲に戦っても奴を倒すことは出来ない。逃げよう」

「だけど、奴がクロエお姉ちゃんを…」

モイラはそう言いかけて口を閉じる。

「ごめん、てめえにとってもクロエ姉ちゃんは…」

「今はいい！出来るだけ遠くまで逃げるんだ！」

『逃がさぬよ…』

不意に背後から殺気を感じて、モイラを庇うように振り返って機関銃をぶっ放していく。

鎌を振り上げようとしていたカロンが四散していき、その欠片からさらに数体のカロンが出現してくる。

「ふぁふぁふぁふぁ！」

「無駄じゃ！」

「痛くも痒くもないわ！」

カロンの分身等は鎌を振って、無数の漆黒の刃を飛ばしてくる。

「くっ！オーディン！」

飛来してきた刃の群れを倍返しして死神の群れに放っていく。

死神の群れは切り刻まれながらも鎌を振るって刃を途切れることなく飛ばし、展開してオーディンに亀裂が生じていく。

不味い、このままではオーディンが破られてしまう。

「年貢の収め時じゃな…」

死神の軍勢は一斉に黒球を生み出していく。

私は破れかけたオーディンを解除し、上空を覆うほどの無数の魔法陣を出現させていく。

「「「「「「「「「「デッドリィ・バースト！」」」」」」」」」」

「フレイア！」

無数の黒球と閃光が違いにぶつかり合い、上空は爆音の嵐に包まれていく。

だが、カロンは黒球を尽きることなく放っていき、私が出現させた魔法陣を次々と破壊していく。

まさかフレイアが奴らの攻撃の前に撃ち負けているというのか！

爆風の渦から黒い物体が次々と飛び出してくる。

「何なんだよ、彼奴等は…」

あの剛胆なモイラもさすがに青ざめていた。

フレイアは撃ち破られ、爆風が止んだ空にはおびただしいほどの数の死神共が浮遊していた。

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「絶望するがいい…」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」

………。

これがエロス直属の死神カロンの力なのか…。

「恐い…クロエ…お姉ちゃん…嫌だ！嫌だぁあああっ！」

モイラが突然暴れだし、機関銃を取り出して無差別に乱射していく。

「止めろ、モイラ！無闇に撃っても奴を増殖させるだけだ！止め…ぐあっ！」

私はモイラから機関銃を奪い取ろうとするが逆に殴られたりする等の反撃を受けてしまう。

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「ふぁふぁふぁふぁ！」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」

「「「「「「「「感じるぞ！」」」」」」

「「「「「「「「「「お主等の絶望の嘆きを…」」」」」」」」」

カロン等は凄まじい速度で回り込み、私とモイラの逃げ道を塞ぐように包囲していく。

私はモイラに殴られながらも防御結界を施し、魔力を溜めてカタストロフ・サンを放つ。

「カタストロフ・サン！」

「「「「「「「「「「濃の身体を焼いた魔法か？」」」」」」」」」」

「「「「「「「「「「同じ手は二度も通用しないぞ！」」」」」」」」」」

死神共は漆黒の太陽の中に躊躇無く特攻していき、太陽の中心部にいる私に集っていく。

「「「「「「「「「「地獄の業火に焼かれるのはお主等じゃ！」」」」」」」」」」

私の身体に次々と死神が張り付いてきている。

まさか…。

死神は私を中心に巨大な球を形成させるようにして、しがみついてくる。

自爆するつもりなのか！

私はモイラに最大級の防御結界をかけ、さらに庇うようにしてモイラに抱き締めていく。

「モイラ、お前だけは絶対に死なせないぞ…」

「包帯のおじさん…」

モイラは暴れるのを止め、私に身を委ねるように大人しくなる。

モイラと共に必ず生き延びてみせる！

だから耐えてくれ、私の身体よ！

「「「「「「「「「「「「「「「「「「ラスト・ディスパイア」」」」」」」」」」」」」」」」」」

全身の細胞が弾け飛ぶほどの衝撃が襲ってきた…。

……………。

…………。

………。

……。

…。

無数の建造物がそびえ立っていた町は今や瓦礫が散乱する廃墟と化し、吹き荒ぶ風が焦げた匂いを運んでいた…。

焼け爛れた身体を何とか引きずり、モイラを背負っていく。

私はよほど火に嫌われているようだな。

いったいこれで何度火だるまになったことか…。

私は瓦礫の影に隠れて、腕の中にいるモイラの無事を確認する。

「どうやら無傷のようだな…」

「ロスト、ごめん。ごめんなさい。俺が取り乱したばっかしにてめえを殴ってしまって…」

モイラは自分が殴って痣を作ってしまった私の頬に触れていく。

「この程度の傷大したことはない。お前のお仕置きの平手打ちの方がよほど強烈だった…」

「馬鹿野郎…」

涙声で憎まれ口を言い、モイラが私を抱き締めようと背中に腕を回していく。

「うぐっ！」

モイラの腕が背中の焼けただれた傷口に触れ、私はたまらず呻き声を上げてしまった。

「おい、どうしたんだ…っ！」

モイラは私の背中が血にまみれ、肉が爛れていることに気づいたの

だろう。

「こんなにも傷ついてしまって、それなのに俺が無傷で…この馬鹿野郎…どうして、てめえは…」

震えるモイラの頭を私は撫でていく。

「お前まで失ったらクロエの死が無駄になってしまう。だから、どうしても死なせるわけにはいかなかったのだ。と言っても大半は死なせてしまったがな…」

「もう逃げようぜ！奴にはどう足掻いても勝てない…。俺はもう失いたく無いんだ！クロエお姉ちゃんやみんなを失って、その上てめえまでが…んっ！」

私はモイラの唇に自分のそれを重ねる。

「ちゅぱ…ロスト…」

「大丈夫だ。私は死なない！まだやるべきことがあるのだからな。それにこの程度の困難は何度も体験している」

そうだ、私は戦場にはそれほど多くは出張ってはいないが、何度も死線を潜り抜けてきたとは胸張って言える。

「けど、無理だ！彼奴は不死身なんだ。どれだけ力を持っていても勝てないよ…」

「それは違う。奴は不死身でも何でも無いはずだ。そうでなければ、奴がエロスに従うことは有り得ない。奴はエロスに敵わなかったか

らこそ従っているのだ。ならば、必ず勝機はあるはず」

カロンが本当に不死身であるのならば、エロスに服従することはないだろう。

エロスはカロンを屈服させることが出来たからこそ従えれたのだ。

だから、必ず突破口があるはず…。

どの道、奴を倒さなければ、その後も延々と命を狙われてしまうのだ。

逃げても仕方ないのであれば、こちらから出向いて憂いを断ち切らねばならない。

「私も死にたくはないからな。何とか奴を始末してみせる」

そう言って瓦礫の中から出ようとした所を不意にモイラの腕が首に回されて、引き寄せられる。

視界にはモイラが橙色の唇を寄せてきていた。

「んっ…」

……。

私はモイラにされるがままに口づけを受けた。

「ちゅぱ…必ず生きて帰ってくれ、ロスト…」

私は無言で頷いて、瓦礫の中から出ていく。

……。

……。

…。

上空には無数の分身を従えたカロンが浮遊している。

『別れの言葉は告げたか？まあ、直に後を追わせてやるがのう…』

「カロン、私は貴様の獲物で終わらないぞ！」

私は上空の飛び立ち、膨大な魔力を手に集中させる。

「ヴィーザル！」

手から天を貫くほどの巨剣を生み出し、上空に向かって薙いでいく。

『ふぁっふぁっふぁっ！無駄じゃ！』

巨剣により、細切れになっても尚、カロンの嘲笑が止むことはない。

魔法の矢や黒球が嵐のように撃ち出される中で私は巨剣を振るってカロンの軍勢もろとも薙ぎ払っていく。

『儂は中級神であるが、上級神をも何体も屠ったこともあるのじゃ。だからこそ儂は死神と呼ばれておるのじゃよ！』

どうすれば、奴の本体を見つけることが出来るのだ…。

何度剣を振るって蹴散らそうともカロンの軍勢の猛襲は緩むことがなく、それどころかますます激化していく始末だった。

カロンの嵐のような集中砲火の前に巨剣は次第に亀裂が走っていき、砕かれる寸前にまでなっていく。

カロンの群れは巨剣のに次々と張り付いてくる。

『破壊神の力なぞ死神の前では児戯に等しいものじゃて、ラスト・ディスパイア！』

巨剣に張り付いたカロン等は一斉に自爆し、巨剣が砕かれ、爆風が私の身体を激しく打ち付けていく。

「ごはっ！」

爆風の衝撃で弾き飛ばされる私にカロンの分身等が容赦無く群がってくる。

『切り刻んでやろうぞ！』

カロン等の鎌の斬撃の嵐に無数の裂傷を刻まれながらも何とか急所に外していき、拳で蹴散らしていく。

くっ、このままでは嬲り殺しにされてしまう…。

鎌が私の胸元の服を切り裂き、懐に取って置いた物が投げ出される。

クロエの形見である篠笛だった。

私は鎌の斬撃を受けながらも飛んでいく篠笛に手を伸ばしていく。

「ぐぬっ！」

篠笛と掴みと同時に脇腹が熱いような激痛が走る。

篠笛を抱えたまま私は地上へと落下していく。

……。

……。

…。

篠笛の音が響いてくる。

クロエなのか？

私は目を開き、瞬時に起き上がって周囲を見渡す。

そこはカロンによって破壊された灰が舞い散る廃墟。

……。

そうだ、私は今、カロンに戦いを挑んでいる最中だった。

どうやら一瞬意識が落ちてしまっていたようだ。

それにしても確かにクロエの笛の音が聞こえたような気がした。

私は手に持っている篠笛を見つめる。

クロエ、お前のお陰で私は彼方側に逝かずに済んだのかもしれないな…。

既にフレイアやヴィーザルの技もカロンに破られている。

アーテとの戦いで得た大技を駆使してもカロンの本体を叩かない限り、無駄に終わってしまう。

何か方法は無いのか…。

私は手に持っている篠笛を握りしめる。

クロエ、私はどうすればいい？

どうすれば、奴を倒してモイラを守ることができるのだ？

せめて奴の本体を炙り出すことさえ出来れば…。

……。

一つだけ方法があった。

だが、果たして今でも有効なのだろうか？

……。

いや、もはや迷っている場合では無い。

早く奴等の元に行かねば、モイラが標的にされてしまう。

クロエ、どうか私に力を！

お前の加護がまだ私に残っていることに賭けるしかない！

私は飛び立とうして脇腹に激痛が走り、蹲ってしまう。

どうやらカロンに切り裂かれた脇腹から血が溢れていることに遅ればせながら気づく。

私は急いで回復魔法を掛けるが、血が止まるだけで傷口まで塞ぐには至らなかった。

魔力が少なくなっているから回復力が衰えているというのか…。

これから莫大な魔力を使うというのに、果たして私の体力が持つのだろうか？

どの道、ここで何も出来なければ、死ぬしかないのだ。

ならば、死ねば諸共というやつだ！

昔の東洋の偉い武将は言っていた。

死中に生あり、生中に死あり、とな！

私は再び、カロンがいる空の戦場へと飛び立っていく。

……。

……。

…。

『ほう、そのまま隠れておれば、もしかすると見逃していたかもしれないというのに…』

血まみれになって姿を現した私をカロンは嘲笑ってくる。

「心にもないことを言って私に後悔の念を抱かせようとしているつもりか？白々しいものだな。貴様が獲物を逃すことなぞ天地が裂けても有り得ない話だろう」

引きつる顔を必死に隠してカロンの挑発を不敵に返していく。

『よく分かっているのう。ならば、お主を始末した後は瓦礫の中に隠れておる女も始末するということぞ。儂は獲物を決して逃さぬからな…』

「だからこそ、貴様を私の手で必ず殺す。たまには獲物に牙を向かれる経験をするのもいいだろう。獲物になる者の気持ちを考えることが出来るからな…」

私は最大限に魔力を高めてくる。

これはカロンとの戦いだけに留まらず、エロスに挑戦状を叩きつけるための舞台だ。

エロス、貴様に私の挑戦状を受け取ってもらうぞ！

「火よ、土よ、水よ、風よ、諸々の全てよ…」

『ん？神降ろしの祝詞じゃと？今更神頼みでもするつもりか…』

カロンは私の行為にせせら笑っているようだ。

だが、その余裕の笑みは直に凍り付くだろう。

「我が名はロスト。我は汝の器なり」

私の言葉に呼応するかのように大気が震えてくる。

『まさか…』

カロンの嘲笑が止まり、代わりに出てくるのは恐怖。

「我が声に耳を傾けよ。我は汝の血肉とならん」

空間が歪み、嵐が吹き荒れていく。

『止めろ！正気なのか、お主は！』

カロンの軍勢が私の祝詞を止めようと一斉に群がろうとしてくる。

私は笑みを浮かべる。

これこそ後の祭りというものだ、カロン…。

「神なる者よ！我を求めよ！現世の降り立ち給え！カロン！」

神降ろしの祝詞を私はカロンに直接向けて唱える。

『ぬぐあああああああっ！』

カロンの軍勢の動きが一糸乱れぬが如く、綺麗に止まり、その中で一体だけが不自然に藻掻き苦しむ様子があった。

カロンは既にエロスに神降ろしの儀によって契約を交わされている。

そこに私が割り込みをするようにして、神降ろしの儀をカロンに無理矢理強制したのだ。

当然、エロスの契約による強制力が発動して、カロンを引き留めようとして反発していく。

だが、私の神降ろしの強制力がエロスの力と拮抗してしまい、その狭間にいるカロンがとばっちりを受けて苦しんでいるわけだ。

これは一か八かの賭だった。

神降ろしの儀は神あるいは神降ろしの術者の承認が無ければ、行うことが出来ない。

私はまだ神降ろしの儀を完了させてはいない。

エリスともガイアとも正式に契約を交わしてわけではないからな。

だからこそ、クロエが承認してくれた効果が今だに有効であったことが幸いした。

クロエの加護が私の中にまだ残っていたのだ！

感謝するぞ、クロエ！

やはりお前は私に幸運を運んでくれる女神だったぞ！

「本体見つけたり！カロン！」

私は光の速さで本体のカロンへと近づき、渾身の力を込めて、拳を叩きつけていく。

拳はカロンの嘆れた顔面へとめり込んでいく。

「ぐぼあああああっ！」

カロンは血を吹き出して、弾き飛ぼうとしていた所を私は黒衣を掴んで引き寄せ、胴体に何度も拳を叩きつける。

今までの借りを百倍にして返してやろう。

「おのれぇえええええっ！」

カロンは私が掴んでいる黒衣を引きちぎって離れ、血反吐を吐きながらも鎌を私に叩きつけようと振りかぶってくる。

あれほど拳を叩きつけたにも関わらず、尚も反撃する元気があるとはな…。

だが、その判断は誤りだな。

素直に分身の中に姿をくらまして、反撃の時を伺えば良かったのだ。

わざわざ私の攻撃の的になるためにそちらから向かってくれるとはな…。

振り下ろされる鎌を拳で叩き折り、カロンの脳天に拳骨を振り下ろしていく。

「ぎゃはあああっ！」

鈍い音と共にカロンは悲鳴を上げ、地上へと叩きつけられていく。

まあ、例え分身に紛れようとしても無駄なことなのだがな…。

既に貴様の匂いや気配は完全に覚えたから、分身の中に紛れようとも見つけだすことは容易だ。

私はカロンを追って、地上へと降り立っていく。

……。

……。

…。

カロンは陥没した地面から蹌踉けながらも立ち上がっていた。

「神々から…死神と呼ばれ…恐れられていた儂が何と無様な…。許さんぞ！絶対に！絶対に！絶対に許さんぞ！」

ふらつきながらもカロンはこの世の全てを呪うかのような声を吐き出してくる。

「許さないのはこちらの方だ。貴様は私の大切な仲間を狩りを楽しむかのようにして奪っていったのだからな。貴様に獲物になった者達の気持ちを死ぬほど教えてやるぞ…」

「ほざけっ！儂の真なる姿を見せてやろうぞ！」

カロンの身体から黒い蒸気のようなものが溢れだし、漆黒の霧が生み出されていく。

周囲は暗闇に染まっていく。

何処まで見渡しても何も見えることがない完全なる闇。

私はいつの間にか完全なる闇の世界へと佇んでいた。

『ふぁっふぁっふぁっ、これこそが儂の真なる姿、完全なる闇の世界じゃ…』

「うぐっ…うあああっ！」

カロンの声が聞こえた瞬間に右腕が雑巾のようにねじ切れられ、骨が砕かれていく。

「おぐあああっ！」

全身が鋭い刃で何度も切り裂かれるかのような激痛が襲ってくる。

身体から血がおびただしく噴き出していく。

『ふぁはははははっ！世界そのものが儂であるが故にあらゆる方向からお主を切り刻むのが可能なのじゃ。さあ、跪くが良い！』

「ぐあああああああっ！」

両膝が切り刻まれ、私は膝を折ってしまう。

『思い知ったか！これこそが儂が中級神でありながらも上級神をも狩ってきた真なる力。死を司る神の力なのじゃ』

「この世界は元の世界とは別の貴様自身を媒体として作り出した亜空間だというのか？」

気が遠くなるほどの激痛の中で何とか意識を保ち、カロンに問いかける。

『その通りじゃ。この世界は儂そのものといってもいい。故に儂は無敵なのじゃよ。世界そのものを打ち倒すほどの者は原初神以外にはおらぬじゃろうからのう…』

「なるほど、世界そのものを打ち壊すほどの力がないと貴様を殺せないということか…」

私は思わず笑みがこぼれてきた。

今まで世界を壊すほどの相手とは戦ってきているし、勝ったこともある。

さらにこの世界がモイラがいる世界とは別物であるというのならば、もはや遠慮する必要も無い。

血の滴る身体に鞭打って立ち上がり、無事である左手を掲げていく。

「フレイ」

私の頭上に白銀の光球を生み出していく。

『儂の世界を破壊するつもりか。無駄じゃ。原初神やエロスほどの力を持っているというのか？』

「カロン、貴様は間違いを犯した。私を亜空間の世界へと導いたのが、貴様の運の尽きだ…」

モイラがいる世界とは別の作り物の世界であるならば、存分に遠慮無く力を振ることが出来る。

例え、世界そのものを消滅させる力を出そうともな…。

白銀の光球は闇の世界を光に満たさんと果てしなく大きくなっていく。

空間全体に怯えたかのように震えてきた。

『何じゃ、この果て無き力は！それにエロスの力にも似ている！お主、まさか！』

「今更、気づいたのか。そう、私は貴様の主エロスのもう一つの可能性だ…」

所詮は亜空間、作り出した空間には必ず限界があるはずだ。

元の世界と同様に果ての無い世界を作り出すにはそれこそ原初神並の力を持ってなければ不可能だろう。

私は力を振り絞って光球を限界まで巨大化させていく。

『止めろ！止めるのじゃ！』

カロンの怯えた声が光に満ちようとしている世界に空しく響いてくる。

「少しは獲物になる者の気持ちを味わえたか？だが、反省しても既に遅い。貴様はエロスに送る私からの挑戦状そのものと成り果てていくのだ。死という形でな！」

『止めろぉおおおおおおおおっ！』

カロンの絶叫と共に私の身体が何度も切り刻まれていく。

くっ、悪あがきのつもりか！

ならば、終わらせてやるぞ！

私は掲げていた左手を振り下ろしていく。

その瞬間、世界は悲鳴を上げるようにして音を立てて崩壊していく。

『ぐあああああああああああっ！死を司る神である儂が…死ぬだと…馬鹿なっ！馬鹿なぁあああああっ！エロス！エロスぅううううううっ！』

カロンは主に助けを乞うているのか、エロスの名を叫んでいる。

さて、貴様にはエロスへの伝言板となって果ててもらうぞ…。

「最後に伝言を寄越してやる。私の名はロスト、馬鹿で臆病で最強の元平民その他だ！下衆で鬼畜で最低の塵野郎の主に貴様の死を持って伝えるがいい！カロン！」

『ぎゃあああああああああああああああああああああああっ！』

果て無き光に照らされ、闇の世界はカロンの断末魔の悲鳴と共に崩れ去っていく…。

……。

……。

…。

私はいつの間にか元の世界の大地へと佇んでいた。

カロンはどうやら闇の世界と共に完全に消滅したようだ。

ふと全身から力が抜け、私は地面へと倒れ込んでしまう。

「カロン、貴様がもし、上級神であったら私は負けていただろうな…」

奴の分身を無限に増殖させる力と世界そのものに変身する力は恐るべきものだった。

それにアーテと同等の戦闘力がさらに加われば、まさに無敵だっただろう。

奴は搦め手を得意としていたようだが、代わりに直接的な戦闘力では言葉通り中級神並だったということだ。

だからこそ、私はカロンに打ち勝つことだ出来たわけだ。

それにしてもアーテとの戦いのように全身麻痺になっていないことが不幸中の幸いだ。

重傷を負っているが、暫く時を置けば魔力が回復して身体を治すことも可能だろう。

「ロストっ！」

モイラの声が聞こえてくる。

私の元に駆けつけてきたのか…。

「おい、しっかりしろよ！寝るんじゃねえ！寝たら終わりだぞ！」

「ぶべっ！ぶべらっ！はべらっ！もべらっ！」

モイラは乱暴に私を抱き起こして必殺の往復平手打ちを炸裂させてきた。

今度こそ意識が永遠の闇の底へ…。

……。

それは絶対に御免被るぞ！

「痛いわ！重傷者に殴って呼び起こすな！」

私は何とかモイラの手を振り払って叫ぶ。

「ご、ごめん！けど、良かった無事で…ほんとに良かった…ううっ」

モイラは身体を震わせて私に抱きついてくる。

「何だか真っ暗な霧が現れたと思ったらいきなり晴れてきて、あの禄でもねえ死神共は全部消えてしまって…どうなってちまったんだよ。俺、訳が分からなくなっちまって。てめえが消えてしまうし…」

「一から説明するのは面倒だが、全てを集約するとカロンは私の手で始末した。だからもう心配は要らない…」

私は泣きついてくるモイラの頭を優しく撫でていく。

「クロエのお陰で私は生き延びることが出来たのだ…」

「クロエお姉ちゃんのお陰で…」

私はモイラに篠笛を渡す。

モイラはそれを受け取って暫くして笑みを浮かべ「そっか」と言って納得し、再び私に抱きついていく。

……。

……。

…。

私とモイラは再び、泊まっていた宿に戻ることにした。

あの宿は黒装束集団が包囲しているから危険だと言ったが、モイラ曰く「あのおばさん連中だったらあの程度の雑魚共を今頃は蹴散らしているぜ！」だそうだ。

暫くして私は多少体力を回復させた所で重傷だった身体を魔法で何とか治癒させていく。

だが、全身が筋肉痛で思うように動くことが出来ない。

麻痺ではないからいいもの歩くには少し辛かった。

モイラは筋肉痛で顔を蹌踉けながら歩いている私を見かねて提案してくる。

「苦しいんだったら、俺におぶれよ。てめえは小せいから軽そうだ

から問題無いぜ」

……。

身体が痛くて歩きづらい私にとっては確かに名案なのだが、男の尊厳に関わるわけであって…。

「遠慮するなよ！とっとと俺の背中に持たれろっつってんだよ！」

モイラはふらつく私を無理矢理抱き上げて、背負っていく。

大の男を持ち上げて背負うとは相変わらずモイラの馬鹿力は凄まじいものがあるな…。

まあ、ここで男の尊厳云々について考えても仕方ない。

それを考えるには身体が疲れすぎている。

私は遠慮無くモイラの暖かい背中に身を委ねることにした。

「俺の背中の上でゆっくり休みな…ちゅ」

モイラは私の頭を掴んで顔を寄せて口づけし、そのまま歩いていく。

……。

まずは第一段階は突破と言ったところか…。

この未来の世界で私がどのような道を辿るのかは分からないが、とりあえずやるべき事は決まっている。

私のもう一つの可能性であり、宿敵でもあるエロスに会うことだ。

今頃、エロスは自分の使役していた死神の消滅を知り、慌てている
ことだろう。

そして、おそらく私の存在も既に感知しているはずだ。

私とエロス、どちらかが死ぬまでの戦いが今まさに始まろうとして
る。

エロスを倒さない限り、私に安息が訪れることは永遠に無いのだ。

……。

とりあえず、疲れたので少し眠ろう。

私は新たなる決意を胸に秘め、モイラの背中の上で眠りにつく。

「お休み、ロスト…」

モイラの慈愛に満ちた声が耳に響き、私は夢の世界へと旅立ってい
った。

……。

第７３話：ＨＡＲＤ　ＴＡＲＧＥＴ（後書き）

文才が欲しいです…。

とりあえず下手なりに何とか執筆しようと決意しているこの頃です。

では、約三日後にて…。

第７４話：Ｉ（前書き）

久しぶりに早く書くことが出来たので更新しました。

相変わらずぐたぐたですけど、どうぞ。

第７４話：Ｉ

私は今、宿で戦いで失った血を取り戻すが如く、一心不乱に馬鹿食いを決行している。

モイラは私にそんな様子に呆れながら意外にも丁寧に食事を取っている。

そういえば、粗野な言葉遣いに反して彼女は意外に女性らしい側面があったのだ。

これもかつての小悪魔的な美少女だった頃の名残だというのだろうか。

いや、今のご時世でそれが目立たないだけになっているのだろう。

お淑やかで儚げなだけのお嬢ではあの鬼畜野郎の餌食になりかねないからな。

だからこそ、少しでも強くあろうと背伸びをしているに違いない。

「良い食べっぷりだねえ。お代わりはあるから遠慮無く食べればいいんだよ」

それにしても、この宿を切り盛りしているおばさんの皆様方の逞しさには驚嘆させられた。

彼女達はあの黒装束集団を殲滅させ、わざわざ私達が帰ってくるのを見越して食事の準備に取りかかっていたのだ。

私もそのお陰でこうして体力を回復させることが出来ているわけだが、何時の時代も女は強いということなのか。

それに何だか母を思い出させるような強くて暖かい包容力を感じさせられる。

死神との戦いを何とか乗り切り、暖かい食事にありつけたことで私は生きていることを実感しているのだ。

そのことで不覚にも涙が零れそうになり、危うく恥を晒しそうになったわけで…。

だが、おばさん達は私のなけなしの意地を受け流すような大人な目線で黙って食事を提供してくれた。

全く、後十年ほど若ければ、確実に酒池肉林の構成員として全力でお誘いしていただろうというほどに良い女達だった。

「おい、そんなに急いで食わなくても飯は逃げたりしないぜ。全くてめえは育ち盛りに餓鬼かよ」

「食べられるときは魚の骨も残さず食べろというのが我が家の家訓だ」

モイラの呆れた声にも構わずに私は馬鹿食いを遂行していく。

おばさん達の食事はとにかく美味すぎたのだ。

酒池肉林の構成員に迎えられなくとも、家政婦として雇えば最高だ

ろう。

「ほら、乱暴に食うから頬に食べ滓が沢山付いてるぜ。拭いてやるから顔貸しな」

モイラは私の頭を掴んで顔を向かせ、布巾で頬を拭ってくれる。

何だか近所の姉さんに世話を焼かれているようで少し気恥ずかしい…。

「おや、早くも世話女房気取りかい？あんたがそんなにも手が早いなんて知らなかったよ」

「全く良かったよ。モイラも元の女に戻ったんだねえ。小さい頃はあれほど可愛かったのに、サブマシンガンをぷっぱなしたり、花の世話よりも武器の手入れをするようになったときは心配だったけど…」

「馬鹿！何言ってやがる！俺はだな、ただ此奴のことを放っておけなくてだな…」

「モイラ、狙った男は絶対に逃がさないようにするんだよ。あんたの大きい胸で挟み込んでやれば、男なんて一発で終わりさ。頑張るんだよ」

「てめえ等もう今度こそ勘弁しねえぞ！待てこの野郎！」

モイラの怒鳴り声とおばさん達の笑い声を挿入曲として私は恙なく食事を進めていった。

下手に介入して巻き添えを食うのは御免被るからな…。

「何自分は関係無いって面で飯食ってんだよ！てめえは！」

「ぶべらっ！はべらっ！」

やはり平和的食事は望めない運命だったか…。

それにしてもモイラの攻撃力はますます上がってきているな。

モイラの平手打ちは脳が激しく揺さぶられ、意識が闇の底へと永遠に沈みそうになってくるぞ。

その内、私はモイラのお仕置きで死者の国へと直行してしまうのではなかろうか…。

「モイラ、あんましやりすぎると嫌われるわよ。鞭を使うのだったら飴を与えないと男は逃げてしまうからね」

「分かってるよ。後で此奴にはたっぷり飴を与えてやるんだからな。今のは俺を心配させたお仕置きなんだからよ…」

そうか、私はモイラに心配させたからお仕置きを食らっているというのか…。

だが、お仕置きで死者の国へと直行するのは御免被りたいからそろそろ止めて欲しいのだが…。

私の両頬は既に瘤のように膨れあがっていた。

「そうかい。だったら早く飴を与えてやるんだね。食事を私達が片づけとくから思いっきり燃えてきな」

「いや、片づけの手伝いをするぜ。てめえも床に伸びてないで手伝えよ」

モイラはお仕置きされて床に伸びている私に理不尽に命令してくる。

伸びてしまっていたのはモイラが原因で命令されるのは癪だが、世話になったおばさん達の手伝いをするのは賛成だ。

私は脳震盪してふらついている身体を鞭打つようにして立ち上がり、食器洗いに勤しんでいった。

……。

……。

…。

食事の片づけを終え、寝室に戻ってベットへ寝転び、目を閉じる。

さて、これからどうするかを考えなければな…。

この世界での最終目的はエロスに会ってどうにかすることだ。

だが、今の私では個人的な戦闘力はあっても、権力や社会的地位は無い。

馬鹿力だけではエロスの場所まで辿り付くことは不可能に近いだろ

う。

さすがに単体で世界相手に全面戦争を起こすのは無謀を通り越してただの愚か者だ。

それにカロンのような強力な取り巻きが他にも何体もいるかもしれない。

今の私に必要なの強力な後ろ盾だ。

国を相手にするのだったら、こちらも相応の勢力を誇る組織を背にして立ち向かわなければならない。

今思いつく妥当な勢力と言えば、モイラが所属するという反乱軍なのだろう。

しかし、私は身元不詳でエロス以外に存在する世界で唯一の男だ。

それに私は既にエロスに宣戦布告してしまった。

エロスが私を取るに足らない存在だと侮ってくれれば好都合だが、生憎それは期待できそうにない。

なぜならば、私がエロスの立場ならば、全軍を総動員させて自分の存在を脅かす者を全力で排除しようと思ってしまうからだ。

エロスのもう一つの可能性である私がそう思ってしまうのだからエロスもそう考える可能性が極めて高い。

それを考慮して私は戦争を引き起こす起爆剤という立場だ。

反乱軍が未だに健在なのはおそらくエロスが少しでも自分の女を増やそうと腐心していることから手加減をしているのだと思う。

私がエロスの立場ならば、長い歳月を掛けて精神的に追い詰める等の搦め手で攻めた立ていくからな…。

それでもし、私が反乱軍という組織に加入したことをエロスが知れば、手加減無しに間違いなく前面戦争を仕掛けてくるに違いない。

私は足がかりになる組織を戦争に巻き込むことを前提にして、手に入れなければならないのだ。

要約すれば、己の目的のためにその他大勢を巻き込むことすら厭わない手段を用いなければならない。

何とも気が重たいものだ。

これでは英雄として祭り上げられたブリュンスタッドの頃の方がよほど裕福だった。

あるいはヴァルキリアでヒュプノスの使い走りだった頃の方が何も考えずに楽だった。

だが、今は私自身で物事を考えて前に進まなければならない。

『だから、迷うことは無いよ。僕を選ぶんだ。そして、一緒に面白可笑しく遊んで暮らていこうよ。きっと毎日が楽しいはずさ…』

この世界に放り出したガイアの言葉を思い出してしまう。

今思えば、ガイアの誘いはこの上無く魅力的なものだと感じてくる。

何もかも忘れて面白可笑しく遊んで暮らしたいと思えてしまう。

私が望めばガイアは全てを与えてくれるのだろう。

地位も名誉も夢や希望も何かも全てを…。

……。

なるほど、これこそがガイアの目的なのか…。

この荒廃とした世界に私を放置させ、苦難を舐めさせ、絶望に打ち拉がれた私に救いの手を差し伸ばそうとすることが狙いなのだろう。

確証は無いがそう考えれば辻褄が合うと納得させられる。

……。

だが、ガイアの差し伸べた手を掴むのも悪くないと思えてしまう。

そうだ、私は自分の衣食住が保証されればそれで良かったのではないのか？

私はいつの間にこの世の全てを背負った救世主気取りになってしまったのだろうか？

思えば、分布不相応にも家族を持とうとしたときから私の本当の苦難が始まったと言える。

その時から私は傷だらけの人生を歩み始めたのだろう。

ブリュンスタッドが滅亡した時にエルとアビスのことを放置して逃げていれば、私は平和な人生を歩めていたはずだ。

エルが人質に取られたことを気にせずにヴァルキリアから脱出していれば、平凡で安全な生活に戻れたかもしれない。

その全ての機会を私は不意にして敢えて困難な道を選んでしまったのだ。

何故だ?

私は痛い思いをするのは死ぬほど嫌いだったはずだ?

アーテとの戦いでも大切な者が出来たからと気合いを入れて命を賭けてしまった。

大切な者?

家族?

それは私にとって本当に必要な者だったのか?

何を基準に私は彼女達を大切な者だと決めたのだ?

分からない…。

分からなくなった!

頭が痛い！

なぜ私はこれほど苦しい思いをしてまで…。

ん？

唇に生暖かい感触が伝ってくる。

これは…。

目を開くとモイラの顔が私の視界を占めていた。

私はモイラに口づけされているのか…。

モイラは私が気づいたことを知り、貪るようにして唇を吸い付かせてくる。

「ちゅばちゅぷちゅちゅる」

私の舌がモイラのそれに絡め取られ、モイラの口の中に強引に招待されていく。

「ちゅるるるっ…ちゅばちゅうううっ！」

モイラは私を縛り滓にするぐらいに痛いほど吸引してくる。

少し息苦しくなってきた。

意識が朦朧としてきた頃ぐらいにモイラの唇がようやっと離れる。

モイラの唇から涎の糸が伸びていた。

「眉間に皺寄せて何考えていたんだ？まあ、どうせ禄でもねえことをなんだろうな」

モイラは意地悪そうな笑みを浮かべている。

それが何故か私には煩わしく思ってしまったのか顔を背けてしまう。

「そうかもしれないな…」

「おい、そこは否定しねえのかよ？ていうか何いじけてんだよ」

モイラは背けていた私の顔を掴んで強引に自分の顔の方へと向かせる。

「もうてめえと俺は運命共同体ってやつだろ。悩んでいるんだったら話してみな。話したくないんなら無理とは言わねえけどよ…」

どうやら私が悩んでいることをモイラに悟られてしまったようだ。

「お前にとっては取るに足らない、恥ずかしくて言えないことだ」

私は真摯に心配しているモイラに対し、苦笑して答える。

だが、モイラはそんな私に吐息がかかるほどに顔を近づけて凄んできた。

「それは違うぜ。てめえの悩みの度合いを決めるのは他人なんかじ

ゃえよ。他人からすれば下らない悩みだとしても本人が悩んでるんだったら一大事なことだ。それを下らないと斬り捨てる野郎の方が一番下らない野郎なんだぜ」

……。

「てめえが目を瞑って眉間に皺を寄せて悩むことだから、てめえにとっては重大な悩みなんだろ。俺は絶対にそれを下らないなんて斬り捨てたりはしない。それに何に悩んでるかは察しはついてるしな…」

「私の悩みが察しがついているだと？お前に私の何が分かるというのだ？」

今度は私がモイラを睨み付けてしまう。

それに対して、モイラは怯むことなく見つめ返してくる。

「何となくだけど、てめえはエロスと何らかの因縁を持ってるんだろ？」

モイラの問いかけに私は息を呑んでしまう。

もしかして、私がエロスのもう一つの可能性であることが悟られてしまったのか？

「俺がエロスの悪行を語っている時にてめえはいつも申し訳なさそうに顔を俯かせていたからな。彼奴と何かの関係があるにせよ、てめえはてめえだろ。飽くまでエロスがやったことだ。てめえが申し訳ないような顔をしなくてもいいんじゃねえか？」

モイラの言葉に私の心が揺さぶられる。

てめえはてめえだろ、か…。

いつも心の中で私は私だと言い聞かせていたはずなのに何故だろうか、誰かにそう言われるとより安心した気持ちになれてしまう。

「そうだな。モイラの言うとおりだ。私は私だ。確かにエロスのことは関係無い」

モイラは私の答えに満足したのか微かに笑い、私の頬に口づけを落としていく。

「良い顔になってきたな。それでこそ俺の男だぜ。よし、これからてめえに飴をたっぷり与えてやるぜ。明日からは忙しくなるからな…んっ…ちゅぱ」

モイラは顔のみならず首筋から胸元まで口づけの雨を降らせる。

私の身体に橙色の口紅が付けられていく。

モイラの唇の感触に身もだえしながらも私はモイラが言った言葉から気になることがあり、質問する。

「うっ…明日…忙しくなる…うおっ…どういうことだ?」

「ちゅ…決まってるだろ…ちゅぷ…明日は俺と…んっ…反乱軍の本拠地に…ちゅぱ…旅立つんだからよ…ちゅう」

モイラは私の胸に唇を這わせながらさも当然のように言い放ってくる。

私を反乱軍の本拠地に連れていくだと？

口づけてくるモイラを引き離して私は起き上がる。

「身元不明の私を反乱軍の本拠地に連れて行ってもいいのか？それに私はお前の言うとおり、エロスとは因縁がある。そんな私を迎え入れてしまっては…むぐっ！」

モイラは私の言葉を遮るように唇を吸い付けて押し倒してくる。

「ちゅば…てめえが何者だろうと問題無いぜ。どうせ俺達は近い内にエロスに戦争を仕掛けるつもりだからよ。頭目は世界中に散らばっている同志に呼びかけをやって軍備を整えてるんだしな…ちゅううっ！」

モイラはさらりと機密事項を私に漏らしてきた。

どうやらモイラの中で私が共に来ることが確定しているような感じだ。

「んっ…てめえはあのエロス直属の死神カロンを、クロエお姉ちゃんの仇を取ってくれた。形見の笛を大切に握っていてくれた。俺を守ってくれた。何よりもてめえはクロエお姉ちゃんの思い人だったんだから…ちゅぱっ…」

……。

「包帯のおじさん、俺はおじさんを最初見たときに親父のことを思い出したんだ。親父は戦争帰りで全身が火傷で包帯まみれになってしまって、それでも俺やお袋に心配掛けないように笑いかけてきていた。てめえがクロエお姉ちゃんに笑いかけている姿が丁度親父の姿と重なっちまってそれで…」

モイラは顔を赤くして染めてそっぽを向く。

……。

なるほど、父親の姿と包帯まみれの私の姿が重なったからこそ恐れずに私に好意的に話しかけてくれたわけか…。

それでクロエは子供のモイラ相手に嫉妬するなどという姿を私に披露する羽目になってしまったわけだ。

「俺はおじさんを信じてるぜ。おじさんもクロエお姉ちゃんを大切に想っていたことを…。だから、おじさんを俺達の仲間に迎え入れたいんだ…」

モイラはいつの間にか私のことをてめえからおじさんと呼んでいた。

自分の想いを伝えたことで昔の自分に戻りつつあるのだろうか。

「俺じゃあクロエお姉ちゃんの代わりにはなれないかもしれない。けど、それでも俺は…」

「モイラは私に言ってくれただろう。てめえはてめえだと。ならば、モイラもまたモイラでしかない。クロエの代わりでなくて充分だ」

今の男らしいモイラも昔の女らしいモイラも結局は私にとっては同じモイラでしかない。

衣食住を保証できれば、他者などどうでもいいと思っていた過去の私と大切な者を守るために痛い思いを進んで受けている今の私が同じであるように…。

エロスと同じように私もまた残虐非道な気質が心の何処かにあるのかもしれない。

だが、それでも私はエロスとは違うと断言できる。

私には心配してくれる家族がいるのだから…。

……。

そうだ、私はこの心地良い気持ちを得たいが為に大切な者を守ろうとしていたのだった。

そして、最終目的である酒池肉林を作り、私は私が満足する楽園を築き上がるために命を掛けているのだ。

「ありがとう、おじさん。大好きだぜ…」

モイラは自分の服を脱ぎ捨て、私の服を脱がせていく。

「今晩は俺がおじさんを徹底的に満足させてやるよ。だから、俺に全てを任せてくれ…ちゅ」

口づけをしながらモイラは私の男の証を自分の中へと呑み込んでい

く。

前にしたときよりもさらに強烈な締め付けだ…。

「おじさん、あの時言った約束覚えているか？」

あの時言った約束？

『もし、そのまま怪我を治らないで寂しい人生を送ってしまうのだったら私の所に来てよ。私がお嫁さんになってあ、げ、る…』

私は子供だった頃のモイラと交わした約束を思い出す。

「寂しい人生を送っていたら嫁になってくれるという約束か？」

私の答えにモイラは満面の笑みを浮かべてくる。

「覚えてくれてて良かったぜ。忘れていたら不能にしてやるところだったからな…」

モイラは獰猛な笑みを浮かべて、呑み込んでいる男の証をさらに強く締め付けていく。

覚えておいて心底良かったと思った…。

忘れていたら男としての喜びとは永遠に無縁になってしまうところだったからな…。

「おじさんが寂しい人生を送っているかどうか分からねえけど、少なくてもこの世界では行く当て無いんだろ？だったら、俺がおじさ

んを婿として迎えてもいいよな？」

……。

モイラが言っていることは私に対する告白というものなのだろう。

女が一大決心をした愛の告白なのだが、私は…。

「モイラ、私は…」

「分かってる。おじさんはこの世界の人間じゃないことも…。いつか別れの時がやってきてしまうことも…。だけど、今だけは、今だけは俺に夢を見させてくれ…」

モイラの切なる訴えに私は何も言えなかった。

私とモイラは異なる時系列の世界から生まれてきている。

いずれ私は元の世界へと戻ることになるかもしれない。

元の世界にもモイラは存在しているが、将来、今私が抱いているモイラと同様になる保証は何処にも無い。

この世界のモイラもまた数ある可能性の一つでしかないのだ。

私がこの世界から去れば今のモイラとは永遠の別離となってしまう。

「おじさんとはいずれ別れの時がやってくるかもしれない。だから、おじさんと愛し合った証が俺は欲しいんだ！」

「私と愛し合った証？」

私の言葉にモイラは頷く。

もしかしてモイラは私の…。

「俺におじさんの子供を産ませて欲しい。だから、お願い…」

私の子供？

モイラが私の子供を産んでくれるというのか…。

……。

私は無性にモイラを愛しく思い、起き上がってモイラを抱き締める。

「おじさん？」

モイラは突然の私の抱擁に驚き、身体を固くする。

「私でいいのか？私はこの世界からいずれ消えてしまうかもしれない。それでも私の子供を産みたいというのか？」

「愚問だぜ。俺はおじさんの子供だから生みたいと思ったんだ。だから、後悔は絶対にしない」

私は思わず涙腺が緩みそうになってきた。

歪んだ世界の中にも確かに希望は存在していたのだ。

「私の子供を産んでくれ、モイラ！」

私は男の証を今までにないほどの力を込めて、モイラを貫いていく。

「うっ！おじさん！」

モイラが背骨が砕けるほどに強く抱き締めてくる。

「あうっ！おじさん…私を…感じて！」

私の激しい攻めにモイラは倍返しするように荒々しく情熱的に男の証をすり減らすのではないかと言うほどに激しく腰を振ってくる。

それにいつの間にか一人称が俺から私に変わっていた。

「ああっ…私の中で…ううっ！おじさんのが…暴れている！はああっ！激し…過ぎる…あぁん！」

ぐおおおっ！

未だかつて無いほどの激しい締め付けだ！

それにこの激し過ぎる腰使い！

モイラが腰を振る度に全身の骨が砕けるのではないかという衝撃が襲ってくる！

これが小作りを勤しむ女の底力だというのか！

「あああっ！おじさん！おじさん！好き…あぁん！大好き！私を…

私を離さないで！あああああっ！」

ぬあああああああああああああああああっ！

……。

……。

……。

……。

……。

…。

私は骨と皮だけの縛り滓と成り果て、モイラは至福に満ちた顔で眠りについていた。

結局モイラが徹底的に満足するまで搾り立てられたが、彼女を満足させたのなら男としての面子が立ったと思っておくことにしよう。

モイラに指し示された道ではあるが、とりあえず私がまずやるべきことは見つかった。

反乱軍の本隊に合流して、エロスとの決戦に備えることだ。

この世界でエロスと決着をつけれるかどうかは分からないが、少なくとも辿り着くことは出来るに違いない。

私はこの世界に存在しないはずの異分子だが、それでもこうして存在し、生きているのだ。

万一、元の世界に戻れないのであれば、エロスを始末して、モイラと家庭を築くのもいいかもしれない。

そして、モイラに殺されることを覚悟してでも酒池肉林を目指していくのだ。

私が私である限り、過去、現在、未来、平行世界の有無なぞ関係無い。

地獄であれば、天国に変えていけばいい。

絶望の闇に満ちているのならば、希望の光を照らしてみせる。

どの次元、いかなる世界に投げ出されても私である限り、問題無い。

ただし、最低でも女がいればを付け足した方がいいだろう。

それが無くなれば、さすがにどうしようもなくなってしまうからな…。

……。

さて、明日からは忙しくなるとモイラが言っていたので寝るとしよう。

少しでも体力を回復させなければ、本当に木乃伊になりかねない。

それにしても最近、くたばるようにして眠ることが多い気がしてくる。

まあ、生きていることをそれだけ実感しているのだと強引に納得すればかまわないか。

ともあれ、毎度のことながら…。

……。

燃え尽きたな…。

第７５話：始まりの地

目を覚まし、私は起き上がる。

隣に寝ていたはずのモイラはいなかった。

既に起き上がって準備でもしているのだろうか。

私は気だるい身体を引きずって服を着て、寝室を後にした。

……。

……。

…。

台所ではモイラがおばさん達と共に朝食の準備に取りかかっていた。

「お早う、おじさん。もうすぐ飯が出来るからテーブルに座って待ってくれ」

モイラは手慣れた動きで野菜を炒めて料理を作っている。

実に家庭的な姿だった。

あの重火器をぶっ放していた姿とは懸け離れ過ぎている。

「あら、お早う。ロストさん。昨日は随分燃え上がったようだね。それよりも顔洗った方が良いわよ。顔に沢山モイラとやり合った後

が残ってるしね」

おばさんの発言に私は即座に愛用の手鏡を取り出して、自分の顔を確認する。

顔には見事に橙色の口紅が至る所に塗りたくられていた。

久しぶりの情事だったことからつい油断して顔の手入れをするのを忘れていたな…。

私は急いで顔を洗い、モイラ達が用意してくれた朝食を取ることにした。

モイラが用意してくれたのはレバニラ炒めにサラダ、ソーセージを挟んだパンだった。

朝食を食べれば、この宿を経って反乱軍の本部へと向かうことになる。

当然、その道のりでまともな食事に有り付けるかどうかは分からない。

ならば、ここでしっかりと味わって食べておかなければ。

「おじさん、美味いか？」

「美味い」

モイラが作ったレバニラ炒めは実に美味だった。

彼女は私が食べる様子を満面の笑みを浮かべて見ている。

「私の顔に何か付いているのか？」

「ううん、別に」

モイラは笑顔を向けたまま、ただ私の食べる様子を見ている。

まるで少しでも私の姿を自分の目に焼き付けようとしているかのように…。

いずれ私は元の世界へと戻り、彼女とは永遠の別れを告げることになるのだ。

それを考えるとモイラの笑顔が少し切なく感じてくる。

……。

これ以上辛気くさいことを考えるのは止めよう。

考えても仕方ないことだ。

私は余計な考えを起こさないようにするためにも馬鹿食いをするのだった。

……。

……。

…。

宿の窓枠から見えてくるのは無機質な建造物と雲間から僅かに照らされる日の光。

吹き荒ぶ風が運んでくるものは灰と塵と僅かに漂う死臭。

世界はエロスという疫病で衰弱し、今にも病死してしまうのではないかというほどに荒廃している。

歪んだ未来とはまさに言い当て妙だな…。

私はモイラが戦場で使った武器、サブマシンガンを手に持って眺める。

モイラに聞いた話によるとエロスは今の時代には考えられないような技術で作られた武器を大量生産しているらしい。

その副産物が昨日の死神との戦いで猛威を振るった機関銃、サブマシンガンやバズーカ等と言った重火器だそうだ。

魔力が無い人間でも高等魔法級の攻撃を即席で行使できるという革新的な武器であり、この世界の主要武器として扱われているという。

威力では魔法の方が高いが、魔力の充填や体力の消耗も無いことが特筆すべき点であり、効率が良いようだ。

だが、その技術の最先端で作られた核兵器と呼ばれる代物により、地上は荒廃し、人類の大半が死滅してしまったのだという。

エロスはかつての第二次聖戦時に核兵器を投入し、世界を代表する

主要国家を世界地図から抹消していった。

その威力は殲滅魔法をも凌駕し、世界は恐怖の渦に呑まれていくのだった。

さらに核兵器の真の恐ろしさは殲滅魔法と同等の威力を持っているだけに留まらず、放射能と呼ばれる人体の組織を破壊するものをばらまくことにあった。

それがこの世界を病ませている根幹だということだ。

しかし、人類が滅亡すればエロスの理想の楽園が成り立たなくなってしまう。

さすがにエロスも男のみならず女まで死滅しては溜まらないと思ったのだろう。

神の力と行使し、世界に蔓延する放射能を瞬く間に浄化していったらしい。

浄化により、辛うじて人類は滅亡せずに至り、エロスは神として世界に君臨することになったわけだ。

自分が蒔いた種で世界を滅亡寸前にまで陥れ、その後始末をすることで世界を救済し、神として崇めるよう呼びかけるとは…。

エロスはまさに下々の苦悩や絶望を我関せずと言わんばかりに残酷な運命を下す神そのものだ。

世界はエロスによって生かさず殺さずの状態に追われている。

これほどまでに世界を掻き乱したエロスに私は会おうとしているのだ。

我ながら正気の沙汰ではないな…。

「おじさん、準備が出来たぜ」

寝室に訪ねてきたモイラが私を呼びかけてくる。

どうやら旅の支度が整ったようだ。

私はありったけの武器を所持して寝室を後にした。

……。

……。

宿の外には乗り物らしき物が用意されていた。

モイラの説明によると自動車と呼ばれる乗り物であり、これもまたエロスの製品だという。

自動車の中にも多種多様の種類があり、その中でもこの自動車ジープは軍事戦略において最も活躍したものであると言われている。

耐久性の高さや険しい道でも安全な走行力、輸送や偵察において優れた性能を発揮する代物らしい。

エロスの部隊が食料を輸送していたところを襲撃して手に入れたとのことだ。

「これで本部まで一気に飛ばしてやるぜ。ほら、おじさん。恐いことないからさっさと乗れよ」

私は言われるがままにモイラの隣に搭乗していく。

これからモイラと二人きりの旅が始まるのだ。

反乱軍の本部に何事も無く辿り着ければ良いのだがな…。

宿からはおばさんの皆様が見送りに来てくれている。

「達者でね。私達も戦いの時が来たら必ず駆けつけるからね」

「ありがとう、頭目には伝えておくぜ」

「道中気を付けて。ロストさん、モイラを宜しく頼むよ」

「まかせてください」

私はおばさんの言葉に力強く頷いてみせた。

「出るぜ、おじさん」

ジープは震えだし、馬車よりも速い速度で走り出していく。

手を振って見送るおばさん達の姿が瞬く間に遠ざかっていった。

……。

……。

…。

砂塵が舞う荒野に私とモイラが乗るジープはひたすら駆け抜けていく。

私は暇だったので運転しているモイラと他愛のない話をしていた。

世間話の際にふと何処に反乱軍の本部があるのかを気になり、聞いてみた。

「本部は何処にあるのだ？」

「旧ブリュンスタッド王国首都ジークフリートだぜ」

……。

これも運命の巡り合わせなのか…。

まさか私にとって全ての始まりの地が反乱軍の本部になっていたとはな…。

「モーモス様が言ってたもんな。おじさんはブリュンスタッドの軍を率いて、あのヴァルキリアを退けた英雄だって。そのブリュンスタッドが今は反乱軍の住処になっていると分かれば驚いて当然か…」

モイラは感慨深げに言ってくる。

ブリュンスタッドは滅亡する前まではビフレストと並んでヴァルキリアの宿敵と呼ばれていた国だった。

それが反乱軍の本部となり、猛威を振るっているのだ。

対してエロスの軍勢は旧ヴァルキリアを母体とした世界を支配する勢力。

形は違えど、ブリュンスタッドとヴァルキリアの因縁は時を越えても尚続いていたというわけか…。

「おじさんはエロス直属の神であるカロンを撃退した。もうおじさんの存在はエロスに知れ渡ってるはずだ。だから、おじさんを反乱軍の象徴として招くんだ。来るべき戦いに向けてな…」

「頭目は世界各地にいる同胞に呼びかけているのだと言っていたな。もうすぐ戦争が始まるということなのか…」

モイラは私の問いに頷く。

「頭目は第三次聖戦を発動すると言ってた。俺達反乱軍はエロスに最後の戦いを挑むんだ。おそらく、これで完全に白黒がつけられるんだろうよ。この世界が完全にエロスの物に成り果ててしまうか、あるいは俺達が新しい世界を築き上げるか、いずれかにな…」

「二大勢力による完全なる殲滅戦争になるというわけなのだな…」

私は第三次どころか第二次すらも経験したことがまだ無い。

いずれ元の世界で第二次が勃発するらしいのだが…。

いつもの私なら平和的に物事が済めばいいと思っていただろう。

だが、エロスが関わっているのであれば、話は別だ。

奴と私が分かり合うことは天地が裂けても有り得ない。

だから、戦いは避けられない。

私はエロスと何としてでも決着を付けねばならないのだ。

でなければ、酒池肉林の夢は永遠に実現し得ないだろう。

エロスが狂った楽園を築き上げている限り…。

……。

……。

…。

日が暮れて、荒野は物悲しい風が吹き付け、冷たい夜が迎えてきた。

私とモイラはジープを止め、瓦礫の中で身体を寄り添わせて過ごす。

火を灯したかったが、いつエロスの刺客が襲いかかってくるかもしれない時にわざわざ目印になるものを出すわけにはいかなかった。

さらに魔力も探知される恐れがあることからよほどのことが無い限り私は魔法の使用を控えた。

「おじさん、寒くないか？」

私が言う予定だった台詞をモイラが先に言ってきた。

あの夜以来、モイラの粗野な口調が少し潜めてきたが、相変わらずの男っぷりだ。

モイラの方が私よりも体格が勝っているため寄り添うと言うよりはモイラに一方的に抱き締められている形になってしまっている。

まるでモイラの抱き枕になってしまっているような気分だ。

「大丈夫だ。問題無い」

「そうか。おじさんは暖かいな。癖になってしまいそうだぜ…」

モイラは気持ちよさそうな声を出して頬刷りをしてくる。

まあ、体格が小さいお陰で私はモイラの胸枕を堪能出来るから、男の威厳が損なわれるのは些細なことかもしれない。

私もモイラの胸により一層強く頭を擦りつけていく。

「なあ、おじさん…」

「何だ？」

「このまま二人で何処かに逃げようか？」

……。

私は顔を上げてモイラの顔を見る。

瓦礫の中にいることで視界が暗く、モイラの表情が見えない。

「モイラ…」

「ううん、ごめん。私、どうかしてた。忘れてくれ…」

一人称がまた俺から私に変わっていた。

そういえば、あの夜の時もモイラは一人称が私と言っていた。

「それもいいかもしれないな…」

「おじさん？」

モイラの微かな息が止まるのを感じた。

「モイラの提案は魅力的だ。エロスのことや反乱軍のこと、この世界情勢の何もかもを忘れて、二人静かに暮らすことも良いかもしれない。そうしたところで誰も責めたりはしないだろう…」

この世界で生涯を終えたクロエもモイラが武器を取ることは望んでいないだろう。

あの気の優しいおばさん達もモイラが戦場に出ることを本当は望ん

でいないはずだ。

彼女達のモイラを見る眼差しは喧嘩で傷ついた私を気遣う母さんの眼差しによく似ていたから…。

私もまたモイラの提案に心を揺さぶられてしまったのだ。

このまま何もかも忘れて二人で生きていくのも悪くないかもしれないと…。

だが…。

「私は欲張りかも知れないな。静かに過ごすのではなく、日の光を浴びながら楽しく過ごしたいのだ。だから、立ち止まるわけにはいかない…」

「おじさん…」

モイラは私の頭を自分の胸の中へと収めて、より強く抱き締めてくる。

「私もおじさんと明るい日差しの中で笑って楽しく過ごしたい。だから、私も立ち止まるわけにはいかないよ…」

「そうか…」

やはりエロスとの戦いは避けられそうにないだろう。

私とモイラが望む楽園を築き上げるためには…。

モイラはいつの間にか私の下着を降ろしにかかっていた。

「また、おじさんの子種を…貰っても…いいか？」

モイラの不安が入り交じったかのような辿々しい声が頭上に響いてくる。

多分、モイラの顔は赤く染まっているのだろう。

私は肯定の意を示すため、無言でモイラの背中に腕を回していく。

「おじさん…んちゅ…」

モイラは私の頭を掴んで唇を重ね、男の証を呑み込んでいく。

「私、必ずおじさんの子供を必ず産むから…私の大好きなおじさんの子供を私が…んっ！」

狂おしいほどに激しくモイラは私を求めてきた。

私がこの世界に存在した確かな証を自分の中に宿すために…。

私はモイラの切なる思いに応えるべく、燃え上がっていった。

「あああああああああっ！」

モイラの絶叫が瓦礫の中で反響していった。

……。

……。

…。

こうして私とモイラは反乱軍の本部であるジークフリートに到着するまでの一週間、毎晩繋がることになった。

毎晩、情事することでモイラはますます美しくなり、私は痩せ細っていくのだった。

そして、私とモイラはブリュンスタッドの首都ジークフリートの手前にいた。

首都は砂塵で視界が閉ざされていた。

「とうとうジークフリートに着いたわけか。もうおじさんと二人きりの時間が終わってしまったのが残念だけどな」

モイラは艶が増した顔で艶やかな笑みを私に向けてくる。

「そ、そうだな…」

対して私は蹌踉ける身体を杖で支え、老人のような嗄れた声で応える。

ジークフリートに辿り着くまでは幸い、エロスの刺客に襲われることは無かったが、後一日でも遅かったら本気で腹上死をするところだった。

手鏡を見たときは頬が削ぎ落ち、橙色の斑点が顔中に付いていたこ

とから長くないかもしれないと恐怖を抱いたほどだ。

「さあ、行こうぜ、おじさん。俺が支えてやるからよ」

モイラは私の背中に腕を回して、支えるようにして連れて行ってくれる。

「すまないな…」

モイラの再びいつも通りに一人称が俺に戻っていた。

また、あの夜の時のように一人称を私と言って欲しいと少し思ったりもするのだが、それは強要するべきではないだろう。

戦争が終われば、モイラも男らしく振る舞う必要も無くなってくる。

あの情事で一人称が俺から私に変わったのも女でありたいと無意識に思ってのことだろう。

だから、私はモイラが自然と私と言ってくれることを待つことにする。

……。

……。

…。

この世界に留まる限りに…。

ジークフリートはまるで何千年も時を経て風化したのではないかというほどに荒れ果てていた。

賑わっていた町も人影は無く、絢爛豪華に彩っていた城も見る影も無く瓦礫の山と化していた。

聞こえてくるのは吹き荒ぶ風の音だけだった。

……。

風の音に微かだが、雑音が混じっている。

これは…。

瓦礫の影から薄汚れた布で顔を隠している者達が飛び出していき、あっという間に私とモイラを包囲していく。

「その女を離して貰せ！このエロスの回し者め！」

「モイラ。安心してください。すぐにその曲者を殺しますから」

「聖戦が始まる前にエロスに我等の力を示す良い機会やもしれぬな」

包囲している兵士の中から三人の女兵士が現る。

肩までの長さで赤、青、緑の色鮮やかな髪をしている。

赤い髪の女は赤紫色の口紅を塗った唇から八重歯を見せ、赤く鋭い眼光で睨み付けていく顔つきからいかにも獰猛な女戦士の雰囲気を漂わせていた。

服装はアーテが来ていた軍服がそのまま赤になったものだ。

青い軍服を着ている青い髪の女は藍色の口紅に染めた唇から冷徹な言葉を紡ぎ、時を凍らせるかのような冷たい青の視線は冷酷なる女戦士だという恐怖を抱かせる。

緑の髪の女は青緑の口紅を装った唇からは美しくも年輪を感じさせるような老成とした声を響かせ、威厳に満ちた緑の瞳は歴戦の女戦士の威圧感があった。

彼女だけが緑の軍服にさらに赤いマントを纏っている。

三人の中でも位が一番高いことが伺わせる。

それにしても三人共、目眩がするほどの美女だ。

私の世界の住民では無いが、出来ることなら是非酒池肉林の構成員に迎えたいと思ったほどだった。

だが、彼女達は目を合わせただけで八つ裂きにするのではないかというほどの殺気を帯びた目線を私に向けてきている。

「あたいの名はメガイラ」

「わたくしはティーシポネー」

「儂の名はアレークトー。我等三人は反乱軍最精鋭部隊エリニュス。エロスに使役されし邪神よ。覚悟されるがよい」

緑の女アレークトーの自己紹介と共に風の音が鳴り止んでいく。
それどころか空気が変わったかのような感触がしてきた。
包囲していた兵士達がいつの間にかいなくなっている。
「この世界ならば、外界に遠慮することなく始末できよう」
アレークトーの言葉に対し、私は額から冷や汗が流れるのを感じた。
いつの間にか私達は疑似世界へと飛ばされてしまっていた。
世界そのものは一見すれば、変わっていないように見えたが、空気が違う。
見た目が同じなだけでそれ以外の何もかもが違う偽物の世界。
現実の世界を完全に再現させた恐ろしいまでもの疑似世界だ。
力を持たない者であれば、自分が別世界に飛ばされたことすら気づかないだろう。
現実世界を忠実に似せた偽物の世界を創造し、私とモイラを一瞬にして疑似世界に招き寄せた力は驚嘆すべきものだった。
確か反乱軍の最精鋭部隊と言っていたな…。
彼女達一人一人の力は軽く見積もって、レテシアが使役していたゲーラス以上の力、すなわち上級神に近い戦闘力を秘めているだろう。

簡単に言えば、アーテ並の実力者が三人揃っているということだ。

……。

冗談無く絶体絶命の危機だ。

だが、彼女達は反乱軍の同志、いわばモイラの仲間なのだ。

ここは平和的に話し合えば、分かってくれるはず…。

「私はエロスに仕える邪神などではない。それに…」

「黙れ、邪神！エロスが使役する神はみんな男、それにこの世界に人間の男はもう存在しないはずだ！下手な嘘を突こうとしても騙されないからな！」

「口を閉じなさい。これ以上貴方の言葉を聞いてしまうと耳が腐ります。ついでに息をするのも止めてくれると嬉しいです。綺麗な空気が汚染されずに済みますから…」

赤い髪のメガイラは苛烈に、青い髪のティーシポネーは冷徹に私の言葉を斬り捨てていく。

「アレク、聞いてくれ。このおじさんは正真正銘の人間で男で味方だ。決してエロスの回し者なんかじゃねえよ！だから、警戒を解いてくれ！」

「モイラ…」

必死に説得してくるモイラに対し、アレークトーは憐憫の眼差しを

向けていた。

「モイラ、そなたはその邪神に騙されておるのだ」

「俺がおじさんに騙されてるだって？そんな馬鹿なことがあるか！俺はおじさんと一緒にあの恐ろしい死神とも戦ったんだ！それでおじさんは死神を倒してくれたんだぜ！」

モイラは私の誤解を解こうと必死に反乱軍の最精鋭部隊の三人を説得してくれている。

「儂はそなたの身に何があったのかは知っている。辛かっただろう。全てはその邪神が降り立ったことでそなたに不幸を招き寄せたのだ。カロンを滅ぼしたのも邪神の奸計の内であろう」

「だから違うってんだろうが！おじさんは邪神じゃねえって何で信じてくれないんだ！」

モイラの説得にも三人は全く取り合おうとしていない。

頼む、モイラ、この化け物女達に命を狙われないためにも何とか説得してくれ！

「邪神に誑かされているのだろ。心配するな、すぐにあたい達がその腐れ邪神をぶち殺して助けてやるからよ」

「わたくしの愛しいモイラの心の間隙を巣くう汚らわしい邪神に命じます。すぐに死になさい。死なないのであれば、わたくしの手で貴方に凄絶なる死を与えます。それでも死ねないのであれば、無限の生き地獄に逝かせます」

メガイラは拳を構え、ティーシポネーは全身から途方も無いほどに強大な魔力を溢れだしている。

もはや聞く耳持たないと言わんばかりに戦闘態勢を取っている。

いくらなんでも強引すぎないか？

こちらの言い分を聞く前に強引に戦おうとしているかのようだ。

「待て、メイ、ティー。まずは邪神からモイラを引き離す」

アレークトーが掌を向けた瞬間にモイラの身体が引き寄せられていく。

私はモイラを捕まえようと手を伸ばしたが、私の手に弾かれたかのようにしてモイラの身体がより一層遠くへと弾き飛ばされてしまう。

弾き飛ばされたモイラはアレークトーが抱き留めた。

「お帰り、モイラ」

「離せ、アレク！おじさんは邪神なんかじゃねえ！なんで信じねえんだ！」

腕の中で暴れるモイラの額にアレークトーの掌が触れる。

「ぐっ…アレク…てめえ…」

暴れていたモイラは身体が重くなったかのように急に動かなくなっ

ていく。

「おじさん…逃げ…て…」

モイラは私にそう言ってアレークトーに身を委ねるようにして眠りについた。

「モイラ！」

私はモイラを取り返そうと三人のいる所へと駆けつけていく。

「おっと、邪魔はさせねえよ！」

瞬時に目の前に行く手を遮るようにしてメガイラが現れ、拳を繰り出してくる。

私は何とか腕を交差してメガイラの打撃を防ぐ。

しかし、衝撃までは防げず、遠くへと弾き飛ばされしまう。

「くっ！モイラぁあああああっ！」

「ははっ、あたいの拳を防ぐなんて腐れ邪神の癖にやるねえ！けど、これで終わりだよ！」

吹っ飛ばされている私に凄まじい速度で迫り、拳を叩きつけてこようとするメガイラ。

喧嘩番長たる私に殴り合いでくるとは良い度胸だな…。

本気で拳を向けてくる者に対し、私は老若男女、例え絶世の美女であろうとも差別はしないぞ！

「舐めるな！」

私は身体を捻ってメガイラの拳を交わし、逆に腹部に拳をめり込ませていく。

「ぐあっ！」

メガイラは私の拳に弾き飛ばされ、瓦礫の山に激突していく。

撃破したことを確認し、モイラに視線を移す。

「お休み、モイラ。そなたが目覚める頃には悪夢は露となって消えていよう。ティー、モイラを元の世界へ送還する魔法陣を…」

「はい、アレク姉様」

ティーシポネーは魔法陣を出現させ、モイラはそれに吸い込まれていった。

おのれ、一足遅かったか…。

「さて、これで気兼ねなくそなたを葬れるのだが…」

「メイを吹っ飛ばすとはなかなか侮れませんね。しかし、メイは油断し過ぎです。メイ、早く塵の山から出てきなさい。愛しいモイラに集っている害虫を駆除しますよ」

瓦礫の山が爆発し、メガイラが飛び出てくる。

「分かったよ、ティー姉さん。いててっ…それにしても…確かに侮れないな…」

メガイラは腹部を押さえ、顔をしかめながらもアレークトー等の元へと戻っていく。

……。

私はメガイラと拳を交えて、戦慄を覚えていた。

メガイラは特に補助魔法を掛けていない状態でアーテがロキを使用した時ぐらいの身体能力があったのだ。

これで補助魔法をかけてきたらどれぐらいの戦闘力が増していくのだろうか？

考えるだけでも恐ろしい…。

「さて、そなたには反乱軍で最大戦力である儂等の力をその身に刻み込んで頂こうか…」

「抵抗せずにいてくれれば、楽に死なせてあげます。ですが、それではわたくし達の力をエロスに示すことができませんから、ある程度痛めつけた後に殺します。苦しみたくないのであれば、自殺することをお勧めしますが…」

「おい、お前はあたいを吹っ飛ばしてくれたんだ。ティー姉さんの言うことなんか聞かないでくれよ。そうでないと倍返しができない

からよ…」

三人がそれぞれ強大な魔力を纏って、私に迫ろうとしてきてる。

反乱軍と共闘してもらうために此処まで着たというのに何故、戦うことになってしまったのだ？

絶世の美女と縁があるのは非常に嬉しいが、もう少し平和的な出会いというものを経験したいものだ。

普通にお見合いするように少しずつ話して時間を掛けて互いを理解し合い、結ばれていくという流れでいきたいというのに…。

「さあ、始めようか。殺し合いを…」

拳を交えなければ、分かり合えないものなのだろうか…。

……。

もう考えても仕方がない。

とりあえず、生き延びるために肉体言語で語り合うしかないだろう。

幸いにも此処は作られた世界で無関係の人々が巻き込まれる心配はない。

アーテの時はモーモス、カロンの時はモイラ、アルゴスの時はクロエ等と常に守るべき者が側にいたが今回は違う。

自分が生き残るためだけに戦えばいいのだ。

だからこそ、アレークトーの言うとおり、何の気兼ねも無しにこちらも戦える。

モイラを安全な世界へと送ってくれたのも返って良かったのかもしれないな…。

「死ぬ準備は出来ましたか？」

ティーシポネーが苛立たしげに言ってくる。

「ああ、準備は出来た。だから…」

私は三人に背を向けて全力で走っていく。

三人の姿が瞬く間に遠ざかる。

「これって、まさか…」

「ちっ！逃げたわけですか！わたくしに余計な時間を使わせるとは許し難いですね！すぐに追いついて殺します！」

「油断するな。思った以上に侮れない相手かもしれぬぞ」

三人が思い出したかのように動き出し、逃げる私を追いかけてくる。

奴らは一人一人が破壊神級の実力者だ。

まともにやりあえば、一方的な私刑になることは確実。

ならば、逃げ続けて好機を見たら反撃という戦法でいくしかない。

……。

それにしても奴らほどの実力者を反乱軍はどうやって集めたのだろうか？

その反乱軍を纏める頭目とはいったい何者なのか？

気になることは沢山あるが、まずは…。

「待ちなさい！大人しく待てば、手加減して殺してあげます！待たなければ本気で殺します！」

「待てるか！それに殺すことに手加減も本気も関係無いわ！」

生き延びることが最優先事項だ！

私にとって始まりの場所であるブリュンスタッドを終わりの地にしないためにも全力疾走していく。

守るべき者がいない今、私は全力全開で自身が生き延びれることだけに腐心できるのだ。

エリニュス、貴様等こそ思い知らせてやるぞ！

私の神を凌ぐほどの究極にして、至高なる生存能力というものな！

そのためにはひたすら走る！

人生とは走ることと見つけたり！

第７５話：始まりの地（後書き）

もっと、武器やら兵器の勉強すればよかったな…。

次回も生き延びるためにロストは走ります！

最近はゲームをしているから多少遅れるかもしれませんが、約三日後、遅くても一週間後にて…。

第76話：Toccata, adagio und Fugue（前書き）

やはり戦闘は難しいです。

ゲームをやっていて更新が遅くなりました。

第76話：Toccata, adagio und Fugue

現実世界と似て非なる世界を私は駆け回っていた。

背後からは美女であるが、途轍もなく恐ろしい化け物共が三体追いかけている。

「モイラを誑かす者は私が許しません！大人しく私に殺されなさい！」

「こんなにも堂々と敵前逃亡する奴なんて初めて見たよ…」

「気を付けろ。少なくとも無謀に突撃する輩よりも躊躇いもなく逃亡する相手の方が油断は出来ぬ」

一人は激怒し、一人は呆れ果て、一人は警戒している。

確かアレークトーという名だったか、逃げている私を油断無く警戒している相手は特に注意が必要だろう。

メガイラは如何にも戦闘狂という感じで私にとって一番相性が良い相手かもしれない。

最も苦手だと思うのは私に一番殺意を漲らせているティーシポネーという女だ。

私を殺すためには手段を選ばないような苛烈さがあり、氷のように冷たい美貌に反して、かなりの激情家だと言えよう。

その手の輩には言葉や理屈なぞ一切通じない。

自分が好きか嫌いか、自分にとって敵か味方かが一番重要なのだ。

下手をすると反乱軍の貴重な戦力をここで断ち切らねばならないかもしれない。

私とて死にたくはないからな…。

とりあえず、瓦礫の影へと身を潜め、近づいてきたところを不意打ちだ。

私は三人からある程度遠くに引き離したことを確認し、瓦礫の中で息を潜める。

来るがいい、不意打ちで格個撃破してやるぞ！

『隠れているつもりなのか？愚かなことだ。儂等を除けば、生きている者はそなた以外に存在しないというのに…』

アレークトーの声が響いたと同時に私の身体を纏う空気の流れや土の匂いの一切が消え、視界が揺らいできたのを感じる。

私の生存本能が反応したのか、瓦礫の中から飛び出してていく。

その瞬間、私が隠れていた瓦礫は正体不明の黒い物体か何かに覆われ、暫くして消えていった。

黒い物体が消えた後を見て、私は冷や汗を流す。

私が隠れていた瓦礫の山は消滅し、地面が削り取られたかのようになっていたのだ。

「勘が良いものだ。儂のグラビティプレスを回避するとはな。やはり油断出来ぬ相手のようだ」

呆然としていて立ち止まっていた精か、メガイラとティーシポネーが迫ってきていた。

「挽肉にしてやるよ！メガイラナックル！」

メガイラが魔力を込めた拳を繰り出してくる。

あの拳には殲滅魔法級の威力は軽く込められているだろう。

受け止めるのは得策ではない。

身体を反らすことでメガイラの拳を避ける。

メガイラが拳を振るった衝撃で周囲の建造物が薙ぎ払われていく。

タナトスの打撃の強力版と言ったところか…。

メガイラの攻撃から続くようにしてティーシポネーが魔力で圧縮した剣を振り下ろしてくる。

連携をしてくるつもりのようだ。

ティーシポネーの剣撃の速度はメガイラの打撃よりも速い。

それに剣の威力はメガイラの拳に劣るものの、それでも国一つを軽く薙ぎ払う程の威力はあるだろう。

この斬撃もまた身体を捻って回避していく。

ティーシポネーは舌打ちをして斬撃を見舞い、メガイラもまたそれに割り込むようにして打撃の嵐を喰らわせようとしてくる。

二人がかりの攻撃を私は命辛々の思いで回避し続けていく。

「蛸みたいな阿呆な動きであたいの拳が交わされるなんて…」

「馬鹿にされているようで腹立たしいですね！」

二人の攻撃がますます激化していく中、ふと思った。

私の身体が以前よりも軽くなってきている。

今、私に斬りかかってきている二人は見積もってもアーテ並の実力者達だ。

アーテ並の実力者二人掛かりの攻撃を紙一重ながらも私は何とかやり合えている。

これは私が強くなっていることなのだろうか？

「この！」

「ちっ！」

私に攻撃がなかなか当たらないことで二人が苛立っている様子が見て取れる。

二人の嵐のような攻撃を前にしても私は冷静に相手の様子を伺える余裕すらもあった。

『儂がいることを忘れて貰っては困るな…』

アレークトーの声が聞こえた瞬間、身体中に重りが乗せられた感覚がしてきた。

身体が重くなってきている！

メガイラの拳が胸にめり込み、ティーシポネーの剣が肩を切り裂いてくる。

「ぐあああっ！」

動きづらくなったことで二人の攻撃が初めて当たってしまう。

視線を遙か先に捉えるとアレークトーが私に掌を向けて何らかの魔力を発している。

アレークトーが私の動きを何らかの力で制限してきているようだ。

「不本意ですが、アレク姉様の補助で貴方にようやく一撃を入れれたようですね」

「ティー姉さん、後はあたいに任せてくれてもいいよ。アレク姉さんの補助があれば、あたいだけでも充分に対応可能だ。それにあた

いの全開も見せてやりたいと思うしな…」

メガイラは獰猛な笑みを浮かべて、拳と蹴りを肘打ち等と多様な打撃を織り交ぜてくる。

相手の素早い攻撃に対し、自分はアレークトーの魔力により、動きが鈍くなっていて避けれない。

ならば、最小限の動きで相手の攻撃を受け流すしかない。

「見せてやるよ。あたいの本気を、メガイラブースト！」

メガイラの姿が視界から消えた瞬間、腹部に抉られたような衝撃が襲ってきた。

「ぐはぁっ！」

胃袋で分泌されている胃液が漏れなく口から叩き出されていく。

いつの間にかメガイラの拳が私の腹にめり込んでいた。

「おいおい、立ったまま寝ていたのか？これからが面白くなるっていうのによ…」

メガイラは八重歯を見せて笑みを浮かべながら腹にめり込んでいる拳をさらにねじ込ませていく。

ぐほっ、馬鹿な…。

私が全く反応できずにまともに攻撃を喰らってしまうとは…。

反撃の拳をメガイラに向かって繰り出そうとするがアレークトーの妨害があり、攻撃が緩慢になってしまう。

「喰らいな！メガイラコンボ！」

私の鈍い攻撃をメガイラは僅かに身体を反らして避け、さらに二発、三発と胴体に拳を叩き込み、側頭部に回し蹴りを喰らわしてくる。

メガイラの蹴りにより、弾き飛ばされ、建造物を一二軒をぶち抜いていった。

三軒ほど貫いた所で止まり、建造物の中で吐血していく。

おのれ、身体が思うように動けない…。

喧嘩番長と呼ばれた私が戦闘力が増したとは言え、メガイラの近接格闘に全く歯が立たないとは…。

やはりアレークトーを最初に伸さねば勝ち目が無いのか…。

地響きが聞こえてくる。

部屋の壁に亀裂、いや壁だけでは無い！

床や天上まで、これはまさか…。

私は重い自分の身体を引っ張るようにして窓の外へと飛び込んでいく。

建造物から離れた途端に黒い物体が覆い、建造物は粉々に砕け散り、消滅していった。

アレークトーのグラミビティプレスが放たれたのか…。

私は魔力が発生した方向へと視線を向ける。

視線の先にはアレークトーとそれに付き従うティーシポネーがいる。

アレークトーの側にはティーシポネーがいるから迂闊に手を出せないというわけか…。

「何処を余所見してるんだ?こっちを見な!」

背中に打撃が打ち付けられ、前のめりになるところをメガイラの拳が私の顎を突き上げていく。

脳が揺れ、私の意識が一瞬暗転してしまう。

「とどめだ!メガイラシュート!」

メガイラの剃刀のような蹴撃が私の首を捉えようとする。

こんな所で私は蹲くわけにはいかないのだ!

「オーディン!」

メガイラの蹴撃が銀の光を放つ魔法陣に防ぐと同時に力が反射し、メガイラの身体に打ち付けれていく。

「なにっ！ぐあああああっ！」

メガイラの赤の軍服が破け、錐揉みするように弾き飛ぶ。

弾き飛ばされたメガイラに止めの追撃を掛けようと思ったが、身体が重くて動きづらい。

だが、これで奴らが動き出すはずだ。

「ティー、そなたも向かうのだ。儂が援護するぞ」

「畏まりました、アレク姉様」

アレークトーからティーシポネーがメガイラを援護するために離れていく。

これで三人はそれぞれ孤立した。

さてと、存分に暴れてやろう。

身体が思うように動かないのであれば、魔法を使いまくるのみだ。

この世界は偽物で他の無関係な者達がいない以上、遠慮の欠片も要らない。

アーテに見習って破壊神の真似事をさせて貰うぞ！

身体が莫大な魔力を吹き出させ、上空に大量の漆黒の太陽を出現させていく。

「この膨大なる魔力、それにこの技はガイア様の…。メイ！ティー！防御魔法を掛けろ！」

冷静沈着な印象であったアレークトーの初めて狼狽した声が聞こえてくる。

世界規模の弾幕を喰らわせてやる！

「スルト！」

無数の漆黒の太陽が次々と落下し、広範囲の爆風を起こしていく。

建造物は吹き飛ばされ、世界は爆風の嵐が吹き荒れる。

やりすぎのような気がするが、こちらの命が危ういのだ。

遠慮をしていたら間違いなく殺されてしまう。

私は漆黒の太陽が全て落下しない内にさらに魔力を放出し、大量の漆黒の太陽を出現させる。

「世界丸ごと喰らわせてやる！スルト！」

さらなる爆風の嵐を発生させ、世界を火の海に変えていく。

焦熱地獄と化した世界を見下ろし、私は何故か爽快感を感じていく。

力を思い切り解放することがこれほどまでに快感だったとは…。

私の力で世界が変わっている。

「ははははっ…」

思わず笑みが零れてくる。

これが全能感と言うものなのか…。

……。

不味い、心を強く持つのだ！

……。

危なかった。

危うくもう少しで力に酔ってしまうところだった。

私はエロスとは違うのだ。

「舐めた真似をしてくれたな！貴様！」

漆黒の太陽の集中豪雨の嵐から抜け出ようとしてる人影が見えてくる。

服が破け、胸が露わになっているメガイラだった。

ぐほっ！

私は思わず熱い欲望が溢れ出してくる鼻を押さえた。

メガイラ…。

何たる恐ろしい凶器を持っているのだ…。

緊迫した戦場で最終兵器を晒してくるとはタナトスの戦い以来だな…。

「メガイラアックス！」

メガイラの目にも留まらない攻撃が襲ってくるが、炎が揺らめき、攻撃する動きが読めてくる。

動きが鈍くても避けれた攻撃のはずだった。

だが…。

「ごほっ！」

メガイラの腕が見事に私の頚部にめり込んでいく。

これはかつての失われし伝説の格闘術レスリングのラリアットという必殺技だ。

脳が揺れ、息が止まりそうな一撃だったが、それ以上に最終兵器が揺れる瞬間が目に留まり…。

「ぶほっ！」

私の鼻から盛大な熱い血潮が吹き出していく。

その間にもメガイラの蹴りや拳で私の身体は滅多打ちにされている。

だが、それらの痛みは些細な物でしかない。

煩悩が肉体の損傷をも越えてしまっているのか…。

床では何度も見たはずで見慣れたかと思っていたのだが、このような戦場で見れるからこそ興奮してしまう質だったということなのか…。

「おい、そんなにあたいの攻撃が利いたのかよ?」

必要以上に血を吹き出す私にメガイラは怪訝に思ったのか、声を掛けていく。

鼻血を流しながらも、私は周囲を見渡す。

大分漆黒の太陽が降り尽くしていっている。

もうそろそろスルトの攻撃が途切れてしまうだろう。

このままではティーシポネーが再び加わって連携攻撃を喰らわせられる羽目になってしまう。

それに一応、攻撃を何度も喰らわされて、身体の節々が途轍もなく痛い。

……。

ここはメガイラに服を再び着て貰うとしよう。

誠意を持って事情を話せば、分かってくれるはずだ。

「待て、メガイラ！」

「何だよ、戦場で無駄話をするのがお前の趣味か？」

私は自分の胸に指差し、メガイラに胸元が晒されていることに気づいて貰おうとする。

メガイラは私の意志が伝わったのか、自分の胸元を見て、暫く固まってしまう。

どうやら無事に気づいたようだな。

全く戦闘狂は戦いに夢中になる余り、自分が羞恥を晒していることすらも気づかないとは困ったものだ。

「お前、見ていたのか？あたいの攻撃で鼻血を出したんじゃくて、その…胸を見て…いたからなのか？」

「神聖な戦場で胸を晒すのは本意ではないだろう。さあ、服を早く着るのだ。それまで待ってやるぞ」

メガイラは胸を隠し、顔を赤くして震えていた。

今更ながら羞恥心に震えているのだろうか？

もう少し早く教えるべきだったか？

「巫山戯るな！何が神聖な戦場だ！あたいの胸を見て楽しんでいたお前がよくもぬけぬけと…許さねえ…。絶対に許さねえ！」

「せっかく教えたのに何故余計に怒ってしまっているのだ？」

メガイラの怒気に思わず腰が引けてしまう。

「ガイア様と姉さん達以外に見せたことがないあたいの身体を見たことを死を持って償わせてやる！」

これは途轍もなく不味い気がする！

とりあえずは弾幕を再び展開させるのだ！

「スルト！」

再度、無数の漆黒の太陽が火の海と化した地上へと降り注がせる。

「こんなものであたいを止めれると思ってるのかよ！」

降り注ぐ太陽を拳や蹴りで弾きながらも怒りの形相で向かってくるメガイラ。

アーテに匹敵する力を持つと予想していただけあって、スルトの嵐の中でも果敢に突撃してくるとは恐るべし！

メガイラは一応私の忠告を聞いてくれたのか、胸元を服の切れ端で縛って隠している姿が目に映る。

余りの殺気に身震いするほどだったが、怯むほどではない。

それに胸元を隠してくれたお陰で私の邪念が払われたのだ。

もはや恐るるに足らん！

先ほどは視認することすら出来ず、成す術も無く受けていたメガイラの打撃。

だが、もう私の目には十二分にメガイラの攻撃する動作が見えてきている。

「吹っ飛びやがれ！この助平野郎！メガイラスィックル！」

メガイラが暴言を吐きながら、これもまた伝説のレスリングの必殺技延髄斬りを繰り出してくる。

私はメガイラの延髄斬りを捻って回避し、拳を突き上げて顎を撃ち抜く。

「ごほっ！」

メガイラは血を吐きながら仰け反っていく。

「あたいの攻撃を見切っただと…馬鹿な！」

「喧嘩番長は一度戦った者の攻撃は見切れるのだ」

以前にもアーテがロキで身体能力を向上させたことで最初は手こずったが、見切ることで凌いでいった。

私の動体視力もまた人間離れをしているわけだ。

これはアーテの力の恩恵で得られたものではない。

喧嘩番長を名乗っていた幼少の頃から今に至るまで培った私の技術だ。

もっともそれは最強の力を手に入れて、動体視力が向上したということから結局はアーテの恩恵か…。

それにしても身体が急に軽くなってきている。

どうやら私がスルトを連発して放ったことで魔力が混在し、アレークトーが私を妨害するために送る魔力が乱れたのだろう。

『メイ！聞こえるか？単独で邪神に手を出すな！』

焦っているのかアレークトーの念話が漏れてきている。

どうやら幸運が私に回ってきたようだ。

「おのれぇえええっ！」

血反吐を吐きながらもメガイラは拳を振り上げて私に向かってくる。

メガイラの攻撃速度は途轍もなく早い。

常人が見れば、瞬間移動したようにしか見えないだろう。

だが、生憎私は常人では無い。

神にすらも刃を向けたこともある。

「ロキ」

身体能力を向上させた私はメガイラの速度以上の速さで二三発メガイラの胴体に打ち付けていく。

「がはっ…そんな！あたいが…あたいがここまでやられるなんて…認めない！」

メガイラは攻撃を受け、身体をふらつかせながらも尚攻撃を繰り出してくる。

何て頑丈な女なのだろうか…。

『メイ！今から私も行きます。だから、私が来るまで退きなさい！』

「うるせえ！あたいは…あたいは負けねえ！負けてたまるか！」

逆上したメガイラにもはやティーシポネーの言葉を聞く耳は持っていなかった。

「あたいの最大の一撃で貴様を沈めてやるよ！メガイラクリティカルブロー！」

メガイラの拳に強大な魔力が収束され、黄金色に輝いてくる。

私の黄金の拳を真似しているように見える。

他人の技を真似る私が不満に思う筋合いは無いのだろうが、やはり腹が立ってくる。

しかも私と違って本格的な黄金の拳だとは生意気な！

本家本元の黄金の拳を見せてくれるわ！

我が黄金の拳よ、唸れ！

燃えさかる炎の中、私とメガイラの拳が激突し合い、二人を中心に凄まじい衝撃波が巻き起こってくる。

「うぐっ！そんな馬鹿な！」

拳から血を吹き出し、仰け反ったのはメガイラ。

私の黄金の拳が打ち勝ったのだ。

「この…邪神…」

「私は邪神ではない。ロストだ。覚えておけ…」

メガイラの胸に拳をめり込ませていく。

「がふっ！あたいが…負けるなんて…けど…」

メガイラは血を吐きながらも、私の顔を掴んでくる。

「気に入ったよ…お前だったらあたいの身体を見たことを許してやるよ…ちゅ」

むぐっ！

私の唇にメガイラのそれが押しつけれる。

激しい戦いの最中に場違いの柔らかい感触が私の脳髄を支配していく。

「ちゅぱ…これは餞別だ。あたいに勝ったんだから姉さん達に負けるなよ…」

メガイラは不敵な笑みを見せ、私の腕の中で気を失った。

餞別とは何のことだか分からないが、メガイラの唇は柔らかくて気持ちよかった。

とりあえずはまず一人倒した。

『ブラックホール』

不意にアレークトーの声が響き、強力な引力に引き寄せられる力を感じてくる。

燃えさかっている炎や煙、蔓延している灰が遠くに見えてくる黒い斑点のような物に吸い寄せられているのが見えてくる。

煙幕を無くして私の姿を晒させようとするつもりなのか。

メガイラに最大限の防御結界を掛け、その場に横たわらせる。

万一にメガイラが巻き込まれても知ったことではないが、美女に何もせずに放置しておくのは心苦しい。

とにかくこれで殲滅魔法ぐらいの威力ならば、死にはしないだろう。

だが、万一に死なせることになれば、致し方ないとしてあの世に行ったときに苦情を受けてやろう。

私は黒い斑点の方に向かっていく。

……。

……。

…。

黒い斑点は私が生み出した漆黒の太陽や建造物等と何もかもを吸い尽くして消滅させていた。

私は黒い斑点に呑み込まれないように必死に踏ん張らせていた。

少しでも力を抜くとあの黒い斑点の餌食にされてしまう。

「まさか、メイを倒すとはな。それで隙が出来たことで今度は儂を倒そうとしているのか…」

黒い斑点を盾にして、浮遊しているアレークトーは私に微笑みかけてくる。

ティーシポネーが援軍に来るまでに早くこの女を倒さねば…。

「儂も何処かでそなたを侮っていたのかもしれない。だが、その僅かな慢心も既に無くなった。全力で抗わせてもらうぞ。ディメンションカッター」

「うぐっ！」

空間が不自然に揺らめいた瞬間に身体の至る所が切り裂かれてくる。

「オーディン！」

銀色の魔法陣を展開させるが、それすらも容易く切り裂かれてしまう。

「儂は重力と空間を自在に操る者。結界なぞ空間自体を切り裂けば無意味なものだ。ただの真空破などとは訳が違うぞ」

右脇腹と胸から血が噴き出してくる。

黒い斑点で巻き起こす引力で動きが制限されている上に目に見えない攻撃とは厄介だな…。

それに今まで私の身体が重かったのは重力を掛けられていたからなのか…。

「さて、早く消滅の渦に呑まれてくれないか？このままではティーやメイも巻き添えにし、世界すらも呑み込んでしまうからな。さらに力を込めてやろう」

黒い斑点からの引力がさらに強まってくる。

「ディメンションカッター」

全身が八つ裂きにされかねないほどに見えない空間の刃に何度も切り刻まれていく。

このままではやられてしまう。

どうすればいい…。

アレークトーはこの世界の空間や重力に干渉していることから世界そのものがアレークトーの掌の中と言っても過言ではない。

……。

そうだ、アレークトーに干渉されない空間を作り出せばいいのだ。

自らの空間を作り出すこと、すなわち自らの領域、もしくは世界を作り出すことだ。

今までの敵で疑似世界を作り出す者は幾つも見てきた。

あのヒュプノスですらも作り出していたのだ。

ならば、この私でも不可能では無い！

全身から魔力を放出していく。

世界そのものを作るわけではないから大した魔力は要らない。

薄皮一枚程度の限定的な空間で事足りる。

「攻撃が届かない。どういう事だ？」

もはや、黒い斑点から発する馬鹿げた引力も不可視の刃も私には届かない。

アレークトーの顔から焦りが見え始めてくる。

「新たな空間を自らの魔力で生み出してたというのか！ならば、魔力で断ち切れば済むことだ！」

黒い斑点が消え、両手から魔力を生み出した剣を持って、斬りかかってくる。

鋭い斬撃だが、メガイラよりは遅い。

私は易々とアレークトーの攻撃を避け、拳に力を込めていく。

貴様もまたメガイラと同様に黄金の拳で沈めてやる。

渾身の力を込めた拳がアレークトーの溝へと放っていく。

「ちっ！そなたに接近戦は愚の骨頂ということか…。だが、儂には攻撃は届かぬ。ホワイトホール」

アレークトーの前に白い斑点が出現し、私の拳を阻まれてしまう。

それどころか凄まじい衝撃が襲いかかり、私の身体を弾き飛ばそうとしてくる。

「儂のホワイトホールに異なる空間や次元なぞ関係無い。そなたを多次元の果てまで弾き飛ばしてくれよう！」

かつて無いほどの力が私の全てを弾き飛ばそうとしてきている。

このまま吹き飛ばされれば、身体がすり切れるまで何処までも弾き飛ばされることは確実だろう。

すなわちここで力負けすれば私は死んでしまうということだ。

……。

このような所で訳も分からず喧嘩を売られて負けて死ぬなぞ冗談では無い！

次元や空間に関係無しに弾き飛ばすだと…。

ならば、私の黄金の拳は三千世界の彼方まで殴り飛ばしてみせる！

最強の力を持つ者に神の摂理や宇宙の法則すらも無意味だということを思い知らせやるぞ！

私の拳は少しずつ白い斑点まで近づいてくる。

その様子にアレークトーの顔が青ざめる。

「そなた、邪神ではなく、原初神なのか！いや、違う！」

アレークトーは顔を引きつらせながらも私の拳を見る。

私の拳には黒い光が収束されていた。

「その拳に込められた力はブラックホール。儂のホワイトホールを中和させるために見様見真似で行ったというのか。いや、ただ儂の攻撃に対応し、最適化した攻撃を無意識にやることで成した技だということか…。さすがはガイア様が寄越した儂等の主候補のだけはあるな…」

アレークトーは微笑み、観念するように両手を広げた。

白い斑点は黄金の拳によって砕け、吸い込まれるようにしてアレークトーの溝へとめり込んでいく。

アレークトーは血を吐きながらも笑みを浮かべ、腹に私の拳をめり込ませたまま不意に抱きついてくる。

「ふふっ…さて…その調子でティーを打ち破って…みせるがいい…ちゅ」

ぬおっ！

アレークトーの唇が私の口を覆い尽くす。

一瞬、夢の世界へと旅立ってしまう感覚だった。

「んっ…ちゅば…」

私から唇を離したアレークトーは青緑の唇から唾液の糸を伸ばして妖艶に微笑む。

その姿に私の男の証が元気になりかけてしまう。

「な、何のつもりだ！」

「ふふっ…儂からの…祝福だ…」

メガイラと同様にアレークトーもまた私に持たれるようにして気を失う。

メガイラの餞別の次はアレークトーの祝福ときたか…。

それにしても、アレークトーは途中で訳の分からないことを呟いていたが、確かにガイアの名を言っていた。

アレークトーとガイアの間に何らかの関係を持っているのだろうか？

「アレク姉様！」

声がした方向に視線を向け、私は息を呑む。

ティーシポネーだ。

何故か分からないが、涙目になっている。

「メイに続き、アレク姉様までもが邪神の餌食に…」

何だか分からないが、ティーシポネーは盛大に勘違いをしているようだ。

いや、第三者の目線でいけば、アレークトーを抱き寄せている私は女を襲おうとしている極悪人に見えないこともないだろう。

「これは誤解だ。私はただ…」

「だったら、その顔についているものは何なのですか？」

私の顔についているもの？

まさか！

この戦場の中で頑丈にも壊れずにいた自前の手鏡を見る。

私の唇にはメガイラの赤紫とアレークトーの青緑の口紅が重なるように塗られていた。

……。

「メイの服も引き裂かれていたことですし、アレク姉様が強姦されたという動かぬ証拠があります」

……。

私はアレークトーに防御結界を即座に掛けて、その場に横たわらせティーシポネーから逃げるようにして飛び立っていく。

かつてこれほどまでに真っ直ぐ殺意を向けられたことがあっただろうか。

ティーシポネーの殺意に怯み、脊髄反射の如く逃げている自分に驚

いていた。

「ヴィマーナ」

不意に背中に疼き、私は身体を反らす。

脇すれすれに通り過ぎたのは血のような紅い光を放つ、巨大な槍の穂先だった。

アーテが使うヴィーザル並の規模の武器だ。

それに少し掠ったのか、アレークトー対策で身に纏っていた疑似空間の障壁が削れている。

どうやら見かけ倒しの武器ではなさそうだ。

まともに喰らえば串刺しになっていたかもしれない。

「女の敵！私のヴィマーナで貴方を貫きます！」

高層建造物並の巨大な槍を玩具のように軽く振り回してくるティーシポネー。

槍の穂先が私を貫こうと迫ってくる。

まるで巨大な閃光が迫ってくるような迫力だ。

私は刺突を何とか回避し、ティーシポネーの懐へと飛び込もうとするが、軽量級戦士のような速さで槍を振るってくる。

隙が全く見えてこない。

「どうしましたか？ガイア様が寄越した愛しい者の力とはその程度ですか？その程度なら生きる意味はありませんね。だから、殺します！」

ティーシポネーは閃光の如くの斬撃を見舞いながらもガイアの名を口に出してくる。

「くっ、貴様等はガイアのいったい何のだ？」

「答える必要はありません。なぜならば、貴方は死ぬのですからね！」

ティーシポネーは巨大槍を裂帛の声と共に薙ぎ払ってくる。

槍の斬撃と衝撃波を間一髪で避けると一旦距離を取る。

まずはあの槍を何とかせねばならないな、ならば…。

「ヴィーザル！」

天を突き抜ける程の巨大な剣を出現させ、手に取る。

奴が巨大槍ならば、こちらは巨大剣で攻めてみせる。

私のヴィーザルとティーシポネーのヴィマーナが激突し、爆発が起きたかのような衝撃が襲ってくる。

「無駄なことです！」

うおっ！

ティーシポネーのヴィマーナが競り勝ち、ヴィーザルと共に私を弾いていく。

力負けしてしまうとは…。

「往生しなさい！助平男！」

ヴィマーナを受け続け、ヴィーザルに亀裂が生じている。

ヴィマーナを縦横無尽に振り、私はヴィーザルで応戦しつつも追い詰められていく。

私は殴り合い専門ではあるが、剣術や槍術、その他諸々の戦いは専門外だ。

ティーシポネーの裂帛の気合いと共についにヴィーザルが砕け散ってしまう。

そのまま振り下ろされる閃光の如き一撃を私は辛うじて回避し、距離を取っていく。

「今の一撃を避けるとは気に入りませんね」

ヴィマーナの穂先を私に向けてくるティーシポネー。

「メイとアレク姉様は元の世界へと送還しました。後は貴方を疑似世界ごと消し去れば終わりです…」

この構えと似たような技を何処かで見たことがあった。

穂先に紅黒い光を放つ魔力が凝縮されている。

……。

思い出したぞ！

確かレテシアが使役する神ゲーラスの必殺技である修羅雪だ！

「アグネヤ」

ヴィマーナの穂先に凝縮された紅黒い光が煌めいた瞬間に私の生存本能が反応し、防御障壁を展開させる。

世界は真紅に染まり…。

そして、崩壊する。

……。

……。

…。

何とか生き残った…。

アグネヤか…。

少なくともアーテの最強の技であるフレイを遙かに凌ぐ威力だったな…。

今回は私だけが生き残るために全力で防御障壁を展開できたことが幸いだった。

私の身体は魔力を発していないにも関わらず浮遊している。

天も地も無く、ただ空間だけが存在している世界。

空間は極彩色に彩られ、綺麗なのか奇怪なのか、はっきりせず落ち着かせない感覚を醸し出すような…。

この世界はいったい何処なのだろうか？

「まさか、アグネヤに耐えるとは規格外の助平男のようですね…」

声がした方向に振り向くとヴィマーナを携えたティーシポネーがいた。

「ここは根元世界。貴方達が済む世界が夜空に輝く星の一つだとすれば、ここは夜空そのもの。あるいは世界の果てとでも言えますね」

ティーシポネーは憂いを秘めた青に輝く瞳で極彩色の空間を眺める。

「少々干渉に浸ってしまったようです。良かったですね。世界の真実が結集されたこの場所で死ねるのですから…」

「私にはまだやることがある。それまでは死ぬわけにはいかない。だから、倒させてもらうぞ」

私はこんな難解で前衛的な芸術家が彩ったような奇怪な世界で骨を埋めるつもりは毛頭無い。

桃色に満ちた酒池肉林の世界こそが私が定めた死に場所だ。

「では、殺します。アグネヤ！」

ヴィマーナの穂先から再び紅く巨大な波動が放たれる。

大技をまたしても放ってくるのか！

魔力を放出し、全速力で飛行して紅い波動の攻撃範囲から離脱していく。

「逃がしません！」

あらゆる角度からヴィマーナの穂先が光の速さで襲いかかってくる。

さらに回避したとしても槍を振るう時に生じる衝撃波によって私の身体が裂傷が刻まれていく。

このままでは動きを見切る前にやられてしまう可能性がある。

「逃げてばかりとは情けないですね。メイとアレク姉様を倒した力でわたくしも倒してみせたらどうなのですか？」

メガイラとアレークトーを倒したのも抵抗しなければ殺されていたからだ！

攻撃が見切れないのであれば痛いのを我慢して突撃するしかないだが、こんな戦いで命を賭けたくは無いぞ！

……。

モイラには悪いが、反乱軍と私は相容れない宿命のようだ…。

私に殺意を抱くほどの嫌悪感を抱いていている連中と一緒にいては胃薬がいくらあっても足りない。

彼女達はモイラのことを大切に思っている様子だったから、ここでモイラを引き渡して立ち去っても大丈夫だろう。

……。

駄目だ、モイラとは別れたくはない。

だが、モイラと一緒にいれば、アーテ並の化け物女と行動を共にしなければならない。

二人も倒したことだから、何とか譲歩してもらえないのだろうか。

「私は無駄な戦いはする主義では無い。だから見逃してくれないか？」

「なっ！わたくしとの殺し合いを放棄するというのですか！絶対に逃がしませんよ！」

ティーシポネーはさらに速度を上げて、ヴィマーナ振りかぶって追いかけてくる。

「メイとアレク姉様を誑し込んでおいて、わたくしだけ何もせずに放置とは…鬼畜です！外道です！もはや塵と言ってもいいですね！そこに直りなさい！」

何故か分からないが、余計に怒らせてしまったみたいだ。

「ブラフマシル」

ティーシポネーはレテシアの技である血桜のようにヴィマーナを横一閃に払い、アグネヤを凌ぐ超範囲の紅い波動が真一文字に放たれていく。

避けるには余りにも攻撃範囲が広すぎる。

まるで紅い洪水が押し寄せてくるかのような迫力だ。

受け止めて耐えるしかない！

防御結界を何重にも展開させ、さらにオーディンも重ね掛けして迫り来る紅い津波に耐えようと身構える。

極彩色の世界が真紅に染まり、凄まじい衝撃が結界を打ち付けていく。

何重にも展開している結界が次々と破砕している。

やはり痛い思いをするしかないというのか…。

私は覚悟を決めて激痛に備えて気合いを入れる。

火炙りや八つ裂きの刑にも耐え抜いたのだ。

今回も耐えて生き延びてやるぞ！

……。

全ての防御結界が砕かれ視界が真っ赤に染まり、全身に激痛が走ってくる。

激痛を通り越して鈍痛になり、ついには何も感じなくなっていく。

もはや、何も感じない。

……。

己の意識を強く保ち続けろ！

生きたいと思え！

不死身だと思い込め！

欲望を解放しろ！

執念を持て！

私は喧嘩番長だ！

馬鹿で臆病で最強の元平民その他だ！

夢は安定した衣食住だ！

酒池肉林を築ければ尚も良し！

それらはまだ何一つ果たされていない！

故に生き延びる！

それがロストなのだ！

……。

……。

…。

「まさか、アグネヤに続いてブラフマシルまで耐えるとは…」

ティーシポネーの冷徹な表情が戸惑いに満ちた顔に変わっていた。

何も感じなかった身体に焼け付くような痛みが戻ってくる。

痛みは私に生きている実感を与えてくれた。

ティーシポネー。

私にここまで痛い目に合わせてくれたのだ。

貴様にも痛みを与えてやるぞ…。

ティーシポネーは後ずさっていた。

手鏡で自分の姿を確認したいところだが、さぞ凄惨な姿になっているのだろう。

「こ、来ないでください！殺しますよ！」

ヴィマーナが閃光の速さで迫り、私を薙ぎ払おうとしてくる。

だが、今の私にはティーシポネーの攻撃が可哀想なほどに遅く見えてしまう。

私は掌を添えるようにしてヴィマーナを受け止め、押し返していく。

「ぐっ！素手で受け止めるとは…。貴方はいったい…」

ヴィマーナを押し返されたことで戸惑っているティーシポネーに対し、私は露悪的に笑みを見せていく。

「散々と私に殺してやると言ってきたが、殺される側に立ったことはあるのか？」

「それはその…ただ私は貴方に…」

ティーシポネーが何かを言おうとしているが、もはや聞く耳は持たない。

今の私は例え相手が絶世の美女であろうとも何の躊躇いもない。

これまでにない全能感に満たされている気分だった。

私は焼けただれた身体を数秒で治癒し、笑みを浮かべる。
どうやら私は気分が乗るとこの上なく強くなるようだ。
いつもこの調子が出せれば苦労はしないのだがな…。

「今度は私が殺す側に立つ。なぜならば、殺されたくないからな…」

まるで自分では無い自分が言っているような感覚がしてくる。
我ながら本当に私なのだろうかと疑問に思ってしまう程だ。
だが、私は私であることに変わりはない。

「言ってくれましたね…。では、ガイア様から教わった私の最強の技を見せてあげますよ！そして、今度こそ殺します！わたくしが貴方を殺すのです！他の誰でもないわたくしの手で必ず！」

ティーシポネーも私の挑発に乗り、穂先を私に向けてくる。

「それは私の台詞だ。私が貴様を殺す」

「ぐっ！もう容赦しませんよ！貴方を殺して永遠にわたくしの者にします！だから絶対に殺す！」

何か聞き捨てならない言葉を言っているような気がしたが、この際流しておこう。

「ブラフマストラ」

ティーシポネーはヴィマーナを担ぎ、紅い炎を纏わせ、流星あるいは巨大隕石の如く迫ってくる。

私は拳を握りしめ、ティーシポネーを迎え討つべく構える。

「他の姉妹同様に黄金の拳で貴様を沈めてやるぞ」

ティーシポネーには殺すと言ったが、喧嘩に殺しは無しだ。

カロンとは違い、ティーシポネーはモイラの知り合いなのだからな…。

だが、仕返しはさせてもらうぞ！

黄金の拳よ、唸れ！

私は迫り来るティーシポネーの流星に向かって飛んでいく。

ティーシポネー。

貴様は私の大好きな絶世の美女だ。

その貴様が何故、そこまでして私を殺したいのかは分からない。

だが、私にはやることがある故に殺されるわけにはいかないのだ！

美女の願いを断るのは無粋ではあるが、殺されることだけは謹んで断らせてもらうぞ！

私の繰り出す黄金の拳とティーシポネーのヴィマーナの穂先が激突し、極彩色の空間が揺らいでいく。

「ぐぐっ！これが…アーテを打ち負かした貴方の本当の力なのですか！」

「訂正しろ。アーテを打ち負かした時以上の力だ！」

ティーシポネーの穂先に亀裂が生じ、全体に広がっていく。

「わたくしのヴィマーナが…」

「私の拳に砕けぬものは無い！うおおおおおっ！」

私の気合いと共にティーシポネーのヴィマーナが砕け散っていく。

自慢のヴィマーナは砕け、呆然としているティーシポネーに私の拳が届こうとしている。

「これで終わりだ！ティーシポネー！」

「なるほど…わたくしは殺される側…なのですか…それも良いかもしれませんね…」

ティーシポネーは自嘲めいた笑みを見せ、アレークトーの時と同様に両手を広げてくる。

「どうぞ…わたくしを殺してください…モイラを…姉妹を…宜しくお願いしますね…」

モイラと姉妹のことを私に託し、死を受け容れたティーシポネーの姿。

私はこの姿を何処かで見たことがあった。

……。

戦場で私の前で違いに庇い合っていたパラディスムの双子。

非道な実験体にさせないために泣きながら殺し合っていた二人の音楽家の思い出。

里を守るために命懸けで邪神に戦いを挑んだ頭領と御館様の過去。

……。

その姿と重ねてしまっては怒りのままに拳を振るうことが出来なくなってしまうではないか…。

私は拳をティーシポネーの溝の手前で寸止めする。

「なぜ…止めるのですか？」

「私は喧嘩番長であって殺戮番長ではない。ただそれだけだ」

私は拳を降ろして、戸惑っているティーシポネーを正面から見据える。

「殺すのではないのですか？わたくしは貴方に散々な仕打ちをしたのですよ…」

「これは殺し合いでは無い。ただの喧嘩だ。そして、喧嘩に殺しは無しだ」

ティーシポネーは私の答えに苦笑し、私に寄りかかってくる。

「貴方は馬鹿です。本当に殺したいほどの大馬鹿者ですね…」

これはいったい何の真似だろうか？

そういえば、アレークトーには祝福と言われて接吻され、メガイラからは責任を取れと言われた。

そして、今はあれほど殺すと言われ実際に殺され掛けた相手に抱き締められている。

胸はメガイラと同等以上の大きさで私の頭が埋まってしまっている。

「それに喧嘩番長なんてよくもそんな恥ずかしい二つ名を名乗るものですね。呆れて殺す気が失せてしまいました…」

「それは良かった…」

本当に心底良かったと思える。

どうやら反乱軍に身を寄せれる希望が芽生えてきたようだ。

暫く私を抱き締めていたティーシポネーは私の顔を両手で挟み自分の顔を寄せてきた。

「わたくしの負けです。ガイア様の仰る通り、貴方はわたくし達の主に相応しい者であることを認めます…ちゅ」

メガイラとアレークトーに続き、ティーシポネーの唇が重なってくる。

「ちゅ…ちゅばちゅうう」

三人の中で一番情熱的な口づけだ。

私にあれほど殺すと物騒な言葉を紡いでいた唇で私のそれを夢中で貪られる。

一瞬、口づけで私を殺そうとするつもりではないかと思った程に激しかった。

……。

「ちゅぱ…これは愛と忠誠の口付けです。これでわたくしは末永く貴方様が死ぬまで付きまといますので宜しくお願いします」

情熱的な接吻で恍惚としていた私に冷や水をかけるように無感動な声をかけてくる。

無表情な顔で愛と忠誠の口付けと言われても実感が湧かないのだが…。

それに何故付き従うではなく付きまとうことになるのだ？

「それとこれからはわたくしのことをティーと呼んでください。呼

ばなければ殺しますからね」

……。

ティーは私に忠誠を誓っても殺すと脅すというのか…。

「いいですか?分かったのであれば返事をしてください。殺しますよ」

「はい、わかりました」

女の脅しは恐ろしい。

素直に従うことこそが賢い男の生き様なのだ。

「ティー姉さんまで打ち負かされるなんて、さすがあたいが見込んだだけはあるよ」

「ふっ、ガイア様が花婿とだと豪語しただけはあるということか…」

メガイラとアレークトーがいつの間にか姿を現していた。

「メガイラ、アレークトー…」

二人の出現で身構える私をアレークトーは苦笑してくる。

「ロスト殿、勝手に敵対して申し訳ないが警戒しないで頂きたい。儂等はもうそなたに危害は加えぬ。ティーと同様に儂もメイもそなたに愛と忠誠を誓っておるからな。付け加えて儂のことはアレクと呼んで欲しい」

「もうあたいはお前の味方だ。だから警戒するなって、ロスト。それとあたいのことはメイと呼んでくれよ」

メガイラは馴れ馴れしく私の首に腕を回してくる。

「アレク姉様、私達のことを詳細に説明した方が宜しいでしょう。この通り、ロスト様はまだ状況を理解していません。このままだとわたくしはロスト様を殺したくなってしまいます」

「アレク、早急に状況を説明してくれ」

こんなことで私はティーに殺されたくはない。

彼女達がただの反乱軍の最大戦力ではないことは何となくだが分かる。

それに彼女達はガイアの事を含めて私を知っているような口振りだ。

「相分かった。では、ロスト様に儂達のことを教えるとしよう」

私はアレクから話を聞くことになる。

果たして彼女達とガイアとの関係は何なのか？

状況を完全に把握しなければティーの殺意が収まらないだろうから…。

……。

今回も美女と縁を作るために何度も死ぬかもしれない程の激戦を無事に乗り越えることができた。

これからは新しい美女に出会ったら戦いが始まる予兆であると考えた方が良いだろう。

美女がいる所に戦場があり。

私はまた一つ教訓を得ることが出来たのだ。

……。

さて、アレクから説明を聞くとしようか…。

第77話：エリニュス

私とメイ、ティー、アレクの四人は極彩色に彩られる根元世界の中に浮遊している。

「記念すべき我等が主に自己紹介を改めてしたいと思うが、まずは別世界へと移動しよう。ここは全ての世界と繋がっている故に、あの男に感づかれるやもしれぬからな…」

アレクは老成とした美声を紡ぎ、魔法陣を出現させる。

「ロスト殿、では参ろうか」

魔法陣から光が放たれ、視界が真っ白になっていく。

……。

……。

…。

視界が回復したときにはメイとアレクと戦ったジークフリートに似せた世界に立っていた。

「儂が作ったこの世界ならば、大丈夫であろう。さて、自己紹介させてもらおうか。儂等は反乱軍最精鋭部隊エリニュス。または原初神ガイア様の高弟でもある」

アーテ以外にも弟子は存在していたということか…。

「あたいは主に格闘術を、姉さん達は剣術や槍術、それと手品を教えてもらったんだよ」

「ちなみに手品というのはガイア様の技のことを指します。もっとも世界を何千回も滅ぼせる大量殺戮兵器に匹敵する禁断の手品なのですけどね」

そういえば、アーテの技の全てもガイア曰く手品だと言っていた。

破滅的威力を誇る凶悪な技もガイアにとっては単なる手品でしかないということなのか…。

「もう察していると思うが、儂等は全員上級神。そなたは上級神である儂等三人を一人で撃ち破ったことになるわけだ。さすがはガイア様の花婿と言われるだけはあると感心したぞ」

「全くその通りだな。あたい達を一人で撃ち破るなんてガイア様以外で初めて見たよ。お前は本当に強いんだな。さすがはあたいが認めた男だよ」

アレクは冷静な表情から一変して成熟した大人の色気を醸し出す笑みを見せ、メイは私の首に回している腕で自分の身体をより密着させてくる。

メガイラの巨乳の感触が気持ち良くて思わず力が抜けてきそうになってくる。

「自惚れないでくださいね。ガイア様ならもう少し手際良くわたくし達をあしらいます。それにわたくし達に手こずっている程度では

エロスとカオスには到底勝てませんよ」

……。

メイとアレクには持ち上げられ、ティーにはお釣りが出るほどに突き落とされてしまった。

ここまで私に辛辣な言葉を吐いたのはエルとアイリの時以来だった。

「エロスはガイア様をも凌ぐかもしれないほどの力を持っていると聞き及んでいます。カオスについては詳しいことは分かりませんが、エロスの力によって神へと転生したとガイア様から聞きました」

カオスもエリスと同様に神へと転生して生きながらえているということなのか？

「カオスは人だった頃でも中級神以上の力を誇っていたと聞きます。その彼女が神へと転生したときの力は想像もつきません」

「カオスについては詳しく分からないのか？」

カオスがどれほどのものかは分からないが、親友であるアーテを半殺しにした程なのだ。

極めて危険な存在だということは想像できる。

「カオスについてはガイア様ですらも分からず詳細不明なのです。ですが、エロスと同等に恐ろしい存在だろうとも言われていました」

「エロスと同等に恐ろしいというのか…」

エロスだけでも手に余るというのに厄介なことだな…。

「あっ！そういえばガイア様から伝言を預かっているけど、聞く？」

あの道化師からの私に伝言だと？

猛烈に嫌な予感がしてくるぞ…。

ここは断固として断らせてもらおう。

「聞か…」

「聞かなかったら、殺せとも言われましたが…」

私の返事を遮るようにティーの冷徹な言葉が紡がれていく。

「聞きますか？死にますか？」

「聞きます」

殺されたくありません。

「ロスト殿。この魔法玉に耳元に近づけるのだ。ガイア様のお言葉が流れる仕組みになっている」

アレクから受け取った魔法玉は黄緑の光を放っている。

ガイアの魔力が込められているのが、感じ取れる。

私はアレクに言われた通りに魔法玉を耳元に近づける。

『やあ、僕の愛しい花嫁！元気にしてる？時間旅行は楽しい？僕はとっても寂しいよ！アーテとエリスとクロエとお茶会をして楽しんだり、訓練という名のお遊びをしているけど…。あれ？実は結構楽しんでいるかも？嘘嘘！やっぱり君と一緒の方が何兆倍も楽しいさ！それにしても僕の可愛い弟子達とのお見合いは如何だったかな？彼女達は君が左右上下が分からない世界に放置されて寂しがっている君のために送り込んだ贈り者達なのさ！あるいは君の側室一号、二号、三号と言ったところかな。助平な君にはこの上なくたまらない贈り者だろう！僕の三千世界よりも広い愛に感謝してくれてもいいよ！それとティーから殺すと脅されたかな？脅されたのなら君は幸せ者だ！彼女の殺意は一種の愛情表現なのだからね！まさに殺したいほど愛している！男冥利に尽きるものだね！さて、本題に入るけどエロスに戦いを挑むつもりなのかな？君は感じたはずだ。この世界の有様でエロスが如何に強大であるかをね。正直な話、僕もエロスとは敵対したくない。恥を晒すようだけど、僕は彼に負けてしまったんだよ。そう、僕はいわば王位を簒奪されてしまった敗者だ。彼は僕の全てを奪っていった。可愛い弟子達も親衛隊も民も何もかも…。だから、僕は王者から道化師になったのさ。守るべき者を無くして王を名乗るのは滑稽だからね。虚栄心に縋って神の中の神や王者とは言ってたけど、僕は君達の言う本物の道化師だったわけだよ。それでもう一度言うけど、本当にエロスと敵対するつもりかな？そこにいる三人とアーテは僕がエロスとの戦いに何とか生き延びた後に迎えた弟子達だ。君に寄越したアレク、ティー、メイは一騎当万の実力者だけどそれでもエロス率いる軍勢には敵わないと思うよ。彼には僕から奪った弟子達と親衛隊がいるからね。そして、何よりもカオスがいる。僕が戦いで実際負けたのは彼ではなくて彼女の方だからね。それにしてもアーテはとんでもない奴を親友にしてしまったようだ。彼女はまさに正真正銘の化け物と言っていい。人

外というよりは神外とも言えるおぞましさだったよ。しつこいようだけど、それでもエロスに戦いを挑むつもりなのかな?戦うのであれば、この荒んだ世界に希望をもたらす姿を僕に見せてくれ。その程度のことが出来なければ、エロスの下に辿り着くことすらも叶わないよ。けど、出来なくても誰も責めたりはしないさ。僕でも無理だったんだからね。だから、諦めて僕と結婚して面白可笑しく暮らそうよ。それじゃあ、返事を聞くよ。僕の下に来るなら大好きだと言って欲しい。僕の下に来ないのなら愛していると叫ぶんだ。さあ、君の愛ある返事を僕に賜ってくれ!』

……。

「相変わらずだね。ガイア様は…」

「ガイア様だからな…」

愛しているも大好きもほぼ同じ意味だと思うが、誰も突っ込んだりしないのだろうか?

「どうしますか?ロスト様」

「どうしても返事を返さないと駄目なのか?」

ティーは無言で頷く。

返事を保留にしたら殺しますと脅しそうな目つきだ。

ガイアも絶世な美女だから結婚して面白可笑しく暮らすことも悪くは無い。

だが、私は世界中の美女と出会い、酒池肉林の構成員の数を増やしていきたいのだ。

それにはエロスの存在が最大の壁になってしまう。

ガイアと共になれば、エロスのことについては譲歩しなければならなくなる。

それはすなわち酒池肉林を夢を諦めることに等しい。

故にガイアからの誘いを受けるわけにはいかない。

他の敵ならいくらでも逃げるつもりだが、エロスだけは私の今後の人生のためにも放置しておけないのだ。

……。

問題は断る時の台詞だが…。

愛していると言わなければならないのか…。

「ロスト殿、気持ちは分かるが、早く言った方が楽になると思うぞ」

「まあ、ガイア様だから仕方がないよ」

アレクとメイは同情するように肩に手を添える。

「何時まで待たせるつもりですか？殺しますよ」

ティーは相変わらず容赦が無い。

これがガイア曰く愛情表現というものなのだろうか？

とりあえずティーには殺されたくないから恥を忍んで言うしかない。

「あ、愛している…」

……。

『そうか！僕のことをそんなに愛してくれるというのか！嬉しいね！君の愛の囁きは僕の脳内に永遠に保存しておくとするよ。この言葉さえあれば僕は原初神の肩書きなんていらない！君だけで充分だ！早く君に会いたいよ！僕の女の部分が疼いてくる！会って君を骨と皮になるまで搾り尽くしたい！はぁ…はぁ…。つい興奮して我を忘れてしまったよ。さてと、断腸の思いだけど君の意志を尊重してあげるよ。僕は物分かりがいい妻だからね。けど、苦しくなったらいつでも僕の豊満な胸に飛び込んでくれ。くれぐれも無理をしないようにね。エロスとカオスも強大だけど、僕の元弟子の四神も侮れないからね。その中でウラノス、ウレア、ポントスは君に寄越してる三人と互角ぐらいの強さを持っているから注意してくれ。最後の一神のテュフォンだけど、僕の弟子の中でも最強だから出来れば逃げることを推奨するよ。僕の勝ち戦の中で二番目に苦戦した相手だったからね。だったら、一番は誰かって？それは聞かない方がいいよ。世の中には知らない方が良いこともあるから…。僕の元弟子や親衛隊だけじゃない。エロスには強力な取り巻きが沢山いるから苦しい戦いになるけど絶対に死なないでくれ。寂しい時はアレク達にたっぷりと慰めて貰えばいいからね。無論、妻公認だから浮気になってしまう心配は無いから安心して発情してくれてもいいよ。これを持って僕からの愛ある伝言は以上だ。愛してるよ、ロスト』

……。

ガイアはふざけているようだが、私のことを本気で心配してくれていることは分かった。

彼女の元弟子と親衛隊には気を付けろか…。

私はアレク達を見る。

元弟子は彼女達に任せるようにしよう。

だが、テュフォンだけはガイアに次ぐ実力者ということから私が何とかするべきなのだろうな…。

それにしてもガイアが一番苦戦した奴は何者なのだろうか？

ガイアは知らない方がいいと言っていたが…。

まあいい。

とりあえずアレク達がガイアが寄越してきた監視役であることは分かった。

無事に謎が解けたところでモイラと合流させてもらおうか。

「お前達の言うことは分かった。アレク、私をモイラがいる世界に戻してくれ」

早く戻って骨休めをしなければな…。

「まだ用件は終わっておらん。そなたには契約してもらわないとな…」

「契約とは何のことだ？」

メイは獰猛な笑みを見せて、乱暴に私の首に腕を回し、豊満な胸を身体に押しつけてくる。

「助平なロストが喜ぶことをするんだよ。あたい達とな…」

アレクは私をメイと一緒に地面に押し倒し、破けた服を取って胸元に唇を這わせてきた。

「ちゅぱ…契約には他にも方法があるのだが、助平なそなたはこの方法が喜ぶであろう」

ティーは私の顔に両手で挟み、不機嫌そうな顔を寄せてる。

「貴方は黙って受け容れればいいのです。拒否すれば殺すますからね…ちゅ」

ティーの唇が私のそれに重なっていく。

……。

うおおおおおおおっ！

三人の魅惑的な身体の感触が心地よいぞ！

命を賭けて、戦った甲斐があったというものだ！

これこそが究極の命の洗濯と言っても過言では無い！

「ちゅぱ…調子に乗らないでください…ちゅ…これは飽くまで契約なのですから…ちゅうう」

ティーは唇と言わず、頬や額、顎へと口付けの雨を降らせていく。

私はティーの胸を鷲づかみして按摩をするように揉みほぐす。

「ちゅぱ…あぅ…そんなに胸を強く…ちゅ…殺し…ますよ…ちゅる」

脅し文句の殺すという言葉でさえも心地よく聞こえてしまう。

「はぁ…もっと…強く…強く揉みなさい…ちゅう…そうすれば…許します…はぁああっ！」

私は夢中でティーの胸を揉んでいく。

ぬおっ！

急に胸に痛みを感じてきた。

「儂等を忘れるとは失礼な主だな。あむっ！」

アレクが胸に歯を立ててきている。

しかも、歯形が付いて少し血が滲んできていた。

「あたいの胸もティー姉さんに負けてないよ。ほら、触りな」

メイが私の手を掴み、自分の胸に押しつける。

手がメイの胸の中に呑み込まれそうな感覚に陥ってきそうだ！

「はぁ…どうだい。あたいの胸もなかなかだろ。しっかり味わいな…ちゅちゅ」

メイもまたティーの口付けの嵐に割り込むように唇を私の顔に這わせてくる。

アレクも負けじと胸元から首筋にかけて舌と唇を丹念に押しつけていく。

三人の逞しくも滑らかな美脚が私の下半身に絡みつき、まさに極上の至りだ！

しかも三人共並の男では歯牙にも掛けないだろう絶世の美女ときている！

これで文句を言う奴がいれば、何百回と抹殺しても足りないぐらいだ！

それでも私はこれで満足はまだしないのだがな…。

「そろそろ濡れてきた頃だから、年長者たる儂がまず頂くとしようか…」

仰向けになっている私にアレクの下半身にアレクが跨り、男の証を捉えていく。

メイとティーは私の顔を食べるのではないかというほどに貪り、私はそれに応えるように二人の胸をまさぐっている。

「では頂くぞ！ロスト殿！」

ぬあああああっ！

アレクの中に男の証が呑まれていく。

「くぅ…さすがは助平なロスト殿の男だな。見事に儂の女を貫いてくれたわ！はああっ！」

ぐおっ！

締め付けられていく…。

「メイ、ティー。ロスト殿を押さえておけ。ガイア様が求めて止まない男の味がどれほどのものかを徹底的に調べてくれよう、くっくっくっ…」

冷静沈着で控えめなアレクが攻撃的な雰囲気を放っている…。

「畏まりました、アレク姉様。さあ、これからが大変ですよ、ロスト様」

「好奇心が芽生えたアレク姉さんは止まらなくなるからな。しっかり耐えろよ、ロスト」

メイとティーは一層私の身体を締め付けるように強く抱きついてく

る。

何かを喋ろうにも二人の唇に塞がれていて出来ない。

「心配するな。天国に連れて行ってやるぞ！」

がああああああっ！

アレクの凄まじい荒腰が私の下半身に炸裂していく。

「若い者の精気を骨の髄までしゃぶり尽くさねばな！」

ぬおおおおっ！

身体の力が抜けていく！

まるでアレクから精気が吸い取れているかのようだ！

「ちゅぱ…ちなみにわたくし達神と性交すれば、生気が吸い取られますので…ちゅ」

「これは神降ろしの契約と同じなんだよ…ちゅううう！」

そう言えば、メイとティーからも口付けされたりする度に脱力感が出てくるような…。

もしかして私は三人から生命力を吸われているというのか！

「はははははっ！美味いぞ！さすがはガイア様の花婿殿だ！」

アレクは狂気に満ちた笑みを浮かべて激しく腰を振ってくる。

「神降ろしで一体しか契約出来ないのは生命力が足りないという理由ですよ…ちゅる」

「二体以上契約しようとすれば、生命力を根刮ぎ吸い取られて死んでしまうというわけさ…ちゅぱ」

ごほっ！

私の生命力が吸われていく！

これではタナトスとケールとの性交が優しいほどに思えてくるぞ！

「それにしても生命力だけは化け物並ですね。殺しても死なないぐらいです…あむっ」

「上級神であるあたい達三人がかりでも全く堪えてないしな…ぷちゅ」

メイとティーが吸血鬼のように首筋を甘噛みしたり、吸い付いたりしてきている。

上級神と言えば、アーテとも性交したときも脱力感が出てきたことを思い出した。

その時は平気でいた私を見て、アーテが驚いていたが…。

まさか子種を宿すことではなく、生命力を捧げることだっとはな…。

「はあああああああっ！」

アレクの絶叫と共に私の生命力が一気に吸われていく！

「ロストどのぉおおおおおおおおっ！」

ぎゃあああああああああっ！

……。

……。

……。

……。

…。

「ふふっ、美味だったぞ、ロスト殿…」

「ぞ、ぞうは…」

呂律が回らない…。

アレクは満ち足りた表情で私の男の証を解放してくる。

これが神との契約なのか…。

快楽以上に脱力感が圧倒的に勝っている気がするぞ…。

「わたくしは最後で構いません。次はメイがご馳走なさい」

「へへっ、待っていたよ。アレク姉さんを酔わせた生気を吸わせて貰うよ…」

メイは舌なめずりしながら下半身に跨っていく。

アレクとティーはそれぞれ私の腕を胸に抱き寄せ、指をしゃぶってくる。

ぐっ、指先から生気が…。

「じゃあ、頂きます。はぅっ！」

ぬぐっ！

アレク以上の締め付け感が私の男の証に襲いかかってくる。

「あううっ！美味しい！何これ？美味すぎるよ！」

相当私の生気が美味かったのか、メイは身体を仰け反らしていく。

「でがげんじで…くれ…」

手加減してくれと言いたかったが、思ったように声が出ない…。

かなり生命力が吸われていたのか意識が朦朧としている。

このままでは冥府に旅立ってしまいそうだ。

「それ、無理。手加減なんて出来ないよ。こんなご馳走を前にしてさ…」

仰け反った身体を前屈みにし、八重歯を見せて微笑を浮かべてくる。

獲物を前にした吸血鬼の笑みだ…。

「ちゅぱぷちゅ…観念して…ちゅ…食べられてください…んっ」

「ロスト殿の…んちゅ…生気が…あむぅ…美味すぎるのが悪い…ちゅう」

気持ちいいのは良いが、脱力感を感じるのは嫌だ！

「大丈夫よ。熱くなった身体が少しずつ冷えていく感覚も癖になると思うから…」

それは絶対に死ぬ前兆の状態のことに違いない！

「ほれいひょうは…むぐっ！」

これ以上はと言いかけて、メイの唇で塞がれてしまう。

「むちゅちゅぱぷちゅちゅう」

はぐあああああっ！

メイの上と下の口から同時に生気が吸い取られている！

このままでは冗談抜きで死んでしまうぞ！

「ちゅ…抵抗しないでください。大丈夫、死にはしませんよ。ロスト様の生命力は自分が思っているよりも絶大なのですから…んっ」

「ティーの言う通りだ。儂等はまだそなたの生命力の一割の中の一割すらも摂取しとらんのだぞ…れろっ」

私はメイを引きはがそうと手を動かそうとしたが、アレクとティーが胸に抱きかかえていることから抵抗すらも出来ない…。

「んっ…美味しい…ちゅぱ…もっと…もっと…あたいを…満たさせて！あああああっ！」

ぐふあああああああああっ！

……。

……。

……。

…。

「あたい…こんなにも満足したのは初めてだよ…」

メイは恍惚とした表情で名残惜しげに私の男の証を解放する。

「さて、次はいよいよわたくしの番ですね…」

ティーが私の腕を離して立ち上がろうとする。

……。

今が好機なり！

「あっ！ロスト殿、何処に行かれるか！」

私はアレクの腕を払って立ち上がり、全速力で走っていく。

確かに気持ちよかったが、生気を吸い取られるのは御免被る！

私はもっと普通の性交をして快感を得たいのだ！

ケールとタナトスの乱暴だけど命の危険性が無い情事が懐かしい！

んぷっ！

急に視界が暗くなり、顔に柔らかい何かが当たってくる。

ふむ、この感触は女性の胸だな。

なかなか心地よいではないか。

いったい誰の…。

私は胸から頭を離して巨乳の持ち主の顔を見て、唖然とする。

「ティー、いつの間に…」

「甘いですよ、ロスト様。ガイア様の言う通り、戦闘以外では本当に雑魚なんですね」

……。

雑魚だと…。

私は何度も死ぬ思いをして戦い、最終的には勝利を手にしてきた。

その過程で敵には散々と侮られたことがあったが、雑魚呼ばわりされたことは未だかつて無かった。

「どうしましたか？早くわたくしにも貴方の生気を与えなさい。殺しますよ」

「言ってくれたな、ティー…」

私はティーから距離を取って拳を構える。

「えっ？な、何のつもりなんですか？」

ティーは私が強気になったことで戸惑っている。

ここで私が反抗するとは思っても見なかったのだろう。

いつまでも脅し文句に怯えるロスト様ではない！

「ならば、戦闘態勢を取れば私は雑魚ではないぞ！かかってこい！」

「ロスト様…」

ティーは驚いたような目で私を見てくる。

我ながら狭量だと思うが、ここまで嘗められては黙ってられない。

喧嘩番長としての威厳を取り戻してやるぞ！

……。

ん？

ティーから何も反応が出てこない。

私が本気であることに驚いて声が出ないのだろうか？

「そんなにわたくしを抱くのがお嫌なのですか…」

ティーは俯き、消え入りそうな声を出している。

「アレク姉様とメイは抱いて…わたくしだけ抱かないなんて…そんなにわたしくのことが…嫌いなんですか？」

……。

あの物騒な脅し文句を散々と言ってきたティーが泣いていた。

もしかして私が泣かせてしまったのか？

「見損なったぞ、ロスト殿。ティーを泣かせるとは…」

「女を泣かせるなんて最低だよ、ロスト」

アレクとメイが白けたような目で私を見てくる。

私が悪いというのか？

私とティーの姿を第三者から見て、どのように目に映るだろうか？

簡単に分析してみるとしよう。

ティーは顔を俯かせて泣いている。

私は拳を構えて戦おうとしている。

端から見ると餓鬼大将がか弱い女を虐めている構図が見えてしまう。

もし、この場に野郎共がいたら全世界に拡大感染して人類の半分以上を敵に回すことは確実だろう。

そして、人類の敵として私は容赦無く抹殺されてしまうという壮絶な結末を迎えていく。

……。

完全に私が悪い構図ではないか！

私は拳を降ろして、ゆっくりと泣いてるティーに近づく。

「あ、すまない。悪かった…」

……。

ティーは俯いたままだ。

「お願いだから、許してくれ…」

……。

ティーから反応は無し。

「ティーの言うことは何でも聞く。出来る限りに…」

さすがに「死んでください」という命令をされたら聞けないが…。

俯いていた顔を上げ、涙目で睨んでくるティー。

「本当ですか？死んでくれますか？」

「死ねという命令は無しにして欲しい…」

しばらくの間、私を睨んでいたティーだったが、やがてため息を付く。

「許します…」

……。

心臓が止まるかと思った…。

「本当にすまない…」

「男なら言葉より行動で示してください」

言葉よりも行動か…。

ティーは私の挙動を瞬きせずに見つめている。

私は無言でティーの元へと歩み、しがみついていく。

背が低いからどうしても格好が付かないのが悔しい。

そんな私の姿にティーは苦笑し、背中に腕を回してくる。

「本当にどうしようもないですね。殺しますよ…ちゅ」

ティーは私を引っ張るように仰向けになって地面に横たわってくる。

体格差からして押し倒されると思ったが、ティーは逆に押し倒されてくれた。

「男が下では格好つかないでしょ。早く私を満足させてください…殺し…んっ」

私は脅し文句を言おうとしていたティーの唇にごく自然に自分のそれを重ねた。

ティーは敢えて私を男として立ててくれたのだ。

それが嬉しくなって衝動的にティーを求めてしまう。

思えば、受けに回ってくれた女性と情事をするのは初めての気がする。

私はティーの唇を貪りながら、男の証を出して、ティーの女を貫いた。

「ちゅぱ…これが…ロスト様の…男…はぅ！」

「うおおおっ！」

三人の中で一番の締め付けだ。

生気がティーに吸収されていくのを感じる。

アレクとメイは手を出さず見守っている。

二人で存分にやれということなのか。

一人だけならば、少々生気を沢山吸われようとも大丈夫だろう。

私は男を立ててくれたティーの思いに報いるために無我夢中で腰を振る。

「ああっ！いい！わたくしの中に…ちゅぱ…ロスト様の生気が…んっ…入ってくる！」

激しい脱力感が襲ってくるが、気持ちいい！

やはり、男は攻めでいかなければな！

「くっ！わたくしが…ロスト様に…殺されてしまう！あんっ！これなら…殺されて…いい！」

うおおおおおおおっ！

「あああああああああああっ！」

……。

……。

…。

気持ち良くも苦しい戦いは終わった…。

私はティーの中から男の証を引き抜こうとする。

……。

抜けない…。

ティーの脅威的な締め付けは私の男の証を引き抜くことを許さなかった。

「逃がしませんよ…」

ぬっ！

ティーは私の腰にティーの両足が逃がすまいと絡みつき、背中に両

腕を回して、私を抱き寄せてくる。

「ロスト様」

「何でしょうか？」

額から汗が流れてくるのを感じる。

「私の中で死んでください」

……。

「言い間違えました。死ぬ寸前まで生気を下さい」

……。

「それはお願いですか？」

「いいえ」

……。

「命令ですか？」

「はい」

……。

「拒否権は？」

「認めません。殺しますよ」

ティーは仰向けながらも腰を振り上げ、私の生気を吸い始めていく。

「ティー姉さん、よっぽど嬉しいんだね」

「うむ、これほどまでに弾けてるティーを見るのは初めてだな」

メイとアレクは何だか感心している様子だ。

私としては感心しないでティーの暴走を止めて欲しいのだが…。

「ロスト殿、気を強く持つのだ。そうすれば無事に生き残ることが出来るぞ」

「死んでしまったらモイラにはきちんと伝えておくから頑張れよ。あっ、それからティー姉さんが満足した後にはまた吸わせてね。あたいもまだ満足してないから」

アレクは完全に我関せずと決め込み、メイに至っては食事のお代わりを求めてきている！

もはや退路が塞がれてしまったのか！

「はぁ…わたしくにばかり…腰を使わせてどうするんですか！本当に殺しますよ！んちゅ！」

ティーは痺れを切らしたのか、私を荒々しく抱き寄せて唇を貪ってきた。

生気を吸われすぎて魂が抜け出そうだ…。

「ちゅぱ…ロスト様…逝ってください！」

ぐぎゃあああああああああっ！

……。

……。

……。

……。

……。

……。

…。

「よくぞ生き残ってくれた。ご苦労様、ロスト殿」

アレクは骨と皮になった私を抱き寄せて膝枕をしてくれている。

やはりアレクが三人の中でも一番の良識派のようだ。

助けてくれなかったが…。

「ティーの暴走をどうか許してやって欲しい。彼女は今まで自分の感情をまっすぐぶつけれる相手がおらんかったからな。ロスト殿に

逢えてよほど嬉しかったのだよ」

「そうか…」

確かに彼女ほどの実力者に殺す等と物騒な脅し文句を言われれば、よほど胆力のある相手でなければ務まらないだろう。

ティーはメイと抱き合うようにして眠っていた。

二人とも眠っている顔はあどけない。

とても殺し合いをしていた女とは思えないほどに…。

「これで儂等はそなたと契約することが出来たわけだ。そなたの従者として働くことを三姉妹を代表して儂が誓おう。宜しく頼む」

私は図らずとも三体の上級神の主として神降ろしに成功したことになった。

今回はガイアの了承を得ることで神降ろしをしたことになっているようだ。

もっとも、ほとんど押し掛けのような形になったわけだが…。

それにしても従者と言えば、最も魔力の消費が高い召喚方法だと思うが、私の生命力ならば平気というわけなのか…。

「ちなみに儂等三人でロスト殿の全生気の二割ほどを頂かせて貰ったぞ。ロスト殿は本当の生命力が有り余っておるな」

「それだけが一番自慢できることだからな」

私の言葉にアレクは苦笑しながら、頭を撫でてくれる。

「真にそうだな。既にそなたの生命力は全快しつつあるように感じる。さてと、もう暫し待ってくれぬか？ティーとメイは疲れておるようだしな…」

アレクは慈愛に満ちた目で眠っている妹達に見る。

「かまわない」

「忝ない。目が覚めた時にはモイラと共に反乱軍の本部へと招待することを約束しよう」

正直言えば、もう少しアレクの膝枕を堪能したかった。

成熟した大人の美女に身を預けるのは心地よいものだ。

「そなたも眠ればよい。この世界では時間は無意味だ。故にモイラを待たせていることに関しては心配することはない。メイとティーが起きるまで儂の膝枕を堪能しても構わぬぞ。心地よい顔をしておるようだからな」

「お見通しということか…」

アレクには隠し事をするのは困難かもしれないな。

「では、そうさせてもらう」

「ゆっくり儂の膝の上で休むがよい、ロスト殿…ちゅ」

アレクの唇の感触に引かれるようにして私は眠りについていく。

……。

今回も苦しい戦いだったが、得られるものもあった。

束の安息が終われば、ついに反乱軍の本部へと足を踏み入れることができる。

いよいよ反乱軍の頭目とのご対面が叶うわけなのだ。

反乱軍の本部には何が待ち受けているかは分からないが、モイラの仲間なのだから多分大丈夫だろう。

それに反乱軍の最大戦力である上級神の三姉妹を従えることが出来た。

彼女達以上に恐ろしい存在がいないことを切に願うしかない。

……。

さてと…。

燃え尽きたな…。

第７８話：反乱軍

エリニュスとの戦いを乗り越え、どさくさに紛れた形で神降ろしの儀を完了させた私はモイラのいる世界へと戻っていった。

そこで待っていたのはモイラからの手厚い往復張り手だった。

「おじさん、手が早いのは分かってたが、限度って言葉を知らねえのか！ああん？」

「申し訳ありません」

何故、ばれてしまったのだ？

「あはは…ごめんね、ロスト」

赤く腫れ上がった両頬を押さえている私にメイが申し訳なさそうに手鏡を差し出してくる。

顔には三色の口紅の跡がくっきりと刻まれていた。

またしても証拠隠滅を行うことを失念してしまったというのか！

我ながら学習能力が無さ過ぎるな…。

「悪いことは出来ない良い見本だというものですね、ロスト様。久しぶり、モイラ。元気にしてましたか？」

ティーは白々しく言って、何事も無いようにモイラに接していた。

……。

奴とはいずれ決着を付けねばならないようだな…。

「久しぶりだな、ティー。おじさんを拉致して何しでかすかと思ったけど、反乱軍に付いての説明をしてたんだな。それにしては疑似世界まで連行する必要は無かったんじゃないか？」

「誰が聞き耳を立てているか分かったものではありません。万全を喫するのは当然のことです。それにしても武器の手入れも良いですが、肌の手入れもしてください。貴方は可愛い女の子なのですから…」

ティーは慈愛に満ちた眼差しをモイラに向けて、抱き締めてくる。

「おい、止めてくれ。俺はもう女の子なんか呼ばれる子供なんかじゃないぜ」

「いいえ、モイラはわたくしにとって可愛い女の子なのです…」

……。

あの態度の違いはいったい何のだ？

私には散々と殺すや逝け等と冷たい目線で物騒な言葉を掛けてくるというのに…。

「本当にティー姉さんのモイラへの溺愛ぶりに困ったもんだよ。気にしないでくれ。ティー姉さんは可愛い女が大好きなだけだからね」

メイは苦笑しながらも口紅に塗られた私の顔を布巾で拭ってくれる。

「さて、この旧ブリュンスタッド本城が現在の反乱軍本部だ。中へと案内しよう。付いてきてくれ、ロスト殿」

私はメイに顔を拭かれながらもアレクの後に続いていった。

「おい、待てよ！おじさんは俺が案内するんだからな！」

「モイラの行為を無下にしたら殺しますよ、ロスト様」

モイラは私の右腕に抱きつき、ティーは左腕を抱いてくる。

二人の胸の感触を腕を通して堪能しながらブリュンスタッド城へと入っていく。

……。

……。

…。

典雅が彩りだった城の回廊は蜘蛛の巣がかかり、古びた廃墟と成り果てていた。

徴兵に狩り出され、手柄を立てたときもこの回廊を通っていたことを今でも昨日のことのように覚えている。

ヴァルキリアに滅ぼされ、囚われた時には二度と戻ることが無いと

思っていたのだがな…。

錆びた鐘楼や色あせた肖像画がかつての栄華を忍ばせていた。

「相変わらず汚い場所だな。あたいはこの場所が嫌いだよ」

「メイ、その口を閉じろ。申し訳ない、ロスト殿」

アレクは私がブリュンスタッド出身であることを知り、気遣ってくれているのだろう。

本当にアレクは私が今まで会った女性の中では良識派である。

「謝ることは無い。別に愛国心があったわけではなかったからな…」

「愛国心は無くても、おじさんの生まれ故郷だろ？変に気を張らなくたっていいんだぜ…」

モイラは私の顔を伺うように言ってくる。

「俺の故郷のアースガルズもエロスによって滅ぼされた。別に国がどうこうというわけじゃないけど、やっぱり俺が育った場所だったんだ。だから、思うことがあっても可笑しくねえよ…」

「ごめん、あたい、不謹慎だった…」

モイラとティーの言葉を聞き、メイは申し訳なさそうに謝ってくる。

少し感傷的になりすぎていたか、どうやら私の精で空気を悪くしているようだ。

「本当に謝らなくてもいい。メイは何も悪くは無いのだから」

「ありがとう！ロスト！」

メイは後ろに回り込んで抱きついてくる。

背中に感じる胸の感触が心地よいぞ。

「あたい、ロストの頼みだったら何だって聞いてやるからな！」

メイは場を明るくする才能がありそうだ。

モイラもメイも苦笑し、暗い雰囲気が払拭されている。

「頭目の使いの者が迎えにきたようだぞ、ロスト殿」

古びた回廊を延々と歩き続けていると人影が見えてきた。

「お待ちしていました、皆様方…」

……。

茶髪が少し伸びていたが、紛れもなく彼女は…。

「生きていたのか、エクリア…」

「貴方はっ！」

頭目の使者であるエクリアは私の姿を見て、立ちつくす。

「であえっ！閣下の偽物め！よくも！」

エクリアの声に従い、女兵士達は瞬く間に現れ、一糸乱れぬ動き、銃口を私の方へと一斉に向けていく。

「エクリア、私は本物だ！」

「黙れっ！小官は確かに見た。閣下があのおぞましい黒い化け物に殺されてしまう様を…。閣下は…死んだのだ！小官達の最後の希望が…エロスに屈してしまったのだ…」

エクリアは憎悪に満ちた目で私を睨んでくる。

私はエクリアのこれほどまでに負の感情を帯びた目を見たのは初めてだった。

モイラは言葉を失い、ただ呆然としていた。

ティーとメイは黙って静観していた。

「待てっ！エクリア殿！彼は紛れもなく本物のロスト殿だ！断じて偽物ではない！」

「アレク殿も乱心なされたのか！閣下は死んだのですよ！」

エクリアはもはや聞く耳持たないと言わんばかりの形相だ！

このままでは射殺されて人生に終止符を迎える羽目になってしまう！

ティーとメイとモイラは私を庇うようにして、銃口の前に立ちふさがっている。

「おじさんは本物だ！俺をあのカロンから救ってくれたんだぜ！」

「上級神であるあたい達が下らない嘘を突くはずがないだろ！」

「殺したいほどに不本意ですが、彼は間違い無くロスト様です」

モイラ達が私を庇う姿を見て、エクリアは少し落ち着いたのか兵士達に銃を下ろさせる。

「ですが、彼が本物の閣下だとしても確かに死んだ場面を小官は見たのです。それをどう説明するのですか？」

確かに最もな意見だ。

それにしてもモイラはすぐに私のことを信用していたのにエクリアはやけに疑り深い。

いや、これが普通の反応なのだろうか…。

……。

そうだ、私が偽物だと証明出来る方法があった！

私でしか知らないことを言えばいいのだ！

「エクリア、いや、オネイロス！私は以前に最初に出会った時はロット、アースガルズに行ったときは確かロースと名乗っていた。私

は過去の世界からやってきたものなのだ！」

「どうして、小官の名前を！それに閣下の偽名を知ってるとは…。それに過去の世界って…」

私の言葉にエクリアは暫く黙り込む。

私しか知らないこと。

それはエクリアは実は人間の世界に紛れ込んだ神であり、私が彼女の神の名を告げたこと。

そして、私がいくつか偽名を名乗って行動していたことだ。

暫し時が経ち、エクリアは背を向け、歩き出す。

群がっていた女兵士達も影に紛れ込むように消えていく。

「分かりました。色々と聞きたいことがありますが、一応信じたつもりでいましょう。ついてきてください、ロスト様」

エクリアは私のことを閣下ではなくロスト様と呼ぶ。

どうやら完全には信用されていないようだ。

「俺、エクリアがこんなにも取り乱した姿を見たのは初めてだぜ…」

「モイラ、それは無理も無いというものです。死んだはずの愛しい者が目の前に姿を現したのですからね。エクリアとしても心の整理が付かないのでしょう」

いや、何となくだが、理由はそれだけでは無いような気がする。

あれほどお喋りで几帳面で説教好きだった彼女が無言のままで歩いている。

『小官が勝てば、閣下の私生活を正して頂きます！』

……。

エクリアと初めて出会った頃を思い出す。

確か、その時の私は漆黒の鎧を付けていて散々と怖がらせてしまったな。

私はエクリアに決闘を挑まれ、勝ったご褒美に処女を頂いたのだ。

そして、ケールと共に私を影に日向に支えてくれた。

エクリアは既に家族の一員も同然だった。

だが、今ではエクリアが他人のように見えてしまう。

……。

いったいエクリアの身に何が起こったというのだろうか？

「ここが本部への入り口です」

回廊の突き当たりにブリュンスタッドの華として讃えられたセシリ

ア・ブリュンスタッドの肖像画があった。

肖像画でセシリアが携えている錫杖の部分にエクリアは手を添え、何らかの呪文を唱える。

エクリアが呪文を唱え終えた瞬間、肖像画は光り輝き、手前の床が沈んで地下への階段が出現する。

「何度見てもすげえ仕掛けだな」

「これは代々王族のみに伝わる隠し通路でしたから…」

モイラの言葉にエクリアは言葉少なに応じ、階段を降りていく。

王族しか伝わらない隠し通路を知っているということは反乱軍に王族関係者がいるということなのだろうか？

「王族にしか伝わらない隠し通路をどうやって知ったのだ？」

私は不意に階段を降りていくエクリアに質問した。

エクリアは一瞬立ち止まり、私の方へと向く。

その表情は悲哀に満ちていた。

「すぐに…わかりますよ…」

エクリアはそう言って再び歩き出す。

……。

私としてはエクリアが長い説明をしてくれることを期待していたのだが…。

本当に変わってしまったのだな…。

エクリア…。

……。

……。

…。

階段を下りた先には目に映ったのは巨大な町だった。

アースガルズで見た無機質な建造物ではない、私が元いた世界で馴染みのある民家が建ち並んでいる。

その光景を見て、思わず元の世界に戻ったかのような安心感を得てしまった。

町は女達が汗に埃にまみれながらも武器の輸送や食糧を確保し、緊迫した雰囲気が漂っていた。

他にも虚ろな表情で空を見上げている女、小さい声で呟き含み笑いをしている少女等といた。

……。

その光景はかつてヒュプノスが狂戦士を造り上げるために収容していた哀れな女達を姿と重なる。

理由も無く叫ぶ姿やいきなり泣き叫んだり、常軌を逸した行動に出る女もいた。

嫌な光景だ。

私がかつて殺してきた狂戦士達を嫌でも思い出させてしまう。

彼女達はヴァルキリアでの犠牲者達なのだろうか？

それにしても、やはり男は一人もいないようだ。

本当にこの世界では男は滅び去ってしまったのだな…。

「この町はアレク姉さんの疑似世界で構築された軍事拠点だよ」

メイが得意げに語り、アレクは苦笑する。

「アレク姉様の空間魔法は一流ですから当然です」

ティーは当たり前と言わんばかりに冷たく言ってくる。

「アレク達のお陰で俺達はエロスの軍勢に対して何とかやり合えるようになってきたんだ。後は周辺に散らばってる反エロスの組織が集結してくれれば言うこと無しなんだけどよ…」

「暫くは静観するでしょう。小官達が果たしてエロス軍に敵う戦力を持っているかどうかを…」

他の反乱組織はモイラが所属する反乱軍がエロスの軍勢に敵うかどうかを見極めているということなのか…。

勝ち目が無い組織と組めば、巻き添えになるかもしれないことから慎重になるのも同然か…。

武器の手入れをしていた女兵士達が私を見た途端に動きが止まり、不躾な視線を向けてきている。

滅び去ったはずの男である私がいることがやはり気になるというのだろうか…。

「ああっ！エロス様！」

突如、薄汚れた服を纏った女性が私にしがみついてくる。

「エロス様！ああっ…エロス様、私にお情けを…どうか私にお情けを賜り下さい！」

エロス様だと？

「おじさん！」

「ロスト様！」

「ロスト！」

私にくっついて歩いていた三人は唖然としている。

しがみついてきた女性の目は狂気に満ちていた。

若い女性であるが、乱れた金髪を振り乱し、頬はそげ落ち、落ちぶれた老婆のようにも見えた。

それにしても何処かで見たことがあるような…。

「私はエロスではない！」

私は怪我させないようにしがみついた女を引きはがそうとするが、思いの外抵抗が強い。

「いいえ、貴方様は紛れもなくエロス様よ！いと美しき至高なる存在！」

この狂った女はエロスに会ったことがあるというのか…。

「ああっ！あの時の甘美な味！究極の快楽は今でも忘れられない！お願い！エロス様！もう一度私にあの時の…」

「お止め下さい！セシリア様！」

他の女達が駆けつけて、私から狂った女を引きはがす。

……。

それよりも今何て言ったのだ…。

『お止め下さい！セシリア様！』

……。

「離して！私にはもうエロス様しか！エロス様しかいないのよ！」

エクリアは憐憫の眼差しでセシリアと呼ばれた女を見ていた。

「お前達、セシリア陛下の世話をきちんとしておけ」

「申し訳ありません、エクリア様。さあ、陛下こちらへ…」

女達はセシリア陛下と呼ばれた女を羽交い締めにして民家へと連れて行く。

「離せぇ！エロス様！エロスさまぁあああっ！」

……。

『ロストよ。今後も励みなさい』

誰よりも美しく気高かったセシリア様が…。

私が憧れて止まなかった絶世の美女だったセシリア様が…。

「エロスさまぁあああああああああっ！」

私は力が抜けたように膝を付いて耳を塞ぐ。

あれはセシリア様では無い！

あれはセシリア様では…。

塞ぎ込んでいる私を見下ろすエクリア。

「エクリア、すぐに分かるとはこういうことだったのか…」

エクリアは私の問いに無言で頷いた。

あの狂った女は紛れもなくセシリア様なのだ。

そして、なぜあのようになってしまったのかは聞かなくても分かる。

エロスに手によって壊されてしまったのだ。

セシリア様はオイジュス様やモーモスのようにエロスに散々と弄ばれ、汚され、捨てられてしまった…。

薬漬けになっているように見えた女達も同様にエロスの手によって…。

「ロスト様、どうかお立ち下さい…」

いつもは悪態をつくティーが珍しくも気遣うように声を掛けてくれる。

「すまない…」

ティーの手を借りて立ち上がり、セシリア様が連れられた民家を眺める。

「セシリア様は目の前で国王陛下を殺されて…」

「もういい、早く頭目の元へと案内してくれ。エクリア」

これ以上はもう聞きたくなかった。

「すいません、ロスト様。では、付いてきてください…」

私達はそれから暫く無言で町を歩き続ける。

……。

『いいえ、貴方様は紛れもなくエロス様よ！いと美しき至高なる存在！』

……。

『離して！私にはもうエロス様しか！エロス様しかいないのよ！』

……。

『離せぇ！エロス様！エロスさまぁあああっ！』

……。

セシリア様が私に対して言った言葉が頭から離れなかった。

私はエロスとそこまで似ているというのか…。

『エロスさまぁあああああああああっ！』

違う！

断じて否だ！

私はエロスではない！

私は…。

……。

……。

…。

暫く歩き続けていると城塞らしきものが見えてくる。

あの中に反乱軍頭目がいるというのか…。

「エクリアだ。開門せよ！」

扉は重々しく開き、私達は城塞へと足を踏み入れる。

城塞の中は薄暗く重苦しい雰囲気を漂わせていた。

機関銃を持って油断無く周囲を見渡す衛兵が幾人も立ち並び、落ち着かせない気分にさせてくる。

「おじさん…」

モイラが私を呼び、強く腕を抱き締めてくる。

「おじさんのことを何でエロスと言っていたのか分からねえけど、おじさんは何も悪くは無い。だから、元気だせよ…」

「モイラ…」

私の腕を包み込むモイラの胸の感触が優しさと共に心地良く伝ってくる。

「あたい達はここで少し別行動させてもらうよ」

「そうですね。わたくしも急用を思い出したので失礼します」

メイとティーはそう言って姿を消していなくなる。

「そういうことで儂も野暮用があるので消えさせてもらうぞ」

アレクは私の腕に抱きついているモイラに笑みを見せて姿を消し去っていく。

「彼奴等め、余計な気を使いやがって…」

モイラは消えていった三人に悪態を付き、顔を隠すように私の腕に抱きつく。

「おじさん…」

「何だ？」

……。

「後でまた…俺が…慰めてやるからよ…」

「あ、ありがとう…」

私は柄にも無く照れてしまった。

……。

モイラのお陰で少し気分が明るくなったかもしれない。

「さあ、もうすぐ頭目にお会いになられます」

エクリアは私とモイラのやり取りを見ていた。

まるで失ったものを見出すかのような憧憬の眼差しで…。

……。

……。

…。

謁見の間とも言える部屋で私とモイラは椅子に座って待機していた。

もうすぐしたら反乱軍頭目とご対面になる。

「モイラ、頭目とはいったい何者だ?」

「複雑な経歴を持つ方さ。頭目は…」

モイラが言葉を遮るかのように部屋の戸を開く音が聞こえてきた。

「待たせたな…」

……。

一瞬、私の体内時計が止まってしまった。

部屋に入ってきたのはエクリアともう一人の女性。

燃えるような紅い髪。

野性的な色黒の肌。

そして，青色の妖艶な口紅。

エクリア以上の背丈を誇る絶世の美女。

……。

「ヒュプノス・ヴァルキリア…」

ヴァルキリア帝国第一皇女であり、科学兵器開発部門統括，帝国軍師、そして、タナトスの実の姉…。

私の中でヒュプノスがしてきた仕打ちを思い出されていく。

疑似世界で哀れな狂戦士と殺し合いをさせたこと。

エルとアビスを人質にとったこと。

そして、エルを洗脳し、パラディスムの里を滅ぼさせたこと。

黒い炎が私の中で煮えたぎる。

この女のお陰でエルとエリス、ケールが！

「おじさん！」

「閣下！」

エクリアとモイラの静止も聞かず私はヒュプノスを吊し上げていた。

ヒュプノスは苦悶の表情を浮かべながらも毅然と私を見つめてくる。

「よくも私の前に顔を出せたものだな！」

思えば、絶世の美女に対してここまで怒りを露わにしたのは初めてだった。

セシリア様の件で気分が参っている精かもしれない。

私は怒りの感情が抑えれなかった。

「ぐぅ…エクリアから…話を聞いてる。このまま私を…殺すのも良かろう…」

ぐっ！

憎たらしいが、殺してやりたいとまでは…。

ならば、せめて壊して…。

『エロスさまぁあああああああああああっ！』

不意に狂ってしまったセシリア様の姿を思い出す。

……。

落ち着くのだ、ロスト！

今の彼女は無抵抗だ！

ここで感情のままにヒュプノスを攻め立ててしまえば、エロスと同じになってしまう！

私はエロスとは断じて違うのだ！

背中に柔らかいものが押し当てられる感触を感じる。

「閣下、ここは怒りをどうかお鎮め下さい！全ては小官が悪いのです！ヒュプノス様の代わりに小官が閣下の怒りを受け止めます！だから！」

エクリア…。

先ほどまでに何処か冷たかった彼女が私の背中に泣きすがっていた。

何故、エクリアが泣いて私に謝ってくるのだ…。

「おじさん…」

モイラはヒュプノスを掴み上げている私の手に自分のそれを重ね、首を横に振る。

「モイラ…」

エクリアは私の背中に持たれて泣いている。

私はヒュプノスから手を離し、背中に抱きついているエクリアと正面から向かい合う。

「やっと私のことを閣下と呼んでくれたな…」

「か、閣下…」

戸惑うエクリアを私は抱き締める。

エクリアは私であると信じてくれたのだ。

それがたまらなく嬉しかった。

「第二次聖戦でお前に何が起こったのかは分からない。だが、何よりもお前が無事で良かった…」

「かっ…か、閣下！うあああああっ！」

エクリアは号泣して私の身体にしがみつく。

よほど辛いことがあったのだろう。

まだ戦争が本格化していない世界からやってきた私には想像も付かないことを経験したに違いない。

……。

……。

…。

しばらくしてエクリアは泣き止み、私の顔を悲しげに見つめてくる。

「先ほどまでの無礼申し訳ありません、閣…ロスト様…」

エクリアはまた閣下からロスト様と言い直してきた。

「まだ、私を信じてくれないのか…」

「いいえ、違います！小官にはもう…貴方様を閣下と呼ぶ資格はないのです…」

エクリアはそう言って、部屋から出ていった。

私は何故か追いかけることが出来なかった。

彼女と私では生きている世界が違う。

この世界でいったい何が起こったのかが分からない私に何が出来るというのだ…。

「エクリアも貴公と同様に混乱しているのだ。彼女には暫く時間を与えてやってくれ」

「ヒュプノス…」

私はヒュプノスを正面から睨み付ける。

「貴様は何故、ここにいるのだ?」

「おじさん、ヒュプノス様が…」

モイラが何かを言おうとしたとき、ヒュプノスは私の足下へと跪いてきた。

「ロスト殿、私達反乱軍に貴公の力を貸して頂きたい!」

……。

私は幻を見ているのだろうか?

あのヒュプノスが私に跪いているだと!

今まで散々と弱みを握り、使い回してくれたあのヒュプノスが…。

あまりの光景に私は何も言えず立ちつくしてしまう。

その私にさらに畳みかけるようにヒュプノスは話を続けていく。

「察しの通り、私がこの反乱軍の頭目ヒュプノス・ヴァルキリア、

いや、今はただのヒュプノスだ」

……。

二度目の衝撃的事実に私は頭が真っ白になった。

私はヒュプノスの言うように察してはいなかった。

まさかかつての怨敵が反乱軍の頭目となっていたとは…。

ヒュプノスは何処まで私を驚かせるつもりなのか…。

「過去に貴公に非道な仕打ちをしてしまったことはいくら詫びても足りないだろう。責めならいくらでも負う。だが、私は反乱軍を率いる身だ。死ぬわけにはいかない。全てを終わらせたときには喜んでこの首を貴公に捧げよう」

殊勝なことを言っているヒュプノスに対して私はいったいどう返答すればいいのだ?

「その言葉は本当なのか?」

とりあえずヒュプノスの言葉に偽りが無いかを聞くしかない。

「私の全てを掛けて偽りは無い。命を差し出すことはまだ出来ぬが、私の身体を気が済むように好きにしてくれてもいい。痛めつけるのも良し。犯すのも良し。今後の行動に支障が出ない程度なら私の身体を玩具にしようとも構わない」

……。

「もっとも私の身体は既にあの男に汚されてしまっているがな…」

「エロスにやられたのか…」

ヒュプノスは無言で頷く。

「おじさん…」

モイラは心配げに私の裾を掴んでくる。

「大丈夫だ、もうヒュプノスに乱暴なことはしない」

ヒュプノスは私に許し難い仕打ちをしてきた。

それは決して許せるものではない。

だが、個人的感情をぶつけるにはヒュプノスの身体には余りにも多くの命が背負われている。

悔しいが、エロスの元へと辿り着くにはヒュプノスの力がどうしても必要だ。

それに万一騙されたとしても私には上級神の三姉妹が従えてくれている。

彼女達は反乱軍の最精鋭部隊の肩書きだが、ガイアの弟子なのだ。

騙されて窮地に立たされときには私の味方になってくれるだろう。

私は足下に跪いているヒュプノスを改めて見た。

彼女は誰よりも誇り高かったはずだ。

その彼女が地面に跪き、女の武器を使ってまで私に頼ろうとしている。

何振り構わない覚悟を決めているのだろう。

だが、返事する前にどうしても聞かなければならないことがある。

「返事する前にどうしても聞きたいことがある」

「何でも答えよう」

ヒュプノスは真っ直ぐに私の顔を見つめてくる。

「エルはどうした？」

……。

「エロスに囚われている。妹のアビスも姉を助けるために出ていき、連絡が途切れた。彼女も恐らく…。すまない…」

「そうか…」

暫しの沈黙の後、ヒュプノスは答えた。

ヒュプノスがいるからもしかするとと思ったが、淡い期待だったようだ。

エロスに囚われている以上、ヒュプノスに怒りをぶつけても意味が無い。

……。

エルとアビスを取り戻すためにもやはりエロスとは決着を付けなければならないのか…。

ならば、私も覚悟を決めるしかない。

「分かった。モイラに免じて貴様に力を貸す」

本当はこちらが力を貸して貰いたいほどなのだが、敢えて強気な態度に出ておこう。

我ながら小物だと思ってしまうが、今まで威張られてきた仕返しだ。

「感謝する。私は反乱軍頭目の肩書きを持っているが、私個人として貴方様に永遠の忠誠を誓う」

ヒュプノスは恭しく私の手を取り、手の甲に自ら青色の唇を押しつけていく。

「んっ」

……。

ヒュプノスの唇から痺れるような感覚が伝わってくる。

これは何という感覚なのか…。

「ちゅぱ…これで私の全ては貴方のものだ」

手の甲から唇は離し、私を仰ぎ見るヒュプノス。

私は自分の身に伝った感覚の正体を悟った

これは優越感なのだ。

傲慢を絵に描いたようなヒュプノスを私が跪かせたという快感に酔いしれてしまっているのだ。

この感覚に酔うと非常に不味い。

これは身を滅ぼす魔性の酒だ。

「そ、そうか…」

私は青色の口紅がついた自分の手の甲を見つめながら、何とか声に出して応える。

くっ！

不意に腕に痛みを感じた。

「ふんっ」

モイラが腕を抓ってきたようだ。

「何故、抓る？」

「別に！嫉妬したわけじゃないからな！勘違いするんじゃねえぞ！」

嫉妬したのだな…。

「では、改めてようこそ。反乱軍を代表して私は貴方様を歓迎しよう」

ヒュプノスは執事のように優雅に一礼して私を歓迎してくれた。

……。

これで私は反乱軍という巨大な後ろ盾を得ることが出来た。

まずは仲間達の行方を聞かねばな…。

アイリ達が生きているかどうかを確かめなければならない。

そして、反乱軍の今後の方針を聞き、私の出来ることを把握するのだ。

これで少しでもエロスの元へと近づければ良いのだが…。

果たしてどうなるだろうか…。

第79話：Lacrimosa

私はモイラを伴い、テーブルを挟んでヒュプノスと向かい合って座っている。

……。

暫くの間、互いに沈黙したままだった。

「モイラ、席を外せてもらえないか？ロスト殿と二人きりで話したいことがある」

最初に沈黙を破ったのはヒュプノス。

「ヒュプノス様…」

モイラは私に意見を求めるように見つめてくる。

「済まない、モイラ。暫くヒュプノスとじっくり話をしたいのだ」

「分かったよ…」

モイラはあっさり引き下がり、席を立つ。

「おじさん…」

「分かっている。事を荒立てたりはしない」

モイラは私とヒュプノスの因縁を感じ取ったのかもしれない。

「じゃあ、また後でな…ちゅ」

モイラは私の頬に口付けして部屋から出ていく。

……。

「随分と懐かれたのだな…」

「貴様には関係無い。話を聞かせて貰おうか…」

私の素っ気ない態度にヒュプノスは悲しげに「そうだな」と言い、話し始める。

「まず、貴公の仲間達なのだが、アイリウス将軍、エリアルト将軍、そして、パラディスムの頭領レテシアはエロスに囚われてしまっている可能性が高い」

……。

「まだ生きているのだな…」

「エロスは無抵抗の女は殺さない。死んだほうがましだと思えるぐらいの仕打ちをしてくるが…」

アイリはヒュプノスと同じぐらい傲慢だから決してエロスに屈することは無いだろう。

それ故に心配だ。

正気を失ったセシリア様のことを思い出す。

エロスはもう一人の私だからこそ分かる。

傲慢で誇り高い女ほど何処までも墜としたくなってしまうものなのだ。

ヒュプノスが私に跪いたときに感じた優越感を得たいが為に…。

エロスはあらゆる手を使い、身も心も摩耗させ、徹底的に責め苦を与えてくるだろう。

アイリもまたセシリア様と同じようになっていなければいいが…。

エリーはどうなのだろうか…。

彼女はふざけているようだが、芯は強い女性だ。

エロスにどんな仕打ちをされているのかが心配でたまらなかった。

「心中察する。あの時の私は本当に無力だったからな。私が遠征に乗り出したのも元はと言えば、エロスが城へとやってきたのが、始まりだった」

ヒュプノスの話だとエロスは今の時代では考えられないほどの知識と技術を提供し、その中でも特に注目したのが、強化兵士の秘法だった。

富国強兵を掲げていた当時のヴァルキリアでは涎が出るほどに欲していた禁断の秘術だった。

ヒュプノスはその秘術を採用し、戦力増強を図ったのだ。

そして、その成果が周辺諸国を制圧という快挙を成し遂げた。

ヴァルキリア帝国は世界でも有数の列強国として名を馳せたのだった。

「研究者でもあった私は狂喜乱舞したよ。自分の研究でヴァルキリアは強国へとのし上がったのだと思い上がってしまった。それが純粋な力でのし上がったタナトスとの間に亀裂を生じさせる切っ掛けとなってしまったわけだが…」

ヒュプノスは自嘲じみた笑みを見せてくる。

「私は妹に嫉妬していたのだよ。周囲の誰もが言っていた。タナトスこそがカオスの再来だと、次期王位に相応しいと…。実際、タナトスはカオスの生き写しとも言える容姿であり、武勇や人望においても私以上だった。だからこそ、私だけの何かが欲しかったのだ。タナトスに対抗するために実験を重ね、成果を得たのが、ヴァルキリアの最終兵器と言われたケールだったわけだ。だが、それもビフレスト皇国に完膚無きまでに破られてしまうのだがな。結局、私の心の弱さがエロスに隙を与えてしまったのだ」

ヴァルキリアで最恐の女と言われていたヒュプノスにそんな背景があったとはな…。

何処か非人間的だった彼女が酷く人間臭く思えてきた。

「エロスは日に日に増長し始めていった。私に断りもなく研究を押

し進め、上層部を掌握するなどの独断専行が目立ち始めた。だが、私は奴を止めることが出来なかった。何故か、奴の言葉には逆らえない強制力、あるいは刷り込みをされたかのような感じになってしまうのだ」

ヒュプノスは知らない。

エロスこそがヴァルキリアの始祖で自分がその子孫であることを…。

彼女にとってエロスの言葉は父親に命令されたような抗えない響きを感じ取ったのかもしれない。

「そんなときだった。タナトスが独断で軍を率いてブリュンスタッドを攻め入った情報が入ってきたのだ。さらにタナトスが一騎打ちで敗れたことを聞いて衝撃を受けてしまったよ。ビフレストのモロスに続き、タナトスよりも強い者がいたということにな。さらにタナトスが自分を破った男に惚れ込んで無理矢理嫁いでいったことに私は怒りを覚えた」

「それで私を捉えるようにパラディスムに任務を下したのだな」

それが私とパラディスムの双子が出会う切っ掛けになってしまったわけか…。

美味い酒を飲み、女を侍らせ、衣食住が保証された生活を送りたいという私にささやかな人生設計が狂い始めたのだ。

「パラディスムの情報でタナトスを打ち負かしたものがブリュンスタッドで最近武功を立てている成り上がりでロストだということはすぐに分かった。私はロストを捉えるためにブリュンスタッドに戦

争を仕掛けたのだよ。タナトスが花婿を捜すためという単純な理由で攻め入ったようにな」

血は争えないということか…。

姉妹揃って傍迷惑な所は似ていたのだな。

そして、その物騒な血筋の大元がエロスだというのも恐いぐらいに納得出来てしまう。

さらにそのエロスがもう一人の私であることがティーの言葉を借りれば、まさに殺したいほどに不本意だ。

「私としてはロスト殿を捉えれば、後はどうでも良かったのだが、思いの外、ブリュンスタッドが脆弱であったことから滅亡させてしまったのは予想外だった」

確かにブリュンスタッドは余りにも呆気なく滅亡したような気がした。

もっともヴァルキリアの強化兵士が規格外過ぎたのが、大きな要因と言えると思うが…。

「しかし、これでロストを捉えるのは容易だと思った矢先、エルからタナトスとの一騎打ちで負傷したことが原因で死んだと聞いたときは内心、焦ってしまったぞ。さらにロストには双子の弟ロットがいるから代わりに寄越してきたと聞いたときには偽物を寄越したのだと思って怒りに煮えたぎったな…」

どうやら私の完璧だと思った嘘はヒュプノスに即刻ばれていたらし

い。

エルとアビスを見て、咄嗟に思い浮かべた素晴らしい考えだと思ったのだったが、現実は甘くは無かったようだ。

そういえばエルも私の嘘に薄々感づいていたな…。

「私はロストの偽物を見た瞬間に斬り捨てる心づもりでいた。だが、エルが寄越してきた偽物、貴公の顔を見たときにすぐに確信した。偽物が実は本物だったということにな…」

「私の顔とエロスの顔が酷似していたからか？」

私の問いにヒュプノスは無言で頷いた。

セシリア様の時といい、私の顔はエロスと瓜二つと言ってもいいほどに似ているというのか…。

自分の顔が嫌いになってしまいそうだ。

それにしても反乱軍の中ではエロスの顔を見たことがあるものはいったいどれぐらいいるのか？

「話は逸れるが、反乱軍でエロスの顔を見たことがある者はどれぐらいいるのだ？」

「貴公も見ただろう。セシリアを初めとする正気を失った女達を…。彼女達がエロスの顔を見知っている。だが、彼女達の有様を見て分かると思うが、正確な情報を聞き出すことは不可能だ。脳を摘出して記憶を覗けば、あるいは可能かもしれないが…」

……。

ヒュプノスは息を呑んで一旦沈黙する。

話しにくいことなのだろうか？

「可能なのかもしれないが、どうなのだ？」

私の質問に観念したのか、ヒュプノスは重々しく口を開く。

「実のところ、実行しようと思っていた。彼女達の記憶はエロスとの情事以外にも基地の情報や戦力が分かるかもしれなかったのだからな。脳を摘出して情報を引き出せば、優位に立てるかもしれないとも思った。だが、それをしてしまうと反乱軍としての大儀が失われてしまうのだ。だから、断念した…」

「反乱軍としての大儀が失われるとはどういう事だ？」

やり方は確かに非道かもしれないが、戦争に勝つためならば、止む終えないとも考えられる。

冷たいかもしれないが、これ以上の犠牲を生み出さないためにも実行すべきだと思ってしまう。

それにヒュプノスは自分がのし上がるために散々と非道な実験を繰り返していたはずだ。

「貴公の言いたいことは分かる。私が今更、躊躇する様子を滑稽だと思っていることも…。以前の私ならば、大儀云々を気にすること

もなく強行していたかもしれない…」

「ならば、何故？」

ヒュプノスは立ち上がり、私の手を取ってくる。

「唐突で済まないが、見せたいものがある。そこで続きを話そう。案内する」

私はヒュプノスに手を引かれるまま、部屋を出て見せたい場所へと案内されていく。

……。

……。

…。

「この先に見せたいものがあるのか？」

ヒュプノスの屋敷にはブリュンスタッドの隠し通路のように地下に続く階段があった。

「そうだ。この先にあるものは今の世界の現状が集約されていると言っても過言ではない。今更だが、引き返しても構わない。知らない方が幸せということもあるからな…」

「愚問だな。案内してくれ」

目を逸らすわけにはいかなかった。

私はこの世界で起こっていることを知る必要があるのだ。

正気を失ってしまったセシリア様。

人が変わったかのように冷たくなったエクリア。

彼女達に何が起こったかを知るためにも…。

「貴公の赴くままに…」

ヒュプノスは私の手を引き、階段を下りていく。

……。

……。

…。

階段を下りた先は牢獄のように薄暗く、亡者のような喘ぎ声が聞こえてくる。

地下の回廊には無数の鉄格子で閉じられた部屋が並んでいた。

まるで罪人を収容する刑務所みたいではないか…。

ヒュプノスが握っている手が汗ばんできた。

かつてヴァルキリアで狂戦士を収容していた施設に行ったことを思い出しそうな雰囲気だ。

ヒュプノスは部屋に立ち止まり、鉄格子で閉じられている戸を開く。
鉄格子の中は排泄物の臭いがして、思わず顔をしかめてしまう。
そんな中でヒュプノスは平然と鉄格子の中へと足を踏み入れていく。
「目を逸らさず見てくれ。これが世界の現状だ」
……。
そこには黄色く変色した布団が敷かれ、その上には四肢を失い、横たわっている…男がいた。
この世界で私以外に初めて見る男。
身体には無数の管が繋がれている。
それよりもこの男は…。
「グレイブ殿…」
『私もその気持ちはよく分かる。私も本国では百人以上もの愛人を抱えているからな。百人が百人とも個性的で魅力的な女性だから扱いに困っているところだ』
アルセイヌ王国第二王位継承者。
『何を言っている？私も貴公も溢れる精力を持てあましている時だ。百人どころか千人でも万人でも捌く気概を持たねば男として生まれ

てきた甲斐が無いぞ！』

グレイブ・アルセイヌ。

私の初めての男友達であり、人生の先輩として仰ぎ見た…。

「グレイブ殿！」

悪臭が漂っている部屋に横たわっているグレイブに駆けつけた。

グレイブ殿は虚ろな目で天井を眺めている。

「しっかりしろ！私だ！ロストだ！」

私がどれだけ揺さぶってもグレイブ殿は反応をしなかった。

まるで死んでるように…。

「無駄だ。彼はもう何も応えることはない。永遠に…」

「どういう事だ！」

私は立ちつくしているヒュプノスを掴み上がていく。

「彼は脳を摘出されてしまっている。四肢をもがれ、子を成すための子種を作る為の生きた道具にさせられてしまったのだ！エロスによってな！」

……。

『世界中の男共は皆エロスに殺されるか、脳死されて種馬として飼育されてしまってる。要するに人類の半分がエロスによって絶滅されてしまったんだよ』

モイラの言葉を思い出す。

実際見ることはただ聞くこととは段違いだということを思い知らされる。

私はまだ心の何処かでぬるま湯に浸かっていたということなのか…。

「ロスト殿…」

「すまない、ヒュプノス…」

掴み上げていたヒュプノスを下ろし、横たわっているグレイブ殿の側にいく。

「その男はグレイブと言ったな。彼は自分の女達を守るために最後まで果敢にエロスの軍勢に戦いを挑んでいった。真に勇敢な男だったよ…」

ヒュプノスの話を聞き、思わず笑みを浮かべてしまう。

グレイブ殿が自分の女を守るために奮闘する姿が悲しいほどに脳裏に過ぎってくる。

『この乱世が終わったら、私の国に立ち寄ったらどうだ？貴公ならば、いくらでも女を紹介してやってもいいぞ』

……。

「約束したではないか…。私に女を紹介してくれると…。それなのにお前がこの有様でどうする？これでは満足に女を抱くことも出来ないぞ…」

あれほど覇気に溢れていた顔も今は死人のようで見る影もない。

「何百人何千人の女を捌けれなくては男に生まれた甲斐が無いのでは無かったのか！応えろ！グレイブ！」

グレイブ殿を乱暴に抱き起こし、揺さぶっていく。

「乱暴にするな！管が抜けてしまったら生きながらえないのだぞ！」

ヒュプノスが背中から抱きついて私を必死に止めようとしてくる。

……。

私はグレイブ殿の身体を抱き上げて、唖然とする。

男の身体はこれほどまでに軽かったのか…。

グレイブ殿にはもう美女を抱き締めるための腕は無い。

美女を追いかけるための足も無い。

夢を思い描くための脳も無い。

骨と皮だけの生ける屍。

……。

私はグレイブ殿の姿を見ながらヒュプノスに質問する。

「脳を摘出して記憶を覗く方法はエロスの技術なのだな？」

「その通りだ。戦争に勝ちたいために他人の脳を取り除くことをすれば、エロスと同じになってしまう。だから、出来ない…」

ヒュプノスは私の背中に寄りかかりながら声を震わせながら言ってくる。

「我ながらお笑いぐさだ。私達反乱軍は既にエロスの技術からもたらされた銃や火薬で戦争をしているというのにな…」

モイラ達が使っていた機関銃やバズーカもエロスの技術で作られた物だと確かに聞いている。

それに頼らざるおえないのは…。

「それだけエロスの軍勢は強大だというのか…」

「奴らは余りにも強大過ぎる。私達はエロスの気まぐれで生かされている無力でちっぽけな存在だ…」

エロスだけでも世界を滅ぼすほどの力を有している。

その取り巻きにも相応の力を持つ者が沢山いるのだろう。

ガイアの元弟子や精鋭部隊。

私がエロスの元へと辿り着くには果てしなく困難だというのか…。

だが…。

「それでもグレイブ殿は最後まで戦い抜いた。自分の大切な者を守るために…」

グレイブ殿は私と違い、一般の域を超えない強さだったはずだ。

それでも世界を滅ぼすほどの強大な敵に挑んだのだ。

こんな姿になってまで…。

私は果たしてここまで戦うことが出来るのか？

私はただ酒池肉林の夢を追いかけて、衣食住が保証された生活が出来ればいいと思っていた。

そして、アーテから与えられた力でそれが実現できると安易に考えていた。

だが、これはもうその域をとうに超えてしまっている。

エロスを排除出来れば終わりだと簡単に思っていた自分が恥ずかしくなってきた。

自分の世界を確立させるためには相手の世界を押しつぶす覚悟が無ければならない。

今更ながらエロスの強大さを思い知ってしまう。

私は世界をここまで歪ませた相手に挑まなければならないのだ。

……。

ヒュプノスの言う通り、見なければよかった…。

覇気が溢れていたグレイブ殿を生ける屍に変えたエロスが恐ろしくなってしまった。

グレイブ殿がこんな姿になったのは遺憾ともし難い思いだ。

だが、それ以上にグレイブ殿のような状態になってしまったらという恐怖の方が勝っていた。

こんな私では酒池肉林の夢を叶えることなぞ到底無理だという諦めの思いが脳裏に広がろうとしている。

『それでもエロスに戦いを挑むつもりなのかな?戦うのであれば、この荒んだ世界に希望をもたらす姿を僕に見せてくれ。その程度のことが出来なければ、エロスの下に辿り着くことすらも叶わないよ。けど、出来なくても誰も責めたりはしないさ。僕でも無理だったんだからね』

私の頭にガイアと交わした言葉が重々しく響いてくる。

ガイアは私にこの世界に希望をもたらせと言ってきた。

原初神であるガイアですらエロスには敵わなかったのだ。
それなのに私が果たして…。
……。
「ロスト殿、大丈夫か？」
不意にヒュプノスの声が聞こえ、思考を停止させる。
「ああ、大丈夫だ…」
私は何とか声を出して、立ち上がる。
「これが貴様が見せたいものなのか？」
「それは半分だ。もう半分をこれから見せる」
ヒュプノスは私の手を引き、グレイブ殿の部屋から出ていく。
……。
……。
…。
ヒュプノスはもう半分を見せると言っていたが、正直な話見たくなかった。
あれほど大口を叩いてながら情けなく思えてくるが、エロスの所行

を見るのが恐くてたまらなくなってしまったのだ。

喧嘩番長と名乗り、命の危険も無く喧嘩に明け暮れていた日々が酷く遠く感じてしまう。

だが、私の手を引いているヒュプノスの手はここまで見たのだから今更引き返すことは許さないと言わんばかりに強く握っていた。

地下の回廊の先に一際大きく堅固な扉が見えてきた。

ヒュプノスは扉の手前に立ち止まり、私の手を離す。

「ここに私がエロスに立ち向かう理由がある。今まで私以外には誰一人入らせたことが無い部屋だ。だが、貴公には入る資格はあるだろう」

ヒュプノスは扉に手を当てて、開門の呪文を唱える。

扉に魔法陣が浮かび上がり、開かれていく。

薄暗い地下回廊の中で扉から目映い光が放たれる。

私は余りのまぶしさに目を細めてしまった。

光で視界は真っ白に染まり、いつの間にか私は草原の上に立っていた。

ここは疑似世界、なのか…。

地下にいたはずなのに青空が見えていた。

冷たく心地よい風が私の身体を包み込んでいる。

今の世界に失われている緑の息吹がここにはあった。

「綺麗だろう。この世界こそが私の最高傑作だ」

ヒュプノスは失われたものを懐かしむかのように緑に満ちた作り物の世界を眺めている。

「もし、全てが終われば、私はここで骨を埋めたいと思っている。彼女と共に…」

彼女と共に、か…。

いったい誰のことを言っているのだろうか?

もしかするとその彼女こそがヒュプノスの戦う理由なのかもしれない。

「貴様の戦う理由とはいったい何のだ?」

「貴公にこの世界の主に会わせよう。付いてきてくれ…」

私はヒュプノスの後へと付いていく。

……。

……。

…。

蝶が舞い、鳥が囀る声が聞こえてくる。

風のせせらぎ、草木の匂い。

全てが精巧に現実世界を再現されている。

この世界は確かにヒュプノスが言う最高傑作とも言えるもかもしれない。

ふと無数の石碑が並んでいる光景に目が留まった。

石碑は地平線の先まで果てしなく並んでいる。

草原が靡くこの世界の中でも異質の光景だ。

「あの石碑はいったい何だ?」

……。

「墓標だ」

……。

ヒュプノスは石碑へと立ち寄っていく。

私もヒュプノスに続くようにして石碑の前に立つ。

そして、石碑に刻まれている名前を見て、私は息を呑んだ。

石碑には刻まれていた。

『純白の聖女オイジュス、ここに眠る』

オイジュス様…。

……。

私は暫く石碑の前に立ちつくし、他の石碑を見て回る。

『誇り高き王者モーモス、ここに眠る』

『漆黒の聖女クロエ、ここに眠る』

モーモス！

クロエ！

……。

ある墓標には古びたマンドリンが据えられている。

あのマンドリンはまさか…。

私はマンドリンが置かれている墓標の前に立って、刻まれている文字を見た。

『猛き勇者ケール、ここに眠る』

ケール…。

『ヴァルキリアの最終兵器と呼ばれた僕はもう死んだ。僕は新しく生まれ変わったんだ。君の手によってね…』

お前までが…。

『君は僕にとってご主人であり、父であり、兄であり、弟でもある…』

私を丸焼きにするほどに出鱈目に強かったお前が…。

『そして、何よりも僕が愛する男性なのだから…』

「ケール！」

マンドリンを抱き締め、墓標の前に膝を付く。

『僕の居場所は僕が守る。だから、僕は君を守ってみせるよ…』

「死んでしまっては…居場所も何も…無いではないか…。私を守ってくれるのではなかったのか…ケール…」

墓標が涙で濡れていく…。

「ケールは敗走する同盟軍を守るために殿を務めてくれた。その頃の私はヴァルキリアを裏切って同盟軍に内通していたからな…。第二次聖戦が終盤を迎えていた頃、ヴァルキリアから脱国していた私は運命の導きなのか、偶然にも瀕死の状態だったケールと遭遇したのだ」

「ヴァルキリアを裏切ったというのか…」

ヒュプノスは頷き、私が持っているマンドリンに触れる。

「その時に私は頼まれたのだ…」

『僕は…もうすぐご主人様の元に…旅立ちます。どうか…僕の宝物の…マンドリンを墓標に据えてください。そして…ご主人様の墓標の隣に…』

ご主人様の隣…。

私はケールの墓標の隣にある墓標を見る。

……。

『偉大なる英雄ロスト、ここに眠る』

……。

「ケールは最後まで貴公を守れなかったことを悔やんでいたようだ。クロエもオイジュスもモーモスも…」

モイラから聞いて分かっていたつもりだった。

だが、実際この目で見るまでは何処か信じていなかったかもしれない。

エロスによって私の大切な者は失ってしまったのだ…。

そして、私はエロスに負けてしまった…。

……。

私は改めて墓標を見渡した。

オイジュス…。

モーモス…。

クロエ…。

ケール…。

……。

タナトスの墓標が無い…。

ヒュプノスからはエロスに囚われいる可能性があるのはアイリ、エリー、レテシア、アビス、エルだということは既に聞いた。

ロンはフェイロン共和国の兵士であるから不明だとして、エクリアは生存している。

ならば、残りは戦死したことになるはずだ。

戦死したのはオイジュス、モーモス、クロエ、ケール、私、そして、タナトスとなるはずだ。

だが、タナトスの墓標が見当たらない。

……。

「さあ、彼女に会わせよう。付いてきてくれ」

私はケールの墓標にマンドリンを起き、墓地を後にした。

……。

……。

…。

ヒュプノスが案内した場所は花びらが舞う、白百合の丘だった。

「この世界で最も美しい場所だ。そこに彼女がいる…」

ヒュプノスは白百合の丘の頂きに目を向ける。

丘の頂上にはテーブルと椅子が添えられていた。

そして、椅子には純白のドレスに身を包んだ女性が座っている。

……。

燃えるような炎の如き紅い髪。

野性的な褐色の肌。

妖艶な紫色に彩られた唇。

……。

タナトス…。

肩まで切り揃えていたはずの髪を伸ばし、風に靡いている姿は何処か幻想的に見えてくる。

猛々しかったはずの彼女が今にも消えそうなほどに儚げな雰囲気を讃えて、静かに椅子に座っていた。

生きていたのか…。

私は白百合を踏み荒らして椅子に座っているタナトスの元へと駆けつける。

「タナトス！」

私の声に反応したのかタナトスは顔を向けてくる。

常に野獣のような笑みを見せていたはずのタナトスは柔らかい笑みを浮かべていた。

「タナトス…」

私はタナトスの肩に手を添えて、驚愕した。

戦場で鍛えていたはずの彼女の肩は骨が剥き出しているのではないかと思えるほどに痩せ細っていた。

逞しい腕もか弱い少女のようにか細くなっていて、抱き締めれば壊れてしまいそうな程に弱々しくなっている。

「タナトス！返事をしろ！私のことが分からないのか！」

必死に呼びかける私にタナトスはか細くなった手を私の頬に添えてくる。

「貴方の瞳は何処か悲しい光が見えてきます…」

「何言ってるのだ？タナトス…」

タナトスは微笑み、優しげに頬を撫でてくる。

「それに貴方は私の愛しい人に似ている。私の愛しい人に似ている貴方、どうか悲しまないで…」

「お前は本当にタナトスなのか…」

私はタナトスの手を振り払い、後ずさっていく。

私の知っている彼女はもっと強く凛々しくて…。

「どうしたの？愛しい人に似ている貴方…」

戸惑う私に邪気の無い笑顔を見せてくるタナトス。

彼女はこんな顔で笑わないはずだ！

「ヒュプノス！」

私は後ろに佇んでいるヒュプノスに呼びかけた。

「タナトスもエロスによって壊されてしまったのだ…」

ヒュプノスは沈痛の面もちで真実を告げた。

……。

「第二次聖戦時に同盟軍の将軍として戦っていたタナトスはヴァルキリアに囚われ、捕虜としてエロスの前に差し出されたのだ。そして、エロスの食指が動いたのか、奴は徹底的にタナトスを犯していった。私の目の前でな…」

……。

「だが、タナトスはどれだけ汚されようとも決してエロスに屈すること無く、最後まで抵抗した。その頑なタナトスの態度に業を煮やしたエロスは禁断の医術を施したのだ…」

禁断の医術。

「それはいったい何だ！エロスはタナトスにいったい何をやったんだ！」

「脳の中にある感情を司る部分を切除する医術だ。エロスから提供された書物では精神が病んでいた者に施す医術の一つとして有用されていた治療だと書かれていた。だが、人体実験に近いものであることから、非人道的な医術として言われ、廃止されてしまったのだ」

私は人が変わったように穏やかになってしまっているタナトスを見る。

「タナトスはその医術で…」

「そう、エロスは人の感情を壊してしまう禁忌の医術をタナトスに施した。そして、タナトスは壊れてしまった。貴公が…私が知ってる…タナトスは…もういないのだ！」

ヒュプノスはしゃがみ込んで、嗚咽を漏らす。

「タナトスの…その姿を見たとき…私は思い知らせれたのだ！私が如何に非人道的な実験を行い、命を弄んでいたのかを！抵抗をしなくなったタナトスをエロスは嬉々として犯し抜いていった。だが、飽きてしまったのか、私にタナトスを寄越してこう告げたのだ…」

『やはり抵抗する女を強引に犯す方がよほど楽しかったな。私としたことが改善させたつもりが改悪になってしまったよ。この失敗を今後の実験に活かす教訓として忘れないようにしなければな…』

……。

「エロスは私の鏡だった。私の今まで行ったことが客観的に見えてしまう鏡だったのだ！タナトスが私を邪気の無い笑顔で姉上と呼んだ姿を見て、私が如何に愚かだった事が痛いほどに思い知らされてしまった。だから、私はタナトスを連れてエロスから逃げたのだ…」

……。

「私にはエロスを増長させた罪がある。タナトスを壊してしまった悪魔の実験に荷担した罪も…。そして、世界を歪ませてしまった罪も…。戦う理由は償い、ただの自己満足だ。私は王族の血が流れてることから反乱軍の頭目という祭り上げられただけの愚かな女に過ぎないのだ…」

ヒュプノスは全てを言い終えたのか、沈黙するのだった。

「姉上は何を悲しんでいるのでしょうか?姉上は私を見てはいつも悲しげな顔をなさって泣いてしまうのよ。だから、貴方は笑って…。愛しい人に似ている貴方が笑えば、きっと姉上も笑ってくれるはずよ…」

愛しい人に似ている貴方、か…。

私の顔を見ても、タナトスはただ微笑むだけだった。

タナトスの中では私は死んだものとして完全にいなくなってしまっている。

そして、私が知ってるタナトスも…。

『今まで出会っていた男は皆俺よりも弱くて相手にしなかったが，貴様が俺の初めて男だ。だから，宜しく頼む』

……。

『いや，殺し合いでもかまわないかもしれないな。何しろ貴様は最強なのだからな。俺が殺す気でかかっても平気だろ?』

……。

『ロスト，俺は貴様を失いたくない…』

……。

『やはり旦那様は優しいな。だから，柄にも無く縋りたくなってしまう…』

……。

「泣いているの?愛しい人に似ている貴方…」

私の目から涙が零れていた。

もう私の知ってるタナトスはいない…。

私を旦那様と言って、口付けをしてくれないのだ…。

タナトスは泣いている私に手を伸ばして、零れている涙を拭ってくる。

「泣かないで、愛しい人に似ている貴方。私も何だか悲しくなってしまうわ…」

私の涙を拭いながらタナトスも涙を流している。

「何故かしら?貴方を見ていると私までも悲しくなってしまう。こんなことは初めて…私は…」

タナトスは泣いている自分に戸惑っていた。

「ごめん…さい…泣いたらいけないのに…笑わないと…いけないのに…そうしないと…エロス様が…」

エロス様…。

私は顔を上げ、細くなったタナトスの肩を掴む。

「私はロストだ！エロスではない！タナトス！頼む…私の名を呼んでくれ…」

「ロスト…。ロストは…旦那様は…確か…死んだはず…。私の愛しい人…ロスト…ロスト…ロスト…」

タナトスは私の名を呟き続けてる！

もしかすれば、元のタナトスに戻れるかもれない！

「そうだ！私がロストだ！お前の旦那様のロストだ！」

「愛しい人に似ている貴方…優しいのですね。旦那様の代わりになろうとして…私を慰めてくれるのですか？」

タナトスは涙を拭い、悲しいほどに目映い笑顔を私に投げかけてくる。

「タナトスっ…うぐっ…ううっ…」

私はタナトスに抱きつき、肩を振るわせた。

「済まない、本当に済まない！ロスト殿…うぅ…」

ヒュプノスの嗚咽の混じった声がしてくる。

「笑ってください。笑えば幸せが訪れてきますよ…」

私の知っているタナトスはもう二度と…。

「ううっ…うあああああっ…あああああああああっ！」

タナトスの慰める声と背中をさするか細い手の感触が私の涙を止めどなく流させていく。

私はタナトスの胸の中で声を上げて泣き叫ぶのだった。

……。

……。

……。

……。

……。

……。

……。

…。

冷たい風が悲しいほどに白百合の花びらを舞い散らせていく中、慟哭が何時までも響き渡っていく。

第８０話：ヒュプノス

私はタナトスの胸の中で力の限り泣き叫んだ後、ヒュプノスと疑似世界の白百合が咲き誇る庭園を散策していた。

タナトスは私を抱いたまま眠り、疑似世界にある古城の寝室に寝かせた。

彼女の身体は私よりも体格が勝るはずなのに驚くほどに軽く、思わず落としそうになった程だった。

まるで羽布団を運んでいるみたいな感覚。

彼女はまさに深窓の令嬢とも言える淑女となり、戦場を駆け抜けていた女傑であった面影は欠片も無くなってしまったのだ。

猛々しかったタナトスの牙を切り取り、飼い殺しにした憎き敵エロス。

愛した女性を奪われたことで殺したいほどに憎いはずなのにそれでも踏ん切りがつけない。

なぜならば、私はエロスを恐れてしまっているのだ。

四肢がもがれ、脳死してしまったグレイブ殿。

死んでいった仲間達。

彼らの壮絶な最後を聞き、臆病風に吹かれてしまった私。

ヒュプノスに力を貸すと豪語したことを後悔している自分。

もし、ヒュプノスに自分が尻込みしていることを悟られれば、さぞ失望することだろう。

私は最強と呼ばれる力を持っているにもかかわらず、心が情けないほどに弱くて脆い。

もう私は酒池肉林の夢を抱くことが出来ないかもしれない。

彼女達を守ろうとする気概を持つことが出来なくなっている。

「どうしたのだ？ロスト殿」

隣で歩いてたヒュプノスが心配げに私の顔を伺ってくる。

彼女が跪いたときに優越感を感じてしまった自分が恥ずかしくなってくる。

タナトスもセシリア様も私の名ではなく、エロスの名を言ってきた。

私の中にエロスと同じ残虐な心が巣くっているのでは無いかと思ってしまう。

「ロスト殿、覚えているか？私と初めて出会ったあの日のことを…」

不意にヒュプノスが話しかけてくる。

ヒュプノスと初めて出会ったときのことか…。

『よく来たな、ロスト殿』

それが私に投げかけたヒュプノスの最初の言葉だった。

出自を偽っていた私をエルが代わりに必死に弁明していたのだったな…。

そして、ヒュプノスの挑発に乗り、私は力を振るってしまったのだ。

「あの時、貴公を初めて見たときには失望していた。待ち望んでいた男は女に庇われ、臆病風を吹かせていた腰抜けだと…」

「そうか…」

その評価は間違ってはいない。

実際、私は臆病者だった。

いや、今でも臆病者だ。

「だが、貴公は見事に力を示し、私を感嘆させていった。そして、私が研究を重ねて育て上げた狂戦士等も撃ち破り、果てにタナトスに対抗して造り上げたケールすらも打ち負かした」

ヒュプノスは恍惚とした表情で言い、私の顔を見つめた。

「その時、私は確信した。彼ならば、エロスを打ち倒せるのではないかと…。だが、貴公は私の非人道的行為に怒りを覚え、私の思惑とは裏腹に遠ざかっていった。今でも収容所から立ち去るときに私

に見せた貴公の冷たい目を昨日のことのように思い出せる…」

……。

『ヒュプノス。私は貴様の思い通りにはならない。覚えとけ…』

確か、私はそう言ってヒュプノスに啖呵を切って立ち去ったのだった。

あの時はケールを抱きかかえていたから無我夢中だったことを思い出す。

思えば、あの頃からアーテが頻繁に夢の中で現れたりするようになったのだ。

「貴公の冷たい目がエロスの目と重なり、恐れてしまったのだ。貴公もエロスと同じように私を蹂躙するのではないかと…」

ヒュプノスもまた私をエロスと重ね合わせているのか…。

「だから、私を従えるためにエルを人質に取り、あまつさえ洗脳までしたというのか？私の方こそ貴様に蹂躙されそうな思いだったのだがな…」

私は思わず喧嘩腰に言い返してしまう。

我ながら何て子供じみているのか…。

「本当に申し訳ない。私もまたエロスと同罪だ。貴公から大切な者を奪ってしまったのだからな。この償いは一生かけてもするつもり

だ」

「ならば、今すぐにでも償ってくれ」

私はヒュプノスの胸を鷲づかみにする。

「ろ、ロスト殿？」

ヒュプノスが唖然とした表情で私を見ている。

その目に映るのは恐怖なのか？

今まで傲慢だった彼女を怯えさせる快感が身体中に巡ってくる。

「貴様の身体で償え…」

私はどうしてしまったのか？

弱々しく謝罪してくるヒュプノスをどうしようもなく壊したくなってしまった。

壊したい…。

壊し…。

駄目だ！

ヒュプノスの胸から手を離し、後ずさった。

「すまない！私はいったい何を…」

ヒュプノスの目に私はどのように映ってしまっているのだろうか？

エロスの姿と重なってしまったのだろうか？

「償わなくてもいい。今のは忘れてくれ」

弱腰になっている私に償う必要は無いのだ。

エロスを恐れてしまっている弱い私など…。

私はヒュプノスの前から逃げるように立ち去ろうとする。

「待ってくれ！」

立ち去ろうとする私の手を掴むヒュプノス。

「私の身体は既に貴公のものだ。遠慮する必要は無い」

「ヒュプノス…」

ヒュプノスは私の手を自分の胸へと導く。

彼女の潤んだ瞳に私の驚いている顔が映る。

「私は貴公ならば構わない…」

「正気なのか…」

ヒュプノスの胸の感触に脳髄が痺れていく。

これは抗いがたい甘美な感触だ。

エロスのことで悩んでいた私が陳腐の思えてくるような極上の柔らかさ…。

小難しい理屈など性欲の前ではどうしようもなく無意味に思えてくる。

哀しみも苦しみも性欲の前ではただの記憶でしかないのか…。

「私は正気だ。貴公に許されるのであれば、何だってやる。いや、許されるものではないな。罪は永遠に背負うものだ」

罪は永遠に背負うもの。

その言葉は何故か私の頭に重くのし掛かってくる。

私もまた多くの者を殺してきたのだ。

ヒュプノスは私の頬に両手を添えて見つめてくる。

「貴公の目に映る者はヴァルキリア帝国第一皇女でも帝国軍師でも化学部門統括でもない。自分を戒めることで罪の重みから目を逸らそうとしている浅はかで愚かな、ただの女。ただのヒュプノスだ」

私の唇にヒュプノスの青色の唇が重なり、抱きすくめられていく。

「んっ」

……。

彼女の胸の柔らかさと唇の熱さが私の思考を溶かそうとしている。

仲間を失った哀しみもエロスに対する憎しみも…。

そして、ヒュプノスの狂おしいほどの激情が身体全体に伝ってきた。

彼女の身体はエロスに壊され、か細くなってしまったタナトスよりも逞しく、力強い。

だが、微かに震えている肩を見て、彼女もまたか弱い女でしかないことを知ってしまう。

私を抱き締めている彼女は紛れもなくただの女になっていた。

「ふぅ…私に償わせてくれ。いや、違う。私を抱いて欲しい」

青色の唇から銀色の糸を艶やかに伸ばしながら私に抱いて欲しいと哀願するヒュプノス。

男なら彼女の誘いを受けるのはごく自然な流れとなるだろう。

私は当然のように彼女の身体を引き寄せていく。

「これは自己満足なのか？」

「そうかもしれない。違うかもしれない。だが、貴公に抱いて貰いたい思いは確かだ」

ヒュプノスは鎧のように纏ってた軍服を脱ぎ捨て生まれ立ての子供のように身体を晒す。

白百合が舞い散る中で美しくも滑らかな体躯を晒す姿は幻想的で一枚の絵に認めたいほどの光景だった。

彼女は私を天国へと誘う手を差し伸べてる。

私は彼女の手を掴み天国へと誘われる。

ヒュプノスは私を抱き締めるようにして、白百合の中へと倒れ込む。

彼女のしなやかで鍛え上げられた身体は何処かタナトスを思い出してしまう。

『旦那様…』

もう二度と呼ぶことのない呼称が幻聴となって苛むように響く。

「どうしたのだ？貴公…」

ヒュプノスは私の顔を覗き込んできた

彼女の熱い吐息が私に頬をくすぐってくる。

「いや、何でも…」

「やはり、あの男に汚されてしまった身体は嫌なのか？」

あの男。

『もっとも私の身体は既にあの男に汚されてしまっているがな…』

ヒュプノスもタナトスと同様にエロスに汚されてしまってるということか…。

「それは別に気にしていない。お前こそ気にならないのか？」

「何を気にするというのだ？」

ヒュプノスの瞳に私の顔が映っている。

「私はエロスと瓜二つなのだろう」

セシリア様もタナトスも私の顔を見て、エロスの名を叫んでいた。

エロスの名を聞く度に私の中にも悪魔が潜んでいるのかと恐れてしまう。

その内、私もまたエロスと同じようになってしまうのではないかと考えてしまうのだ。

「貴公はエロスとは違う。なぜならば貴公は私に中でこれほどまでに弱く震えているのだからな…」

ヒュプノスは私を抱き締めて、耳元で囁いてくる。

「貴公は貴公でしかない。他の誰でもないのだ。私がヒュプノスでしかないように…」

私はヒュプノスの言葉に鈍器を打たれたかのような衝撃を受ける。

ヒュプノスは気づいていたのだ。

私がタナトスと重ねて、ヒュプノスを見ていたことに…。

「済まない、私は…むぐっ」

「ちゅ…んっ…ちゅう」

私の謝罪の言葉を青色の唇が閉ざしていく。

「ちゅぱ…謝らなくてもいい…」

情事の最中に他の女を重ねてしまったにもかかわらずヒュプノスを嬉しそうに微笑んでいた。

「私は嬉しいのだ。タナトスが惚れ込んだ男に抱いて貰えるのだからな。だから気にするな」

ヒュプノスは私の腰に逞しい脚を回し、男の証を自分の女の中へと招き入れようとする。

「貴公の女にしてくれ。全てを忘れるほどに強く、激しく、壊れてしまう程に…」

私はヒュプノスに誘われるままに男の証が呑み込まれていく。

「はあああっ！これが貴公の…男なのか…」

ヒュプノスの女が私を締め付けていく。

私の欲望がすぐにでも決壊するのでは無いかと思う程に強く…。

女としての理性が崩壊したのか、蛇が獲物を締め付けるように激しく私の身体を抱き締めてくる。

今の私はもはやヒュプノスの餌と成り果てている。

彼女の求めにひたすら応じるだけの囚われの獲物の如く。

寄生され、養分を吸い取られる宿主のように私はヒュプノスから搾り取られていく。

「はぁはぁ！貴公の全てが欲しい！もっと…もっと…激しく…ちゅううううっ！」

彼女の唇が私の唇を通して身体の中の全てを飲み干すかのように激しく吸い尽くす。

さらに獲物に自分の匂いをつけて所有物であることを示すように身体中に彼女の唇の跡を刻みつけられていく。

……。

私はヒュプノスに食べられている。

ヒュプノスの血肉となって私は永遠に生き続けることになるのだ。

「ちゅぱ…ロスト…殿！ロスト！あああああっ！」

私の欲望が彼女の中で浄化されていく。

喜びも悲しみも何もかも全てが彼女の中へと還ろうとしている。

「来て！来て！私の中に！ロスト！」

「ヒュプノス！ぐっ…うおおおおおおおおおおっ！」

私は断末魔の悲鳴を上げて、彼女の中で果てていった。

……。

……。

……。

……。

……。

……。

「多分、この戦争に勝っても負けても、この世界は滅ぶだろう」

私はヒュプノスの胸を枕に彼女の身体をベットにするように横たわっていた。

彼女は自分の胸に埋めている私の頭を撫でながら不吉な予言を零す。

「それほどまでに戦いは熾烈を極めるのか？」

私の問いに彼女は頭を抱き寄せ、口付けで応える。

彼女の唇が私の左頬を剥ぎ取るかのように吸い付いてくる。

これは私の外れの意図を示す戒めの口付け。

「ちゅぱ…この世界は余りにも資源が枯渇し過ぎている。もはや生物が育むには世界は年老いているのだ…」

彼女は腫れてしまった私の左頬を親が子を労るように舐めていく。

「世界が死にかけているというのか？」

私の答えに今度は右頬に唇を押しつけてくる。

甘噛みにも似た頬を包むような柔らかい唇の感触。

これは正答を示すご褒美の接吻。

「ちゅぱ…その通りだ。世界は死にかけている。度重なる戦争で疲弊し、力尽きようとしている。貴公も見たはずだ。緑が無い、生命の息吹を感じさせない町並みを…」

モイラと旅をする際に目にしてきた荒廃とした地平線。

死に絶えた物言わぬ町。

草木の実らない死に絶えた大地。

沈黙した世界。

世界は確かに死にかけている。

「タナトスのために作ったこの疑似世界はいわば戦争が起こり、世界が滅び去った時のより所のためでもあるのだ」

だからこそ、現実世界に忠実に造り上げたというのか…。

この疑似世界はいわば人類の存亡を賭けた最後の楽園。

ヒュプノスの叡智を結集させて造り上げられた最後の希望ということなのだな…。

舞い散る白百合の花びらをヒュプノスは手に取っていく。

「世界はエロスという癌に侵されている。奴は世界の全てを食い荒らし、死に至らせた後にまた新たな世界に旅立つつもりだと聞いたことがある」

エロスはまさに世界を食い荒らす寄生虫だ。

宿主を殺しては新たな宿主に探し出し、寄生してはまた殺していく。

ガイアは言っていた。

エロスは唯一の存在にして、全ての世界を渡り歩く超越者であると。

「エロスからは様々な知識を得ることが出来た。この世には過去、現在、未来に至る世界の他に幾つもの可能性を示す世界が無限にも及ぶ数だけ存在するのだと…」

「平行世界と呼ばれているのだろう」

私の頭を挟んでいる乳房が震える。

何故、私がその答えに辿り着いたのかを怪訝に思ったのだろう。

やがて、彼女は私の顔を取り、唇を何度も押しつけていく。

「ちゅぱ…ちゅ…ちゅぷちゅちゅ」

私の顔は彼女の唾液に浸され、ふやけていくそうになる。

「ちゅ…貴公ならば知ってもおかしくないということか…。エクリアから貴公が過去の世界から来たと聞き、最初は半信半疑だったが、今の答えで確信した」

ヒュプノスは私の鼻を甘く歯を立て、唇で優しく包み込むように挟んでいく。

「れろっ…貴公もまた世界を越える力を得た超越者なのだな。その…エロスと同じく…」

最後の言葉は私がエロスのことを気にしているのを察した故なのか、遠慮深げに口にしていた。

本当はガイアの手引きによって世界を越えてきたのだが、敢えて言わなかった。

なぜならば、エロスが率いてる軍勢の中にはかつてのガイアの衛兵や弟子も存在しているからだ。

万が一、戦場でエロスの元弟子に鉢合わせしたときにガイアの名前を出されば、混乱を招く恐れがある。

「過去から来た者として貴公に聞きたいことがある」

彼女は愛撫していた唇を私の顔から離し、問いかける。

「貴公は何時から来たのだ?」

私はヒュプノスの顔を見据える。

彼女の問いかけの裏にあるものを探ろうとしたが、分からない。

「ヴァルキリアの使者としてアースガルズに滞在している時だ」

「そうか…。ならば、ビフレストとヴァルキリアの二国から挟撃される手前の当たりか…」

ヒュプノスは思案するかのように呟く。

アースガルズを母体とした同盟軍が結成され、ヴァルキリアとビフレストに二大強国と渡り合った第二次聖戦の話はモイラから聞いていた。

同盟軍はビフレストを撃退し、ヴァルキリアを追い詰めていった。

だが、後一歩の所で巨大な黒い化け物によって逆に追い詰められ、滅ぼされてしまったのだ。

その時に私は黒い化け物との戦いで戦死してしまったという。

……。

黒い化け物とはいったい何者なのか？

ヴァルキリアの中枢にいたヒュプノスならば何か知っているかもしれない。

「同盟軍は黒い化け物にやられたことはモイラから聞いた。そして、私がそれによって殺されたことも…。黒い化け物とはいったい何者だ？」

冷静であるはずの彼女の顔が引きつる。

私は禁忌に触れる質問を投げかけてしまったようだ。

「あれは…エロスが言うにタルタロスと呼ばれる最強の上級神にして邪神。かつて原初神の座の賭けた争いに破れて、世界の果てに封じられた奈落の神だ」

タルタロス。

世界の果てに封印された最強の上級神にして邪神。

そして、原初神の座を賭けた争いに敗れた奈落の神。

『だったら、一番は誰かって？それは聞かない方がいいよ。世の中には知らない方が良いこともあるから…』

ガイアが聞かない方がいいと言っていた一番目に苦戦した相手。

私を殺した神のことだったというのか…。

「世界の果て、または根元世界と呼ばれる所に封印されていた邪神タルタロスは当然エロスの手によって封印が解かれてしまった。そして、タルタロスはエロスからある者を差し出す条件で同盟を結んだと言っていた」

「ある者とはいったい誰だ？」

神の生贄みたいな者なのだろうか？

「依り代だ。自分に適合する神降ろしの術者。タルタロスは世界の事象そのもの、肉体を持たない神だった。それ故に原初神の争いに敗れたのだと言っていた。だから、依り代を得ることで原初神以上の力を手に入れるよう条件を提示したらしい。そして、奴は依り代を手に入れ、同盟軍を滅ぼした…」

上級神の依り代、すなわち神降ろしの術者。

だが、クロエの話では一般に人が呼び寄せることが出来る神は中級神までだと言っていた。

ガイアと争うほどの強大な神を受け容れる力を持った者は存在しな

いはずだ。

「一般に人が上級神を呼び寄せることは不可能のはずだ。だが、神の子と呼ばれる者ならば話は別だ」

神の子。

初めて聞く言葉だった。

「エロス曰く、神の子とはすなわち神の血を受け継ぎし者、あるいは神の祝福を受けし者の総称だ」

ヒュプノスは私の頭を再び自分の胸に抱き寄せてくる。

「私と貴公がそうなのだ。私達だけではない。戦死したモーモス、オイジュス、クロエ、ケールもまた然り。タナトスもエクリアも、副頭目のモイラもまた神の子だ」

……。

「そして、囚われたエリアルト将軍、アイリウス将軍、パラディス ム頭領レテシア、エルとアビスもまた神の子だ。そして、彼女達の中から依り代が選ばれたのだと考えられる…」

かつてアーテは言っていた。

ケールとタナトス、モーモス、そして、オイジュスは自分の手札だと。

彼女達は自分の血肉によって生まれた存在だと言った。

そして、彼女達は神の子としてエロスに利用されてしまっている。

エロスに囚われてしまったエリー、アイリ、レテシア、エル、アビス。

彼女達の中からタルタロスが自分の適合者を選んでいる可能性がある。

私は彼女達の誰かに殺されてしまったということになる。

だから、ガイアは私に知らない方がいいと言った訳なのか…。

「原初神に匹敵する力を持った邪神タルタロス。奴こそがこれから引き起こす第三次聖戦においての最大最強の敵になることは確実だ」

私を殺した奴を打ち倒さない限り、勝利はありえないということなのか…。

そして、タルタロスは捉えている五人の中の誰かを依り代にしている。

タルタロスと戦うことは選ばれた彼女を殺すことを意味する。

……。

もしかすると私が殺されたのは依り代になった彼女を殺すことを躊躇ったからかもしれない。

だとしたら私が躊躇ってしまったから同盟軍は負けたということにも繋がってしまう。

私は果たして依り代ごとタルタロスを倒すことが出来るのか？

これぱかりは答が導き出されない。

だが、答えを導き出さねば、第二次聖戦の二の舞になってしまうのは確実だ。

ただでさえエロスに対して恐怖を抱いているというのにこの体たらくでは何一つ成し遂げることが出来ない。

「第三次聖戦は援軍を各地に散らばる反乱軍の同志が結集したときに発動させる。ロスト殿、その時までに覚悟を決めて欲しい。戦争は犠牲が付き物だからな…」

戦争に犠牲は付き物。

勝利を得る為には時として冷徹に斬り捨てなければならない時がある。

私はその覚悟を受け容れなければならないのだ。

そうでなければ、犠牲になった仲間達に報いることが出来ないのだから…。

……。

「それにしても貴公は不思議な縁を持っているようだ」

押し黙った私を気遣ってか、ヒュプノスは別の話題を持ちかけてく

る。

「何しろ関係を持った女性全てが神の子なのだからな。それは偶然なのか、誰かに仕組まれたものなのかは分からないが、貴公が神の子を引き寄せていることは確かだ…」

確かに偶然にしては出来すぎている。

私が出会った女性の全てが神の子だとは…。

「神の子とは元来女性だと言われている。だが、貴公は男だ。そして、どの神の子よりも強大ときている…ちゅ」

ヒュプノスは自分の胸に埋めている私の頭に口づけてくる。

「貴公と私もまた神の子として惹かれあっているのだろうか?それともロストとヒュプノス、ただの男と女として交わっているのか…」

愛欲によって結ばれているのか、それとも運命に結びつけれているのか…。

前者であることを切に願いたい。

私の想いの何もかもが運命によって定められているとしたら、もはや人を愛する意味を失ってしまいそうだ。

この想いは私の中から見出された確かのものであるはずだと思いたい。

ヒュプノスの胸の中へと私は擦る付けるようにして埋めていく。

この柔らかさも暖かさも全て仕組まれているものだとは思いたくない。

「ロスト…」

不意にヒュプノスが自分の胸に埋まっている私の頭を上げさせて正面から見据えてくる。

彼女の瞳は私の全てを見透かすように澄んでいた。

「例え、神の子として巡り会う運命だったとしても惹かれ合うのは本人の意思によるものだ。私はロストを欲したいと思っている。これは紛れもなく私の中にある確かな意志だ。貴公は違うのか？私とこうして混じり合っているのは運命の導きだと思っているのか？」

運命の導きなのか。

人の意志によるものなのか

彼女は問いかけている。

「違う。私は私に意志でお前を欲している。運命の導きでも、仕組まれたものでもない」

私の答えは既に決まっていた。

切っ掛けは運命の導きかもしれない。

だが、そこから先は人の意志によるものだ。

私は自分の意志で彼女達と寄り添っていったのだ。

私の答えにヒュプノスは微笑み、魅惑的な青色の唇を私の顔に余すことなく押しつけることで応える。

「ちゅぱちゅぱちゅちゅうううっ！」

彼女の情熱的な接吻の嵐に私の顔が彼女の色に染まっていく。

「ちゅぱ…ならば、私と貴公の想いは本物だ」

そして、ヒュプノスは私を二度と話さないと言わんばかりに足と手を絡めていく。

私は再びヒュプノスに囚われた獲物となってしまう。

「私は貴公を愛している。ロストというただの男を愛してる…」

「私はお前を愛してる。ヒュプノスというただの女を愛してる…」

二人は解け合うようにして一つになる。

私は持てる全ての力を持ってヒュプノスの全てを蹂躙しようと貪ろうとしていく。

だが、そんな私を嘲笑うかのようにヒュプノスは容易く受け止めてしまう。

降り掛かる火の粉を振り払うように容赦なくヒュプノスは快楽の渦

で私を呑み込んでいく。

やはり床の上では私の力は赤子の手を捻るが如しなのだろう。

私はひたすら彼女の愛撫にただただ堪え忍ぶのみである。

それでも私の男としての矜持が許さないのか、時折無駄な抵抗を試みていく。

そして、彼女は私に耐え難い快楽を与えて、完膚無きまでに返り討ちにするのだ。

……。

私はヒュプノスに再び食べられ、果てていくのだった。

……。

……。

……。

……。

……。

……。

…。

床ではいつの間にか主従が逆転されてしまった。

見事に下克上をされてしまったのだ。

それでも私は良かれと思ってしまう。

ヒュプノスとの情事が私に僅かでも恐れや不安を忘れさせてくれたのだから…。

心安らかなる夢は儚いものだ。

だからこそ、縋りたくなってしまう。

例え、その先に絶望が待ち受けているにしても…。

……。

とりあえず…。

燃え尽きたな…。

2010

第８０話：ヒュプノス（後書き）

五日連続更新しました。

今後は二日か三日に一回に更新しようと思います。

第８１話：気晴らし

私はヒュプノスの屋敷から出て、顔を布巾で拭きながら町を散策していた。

顔中にこびり付いている口紅の跡がなかなか落ちない。

ヒュプノスの熱心な奉仕のお陰で沈みかけていた気分が回復したような気になった。

その代わり、身体的にはかなり疲労感を得ることになってしまったが…。

ヒュプノスの奉仕はタナトスとは違う力強さがあり、何とも言えない快感を感じさせて貰えた。

タナトスとは違う、か…。

人が変わったかのようにお淑やかになってしまったタナトス。

あの背骨が折れるほどの強烈な抱擁をされなくなると思えば、寿命が延びたと狂喜乱舞するはずだが…。

やはり、寂しいものだ…。

それでも心の何処かでまだ余裕があるのはこの世界が私にとってまだ訪れていない未来の世界なのだからだろう。

この世界では例え、どれだけ犠牲者が増えようとも私にとってはま

だ未来の出来事だ。

だからこそ、まだ希望があるのではないかと思ってしまう。

戦死してしまったオイジュス、モーモス、クロエ、ケール。

四肢を失い、脳死してしまったグレイブ。

正気を失ってしまったセシリア。

そして、感情を壊してしまったタナトス。

彼女達は私の現在の世界ではまだ無事なのだ。

……。

そういえば、ガイアは言っていた。

この世界で希望を残すことが出来なければ、エロスの元に辿り着くことは出来ないと。

彼女の言う希望とはいったい何のだろうか？

……。

分からん。

考えても仕方ないことは考えない主義だ。

とりあえず、これからどうするかを考えねばならない。

ヒュプノスには反乱軍に強力すると言ったが、未だに迷ってしまっている。

エロスとは戦いたくない。

奴のことが恐い。

だが、ここで逃げても何も変わらない。

奴は全次元全世界を渡り行くことが出来る超越者だ。

例え、この未来の世界から逃れたとしても、現在の世界での脅威が待っている。

どの道、奴との戦いは避けられない。

奴にとっても私はもう一つの可能性であり、見逃せない存在であるはずだからだ。

もし、奴と戦うとしたらガイアから引き抜いた弟子や精鋭部隊との対決も避けられないだろう。

だが、ガイアの関係者ならば奴らもエロスと同様に全次元を越える超越者だと考えられる。

ならば、この未来の世界で奴らを倒せば、エロス陣営の戦力低下と共に現在の世界での戦争が遙かに楽になるかもしれない。

それを踏まえて考えれば、これは好機だと言ってもいいだろう。

2014

この未来の世界ではいくら犠牲を払っても現在の世界では何の影響も無い。

その中でエロスの取り巻きを出来るだけ倒せば、現在の世界での犠牲は最小限に押さえれることが出来るかもしれない。

……。

我ながら何て最低な発想なのだろうか…。

自分の思惑のために今を生きる者達を踏みにじっても構わない考えはまさにエロスそのものだ。

私も一歩間違えれば、エロスのように墜ちていく可能性は十二分に有り得る。

奴と同じ道を歩むことはロストの存在そのものの敗北を意味してしまう。

それは私が今まで歩んできた道のりを全て否定することにもなる。

嫌なことや痛いことから逃げるのは構わない。

恐いことや辛いことを避けるのは別にいい。

だが、私の存在そのものを無為にされてしまうのは我慢ならない。

それでは私の生きる意味が全て無意味になってしまうからだ。

軍備が整えられるまで暫くまだかかるとヒュプノスは言ってた。

その時まで、もう少し時間を置いて改めて答えを出していこう。

私のこれからの人生に関わることなのだ。

焦って答を無理矢理導こうとしては良い結果を出すことは出来ないだろう。

冷静になって今の立場を考えていくとしよう。

……。

しばらく歩いていると私の首に力強い腕が周り、肩に柔らかいものが押し当てられる感触を感じてくる。

この感触は…。

赤い髪を靡かせて、艶のある赤紫の唇から八重歯を見せて笑う絶世の美女。

「メイか」

「何、一人寂しく散歩してるんだよ。暇だったらあたいに付き合えよ」

メイは好戦的な口調で私を誘おうとしてる。

「何に付き合うのだ？」

「喧嘩に決まってるだろ?今度こそお前にぶちのめしてやるよ」

私の頬に拳をぐりぐりと押しつけながら挑戦を申し立てていくメイ。

喧嘩番長足る私に喧嘩の挑戦だとは…。

「面白い。受けて立つぞ」

殺し合いならばともかく、ただの殴り合いならば大いに歓迎だ。

「そうこなくちゃあな。アレク姉さんに疑似世界を作ってもらおう。行こう」

メイは嬉しげに私の腕に抱きついていく。

純粋な喧嘩をして荒んだ気分を解消させるか。

……。

……。

…。

アレクに疑似世界を作ってもらい、その中で私とメイは思い切り殴り合った。

命を賭けない戦い、すなわち模擬戦や大会試合のものであれば私はとことんまで調子付いていける。

その証にあれほど苦戦していたメイを一方的に叩きのめすことが出

来た。

メイは息を切らせて横たわり、私は彼女を見下ろす形となっている。

「もしかしてあの時の戦いは手加減していたかよ。あたいがこうも簡単に叩きのめされるなんて…」

彼女は悔しそうに私を上目遣いで睨んできていた。

「喧嘩ならば私は負けない」

「そういう問題かよ。あたいはこれでも殺すつもりで全力でやったのに…。反則過ぎる…」

メイは自然に物騒なことを言っている。

殺すつもりで全力でやったのか？

「お前は喧嘩と名がつけば無敵なんだな。この調子でやれば、ガイア様と同様に容易くあたい達を制覇できたのによ…」

「メイは猪突猛進だから不覚を取るのです」

私の隣に立つのは暑苦しい青色の軍服を隙が無く着こなしている青い髪を靡かせる冷徹なる美女ティー。

相変わらずの毒舌女だ。

「しかし、可愛い妹がこうも呆気なくやられてしまうのは我慢なりませんね。ロスト様、一つここは貴方のお得意の喧嘩をわたくしと

してみませんか？」

「喧嘩ならば喜んで買うぞ」

私の土俵で勝負を仕掛けてくるとは良い度胸だ。

いつも私を殺すと脅してくる美女を叩きのめすのもまた一興だろう。

「言いましたね。狡猾で不敵な私に貴方の喧嘩が露ほどに通じないことを思い知らせてあげますよ」

ティーは伝家の宝刀たる巨大槍ヴィマーナを手に取り、油断無く構えてくる。

私はそれに対し、素手で迎え撃とうする。

喧嘩は素手で行うものだ。

例え、相手が如何なるものであろうとな…。

「では、貴方を殺します！」

私とティーは同時に駆けり、互いの刃を繰り出していく。

……。

……。

…。

地面に横たわっている美女がもう一人増えている。

「ぐっ！何故ですか！私は思い込みが激しい馬鹿力野郎に負けてしまったというのですか！」

ティーは憎悪の籠もった瞳で私を射抜いてくる。

並の人間ならば、心臓麻痺しかねないほどの鋭い眼光だ。

「この恨み晴らさでおくべきか！次こそは絶対に、絶対に殺します！覚えておきなさい！ロスト！」

主従関係のはずが何故か仇敵と復讐者の関係へと悪化してしまっている。

それに呼び捨てにされてしまった。

「メイもティーも老獪さに欠けておるな」

妹二人の醜態を見て苦笑を浮かべているのは三人の中で唯一マントを羽織っている老成とした美女。

反乱軍最精鋭部隊エリニュス隊隊長で良識派にして頭脳派であるアレクだった。

相手の油断をついて戦う私としてはやりづらい相手だ。

「どれ、儂が本当の戦い方というものを見せてやろう。そういうことでロスト殿、喧嘩を売ろう」

「買わせて貰う」

アレクは直接的な戦闘よりも遠距離からの後方支援が担当の戦女神である。

私にとって苦手な戦法を得意とする彼女だが、喧嘩ならば話は別だ。

大いに買ってやろうではないか。

「さて、ロスト殿。そなたに年季の違いというものを身体で分からせてやろう」

アレクは男を誘うように舌なめずりしながら、空間を圧縮させた二本の剣を携えてくる。

喧嘩を売られてしまっているのに男の証が元気になりかけてしまった…。

これが老練とした美女の色香だというものなのか…。

やはり三人の中で最も油断ならぬ美女だな…。

だが、喧嘩なら負けはせぬぞ！

「では、参るぞ、ロスト殿！」

アレクの周囲の空間が歪み、不可視の刃が四方八方から私を切り刻もうと攻めってくる。

私は二本の拳を振るい、駆け抜けていく。

……。

……。

…。

そして、見事に姉妹仲良く地面に寝そべる光景を完成させた。

「うぅ…ロスト殿。そなたは鬼か。年寄りをもう少し労ってもよいのではないか…」

「済まない。私は喧嘩では老若男女差別しない主義なのだ」

喧嘩ならば女子供とて全力で挑んで殴り倒すのが私の矜持なのだ。

「あたい達、これでもガイア様からは四高弟に勝るとも劣らない実力を持っていると褒められたのに…」

「仕方ないです。ロスト様が規格外の糞力野郎なのですから…」

メイとティーは悔しげに呟いている。

「確かに悔しいが、身体を張った甲斐は有ったというものだ。ロスト殿、多少の気晴らしにはなったか？」

アレクは意味ありげな目で私を見つめてくる。

……。

なるほど、気晴らしということか…。

彼女達は落ち込んでいる私を元気づける意味で喧嘩を売ってきた訳だ…。

「済まない。いや、ありがとう。確かに良い気晴らしになった」

おそらくヒュプノスがアレク達に口添えをしたのだろう。

「屑野郎な貴方でも私達の大切な主ですからね。心の奥底から不本意ですが、当然のことです」

「せっかく見つけた喧嘩相手が落ち込んでいたら、あたいも調子でないからな。まあ、そういうこと」

メイとティーは顔を赤らめながらも彼女達なりに私を思ってくれてる。

……。

アレク達は未来の世界で出会った者達だ。

だが、この世界で得ることが出来た掛け替えの無い大切な者。

未来も現在も関係無いのだ。

彼女達と確かに今を共に生きている。

私はそれを忘れてはならない。

……。

エロス。

やはり私は貴様とは違う。

貴様には性欲を満たす者がいても心までを満たす者はいないだろう。

私は貴様が築き上げた楽園を否定する。

……

だが、それでも恐い。

『しかし、貴方様には過酷な運命が待ち受けています。この世界を歪んだ未来へと導く存在との果てしなく、苦しみと哀しみに満ちた戦いが…』

オイジュスが言っていた予言を思い出す。

エロスと本格的に戦えば、多くの犠牲を生み出すことになるだろう。

「今度こそ貴方を殺して私のものにしてみせますからね！」

「ティー姉さん、殺したら喧嘩相手がいなくなるから殺すのではなく、せめて半殺しにしようよ」

彼女達もまた犠牲になっていくのだろう。

そして、ヒュプノスの疑似世界に並べられた墓標に名を刻まれてい

くのだ。

……。

「どうした？ロスト殿。また落ち込んでいるようだが…」

アレクが私の顔を心配げに顔を伺っている。

メイとティーも立ち上がり、不安げに見ていた。

「いや、何でもない。良い気晴らしになった。私はこのまま散歩に…」

不意に背中から感じた感触で言葉が途切れてしまう。

「ロスト殿、そなたはやはり戦い以外ではか弱い男の子に過ぎないのだな」

アレクはいつの間にか背後から私を抱き締めていた。

「そなたに喧嘩では負けてしまった。だが、こちらでは儂等の方が強者であると自負しておるぞ…れろぉ」

「うっ！」

私のうなじにアレクの熱い舌が這っていき、男の証が鷲づかみされてしまう。

「んっ…ちゅぱ…ほう、これはティーのヴィマーナに勝るとも劣らぬ業物だ。これほどの凶悪な業物で儂を貫いたとはそなたはとんだ

鬼畜野郎だな」

「くっ！いったい何のつもりだ？」

これからやることが分かっていても敢えて質問してしまうものだ。

アレクは分かっているだろう、と言いたげに私のヴィマーナを撫で回していく。

「そなたとの戦いでいささか疲れてしまった。分かるだろう…ちゅ」

私の首筋をアレクの首筋が吸い付き、脱力感を感じていく。

「喧嘩を楽しんだだろ？代金を払ってもらうんだよ…ちゅぷ」

メイは左腕を自分の豊満な胸に埋め込み、左耳を甘噛みしてくる。

「ただで楽しもうとするとは厚かましいにも程がありますからね。代償を支払ってください。踏み倒したら殺します…れろぉ」

ティーは右腕に抱きつき、右耳を濡れた舌で包み込む。

「ちゅぱ…ちゅううう」

「はむぅ…ちゅるちゅぱ」

「ぢゅるぢゅるるっ」

私の生気が三人の唇の中へと流れ込んでいく。

「ふぅ…あたい達の極上のおやつになってもらうよ、ロスト…ちゅ」

私が立っている大地が盛り上がり、土が暖かい布団となって私達を包み込んでいく。

「死にたいほどの快楽を提供しますよ、ロスト様…んっ」

三人に抱きつかれていた私は布団に押し倒れていく。

彼女達は身体の全てで私を咀嚼するかのように狂おしく激しく求めてくる。

「貴方の生気を早くわたくしに寄越しなさい！」

「これはあたいが頂くんだ！」

ティーとメイは私のヴィマーナを己の女で挟み込むようにして愛撫し、私を狂わせていく。

彼女達の抱擁に私は成すさがままにされ、悲鳴を上げようとしたところをアレクは唇で塞き止めてくる。

ヴィマーナはメイとティーと言う名の鞘に刃こぼれになるほどに交互に収められていく。

「ロストの生気は…本当に美味しいな…ティー姉さんの気持ちが…分かってくるよ…此奴は…殺したいほどに美味過ぎるよ！はあああっ！」

「今更…気づいたのですか？ですが…ロスト様を殺すのは…私です

！それは誰にも…譲りません！あぁん…」

「むぐっ…もごっ！」

私は喋ろうとしてもアレクの舌が私の舌を人質にとって黙り込むしかない。

「ちゅぱ…そなたの舌は本当にきかん坊だな。だが、それがいい。年寄りはやんちゃな坊主が大好きだからな…ちゅううううっ！」

アレクの唇が私の舌を引き抜くように吸い付いていく。

まるでこれは私のものだと言わんばかりの強烈な吸い付きだ。

私の身も心も全て彼女達に吸い尽くされていく。

知恵熱を出しかけていた私の頭が急激に冷えようとしてくる。

常人であれば、この時点で死んでしまうだろう。

メイとティーがようやっと満足したのか、ヴィマーナを解放してくれる。

だが、最後に待ち受けているのは隊長格のアレクだ。

彼女は舌なめずりをしながら自分の鞘にヴィマーナを収め込み、歓喜と共に激しく腰を振るのだった。

「何たる美味！最高だ！儂等の乾きを満たしてくれるのはそなたのみであるぞ！」

ティーは私の顔を下の口で塞ぎ込み、メイはアレクを狂わせているヴィマーナに口付けていく。

「はぁ…はあ…下僕に奉仕するのも…主の務めです！手を抜いたら…殺し…ますよ…んぅううううっ！」

「れろぉ…ちゅぱ…ちゅ」

搾り取られていく…。

私は絶叫も上げられぬまま、彼女達の中で果てていった。

……。

……。

……。

……。

…。

「気晴らしになりましたか、ロスト様」

ティーは私の頭を自分の胸に乗せたまま伺ってくる。

毒舌家であるティーだが、この時は何故か優しげな声だった。

満腹になるほど生気を食べたから機嫌が良いのだろう。

「ご馳走様。お礼にあたいの指圧を提供してやるよ」

メイは私の両足が血行が良くなる指圧をかけてくる。

「私もさせて貰います。主の体調管理も下僕たるわたくしの務めですからね…」

ティーもまたメイに倣うように指圧をしてくる。

彼女達の指圧は痛いような気持ちいいようなはっきりしない感覚が襲ってくる。

思わず身体を動かそうとすれば、アレクが縛り付けた鎖のように締め付けてくるのだった。

「大人しくしろ。儂等の心づもりに対して遠慮は無用だ」

どちらにしても身体は脱力していて満足に動けそうにない。

ヒュプノスの情事の後に続けての連戦だから当然のことか…。

私は大人しくメイとティーの指圧とアレクの心地よい抱擁に身を委ねていく。

……。

「ロスト殿」

「何だ？」

アレクは自分の胸に埋まっている私の頭を撫でながら話しかけてくる。

「気晴らしさせておいて悪いが、近いうちにそなたの生気を二度と吸えなくなる時がやってくるやもしれぬ…」

生気を二度と吸えなくなる時、それはすなわち…。

「このまま援軍が集まらなければ、儂等は確実に負ける」

メイとティーはアレクの言葉に口を挟むこと無く、黙々と私の足に指圧をかけていた。

頭脳担当のアレクに全てを委ねているように見える。

「エロスの軍勢は二つの勢力によって構成されている。一つはガイア様の弟子や親衛隊で構成されるガイア陣営、もう一つはエロスの同盟者タルタロスとその眷属で構成されるタルタロス陣営だ」

この世界の私を殺した最強の上級神タルタロス。

奴にも配下がいるというのか…。

「ガイア陣営はウラノス、ウレア、ポントス、そして、ティフォンの四高弟とティターン神軍が主力となっている。四高弟のことは既にそなたも聞いていると思うが、儂等エリニュスと破壊神アーテーの前身に当たる姉弟子達だ」

ガイア四高弟か…。

同じガイアの弟子であるアレク達にとっては宿敵とも言える存在なのだろう。

そして、ティフォンはガイアが二番目に苦戦した相手とも言っていた。

おそらく四高弟の中でティフォンが最強であるに違いない。

今のところはティフォンは私が引き受けて、後の三人の高弟はアレク達に任せるという構図と言ったところか…。

「だが、四高弟よりも恐ろしいのはガイア様の親衛隊、ティターン神軍だ」

ティターン神軍。

これもまた厄介そうな輩の名前が出てきたな…。

「ティターン神軍はガイア様が原初神の座につく以前から付き従っていたガイア様の私兵とも言える者達だ。奴らはガイア様とタルタロスが原初神の座をかけた戦い、真神戦争で活躍した伝説の神々として語り継がれている。そう、伝説の存在なのだ。儂等もガイア様から聞いたことがあるだけで見たことがない。だが、奴らこそがエロス軍の主力部隊だと見ても間違い無いと儂は確信している」

次から次へと厄介な存在が判明されていく。

聞いただけでも過労死してしまうような連中共がいるものだ。

それにしても気になることがあった。

「何故、ティターン神軍も四高弟もガイアを裏切り、エロスに荷担したのだ？」

「簡単なことだ。奴らは戦う場所が欲しかったのだ。ガイア様曰く自分の実力だけでなく歪んだ感情まで引き継いでいる最悪の戦闘狂集団らしい」

……。

以前、ガイアに見せてもらった映像活劇を思い出す。

彼女が嬉々として世界を滅ぼしていた様子を見せつけられて恐怖に怯えた記憶は鮮明に残っている。

要するにガイアの歪んだ資質を受け継いだ軍隊。

まさしく最悪にして最低の軍隊だ。

それにしてもガイア陣営だけを考慮しても反乱軍は余りにも戦力不足だ。

これでは確かにアレクの言う通り、反乱軍は確実に負けてしまう。

もうこれ以上聞きたくないと思ってしまうが、話し終えるまでアレクは私を解放してくれないだろう。

アレクの抱擁は何も抵抗しなければ、柔らかくて心地よい女体の身体である。

だが、抵抗すれば、強固な鎖で縛られているのではないかという締め付けが襲いかかってくる。

先ほどから離れようと何度も試みたが、その度にアレクの腕と足が万力のように激しく締め付けてきた。

「ロスト殿は本当に可愛いな。戦い以外ではそなたはか弱き赤子も同然だ。赤子が儂の抱擁からは逃れられるわけがなかろう。観念して年寄りの話に耳を貸すがいい…あむぅ…んちゅ」

アレクはお仕置きと言わんばかりに左耳を唇で挟んでくる。

回復しかけていた生気が再び吸われていく。

「ぴちゃちゅぱちゅるちゅる」

「ぐあぁ…うぅ…」

身体の力が抜けていってしまう。

「ちゅぱ…ふぅ…これで大人しく話を聞いてくれるな…」

私は熱に浮かされたようにしてアレクの胸の中へと顔を埋めてしまう。

アレクは実はティー以上に容赦が無い女なのかもしれない。

「あたいの指圧は気持ちいいか？ロスト」

与えられた役割を忠実にこなそうと丹念に指圧をかけてくるメイ。

メイは普段は常に喧嘩を吹っかけてくる血気盛んな暑苦しい女だ。

だが、必死に気持ち良くしようと丹念に揉み、私に伺ってくるメイの姿には癒されるものがあった。

一方、ティーは…。

「わたくしの指圧に満足しないはずがありません。不平不満を口にすれば、寿命を縮めると思いなさい」

ティーはやはりティーだった…。

……。

メイこそが三人の中で一番の良識派だと考えを改めることにしよう。

「何やら気に入らぬ考えを巡らせているような気がしたが…。話を進めるとしようか」

次の話はガイア陣営の対となるタルタロス陣営の話か…。

「タルタロス陣営はある意味、ガイア陣営よりも危険な輩が揃っている。まず、挙げられるのは怪物の母と呼ばれている女王エキドナ。彼女は幾つもの魔物を生み出し、エロス軍の戦力増強を担当している邪神だ。上半身は絶世の美女で下半身は大蛇の姿で、そこらに立ち並ぶ建造物よりも巨大でおぞましい姿をした化け物だという情報

を得ている」

上半身は美女で下半身は醜悪な大蛇でそこらの建造物よりも巨大なおぞましい怪物…。

……。

これは究極的に不味い予感がしてくるぞ！

私はほとんどの場合、必ず危険で凶悪な女に好かれてしまう体質だと最近の体験から学習したのだ！

女王エキドナ。

その化け物女にだけは絶対に遭遇しないよう気を付けねば…。

「次に挙がるのは闇の双剣として恐れられているタルタロスの腹心の配下にして、エロスの副官も務めている二体の上級神、ニュクスとエレボスだ」

ニュクスとエレボス。

如何にも手強そうな響きを感じさせる名だ。

「表舞台から姿を消したカオス、力を蓄えるために前線から身を引いたタルタロスを覗けば、エロス軍の最大の脅威と言っても過言ではない存在だ。特にニュクスにはどういうわけか如何なる攻撃も届かず、如何なる防御をも貫く攻撃をしてくる…」

如何なる攻撃も届かない…。

如何なる防御をも貫く…。

それはまさしく最強で無敵の存在だろう。

……。

気分が沈んでくる。

ただでさえ絶望的な戦力差だというのに…。

「援軍がなかなか腰を浮かさないのはニュクスの存在が原因とも言われている。エレボスについては詳細は不明だ。ニュクスが主に戦い、エレボスはほとんど戦うことが無いからな…」

「ならば、ニュクスを倒さない限り、援軍が来ない可能性があるというのか？だが、奴には攻撃も通用せずに防御すらも出来ない。勝ち目が無いではないか！」

攻撃も届かず、防御も出来ない相手では私もどうしようも無い。

私ではやはりエロスの元へは辿り着けないというのか…。

「それは違うぞ、ロスト殿」

アレクを子を宥める母のような口調で言ってくる。

「ニュクスは決して無敵でも最強でも無いはずだ。タルタロスはガイア様に破れている。そして、ガイア様はエロスの屈してしまった。ガイア様もタルタロスも最強でも無敵でも無いということだ。それ

ならば、無敵ではないタルタロスに従うニュクスは無敵であるのか？それは否だ。神は力有る者こそが至高の存在だからだ。そして、神は己よりも強者である者にしか従わない」

確かにアレクの言う通りだ。

ニュクスが本当に最強で無敵の存在であるならば、タルタロスに従うことは無いはずだ。

そして、タルタロスはガイアに破れている。

ならば、ニュクスにも必ず死角があるということだ。

「覚えておるか、ロスト殿。儂と戦った時のことを…」

アレク達と戦ったのはつい最近というよりは昨日のことだ。

覚えているかどうかを確認するまでもない。

「儂は如何なる力も弾き飛ばすホワイトホールという技でそなたを迎え討とうした。だが、そなたは儂のホワイトホールを砕き、儂を打ち負かした。そなたには神が定めた摂理をねじ曲げる力があるやもしれぬ。だからこそ、そなたならば、ニュクスを倒せると儂は信じている」

「あたい達を打ち負かしたんだ。ロストだったら絶対にニュクスを倒せるはずだよ」

「わたくしを打ち負かしておいて何処の馬の骨か知らない者に負けるなんてあり得ません。ロスト様なら必ずニュクスを倒せると信じ

てます」

……。

アレクもメイもティーも私の勝利を信じて疑っていない。

……。

気恥ずかしくなって無言でアレクの胸に顔を埋めていく。

そんな私の頭をアレクは愛おしげに撫でてくれる。

ニュクスがどれほど強大な力を誇っているのかは分からない。

だが、彼女達が私の勝利を信じてくれるのであれば、がんばろうという思いが芽生えてくる。

エロスに対する恐怖と彼女達への思いがせめぎ合ってくる。

私は信じてくれる彼女達の思いに応えようとすれば、エロスと戦う決心を持つことが出来るのだろうか？

……。

まだ、分からない。

……。

アレクは話を進めていく。

「最後に挙げられるのは上級神アパテーだ。彼女には様々な二つ名がある。代表的なものは四肢狩りアパテー、そして、脳無しアパテーが有名だ」

四肢狩りアパテーに脳無しアパテー。

何か気になる二つ名だ。

それに何か胸騒ぎがしてくる。

「四肢狩りと脳無しというのはどういうことだ?」

アレクの身体がやや小刻みに震えてくるのを感じた。

「アパテーが担当しているのは拷問官、調教師、そして、従軍医師…」

拷問官。

調教師。

従軍医師。

四肢狩り。

脳無し。

これらの言葉から連想して考えれるのは一つしかない。

「アパテーはエロスの配下の中で最も残虐で冷酷な狂女として恐れ

られている。奴こそが…僅かに生き残った男の四肢を切断し…脳を切除し…男を種馬として飼育することを担当している。エロスの行う実験の助手も務めている最低最悪の逝かれ女だ…」

アレクは苦々しげにアパテーのことを説明した。

正気を失ったセシリア。

四肢と脳を失ったグレイブ。

そして、感情が壊されたタナトス。

……。

私はアレクの抱擁を振りほどいて起き上がる。

「ロスト殿…」

「ロスト様…」

「ロスト…」

三人は怯えたような目で私を見てくる。

怖がらせているのだろうか？

だが、それよりも…。

何よりも…。

「そのアパテーが両手足を切り取って、脳を取り出しているということなのか？それで間違い無いということなのだな？アレク…」

「あ、ああ、そうだ」

アレクは震えた声で私の確認を肯定してくる。

『タナトスもエロスによって壊されてしまったのだ…』

アパテーが…。

『そう、エロスは人の感情を壊してしまう禁忌の医術をタナトスに施した。そして、タナトスは壊れてしまった。貴公が…私が知ってる…タナトスは…もういないのだ！』

タナトスを壊したのか…。

……。

『泣いているの？愛しい人に似ている貴方…』

目頭が熱くなってくる…。

『泣かないで、愛しい人に似ている貴方。私も何だか悲しくなってしまうわ…』

身体が震えてくる…。

『ロスト…。ロストは…旦那様は…確か…死んだはず…。私の愛しい人…ロスト…ロスト…ロスト…』

胸が痛い…。

『笑ってください。笑えば幸せが訪れてきますよ…』

血が滾ってくる！

……。

アパテー。

四肢狩りアパテー。

脳無しアパテー。

貴様の名は確かに覚えた…。

絶対に忘れたりはしない…。

……。

不意に両腕に柔らかい感触を感じ、熱くなった身体が冷めていく。

メイとティーが抱きついていた。

「ロスト様、気晴らしをしましょう。アレク姉様、戦いのことはまた後で話し合いましょう。ロスト様、今はわたくし達の身体で心も体も癒してください…ちゅ」

「難しい話は後にしてゆっくり休んだほうがいいよ。あたい達はロ

ストに気晴らしをさせるためにこうしているんだからね…ちゅ」

ティーとメイの唇が私の両頬を優しく包み込んでいく。

今までにない柔らかく暖かい口付けだった。

「そうであったな。済まない、ロスト殿。この話はまた後にして、ゆっくりと気晴らしをしてくれ。儂等の全てを持って癒そう。そなたが少しでも心安らかになるように…ちゅ」

私の唇にアレクのそれが包み込んでいく。

生気が吸い取られていない。

彼女達は純粋に私を癒す為に包んでくれているのだ。

私は彼女達に身を任せて、気晴らしをさせてもらうことにした。

……。

……。

……。

……。

……。

……。

…。

最高に良い気晴らしをさせてもらった。

第８２話：子作り（前書き）

細かい突っ込みは無しで…。

大らかに呼んで頂ければ…。

第８２話：子作り

存分に気張らしをさせてもらった後、軍備を整えるということでアレク達と別れて、モイラと合流した。

「随分時間かかっていたけど、頭目とは何かあったのか？」

……。

ヒュプノスとの強烈な情事を幾度も体験し、エリニュスと喧嘩祭りした末に情事をしたから時間かかったとはさすがに言えない。

「この世界にきてから色々と話を聞いたからな。状況を把握し、整理するために何度も聞いたのだ」

とりあえず嘘をつきましょう。

モイラのお仕置きで両頬を腫らしたくは無い。

だが、不安になることもないだろう。

物的証拠は無く、容疑者に挙げられることも無い。

まさに完全犯罪を敢行しているような気分だ。

私の作り話を聞いて、モイラは何故か実に良い笑顔を見せて、私の顔を覗いてくる。

モイラの吐息が頬をくすぐり、甘い香りがする。

顔を少しでも前に出せば、口付けができるほどに顔を近づけてくる。

彼女の瞳に私の顔が映る。

私の顔は戸惑い、恐れているかのような表情だ。

「おじさん…」

モイラは耳元に橙色の唇を寄せて囁いてくる。

「俺はさっきまで頭目と話をしていたんだぜ…」

モイラの唇が耳たぶに触れるのを感じる。

「頭目は何時にも増して、女の顔をしていた。何故だろうな?」

吐息が耳にかかり、身体が身震いしてしまう。

「そういえば、頭目はアレク達におじさんを気晴らしさせるように言ったとも聞いたぜ…」

モイラの腕が私の首に回ってくる。

「エリニュスみたいな美女達との気晴らしならおじさんも喜ぶだろうって…」

腕の締め付けが強くなってきている…。

息苦しくなってきたぞ!

「良い気晴らしになったか？ああん？」

やはり嘘を付くのは良くないです。

正直に話して謝りましょう。

……。

……。

…。

私は道端に土下座してモイラを仰ぎ見ている。

「まあ、おじさんのことだから、そうだろうと思ってたけどよ…」

真実を話し、モイラは私を見下ろしてため息をつく。

どうでもいいが、私は信用されていないようだ。

「これからのことを考えると一々怒ってたりしたら、きりがねえから特別に許してやるよ。俺の寛大な心に感謝しろ」

両頬はとても熱くて痛い。

足が痺れてくる。

どう考えても寛大な処置では無い気がするのだが…。

いや、むしろ女を怒らせて、この程度で済んでいると感謝するべきなのか…。

……。

……。

…。

土下座で足が痺れていることからモイラに肩を貸してもらって、私はモイラに誘導されるまま歩いていた。

「そういえば、これからのこととはいったい何のことだ?」

「その話か…」

モイラは言い辛そうな様子だった。

「それほど不味いことを私にさせるつもりなのか?」

私は反乱軍に協力することをヒュプノスに言った。

おそらくモイラはヒュプノスに何かを言伝られたのだろう。

迫り来るエロス軍との決戦に向けて、軍の編成や食料武器の調達、地形の確認、戦術戦略の立案等とやることが多くある。

だが、生憎私はそのどれもがさっぱり分からん。

私に出来ることと言えば…。

戦いに備えて肉体強化でも図っておけとのことだろうか？

それとも隊を一つ持たせて調練させるとのことだろうか？

それぐらいのことであれば、ブリュンスタッド時代の時に多少経験したことがあるのだが…。

知恵熱を出すほど考え唸っていた私を見て、モイラは何かに対して観念したかのようにため息をつく。

「人類存亡のために仕方がねえと思ってるけど、このご時世で個人的感情を優先させるなんて以ての外だよな…」

モイラは自分の肩に回していた私の腕を振りほどき、正面に回り込んで私の顔を睨んでくる。

その際に痺れた足でふらつく私を支えることも忘れていない。

「単刀直入に言うぜ。頭目はおじさんに重大な使命を与えると言ってた。それで俺がその監督役を仰せつかったわけだ」

「お前が私の目付役になったのは分かった。それで重大な使命とは何だ？」

もしかすると患者としてヴァルキリアに潜入しろとでも言うのだろうか？

いや、それは有り得ないだろう。

男がほぼ絶滅したこの世界で男である私が潜入すれば即座にばれて拷問をかけれる羽目になる。

軍事に疎くて、喧嘩しか能が無い私に出来ることは限られている。

「子作りだ」

……。

何ですと？

「耳が悪くなったのかもしれない。もう一度言ってくれないか？」

「子作りだ」

……。

「もう一度…ぶべらっ！」

さらにもう一度聞こうとした私をモイラは平手打ちを炸裂させてきた。

「おじさんに沢山の女と性交して子を孕ませろって頭目から言われたんだよ！何度も言わせるな！馬鹿！」

顔を赤らめて怒鳴ってくるモイラ。

私はぶたれた頬を押さえて呆然としていた。

まさか私の任務が子作りとはな…。

……。

……。

…。

「というわけで沢山の女と性交して子供を増やすことが任務なんだよ。おじさんはこの反乱軍で唯一の元気な男なんだからな！」

「村の学者から聞いたことがある。産めよ増やせよ、だな」

国が子供を出産するよう要請するのは歴史上で聞いたことがある。

確か兵隊を増加させるためや生産を向上させて国を強くするためだったな。

「まあ、そうとも言う。頭目は戦いが終わった後のことも考えているからな…」

今回の場合は人類種を存続させるためなのだろう。

男がほぼ絶滅し、女のみとなってしまった今の人類では生殖行為が出来ないため、絶滅の道を歩むしかない。

だからこそ、唯一の男である私に生殖行為をさせて、男を増やすことで人類を存続させるということか…。

確かにエロスを倒して平和を取り戻しても人類が繁栄できなければ意味が無い。

これはまさに重大な任務だ。

しかも私にしか出来ないことだ。

四肢がもがれ、脳を失ってしまった男では生殖行為は困難だろうからな…。

無理矢理にでも行えば可能なのかもしれないが…。

それを強要してしまえば、下手するとエロスと同類となり、大儀を失うことも考えられるわけか…。

……。

エロスと同類か…。

奴は人の感情にお構いなく性欲を満たすことだけしか考えない野郎だ。

正気を失ったセシリア。

感情が壊れたタナトス。

彼女達のような犠牲者が出ないようにするためにもエロスを倒さなければならない。

エロスのことは恐い。

それにエロスを倒してしまえば…。

……。

『つまり君が今まで築き上げてきたもの全てが無かった世界へと変わってしまうということだ』

……。

ガイアの言葉を思い出す。

忘れていたわけではない。

考えないようにしていたのかもしれない。

奴を倒せば、彼女達と築き上げてきた縁が全て消えてしまう。

大切な者を守るために戦い、そして、大切な者を失ってしまう。

何ともやるせないことだ。

私は本当はエロスと戦うことを恐れているのでは無く、エロスを倒すことで…。

「何黙り込んでるんだよ、おじさん…」

「ああ、すまない…」

今は自分の出来ることをやるしかない。

「それで私はどうすればいい？」

「おじさんがアレク達と気晴らししている間に頭目の言いつけで募集欄を配っていったよ。随意でやってもらうという形でな」

飽くまで強要では無いと言う形ということか…。

確かに無理矢理やらせるぐらいならば、私が来る以前で四肢を失った男達で行っていただろう。

ヒュプノスはタナトスの件で随分と心を入れ替えたようだ。

「とりあえず、あそこの教会が集合場所って募集欄に書いたから、あそこで待ってようぜ」

モイラが目を向けた先には古びた教会があった。

教会か…。

モイラと最初に出会ったときも教会だったな…。

「ほら、さっさと行こうぜ！」

「待て！まだ足が痺れ…ぐおおおっ！」

モイラは荒々しく私の腕を掴み、足が痺れて悶える私を引きずっていくのだった。

……。

……。

…。

教会は賛歌が鳴り響いてなければ、オルガンの音色も響いていない。

参詣する信者も居なく、教義を唱える神父も居なかった。

信仰心を求める場所ではなく、ただ己の決意を胸に秘めて神に誓いを立てるための場所らしい。

自分を鼓舞するための舞台と言ったところか…。

祭壇の前には神の形を象った女神像が立てられている。

近い内に第三次聖戦が発動し、エロスと対決する時がやってくる。

それ以前にこの世界の私を殺した邪神タルタロスとその眷属との戦いもある。

ガイアを裏切った弟子や親衛隊との激突もある。

……。

私もいずれ貴方に誓いを立てる日が訪れるのだろうか？

「おじさん…」

モイラは私の腕を包むように抱き締めてくる。

「おじさんはきっと大丈夫だぜ」

女神像が立つ前で私とモイラは抱き合う。

「もし、誰も来てくれなくても心配することは無いぜ。俺がおじさんの子供を絶対に産んでやるんだからな」

「ありがとう」

私とモイラは祭壇の手前にある椅子に座り、静かに待っていた。

果たしてどれだけ来てくれるだろう。

もし、沢山の女性が来てくれて性交を行い、孕ませることが出来ればどうなのか？

私の子孫が人類の繁栄に貢献することになるだろう。

ならば、私は新たな人類の始祖となり、後世に語り継がれる伝説の存在となるだろう。

そう考えれば、私の任務はまさに人類存亡をかけた壮大なる使命となる。

……。

これはもしかして私が求める酒池肉林の世界そのものだということではないのか？

人類の繁栄のために全世界の女と力の限り性交していく！

そして、愛欲の果てにて腹上死という壮絶な最後をもって伝説となる！

エロスとの思想の違いについて議論するのはこの際置いておこう。

何よりもモイラやヒュプノスの公認で任務として下されたのだ！

私に何もやましいことは欠片も無い！

久々に気分が高揚してきた…。

人類を救済するために我が欲望を余すところ無く発散させてくれよう！

私は女神像の前に決意を胸に秘めて誓いを立てる！

アレルイヤ！

「おい、俺のことを完全に忘れているだろ？」

モイラが不機嫌そうに何かを言ってきているが、敢えて無視をする。

我が想いよ！

天まで届け！

アレルイヤ！

……。

……。

……。

……。

…。

「日が暮れてきたな…」

私は夕暮れの光が照らされる祭壇の前に佇んでいた。

そういえば、地下世界なのに太陽が昇るのだな。

疑似世界の応用なのだろうか…。

女神像が私に微笑みかけている。

気のせいか嘲笑っているように見えた。

やはり神は応えてくれないものなのか…。

「ぷっ…元気出せよ。くっ…また明日があるさ…ぷぷっ」

モイラの笑いを押し殺した慰めに少し怒りを覚えてしまった。

今日はもう切り上げて明日に出直すか…。

「落ち込むなよ。後で俺が慰めてやるから。な？」

さすがに哀れに思ったのか、今度は真摯に慰めてくれるモイラ。

「けど、女にとって子を産むことは人生最大の出来事の一つだからな。募集で寄ってくる女なんているはずねえよな…」

モイラの言う通り、女性にとって出産は人生最大の出来事の一つだ。

仕事の募集や徴兵などとは訳が違う。

ヒュプノスは今まで女性を使い捨ての兵士として扱っていたため、それに気づかなかったわけか…。

彼女は帝国軍師と言っても、研究者が本業だろう。

狂戦士は彼女の言葉に忠実だったことから戦術や戦略を組み込むことが容易だった。

それ故に薬漬けにしていない者達の心理や機微を感じ取る能力が育たなかったのだろう。

だからこそ、人類繁栄のためという大儀を掲げれば、人が簡単に集まると安易に考えたのかもしれない。

もっとも、それに疑問に思うこともなく募集していた私も当然ヒュプノスと同類だ。

これではエロスと同類と思われても仕方ないような気がしてしまうな…。

「募集は止めて、別の方法を考えよう。ヒュプノスのやり方では集

まるはずがない」

私が女の立場だったら顔を見たことが無い何処の馬の骨とも分からない男の子供を産みたいと思うはずがない。

「だったらどうするんだ?まさか、一軒ずつ回って頼み込むつもりかよ」

「直接会って交渉する方法か…」

仮に私が女の立場として、考えてみよう。

……。

交渉方法其の一。

『人類繁栄のため、私の子供を産んでください!』

不審者が押し寄せてきた。

私は無言で剣を抜いて男を斬り捨てる。

交渉其の一は不可!

……。

交渉方法其の二。

『頭目に頼んで貴女を大富豪にします。だから、私の子供を産んでください』

金で自分の身を売れと言っているようなものである。

しかもヒュプノスに頼むという他力本願丸出しの男に自分の身を預けたいとは思わない。

やはり剣を抜いて男を斬り捨てる。

交渉方法其の二は不可！

……。

交渉方法其の三。

『貴女の全てを守りたい。結婚してくれ！』

唐突過ぎる。

またしても剣を抜いて男を斬り捨てる。

交渉方法其の三は不可！

……。

交渉方法其の四。

『相談したいことがあります』

不審ながらも私は話を聞く。

男は日を改めて、指定した待ち合わせ場所で落ち合う。

『私はこの荒んだ世界に自分の生きた証を残したい』

男と共に店を周り、自分の将来の夢を語り、己の確固たる信念を私に示してくれる。

私の心に少し揺らいでいく。

そして、何度も逢瀬を交わしていくうちに…。

暫く時が経ち…。

男は別の女の元へと訪ねていく。

『相談したいことがあります』

その女は不審がり、ある女を呼び出す。

ある女とは私のことだった。

男は二股をかけていた。

許すまじ。

私は男を八つ裂きにしていく。

交渉方法其の四は不可！

……。

駄目だ！

喧嘩に明け暮れていた私には女の口説き方等という高尚な能力は皆無だ！

考えてみれば、私は口で語るよりは拳で語る方法で口説いていた。

さらに戦場などという特殊な環境や状況の中でのことだ。

そして、極めつけに相手が一般から懸け離れた特殊な人種の女性が大半だ。

私は平和的状況で文化的な話し合いをして、時間を掛けて打ち解けていき、愛を育むという経験が全く無かったわけだ…。

結論からして私は一般的に女性とつき合う能力は無い…。

……。

「おじさん、どうしたんだ？」

モイラは心配げに私の顔を伺ってくる。

彼女とも特殊な環境下で出会って、絆を深めてきたのだったな…。

「モイラ…」

私はモイラの顔を見つめていく。

「ど、どうしたんだよ！真剣な顔をしてからよ…」

「側にいてくれて、ありがとう」

モイラは私の言葉に顔を赤くし、俯く。

「いいってことよ。俺も…おじさんの側に…いたいんだからよ…」

「そうか…」

私はモイラを抱き締めていく。

モイラは私に身を預けていく。

「ヒュプノスに報告しようか…」

「うん…」

私はモイラを抱き寄せて、ヒュプノスの屋敷へと向かった。

……。

……。

…。

ヒュプノスは私の話を聞き、苦笑していた。

「まあ、私も無理かとは思っていた。それでも貴公ならばとやってもらったのだ。貴公やモイラには悪いことをさせてしまったな…」

「駄目だと分かっているのでしたら、何故おじさんにこの任務を与えたのでしょうか？」

弁解しているヒュプノスにモイラは理由を尋ねてくる。

「万一の可能性をと思ってな。子供とはやはり両者の想いが重なり合って育まれた方が良いに決まっているからな…」

ヒュプノスは幾つかの硝子瓶を取り出して見せてくる。

「これが子を成すための精子と卵子というものだ。これが合わされば子が生まれてくる。だが、これを行うためには金と機材が必要だ。幸い、私の屋敷にはそれを行うことができるための環境が揃っているが、私はこれを行うか否かで迷っている。どちらかと言えば、破棄する考えが有力だ…」

ヒュプノスはそう言い、硝子瓶を床に投げ捨てていく。

私はヒュプノスの突然の行動に動くことが出来なかった。

「何をやっているんですか？ヒュプノス様！」

モイラは割れた硝子瓶を回収して、零れたものを掬おうとする。

「掬っても無駄だ。もう使いものにはならない」

「子を成して人類を存続させるのではなかったのですか？」

ヒュプノスは戸惑うモイラを余所に私を見据えてくる。

「貴公ならば分かるだろう。これで人類を繁栄させたところで何も意味は成さない。なぜならば、人は感情と理性を持っているからこそ人であり続ける。感情無き出産に何の希望を残せようか？」

「だが、生まれはどうであれ、感情を持って育てればいいのではないか？孤児院を創設して、しかるべき者に任せれば…」

「そうかもしれない。ならば、貴公がそれをしてくれるのか？責任をもって育ててくれるのか？」

……。

言葉に詰まってしまう。

私はこの世界の人間ではない。

責任をもって最後まで育てることは出来ない。

ヒュプノスは散らばった硝子の破片を拾いながら語っていく。

「一人で生きていると豪語する者は沢山いるが、その輩も社会の仕組みの中で生かされている。自分の目の届かない何かで生きる糧を与えられて、それに気づくこと無く、一人で生きていると錯覚している。その輩に人類繁栄などという大層な使命を掲げることが出来ようか？」

……。

「それは否だ。なぜならば、一人で生きていくと考えている者は一

人でいたいと考えているからだ。自分の世界を守るためにな…。要するに自分が可愛いわけだ。種としてではなく、個として生きる道を選んでいる者が人類存亡等を考えられるはずがない。私とてそうだ。ロスト、貴公ならば分かるだろう。貴公にも目指す世界があるはずだ」

……。

『私にはエロスを増長させた罪がある。タナトスを壊してしまった悪魔の実験に荷担した罪も…。そして、世界を歪ませてしまった罪も…。戦う理由は償い、ただの自己満足だ。私は王族の血が流れてることから反乱軍の頭目という祭り上げられただけの愚かな女に過ぎないのだ…』

疑似世界でヒュプノスが言っていた戦う理由を思い出した。

ヒュプノスは個として生きているのだろう。

私はどうなのだろうか？

個であるのか？

種であるのか？

私の目指す世界。

決まっている。

衣食住が保証され、出来れば酒池肉林の世界を築き上げればと思っている。

それは個であるのか、種であるのかは分からない。

「子を成そうとする者は個ではなく種として生きねばならない。家族を守る。会社を守る。国家を守る。世界を守る。人類を守る。種の存続の糧として個を捧げる者こそが大儀を掲げれるのだ。その志が無い者が子を成すことは害悪だと私は考えている」

害悪とは些か言い過ぎのような気がするが、それがヒュプノスの考えなのだろう。

しかし、害悪という意味が分からない。

「害悪なのは個で生きる者が子を成せば、個となるからだ。蛙の子は蛙という東洋の諺だな。個は種に何ももたらさない。子は何も受け継ぐことも無く生きていく。子は個として生きていく。種であるか、個であるかを選択する余地も無く、個としてしか生きられなくなる。それで人類は繁栄出来るのか？」

……。

「種で生きる者が子を成せば、種となる。種は個の複数、故に個にも種にも成り得る。個から成した子よりも可能性が広がるということだ。可能性が広がれば自分の世界が広がる。視野が広がる。思想が広がる。やがて、自分の世界は他の個にも浸透していくことになる。浸透された個も世界を広げることが出来る。そして、他の個に影響を与えていく。互いの世界が広がり、重なり合えば、やがて新しき種が生まれていく。世界が重なり合って生まれた種はさらなる可能性で世界を広げていくことが出来る。それが私の考える人類の繁栄だ」

……。

「ふっ、別に全ての者が種である必要は無い。個でもいい。なぜならば、他の種と共に生きれば個でも種でもなれるからだ。だが、それは数限りない種と個が入り交じった男女が同等の比率で共存する人類であればの話、この世界にはわずかの男しかいない。選択の余地が無いわけだ。種でなければならない。貴公は孤児院の経営を出来るかどうかに対する返答に詰まった。個に影響を与えるためには相応の種でなければならない。種が成した子であれば、その種が育てればいい。だが、影響を与えていない異なる個を育てることは並大抵のことではない。あるかどうか分からない種に頼るわけにはいかないのだ」

……。

モイラはヒュプノスの言葉に唖然とし、押し黙ったままだった。

「人類は…滅びるしかないと…いうことなのか？」

私は乾いた喉から絞り出すように声を出す。

「それは分からない。だが、個でしか生きられない者が万に一つ種になれるとしたら、それは一つだ」

「それはいったい…」

ヒュプノスはやや顔を赤らめて、息の呑む。

何故か言い辛そうな様子だった。

「それは…人を愛すことだ…」

……。

「黙ってないで何か言ったらどうだ？恥ずかしいではないか！」

ヒュプノスが私が黙っていることで不安になったのか、怒鳴ってくる。

「いや、その通りだと思って、驚いただけだ」

「俺もそう思いました。陳腐で単純な答えだと思ったけど…」

ヒュプノスは深呼吸をして落ち着き、冷静な目つきに戻っていく。

「お伽噺でよく愛は世界を救うという言葉を聞く。戯れ言だと嘲笑う者がいるかもしれない。持論を掲げて否定する者もいるだろう。だが、使い回されている言葉にこそ真理が隠されていると私は考えている」

難しくて分からないが、何となく言いたいことは分かる気がする。

「小難しいことを言ってしまったが、結局行き着く先はそこだ。陳腐で単純、だが、何よりも代え難いもの、愛することだ。研究者としては否定したいところだが、ヒュプノス個人としてはそうでありたいと思っている…」

ヒュプノス個人としてか…。

『例え、神の子として巡り会う運命だったとしても惹かれ合うのは本人の意思によるものだ。私はロストを欲したいと思っている。これは紛れもなく私の中にある確かな意志だ。貴公は違うのか？私とこうして混じり合っているのは運命の導きだと思っているのか？』

ヒュプノスは神の子として惹かれあうのは自分の意志だと言ってた。

惹かれ合うのは自分の意志。

それこそが愛なのだろうか？

ならば、ヒュプノスは個ではなく、種だということになる。

私も種なのだろうか？

……。

「詰まらない長話をしてしまったな。私はこれから会議があるので失礼させてもらう。貴公の寝床は既に手配している。モイラと貴公が出産してくれる女性を募集していた教会と向かい合っている民家だ。では、明日にまた逢おう…」

ヒュプノスは私室から出ていく。

「俺も副頭目としてヒュプノス様に付いていく。おじさん、また明日会おうぜ…ちゅ」

モイラは私の頬に口付けをして、ヒュプノスの後に付いていった。

私はモイラを見送り、ヒュプノスの屋敷を後にする。

……。

……。

…。

正直、ヒュプノスの話は半分、いや、ほとんど理解出来なかった。

だが、愛は世界を救うという言葉は何故か印象に残ってしまった。

お伽噺ではよく聞く言葉だが、だからこそ深い意味を持っているのだということは理解した。

単純な言葉にこそ真理が隠されているという意味なのだろうか。

……。

まあいい。

これ以上考えると知恵熱が出てしまいそうだ。

とりあえず、ヒュプノスに紹介された宿へと行こう。

確か教会の手前の民家だと言っていたな。

古びた教会の向かい合った先に確かに民家があった。

民家に入ろうとして、ふと教会に目を留める。

今更、誰かが来ているとは思えないが…。

私は何故か気になり、教会の方へと歩いていく。

寂れた祭壇。

その上に立つ女神像。

そして、女神像の前に佇む少年。

少年は教会の窓辺から差し込む月の光に照らされている。

その姿は儚げで幻想的に見えた。

……。

誰だ？

女神像を仰ぎ見ている少年は輝くような銀色の短髪をたたえ、雪のように白い肌を見せていた。

服装は黒を基調とした短い着物にも似たもの着ており、滑らかな曲線を帯びた脚を覗かせている。

背丈は私よりも頭一つ分低かった。

子供相手に背丈を確認するのは大人げなかったが、とにかく私よりは低い。

とりあえず、話しかけてみようか…。

教会の中へと入っていった。

私が教会に足を踏み入れた際に足音が響いたためか、少年の肩が僅かに震える。

少年は銀髪を靡かせて後ろを振り向いてくる。

瞳は黄金に輝いていた。

唇に象牙色の口紅を塗っている。

口紅の色に相まって表情に何処か影のある少年だ。

胸は細い四肢に不釣り合いなほどに大きく…。

胸が大きい、だと…。

口紅は大体が女性が塗るものだ。

ならば、女神像の前に立っている少年は…。

少年ではなくて少女。

モイラの子供時代の典型的な美少女の容姿とはまた趣が違う。

美少女に見えるし、美少年にでも見える中性的な容姿。

教会の祭壇に佇む神秘的な姿を相まって天使のように見えた。

「私はピロテース。ピテスでもいい」

少女の唇から冷え冷えとした美声が響き渡っていく。

「ここで何をしている？」

私は油断無く構える。

相手は少女であるが、年に似つかわしくない雰囲気を漂わせている。

力は感じられないが、警戒するに越したことはないだろう。

「募集欄を見てここに来た」

少女は募集欄を掲げて見せてくる。

それは確かにモイラが配布した募集用紙だった。

「貴方がロストなの？」

私は息を呑みながら無言で頷く。

「そう、貴方がロスト…」

「如何にも…私が…ロストだ…」

私は必死に声を絞り出す。

子供に気圧されているとは我ながら情けない！

毅然とした態度で挑まねば！

「ロスト」

「はい」

何故、素直に返事をしてしまうのだ！

彼女の底冷えするような声には得も知れない迫力があった…。

「私は貴方の子供を産みに来た」

……。

何ですと？

いや、私の聞き間違えかも知れない。

タナトスの件といい、心労が祟っているのだろう。

だから、もう一度確認しよう。

「もう一度言ってくれ」

「私は貴方の子供を産みに来た」

……。

目眩がしてきた。

目の前にいるのは確かに美人だ。

だが、絶世の美少女だ。

絶世の美女ではない。

「私は貴方の子…」

「もう言わなくていい」

少女ピロテースは祭壇から降りて、私に方へと歩いてくる。

私は思わず後ずさろうとして、何とか踏みとどまる。

少女は私の胸元近くまで近づいてきた。

「ピロテース、お前は…」

「ピテス」

……。

「ピテスと呼んで。ロスト」

ピテスは私の手を取ってくる。

「私を連れて行って…」

ピテスは無垢な黄金瞳で私を見る。

……。

ヒュプノスの無謀な作戦は見事に成功した。

だが、相手は子供、しかも絶世の美少女だ。

モイラといい、私は教会に行くと美少女と縁が出来てしまうようだ。

ピテスは私の手を離そうとはしない。

「私には親がいない。だから、安心して…」

これは重たい事情を背負った少女だ…。

……。

私はどうすればいい？

家に連れて帰るしかないのか？

神よ、応えてくれ…。

アレルイヤ…。

第８３話：瘤

私はヒュプノスが寄越した食事係が作った料理を頬張っていた。

「もぐもぐ」

ピロテースは頬を膨らませて熱心に食事と格闘していた。

しかも我が物顔で私の膝の上に座ってだ…。

「ピロテース」

「もぐもぐ」

……。

「ピテス」

「何？」

ピテスは頬を膨らませながらも淀みない美声で私の呼びかけに応じる。

頬を膨らませながら無表情で応える顔はなかなかに奇怪なものだった。

だが、それはそれで年相応の雰囲気が見れて安堵する気持ちにもなれた。

「美味しいか？」

「美味しい…もぐもぐ」

……。

どう会話を切り出せば良いのかさっぱり分からん！

過去にもモロスという無口な神と遭遇したのだが、ピテスはそれ以上に無口だ。

ピテスは呑み込み音を響かせて、食事係に皿を差し出していく。

「お代わり」

「畏まりました」

食事係は恭しく皿を受け取り、別の食事を用意してくる。

もはや彼女は主になっていた。

既に彼女の平らげた皿は私の背に届くぐらいに重ねられている。

どうやらとんでもなく育ち盛りな子供のようだ。

無表情であるはずの彼女は戦場に赴く戦乙女の如く凛々しい顔つきで食物を胃袋に流し込んでいく。

彼女の胃袋は疑似世界へと通じているのだろうか…。

……。

私の皿もいつの間にか空になっているぞ！

「もぐもぐ」

神秘的な無口美少女だと思ったが、油断ならない女だ。

とにかくピテスに貴重な食物を蹂躙される前にこちらも胃袋に収納していかなければ…。

私は焼きたての肉にフォークを突き刺そうとする。

「もぐもぐ」

……。

電光石火の速さでピテスのフォークが煌めき、私の肉が消えてしまった…。

「もぐもぐ」

「ピテス、貴様…」

私の声にピテスは貴族さながらの優雅な仕草でフォークを置いて、口元を布巾で拭って私の顔を見つめてくる。

「生きることは戦い」

「何だと？」

彼女の黄金瞳が無機質な輝きを放ってくる。

「生きることは食べること…」

……。

私の喧嘩番長としての血が滾ってきた。

喧嘩とは老若男女差別することなく行うもの。

「面白い…」

相手は子供に非ず！

喧嘩を売ってきた一人の敵だ！

敵には一切の容赦はせぬ！

「相手になるぞ…」

私の黄金のフォーク捌きを見せてくれる！

「負けない」

ピテスは静かなる闘志を燃やして私を見据えてくる。

私とピテスは空になった皿を食事係に差し出す。

「「おかわり」」

完膚無きまで叩きのめしてやるぞ！

そして、戦いが始まったのだった。

……。

……。

…。

「ごちそうさま」

……。

私の皿は五枚。

ピテスの皿は…天井まで届いていた。

負けた…。

完全敗北だ…。

……。

負けて当たり前ではないか！

私の膝の上に座っている時点で地の利はピテスにあったのだ！

手前に食物が置かれれば、ピテスのフォークが突き刺さる方が速いに

決まっている！

敗北に身を震わせていた私にピテスは私の両頬を手を添えてくる。

彼女の神秘的な黄金瞳が私の姿を映し出す。

東洋の地獄の伝説で生前の罪が映し出される鏡があると聞いたことがある。

彼女の黄金瞳はまさに私のやましい部分を見透かすような鏡のように思えてくる。

「落ち込まないで、ロスト」

彼女の冷たい手触りは私の怒りをも冷やしてくる。

「貴方にはまだ食事が残っている」

私はテーブルに並べられた皿を見る。

皿に置かれた物は全てピテスの胃袋という名の疑似世界へと送り込まれている。

「残っていないぞ」

私の答えにピテスは首を横に振る。

「貴方の膝の上にまだ残っている」

……。

「どういうことでしょうか？」

思わず敬語で話してしまう。

いや、これはもう答えが既に導き出されている。

すなわち…。

「私を食べて…」

……。

食事合戦していてすっかり忘れていた。

ピテスは私の子を産むために押し掛けてきたのだ。

私の手を掴んでたピテスの手は万力で締め上げられたように強固でどれだけ力を入れようと振りほどくことが出来なかった。

子供相手に戦いの力を振るうわけには行かなかった。

それにやましいことは無いはずだが、モイラやアレク達に相談するのも憚られた。

特にモイラとティーに私が子供を連れている場面を目撃されてしまったら、どうなるか分かってものではない。

それにもう日が暮れていたということで仕方なく家に上がらせてしまったのだ。

「何が目的だ?」

私は油断無くピテスを見据える。

数々の危ない女に出会ってきた私には何故か確信できていた。

彼女は絶対にただものではない。

「私は貴方の子供を産みに来た」

……。

私は額から汗が流れてくる。

食事を頬張っていた時には無邪気に見えたのだが…。

「何のために私の子供を生みたいのだ?」

私は息を呑みながら自分の膝に座っているピテスに聞いていく。

彼女の黄金瞳に憂いの光が帯びてくる。

「独りはいや…」

……。

「だから、私は欲しいの。自分と同じ存在が…」

『私には親がいない。だから、安心して…』

そういえば、ピテスは親がいないと言ってた。

彼女は家族が欲しいというわけか…。

家族を得て、孤独を癒したいのか…。

ピテスは私の思いを余所にそのまま話し続けていく。

「私と一緒にいるとみんな死んでしまう…」

……。

「だから、私は自分と同じ存在が欲しい…」

……。

「私と同じなら死ぬことはないから…」

……。

「貴方の子供なら消えてしまわないから…」

……。

「世界が滅びても一緒に居られるから…」

……。

「永遠の孤独から解放されるから…」

……。

彼女の黄金瞳に狂気の光が灯っている。

私はモロスに陵辱されたことを思い出す。

「ロスト、私を食べて…」

身体が動かない…。

「食べて…」

間違いない！

ピテスは普通の人間ではない！

「ピテス…誰に…私の子を…孕めと…言われた？」

私は何とか声を絞り出す。

「誰から聞いたのだ！」

ピテスには背後には必ず何かが居るはずだ！

「答えろ！ピテス！」

ピテスは黄金瞳から無機質な光を煌めかせて、吐息がかかるほどに顔を寄せてくる。

……。

……。

…。

「エロス」

……。

……。

…。

馬鹿な…。

無邪気に食事と格闘していたピテスが…。

私を食事合戦で打ち負かしたピテスが…。

私の子供を産むと言ってきたピテスが…。

……。

エロスの刺客？

……。

「私を求めて、ロスト…んっ」

ピテスの象牙色の唇が私のそれを覆っていく。

何だこれは？

「ちゅ…ちゅ」

ピテスの唇から通じて、私の身体が快楽の海へと沈もうとしてくる。

それと同時に自分が自分で無くなってくるような…。

これは非常に不味い前兆だ！

私の生存本能が死の危険を感じている！

私はピテスを突き飛ばしてしまう。

「あぅ！」

皿が割れる音が響く。

彼女はテーブルごと倒れていった。

……。

私は立ち上がって、倒れているピテスを見下ろす。

「痛い…」

ピテスは屍食鬼のように立ち上がり、光の灯らない黄金瞳で私を見つめてくる。

銀髪から瞼を経て、頬を伝うようにして血が流れている。

まるで血の涙を流しているかのように…。

「どうして…拒むの？」

「ピテス…」

今にも泣きそうなほどに悲しげな顔をして見てくる。

「エロスはロストだったら消えないと言っていた。エロスは嘘をついていたの？貴方も私の前から消えてしまうの？」

「落ち着け、ピテス…」

ピテスはゆっくりと近づいてくる。

「私は独りになるの？」

私は後ずさる。

「私を独りにしないで…」

……。

「助けて、ロスト…」

……。

ピテスの手が再び私の頬に触れようとしたときだった。

『ロスト殿！』

不意に私の脳裏に声が響く。

この声はアレク。

私とピテスが立つ床から魔法陣が出現し、世界は暗転していく。

……。

……。

…。

地平線の果てまで純白に染まった世界。

白い大地の所々には崩れかけた巨大建造物が立ち並んでいる。

ここはアレクが創造した疑似世界なのだろうか？

「危機一髪だったな、ロスト殿…」

私の隣に立っているのはマントと緑色の髪を靡かせている美女アレク。

「アレクはピテ…ピロテースのことについて何か知っているのか？」

「これは飽くまでガイア様から聞いた話だがな…」

アレクは無言で私の顔を見つめてくる。
私の顔に何か付いているのだろうか？
「ピロテースは…」
……。
「エロスの娘だ」
……。
エロスに子供がいたというのか…。
言葉が出ない私を余所にアレクは話を進めていく。
「正確に言えば、エロスの血肉を基にして作られた人工生命体だ。彼女はエロスの叡智を結集させて生み出した最高傑作と言われている」
エロスの血肉で造り上げた人工生命体。
エロスの叡智を結集させて生み出した最高傑作。
……。
『だから、私は欲しいの。自分と同じ存在が…』
……。

彼女は作られし命だったのか…。

「エロスは幾万ほどの女性を犯してきたが、一つだけ不満を覚えていた。なかなか自分の求める完全な美女が見つけられなかった。そう、エロスは自分が思い描いた理想の女性に飢えていたのだ。そして、奴は考えた。ならば、自分の手で造り上げればいいではないかとな…。強くて美しい自分だけの女性を…。奴は何千何百の美しく強い力を持った人間、動物、魔物、魔獣、神、ありあらゆる生物を狩り、その血肉を自分の血肉を基盤に融合させて一つの生命体を生み出していった。それで完成されたのがピロテース。彼女は神でも人でも魔物でも何者にも当てはまらないエロスによるエロスのために造り上げた唯一無二の存在なのだ…」

……。

ピロテースはエロスの欲望の果てに生み出されたということなのか…。

だが、それならば何故、エロスは自分が造り上げた理想の女性を私に刺客として送り込んだのだろう?

「だが、誤算もあった。ピロテースはエロスが想像していたよりも遙かに強大な力を持った怪物だった。自分の血肉で造り上げたことで制御出来ないほどに手に負えない存在になってしまったわけだ。実際、エロスが率いていた上級神で構成された精鋭部隊の大半までもが彼女の手によって消滅させられてしまったらしい…」

ピテスはエロスでも制御出来ない程の強大な力を持っているというのか…。

それに上級神で構成された精鋭部隊の大半を消滅させるとは…。

「それで手に負えなくなったピロテースはどうなった?」

「エロスは最初処分するつもりだった。だが、それでは彼女を失敗作だと認めてしまうことになる。それは奴にとって耐え難い屈辱だったのだろう。だから、奴は彼女の使い道を考えた。それがおそらくロスト殿に刺客として送り込むことだったのだろう。彼女はエロスが言いつけられたことを行うために根元世界の中で無数の平行世界を旅していったわけだ。その過程で生まれた世界がここだということだ…」

アレクは純白の大地に彩られた世界を見渡す。

この白い大地はいったい何なのだろうか?

私はしゃがみ込んで地面に触れた。

まるで塩のような白い粉で埋め尽くされた大地。

塩の大地。

私は一粒を摘んで口に含む。

この白い粉は塩の味だ。

「塩の世界…」

私の呟きにアレクは頷く。

「これが彼女の力だ。彼女はこの世界のあらゆる物を塩に変えたわけだ。ここは彼女によって滅ぼされた世界だ…」

塩に満ちた世界。

ピテスが滅ぼした世界。

ピテスはこの世界の命全てを塩に変えたのだ…。

ピテス以外の全てが塩になってしまったのだ…。

……。

『私を独りにしないで…』

……。

血の涙を流して私に手を伸ばしてきたピテス。

エロスの勝手な欲望で生み出されてしまったピテス。

『害悪なのは個で生きる者が子を成せば、個となるからだ。蛙の子は蛙という東洋の諺だな。個は種に何ももたらさない。子は何も受け継ぐことも無く生きていく。子は個として生きていく。種であるか、個であるかを選択する余地も無く、個としてしか生きられなくなる。それで人類は繁栄出来るのか?』

ヒュプノスが言っていた言葉を思い出す。

エロスは理不尽なまでに個の存在だ。

その個によって生み出されたピテスもまた個の存在。

個としてしか生きられない個。

……。

『永遠の孤独から解放されるから…』

……。

ピテスは個である自分を救ってくれる相手を欲していたのだ。

だからこそ、同じ存在が得られると言ってきたエロスの言葉を信じて独りで世界を巡っていた。

……。

『助けて、ロスト…』

……。

ピテスは私に助けを求めてきたのだ。

それなのに私はピテスを拒絶してしまった。

ピテスの最後の希望を打ち砕いてしまったのだ。

……。

『痛い…』

……。

私に突き飛ばされて血の涙を流したピテスの姿が頭から離れない。

アレクは立ちつくしている私の手を握ってくる。

「ロスト殿、ここは一旦退いた方が得策だ。ピテロースは単にエロスの理想の少女人形ではない。数多の上級神を抹殺してきた神殺し、究極の生体兵器だ。ティーとメイを呼んで万全を喫して戦いを挑もう」

足下に魔法陣が出現してくる。

ティーとメイに応援を要請するために元の世界へと戻るのだろう。

だが、その前に聞きたいことがあった。

「ピテスを殺すのか？」

「彼女は危険だ。滅ぼさねば、こちらが滅ぼされてしまう。この世界のようにな…」

私の質問にアレクは冷たい声で答える。

アレクは塩と化した世界を眺める。

「ピテスを救うことが出来ないのだろうか？」

「そなたの気晴らしの時に話していたタルタロスの眷属ニュクスよりも強大な存在なのだぞ！」

私の問いにアレクは激高する。

そして、私の肩を荒々しく掴んでくる。

「このまま奴を放置してしまえば、元の世界も塩と化してしまう脅威があるのだぞ！分かっておるのか！」

「それぐらいのことは分かっている！」

私もまた思わず喧嘩腰でアレクの胸ぐらを掴んでいく。

「いいや、そなたは分かってはおらん！あの少女はエロスが寄越した敵なのだ！敵に情けをかけてしまえば、味方を殺すことになるのだぞ！」

アレクもまた私の胸ぐらを掴んでくる。

「そなた一人が犠牲になるのではない！儂もティーもメイもヒュプノスもモイラも反乱軍全ての者達が犠牲に成り果てるのだ！それが戦争だ！」

アレクは私を掴み挙げて押し倒し、馬乗りをしてくる。

「自覚しろ！ロスト！そなたとエロスの戦争は既に始まっておるのだ！」

私とエロスの戦争。

もう始まっているのか…。

「エロスはそなたが考えているよりも遙かに狡猾で残忍な男だ。奴は必ずそなたの心の隙間を狙って攻め立てていく。絶望に歪み、朽ち果てていくそなたを見てせせら笑うのだ…」

私の頬に熱い何かが落ちてくる。

「儂は…二度もそなたを…失いたく無いのだ…」

「お前はもしかして…この世界の私のことを…知っているのか？」

アレクはこの世界の私とも会っていたのか…。

アレクは立ち上がり、私の手を掴んで起こしてくれた。

「儂等エリニュスは反乱軍の最精鋭部隊である前にそなたの私兵だった。同盟軍の将軍となったそなたを補佐する形で戦場を駆け抜けていたのだ…」

この世界の私と共にアレク達はエロスに戦いを挑んでいたのか…。

だったら、この世界の私に最後の時も…。

「この世界のそなたもまた戦うことに対して抵抗を示し、本当に世話が焼けたものだった。それでも儂等はそなたに付き従った。そんなそなたが儂は好きだったからな。ティーもメイもな…」

……。

「だが、エロスはそなたの甘い部分に付け込んで悪魔を解き放ってきたのだ。ガイア様の宿敵、奈落の神タルタロスをな…」

タルタロス。

私を殺した相手だ。

私とアレク達は共にタルタロスに立ち向かったのだろう。

「タルタロスとそなたの戦いは熾烈を極めた。激戦、死闘、その言葉が生易しいと思えるほどの壮絶な戦いだ。だが、その戦いを制したのはタルタロス、予想外の結末だった。なぜならば、戦いの終盤ではタルタロスは追い詰められていたからだ。誰もがそなたの勝利を信じて疑わなかった。そなたの動きを止めたのはタルタロスの心臓となっていたある女性だった…」

確かヒュプノスは言ってた。

タルタロスは肉体を持たない神で依り代を手に入れることで原初神以上の力も発揮することが出来ると。

タルタロスの心臓とは依り代のことだ。

そして、依り代すなわち適合者は神の子であるという。

エロスに囚われている神の子はレテシア、エリー、アイリ、エル、アビス。

彼女達五人の中から選ばれてるのだ。

タルタロスの適合者になった者は誰だ？

「その女性の名は…」

彼女の名は…。

……。

「アビス・パラディスム」

……。

「アビスがタルタロスの心臓に…されたのか…」

「アビスは姉君を救うために単身エロスの元へと向かい、囚われてしまったのだ…」

アビス…。

……。

『私のことは大丈夫だから…』

……。

アビスが私の側から離れてエルの元へと向かったというのか…。

「そなたが何を思っているかは分からぬが、アビスは姉君を救いた

いと思っただけでは無い。そなたを救うためにも単身でエロスに立ち向かったのだ…」

「私を救うためだと？」

アレクは頷く。

「姉君さえ救えば、そなたは迷うことなく戦うことが出来る。負けることが無くなる。そう考えたのだ。結局それがエロスに付け込まれる切っ掛けになったことだから救いが無かったわけだが…」

「私が迷っていたからなのか…」

多分、アビスは私がエルのことで悩む姿を見るに見かねてしまったのだ。

だから、私の元から離れてエルの元へと行ってしまい、囚われてしまった。

「そなたは戦いながらもひたすら彼女の名を叫んでいた。彼女を殺すのを躊躇ったことで破れてしまった。それが第二次聖戦の敗因に繋がってしまったのだ…」

私がアビスを殺すことを躊躇ってしまったために同盟軍が負けてしまった…。

「エロスはそなたの弱点などお見通しだった。馬鹿で臆病で最強に甘いそなたの心の隙間を貫いたのだ…」

だから、私はエロスに負けてしまった。

そして、第二次聖戦で同盟軍を敗北に追い遣ってしまった。

それがこの世界の私の結末だったわけなのか…。

……。

「分かったか、そなたの甘さはエロスにとって格好の餌だ。それが分かっているからこそ、あの少女をそなたに差し向けたのだ」

アレクは私の肩を痛いほどに強く掴んでくる。

「鬼になれ、ロスト！そなたが甘さを捨て、鬼となれば最強となれるのだ！何者にも負けぬ最強の存在へと生まれ変わるのだ！そなたの大切な者達を守るためにも！」

馬鹿で臆病な平民その他である私に最強の鬼になれというのか…。

……。

『助けて、ロスト…』

……。

ピテスを殺せというのか…。

無理だ！

私は鬼にはなれない！

私にはピテスを殺すことが出来ない！

私は自分の肩を掴んでいるアレクの手を振り払う。

「ロスト殿…」

「私はピテスを見捨てることは出来ない…」

……。

「まだ分からぬのか！大切な者を失っても…」

「ピテスも私にとって大切な者だ！」

彼女とは僅かの時間しか過ごしていないが、楽しく喧嘩をし合った仲だ。

それに私に助けを求めていたのだ。

それで充分だった。

……。

「そなたは…第二次聖戦の悲劇を繰り返すつもりなのか？今のそなたではタルタロスに、いや、アビスに再び殺されてしまうぞ！そして…全てを失ってしまう…くっ…そなたはまた儂の前から…いなくなってしまうのか…うぅ…」

「私は鬼にはなれない。私は馬鹿で臆病で元平民その他にしか過ぎない。それがロストだ。済まない…」

私は涙を流すアレクを抱き締めた。

「そなたは…大馬鹿者だ…何処まで儂の世話を焼かせれば気が済むのだ…」

「本当に済まない…」

……。

……。

…。

アレクは涙を拭い、静かな眼差しで私を見つめてくる。

「そなたが選んだ道ならば、もはや何も言うまい。儂等エリニュスは命尽き果てるまでそなたに従うのみだ」

今度はアレクの方から私を抱き締めてくる。

「だが、次はそなたを死なせはせぬ。儂はそなたの死に様を見るのは懲り懲りだからな。死ぬのは年寄りである儂の役目。儂は命に代えてもそなたを守り抜こう…」

「アレク…」

アレクは魔法陣を展開させる。

「儂も行こう。止めて無駄であれば、付き従うのみだ」

「済まない…」

私は先ほどからアレクに謝ってばかりだった。

「ピロテースは儂の力で根元世界へと放置している。直に儂等の世界を嗅ぎつけるだろう。そこに向かうぞ、ロスト殿」

「頼む」

魔法陣が輝きだし、視界が暗転していく。

……。

私は必ずピテスを救ってみせる。

そして、生き残る。

今まで通りに…。

これから先ずっと…。

……。

だが、アレクの涙ながらの言葉が私の頭の中に瘤のように残っていた。

時の流れと共に大きくなっていく瘤のような…。

……。

第84話：The Beast that Shouted Love at

根元世界。

世界を一つの星と呼ぶのなら根元世界は無数の星が彩られる夜空。

それは世界の果て。

世界の真実が集約された世界。

私はピテスを見つけるためにアレクと共に根元世界を飛び回っていた。

彼女を放置していると夜空に浮かぶ星々が消され、闇に包まれた夜空となってしまうからだ。

それは永遠の闇。

私がいた元の世界もモイラがいる未来の世界も何もかもが消えた終わりの世界。

全ての命が消えてしまった終焉の世界。

……。

世界が終わってしまえば、ピテスは永遠の孤独へ苛まれてしまう。

『助けて、ロスト…』

ピテスは私に助けを求めていた。

美女では無いが美少女の願いを無下にすることも出来ない。

ピテスは個でしか生きられない個。

誰かが手を差し伸べない限り永遠に個でしかならない孤独な存在。

『個に影響を与えるためには相応の種でなければならない』

ヒュプノスは言ってた。

私は自分が種であるのか、個であるのかは分からない。

『貴公は孤児院の経営を出来るかどうかに対する返答に詰まった』

私は責任を持ってピテスを導けるのか？

元の世界と今の世界に揺れ動く私に？

鬼になれない臆病で甘い私に？

分からない…。

普段ならば、考えても仕方ないことは放置するのだが…。

これは放置してしまえば、近い内に飛んでもないことを引き起こすものとなる予感がしてくる。

頭の中に出来てしまった瘤が疼く。

アレクに叱られて以降、私の頭の中に小さな瘤が出来てしまった。
その瘤は私が考えまいとすればするほど大きくなっていく。
大きくなる瘤の重みに私は潰れそうになっていく。
頭が割れそうなほどに大きくなっていく。
そして、瘤は弾けてしまい、頭を壊してしまうかもしれない。
瘤が弾けるのは何時になるのだろう。
それまでに私は答えを導き出さねばならない。
ともかく今はピテスを助け出すことが先だ。
……。
また少し瘤が大きくなっていく。
「ロスト殿、ピロテースの位置が判明したぞ」
私と手を繋いで飛んでいるアレクがピテスの居場所を突き止めたようだ。
「何処だ?」
「あの世界だ…」

アレクが指し示す方向には無数に輝く星々の中で光が失われている星。

「幸いっていうのもあれだが、あの世界は既に滅びている。命無き世界だ」

アレクは意味ありげに私の顔を伺ってくる。

「運が良かったな。滅びた世界であれば、悠長な説得をすることもできよう…」

アレクの口調は何処か刺々しい。

まだ怒っているのだろう。

「儂は付いて行くと言ったが、今回は見守らせてもらおう。そなたのやり方で果たしてあの少女を救えるのかを見定めるためにもな…」

……。

「そなたのあの哀れな少女を救いたいという思いは尊い。だが、それは個人的事情の範囲内に限る。戦争は個人では収まらない。先ほども言ったが、そなたとエロスの戦争は既に始まっておるのだ。それをゆめゆめ忘れ無きように…」

「何とかしてみせる」

正直言って、アレクに手伝ってもらえば楽に行けると思ったが、甘かった。

アレクは私の考えを修正するつもりなのだろう。

「儂はそなたの従者だ。だが、それ以上に個人的な想いもある。故に従者の域を超えて踏み入らせてもらうぞ。ふふっ、覚悟しておくがいい。儂はそなた以上の頑固者ゆえな…」

「覚悟しておく」

これはピテスを取り戻すだけの戦いではない。

アレクとの喧嘩でもあるのだ。

だが、喧嘩ならば負けはしない。

そして、ピテスには食事合戦の時の雪辱を晴らさねばならないのだ。

待っているがいい、ピテス。

視界が暗転し、私とアレクはピテスのいる滅びの世界へと降り立とうとした。

……。

……。

…。

そこは残骸で埋め尽くされた世界だった。

かつてヒュプノスの余興で狂戦士達と死闘を繰り広げた死の世界に似た雰囲気を漂わせている。

この世界にピテスはいるというのか…。

「このまま真っ直ぐ行けば、ピロテースの元へと辿り着けよう。さて、儂はここまでにする。後はそなたの力で乗り切って見せよ」

「そうさせてもらう」

やはり一人で行かねばならないのか…。

だが、もう後戻りは出来ない。

私は決めてしまったのだから…。

「暫し待たれよ…」

「何だ…んっ」

呼び止められ、振り返って先に映ったのはアレクの青緑色の唇だった。

アレクの唇が私のそれに重なり、抱き寄せられていく。

「ちゅぽ…んっちゅう」

私はアレクの背中に腕を回した。

……。

「ちゅぱ…ふぅ…御武運を…ロスト殿」

「ありがとう…」

アレクは唇を離し、顔を赤らめて俯く。

私を修正したいと思って、敢えて見守る形を取っているが、本当は共に行きたかったのだろう。

アレクはせめて自分の想いだけでも私と共にあると示したかったのか…。

「行ってくる…」

私はアレクの視線を感じながらも歩んでいく。

……。

……。

…。

冷たい風が吹き荒んでいる。

アレクが指し示した方向へと宛も無く走っていく私。

どれだけ走ったのだろうか。

灰色に染まった世界の中で銀色に輝く光を目にする。

……。

それは銀色の短髪を靡かせる漆黒の少女。

欲望の果てに作られし仕組まれた命。

神をも屠る小さな天使。

その名はピロテース。

「ピテス…」

荒野の中で佇む姿は何処か儚く、教会で初めて出会った時の姿と重なった。

「ロスト…」

銀髪を靡かせ、血の涙を流した顔を見せてくるピテス。

私が彼女に流させてしまった罪の涙。

「何故、来たの？」

「お前を連れ戻しにきた」

風が止んでいく。

彼女の黄金瞳が無機質に私を見据えてくる。

「貴方は私と同じにはなれない」

それは拒絶の言葉だった。

「私は私だ。お前と同じにはなれない。当たり前のことだ」

「だから、私は独りになる。永遠に…」

私は一歩踏み出す。

「同じ存在はいない。いや、同じ存在がいては面白くないだろう。違う存在に巡り会えばこそ自分の存在が確認できるのだ。故に私は同じ存在はいらない。私は私だけがいればいい」

私もまた個の存在なのかもしれない。

だが、それはどうでもいいことだ。

「何故なの？私は同じ存在が欲しい。何故ならば、同じ存在でないと消えてしまう。だから…」

ピテスの黄金瞳に憂いの光が帯びる。

私はさらに一歩踏み出す。

「私は消えない。お前に消されたりはしない。だから、問題無い…」

「嘘、誰もが私にそう言った。だけどみんな消えてしまった。手を繋いで遊んでくれた友達も…懐いてくれた子犬も…美味しい食事を

くれたおばさんも…私を抱き上げて肩車をしてくれたおじさんも…森のせせらぎも…鳥の囀りも…緑に満ちた大地も…目映い世界も…何もかも全て…全て消えてしまった…だから、私は独りなの…これから先ずっと…」

無表情だったピテスに僅かながらの感情の揺らめきを垣間見えた。

後もう少しだ。

私は一歩を踏み出す。

後一歩でピテスの元に辿り着ける。

「お前は独りではない。私がいるからな。個は個でしかないが、個が二つも揃えば、種になる。世界が広がる。私と共に世界を広げよう、ピテス」

「ロスト…」

私はついにピテスの元へと辿り着く。

「貴方は…本当に…消えないの？」

「絶対に消えない…」

ピテスの黄金瞳が潤んでいる。

「私は…貴方と居ても…いいの？」

「当然だ…」

私は手を差しのばす。

ピテスはおそるおそる手を伸ばそうとする。

どうやら説得は成功し…。

『いいや、お前は独りだ。誰もお前の側に立つことは叶わない。なぜなら、それがお前の価値なのだからな…』

空が振るえ、圧倒的な威圧感と共に天から声が響いてくる。

『ピテロース、神殺し、世界食い、それがお前だ。私の造り上げた強くて美しき天使よ。私の声に耳を傾けろ…』

「ああ…あ…エ…ロ…ス…」

ピテスは耳を塞いで塞ぎ込んでいく。

確かエロスと言っていた。

天から響く声はエロスだというのか！

『世界の終わりを謳う天使よ。可愛いピテロース。私に聴かせてくれ。お前の滅びの歌を…。歌には伴奏が必要だ。目の前に生きた楽器がある。その楽器で嘆きの調べを奏でるのだ。お前の手でな…』

「ピテス！奴の声に耳を傾けるな！」

私は塞ぎ込むピテスに近づこうとする。

「来ないでぇえええええっ！」

ピテスの張り裂ける声と共に不可視の力で私は弾き飛ばされてしまう。

「ぐっ…ピテス…」

やっと辿り着けたのにまた遠くまで逆戻りにさせられてしまった。

エロスの妨害のお陰で…。

「私は独り、私は独り、私は独り、私は独り、私は独り、私は独り、私は…」

『そう、お前は独りだ、愛しいピテロース。だが、悲しむことは無い。孤高にして唯一絶対なる存在こそが大儀を掲げれる。世界はお前を祝福しているのだよ。さあ、私のために歌え…』

ピテスの足下を中心に大地が純白に染まっていく。

純白の大地。

塩の世界。

ピテスはこの世界全てを塩に変えるつもりなのか！

『歌え、ピロテース』

「奴の声に耳を貸すな！私の声を聞け！ピテス！」

残骸が風化したように崩れ、塩になっていく。
ピテスの黄金瞳が私の姿を捉える。
「ごめんなさい…」
ピテスの周囲の塩が盛り上がり、槍の形を成していく。
「貴方は消える…」
『消え去れ』
周囲の塩から嵐のように次々と槍が撃ち出される。
「くっ！」
私は上空へと飛び上がって槍の嵐を避けていく。
「誰も存在し得ない…」
『それが無だ』
槍は私を追うように軌道を変えていく。
私は防御結界を展開して防ごうとする。
「誰も避けれない…」
『逃れられない』

塩の槍は結界を浸食していく。

結界が塩に変わっている！

「貴方は地の塩」

『塩に還れ』

浸食されている結界を放棄して、飛び退く。

塩の槍が逃がさぬとばかりに結界を突き抜けて私の左腕を貫いていく。

「ぐあっ！」

呻いている私に雪崩れ込むように槍が次々と刺さっていく。

右大腿。

左肩。

右脇腹。

激痛で意識が遠のきそうだ！

霞む視界で悲しげに俯くピテスの姿が映る。

「全ては塩で成す…」

『塩は力なり』

俯くピテスの背後に物体が出現する。

塩で象った人形だった。

「グオオオオオオオオオッ！」

塩人形は瞬時に私の間合いに肉薄してくる。

速い！

脇腹、胸の二カ所に人形の拳がめり込む、喉奥から血が溢れてくる。

「ぐふっ…殴り合いならば…負けん！」

私も反撃に拳を繰り出すが、人形の顔面に炸裂した瞬間に骨が砕ける音がしてくる。

黄金の拳が砕けただと！

「抵抗は止めて…」

『無駄を悟れ』

周囲の残骸が塩になっていく。

全てが塩に還ってしまう。

塩人形を振り切って、ピテスの方へと突っ切っていく。

「ピテスぅううううっ！」

無機質な黄金瞳が私を捉える。

ピテスに掴みかかろうとしたとき、周囲には無数の塩人形が待機していた。

「「「「ゴオオオオオオオオッ」」」」

塩人形達の打撃と蹴撃の連打が私の身体に容赦無く打ち付けれていく。

「ごほぉっ！」

代人形達に殴り飛ばされ、ピテスの前から遠ざかっていく。

「お願い、私から逃げて…」

黄金瞳から血の涙が流れていく。

『逃げるのか？ロスト』

「エロス、きさまぁあああああっ！」

塩人形達が融合し、塩の巨人が形成されていく。

『潰せ』

巨大な拳が迫ってくる。

「オーディン！」

銀の光を放つ魔法陣が私を守る盾となって展開される。

『砕けよ…』

巨人の拳は容易く魔法陣を砕き、私の身体に打ち付けていく。

「ごおおっ！」

全身の骨が砕けそうだ…。

それにしてもオーディンがこうも容易く砕かれるとは…。

攻撃も利かない。

防御も出来ない。

まさに無敵で最強だ。

これが神殺しの力だというのか…。

戦ったことがないが、反乱軍が要注意としているニュクスよりも強大だとアレクは言ってた。

だが、ニュクスは無敵でも最強でも無いという。

もし、本当にそうであれば、タルタロスの下に付くはずがないからだ。

『散るがいい…』

塩巨人の身体から塩の飛礫が機関銃の如く放射されていく。

避けることも防ぐことも叶わず、ただ打ち付けれていくだけの私。

全身が血に染まり、もはや身体を満足に動かすこともままならない。

このまま私はやられてしまうのか…。

……。

『そなたには神が定めた摂理をねじ曲げる力があるやもしれぬ…』

……。

不意にアレクの言葉を思い出す。

私に神の摂理をねじ曲げる力か…。

摂理をねじ曲げれば、私の攻撃が通用し、奴の攻撃も防御出来る。

「やはり貴方も消えてしまう…」

『所詮、この程度か…』

身体が別の物質へと変わろうとしていく。

私は塩になってしまうのか…。

『それがお前の運命だ、ロスト…』

私の運命だと…。

塩になるのが私の結末だと…。

冗談では無いわ！

私は最初から最後までロストだ！

味付けの素材になってたまるか！

「貴方は地の塩」

「私はロストだ！」

身体を浸食しようとするものを弾き出す。

「なっ！」

『馬鹿な…』

私は思いきり振りかぶり、黄金の拳を繰り出す。

拳から発する風圧が塩の嵐を吹き飛ばしていく。

「私の黄金の拳は摂理すらねじ曲げる！」

「全ては塩で成す！」

塩の巨人が拳を振りかぶってくる。

『砕けろ！』

「砕けるのは貴様だ！エロス！」

巨人の拳と私の拳がぶつかり合い、その衝撃で塩が舞い散っていく。

巨人の拳に亀裂が走り、全身へと伝っていく。

「グオオオアアアアアアアアッ！」

巨人はただの塩へと還り、私は再びピテスの元へと突き進んでいく。

「そんな…塩にならない…」

ピテスは動揺していた。

「私は味付けの調味料になったりはしないぞ！」

「だったら…」

ピテスは祈るように合掌していく。

「私は世の光」

『光あれ』

合掌していた手を開き手鞠ほどの大きさの光球が生み出される。

光球は瞬く間に世界に広がり、全ての存在を消し去っていく。

それは如何なる防御をも無効にし、如何なる強固な物質をも消滅させ、絶対不可避の攻撃範囲であることから、まさに究極の大量殺戮魔法と言えよう。

だが、それは自然の摂理に従っている生物に対してであればの話だ。

私は摂理をねじ曲げることが出来る。

故にピテスの照射する消滅の光も私には通用しない！

滅びの世界は塵となり、根元世界へと還っていく。

「消えない…」

『律法破りか…』

律法破り？

エロスが気になる単語を言ってきたが、今はピテスが先決だ！

根元世界には私とピテスが浮遊している。

ピテスの元まで辿り着くのだ！

「私は地の塩！」

塩の吹雪が吹き荒んでいく。

触れれば、塩に還る不可避の塩の吹雪。

だが、今の私にとっては少々痛くて辛い吹雪に過ぎん！

「塩は形成す！」

中空に塩が生成され、大蛇、巨人、兵士、鳥、あらゆる生物が形取られていく。

塩の軍隊が一斉に私に向かって進軍してくる。

それは如何なる軍隊でも抗うことなく塩となって散らされてしまうだろう。

だが、私は群がってくる塩の怪物共を拳の連打で片っ端から打ち砕いて駆け抜けていく。

「光あれ！」

中空からあらゆる角度から一条の光が照らされ、私を焼き尽くそうとしてくる。

だが、今の私にとっては日光を虫眼鏡で収束させただけの少し火傷する程度のものに過ぎん！

「何故なの！」

ピテスはかつて無いほどに戸惑っていた。

「何故、消えない！」

如何なる攻撃でも塩に還らず、塵と還らず、消え去らない私を恐れているのだろう。

「消えない！」

初めて目にする自分の常識を越えた存在に畏怖しているのだろう。

「だが、それこそがお前が望んだ存在のはずだ！ピテス！」

怯えるピテスの元へと近づいていく。

「貴方は地の塩！私は世の光！」

「無駄だ！」

私は黄金の拳を振るって、光を掻き消し、塩を吹き飛ばしていく。

後少しでピテスに辿り着く！

「ひっ！塩は形成す！私は世の…」

「お前はピテスだ！」

ピテスの前に展開されていた塩の障壁を黄金の拳で砕き、血の涙に濡れたピテスの顔が見えた。

「これでもうお前は独りではない…」

私はピテスの血の涙を指で拭う。

「ロスト…」

血の涙が拭われ、綺麗になった顔で見つめてくるピテス。

「お前はもう個ではない。私がずっと付いている」

「ロ…ス…ト…」

ピテスの黄金瞳から透明の涙が零れていく。

ヒュプノスは個から種になる方法について確か言っていたな…。

「私はピテスを愛する！いや、ピテスを愛している！」

私は根元世界の隅々まで響き渡るほどの声は出す。

「ロスト…」

私の告白にピテスは黄金瞳が驚いたように見開く。

私が愛することで個ではなく種とする。

ピテスはモイラ達とは違い、どの世界にも属していない。

ならば、ピテスは私が責任を持って最後まで面倒を見る。

元の世界に帰る時も一緒だ。

私がヒュプノスが言う相応の種であるかはともかく、私は決めたのだ。

必ずピテスを独りにはさせない。

「お前は私の家族にする。ついでに酒池肉林の構成員になってくれ」

ピテスは体当たりを仕掛けるように力強く抱きついてくる。

「私は…ロストの家族になる！酒池肉林の構成員になる！私もロストを愛する！だから…私の側に居て…」

私はピテスの背中に腕を回して抱き締める。

「もちろんだ。ピテスの側にいる…」

「ロスト…ロスト！ロスト！うぅ…あああああっ…あっ！」

ピテスは今まで押さえてきたものを弾き出すように声を上げて泣いた。

「もう寂しくは無い。お前はもう独りではない…」

私は自分の胸に埋まっているピテスの頭を撫でていく。

彼女が泣き止むまで私は何時までも撫でていった。

……。

……。

…。

暫くしてピテスは泣き止み、私の胸から頭を起こし、上目遣いで見つめてくる。

「もう平気…」

無表情ながらも僅かなながら頬を赤く染めていた。

「ありがとう…ちゅ」

ピテスは首を伸ばし、軽く触れる程度に唇を重ねてきた。

「私のロスト…もう離さないから…」

ピテスは再び私の胸に顔を埋めていく。

これはこれでなかなか良いものだ。

根元世界の中で私とピテスは抱き締め合うのだった。

……。

『おめでとう、ロスト。どうやら無事にピテロースを手なずけたようだな…』

中空から憎たらしい野郎の声が響いてくる。

「エロス…」

『素晴らしい戦いぶりだったよ。まさか律法破りまで開眼するとはね。もっともまだ使いこなせていないようだがな…』

エロスは再び律法破りという単語を口にしている。

「律法破りとはいったい何だ？」

『言葉通りだ。如何なる法則をも無視できる絶対的な力。最強に相応しい神なる力だよ。お前は危機的状況による場面に限定して発動しているようだが…。ロスト、お前にはまだ迷いがあるのではないか？力を使うことを躊躇っているようにも見える』

エロスの言葉に何も言い返さない。

確かに私は迷っている部分がある。

アレクに叱られて頭の中に出来た瘤が少しずつ膨れてきている。

『ピロテースを捕獲できたことは褒めてやるが、だからこそ確信する。お前では私に勝てない。それどころか、辿り着くことすらも叶わないだろう。奈落の果てへと落ちてゆくのみだ…』

奈落の果て。

タルタロスのことを言っているのか…。

「やってみなくては分からないぞ」

『いいや、私には分かる。なぜならば、私はもう一人のお前なのだ

からな。だからこそ分かるのだ。まあ、これはほんの序章に過ぎない。お前は思い知ることになるだろう。真の絶望というものを…。そして、お前は私と同じになっていくのだ。もう一人のエロスとしてな…』

私がエロスになるだと？

「私は貴様には絶対にならない！覚えておけ！必ず貴様をこの黄金の拳で殴り飛ばしてやることをな！」

『覚えておいてやろう。もう一人の私よ。では、失礼させてもらおうか。お前には私の愛玩人形をくれてやる。それは私の理想であると共にお前にとっても理想であるはずだ。なぜならば、私とお前は同じなのだからな…はははははははっ！』

高笑いと共にエロスの声が聞こえなくなった。

「ロスト…」

「大丈夫だ。それより戻ろうか…」

ピテスは頷いて、背後に回り込み、私の背中におぶさってくる。

「ここが私の居場所…」

絶対に話さないと言わないばかりに私に首に両腕を回し、腰には両足を絡ませてくる。

背中にはピテスの胸が思い切り押しつけれてきて、脳髄に応える感覚を感じされていく。

私よりも背丈が高かったら、このようにおぶさることはできないだろう。

まさに体型を活かした場所取りだ。

「ロスト殿…」

私の背後から底冷えするような冷たい美声が響く。

「アレク、無事だったのか…」

「ふん、儂は忘れておっただろう。そなたにとって儂は口五月蠅い鬼婆だろうから仕方ないことか…」

アレクが怒っている。

どうすればいいのやらか…。

途方に暮れていた私に突然アレクが抱きついてくる。

私はピテスとアレク、美少女と美女に挟まれた形となった。

前後に感じる胸の感触が心地良いぞ…。

「大馬鹿者が…儂の心臓を止めるつもりなのか…心配させおって…」

「アレク…」

私はされるがままになった。

……。

……。

…。

そして、暫くして私とピテスはアレクの力で今の世界にある私の民家の所まで送ってもらった。

部屋はテーブルが倒れ、割れた皿が散乱したままだ。

「ロスト殿、今回の件は飽くまで運が良かったに過ぎん。次もこうなるとは限らぬ。それを忘れるではないぞ」

「分かった」

私の返事にアレクはため息をつき、胸ぐらを掴んでくる。

「いいや、そなたは分かってはおらん！故に身体で分からせてやる…んっ」

「むぐっ」

アレクの青緑の唇が私のそれを貪ってくる。

「むごっ！」

生気が物凄い勢いで吸い取れているぞ！

「ちゅうううううっ！」

今まで一番容赦無く搾り取っている！

「あっ…ロストが干物になってくる…」

全身が脱力感に支配されていく…。

「ロストの命が吸われている…」

ピテスは私に抱きついたまま冷静に私の状態を言ってくる。

「美味しそう…」

助けようとは思わないのだろうか…。

それに聞き捨てならないことも言っているような…。

「ぢゅうううううっ！」

天国が見えてきた…。

……。

「ぢゅぱ…ふふっ、これが儂のお仕置きだ。骨の髄まで猛省するがよかろう…」

倒れ伏す私を一瞥して無情に去っていくアレク。

私は無様に床に寝そべってしまう。

「疲れたの、ロスト…」

私が蛙が潰れたように這い蹲っていた状態に陥っても尚ピテスは私の背中に張り付いたままだった。

「問題無い。それよりも少し退けて貰えないだろうか？」

ピテスのような小柄な身体でも干からびた私にはこれ以上無いほどに重たいのだ。

「駄目、ここが私の居場所。絶対に離れない…」

ピテスは干からびた私を押しつぶすのではないかというほどに強くのし掛かってきた。

「それに私もロストの命を吸ってみたい…」

何ですと？

「お腹が空いたし…」

ピテスは私の顔をねじるように強引に自分の方へと向かせてくる。

私は食事合戦でピテスが築き上げた天井にまで届く皿の塔を思い出す。

ピテスは大飯食らいだった…。

それも規格外と言えるほどに…。

私の生存本能が警告を出している…。

「待て！ピテス！まずは話し合おう！」

「駄目、我慢できない…」

ピテスの象牙色の唇が私のそれに狙いを定めてくる。

「いただきます…」

「止め…むぐっ」

命が絞り尽くされていく…。

「ちゅうううううううううっ！」

何だか眠たくなってきたな…。

「ぢゅうううううううううっ！」

……。

……。

…。

そして、私はピテスという天使に手を引かれ、天国へと昇っていった。

……。

……。

…。

まだ現世に未練があるというのに死んでたまるか！

私は見事に復活するのだった。

「ちゅぱ…美味しかった…」

「そうか、良かったな…」

存分に私の命を吸い、ピテスは満面の笑みを見せてくれる。

無表情な顔も神秘的で悪くはなかったが、やはり笑顔の方が格別に良いものだ。

命を賭けた甲斐があったというものだろう。

ピテスは私の背中に自分の居場所を見出したかのように何時までも離れなかった。

第８５話：ピテス

私は子作り募集作戦の件で元の世界に連れていく酒池肉林の構成員を得ることが出来た。

……。

ピテスは今でも私の背中にしがみついたままだ。

彼女は確かに可愛いし、綺麗だ。

自分よりも体格が小さいことで抱きやすいし、上目遣いで見つめられたときには少しときめてしまう。

守りたいと思い、気合いを入れたくもなる。

家に連れ帰った後、アレクのお仕置きとピテスの補食で干物になっていた私に歌も歌ってくれた。

彼女の歌は教会の少年聖歌隊も斯くやの天使の歌声で思わず拍手をしてしまったほどだった。

これで大食らいでなければ言うこと無いのだが、それもまた彼女の魅力の一つなのだろう。

ちなみに私の生気を吸収したのは力の使いすぎでお腹が空いていたからであるらしい。

アレクに根元世界へ送還される前にあれほど馬鹿食いしていたはず

なのに何とも燃費の悪い食いしん坊のようだ。

私はピテスに抱きつかれて、分かったことが一つあった。

ピテスが何故、エロスの理想の女性であるかについてだ。

エロスは私と同じだ。

だから私と同じ体格なのだろう。

多分、なかなか理想の女性を見つけることが出来なかったのは背丈の問題だと思った。

エロスは自分が抱き込める体格の美女を求めていたかもしれない。

絶世の美女であれば、大抵は自分より背丈が高い。

背丈が低ければ、幼すぎて食指が伸びてこない。

その点、ピテスは小柄ながらも何処か憂いを秘めた大人びた顔であり、美形だ。

さらに胸が大きく、凹凸に恵まれた見事な肉体を持っている。

中性的であることから美少年のようにも見え、同性愛で男娼としても愛でることが出来るだろう。

そして、神殺しとして規格外とも言える戦闘力を誇っている。

まさにエロスにとって強く美しい理想の女性とも言える存在として

ピテスは生み出されたわけだ。

エロスの言う通り、理想の女性像という一点に置いては同じかもかもしれない。

私にとってもピテスは理想の女性のように思えている。

……。

要するに自分よりも小さくて綺麗で可愛くて強く中性的で大人びた雰囲気を漂わせ、凹凸に恵まれた成熟した肉体にそれらが芸術的なまでの整合性で融合された女を愛でたいという欲望の結晶がピテスだということだ。

形容詞と副詞が長くなってしまったが、一番の問題は「自分よりも小さく」だったのではないかと切実に思う。

だが、それを指摘してしまうと私まで悲しくなってしまうので考えないようにしよう。

「はむはむ」

背中に抱きついているピテスは時折、私の首筋に甘噛みをする。

甘えの仕草なのかもしれないが、僅かだが、生気も吸われてきている。

私はピテスの居場所と共に携帯食としての役割を果たしているのかもしれない。

先ほどまで干物になるほどに生気を吸っていたというのにどこまで大飯ぐらいなのだ。

お陰で私の首は象牙色の口紅と唾液でふやけかけている。

だが、心地よい感触を感じさせてくれるので無下には出来ない。

それにピテスの大人びた美声に誘われてしまえば、抗うことが出来ないだろう。

理想の女性というものは愛欲に溺れて身を滅ぼすという意味では厄介な存在なのかもしれない。

だが、数々の美女との修羅場を乗り越えた私ならば問題無い。

干物から回復した私はピテスを背中に張り付かせたまま、割れた皿を片づけていく。

今日は実に濃度が高い一日だった。

……。

モイラと毎日繋がり、骨と皮になりかけながらも反乱軍の本拠地に辿り着いたと思いきや、アレク率いるエリニュスに因縁をつけれて戦うことになった。

見事に勝利した後に神降ろしの契約として彼女達と情事を交わすことにもなった。

情事の中で私は彼女達に快楽を提供される代償として生気を散々に

吸われる羽目になってしまったのだ。

そして、反乱軍の頭目がかつての宿敵ヒュプノスであったことも驚きだ。

ヒュプノスからは世界の現状とかつての仲間達の訃報が知らされ、落ち込んでしまった。

そんな私をヒュプノスが身体で慰めてくれて、さらに気晴らしとしてアレク達と喧嘩祭りをして、再び情事を交わしていった。

その後は鉢合わせしたモイラと共にヒュプノスに言い渡された子作り大作戦を敢行したが、見事に不発。

ヒュプノスからは小難しい人類生存の云々の話を聞かされ、もう一度教会に向かえばピテスと運命的な出会いを果たし、色々あって今に至っている。

……。

改めて振り返ると本当に密度の高い一日を過ごしたものだ。

常人であれば、何度も過労死あるいは衰弱死していたかもしれないな…。

まあ、その日での一番の収穫はピテスという酒池肉林の構成員を迎えたことだろう。

彼女はどの世界にも属していないことから私の元の世界へと一緒に連れて行くことに問題無いはずだ。

「んんぅちゅぱ…ロスト…」

私の首から唇を離し、耳元から話しかけてくるピテス。

「どうした?」

「私は嬉しい…」

ピテスは強く抱き締めてくる。

少し息苦しかったが、何故か心地よかった。

だが、ピテスの身体が僅かながら震えていたことから少し不安げな気持ちが入り交じっているように思えた。

「だけど、恐い…」

「恐い?どうしてだ?」

ピテスは器用に私の身体にしがみついたまま背中から私の胸元へと移動してきた。

森の大木に伝って生きてる小動物みたいだな…。

「この幸せが壊れるかもしれない…」

ピテスは身体を震わせている。

彼女は本当に恐れている。

その理由はもしかすると…。

「エロス、なのか？」

ピテスは無言で頷く。

「あの人は全てを奪う…」

「全てを、か…」

……。

エロス。

もう一人の私。

もう一つの可能性。

奴は私に真の絶望を思い知らせると言ってきた。

「エロスは欲しいものは何が何でも手に入れようとする…」

ピテスは私の胸に顔を埋めてくる。

「特に相手が最も大切にしているものを欲しがってくる…」

相手が最も大切な者。

奴は既に私から大切な者を多く奪ってきている。

それでも奴は満足することなく際限なく奪い続けるのだろう。

何もかも全てを失うまで…。

「ロストはエロスとは違う。けど、エロスと同じ…」

私がエロスと同じだと?

「何処が同じなんだ?」

「分からない…」

ピテスは直にエロスと逢っている。

なぜならば、ピテスはエロスの欲望の果てに生み出された女だからだ。

だから、私はピテスに訪ねようと思った。

「エロスはいったいどんな奴だ?ピテスの思ったことを教えてくれ…」

ピテスは頷く。

そして、ピテスはエロスのことを語り出した。

……。

……。

……。

……。

…。

『ピロテース、私は美しいものを愛している。だから、数多の美しきものを愛でてきた。美女、美少女、あるいは美男も美少年もだ。だが、すぐに飽きてしまう。何故だと思う？』

……。

『分からない…』

……。

『考えろ、可愛いピロテース』

……。

『汚い部分が見つかるから…』

……。

『そう、どれほど美しく着飾っても醜い部分は容易く見出されてしまう。特に欲にまみれてしまえば、なおさらのこと。人は美しく着飾っても影では糞尿を垂れ流している。それこそが人の本質であり、醜さでもあるし、美しさでもある。だが、人は醜い部分をひたすら隠し続ける。それこそが人の悪徳であり美徳でもある。人に比べれ

ば、平然と醜き部分を晒す理性無き獣の方がよほど分かりやすく可愛いものだ』

……。

『醜いものが美しいということなの？』

……。

『それは議論の余地がある命題だが、私は考える。美しいものとは醜き中から見出すものであると。私はそれを宝探しと呼んでいる』

……。

『宝探し？』

……。

『そう、宝探しだ。子供が冒険に憧れ、不気味な森を駆け抜け、薄暗い洞窟を通り抜け、沼地を渡り歩き、その果てに輝く宝石を見つけだすことだ。困難な道のりの果てに宝石を探し出し、掴み取る。これ以上に無い達成感を得ると共に愛着が湧くものだろう。人の美もまた然り。醜き部分の中から美を見出すのはまさに宝探しだ』

……。

『美しいものは宝探しをして見つけることなの？』

……。

『そうだ。美を宝石と呼ぶのであれば、美を持つ人は宝石を収める宝箱。私はその宝箱を神々の贈り物だと考えている』

……。

『神々の贈り物？』

……。

『神々の贈り物とは聖書に記されし神の箱、もしくは神の壷とも呼ばれている。その箱は決して開けてはならないもの。なぜならば、箱の中にはこの世のありとあらゆる災いが眠っているからだ。だが、ある神は好奇心に負けてしまい、箱を開けてしまった』

……。

『災いが箱から出てしまったの？』

……。

『災いは箱から飛び出し、世界は病んでいった。それに気づいた神は箱を閉じたのだ。そして、箱の中には希望が残された』

……。

『厄災が眠っているはずの箱に何故、希望があるの？』

……。

『良い質問だ、愛しいピロテース。これには様々な解釈が成されて

いる。代表的なのは希望とは未来を予見する力、すなわち未来が見えてしまう災いと解釈もされている。未来が予見できれば、人は努力をする意味を見失ってしまう。結果が分かってしまうのだからな。そして、未来が分からなければ、人は期待を抱き、希望を持つ。それが希望と呼ばれる災いの意味だ。だが、私は言葉通りに解釈する。そう、希望だ。希望こそが人が隠し持っている真なる美なのだ』

……。

『人は神の箱で美しさは希望、醜さは災い…』

……。

『その通りだ、美しいピロテース。私は神の箱を開けて、災いの果てにある希望を見てみたい。だからこそ私は人を絶望に突き落とすのだ。絶望とは希望の証だ。希望をひた隠しする者には絶望を与え、希望を炙り出す。憎しみの刃を晒す者はその先に愛しき思いを抱いている。悪を成すことで善を見出す。美もまた醜き中に埋没している。私はそれを掴み取るのだ』

……。

『けど、人は綺麗に着飾って、汚い部分を隠している。希望は無い…』

……。

『希望が災いと呼ばれることと同じだ。ひた隠しにするものは人の本性。それこそが宝石だ。それこそが希望だ。それこそが美だ。ただ美しく着飾っている者は容易く宝石を見つけだせてしまう。だか

ら、すぐに飽きてしまう。だが、あるがままに美しく強き者はより輝ける宝石を奥深く隠し持っている。私はその者を嬲り尽くして、宝石を掴み取ることが楽しみで仕方ないのだよ…』

……。

『容姿は二の次なの？』

……。

『もちろん美しい容姿も愛しいと思っている。見た目だけの美もまた重要だ。これは物質的な美だな。私が今まで説明したことは本質的あるいは精神的な美とでも言っておこうか。物質的な美は見出すのは容易だが、儚く移ろいやすい。散りゆく桜のように…。本質的な美は見出すのは困難であるが、代わりに果てること無き永遠の光を照らす。そして、何よりも得難きものは物質的な美と本質的な美を兼ね備えた完全なる美。まさに神の如き美の化身というべき存在。これは探しても見つかるものではない。完全な美など存在しえないのだからな。だが、存在しなければ創造すればいい。自らが神となって…』

……。

『神になる…』

……。

『創造主となり、自らの望む人形を生み出すのだ。ピロテース、お前のようにな…』

……。

『私は別に美しくない…』

……。

『いいや、お前は美しい。物質的な美も本質的な美も全て、そう、全てを兼ね備えている。お前の身体を構成する細胞の一つ一つが宝石なのだよ。私が宝探しの末に手に入れた数多の宝石を錬金し、合成した完全にして永遠なる美だ。ふふっ、病める者、健やかなる者、醜き者、美しき者、全ての宝石がお前の中にあるのだ。ふはははははっ…そうだ。お前こそが私の最高傑作なのだ。さあ、麗しきピロテースよ。私のために歌ってくれ…』

……。

……。

……。

……。

…。

「それがエロスという男。全てに美を見出して手に入れるもの…」

おかしい。

ピテスが言うエロスの人物像に矛盾が生じてくる。

全てに美を見出すことこそが奴の楽しみであるならば、男を絶滅させようとはしないはずだ。

それにピテスはエロスが美女や美少女だけでなく美男や美少年も愛でると言った。

ならば、男を滅ぼすことはありえない。

「全てに美を見出す奴が何故、男を滅ぼした?」

「それは誤解。彼は男を滅ぼすことを望んではいなかった…」

……。

エロスは男を絶滅を望んでいなかっただと?

では、何故?

「男の絶滅を望んだのは…」

……。

……。

…。

「カオス」

……。

……。

…。

アーテの親友にしてエロスと並び、ヴァルキリアの始祖と呼ばれた伝説の女傑。

彼女が男の絶滅を望んだというのか…。

確かにガイアは言っていた。

エロスの愛を得たいがために自分の理想である女性解放から男性絶滅へと変貌させていったと…。

だが、ガイアもモイラも誰もがエロスは女好きで男は不要という考えを抱いていると言っていた。

「カオスはエロスを自分のものにしたかった。だから、彼女は彼から女を遠ざけるために男を滅ぼしていった…」

女を遠ざけるために男を滅ぼしただと?

普通は女を遠ざけるために女を滅ぼす考えに至るのではないか?

「彼女は自分だけがエロスを本当に愛していることを思い知らせるために男を滅ぼし、彼が男を嫌悪し、女を愛玩する者であることを世界に知らしめた…」

確かに男を絶滅させ、女を愛玩する男だと世界に知らしめれば、誰もエロスを本当に愛することなどありえない。

自分こそが本当にエロスを愛しているのだと思い込むことが出来る。

……。

何てことだ…。

この歪んだ世界を生み出したのはエロスよりもむしろカオスの方だ。

カオスこそが歪みをもたらす存在だということだったのだ。

だが、カオスは第二次聖戦では姿を現していなかった。

アレクもカオスは表舞台から姿を消したと言っていた。

「カオスは男を滅ぼすだけに飽きたらず、女も滅ぼそうとした。だから、エロスによって彼女は封印された…」

カオスがエロスによって封印された。

それでカオスは表舞台から姿を消したということになるのか…。

そうなれば、またしても矛盾が生じてくる。

カオスが封印されたにもかかわらず、この世界の男はほぼ絶滅している。

エロスが男を滅ぼすつもりが無ければ、他に誰がいるというのだ？

「けど、封印されたカオスの意志を受け継ぐ者がいた。彼女はタル

タロスの腹心であると共にカオスの腹心でもあった。彼女の名は…」

……。

……。

…。

「アパテー」

……。

……。

…。

奴の名は覚えている。

覚えている…。

四肢狩りアパテー。

脳無しアパテー。

セシリアを狂わせた者。

グレイブを生ける屍に変えた者。

そして、タナトスの感情を壊した者。

奴の名は絶対に忘れない…。

「アパテーはタルタロスの腹心であり、カオスの腹心。そして、狂科学者。彼女はエロスに技術提供とタルタロス陣営の仲介を務める代わりにカオスの代行者であることを認めさせた。男を実験のために搾取したいために…。だから、この世界の男は滅びた…」

ピテスは身体を震わせる。

「アパテーは世界全てを自分の実験場としか捉えていない…」

ピテスの黄金瞳に恐怖と共に悲哀の感情が帯びているように見えた。

アパテーに対して恐怖の感情を抱くのは分かる。

だが、悲哀の感情はいったい？

もしかすると…。

「ピテス、アパテーはまさか…」

「エロスが私の父であるなら、アパテーは母…」

……。

何故、今まで気づかなかった…。

アパテーはエロスの実験の助手だとアレクから聞いていた。

ならば、ピテスを生み出す実験にアパテーが関与していてもおかし

くないはずだ。

「私はエロスの理想の人形。だけど、カオスの代行者であるアパテーは私の存在を許さなかった。そして、彼女は私に刺客を差し向けた。だから、私は…」

私はピテスを抱き締めた。

ピテスは自分の母親に殺されかけたということだ。

だから、エロスの元から逃げ出した。

「エロスは貴方の元に行くことを私に伝えて、逃がしてくれた…」

エロスは形はどうあれピテスのことを確かに愛していたのだ…。

それでもう一人の自分である私にピテスを託したのか…。

エロスのことが分からなくなった。

エロスは何故、私にピテスを託したのだろうか?

ピテスはエロスの理想の女性であったはずだ。

エロスはアパテーに殺されないようにするためにピテスを逃がした。

そして、私の元に行くようにピテスに伝えた。

……。

私はもしかすると重大な何かを見落としているのだろうか？

分からない…。

分かっていることはエロスの思惑はどうあれ、私はピテスを守る。

それだけは確かなことだ。

「ロスト…」

ピテスの潤んだ黄金瞳が私を見つめてくる。

「どうした？」

「抱いて…」

私はピテスの言葉に唖然とする。

「ピテス？」

「抱いて欲しい…」

ピテスは力強く私にしがみついてくる。

「私はもうお前の元を離れないのだぞ。独りにはならない。だから、子供を産むことは…」

「違う。私は貴方が欲しい…」

……。

「貴方だから…貴方の子供を産みたい…」

「ピテス…」

ピテスは私の手を取って、自分の胸を掴ませる。

「私はロストの理想の女性になりたい…」

私とエロスは違う可能性と言えど同じ存在。

だから、私にとってピテスは…。

「ロスト…」

理想の女性なのだ…。

私とピテスは唇を重ねる。

「んぅちゅぱちゅる」

ピテスは儚げな雰囲気に反して力強く私の唇を求めてきた。

彼女の激しい思いを唇を通して伝わってくる。

私は彼女の思いに応えるように唇を通して返していく。

……。

私は仰向けに倒れて、ピテスが上に跨っていく。

「私に任せて…」

彼女は黒光りする着物を脱ぎ捨て雪のように白い肌を見せてくる。

小柄ながらも母性溢れる胸。

儚げながらも力強くてしなやかな身体。

柔と剛、静と動を併せ持った完全なる肉体美。

ピテスは私に獣のように覆い被さって唇を吸ってくる。

激しくも包み込むような柔らかさ。

ピテスの想いが形となって私の身体に伝ってくる。

「うぐっ！」

彼女の呻き声が耳に留まる。

血の匂い。

「ピテス、お前はまさか…」

「ロス…ト…これでやっと…同じになれた…」

黄金瞳から涙を零すピテス。

エロスはピテスに手を出していなかった…。

「私は…貴方に出会うために…生まれてきた…」

ピテスは苦痛に顔を歪ませながらも満ち足りた笑みを零していた。

「どういうことだ？ピテス…」

「分からない…でも…分かる」

ピテスは身体を動かしていく。

生々しいほどの強い締め付けが来る。

私もまたピテスの胸をまさぐり、腰を浮かせていく。

「はぁ…はぁ…ロスト…私の全てを…貴方に！」

私とピテスは互いに激しく身体を動かし、求め合っていく。

「私は…地の塩！貴方は…世の光！あああああっ！」

「うおおおおおおおおおっ！」

……。

……。

……。

……。

…。

『敵を見誤るな、ロスト…』

……。

……。

……。

……。

…。

『ピテスを頼む…』

……。

……。

……。

……。

…。

誰の声だったか…。

ピテスは私の胸の上に身を預け、寝息を立てていた。

私はエロスにピテスを託された。

さらにエロスはピテスに手を出していなかった。

自分の理想の女性であるにもかかわらずにだ。

エロスの思惑が果たして何であるのかは見当が付かない。

だが、確かなのは私はピテスを守るということだ。

ピテスからはエロスの内部事情をかなり深い部分まで聞かせてもらった。

だが、この話は私の胸の中に留めておくことにする。

エロスの事情がどうあれ、敵であることには変わりないのだ。

アレクは言っていた。

敵に情けをかければ、味方を殺すと。

それにエロスは狡猾で残忍であるとも言っていた。

だが、ピテスの話を聞いていると少し違う気もしてくる。

確かにエロスは残酷かもしれないが、それだけではない何かがあるような気がしてくる。

……。

どの道、エロスを倒さねば未来が無くなる。

エロスのことは恐ろしいが、私は戦う。

私は覚悟を決めたのだ。

「ロス…ト…」

ピテスが寝言で私の名を言ってきた。

私はピテスの寝言に応えるように抱き締める。

……。

頭の中に根付いている瘤がまた疼いてきた。

私の中にある迷いを食べて瘤が大きくなってきている。

瘤の疼きを余所に私は眠りにつくのだった。

……。

第８６話：Ｃｏｎｆｅｓｓｉｏ

ピテスの件が無事に解決し、反乱軍本部の一日を何とか生き延びることが出来た。

だが、私はよほど災難の女神に愛されてしまっているのか、早速一難去ってまた一難という出来事に出会すことになる。

それはピテスとの濃密な情事を終わらせて朝を迎えた時だった。

……。

……。

…。

「出動要請か…」

「はい、ロスト様」

私の家に訪ねてきたのは反乱軍参謀長であるエクリア・レイラントだった。

彼女は私に何かを隠していて、しかも他人行儀な態度で接されている。

おそらく、この世界で死んでしまった私に何かが関係しているのだろう。

「モイラとエリニュスはどうした？」

「モイラはヒュプノス様の補佐。エリニュスは反乱軍に加盟する諸国への出迎えにいっています。いくつかの国が重い腰を上げたようですので…」

援軍が来るというのか…。

アレクの話によるとエロス軍にいるニュクスの存在に恐れて、動かないと聞いたのだが…。

「何処の国が援軍として来るのだ？」

ニュクスを恐れないとはよほど戦力に自信があるのだろう。

大変頼もしい限りである。

「フェイロン共和国です。リー・ロンファン将軍が手勢を率いて反乱軍に加入してくれるとのことです」

……。

リー・フェイロン。

愛称ロン。

初代百合構成員。

生きていたのか…。

「反乱軍は貴方の存在を明るみにしました。それで彼女が真っ先に参戦をすることを宣言したのです」

「そうか…」

私を父として慕ってくれたロンが参戦してくれるのか…。

確かに大変頼もしい限りだ…。

だが、聞き捨てならないことがある。

「反乱軍はなぜ私の存在を明るみにしたのだ?それにどう宣伝したわけだ?」

考えてみれば、私はこの世界では死んだことになっているのだ。

ならば、私のことをどのようにして宣伝したのかということになる。

救世主のように奇蹟の復活を遂げたとでも言ってのだろうか?

「アースガルズの神武闘式の優勝者黒騎士ロースの名で宣伝したのですよ」

黒騎士ロース。

懐かしい肩書きだ。

ヴァルキリアの使者でケールの従者として、その名を名乗ったのだ。

「神武闘式の優勝者は不在という形を取り、黒騎士ロースの存在は

闇の中になったわけです。そして、モーモス殿が優勝。彼女は王を名乗り、黒騎士ロースの存在を消して、ブリュンスタッドの英雄であるロスト様を直属の騎士へと迎えたわけです。来るべき第二次聖戦へと向けて…」

「そうか…」

モーモスは王になる決心をしたのか…。

オイジュス様と話し合いをして決着を付けて前へ進んだのだろう。

モーモスが王になった姿をどうだったのだろうか？

さぞ、神々しい姿だったに違いない。

それにしても、確かに黒騎士ロースが私と同一だと明るみに出ていなければ、その名を使うことは可能だ。

モーモスの直属の騎士になったということは私はヴァルキリアを離脱したということになる。

そして、ロンはロースの名前に反応して参戦することを決めたというわけだな。

……。

「さて、これから案内しようと思っているのですが…」

「どうしたのだ？」

エクリアの眼光が私の背後を指している。

「どうしたの？」

氷のような冷たい美声が首筋に響く。

そういえば、私の背中にはピテスが張り付いていたのだった。

朝起きた時には既に私の背中にしがみついていて、決して離れようとはしなかったのだ。

「その子供は誰なのですか？もしかして誘拐した…なんてことはありませんよね？」

「それは断じて否だ！」

こんな形で私は犯罪者にはなりたくはない。

エクリアは鋭い眼光を私に浴びせてくる。

「では、誰なんです？」

「相手に名前を訪ねるときはまず自分から…」

……。

「エクリア・レイラントです。それで誰ですか？」

ピロテースの問いに激高することなく受け流すとは…。

どうやらかなり戦闘力を増しているようだ。

「ピロテース…ロストの妻…」

……。

「何と言いましたか？」

「ピロテース…ロストの妻…」

……。

「ピロテース…ロス…」

「もう言わなくていい」

エクリアから凄まじい威圧感を感じてくる。

さて、どう言い訳したらいいのやらか…。

「裏切り者…」

「なっ！」

ピテスの一言にエクリアは顔を赤らめていく。

「ピテス、何を言っているのだ？」

私は後ろを振り向き、背中に張り付いているピテスを見る。

彼女の黄金瞳は冷たい光を放って、エクリアを見据えていた。

エクリアはピテスの言葉によほど驚いたのか呆然としている。

「私は多くの世界を見てきた。だから分かる。彼女の目は裏切り者の目…」

ピテスは私にしがみつく力を強めてくる。

まるで私を守るかのように…。

「ま…まあ、いいでしょう。付いてきてください…」

エクリアはピテスの言動を追求することなく背を向けて歩いていく。

いや、この場合はエクリアが追求されたくないがために受け流したというべきか…。

「逃げるの？」

そんなエクリアにさらにピテスが追い打ちをかけていく。

ピテスの声に肩を震わせて立ち止まるエクリアだったが、再び何も無かったかのように私の家から出ていく。

私はエクリアの後へと付いていく。

「私の居場所はここ…」

ピテスは私の背中から離れないので、仕方なく付いていかせること

にした。

……。

……。

…。

ヒュプノスの屋敷の次に大きい建物の前へと辿り着く。

「この建物は何だ？」

「ここは収容所です。付いてきてください…」

収容所。

囚人や捕虜を管理している牢獄の家。

そんな物騒な場所に何があるというのか？

「エリニュスを従えた貴方でしたら、恐らく手なずけれるかというヒュプノス様の判断です」

「私にその収容所で最も危険な何者かを従えろということか…」

エクリアは頷き、収容所の中へと足を踏み入れる。

「ロスト…強い力を感じる…」

ピテスは収容所を静かに見据える。

「分かるのか？ピテス…」

「多重閉塞世界…」

多重閉塞世界？

疑似世界のようなものなのだろうか？

私は収容所へと足を踏み入れる。

ふと違和感を感じた。

空気が代わってきている。

収容所そのものが巨大な生き物であるかのような途轍もない威圧感。

「何をしているのですか？さあ、付いてきてください」

エクリアが立ち止まって私を待っている。

「すまない…」

私はエクリアを追いかけていく。

「多重閉塞世界…」

ピテスは再び同じ言葉を呟いていた。

……。

中に入った時には得も知らない威圧感を感じたが、中身は特に変わったものではなかった。

虚ろに目を開けている女。

獲物を狙うような目つきで睨んでくる女。

突然笑い出す女。

狂戦士訓練施設やグレイブやタナトスの有様を見た私にはもはや有り触れた光景だ。

私は悠然と歩いていく。

「さすが…かなりの修羅場を潜ってきているようですね。それにしても…」

エクリアはピテスを見る。

私が落ち着いているのは納得できても、ピテスが全く動揺を見せないことに不審がっているようだ。

それにしてもエクリアはオネイロスという神ではあるが、それほど高位ではないようだ。

高位の神であれば、ピロテースの強大な力を嗅ぎ取ってもおかしくないはずだからだ。

暫く歩き、エクリアは巨大な扉を前にして立ち止まる。

私はヒュプノスの屋敷にあった巨大な扉を思い出す。
その扉はタナトスの居る疑似世界へと通じていた。
この巨大扉もまた…。

「多重閉塞世界…」

ピテスは再び曰くの言葉を呟く。

「なぜ、子供の貴方がそのことを…」

エクリアは劇的に反応してくる。

「ピテス、多重閉塞世界とはいったいどんな世界だ?」

「究極の封印魔法…主に上級神や邪神を封印する際に使用する魔法…」

上級神や邪神を封印する魔法なのか…。

ならば、この扉の先には上級神並の実力者が囚われているということになる。

「原初神の座を賭けた神々の戦い、真神戦争でガイアがタルタロスに使用した封印魔法も多重閉塞世界…」

まさかタルタロスを封印した魔法でもあるのか…。

「何故、そこまで知っているのですか？」

エクリアが凄まじい形相で顔を近づけてくる。

ピテスはそんなエクリアを余所に話を進めていく。

「エロスがカオスを封印した魔法も多重閉塞世界…」

「エロスって…貴方…本当に何者なの？」

エクリアは目眩がしたかのように身体をふらつかせてくる。

それにしてもカオスを封印した魔法も多重閉塞世界だとはな…。

ガイアは確かエロスではなくカオスに破れてしまったと言っていた。

カオスの力はタルタロス以上である可能性があるということだ。

そのカオスをエロスは封印することが出来たことからエロスはそれ以上の強者だということになる。

何とも厄介なことだ…。

「私も多重閉塞世界に封印されたことがある…」

……。

ピテスの言葉にエクリアが口を開けたまま固まっている。

「何者ですか…」

エクリアは剣先をピテスに向けてくる。

「ピロテース…ロストの妻…」

「そんなんではありません！何処から来たのですか！」

……。

「裏切り者…」

ピテスの言葉にエクリアの剣先が震えている。

「貴方の事情を言えば…こちらも話す…」

……。

「行きましょう…」

エクリアは扉に魔法陣を展開させ、開門の呪文を唱える。

扉が開き、光が刺してくる。

光は私達を包み込み、新たなる世界へと誘っていく。

「また逃げるの？」

光に包まれる最中、ピテスの呟きが耳に響いた。

……。

……。

…。

灰色の空が視界に留まっていく。

今でも雨が降りそうな曇り空であり、雨水の匂いがしてくる。

タナトスがいる世界とは比較にならないほどの暗くじめじめした世界だった。

「こちらです…」

虚空に忽然と巨大扉が出現し、エクリアは魔法陣を展開させ、開門の呪文を唱えていく。

疑似世界の中で作られた疑似世界。

疑似世界を何重にも展開させて、収容する世界。

世界そのものが牢獄ということか…。

まさに究極の封印魔法ということだな…。

その後、私達は疑似世界の扉を何度もくぐり、最深部の世界を目指していった。

……。

……。

……。

……。

…。

「もうすぐ辿り着きます…」

黙々と扉を開いていったエクリアが久しぶりに言葉を紡いでくる。

「これほどの封印魔法が使えるのであれば、何故今まで使わなかった？」

「多重閉塞世界は複数の術者で行うものです。それに発動まで時間がかかります。発動する最中、敵の動きを止めなくてはいけません。タルタロスの動きを止めれる者はこの世界で死んだロスト様以外にいませんでした…」

やはり、都合良くいくことでは無いのか…。

何度も世界を潜り、灰色だった空は既に暗闇に染まっていた。

「この扉を潜れば、辿り着きます…」

エクリアは扉を背に私の方へと振り向く。

ピテスに裏切り者と呼ばれ、私の眼から避けるように扉を潜っていたエクリアが正面から見据えてくる。

「告白します、閣下…」

エクリアはロスト様では無く、閣下と呼んだ。

……。

……。

…。

「私は閣下を裏切りました…」

……。

……。

…。

闇夜に満ちた世界でエクリアの告白が玲瓏に響き渡る。

ピテスは何も言わず背中からエクリアを見据えているだけだ。

「第二次聖戦前に閣下はアースガルズに付きました。だけど、私はヴァルキリア側。そして、ヒュプノス様の命により、閣下を監視するためにお側に居させて頂いた者です…」

ヒュプノスから遣わされた監視役。

それは別に珍しくも何も無い。

エクリアは元々はヒュプノスの目付役で親衛隊長だったのだから。

「閣下がアースガルズに付いたのであれば、私は閣下に敵対する立場。だから、もし閣下がヴァルキリアから離れた場合に報告して、アースガルズを襲撃する手筈になっていました。パラディスムと同様に…」

「それが切っ掛けで第二次聖戦が発動したのか…」

エクリアは頷く。

「さらにピフレストにそのことを情報を流したのも私です。当時ヒュプノスの背後にいたエロスが私に言ったのです…」

……。

『ビフレストにいるモロスにロストがヴァルキリアに蹂躙されてしまうと伝えろ。そうすれば、奴から出向いてくるはずだ…』

……。

またしてもエロスが影にいるというのか…。

「そして、アースガルズはピフレストとヴァルキリアに挟撃される形になりました。閣下は単身でビフレストへと行き、私はヴァルキリア側に付き、エロスから提供された精鋭部隊を率いてアースガルズへ進軍しました。撃退されましたが、引き替えにタナトス様、アイリウス殿、エリアルト殿、レテシア殿を捕獲したのです」

タナトスとエリーとアイリを捕獲…。

「そう、私が閣下から大切な者を奪ったのです…」

「エクリア…」

ならば、タナトスが壊れてしまう切っ掛けを与えたのが、エクリアなのか…。

エクリアは剣を抜き、私に差し出してくる。

「どうぞお受け取り下さい。そして、私の首を落としてください。ヒュプノス様には既に伝えています…」

……。

私も子供ではない。

エクリアの立場ならば、当然のことだ。

だが、それでも…。

それでも！

「躊躇うことはありません。私は閣下に対して最もやってはいけない行為を働いてしまいましたから…」

「しかし、お前は軍人でだから仕方無く…」

エクリアは軍人だ。

だから…。

「閣下は何処までもお優しい。ですが、時には鬼になることも必要かと存じます。確かに閣下の仰る通り、私は…小官は軍人でした…」

……。

「軍人は如何なる命令をも遂行するもの。確かにそれが軍人として正しき有りようです。私がただの軍人で有れば、騙された方が悪いと開き直っていたでしょう…」

「だったら、何を悔いているのだ？」

エクリアは涙を流してくる。

「小官は閣下の家族になりました。閣下のお側にいることを誓いました。私が閣下に最もしてはならぬこと、家族を裏切ったのです！」

……。

私はエクリアの何を見ていたのだろうか…。

彼女は家族であった私を裏切っていたことを悔いていた…。

ピテスはエクリアの告白を黙って聞いている。

エクリアは自嘲じみた笑みを見せる。

「小官は閣下を籠絡するために送られた刺客です。だから、あの時、

小官は閣下に抱かれるように仕向けました…」

……。

『閣下が小官に勝ったときにはこの身を捧げます！』

……。

あの唐突な誘いは私を籠絡させ、意のままに操ろうとするつもりだったのか…。

「ですが、閣下はとても優しくて、私を家族のように扱ってくれて…」

……。

「閣下と過ごした日々は楽しかった。けど、辛かった。いつか閣下をヴァルキリアの中枢へと否が応でもはめ込まなければならなかったのですから…。そして、選択の時が近づいてきました…」

……。

『ロスト殿、貴方に王になってもらいたい』

……。

もしかして、モーモスが私にアースガルズの王になることを進言したときなのか…。

その時のエクリアは口数が少なく、控えめになっていた。

「小官は閣下はヴァルキリアの者だと言いたかった。けど、閣下はヴァルキリアのことをよく思われていない。だったら、どうするべきか？軍人としてヴァルキリアにいることを進言するのか？家族としてアースガルズへと移ることを勧めるか？」

エクリアはあの時から苦悩してたのだ…。

家族として共に生きるか？

軍人として職務を全うするのか？

「そして、小官は軍人であることを選びました。家族としての私は貴方を裏切ってしまったのです…」

エクリアは俯き、涙を零している。

何故、もっと早く気づかなかった…。

少しでもエクリアの立場を考えていれば分かるはずだった…。

それなのに私は…。

「これが私の罪。さあ、閣下。いえ、ロスト様、小官を…私を…断罪してください…」

エクリアは両腕を開いてくる。

「貴方様を裏切った愚かな女に血の鉄槌を下してください…さあ…」

私はエクリアから受け取った剣を構える。

手が震えてくる。

息が苦しくなってくる。

「ロスト…」

ピテスは背中から降りて、私を気遣うように顔を伺ってくる。

「何を躊躇うのですか?私は貴方様を裏切ったのです。裏切り者には死の制裁を…」

「エクリア、私はお前を…」

エクリアは露悪的な笑みを見せてくる。

「エクリア?」

「ふふっ…あはははははっ…結局は…私達は家族では無かったということです。だから、裏切った。それだけなのですよ、お優しい閣下…」

私が構えている剣に向かって、歩んでくるエクリア。

「ヒュプノス様から聞きました。貴方様の大切な御方、タナトス様の感情が壊れてしまったと…。私の精なのですよ。エロスにタナトス様を差し出したのは私なのです。私がタナトス様をエロスに売ったのですよ!閣下!」

エクリア…。

「第二次聖戦を引き起こす切っ掛けを作ったのも私！ケール殿、オイジュス殿、モーモス殿、クロエ殿を死なせる原因を作ったのも私！アビス殿、レテシア殿、エリアルト殿、アイリウス殿が囚われる原因を作ったのも私！タナトス様、グレイブ殿、セシリア様が壊れる切っ掛けを作ったのも私！そう、全部私なのですよ！閣下！」

エクリアは後一歩踏み出せば、剣先が自分の喉を貫く位置へと立ってくる。

「全て、そう、全て私が原因なのです！同盟軍が敗北したのも！何よりも閣下がタルタロスに殺されてしまったのも私、私が原因なのですよ。私は貴方様の全てを奪ったのです。それでも私を家族と呼んでくれるのですか？閣下…」

エクリアは悲しげな笑みを零す。

「私を殺すことで怒りの炎を灯してください。閣下の大切な方々を奪った全ての敵に向けて…。さあ、私を殺してください！閣下！」

私は剣を振りかぶる。

「ロスト…彼女を殺すの？」

無表情であるはずのピテスが戸惑っている。

私はもう自分を押さえられなかった…。

エクリアを私の姿を見て、全てから解放される歓喜の笑みを浮かべ

た。

「うおおおおおおおおおっ！」

許せない！

「そうです、閣下。さあ、私を殺して…ロスト…」

エクリアは全てを受け容れるように目を閉じる。

「ロスト！」

「エクリアぁあああああああああっ！」

そして、剣を振り下ろした。

……。

……。

……。

……。

……。

……。

…。

「何故、ですか？」

「ロスト…」

エクリアとピテスは呆然と立ちつくしている。

残骸と化した世界の中に私は佇んでいた。

私は剣を無我夢中に振るい、苛立ちをぶつけるようにして世界を、自分を、痛めつけた。

身体の至る所から血を流している。

自分の嫌いな痛みを全身に纏って戒めたかった…。

許せない…。

私は自分が許せなかった…。

エクリアを追い詰めてしまった自分に…。

私は血を滴らせながらエクリアの方へと振り向く。

「エクリア、お前は職務を全うしただけだ。私に何一つ許しを請う必要は無いのだ…」

「何を言っているのですか？私は家族を裏切ったのですよ！そんな私が許されるは…あっ…」

私はエクリアを黙らせるように抱き締める。

「むしろ悪いのは私だ。お前は軍人だった。だが、私は何者でも無い、ただのロスト。だから、私が気遣うべきだったのだ…」

プリュンスタッドやヴァルキリア、アースガルズを渡り歩いていた中途半端な私が悪かったのだ。

「エクリアの言う通りかもしれない。私はお前を家族だと言いながら気遣うことなく放置していた。お前がどれほど悩んでいるかを考えようともせずに…」

モーモスが私にアースガルズの王になれと進言したときに真っ先に気づくべきだったのだ。

「そんな…閣下は…いつも優しくして…」

「優しいだけでは何も救えない。家族を持つには相応の種でなければならない。私は自分の立ち位置を決めなければならなかったのだ。だが、それを先送りにしてしまった。それでお前を苦しめる結果になってしまったのだ！」

……。

「ふっ、これではアビスに愛想尽かされて去られてしまっても仕方ないな…。選ばなかったから私はタルタロスに、アビスに殺されてしまった。そして、同盟軍を敗北に追い遣ってしまった。お前の精ではない。私の精で自分の大切な者を失ってしまったのだ。だから、エクリアは悪くない。悪くないのだ…」

アレクの言う通り、私は大馬鹿者だ…。

もう一つ気づくべきこともあったのだ…。

「お前はヒュプノスを守りたかったのだろう？」

「わ…私は…」

エクリアはヒュプノスを幼少の頃から教育係として付いていたことは聞いていた。

彼女にとってヒュプノスは…。

「ヒュプノスを…家族を守るためだったのだろう。だから、エロスの言いなりになるしかなかった。違うか？」

「閣下…」

私はさらに強くエクリアを抱き締めていく。

「辛かっただろう？私がふがいないばかり相談することが出来ず、独り板挟みになってしまって…。二つの家族の狭間で揺らいでしまって…。私がお前をそうさせてしまったのだ。私こそがお前に断罪される立場だったのだ…」

「そんな！私こそ…私がいけなかったんです！私が…」

エクリアは私の背中に腕を回してくる。

「済まない、エクリア！私がふがいないばっかりに苦労かけてしまって…」

「閣下…私こそ…申し訳ありませんでした…」

私とエクリアは互いに抱き締め合い、涙するのだった。

……。

……。

…。

「仲直りした？」

抱擁する私とエクリアを覗き込むように伺うピテス。

表情が心無しか不機嫌そうだ。

「二人の世界を作っている。私は仲間はずれなの？」

どうやら忘れ去られたことに不満を持っているようだ。

「済まない…」

「も、申し訳ありません！」

私とエクリアは同時にピテスに頭を下げて謝ってしまう。

……。

……。

…。

それからエクリアは私の足下に跪いていた。

「閣下、お手を…」

私はエクリアに手を差し出した。

「閣下のお心遣い痛み入ります。ですが、小官は自分が許せません。これからは閣下を身命を賭してお守りすることを改めて誓わせて頂きます…ちゅ」

エクリアの唇が私の手の甲に押しつけられる。

「んっ」

ヒュプノスと同じ騎士の誓いだ。

手の甲から唇を離し、エクリアは潤んだ目で私を仰ぎ見る。

「私は貴方様を裏切らぬ剣となり、この身を捧げます。永久に…ちゅ」

再びエクリアは私の手の甲に唇を押しつけてくる。

自分の証を私の手の甲に刻みつけるように…。

「ちゅぱ…ふぅ…閣下のお心は尊き者で御座います。ですが、時には非情になることもお忘れ無きように…。いずれ非情であらねばな

らない時がやってきます。本当の意味で御覚悟を決めなければ、全てを失ってしまいます。諫言ほどお許し下さい…」

「肝に命じておく…」

エクリアはアレクと同様の諫言を賜ってきた。

私は覚悟を決めたつもりでいるが、まだそのように見られていないということか…。

「心配いらない…」

黙って聞いていたピテスがエクリアが接吻した反対の私の手を取る。

「ロストは私が守る…んちゅ」

ピテスはエクリアの騎士の誓いを真似るように私の手の甲に接吻する。

「ちゅぱ…だから、私はロストと何時までも側にいる…」

ピテスの大人びた黄金瞳が私を射抜いてくる。

「ピロテースも閣下の騎士になったのですね…」

エクリアはピテスの様子を子供が背伸びしているのだろうと思い、微笑ましげに見守っていた。

どうやら都合の良いように解釈してくれているようだ。

これでもし、ピテスと関係を結んでいることが知られれば説教地獄を喰らわされる羽目になるだろう。

「では、行きましょう、閣下。この先に反乱軍の戦力となるかもしれない者が囚われています」

扉を開こうとしたときにピテスがエクリアの手を握る。

「エクリアはここに残った方がいい…」

「な、何故、ですか！」

ピテスのいきなりの発言にエクリアは戸惑う。

私が何かを言おうとしたところ、ピテスの黄金瞳が向けられる。

……。

口出しは無用だと言いたいのか？

私は黙って見守ることにした。

「ここから先は危険。エクリアは残った方がいい…」

ピテスの言葉は威圧的で凍えるように冷たい美声だった。

「子供の貴女が何を言ってるのですか！私はこれでも…」

「オネイロス…」

エクリアは自分の神の名を告げられて目を見開く。

「貴女では足手纏いになる。この先に囚われている者は私と同じ力を持っているから…」

「貴女は何者なのですか？」

エクリアの問いに無表情だったピテスが初めて笑みを見せてくる。

同姓でも顔を赤らめてしまうような妖艶な微笑みだった。

「私はピロテース…ロストの妻…ピテスと呼んで…」

「ピテス…」

エクリアはピテスの眼光を前にして力が抜けたように膝を折ってくる。

ピテスの雰囲気に呑まれたのかもしれない。

それにしてもピテスはエクリアに愛称を呼ぶように促していた。

エクリアの本当の気持ちを知ったことで認めたのだろう。

「ここはピテスの言う通りにしてくれ、エクリア」

「か、閣下…申し訳ありません。先ほど命を賭けると申したばかりですのに…」

ピテスの力は反乱軍が最も危険視しているニュクスよりも強大な力

を持っているのだ。

そのピテスが警戒するほどの者がこの扉の先に待っている。

そして、ピテスと同じ力を持っているのであれば、ここでエクリアを待機させた方が良いだろう。

ピテスは再び私の背中にしがみついていく。

「行こう、ロスト…」

私のピテスの促しに頷き、扉を開いていく。

「お気を付け下さい、閣下…」

エクリアの見送りに私は手を挙げて、応えた。

扉の先には闇夜の空が広がっていた。

私が闇に満ちた世界へと突き進んでいくと扉が閉じていく。

どうやら逃げられなくなってしまったみたいだ。

僅かだが、身体が震えてくる。

これは恐怖なのか？

「ロスト、私が付いている…」

震える私に自分の存在を確認させるように強く抱き締めてくるピテ

ス。

「ありがとう…」

今後、私はピテスに頭が上がらないかもしれないな…。

……。

さて、何者が待ち受けているのか？

ピテスと同じ力を持っているということから途轍もない実力者なのだろう。

苦戦するかもしれないが、何とかなるだろう。

出来れば、戦うことなく平和的な話し合いが出来れば良いが、それは高望みなのだろう。

私の人生で何事もなく、平和的に終わった試しが無いのだから…。

だが、それでも前に突き進まねばならない。

覚悟を決めたのだから…。

第87話：Inventionen und Sinfonien

星々の煌めきが一切無い真なる闇夜。

闇一色の空で月が不自然なまでに禍々しい光を放っている。

現実世界を忠実に再現した疑似世界ではない。

この世界の主、すなわち囚人の心証を反映しているのではないかと思われる歪な世界。

私はピテスを背負いながらも枯れ草が生えている荒野を歩いていく。

その時だった。

楽器の音色が響いてくる。

この音色はチェンバロ。

かつての芸術が栄えた時代に愛好されていた古楽器。

聞き覚えがある無味乾燥な音色。

アースガルズで受けた快楽が伴った屈辱が脳裏に過ぎってくる。

決して忘れることは無いだろう呪いにも似た甘美なる思い出。

まさか、多重閉塞世界に囚われている者というのは…。

「ロスト…」

私はピテスの声に促されるように前方を見据える。

『ぐああ…おおおおおお…』

『がが…おおおおお…うぅ』

荒野から漆黒の鎧を纏った兵士達が次々と這い出てくる。

兜からは赤い眼光が不気味に煌めいていた。

「奴らは何者だ？」

「ヘル…あるいは…ラスール…」

ヘルは聞いたことがある。

確かアーテが使用していた魔法。

見知った者の戦闘能力を忠実に再現して遣わす恐ろしい魔法だ。

この黒い兵士達はヘルと同様の種類だというのか…。

「来る…」

チェンバロの演奏に合わせるように漆黒の兵士等は一斉に矢を放ってくる。

「避けて…」

ピテスの言葉に従い、私は柔軟体操宜しくの回避術で矢の嵐をかいくぐっていく。

「奇妙な動き…」

「華麗な動きと呼べ！」

黒の軍勢に突撃し、拳を振るっていく。

だが、思いの外強固な鎧に拳が弾かれてしまう。

これはまさか…。

「奴は私と同じ力の持ち主…」

如何なる攻撃も弾く防御。

それに先ほどピテスは避けろと言い、防げとは言わなかった。

つまり…。

「自然の摂理に従った攻撃と防御は無意味だということか！」

「その通り…」

弾かれた拳を庇いながら、黒光りする剣や槍を振るってくる兵士達の攻撃を何とか交わしていく。

黒の兵士達、一体一体の力量が半端では無い。

ピテスが生み出した塩人形並の戦闘力だ。

ピテスを倒した時の感覚を思い出せ！

摂理をねじ曲げ、如何なる攻撃も防御も思うがままになるように望め！

自分こそが世界の法則だと思いこむ力を発揮するのだ！

弾かれた拳を再び握りしめて、漆黒の兵士に向かって振りかぶっていく。

黄金の拳よ、唸れ！

漆黒の兵士は振り下ろしてきた大剣と共に砕かれていく。

今度は攻撃が通じるようになった。

攻撃さえ通じれば、もはやただの雑魚に過ぎん！

「さすがロスト…」

ピテスの賞賛に私は気を良くし、次々と群がってくる兵士達を殴り砕いていく。

私はピテスが造った塩人形相手に激戦を繰り広げたことがあるのだ。

同様の相手、あるいは類似した相手に何度も苦戦するロストではない！

「ヴィーザル！」

天まで届く巨大剣を生み出し、横薙ぎを繰り出す。

漆黒の軍勢はまとめて薙飛ばされ、血路が開かれていく。

「今が好機…」

「分かっている！」

私は開かれた道を駆け抜けていく。

その先にあるのは薄汚れた古城。

あの建物の中からチェンバロの音色が聞こえてくる。

出来れば、何事も無く平和的に話し合えたらと切に願っている。

反乱軍が捕らえている囚人が私の予想通りの者だとすれば、とんでもなく危ない存在だからだ。

ピテスは同じ力の持ち主だと言っていたが、それだけではない。

「もう少しで辿り着く。頑張って、ロスト…」

ピテスと同じ種類の人種だ！

故に危険な存在だ！

「何か、不快なことを考えてるような気がする…」

「気のせいだ…」

迫り来る兵士達を巨大剣で薙ぎ払いながらも古城の扉を目指していく。

心無しか私が古城に近づくに釣れて、無味乾燥の音色が熱情を迸るような響きへと変わってきている。

私を誘っているような熱を帯びた音色。

「ロストを誘っている…何だか許せない響き…」

ピテスは情熱的になっているチェンバロの音色をお気に召さないようだ。

古城の前に辿り着き、扉に向かって拳を振るおうとする。

だが、扉は私を誘うように重々しく開いていくのだった。

私は古城に足を踏み入れていく。

追撃していたはずの漆黒の軍勢はいつの間にか姿を消していた。

私はチェンバロの音色に導かれるままに歩いていく。

……。

……。

…。

私は古城の最上階へと進んでいく。

チェンバロの響きが大きくなってくる。

私はついに屋上に続く扉に辿り着く。

この先に彼女がいるはずだ。

「行こう…」

ピテスに促されるままに扉を開いていく。

扉の先には月の光に照らされながらチェンバロを奏でる純白の鎧を纏った騎士がいた。

やはり、貴様だったのか…。

ビフレスト皇国の守護神。

ヴァルキリア帝国最大の脅威と謳われた女将軍。

そう言えば、確かこの世界の私はビフレストに単身で攻め入り、モロスを捕虜にしたのだったな…。

まさか多重閉塞世界に囚われていた者がモロスだったとは…。

確かにピテスの言う通り、エクリアでは足手纏いになる相手だ。

「モロス…」

「ロスト…久方ぶりの再会…私の凍結された思考は氷解していく…」

演奏を止め、マントを靡かせて振り向くモロス。

それと同時に私の背中から降りていくピテス。

「貴方は確かに死亡した。だけど、貴方は存在している。偽物では無い。私の魂が貴方の真実を告げている。貴方は間違いなく本物…私を暴走させる唯一無二の存在…」

純白の鎧は光の粒となって消え、黒の法衣を身に纏った美女が姿を現す。

肩まで切り揃えた深遠なる闇を映し出す漆黒の髪。

全てを黒く塗る潰すかのような漆黒の口紅。

それらの全てを際立たせる純白の肌。

アースガルズで初めてであった頃と何も変わらない容姿。

一度しか逢ったことが無いにも関わらず、彼女に完膚無きまでに搾り取られてしまったことは鮮明に覚えている。

しかも、自分以外の女性が私に近づくことを極端に嫌っていることも…。

「久しぶりだな、モロス…」

モロスの黒曜石に瞳から透明の滴が零れ落ちていた。

「モロス？」

私はモロスの涙を初めて見る。

「愛欲の対象…ロスト」

無味乾燥だった彼女が涙を流す姿に私は戸惑ってしまう。

「私は貴方を抱擁したい…」

私に近づこうとするモロスの前にピテスが立ちふさがる。

モロスは感情が読めない黒曜石の瞳をピテスに向けていく。

「異物の存在を確認…ロスト…説明を要求する…」

「私はピロテース…ロストの妻…」

私が応えるよりも早くピテスがモロスの質問に答える。

ピテスの応えにモロスの黒曜石の瞳が暗く輝いていく。

対するピテスの黄金瞳もまた毒々しく光り輝いていた。

「復唱を要求する…」

「私はピロテース…ロストの妻…」

……。

何故だろうか、急に寒くなってきた…。

「私はピロテース…ロス…」

「沈黙しろ…異物…」

空気が冷えてきた。

これは不味い前兆だ。

何故か分からないが、そう思ってしまった。

「私はピロテース…ロストの妻…」

ピテスはモロスの威圧的な言葉に構わず復唱してきた。

……。

この寒々とした感覚が何であるか理解出来た。

二股をかけていた男が証言現場を押さえられて狼狽えている気持ちだ。

私は別にモロスを酒池肉林の構成員として迎えていないから別に二股ということはないのだが…。

「私はロストと愛液を交換した関係。異物が存在する空間は皆無。早急に離脱を要求する」

モロスとは強引な形であるが、関係を結んでしまっている。

それで二股をかけていないという言い訳は通用するはずがない。

「私の身体の中にもロストの欲望が溜まっている。それに私はロストにとっての理想の女性…貴女のような根暗な女に出る幕は無い…」

ピテスはモロスに対して一歩も退く様子は無かった。

モロスの周囲の空間が歪んでくる。

「敵対行為だと確認した。貴女を抹殺対象と認識する」

ピテスの周囲にある物が塩に変わっていく。

「受けて立つ。私は貴女を敵として殺すことを誓う」

互いの殺気が吹き出し、二人の間にある空間に亀裂が生じている。

何と言うことだ…

二人の女が私を巡って争っているという美味しい立場のはずなのに全然嬉しく無い…。

「貴女は地の塩」

「物質変換、対象を無機物へと上書きさせる」

ピテスからは塩が吹雪が起こり、モロスからは鉄塊の嵐が巻き起こる。

私は古城の屋上から飛び降りる。

飛び降りた瞬間に古城は爆破され、上空に白と黒の光が何度もぶつかり合っていく。

「貴女の塩は塩気を無くし、塵となる。塵に還れ」

「大気の物質変換、燃焼、焼却、焼失、対象を焼死、火刑、火葬にて処分」

ピテスは塩を閃光の如く放出、対してモロスは灼熱の業火を雷雲の如く流出させてくる。

目眩がするほどに壮絶な光景だ。

さらにピテスとモロスは互いに手勢である塩人形と漆黒の鎧を召喚し、矢と魔法を雨霰と巻き起こしている。

私は多くの規格外の化け物と戦ってきたが、第三者として化け物同士の戦いを見るのは初めてだった。

まさに最終戦争と呼ぶのに相応しい激戦だ…。

私は今、歴史的瞬間をこの目で見ているのかもしれない…。

「ぬあっ！」

鉄塊や塩の槍などがこちらに向かって落ちていく。

これは戦場でいう流れ矢みたいなものだ。

私は間一髪さけて荒い息を吐いていく。

感心している場合ではないな…。

このままではこの疑似世界が崩壊するのも時間の問題。

この世界が崩壊すれば、上層の世界、すなわちエクリアが待機している世界にも被害が及んでしまう。

「私は世の光！光有れ！絶えざる光を持て！永遠なる光を照らせ！」

「高次存在へと変形！熱量上昇！熱線を放出！消失！消滅！対象を消去する！」

互いの身体が光輝き、大小入り乱れた光の波動を打ち合っていく。

戦いがもはや神の領域に達している。

それに世界が蜂の巣のようにぼろぼろに成り果ててしまっている。

このままだと冗談抜きで世界が崩壊してしまうぞ！

何とか二人に喧嘩を止めることは出来ないのか！

……。

喧嘩を止める？

喧嘩？

そうか、喧嘩なのか…。

私は笑いが込み上げてきた。

喧嘩を止めるにはどうすればいいのか？

決まっている。

より強い喧嘩で収めればいいのだ。

喧嘩番長を名乗っていた頃にもよく仲間内で喧嘩をしていたものだった。

その時に私の黄金の拳で黙らせていたのだ。

私は拳を握りしめて、上空で喧嘩している二人を見る。

「ロストは私の夫…だから、貴女は諦めて…」

「断固として拒否する。貴女こそロストを放棄して私に委託して…」

……。

まずは話し合いで解決の糸口を見つけよう。

最初から暴力で訴えるのは良くない。

私は二人の戦場へと飛び立っていく。

……。

……。

…。

「二人とも止めろ。冷静に話し合うのだ」

私は傷だらけになりながらも何とか二人に間に割り込むことに成功する。

戦場で敵陣の大将の元に辿り着くよりも遙かに困難な道のりだった。

二人は私の声に気づき、攻撃を一旦止めて睨み付けていく。

「止めないで、ロスト…愛することは守ること…守ることは戦い…」

「沈黙して傍観することを推奨する。私の熱愛は闘争…略奪…殺戮の果てにある…」

……。

こめかみに血管が浮き出るのを感じた。

「喧嘩は止めないのか？」

だが、平和的に話し合えば…。

「邪魔しないで…」

「妨害しないで…」

……。

考えてみれば、私が原因で争っているのだ。

ならば、私も当事者ということになる。

いや、私が元凶と言っても過言ではない。

その私が喧嘩の仲裁をすることが出来ようか？

私は争いの種を蒔いた責任を取らねばならない。

このままだと私が原因で世界は崩壊し、エクリアを巻き込むことになる。

そうなれば、エクリアの説教地獄では済まなくなってしまう。

私は血が滲むほどに拳を握りしめる。

喧嘩は喧嘩でもって制する！

それが喧嘩番長としての私の矜持だ！

二人に戦いぶりは身をもって十二分に見せてもらった。

「ピテス！モロス！」

私は二人の間に再び割り込んでいく。

「貴女は地の塩！私は世の光！塩は光となり、光は塩に還る！光に果てよ！塩に呑まれよ！貴女の全てを塵と化せ！」

ピテスは全てを塵に還す塩と光の波動を全身から放出していく。

「貴女の世界を初期化する！破壊の果てに再生を！消滅せよ！絶滅せよ！壊滅せよ！全滅せよ！貴女の存在を殲滅させる！」

対して、モロスは全てを闇に還す漆黒の光の波動を撃ち放っていく。

「喧嘩両成敗だ！貴様等！」

黄金の拳よ、唸れ！

私の拳が二人の刃と交差する。

世界は光に包まれていった。

……。

……。

……。

……。

……。

……。

…。

「負けた…」

「敗北…」

私は地べたで伸びている二人を見下ろしていた。

「私に喧嘩で負けたのだから言うことを聞いてもらうぞ」

私は自分の力が強くなっているのを感じた。

摂理をねじ曲げる力さえ用いれば、二人掛かりでも力押しが十二分通じる。

この力を使えば、エロスの元に辿り着けるかもしれない。

……。

モロスは蹌踉ける身体に鞭打って立ち上がってくる。

「ロスト…貴方は…私と…この場所に永住する方が幸福…」

「モロス…」

モロスは黒曜石の瞳に哀しみの光を宿していた。

「私は確認している。タルタロスは強大無比…世界も…次元も…全部を初期化する…私は貴方が初期化になる状況に対する耐性は皆無…死んで欲しくない…」

モロスもまた私の最後を目撃していたのか…。

「逃避することを懇願する。世界からも…次元からも…私と永久に世界の果てで生存することを希望する…」

タルタロスの力はモロスを恐れさせるほどに強大だと言うのか…。

だが、そのタルタロスは…。

「済まないが、その申し出を受けることは出来ない…」

私はタルタロスの中に囚われているアビスを解放しなければならない。

タルタロスが私の元の世界にいるアビスに影響を与える前に…。

タルタロスがエロスと同等の存在であるならば、全次元全世界に置いて唯一無二の超越者であることが予想させる。

もし、奴を放置してしまえば、全次元全世界に存在するアビスが影響される可能性がある。

根元世界に存在するアビスの全ての可能性がタルタロスに食い尽くされてしまうことになってしまうのだ。

だからこそ、この未来の世界は私にとって一番好機を掴める世界。

自分でも最低な発想だと思うが、やらねばならない…。

「ロストの意志は強固…解凍することは不可…私は沈黙するしかない…」

モロスは俯く。

「ロストは死なない…」

ピテスもまた蹌踉けながらも立ち上がってくる。

「ロストは私の夫…夫を守るのは妻の役目…だから、死なない…」

「ピテス…」

ピテスはか細い手を私の拳に添えてくる。

「ロストは必ず生き残る…」

モロスも手を添えてくる。

「私もロストの生存を促進するために努力する。守護する。死守する。ピロテース、休戦を提案する…」

「受け容れる。私のことはピテスと呼んで…」

ピテスとモロスの間で休戦協定が結ばれた。

これで反乱軍の戦力が大幅に増強することになるだろう。

一件落着と言ったところか…。

「ピテス、私は共同戦線の追加を提案する。このままロストに敗北したままでいるのは屈辱…」

「受け容れる。夫は妻の尻に敷かれる者だと聞いたことがある…」

漆黒の瞳と黄金瞳が獲物に狙いを定めてくる。

二人の瞳に映っているのは私。

……。

とりあえず家に帰って休みましょう。

今はエクリアを待たせているのだ。

場所が悪すぎる。

私は二人の言葉を無視してエクリアが待機する世界に通じる扉に向かおうとした。

「逃がさない…」

「逃亡は許可しない…」

か細くも力強い手が私の肩に痛いほどに食い込んでくる。

「それに私はお腹が空いた…」

「私の身体が栄養補給を要求している…」

彼女達の底冷えした声に私は戦慄を覚えてしまう。

二人が対峙したときから思っていたことがあった。

ピテスとモロスは力が似ているだけではない。

性格も似ているのだ。

そうならば、もう一つ厄介なことが似ている可能性も出てくる。

「貴方を食べたい…」

「貴方を補食したい…」

二人共壮絶なまでに食いしん坊であることだ…。

「待て、二人掛かりではさすがの私も…ぐほっ！」

二人の拳が私の両脇にめり込んでいく。

私は二人に身体を預けるように倒れてしまう。

「妻の求めに応じるのも夫の甲斐性だというもの…ちゅ」

「私の愛欲は時として暴力を行使することも辞さない…ちゅ」

倒れ込んだ私の顔に象牙色と漆黒の唇が貪っていく。

「ちゅぱちゅうっ…とても美味しい…」

「ちゅちゅううちゅぱっ…大変美味…」

暴力的なほどまでに生気を吸い尽くそうとしてくるピテスとモロス。

私は仰向けに倒れ、ピテスは下の口を私の顔に、モロスは上の口で私の男の証を呑み込んでいく。

「むごごおおっ！」

ピテスの下の口が意志を持っているかのように食いついてくる。

「もっと暴れてくれたらいい…」

ピテスは私の抵抗を嘲笑うように下の口を乱暴に擦りつけてくる。

私が暴れれば暴れるほど脱力感が増す。

言葉通り妻に尻を敷かれる夫の状態だ。

「ぢゅるぢゅるぢゅるぢゅる」

一方、モロスは私の男の証を食いちぎるのではないかというほど激しく食らいついてくる。

しかも口の締め付けが痛いほどに強い。

だが、それ以上に快楽が全身に迸っていく。

正直言ってアレク達三人の搾り取りよりも激しすぎる。

「ちゅぱ…次は本格的に摂取する…」

モロスは上の口を男の証から離し、今度は下の口で私の男の証を呑み込もうとしてくる。

「接合…あうぅ！」

「むごおおおっ！」

上の口以上に締め付けが襲ってくる。

「はぁはぁはぁ…あぁあああっ！ロストの生命が…私の中へ…流出されていく！」

「モロス…次は私がやるから残して置いて…」

快楽と苦痛が私の脳髄を苛んでいく。

「むごおおおおおおおおっ！」

……。

……。

…。

絶頂を迎えたモロスは名残惜しげに私の男の証を解放する。
そして、ピテスもまた私の顔を解放し、今度は男の証を呑み込もうと腰に跨いでくる。
「私を満たさせて、ロスト…はぅ！」
「ぐおおおっ！」
男の証がピテスに呑み込まれていく。
締め付けはモロスほどにきつくは無かった。
だが、私の男の証に応じた力で程良く締め付けてくる。
その絶妙な感触はまさに名器と呼ぶに相応しいとも言える程だ。
まさに私のために生まれた理想の女性というべきなのか…。
「れろぉちゅぷ…」
モロスはピテスによってべとべとになった私の顔を拭うように舌を這わせてくる。
「ロスト…ロスト…貴方の塩で私を満たしてっ！あああああっ！」
ピテスは私の上で踊るように激しく身体を動かす。
「ちゅうううううっ！」

モロスは蛸の吸盤のように私の唇に吸い付いて離れない。

「あああああああああああっ！」

そして、ピテスの絶叫と共に私の塩が吹き散らされていった。

……。

……。

……。

……。

……。

…。

私は背中にピテスを背負い、モロスに肩を借りながら、エクリアが待機している世界へと戻っていく。

エクリアは安堵の表情を見せるものの私の顔を見て、即座に鬼の形相へと早変わりしていった。

背中に張り付いているピテスは私の愛用手鏡を取り寄せて、私の姿を映しだしてくれる。

首筋から顔にかけて漆黒と象牙色の唇が塗りたくられ、頬が削り取られたかのような痩せ細った顔。

……。

何故、毎回後始末を忘れてしまうのだろうか…。

私自身が十二分と言えるほどの証拠となってしまっている。

「閣下！そこのお二人もその場に直りなさい！」

エクリアは顔を真っ赤にして腰から鞭を取り出してくる。

「私はロストの言うこと以外は…」

「断固として拒否す…」

エクリアは無言で鞭を地面に振るい、切れのある音を鳴り響かせる。

「直りなさい…」

……。

「分かった…」

「了解…」

ピテスとモロスはエクリアの迫力に押され、正座させられしまう。

世界を滅亡させるほどの強者共を鞭一発で黙らせるとは…。

「いいですか、閣下！貴方は確かにヒュプノス様が下した任務を無

事に果たしました。それに付いては申し分は有りません。ですが、これは一体どういうことなんですか？ピテスはまだ幼いのですよ。いくら女好きの閣下とは言え、もう少しは節度を持って行動してください。何もかもが愛があれば許されるとは限りません。女性を抱くというのは責任を持つということなのですよ。閣下は戦場では強者ですが、それ以外では全くと言っていいほどの役立たずです。強ければ、女性を射止められると思ったら大間違いです。そもそも閣下は…」

……。

「一夫多妻というのは女性を皆平等に愛することを旨にしなければなりません。一人でも特別扱いはあってはならないのです。ですが、女性の立場からして皆愛する人にとって自分が一番と望みたいものなのです。そして、夫の知らぬ間に女性の中ではいつしか序列が成立し、独自の社会が成立してしまうのです。それを閣下は気づいて…」

……。

「愛は素晴らしいものですが、時として残酷な刃となることがあるのです。共に生きる愛もありましょう。共に死す愛もありましょう。愛の形は人それぞれ違うのです。それら全てを受け容れてこそ多々の女性を皆平等に愛する資格が得られるのです。ですから感情とは別の冷静に分析する視点も養わねばいけません。いいですか、愛することは綺麗事では済まされないのです。愛は…」

……。

久方ぶりに説教地獄が炸裂された。

「もう…駄目…」

「悶絶寸前…」

無表情であるピテスとモロスは痛々しいほどに顔を歪めて悶絶寸前に陥っている。

確かケールとも一緒に正座させられて説教されたことがあったな…。

エクリアはどうやら久しぶりに本領発揮してくれたようだ。

足は痺れていたが、嬉しい出来事だった。

「何が可笑しいのですか？閣下！」

エクリアに見咎められてしまう。

どうやら思い出し笑いをしてしまったらしい。

「こうなれば、徹底的に閣下には小官の話を聞いて頂きます！御覚悟を！」

……。

……。

……。

……。

……。

……。

…。

この説教地獄を境にピテスとモロスはエクリアに頭が上がらなくなってしまったらしい。

エクリアの説教地獄は夕日が沈む時間まで続いていった。

一日の大半を説教地獄で無駄に過ごすことになってしまったが、収穫は確かにあった。

エリニュス以上の力を持つ上級神モロスが仲間となり、反乱軍の戦力が増加していったことだ。

モロスはピテスと同様に私の家に居候することになった。

初対面こそ喧嘩したが、それ以降は通じ合う所があったのか姉妹のように仲良くなったそうだ。

私は説教地獄を乗り越えた後、家に直行してベッドに飛び込んでいった。

「疲れたから寝る…」

「睡眠欲求…」

ピテスもモロスも私に続くようにベッドに飛び込み、私は二人に挟み込まれるような形で寝転んでいった。

「お休み、ロスト…ちゅ」

「一緒に就寝する、ロスト…ちゅ」

二人のお休みの口付けを両頬に受けて、私は深い眠りについていく。

……。

燃え尽きたな…。

第88話：L' Ultima Cena

戸を叩く音が聞こえてくる。

朝っぱらからいったい誰だ?

私はベッドから起き上がろうとして背中に張り付いている生物を横目で見る。

「はむはむ」

ピテスは私の首筋を赤子のように吸い付いてきている。

もはや背中に張り付いてきているのが違和感無いほどに慣れてしまった。

モロスが召喚した兵士達と立ち回る時ですれもピテスを背負ったまま戦ってきたからだ。

「無断侵入される脅威がある…警戒は重要…」

……。

ベッドにまだ寝ていたはずだったモロスがいつの間にか私の隣に立っていた。

「朝から脅かすな。暗殺者かと思ったぞ…」

「暗殺者…それは否定…私はロストの伴侶…」

私はモロスの言葉を無視して戸を開ける。

「おはよう、おじ…」

訪ねてきたのはモイラだった。

元気良く朝の挨拶をしてくるかと思ったが、私の顔、いや、私の背中の者と隣の者を見た瞬間に蝋燭の火が消えるが如く表情を消してしまう。

「おじさん、背中に背負ってるのは誰だ?」

「私はピロテース…ロストの妻…」

モイラはピテスの言葉を聞き、実の良い笑顔になる。

「隣の人は誰だ?」

「私はモロスという生物…ロストの伴侶という地位に有る…」

……。

風を切る音を出して手を振り上げるモイラ。

「歯を食いしばれぇえええっ!」

またぶたれてしまう!

私は衝撃に備えて目を閉じる。

だが、何時まで経っても衝撃は来なかった。

目を開けてみるとモイラの手を掴んでいるモロスがいた。

ピテスもいつの間にか私の背中から降りている。

「伴侶に対する暴行未遂…敵対行為と認識し、最大警戒にて全力応戦する…」

「夫に手を出すのは妻として許すわけにはいかない…」

ピテスとモロスがモイラに対して殺気を放ってくる。

「夫に伴侶だって？おじさんは俺が最初に目を付けたんだ！同棲してければ正妻の俺に断ってきてからんにしろ！」

モイラは相手が生きた大量殺戮兵器であることを知らないのか、啖呵を切ってくる。

それにしてもモイラはいつ私の正妻になってしまったのだろうか？

「歴史上で側室が権力を握るのは珍しくもない…」

「むしろ正妻の立場に縋っている軽薄な女…」

モイラはモロスの手を振り払い、獰猛な目つきで二人を見据える。

「上等じゃねえか…表に出ろ！」

モイラは何処に隠し持っていたのかサブマシンガン、バズーカ、ショットガン等を二三丁ずつ両手に器用に持って戦闘態勢を取り始める。

「俺は相手が子供だろうが、女の戦いだったら差別しねえぜ！」

モイラの啖呵にピテスは薄笑いを浮かべる。

「面白い…受けて立つ…」

「私も同様…」

三人の眼光に火花が散ろうとしてときだった。

「何やってるのですか！貴方達は！」

突然の怒声にピテスとモロスは肩を震わせてくる。

この怒鳴り声はエクリア。

「モイラ！何朝っぱらから物騒な物を出しているのです！戦争でも始めるつもりなのですか？」

「あ…エクリア様？」

モイラは引きつった顔になっている。

いつもは冷徹なほどに物静かなエクリアがこれほどまでの怒声を上げるのが珍しいのだろう。

「貴方達二人もまだ懲りていないのですか！」

エクリアの怒声にモロスとピテスは縮こまっていく。

「エクリア…これは…その」

「理由検索…不可…」

エクリアは腰に付けている鞭を取り出して、切れの良い音を響かせる。

「お説教です！」

……。

「ピテス、モロス、貴方達二人は確かに出生が複雑でありますから多少の常識外れな行動は致し方ないと思います。ですが、閣下と共に生きるのであれば、もう少し分別のある行動をなさってください！東洋の諺で郷には入れば郷に従えという言葉があります。いえ、常識非常識以前に何でも力づくで解決する姿勢が良くありません。モイラ、貴方も同罪です。女性として貴方の気持ちは痛いほどに分かります。ですが、少しは閣下の言い分を聞いてから手を出すかどうかを考えてください。貴方達は何のために言葉を紡ぐことが出来るお口をお持ちなのですか?暴力は時として必要となる時があるかもしれませんが、それは飽くまで最終手段です。まずは文化的に話し合いで物事を解決する姿勢を見せてください。戦争が勃発している今だからこそ、平時は文化的であらねばなりません。私達は何のために戦って…」

そして、モイラを含め、四人仲良く正座させられて説教地獄を喰ら

わせられる結末を辿ってしまった。

……。

……。

…。

「畜生付いてねえな。まだ、足が痺れてくるぜ…」

「そうだな…」

私とモイラはおぼつかない足取りでヒュプノスの屋敷に向かっていた。

モロスとピテスの件で報告するためだ。

ピテスの件はエロスの思惑は省き、造られし存在だということは報告しておこうと思う。

エロスが如何なる思惑だろうと敵として戦うには変わらないことなのだから余計な情報は与えない方が良いと思ったのだ。

モロスについてはヒュプノスの方がよく知っていることだろう。

何しろヴァルキリアに何度も辛酸を嘗めさせた宿敵なのだから。

ピテスとモロスは仕事を与えるためにエクリアに引きずられていった。

何でも、働かざる者食うべからず、らしい。

……。

二人で歩いていて暫く沈黙が続いていた。

そう言えば、二人きりになるのは久しぶりだ。

いや、たった一日ぶりだが、何日も経ったかのような感覚だ。

モイラとはこの歪んだ未来で最初に出会った女性として何かと世話を焼いてもらった。

特に反乱軍本部に行くまでの道のりでは毎晩繋がっていた仲だったのだ。

そして、一時とは言え、将来を約束した仲でもある。

……。

『俺におじさんの子供を産ませて欲しい。だから、お願い…』

……。

私が初めて、子供を欲しいと思わせたのがモイラなのだ。

彼女の存在は私にとって掛け替えのない存在となっていた。

「おじさんと二人きりになるのは久しぶりだよな。久しぶりというよりはまだ一日ぶりなんだけよ…」

モイラは私と同じことを思ってくれていたようだ。

私は思わず、モイラの背中に腕を回していく。

「おじさん？」

「私もそう思った。ヒュプノスの屋敷に着くまで二人きりの時間を楽しもう…」

モイラは顔を赤らめ、私の頭に顔を寄せてくる。

「うん…」

私はモイラに寄りかかられながらヒュプノスの屋敷を目指した。

……。

……。

…。

私とモイラはヒュプノスの屋敷に入り、私室でヒュプノスに報告をするのだった。

モイラは私の隣に座り、ヒュプノスとはテーブルを挟んで向かい合う状態で報告会を始めた。

「ご苦労だった、ロスト殿。それにしてもまさかそのピロテースという子供がエロスによって作られて亜人工生命体だとはな。しかも

モロス将軍と互角の実力を持っているのだから驚きだ」

私の報告を聞いて、ヒュプノスは感慨深げに唸ってくる。

「どちらもおじさんに懐いているただの女にしか見えませんでしたけどね…」

モイラが私の報告に横槍するように刺々しく言ってくる。

「それならば、尚のこと良い。ロスト殿の言うことならば聞いてくれるということだろう。ピテスの存在は色々と曰く有りで故に扱いは難しいかもしれないが、民間の護衛としてはこれ以上に無い有用な逸材だろう。どうだ、ロスト殿？」

ヒュプノスはピテスは見た目が子供であることから戦場には出さないが、変わりに民間の護衛としてはどうだと私に言ってきているのか？

……。

断る理由は無い。

戦争が始まれば、民間に被害が及ぶことを想定して挑まねばならない。

ピテスには戦場で戦うよりも民間の最終防衛線として動いてくれれば良いと思う。

「私は総大将となり、エクリアは軍師将軍、エリニュスのアレークトーは近衛将軍、ティーシポネーは右府将軍、メガイラは左府将軍

として各軍を率いて貰う」

「あの…俺はいったい…」

モイラは自分の地位が無いことに気づき、ヒュプノスに伺いを立ててくる。

「モイラは後方待機、救護班として負傷兵を纏めるのだ。ピテスと共に最終防衛線での指揮官を務めろ」

そんなモイラを一瞥して、ヒュプノスは疑問に答えた。

「何でですか！俺だって戦えます！それは神や怪物相手だったら勝てないかもしれないけど…」

不満を言うモイラにヒュプノスは力強くモイラの肩に手を添えてくる。

「お前の仕事はむしろ戦後にある。私は戦や研究しか知らぬはぐれ者だが、お前には人を纏めることが出来る徳がある。だからこそ、私はお前を副頭目に任命したのだ…」

「ヒュプノス様…」

ヒュプノスはモイラを抱き寄せる。

「お前には生き残った人類を導く光になってもらいたい。万が一に私が居なくなる時にはお前には私の全てを委ねる。そう、全てをな。どうするのかはお前次第だ…」

「はい…」

モイラはヒュプノスの言葉に返事をして、そのまま引き下がる。

「そして、ロスト殿だが、貴公には斬り込み隊長になってもらいたい」

……。

斬り込み隊長か…。

懐かしい響きだ…。

ブリュンスタッドで初めて手柄を上げた時もその地位を頂いたのだ。

そして、その肩書きで戦場を駆け抜け、ヴァルキリアに戦いを挑んでいった。

「引き受けてくれるな？」

「分かった…」

最前線まっしぐらの地位を与えることをヒュプノスに言われたにも関わらず、あの頃よりも冷静に受け止めている自分がいる。

「よく引き受けてくれた。最も戦場で命を賭けて戦う役目にも関わらずな…。副長にはモロスを付けよう。モロスを御せるのは貴公を置いて他にはいないだろうからな。だが、上手く操れば、この上ない力となるだろう」

確かにモロスは私以外では言うことを聞かせるのは難しいだろう。

私は了承の意を持って頷く。

「エロス軍は強大な力を持っているが、唯一の弱点と言えば、指揮官がいないことだ。つまり戦略、戦術、陣形等何も無いという点にある」

「つまりはただの寄せ集めということか？」

寄せ集めならば、それこそエクリアやヒュプノス等が戦略等の軍事知識を駆使すれば何とかなるかもしれないな…。

「ただの寄せ集めか…。それは私達と同じ人間相手ならば、そう楽観出来るだろう。だが、奴らは戦術や戦略を物ともしない圧倒的な戦闘力がある。それこそ、一人で全軍を殲滅するほどの圧倒的な力がな…」

……。

「より分かりやすく言えば、モロスのような連中が沢山居るということだ。戦争は個人の武勇ではどうにもならないと言われてきたが、それは飽くまで人の域での話だということだ…」

モロス並の戦闘力を誇った連中が沢山居れば、確かに戦術も戦略も意味を成さなくなってしまう。

奴らは戦略や戦術が出来ないのではない。

圧倒的な力があるが故に必要で無いということだ。

「アレクから既に聞いていると思うが、ガイア四高弟は戦闘狂だと言われている。戦場で好きに暴れ、私達の軍を掻き乱し、その最中にギガンテス神軍とキュクロプス神軍が畳みかけるという形だ。これも広義の意味では戦術や戦略なのかもしれないな…」

「少し待ってくれ。私はティターン神軍については聞いたが、ギガンテス神軍やキュクロプス神軍については聞いていない。奴らは一体どんな連中なのだ?」

ギガンテス神軍とキュクロプス神軍は初めて聞く名だ。

だが、ティターン神軍よりも何となく強い響きを持つ軍隊だと感じた。

「聞いていなかったのか…。まあ、ギガンテス神軍とキュクロプス神軍はエロス軍で下位に当たる軍隊だからな。より分かりやすく言えばエロス軍にとっては一兵卒にあたる軍隊だ。もっとも私達にとっては他のどの国の主力部隊よりも恐ろしい連中だがな…」

とにかく恐ろしい連中だと言うことは分かった。

それに下位というのならば、ティターン神軍よりは格下だということなのだな。

それともう一つ気になることがあった。

「奴らに指揮官が存在しないとなれば、指揮官を倒す以外にどうすれば勝つことが出来るのだ?まさか、全軍を殲滅させなければならないというのか?」

「ロスト殿の言う通り、殲滅させるしかない…」

……。

「奴らが唯一止まるとすれば、エロスあるいはタルタロスを倒すことだけだ…」

他の幹部連中を倒しても敵軍は止まることが無く進軍してくる。

その最中で総大将であるエロスあるいはタルタロスを倒さねばならないとは余りにも困難な道のりではなかろうか…。

「だから、私達反乱軍はエロス軍の本拠地であるヴァルキリア帝国首都ジークリンデまで進軍してから戦いを挑まねばならない。でなければ、戦いを終わらすことは出来ないからな…」

「だったら今、エロス軍から進撃されたらどうなるのだ?」

モイラは私はただ黙って聞いているのみだった。

エロス軍の恐ろしさは既に嫌というほど知っているのだろう。

「それについては祈るしかない。前にも言ったが、私達はエロスの気まぐれに生かされているのだ。軍師としてはこれ以上に無いほどに失格だが、希望的観測に縋るしかない状況だ…」

「ならば、奴らが攻めてこないことを祈って、かつ援軍が揃うのを待って進撃するということなのか…」

途方もないほどに運頼りの方針だ。

だが、ヒュプノスが決して無能というわけではないのだろう。

エロス軍が余りにも規格外過ぎるのだ。

「あるいは反乱軍に援軍が集結したところを一網打尽するつもりなのかもしれない…」

「戦力が一点に集中したときに叩けば、手間が省けるということか…」

どんな思惑があるのかは分からないが、エロス軍にとって戦争は単なる娯楽でしか思っていないことだけは確かだ。

「だが、良い知らせもある…」

「それは何だ？」

黙って聞いていたモイラも目を見開く。

「明日には援軍が到着するとのことだ。フェイロン共和国、ジェラルド公国、リンドバルム王国の三カ国だ。そして、ロスト殿。貴公に犠牲になってもらうことになるかもしれない…」

私が犠牲になるだと？

戦争以外で何かがあるというのか？

「ヒュプノス様…やはり援軍に来る目的は…」

モイラは察しがついたのか苦々しげな表情をしていた。

「私が犠牲になるとはどういうことなのだ？ヒュプノス」

「奴らが援軍に来る目的は勝ち戦に乗るためだけではない。血筋を残すためだ。つまりお前の子種を、い入れるために来るのだ」

……。

「私の子を孕むためなのか…」

「そうだ。例え、エロス軍を倒したとしても男がほぼ絶滅した人類には緩慢なる滅びの道を歩むしかない。その中で唯一の健康な男である貴公の子種で嫡子を身ごもることになれば、それだけ世界的地位に立つことが出来るという政治的思惑があるのだ…」

つまり私は政治で利用される種馬であり、それが犠牲だということなのか…。

……。

結論から言って別に問題無い。

拷問や飢餓等と比べれば、苦でもなければ犠牲の内には入らない。

むしろ私に差し出される女の方が犠牲だと言えよう。

相手の女性が本当に覚悟があって身体を晒すのであれば、私は何も言うことなく受け容れる。

その代わり、嫌なそぶりを見せるのであれば、こちらからは手を出さない。

嫌なそぶりを見せている相手に手を出してしまえば、陵辱になってしまうからな。

それは私の矜持に反することだ。

ただモイラの手前、素直に提案を受け容れてしまうのは不味い。

だから言葉を濁しておこう。

「そうか…」

とりあえず、種馬になる可能性があるということを聞き入れたことにしよう。

「おじさん…」

モイラの目が薄く光っているように見えた。

私の思惑が感づかれてしまったのか？

「ふっ、あるいはロスト殿にとっては犠牲の内に入らないかもしれないな。だが、何処の馬の骨とも知れない相手に易々と種馬にされてしまうのは正直気分が良くないものだな。そう思わないか、モイラ？」

ヒュプノスは立ち上がり、テーブルの上を伝って私の方へと近づい

てくる。

「モイラ…」

「はい…」

ヒュプノスの一言でモイラは立ち上がり、私の椅子の後ろから拘束するように抱きついてくる。

「ヒュプノス、モイラ、これはいったい何のつもりだ?」

「本当は分かっているはずだろう、ロスト…」

ヒュプノスは逞しくも滑らかな両足を私の首に絡ませてくる。

胴体にはモイラの腕が回されていて、動けない状態だ。

「異国の女共に種を分け与える前にこちらが処理しておかなければな…」

「そうですね、おじさんの子供を産むのは俺が一番なんだからよ…」

ヒュプノスは蟹挟みで私の顔を自分の股間に埋め、モイラは私の胸元の服を破り捨てていく。

モイラの怪しい手触りが私の胸を刺激していく。

「儂等も混ざらせて貰おうかな…」

「あたいも他の女にむざむざと分け与えるのは癪だからね」

「本当は殺して、独り占めにしたいところですが、致し方ないですね」

エリニュス一同がいつの間にかヒュプノスの部屋に現れていた。

「私が予め呼んだのだ。まだまだこれだけではないぞ」

部屋の扉が開かれる音がする。

「ヒュプノス様、予定通りにピテスとモロスをお連れしました」

「ご苦労。初めまして、モロス殿、ピテス殿…」

ヒュプノスは私の顔を自分の股間に押しつけたまま連れてきたというモロスとピテスに挨拶をしてくる。

「自己紹介…私はモロスという個体…貴方はヒュプノス…記憶した」

「私はピロテース…ロストの妻…ピテスと呼んで…」

二人は相変わらずの独特の口調でヒュプノスに挨拶した。

「明日には援軍が到着して忙しくなる。これほどの顔ぶれが同じ部屋に集うことはもう二度と無いかもしれない。だから、今日は徹底的に楽しめ！反乱軍頭目足る私が全て許す！」

ヒュプノスのかけ声と共に他の女性も一斉に私に群がってくる。

私は椅子から引きずり降ろされて、床に仰向けにされてしまう。

視界がヒュプノスの股間に占められているため、誰に抱かれているのかが分からない状態だ。

「ちゅぱちゅうちゅうう」

「あむぅれろぉちゅぱ」

身体の至る所が舐めれている。

その中には確実に生気を吸っている者が少なくとも、いや、ほぼ全員が吸っていると言っていいだろう。

「明日から…ちゅぱ…忙しくなりますから…殺してしまう程に…ちゅ…吸わせて頂きます…んっ」

「あたいの活力が戦後まで持たせるように吸わせて貰うよ…ちゅうううううっ！」

「年寄りに活力を与えるのが若者の義務だ。そなたの生気で儂を長生きさせるのだ…ちゅぱちゅぱ」

「ロストは夫として妻を養わせないといけない…だから、私は食べる…はむはむ…ちゅぷちゅぷ…」

「ロストは私の伴侶として…ちゅうううっ…搾取される…私の生命が…ちゅぱ…ロストと…融合する…」

彼女達は私の生気を搾取する引き替えに至上の快楽をもたらしてくれる。

男の証もまた口に呑み込まれている。

これは下の口か。

「はあぁ…おじさんの子供は…絶対に俺が一番に産むんだからな！あぁん！早く俺を孕ませろよ！」

これはモイラが跨っているというのか。

さすがに筋肉質だけあって締め付けが強い。

「申し訳有りません、閣下。小官が長時間説教した精で足の血行が悪くなっていますね。お揉みします」

エクリアは丹念に私の足に指圧をかけてくれているようだ。

時に湿った生暖かいものも押しつけれているようだが…。

それにしても私の身体に触れていない場所が無いほどに女体盛りとなっている。

これはまさに酒池肉林と言うべきものではなかろうか。

急に顔を締めていた圧力が無くなり、視界が開けてくる。

ヒュプノスが退けてくれたのだ。

そう思って、新鮮な空気を吸おうとした矢先、別のものが視界を塞いでくる。

この感触は胸だ。

「ロスト…私の胸を吸えばいい…赤ん坊みたいに…」

ピテスの静かながらも妖艶な響きを放つ美声に私は赤子に還って乳を吸っていく。

互いに貪り合う形で原型が無くなるような錯覚を覚えてくる。

ヒュプノスの部屋に暫しの間、喘ぎ声が絶え間なく響いていった。

……。

……。

……。

……。

……。

…。

私は女体の海から這い上がり、ヒュプノスの屋敷を出て、夜風に当たる。

明日から忙しくなるか…。

忙しくなる程度で何時までも済めばいいのだがな…。

今日は実に楽しくて気持ちよかった。

彼女達の情事で急に元の世界のことが恋しくなってきた。

アーテにエリス、クロエは今頃ガイアとお茶会でもしているのだろうか？

この世界とは違って私と関係を結んだ女性は健在だ。

タナトスの感情も壊れていない。

グレイブ殿も五体満足で沢山の女を侍らかしているのだろう。

ガイアに頼めば、今すぐにでも元の世界に帰れるかもしれない。

だが、もうそれが出来ない自分がいる。

私はこの世界が元の世界の未来などという考えを既に抱いてはいない。

この世界もまた一つの独立した世界だと捉えている。

少なくともこの世界でなければ、モイラやヒュプノス、アレク達やピテスと関係を結ぶことは無かった。

この世界での彼女達の絆を大切にしたいと思う。

そのためにはエルとアビスを…。

……。

また瘤が大きくなっていく。

……。

改めて思い知った。

私はやはり全くと言っていいほどに覚悟が出来ていない。

これではアレクの言う通り、本当に第二次聖戦の二の舞になってしまう。

ただでさえエロス軍との戦力の差は絶望的なまでに開いているというのにこれでは本当に全てを失ってしまう。

……。

いったいどうすればいいのだ？

……。

「貴公も目が覚めていたのか？」

私の思考を掻き消すような低音の美声が響いてくる。

「ヒュプノス…」

「ご一緒させて貰おう…」

私とヒュプノスは暫しの間、空を見上げる。
地下世界のはずなのに精巧に作り上げれた偽の空。
それでも落ち着く気分にさせられる。
このまま時が止まればいいとさえ思えてくる。

「今日は楽しかった。これ程楽しい一日はこれから先、二度と訪れないかもしれないと思えるぐらいにな…」

ヒュプノスは空を見上げたまま呟いてくる。

「生きていれば、何度でも訪れる。だから生き延びるのだ。どれほど屈辱に呑まれようとも…」

「それがロスト殿の強みなのか。だが、それは本来孤高なる存在が持つ強み。貴公は幾重もの縁を築き上げ過ぎた。いずれその縁が枷となるかも知れない…」

ヒュプノスは空から私へと視線を移す。

「この戦い、おそらく貴公の気質が如何に発揮されるかが勝利の分かれ目になるかもしれない。戦争は一人で出来るものではない。だが、貴公はその常識に当てはまらない存在…」

「何が言いたい？」

私もまたヒュプノスを正面から見据える。

「貴公は貴公の戦いを貫け。私達に遠慮することなく貴公の戦いをやるのだ。私は戦前まではともかく戦争が始まったときには貴公に一切の制限を与えない。好き勝手に戦えばいい」

「私の好きに戦えばいいということなのか？」

エロス軍のガイア四高弟もまた好き勝手に戦場を掻き乱している。

つまり私もそうしろと言うことなのか。

「味方の安全を考えて火薬の量を調整していては勝てる相手ではない。味方を吹き飛ばすぐらいの過剰な火薬が必要なのだ。だから私達のことは構わず戦え。戦場から離れて大切な者を守ろうとしても構わない…」

「そこまで好きにしていいのか？」

ヒュプノスの言っていることは戦場から離脱してもいいとでも聞こえてくる。

「構わない。貴公にはもう枷が付いてしまっている。おそらく私の言葉よりも貴公は枷に従うことになるだろう。そして、それが貴公が貴公である証にもなってくる」

「ならば、私はヒュプノスの言葉に従うかもしれないな…」

私の言葉にヒュプノスは目を見開く。

「私も貴公の枷となっているということなのか…」

「私はそう思っている。言葉には従わないかもしれないが、枷には従うかもしれない…」

ヒュプノスは微笑を浮かべて、私の頭を掻き抱く。

私の顔はヒュプノスの豊満な胸に埋まっていった。

「小生意気だな。だが、嬉しくもある。ならば、さらなる枷を与えてくれようか…」

ヒュプノスは夜空の下で私を押し倒し、即座に私の男の証を呑み込んでいく。

「余り多くの枷を追加されてしまえば動けなくなってしまうかもしれないな…ロスト…んちゅ」

覆い被さるように口付けを交わし、激しく腰を振ってくる。

「ちゅぱ…私はお前の枷になってやる…はあああああっ！」

「うおおおおおっ！」

……。

……。

……。

……。

……。

……。

…。

「ロスト、覚えているか？私が案内した最高傑作の世界、タナトスの世界を…」

「覚えている。忘れるはずがない…」

私はヒュプノスの胸に埋めながら答える。

「エクリアにはタナトスの件については話したが、あの世界のことは話していない。故に私以外では貴公しか知らないのだ」

「何が言いたいのだ？」

ヒュプノスは私の頭を掻き抱いてくる。

「絶対に誰にも言うな。明日やってくる援軍には特にな。例え、タナトスに縁がある者であろうともだ」

「それは何故だ？」

ヒュプノスは私の額に強く唇を押し当てていく。

「ちゅぱ…この枯渇化した世界であのタナトスの世界こそが最後の切り札になるかもしれないからだ。だから絶対に、少なくとも第三次聖戦が本格化するまでには秘密にしておく必要がある…」

「分かった…」

私の返事にヒュプノスは微笑み、口付けの雨を至る所に降らしていく。

「ちゅ…ちゅぱ…ちゅちゅ…ロスト…貴公も私の枷になってくれ…んちゅううっ」

夜空の下で私とヒュプノスは燃え上がるのだった。

……。

……。

……。

……。

……。

…。

だが、私はヒュプノスの約束を破ってしまうことになる。

明日やってくる援軍の中にいた懐かしきあの女の手によって…。

私はエロスが言っていた真の絶望を味わうことになっていく。

そして、ヒュプノスが言っていた通り、この日が全員揃って笑い合

える最後の日となった。

……。

第89話：Chromatische Fantasie und Fuge

エロス軍からは未だに何も動きが無いとの情報だった。

まるで何かを待っているような予感がするとヒュプノスは言っていた。

エロスは私に真の絶望を見せると言ってきたが、果たして何なのだろうか？

大切な者が奪われること。

夢を見失ってしまうこと。

己が己で無くなってしまうこと。

あるいはその全て…。

……。

分からない…。

私にとって何が真の絶望なのか…。

だが、それに対して心構えをしておかなければならない。

もうすぐ戦争が始まってしまうのだろうから…。

今日はいよいよフェイロン共和国を初めとした援軍が到着する。

私を父として慕ってくれていたリー・ロンファンと再会することが出来る。

この歪んだ未来に置いて、私の知り合いは何かしらの悲劇に見舞われてしまっていることが多かった。

一人でも無事であれば、これほど嬉しいことはない。

私は黒騎士ロースと名乗るため、エクリアに用意された黒の甲冑を纏い、ピテスは家に待機して貰った。

ピテスは不満そうであったが、後で存分に生気を吸わせることを約束したらあっさりと引き下がった。

ヒュプノスとモイラは援軍を迎える準備に勤しんでいる。

「いきなり、本部に押し掛けられてしまえば、非戦闘員に要らぬ混乱を招く。故に疑似世界を構築する」

アレクは援軍を迎えるためだけの疑似世界を創造していく。

疑似世界を潜る扉は巨大建造物並の大きさになっていた。

大軍が扉を潜るにはそれぐらいの大きさが必要とのことだった。

私達はそこで援軍の到着を待つことにした。

私もとい黒騎士ロースはアレク率いるエリニュス、元ピフレスト皇国将軍モロスという反乱軍の最高戦力を勢揃いさせて、出迎えるこ

とになる。

それは反乱軍が如何に精強であるかを援軍に見せつけるための演出だ。

モロスはヴァルキリアの宿敵として世界に名を轟かせている。

エリニュスも同盟軍が健在だった頃には私の私兵として名を馳せていた。

そして、黒騎士ロースは今は亡きオイジュスとモーモスに覚えある屈強なる戦士。

これだけの逸材を見せつければ、援軍に来た者達も安心することだろう。

……。

……。

…。

もうすぐ戦力は揃う。

そうなれば、戦争が始まる。

エルとアビス。

私をヴァルキリアに誘い、本格的に巻き込む要因を造ったパラディスムの双子。

彼女達二人の出会いで私の運命が動き出したのだ。

良い意味でも…。

悪い意味でも…。

そんな彼女達と殺し合う時が近づいてきている。

出来れば、救いたい。

だが、ピテスの時と違い、エルとは間違いなく戦場で逢うことになる。

敵も味方も等しく地に預けることになる死の世界で…。

今度は躊躇わずに戦わなければ、自分はともかく味方に犠牲を出してしまうことになるのだ。

アレクは言っていた。

敵に情けをかければ、味方を殺すことになると…。

そして、アビスはこの世界の私を殺してしまっている。

敵に呼びかける余り、自分の命をおろそかにしてしまった結末だ。

『そなたは…第二次聖戦の悲劇を繰り返すつもりなのか？今のそなたではタルタロスに、いや、アビスに再び殺されてしまうぞ！そして…全てを失ってしまう…くっ…そなたはまた儂の前から…いなく

なってしまうのか…うぅ…』

アレクの言葉を聞いて以来、私の中に瘤が出来てしまった。

瘤は既に私の頭の全てを占めるほどに大きく成長してきている。

私はまだ心の何処かで覚悟を決めていない自分を潜めている。

瘤はそれを見逃さずに食らいつく。

やがて瘤は破裂し、私の大切な者全てを奪うのだ。

だから、早く覚悟を決めねばならない…。

だが、どうすれば覚悟が決められる?

……。

……。

…。

「もうすぐ援軍等が扉を潜ってくる。くれぐれも粗相が無いようにしろ」

ヒュプノスが緊張感漂う声を向けてくる。

エリニュス一同は頷き、モロスは私の腕に抱きついていく。

人見知りなのだろうか?

「ロストは私が守護する…」

どうやら私を守るためのようだ。

「くっ…副頭目じゃなかったら…俺だって…」

モイラは何かに耐えるような表情で私、いや、隣で抱きついているモロスを睨んでくる。

モロスはモイラの視線を無表情ながらも何処か優越感に浸ったような目で睨み返していた。

どうやら私に抱きついているモロスが羨ましいようだ。

私はこの堅苦しい雰囲気の中でモロスの胸の感触が癒しとなっていた。

……。

「来たぞ…」

ヒュプノスはまるで敵軍が攻めてきたかのような緊迫した口調で言う。

疑似世界の扉が重々しく開いていく。

その先には鎧で固めた馬を駆って一糸乱れぬ動きで行進する軍隊が疑似世界へと侵入してくる。

……。

軍隊を間近で見るのもブリュンスタッドで戦場に出た時以来か…。

疑似世界に入ってくる軍隊はまさに精強と呼ぶに相応しい統制された乱れのない布陣だ。

軍事に素人の私でも分かるほどに訓練された歴戦の兵士達という雰囲気を漂わせていた。

行進は止み、全ての軍隊が疑似世界への侵入を完了させたようだ。

軍隊は緑、青、銀の三色の鎧を纏った兵士達で構成されていた。

青がジェラルド公国。

銀がリンドバルム王国。

緑がフェイロン共和国。

緑の兵士達の中で羽根飾りを付け、如何にも高価なマントを羽織った兵士が馬上から降りていく。

その兵士は迷うこと無い足取りで私の方へと歩んできた。

そして、手にはいつの間にか六角棒を持ち、横に薙ぎ払うように私に向かって振ってくる。

私は咄嗟にモロスを横に弾き、六角棒をしゃがんで避け、襲撃者の懐へと入って、拳を軽く溝へと当てる。

気絶しない程度の当て身。

回避した六角棒が三節に分離して鞭のようにしなっていた。

使用した武器は三節棍。

この身のこなしと武器からして間違いなく彼女だ。

「久しぶりだな、ロン…」

襲撃者は兜を脱ぎ捨ててくる。

……。

「父様…」

……。

東洋的な顔立ちをした整った顔立ち。

その表情はあどけなさを持ちながらも体格は逞しいの一言。

私よりも頭二つ分高い背丈を備えた猛々しき絶世の美女。

リー・ロンファン。

フェイロン共和国の英雄とも言われる女傑だ。

「逢いたかったです！もう二度と逢えないのかもと思いました！こ

れはもう奇蹟なんですね！」

ロンは私を鯖折りするような要領で抱き潰してくる。

私の背骨は悲鳴を上げて悶絶必死の状態だ。

そこをモロスがさり気ない手つきでロンの抱擁を容易く解き、私を掴み取っていく。

その仕草は取られてた人形を取り返す子供そのものだった。

モロスは今度は取られまいと自分の胸の中へと私を無理矢理収納していく。

「ロストは私の所有物…」

鯖折りがロンからモロスに変わっただけで危機状況は何も変わっていないぞ…。

「はぁ…貴女も父様のお姉さんということですか…」

私を抱きかかえているモロスをため息つきながら見るロン。

「それは誤答…私はロストの伴侶…」

「分かりましたよ…お姉さん…」

……。

二人の視線に火花が散っていた。

「ロスト様の女癖の悪さには困ったものですね。殺しますよ…」

「後であたいの喧嘩に付き合ってもらわないとな、ロスト…」

「若者を修正していくのも年寄りの役目というものだな、ロスト殿…」

エリニュスは殺気を滲ませて私を睨んでくる。

モイラは無言だったが、手は握り拳になって震えていた。

ヒュプノスは飽くまで頭目として静かに見据えていたが、逆にそれが恐ろしくも感じる。

「少し宜しいか？」

青色の甲冑を纏った者が歩み寄ってくる。

青はジェラルド公国の兵士の者だ。

鎧にはマントと肩当て、他の兵士達と明らかに異なる東洋の伝承に伝わる鬼の角が生えた兜。

おそらくジェラルド公国軍で一番の位置を持つ兵士なのだろう。

「拙者はジェラルド公国軍総軍団長アイテル。お主が黒騎士ロースで相違ないな？」

古風な物言いだ。

「如何にも、私が黒騎士ロースだ」

それにかなりの威圧感を感じる。

いったい何者だろうか？

「アイテル、不老不死で伝説の女傑と謳われた存在だ。表舞台から姿を消したはずだったが、まさかジェラルド公国で過ごしておったとはな…」

アレクが神妙な顔をして解説してくる。

「知っているのか？」

「知ってるも何もヴァルキリアの始祖と呼ばれたカオスと激突したことで有名な戦女神、まさに生ける伝説と呼ばれる女傑だ」

私は思わずまじまじとアイテルを見つめていく。

周囲もアレクの言葉に騒然としている。

アイテルとはそこまで有名な女だというのか…。

「あまり熱い目で拙者を見つめるでない。照れるではないか。それにしても久しいな、アレク。年老いてますます美しくなったようだな」

「儂より年上のそなたに年寄り呼ばわりされる覚えは無い。アイテル、そなたこそ今更何しに表舞台に出てきおったのだ？」

アレクの質問にアイテルは含み笑いをしてくる。

「年齢はともかく頭まで耄碌したのか？それともわざと呆けているのか？お主こそ何故、そこの黒騎士に従っておるのだ？」

「ふっ、やはりそなたは戦闘狂だな。儂等を付き従わせた者を見るために援軍として紛れ込んだというわけか…」

アイテルはアレク以上の年寄りだということは分かった。

さらに言えば、第一次聖戦を直に体験したこともある貴重な情報源ということもだ。

「ということで黒騎士ロース殿と言ったか。拙者といざ尋常に勝負しろ」

「断る」

……。

「あの…耳が逝かれてしまったのだろうか？もう一度言って貰えないだろうか？」

「断る」

平時ならいざ知らず、戦を前にして無駄な体力を消耗したくはない。

私は大局を見据えるのだ。

今までのようなただの喧嘩馬鹿とは違うぞ。

「ロース殿！」

私はいきなりアレクに引き寄せられてしまう。

「何だ、アレク？」

「ここはアイテルの要望通り大人しく勝負を受けて下され」

アレクならば真っ先に荒事を諫めるだろうと思ったが、何故喧嘩を推奨するのだろうか？

「理由は何だ？」

「ロース殿の力を皆に示すためだ。そなたが強いところを見せつければ、纏まりがつくだろう。これjは今後の戦に勝つために重要なことだ。だからアイテルの売った喧嘩を買えばよい」

私はアレクから解放され、再びアイテルと対峙する。

「拙者も年取って、耳が遠くなったかもしれん。もう一度言ってくれないだろうか？」

アイテルはよほど断られた事実を認めたくないらしい。

アレクからの御墨付きを得れたことであるし、喧嘩を買うことにしよう。

「良かろう」

「おう！そうか！そうか！やはり武士はそうであらなくてはならぬぞ！拙者はそういう輩が大好きだ！」

実に嬉しげに剣を抜いてくるアイテル。

剣が黄金に輝いている。

かなりの業物なのだろうか？

「この剣は拙者の一部故に人が造った武具と同等であるとは思わぬ方がよいぞ」

私は腰に付けていた間に合わせの剣を抜いて構える。

「儂等は兵隊達に危害が及ばぬように結界を展開させる。ティー！メイ！」

「畏まりました、アレク姉様」

「分かったよ、アレク姉さん」

エリニュスは兵隊達に何重もの結界を貼っていく。

「ははははっ…何とも豪華な果たし合い場ではないか！心が躍ってくるわ！戦装束装着！」

アイテルは高笑いしながらも青の甲冑を黄金の甲冑へと変換してくる。

これはモロスと同じ能力だ。

「物質変換…」

モロスもまた自分と同じ能力を見たことで多少驚いているようだ。

私は危なげに剣を構えていく。

「何だ、その構えは？なっておらんな。お主、本当にアレク達を従わせたのか？」

「言葉で確認するより己の身でもって確認するが良かろう…」

構えがなっていなくて当然だ。

私の本業は剣士に非ず。

飽くまで素手専門の喧嘩番長なのだ。

「なるほど、お主の言う通りだ。ならば、戦を楽しもうではないか！ロース！」

「とんだ戦闘狂に目を付けられたものだ！」

甲冑で顔を隠しているから顔を確認出来ないが、美女であって欲しいものだ。

アイテルは一足前に出した瞬間に私の間合いを詰めて、黄金の剣を振るってくる。

私は何とか受け止めるが、途轍もなく思い一撃だったのか、地面が陥没し、思わず膝も付いてしまう。

「ははははは！いいぞ！拙者の一撃を防げた者はお主が初めてだ！もっと拙者を楽しませてくれ！さあ！」

アイテルは笑いながらも剣を何度も叩きつけてくる。

此奴の剣は斬るというよりは叩き潰すという表現の方が適切なようだ。

剣撃を受け止めても、それに伴ってくる衝撃が打ち付けられていき、全身の骨が悲鳴を上げている。

一旦、距離を離さねば！

私はアイテルの剣撃の嵐から非難するべく後ろへと下がっていく。

「逃がさぬぞ！そらぁ！螺旋！帝釈天！」

黄金剣を振るい、螺旋状に軌道する極大の波動を放ってくる。

波動が歪な螺旋を描いて放出されているため、発射方向が把握できない。

とにかく全速力で避けるしかない。

歪に軌道で波動が私に迫ってくる寸前を狙って瞬間的に素早く飛んで交わしていく。

だが、避けられた波動は見守っていたモイラの方へと向かっていく。

不味い！

あの攻撃はアレクの展開した結界をも貫く威力がある。

「モロス！」

「了解した…」

モロスは私の意図を酌み、漆黒の障壁を展開して、アイテルの波動を弾いていく。

これならば、モイラ達は安心だな。

「拙者と戦いながらも他の女の名を呼ぶとは妬けてくるではないか！天誅を下してくれる！滅却！涅槃！」

アイテルは剣先から超広範囲の波動を放ってくる。

観客を巻き込むつもりか！

ならば、罪を受け容れるわけにはいかないな！

「ヴィマーナ！」

私は剣を捨て、巨大な赤黒い槍を持つ。

「その技はわたくしのもの…真似するなんて殺しますよ！ロス…ロース様！」

ティーの不満を余所に穂先に高密度の魔力を圧縮させて放つ。

「アグネヤ！」

私の放った波動とアイテルが放った波動が激突して相殺されていく。

「やってくれたな！ならば、これならどうだ！」

アイテルは放たれた波動よりも速く、私の眼前まで迫り、黄金剣を振りかぶってくる。

「喰らえ！六連殺！阿修羅！」

光の如くの刺突が六連撃襲ってくる。

ならば、私は黄金の拳の乱舞をお見舞いするまでだ！

「はあああああっ！」

刺突と拳の嵐が激突し、周囲に凄まじい余波を撒き散らしていく。

「ぐううううっ！ロォオオオス！」

「うおおおっ！黄金の拳よ！唸れ！」

アイテルの六連撃を全て殴り落とし、拳がアイテルの胸にめり込んでいく。

「ごほおおおっ！」

アイテルの呻き声が響き、私はさらに兜に向かって拳を打ち付ける。

「がはああっ！」

兜が砕け、アイテルの素顔が晒されていく。

紫色の髪を靡かせ、小麦色の肌に妖艶な茜色に染めた唇。

血のように紅い光を煌めかしている真紅の瞳。

絶世の美女に相応しい顔立ちだ。

これならば、俄然やる気が出てくるぞ！

「おのれぇえええええっ！」

紫色の髪を振り乱し、憤怒の形相を見せてくるアイテル。

怒りの刃が振り下ろされてくるが、アイテルの剣撃は既に見慣れた。

私は東洋の神秘、必殺白羽取りを持って食い止めていく。

「なっ！白羽取りだとっ！」

必殺の一撃を止められたためか、アイテルに隙が生じる。

私はそれを見逃すこと無く腹部に蹴りを叩き入れていく。

「ごほぁっ！」

アイテルは吐血し、私の顔に血がかかっていく。

喧嘩に美女の怪物も関係無しだ！

ただし、兜を失ったことから顔面はもう狙わない！

さらにアイテルの溝に拳を炸裂させていき、アイテルは血を吐いていく。

「ぐっ！」

アイテルは溜まらなくなったのか、私から距離を取っていく。

私はそれを追わず、静かに拳を構える。

「ごほっ…拙者を後ろに下がらせたのは…カオス以外ではお主が初めてだ…」

黄金の甲冑は至る所に罅が生じ、血に塗れて見る影も無かった。

それでもアイテルの眼光は微塵も衰えてはいなかった。

だが、そろそろ終わりにさせてもらう。

「生憎だが、お前は目先の敵ばかりに執着して井の中の蛙となっているだけだ…」

「何だと！拙者が弱いと申すのか！貴様！」

アイテルが戦っていた頃のカオスはおそらく神に転生する前の状態なのだろう。

神に転生したカオスはあの原初神ガイアをも打ち負かすほどの強大な力だと当事者であるガイアから聞いた。

アイテルの力はエリニュスよりは上でピテスとモロスと同等の戦闘力と言ったところだろうか。

「おのれっ！侮辱は許さんぞ！森羅万象全ての輝きよ！我の下へ集え！」

アイテルは黄金剣を天にかざした瞬間に地響きが起こってくる。

凄まじい圧力が私を襲い、身動きが取れなくなってしまう。

今までに無い強大な力を放とうとしているようだ。

「いかん！全軍扉に向かえ！アイテルが全力の一撃が放とうとしている！この疑似世界が崩壊するやもしれぬぞ！」

アレクは全軍に響く声を発し、退避を呼びかける。

「私はこの場所…むぐっ！」

「貴女も逃げるのですよ！ロスト様はわたくしが殺さない限り死にません！」

「あたいと喧嘩出来るのはロストだけだからな！だから死なねえよ！」

ティーとメイが二人掛かりでモロスを羽交い締めして扉まで駆けていく。

「おじさん！」

「モイラ！ロースならば大丈夫だ！巻き込まれる前に出るのだ！」

ヒュプノスはモイラを連れて逃げようとしているが、モイラは動こうとはしない。

このままではモイラを巻き込んでしまう。

「モイラ！お前の身体はもう自分だけのものではないのだぞ！」

ヒュプノスが何かを言ったのか、モイラは硬直し、やがて扉に向かって走り出す。

ヒュプノスはモイラに続くようにして扉の向こうへと駆け抜けていった。

兵隊達も全員退避が完了したようだ。

「邪魔な輩は居なくなって安心したか？」

どうやらアイテルを怒っていても我を忘れていなかったらしい。

全員が退避するまで技を放つのは控えていたみたいだ。

「黒騎士ロース！貴様が人類の希望だと言うのであれば、拙者の一

撃を見事砕いてみせよ！それが叶わぬのであれば死ね！拙者が代わりに人類の希望となり、身を粉にして戦ってやろう！かつての第一次聖戦の時と同様にな！」

「私は自分が人類に希望とは露ほどにも思っていないが、貴様よりは上手く出来る自信はあるぞ」

私はアイテルの最大の一撃を迎え討つように拳を向けてくる。

喧嘩は恐れてしまったら負けだ。

私は喧嘩番長として一歩も退かないぞ！

「来るがいい、アイテル」

「殺してくれる！必滅！天津甕星！」

アイテルは自らを光の刃と化して、私を両断しようと迫ってくる。

私を含めて時が止まったかのような速さ。

全ての法則を無視したかのような出鱈目な速さ。

自然の摂理に従っている者であれば、決して避けることすら叶わない言葉通りの必滅。

世界の全てを葬り去る究極の必滅。

だが、私は違う。

私は摂理をねじ曲げる力が備わっているのだ。

ならば、こちらも同様の領域で迎え討てばいい。

私の時が動き出す。

拳を握りしめ全てを切り刻む光の刃に向かって駆けていく。

黄金の拳よ、全てをうち砕け！

「うおおおおおっ！」

光の刃は黄金の拳に打ち砕かれ、アイテルの姿が露わになる。

「馬鹿な…拙者の必滅が…」

「終わりだ！アイテル！」

私の拳がアイテルの溝にめり込み、亀裂が生じていた黄金の甲冑が砕け散っていく。

「ごほっ…拙者の…負け…なの…か…」

服も破け、裸体が露わになったアイテルを私は抱き留める。

決着は付いた…。

……。

……。

…。

私は気絶したアイテルに服を被せ、疑似世界から出る扉に足を運ぼうとした。

不意に背後から殺気を感じ、身体を反らす。

反らした場所に剣が通り過ぎていった。

……。

背後から不意打ちしてきたのは銀色の甲冑にマントを羽織った兵士。

この疑似世界で私とアイテル以外にまだ残っていた奴がいたのか…。

「私はヘメラ、貴方様の力を試させて頂きます」

銀色の兵士はすかさず拳を繰り出して、私の脇腹を抉っていく。

「ごほっ！」

血の味がしてくる。

今の一撃は何の魔力も込められていないただの打撃。

それなのにこの威力何なのだ？

血の唾を吐きながら、気絶したアイテルを地面に横たえて、ヘメラを見据えようとするが、姿が見えない。

何処に行ったのだ?

「何処を見ているのですか?」

「ごほっ!」

背中に熱い感覚が襲ってくる。

……。

これは背中を剣で刺されたのか…。

「うおおおおっ!」

私は振り向き様に裏拳を振るい、背後の襲撃者を弾き飛ばす。

「私を…暗殺する…つもりか…」

私は背中の剣を引き抜き、魔法で止血する。

「ならば、容赦しないぞ!」

ヘメラは弾き飛ばされながらも掌を私の方へと向けていた。

「ミサ・ブレヴィス」

空間のあらゆる方向から小型の魔法陣が展開され、閃光が放たれていく。

「くっ！」

ピテスの技に似ている。

柔軟体操宜しくの動きを披露したい所だが、背中の激痛がそうさせてくれない。

身体の至る所に掠り傷を追いながらも五体満足で何とか回避し、安心したと思いきや光の刃が迫ってくる。

ヘメラが魔力で圧縮した光の剣を振るってきたのだ。

これ以上斬られてたまるか！

「うおおおおおっ！」

私は光の剣を鷲づかみし、ヘメラに蹴りを食らわせる。

「ぐふっ！」

「まだまだだ！」

そのまま拳を溝に打ち付けようとしたときにヘメラのしなるような蹴りが脇腹に当たり、背中の傷に響いてしまう。

「ぐおっ！」

目眩がしそうな程の激痛だ…。

ヘメラは私を背負い、さらに背中から地面に叩きつけていく。

「ごほっ！」

私の吐血が銀色の兜を紅く染めていく。

ヘメラは倒れている私に光の短剣でのど笛を貫こうと振りかぶってくる。

「調子に…乗るな！」

「ごはっ！」

私は拳を振り上げ、ヘメラを殴り飛ばす。

ヘメラは空中に浮遊し、莫大な魔力を収束させていく。

「ヴィマーナ！」

巨大槍を携え、こちらもまた魔力を溜める。

そして、魔力が溜まり、同時に技を繰り出していく。

「ミサ・ロンガ」

「ブラフマシル！」

互いが放つ波動がぶつかり合って相殺し、凄まじい余波が巻き起こり、世界を軋ませていく。

「うぐっ！」

背中の傷がまだ響いてくる！

私はふと遠くで横たわっているアイテルを見る。

早く決着を付けなければ、彼女を巻き込んでしまうことになる。

ヘメラの身体が輝き出す。

魔力の容量からして疑似世界が崩壊する威力の技を放とうとしている。

考えても仕方ない！

突貫あるのみだ！

私はヘメラに向かって飛び立っていく。

「ミサ・ソレムニス」

ヘメラは全身から目映い光を放ってくる。

ピテスの私は世の光に似た技か！

とりあえず構うことはない！

肉を切らせて骨を断つ戦法だ！

私は光に妬かれながらも突進していく。

ヘメラに接近し、拳を振りかぶる。

黄金の拳よ、またしても唸れ！

「あぐぅあああっ！」

銀の兜に黄金の拳が炸裂する。

光が止み、ヘメラは力が抜けるようにして地面へと落ちていく。

とりあえず決着が付いたか…。

私はヘメラの落ちていった場所へと降り立っていく。

此奴から目的を何であるかを聞き出すのだ。

……。

……。

…。

ヘメラは蹌踉けながらも何とか立ち上がっていた。

戦闘続行ならば、次は容赦無く始末する。

自分の命を狙う輩を放置していたら命が幾つあっても足りないからな…。

「お見事です。さすがですね、隊長」

隊長だと？

ヘメラは私のことを隊長と言ってきた。

私はいつヘメラを部下に持ったというのだろうか？

ヘメラは悠然と私に歩み寄ってくる。

「貴様はいったい何者だ？」

「何者、ですか…。何者か当ててみてくださいよ、隊長」

ヘメラは私の前に立ってくる。

「本当に分からないのですか？隊長」

ヘメラはやたらと隊長を強調して呼んでくる。

隊長。

いや、私のことを隊長と呼ぶ女性は二人いた。

まずはアイリだ。

彼女は公的な場に限り、私のことをロスト隊長と呼んでいた。

単に隊長とは呼んだことは一度も無かった。

そして、私的な場では名前で呼んでくれている。

だとすれば、私のことをいつも隊長と呼ぶ女性はただの一人しか思いつかない。

……。

「エリー」

……。

「はい、正解ですよ、隊長…」

……。

銀の兜がひび割れて落ちていく。

黄金に輝く髪を肩まで切り揃え、美青年とも言える風貌の女騎士。

ブリュンスタッドで初めて関係を結んだ絶世の美女。

エリアルト・リリエンフェルト。

ただ、何の心境なのか紺青色の口紅を塗っていた。

「お前はエロスに囚われていたのではなかったのか？」

「はい、囚われていました。けど、何とか逃げ出すことが出来たのですよ、隊長」

天真爛漫な笑みを見せてくるエリー。

だが、心なしか陰りのある笑みだ。

「もしかして私を疑うのですか、隊長…」

エリーはこの世の終わりが告げられたかのような悲しげな顔になる。

「い、いや、違う。よく逃げ延びたな、エリー…」

「はい、苦労したのですよ、もっと褒めてください、隊長…」

エリーは私を抱き締めてくる。

「それと私はヘメラ、リンドバルム王国将軍ヘメラ。それが今の私です。エリアルト・リリエンフェルトはもう何処にも居ません」

「エリー、ヘメラ…」

エリーはかつてのエリーの微笑みを私に見せてくれる。

「だから、私はもうヘメラなのです。私は生まれ変わったんです。あの頃の間抜けな私はもう居ないのです。それよりも隊長、私、強くなったでしょう？」

……。

「お前、私を殺すつもりだったのか？」

私の背中の傷が疼く。

この傷は殺すつもりで与えてきた傷だ。

殺気も本物だった。

「何言ってるのですか?私は隊長に自分の成長した姿を見せたかっただけですよ。それに隊長だったら私が殺すつもりでかかっても大丈夫だと思ったのです」

……。

「もしかして、隊長は私のことをまだ疑っているのですか?私…死ぬ思いで…此処まで来たのですよ。隊長に…会いたかったから…」

エリーの瞳が涙に濡れていく。

「いや、別に疑ってはいない。驚いただけだ…」

「本当…ですか?」

……。

「あ、ああ…」

「嬉しい!逢いたかったです!隊長…んちゅ…」

エリー、ヘメラは紺青色の唇を私のそれに重ね、激しく貪ってくる。

「ちゅぱ…ちゅぱ…隊長…ちゅぱちゅううっ!」

私はエリーだった者、ヘメラを抱き締めていく。

……。

私の瘤が急激に大きくなっていく。

……。

何故だ？

何故、エリーと再会したことで私の中にある瘤が大きくなったのだ？

瘤は何を喰らって大きくなってしまったのだ？

私は何かを考えないようにしているのか？

それとも何かに目を逸らしているのか？

エリーと再会出来て良かったはずだ。

だから、何も心配することはないはずなのだ。

そう、エリーの無事をただ喜べばいいのだ…。

それだけを考えればいい…。

……。

第９０話：アイテル

私はアイテルを抱きかかえ、エリーを伴って疑似世界を後にする。

……。

「おじさん、無事だったんだな！」

一番に駆けつけてくれたのはモイラだった。

「父様、無事で良かった…」

ロンはモイラに続く形で来る。

モロスは未だにティーとメイに拘束中だ。

同盟軍等もまた無事に待機していた。

私は気絶しているアイテルをジェラルド公国に引き渡していく。

「まさかアイテル様を打ち負かすとは本当にお強いのですね！今度お茶でもご一緒に如何かしら、ロース様」

私を誘いかけているのはジェラルド公国の王族令嬢だ。

「お誘いの言葉、有り難くお受け取りします。では、後ほど…」

とりあえず可もなく不可もなくで挨拶しておこう。

それにしても黒騎士と言っても私は以前のように兜で素顔を隠してはいない。

どうやら私のロストとしての名声は飽くまで名前だけのものだったようだ。

名前さえ偽れば、私がロストであることはよほど近しい者でない限り、気づくことは無いだろう。

「おじさん…」

「父様…」

私が愛想良く王族に挨拶している姿をモイラとロンは複雑そうな顔で眺めている。

これればかりは二人には堪えて貰うしかない。

……。

一方、ヒュプノスとエクリアは来たが、私の隣に居るエリーを見るなり顔を引きつらせた。

……。

「お久しぶりです、エクリア殿、ヒュプノス殿。あの時は大変お世話になりました」

エリーは爽やかな笑顔で挨拶してきた。

「本当に…エリアルト殿なのですか？」

エクリアは驚愕を通り越して、恐怖を抱いてる様子だった。

「見て分からないのですか？私は正真正銘のエリアルトですよ。まあ、今はリンドバルム王国将軍ヘメラですけどね…」

「どうやってエロスから逃れた？」

ヒュプノスは鋭い目でエリーを見据えている。

「言葉通り死ぬ思いをして、とでも言っておきますね。エクリア殿、私は裏切りは気にしていませんよ。戦争ではよくあることです。だから全然気にしていませんからね…」

「そ、そうですか…」

エクリアはエリーを見て、震えていた。

自分が裏切ったことでエロスに囚われていたはずの相手が今目の前にいるのだ。

さぞ複雑な心境なのだろう。

「他の者達はどうしたのだ？アイリウス殿とレテシア殿は無事なのか？」

俯いたエクリアとは違い、ヒュプノスは動揺をこれ以上見せることなく質問していく。

「知りません」

「本当に何も知らないのだな？」

エリーはヒュプノスの追求に飽くまで笑顔で応えていく。

「私は自分のことで精一杯でしたからね。言ったでしょ。死ぬ思いをしてきたと。ふふっ、そんな私に他人のことを気にする余裕があるわけないじゃないですか…」

「そうか、大変だったのだな…」

ヒュプノスはこれ以上聞いても仕方ないと思い、身を退こうとする。

「では、私からも聞いてもいいですか？」

「何を聞きたい？」

立ち去ろうとするヒュプノスを呼び止め、エリーは笑みを浮かべて質問してくる。

……。

「タナトス殿は何処にいるのですか？」

……。

ヒュプノスとエクリアの肩が一瞬震えるのが見えた。

「そう言えばヒュプノス殿とエクリア殿はタナトス殿を連れてヴァ

ルキリアから脱出したのですよね。タナトス殿は息災ですか？」

「ああ、息災だ…」

ヒュプノスはエリーの質問に冷静に応えているようだが、内心は動揺しているはずだ。

それとタナトスとエリーはブリュンスタッド時代から知り合っていた仲だった。

……。

『絶対に誰にも言うな。明日やってくる援軍には特にな。例え、タナトスに縁がある者であろうともだ』

……。

タナトスがいる場所はヒュプノスにとって、いや、反乱軍の最後の切り札になる場所だ。

「だったら是非逢わせてください。私はタナトス殿とはブリュンスタッドで知り合った旧友なのです」

「また今度にしてくれないか。今日は色々と忙しくてな。貴公も一国の将軍という立場だろう。決して暇では無いはずだ」

さて、どう出るのか？

「確かにその通りですね。では、次は必ず逢わせて頂きますね。隊長、私はこれから兵達と話がありますので…んちゅう…」

エリーはヒュプノスに見せつけるように私の頬に口付けしてくる。

「ちゅぱ…また後ほどに…隊長」

エリーは自分の唇を撫でながらも笑みを浮かべ、去っていった。

……。

「まさか、エリアルト殿が戻ってくるとはな…」

ヒュプノスはやはり少なからず動揺していたみたいだった。

「あの方は顔は笑っていましたが、目は笑っていませんでした…」

エクリアは自分の身体を抱くようにして震えていた。

「わたくしも嫌な感じがしました…」

「あたいも…何か喧嘩したらやばい感じだ…」

「儂も長年の勘が告げておる。あやつは限りなく黒に近い灰色だな…」

……。

みんなエリーを疑っているみたいだ。

普通ならば誰しもがそう思うかもしれない。

だが、私は…。

「おじさんはおじさんのままでいてくれたらいいぜ。旧友なんだろ？」

「エリーお姉さんはきっとまだ心の整理がついていないだけなんですよ、父様…」

彼女を擁護してくれる人情派もいる。

とにかくエリーの今後の様子を見定めておかなければな…。

「ロース殿！」

不意に私を呼ぶ声が聞こえてくる。

誰だ？

私は声が聞こえた方向へと振り向く。

頭二つ分高い背丈に紅い着物を身に纏い、レテシアのような大人の艶やかさを感じさせる美女がいた。

紫の髪を靡かせ、茜色の口紅を煌めかせており、母性は触れる豊満な胸が実に輝かしかった。

「アイ…テル…なのか？」

私は口を開いて、目の前の美女にまじまじと見つめた。

旧知の仲であるアレクを初めとした他の女性陣も口をあけて目の前の不可思議な光景を見ていた。

「はい、そうで御座います、御亭主様…」

御亭主様?

「それは…私のことなのか?」

「他に誰がいましょう?拙者の愛しい御亭主様…」

アイテルは舞うように軽やかな動きで私の隣に立ち、腕を絡めてくる。

そして、頬を染めて、私の胸に人差し指を付けてくる。

これが先ほどの戦闘狂だと思ったアイテルなのか…。

私は視線をアレクに向ける。

「儂もこんなアイテルを見たことなど無かった。いや、長生きしてみるものだな…」

よほど感慨深い出来事だったのか、アレクはしみじみと語ってくる。

「おじさんの毒牙にかかった女がまた一人…」

「落ち着いてください、モイラお姉さん。もうこれが父様なのですから…」

ロンが落ち込むモイラを宥めていた。

それよりもいつの間に仲良くなったのだろうか？

「それよりもエリアルト殿とタナトスの件はこちらで何とかする。ロース殿、分かっているな？」

ヒュプノスは確認するように私に問いかける。

エリーには絶対にタナトスのこと、いや、疑似世界について話すなということなのだろう。

「ああ、分かった…」

とりあえず返事したが、エリーと逢えばどうなるかが分からない。

なるべく彼女とは鉢合わせにならないようにしよう。

エリーのことは別に疑ってはいない。

いや、もしかすると…。

「御亭主様、拙者は貴方様とお話をしとう御座います…」

私はたおやかな胸に腕を包まれながらも物を言わせぬ力で引きずられていく。

「ロース殿、アイテルは不老不死であるが、正真正銘の人間。ピテスと同様に生殖行為が可能な相手だ。そなた達のがんばりに期待しておるぞ」

「わたくし達は子種を成せないのが、残念ですが、その代わりロース様には一生わたくし達の食事として奮闘していただきます。生かさず殺さずと言ったところですね」

「ロースとアイテルの子供だったら強そうだな。成長したら喧嘩を挑む楽しみがでてくるかもしれないね。丈夫な子を作るんだよ」

アレク達は好き勝手言って去っていく。

各国の軍隊もそれぞれ軍の編成について会議と訓練が行われるようだ。

もう私に出来ることはここにはない。

「後で覚えてろよ、おじさん」

「落ち着いて、モイラお姉さん」

ロンは僅かに悲しげな表情を私に向け、モイラを宥めながら、去っていく。

そう言えばロンの方がモイラよりも年上だと思うが、何故姉呼ばわりするのだろうか？

それにロンが一瞬見せた悲しげな顔はいったい？

……。

今考えても仕方ない。

私は腕に抱きついてくる絶世の美女を見る。

ジェラルド公国総軍団長アイテル。

彼女は不老不死であり、第一次聖戦でカオスと戦ったことがある伝説の女傑。

まさにアレクと並ぶ生き字引というやつだ。

「御亭主様のお考えは分かっております。第一次聖戦の時のお話がご所望なのでしょう？」

どうやら伊達にアレクよりも年寄りということではなさそうだ。

「そうだ…」

私は下手に誤魔化さずに正直に応える。

「その話は宿舎にて致しましょう。さあ、こちらへ…」

「お前はジェラルドの要人ではないのか？」

彼女は総軍団長という立場なのだ。

私にかまけている暇は無いと思うが…。

「拙者は御輿なのですよ。第一次聖戦でカオスに戦いを挑んだ女傑として持て囃されているだけで御座います。それに子種を授かることも彼らにとって利益になること…。あっ、勘違いなさらないでく

ださい。拙者は純粋に御亭主様に抱かれたいと望んでいるのです」

アイテルは潤んだ目で私を見つめてくる。

なるほど、打算ではなく純粋に私に抱かれたいと…。

さらに不老不死であるだけで子種を受け容れることが出来る人間であると。

……。

まさに完璧ではないか！

政治的利益も愛情も快楽も得ることが出来る！

これ以上に無い一石三鳥とも言える出来事だ！

「では、ゆっくりと話を聞かせて貰おうか…」

「はい、拙者の口と…胸と…身体至る所全てに余すことなく聞いてくださいませ、御亭主様…」

私はアイテルに抱き寄せられて閨がある宿舎へと案内されるのだった。

……。

……。

…。

宿舎では既に何時でも夜を過ごせるようにと寝具が整っていた。

「御亭主様、お茶をお注ぎします」

アイテルは手慣れた手つきでお茶を茶碗に注ぎ、ベッドの上に座った私に差し出してくる。

その壊れ物を扱うような繊細な手つき、これが先ほどまで剣を振り回していた物騒な戦闘狂なのか？

余りにも雰囲気が違いすぎている。

「御亭主様はよく顔に出されるようですね。驚かれましたか？これが拙者なのです。拙者は女故に周囲の前では常に強く見せねばならなかったのです。これはアレクの前にも見せたことがなかったのですけどね…」

アイテルは儚げな笑みを見せる。

「拙者は代々武士を配する家系に生まれし者。父上の代では男の子が恵まれず拙者が武士として日々剣の修行に明け暮れていました。そして、神降ろしの儀により、不老不死の術が授けられ、契約した神の名アイテルの名を頂くこととなりました。その時に知り合ったのが、アレクでした」

アイテルの不老不死は神降ろしの契約の最中で授けれた奇蹟だったということなのか…。

そして、アレクともその時に知り合ったわけだ。

「拙者は父上から習った剣術、アイテルとの契約で手に入れた身体能力で強大な戦闘力を得ることが出来ました。同時にその頃はヴァルキリア帝国が建国され、女性優位を掲げるカオス・ヴァルキリアの名の下に男狩りが起こっていました。これが第一次聖戦の始まりとなります」

カオス・ヴァルキリア。

エロスと並び称されるヴァルキリアの始祖。

私が倒さなければならない相手の一人だ。

「拙者はアレクと共に戦場を駆け巡り、幾度もカオスに戦いを挑み、何度も引き分けました。そして、拙者は人類の英雄として持て囃されたのです。ですが…」

「カオスはさらなる力を手に入れたのだろう？」

私の言葉にアイテルは目を見開き、無言で頷く。

カオスは人から神へと転生したのだ。

それで上級神以上の力を手に入れてしまった。

「拙者は強大化したカオスに成す術もなく敗れ去りました。拙者が敗れた姿を見て、当時の同盟軍首脳は絶望に打ち拉がれたのでしょうか、如何に降伏するかを模索し始めました。ですが、奇蹟が起こったのか、カオスは戦場に現れなくなり、ヴァルキリアの進撃は止まりました。そのまま何も起こることなく、なし崩し的に第一次聖

戦は終結しました…」

……。

「何故、カオスが姿を消したかについてはどうなったわけだ?」

「分かりません。余りにも強大な力を持ちすぎた故に謀殺されたという説が有力ですが、真相はヴァルキリアの中枢のみでしか知らされていません。同盟軍の諜報部もやぶ蛇を突いてカオスが表舞台に帰ってくることを恐れ、それ以上手出しはしなかったと言われています」

強大な力を持ち過ぎて謀殺というのは強ち間違っていないだろう。

多分、その頃にガイアとエロスとの熾烈な戦いが繰り広げれていたのだろう。

そして、制御でき無くなりつつあったカオスをエロスが封印したことで真相は闇に葬り去られたに違いない。

「御亭主様…」

アイテルは私の隣に座り、甘えるように身体を預けてくる。

「拙者は御亭主様の言われた通り、井の中の蛙で御座いました。こんな拙者ですが、父上の影響もあり、かなりの負けず嫌いだったのです。ですから、あの戦いでは大変見苦しい姿を見せたことをお許し下さい…」

「いや、謝らなくていい。私もまた井の中の蛙だろう。私一人では

太刀打ち出来ない者など沢山ある。それを自覚して注意すればいいのだ」

最強の力を手に入れても決して無敵ではない。

この世界の私がタルタロスに敗れたのが証拠だ。

「今までがむしゃらに剣を振るってきた拙者ですが、これからは違います。御亭主様と御亭主様がお守りする方々のために身命を賭して剣を振るいとう御座います。武家に生まれた女として…」

「アイテル…」

私は急にアイテルのことが愛しくなり、抱き締めた。

彼女のしなやかなで柔らかい身体の感触を心地よく感じてくる。

「御亭主様、嬉しゅう御座います。貴方様の温もりが拙者をただの女にさせてくれます…」

「私もお前の温もりでただの男となってしまう…」

アイテルは私を引き寄せるように首に腕を回し、ベッドに倒れ込んでいく。

「ならば、ただの男と女で混じり合いましょう。拙者は御亭主様のお情けを賜りとう御座います…」

「私もお前が欲しい…」

私とアイテルは互いの唇を重ね、混じり合っていく。

「ちゅぱ…御亭主様の唇…熱う御座います…ちゅちゅぱ」

淑やかな振る舞いから一変してアイテルは激しく私の身体をまさぐってくる。

彼女の繊細さと獰猛さを兼ね備えた手技に私は翻弄されてしまう。

「ちゅ…拙者に…拙者に…ちゅぱ…全てを…お任せ下さい…ちゅううっ」

私の身体の隅々を制覇するかのように自分の身体の全てを駆使して混じろうとしてくるアイテル。

彼女はやはり戦闘狂の側面を備えている。

言葉とは裏腹に自分が全てを制覇したいという思いが伝わってくる。

だが、これもまたアイテルの姿なのだろう。

「拙者の全てをお受け取り下さい、御亭主様…うぐぐぅ！」

私の上に跨り、男の証を呑み込もうとするアイテル。

彼女の苦悶に満ちた表情が自分の初めてを私に捧げようとしていることが伝わってくる。

「はあああああっ！」

「ぐうっ！」

アイテルは絶叫を上げ、私の全てを呑み込む。

武の世界で生きてた彼女の中は途方もなく強い締め付けだった。

一瞬でも気を抜けば、私の欲望が弾けてしまいそうな程に…。

「はぁ…嬉しゅう御座います。これでアイテルは御亭主様の女になれたのですね…」

アイテルは歓喜の涙を流していた。

「では、御奉仕を致します！あああっ！」

「うぐっ！」

初めてを捧げたはずにもかかわらず、鬼のように激しい腰使いを炸裂させられる。

武に生きた女は痛みに強いということなのか！

「あぁん！御亭主様！御亭主様！あぁっ！」

このままでは一方的にやられてしまう。

私は激しく揺らすアイテルの胸を鷲づかみにして何とか気を逸らそうとするが…。

「あああっ！気持ちいい！御亭主様のお手が私の胸に…あああああ

っ！」

返って事態を悪化させてしまった。

「御亭主様ぁあああああっ！」

「ぬおおおおおおおおっ！」

……。

……。

……。

……。

……。

……。

「気持ちよう御座いました、御亭主様…んちゅ」

アイテルは満ち足りた笑みを浮かべて、私の頬に唇を押しつけてくる。

アイテルに御奉仕されるつもりが、私がアイテルに御奉仕する形になってしまったような気がする。

まあ、気持ちよかったことは確かだから細かいことは気にしないでおこう。

「御亭主様、もうすぐ戦が始まります。おそらく沢山の命が散ると思われます…」

「そうだな…」

ある程度の援軍が揃えば、いよいよエロス軍の本拠地ジークリンデへと進軍を開始することになる。

そして、パラディスムの双子とも戦わなければならないのだ。

「ですが、御亭主様のお命だけは散りません。拙者が命を賭けてお守りしますが故に…」

アイテルは私を守るという思いを込めて、私を抱き締めてくる。

私の頭はアイテルの胸の中へと沈んでいく。

「御亭主様は分かっておられるのでしょう。エロスの取り巻きには拙者程度の実力者はいくらでも居ることを…。だからこそ、拙者を井の中の蛙と仰られたのでしょう」

……。

「それでも拙者の成すべきことは変わりませぬ。武士とは死ぬことと見つけたり。拙者は御亭主様が歩む血路を開くために腐心するのみです」

「アイテル…」

私は縋るようにしてアイテルの身体を抱き締める。

「余り私の前で命を賭けると言わないでくれ。死ぬ思いで私を守ってくれるのは嬉しいが、本当に死んでしまってはもう何も出来なくなるのだぞ」

「申し訳ありません。ですが、これが拙者の生き方で御座います。それ以外の生き方は私は知らないのです…ちゅ」

アイテルは私の頭に口付けをして撫でていく。

「拙者は死ぬことでしか証を立てれませぬが、御亭主様は生きることで証が立てられるのでしょう。ですから、どうか生き延びてください。例え、どれほどの恥辱にまみれようとも…」

彼女は私が危険に陥ったら迷うことなく自らの命を盾にして守ってくれるだろう。

だが、それでは非常に困るのだ。

「私は生き延びる。今までそうしてきたように…。お前も私の女になったのであれば、生きてくれ。生きて私を支えてくれ。そして、私の子を宿すのだ」

彼女には私が生きた証を身体に宿してもらうのだ。

この歪んだ世界に希望を残すために…。

私が生き延びる理由を見出すために…。

「拙者が恐れ多くも御亭主様の御子を宿しても宜しいのでしょうか？」

「そのためにも交わったと思ったが…」

そう言えばアイテルは私の子を宿すためでは無く、純粋に私に抱かれたいためだったことを忘れていた。

「もし、御亭主様のお許しが頂けて御子を授かることが出来ると申されるのであれば、確かに拙者は死ぬわけにはいかなくなりますね…」

「そういうことだ…」

アイテルは私を抱き起こしてくる。

「では、拙者が生きる証をお与え下さい。貴方様の生きる力を分けて頂きとう御座います」

「それならば、お安いご用だ」

私はアイテルを掻き抱き、男の証でアイテルの女を貫く。

「はあああっ…御亭主様の生きる力が拙者の中に…あうっ！」

「アイテル、お前も私と共に生き延びろ！うおおおおおおっ！」

……。

……。

……。

……。

……。

……。

……。

私はこれ以上に無い程に欲望を発散させた。

アイテルは私の胸の上で寝息を立てている。

モイラやピテスに続いて、アイテルも私の子が身ごもればいいと思う。

家族が増えれば、それだけ生きる活力になるからだ。

……。

さて、同盟軍が結成され、いよいよ戦の準備に取りかかる時が来た。

果たしてエロス軍はどんな時期を狙って進軍してくるのだろうか？

奴は攻め落とそうと思えば、何時でも出来るはずだったにも関わらず、未だに何も行動に出ていない。

気まぐれなのか、あるいは何か狙いがあるのだろうか？

気まぐれならば、いつまでも気まぐれに見逃してもらいたいと思えてくる。

反対に何かの狙いがあるとすれば、それが何であるかを探す必要がある。

だが、何よりも気になることはエリーの存在だ。

彼女はエロス軍で何を見てきたのか？

それについて追求したいと思っても、足を踏み出せずにいる自分がいる。

もし、それを聞けば、何かが壊れてしまいそうな予感がしてくるからだ。

頭の中の瘤に痛みを感じてきている。

このままでは瘤が破裂してしまう。

破裂してしまえば、何もかも全てが失ってしまう…。

「まだ、起きておられたのですか、御亭主様…」

アイテルはいつの間にか目を開けて、私の胸の上で身じろぎをしていた。

「ああ、済まない。起こしてしまったか？」

アイテルは首を横に振り、立ち上がる。

「どうしたのだ？」

「御亭主様が心安らかになられるよう音楽を賜りましょう」

アイテルはベッドから降りて、棚から楽器らしき物を取り出す。

「これは東洋に伝わりし古の楽器、胡弓と呼ばれるものです」

西洋に伝わる楽器ヴァイオリンやチェロとはまた違う形の弦楽器だった。

アイテルは弓らしきものを持ち、本体の弦に添えていく。

「御亭主様の安寧をお祈りして…」

音楽が奏でられていく。

彼女が奏でる音色は母が子供に聞かせる子守歌のように優しく心洗われる響きだった。

まるで母親に抱き締められているような気分になっていく。

眠たくなってきたな…。

エリーのことはまた明日にでも考えよう。

今はアイテルの音色に浸っていきたい。

……。

私はまた考えるのを止めてしまった。

そして、痛みを感じる瘤を余所に私は眠っていくのだった。

……。

第９１話：Ｔｒａｇｉｓｃｈｅ　Ｏｕｖｅｒｔ？ｒｅ

「では、拙者はジェラルドの軍編成に勤しむ故に失礼致します…ちゅ」

日が変わり、アイテルは別れの口付けを私の頬にして宿舎を後にした。

私は茜色の口紅がついた頬を押さえてアイテルを見送った。

彼女は本当に私に惚れたのか、当初のような激しさは息を潜め、清廉な淑女として振る舞っていた。

おそらくこれが本来の彼女の姿だったのだろう。

さてと、私はどうすればいいのか…。

私もまた同じく宿舎を後にしたが、何もすることが無く途方に暮れていた。

ふと、黄金の髪を靡かせている女性が歩いているのを見かける。

リンドバルム王国将軍ヘメラ、もといエリーだ。

彼女は誰かを捜しているかのように周囲を見回している。

私は思わず隠れてエリーが通り過ぎるのを待った。

「隊長はいったい何処にいるのでしょうか？」

エリーの声が聞こえてくる。

やはり私のことを捜していたのか…。

「せっかくタナトス殿のいる場所を教えて頂こうと思ったのに…」

……。

エリーは私からタナトスの居場所を聞きだそうとしている。

このままだといずれ私は彼女に見つかり、場所を聞かれることになる。

今のエリーは以前と違い、かなり危ない雰囲気を漂わせている。

何らかの含みがある女性は私は苦手なのだ。

それに私は交渉術や誘導尋問のような高等話術は皆無だ。

もし、タナトスの場所を問われてしまえば、確実に話してしまう気がする。

さらに無理矢理誤魔化そうとすれば、私が疑っていると思われて、何をされるか分かったものではない。

エリーは昔のような私の部下という立場ではない。

リンドバルム王国将軍という要人なのだ。

彼女の心証を悪くして、リンドバルムが同盟軍から離脱という事態もあり得る。

慎重に対応していかねばならない相手なのだ。

これは早急に対策を立てる必要があるな。

……。

……。

…。

私はヒュプノスの屋敷に向かった。

彼女は各国の代表と軍事会議に勤しんでいるため逢うことは出来なかった。

モイラも彼女と共に出席している。

最近、モイラともまともに話していない気がする。

代わりにエクリアが私の話を聞いてくれることになった。

この際だ、エクリアを伝言役としよう。

ヒュプノスが聞けば分かるような言葉を言伝ておこう。

「閣下、一体何の用件でしょうか?重大な話があると聞きましたが…」

「エクリア、ヒュプノスの耳元に伝えて欲しい言葉がある」

さて、どういう言葉を伝えようか？

まず一つ目。

エリーに捕まって、タナトスの居場所を白状させられるかもしれないから助けてくれ！

これは余りにも情けなさ過ぎるため却下。

二つ目。

エリーの色香に屈服して、つい口が滑ってしまいそうだ、許せ…。

格好良いようで格好が悪い言い訳だから却下。

……。

分からん！

どのように伝言すればいい？

第一、エクリアもタナトスの居場所は知らないだろうから、逆に追求される恐れもある。

私は美女からの追求には弱いのだ…。

……。

いや、本当は違う。

私はエリーを疑いたくないのだ…。

だから、多分エリーが言ったことを私は迷わず呑んでしまう。

彼女は鬱陶しい時もあったが、それでも私の初めての部下だった女性だ。

……。

「エクリア、ヒュプノスにこう伝えてくれ。仲人になるかもしれないと…」

これでヒュプノスに伝わればいいのだが…。

おそらく私はヒュプノスとの約束を破ってしまうだろう。

自分の心の弱さに我ながら呆れ果ててしまう。

「はあ…そう伝えれば宜しいのですか？」

エクリアは怪訝そうな顔をしたが、了承してくれた。

後はエリーを信じるだけだ。

……。

だが、事態は私のなけなしの脳では既に収まりきらないほどに大き

くなろうとしていたのだった。

……。

……。

…。

ヒュプノスの屋敷から出るとロンと鉢合わせになった。

「あ…父様…」

「ロン…」

何となく気まずい空気が漂ってくる。

別にロンに対しては何らやましいことはないはずなのだが…。

「父様は昨日晩はアイテルお姉さんと過ごされたのですね?」

「そうだが、どうしたのだ?」

ロンは暫し沈黙した後に笑顔を見せてくる。

「ううん、何でもありません。それでは私はヒュプノス殿と相談したいことがありますので…」

ロンは私から逃げるようにヒュプノスの部屋へと入っていく。

私は走り去っているロンを見送り、思案する。

彼女は私のことを父として慕っているが、男としてはどう思ってくれているのだろうか？

私が他の女性と関係を結ぶ様子を見て、悲しげな表情を見せていた。

彼女は私のことを男として見てくれていることも考えられる。

時間が空いた時に話してみよう。

……。

ふと背中に何者かがしがみついてきた。

背中に羽布団のような心地よい感触がしてくる。

それに首筋に柔らかくて湿ったものを押しつけれている。

「はむはむ」

この感触はピテスだ。

相変わらず私の背中を自分の居場所だと決めつけて居座るつもりでいるようだ。

「ちゅぱちゅぱ」

どうやら大人しく留守番をしていたから生気を吸わせろと言いたいらしい。

首筋を唾液で濡らしながらも私は一旦自分の住む民家へと戻っていくことにした。

……。

……。

…。

民家の前に一人の女性が待っていた。

「エリー、いや、ヘメラ将軍か…」

「待っていましたよ、隊長…」

迂闊だった。

私の民家は既に隊員達の知れ渡っている。

彼女が先回りしていてもおかしくないという考えに何故至らなかったのか…。

「あの人…誰？」

ピテスが回している腕の力が強まり、私の首が絞まっていく。

「彼女は私の元部下、リンドバルム王国将軍ヘメラだ」

そういえばピテスは私の家に留守番していたから初対面なのだ。

「初めまして、小さな天使さん。私はヘメラです」

ヘメラはピテスに対して笑顔で挨拶をしてくる。

ピテスはヘメラの挨拶に対して一瞬だが、確かに身体を震わせた。

私はピテスの反応に軽く衝撃を受ける。

いつもなら即座に「私はピロテース、ロストの妻」と返すはずだ。

それが無言のまま身体を震わせたのだ。

ピテスはモロスを相手にしても一歩も退くことなく啖呵を切るほどの胆力の持ち主だ。

そのピテスがヘメラに怯えたとは…。

「貴女から異臭が漂っている…」

……。

私はピテスが何を言っているのか分からなかった。

「私はいつも清潔を心がけているつもりだけど、何か臭うのかな?」

ヘメラはピテスの物言いに飽くまで笑顔を絶やさない。

「貴女は私と同じ…アパテーにやられた被験体…」

……。

「ふふっ、何のことでしょうか？可愛い天使さん…」

エリーは口に笑みを浮かべたまま鋭い眼光をピテスに向けてくる。

私はピテスの口からまたしてもアパテーの名が出てきて動揺してしまう。

エロスの助手として、世界全てを実験場と言って憚らない狂科学者アパテー。

タナトスの感情を壊した忌むべき存在。

エリーもアパテーに何かをされてしまったというのか？

「私は誤魔化されない…私と同じでも…方向性が違う…私はエロスの思想を元に…貴女は…」

「アパテーの思想を元にですか？ピロテース、エロスの理想の少女人形…」

ヘメラの切り返しに息を呑むピテス。

エロスは強く美しく抱き心地の良い少女を理想としていた。

対してヘメラはアパテーの理想を具現化した存在なのか？

「隊長、私と戦った貴方はもうご存じのはずですよ。私は何の思想を元に作られたかを…」

笑顔を浮かべたまま近づいてくるエリー。

「ロスト…恐い…」

いつもの強気なピテスがエリーに対して本気で怯えている。

私はピテスを庇うようにしてエリーを睨み付ける。

「おや？元部下である私に敵愾心を抱くのですか？私は悲しいです…」

エリーは悲しげに俯いてくる。

分かっている。

これが演技であるということを…。

だが…。

「エリー、お前は…」

「察しの通り嘘ですよ。けど、戦い以外ではやはり甘いようですね、隊長…」

「ロスト！」

ピテスの叫ぶ声が聞こえ、背中が不意に軽くなる。

後ろを振り向くと銀色の兵士がピテスを捉えていた。

いつの間に私の背後を回ったというのだ？

それにあのピテスがいとも簡単に囚われしまうとは…。

ピテスを捕らえた銀色の兵士達は私の三倍ほどの体格という、有り得ないほどの体格を誇っていた。

タナトスやケールを上回る体格の兵士達は言葉通りピテスを赤子の如く捕らえている。

さらに周囲から人の気配が消えている。

これはいつの間にか疑似世界に引き寄せられてしまったのか…。

「下手な抵抗をしないでくださいよ。貴方が暴れたらリンドバルムに敵対したということで反乱軍から離脱し、エロス軍に寝返ります…ふふっ…」

「エリー…」

ヘメラは捕らえられているピテスの方へと歩み寄っていく。

「ピロテースを何故、簡単に捕らえられたのかって？簡単なことです。私はアパテーから放たれた刺客、エロス軍の反乱分子を抹殺するために寄越された暗部なのですから…」

元々はアパテーがピテスを処分しようとしたのを阻止するためにエロスが私への刺客と言う名目で逃がしたという。

アパテーは逃げたピテスを始末するべく刺客を放ってきた。

エロスの意向を無視してまで強行してきたのだ。

アパテーはエロスの実験助手である前にタルタロスの腹心だ。

ならば、エロス軍は一枚岩ではなくエロス派とタルタロス派が存在しているということなのか？

『敵を見誤るな、ロスト…』

エロス…。

『ピテスを頼む…』

お前が私にピテスを託したのはこの時のためだったのか…。

「ピロテースは確かに強大なる生体兵器です。けど、私と彼女を拘束しているオケアニス達はそれを上回る生体兵器だったということですね」

この有り得ないほどの体格をしている兵士達はオケアニスと呼ばれる者なのか…。

驚いている私に気を良くしたのか、ヘメラはさらに得意げに語ってくる。

「そうそう、このオケアニスについてはもっと面白い話があるのですよ。お前達、兜を脱げ…」

ピテスを捕らえている三人の兵士がそれぞれ申し合わせたかのよう

に揃って兜を脱いでいく。

……。

白銀の髪を肩まで切り揃え、透明感溢れる白い肌に艶めかしい藍錆色の口紅が塗った鉄仮面のような表情の絶世の美女。

だが、真に注目すべきことはそれではなかった。

三人共同じ姿だったのだ。

エルやアビスのような双子とは違う。

同じ目つきで同じ仕草、同じ雰囲気…。

同じ、そう、同じなのだ…。

何もかもが不自然なまでに似すぎている異質な存在。

「彼女達はガイアの元親衛隊、ティターン神軍の一神オケアノスの分身体三千の内の三体ですよ。いわゆるティターン神軍の一兵卒と言ったところでしょうか。ですけど、ピロテースを取り押さえた所から分かるように一兵卒と言えど一騎当万の実力者揃いだということは確かですね…」

ヘメラは笑いながらも恐ろしいことを口にしていた。

ピテスを取り押さえるほどの実力者が三千…。

そして、それらを統括する者がティターン神軍の一人であるという

…。

ティターン神軍は想像を遙かに上回る強大な軍隊だというのか…。

「隊長はもう私に従うしかありませんよ。ピロテースを捕らえているこの三体は残りの二千九百九十七体の兵士と繋がっています。もし、この少女人形を助けるために彼女達を倒すか傷つけたりしてしまえば、ただちに二千九百九十七体のオケアニスに伝わることになります。それがどういう意味かお分かりでしょう？」

……。

もし、ここで交戦すれば、残る二千九百九十七体のオケアニスに三体の危機が伝わり、この反乱軍本部に襲撃を仕掛けてくる。

それはすなわち反乱軍とエロス軍との全面戦争へと発展することを意味する。

もはやこれはヒュプノスの約束を破る云々では済まない事態となっている。

私にはもう選択の余地が無いということだ。

「大人しくしてくれれば有り難いです。私としても出来れば隊長を殺したくはないですからね」

「私もお前と殺し合いをしたくはない。何が目的だ、エリー？」

私の問いにエリーはわざとらしくため息を付いてみせてくる。

まるで自分の目的が既に知っていたと思っていたけど、そうでなかったというような期待外れのため息。

「私の目的はただ一つタナトス殿の居場所を知ることだけですよ、隊長」

「何故、タナトスの居場所をそこまでして知りたいのだ？私にではなくヒュプノスに直接聞けばいいだろう？」

エリーがタナトスの居場所を知りたいのは懐かしの旧友と再会するためだけではないのは確かだ。

何か裏があるはずだ。

「それに懐かしい旧友と再会したいためにここまでしないはずだ。何が狙いだ。エリー」

こんな交渉まがいの形でエリーと会話をしたくはない。

だが、彼女の手にはピテスの命がある。

彼女は私の女、もとい仲間としてではなくアパテーの刺客として対峙している。

悲しいことだが、これが現実なのだ…。

「アパテーはこのジークフリートに度々間者を寄越していたのです。自分が扱っていた被験体がどうなったのかを知りたくてね。ほら、隊長は見たはずですよ。廃人になってしまった哀れな人達を…」

まさか…。

『エロスさまぁあああああああああああっ！』

エロス軍にセシリアを初めとする囚われて発狂してしまった犠牲者達の中に患者がいたということなのか…。

「貴方達が保護した哀れなる被験体の細胞にはある特定の信号を受信するとヴァルキリアにその情報が届くことになっています。ある特定の信号とはタナトス殿の呼吸音や脈拍、体温、彼女が発する生命反応と言った方がいいでしょうか。とにかく彼女が居る事が分かればヴァルキリアの伝わることになっていたのです」

タナトスの生命反応が感じないのは当然だった。

彼女はヒュプノスが構築した疑似世界に居着いていたのだから…。

そして、そのことは私を除いてヒュプノスしか知らないことだ。

「質問に答えろ。タナトスを探してどうするつもりだ？」

タナトスは感情が壊れてしまい、とてもではないが利用価値があるとは思えない。

彼女自身を利用する以外で何か目的があるはずだ。

それを探らねばならない。

「別にタナトス殿をどうこうすることはありません。ただ彼女が何処に雲隠れしたのかを知りたいのですよ…」

……。

エリーの目的が分かった。

自分達の監視の目から逃れられる場所は何処かと聞いているのだ…。

タナトスが隠れた世界はヒュプノス曰く滅びつつある世界の中での最後の切り札と言っていた。

エリーは、いや、エロス軍はその世界を探るためにタナトスを引き合いに出してきたのだ。

もしかすると今までエロス軍が攻めてこなかった理由はまさかヒュプノスが隠した世界を探るためなのか？

私は嘲るような笑みを見せているエリーを見据える。

「さて、私はここまで正体を晒したのですよ。隊長も私に隠していることを包み隠さず話して頂きたいものですね。そうでなければ…」

「うぐっ…」

オケアニスがピテスの首を締め上げてくる。

「やめろっ、エリー！」

「止めません。隊長、それに私はもうエリーではありません。ヘメラです」

「う…うっ！」

ヘメラは暗い笑みを見せてくる。

「もうすぐしたら本当の人形になってしまうかもしれませんね。さあ、どうしますか、隊長。私は一向に構わないのですよ。後はこの兵士達を暴れさせるだけですからね…」

「エリー！くっ…」

何故、こうなってしまったのだ…。

せっかく生きて再会したというのに何処で道を違えてしまったのか…。

いったいエリーはどんな地獄を見てきたのか…。

……。

『ロスト隊長！貴方様の勇姿に惚れ込み、麾下に加わりたいと馳せ参じました！』

……。

初めてであった頃の私の心臓を撃ち抜かんばかりの笑顔で挨拶したエリー。

……。

『私はエリアルト・リリエンフェルトと申します。親しい者はエリ

ーと呼びます。閣下、どうぞ，エリーとお呼びいただけないでしょうか…』

……。

子犬のように私の後を付いてきた少し間抜けな副官エリー。

……。

『感激です！閣下のような英雄に支えて欲しいと仰られるとは…。私はいつ死んでも悔いはありません！』

……。

私の情けない姿を英雄だと盛大に勘違いした残念な美女エリー。

……。

「あぐぅうう！」

オケアニスはわざとピテスに呻き声を上げさせるように首を締め上げている。

「ピテス！」

駆けつけようとしたところを二人のオケアニスに阻まれてしまう。

そんな私を高笑いするエリー。

「あはははは！早く決断してくださいよ。そうしなければ隊長の

愛しい人形がただの人形になってしまいますよ?それでもいいのですか?ははははははっ！」

……。

もう私達はあの頃には戻れないというのか…。

「分かった、タナトスの居場所を言う。だが、決してタナトスに手出しをしないことが条件だ！」

「まだ自分の立場が分かっていないようですね。隊長には選択の余地なんてないのですよ」

ヘメラは目で合図し、ピテスを締め上げているオケアニスは彼女の溝に拳を打ち込んでいく。

「ごほっ！」

「ピテス！」

ピテスは血を吐き、苦悶の表情になっている。

「ふふっ、もう一度言って貰えますか、隊長?」

「タナトスの居場所は…ヒュプノスの屋敷にある…疑似世界です。だから、もうピテスを傷つけないで…ください…」

済まない、ヒュプノス…。

私はお前との約束を破ってしまった…。

私は唇を噛み、掌に爪を立てるように握りしめながらもエリーに向かってお辞儀をする。

「あははははっ！まさか隊長が元部下である私に向かって一礼するなんて可笑しいですね！だけど何でしょうか？とっても良い気分ですよ！はははははははっ！」

高笑いするエリーに私はただ頭を垂れていた。

耐えるのだ、ロスト…。

私の態度次第でピテスの生死が関わってしまうのだ…。

「ロ…ス…ト…」

ピテスが悲痛に満ちた声で私の名を呼ぶのが聞こえてくる。

「良いですよ、隊長！その態度に免じて愛玩人形の命はとりあえず保証してあげますよ。なんたって隊長が頭を下げてまで頼んだことですからね。仕方なく聞いてあげますよ。元副官の私に感謝してください、あははははっ！」

……。

「では、頭を上げてください。隊長がここまで恥を忍んで私に頭を下げてくれたのです。その心意気に元副官である私が女好きの隊長にご褒美をあげますよ…」

オケアニスに首を締め上げられ項垂れていたピテスをヘメラが受け

取り、拘束魔法を掛けていく。

「何をするつもりだ？」

「だから、ご褒美ですよ、隊長…」

ピテスを締め上げていた者と私の前に立ちふさがっていた二人、三人のオケアニスが私を取り囲んでくる。

「私からのせめてものご褒美です。彼女達の身体で楽しんでください、隊長…」

後ろのオケアニスが私を羽交い締めにして、前の二人が私の顔を覆うほどの巨大な藍錆色の唇を寄せて吸い付いてくる。

「ちゅばちゅばちゅば」

「ちゅうううっ！」

「むぐぅ！」

三倍の背丈を誇る彼女達の唇は相応に大きく、二人の口付けで私の顔が潰されるのではないかというほどの力強い押しつけだった。

それに身体の生気が吸われていく…。

「むごっ！」

首筋に激痛を感じ、舐めしゃぶる音が聞こえてくる。

「ぢゅるるうっ！」

後ろから羽交い締めにしてるオケアニスは私の首筋に噛みつき、血を啜ってくる。

彼女の巨大な唇は私の首の半分まで覆い、まるで鰐に嚙られているかのような形となっていた。

突き立てられた歯も大きく、私の首筋からは血が大量に滴っていた。

「彼女達は生気だけでなく生き血も好物なんですよね。けど、お酒と同じようなものですよ。最初は痛いけど、病みつきになるような快楽がやってくるのです、ふふっ…」

「ぢゅるぢゅるぢゅる…」

ヘメラの言う通り、オケアニスの吸血行為は身体からじわじわと冷えていくような異様な心地良さが全身に伝ってきている。

同時に生気も吸われて全てから解放されたかのような脱力感を感じてくる。

愛の無い行為でもここまで気持ちいいものなのか…。

だが、これに溺れてしまうと終わってしまいそうな危うさも感じてくる。

「ロスト！くっ…彼の生気を限界まで吸い尽くすつもりなの！」

ピテスの言葉で私はヘメラの意図に気づく。

「万一にも隊長が癇癪を起こして暴れられては困りますからね。まあ、快楽と引き替えとでも思ってください」

ヘメラの非常なる言葉とは裏腹にオケアニスは無表情で淡々と私の生気を容赦無く吸い尽くそうとしてくる。

彼女達の唇からは激痛と共に得も知れない快感が伝わり、腰が抜けそうになっていく。

そして、私はついに膝を折り、オケアニスに挟まれる形で横たわってしまう。

「良いことを教えてあげますよ。彼女達は実は初めてなんです。だから、加減が知らず隊長の生気を吸い過ぎるかもしれませんね、ふふっ…」

オケアニスは私の身体に痛いほど強く手と足を絡みつかせ、至る所に接吻をして生気を吸ってくる。

オケアニスの行為は私の意志とは無関係にただひたすら無表情で無感動に摂取してくる無味乾燥な情事だった。

だが、感情が籠もらない愛撫でも快感だけは容赦無く私の身体を苛ませていく。

愛が無くても身体が勝手に反応してしまう…。

三人は一人ずつ順番に私の男の証を呑み込み、苦悶の表情を浮かべることなく準備体操するように腰を振ってくる。

それでも激しい締め付けと柔らかさに私は強制的に欲望が搾取され続けていく。

さらに私の身体の至る所に彼女達の獰猛な唇に貪られ、藍錆色の斑点と共に身体中が血塗れにされていく。

ふと視線を向けると嘲りの表情で見下すヘメラと悲しげな顔で見つめてくるピテスの顔が目に映る。

ヘメラは私の姿を見せつけるようにしてピテスを頭を掴んで私の方へと視線を向けさせていた。

「気持ちいいですか、隊長？ここは私が造り上げた時間の流れにとらわれない疑似世界ですからね。いくらでも楽しんでください。それこそ腹上死する寸前までね…」

……。

……。

……。

……。

…。

オケアニスは三人揃って何度も順番に私の男の証を呑み込んでは搾り取っていく。

いったいどれだけ私は彼女達の相手をしたのだろうか…。

「さすがですね。普通なら腹上死あるいは失血死してもおかしくない程搾り取られたかと思うのですけどね。けど、これで隊長は満足に身動きが取れなくなりましたよね…」

「どう…いう…ことだ…」

私は生気と血を死ぬ寸前まで搾り取られ、からからになった喉で辛うじて声を絞り出した。

「これで何の憂いもなくタナトスのいる世界へと踏み込むことが出来るというものです。さあ、隊長。貴方は私の傍らで見ててください。終わりの始まりというものをね。オケアニス、隊長を丁重にお連れしろ…」

ヘメラの指示に従い、血塗れで骨と顔になりかけた私を抱き上げるようにして運んでいくオケアニス。

「ロスト…」

「ロスト…」

「ロスト…」

彼女達は口々に私の名前を呟きながら運んでいく。

「オケアノスの言いなりであるはずの人形にまで好かれるなんてさすがは隊長。危険な女には本当に慕われる才能の持ち主なんですね…」

意識が消えかかり、エリーの言葉が遠くから響くように感じていく。

このまま私はエリーの所行を黙って見過ごすことになってしまうのか…。

「ロスト…」

拘束魔法にかけられたピテスの声が辛うじて私の意識を繋ぎ止めていく。

何とかエリーを食い止めねばならない。

私は曲がりなりにも隊長として部下の不始末を正す義務がある。

いや、義務だけではない。

個人的感情でエリーを止めたい。

生気と体液を吸い尽くされ得てしまい身動きが取れない状態だが、私の体力ならばすぐに回復するはずだ。

「さあ、共に参りましょう、隊長。破滅への舞台へと…あはははは！」

エリーの勝ち誇った笑いを黙って聞きながらも私は耐えていく。

好機を待つのだ。

例え、絶望的な状況に陥ろうとも…。

ピテスを救うために…。

エリーを助けるために…。

第９２話：Ｌｉｌｌｉｕｍ

疑似世界は解除され、反乱軍での私の民家の前へと戻っていく。

「何だ！あの血塗れになった男は！それを抱き上げている大女はいったい…」

「ヘメラ将軍！いったい何があったというのですか？」

「子供も抱き上げているぞ」

私が血塗れの姿で大女に抱き上げられている姿がよほど滑稽に映ったのだろう。

それにしても私の顔はまだほとんどの者が覚えていないようだ。

誰も私が反乱軍の黒騎士ロースであることに気づいていない。

各国の兵士達が様子を確認しようと群がってくる。

それに対してヘメラは飽くまで笑顔で答えていく。

「流れ者を保護しただけだ。心配するな。彼らを連れて反乱軍頭目の屋敷へと向かう。お前達は持ち場に着くといい」

「はっ！」

群がっていた兵士達はヘメラの一声であっさりと散らばっていった。

そう言えば、ヘメラは公的な立場では一国の将軍なのだ。

彼女の発言力は私が思っていたよりも遙かに高いようだ。

誰もが彼女のことを信用しきっている。

兵士達の反応に唖然としている私にヘメラは嘲るような笑みを向けてくる。

「さあ、気にせずに頭目の屋敷に向かいましょうか、隊長…」

「くっ…」

私とピテスは為すがままにヒュプノスの屋敷まで運ばれていった。

……。

……。

…。

ヒュプノスの屋敷の前には兵士達がずらりと並んで警護をしていた。

いつもよりも不自然なまでの強固な警備体制を取っているように思える。

もしかするとエクリアの伝言がヒュプノスに伝わったのだろうか？

だが、そんな厳重な警備の中でもヘメラと付きのオケアニス達は構わず屋敷の玄関まで歩み進んでいく。

そのヘメラの様子に警備をしている兵士達は駆け寄ってくる。

「リンドバルム王国ヘメラ将軍閣下ですね。今は会議中です。どうか日を改めてお越し下さい」

「こちらは火急の用があって来ました。見ての通り、流れ者を保護した。彼らからエロス軍について重要な情報が聞き出せるかも知れないのです。今すぐヒュプノス殿にお目通りしたい。どうか取り次いでもらえないでしょうか？」

ヘメラは真摯に警備兵に頼み込み、頭を下げていた。

そのヘメラの姿に警備兵は戸惑うものの首を縦に振ろうとはしなかった。

「どうか頭をお上げ下さい。ヘメラ将軍の仰ることは頭目に必ずお伝えしますので、今日の所はどうか…申し訳ありませんが…」

警備兵は心苦しそうにヘメラにお引き取り願おうとしていた。

おそらく私の伝言がヒュプノスに伝わって根回しをしてくれたのだろう。

だが、ヘメラがこれで引き下がるとは思えない。

その証拠に頭を下げているヘメラの顔は獰猛な笑みに満ちていた。

「穏便に済まそうと一応努力したんですけど、やっぱり無理でしたねえ…」

ヘメラは頭を上げて、露悪的な笑みを見せて手を挙げてくる。
その動作に隣にいたオケアニスが反応し、魔力を放出してくる。
「閉塞世界が…展開される…」
ピテスの言葉が聞こえた瞬間、ヒュプノスの屋敷周辺の感じた気配が途絶していく。
オケアニスは疑似世界を展開させるために魔力を放ったのだ。
近くにいた警備兵達が疑似世界の展開されたことに気づいたのだろう。
武器をヘメラに向けていく。
「これはいったい…何を成されたのですか？ヘメラ将軍閣下！」
「熱心に任務を遂行している貴女達はとても素敵ですよ。だから、ご褒美に休暇を与えようと思います…」
その言葉にもう一方の隣にいたオケアニスが腕を無造作に振るった瞬間に警備兵の動きが止まっていく。
「ああ…あがが…」
警備兵は呂律の回らない声を出し、目から紅い涙を流しつつ手をヘメラに向けて伸ばしていく。

いったい何が起きたというのだ？

「任務ご苦労様、ゆっくりとお休みになってください」

警備兵の手がヘメラに届く寸前に全身から血を吹き出し、五体ばらばらになって崩れていく。

他の警備兵もまた同様に八つ裂きになって鮮血を撒き散らす。

私達の身体に警備兵の鮮血が浴びせられていく。

「冥府の果てで永遠にね…」

血に塗れたヘメラは変わらない笑みを浮かべてヒュプノスの屋敷の扉に向かっていく。

ヘメラ達が飛び散った肉片を踏み荒らしていく音が生々しく響いてくる。

「あっ…」

同じく血に塗れたピテスは呆然と惨劇の光景を言葉無く眺めていた。

オケアニスは掌をかざし、不可視の力で扉を粉砕していく。

「あはっ…お邪魔しますよ、ヒュプノス殿…」

血を滴らせながら歩んでいくヘメラとオケアニスの三体。

警備兵の異常を察知した兵士達が次々とヘメラの行く手を遮るべく

魔力を込め、銃口を向けて威嚇してくる。

「止まりなさい、ヘメラ将軍！貴女の行っていることは重大な軍紀違反です！」

「歩みを止めて、人質を解放せねば敵と見なし攻撃させて頂きます！」

立ちふさがった兵士達をのこのこと引っかかってきた獲物を見るような目つきのヘメラ。

そして、無表情で無感動な目で獲物を見据えるオケアニス達。

駄目だ、普通の兵士達ではヘメラ達を止められない！

無為に犠牲者を増やしてしまうだけだ！

「軍紀違反？生憎ですが、私は軍人ではなくただの殺し屋なのですよ。残念でした！あはははははっ！」

「くっ！放てぇ！」

人質である私とピテスを抱えているヘメラとオケアニスは後回しにするつもりなのだろう。

兵士達は威力を搾った魔法と銃弾を立ちふさがるオケアニス二体に向かって放っていく。

その時に信じられない光景を目にしてしまう。

オケアニス達は銃弾も魔法も身体にまともに当たるものの、傷一つ負うことなく逆に弾いていったのだ。

魔法障壁も防御結界も使うことなく生身で魔法や銃弾すらも弾くものなのか…。

「馬鹿な！生身で私達の攻撃を弾くとは…。貴様等一体何者だ！」

兵士達は怯えながらもひたすら魔法や銃弾を放っている。

それでもオケアニス達は攻撃を一身に受けながらも表情を崩すことなく歩み、手を前方に伸ばしていく。

「だから言ったでしょ？私達は殺し屋なんですよ。それでもって貴女達は軍人ではなく殺し屋に狩られるただの獲物。だから、軍紀違反でありませんね…」

オケアニス達の指が触手のように伸びていき、兵士達の額を次々と貫いていく。

「そういうことでお疲れ様でしたっ！あはははははっ！」

血の雨が降り注ぎヒュプノスの屋敷の回廊が紅に染まっていく。

それにしても…。

全身を血に染めて狂ったように笑っているヘメラ、いや、エリー…。

エリーが、ヘメラが嬉々として殺しを行っている…。

これが本当にあの少し間抜けで懸命に私を慕ってくれたエリーなのか？

エリー達は次々と立ちふさがっていく兵士達を鼻歌交じりに八つ裂きにしていくのだった。

……。

……。

…。

「もうそろそろ姿を見せたどうですか？ヒュプノス殿。これでは兵士達の無駄遣いですよ。まあ、私は一向に構いませんけどね…」

エリーはピテスを片手で担ぎ上げながら、もう片方の手で生首を弄んでいる。

「それとも軍事会議で忙しいのですか？使える兵士達が無くなっているというのに？」

生首を中空に投げ、オケアニスが腕を振るって飛び散る肉片。

「あるいは逃げる算段でも立てているのですか？鳥籠になってしまったこの世界で？」

飛び散った肉片を音楽を奏でるように軽やかに踏みつけていくエリー。

「翼を引きちぎられ、地べたで血を流しながらゆっくりと冥府の空

へと羽ばたいていく。いいですよねえ。そういう詩的な殺しを貴女達で試してみたいですよ…」

エリーは散乱した肉片を掴み、花びらのように散らしていく。

「ねえ、ヒュプノス、それとエクリア…ミサ・ブレヴィス」

回廊を塞ぐほどの大量の小型の魔法陣が生み出されていく。

「出てこないと貴方達が保護した可哀想な患者もろとも屋敷をばらしますよ…」

「止めろ！エリ…むぐっ！」

私はエリーを止めようと声を出そうとすると抱きかかえてくれていたオケアニスが私の唇に自分のそれを重ねさせて黙らせてきた。

「ちゅばちゅうううっ！」

「むごおおおっ！」

戻りつつあった生気が再びオケアニスに吸われていく。

「隊長はそのまま人形遊びでもしていてください。早く出てきてください。どうせ聞こえているのでしょ？出てこなければ本気で吹っ飛ばしますよ…」

魔法陣が魔力を放とうと輝きだしてくる。

後もう少しで閃光が放たれ、屋敷を塵と化してしまうだろう。

危機的状況にも関わらず、私は美女に口付けをされて男の証を元気にさせてしまっている。

これが悲しい男の本能というものなのだろうか…。

私がこんな状況で皆が危険に晒されてしまっている。

せめてエリニュスかモロス、彼女達の誰かがこの危機的状況を察知して駆けつけてくれれば…。

「では、後五秒数え終えるまでに出てこないと問答無用と消し飛ばします…」

……。

「五」

……。

「四」

……。

「三」

『分かった。姿を見せる』

虚空から声が響き、エリーは数えるのを止める。

魔法陣が出現し、その中から二つの人影が見えてきた。

「やっと姿を見せてくれましたね、ヒュプノス、エクリア…」

「へメラ、いいえ、エリアルト・リリエンフェルト。やはり私を恨んでいるというのか？」

ヒュプノスの毅然とした態度にエリーは獰猛な笑みを見せてくる。

「気にしていないというのは真っ赤な嘘ですよ。憎いに決まっているよ。五体ばらばらに引き裂いて畜生共の餌にしてやりたいに決まってるじゃねえかよ！なあ、特に薄汚い裏切り者エクリアさんよ！」

「貴女の恨みは当然のことでしょう。ですが、このような暴挙を黙って見過ごすわけにはいきません。大人しくお縄に付いて頂きます…」

エリーの人が変わったかのような口調にエクリアは僅かながら震えたが、ヒュプノスと同様に毅然として答える。

「ははっ…暴挙だと？暴挙だと言ったよな？私が暴挙だと言うのなら貴様は何だ？私とセシリア様、アイリウス閣下を売り飛ばしておいてよくもぬけぬけと…。この世界の隊長が死んだのも貴様の裏切りのせいだろう！タナトス殿が壊れてしまったのも！この世界が歪んでしまったのも全部全部貴様が原因だろうが、この薄汚い雌豚がぁあああっ！」

エリーの恫喝にエクリアは思わず後ずさりかけたが、何とか踏みとどまる。

「私は…確かに貴女の言う通り薄汚い裏切り者です。何と言われようと構いません。私は一生かけても償うつもりでいます。それこそ死の一歩手前に至ろうとも…」

「あはははは！憎たらしい程に立派ですねえ！拍手喝采ものですよ！まあ、貴女とはまだ後でじっくりと話し合うことにしましょうか。それよりも早くタナトス殿の居場所へと案内してくださいよ。私には彼女に逢う資格がありますよね、ヒュプノス殿？」

エクリアに対して怒り狂っていた態度を一変して、再び人を食ったような態度でヒュプノスに向き直るエリー。

エリーの情緒不安定な様子に戦慄を覚えてしまう。

彼女はいったいどれだけの地獄を見てきたのだろうか？

「そうだな、貴公には確かに資格はある。付いてくるがいい…」

ヒュプノスは沈痛な面もちで言い、エリー達に付いてくるように促してくる。

「さすがは反乱軍の頭目、物分かりが良いですね。もっとも早く姿を見せてくれれば無駄に血を流さずに済んだのですけどね…ははははは！」

私はオケアニスに未だに唇を吸われながらも重々しい足取りでエリー達を案内するヒュプノスとエクリアの背中を見つめるのだった。

……。

……。

…。

ヒュプノスはタナトスがいる疑似世界へと通じる扉まで足を運んでいく。

エクリアも初めて見たためか、僅かながらも目を見開いているようだった。

「この先にタナトス殿がおられるわけですか。さてと、感動の再会を演出していただけますか、ヒュプノス殿？」

ヒュプノスは軽口を叩くエリーを一瞥し、扉に手を当てて開門の呪文を唱える。

扉はヒュプノスの呪文に呼応するかのように重々しい音を立てて開いていく。

「この扉の先にタナトス殿が…」

扉の先にある目映い光に圧倒されるエクリア。

私にとって二度目の訪問となるタナトスの世界。

まさかこのような形で二度目を迎えてしまうとはな…。

視界が真っ白となり、次の瞬間には緑溢れる草原が目に映る。

「綺麗…」

ピテスの呟きが聞こえてきた。

このタナトスの世界はヒュプノスが最高傑作と豪語する疑似世界だ。

現実世界を忠実にしながらも緑が生い茂る豊かな大地を見事に再現している。

資源が枯渇し、滅亡の一途を辿っている人類にとって最後の切り札だとも言っていた。

「これがタナトス殿が住む世界…ですか…」

エリーも余りの美しい光景に息を呑んでいる様子だった。

彼女の目は失われてしまったものを見出そうとする悲しげな瞳に彩られていた。

私はオケアニスに唇を解放され、支えられるようにして立たされた。

ピテスも同様にエリーは拘束魔法を解いて解放していく。

「目的は果たされました。もう隊長達を拘束する必要はありませんから解放します。出来ればタナトス殿の場所へと案内して欲しいのですが…」

エリーは愁いに満ちた瞳で緑の世界を見渡していく。

「分かった…」

今度は私がエリーを案内人を買って出た。

ヒュプノスとエクリアは私の行動を黙認する形で後に続く形を取る。

ピテスはオケアニスに支えられた私の隣に立ち、手を握ってくる。

「ロスト…大丈夫？」

「心配させて済まない…」

私は潤んだ目で見つめてくるピテスの頭を撫でていく。

まだ体力は完全に回復していないが、一人で立てるぐらいには平気だろうと思い、オケアニスの手から逃れようとするが…。

「ロスト…」

オケアニスは私の名を呟き、無表情ながらも私を後ろから支えたままだった。

私の頭上にはオケアニスの巨乳がのし掛かっている。

「隊長はそのままオケアニスに支えられたまま案内してください。変な真似をされても困りますからね」

どうやら完全には私を解放しようとするつもりはないらしい。

「念が入ったものだな、エリー」

「隊長ですからね…」

私の皮肉を軽く受け止めるエリー。

隊長の思惑など副官のエリーにはお見通しだということか…。

私はピテスと手を繋ぎ、背中にはオケアニスに寄りかかれながらもタナトスの場所へと案内していく。

それにしても頭にのし掛かってくるオケアニスの巨乳で首が痛い。

抱かれてオケアニスの身体は柔軟な筋肉質で乳も大きいながらも前方に突き出していた。

私の背丈により、ちょうどオケアニスの乳に頭が当たり、強靱な弾力で私の頭を押さえつけてくるのだ。

出来れば、ピテスが背中に張り付いて、オケアニスに手を繋いでもらう位置が良かった。

そんな些細な文句をこの危機的状況で言うのも憚られたので何も気にした様子を見せず、黙々と案内に徹した。

そして、見えてくる。

この世界で最も美しい場所が…。

……。

……。

…。

白百合の丘。

舞い散る花びらは雪の如し。

絵画の世界から飛び出たのではないかという程の幻想的な美しさを讃えた世界。

この世にある数多の美が結集されたかのような光景。

その中心で無邪気に笑顔を振りまく天使がいた。

白いドレスを身に纏い、囀る小鳥に餌を与える穢れ無き淑女。

「タナトス殿…」

エリーは嬉しいような悲しいような声で天使の名を呟く。

彼女にとってタナトスは同じ地獄を見てきた同志とも言える存在だ。

だが、今のタナトスはエリーの存在すらも認識出来ない。

「探しましたよ、タナトス殿。こんな綺麗な場所に居たのですね…」

血塗れになったエリーは白百合を紅く染めながらタナトスのいる場所へと歩んでいく。

不意に頭にのし掛かるものが取り除かれる。

オケアニスが私を解放してくれたようだ。

もう私を取り押さえる必要は無いということなのか？

エリーは鳥の餌を与えて微笑んでいるタナトスに近づいていく。

「貴女は誰？」

タナトスは突然目の前に来た血塗れの来訪者のも変わらず花のような微笑みを向けてくる。

そんなタナトスにエリーは悲しげに笑い、跪いていく。

「お久しぶりです。自称隊長の正妻さん。隊長の元副官で貴女の恋敵であるエリーだった者ですよ…」

「エリー、懐かしい響きを感じるわ。貴女とは昔逢ったような…」

タナトスは血塗れになったエリーの両頬に手を添えてくる。

「悲しい瞳…貴女は心の底から笑えていないのですね…それにこんなにも傷ついている…」

タナトスは白いドレスが真紅に染まるのも構わずエリーを抱き締めていく。

「タナトス殿…」

エリーはタナトスに抱き締めれて身体を固くする。

「私は分かりません…貴女が何故…悲しんでいるのかが…」

……。

「だけど…何故か分かってしまうのです…貴女が悲しんでいて…心の底から笑うことができないのが…」

「まったく…タナトス殿には…敵いませんね…感情が壊れていても…やっぱりタナトス殿なのですね…」

エリーもまたタナトスに縋るように抱き返していく。

「いいえ…これが本来のタナトス殿だったのかもしれません…」

兵士達を殺戮していたエリーが安らぐような顔でタナトスの胸に甘えている。

その光景は教会の宗教画で描かれていた子を慈しむ聖母のように見えた。

「私も貴女のようになりたかった。この世に満ちた穢れを全て忘れ、天使のように微笑む貴女に…」

「貴女には貴女の素晴らしさがありますよ。だから、自分を卑下しないでください…」

縋り付くエリーの頭を優しく撫でていくタナトス。

「エリー…」

私が近くいることに気づき、タナトスの胸から顔を上げていくエリー。

「お前は純粋にタナトスに逢いたかっただけだったのか…」

「言ったはずです。もう目的は果たされたと…」

エリーは足下にあった血に染まった白百合を摘み取る。

「白百合の聖書では純潔の象徴。この血に染まった百合は今の私に相応しい姿ですね…」

エリーは血に染まった百合を投げ捨てて、ヒュプノスとエクリアの方へと視線を向ける。

「ヒュプノス殿、エクリア殿。もうすぐこの地にエロスの軍勢が押し寄せてきます。貴女達の償いで見事この絶望的な状況を乗り越えてください…」

「いつ頃から進軍は開始している?」

ヒュプノスは何故進軍してきたということでなく、いつ進軍を開始したかを聞いていた。

「分かっているはずですよ。この世界は魔力の一切を外界から隠蔽する世界。私、いいえ、オケアニスがこの世界に入ったその時が進軍開始の合図となったのです…」

……。

『言ったはずです。もう目的は果たされたと…』

……。

エリーの言葉を思い出す。

目的を既に果たしたというのはこの世界に侵入することだったわけか…。

そう言えば、私とピテスを拘束していたオケアニスがいつの間にかいなくなっていた。

「安心してください。進軍の合図になっただけでこの世界のことについてはオケアニスに口止めするように念じておきました。私とてタナトス殿が住むこの世界を汚すのは本意ではありません。だってタナトス殿は私と違ってこんなにも清らかなんですから…」

エリーは羨望の眼差しでタナトスを見つめ、エクリアの方へと視線を移す。

「私もエクリア殿と同じですね。いや、違うか…。私は償って生きていけるほど強くはなれない。だから、羨ましかった。嫉妬ですね。最後まで隊長に迷惑をかけただけの者…」

「エリアルト殿…」

エリーはエクリアに儚げな笑みを見せてくる。

「さあ、呆けてないで軍備を整えたらどうですか？それとリンドバルムは私が居なくなってもきちんと反乱軍に従うように言伝てます

から安心してください」

エロスの軍勢が攻めてくる。

重大なことを口にしたエリーだったが、それよりも気になることを言っていた。

エリーは最後という言葉を口にしていたのだ。

それに今も「私が居なくなっても」と言った。

「エリー、お前はまさか…」

「そろそろ頃合いですね、隊長…」

エリーの足下に何かが落ちていく。

……。

それはエリーの右腕だった。

いや、違う。

エリーの顔の色と腕の色は微妙に違っていた。

「ふふっ…見せてあげますよ、私の本当の姿を…」

エリーは残った左手で自分の服を掴み、次々と破り裂いていった。

……。

みんなの息を呑む音が響く。

「これが私の…絶望です…隊長…」

エリーの身体は斑模様のように様々な肉片が継ぎ接ぎされていた。

黒い肌や黄色い肌、人ではない表皮、出鱈目に繋ぎ止められた歪な肉体。

胸の大きさも足の太さも違う不自然なまでに左右非対称の身体。

「私の内蔵も子宮も何もかもが全て寄せ集めで出来上がったものなのです…本物なのは首から上だけ…」

エリーはおぼつかない足取りで私の元に歩いてくる。

その時、エリーの右足が身体から千切れ落ちていき、倒れようとしていた。

「エリー！」

私は倒れようとしたエリーを抱き留める。

エリーの身体から左足も崩れ落ちていく。

「エリアルトの身体は私と違い…力を特化させて肉片を繋ぎ合わせただけの身体…当人の造形や…生命を…考慮していない造り…」

ピテスは沈痛な面もちでエリーの身体に施されたものについて語っ

てくる。

エリーの身体はアパテーの思想に基づいて造られたと聞いた。

奴は人の命をただの実験の材料としか思っていない悪魔だ。

「ははっ…やっぱり無理しすぎた精でしょうか…隊長…」

無理しすぎただと？

まさか、不意打ちで仕掛けてきた戦闘のことを言っているのか？

「何故、無理をしてまで私に戦いを挑んだ？そうしなければお前はまだ…」

まだ、生きていられたのではないのか！

私の問いにエリーは静かに首を横に振った。

「いいえ、遅かれ早かれ私の肉体は…崩壊しつつありました…だけど…このまま黙って壊れてしまったら…悔しいじゃないですか…だから…」

「私と最後に戦いたかったのか…」

エリーは笑顔で頷く。

「私は隊長の全力が見たかった。隊長はいつも何処か巫山戯ていて全力を出しているようで出していませんでしたから…結局…隊長の全力を引き出し切れませんでしたが…」

「それで不意打ちを仕掛けたり、殺すつもりで襲いかかったのか…。
馬鹿が…危うく私はお前を殺してししまうところだったのだぞ…」

あの時は本当に殺される思いだった。

だが、それも全てエリーが私に全力を出させるためのことだったのか…。

それでも弾みで殺してしまう可能性があった。

エリー程の実力者ならば分かるはずだ。

「それで隊長の殺されれば…むしろ本望です…そうなれば私の存在は…永遠に…隊長の中で生き続けることになりますから…」

……。

私に殺されたいために殺す気で戦ったのか…。

……。

エリーは本当に馬鹿な副官だ…。

そんなことをしなくても私は…。

「馬鹿者が…そんなことをしなくても…私にとってお前の存在は…永遠だ…」

「泣いているのですか…隊長…こんなに醜くなった私を…まだ…愛

してくれるのですか？」

エリーは本当に馬鹿だ…。

「愛するに決まっているだろう！もうお前は私の酒池肉林の構成員なのだ！酒池肉林の主として構成員は決して見捨てない！例え、どんな姿になっても…」

「たい…ちょう…ごめん…なさい…最後に隊長に重荷を背負わせることをしてしまって…私の自分勝手な欲望のために…みんなを危険な目に逢わせることになってしまって…私は恐かったのです…タナトス殿に去られ…みんなが居なくなって…寂しい中で…独り…死にたく無かったのです…ふふっ…騎士失格ですね…」

私はエリーの涙を拭って笑いかける。

「私は気にしていない。エリーは自分の出来ることを果たしただけだ。確かにお前のやったことは許されないだろう。だが…例え…世界中の誰もがエリーを糾弾しようとも…私は責めたりはしない…」

エリーは死に場所を求めていた。

誰かに看取られ、自分を覚えて貰えるような死に場所を求めていたのだ。

だから、エリーは自らを貶めることで生き延びる方法を選んだ。

犬に成り下がることで生き延び、私やタナトスに助けを求めてきたのだ。

それが例え、破滅を導くことになると分かっていても…。

極限の状態に追い詰められて他人の都合を考えれるものがどれだけいるのだろうか…。

自分を犠牲にしてまで世界を守ろうとする者など滅多にいるものではない…。

誰もがそこまで強いわけではない…。

……。

少なくとも私はそうだ…。

だから私は彼女を責めることは出来ない。

もし、出来る者いるとすれば…。

白いドレスを紅く染めながらも笑みを絶やすことのない淑女を見る。

同じ地獄を味わったタナトスだけなのだろう。

「私は軍の編成を呼びかける。彼女と最後の別れをするといい…ロスト…」

「失礼します…閣下…エリアルト殿…」

ヒュプノスとエクリアは去っていく。

ピテスはタナトスと共に私の傍らで静かに見守っていた。

エリーは私に必死に手を伸ばそうとしてきた。

「不謹慎なのは分かっていますが…それでも嬉しいです…だから…また恐くなった…死にたくない…死にたくない！まだ…隊長と一緒に過ごしたいです！殴られてもいい！鬱陶しがられてもいい！一緒にいたい！あの頃の帰りたいです！タナトス殿と喧嘩してアイリ将軍閣下に叱られて隊長と馬鹿をやって楽しく過ごして…あの楽しかった頃に…かえりたいよぉ…たい…ちょう…」

「エリー！」

私はエリーが伸ばしてきた左手を掴もうとするが…。

「あっ…」

エリーの左手が崩れ落ちてしまった。

「たいちょう…そばに…こわい…死にたくない…独りに…しない…で…」

「ずっと一緒だ！エリー！寂しくはない！恐くはないぞ！だから安心するんだ！お前は私の唯一の副官なんだからな！隊長が副官を残すなぞ天地が裂けても有り得ないのだ！エリー！だから…安心して…眠るんだ…ずっと側にいるから…」

私は手足を失ったエリーを抱き締めていく。

もうお前は独りでない…。

お前は私にとって永遠の存在になるのだ…。

「お前が眠るまでずっと側にいるぞ…だから…きっと良い夢が見られるはずだ。アイリがいて…タナトスがいて…ブリュンスタッドの連中がいて…馬鹿馬鹿しく…楽しい夢が見られるのだ…ずっと…ずっと…」

「たいちょう…ああ…うれしい…わたしは…いつまでも…たいちょうの…ふくかんでいられるのですね…」

そうだ、エリーは楽しい夢を見て眠るのだ…。

もう寂しい思いをすることなく永遠に…。

「そうだ…お前以外に…誰が私の副官を…務まるというのだ?隊長と副官は一心同体だ…いつまでもな…」

「うれしいです…うれしい…たいちょう…ずっと…ずっと…あなたを…おしたい…して…いま…」

エリーは安心したように目を閉じていった。

羨ましいぐらいに心地良い寝顔だった。

「今回だけだ。副官が隊長よりも先に気持ち良く寝るのを許すのは…。エリー…分かっているのか?今回だけだ。今回…次回があるわけないのに今回は、か…。こんなにも気持ち良く眠ってから…羨ましいぞ…エリー…ううぅ…」

「ロスト…」

ピテスが私の背中に抱きついてくるが、もはや止まられなかった。

「エリぃいいいいいいいいいいっ！うあああああああああああ！」

何故、エリーがこんな死に方をしなければならなかった！

誰の精だ！

誰がエリーをこんな目に合わせたのだ！

エロスか？

アパテーか？

……。

私が不甲斐なかったからなのか…。

私の甘さがエリーを地獄に突き落としてしまったのか！

私の精でエリーは…。

「綺麗な寝顔ですね…」

「タナトス…」

いつの間にかタナトスが側に来ていた。

「彼女にはこの白百合が似合っています…」

タナトスは白百合を摘み、エリーの髪へと飾っていく。

「そうだな…エリーには…似合っている…似合っているぞ…」

ふとエリーが白百合に囲まれた楽園で笑顔を振りまいている姿を思い浮かんできた。

……。

『隊長…ずっと一緒です…』

……。

「エリー…」

私は白百合の丘にエリーを横たわらせ、火の魔法を掛けていく。

エリーは土に還り、白百合に生まれ変わっていくのだ…。

「お休み…良い夢を…エリー…私の愛しい副官…」

ピテスは私を慰めるかのように背中へと抱きついてくる。

「ロスト…」

「ありがとう…ピテス…」

……。

私はタナトスに見送られ、ピテスと共に疑似世界を後にする。

もうすぐエロスの軍勢がジークフリートに押し寄せてくる。

第三次聖戦が始まろうとしている。

エリーは自分の出来ることを果たして眠りについた。

ならば私もまた自分の出来ることをするまでだ。

私の出来ることはただ一つ。

……。

奴らを一人残らず皆殺しにすることだ…。

第９３話：Ｉｄｅｎｔｉｔｙ

私はピテスと共に会議室に足を運んでいく。

会議室は殺伐とした空気が流れていた。

エロス軍が襲来してくるという情報があったのだ。

動揺するのも無理は無い。

しかも、敵の本拠地であるジークリンデに到達する前での襲来だ。

エロス軍は大将であるエロスあるいはそれに準ずるタルタロスを倒さない限り、決して退くことは無い。

戦地での指揮官や隊長の首級をいくら挙げたところで大して意味が無いのだ。

だからこそ、大将がいるジークリンデまで到達して戦を起こすことが重要だった。

最悪の状況だと言っても過言ではないだろう。

リンドバルムの首脳はエリーの言伝が行き届いているのか粛々と会議の椅子に腰掛けている。

エリーはリンドバルムでは人望が厚かったに違いない。

ヒュプノスに話を聞いていたモイラが私の存在に気づき、駆けつけ

てくる。

「おじさん…」

心配げに声をかけてくるモイラの頭に手を触れようとして自分の手が血塗れであることに気づく。

「心配かけたな、済まない…」

「別に謝らなくて良いよ。おじさんも…その…大丈夫なのか？」

私はモイラの問いに何とか笑顔を向けていく。

かなり引きつった顔になっているかもしれない。

「大丈夫だ。問題無い」

私はモイラにそう言い、ヒュプノスの方へと向かっていく。

「作戦は決まったのか？敵の戦力はどれくらいだ？」

「ロスト殿…とりあえずこれで顔を拭け…」

ヒュプノスは私に布巾を寄越してくる。

「偵察を送ったが、誰も戻って来なかった。おそらく全員やられてしまったのだろう。詳細は分からないが、途轍もない魔力を持った者が多数押し寄せてきていることは分かっている。苦しい戦いになることは確実だ」

ヒュプノスは苦々しげに言ってきた。

敵方の情報が得られないのは戦場の中ではかなり不利な状況なのだろう。

だが、敵はこちらが充分な情報を得るまでに待ってくれるはずがない。

「ロスト殿、情けない話だが、貴公等の力が勝利の鍵になってくる。死地へと送ることになってしまう…」

「ヒュプノス、私は頭が悪いから戦場で好きに暴れることしか出来ない。だが、こちらに有利になるようにしていきたい。敵が最も突いてくる場所に配置してくれ…」

私は顔を布巾で拭いながらもヒュプノスに懇願していく。

……。

馬鹿で臆病である私が最も危険な戦地を志願している。

これはエリーを狂わせてしまった奴らに対する怒りから発する思いなのだろうか？

殺しは出来るだけしたくないつもりだった。

だが…。

……。

『たいちょう…そばに…こわい…死にたくない…独りに…しないで…』

……。

私はもう止まれなくなってしまった…。

奴らを皆殺しにしたくて仕方がないのだ…。

臆病な思いも馬鹿な頭も関係無い。

今の私は怒りの感情に支配されてしまっている…。

怒りのままに力を振るうのは子供だということは分かっている。

誰もが苦しい思いをしていて我慢しているのは分かっているつもりだ！

それでも止まれない…。

止まれないのだ！

……。

『不謹慎なのは分かっていますが…それでも嬉しいです…だから…また恐くなった…死にたくない…死にたくない！まだ…隊長と一緒に過ごしたいです！殴られてもいい！鬱陶しがられてもいい！一緒にいたい！あの頃の帰りたいです！タナトス殿と喧嘩してアイリ将軍閣下に叱られて隊長と馬鹿をやって楽しく過ごして…あの楽しかった頃に…かえりたいよぉ…たい…ちょう…』

……。

あのエリーを見て我慢するくらいならば私は子供でも構わない…。

子供のように残酷なまでに無慈悲に不条理なまでに奴らを滅ぼしてやりたい…。

「貴公はそれでいいのか？死ぬかもしれないのだぞ…」

ヒュプノスは私が気でも触れたのかと思ったのだろう。

私を必死に止めようとしてくれている。

彼女は私が罪の意識に苛まれて、自暴自棄に陥っていると思っているかもしれない。

確かにヒュプノスがまだ人体実験を行い、私に狂戦士達と戦わせた時には自暴自棄に陥ったときがあった。

だが、今の私は違う。

「私がそう望んだのだ。ヒュプノス、お前は私に言ったはずだ。安心してくれ。私は死なない。お前が言う枷が私にはあるのだからな…」

……。

『構わない。貴公にはもう枷が付いてしまっている。おそらく私の言葉よりも貴公は枷に従うことになるだろう。そして、それが貴公

が貴公である証にもなってくる』

……。

あの星空の下でヒュプノスと交わした言葉を私は思い出す。

私には多くの枷が嵌められている。

だから、私は死ぬわけにはいかない。

エリーやタナトスを狂わせた奴等を全て始末し、安心して暮らせる世界を求めるのだ。

私の楽園を築くために奴らの楽園を潰す。

そこには平和のためや大儀も何も無い。

ただ私が安心して暮らせる世界を手に入れたいという個人的な思いによる動機だ。

ピテスの言う通り、その点に置いてはエロスと似通っているかもしれないな…。

「私は私のやりたいように戦いたい。頼む…」

「分かった。私は貴公にそう振る舞うように言ったからな。貴公の思う通りにしてくれ…だが…」

ヒュプノスは私の胸ぐらを引き寄せてくる。

「絶対に死ぬなよ。これだけは譲らん」

「分かっている。枷がある限り、私は絶対に生き延びる」

ヒュプノスは私の答えに満足したのか、笑みを浮かべ、そのまま胸ぐらを引き寄せて口付けをしてくる。

「んっちゅる」

兵士達はヒュプノスの突然の行動に驚いているようだ。

「頭目って大胆…」

「こんな時だからこそやるものがあるんですね…」

……。

唇の感触は気持ちいいが、少し恥ずかしいぞ。

「ちゅぱ…ふふっ、これで貴公にまた枷を嵌めてやったぞ。絶対に生き延びろ…」

ヒュプノスは舌なめずりして私に笑いかけてくる。

「あ、ああ、当然だ…」

私はヒュプノスの色気に思わず後ずさってしまう。

その様子を見て、モイラが不機嫌そうな顔になり、私の前に立ってくる。

「俺だっておじさんの枷になるんだからな！んちゅ！」

「むぐっ！」

モイラは私の頭を掴んで、噛みつくように口付けをしてくる。

ヒュプノスの大胆な行動が伝染したかためだろうか、彼女も人前を気にした様子は微塵もなかった。

「私も枷になる…ちゅう」

ピテスも私の背中に昇って後ろから割り込むようにして口付けをしてくる。

「ちゅぱちゅ」

「ちゅるちゅる」

二人の情熱的な口付けにされるがままになる私だった。

……。

「お盛んですね。拙者は後でさせて頂きますが故に…」

「私も充電必要…摂取させてもらう…」

アイテルとモロスが羨望の眼差しで三人の口付けをしている様子を見ていることに気づき、結局みんな私の枷となっていった。

……。

……。

…。

美女の力は偉大というべきなのか、私の荒んだ心が多少癒されたような気がした。

ピテスが無表情で口紅だらけになった私の顔を拭ってくれる。

「よし、苦しい戦いになるだろうが、私達の未来をかけた戦いとなる。絶対に勝つんだ！」

私が彼女達に口付けされている間に作戦方針が決まったのか、纏めてくるヒュプノス。

「「了解した！」」

「いよいよ戦が始まるのか…」

作戦方針が決まり、各国の首脳とその腹心は自分の持ち場へ移るべく慌ただしく動き始める。

そして、私はヒュプノスが指定してくれた死地へと向かおうとした。

「おじさん！」

モイラが私を引き留めてくる。

「どうした？」

「あの…その…」

モイラは言いずらそうに顔を俯かせている。

忙しくなるから早く解放して欲しいと思ったが、彼女は多分重大なことを告げようとしている。

何故か私はそう思った。

「ううん、今は大事なとき…これ以上…おじさんに枷を掛けてしまうと身動きが取れなくなってしまうからな…」

「何のことだ？」

俯いていたモイラは顔を上げて無理矢理笑顔を見せてくる。

「いいの！俺…私…おじさんが生きて私の所に戻ってくるのを待ってるから…ちゅ」

モイラは軽く私の頬に口付けして逃げるようにして去っていく。

……。

私は口付けされた頬を押さえて走り去っていくモイラを呆然と見送った。

「少しは元気が出たようですね、閣下…」

エクリアは私の隣に立ち、走り去っていくモイラを見ていた。

「小官はエリアルト殿のお言葉で改めて自分が行ったことを改めて骨身に染みました。だからこそ、この世界からエロスの脅威を取り除きたいという思いが強くなりました…」

「エクリア…」

エクリアは吹っ切れた笑みを私に見せてくる。

「閣下はいつも通り、生き延びるように戦ってください。小官は非力で閣下の助けにはなれないかもしれません。ですが…ちゅ」

エクリアはモイラが口付けした頬の反対側に接吻してくる。

「ちゅぱ…小官も閣下の枷ぐらいにはなれます。どうかご自愛を…。いくら閣下が化け物級の生存能力を持っているとしても不死身ではないのですから…では、失礼します…」

エクリアは敬礼し、現場へと駆けつけていく。

……。

「肝に命じておく。ありがとう、エクリア…」

どうやら私の枷は思っていた以上に重いようだ。

これでは重すぎて到底死者の国まで辿り着けそうにも無いだろう。

私は後ろに付いてきているピテスとモロスに向き直る。

「ピテス、モロス。お前達にはここに残って屋敷を守って欲しい」

「拒否…私は貴方と一心同体…分離することは不可…それに私は既にヒュプノスから貴方の補佐を命じられている…」

予想通り、モロスは頑なに拒否をしてきた。

「モロス…」

私はモロスの肩に手を添える。

「ロス…ト…」

「お前には私の帰る場所を守ってもらいたいのだ。分かるか?妻は夫の帰る場所を守るものだ。だから、頼む…」

モロスは目を見開き、私の顔をまじまじと見る。

「未知なる経験…私はロストから初めて妻だと明言された…」

「そうだ…お前は私の自慢の妻だ。これはお前にしか頼めないのだ、モロス…」

私は真っ直ぐモロスの漆黒の瞳を見つめていく。

彼女の頬が紅くなってくる。

「りょ…了解!私はロストの妻…妻は夫の帰還する場所を死守する!だから…ロスト…」

モロスは目を閉じて漆黒の唇を突き出してくる。

これは接吻しろということなのか…。

……。

私は大体が接吻されることが多く、自分から口付けをしたことはほとんど無い。

さすがに気恥ずかしい気もするが、彼女の唇に口付けしたいという欲求も出てきている。

私はモロスを抱き寄せて、爪先立てて彼女の唇に自分のそれを重ねていく。

「んっちゅうちゅるちゅば」

モロスは私を抱き上げ、私の口内に舌が挿入し、思うがままに蹂躙してきた。

私もまた必死にモロスの思いに応えようと舌を絡めていく。

彼女は情熱的に私を求めてきてくれる。

最初出合ったときは無愛想で無感情な女だと思っていたが、違っていた。

今はこうして私の舌を引き抜くのではないかというほど激しく吸い付いてきている。

彼女は思いをぶつける相手が居なかっただけだったのだ。

それから私はその場に押し倒されて…。

……。

……。

…。

さすがに会議室では不味いと周囲が思ったのか、アイテルを初めとした数十人でモロスを取り押さえることになってしまった。

「うぅ…ロストは私と一心同体…けど…妻…だから…帰還場所を死守する…」

「ぶつぶつ言わないで持ち場に付いてください、モロス殿」

モロスはアイテルに引きずられながら消えていった。

……。

「ロストはさっかから汚れてばかり…」

ピテスは服装が乱れ、顔から首筋にかけて漆黒の口紅に塗りたくられた私の身体を布巾で拭き取ってくれていた。

まるで女房のように甲斐甲斐しく世話を焼いてくれている。

ピテスは飽くまで私の理想の女性であろうとしているようだ。

「ピテス、お前は良い女だな…」

「私はロストの…理想の女…だから当然のこと…」

ピテスは照れたのか、顔を赤く染めてくる。

私はそんなピテスの頭を撫でていく。

「では、留守番を頼んだ、ピテス。私の愛しい妻」

「気を付けて…帰りを待っている…ちゅ」

ピテスの接吻を頬に受け、私は死地に向かって歩んでいく。

……。

……。

…。

私の戦地となる場所であるブリュンスタッド城下町の正面門に向かって歩いていた。

反乱軍の兵士達が至る所に弾薬の確認をし、ガトリング砲やロケットランチャー、ショットガン等の重火器の手入れを行っていた。

リンドバルム、ジェラルド、フェイロンの三カ国もそれぞれ独自の戦術を練っており、迫り来る戦の準備を急いでいる。

如何にも戦争が始まるのだという緊迫とした空気が全身から伝わってくる。

暫く歩いていると正面門跡が見えてくる。

私の死に場所になるかもしれない死地だ。

正面門跡に三つの人影があることに私は気づいた。

そこには私と契約した忠実なる神が跪いて待っていた。

「いよいよ戦が始まります、我が君よ。私達一同身命を賭して貴方様を守ります」

アレクはいつもの老成とした口調から一変して凛とした女性軍人の口調で言ってきた。

「わたくしもまた貴方様の世界を見届けとう御座います。どうか、御武運を…」

「あたい達はお前の盾であり剣だ。遠慮無く使い捨てても構わない…」

メイもティーも恭しく頭を下げて、激励を送ってくる。

「堅苦しいな、まるで最後の別れのようだな」

私は思わず苦笑してしまった。

「全くせっかく雰囲気を出そうと思ったのにそなたは…。どうやら大丈夫のようだな」

「貴方はわたくし以外には絶対に殺させません。ですから、存分に暴れてください」

「お前はあたいの愛しい喧嘩仲間だからね。だから、身体を張って守ってやるよ」

私の軽口に堅苦しい雰囲気を出していた三人もまたいつもの調子で軽口を返していく。

それにしても私には勿体ないほどの頼もしい仲間達だ。

最強の力を得たことでこれ程の良い女に巡り会えたことに感謝しよう。

そして、私が良い女を過ごす楽園を築くためにはエロスの築き上げた楽園を何としても壊さねばならない。

エリーやタナトスのような犠牲者を出さないためにも…。

私が思案しているといつの間にか両側にはメイとティーが熱い息を吹きかけてしなだれかかっていた。

「まあ、景気づけにあたい達にお前の生気を吸わせてくれると嬉しいけどな…」

「わたくしも貴方の極上の生気を頂きたく思っています。宜しいでしょうか？」

いつもは殺すと暴言を吐いているティーが上目遣い、いや、下目遣いで私を見つめてくる。

例え、ティーの仕草はおそらく私の生気を吸いたいがための演技だろう。

だが、演技だとしても彼女の甘えるようなお強請りを断れる男は果たしてどれだけいるのか…。

それに演技だろうが嘘だろうが、美女の誘いならば敢えて乗ることが男の甲斐性というものだ。

故に断る選択肢は有り得ない。

「いくらでも構わない…」

私の了承にティーは極上の笑みを見せて、私の右頬に唇を這わせてくる。

メイもまた私の左頬を唇で抓るようにして吸い付く。

「ちゅぱちゅ」

「あむぅ…ちゅる」

二人の唇が私の顔を包むように押しつけられていく。

そして、正面にはエリニュスの隊長格たるアレクが立ち塞がってくる。

「そなたの生気を勝利の美酒として味あわせてもらおうか…んちゅ」

アレクの唇が追加され、私の顔は三人の唾液と口紅が塗られていく。

……。

遅ればせながら気づいたが、モロスやピテスの時と同様に彼女達も私の生気を吸っていなかったのだ。

戦争が間近に迫っている時に体力を消耗させたくないという気遣いのつもりなのだろうか？

生気を吸うというのは飽くまで建前で純粋な激励のつもりで身体を張ってくれたのかもしれない。

女好きである私に対して、最大限の激励を言葉よりも行動で示す方が良いと考えたのだろう。

私は暫くの間、彼女達の口付けの嵐を堪能させてもらった。

……。

……。

…。

「んんんっちゅぱ…これで元気百倍になったかな？この戦いが終わったらまた喧嘩祭りをしてね」

「ちゅぱ…今回はこれで勘弁してあげましょう。次こそは貴方を吸い殺してあげます。覚悟してくださいいね」

メイとティーは流し目を私に送り、持ち場へと戻っていった。

「ちゅぱ…儂等はまたこうやってそなたと楽しみたい。だから、何としても生き延びるだぞ…」

最後に私の唇から自分のそれを離し、抱き締めてくるアレク。

私の頭がアレクの胸に埋まっていく。

「どれほど無様になってもいい。必ず生き延びるのだ。生きていればいくらでも可能性があるのだからな…」

「アレク…」

私もまたアレクの背中に腕を回していく。

「ピロテースの件できつく言ってしまったが、儂の言葉は飽くまで一つの考え方として捉えれば良い。結局はそなた自身が決めることなのだからな。だが、そういう考え方もあるということを頭の片隅にでもいいから覚えていて欲しい。儂が一番そなたに望んでいることはただ一つ、生き延びて欲しいことだけだ…」

「覚えておく。ありがとう…アレク…」

アレクは再び口付けを交わして去っていく。

……。

……。

……。

……。

…。

私の持ち場である城下町正面門。

配置に付いているのは私ただ一人。

一番敵の戦力が集中しやすい位置にただ一人。

一人軍隊である私には他の兵士は必要無い。

だから、ただ一人。

……。

この場所では誰も助けが来ない。

だから、ただ一人。

苦しむのもただ一人。

死にのもただ一人。

ただ一人で死ぬ。

だから、ただ独り。

……。

寂しい。

恐い。

切ない。

死にたくない。

独りは嫌だ。

だから、生き残る。

……。

エリー。

お前は独りになったときに何を考えたのだ？

私のように独りで死にたくないと思ったのだろうか？

独りでいると自分が誰なのかが分からなくなるときがある。

自分の存在を認識するには他人が必要だ。

なぜならば、自分を客観的に見定めることが出来るのは他人だけだ

からだ。

私は他人、主に美女と触れ合うことで自分が生きていることを認識してきた。

美女の胸を触ることで自分の手を認識した。

美女の唇に重ねることで自分の顔を認識した。

美女を貫くことで自分が男であることを認識した。

私がロストであることが認識できた。

例え、名前を変えて幾多の国を巡ろうとも私が私であることを認識出来たのだ。

……。

エリーは自分の身体を引き裂かれ、自分を見失ってしまった。

タナトスは自分の脳を削り取られ、感情が壊れた。

だが、それでもタナトスは確かにタナトスだった。

エリーはエリーであり続けた。

なぜならば、生きていたからだ。

言葉を交わし、肌を触れ合わせることが出来たからだ。

私は確かに感じたのだ。

エリーが生きた証を…。

例え、継ぎ接ぎだらけの身体になろうとも…。

……。

『どれほど無様になってもいい。必ず生き延びるのだ。生きていればいくらでも可能性があるのだからな…』

……。

アレクの言葉に身に染みてくる。

エリーは最後の最後まで可能性を信じて私の元へと辿り着いたのだ。

ならば、私も可能性を信じて必ず生き延びてみせる。

私が私である証を立てるために…。

エリーが見出した可能性を繋げるために…。

……。

……。

……。

…。

「父様…」

突然聞こえてきた声で私の思考は途絶される。

私を父様と呼び女はこの世で一人しかいない。

「ロン…」

声が聞こえた方向にはロンが佇んでいた。

「お前は確かフェイロンの将軍。軍備は整ったのか？お前は責任者だろう…」

「終わりましたよ。後は敵を迎え討つだけです」

ロンは私の隣へと腰掛け、私の肩へと持たれてくる。

「ロン、何かあったのか？」

「もうすぐ戦争が始まりますね？父様…」

私の質問に答えることなく話を進めていくロン。

そう言えば、ロンと二人きりで話すのは初めての気がする。

ロンと居るときは必ず他のみんなと一緒の時だったからだ。

「戦争が始まれば沢山人が死にます。だから、父様とこうしてお話をするのも最後になるかもしれません…」

「私は絶対に死なない。そして、お前も死なせない…」

私の答えにロンは儚げに笑ってみせる。

彼女の目に涙の光が見えていた。

「あの時もそうでした。私は絶対に死なないと笑いかけてくれた。けど、それが最後の会話になってしまった…」

……。

ロンもまたこの世界の私がタルタロスに殺されてしまった場面を見ていたのだ。

この世界の私もまたタルタロスに戦いを挑む前に今の私と同じ台詞をロンに言ったというのか…。

「私は後悔しているんです。何故、あの時に言えなかったのか…。もし、私が父様に告げていたら運命が変わっていたのかもしれないと…」

ロンは私を抱きすくめてくる。

まるで今度こそは逃がさないと言わんばかりに…。

「何の話だ？ロン？」

「けど、こうして再び父様に逢うことが出来た。これは私に与えれた最後の機会。だから、私は告白します…」

ロンは馬鹿力を発揮して無理矢理私を立たせ、正面に向き合う形を取らされた。

彼女の目はこれから戦場に向かおうと決意する炎が宿っているように見えた。

「私ことリー・ロンファンは娘としてではなく一人の女として父様を…いえ、ロストさんを愛しています…」

……。

私はロンの突然の告白に時が止まったかのように身体を固めてしまった。

ロンは私を父と重ねて見ていたのだと思っていた。

いや、私は気づかない振りをしていたのかもしれない。

彼女は私と関係を持った女性達に対し、姉と呼んで慕っても母と呼ぶことは決して無かった。

父と関係を持つ女性は母と呼び慕うはずだと思っていたが、ロンは決して母とは呼ばなかったのだ。

ロンは家族を失った過去により甘えれる存在を渇望していた。

同性の場合は自分が甘えれる姉として認識し、異性の場合は…。

異性で甘えれる存在は二通りある。

一つは父親の存在だ。

そして、もう一つは…。

「お願いです！私を少しでも女として見てくれるのなら抱いてください！」

ロンは母でありたかったのだ。

父親と対になる存在である母親に…。

私を父ではなく男として、自分は娘ではなく女として見たかったのか…。

「もう…私は…後悔するのが嫌なんです…」

……。

私はロンの父親という立場に甘えていたのかもしれない。

ロンもまた一歩踏み出すことで関係が崩れてしまうことを恐れていたのかもしれない。

私とロンは互いの唇を重ねた。

彼女は過去を乗り越え、家族を得たのだ。

私も新たな家族を得ることが出来た。

ロンもまた私が私であるための枷だったのだ。

私とロンは互いの身体を貪り合う。

「ロストさん！私はロストさんと…こうなることを夢見ていたの…」

「私もだ…ロン…」

彼女とは神武闘式で戦うことで分かり合った。

今ではこうして身体を重ね合うことで分かり合おうとしている。

ロンは私を受け容れ、私はロンの中へと沈んでいく。

「あああああっ！ロスト…さん！ううぅ！」

私を聖域に招き入れたロンは狂おしいほどに締め上げていく。

瞬く間にロンの中で私は果ててしまいそうになる。

さすがに彼女の中で潰れるのはまだ早すぎるだろう。

私は力の限り、彼女の中で私を刻みつけようと足掻いていく。

「あぅ…激しい…です！ロスト…さん…」

ロンの聖域を私の聖域へと変えていくために私は奮戦していく。

これは私とロンの聖域を賭けた戦争だ。

私は戦場を駆け抜ける猛将の如くロンの聖域を制圧していくのだ。

だが、奮戦空しく私は最後には成す術もなく力尽きてしまう。

そして、私は枷を嵌められ囚われてしまうのだ。

「ロストさん！あああああああああっ！」

ロンの聖域の中で永遠に…。

……。

……。

……。

……。

「有り難う御座います…これでもう思い残すことはありません…ロストさん」

「ロン…」

服を整え、立ち上がったロンは眩しい笑顔を見せてくる。

「これで運命が変えられるかもしれません…」

「もう既に運命は変わっている。私とお前は父娘から男女になった

のだからな…」

私の言葉にロンは一瞬顔を赤くするが、すぐに持ち直し「そうですね」と返してくる。

「では、互いに生き残るよう全力を尽くすぞ…ロン」

「はい！ロストさん！」

ロンは私から一歩離れていく。

そして、何時如何なる時も死をも受け容れる覚悟を決めた軍人の顔になり、私に敬礼してくる。

「では、失礼します！黒騎士ロース殿！」

「御武運をリー将軍」

私もまた敬礼で返していく。

そして、ロンは立ち去り、私はまた一人になる。

だが、独りではない。

私は確かに認識出来ているのだ。

彼女達との絆によって…。

だから一人であるが、独りではない。

独りではないからこそ私の存在には価値があるのだ。

エリーもそうであったように…。

故に私は必ず生き延びてみせる。

私が私である証を立てるために…。

エリーが見出した可能性を繋げるために…。

……。

……。

…。

ふと空気が震えるのを感じた。

私は前方を見据える。

奴らがついにやってくるのか…。

『大多数の魔力を感知！敵が来るぞ！総員戦闘態勢を取れ！』

大地が揺れるのを感じた。

悪魔達の足音が聞こえてくる。

『戦の歌を上げろ！体力魔力戦う力全てを限界にまで高めるのだ！』

戦の歌が流れ、身体の血が滾るのを感じる。

戦場に嵐が吹き荒れ、雷鳴が鳴り響いていく。

……。

かつてカオス・ヴァルキリアが引き起こした人類史上最も悲惨で凄絶と呼ばれた戦争。

その三度目となる戦い。

第三次聖戦。

哀しみと苦しみに満ちた戦いがついに始まろうとしていた…。

第９３話：Ｉｄｅｎｔｉｔｙ（後書き）

次回からついに物語の中核を成す第三次聖戦が始まります。

果たしてどうなるのだろうか？

それは作者のみぞ知るといったところか…。

第９４話：Ｓｃｈｉｃｋｓａｌｓｓｙｍｐｈｏｎｉｅ

ついに戦争が始まる。

ブリュンスタッド以来の久しぶりの戦争だ。

その時に戦ったヴァルキリア軍も強大だったが、今回の敵軍はおそらく全次元において最強を誇る軍勢だろう。

額に汗が滴り、息が荒くなっていく。

私は戦場に出る前にヒュプノスから予め頂いた機械を耳に装着していく。

この装置で他の部隊の声が聞こえ、状況が把握できるらしい。

『敵を引きつけろ！奴らは強大とは言え、戦略戦術は皆無だ！そこを付け入るのだ！』

早速反乱軍の格指揮官の声が高々と装置から聞こえてくる。

エロス軍は基本的にただ本能のままに突撃してくるだけだ。

いわば力押しだ。

単純であるが、だからこそ恐ろしい所もある。

奴らは戦略戦術を必要としないほどの力を誇っているからだ。

地響きが大きくなってくる。

奴らが来る！

『敵軍の姿を確認！通常歩兵部隊！ギガンテス神軍！キュクロプス神軍です！』

『ジェラルド軍！リンドバルム軍の両軍は左翼へ！フェイロン軍！反乱軍は右翼へ展開しろ！』

エクリアの伝言とヒュプノスの指示が聞こえてくる。

戦の陣を整えているのだ。

……。

戦場の大地を漆黒に染めんと押し寄せてくる黒装束の軍勢。

モイラの部隊と応戦した重火器を武装した部隊だ。

奴らはエロス軍の中で最下級の雑兵に過ぎない。

彼奴等は無視して、反乱軍の他の部隊に任せておけばいいだろう。

問題はその背後にいる常人の四五倍の背丈を誇る巨人部隊。

漆黒の髪を振り乱し、禍々しい緋色の瞳に黒光りする筋肉を誇張し、隙のない足取りで進軍してくる巨人兵。

破れかけの粗雑な布を身に纏い、手には自分の背丈の倍はある寂れ

た槍を携え、もう片方の手には無骨な棍棒を握っている。

奴らがエロス軍の一兵卒ギガンテス神軍だろう。

『いいか…私達は狩人だ。敵全ては私達が狩る獲物だと思え…息を潜めろ…気配を自然と同化させろ…』

こちらの軍は息を潜めて、敵の接近を待ちかまえている。

私もまた息を殺して敵軍を見定めていく。

地響きがさらに大きくなってくる。

ギガンテスの背後にいるのはさらに大きい巨人兵は恐らくキュクロプス神軍。

顔の半分を一つの巨大な銀色の目玉で締める異様な相。

人にも似た小麦色の肌に強固な天然の鎧とでもいうべき強靱な肉体を誇った精強なる巨人兵。

両手にはこれもまた自分よりも倍はある長さがある銀色に光る斧槍を持ち、銀色の肩当てにマントを羽織っている。

装備の質からしてキュクロプスは明らかにギガンテスよりも格上の様相を誇っていた。

エロス軍では正規兵に位置する部隊なのだろう。

私は手に魔力を溜め、何時でも攻撃出来るように構えていく。

空には無数の見たことが無い乗り物が浮遊していた。

モイラとの旅で見た無機質な建物を構成する黒光りする乗り物。

その頭上には羽が高速回転し、無味乾燥な羽音を出している異様な姿。

あれはモイラから聞いた話ではアパッチと呼ばれる戦闘飛行機なのだろう。

武器兵士の運用と装着された武装で制空権を確保し、戦場で優位に立つ戦略兵器。

ある世界で自由の名の元に全てを支配していた大国が用いた主力兵器であったらしい。

その乗り物に搭乗しているのは黒装束だと聞いている。

力が無い分、未知なる兵器を使役することで戦闘力を補うというわけか…。

だが、こちらにも同様の兵器は所有しているはずだ。

これも他の部隊に任せる方向で行くとする。

ふとギガンテス部隊が立ち止まり、一斉に槍を振りかぶる姿が目に留まる。

『投げ槍の雨が来るぞ！総員防御結界を展開しろ！』

あの巨大な槍を大量に投げてくるというのか！

あれはおそらく並の防御結界を容易く突き破る威力が誇ってると見て間違いない。

反乱軍は多くの犠牲を出してでも息を潜めて好機を待つのだろうが、あれは確実に多大な犠牲者が出てくる。

エリニュスやアイテルが率いる部隊ならば問題無いだろうが、ロンや他の部隊では凌ぎきれるものではない。

私としてもまだ動きたくはなかったが、致し方無しだ！

ギガンテス神軍とキュクロプス神軍。

奴らは私が全て狩り取っていく！

「ロキ！」

身体強化を図り、死の大地を駆けていく。

『黒騎士ロース様が動いたぞ！』

『あの方ならば心配は要らない！我等は我等の役割を果たすのだ！』

ヒュプノス、お前の言葉に甘えて好き勝手に動かさせてもらうぞ！

黒装束が私の接近に気づき、銃弾の嵐を展開していく。

だが、その程度の攻撃、防御結界を貼るまでも無い。

私の強化された身体は銃弾をも弾いていく。

バズーカやショットガン、ガトリング砲も放ってくるが虫に刺された程度にも応えない。

私は手を振り、風圧だけで黒装束を吹き飛ばしていく。

その時にギガンテスが槍を放物線を描くように投げ放っていく。

「そうはさせるか！ブラックホール！」

私の頭上に黒球が生み出され、投げられた槍の全てを吸引していく。

待ちかまえている反乱軍に接触するまで出来るだけ露払いをするのだ。

その際に黒装束部隊も巻き込まれる形でブラックホールに呑み込まれる。

だが、ギガンテス神軍とキュクロプスは大地に足を根付かせ驚異的な踏ん張りでブラックホールの吸引力に耐え抜いていく。

さすがは馬鹿力の専門集団と言ったところか！

「「「グオオオオオオオオッ！」」」

ギガンテス等が雄叫びと共に次々と棍棒を振るい、全てを薙ぎ払うような強烈な衝撃波を放ってくる。

「ヴィーザル！」

私は天をも貫く巨大剣を手に持ち、力の限りに横に振り払っていく。

巨大剣はギガンテス等が放った衝撃波をも弾き、数十体を纏めて胴薙ぎにする。

戦場に大量の血の噴射が発生し、大地を紅く染まる。

そのまま何度も横に振るい、血の雨を降らしていく。

私の身体は既に全身が紅く染まり、口には血と鉄の味がする。

今の私はどんな表情をしているのだろうか？

敵にはさぞ死神のように見えていることだろう。

だが、それでいい。

今日ほど己の最強の力に感謝したことが無い！

私は奴らを一人残らず皆殺しにする！

「うおおおおおおおっ！」

私は雄叫びを上げて、ギガンテスの首を大量に飛ばしていく。

エリーを狂わせた元凶を滅ぼしてやるのだ！

不意に斧槍が回転しながらこちらに向かって飛来してくるのが目に留まる。

私は咄嗟にしゃがんで回避する。

髪の毛が数本飛んでいった。

投げてきたのはギガンテス兵の上位キュクロプスだった。

キュクロプス等は顔半分を占める目玉を紅く輝かせ、閃光を放射してきた。

「くっ！」

息つく間も与えず閃光を放射し、斧槍を投げてくるキュクロプス。

さすがはエロス軍の正規兵と言ったところか…。

ギガンテスのようなただの馬鹿力集団ではない。

黒装束も弾幕の嵐を展開させ、目眩まし程度の役割は果たしてきている。

さすがにきつくなってきたかもしれない。

だが…。

「まだまだだ！フレイア！」

大量の魔法陣が展開され、閃光の嵐が吹き荒れる。

キュクロプスが放つ閃光や黒装束の弾幕をも薙ぎ払い、奴らを身体を焼き焦がしていく。

上空から響く羽音が頭上まで聞こえてきたの察知し、空を見上げた。

戦闘飛行機アパッチがガトリング砲を放射し、爆弾らしきものを投下してくる。

私は魔法障壁を展開して凌ぐ。

戦場に爆音が鳴り響き、破片が舞い散っていく。

ついに私に的を絞って集中攻撃してきたらしい。

ならば、ますます好都合というものだ！

「グアアアアアアアアアッ！」

「シャアアアアアアアアッ！」

爆炎の中からキュクロプスとギガンテスが踊り出て、斧槍や棍棒を私に叩きつけようとしてくる。

その時、後方から矢が飛来し、キュクロプスの目玉を射抜いていく。

さらに矢が雪崩れ込むように飛来し、ギガンテス共の身体に次々と突き刺さる。

『黒騎士ロースに続け！突貫！』

この声はロン！

フェイロン軍が動き出したのだ！

『勇敢なるジェラルド軍よ！進撃せよ！』

『リンドバルムよ！敵を撃滅するのだ！』

後方から次々と味方の兵士が雪崩れ込み、獲物を食いつく猟犬の如くギガンテス共に集っていく。

「ロース殿！」

ロンが三節棍を振るい、黒装束を蹴散らしながらこちらに向かってくる。

「リー将軍、ついに本隊が動き出したのか！」

私はロンに応えながらも斧槍を振るってくるキュクロプスの懐に入り、目玉に向かって拳をめり込ませ、遠方に向かって、ヴィーザルを投げていく。

前方からは悲鳴と共に血の霧が立ちこめていく。

「はい！ジェラルドにはエリニュスのティーシポネー隊、リンドバルムにはアレークトー隊、そして私達フェイロンには…」

「あたい達メガイラ隊が援護に回ってるよ！ぶっ飛べ！メガイラナックル！」

メイは拳を振るい、ギガンテス共を纏めて十数体ほど殴り飛ばしていく。

それに続くように後方から魔法弾が飛び交い、仕留め損なった敵兵に止めを刺す。

『お主等！空の羽虫共も拙者等が駆逐するのだ！』

上空にはアイテルの声と共に反乱軍とエロス軍のアパッチ部隊が激しい弾幕戦を展開させている。

「アイテルは反乱軍空戦部隊を指揮してる！あたい達は地上に這う虫を駆除してやろうよ！」

「エロスに私達の底力を見せてやりましょう！」

二人の指揮官の声と共にフェイロン軍とメガイラ隊はギガンテス神軍とキュクロプス神軍を蹂躙するべく陣を整えていく。

それに応じるようにリンドバルム軍とジェラルド軍もティーシポネー隊とアレークトー隊を主砲に敵軍を挟撃する形で部隊を動かしていく。

右方向からはティーが放つアグネヤの光が見え、左方向からはアレクの魔力により空間が歪んできている。

各自が己の力を振り絞って戦っているのが肌で感じてくる。

ならば、私も全力で好き勝手に暴れるのみだ！

「フレイ！」

頭上に銀の光を放つ巨大光球を生み出し、敵軍に投げつけていく。

爆風と共に肉片が飛び散り、血路が開かれていく。

敵軍に風穴が開いたようだ。

「ようし！お前等あたいに続くんだ！食い散らかしてやれ！」

メガイラ隊が敵軍の風穴を広げるべく突進していく。

このまま奴らを一網打尽にする！

私は更なる魔力を溜めて、攻撃をしようと思った時だった。

敵陣の遙か後方から巨大な影が見えてくる。

「あれは一体何なんだ？」

「もしかして黒い巨人なのか？」

黒い巨人。

もしかしてタルタロスなのか？

「いいえ！あれは違います！」

否定したのは三節棍を振るっているロンだった。

巨人はギガンテスやキュクロプスが虫みたいに思えてくるほどに有り得ない体格を誇っていた。

体格だけならまだしも驚くべき所は別にあった。

異様なのは無数に蠢く首と腕。

首が四十、いや、五十ほどあり、腕が数え切れないほどにあったのだ。

無数にある首と腕は磯巾着の下手物下級神アルゴスの触手のように蠢かしていた。

肌はギガンテスと同様に赤黒く、顔の相も似ているようだった。

「あれは…ヘカトンケイル、エロス軍最上級兵でティターン神軍に次ぐ主戦力と呼ばれています！」

ついに大物が出現したということか…。

ヘカトンケイルは無数の腕に魔力を凝縮させ巨大剣を次々と生み出してくる。

「「「「「ギガアアハハハアアアアアアアッ」」」」」

無数に蠢く首から咆吼が響き、剣先から巨大な光球を生み出し、放ってくる。

戦場に光弾の雨が降り注いできた。

無数の爆裂音が響き、反乱軍の陣形に乱れが生じてくる。

その際にもヘカトンケイルは巨大剣を振るって、真空破を放ち味方兵を切り刻んでいく。

押され気味だったギガンテス兵とキュクロプス兵が息を吹き返したかのように突撃をし始めてきた。

ヘカトンケイルの出現でエロス軍の士気が上がってきている。

「ロストさん！」

ロンが公的な立場を忘れ、私の本名を呼んできている。

あの化け物を何とかしなければこちらが風穴を空けられてしまう！

「奴は私が何とかする！」

私はヘカトンケイルがいる場所に向かって飛び立とうとする。

ロンは雷龍を召喚し、私に手を差し伸べる。

「私も行きます！ロストさんもつかまってください！」

「頼む！」

私はロンの手を掴み、雷龍の背へと乗っていく。

「あたい等も行かせてもらうよ！」

「そうはさせねえよ！」

メイが駆けようとしたところに不意に影が過ぎってくる。

両手に土色の鉤爪を携えた私の三倍ほどの背丈を誇る大女。

茶色の髪を肩まで伸ばし、青鈍色の唇を歪ませ、褐色でしなやかな肉体美を誇る女戦士が立ち塞がってきた。

「あたしの名は元ガイア四高弟が一神ウレア。お前はエリニュスのメガイラだろ？ここは同じガイア様の門弟として新旧白黒つけるべく殺し合いをしようじゃねえか？」

ウレアは獰猛な笑みを見せて、鉤爪を煌めかせてくる。

「上等じゃないの！ロスト、ロン、先に行っといてくれ！あたいはどうやら喧嘩を売られたらしいからな…」

「いいねえ、お前はあたしと同じ匂いがするよ。安心しな、メガイラ。お前の姉ティーシポネーにはウラノス、アレークトーにはポントスが今頃張り付いている。三姉妹仲良く冥府には逝けるだろうよ！」

メイと魔力の篭もった拳とウレアの鉤爪が激突し、周囲に凄まじい余波が巻き起こってくる。

二人の戦いにもはや手出しする余地は無い。

「ここはメイに任せて先に進むしかなのか…。ロン！出してくれ！」

「はい！ロストさん！」

私とロンを乗せた雷龍は縦横無尽に巨大剣を振るっているヘカトンケイルの元に向かって飛び立っていく。

『アレークトー隊長が四高弟の一神ポントスと思わしき敵と交戦中！』

『不味い！ウラノスにティーシポネー隊長が押されている！加勢し…きゃあああああっ！』

ヘカトンケイルに続き、ガイア四高弟まで出張ってくるとは…。

これは本気でこちらの戦況が不利になってきている。

早く戦況を有利に進めていかないと体勢を立て直せなくなる。

四高弟の相手をしているエリニュスも危ない。

「ロストさん！」

ロンの声が聞こえ、前方から敵軍のアパッチが銃弾を放射しつつ接近していることに気づく。

「貴様等雑魚に構っている暇は無い！ブラッドスター！」

上空を覆うほどの無数の光弾が生み出され、アパッチ部隊を貫くべく一斉に飛来する。

「もっと急ぐのだ！」

「はい！」

光弾に撃破され墜落していくアパッチ部隊を余所におぞましき巨人ヘカトンケイルの眼前まで接近していく。

ヘカトンケイルは私達の接近に気づき、無数の顔から顎が外れるほどに大きく口を開き、無数の閃光が放たれていく。

「オーディン！」

銀色の魔法陣が展開され、閃光をさらに巨大な閃光にして返していく。

ヘカトンケイルの無数にある首が閃光によって次々と貫かれ、消滅していく。

こちらのオーディンも度重なる閃光を受けて、今にでも壊れそうなほど亀裂が生じている。

「ロン、お前は衝撃に備えろ！後は私に任せるのだ！」

ロンは雷龍の背中にしがみつき、私は飛翔魔法でヘカトンケイルに向かって飛んでいく。

私は貴様如きに手こずっている場合では無いのだ！

「スルト！」

上空に大量の巨大な漆黒の太陽が生み出される。

ヘカトンケイルは巨大剣を振るい、ついにオーディンを砕いてしまう。

魔法陣が砕かれた先には無数の漆黒の太陽が獲物を待ちかまえていた。

「丸焦げになれ！」

咆吼を上げるヘカトンケイルに向かって一斉に漆黒の太陽が飛んでいく。

だが、ヘカトンケイルは飛来してくる太陽を素手で鷲づかみして握りつぶし、巨大剣を振るって弾いていく。

スルトが通用しないのか…。

フレイアも多分同様に閃光で応戦されて相殺してくるだろう。

遠距離攻撃ではおそらく倒すことは出来ない。

ならば、接近戦で挑むしかない。

私はヘカトンケイルの胸部に向かって飛んでいく。

首や腕が無数にあろうと心臓は一つだろう。

奴の心臓に目掛けて黄金の拳を炸裂させる。

そう思い、ヘカトンケイルの心臓に向けて飛び出そうとした矢先、私の周囲から魔法陣が次々と出現していく。

魔法陣からは頭部が獅子で身体が山羊、尻尾が蛇という異様な姿の生き物が出てくる。

その生き物は無数に出現し、口を開いて閃光を放出してきた。

「新手の戦力か！」

私は閃光を手を振って弾き、黄金の拳を獅子の額にめり込ませていく。

獅子擬き達は額から血を吹き出し、地上をへと落下していく獅子擬きを余所に次々と閃光を吐き、もしくは体当たりをしかけてくる。

群がってくる獅子擬きに気を取られている内に不意に巨大な拳が目の前に迫っていることに気づく。

ヘカトンケイルの拳が襲いかかってきたのだ。

避けようと思った矢先に獅子擬きの閃光が脇腹を霞み、まともに拳が身体に激突してしまう。

「ぐはっ！」

全身の骨が砕ける程の激痛と共にはじき飛ばされ、獅子擬き達が駄目押しに閃光の嵐を吹きかけていく。

弾き飛ばされながらも即座に防御結界を展開させ、閃光の嵐を何と

か凌いでいく。

私が奴の懐に接近することを呼んで戦力を投入してきたということか…。

どうやら戦術戦略が全く皆無というわけではなさそうだ。

おそらく指揮官が何処かにいるのだろう。

「全く厄介なことだ…」

ヘカトンケイルは無数の腕があるため、私に応戦しながらも反乱軍の兵士達を蹴散らしている。

何としても早く倒さねばならない。

だが、弱点であろう心臓に向かおうにも獅子擬き達が妨害し、気を取られていたらヘカトンケイルの攻撃を喰らうことになってしまう。

この連携を突き崩さない限り、容易にヘカトンケイルの心臓に近づけない。

必死に思考を巡らせている時にも獅子擬き達の閃光とヘカトンケイルの巨大剣が容赦無く襲いかかってくる。

「くっ！」

些か調子に乗りすぎてしまったのか…。

私の力はこの程度のものだったのか…。

この体たらくではエロスの元に辿り着く事が出来ないではないか…。

エロスだけではない。

タルタロスに囚われたアビスの元にすら辿り着くことが出来ない…。

エルもレテシアもアイリの元にさえも…。

獅子擬き達の体当たりが防御結界を突き破り、全身の骨が砕けるほどの激痛が私を苛む。

「ごほぁああっ！」

血を吐きながらも体当たりしてきた獅子擬きの頭部を鷲づかみして握りつぶす。

冗談ではないぞ！

こんな所で立ち止まるロストではない！

「カタストロフ・サン！」

全身に漆黒の太陽を纏わせ、群がってくる獅子擬き達を焼き払っていく。

「いくらでも来るがいい！」

私に群がろうとしてきた獅子擬き達は突如後方から放たれた閃光の嵐に次々と撃墜されていく。

後ろを振り返るとロンが八つの首が生えた雷龍を使役して応戦していた。

「ネメシスの力よ！仇成す者全てを滅ぼす力を与え給え！八岐大蛇！」

八つの口と十六の目から閃光を放ち、獅子擬き達を瞬く間に駆逐していく。

まさかロンは神降ろしの力を行使しているというのか？

獅子擬き達がロンの放つ閃光に薙ぎ払われ、血路が開いていく。

「キマイラ共は私が引き受けます！ロストさんは早くヘカトンケイルを！」

「有り難い！」

私は真っ直ぐにヘカトンケイルの元へと向かっていく。

「グオオオオオオオッ！」

ヘカトンケイルが無数の首から閃光を吐き、数多の腕からは魔法弾や巨大剣の斬撃、打撃、さらには剣圧による衝撃波を放ってくる。

「ヴィーザル二刀流！」

迫り来る無数の巨大剣を片っ端から叩き折り、ひたすら駆け抜ける。

拳の嵐は腕を切り落とすことで掻き消していき、魔法弾や閃光は弾き、衝撃波を掻き消してヘカトンケイルの心臓を目指す。

ヘカトンケイルは心臓を守るために門を閉じるようにして全ての巨大剣の剣先を合わせてくる。

「「「「「「「ギゲガォアアアアアアアアッ！」」」」」」」

大気を振るわせるほどの咆吼を上げ、合わせた剣先から膨大なる魔力が凝縮されていく。

私は二本のヴィーザルを合わせ、一本の超巨大剣へと変えていく。

「これで貴様の心臓に風穴をあけてやるぞ！」

「「「「「「「ガグオアアアアガォアアアアアアアアッ！」」」」」」」

ヘカトンケイルの剣先から極大の閃光が放たれ、突撃する私を呑み込もうとしていく。

それでも構わず私は閃光の中を突っ切り、無数の巨大剣を砕いてヘカトンケイルの心臓へと到達する。

「これで終わりだ！ヘカトンケイル！」

「「「「「「「ハギャアアアアアアアアアアアアアアアッ！」」」」」」」

私の超巨大剣がヘカトンケイルの心臓に突き刺さり、断末魔の悲鳴が戦場一帯に木霊していく。

風穴が空いた胸から滝のように血が噴出していき、ヘカトンケイルは力尽きて倒れていく。

ギガンテス兵やキュクロプス兵等はヘカトンケイルの下敷きになり、戦場一帯に血が溢れていった。

「ロストさん！やりましたね！」

八頭龍の使役するロンが駆けつけてきた。

「ああ、大物を仕留めたぞ…」

これで反乱軍の士気が上がり、風向きが変わるだろう。

事実反乱軍は巻き返すようにギガンテス兵やキュクロプス兵を次々と葬っていた。

「ロン、まさか神降ろしを使えるようになっているとは驚いたぞ…」

「少しでもロストさんと肩を並べたくて…がんばりました…」

ロンの健気な言葉に私は思わず笑みが零れてしまう。

おそらくロンは身体に神を宿してより強大な雷龍を召喚しているのだろう。

この流れに乗って敵を殲滅していこう。

そして、指揮官を仕留めて反乱軍の士気をさらに高めていくのだ。

ヘカトンケイルとの戦いの時にキマイラ部隊が投入され、苦戦を強いられた。

本能のままに戦う連中に連携等という高尚な戦術を使えるはずがない。

敵軍に必ず指揮官がいるはずだ。

「このまま一気に畳みかけるぞ！ロン！」

「はい！ロストさん！」

私は雷龍の頭部に立ち、敵軍の陣地へと目指して飛んでいく。

雷龍は閃光を吐き、群がるアパッチ部隊とキマイラ部隊を薙ぎ払っていく。

「スルト！」

私は地上に漆黒の太陽を降り注がせ、ギガンテス部隊とキュクロプス部隊を焼き払っていく。

『ロース将軍とリー将軍に続け！』

『エロスの軍勢を殲滅してやるんだ！』

反乱軍もまたロンの使役する八頭龍に続くようにエロス軍を蹂躙し

ていく。

「ロストさん！私、嬉しいです！ロストさんとこうして肩を並べて戦うことが出来て…」

「ロン…」

ロンは私の隣へと飛び移り、手を握ってくる。

「私、運命を変えることが出来て本当に良かったと思います！ロストさんに想いを告げることが出来て…」

ロンは凛々しい笑顔で言ってくる。

彼女は既に一流の戦士で良い女だった。

そんな彼女と関係を結ぶことが出来たことは人生で最良の出来事の一つとなるだろう。

「必ず生き延びるぞ！ロン！」

「はい！ロストさん！」

私とロンは互いの手を握り、迫り来る敵を薙ぎ払って駆け抜けていく。

良い風向きだ。

この調子でいけば…。

「うっ！」

「どうしましたか？ロストさん…」

背筋に悪寒が走ってきた。

しかも冷や汗が流れてくる。

この感覚は何なのだ？

ふと遙か前方から暴悪なる威圧感を感じる。

遙か前方を目を凝らして見てみると空に浮遊している二匹の巨大な怪物にそれぞれ騎乗している兵士がいた。

一方はヘカトンケイルと同等の数の獅子の首と竜の尾を持つ犬型の怪物。

それに騎乗している者は紫を基調とする鎧にマントを羽織らせた兵士。

もう一方は二つの犬の首に鬣の一本一本と尾が蛇になっている犬型の怪物。

それに騎乗している者は紅を貴重とする鎧にマントを羽織らせた兵士。

あの二人がおそらく指揮官なのだろうか？

確認を取るためにロンに伺おうと振り返ると私は言葉を失ってしま

う。

先ほどまで凛々しかったロンがか弱い少女のように震えてしまっていた。

「まさか…闇の双剣まで…来ているなんて…」

「闇の双剣？ニュクスとエレボスのことか！」

アレクが言っていたエロス軍で最大の脅威と呼ばれた存在。

闇の双剣ニュクスとエレボス。

エロスの副官であり、タルタロスの腹心とも呼ばれるエロス軍最高幹部。

これ程の大物が早くも登場してくるとはな…。

「紫の方がニュクス…紅の方がエレボスです。そして、ニュクスが乗っている怪物は女王エキドナが産み落とした地獄の番犬ケルベロス、エレボスの方はケルベロスの弟に当たるオルトロス…いずれもエロス軍最高戦力と言っても過言ではありません…」

ロンは恐ろしげに語っているが、奴らはピテスやモロスに比べれば弱いとアレクは言っていた。

苦戦することはあっても負けはしないだろう。

そう思っていたが、奴らの放つ威圧感からしてとてもピテスやモロスよりも弱いとは思えない。

むしろ逆に…。

紫の兵士ニュクスが掌をこちらに向ける仕草が不意に目に留まる。

何をするつもりだ？

……。

『アザゼル』

……。

紫色の光が上空一帯を覆っていく。

全身に灼熱の業火が纏ったような熱さを感じ、私の意識は紫色の光に呑まれていった。

……。

……。

……。

……。

……。

……。

…。

私は目を覚ます。

いったい何だったのだ？

全身の至る所に火傷が負っている。

常人ならば間違えなく死んでいただろうと思うほどに…。

もしかすると無意識的に私の神掛かり的な生存能力が働いたのだろう。

私は起き上がり、周囲を見渡して唖然としてしまう。

周囲は焼け焦げた死体に埋め尽くされていた。

僅かに原型を留めてる焼死体を見て、それがキマイラの死体だと判明した。

人の死体もあれば、ギガンテス、キュクロプスの死体もあった。

兵士達は焼死体に躓きながらも応戦をしていた。

まさか、先ほどニュクスが放った紫色の光で敵味方関係無く焼き尽くしたというのか…。

それにしても肉体強化をさせ、防御結界を展開させていた私に負傷させ、尚かつ意識まで奪い取るとは…。

私は立ち上がろうとして手に何かが握られていることに気づいた。

……。

まさか…。

……。

握られていたのは黒焦げた人の手らしきもの…。

……。

そんな…。

……。

先ほどまで握っていたものはロンの手…。

……。

……。

…。

『私、運命を変えることが出来て本当に良かったと思います！ロストさんに想いを告げることが出来て…』

……。

……。

…。

「おげぇえええええええっ！」

喉の奥から吐瀉物が吐き出されてる。

目と鼻から体液が流れてくる。

「ごほっ…うえええっ…」

嗚咽が止まらない。

……。

『有り難う御座います…これでもう思い残すことはありません…ロストさん…』

……。

私は崩れ落ちていくロンを握りしめた。

「ごほっ…私はお前にま…うえぇ…思い残したことはまだ…おえぇ…沢山…あるのだぞ…ロン…がはっ」

運命を変えただと？

違う！

お前はただ肩代わりをしただけだ！

私が背負うはずだった運命を…。

「ロォオオオオオオオオオオン！うおおおおおおおおおおっ！」

慟哭が戦場に響き渡っていく。

……。

ロンは私の手から零れ落ち、空の彼方へと散って逝った。

第９５話：Ｖｅｓｐｅｒｓ

私は空に散ってしまったロンを想い、戦場で呆然と佇んでいた。

視界には牙を向けて襲いかかるキマイラの姿が映る。

私はそれを他人事のように眺めている。

キマイラの牙が私の首に食い込もうとした瞬間に私の生存本能が反射的に働いたのか、拳を繰り出し、キマイラの身体を破砕していた。

……。

ここで立ち止まるわけにはいかない…。

立ち止まれば、もう前に進めなくなる…。

仲間が死んでしまう。

そして、私も…。

戦わなければならない…。

生き延びるためにも…。

ロンの生きた証を残すためにも…。

私がまずすべきこと。

それは…。

ロンの感触が残った手を握りしめ、涙を拭って空を見上げる。

目に映るのは無数の首を蠢かした怪物ケルベロス。

そして、紫の鎧を身に包む闇の双剣の片割れニュクス。

奴等を殺すことだ…。

「「「グオオオオオオオッ！」」」

棍棒を振るい、私に群がってくるギガンテス。

私が手を振るった瞬間にギガンテスの肉片が飛び散っていく。

「下手物等に用は無い…私の獲物は…ニュクス…貴様だけだ！」

私は再び空へと駈け上っていく。

ロンを奪った仇ニュクスを追うために…。

戦場では人の生き死には当たり前のことだ。

だから、戦場に出れば死を受け容れる覚悟を持たなければならない。

だが、それは飽くまで理屈の中での話だ。

私の感情が大人しく覚悟を受け容れることは無い。

だから、私の赴くままに戦場を駆け抜ける。

それが私が私である証だ。

紫の鎧が乗った怪物に向かって飛んでいく。

「ニュクス！貴様だけは私の手で…」

私の行く手を阻もうとキマイラの群れが襲いかかってくる。

キマイラは一斉に口から灼熱の炎を吐いてくる。

「邪魔だ！フレイア！」

即座に大量の魔法陣が出現し、閃光の吹雪がキマイラの灼熱の炎諸共薙ぎ払っていく。

閃光をかいくぐってきたキマイラは殴り潰し、引き裂いていく。

地上から黒装束部隊が弾幕を放射し、空中からはアパッチがミサイルと呼ばれる爆弾を放ってくる。

ギガンテス兵等が槍を投げ、キュクロプス兵等が斧槍をぶん投げてくる。

「ホワイトホール！」

私に向かってきた全ての物質が逆方向へと軌道を変え、敵達へと返される。

向かってきたキマイラの群れは身体が焼き切れるほどに彼方へと突き飛ばされていく。

戦場の至る所で金切り声が響き渡る。

「貴様等如きに私は止められはしない！」

空の遙か彼方でケルベロスに騎乗し悠然と構えるニュクス。

私の獲物はニュクスだけだ！

視界でニュクスの姿が徐々に大きくなってくる。

奴に必ず私の黄金の拳を喰らわせてる！

ロンの感触が微かに残っているこの手で…。

『ベルゼブル』

ニュクスは紫の光球を大量に生み出し、周囲へばらまいてくる。

光球は私の方へと飛んでこなかった。

何をしたのか分からないが、奴に辿り着けばいい。

私は拳を握りしめる。

もう少しでニュクスの元に辿り着けると思った矢先に視界に赤黒いものが映る。

「「「「ゴゲガァアアアアアアアアアッ！」」」」

……。

胸に風穴が空いた無数の首と腕が蠢く怪物。

「ヘカトンケイル…馬鹿な…」

心臓をぶち抜いて死んだはずだ…。

私の疑問を余所にヘカトンケイルの無数の腕が容赦無く襲いかかってくる。

「くっ！」

拳の嵐を凌ぎながら考える。

ヘカトンケイルは確かに死んだはずだ。

それなのに蘇ったかのように起き上がって私に攻撃をしてきている。

ヘカトンケイルの猛攻で近づきかけたニュクスとの距離が引き離されていく。

「ゴアアアアアアッ！」

頭が潰れたキマイラが姿を現し、体当たりを仕掛けていく。

私は身体を反らして避け、キマイラを殴り飛ばす。

奴は確か体当たりを仕掛けた際に頭を鷲づかみにして潰し殺したはずだ。

間違いない。

ニュクスは死体を操っている。

そう言えば戦場一帯に不気味な喘ぎ声が響いている。

私は地上を見渡すと反乱軍の兵士が味方に向かって攻撃している場面が目に留まる。

『死体が動き出しているぞ！』

『私のことが分からないの？やめ…あああああっ！』

味方だった兵士が敵味方関係無く攻撃している。

しかも倒れた者にのし掛かって生き血や肉を貪っていた。

吐き気が襲ってくる。

私は口を押さえながらヘカトンケイルが放つ閃光を避け続ける。

「うぐっ…ニュクスを早く倒さねば…」

このままだと敵味方関係無くニュクスの死体遊びに付き合わされてしまう。

敵はまだ構わないが、味方の命を弄ばれるのは容認出来るものでは

ない。

それにヘカトンケイルの攻撃が生前よりも鋭い。

まるで私の力に対応しているかのように強くなっている。

「「「「グガゲゲ…コロス…コロ…コロ…ス…ハガガガッ…ハハハハハッ！」」」」

ヘカトンケイルが人の言葉を発している。

進化しているというのか！

「「「「シネ…シネ！シネ！シネ！シシシシシシッ…シャアアアアアアアアッ！」」」」

手に持っている巨大剣を一斉に投げつけてきた。

「オーディン！」

銀色の魔法陣を展開させるが、巨大剣はあっという間に魔法陣を砕き、私に迫ってくる。

「ちっ！」

威力が生前と比較にならないほどに増している！

凄まじい速度で飛来してくる巨大剣を必死に交わし、何とか活路を見出そうとする。

ヘカトンケイルは暴走したように無茶苦茶に巨大剣を振り回し、閃光を乱れ撃ちをして周囲を根刮ぎ薙ぎ払っていく。

「ぐわっ！」

乱れ撃ちで放たれた真空破に掠り、全身から血飛沫が出る。

このままではやられてしまう！

ヘカトンケイルの遙か後ろではニュクスが悠然と私が戦っている様子を眺めていた。

私が苦しんでいる姿を楽しんでいるようにも見える。

こうなれば肉片一つ残らず消し飛ばすまでだ。

「ヴィマーナ！」

真紅の巨大槍を手に取り、ヘカトンケイルに対峙する。

未練を残さないように現世から一片も残らず消滅させてやる。

穂先をヘカトンケイルに向け、突撃しようとした時だった。

「ま…また…わた…わたくしの技を…つっつっつ…つかって…いるのですか…かかかかっ…ロス…ロスト…ロスト…さま…さま…ままままっ！」

……。

目の前の現れた女を見て、私は身体が固まってしまう。
目と口から血を流し、胸元から血が溢れていた美女。
「ティー…」
首に紫色の光球が根付いていた。
まさか、お前はもう既に…。
「何て…なんて顔をしておいで…おいでですか？ああ…既にご存じ…ですですかかか…わたくしが…」
……。
「死んでいることが…」
……。
ヘカトンケイルはティーを避けるようにして私に攻撃を繰り出してくる。
私はヘカトンケイルの猛攻を必死に交わしながらもティーに呼びかけていく。
「ティー！何故だ！なぜ…」
「ウラノスに…負けてしまいました…だから…私は…今こうして…貴方の前にいます…貴方を…」

……。

「殺すために…」

……。

ティーから何度も殺すと言われてきたが、今の「殺す」の響きは今までのものとは違う。

「本気で私を殺すつもりなのか…」

「ええ…私は貴方を殺して自分の物にしたい…今までずっとそう思っておりました…愛している…殺したい…でも…殺したら…失ってしまう…でも…殺したい…」

ヘカトンケイルの閃光が肩と足に掠り激痛が襲う。

ティーの言葉が余りにも受け容れがたく、現実感が喪失してしまうような…。

「けど…私はもう死にました…だからでしょうか…迷いが晴れたのです…」

ティーはヴィマーナを手にし、後ろに向けて振り払い、ヘカトンケイルを彼方へと弾き飛ばす。

あれほど苦戦したヘカトンケイルを虫けらのように蹴散らした光景に戦慄を覚える。

生前とは桁違いの力だった。

私も釣られるようにヴィマーナを構える。

ヘカトンケイルはもはや既に眼中に無かった。

ティーはもう死んでいるのだ。

「貴方を殺すことに何の躊躇いもない…」

死んでいる…。

「殺されたくなければ…私を消してください…」

死んだのだ！

「他の誰でもない…貴方の手で…ロスト様！」

「ティィいいいいいいいいいっ！」

互いのヴィマーナが激突し、上空に凄まじい爆音が響く。

戦闘に割り込もうとしてきたキマイラやアパッチが爆風で弾き飛ばされる。

もはや私とティーの対決に割り込む無粋な連中はいない。

以前よりも格段に戦闘力が増したティーの猛攻が私に容赦無く降り掛かる。

だが、鋭い斬撃よりも凄まじい打撃よりも今のティーの姿が何倍に

も身も心にも堪える…。

今だからこそ分かる。

ティーが殺したいという思いが如何に私を求めていたのかが…。

……。

『本当ですか？死んでくれますか？』

……。

「これが…お前の望みだというのか！ティー！」

ティーは全ての枷から解放されたかのような清々しい笑顔を浮かべていた。

生前では見られなかった笑顔だった。

「私は…幸せです…貴方と…本気で殺し合いしているこの時が…ははははっ…ロスト様…殺したい程に愛してます！」

「私はお前の愛し方を理解したくなかった…だが…理解してしまった…私を永遠の存在に変えたかったということなのか！」

互いに放った波動がぶつかり合い、再び爆音が響いていく。

「ロスト様は私にとって永遠の光なのです！それなのにタルタロスなんかにやられてしまって…ですが、許してあげます…こうして私に殺されるために貴方がもどってくれたのですからね！あははは

！」

ティーの渾身の一撃を私は受け止める。

「生憎私は殺されるわけにはいかない！永遠に何も出来なくなるよりも限りある生で欲望のままに謳歌していくこそが我が人生だ！」

私はティーの言葉に応えて、打ち返していく。

「では、私が貴方の欲望を永遠にしてあげます！私と共に冥府の者となればいい！死しても尚永遠に愛し合いましょう！ロスト様！」

「私の夢は酒池肉林の世界だ！冥府で亡者共を侍らせるような魑魅魍魎の世界は築くつもりは微塵も無い！」

互いの本音をぶつけ合った攻撃は何時しか二人だけの世界へと入っていた。

ティーは死者になったことで自分の欲望が押さえきれなくなったのだろう。

私はティーの言葉を端々を探るつもりはなかった。

殺すという言葉は飽くまでティーならでは冗談としか受け取らなかった。

これは私がティーと真剣に向き合わなかった罰なのだろうか…。

だが、私は罰を今受けるわけにはいかない。

ティーは既に死んでいるのだ…。

今目の前にいるはティーの意識の残響にしかない。

ニュクスに利用された生前の記憶を元に動かしている人形に過ぎないのだ。

「私はお前の永遠にはなれない。だから、代わりにお前を私の永遠の光にする…」

「いいえ…貴方が永遠になるのです…私が殺して…貪って…塵に還って…それで…」

互いにヴィマーナの穂先を向け、駆けていく。

済まない…。

……。

『本当にどうしようもないですね。殺しますよ…』

……。

……。

「ティぃいいいいいいいいいいっ！」

ティーのヴィマーナは砕かれ、私のヴィマーナが彼女を貫いていく。

……。

「あははっ…これで…私は…貴方に殺されて…永遠になれる…」

……。

「ありがと…ロス…」

……。

ティーは光の中で散って逝った…。

……。

彼女は既に死んでいたのだ…。

だから、私が殺したことにはならない…。

ならないはずだ…。

それなのに手が震えていた。

ティーを殺したという感触が身体に刻まれてしまっている。

……。

『私は貴方に殺されたのですよ…』

……。

幻聴なのか、ティーの声が脳裏に響いてくる。

……。

『わたくしは貴方の手で永遠になりました…』

……。

「違う！私はただ…」

……。

『他の誰でもない…ロスト様の手によって…』

……。

「私はお前を…うぐあああっ！」

身体に凄まじい圧迫感を感じる。

私は巨大な手に身体を握りしめられていた。

「「「「ノガサナイ…ノガサナイ…コロス…コロス…シネ…シネ…シネェエエエエエエッ！」」」」

全身血塗れで、内蔵が垂れている威圧的な巨人。

ティーが薙ぎ払ったはずのヘカトンケイルの死体だった。

「ぐううううあああっ！」

口から内蔵が飛び出てきそうだ。

……。

『忘れないでください…わたくしは…何時でも…貴方の…側にいます…』

……。

ティー…。

これがお前が与える私への罰だというのか…。

意識が遠のきそうになる。

結局は私もまた永遠になってしまうのか…。

そして、ティーの元へと…。

「何やってるのよ！ロスト！」

破砕音が響き、圧迫感から解放される。

「その声は…メイ…なのか…」

メイがヘカトンケイルの腕を砕いて、私を解放してくれたのか…。

「そうよ！お前の喧嘩仲間のメイよ！何戦場で固まってるのよ！」

メイは私を庇うように襲いかかってくるヘカトンケイルの拳と刃を

素手で捌いていく。

彼女は確かウレアと交戦していたはずだ。

「メイ…お前はウレアと戦っていたはずでは…」

「何もせずに黙ってやられているお前を見て居ても立っても要られなくなって、喧嘩を放棄したのよ！全くあたいに喧嘩よりも優先させるのはお前ぐらいだよ！」

メイは私を抱えて、ヘカトンケイルの猛攻を片手で凌いでいる。

「そなたはニュクスの元へと辿り着かねばならぬ」

アレクは重力を操作してヘカトンケイルの動きを妨害していた。

「済まない。儂の見通しが甘かった。奴もまたタルタロスと同様に依代を得て活動する世界の事象たる神だ。おそらくあのニュクスは儂が知っているものとは別物だ」

アレクもまたメイと同様に私の不甲斐ない姿に業を煮やして来てくれたのだろうか？

「お前もまた自分の戦いを切り上げて、加勢に来てくれたのか？」

私の疑問にアレクは応えずにひたすら敵の攻撃を妨害してくれる。

メイもそのことには言及することはなく戦いに徹していた。

「奴の身体をよく見ろ」

アレクが言葉に私はヘカトンケイルの身体を目を凝らしてみる。

身体の所々に紫色の光球が埋め込まれている。

あれは確かニュクスがばらまいたものだ。

「ベルゼブル、奴が最も恐れられる理由の一つだ。あれは死体に残された未練、欲望に反応し、巣くい、操る技だ。生前での自我が強いものは力と欲望が増大され、記憶の残照を元に自立が可能だが、想いが遂げられた時には完全な屍になるのだ…

……。

『あははっ…これで…私は…貴方に殺されて…永遠になれる…』

……。

私はティーの最後の姿を思い出す。

彼女の想いとは私に殺されることで永遠となることだった。

「アレク姉さん！」

メイの焦った声で思考が途絶する。

私は周囲を見渡して息を呑んだ。

「驚くことではない。ヘカトンケイルは元々三体いることは分かっていたはずだ」

生者であるヘカトンケイルと二体と死者であるそれが私達を包囲していた。

「「「「「「ギガァハァアアアアアアアアアアッ！」」」」」」

一体でも十二分の化け物だった者が三体もいたとは…。

私が絶望的な気分に染まろうとしていた中でメイとアレクは笑っていた。

何故、絶体絶命の状況に笑っていられるのだ？

「メイ、どうやら儂等の想いを遂げられる好機が巡ってきたみたいだぞ…」

「上等だよ！ロストに手を出す奴はあたいの拳で全て殴り飛ばしてやるさ！」

……。

「何を言っているのだ？メイ、アレク…」

メイとアレクは私の言葉に儚げな笑みを見せ、ぼろぼろになった自分の軍服を破る。

彼女達の胸元にはティーと同様に紫色の光球が埋め込まれていた。

「どうやらガイア様の四高弟は想像以上に強大だったということだ。

情けない話だが…」

アレクは自嘲じみた笑みを見せる。

「あたいは負けたわけではないよ。喧嘩よりも大切な者を見つけただけだ。結果はこうなってしまってけどね…」

私を抱えながらでもメイはヘカトンケイルの猛襲を難なく凌いでいた。

メイの力は明らかに高まっている。

そして、紫の光球が身体に埋め込まれているということは…。

「お前達も既に…」

「儂等はティーのように殺しと愛を等価値にしているわけではない。ティーのことを許せとは言わない。だが、ティーがそなたを愛していたことはどうか覚えて欲しい。そして、儂等のことも…」

「「「「「「「「「「ギャヘアアアアアアアアアッ！」」」」」」」」」」

ヘカトンケイルが無数の首と巨大剣から閃光を放ってくる。

「さよならよ、ロスト…ちゅ」

メイは私の唇に自分のそれを重ね、アレクへと私を投げ飛ばしていく。

「アレク姉さん！後は任せたよ！」

メイはアレクにそう言って両の拳で閃光の嵐を弾いていく。

「承知した！」

アレクは私を抱え込み、ヘカトンケイルの包囲網から突破しようとしていく。

「待て！アレク！このままだとメイが…」

「だからどうした！儂等は既に死んでおるのだ！ふっ、敵がむざむざ好機を与えてくれたのだ。利用せぬ手は無い！」

アレクは問答無用と言わんばかりに私の頭を自分の胸の中へと押しつけていく。

「むごっ！」

「平時ならばそなたの緩い性格に心地よさを感じただろう。だが、今は鋭くなれ。近づく者全てを切り裂くような鋭い刃に…」

顔がアレクの胸に押さえつけられて何も見えない。

……。

『また…喧嘩しような…ロスト…』

……。

脳裏にメイの声が響く。

……。

『メガイラエクスプロージョン』

……。

「むぐっ…メイぃいいいいいいいいっ！」

私はアレクの胸から何とか顔を上げた瞬間に大気を振るわせる爆音と熱風を感じる。

アレクに抱えながらも後ろを振り向くと茸雲が天に向かって立ち上っていた…。

「死んでは喧嘩が出来ないだろうが…」

ティーに続きメイまでもが…。

足や首が千切れかけたキマイラ達が息を付かせる間も無く突進してくる。

「メイが命を賭して切り開いた血路を無駄にするな！そなたはそなたのやるべきことだけを考えろ！」

アレクはホワイトホールを展開し、襲いかかってくるキマイラを弾き飛ばしていく。

「前にも言ったが、死ぬのは年寄りである儂の役目。儂が命に代え

てもそなたを守り抜く！」

群がる怪物共が重力に押しつぶされ、千切れ飛んでいく。

アレクの身体からは死の匂いを感じる。

「第二次聖戦の悲劇を繰り返させぬ！」

ふと頭の中に記憶が流れ込んでいく。

……。

……。

…。

爆音と悲鳴が響く戦場。

第二次聖戦。

同盟軍とエロスの軍勢の凄絶なる戦い。

ティーもメイも必死にエロスの軍勢と戦っている。

エロスの軍勢を勢いづけているのは巨大な黒い悪魔。

黒い悪魔は迸る邪悪な波動で全てを薙ぎ払い、戦場を奈落へと突き落とそうとしてくる。

私とアレクは奈落に落ちないように必死に足掻いていた。

『何度言わせれば分かる！ロスト！あれはもうそなたの知っているアビスではない！全世界全次元を奈落の果てへと突き落とす邪神なのだぞ！』

『それでも私はアビスを殺すことが出来ない…。なんとかアビスを取り戻せないのか！アレク！』

私は必死にアレクに縋り付いていた。

何としてもアビスを助けたいという思いが伝わってくる。

だが、アレクはそんな私の願いに首を横に振る。

『不可能だ。アビスとタルタロスは既に同化している。これ以上にないほど完全にだ。おそらくガイア様でも敵わぬほどに…もはやそなたでしか奴を倒せるものがいないのだ！いい加減に腹を括れ！ロスト！』

『断る！私は何としてもアビスを助け出す！済まない…アレク…これが私なのだ…』

追いすがるアレクの手を振り払い背を向ける私。

『行くな…行かないでくれ…』

私はアレクの声に応えない。

『儂を…私を置いていかないでくれ…ロスト…』

そして、私は黒い悪魔に向かって駆けていった。

『ロスト…ロストぉおおおおおおおっ！』

アレクは追いかけようとするものの敵に群れに呑まれてしまう。

それが第二次聖戦での私とアレクが交わした最後の会話。

私はアビスに殺され、エロス軍の勝利でもって第二次聖戦は幕を閉じたのだった。

……。

……。

…。

「アレク…」

「儂も…もう少しそなたの想いを汲み取るべきだったかもしれぬ…」

彼方に控えているニュクスに近づきつつあった。

私とアレクの周りにはホワイトホールが展開されていて群がる怪物を全て弾き飛ばしている。

「儂等は神だ。神の死は次なる段階にしか過ぎぬ。そなたとの絆が儂等をさらなる高みへと導いてくれるのだ。故に悲しむな…」

アレクは私の眼から零れ落ちる熱い物を掬い取る。

「この戦いはおそらく負けるだろう。だが、せめてニュクスだけは倒すのだ。奴を完全に滅ぼせば、おそらく皆が立ち上がる。次なる戦いへと礎となろう。そのためにも奴を倒し、生き延びるのだ、ロスト！」

アレクは止まり、前方を見据える。

「ニュクス…」

地獄の番犬を従える奈落の眷属。

戦場を真なる絶望へと導く地獄の使者。

「グオオオオオオオオオオッ！」

ケルベロスは咆吼を上げ、空間に歪みが生じてくる。

「馬鹿な…ホワイトホールが…」

アレクが展開させているホワイトホールがケルベロスの咆吼により掻き消されていく。

「奴と全力で戦えば、この世界は滅びてしまう！」

ケルベロスはヘカトンケイルと同様に無数の首から閃光を次々と吐きだしてくる。

『滅べ…』

ニュクスの野太い声が響き、漆黒の波動が撃ち出されていく。

「くっ！」

防御結界を展開してもニュクスが放つ漆黒の波動で掻き消され、ケルベロスの閃光が迫ってくる。

「ロスト殿！これから儂がそなたとニュクス等を疑似世界へと飛ばす！そこで奴を倒すのだ！」

「お前はどうするのだ！アレク！」

ニュクスとケルベロスの猛攻を何とか凌ぎながらもアレクは儚げな笑みを零す。

「これは仕返しだ。儂が今度はそなたの元から離れるのだ…ちゅ」

アレクはメイと同様に私に口付けて、抱擁を解いていく。

「だが、魂はそなたと共にある。儂は…私は貴方の…」

私とニュクス等がいる空間に歪みが生じてくる。

……。

『永遠の存在になる…』

……。

アレクは光の粒となって崩れながらも微笑んでいる。

想いを遂げたから消えようとしているのか！

……。

『生きてくれ…ロスト…』

……。

アレクは光となって散っていく。

「アレク…くっ…」

エリニュスはそれぞれの想いを遂げ、世界へと還っていった。

……。

『私達は貴方の中に還っただけ…悲しまないで…』

『あたい達はいつでもお前の側にいるさ…』

『わたくし達は貴方の永遠になったのです…』

……。

エリニュスの想いが私の中に流れ込んでくる。

「メイ、ティー、アレク、お前達の存在が永遠であり続けるためにも私は生き延びてみせる…」

それが私に出来るお前達へのせめてもの手向けだ…。

私はアレクが残した光でニュクスと決着を付けるための世界へと導かれていく。

……。

……。

…。

光が薄れ、気が付くと私は空に佇んでいた。

夕暮れの空が美しい疑似世界。

聖歌が鳴り響いている。

私の身体から疲労感が抜け、力が漲ってくる。

これは戦の歌なのだろうか？

違う。

これはアレクが私に残した戦の歌だ。

アレクだけではない。

メイの歌も聞こえてくる。

ティーの声が響いてくる。

彼女達の斉唱が夕暮れの世界で響き渡っている。

「「「「「「「「「グガアアアアアアアアアアアアアアアッ」」」」」」」」」

世界に響く歌声を耳障りだと言わんばかりにエルベロスの咆吼が聞こえてくる。

「ニュクス…」

夕日を背にケルベロスに騎乗し、悠然と見据えてくるニュクス。

ロンの仇敵はあり、殺したい怨敵であるニュクス。

だが、ロンは私にそのような形で晴らして欲しいとは思わないだろう。

私は私であるために戦うことこそがロンが望んでいることだ。

ロンの運命は私と共にある。

そして、エリニュスの歌が私が独りではないと語りかけてくれる。

「「「「「「「「「「ギャオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！」」」」」」」」」」

ケルベロスがエリニュスの歌声を掻き消そうと世界が軋む程の咆吼を上げ、ニュクスは世界が震えるほどの威圧感を出してくる。

私は両の拳を構え、魔力を解放していく。

ロンとエリニュスが残した絆を守るために私は戦う。

「ニュクス…貴様を倒す！」

そして、何としても生き延びてみせる。

……。

エリニュスの歌が響く世界で私とニュクスの最終決戦が始まろうとした。

第96話：Sinfonia eroica, composta per f

この歪んだ未来へと時間旅行して初めて対峙する恐怖。

ニュクスとケルベロスの周囲の空間に歪みが生じている。

奴は間違いなくピテスやモロス以上の怪物だ。

「「「「グアアアアアアアアアアアッ！」」」」

無数にあるケルベロスの口から紫色の煙が吐き出されてくる。

身体に痺れが生じてくる。

「毒霧か！」

急いで防御結界を展開させるが、結界が紫色となり、砕かれていく。

ピテスやモロスと同じ防御無視の能力を秘めているようだ。

夕焼けの空が紫色の染まってくる。

『朽ち果てよ』

ニュクスの威圧的な野太い声が響く。

絶対的なる死の恐怖が迫ってくる。

アレク。

メイ。

ティー。

ロン。

私にさらなる勇気を…。

私に生きる力を与え給え…。

「アレルイヤ！」

魔力を開放し、紫色に染まっていく空を再び夕焼けの黄色い空へと還そうとする。

「「「「ギャアアアアアアアアアアアッ！」」」」

ケルベロスが私の魔力に対抗するように紅青黄色等と様々な色の霧を吐き出してくる。

霧は私の魔力を食い尽くそうと広がっていく。

「ぐっ…」

ニュクス以前の番犬に負けるわけにはいかない。

私の相手は畜生ではないのだ。

「はあああああああっ！」

気合いと共に魔力を爆発的に放出し、ケルベロスの霧を押し返していく。

「「「「「「「ギャガァアアアアアアアッ！」」」」」」」

ケルベロスの悲鳴と共に風を切り音が聞こえてくる。

何かが私を切り裂こうとしている。

「ヴィマーナ！」

真紅の巨大槍を生み出し、迫り来る何かを受け止めた。

ケルベロスの前足に伸びた鉤爪だった。

世界を打ち払う威力を誇るヴィマーナとまともにぶつかり合ってもびくともしないとは…。

ケルベロスは空間を掻き混ぜるかのように激しく両の鉤爪を振るっていく。

鉤爪の猛襲に対し、私もまたヴィマーナを縦横無尽に振るって打ち合っていく。

互いが竜巻となってぶつかり合っているかのような凄まじい余波が世界を震わせる。

「うおおおおおおおっ！」

裂帛の気合いと共に私のヴィマーナがケルベロスの左前足を切り落とす。

「「「「ギャガァアアアアアアアアアッ！」」」」

ケルベロスは悲鳴を上げながらも切断された左前足の断面を向け、鮮血を駆けてくる。

身体に血が掛かった瞬間に焼けるような激痛が全身に襲ってきた。

奴の血も毒だというのか！

私の動きが鈍ったことでケルベロスの無数にある真紅の瞳が禍々しく煌めく。

毒で身体の動きが鈍くなっている私にケルベロスの鉤爪が容赦無く迫ってきた。

ヴィマーナを何とか構えて攻撃を受け止めるが、衝撃まで受け止めることが出来ず、私の身体は地上へと叩きつけられる。

「ぐほっ！」

地面に激突し、呻いている私に唾液にまみれたケルベロスの口内が視界に映る。

「食われて…たまるか！」

私は寝転がった姿勢のままで身体を高速回転で地面を移動してケルベロスの牙から逃れていく。

ケルベロスは高速回転で移動している私に追いつこうとしつこく数多の首を伸ばして食らいつこうとしてくる。

このままでは拉致がない。

私は高速回転を止め、ケルベロスの牙が迫り来るのを待つ。

ケルベロスもピテスやモロス、ニュクスと同様にあらゆる防御を無力化する能力は持っている。

だが…。

「ブラックホール！」

ケルベロスの牙が私の身体を噛み砕こうとする瞬間に黒い球体を口内へと出現させる。

「「「「「モガガアオオガアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！」」」」」

悲鳴と共に肉が潰れる音が生々しく響いてくる。

ケルベロスの数多の首が釣られるようにブラックホールへと吸い込まれていく。

さすがに密着した状態で魔法を発動させれば無効化も何も意味が無いだろう。

それに私もまた防御を無効化する能力は体得している。

同じ能力者ならば、効果が相殺されて通常通りに攻撃が通じるものだ。

毒の効果を持つ返り血もブラックホールに吸収されて安全であるという我ながら上手い攻撃だと思う。

……。

このままケルベロスを始末出来ればと思うが、どうやらそうはいかないようだ。

ケルベロスは吸引されている首を鉤爪で切断して、ブラックホールの攻撃範囲から離脱していく。

『邪魔だ。消えろ』

ニュクスが手を振ると展開したブラックホールが硝子が砕け散るようにして消滅していった。

ケルベロスは沢山の首が千切れ、全身は焼けただれ、ますますおぞましい姿になっている。

『さすがはカロンを始末しただけはある。だが、タルタロス様には遠く及ばないだろう。無論、この私にもな…』

「滅べ」や「消えろ」等と刹那的な台詞しか言わなかったニュクスが急に饒舌になる。

『貴様はこのケルベロスの餌となって死ぬのだ。深遠なる夜よ、安

らぎを与えたまえ…』

ニュクスの身体から紫色の煙あるいは雲が放出され、ケルベロスを包んでいく。

一体何が起こるというのだ？

『夜は命に眠りをもたらし、癒しを与える…』

紫色の煙が晴れ、ケルベロスの姿が見えてくる。

「馬鹿な…」

あれほど血塗れで満身創痍だったケルベロスの身体が新品同然の元の身体になっていた。

いや、元に戻ったで済むことではない。

首の数が増え、足の数も六本という明らかに戦闘力が増しただろうという姿になっていたのだ。

『凌いでみるがいい。ガイアに愛されし仔ロストよ…』

「何故、私の名を知っている！」

私は飽くまで黒騎士ロースとして戦場に立っている。

だが、ニュクスは私のことをロストだと看破していた。

『知りたければケルベロスを倒してみろ』

「「「「ガギャアアアアアアアアアアアアアアアアッ！」」」」

ケルベロスの無数の口から火、氷、毒、光、ありとあらゆる属性の魔法が放出されていく。

「くっ！フレイ！」

銀色に光る巨大な光球を放つがケルベロスの全属性が混合した魔法に合えなく呑まれようとしていく。

『この程度なのか？存外大したことはないようだな…』

「ぐぅ…」

ケルベロスの魔力波が私の元へと迫ろうとしてきている。

こんな所で私は負けるわけにはいかない…。

「生き延びるのだ！はあああああああっ！」

私の気合いと共に魔力が爆発的に増大し、瞬く間にケルベロスの魔力を押し返していく。

だが、ケルベロスは尾についている竜の頭部から巨大なる波動を放出させ、巻き返そうとしてくる。

さらに増えた前足の鉤爪から閃光が撃ち出されていく。

『訂正しよう。貴様はなかなかの強者だった。だが、これで終わりだ。アザゼル』

ニュクスが掌を向け、紫色の波動を放ってくる。

ロンの命を散らした技だ。

紫の波動はケルベロスの魔力波と混じり合い、赤紫となって銀色の光球を瞬く間に呑み込み、私に迫ってきた。

私は避ける間もなく赤紫の波動に呑まれていく。

ロンを失った時以上の焼け付く激痛。

私の意識が瞬く間に刈り取られそうになっていく。

ロンに肩代わりしてもらったはずの運命が今度こそと私を捉えたわけなのか…。

済まない…。

ロン…。

……。

……。

……。

……。

…。

『まだ夕暮れです。夜の時間にはまだ早いですよ。ロストさん…』

この声は？

『これはただの残照、記憶の残り香…』

ロン。

『私はネメシスとの契約時に魂の半分を預けていました。だから、私はロンであり、ネメシスです』

ネメシスでありロン。

『はい、私はロストさんと一つになったときにネメシスの力の一部を予め残しました』

私と情事した時の話なのか…。

『そして、私とロンの命はロストさんと繋がりました。永遠の絆を紡ぐことができたのです』

ロンもまたネメシスと共に永遠の存在へと生まれ変わったのだな…。

『はい、私はネメシスと一つとなり、神になりました。全次元全世界を通して唯一無二の存在へと生まれ変わったのです。ですが…』

哀しみの感覚が私の意識に伝わってくる。

『同時に私はどの世界にも存在しえない者となりました…』

つまり私が元の世界に戻ってもロンは存在しないということなのか…。

……。

沈黙でもって答えが返ってくる。

『悲しまないでください。私はロストさんと一つになったのです。ロストさんは感じることが出来るはずです。私を…』

不意に全身に心地よい暖かさを感じてくる。

まるで女に抱き締められているかのような…。

これはロンの…。

『私もロストさんを感じることができます。もう私達は離れることはないのです。だから…』

ロン…。

お前は確かに私の永遠の存在になったのだな…。

ロンの感触が残っている掌から何かが入り込んでいく。

ネメシス。

ロンが降ろした神が私と同化していく。

『私はロストさんと共に運命に抗います！』

全身にロンの想いが駆け巡ってくる。

『さあ、目を覚ましてください！』

私に目覚めよと声が響く。

エリニュスの歌声が聞こえてくる。

なるほど、確かに彼女達は永遠に私と共にいるらしい。

どうやらロンの言う通り、確かに寝る時間には些か早すぎるようだ。

それに寝るのならば、美女の胸に抱かれて眠ることに限る。

戦場の冷たい大地に抱かれて眠るのは御免被るというものだ！

……。

……。

……。

……。

…。

私は溢れる力を解放し、ニュクスの攻撃を弾いていく。

『なるほど、確かに生きる執念は神懸かりだと認めよう。だが、それだけでは私とケルベロスには勝てぬぞ』

ニュクスは私の起死回生の姿に驚いた様子は無い。

それどころか想定範囲だと思っているようだ。

この手の敵はかなり手強いだろう。

ともかく私はもう後戻りは出来ない。

私の命は自分だけのものではなくなったのだからな…。

エリニュスとロンの絆を永遠のものとするためにも必ず生き残る。

大気が震え、大地が揺れていく。

ロン、お前の力を私に…。

「顕現せよ！ネメシス！そして、形と成せ！八岐大蛇！」

雷の雨が降り注ぎ、巨大な八頭竜の姿を成していく。

かつての偉大な王が大成させた法で言っていた。

目には目を…。

歯には歯を…。

獣には獣を！

私は八岐大蛇の頭部に飛び立ち、ケルベロスに騎乗するニュクスに相対する。

『さすがに見せてくれるな。ならば、私も対策を立てねばなるまい…』

ニュクスは屈み込み、ケルベロスの胴体に手を添えてくる。

『アザゼル』

大量の血飛沫が吹き荒れる。

ケルベロスは全身から血を吹き出しながら悲鳴も無く倒れていく。

ニュクスは零距離からケルベロスの身体にアザゼルを放ち、殺したのだ。

「何のつもりだ？」

『すぐに分かる。ベルゼブル』

周囲に大量の紫色の光球が生み出され、ケルベロスの死体へと群がっていく。

まさか、戦闘力を増大させるためにわざと殺したということなのか…。

『ケルベロスは新たなる夜を迎え、生まれ変わるのだ…ふふっ…はははははっ！』

「「「「「「グガガガガギャガアアアアアアアアアアアアアアアッ！」」」」」」

ニュクスの狂笑とケルベロスの悲鳴にも近い咆吼が響き渡っていく。

奴にとって他者の命は武器の一つに過ぎないということなのか…。

ケルベロスは背中から翼を生やし、身体の至る所に足が血飛沫を上げながら生えてくる。

もはや別次元の生物、いや死体と成り果てていた。

『美しいだろう！ケルベロスは死を乗り越えたのだ！貴様の女と同じようにな！ふはははははっ！』

「乗り越えただと？貴様が無理矢理引きずっただけだろう。懸命に生きた果てに死を受け容れた者にこそが永遠の光が照らされるのだ。私とロンは貴様等とは違う」

私はヴィマーナを携え、八頭竜は唸り声を上げていく。

「ロンが遺した力で貴様等を滅ぼす！」

『永遠の光か…。永劫なる奈落の果てこそが我等の辿り着く楽園よ。偉大なるタルタロス様の命により貴様を明け無き夜へと誘ってやろう！』

互いの召喚獣を駆り、空中で激突していく。

「「「「グガアアアアアアアアアッ！」」」」

『『『『シャアアアアアアアアアアッ！』』』』

二匹の獣が互いを貪るように絡み合っていく。

ニュクスはマントを脱ぎ捨て、手に魔力を圧縮させた剣を生み出してくる。

その剣はアーテのヴィーザルと同様に天を貫くほどの大きさを誇り、漆黒の光が煌めいていた。

『マスティア』

私もまたヴィマーナを携え、巨大剣を握るニュクスと睨み合う。

『殺し合いだ！ロスト！』

「死ぬのは貴様だけだ！ニュクス！」

もつれ合う二匹の獣の背中から飛び立ち、さらなる上空で私とニュクスは互いの獲物をぶつけ合っていく。

暫く打ち合っていたが、ニュクスの剣速は息もつかせぬものであり、私はたちまちの内に押され気味になってしまう。

だが、そこは私が戦場で培った運と勘、そして、柔軟体操宜しくの回避術で何とか凌いでいく。

『なかなかの剣捌きだが、正規の剣術ではないな。それで私に勝とうとは片腹痛いわ！』

ニュクスの渾身の一撃を辛うじて受け止めるが、剣圧により、身体の所々に裂傷が刻まれてしまう。

確かに私は剣などという大層な武器は子供の遊び程度しか使っていない。

それどころか戦いすらも喧嘩の延長線上でしか捉えていないかもしれない。

だが、それでも私が今まで生き延びれたのは喧嘩で培った経験と腕っ節のお陰だった。

私にとって喧嘩とは何でもありの総合格闘術であり、最強無比の我流なのだ。

喧嘩番長としての私の力を貴様に見せてやるぞ。

ニュクスの一撃を弾き、ヴィマーナを振り上げる。

『馬鹿め！隙だらけだ！』

ニュクスはヴィマーナを振り上げて、がら空きになった私の胸元に向かって剣先を向けていく。

私はそのままヴィマーナを頭上へと放り投げ、ニュクスの剣先を避けて、懐へと駆ける。

『お見通しだ。夜よ！来たれ！』

「こちらも想定内だ。世の光！」

純白の光と漆黒の光が激突し、全身に打ち付けるような爆風が巻き起こっていく。

私は爆風にもめげずに駆け抜けていく。

喧嘩の神髄は肉を切らせて骨を断つ。

黄金の拳よ、唸れ！

光が晴れ、ニュクスの紫色の兜が視界に映っていく。

私の殴る的が見えてきた。

「喰らえっ！ニュクス！」

『ぐぼぁあああっ！』

拳が紫色の兜にめり込み、砕けていく。

ニュクスの身体が仰け反る。

見事に会心の一撃を食らわせたぞ。

『ぐっ…あはは…ははは…』

ニュクスは殴られながらも笑っていた。

砕けた兜の破片が散る中でニュクスの素顔が見えてくる。

鮮やかな銀髪が靡かせ、躑躅色の口紅を塗った唇。

……。

「馬鹿な…」

私は身体を硬直させ、目の前の光景に唖然とする。

アレクは言っていた。

ニュクスもまたタルタロスと同様に事象の存在で依代を持つことで活動していると…。

そして、ニュクスは新たな依代を手に入れたことでピテスやモロス以上の力を持ったのだと…。

その新たな依代とは…。

……。

「久しぶりね…ロスト…」

……。

あれほど仕返ししたいと思っていた…。

いつか逆襲してやると思っていた…。

だが、こんな形で決着を付けたいとは思わなかった…。

恐怖の女将軍。

アイリウス・アストレイリア。

「だけど、私は久しぶりとは思わない。懐かしいとも思えない。なぜならば、私は貴方を思い続けて待っていたから…」

「アイリ…」

アイリは私の驚いている顔を見て微笑を浮かべる。

「なんて顔をしているの？貴方は英雄なのだから…」

『英雄はお伽噺の者でしかない。馬鹿な夢想に浸った女だ…』

アイリとニュクスの声が別々に聞こえてくる。

兜を脱いだ影響なのか、ニュクスだろうと思う声もまたアイリの声質と同じだった。

だが、アイリが口を動かしていない時にもニュクスの声が聞こえてくる。

『くっくっくっ…珍しいのか？ならば私の本当の姿を見せてやろう…』

ニュクスはいや、アイリは鎧を脱ぎ、胸元の服を破っていく。

「見なさい、ロスト。私は世界を滅ぼす夜の魔女になってしまった」

アイリの諦観に満ちた声が響く中、私はニュクスの正体を目にしてしまった。

……。

アイリの深い胸の谷間に贓物にも似たものが根付いて蠢いていた。

贓物の中心が割れ、キュクロプスのような目玉が開かれていく。

『私がニュクスだ。そして、今はこのアイリウス・アストレイリアという個を依代としている…』

「そして、私は夜の魔女として世界を明け無き夜の中へと閉じこめようとしている…」

ニュクスの威圧的な声とアイリの儚げな声の二重唱が響き渡っていく。

ニュクスはアイリの心臓のように蠢き、彼女を自分の肉体のように操っている。

「私は貴方を待ち望んでいた。魔王に呪いをかけられ魔女として堕ちた私を滅ぼしてくれる英雄を…」

『ふはははっ…英雄も勇者も救世主も存在しない。魔女に囚われて眠りにつく姫を助ける王子などお伽噺だけの存在だ。全ては永遠の

闇夜へと堕ちていくのみ…』

アイリの悲痛な願いを嘲笑うニュクス。

「アイリ！」

ニュクスが私のことを知っていたのはアイリの身体から記憶を読みとっていたからなのか…。

アイリはエルと違い、自分の意識が遺されている。

『この娘は実に気丈な女だ。自分の部下だった者を自らの手で殺させたにも関わらず泣き言一つ言おうとしない。だが、繋がれている私には分かる。心の奥底にどうしようもないほどの絶望に苛まれていることをな。アパテーの言う通り、この者には最適の絶望だったわけだ。ふはははははははっ！』

胸に奇怪で醜悪な化け物を埋め込まれ、意識を遺されたまま操られていたのだ。

意識を保ったままで見知った相手を殺させていたのか…。

「またしてもアパテーなのか…。エリーと同じようにお前もアパテーに身体を弄くられたというのか！」

「そう…あの子は自分の望みを叶えたというのね。だったら、次は私の番…。ロスト…私を倒しなさい」

アイリは胸に化け物を埋め込まれても尚、いつも通りに傲慢に命令を下してくる。

どこまでお前はアイリで居続けられるのだ。

あれほどの絶望を味わいながらも…。

「ロスト…覚えている？私が貴方に人であり続けなさいと言ったことを…。そして、一握りの者のための英雄であるか万人のための英雄、どちらでも構わないと…けど…」

「失望させるなと言うことか…」

私の答えにアイリは傲慢な笑みを浮かべる。

「そうよ。私はもう人には戻れない。そして、失ったものは二度と返らない。だけど、このままだとより多くの命が永遠の夜へと囚われてしまう。だから…」

『ははははっ…この者に出来はしない！タルタロス様の時と同様に嘆くだけ嘆き、殺されるのだ。アイリウス、貴様の手によってな…ふはははははっ！』

アイリの切なる願いを嘲笑うニュクス。

「黙れ…」

『ははははっ！貴様の求める英雄は幻想だ！現実には誰も守ることが出来ず、消えていくだけの無力な存在なのだ！ふはははははっ！』

拳を握りしめる。

「黙れぇえええええええええっ！」

あらん限りの声を振り絞り、ニュクスの嘲笑を掻き消していく。

もう私にはアイリの命が救えない。

ならば私に出来ることはただ一つ。

アイリをアイリのままで死なせること。

そのためには…。

「私こそがアイリウス・アストレイリアが待ち望んだ英雄ロストだ！魔王にかけられた魔女に堕ちていった女を救うべく、貴様を殺す！」

『救うだと？私はアイリウスの心臓と一つになっている。私を殺せばアイリウスは死ぬ。貴様には救えない。誰も彼も何もかも。哀れなる英雄ロスト…貴様に夜の祝福を与えてやろう！』

ニュクスは漆黒の巨大剣を構えてくる。

「私からの命令よ！私を…ニュクスを倒しなさい！ロスト隊長！」

「はっ！アイリ将軍閣下！」

私は涙を拭い、ヴィマーナを構える。

そして、私のヴィマーナとニュクスのマスティアが交差していく。

私は初めてアイリと出合った頃を思い出す。

……。

『貴方は自分の価値が分かってないのよ…』

……。

私の最大の天敵であり…。

……。

『貴方は自分が思っていたよりも凄いのよ，ロスト…』

……。

最高の上司だった。

……。

『貴方ならやり遂げられるわ。私は知っている。あの時，私は敵将に討ち取られようとしていたわ。だけど，貴方が颯爽と飛び込んでいき，瞬く間に敵将の首を討ち取った姿を…』

……。

だから、私はアイリに今こそ見せる。

呪いをかけられた魔女の魂を見事に救い出す英雄の姿を…。

それがせめてもの私の手向けだ！

「うおおおおおおおおおっ！」

縦横無尽に振るってくるニュクスのマスティアを私は渾身の一撃で弾き飛ばしていく。

『ぐっ…何だ！この気迫は…馬鹿な！有り得ない！』

「これがアイリが待望した英雄の力だ！魔王ニュクス！魔女は返してもらうぞ！」

私の気迫に呼応するかのように八頭竜の牙がケルベロスを引き裂いていく。

『『『『キシャアアアアアアアアアアッ！』』』』

「「「「「ギャガァアアアアアアアアアッ！」」」」」

ロンも私の想いに応えて戦っている。

私の繰り出す拳がニュクスの贓物へとめり込む。

『ぐほっ…私を…本気で…殺すのか…超越者である私を…』

「構わないで！私を殺すのよ！ロスト！」

ニュクスは超越者と言った。

超越者とは全次元全世界において唯一無二の存在。

ここでニュクスを殺すことはすなわち…。

『馬鹿め！』

「うぐっ！」

動きが止まった私の首をニュクスの腕が鷲づかみしてくる。

『ふはははははっ！やはり貴様は英雄ではない！闇夜の獄炎に焼かれろ！ベリアル！』

漆黒の獄炎が私の身体を包み込んでいく。

「あああああああああああああっ！」

「ロストぉおおおおおおおおっ！」

私の絶叫とアイリの悲鳴が重なり合っていく。

駄目だ…。

ニュクスを倒せば、アイリを永遠に失うことになってしまう。

もう二度と彼女の横暴な振る舞いを見ることが出来なくなる。

出来ない…。

私にはアイリを殺すことが…。

『あはははははっ！死ねっ！死ねぇえええええっ！』

やはりアビスの時と同じように私は…。

不意に別の衝撃が襲い、私の身体が弾き飛ばされていく。

『ぐっ…邪魔をするのか！たかが蛇の分際で！』

私を弾き飛ばしたのはケルベロスを羽交い締めにした八頭竜だった。

「ロン…お前は…」

ロンの笑顔が不意に脳裏に浮かんでくる。

お前は私にまだ諦めるなと言うのか…。

『足止めすらも出来ないのか！役立たずの番犬め！纏めて燃え尽きろ！ベリアル！』

ニュクスから放たれた漆黒の炎が八頭竜が絡みついているケルベロスごと焼き尽くしていく。

「ロォオオオオオオオオオオン！」

……。

『アイリさんを救ってください、ロストさん…』

……。

ロンの声が響いてくる。

獄炎に焼かれながらも八頭竜の澄んだ瞳が私に向けられている。

『ははははははっ！何もかも全て夜に還るがいい！永遠にな！ルシファー！』

ニュクスの両手からアザゼルよりもさらに極大の紫の波動が放たれていく。

言葉通り、全てを永遠の夜へと還す光。

疑似世界ごと消し飛ばそうとしているのだ。

エリニュスの歌が最高潮へと達している。

お前達も私に最後まで抗えというのか…。

「お願い…私を殺して…ロスト…」

「アイリッ！うぬぅうううううっ！」

私は迫り来る紫の波動を一身に受けながらニュクスの元へと駆け抜けていく。

『馬鹿な！そのまま突っ込んでくるだと！』

「うおおおおおおおおおっ！」

全身が言葉では表現できないほどの激痛を感じた。

それでも私はこれ以上に耐え難い痛みを知っている。

『ぐぅ…寄るな！来るなぁあああああっ！』

視界の紫がさらに濃くなっていく。

だが、私はそれでも突き進む。

その先にはアイリが居るのだから…。

「来て…ロスト…私の愛しい英雄殿…」

アイリが私を呼んでいる。

黄金の拳よ、唸れ…。

アイリを…。

「アイリィイイイイイイイイイイッ！」

『うあああああああああああああっ！』

……。

……。

……。

……。

……。

……。

…。

「遅かったわよ…ロスト…私を散々待たせるなんて…」

「済まない…アイリ…」

私の拳はニュクスの臓物ごとアイリを貫いていた。

「ふっ…まあいいわ…特別に許します…」

アイリは凱旋した勇者を労うように抱き締めてくれる。

ニュクスの死と共にケルベロスは灰となって散り、八頭竜も役目を終えたことで消えていった。

そして、アイリもまた…。

「ありがとう…ロスト。魔王は滅び、魔女の呪いは解けた。貴方は紛れもなく英雄よ…」

「馬鹿な…私はお前を救うことが出来なかった…何が英雄なものか…」

私が本当に英雄ならば、エリニュスもロンも死なずに済んだはずだ。

英雄はニュクスの言う通り、結局はお伽噺の存在でしかなかったのだ。

「それは違うわ…貴方は私を救ってくれたのよ…私が私のままでいられたのだから…だから…貴方は英雄なの…私にとっては誰よりも…ごほっ！」

「アイリ！」

アイリの身体が冷たくなっていく。

エリニュスとロンに続き、アイリまでが…。

私の目から零れている涙をアイリは拭ってくる。

「その涙を…忘れないで…貴方は…英雄である前に…人でもあるのだから…例え…何者にもなろうとも…人の心を忘れては駄目よ…」

「アイリ…」

アイリは今まで見せたことが無い柔らかな笑みを浮かべていた。

「私は貴方が英雄であり続ける限り…永遠に側に居続ける…だから…涙を拭って…戦いなさい…ロスト…貴方が貴方でありつづけるために…私からの最後の命令よ…承りなさい…」

「承った…うぅ…」

アイリは私の頭を抱き寄せて口付けする。

「ちゅぱ…宜しい…それでこそ…私の…愛しい…えい…ゆう…ど…の…」

頭の中に何かが流れ込んでくる。

……。

……。

…。

『アイリ…貴方の父さんは立派な英雄だったのよ…いつか貴方にとっての英雄と言える人が見つかるといいわね…』

……。

『母上、英雄とは一体何者なのですか？』

……。

『英雄は人によって捉え方が違うけど…そうね、私の心を救ってくれた人かしら…それがアイリの父さんだったわけよ…』

……。

『心を救う？』

……。

『そう、簡単に言えるけど…難しいことなのよ。人の心は千差万別…何を求めているのかは人それぞれ。困難を乗り越えて人々に希望を与えることもそう…これも英雄に違いないわ。貴方の心が求める英雄は誰かしらね？』

……。

『私の心が求める英雄…私にも私だけの英雄がいるのですか？』

……。

『きっと見つかるわ。貴方の心が求める英雄にね…愛しいアイリ…』

……。

『私は必ず見つけてみせる。私だけの英雄を…私の心が求める英雄を…』

……。

……。

…。

これはアイリの記憶。

私はアイリが求める英雄でいられたのだろうか…。

今となっては確かめる術は無かった。

もうアイリは私の腕の中で眠ってしまったのだから…。

私はアイリを抱き寄せて地上へと降りる。

「アイリ…」

お前こそが私の心が求める英雄だったのだ…。

……。

私はアイリを地面に横たわらせ、何も無い場所に視線を向ける。

「エレボス、何時まで覗き見しているつもりだ？」

何もない空間がまるで紙が剥がれるように捲れていく。

その中に現れたのは真紅を鎧を身に纏った者。

エレボス。

いや…。

「エル・パラディスム。お前の隠れん坊は私にはお見通しだ」

エレボスは兜を脱ぎ捨てて素顔を晒してくる。

……。

肩までに切り揃えた暗褐色の髪。

摩訶不思議で美しき金目銀目。

雪のように白い肌。

血のように紅い猩々緋の口紅。

……。

ヒュプノスに洗脳された時と同様に感情が抜け落ちた冷徹なる目。

真なる暗殺者の目を私に向けている。

世界的暗殺集団パラディスムでレテシアに次ぐ実力者と謳われた暗殺者。

私の運命を変えた双子の片割れ。

エル・パラディスム。

「そう言えばお前と最初に出合った時も隠れん坊を見破ったことがあったな…」

私の世間話にエルは何も応えなかった。

……。

やはり彼女とも戦わねばならないのか…。

『ひっひっひっ…独り占めはいけないねえ…エレボス…』

突如、上空から声が響き渡ってくる。

私は声が聞こえた方向へと空を見上げる。

純白の翼を羽ばたかせ、黄金の髪を靡かせている美女が浮遊していた。

黄蘗色の唇を歪め、白の法衣を身に纏い、手にはラッパを持っており、背丈は私の三倍はありそうな絶世の美女だった。

「私はティターン神軍の一神、審判者テミスさ。ロストよ。お前の罪は私達ティターン神軍が裁いてやろうぞ！」

テミスと名乗った美女はラッパを天に向かって高々と響かせる。

彼女のラッパの音に呼応するように空間が歪み始め、次々と目を見張るような美女達が上空に出現してくる。

現れた美女の数は十一。

テミスを含めれば十二にも及ぶ。

いずれも私よりも遙かに大きい体格を誇っていた。

体格だけではない。

戦闘力もまた凄まじく大きいものだ。

一人、いや、一神がもしかするとニュクスと同等の力を持っているかもしれない。

……。

私は目の前の光景を見て、思わず含み笑いをしてしまう。

戦場に出て、あれほど待望していた美女軍団と遂に相見えることが出来たのだ。

惜しむべきは仲間を失い、満身創痍という最も有り難くない状況で実現してしまったわけだが…。

全く、つくづく人生ままならないものだな…。

……。

私は背後に横たわっているアイリに火の魔法を掛ける。

アイリ。

私は私なりの英雄道を歩んでいく。

だから、私の中で永遠に見ていてくれ。

私の英雄道とは最後まで諦めずに生き延び、光明を得ることだ。

例え、どれほど絶望的な状況になろうとも…。

第97話：Tr?umerei

上空にはティターン神軍と名乗る美女軍団が浮遊している。

さて、どうするべきか…。

先ほどのニュクスとの戦いで私は満身創痍でかつ魔力もかなり枯渇しているという分の悪い状態だ。

対して美女軍団は一神一神がおそらくニュクスに匹敵するのではないかという戦闘力を誇っている。

薬漬けになっていた狂戦士共とは違い、理性的には見えるが、今の状況では全く有り難くない敵だ。

「さて、円滑な対話を試みるための基本は自己紹介だ。私はティターン神軍の隊長であり、今回の侵攻軍の指揮官の役割を担うクロノスという。以後お見知り置きを…」

空中で慇懃無礼に一礼するのは肩まで伸ばした白銀の髪に灰色の法衣の上に銀色の鎧を身に纏った者。

背丈は私の四倍ほどあり、竜胆色の口紅に宝石のような碧眼の瞳と病的なまでに純白の肌を持つ美女。

満身創痍の私を侮っているのか、戦場で悠長に「基本は自己紹介」と言ってる様が嫌みに思えてくる。

それにしてもまさかニュクスではなくティターン神軍の隊長がエロ

ス軍の指揮官だったとはな…。

「私はオケアノスよ。この顔には見覚えがあるでしょう？」

クロノスの次に自己紹介したのはオケアノスと名乗る美女。

確かに嫌というほどに見覚えがある顔だ。

なぜならば、エリーが引き連れていた三体のオケアニスと瓜二つの容姿だからだ。

「お前があの女兵士達の統括者だというのか？」

「ええ、そうよ。私を含めて総勢三千一体が貴方のお世話をすることになるから宜しくね」

さすがに三千一体もの彼女達からお世話されでもすれば、私はあっという間に骨と皮と成り果ててしまう。

オケアノスはあの無表情だったオケアニスとは打って変わってかなり明るい性格のようだ。

「考えておく…」

だが、私は誤魔化されない。

笑顔の中で奴の瞳は獲物を狙う獰猛な肉食動物そのものの目つきだ。

道化を演じてるガイアと似たような雰囲気を漂わせてる。

うかつに触れると火傷する美女だろう。

「あたしはテテュス。ふふっ…あんたはさぞ良い悲鳴で鳴いてくれそうね…」

三番目に自己紹介したのはテテュスと名乗るピテスに似た美少女だった。

ただし、背丈は私の二倍はあり、容姿はピテスが成長した姿で表情があどけないことから美少女だと思わせられた。

体格以外では基本造形は同じだが、紅紫色の口紅を塗り、髪の色は黄金で逆に瞳は銀色の光を放っていた。

私よりも背丈があると言っても、ティターンの中では比較的小柄だと言える。

服装は血を思わせる真紅の法衣を身の纏っていた。

「あんたは私が必ず屈服させてみせるわ。楽しみにしておきなさいな…ふふっ…」

彼女の獰猛の笑みを見て背筋が震えてきた。

台詞の端々から相手をいたぶることに喜びを覚える変態美女といったところか…。

「私はテイア」

眼鏡をかけ、茫洋とした瞳で私を観察しているのはテイアと名乗る、

如何にも才媛と思わせる美女。

背丈は私よりも三倍ほどあり、青紫の髪を肩までに切り揃え、藤紫色の口紅を塗り、明るいオケアノスとは対照的に薄暗い雰囲気を漂わせてた。

「アパテーは言っていた。貴方は良質な実験体になりそうだと…」

感情の伺えない声で背筋が凍るような内容を言ってくる。

奴はアパテーと繋がりがあるのか…。

「安心して。私はアパテーのように身体を解体する趣味は持ち合わせていない。貴重な実験体は永続的に愛でるものだから。長持ちさせるためにもね…」

口調はピテスとモロスに似ているが、中身も負けず劣らず似ているような印象だ。

テテュスとは別の意味で恐ろしい美女なのかもしれない。

「僕はレアだよ。宜しくね。ロストちゃん」

……。

ロストちゃん…。

未だかつて呼ばれたことがない呼称だ。

私をロストちゃん呼ばわりしたのはテテュスとピテスのような美少

女と言ってもいい容姿だ。

やはり私よりも二倍はある背丈で純白の法衣に紅の鮮やかな髪を靡かせ、青い瞳に深紅色の口紅を煌めかせ、天真爛漫に微笑んでくる美少女。

「ロストちゃんとは良い友達になれそうな感じがするね…」

だが、その目に映るのはアレクと同等の老成とした眼差しが垣間見えてくる。

オケアノスと同様に無邪気な笑顔に騙されないようにしなければならない。

「儂はイアペトスじゃ。お主は儂等の玩具になる定めじゃな。大人しく諦めるが良かろう…」

私よりも四倍の背丈とアレクと同様に如何にも老獪を思わせる口調の成熟した美女。

背中まで伸ばした灰色の髪に滅紫色の口紅を塗り、純白の法衣の上に無骨な白銀の鎧を纏った歴戦の女戦士と思わせる容姿だった。

「お主だったら儂の永劫とも言える退屈な日々に刺激をもたらせてくれるかもしれんからのう…」

彼女の口振りは老後の楽しみとして私を弄ぶことを所望しているように思わせた。

私としては弄ばれることは死んでも御免被るがな…。

「私はムネモシュネ。ねえ、坊や。私にその身を捧げれば、醒めること無き永遠の楽園を夢見させてあげるわよ…」

私を誘うように手を差し伸べるのは藍緑色の髪を靡かせ、瑠璃色の唇で誘惑の言葉を紡ぐ美女。

背丈は三倍ほどあり、純白の法衣に青銅の鎧を身に包む、妖艶なる女戦士。

色気においてはティターンで一番と思わせる風貌だった。

出合う場所が特殊でなかったら喜んでこの身を捧げていたかもしれない。

「我はポイベなり。汝の血肉を我に捧げよ」

いきなり危ないことを言って自己紹介したのはボイベと名乗る胡散臭い美女。

藍色の短髪に盲目なのか癖なのか目を閉じた状態でいて、藍紫色の唇から静謐なる美声を響き渡らせていた。

背丈は私の四倍だが、それ以上の背丈を思わせる程の威圧感を放っている。

彼女の服装だけは漆黒の法衣であり、真紅の鎧を着飾っていた。

「汝の血肉はさぞ美味であろうな…ふふっ…」

閉じていた目が開き、微笑を浮かべてくるポイベ。

紫色の光を放つ瞳は全てを見据え、世界を見渡す力を持っていると思わせるほどの神々しさを放っていた。

何となくだが、私にとって一番苦手な種類の美女だと思ってしまった。

「俺はヒュペリオン。前から壊しても壊れない玩具が欲しかったんだ。お前は俺の目に叶いそうな予感をさせるな…くっくっくっ…」

背丈は私の五倍、おそらくティターンで一番の大女だろう。

それどころか巨人と言ってもいい体格を誇る怪物女だ。

印象としてはタナトスがさらに凶暴化したような攻撃的な雰囲気を秘めた獰猛な美女と言ったところか…。

ヒュペリオンの肌は褐色でいて灰色の髪を靡かせ、臙脂色の唇という野性的な趣がある容姿だった。

彼女は漆黒の法衣に青色の鎧に身を包んだ出で立ちで猛将とも言うべき威圧感を放っていた。

「私はコイオスというもの…」

コイオスと名乗った美女は青の法衣に氷や結晶を思わせるような透明感のある水色の鎧を身に固めていた。

背丈は私の三倍で寒色系の青の髪に水色の口紅、全体的に寒々とし

た色を基調とした美女だった。

彼女の水色の瞳で私を通して何を見ているのだろうか…。

何を考えているのかが想像出来ない正体不明の女だった。

「彼女はクレイオス…」

コイオスはそのまま隣にいる美女の自己紹介を代理していた。

コイオスに自己紹介されたクレイオスという美女は生きた彫像とも言うべき微動だもしない状態だった。

純白の法衣に白の鎧を纏わせ、白髪に銀灰色の口紅と全てを白く染め上げているような存在感が無い美女。

いや、存在感の無さが存在感を際立たせているようなはっきりしない雰囲気を漂わせていた。

背丈はやはり私よりも三倍以上の大きさと言ったところか…。

「ひっひっひっ…そして、私が審判者テミス。もう知ってるよね…」

一番手に登場したラッパ吹きの美女テミス。

意地悪な老婆を思わせる笑いを響かせ、不気味な雰囲気を漂わせてる美女だ。

……。

ようやくティターン神軍の自己紹介が終わったようだ。

いずれも私よりも大きく、体格に見合った胸が強調されている。

……。

この際、彼女達の性格は考えないこととして、本当に残念だ。

戦場で出会ってなければ、どれほど狂喜乱舞していたことか…。

「丁寧な挨拶痛み入る。それで私をどうするつもりだ？一対多数で嬲り殺しにするつもりなのか？」

そうだとすれば、もはや万事休すだろう。

さすがにニュクス並の実力者を十体以上も相手にするのは過労死するほどの重労働となってしまう。

どんな生き恥を晒しても生き延びることこそが私の生き様。

アイリへの誓いを守るためにも私は何としても生き延びなければならないのだ。

だが、私が生き延びても反乱軍が全滅してしまってはエリニュスとロンに余りにも申し訳が立たない。

いったいどうすればいいのか？

「ふふっ…それも面白いが、私達は君に大変興味を抱いているのだよ。何しろタルタロスの腹心であるニュクスを打ち倒したのだから

ね」

私の思惑を見透かすようにクロノスは意地悪げに笑みを浮かべてくる。

「私に何を望んでいる？」

あの顔は私に何かをさせるつもりなのだろう。

「ほほう、さすがに話が早いね。そう、私達は君に娯楽を求めているのだよ」

クロノスは私のいる地上へと降り立ち、物色するようにして私を見つめてくる。

私は思わず、後ずさろうとしてしまった。

ティターン神軍の女はとにかく身体が大きい。

クロノスの身体は少なくとも私の背丈の四倍ほどある。

私の頭がクロノスの腰にすら届いていないのだ。

さらに脚や腕が私の胴体以上の大きさをある。

胸は…。

……。

とりあえず彼女達に呑まれないように虚勢でも貼らなければ…。

「娯楽だと？遊戯でもするつもりなのか？」

「君は賢いね。そうだ、私達は君と遊びたいのだよ。危険で刺激的な遊びをね…」

人生で生まれて初めて賢いと呼ばれてしまった。

このような状況でなければ感動に打ち震えていたかもしれない。

だが、褒め称えてくれた相手はエロス軍の主力部隊の隊長だ。

「ふふっ…もしかしてこちらの遊びを期待しているのかね？」

クロノスの巨大な指が私の腕を掴み、宙に吊り上げられていく。

私の身体に浮遊する魔法をかけたのか、風船のように私の身体が浮き上がる。

そして、クロノスは掴んだ私の腕を自らの胸へと導いていく。

私の顔よりも大きい胸に私の手が手首までめり込んでいった。

これがティターンの巨乳だというのか…。

一瞬、今居る場所が戦場だということを忘れさせてしまうほどの感触に酔ってしまう。

不味い。

これはクロノスの策略なのだ。

私を神の色香で籠絡させようと思っているが、そうはいかない。

ここで陥落してしまえば、エリニュスとロン、それに先ほど永眠したアイリに顔向けできない。

非常に名残惜しいが、私はクロノスの手を振り払おうとする。

だが、クロノスの胸に腕が嵌ってしまったのか、抜け出せなくなってしまった。

「どうやら私の胸を気に入ったようだね。どうだろうか？君が良ければ私達の遊びに付き合ってくれないかな？引き替えに好条件を与えてもいいのだがな…」

クロノスの胸を気に入ってしまったのは確かだが、だからといって離したくないのではない。

離れないだけだという反論するのも空しいので腕をクロノスの胸に埋めたまま話を進めることにする。

「好条件とは何だ？」

「私達の遊びに付き合ってくれたら、一旦は我が軍を撤退させることを約束しよう。どうだ、破格と言ってもいい程の好条件だろう」

確かに破格と言っても過言では無い好条件だった。

だが、美味しい話には必ず何らかの代償があるはずだ。

「ただし、君は私達と共に来てもらうことにする。本来ならば、このまま有無とは言わさず反乱軍を攻め滅ぼしても仕方がない戦況なのだからね。君一人で犠牲がこれ以上増えることはないのだよ。安いものだろう？」

「断ればどうなる？」

クロノスは私の問いを予想していたのか邪悪な笑みを見せ、後ろで控えていたエレボスもといエルに視線を向ける。

「断れば、エレボスに指揮権を委ね、好きなように攻めさせるまでだ。エレボスもまたニュクスと同様にタルタロスの腹心だからな。容赦無く攻め滅ぼすだろう」

クロノスは腕を振るうことで空間に反乱軍がエロス軍の蹂躙されかけている映像が映し出される。

……。

ギガンテス兵とキュクロプス兵の進撃で反乱軍の重火器は玩具のように弾かれ、魔法の類も目眩まし程度にしか通用していない状態だった。

『くっ！何としても食い止めるのです！御亭主様はきっと生きているはず！だから、決して最後まで諦めないで！』

アイテルが血塗れになりながらもキュクロプス兵を薙ぎ払いながら兵士等に檄を飛ばしている様子が見えた。

最高戦力であるエリニュスを失い、第一次聖戦の英雄であるアイテル一人が奮闘したところでそう長くは持たない。

エロス軍にはニュクスを失っただけでエレボス、エルが控えており、ガイアの四高弟や今目の前にいるティターン神軍もいる。

私も今ここでクロノスの胸に囚われてしまっている状態である。

余りにも圧倒的な戦力差だ。

……。

私は映像からクロノスへと視線を移し、答えを出すことにする。

「分かった。提案を受け容れる。それで遊戯の内容とは何だ？」

口惜しいがここは素直に提案を受けれた方がいいだろう。

どの道、このままでは反乱軍は滅ぼされてしまう。

「ふふっ、エリニュスを従えていたのならば、私達のことは聞いているはずだ。当ててみてくれ」

クロノスは私の手を自分の胸に押しつけながら聞いてくる。

……。

『簡単なことだ。奴らは戦う場所が欲しかったのだ。ガイア様曰く自分の実力だけでなく歪んだ感情まで引き継いでいる最悪の戦闘狂集団らしい』

……。

アレクは確かティターン神軍のことをそう言っていたことを思い出す。

そして、私は最低最悪の軍隊だと評したのだった。

「私と戦うことが望みなのか？」

私の問いにクロノスは正解と言わんばかりに笑顔を浮かべ、抱き寄せてくる。

私の身体がクロノスの胸へとめり込んでいく。

「ぐっ…」

思わず呻き声を上げそうになったのを何とか呑み込んで耐える。

「そうだ。私達は君との刺激的な戦闘を望んでいるのだよ。真神戦争を終えて以来、私達は退屈な年月を過ごしてきた。それでガイア様を裏切ってエロスとタルタロスに付いたのだが、あの時ほどの刺激を得るには及ばなかったよ。その点、君ならば私達を満足させてもらえそうだと思ったのだ」

「な…ならば…ガイアやタルタロス…あるいはエロスに喧嘩を仕掛ければいいだろう」

私の問いにクロノスは強めに私を胸に押しつけていく。

全身の骨が軋んでいく。

私の身体がクロノスの胸の中で圧殺されてしまいそうな程の力だった。

これは不正解を唱えた私への報復のつもりなのか…。

「不平等で一方通行の戦いは面白くない。私達は身の程を弁えているからね。戦いは互いのやり取りが平等に行われることで楽しみが増すものだよ。会話と同じさ。対等な相手と言葉のやり取りをする方が楽しいとは思わないかね？」

「むぐぅ…うああっ…」

クロノスは私の苦しんでいる姿に恍惚とした笑みを零してくる。

彼女といい、やはりティターン神軍はガイアの歪んだ性癖を受け継いでいるようだ。

口では対等や平等を言っているが、心の底では微塵も思っていないだろう。

飽くまで自分が見下した形で存在するもの全てを等しく遊び道具だとしか見ていない。

要するに神である自分以外は全て平等だということだ。

「わ…私が…大人しく貴様等の遊び道具になるとは思わないことだ！」

私は頭を何とかクロノスの胸から引きはがして、啖呵を切る。
美女に足蹴にされることは我慢できても、見下されるのは我慢ならない。

「ほほう、君はこれだけの状況に陥りながらも抗うつもりなのかね。ふふっ…ははははっ！君の心意気には感服するよ。そして、ますます遊び甲斐がある相手だと認識を変えるとしよう。さて、まずは君が万全の状態で私達の遊びに付き合えるようにしてあげようか。クレイオス、彼を癒して差し上げろ」

クロノスの呼びかけに彫像のように動かなかったクレイオスが地上へと降り立ってくる。

クレイオスは私を胸に押しつけているクロノスに向かって、手を差し出してくる。

「彼女は神の癒し手と私達の間では呼んでいる。実際、治癒術ではガイア様ですらも及ばない程の腕前だからじっくりと堪能するといい。心地良さも保証しよう」

クロノスは自分の胸に埋まっている私を掴み上げ、クレイオスの差し出している手に置いていく。

私はクレイオスに掴み上げられて、正面から見据えることになる。

やはり彼女もまた巨大だった。

巨体はギガンテスやキュクロプス等で慣れたつもりだったが、美女の巨体の迫力は次元が違う。

視界に映る圧倒的な美の迫力に思わず平伏してしまいそうなほどの威光が放たれている。

「ロスト…」

クレイオスが初めて声を発してきた。

外見に裏切らず、聞くだけで震えそうな氷の如き冷たい美声だ。

「僕は君を回復させる。そのまま楽にしていて…んちゅ」

クレイオスの巨大な唇が私の顔を覆い尽くしていく。

目が彼女の唾液で染みていく。

「んちゅちゅぱ」

頬も鼻も全て彼女の唇に丸ごと包まれ、戦場に居ることを忘れさせるほどの心地の良さだった。

彼女の唇から魔力が私の身体へと流れ込み、疲労感が取れ、魔力が瞬く間に回復していく。

傷だけでなく、枯渇した魔力も疲労感も同時に回復させるとは、常識では考えられない治癒術だった。

魔力と体力は別々に回復させるものだということが常識だったが、クレイオスの治癒術はその常識を意図も容易く覆す代物だ。

それは確かに神の癒し手と呼ぶに相応しい治癒術と言っても過言ではなかった。

「ちゅるちゅぱちゅううっ」

クレイオスの唇は心地良いが、もう全快したのでいい加減顔から離して欲しいのだが…。

「ふふっ、どうやらクレイオスに気に入られたようだね。普段ならば、回復させるどころか木乃伊になるまで生気を吸い尽くすはずだったのだがね…」

……。

「ちゅぷちゅぱちゅぱちゅ」

クロノスはさらりと恐い話を明かしてきた。

その話からすると私はクレイオスに気に入られなければ、今頃木乃伊になっていたということなのか…。

「クレイオス、気に入ったのは結構だが、そろそろ離してやりなさい。クレイオスだけの玩具ではないのだよ。それに後で存分に弄ぶことが出来る。それまで我慢しろ…」

「ちゅぱ…分かった。僕は我慢する…」

クロノスの言葉でようやく私の顔が解放される。

私は手鏡を取り出して、自分の顔を確認する。

予想通り、顔がクレイオスの口紅で白銀色に染まり、唾液でべとべとになってしまっていた。

顔を拭くのは後にして、とりあえずクロノスの話を聞くとしよう。

「まずは小手調べということで誰か一体を選んで遊んでくれるといい。全員で君を陵辱するのも面白いが、それは後で時間をかけて行うとして…。さあ、ロスト、最初の遊び相手は誰なのかな？君が選んだ遊び相手を満足させたら我が軍を撤退させることを約束しよう」

クロノスに言われるがままにティターン神軍を見渡す。

誰か一体を選べというのか…。

誰を選んでも苦戦することには間違いないが、それでも誰が一番楽そうなのだろうか？

「坊や、あたしを選びなさい。楽しく遊んであ、げ、る、ふふっ…」

ムネモシュネが胸を強調するように前屈みになり、手を差し出してくる。

「よし、貴様を選ぶ」

私は瞬時にムネモシュネを指名する。

……。

他のティターン神軍はやや呆れた目で私を見ていた。

「清々しいまでの即決だね。さすがに驚いたよ…」

「私は何時だって本気だ」

私は飽くまで一番戦いやすそうな相手を選んだに過ぎないのだ。

決してムネモシュネの色香に惹かれたわけではない。

だから、エリニュスもアイリもきっと許してくれるはずだ。

いや、許して欲しいと切に願う…。

ムネモシュネは地上へと降り立ち、私の前に立ってくる。

常人よりも圧倒的に大柄な体格から醸し出す色香は目眩を起こさせる程に凄まじかった。

「怖がらないで、坊や。あたしはただ坊やと遊びたいだけなのだから…ちゅ」

彼女は屈み込んで私の頭を挟むように唇を押しつけてくる。

彼女の唇の感触に意識が遠のいてくる。

これはまさか…。

「もう既に遊戯は始まっているのだよ。彼女の紡ぐ至上の楽園へと浸るといい…ふはははははっ！」

「ちゅぱ…お休み、坊や。私が目眩く甘美な夢へと招待してあげるわ…ちゅぷちゅぱ」

クロノスの嘲笑が響く中、私はムネモシュネの唇の感触に意識が呑まれようとしていく。

余りにも油断をし過ぎてしまった…。

やはり、ここは紛れもなく戦場なのだ。

済まない、アイリ…。

もし、お前の側に逝ってしまった時はいくらでも折檻を受け容れる…。

私の意識はムネモシュネの唇に吸い込まれていった。

『ちゅぱ…ふふっ…良い夢を見てね…坊や…』

……。

……。

……。

……。

……。

……。

…。

わたしは今日も元気に拳を唸らせる。

私は古びた森の中で十人の喧嘩仲間と殴り合っていた。

肉体言語とは真に素晴らしいものだ。

言葉を交わさずとも分かり合えることが出来る。

まさに究極の世界共通語と言っても過言ではない。

「喰らうがいい！我が黄金の拳を！」

「ぐわっ！いてぇ…やっぱつええな…ロストは…」

さて、今日も私の拳で群がってきた野郎共は全員漏れなく地面にお休みさせることが出来た。

いつも通り、私は大いに高笑いをしていく。

「わははははっ！喧嘩番長と呼ぶがいい！」

相変わらず惚れ惚れする拳の切れだ。

自分で自分を褒めてやりたい気分だぞ。

「喧嘩番長参上！」

「喧嘩番長上等！」

「喧嘩番長最強！」

「わはははははっ！もっと私を賞賛するがいい！」

どうやら今日も変わらず絶好調のようだ。

一分一秒毎に私は確実に進化しているような手応えを感じてくる。

いずれ私の拳は世界を砕き、神をも殴り飛ばすことが出来よう。

喧嘩番長の名がこの世界に新たな神話を生み出していくのだ。

そして、私の生涯が聖書として記され、全世界の信者共に愛読される日が来るだろう。

「もう夕方だ。くそっ、今日も喧嘩番長に負けっぱなしで終わるのかよ…」

「明日こそがぼこぼこに伸してやるぜ！覚悟しろよ！喧嘩番長！」

「また明日、殴り合おうぜ、喧嘩番長！」

「わはははははっ！何時でも来るがいい！全員漏れなく返り討ちにしてくれるわ！」

喧嘩仲間が家に帰っていき、私は拳を振るいながら家に向かって走っていく。

さてと、喧嘩の後は母さんの美味しい手料理で体力を回復させるのだ。

……。

……。

…。

「お帰り、ロスト。また服をぼろぼろにして。後で縫ってあげるから服を脱いで置いておくのよ」

「分かったぞ」

村の一軒家では母さんが呆れた顔で出迎えてくれる。

いつもの光景だ。

私は服を脱いで上半身裸になってテーブルの椅子に腰掛ける。

そして、いつもの母さんの手料理がご馳走されるのだ。

されるはずだった…。

母さんはテーブルを挟んで私に向き合い、真剣な表情で見つめてくる。

何か大切な話をするつもりなのだろう。

「ロスト、お前もそろそろ喧嘩ばかりではなく、勉強しないといけ

ない年頃よ。だから母さんは家庭教師を雇ったのよ」

「ロスト！勉強が嫌だったら父さんに代わってくれても構わんのだぞ！その家庭教師は美女で…ぶべらっ！」

いつの間にか湧いて出た父さんを母さんが裏拳で黙らせていく。

我が母親ながら相変わらずの拳の切れだった。

「とにかくロストは少しは勉強しなさい。いつまでも喧嘩なんか出来るはずがないのだからね」

そんなことは分かっている。

確かに何時までも喧嘩が出来るわけではない。

いずれは普通に勉強して、普通に仕事して、普通に結婚して生涯を終えるが定め。

そして、私が喧嘩番長と名乗っていたことは遠い過去の話となっていく。

……。

だけど、まだ夢を浸ってもいいのではないか？

切ないことだが、それが現実だ。

つまらない勉強などしたくはない。

村の学者に色々と雑学を教わった方がまだ楽しい。

そんな私の思いを余所に母さんは雇った家庭教師を呼んでくる。

「紹介するわ。今日からロストの先生になる方、ムネモシュネ・ティターニア先生よ」

「ムネ…先生…」

私は母さんの紹介で台所に入ってきた女性を見る。

「ロスト！やはり父さんと代わりなさい！ムネモシュネ先生！是非、私に性教…あべしっ！」

「あなたはどうして女を見ると見境無いのよ！」

復活を遂げた父さんを回し蹴りで弾き飛ばす母さん。

「それが私なのだ！許せ！母さん！」

そして、瞬間復活を遂げる父さん。

「今日という今日は許しません！」

「これが男の悲しい宿命なのだ！」

父さんと母さんは今日も元気良く喧嘩するのだった。

私が喧嘩が大好きになったのは確実に二人の影響が大きいだろう。

ムネ何とか先生は父さんと母さんの喧嘩の様子を笑顔で眺めた後、私に視線を向けてくる。

「貴方がロストなのかしら。初めまして、ムネモシュネ・ティターニアよ。宜しくね」

私に手を伸ばす者は藍緑色の髪を靡かせ、瑠璃色の唇で官能的な美女だった。

彼女の笑顔に私の心臓が高鳴ってしまう。

これは一体何の感覚なのだろうか？

呆然としている私の手を掴み取り、握手してくる美女。

「宜しく…ムネ…」

名前がややこしくて覚えられない。

「ふふっ、ムネでいいわ。宜しくね」

「宜しく、ムネ先生」

私はムネ先生の手を握り返していく。

ムネ先生は不意に私の手を引き、身体を抱き寄せてくる。

「ムネ…先生？」

「ふふっ…良い夢を見させてあげるわ。可愛い坊や…ちゅ」

抱き寄せた私に触れるように口付けしてくるムネ先生。

彼女は妖艶な笑みを浮かべ、私の唇に触れた自分のそれを指でなぞってくる。

私は先生の唇が触れた自分のそれに触れる。

何故だろうか…。

私は何か大切な事を忘れているような焦燥感に駆られてしまう。

……。

『気のせいよ…』

……。

多分、気のせいだろう。

「ほら、席に座りなさい。夕食の支度は出来ているわよ。先生もどうぞ」

「有り難うございます」

母さんに勧められて、ムネ先生もテーブルの席に付き、食事を取っていく。

父さんは母さんの後ろで悶絶していた。

先生がいる以外、いつも通りの夕食だ。

何も心配することは無い。

私は夕食を取っていく。

復活した父さんも食事を取っていく。

母さんも食事を取っていく。

いつもの家族の団欒。

……。

『何時までも浸るといいわ。私が紡ぐ永遠の楽園の中でね…』

……。

不意に誰かの声が聞こえたような気がしたけど、気のせいだろう。

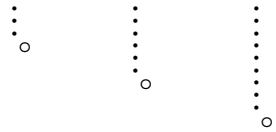
今日も平和な一日だった。

明日もいつも通りだであることを祈ろう…。

何時までも…。

永遠に…。

『そう、永遠に…』



第９８話：ＥＴＥＲＮＡＬ

物凄く眠たかった。

今、私は机に座ってムネ先生の話を聞いてる。

如何にも高尚で雄大な響きのある話をしているということは分かる。

だが、内容はさっぱり分からん！

失われし古代語でも話しているのだろうか？

同じ人種の人間とはとても思えないぞ。

「…より真神戦争が終結したの。分かるかしら、ロスト君？」

……。

暫し考える振りをして答えることにする。

「さっぱり分かりません」

私は喧嘩番長であるが、同時に正直番長でもあるのだ。

「正直で宜しい。けど、理解しようとしたのかしら？」

「いえ、全く理解しようと思ってませんでした」

私の問いにムネ先生は苦笑いをする。

まさか、ここまで出来の悪い生徒だとは思わなかったのだろう。

だが、私はそう簡単には変わらない自信がある。

私の鋼鉄の脳にしわを作るのはかなりの困難だと言えよう。

「ここまで正直なのは考えものね。まあ、ここで煮詰めても意味は無いかもしれないわ。だったら、ロスト君のために特別授業をしてあげるわ…」

ムネ先生はしなやかな手を私の首筋に這わせ、耳元に生暖かい息を吹きかけてきた。

「ぬおっ！何をするのだ！ムネ先生！」

「特別授業よ、ロスト君…ちゅぱ」

耳が柔らかい感触に包まれている。

ムネ先生に耳を噛まれているのだ。

これはムネ先生ならではの肉体言語なのか？

これほどの心地良い肉体言語は母さんに口付けされたこと以外では感じたことがないぞ。

「ちゅぱ…それじゃあ、ロスト君…んっ…アースガルズが信仰している神様の名前は？ちゅ」

「うぐっ…ガイア…」

不意に脳裏に名前が浮かび、答えることができた。

ムネ先生は私を抱き寄せ、首筋に吸い付き、胸で腕を包み込んでいく。

「ちゅうううっ…ちゅぱっ…正解よ、ロスト君。貴方はやれば出来るのよ。もっと自分を信じなさい…ちゅ」

「たまたまだ…ムネ…せん…せい…」

身体が身もだえてしまう。

痛みならば我慢できるが、快感は抗いがたいものだ。

ムネ先生の唇と胸によって私は情けなく悲鳴を上げるしかなかった。

「うふふっ…今日の授業はここまでよ。また、特別授業をしてあげるわ、ロスト君…ちゅ」

授業の最後に私の唇に口付けし、微笑むムネ先生だった。

……。

……。

…。

私はムネ先生の渡された布巾で顔を拭き、今日も元気良く喧嘩する

ために森へと出向く。

いつも通り、喧嘩仲間と殴り合いをして、いつも通りに返り討ちをしていくのだ。

……。

何故だろうか…。

楽しいはずなのに楽しくないと思ってしまう自分がいる。

これは由々しき事態だ。

もうこの年頃になって私は倦怠期に突入してしまったのか？

……。

何だか頭が痛くなってきた…。

私は気分が悪くなったことで早々と喧嘩仲間を全員伸して、家に帰ろうとする。

その時、ふと森の奥から誰かが呼んでいるような感覚がしてきた。

これは長年の喧嘩で染みついた私の第六感が反応したのだろうか？

私は自分の感覚が赴くままに森の奥へと足を踏み入れていく。

これは森を荒らす悪人共のような邪悪な感覚ではない。

何処か懐かしさを覚えるような心地良い感覚。

私の足取りに迷いは無い。

何故か、運命が引き寄せるかのように私はまっすぐに目的地へと辿り着くのだった。

……。

不思議な感覚に導かれた先には不機嫌な顔で大木に持たれている女性がいた。

鮮やかな銀髪が靡かせ、躑躅色の口紅を塗った唇。

漆黒の軍服を身に纏った如何にも軍人らしい美女だった。

私の気配は感じたのか、鋭い視線を向けてくる。

「貴方はいつまで夢に浸っているつもりなの？」

それが私の向ける美女の第一声だった。

「ここは現実だ。何を言ってるのだ？」

私は目が覚めた状態で夢を見る等という特殊な能力等持ち合わせてはいない。

どうやらこの美女は頭が少しおかしいのだろう。

「今、私の頭がおかしいと思ったでしょ。違うわ。おかしいのは貴

方の頭。女の色香に惑わされて脳にお花畑を耕している貴方がおかしいのよ」

美女は身体を私に向け、悠然と近づいてくる。

その威圧感は今まで喧嘩してきたどの野郎共よりも凌いでいた。

この百戦錬磨の私が気圧されているだと？

そんな馬鹿な！

だが、負けるわけにはいかない。

精一杯虚勢を張っている私の前まで美女は立ってきた。

「何故、初対面の貴様にそこまで言われねばならないのだ。我が名はロスト。喧嘩番長ロストだ。貴様、名を名乗れ！」

とりあえず相手に名を聞くには自分の名を告げることが礼儀だと聞いたことがあったから実践してみた。

「ふふっ、相手に名を聞くにはまずは自分から名乗るという礼儀は知っているようね。でも、教えない。何故ならば、貴方は既に私の名前を知っているはずだからよ。私の名前を思い出すこと、それが私が貴方に課す宿題よ」

「宿題を出してくるのは家庭教師だけで充分だ。見ず知らずの貴様に宿題を出される筋合いはないぞ」

私の言葉に美女は一瞬悲しげな顔を見せるものの憤怒の表情となり、

私の身体を抱き寄せてくる。

「むぐっ！」

美女は私の頭蓋骨を押し潰さんとばかりに自分の胸で圧迫し、背骨がへし折れるのではないかと言う程に強く抱き締めてくる。

ムネ先生の優しい抱擁とは違い、謎の美女の抱擁はまるで折檻と言わんばかりに痛くて苦しいものだった。

「もごっむぐぐっ！」

美女の腕力は思いの外強く自力では抜け出せなかった。

「これは折檻よ、ロスト。貴方の悪行は何時だって私は見ているわ。なぜならば、私は貴方の側に永遠にいる存在なのだから…」

不意に地獄の抱擁が緩み、私を抱き上げてくる謎の美女。

「私を失望させないで…早く思い出すのよ、ロスト…んっ」

美女の唇が私のそれを覆ってくる。

ムネ先生の甘美で妖艶な口付けとは趣が違う、懐かしくも暖かい口付け。

私は自然と彼女の口付けに自分の身を委ねてしまっていた。

初対面の彼女に対して、そうすることが当然であるかのように…。

……。

暫くしてようやく美女の口付けから解放された。

もう少しこの美女との口付けを堪能したいと思っている自分がいることに少なからず驚いてしまう。

「いいわね、ロスト。必ず思い出すのよ…」

美女はそう言い、森の奥へと消えていった。

不思議な美女だった。

だが、少なくとも恐い存在ではない。

正体不明だったが、それだけは何故か確信出来たのだ。

……。

……。

…。

私は家に帰り、いつも通りに夕食を食べてムネ先生の授業を受けるのだ。

夕食を終えて机に付き、勉強の用意をした。

そして、ムネ先生が部屋に訪ねてくる。

ムネ先生は笑顔で私の顔を見ていたが、不意に蝋燭の火が消えたように無表情になる。

先生の無表情の顔を見て、私は背筋が凍っていく。

何か怒らせることを無意識の内にやったのだろうか？

とにかく先生が不機嫌であることは感じた。

「ロスト君…何か匂いますけど…誰と逢ったのかしらね？」

……。

何故だろうか…。

浮気をした父さんを追い詰める母さんの雰囲気に似ていた。

だが、私には何もやましいことは無い。

いや、もしかすると…。

「喧嘩仲間と逢っただけだぞ」

正直者で名を馳せている私が今日初めて嘘を付いてしまった。

何故だか分からないが、森で逢った正体不明の美女のことは話してはいけない気がしたのだ。

「そう…お友達と逢っていただけなの…」

先生は私に近づき、胸元に顔を寄せて、匂いを嗅ぐような仕草をしてくる。

私は逆に先生の甘い香りが鼻につき、緊張してしてしまう。

「微かに匂うわね。しかも、女の子ではなく、女の匂い。ふふっ…ロスト君は女とも喧嘩するのかしら？」

「喧嘩に…老若男女関係無い…」

あの謎の美女の香りとは違う、毒々しいまでに甘い香り。

喧嘩で培ってきた私の勘が告げている。

彼女こそがあの謎の美女よりも確実に妖しい存在だ。

「まあいいわ。では、勉強を始めましょうか。けど、その前に…」

先生は椅子に座っている私の膝の上に乗りかかってくる。

そして、私の顎を掴み、甘い吐息を吹きかけてくる。

「君の身体から漂う不快な匂いを消させてもらうわ。このままだと勉強に集中できないから…ちゅ」

先生は私の口に噛みつくように唇を重ね、凹凸に富んだ身体を押しつけてくる。

「むぐっもごごっ」

「ちゅぱちゅるるっ…」

私の唇を通して何かを吸い取っているような感覚だ。

まるで私の命を吸い取っているような…。

先生を引き離すために暴れようとするが、力が入らない。

それどころか先生の口付けに身を任せてしまいたいと思っている自分がいる。

「ぢゅるるるっ…ぢゅうううっ…」

「むごっ…」

このままだと死んでしまうのではないかという恐怖に私は襲われている。

私にはまだやることがあるのだ。

……。

やること?

やることとは一体何だ?

私は一体ここで何をしているのだ?

『考えないで、ロスト…』

私は…。

『貴方は何もする必要は無いのよ…』

そうだった。

私は先生の授業を受けることだけを考えればいいのだ。

『そうよ。それでいいわ…』

先生は唇で私の首筋を吸い、胸元に舌を這わせてくる。

「ううっ…ムネ…先生…」

「ふふっ…貴方に楽園を見せてあげるわ…」

私は一張羅の服が脱がされ、身体の至る所を舐め回されていく。

先生は私が必死に呻き声を出さないように我慢している姿を見て楽しんでいるようだ。

ならば、私は意地でも呻き声を上げないようにしよう。

これは喧嘩の一種だ。

ここで先生に言いようにやられてしまえば、この先精神的優位が立てなくなってしまう気がしたからだ。

「ぴちゃぴちゃちゅぱ」

「ぐおっ！」

先生の舌が私の男の証にまで触れてしまい、思わず呻き声を上げてしまう。

「そこは…止めろ…」

「ちゅぱ…怖がらないで…ロスト君はただ全てを私に任せればいいのよ…あむっ」

私の男の証から何かが吸い上げられていく。

先生に吸われる度に快感と引き替えに私の大切な何かが失っていくような、そんな感じがしてくる。

だが、痺れるような甘美な感触に抗えることが出来ない。

私の反骨精神も闘争意欲も何かもが吸い取られてしまいそうな感じだ。

「さあ、ロスト君。君の記憶を私に捧げるのよ…」

「私の記憶…だと…」

私の無駄に元気な男の証の上に先生の腰があった。

「そうよ。貴方の記憶は私のものになるの。それで私と貴方は一つになるのよ…」

「私の…記憶は…私の…ものだ…ぬおっ！」

先生の腰が私の男の証を呑み込んでいく。

私と先生との境界線が曖昧になってしまいそうだ。

「いいえ、貴方は私になるのよ。もう逃れられない…んちゅ」

「んぐっ！」

先生は逃がさないとばかりに私の唇を吸い、腰を上下に振ってくる。

「ちゅうううっ」

『私に全てを委ねなさい…』

私の唇と男の証が容赦無く食い荒らされていく。

百戦錬磨の喧嘩番長たる私が女の荒腰に成す術もなく蹂躙されている。

……。

不意に見たことがあるような美女達の顔が脳裏に思い浮かんでは消えていく。

巨大な下手物と戦っている場面が思い浮かんでは消えていく。

『貴方の記憶、とっても美味しいわ…』

何かもかもが全て、先生の中へと流れ込んでいく。

不意に涙が流れてしまう。

失った何かを悼むような…。

『愛しているわ、ロスト君…』

「んっ…うあああああああああっ！」

……。

……。

……。

……。

…。

いつの間に朝を迎えたのだろうか…。

今日もいつも通りの一日が始まる…。

朝食を食べて、父さんと母さんが喧嘩している所を見て…。

そして、私は森に入って、喧嘩仲間と会って…。

……。

今日は喧嘩仲間を見かけず、代わりに正体不明の美女が待ちかまえていた。

「よう、今日はあたいと喧嘩してくれよ。無敗の喧嘩番長様」

その美女は紅い髪に赤紫の唇から八重歯を見せ、獰猛な雰囲気を漂わせていた。

服装は紅い軍服らしきもので如何にも訓練された女軍人を思わせる風貌だった。

この美女はかなり出来る…。

私は靄が掛かっていた思考を振り払い、両の拳を構える。

「私は天下無双の喧嘩番長ロスト様だ。貴様、名を名乗るがいい…」

「あたいの名を知りたければ、肉体言語で言い負かせてみな…」

謎の美女其の二ということか…。

……。

其の二だと?

では、謎の美女其の一とは誰だったのだろうか?

何故、目の前の美女を其の二と認識できたのだ?

そんな私の思考を砕くように目の前に美女の拳が迫っていることに気づき、腕を交差して防ぐ。

「ぐっ！」

身体が一瞬宙に浮いてしまう。

何て重い打撃なのだ。

いくら相手の方が遙かに体格が上回るとは言え、体重ではそれほど変わりはないはずだ。

「目の前にこんな美女がいるというのに他の女のことを考えるなんて失礼ね」

「何故、分かったのだ？だが、確かに失礼だったな。では、今度はこちらから行かせてもらうぞ！」

私は両の拳を唸らせて、謎の美女其の二を攻め立てていく。

美女は私の拳を受け流し、反撃の拳を繰り出してくる。

私はその拳を敢えて受け止めて、さらなる反撃の拳を打ち出していく。

「うおおおおっ！」

「うぐっ！」

互いの拳が錯綜し、見事なまで肉体言語のやり取りが行われる。

この美女は今まで戦ったどの喧嘩仲間よりも強い。

私の闘争意欲が果てしなく沸き立っていく。

「やっぱりお前と喧嘩をするのは楽しいな！ロスト！」

美女は野性的だが、魅力的な笑顔を浮かべて拳を振るってくる。

彼女とは何故か初対面では無いような気がする。

まるで懐かしの再会を喜んで挨拶代わりに拳で交わしてるような感覚だ。

私は以前にも彼女と拳を交わし合った気がしてくる。

色々と気になることがあるが、今はそんな些細なことはどうでもいい。

やはり、肉体言語とは素晴らしい。

言葉は交わさずとも美女が私を求めてきてくれることが手に取るように分かってくる。

「これで終わりにしてやるよ！メガイラナックル！」

彼女が大気を震わせるような如何にも強力な拳を繰り出そうとしてくる。

次の一撃で決着を付けようとするつもりなのだろう。

ならば、こちらも最強の一撃で持って迎えてやろうではないか。

私は血が滲むほどに拳を握りしめ、力を溜めていく。

我が黄金の拳よ、唸れ！

「うおおおおおっ！」

「はあああああっ！」

互いの拳がぶつかりあい、周囲に余波が吹き荒れる。

「うあっ！」

美女の拳に血が吹き、仰け反っていく。

私はそのまま追い打ちをかけるように仰け反った美女の溝に拳をめり込ませていった。

「あぐっ！」

確かな手応えと共に謎の美女は私に覆い被さるように倒れていく。

ついに決着を付けることが出来た。

彼女は私が今まで戦ってきた喧嘩相手の中では最強だった。

「やっぱり強いな…ロスト…」

耳元から声がして、私は彼女の顔を見る。

「ぬっ！」

彼女は優しげな笑みを見せ、私の足を払って押し倒していく。

どうやら油断してしまったようだ。

彼女は馬乗りになって私の顔をまじまじと見つめてくる。

「ふふっ…喧嘩は強いけど、それ以外だとやっぱり弱いんだな」

「何をするつもりだ？」

美女はにやりと笑い、私の顔を両手で挟んでくる。

「あたいに喧嘩で勝ったんだ。ご褒美さ…ちゅ」

私の口は美女の唇に塞がれてしまう。

「んちゅちゅばちゅば」

彼女の口付けは先生のものと比べると気持ち良いとは言えなかったが、不思議な心地良さを感じる。

けど、その代わり身体が怠くなってなってくるような感覚がしてきた。

まるで命が吸われていくような感じだ。

私は抱きついてくる美女の背中を叩くが、唇を一向に離してくれず、それどころか舌を絡めてきた。

「むごっ！」

「あむっぴちゃちゅぷ」

私は喧嘩ならば、いくらでも起死回生出来るのだが、この手の攻めには全く対処が出来ない…。

これが喧嘩番長たる私に弱点だと言うのだろうか…。

「ちゅぱ…ふふっ…そう言えば、お前が勝ったんだから名前を教えないといけないわね。あたいはメガイラよ。親しい奴はメイと呼ぶわ」

「メガイ…むぐっ！」

再び口付けされ、私の唇に少し痛みを感じるように八重歯を突き立ててくる。

八重歯からもたらされる甘い疼きに身体の力が抜けてしまう。

「ちゅぱ…メイと呼んで…ロスト…」

彼女の潤んだ瞳が私の心臓を貫きそうになっていく。

美女が私に頼んできているのだ。

「うっ…メイ…」

「もっとはっきりと！」

……。

「メイ！」

……。

私の何かが戻ってくるような感じがしてくる。

そうだ。

私は何か大切なことをやり遂げようとしていたはずだ。

もう少しで何かが思い出せそうな気がする。

メイは満面の笑みを浮かべて、私の顔に口付けの雨を降らせていく。

「ちゅちゅちゅぱ」

時折、八重歯を軽く突き立てる等と可愛い子犬がじゃれつくような愛撫だった。

私は彼女の口付けを心地良く受け止めていった。

……。

「ロスト、あたいがお前を目覚めさせてやるよ」

メイは私の服を脱がしてくる。

そして、私の男の証に自分の女の部分に沿わせていく。

「何を言ってる?私は起きているぞ」

……。

『貴方はいつまで夢に浸っているつもりなの?』

……。

そう言えば、謎の美女其の一からも似たようなことを言われた気がする。

「ぬおっ!」

私の男の証がメイの中へと呑み込まれていく。

喧嘩で鍛えているためなのか、物凄く締め付けが強い。

余りの締め付けの強さに悲鳴を上げてしまいそうだ。

「あたいの荒腰に耐えてみせな!喧嘩番長!」

「うぐっ!」

私の男の証がすり切れそうな程に激しく腰を振ってくるメイ。

それはまるでお仕置きと言わんばかりに容赦無い荒腰だ。

快感と苦痛が交錯する中で不意に見たことがあるような映像が私の脳裏に過ぎってくる。

……。

強大な力を持ったが故に無理矢理戦場に狩り出されるうだつの上がらない男の姿。

痛いことが大嫌いの癖に喧嘩が大好きな矛盾した男の姿。

戦いには強い癖に床では極端に弱い情けない男の姿。

その傍らにはメイがいた。

いや、メイだけではない。

私は多くの美女と出会い、戦場を渡り歩いてきた。

涙が枯れる程に悲しい別れもあった。

だが、それでも永遠の存在となり、常に私を見守ってくれたのだ。

だからこそ、私は…。

……。

……。

……。

……。

…。

頭の中にあった億劫感が洗い流されたかのような晴れ晴れとした気分だった。

メイは既に立ち上がっていた。

「すっきりしたか？我が君…」

「そうだな…」

彼女が何者であるか、私は思い出していく。

「だったら、早く起きろよ。そうしないと今度はあたいよりも恐い姉さん達が押し寄せてくるかもしれないからね…」

「確かにそれは恐そうだな…」

どうやら私は常に監視されているようだ。

だが、嫌な気分ではない。

私の顔を見て、メイは私の手を取って立ち上がらせる。

「だったら、早く目覚めな。お前が寝る場所はここではないだろ？」

「当然だ…」

私が寝る場所は美女の胸の中だと決まっているのだ。

「あたい達はいつかその時が来たときにまた助けにいく。それまでお前の二本足で何とか突き進むのよ」

「分かっている」

彼女達はもう私の中で永遠になっているのだ。

これは単なる冷却期間に過ぎない。

だから、悲しむことはない。

「愛してるよ、ロスト…んちゅ…ちゅ…ちゅぱ」

メイは私を抱き寄せて、熱い唇を私の両頬と口に押しつけていく。

「さあ、行って来な！喧嘩番長！」

「おう！」

私はメイに背中を押されて走っていく。

目指すは謎の美女其の一だ。

彼女に完成した宿題を提出せねばならない。

私は彼女の気配を感じ取り、森の奥へと駆け抜けていく。

そこには以前と同様に不機嫌そうな顔で大木に寄りかかっている美女がいる。

彼女は私の気配に気づいたのか、胡乱な眼差しを向けてくる。

「ふっ、どうやら宿題をこなしたようね」

「ああ、随分と待たしてしまったな…」

謎の美女は私の方へと身体を向け、不敵な笑みを見せてくる。

「余り私を失望させないで欲しいわね。済まないと思っているのなら、行動で示しなさい」

美女の不遜な物言いにも構わず、私も笑みを帰して行動を示すことにした。

私は美女を抱き寄せ、王子が姫に告白するように宿題の答を告げようとする。

「申し訳ありません、アイリ将軍閣下。これで宜しいでしょうか？」

「ふふっ、及第点としておきましょうか。それにしても派手な顔になっているわね…」

アイリは布巾と取り出して、私の顔を拭いてくる。

派手な顔とはおそらくメイが私の顔に口紅を塗りつけたことによるものだろう。

「他に言いたいことがあるとすれば、私はもう将軍閣下ではないわ。ただのアイリよ。さらに言えば、貴方こそがこれからは私の上司ということになるのでしょうね」

赤紫に染まった布巾を仕舞い、私の両頬を挟んでくるアイリ。

「だから、私が貴方の部下ということになるのよ。しっかりしなさい、ロスト将軍閣下…んちゅ」

アイリは私の両頬を挟み、口付けてきた。

まさかアイリが私の部下だと言ってくれる日が来るとはな…。

おそらく私の人生で最も感動した瞬間の一つとして数えられることだろう。

「いずれ時が来たら貴方の下へと馳せ参じるわ。楽しみにしておきなさい、ロスト…」

アイリはそう言い、光の粒となって消えていく。

主従逆転したからといって、今までの関係が変わるわけでもないか…。

……。

私はアイリの変わらぬ姿勢に笑みを零し、悠然とした足取りで我が家へと戻っていく。

……。

…。

いつもの見慣れた山小屋は禍々しい殺気に包まれていた。

家の中には父さんも母さんもいない。

この家、いや、この世界にはもう彼女一人しか存在していないのだ。

私は彼女が待っているであろう、私室に足を踏み入れていく。

私室には腕を組んで邪悪な笑みを零しながら泰然と待ちかまえる彼女がいた。

「遅刻よ。ロスト君」

私の家庭教師をしているムネ先生。

「申し訳ありませんね…」

「どうやら貴方の中には余計な者が寄生しているようね。大人しく私の授業を受けていれば良かったものを…」

ムネ先生から冷たい殺気が溢れてくる。

ついに本性を現したわけか…。

「授業時間に遅刻した出来の悪い生徒には体罰をということか。生憎と私は往生際が悪い餓鬼だからな。そう簡単に観念したりはしないぞ」

「ふふっ、だったら聞き分けの無い生徒を上手く調教することもまた教師の使命よね」

ムネ先生の背中から翼が生えてくる。

翼が羽ばたいた瞬間に空間が硝子が砕けるように崩壊し、世界が暗転していった。

……。

……。

…。

エリニュスの歌声が響いてくる。

そこはニュクスと死闘を演じた疑似世界。

目を開けると視界は瑠璃色の唇で埋まっていた。

私の顔面がムネモシュネの唇に覆われていたのだ。

彼女は目を開けて、重ねていた唇を離していく。

もしかして、私が夢を見ていた間ずっと唇を重ねていたのだろうか？

私と彼女の間に唾液の糸が伸びて切れる。

彼女の唇で涎まみれになった顔を拭って拳を構える。

「残念ね。貴方の記憶はとても美味しかったのに…。出来れば、永遠の楽園の中で貴方を何時までも抱いて上げたかったわ…」

ムネ先生、いや、ムネモシュネは翼を羽ばたかせ天空へと舞っていく。

私はムネモシュネを追うように飛翔魔法で天空へと飛び立つ。

「まさかムネモシュネのムニンを打ち破るとはな。だが、遊びはこれからだ。全ての記憶を見渡すムネモシュネに君は如何に戦うのかな？」

クロノスは楽しげに私とムネモシュネを見渡してくる。

私はクロノスを一瞥し、ムネモシュネと向き合う。

「降参しろ。ムネ先生、いや、ムネモシュネ。私の記憶を見たのならば、分かるだろう。お前では私を倒すことは出来ない」

「なぜかしら？生きとし活ける者全ては記憶に支配されているわ。ならば、記憶を司る私に敵うはずがない。貴方は私に屈服するのよ」

私はため息を付き、ムネモシュネを呆れたように見つめる。

「お前が読みとる記憶なぞ所詮は停滞した物にしか過ぎない。生き物は常に記憶を絶え間なく更新させて生きている。お前が一部分の記憶を読みとる間に私は大幅に記憶を更新させていくのだ。故に私の記憶を読み取ることは無意味だ」

「記憶は森羅万象全てに宿っている。だから、私は世界の全てを知り尽くしている。貴方なんてその中の塵にも等しい取るに足らない存在よ。それを思い知らせてあげるわ！ルシファー！」

ムネモシュネは両掌を向け、極大の紫の波動を撃ち出していく。

術者の力量に反映しているのか、ニュクスが放ったものよりもさらに強大な威力が秘められている。

威力だけではない。

ニュクス以上に如何なる防御をも突き破り、回避することすらも敵わない絶対殲滅魔法へと桁違いに改良すらされている。

ルシファーという技の記憶から短所と長所を分析し、さらに有効で強力な技へと最適化されているのだ。

森羅万象ありとあらゆる記憶を読み取り、より改良して自身の力に反映させていくことこそがムネモシュネの力なのだろう。

それはかつて外界の刺激により情報を取り入れて、力を増大させるアルゴスの能力と類似したように思える。

だが、アルゴスの能力は飽くまで外界の刺激を受けて取り入れるという受動的な力だった。

対してムネモシュネの力は直接相手の記憶を読み込んで力を取り入れるという極めて能動的な力。

当然、受動的な前者よりも能動的である後者の力の方が桁違いに強

大なものだ。

外界の刺激を得るまでも無く、直接的に全ての情報を対象から抽出して自分の力へと変えていくのだから。

だが、前者も後者も何処までも停滞した物を拝借するだけの空虚な力であることには変わり無いはず。

故にムネモシュネの力は私に対しては全くの無為で無意味なものでしかない。

私は拳に魔力を溜めて、迫り来る紫の波動を迎え撃とうとする。

ムネモシュネはそんな私に勝ち誇ったような嘲笑を向けてくる。

「愚かなことです。貴方の記憶はもう充分に読ませて頂きました。ですから、安心して消えなさい」

「記憶を充分に読んだだと?所詮、貴様が読み込んだ記憶は所詮、過去の残照でしか過ぎないのだ!」

黄金の拳よ、唸れ!

記憶も何かもを打ち砕く一撃を炸裂させる!

私の繰り出された拳の力が全てを消滅させる極大の紫の波動を消し飛ばし、その余波がムネモシュネを打ち貫いていく。

「がふっ…そんな…私の記憶の域を…超えるなんて…」

「覚えておけ。私は一分一秒毎に進化しているのだ…」

ムネモシュネは吐血し、力無く地上へと落ちていく。

私は地上に落下する寸前に彼女を何とか抱きかかえる。

自分よりも巨体の女を抱きかかえるのはかなりの重労働だ。

それでも何とか表情に出さないようにして私の行動に驚いてる彼女の顔を見る。

「何故…私を…助けるの…」

「気まぐれだ…」

彼女の問いに私は素っ気なく答える。

経緯はどうあれ、ムネモシュネのお陰でアイリやエリニュス等が私の中で生きていることが分かったのだ。

これはただの借りを返しただけに過ぎない。

決して死なすには惜しい美女だということを考えたわけではないのだ。

「一応、お前は私の家庭教師をしてくれたからな」

「ふふっ…変わった男ね。けど…楽しかったわ…」

ムネモシュネは力尽きたかのように私の腕の中で気絶する。

不意に背後から拍手の音が響いてきた。

「素晴らしい。実に見応えのある遊戯だったよ。ロスト」

クロノスは拍手喝采で私を賞賛してくる。

「賞賛してくれて何よりだ。充分楽しんだところで約束を果たしてもらおうか。速やかに軍を撤退させろ」

「勿論だ。後は君が大人しく私達と同行するのであれば、約束は守るとしよう。クレイオス、ムネモシュネを介抱しろ」

「分かった…」

クロノスの命令でクレイオスは掌を私が抱えているムネモシュネに向けていく。

ムネモシュネが身体が浮遊して、クレイオスの元へと運ばれていった。

そして、ティターンの中で一番大柄な美女ヒュペリオンが私の所へと近づいてくる。

「貴様の強さ、気に入ったぞ。是が非でも連れて行ってやる」

ヒュペリオンは獰猛な笑みを見せて、私の背後に回り込んで抱き締めてくる。

私の身体はヒュペリオンの巨大な胸に挟まれる形となり、見事に身

動きが取れない状態になってしまう。

「くっくっくっ、抱いていて分かるぜ。貴様は俺が今まで逢った誰よりも頑丈な奴だ。惚れてしまいそうだぜ…んちゅううっ」

ヒュペリオンの巨大な唇が私の側頭部が包み込まれ、耳が千切れるのではないかというほど強く吸われていく。

「ちゅぱ…楽しみだな。貴様を存分に可愛がってやるのがな…」

彼女の口付けはタナトスの接吻が優しいと思えるほどに痛いものだった。

「謹んで遠慮したいところだな…」

「精々今の内に減らず口を叩いておけ。直に俺無しでは居られないような身体に調教してやるからな…くっくっくっ…」

嫌な美女に目を付けられしまったものだ。

いや、ヒュペリオンだけではない。

他のティターンの美女達も新たに手に入れた玩具を見るような目つきで私を見ている。

果たして私の身体は無事に済むのだろうか？

激しく不安になってきた。

「ひっひっひっ、では、元の世界へと戻るよ…」

審判者テミスが手に持っていたラッパを吹いた瞬間にアレクが創造した疑似世界は全ての空間の至る所に亀裂が生じ、崩壊が始まっていく。

ニュクスとの戦いで耐えきった疑似世界がラッパの一吹きで容易く破壊するとは…。

テミスは力に戦慄しながらも私は崩壊していく世界を見据える。

エリニュスの歌声が遠ざかっていく。

アレク、ティー、メイ、ロン、アイリ。

暫しの別れだ。

来るべき時にまた再会しよう。

疑似世界は消滅していき、視界が真っ白になっていく。

……。

……。

…。

元の世界に戻り、最初に見た光景は屍に埋め尽くされた大地だった。

屍に埋め尽くされた遙か先にはまだ辛うじて反乱軍の兵士達が戦っている姿が見えた。

血塗れになって戦うアイテルと僅かな兵士達。

その後ろで負傷兵に回復魔法を掛け、必死に檄を飛ばしているエクリア。

対峙してるのは漆黒の軍服を身に纏い、黄金の髪を靡かせている美女。

私よりも頭三つ分高いが、ティターン神軍と比較すれば、小柄とも言える体格。

純白の肌に唇には金赤色の口紅を彩り、凛々しい雰囲気を纏わせていた。

その美女の後ろには一心不乱に反乱軍の兵士だったものを貪っているギガンテス兵とキュクロプス兵。

私はヒュペリオンに抱き締められたまま血塗れに立っているアイテルとエクリアに呼びかける。

「エクリア！アイテル！」

エクリアとアイテルは私の呼びかけに応える余裕も無く、必死に応戦している。

「やっと終わったようですね、クロノス。貴方の遊び癖には困ったものです」

漆黒の女軍人は黄金の髪を掻き上げて、気怠そうにクロノスに不満

をぶつけてくる。

「そう言わないでくれ、ウラノス。私から遊びを取ってしまうと何も残らなくなってしまうではないか…」

漆黒の軍人の名はウラノス。

ガイア四高弟の一員にして、ティーを殺した神。

「その悪癖でガイア様を裏切るのだから始末に負えません。もっとも私も同じ事ですが…」

ウラノスはクロノスと軽口を叩きながらアイテル達に剣を振るっている。

「それにしても、どうやら辛うじて間に合ったようだね」

クロノスはアイテル達が奮戦してる姿を見て喜んでいた。

そして、私の顔を見て、残酷な言葉を告げていく。

「だが、反乱軍はほぼ壊滅。既に大勢は決しているようだ」

クロノスはヒュペリオンに拘束されている私に近づき、顎を掴んでくる。

「それでも君との約束は守ってあげるよ。反乱軍を後一歩で殲滅させる寸前でいようとね…ふふっ…ははははっ…あはははははっ！」

クロノスの勝ち誇ったように笑い出す。

「うぐっ…申し訳…ありません…ご…亭主様…」

アイテルは力尽きて地面へと倒れていく。

「私達の勝利ですね…」

ウラノスは倒れたアイテルを無情に見下ろしていた。

「閣下…」

エクリアの首にはキュクロプスの斧槍が四方八方から突き付けられている。

動いている兵士達はもはや一人もいない。

戦場の至る所でギガンテス兵の雄叫びが聞こえてくる。

クロノスの言う通り、確かに大勢は決してしまったようだ。

そして、私は余りにも時間を掛け過ぎてしまった。

……。

これが現実だというのか…。

私達はエロスに…。

エロスの軍勢に…。

負けてしまったのだ…。

第９９話：ＢＩＲＤ　ＣＡＧＥ

アレクは言っていた。

この戦いは恐らく負けてしまうと…。

今まさにそれが実現してしまったのだ。

もはやエロス軍に立ち向かうことは出来ないのだろうか？

……。

いや、好機を見出すのだ。

例え、どれほど絶望的な状況になろうとも生きている限りは…。

私は絶望に打ち拉がれようとした気持ちを何とか奮い立たせる。

私はまだ生きているのだ。

生きている限り無限の可能性を秘めている。

だから、何としても生き延びるのだ。

「ほう、まだ自分の勝利を信じて疑っていない。あるいは機を伺っているような目つきだな」

クロノスが息を吹きかけるように私の目を覗き込んでくる。

私はクロノスに卑屈な笑みを見せていく。

「それは買いかぶりだ。私はもうどうしようもならない状況に絶望してしまっているのだ」

「君は恐ろしいほどに嘘が下手だね。普通は強がりを言って認めないものだよ」

クロノスは倒れ伏すアイテルと斧槍を突き付けられているエクリアに視線を向けていく。

「それとも彼女達が無事だという安堵の現れなのかね？あるいは私達に捉えられても何時でも逃げ出せると思っているのかな？いや、おそらくその両方だろうね…」

私はクロノスの言葉に何も応えない。

実のところ、彼女が言うことは的を得ていた。

アイテルとエクリアが無事であることと何時でも逃げることで出来るという自信があるのだからかもしれない。

それにヒュプノスがいる疑似世界にはまだ攻め込まれてはいない。

だが、同盟を結んだ三カ国の兵士達はほぼ全滅している。

次に戦う余力はもう無いのかもしれないだろう。

それでも生きていれば何とかなると楽観的に考えなければ絶望に押し潰されてしまう。

「まあ、彼女達はここでは殺さないでおこう。だが、何時でも私達から逃げられると思われているのは少々腹を据えかねる。さて、どうするべきかな？」

「ふっ、首輪を付ければ良かろう。生きた首輪をのう…」

クロノスが思案してる所をイアペトスがアイテルとエクリアに視線を向けながら提案してくる。

イアペトスの視線の先から言わんとしていることを悟り、クロノスは笑みを零す。

「さすがは年の功だな。良い案だ。この彼にとってはこれ以上に無いほどにな…」

「ふん、伊達に長生きはしておらんわ。儂とてせっかく見つけた玩具をみすみす逃したくはないからのう」

クロノスは舐め回すような視線でアイテルとエクリアを見ていく。

まさか、首輪とは私が身動きできないようにするための人質ということなのか？

「さてと、ロスト。君でも分かるだろう。二人の内、どちらかを選びたまえ。君の首輪になってくれる犠牲者をね…」

何て事は言わせようとしているのだ…。

犠牲者になる者を私に選ばせるつもりなのか…。

「選ばないのであれば、両名とも首輪になってもらうことにするよ。それではこの戦争を有様を詳細に伝える伝言者もいなくなってしまうだろう。いずれ機会を見て私達に再戦を挑むつもりだろうと思えるしね…」

クロノスの言葉に私は黙り込むしかなかった。

私は退路が完全に断たれてしまったのだ。

反乱軍がエロス軍に復讐戦を行うかどうかはともかく、私は確実に篭の鳥となってしまう。

アイテルかエクリアという首輪をつけらることで…。

そして、私はどちらかを救うために犠牲者となる首輪を選ばなければならない。

エクリアかアイテルのどちらかを…。

「閣下！小官を選んでください！アイテル様は反乱軍で無くてはならない御方！小官が閣下の首輪になります！」

「エクリア…」

確かにアイテルは第一次聖戦の英雄で、間違いなく反乱軍の中枢となって立つ者だろう。

むしろ私よりもよほど知名度が高く、兵士達の士気を大いに盛り上げていくに違いない。

対してエクリアはヒュプノスの片腕として、反乱軍の統率に貢献してきた者だ。

地味だが、反乱軍が今まで瓦解せずに持ち堪えたのは一重にエクリアの事務処理能力によるものだろう。

どちらが反乱軍により有用かと思えば…。

「お願いです、閣下。小官を選んでください。小官の代わりはいくらでもいますが、アイテル様の代わりはいません。彼女は必ずや反乱軍の要となる御方なるはずなのです」

エクリアの言う通り、どちらが有用と言えば、確実にアイテルだ。

ティターン神軍やガイア四高弟の強大さに霞みがちだが、彼女は間違い無く伝説の英雄である。

それ故に彼女の威光を持ってすれば、さらなる援軍を求めることが可能であり、反乱軍を新たに立て直すことも出来るだろう。

だが、私にとってはどちらが有用であるかは関係無い。

有用な者を選ぶと同時にそうでない者を犠牲にしろというのだ。

しかも選ばなければ二人とも犠牲になってしまう。

一体どうすればいい？

「あたしは三人まとめて来てくれても構わないわよ。そうすれば玩

具が増えることだしね…」

「僕は友達が増えるから大歓迎だよ」

「私もどちらでも構わないわ。ロストを実験体に出来れば問題無いから…」

「苦悩することで汝の血肉に旨味が増してくるやもしれぬな…」

「ひっひっひっ、究極の選択だね。お前の選択を審判者として見極めさせて貰うよ…」

他のティターンの連中は口々に好き勝手なことを言ってくる。

要は自分達が楽しければどちらでも構わないということだろう。

彼女達のように分かりやすい願望であれば、交渉の余地があるのだが…。

「おい、貴様」

「ぬぐっ！」

私を後ろから拘束もとい抱擁しているヒュペリオンが不機嫌そうな声で私に呼びかけてくる。

「こうやって良い女が後ろから抱き締めているというのに他の女に夢中なんて良い度胸だな。このまま絞め殺していいのだぞ…」

「ぬぐぐっ！」

口から内蔵が飛び出るのでは無いかと思えるほどに締め付ける抱擁をしてくるヒュペリオン。

確かに美女に抱擁されているのに他の女のことを考えることは失礼だろうが、状況によると抗議したい。

だが、そんな言い訳は通用しないだろう。

私はタナトスの全身粉砕骨折の抱擁にも生き延びたのだ。

ヒュペリオンの地獄の抱擁にも当然耐え抜いてみせる。

私が堪えない様子にやがて諦めたのか、ヒュペリオンの抱擁が緩む。

「俺の締め付けに暴れることなく耐えきるとはな…。ますます気に入ったぞ…んちゅ」

「うぬぅ…」

ヒュペリオンの巨大な唇が私の頭を覆い尽くしていく。

私の頭がヒュペリオンの口内へと導かれ、飴玉のようにしゃぶられてしまう。

「んちゅちゅぱちゅぱ」

「閣下っ！」

あれほど激痛が走る抱擁に耐えていた私はヒュペリオンの唇から脱

出しようと暴れる。

武器を突き付けられているエクリアの前で敵の女に愛撫されている姿は見せたくなかったのだ。

「ちゅぱちゅぱちゅぱ」

だが、ヒュペリオンは私の押さえ込むように唇を窄め、頭を飴玉のように舐め回していく。

口内の唾液の海に溺れてしまい、息が出来ない。

暴れようにも身体は見事に拘束されてしまって動くことすらできない。

ヒュペリオンは私に殺気を向けているわけでもなく、純粋に愛撫してくれているのだろう。

だからなのか、身体に力が入らない。

戦闘以外では力が発揮出来ないという欠点がこの状況で枷となってしまうとは…。

「ちゅぱ…ふふっ…貴様は美味しいな。俺の色に染め上げてやろうか…」

「ううっ…やめ…ろ…」

ヒュペリオンの熱い唾液で酔ったように項垂れてしまう。

こんな姿をエクリアに晒してしまうとは情けない。

「ヒュペリオンだけずるい！僕もロストちゃんの味見をしてみたいよ！」

「私も実験体の身体がどんな味なのかを確認したいですね」

「汝の血肉をつまみ食いするのもまた一興というものであろうな…」

他のティターンもヒュペリオンに拘束されている私に群がろうとしている。

もしかして、エクリアが見ている前で私を輪姦しようとするというのか！

「ご…御亭主様…」

いつの間にかアイテルは目を覚まし、私が美女共にやられそうな所を力無く見ていた。

こんな戦場で味方の美女達に見られている所で敵方の美女共に輪姦されるなんて冗談ではないぞ！

「ロストと言いましたね。早く決めないとあの二人の見ている所で飢えた雌獅子達に補食されてしまいますよ。自分の女が見ている所で敵の女達に犯されるなんて情けないにも程があるでしょう…」

ウラノスは冷めた目で雌獅子達の獲物になっている私を見据えてくる。

「それとも君は望んでいるというのかね？私達にやられることを…。だから、早々に選択せずに焦らさせているというのかな？」

クロノスは私がよがっている姿を楽しげに見つめてくる。

もはや考える余地も無いというのか…。

「御亭主様…拙者のことは気にせず…どうか…」

「閣下！お願いです。どうか小官を選んでください。小官はもう誰かと引き替えに助かりたくはないのです…」

アイテルの言葉を遮るようにエクリアが私に訴えてくる。

群がろうとしたティターンも動きを止めて、私とエクリアのやり取りを見ている。

「小官はもう既に数え切れないほどの人達を犠牲にしてしまいました。これは小官の我が儘だということは重々承知しています。ですが…」

私は思い出す。

エクリアはヒュプノスを助けるために同盟軍を裏切り、タナトス達を捕らえたことがあったのだ。

過去に裏切ってしまったことを悔やんでいるエクリアが誰かを犠牲にしてまで助かりたいとは思わないのだろう。

もし、ここでアイテルを選んだらエクリアは一生立ち直れなくなる

かもしれない。

逆にエクリアを選んだとしてもアイテルもまた自責の念に駆られてしまうに違いない。

どちらを選んでも角が立つのであれば、冷徹なまでにどちらが有用であるかを考えるべきだ。

……。

私とて重々承知している。

選ばなければならないのだ…。

「エクリア…」

……。

「エクリアだ！」

私は一回目は言葉を発し、二回目は大声で叫んだ。

クロノスは私の言葉に笑みを浮かべ、仰々しく頷く。

「宜しい。君の言う通り、エクリアを首輪にするとしよう」

エクリアの周囲に空間が歪み、三人の美女が出現する。

オケアノスと瓜二つの美女オケアニス達だった。

彼女達は淡々とエクリアの両脇を抱え、連れて行こうとする。

「エクリア殿！」

アイテルはエクリアに追いすがろうとするが、オケアニスの一体に阻まれる。

「ありがとう…ございます…閣下。小官を選んでくれて…」

「エクリア！」

エクリアはオケアニス二体に連れ去られていく。

目の前で成す術もなく連れ去られるエクリアを私はただ見送ることしか出来なかった。

「エクリアの無事は保証してくれるのだろうな？」

感情を押し殺した声でクロノスに訪ねる。

「君との約束は守ろう」

クロノスは笑みを消し、真剣な声で応えてくれる。

とりあえずクロノスの言葉を信じるしかない。

「済まない、アイテル。私は彼女達と共に行くことになってしまった。私やエクリアの分まで何とか反乱軍を盛り立ててくれ…」

「承りました…御亭主様…」

アイテルは私の言葉に涙ながらに頷いてくれる。

「クレイオス、あの者を癒して差し上げろ」

「分かった」

クロノスの命令にクレイオスはアイテルの近づいていく。

アイテルは私に視線を向けてくる。

「大丈夫だ。回復して貰うのだ」

私の問いにアイテルは無言で頷き、無抵抗のままにクレイオスに近づけさせていく。

クレイオスは指先をアイテルの肩に触れていく。

アイテルの身体は輝きだし、所々の傷が瞬く間に治癒されていった。

「忝ない…」

「礼はいらない。ロストが望んだからやっただけだから…」

クレイオスはアイテルの感謝に素っ気なく応じ、離れていく。

私の時とは随分と応対が違う治癒方法だったが、気にしないでおく。

クレイオスが私に近づいてくる。

ヒュペリオンは何故か拘束を解いて、クレイオスに差し出していく。
私はクレイオスの巨大な手に抱きかかえられる。
ピテスやモロスに似た無表情の顔が視界を埋めていく。
「ありがとう、クレイオス」
私はクレイオスに礼を言った。
クレイオスは無言で私の顔に自分の唇を押しつけていく。
「むぐっ！」
「ちゅうちゅるちゅぱ」
顔の皮が剥がれるのではないかというほど強い吸い付きだ。
クレイオスの唇はしつこいほどに私の顔に擦り付けられていった。
……。
「ちゅぱ…僕がこうするのは君だけ。それだけはどうか覚えていて欲しい…」
クレイオスはようやく私の顔から唇を離し、潤んだ目で見つめてきた。
どうやら私はクレイオスに特別扱いをされているようだ。

「さて、心残りはもう無いだろう。さあ、私達と共に行こうではないか」

クロノスが嬉々として両手を広げてくる。

「貴方は一生篭の中の鳥になるのですよ。哀れな…」

ウラノスは逆に哀れみの目を向けてきた。

「そうね。ある意味地獄かもしれないわね。久々の上物ということでなるべく長持ちさせたいところよね…」

妖艶な笑みを見せてくるオケアノス。

オケアノスの下には三千体もの分身オケアニスがいる。

それら全ての世話をさせるつもりなのだろう。

一体どんなお世話をさせられるのやらか…。

「精々可愛がってあげるわね。飽きるまでね…ふふっ…」

テテュスは舌なめずりして私を眺めてくる。

彼女とはなるべくお近づきにはなりたくないな…。

コイオスは気絶しているムネモシュネを抱きかかえていた。

おそらくクレイオスの代わりに預かったのだろう。

彼女の目はまっすぐと私を凝視していた。

果たして何を思って私を見ているのだろうか？

何を考えているのかが全く読めない。

私をどうやっていたぶるかを考えていなかったらいいが…。

「お前にどんな処罰を与えるのかを考えることが楽しみだよ…ひっひっひっ…」

「俺の遊戯に何処まで耐えられるかが楽しみだな…」

「ロストちゃんと遊ぶのが楽しみで仕方ないよ…」

「貴方の身体は調べ甲斐がありますからね…」

「汝の血肉を存分に貪らせて貰うぞ…」

「これで儂を退屈が解消されるかのう…」

……。

とにかく私はティターン神軍にとって都合の良い玩具だということは分かった。

生き残るためには彼女達の遊戯に耐えきることだ。

「大丈夫…壊れそうになったら僕が治してあげる。だから安心して、ロスト…」

クレイオスは私を自分の胸元へと挟み込んで抱き締めていく。

どうやら私は彼女達の手によって壊されることが確定しているようだ。

だが、私はそう簡単には壊れたりはしないぞ。

上空に渦が生じてくる。

「ポントス達は既に待っています。私達も早く行きましょう」

ウラノスはそう言って、渦へと飛び込んでいく。

ティターンの者達もウラノスに続いていく。

クレイオスも私を胸にめり込ませて、渦へと飛び立っていくのだった。

視界が暗転し、世界が移り変わっていく。

……。

……。

…。

世界が変わり、最初に見たのは目映い光だった。

私の目を焼くのではないかというほどの輝きが世界に満ちていた。
空は黄金の光で満ちており、その空の中心にある雲の上には煌びやかな居城がそびえ立っている。
「あれが私達の城だよ。元々はガイア様の根城だったものだ」
あの絢爛豪華な城はガイアの城だったというのか…。
もしかするとこの世界は…。
「そう、この世界は原初神ガイア様が支配していた神々の世界、オリュンポスだ。根元世界の中のさらなる中枢に位置する言葉通り世界の中心なのだよ」
「これが世界の中心…」
人類の誰もが到達し得なかった世界の中心地に私は足を踏み入れることが出来たというのか…。
「この居城の最深部にエロスとタルタロスがいる玉座がある。もっともエレボスとアパテー以外に立ち入った者はいないがね…」
エレボス、いや、エルしか立ち寄ったことがない玉座。
そこにエロスとタルタロスがいるというのか…。
そう言えば、いつの間にかエルの姿が無かった。

「エル…エレボスはどうしたのだ？」

「彼女はタルタロスの腹心だからね。報告に行っているのだろう。あるいは姉として妹の見舞いにでも行っているかもしれないね…」

……。

クロノスはエルとアビスが私の知り合いだということは既に把握しているということか…。

「クレイオス、後は私が彼を案内する。お前は控えていろ」

クロノスの命令にクレイオスは無言のままでいた。

少しばかり私を抱き締める力が強くなっている感じがした。

「クレイオス」

「分かった…」

クレイオスは自分のお気に入りの人形を渡すようにして私をクロノスへと預けていく。

体格が小さい私はもはや彼女達にとって人形も同然のような扱いだ。

私はクロノスの巨乳へと身体が埋められていく。

「ふふっ、君がこれから暮らす場所へと案内してあげよう。ヒュペリオン、テミス、イアペトスは来い。後の者は待機していろ」

「待っていたぜ」

「楽しみですな…ひっひっひっ…」

「では、行くとしようかのう…」

クロノスに指名された美女達は剣呑な雰囲気を漂わせて後に続いていく。

「私は失礼させて頂きます。後でまた逢いましょう。もっとも…」

ウラノスは私に近づき、頬に手を添えてくる。

「貴方が壊れていなければいいのですが…」

私に不吉な言葉を残して、ウラノスは去っていく。

……。

クロノス達は私を一体どうするつもりなのだ？

「さあ、ロスト。鳥籠へと行こうか…」

私の不安を余所にクロノスは私を抱き締めて連れて行くのだった。

……。

城の中は人が建てた城とは変わらない造りだった。

いや、人が神の城を似せて造ったというべきなのだろうか…。

歴史に残るような美しき絵画が至る所に貼られ、管弦楽団が演奏しているのか音楽が流れている。

クロノスはある絵画の前に立ち止まる。

陶磁器のような透き通るような滑らかな処女雪の肌。

毒のようでいて妖しい光を放つ深緑の瞳。

全てに輝きをもたらすような神々しい光を放つ黄金の右の瞳。

その二つの光が合わさったかのような得も知れない妖艶な黄緑色の口紅。

煌びやかで色彩豊かな軍服を身に纏い、緑色の髪を肩まで切り揃えた美女の肖像画だった。

私の男の証が元気になっていくのを感じてくる。

この絵画に映っている美女は余りにも美しすぎたのだ。

全てを射抜くような鋭い眼差し。

凍えるような雰囲気を纏わせた危うさと妖しさを併せ持った美貌。

……。

そういえば、何処かで見たような気がするのだが…。

「この肖像画に映っている女こそが神の中の神と謳われた原初神ガイア様だよ」

……。

……。

…。

何ですと！

この凛々しくて神々しい美女があの破滅の道化師ガイアの以前の姿だったというのか…。

一体何を間違えれば、あの世界的愉快犯のような道化師に変わってしまうのだろうか？

全く持って女とは摩訶不思議の生き物だ。

クロノスは肖像画に向かって手を翳す。

微かな魔力の流れを感じる。

その魔力の流れにガイアの肖像画が反応し、瞬く間に空間が歪んで渦が生じてくる。

出現した渦を見てクロノスは邪悪な笑みを私に見せてくる。

「この先が君の鳥籠になるのだ」

「くっくっくっ…」

「ひっひっひっ…」

「玩具の物置じゃな…」

ヒュペリオンとテミスは含み笑いをし、イアペトスは淡々ととんでもないことを言う。

私はこの渦の先で監禁されてしまうのか…。

クロノスは私を抱き締めて、渦の中へと足を踏み入れていった。

……。

……。

…。

薄暗い場所だった。

まるで罪人を収容する牢獄のような暗い雰囲気を漂わせた場所だ。

辺りを見渡すと骨と皮だけになって衰弱死している屍が散乱していた。

だが、最も異様だと感じたのは屍の表情だった。

どの屍の顔も愉悦に満ちた安らかな顔なのだ。

「この躯共は私達の遊びに付き合ってくれた玩具の成れ果てだ。君もその仲間入りになるかもしれないね…」

クロノスは私を痛いほどに抱き締めてくる。

私は生きながらに地獄に迷い込んだのだろうか？

ヒュプノスの狂戦士育成所でも感じたことが無い未知なる恐怖だった。

何か別のことを考えねば…。

そうだ！

「エクリアは？エクリアは何処に行った？」

「エクリア？ああ、君の首輪のことか…。彼女にはアパテーがつくことになったよ」

……。

アパテーだと？

……。

脳裏にアパテーによって壊されたタナトスやエリーの姿が思い浮かぶ。

……。

よりにもよってアパテーがエクリアについただと？

……。

私は悪い夢を見ているのか？

……。

私はクロノスの腕から逃れようと暴れる。

「エクリアがいる場所に案内しろ！今すぐにだ！」

このままだとエクリアはアパテーに壊される！

また私は大切な者を失ってしまう！

「ヒュペリオン」

「あいよ…」

クロノスの指名にヒュペリオンが前に立ってくる。

「離せ！私は…がぶっ！」

不意に息が止まり、口の中から胃液が溢れてくる。

「げほっ…ごほっ！」

ヒュペリオンの指先が私の腹を抉っていたのだ。

「さすがはクロノスが見つけた玩具だな。俺の指先で風穴が空かないとは頑丈な身体だ」

「大人しくしろ、ロスト。君は既に鳥籠の中にいるのだからね…」

顎に胃液を垂らしながら私はヒュペリオンを睨み付ける。

「本当に活きの良い玩具だな」

ヒュペリオンは獰猛な笑みを見せ、再び指先で私の腹を抉ってくる。

「ぐぼっ！」

胃液の次は血が吐き出されていく。

「無駄な抵抗は身体に毒じゃぞ。首輪の安否はお主の態度次第なのじゃからのう」

「ぐふっ…うぐぅ…」

項垂れている私をクロノスは塵でも投げ捨てるように床へと放り投げていく。

「がはっ！」

私は受け身を取ることも出来ず床へと叩きつけられてしまう。

「玩具が口五月蠅く喋るな。君はもうロストでも何でもない。私達の単なる遊び道具に過ぎないのだ。テミス、イアペトス、やれ」

「うごっ！」

クロノスの巨大な足が私の腹を踏みつけてくる。

「ひっひっひっ、まずは磔刑に処すね」

「ぎゃああっ！」

両手両足首に剣が突き刺さり、思わず悲鳴を上げてしまう。

クロノスは手足が磔で動けなくなった私から足を離し、代わりにイアペトスが前に出てくる。

「さてと、戒めを彫ってやろうかのう。かなり痛いが我慢するのじゃぞ」

イアペトスは爪を煌めかせ、私の胸に突き立ていく。

「うぐっ！」

「それ、地獄の苦しみの始まりじゃ」

突き立てられた爪はそのまま文字を書くように引かれていく。

「ぐあああああっ！」

「儂の爪は神経に直接刺激を与えるからのう。痛みに強い者でも容易く泣き叫ぶのじゃ」

爪が動く度に肉が引き裂かれ、身体が血に染まっていく。

「おいおい、その程度で発狂するなよ。俺の楽しみが減ってしまうからな」

「ひっひっひっ…寧ろ正気を失った方が幸せだと思うよ。だけど、そうなったときは首輪はもう用済みだね」

私が正気を失うとエクリアが殺されてしまうのか…。

いや、タナトスやエリーのように壊されてしまうこともありうるのだ。

もう彼女達のような犠牲者を増やしたくはない。

だから、どれだけ発狂しそうな激痛に襲われようとも私は耐えねば！

「うおおおおおっ！」

悲鳴を咆吼へと変え、私は意志を保ち続けていく。

「なかなかの根性だね。だけど、少々耳障りだ。ヒュペリオン…」

クロノスの促しで、ヒュペリオンは指先で私の両頬を掴んでくる。

「五月蠅いから少し黙ってろよ」

「うおおおっ…あがっ…」

顎が外されてしまった…。

もはや思うように声も上げることすらも出来なくなってしまった。
身体に特殊な紋様のようなものが刻まれていく。
声も上げることもままならず正常な思考が焼き切れていきそうだ。
「唸り声も上げることも出来ず、無言で耐えている姿もなかなかそそるものがありますな…ひっひっひっ…」
「貴様の大切な者を守りたければ、俺達の玩具として役立つしかないのだからな」
「その調子で我慢するのじゃぞ。そうでなくては張り合いが無いからのう」
イアペトスはゆっくりと時間を掛けるように爪を動かしてる。
痛い。
苦しい。
涙が出てくる。
何もかもが嫌になってくる。
生き延びることはこれほどまでに苦しいことなのか…。
「泣き叫ぶことも出来ず苦しいだろう。だが、これが君の日常になるのだよ。私達の鳥籠の中で君は一生玩具として過ごしていくのだ。ふはははっ…己の運命に嘆くがいい…あはははははっ！」

クロノスの嘲笑が響く中で私は絶望に打ち拉がれようとしていた。

永劫とも言える苦痛が私の日常となってしまうのか…。

これほどの苦痛を味わうのであれば、エクリアを見捨てても…。

……。

いや、駄目だ！

それだけは絶対に…。

今のところは彼女達が飽きるまで耐えきるしかない…。

痛みに耐えて生きていれば、いつかきっと…。

僅かな希望に縋って私は意識を保ち続ける…。

絶望の夜が必ず明けていくことをただ信じて…。

……。

……。

…。

第100話：SACRAMENT

……。

激痛に耐えてどれぐらい経ったのだろうか…。

やがて、私の身体に刻みつける作業が終え、イアペトスの爪がやっと離れていく。

ヒュペリオンは再び私の両頬に手を添えていき、外れた顎を嵌めてくれた。

「も…もう終わりなのか…はぁ…はぁ…」

顎がはめられて話すことが出来るようになった私は息切れをしながらもイアペトスを睨み付ける。

そんな私にイアペトスは感心したような笑みを零してくる。

「ほほう、長生きはしてみるものじゃな。まさか儂の戒めに耐えきる者がいようとはのう」

ヒュペリオンとテミスも楽しげに私を見つめてきている。

「さすがは俺が目を付けたことがある。そうこなくてはな…」

「磔刑から生還する。救世主気取りのつもりかな？」

クロノスは私の胸を鷲づかみにして、顔を近づけてくる。

「まずは第一段階は突破出来たということで、おめでとうとでも言っておくよ。私を楽しませてくれる玩具よ…」

「私は…ロストだ…」

私の問いにクロノスは嗜虐的な笑みを見せ、胸に指を食い込ませていく。

「ぐぅ…ああっ…私は…貴様等に…屈さないぞ！」

クロノスの指が食い込み、胸が潰れそうになるが、私は必死に耐える。

エクリアのためでもあるが、私のなけなしの誇りに賭けても屈したりはしないぞ！

「ふふっ…墜とし甲斐があるね、君は…。良いだろう。今日は君の根性に免じて褒美を与えてあげよう。私自らがな…んちゅ！」

「むぐっ！」

クロノスの唇が私の顔を覆い尽くしてくる。

「んちゅうううっ」

顔の皮が千切られそうだ。

しかも歯が食い込んで痛いぞ！

口の中に巨大な何かが入ろうとしている。

クロノスの舌なのか？

それは不味い！

こんな巨大な舌が私の口に中に入ってしまえば、また顎が外れてしまう。

私は必死に口を閉じて、侵入を阻もうとした。

だが、食い込んでいた歯がさらに深く突き立てられ、痛みで思わず口を開いてしまった。

「もごぁあああっ！」

案の定、顎が外れてしまい、激痛と共に舌の侵入を許してしまう。

さらに喉の奥まで舌が侵入していき、窒息しそうになったが、不思議と苦しくなかった。

クロノスが何らかの魔法で窒息しないようにしているのだろうか？

『ふふっ…君の内側から吸い尽くしてあげるよ…』

頭の中でクロノスの声が響いてくる。

クロノスの舌が体内へと侵入し、不気味に蠢いていく。

それが途轍もなく心地良い感覚を全身にもたらせている。

「ぢゅるぢゅるぢゅるるるっ」

身体の中からいやらしいほどに下品な音を立てて、何かを啜っている音が響く。

これは舌が私の体内の何かを啜っているのか！

『ふふっ…君の命そのものさ。私を初めとするティターンは舌先にはもう一つの口がある。それで大抵は人の血肉を吸い尽くすのだ。普通の口では小さき者の肉を引きちぎって食べることになるからね…』

「ちゅぱ…」

クロノスの唇が離れ、私は異様な光景を目にしてしまう。

舌が蛇よりも長く、私の口内から伸びていた。

彼女達はただ巨大なだけではない。

人とは根本的に造りが違う生き物だったのだ。

『これが私の口付けの変わりだ。何せ小さき者である君と繋がってしまうと口付けを交わせなくなるからね。さてと、もういいだろう。テミス』

「ひっひっひっ…分かっているよ…」

テミスの声と共に両手両足首に刺さっていた剣が消えて、血が溢れ

だしてくる。

悲鳴を上げそうになったが、クロノスの舌で塞がれて出来ない。

私は自由になった手を動かそうとするが、両手が鷲づかみされて再び動けなくなる。

テミスは右手をイアペトスが左手をそれぞれ掴んでいた。

「鞭の後は飴を与えることが調教の基本さ…ふふっ…」

右手がテミスの女の中へと呑み込まれていく。

「お主には儂が満足するまで存分に慰めてもらうおうかのう…」

左手がイアペトスの女の中へと吸い込まれていった。

二人とも私の手を食いちぎるのではないかというほどに凄まじい締め付けだ。

「ふはははっ…審判者たる私の中を姦通するなんて万死に値する重罪ですな。その罪をお前の身体に刻みつけてくれるわ…れろっ」

テミスの唇からも触手のように巨大な舌が伸びてくる。

舌の先端には蛭のような口吻が見えていき、私の首筋に巻き付きながら、先端が胸元へと押し当てられていく。

鋭い痛みと共に急激に胸から何かが吸われていくのが感じる。

『お前の罪の味を堪能させてもらうよ…ひっひっひっ』

「ぢゅるるるうっ」

私の胸に吸い付いてるテミスの口吻から血が流れ出ていた。

テミスの中は私の手を咀嚼するように血や生気が吸い取っているのだ。

これもまた病みつきになるような危ない快感がもたらされる。

私の理性が削り取られそうな危険な快楽だ。

「儂ももう少し味見させてもらおうかのう…れろっ」

イアペトスも私の手を咀嚼しながらも唇から舌を伸ばし、私の胴体に巻き付いてくる。

私の身体がイアペトスの唾液に塗りたくられ、巻き付いた舌の先端が腹部へと押し当てられる。

これもまた激痛が走り、血と生気が貪られていく。

『実に美味じゃ。これは癖になりそうじゃのう…』

「ぢゅぱぢゅぱぢゅぱ」

身体が寒くなってきている。

激痛で熱くなった身体が心地良く冷えていくような…。

血あるいは生気が不足しているからなのか？

これは治癒魔法を使わなければ、冗談抜きで死んでしまう。

私は魔力を溜めようとした瞬間に全身が焼き尽くされるような痛みに苛まれる。

何なのだ、これは！

『ふふっ…これこそがイアペトスが刻んだ戒めだ。君の魔力に反応して全身に苦痛を与える呪いなのだ。もう君はただの人なのだよ』

頭の中でクロノスが絶望的な言葉を響かせてくる。

魔力に頼れないということは私は生身のままで根性を出して耐えねばならないということなのか…。

……。

だが、魔力に頼らずとも喧嘩番長として数々の修羅場を乗り越えてきたのだ。

私の神の領域にも勝る生存能力はその程度のことでは揺らぎはしない！

「くっくっくっ…今度は俺も楽しませてもらうぞ」

ヒュペリオンの声が聞こえ、私の両足が掴まれる。

「俺の女はティターンで一番大きいからな。貴様の両足で満足させてもらおうか…」

クロノスの影になって見えないが、私の両足が熱く柔らかい何かに呑み込まれいくのが感じる。

私の足からも血と生気が吸われていく。

意識が遠のきそうになってくる。

もし、ここで寝てしまえば永遠に目が覚めなくなってしまうかもしれない。

私は美女を侍らせて腹上死を迎えることで生涯を閉じたいと思っている。

だが、これでは衰弱死か失血死で生涯を閉じることになってしまう。

それは私の望むことではない。

私は最強の力を手に入れたのだ。

ならば、この肉体もまた特別製で最強であるに違いない。

だから、耐え抜いてみせるぞ！

「ふふっ…まさか魔力が封じられているにも関わらず、未だに意識が保てれるとはな…。ならば、俺も遠慮無くやるまでだ…れろっ」

……。

私の尻に生暖かいものが触れているのを感じる。

これは…。

……。

「むごおおおおおおおおおおおおっ！」

私の口とは別の所から生暖かいものが侵入してきているぞ！

何て事だ！

これでは私が本格的に陵辱されているみたいではないか！

私は殿筋に力を入れて何とかヒュペリオンの舌の侵入を拒もうとする。

しかし、唾液で濡れているため、滑るように侵入をしてくる。

『俺の舌で貴様を骨抜きにしてやろう…』

「ぢゅるぢゅるぢゅる」

クロノスの舌と同様に身体の中から血と生気が吸われていく。

命の危機に晒されているというのに抗えない程の快感が私の身体を貫いてくる。

この快楽に身を任せてしてしまったら、私は間違いなく身も心も玩

具に成り果ててしまうに違いない。

私はとろけそうになる理性を必死に維持していこうとする。

クロノスとヒュペリオンの舌が妖艶に蠢き、私の体内に言葉で言い表せない程の快楽を容赦無く叩きつけてくる。

『大分粘るようだけど、これで君は堕ちることになるだろう』

今まで私の口内から体内へと舌で嬲ってきたクロノスが私の男の証を指先で掴む。

クロノスは人の頭を飲み込めるほどの自分の女で私の男の証を呑み込もうとしてくる。

私の理性に止めを刺そうというのか…。

だが、それでも私は耐えてみせるぞ。

貴様等と私とでは背負ったものが違うということを思い知らせてやる。

『これで君は私のものだ！』

クロノスの女に呑み込まれ、私の身体が硬直してしまう。

何たる破壊力だ！

クロノスの女の中では私の男の証は余りにも無力な存在だった。

一気に締め上げられていき、欲望が絞り出されていく。

『あああああああっ…これだ！私はこの感覚を求めていたのだ！まだ萎むのは許さない！限界まで私に捧げるのだ！ロスト！はあああああっ！』

クロノスの狂おしいまでの求めが私の頭の中で響いてくる。

私の男の証は休む間も無く、強制的に叩き起こされ、クロノスに奉仕することを強要されていく。

『主食はクロノスに譲るとして、俺達は貴様の血と生気を徹底的に貪らせてもらうぞ』

『これこそが肉の磔刑、罪人にとっては夢のような処罰ですな…ひっひっひっ』

『お主に血と生気は美容に効果がありそうで良いものじゃのう。若返るような気分じゃ』

他の美女達も舌と激しく蠢かせ、力強く四肢を締め付けてくる。

「「「「ぐちゅちゅぷちゅぱぢゅるぢゅるぢゅううううっ」」」」

私の身体が絞り滓になるのではないかという程に血肉が吸われ尽くされていく。

耐えるのだ、ロスト！

エクリアを守るためにも！

あるいは男の尊厳を守るためにも！

ひたすら堪え忍ぶのだ！

『さあ、堕ちろ！ロスト！そして、私のものになれ！』

それは死んでも御免被るぞ！

私は声にならない咆吼を上げて、耐え続ける。

……。

……。

……。

……。

……。

「初めてだよ。私達四神がかりで攻めて耐えきる者がいるとはね。見直したよ…んちゅ」

クロノスは額の汗を拭い、床で血塗れで干からびている私の顔に口付けしてくれた。

「やはり貴様は俺が見込んだと通りに者だったようだな。見込み通

りで嬉しいぞ…んちゅうっ」

「ひっひっひっ、罰に耐えきるとはまさに罪人の鑑ですな…ちゅぱ」

「儂の若い頃を思い出せる見事な奮闘じゃ…んっ」

他の美女達も健闘の接吻を私の顔へと振らせてくる。

接吻よりも身体の傷を治癒してくれたほうが嬉しいのだが…。

私はもう言葉を発する気力も残っていなかったのだ。

「さてと、今日はここまでとさせてもらうかな。では、お休み、ロスト。また明日も遊ばせてもらうよ。もっとも…」

「お主が明日まで生きていればの話じゃがな…」

「なるべく生き延びろよ。俺の楽しみのために…」

「ひっひっひっ…」

指先一つ動かせない私を放置したままクロノス達は去っていく。

私を放置したまま立ち去るとは敵ながら見事なまでに無情だな…。

尻から血が流れている。

まだヒュペリオンの舌で彫られてしまった感触が残っている。

男でありながら、まるで処女を奪われたような気分だ。

魔力は使うことは出来ないが、私の最強の肉体ならば超回復で何とか持ち直すことができるだろう。

固い床の上であることは大いに不満だが、とりあえず休もう。

今は快楽よりも睡眠が欲しい…。

……。

……。

……。

…。

暖かい感触だった。

固くて冷たい床の感触ではない。

これはベッドの布団だ。

私はクロノス達に放置されて薄暗い床下で力無く横たわっていたはずだ。

ならば、私は誰かに救出されたのだろうか？

私は重たい瞼を開いていく。

視界に映ったのは美女の顔。

この美女は私を治癒してくれたクレイオスだ。

「クレイオス…」

「無事で良かった。僕は物凄く心配した…」

クレイオスは無表情ながらも私を心配したと言ってくる。

「無事に生き残ったみたいね」

不意に別の声が聞こえてくる。

私の顔を見つめているクレイオスが後ろに控え、代わりに眼鏡を掛けた美女が私の顔を覗き込んでくる。

ティターンの中で眼鏡を掛けている美女と言えば、確か…。

「テイア…」

私の言葉に正解と言わないばかりに冷たく微笑む眼鏡美女。

「正解よ。忘れていたら実験段階の薬物を投与するところだったわよ」

思い出せて心底良かった。

テイアは眼鏡を光らせて私の顔を無言で覗き込む。

眼鏡の奥から除かれる凛々しい目が何となく私のやましい心を見透かすように見えてくる。

「非論理的だけど、貴方とは何故か初めて逢ったような気がしないわ。何処かで逢ったことがあるような気がする」

聞きようによっては誘っているようにも聞こえるな…。

だが、相手は私を散々に陵辱してきたティターン神軍の一神。

そんな甘い相手ではないということは骨の髄まで思い知らされている。

「まあいいわ。貴方は存在自体が非論理的だから今更ね…」

テイアは地味に酷いことを言い、背中を向けてくる。

どうやら尋問は終わったようだ。

とりあえず今は疲れているから何もしないで欲しい。

私はふと部屋を見渡す。

クロノス等に案内されたような薄暗い牢獄ではない。

高級旅館の一室のような清潔感のある部屋だった。

何よりも驚くべきことは部屋が異様に広く、ベッドも大きい。

この城では私以外は全て巨人しかいないということなのか…。

「ちなみに介抱したのはクレイオスではなくて、ムネモシュネよ」

テイアは薬物らしきものをいじりながら言ってくる。

「ムネモシュネは血塗れになっている君を必死に介抱していた…」

クレイオスもテイアの言葉を追随するように言ってくる。

まさかムネが私を助けたというのか…。

彼女とはティターンの中でも最初に関わった者だ。

私の記憶をいじって籠絡しようとしてきた不届きな輩だったが、アイリ達に逢わせてくれたこともあって憎めずにいた女性だ。

「ムネモシュネは何処にいるのだ?」

「貴方を私の部屋まで介抱したらすぐに出ていったわよ。彼女は恥ずかしがり屋だったからね…」

ムネモシュネが恥ずかしがり屋だと?

……。

『私はムネモシュネ。ねえ、坊や。私にその身を捧げれば、醒めること無き永遠の楽園を夢見させてあげるわよ…』

……。

本当に恥ずかしがり屋なのか？

女とはやはり不可思議な生き物だ。

……。

まあいい。

それよりもテイアには聞きたいことがあったのだ。

「テイア、聞きたいことがある」

「アパテーのことかしら？」

テイアは私が聞きたいことを先読みするように逆に聞き返してくる。

私は思わず言葉を失ってしまった。

そんな私の様子を見て、テイアはため息をついてくる。

「まあ、貴方とはまだ逢って間も無いし、聞きたいことと言えば、それしか思い浮かばなかったわ。アパテーの名前を聞いたときの貴方の反応は興味深かったから…」

……。

『アパテーは言っていた。貴方は良質な実験体になりそうだと…』

……。

テイアは間違いなくアパテーとは縁が深い者だ。

エクリアはアパテーに囚われてしまっている。

テイアならば、何か知っているかもしれない。

「アパテーとは一体どういう関係なのか教えてもらえないだろう？」

私の質問にテイアは暫し沈黙する。

クレイオスは相手にされていないことで寂しく思ったのか、私の身体を掴んで自分の膝の上に乗せてきた。

お気に入りの人形として抱き締められている気分だ。

恥ずかしい気分だったが、背中に伝わる感触が心地良いことから不快では無かった。

テイアは言い辛そうに沈黙を破ってくる。

「彼女はいわば私の弟子、あるいは助手というべき存在だったわね…」

アパテーがテイアの弟子兼助手だったというのか…。

別に驚くことでは無いが、テイアの様子から良いことでは無いように思えてくる。

「彼女は本当に優秀だったわ。私の持つ知識技術を見事なまでに自

分の物にして発展させていったのだから。けど、それ以上に彼女は貴方以上に非論理的で不可解な存在だった」

テイアはアパテーの師であったが、好意的では無いように見えた。

それよりも私以上に非論理的な存在とは具体的にどういうことなのだろうか？

「アパテーは一体どんな奴なのだ？」

「強いて言うのであれば、彼女は嘘つきね。そう、嘘つきアパテーよ」

嘘つきアパテー。

四肢狩りアパテーや脳無しアパテーに続いて、今度は嘘つきアパテーときたか…。

「誰もアパテーの本当の姿を見たことが無い。姿というよりは性格と言った方がいいかしら。聞く者によっては残虐であったり、慈悲深かったり、天使であったり、悪魔であったり…。どれが本当の彼女であるのか誰も分からない。ただ一つ言えることは彼女は世界の全てを欺いているということね」

「それで嘘つきアパテーということか…」

世界の全てを欺く女。

これも女の神秘だというのだろうか。

とにかく一筋縄ではいかない相手だということは分かった。

「テイアから見て、アパテーはどういう印象だった」

「勉強熱心で研究に熱意を持っている女性という印象だったわね。まあ、世界の全てを欺いているというのは言い過ぎたかもしれないわ。誰しもが何らかの形で自分を偽って生きているのだから…」

テイアは再び私の方へと顔を向けてくる。

何となくだが、眼鏡が光ったかのように見えた。

「誰もが嘘つきだということなのか？」

「そこまでは言ってないけど、そうね。貴方の前に嫌いな者と好きな者がいました。貴方はどちらに対しても同じ態度で接する？」

私は暫し考えて答える。

「違う態度で接するだろうな…」

嫌いな相手に好意的には接しないだろうし、好きな相手に嫌悪感を漂わせて話すことは有り得ない。

だから、違う態度で接することになるだろう。

「そう、極端な話、誰もが人によっては自分を変えて接するわけよ。仕事では嫌いな相手でも表面上は好意的に接することもあるし、逆に好きな相手に対して敢えて嫌悪感を抱かせるように接することもある。公私を分別して態度を変えたり、偽ったりして相手を欺いて

世界を渡り歩く。生きる術として重要な技術ね」

テイアは淡々と言っていた。

そういえば、クロノス等も私を陵辱するときと普段話すときでは態度が違っていた。

アパテーの改造されてしまったエリーも人によっては態度を豹変させたり、今までに見たことが無い一面が見られた。

ガイアもまたティターンが見たガイアと私が見たガイアとは性格が違うように思えた。

色香を振りまくムネモシュネも実は恥ずかしがり屋だという衝撃的な事実も知った。

誰しもが自分を偽っている部分があるということなのか…。

「アパテーはそうならなければいけない環境下で生きてきたのだと思うわ。だからこそ世界を、自分さえも欺いているのかもしれない。ある心理学者はそれを自己の外的側面、仮面と例えていたわ。周囲に適応するために仮面を被ること、あるいは仮面を被らないことで周囲や自分が苦んでしまうこと…」

相手を欺くための仮面は誰しもが持っている。

しかも相手に対応するための複数の仮面を持っている者がいる。

私もまた相手を欺くための仮面を無数に持ってるのかもしれない。

「一番危惧することは自分が仮面を被っているか、そうでないかが分からなくなることよ。仮面を普段から被っていると仮面こそが自分の素顔だと思い、自己を喪失してしまうの…」

「仮面こそが自分の素顔だと思いこんでしまうということなのか…」

自分を偽る余り、偽りの自分こそが本当の自分だと思うこと。

それは確かに恐ろしいことだ。

自分を見失ってしまうのだからな…。

「気を付けて。本当に恐ろしい嘘つきは無自覚に偽り、自分さえも騙すことが出来る者、素顔そのものが嘘という仮面で塗り固められてた者よ」

それこそが嘘つきアパテーだということなのか…。

自分をも騙すことが出来れば、自身そのものが嘘であることから相手を騙すことは容易いことなのだろう。

確かに一番恐ろしい嘘つきだ。

「仮面を外すことが出来る時はどういうときなのだ?」

「少しは自分で考えたらどうなの。逆に聞くわ。どういう時だと思う?」

私の質問にテイアは微笑み、眼鏡を外して、近づいてくる。

クレイオスは私の抱き締めたまま微動だにしない。

「気心が知れた友人や家族と…接する時だろうか？」

テイアの顔が私の顔の前に来ている。

眼鏡を外したテイアの顔は知的な顔から打って変わって挑発的な美貌が際立っていた。

余りの美貌に私は息を呑んでしまう。

鋭い眼光を宿した青紫の瞳が私を捕らえている。

「そうね。親しい友人と家族と接すれば、確かに仮面を外すことが出来ると思うわ。けど、それよりももっと容易く仮面を脱ぎ捨てる方法があるのよ。分かるかしら？」

テイアが吐息を私の頬に吹きかけてくる。

「何をするつもりだ？」

「分かるはずよ」

テイアは私の側頭部に巨大な唇を押しつけてくる。

「ちゅううううっ」

私の頬や耳が千切れるほどに強い吸い付きだ。

「僕もする…ちゅ」

反対側の側頭部からクレイオスの唇らしきものが押しつけられていくのを感じた。

二人の大きな唇で私の頭が挟み込まれている。

「「ぬちゅちゅぱちゅる」」

両頬と言わず、顔全体に二人の唇が押しつけれ、私の頭はあっという間に唾液まみれになっていく。

暫くしてテイアは私の頭から唇を離し、クレイオスも倣うように離していく。

「気分はどう？」

「どう、と言われてもただ気持ちいいとしか言いようがない…」

テイアは私の男の証を指先で掴んでくる。

「仮面を剥がし、素顔を晒す最も有効な方法、それは本能に身を任せることよ。クレイオス、貴方は最後に頂きなさい。どうせ、彼はティターン神軍とウラノス等全員から洗礼を受けて壊されるだろうから…」

「分かった…」

クレイオスは身を引き、姿を消していく。

それにしてもテイアは今聞き捨てならないことを確かに言っていた。

「全員から洗礼を受けるとはどういうことだ？」

「クロノスから聞いたはずよ。貴方は私達の玩具。ちなみに私にとって貴方は生きの良い実験体」

不意に笑みを浮かべるテイアの顔が二重に見えてくる。

視力が悪くなったというのか？

それに何だか気分がむらむらする。

「効果が出てきたみたいね。実は先ほどの接吻で貴方の身体に媚薬を塗りつけたのよ。さあ、仮面を脱いで素顔を晒しなさい」

「ううっ…」

テイアに塗りつけられた唾液の中に薬が混ぜられていたというのか…。

私はベッドから転び落ちて、テイアの部屋から出ようと床を這っていく。

先ほど散々とクロノス等から搾り取られてしまったのだ。

気持ちいいと言っても、連戦はさすがに御免被るぞ。

「ぐほっ！」

背中に圧力が掛かってくる。

私は後ろを振り向き、背中にテイアの巨大な足が置かれていることに気づく。

「逃がさないわよ。クロノスから聞いていると思うけど、貴方は物同然に扱われることになるの。だから逆らうことは許さない」

「うぐっ…」

テイアの体重が掛けられて、身体が潰れてしまいそうだ。

先ほどまではアパテーのことを教えてくれたりと親切な女性かと思ったが、やなりクロノスと同じティターンの一員だ。

テイアもまた今まで仮面を被っていたということなのか…。

「これから本格的に貴方を調べ尽くしていくわ…」

テイアは足を退けて、代わりに私の頭を鷲づかみして吊し上げていく。

私は無抵抗のままだった。

おのれ…。

エクリアが人質になっていなければ、貴様等などには…。

「悔しそうね。けど、抵抗したら首輪が壊れてしまうわよ。それでは実験素材として貴方の中に流れる体液の四割ほど頂こうかしら…れろっ」

私の肩が生暖かいものが触れた瞬間に激痛が走ってくる。
テイアの舌先から血が吸われているのだ。
「ぢゅるぢゅるぢゅる」
『ふふっ…普通の人間なら四割ほど血を抜き取られてしまえば死ぬけど、貴方なら平気でしょう。苦しくないように気持ちよくもしてあげるわよ』
テイアは私の男の証を掴み、自分の女の中へと入れていく。
『あううっ…当然、ここの体液も四割、いえ、五割ほど頂くわよ。覚悟しなさい』
「うおっ…もう私はクロノス達から絞り取られ…うごっ！」
私の首がテイアの腕に締め上げられ、言葉が出なくなってしまう。
『実験体はただされるがままになればいいのよ。言葉はいらないわ』
「ぢゅうううううっ！」
身体から再び血と生気が搾り取られていく。
その引き替えに得も知れぬ快感が全身に行き渡っている。
これがテイアの洗礼だというのか…。

『貴方の血肉にある遺伝子は神の子を引き寄せる因子があるはずよ。それを解明すれば神を思うがままに操る遺伝子を造り上げることが可能になるわ』

神の子。

……。

『エロス曰く、神の子とはすなわち神の血を受け継ぎし者、あるいは神の祝福を受けし者の総称だ…』

……。

ヒュプノスが確かそう言っていたことを思い出す。

そして、私と神、あるいは神の子は何故か引き寄せられる運命にあるとも言っていた。

テイアは私の血と神の子の因果関係を解明しようとして私の身体を調べ尽くそうということなのか…。

『さあ、貴方の遺伝子を私に捧げなさい。それが貴方の存在価値なのだから…』

「ぢゅるぢゅるぢゅる」

テイアは私の疲労などお構いなしに容赦無く体液を搾り取っていく。

こちらが何も出来ないまま為すがままというのは生殺しに等しいものだ。

まさに快楽の檻に閉じこめられた囚人とも言える。

私はひたすらテイアに命の液を吸われ尽くされていくのだった。

……。

……。

……。

……。

……。

…。

「これで当分の間は実験の素材に困ることは無いわ。感謝するわ、ロスト…ちゅ」

テイアは干物になった私に口付けをし、ベッドに横たわらせてくる。

先ほどの狂った女とは思えないほどの優しい対応だった。

テイアは眼鏡をかけ直し、ベッドの端の椅子に腰掛けて私を見つめてくる。

「私の実験に付き合ってくれたお礼に良いことを教えてあげる。貴方の首輪は今のところは五体満足でいるらしいわ」

「そうか…」

とりあえずエクリアがアパテーにまだ酷い目に合わされていないことが分かっただけでも収穫だ。

だが、アパテーの毒牙に掛かってしまうのは時間の問題だ。

その前に何としてもエクリアを助けださねば…。

「変な気は起こさないことね。その呪いがある限り、貴方が不審な行動を起こせば、イアペトスにすぐに知らされることになるわ」

テイアの言葉を聞き、イアペトスに刻まれた身体の傷を見る。

見たことが無い紋様で刻まれ、血が僅かに滲み出ていた。

そう言えば、私はイアペトスによって力を封じられていたのだ。

この体たらくではエクリアを救い出すどころか逃げ出すことすらも出来ない。

「この部屋は好きに使って良いわ。精々玩具生活に慣れることね。身も心も私達に預ければ、貴方にとってここは楽園になるはずだと思うから…」

テイアはそう言って、部屋から出ていった。

……。

私はこのまま奴等に飼い殺しにされてしまうのだろうか…。

エクリアを助けることも逃げ出すことも出来ない状態。
力も封じられて無抵抗のまま玩具として弄ばれる状態。
まさに八方ふさがりだ。
どうしようもない状況だ。
テイアの言う通り、身も心も彼女達に捧げれば楽になれるかもしれない。
痛めつけられているが、快感をもたらしてくれていることには変わりないのだ。
だから…。
いや、それでも…。
……。
不意を打つように部屋の扉が乱暴に開ける音が響いてきた。
私は部屋の侵入者に目を向ける。
漆黒の軍服に黄金の髪を靡かせた美女。
ガイア四高弟の一神ウラノスだ。
背後にはイアペトスやテテュス、ポイベ、レアがいる。

「ロスト、貴方はこれから私達と一緒に来てもらいます。拒否は認めません」

ウラノスは私を見下しながら傲慢に言い放つ。

「分かった…」

私は言われるがままに立ち上がる。

「やっとあんたを調教できると思うと血が滾ってくるわ…ふふっ…」

「いよいよ汝の血肉を喰らう時が来たわけだ」

「僕、ロストちゃんと遊ぶのを心待ちにしてたよ…」

「儂は血の気の多いお主等を止めるお目付役かのう」

イアペトス達は私を嘲笑いながらウラノスの後に付いてくる。

私は無言で既に背を向けて部屋から出ていくウラノスの後に続いていった。

……。

……。

…。

ウラノス等を追い、テイアの部屋に出た瞬間に視界が暗転して私は

別世界へと降り立つ。

そこは血に塗れた大地が広がり、周囲には円形状の建物が囲っていた。

まるで何らかの催し物をするための会場のような場所だ。

「ここは貴方達人類がかつて戦争で捕らえた捕虜や奴隷を殺し合いさせたと言われる伝説の闘技場を再現させた世界です」

血塗られた大地は殺し合いをさせた者達の血だというのか…。

会場の真ん中にはティターン神軍と四高弟がいた。

ティターン神軍の方はテイア、ムネモシュネ、オケアノス、クレイオス、コイオスがいなかった。

四高弟は二神揃っており、ウレアの他に初めて見る美女が一神がいた。

水色の短髪に翡翠色の唇を瑞々しく光り、薄青色の瞳を煌めかせていた美女だ。

青い法衣の上に白銀の鎧を纏い、背丈は私の頭三つ分ほど高い歴戦の女戦士の雰囲気を漂わせていた。

「地獄へようこそ。哀れなる玩具よ。わたくしはガイア四高弟が一神ポントスと申します。以後お見知り置きを…」

ポントスと名乗った女性は洗練された執事のように優雅に一礼して

みせてくる。

「なるほど、貴様は地獄の案内人ということか…」

私の言葉にポントスは不敵な笑みでもって応える。

彼女達は筋金入りの戦闘狂集団だということはアレクから聞いていた。

この闘技場で彼女達の娯楽のために私を戦わせるつもりなのだろう。

「私一人を貴様等でよってたかって痛めつけるわけか。玩具のように…」

「そこまで理不尽なことはしないさ。無論一対一の決闘で君に戦ってもらうのだよ。言っただろう。不平等で一方通行な戦いは面白くないとね…」

私の悪態に応えたのはクロノスだった。

「ただし、勝ち抜き戦となるけどね。君一人が私達と順番に戦うのさ」

クロノスの言葉に私は息を呑む。

つまり私一人でガイア四高弟とティターン神軍合わせて十六神を順番に戦わなければならないのか…。

これも充分に不公平で一方通行な戦いだと思うのだが、そこは追求しないほうがいいだろう。

下手に怒らせて一対多数になってしまったら終わりだ。

「顔が青ざめているようだけど全員を相手にするわけでもないよ。ティターン神軍は私とイアペトス、テイア、オケアノス、コイオス、クレイオス、ムネモシュネは不参加だ」

「そして、ガイア四高弟は私とウレアを不参加とします。だから貴方は七神と順番に相手をしてもらうことになります」

クロノスとウラノスはそれぞれの陣営から戦う相手を指定してくる。

つまり私が戦う相手は…。

ティターン神軍の中からはテテュス、ポイベ、レア、ヒュペリオン、テミス。

四高弟の中からはポントスとティフォンが相手となるわけか…。

「この時だけはお主にかけた呪いを限定的に解いてやる。安心して全力で戦うが良いぞ」

どうやらイアペトスは一時的に呪いと解いてくれるようだ。

イアペトスがもし戦う相手に入っていたら、半殺しにして呪いを解いてもらう方法を一瞬考えた。

だが、エクリアが人質になっていることから無意味な抵抗に終わってしまうだろう。

それよりもガイアが二番目に苦戦したというティフォンが数に入っていることが厄介だ。

問題のティフォンらしき者の姿は見えないが、敢えて聞くまでも無い。

どの道戦うことになるのだろうからな…。

「お前に裁きを下せるのが楽しみで溜まらないよ…ひっひっひっ…」

「貴様は俺を楽しませる義務があるのだ。無様な戦いは万死に値すると思え…」

私は自分に殺気を向ける輩を見据えていく。

薄暗い場所で散々と虐待し、陵辱されたことを思い出す。

テミスとヒュペリオンにはあの時の借りを必ず倍返しにすると私は心に誓う。

とりあえず一時的とはいえ、呪いが解けたことで全力で戦えることが不幸中の幸いだ。

……。

ここからが彼女達の真の洗礼が始まるのだろう。

だが、私は決して屈したりはしない。

床では一方的にやられてしまったが、戦いとなれば話は別だ。

必ず貴様等を全員漏れなく伸してやるぞ…。

そして、受けた屈辱を倍返しにしてやるのだ…。

第１０１話：ＧＬＡＤＩＡＴＯＲ

闘技場の中心では私と六神が対峙していた。

テテュス、ポイベ、レア、ヒュペリオン、テミス、ポントス。

ティフォンは未だに姿を見せていない。

両者の間に立つのは不参加を表明した四高弟の一神ウレアだ。

「ここは普通は審判者テミスがやる役目なんだけど、テミス自身が戦うということで仕方なしに審判を務めさせてもらう。両者悔いの無いように戦えよ」

物凄くやる気無しで適当そうな審判だ。

だが、おそらく審判は形だけなのだろう。

彼女達が堅苦しい規則を定めて戦うとは思えない。

精々一対一であれば、後は好きにしろという形になるに違いない。

「とりあえず特に規則は無いから好きに戦え。まあ、一応一対一だからな。加勢とかはしないようにな。以上！」

ティターンと四高弟側は濃厚な殺気を放ってくる。

「虫けら程度に多勢でなんかやらないわよ。あたしだけで修正してやるわ」

「戦いで一番面白いのは一対一の決闘だ。横槍などという無粋な真似は俺が許さん」

「規則を破った者には神でも関係無く無慈悲なる罰が与えられるから安心するといいよ、ロスト…ひっひっひっ…」

「遊びは決まり事を守るからこそ楽しいんだよ。そうだよね、ロストちゃん」

「多勢でいけば、我の食い扶持が少なくなる故な…」

「わたくしは面白ければ別に構いません」

彼女等が放つ殺気に身体が震えてきそうだ。

ニュクスと同等以上の実力者七神に対して勝ち抜きで戦うことの恐ろしさが身に染みてくる。

今更ながら逃げ出したい気分に駆られてきた。

六神の内、最初に前に出てきたのはティターンの中で一番小柄なテテュスだった。

ピテスが大人になったかのような容姿に傲慢なほどに華美な黄金の髪を靡かせる美女。

彼女は指揮棒を威圧的に振りながら私を睨み付けていく。

まさか最初の相手が一番お近づきになりたくない美女が出てくると

な…。

気分が急激に落ち込んでいく。

「何だか不満そうね。私が小さいからといって馬鹿にしているの？」

テテュスは私の態度が気に入らないのか、指揮棒を地面に叩きつける。

叩きつけられた地面は亀裂が生じていた。

「そんなことは無い。手強そうなので不安に思っているだけだ」

とりあえず怒らせない方がいいだろう。

癇癪を起こした女ほど恐ろしいものはないのだからな…。

「まあいいわ。私のこのグラムであんたを沢山泣かしてあげるからね。覚悟しなさいよ」

「では、もう戦いを始めて良いぞ」

ウレアの適当な合図で戦いが始まり、テテュスは鞭のようにしなる指揮棒を持って迫ってくる。

「あたしのこのダーインスレイブであんたを修正してあげるわ！喰らいなさい！」

テテュスは凄まじい風圧と共にダーインスレイブと呼んだ指揮棒を振るってきた。

先ほど言ってた武器の名前と違うような気がするが、とりあえず攻撃を避けなければ…。

あの指揮棒の打撃を喰らったら物凄く痛そうな感じがする。

私は咄嗟に地面に倒れ込み、テテュスの一撃を回避する。

「あっ…」

テテュスの声と共に周囲を囲っていた建物が包丁で切った大根のように切断される。

歴史的風格を漂わせる神聖な闘技場を呆気なく壊されていった。

修正する一撃にしては凶悪過ぎるほどの破壊力だ。

屈服させられるどころか、この世から叩き出されてしまう。

「何で私のクラウ・ソラスを避けるのよ！お陰で舞台が台無しじゃない！」

「無茶を言うな！死ぬところだったぞ！それに先ほど言っていた武器の名前と違うぞ！」

何て理不尽な事を言う女なのだ！

やはり一番お近づきになりたくない類だ！

「頭に来たわ！何が何でもあたしのストームブリンガーでお仕置き

してやる！」

「クラウ・ソラスという名前ではなかったのか！」

私の突っ込みにテテュスは問答無用とばかり指揮棒を振るいまくってくる。

立派な闘技場が既に更地と化し、私はただ逃げ回っていくのみだ。

世界は何度も硝子のように砕かれ、その度に再構築されていく。

ただ指揮棒を振り回すだけの単純な攻撃だったが、思いの外厄介だった。

必殺技など必要無いと言わんばかりにテテュスの打撃は余りにも凶悪過ぎる。

例えるなら、テテュスの打撃はティーの最強の技ブラフマストラが連発されているようなものなのだ。

「大人しくあたしのカラドボルグを喰らえ！」

どうやら指揮棒の正式名称は決まっていないらしい。

だが、仰々しい名前に相応しい威力を誇っているのは確かだ。

「くっ！この！この！当たれ！」

並の者ならば、この無茶苦茶な攻撃に成す術もなくあの世へと叩き出されてしまうだろう。

だが、私は最強の力を持っているから攻撃を見切ることは出来る。
テテュスの攻撃の威力は悪魔だが、攻撃の方法は子供だ。
ただ思うがままに無茶苦茶指揮棒を振るっているだけだ。
私と似た攻撃方法と言える。
だからこそ付け入る隙があった。
テテュスが正面から殴りかかってくる所を見計らって、伝家の宝刀を繰り出す。
「なっ！」
私の両の掌が合わさり、テテュスの指揮棒を受け止めたのだ。
全身にばらばらになるのではないかというほどの衝撃が来たが、何とか我慢してテテュスから指揮棒を取り上げる。
「あっ…あたしのバルムンクが…」
私は取り上げた指揮棒をテテュスの首に突き付ける。
「テテュス、貴様の負けだ」
突き付けられた指揮棒を唖然と見ていたテテュスだったが、目に涙を滲ませながら私を睨み付けていく。

「何よ！玩具の癖に生意気よ！」

テテュスは首に指揮棒を突き付けられているにも関わらず、間合いを詰めて私の顔の二倍ほど巨大な拳を振るってくる。

私は反射的にテテュスの拳を避け、腕を掴んで村の学者から教わった東洋の神秘たる柔道の背負い投げを炸裂させる。

「きゃあ！」

黄色い悲鳴と共にテテュスが拳を放った方向から何かが砕ける音が響いてきた。

音が聞こえた方向を見ると空間が砕け散り、再構築されている様子が見えた。

どうやらテテュスは素手でも十二分に凶悪な力を秘めていたようだ。

「ううっ…」

空間を砕くほどの力を受け流して背負い投げを喰らわせたのだ。

相応の威力で地面に叩きつけたから身動きが取れないほどの激痛に苛まれるはずだ。

私は地面に倒れて呻くテテュスに再び指揮棒を突き付ける。

今度は動いたらもう容赦はしないつもりだ。

「降参しろ、テテュス。次はもう容赦しない」

「ぐずっ…」

テテュスは嗚咽を漏らしくる。

これはまさか…。

「うあああああん！玩具に負けたよぉおおっ！」

テテュスは子供のように泣き始めてしまった。

何て事だ…。

こちらは命懸けで戦っただけなのに幼気な子供を泣かせてしまったような後ろめたい気分にさせられてしまう。

敵のはずなのだが、何となく見捨ててしまったら目覚めが悪そうだ。

とりあえずテテュスを抱き起こし、背中をさすっていく。

「あんた…」

敵である私が自分を介抱している様子に驚いているのだろう。

私としては自分の良心が痛まないための偽善的な行動に過ぎない。

体格が二倍ほど大きい美女とは言え、中身は子供だから仕方なしに世話をしているだけだ。

テテュスは私の手を振り払おうと暴れるが、身体が痛むのか抵抗は

弱々しいものだった。

「貴様は私との喧嘩に負けたのだ。だから大人しくしろ」

「ぐずっ…何よ…玩具の癖に…」

テテュスは大人しく背中をさすられるままになる。

……。

……。

…。

「まあ、今回はあんたに華を持たせてあげるわ。感謝しなさいよね」

動けるようになったテテュスは強気に私を見下ろして言ってくる。

傲慢なのは相変わらずだが、少し刺々しさが無くなったのは気のせいだろうか？

まあいい。

「分かった。感謝する」

怒らせるのは得策でないだろうから感謝しておこう。

「ふん、良い心がけね。特別にあたしからあんたに祝福をあげるわ…」

テテュスは私の身体を抱き上げてくる。
何をするつもりだ。
「んちゅ」
テテュスの紅紫色の唇が私の顔を覆い尽くす。
「んっ」
テテュスの唇の感触は戦いで疲れた私には心地良いものだった。
私は暫しの間、テテュスに唇が押し当てられたままでいた。
……。
「ちゅぱ…いい、これは飽くまで運が良くあたしに勝ったから祝福しただけだからね。勘違いしないでよ」
「分かっている…ぐはっ！」
私の答えに不満だったのかテテュスは指揮棒で私の頭を叩いてきた。
何故だ？
私はテテュスの自尊心を促すような満足行く答えを出したというのに…。
「全然分かってないわ！やっぱりあんたはあたしが修正してやらないと駄目のようね！」

「一体何が分かっていないというのだ！さっぱり分からんぞ！」

私は頭をさすりながらテテュスを睨み付けていく。

「とにかく曲がりなりにもあたしに勝ったんだから、負けたら承知しないわよ！」

テテュスはやはり理不尽な女だ…。

「負けたらあたしの愛の鞭であんたをお仕置きしてやるから…だから、勝ちなさいよ…」

テテュスは何故か敵である私に勝利の激励をして、ティターン陣営に戻っていった。

それにしても今までの仰々しい武器の名前から一転して愛の鞭と言うとは…。

一体どういう心境の変化なのだろうか？

……。

考えたら不味い気がするから止めておこう。

今は戦いに集中するべきだ。

「テテュスが勝ちを譲ったことでロストの勝ちとする。次戦う奴出てこい。早く始めるぞ」

ウレアは気怠そうにティターンと四高弟側に対戦相手を促していく。

そして、次に出てきたのは背丈が四倍以上を誇る漆黒の法衣に真紅の鎧を纏った美女。

藍色の短髪に藍紫色の口紅を塗った女戦士。

ティターン神軍の一神ポイベだった。

ポイベは目を閉じたまま歩いてくる。

「汝を食するこの時を我は狂おしいほどに待ち侘びていた」

テテュスの直情的な殺気とはまた違う、舐め回すような嫌らしい殺気だ。

私の掌に汗が滲み出てくる。

テテュスに言われたからではないが、私とて負けるわけにはいかないのだ。

「よし、では、とっとと戦ってくれ」

ウレアの合図と共に私は両の拳を構える。

ポイベは私を食べると言っているが、精々血や生気を貪る程度のことだろう。

今更その程度の脅しで私は怯んだりはしないぞ！

ポイベは目を開き、野獣のような笑みを見せてくる。

「汝の住処は我の中、我に還るがいい！ヨルムンガンド！」

ポイベの身体が輝き出し、巨大化していく。

私は口を開いたまま有り得ない光景を目にする。

黄金に輝く身体に五つの頭を持つ竜のような姿。

それはニュクスが騎乗していたケルベロスに匹敵する巨大な怪物だった。

だが、ケルベロスとは違い、黄金の光を放っていることから奇怪というよりは神々しい雰囲気を纏っていた。

ポイベは私を威嚇するように翼を広げて咆吼してくる。

……。

もしかして血や生気を吸い尽くすのではなくて、言葉通り食べたいという意味で食すると言ったのだろうか？

……。

『ぐふふっ…さとて、汝を食するとしようか…』

ポイベは血のように紅く巨大な舌を出して唾液を垂らしていた。

……。

冗談ではないぞ！

これではまだ血と生気を吸われる方が遙かにましだ！

私は胃袋の中でお世話になるなど死んでも御免被る！

『程良く焼いてやろう…グオオオオッ！』

五頭の口からそれぞれ異なる色の炎が吐き出され、私は防御結界を展開しながら回避していく。

『逃がさぬ！』

不意に視界から巨大な何かが迫り、腕を交差して防御するが、余りの重たい一撃に身体が弾き飛ばされていく。

防いだのはポイベの巨大な鉤爪だった。

『今の一撃を防ぐとは食べ応えがあるそうだな！』

弾き飛ばされている私にポイベは追撃するように鉤爪の連打が繰り出してくる。

嵐のような連打に回避することが出来ず、防御するしかない。

『ふはははっ！まさに汝は我の玩具よ！』

おのれ…。

防御する度に身体が弾き飛ばされてしまう。

まるでクロエに教えてもらった玩具のお手玉にされしまっている気分だ。

『そのまま汝を火の海に投げ捨ててやろうぞ！』

大地は既にポイベの放った炎によって火の海と化している。

このままお手玉にされ続ければ、火の海の中へと放り込まれてしまう。

ポイベは鉤爪を大きく振りかぶってくる。

次の一撃で私を火の海に叩きつけるつもりか！

そうはさせないぞ！

拳を握りしめて力を溜める。

黄金の拳よ、唸れ！

『落ちろぉおおっ！』

「喰らえ！」

ポイベが振り下ろす鉤爪と私が繰り出す拳が激突する。

鉤爪が砕け、ポイベの前足から血飛沫が舞い散っていく。

『ぐあああっ！』

ポイベが悲鳴を上げて怯む。

このまま畳みかけてやるぞ！

私は仰け反ったポイベに向かって拳を繰り出そうと飛び立っていく。

『小癪な！れろっ！』

「ごふっ！」

ポイベの口から伸ばされた巨大な舌先が私の身体に刺突されてしまう。

喉奥から血が溢れてくる。

油断したか…。

『焼き尽くしてくれる！ゴオオオオオオオッ！』

五頭の口から一斉に極大の閃光が吐き出されてくる。

ケルベロスやヘカトンケイルとは比較にならないほどの出力だ。

「オーディン！ホワイトホール！」

銀色の魔法陣と白球を出現させて攻撃を跳ね返すのだ！

『無駄なことだ！グオオオオオオッ！』

ポイベは黄金に輝く身体の全身から強大な魔力の奔流をさらに放ってくる。

閃光を跳ね返そうとしていた魔法陣と白球が砕かれ、閃光と魔力波に呑み込まれていく。

「ぐあああああっ！」

全身の血が沸騰するほどの熱さが身体を苛んでくる。

またしても丸焼けになってしまうのか…。

……。

この程度で焼け死ぬぐらいだったら、疾の昔に死んでいるわ！

「うおおおおおっ！」

閃光と魔力の波に乗りながら、ポイベの下へと駆け抜けていく。

『餌がわざわざ来るとな！ならば、喰らってくれようぞ！れろっ！』

ポイベの舌が触手のように伸びてくる。

丸焼けになりながらも迫ってくる舌を何とか回避しようとする。

だが、ポイベの舌先は私の動きに合わせて軌道を変えて、私を捉えてくる。

「ぐふっ！」

再び舌先が私の腹を貫き、息が止まってしまう。

『れろっ…絡め取ってくれるわ！』

腹を突かれて呻いていた私にさらに別の口から伸ばされた舌が巻き付き、捕らえられてしまう。

逃げようと力を入れようとするが、上手く力が入らない。

『まず軽く味見してみるか…れろっ』

私の目の前に舌先が迫る。

舌先は口のように開き、如何にも熱そうな肉壁が見えてくる。

しかも肉襞が不気味に蠢いていた。

……。

これは既視感というものなのか…。

何だか前にも同じ目にあったことがあるような…。

もしかすると…。

舌の口が私の頭から胸にかけて覆い尽くし、赤子が指をしゃぶるように吸い付いてきた。

『ちゅばぢゅぱぢゅぱぢゅるるるっちゅうううううっぐちゅぶちゅぢゅうううううっ』

「ぬあああああああああああああああああっ！」

アルゴスの触手の接吻に続く、奇怪な口付けがまたしても炸裂させれてしまった！

しかも肉襞が私の身体を舌のように舐め回してきている！

それに気持ち悪いはずなのに気持ち良いと思ってしまっている私がいる！

私は変態になってしまったのか！

『ちゅぱん…ぐふふっ…これは極上の味だ。じっくりと嬲って喰らい尽くしてやろうぞ…ふはははっ！』

舌の中から解放され、上半身唾液まみれになりながらも私は無感動にポイベの嘲笑が聞いていた。

……。

どうやら忘れたい思い出がまたしても刻まれてしまったようだ。

私の身体は焼け焦げているが、それ以上に私の心が怒りの炎に焼き尽くされていた。

急激に力が全身に巡ってくる感覚がしてくる。

私の最強の力が更なる段階に進んでいくのだ。

……。

美女の姿のままでなら許せたが、獣の姿で私の身体を怪我してくるとは許せん！

しかも気持ちいいと思わされたことも腹に据えかねるぞ！

私の心を焼き尽くす怒りの炎よ！

我が力となれ！

敵を滅べせ！

屈辱を晴らすのだ！

『むっ！何なのだ！この力は！』

「私の怒りを思い知れ！ポイベ！はあああああああああっ！」

あれほど頑丈に締め付けていたポイベの舌を私は千切って血が撒き散らしていく。

『ぎゃあああああっ！』

ポイベの甲高い悲鳴を響く中で私は飛び立ち、胴体に向かって黄金の拳の連打を喰らわせていく。

「存分に味わえ！我が黄金の拳の威力をな！」

『ぐがあああああっ！』

ポイベの黄金の身体が血に染まり、私は止めの拳を放って殴り飛ばしていった。

『がはああっ！』

遠くでポイベの悲鳴が響き、私は唾液まみれになった身体を拭っていく。

私の怒りの炎は燃え尽きていったようだ。

それにしても獣に変身したとは言え、元は姿は美女なのだ。

いささかやりすぎてしまったかもしれない。

私はポイベの生存を確認しに殴り飛ばした場所へと駆けていった。

……。

……。

…。

駆けつけた場所には全裸の美女が横たわっていた。

髪の色や体格からして多分ポイベだろう。

「ううっ…」

ポイベは苦しげな表情で魘されていた。

「うぐっ…」

私の男の証が元気になっていく。

全裸で苦しげな表情をしている美女の姿はそそるがあった。

いくら敵とは言え、全裸で放置しておくのも忍びなかった。

私は燃え尽きかけた服を脱ぎ、ポイベの身体に被せようとする。

その時、ポイベの目が開き、私の目と合ってしまった。

……。

どう出るのだ？

……。

何だか恐くなってきたな…。

……。

何時まで見つめているのだ！

「貴様は…むごっ！」

ポイベは私を押し倒してきて、懐いてきた犬のように私の顔どころ

か身体を舐め回してくる。

彼女の巨大な舌が私の上半身をあっという間に唾液まみれになってしまう。

「な、むぐっ、何をする！ぬあっ！」

「あむっちゅぱちゅる…汝は我を完膚無きまでに叩きのめした。故に汝は今日から我の飼い主となるのだ…れろっちゅぱちゅぱ」

……。

何ですと！

ティターン神軍の一神が私の愛玩動物になるというのか！

「れろっあむっちゅぱ」

「うおっ！そこは舐めるな！くすぐったいぞ！」

ポイベは一心不乱に私の身体を舐めまくってくる。

しかも豊満な胸と肉感のある足を絡ませてきているのだ。

このままだと床の戦いへと突入してしまうぞ。

「ロストの癖に何やってるのよ！」

「ひでぶっ！」

強烈な何かに殴られたような衝撃が頭にきた。

私はポイベに舐められながらも辺りを見回すと指揮棒を片手にテテュスが威圧的に見下ろしている姿が目に留まった。

「何だ、テテュスか…」

「何だ、テテュスか、じゃないわよ！何であんたがポイベを手なずけているのよ！ガイア様にだって懐いたことが無かったのに…」

テテュスは呆れたような目でポイベに舐め回されている私を見てくる。

私はただ命懸けで戦っただけなのに何故可哀想な者を見るような目で見られなければならない。

「まあいいわ。ポイベはあたしが回収するからあんたはさっさと残りの五神に勝ちなさいよ」

ティターンの一員なのに敵方の私に激励してどうするのだろうか？

まあいい。

「必ず勝つから期待していてくれ…」

とりあえず話に合わせておこう。

また愛の鞭を喰らいたくはないからな…。

「当然よ！負けたら愛の鞭なんだからね…」

テテュスは顔を赤らめて俯いていく。

不機嫌だと思ったら、何だか機嫌が良さそうな雰囲気を漂わせている。

また愛の鞭か…。

考えてしまったら間違いなく不味いかもしれない。

「飼い主殿、我に餌をくれ。早く！あむっ」

困惑している私を余所にポイベは私の肩を甘噛みしてくる。

先ほどの獰猛な野獣に変身していた者とは思えないほどの豹変ぶりだ。

私は本当にポイベに懐かれてしまったらしい。

そんな私をテテュスは再び不機嫌そうに見て、指揮棒を威圧するように地面に叩きつけていく。

「ポイベ、何時までじゃれてるのよ！ロストもポイベの飼い主なら毅然とした態度で行かないと舐められるわよ！」

もう充分に舐められてしまっているが…。

唾液まみれになった私を見て、テテュスは不機嫌そうにため息をついた。

「あんたの身体は汚いから早くこれで拭いて戦う準備をするのよ！分かった？ほら、ポイベ。飼い主を困らせるんじゃないわよ！邪魔にならないように立ち去るから、一緒に行くわよ！」

「飼い主殿、また後で餌を…」

テテュスは私に布巾を渡し、ポイベを引きずって去っていった。

……。

不機嫌そうだったが、何となく私を激励してくれていることは分かった。

私はテテュスから渡された布巾で身体を拭きながら次の対戦相手を見据える。

背丈が私の二倍はあり、紅の髪を靡かせ、純白の法衣に青色の鎧を身に纏っている美女。

深紅色の口紅を塗って天真爛漫に微笑むティターンの一員であるレア。

「やっとロストちゃんと遊ぶことが出来るから僕、嬉しいよ！」

あの無邪気な笑顔の騙されてはいけない。

彼女は間違いなく成熟した美女だ。

顔は天真爛漫に笑っていても、目はアレクと同じような老成とした光を宿している。

「何でそんなに恐い顔するの？僕はただロストちゃんと遊びたいだけなのに…」

レアは如何にも悲しげに俯いてみせる。

何て白々しいのだ。

「いい加減に演技を止めたらどうだ。本当は私を殺したくてうずうずしているのだろう？」

悲しげに俯いていたレアの顔が起き上がって私に本性を見せてくる。

「あれ、分かっちゃった？どうも僕はガイア様のように道化師になりきれないみたいだ」

レアは邪悪な笑みと共に無邪気な子供の仮面を外して小悪魔の素顔を晒してくる。

テテュスとはまた違う種の捻くれた美女のようだ。

「まさか、テテュスに続いてポイベまで手なずけるとはやるじゃねえかよ。へへっ、メガイラが心酔している理由が分かった気がするぜ。さあ、とっとと始めろ。せいぜいあたしを楽しませろよ」

私は決闘の合図をするウレアを一瞥した。

彼女はメイの仇だ。

この決闘に参加していたら、存分の恨みを晴らせたものを…。

ウレアは私の視線に気づいたのか、笑みを返してくる。
私を侮っているのだろうか？
まあいい。
今は目の前の敵を何とかすることが先決だ。
「随分と余所見していたけど、それって僕を侮っているのかな？」
「いや、そうではない。済まない」
つい反射的に敵の女に謝ってしまった…。
我ながら美女にはとことん甘いようだ。
「まあいいよ。僕と楽しませてくれたら許してあげるからさ…」
レアはまるで誘うかのような流し目を送り、胸を豊満な胸を強調させながら近づいてくる。
色仕掛けで私を翻弄しようというのか…。
レアは両手を合わせて魔力を凝縮させ、小さな光球を生み出してくる。
「僕もロストちゃんを楽しませるために頑張るから期待してくれるといいよ…」

私は油断無く拳を構えて威嚇してみせる。

「この世界って、男がほぼ全員いなくなってしまってるよね。だから、久しぶりなんだ。男と遊ぶのは…。だから、僕を楽しませてね、ロストちゃん…」

不意にレアの姿が視界から消える。

何処へ行った?

「何処を見ているの?僕はここだよ…れろっ」

首筋に生暖かい感触が伝ってくる。

これは舌の感触だ。

「うおおっ!」

私は振り向き様に裏拳を繰り出すが、空を切ってしまう。

「あははは…何処を殴っているの?僕はここだよ…ちゅぱ」

「むぐっ!」

今度は顔に生暖かい感触が押しつけられていく。

これは唇の感触だ。

「ぢゅぱぢゅぱぢゅうううっ」

「むごっむぐぐっ！」

生気が物凄い勢いで吸われている。

私はレアの腹部だろうと思う場所に拳を連打していく。

「ちゅぱ…あはははっ…」

不意に顔から唇が離れ、私は息切れして周囲を見渡す。

「君って弄び甲斐があるね。気に入っちゃったよ…」

レアは真正面で舌なめずりして私を見ていた。

いったい何の手品を使っているのだ？

気配も感じさせずに私の間合いにいとも簡単に入ってくることが出来るとは…。

「僕は道化師見習いで魔術師なのさ。この八尺瓊勾玉でロストちゃんを弄んであげるよ…」

レアが手に持っている八尺瓊勾玉という玉が紅い光を放って輝き出す。

「さあ、遊ぼう」

「僕を楽しませてよ」

「さて、どうやって弄ぼうかな？」

「退屈にさせないでよ」

「飽きてしまったら殺すからね…」

レアが五体に増えてくる。

私に幻を見せているというのか！

どれが本物なのだ？

とにかく気配を感じるのだ…。

「何佇んでいるのかな、ロストちゃん…ぢゅうううっ」

レアがいつの間にかしなだれかかって私の肩に唇を押しつけている。

「ぬあっ！いつの間に…ぐおおっ！」

私の身体を抱き締めるようにして拘束し、血と生気を貪ってくる。

それに得も知らない快楽で身体が痺れてきた。

「ぢゅるぢゅるぢゅるぢゅるるるるっ」

快楽がもたらされると共に身体が急激に冷えてくるのを感じた。

私を木乃伊にするつもりなのか！

「ぬおおおおっ！はあああああっ！」

「きゃあ！」

火事場の馬鹿力で魔力を全身から放出して拘束しているレアを弾き飛ばした。

肩には生々しい深紅の口紅と血の跡が残っている。

ティターンはどうやら吸血鬼の集団でもあるようだ。

「釣れないな」

「早く僕を楽しませてよ…」

レアはまたしても分身の術で私を惑わせてくる。

手に持っている光球から糸のように収束された閃光が放出され、私の脇腹が撃ち抜かれる。

「うぐっ！」

脇腹から血が溢れ出てくる。

周囲を見るとレアの分身達が次々と閃光を撃ち出し、私の身体から血飛沫が吹き荒れていく。

「早くしないと殺しちゃうよ…」

このままではやられてしまう。

誰が本物なのだ？

「何だか詰まらなくなったよ…」

……。

「どうしようかなあ…」

……。

「もう殺しちゃおうか？」

……。

どれが本物なのかさっぱり分からん！

こうなれば力押しだ！

「うおおおっ！」

私は本物も偽物も構わず片っ端から殴りまくる。

レアの分身は次々と増えていくが、それ以上の速さで分身を殴り消していく。

幻を出す暇も与えずにとにかく隅々まで殴ればいずれは本物に突き当たるはずだ。

とにかく殴る。

殴ってやる。

「はあああああっ！」

レアの嘲笑が聞こえなくなっている。

顔から焦りが見え始めているぞ！

数打てば当たるのだ！

私は拳を繰り出し、レアは光球で受け止める。

確かな手応え。

ついに本物を捕らえたようだ。

「まさかこんな原始的な力押しで僕の幻影を見破るなんてね。少々侮っていたよ…」

レアは苦笑いをしながら、光球に魔力を溜めて、私の拳を押し返そうとする。

「私は床で弄ばれるのは許せても、喧嘩で弄ばれるのは大嫌いでな…お返しをさせてもらうぞ！」

私の拳がレアの溝に炸裂させていく。

「うぐっ…やって…くれたね！ロスト！」

レアは後方に飛びながらも光球から炎や氷、隕石や閃光等と全ての

属性魔法を雨霰と乱れ撃ちをしてくる。

周囲は爆風の嵐にまみれ、空間が亀裂だらけになっていく。

もはや完全な暴走だな。

私はレアが展開する弾幕をかいくぐりながら接近していく。

「もう遊びは終わりだ。殺してあげるよ…」

「生憎子供の相手をしている暇など私には無いのだ！光有れ！」

私の身体から目映い光がレアを覆い尽くそうとしていく。

レアは光球を掲げていく。

「ふふっ…そんなもの…」

私の放った光がアレクのブラックホールのようにレアの光球に吸い込まれていく。

「倍返しにしてやるさ！」

レアはさらなる輝くを誇る光を放ってくる。

「倍返しとはこういうものだ！アザゼル！」

私は紫の波動を放ち、レアの放った光諸共包み込もうとする。

「掻き消してやるよ、そんなもの…」

レアの持っている光球が輝き、紫の波動が掻き消されていく。
私はその隙にレアの懐に攻め込む。
「私もそろそろ貴様の遊びに飽きてきたぞ…」
「ごほっ！」
私の拳がまたしてもレアの溝に炸裂し、レアは弾き飛ばされていく。
「ちなみに私は遊んではいない。喧嘩をしているのだ…」
レアは咳き込みながら私の前に現れてくる。
「よくも僕にここまでの屈辱を…もう許さないぞ！何もかも消し飛ばしてやる！」
手に持っている光球が凄まじい魔力と共に輝きだしてくる。
「やばいな…あたしは少し非難させてもらうよ！」
適当に審判どころかただの傍観者となっていたウレアが焦った表情をして、姿を消していった。
それほどまでに不味い攻撃をしてくるのか…。
「気を付けて！レアの技はかつて真神戦争でタルタロスに重傷を負わせたほどのものだから！」

「ガイア様の最強の技でもあるぞ…」

遠くで試合観戦していたテテュスとポイベの焦った忠告してくる。

二神がしてくれた忠告の内容に私は戦慄する。

ガイアの最強の技だと？

「我等の力と技の全てはガイア様から教わったものだ。レアはティターンの中で特にガイア様に可愛がられていたからな。だから、最強の技を教えてもらったらしい…」

おのれ、ガイアめ！

よりにもよって可愛がっていたからという理由で物騒な技を教えるとは…。

ポイベが有り難くない解説を丁寧してくる。

私を絶望させるために業と言っているのか？

「ちょっとポイベ黙っときなさいよ！ごめん！あたし達も非難するから何とか生き延びて！死んだら愛の鞭でお仕置きするわよ！」

テテュスは無茶なことを言ってポイベと共に消え、他のティターンや四高弟もいなくなる。

とにかく私も何処かに非難しなければ…。

「あははははっ…もう遅いよ…死んじゃえ！」

レアの光球が漆黒の光を放ち、世界を根刮ぎ破壊される。

「ビッグバン」

レアの放った一撃で世界が始まりへと還っていく…。

……。

……。

……。

……。

…。

何千回と破壊された世界は再構築されていく。

その中でぼろぼろになった私と怯んでいるレアがいた。

「なんで生きてるの？タルタロスにも深手を負わせたガイア様の最強の必殺技だったのに…」

「タルタロスが喰らわされて生きていたのならば、私も生きていても不思議ではないということだ…」

ぼろぼろになりながらもゆっくり近づいてくる私にレアは怯えて後ずさっている。

「あの…僕…」

「遊びはもう終わりだと言ったな。その言葉、そっくりそのまま返してやるぞ！」

黄金の拳よ、唸れ！

レアが持っている光球に拳を炸裂させ、甲高い音と共に砕け散っていく。

光球が無くなったことでレアは力無く地面へと座り込む。

「ははっ…負けちゃったか…」

レアは乾いた笑いを浮かべ、私を眩しげに見つめてくる。

「負けたのは悔しいけど、楽しかったよ。君はまさしく僕が今まで出会った中でも最高の遊び相手だ…」

レアは立ち上がり、潤んだ目で私を見つめてくる。

先ほどの妖艶な目とは違う情熱的な何かを感じる目だった。

「ねえ、また僕と遊んでくれる？」

レアの瞳は純粋で子供のような穢れ無い光を放っていた。

私は思わず後ずさってしまう。

ここは断るべきだ！

レアは美女とは言え、敵なのだぞ！

「駄目…かな？」

「良いぞ…」

……。

無理だった…。

例え、その先に地獄が待ちかまえていようと断ることが出来ない。

敵に情けをかければ、味方を殺すことになる。

アレクの言葉が今更ながら重くのし掛かってくる。

「ありがとう！ロストちゃん！んちゅ」

レアは満面の笑みを浮かべて、私を抱き上げ、熱い唇を私の顔に押しつけてくる。

「むちゅちゅぱちゅぱちゅううううっ」

レアの情熱的な口付けに私の顔は火傷しそうな程に熱くなり、快楽の海に引き込まれていく。

……。

これはティターンの洗礼のはずだ。

だが、これではティターンとの親睦を深める親善試合をしているような感じがする。

「レア！あんまりロストに懐かないでよ！」

「飼い主殿、我のことを忘れるなよ」

テテュスとポイベが駆けつけて、レアに抱きかかえられている私を引きはがそうとしてくる。

「ちゅぱ…ふふっ、ロストちゃんは僕の遊び相手だからテテュスには関係無いよ」

「何ですって！」

「我は飼い主殿に付いていくのみだ」

三神にもみくちゃにされながら私は考える。

私はエクリアを何とか解放して、モイラ達が待っているジークフリートに帰る心づもりだ。

それなのにこうしてティターンの者達と仲良くなってしまっている。

「後四神残っているのに随分と余裕ですね」

ウラノスは相変わらず冷たい目線で私を哀れむように見つめている。

だが…。

「ふふっ…すっかりテテュス達に気に入られたようだね」

クロノスは初めから私がテテュス達と仲良くなることを見越したような眼差しだった。

そういえば、誰も敵である私と仲良くしているテテュスを咎める者がいないのだ。

「殺し合うことで分かり合えるということだな。だからこそ俺は戦いが大好きだ…くっくっくっ…」

「お前なら裁きの日を乗り越えて天の頂にまで登り詰めるかもしれないね…ひっひっひっ…」

「なかなか面白い見せ物でしたよ。次に戦うのはわたくしでしょうか…ふふっ…」

ヒュペリオンとテミス、ポントスはただ笑っている。

……。

この戦いは果たして彼女達が楽しむためだけの洗礼なのだろうか？

もしかすると私は二度と這い上がることが出来ない沼へと踏み入れようとしているのではないか？

……。

ふと頭の中にある瘤が再び疼き始める。

クロノス等は何かを企んでいるはずだ。

それが一体何なのかを気づかなければとんでもないことが起きそうな予感がしてくる気がした。

……。

クロノスが近づき、私に付きまとっていた三神が無言で離れていく。

「さあ、ロスト」

私は地獄に誘うようにクロノスは手を差し伸べてくる。

「洗礼を続けようか…」

……。

第１０２話：ＡＶＥＮＧＥＲ

私は差し出されたクロノスの手を何となく取ってしまう。

クロノスは私の手を握りしめて、微笑んでくる。

その微笑みに何故か心臓が高鳴ってしまった。

「何をするつもりなのだ？」

黙ってたらクロノスの笑顔に吸い込まれてしまいそうな気がしたのだ。

クロノスは私の手を引いて、自分の胸へと招き寄せてくる。

「むぷっ！」

「君を次の闘技場へと誘ってあげよう」

私の視界がクロノスの胸で満たされ、世界が暗転していく。

……。

……。

…。

「さあ、見たまえ」

クロノスは私を胸から解放して地面に降り立たせてくれる。

……。

瓦礫の山だ。

瓦礫で埋め尽くされている世界。

だが、不自然な部分があった。

瓦礫の素材がばらばらだったのだ。

歴史学者の書物で見た世界各地の建物の素材がばらばらに入り交じっている。

空の色が晴天の青や夕暮れの赤などと統一されていない。

所々に雨が降っていたり、雪が降る等と自然の法則が乱れている。

「ここはタルタロスが創造した世界だよ」

クロノスは驚いている私を楽しむように説明していく。

「タルタロスが滅ぼした世界の成れ果てを集めて造った、いわば世界のごみ箱、掃き溜めとでいいましょうか…」

ウラノスは何処か忌々しげに語ってくる。

「儂は気に入っておるのじゃがな。滅び去った世界もまたなかなかの風情を感じさせるものじゃからのう」

イアペトスは懐かしむように呟いていた。
私の隣にはいつの間にかテテュスがいて、腕を掴んでいた。
「あたしはこの世界は嫌い。彼奴の悪意を感じるようで息苦しいわ」
彼奴とは誰かとは敢えて聞かない。
答えは既にクロノスが言っているのだからな…。
「さてと、ロスト。ここが新しい闘技場だ。ウラノスの言う通り、ここは既に滅びた世界の集まりだから、いくら破壊しようが、消え去ることはない」
「つまり俺達が全力で戦っても壊れる心配が無い場所だということだ」
「裁きの日が来るまで思い切り力を振るえばいいということですな…ひっひっひっ…」
……。
とりあえず彼女達が全力で暴れても壊れない世界だということは分かった。
それならば、何故最初からこの世界で戦おうとはしなかったのだろうか？
「何故、最初からこの世界で戦わなかったのだ？」

「飼い主殿の力がそれだけ凄まじかったということだ」

疑問に答えてくれたのは私を飼い主だと崇めるポイベだった。

「あの闘技場はいわば、気分を高めるための演出でしかない。大抵はテテュスの一撃で終わってしまうような味気ない戦いが多かったからな…」

「あたしのせいのように言わないで欲しいわね。相手が弱すぎたのが悪いのよ」

テテュスは指揮棒でポイベの頭を軽く叩いてくる。

ポイベの説明で合点がいった。

つまり私より以前にもティターンと四高弟の洗礼を受けた者がいたのだ。

そして、今までは世界を破壊するほどの強大な敵と戦うことがなかったということなのか…。

「ロスト君と言いましたか?次に貴方のお相手をするのはこのわたくし、ポントスです」

私の前に歩み出て、優雅に一礼するポントス。

ポントスの酷く友好的な態度に私は戸惑いを覚える。

相手はアレクを殺した仇だ。

ポントスは私の睨み付けるような視線を受け流すように爽やかに笑みを返していく。

「おや、どうやら貴方はわたくしのことをお気に召さないようですね。これでも容姿には結構自信があると自負していましたが…」

「私は貴様とは馴れ合うつもりは毛頭無い」

私は既に拳を構えて、戦闘態勢を取っている。

ウレアはあくびをしながらあぐらをかいて見ている。

審判者の立場が面倒になったのか、放棄しているようだ。

「それは残念です。わたくしは貴方とお近づきになりたいと思っていましたのに…」

ポントスは態とらしく、如何にも傷ついたというように俯いて見せてくる。

何だか馬鹿にされているように見えた。

「ポントスのあの態度は僕と違って素だから気にしたら負けだよ、ロストちゃん」

一歩離れて私の様子を見ているレアが忠告してくる。

「わたくしはただ何時だって本気であるということだけですよ、レア」

レアの評価にポントスは爽やかに笑って返す。

馬鹿にしたような態度が素となれば、それはそれで厄介かもしれない。

戦争という状況で生き死があるのは当然だとしても私にとってはアレクの仇であることには変わりない。

「アレクの借りを返させてもらうぞ」

「ふふっ…いいですね。アレークトーの無念を晴らすためにわたくしに挑むその姿勢。ますます気に入りました。もし、わたくしが勝ったら、貴方と結婚しても宜しいですか？」

……。

……。

…。

何ですと？

どうやら心労で耳が悪くなってしまったかもしれない。

もう一度確認しようか。

「今何て言った？」

「わたくしが勝ったら貴方と結婚しても宜しいですか、と言ったの

ですよ」

……。

ポントスの態度は素だとレアは言っていた。

そして、ポントスも自分は何時だって本気であると豪語していた。

「ロストちゃん、ポントスが言っているのは本当だよ。テテュスやポイベといい、競争率は高そうだね」

「何言ってるのよ！あたしは別にロストなんかと…」

「ロストは我の飼い主。今の所はそれでも良い」

外野が口々に色々と好き勝手に言っているのが空しく聞こえてくる。

私は思わず片膝をついてしまった。

「貴様…いったいどういうつもりだ。私はアレクの復讐者なのだぞ…」

「わたくしはただ貴方に結婚を申し込んだに過ぎませんよ。それ以上もそれ以下もありません」

ポントスは膝を付いてる私に手を差し伸べてくる。

私はポントスの手を払い、自力で立ち上がる。

何てことだ…。

かつてこれほどまでに調子を狂わされた相手が他のいようか…。

仕返しすると宣言した相手に結婚を申し込まれてしまうとは前代未聞だ。

「ならば、意地でも勝たねばならないな…」

負けて押し掛け女房をされましたということがモイラ当たりに知られれば、往復張り手では済まされない。

それどころか私の男としての尊厳が問われてしまう。

全くこんな不可解な美女がアレクを殺した仇だとはな…。

「ふふっ…では、わたくしも意地でも勝たなければなりませんね…」

ポントスは背中から光の翼を出し、手から光球を生み出してくる。

「ブフラマー」

光球から水が溢れるように光の奔流が放出され、私は咄嗟に地上から空中へと飛び立つ。

残骸の大地が光の奔流に包まれていく。

「逃がしませんよ…」

『ガアアアアアアッ！』

光の奔流から形作られた巨大な手や触手、蛇の頭が飛び出し、私を引きずり込もうと伸ばしてきた。

迫り来る巨大な手を避け、さらに迫ってくる触手や蛇から必死に逃げ回っていく。

初めから大技を惜しげもなく使ってくるとは何て奴だ。

そう言えば、ポントスの姿が見えない。

「一体何処にいる?」

「わたくしはここですよ…」

後ろから声が!

振り向くとポントスが爽やかな笑みを浮かべて私に抱きつき、光の奔流の中へと引きずり込む。

全身に焼け付くような激痛が走ってくる。

『苦しいですか?』

気が遠くなるほどの激痛に苛まれる中でも私を抱き込んでいるポントスの声は透き通るように響いてくる。

激痛に苦しむ中でポントスが首筋に吹きかける吐息は何故か鮮明に感じる。

『わたくしと結婚するのであれば、地獄の苦痛から解放されますよ。

どうしますか？』

私を痛めつけて結婚を承諾させようとする腹づもりか！

これで屈服して結婚を押し切られると私は一生ポントスに尻を敷かれて過ごさなければならなくなる。

そんなことは激しく御免被る！

「この無理矢理押し掛け女房気取りめ！誰が貴様などと結婚するものか！」

「きゃあ！」

私は火事場の馬鹿力を発揮してポントスを弾き飛ばし、魔力を放出して光の奔流を掻き消していく。

酒池肉林を実現させてもないのに一人の女に縛られるわけにはいかないのだ！

光の奔流から私は飛び出し、掌を向ける。

私の怒りの一撃を食らえ！

「ミサ・ソレムニス！」

光の波動が光の奔流に激突し、相殺されていく。

地上から光が消え、元の瓦礫の山が見えてくる。

ポントスは消滅したのだろうか…。

「これで終わりなのか…」

余りにも呆気なさ過ぎる。

アレクを殺した仇にしては…。

「何処を見ているのですか？」

またしても背後を取られてしまったのか…。

レアといい、私は背後をよく取られてしまうようだ。

「くっ！」

背後に振り向こうにも既に羽交い締めにされてしまって動けない。

「全く、貴方は本当に釣れないですね。けど、そこがまた良いのかもしれませんね…んちゅ」

「ぬあっ！」

ポントスの唇が私の首筋に吸い付いてくる。

不味い！

このままでは籠絡されてしまう！

「うおおおおっ！」

私はポントスに羽交い締めにされたまま魔力を放出して、瓦礫の山に突っ込む。

肉を切らせて骨を断つだ！

しがみついてるポントスを磨り潰すように瓦礫へとぶつかっていく。

「ふふっ…そう簡単に離しませんよ」

「ぐうっ！」

ポントスもまた身体をぶつかっていく瓦礫に擦り付けるように押してくる。

私とポントスはもつれ合いながら瓦礫の中を泳いでいく。

「いい加減に離れろぉおおっ！」

私はポントスを押しのけようと瓦礫にぶつけていく。

「ふはははっ！わたくしは抵抗されれば燃えていくのですよ！」

「ぐおおっ！」

ポントスは私の首を鷲づかみにして、逆に瓦礫へと押しつけて飛翔していく。

何てしつこい女なのだ！

こうなれば相手が美女であろうと関係無い。

元々此奴はアレクの仇だ。

「貴様の頭をすり減らしてやる！」

私はポントスの顔を鷲づかみにして瓦礫に頭を押しつけながら飛ぶ。

ポントスの頭から血が吹き出ていき、純白の翼が血に汚れていく。

このままポントスを…。

「うおおっ！」

生暖かい感触が掌に滑り、思わず手を離してしまった。

手を離して見えたのは頭から血を流して舌なめずりをして笑みを浮かべるポントスの顔だった。

私の掌を舌で舐めたというのか！

ポントスの壮絶な笑みを見て、私は背筋が凍ってしまった。

「ふふっ…可愛いですね、貴方は…んちゅ」

「むぐっ！」

ポントスは鷲づかみにしていた私の首を引き寄せて、唇を重ねてくる。

頭を押さえられて離れることが出来ない！

私とポントスは瓦礫の山から飛び出していく。

『わたくしはアレクが死ぬ寸前までに貴方の名を叫んでいたことで興味を持ったのです…』

ポントスは唇を重ねながら、念話で私の頭の中に語りかけてくる。

『そして、貴方はテテュス、ポイベ、レアとティターンの中では攻撃を担当する者を見事に撃破していった。貴方こそがわたくしの花婿に相応しいと確信したのですよ…』

「むぐっ…」

アレクが死ぬ寸前まで私の名を呼んでいたのか…。

……。

『生きてくれ…ロスト…』

……。

アレクは最後まで私の身を案じて消えていった。

その想いを絶やさないためにも私は負けるわけにはいかないのだ！

「ちゅぱ…さてと、結婚式に日取りは何時が良いですか？わたくしの花婿殿…」

ポントスは唾液に濡れた唇を煌めかせて嘲笑ってくる。

心底美女の誘いを断ろうと私に決心させたのは貴様が初めてとなるだろう。

私は自分を抱き込んでくるポントスに逆にしがみついてくる。

「ふふっ…ようやくわたくしの愛を受け容れる気になったのですか？」

「勝った気になるのは早いのではないか？カタストロフ・サン！」

私とポントスを包み込むように漆黒の炎球が生み出されていく。

「ふはははっ…これこそがわたくしに対する貴方の愛の炎と言うのですか？貴方の熱さがこの身に染みて心地良いというものです！」

ポントスは身体が燃えながらも愉悦の笑みを零し、私の首を締め上げてくる。

「ぐっ！この…変態女がっ！フレイ！」

私とポントスを包み込んでいる漆黒の炎にさらに銀色の光球が包み込む。

漆黒と銀の色が入り交じった光球が瓦礫の上空で飛び回っていく。

「ぐううっ！」

ようやくポントスは笑みを消し、苦しげな表情を浮かべてくる。

私はさらにポントスの首を締め上げていく。

このままポントスを落としてやる！

「うぐっ…わたくしの…愛の…炎…ヴィシュヌ！」

銀と漆黒に入り交じった光球にさらに灰色の光が混じってくる。

「うぐあああっ！」

三つの魔力で凝縮した光球の中で私とポントスは互いの身体を燃やしながら首を締め上げ合っていた。

「いい加減に私から離れろぉおおおっ！」

「絶対に離しませんよ！」

三色入り交じった光球は暫く上空を飛び回った後、地上へと激突し、爆風を撒き散らせていく。

……。

……。

…。

「やっと引きはがすことが出来たか…」

地上に激突した弾みに何とかポントスを引きはがすことに成功した

らしい。

少し離れたところで屍食鬼のように立ち上がってくるポントスがいる。

「どうしてわたくしの愛を受け容れてくれないのですか？ロスト君…」

ポントスは血塗れになりながらも爽やかな笑みを浮かべている。

「私はまだ自由でいたいのだ。だから、全力で遠慮させてもらう」

ポントスはため息を付き、手に魔力を凝縮させて、三つ又の矛を生み出してくる。

「仕方有りません。ここはアパテーに見習って貴方の四肢を切り裂いて物にするしかありませんね。わたくしのこのトリアイナでね…」

「ならば、ますますもって御免被る。生憎自分の手足には貴様とは比較にならないほどの愛着があるのでな…」

私は拳を構える。

どうやら決着の時が来たようだ。

ポントスが手にしているトリアイナという三つ又の矛から強大な魔力が収束されている。

その力はレアが放ったビッグバンに匹敵するものだった。

「わたくしのこの力に驚いているのでしょうか？レアの放ったあの技は原初神ガイア様が使ってこその最強の技。魔力の強さで如何様にも強くなることが出来るのです」

「なるほど。だが、貴様もまたガイアではない。故に私から見れば、レアと貴様とでは大差は無いな」

だいたいティターンと四高弟の強さの見切った。

まだ戦っていない者が後三神いるがポントスよりも桁違いに強い者はいないだろう。

確かに強大ではあるが、決闘であれば負ける気はしない。

「さすがのわたくしも少し頭に来ましたね。テテュスではありませんが、お仕置きをしてあげましょう。そして、貴方は私の花婿となるのです」

「お仕置きはテテュスだけで十二分に間に合っている。貴様の取り憑く島は無い」

ポントスのトリアイナに強大な魔力が渦巻く。

「終わりにしてあげます！」

私に瞬時に迫り、穂先に強大な魔力を纏わせて振りかぶってくる。

私の拳とポントスのトリアイナの穂先が合わさり、凄まじい余波が周囲に渦巻く。

「うぐっ！」

私の拳から血が吹き出る。

まさか競り負けてしまうとはな…。

「どうしましたか？ロスト君、まさかその程度の力なのですか…」

ポントスはトリアイナを振り回し、遠心力を込めた一撃を見舞ってくる。

それは閃光さながらの一撃だった。

私は辛うじて見切り、身体を転ばせながら何とか避ける。

「まさか、今の一撃を避けますとはね。ほんの少しでも貴方の力を侮ってしまったことをお許し下さい。では、次は本気で行かせて頂きます！」

トリアイナを頭上で回し、竜巻を巻き起こしてくる。

これがアレクを打ち倒したポントスの本気だというのか…。

だが、それでも私は負けるわけにはいかない。

「ロキ！」

身体の身体能力を最大限に増加させ、気合いを入れる。

「来い！ポントス！」

「ふはははは っ！良いですね！その緊張感、では参ります！ハヌマーン！」

竜巻の中心にいるポントスがトリアイナを振り下ろした瞬間に竜巻が巨大化し、私を呑み込もうと迫ってくる。

私が迫ってくる竜巻を回避しようと飛び立とうとした矢先、竜巻がさらに二つ三つへと分裂し、戦場に嵐の渦を巻き起こしてきた。

「くっ！」

余りの暴風で目が開けてられない。

防御結界を展開させて、暴風を遮断しようとしたとき、背後から殺気を感じ、反射的に拳を繰り出す。

甲高い激突音が響き、暴風で視界が狭まった状態で襲撃者を見る。

「レアではありませんが、もっと楽しみましょうよ、ロスト君！」

ポントスは突き出していたトリアイナを不意に私は前のめりになってしまう。

体勢を崩した私の背後に回り込み、トリアイナの柄で私の首を締め上げてくる。

「さあ、私と踊りましょうか！ハヌマーン！」

ポントスは私を締め上げているトリアイナをそのまま回転させ、竜

巻を起こしてくる。

竜巻が発生させる真空で私の身体に次々と裂傷が刻まれていく。

しかも暴風を顔にまともに受けていることで上手く呼吸することもままならず、身動きも取ることができない。

「この状態で先ほどの零距離での漆黒の大火球のように魔法を放てば、それを巻き込んでの竜巻となり、貴方が苦しみだけですよ…っれろっ…んちゅ」

「ぬぐっ！」

ポントスは血が滴っている私の首筋を舐め回し、吸い付いてくる。

苦痛と快楽で私を完全に落とそうとしているのだ。

まさに絶体絶命だ。

どうすればいい？

……。

考えるまでもないな…。

私の戦法は何時だって…。

藻掻いていた私はポントスにされるがままになる。

「ちゅば…どうしたのです？もう抵抗はしないのですか？」

「そうだな。抵抗はしない。ただし…無駄な抵抗はしないだけで有用な抵抗はする！ホワイトホール！」

零距離で白い球体を生み出し、全てを弾き飛ばす力が即座に働き出す。

「その技はアレークトーの…」

「そうだ！貴様が殺したアレクの最強の技だ！」

ホワイトホールは私とポントス、周囲にある全ての竜巻をも弾き飛ばしていく。

凄まじい衝撃で意識までもが弾き飛ばされそうになるが、何とか耐える。

ポントスも弾き飛ばされながらも私を怒りの形相で睨み付けている状態から必死に耐えているようだ。

「くっ！やってくれましたね！インドラ！」

ポントスはホワイトホールの衝撃に耐えながらもトリアイナの穂先をこちらに向けて、極大の波動を放ってくる。

もはやなりふり構わないようだ。

私はヴィマーナを生み出し、ポントスが放った極大の波動に迎え撃つ。

「ブラフマシル！」

私とポントスが互いに放った波動がぶつかり合い、無茶苦茶に力の余波が吹き荒れている戦場の全てを巻き込むような爆発が起こった。

……。

……。

…。

爆風が止み、私は正面を見据えた。

ポントスがトリアイナを杖にして立ち上がっている姿が見えてくる。

「まさか…ここまで追い詰められてしまうとは…貴方の力を…私は何処までも過小評価していたらしいようだ…」

私はヴィマーナを消し、拳を構える。

「そのようだな。だから、私は貴様と結婚するつもりはない。いい加減に諦めろ」

彼女と結婚すれば、確実に私の夢に支障が来たす。

それだけは避けねばならないのだ。

「良いですよ、別に結婚しなくても…ただし…貴方がわたくしだけの物になることは変わりはありません…」

ポントスは杖にしていたトリアイナを持ち上げ、穂先を私の方に向けてくる。

なるほど、そういうことか…。

「私を殺して永遠の存在にするつもりだということか…」

「よく分かりましたね。その通りです」

知り合いに似たようなことで私を殺したいと言ってた女性がいたからな…。

「生憎、私は禁欲的な永遠などには微塵も興味は無い。有限の時の中で欲望のままに生きることこそが我が人生だ。今も昔もな…」

「貴方は自分を知らないようですね。貴方の欲望が有限の時の中で収まるとはとても思えません。貴方はそれこそ、あの無限の欲望を秘めたエロスと似通っているように思えます…」

……。

ピテスにも私はエロスと似ていると言われたことがあった。

どうやら私は何処までもエロスが敷いてくる宿命からは逃れられていないようだ。

私の今後の人生のためにもエロスとは必ず決着を付けねばならない。

そのためにもこの茶番劇から何とか生き延びるようにしなければ…。

「クロノスが貴方を欲する理由が今こそ分かります。ですが、貴方はわたくしだけの者になるのです。もう誰にも渡しはしない！」

強烈な殺気が吹き荒れてくる。

「お前はわたくしだけの者になるのだ！ロスト！」

ポントスの口調が獲物を仕留めようとする獰猛な肉食動物さながらの威圧的なものに変わっていく。

「それが貴様の本性だというのか！上等だな！」

「わたくしの愛を思い知るがいい！冥界の果てでな！」

トリアイナが主の感情を代弁するように黒い禍々しい光を放ち、大気を震わせてくる。

どうやら決着の時が来たようだ。

私は最強の技を繰り出すべく拳に力を溜める。

本性を現したポントスを見て、彼女が改めてアレクの仇であることを実感させられる。

今度こそアレクの因縁に終止符を打ってやるぞ！

ポントスのトリアイナが巨大化し、余波だけで周囲を薙ぎ払うような強大な武器へと変化していく。

「これでお前はわたくしの永遠となるのだ！ふはははははっ！」

狂笑するポントスに私は拳を構えて、無言で答える。

アレク、私は今度こそお前の仇を討つ…。

ポントスはトリアイナを振りかぶり、私に最後の一撃を喰らわさんと駆けてくる。

「死ね！ロスト！シヴァ！」

「終わるのは貴様だ！ポントス！はあああああっ！」

迫り来るポントスの必殺の一撃を迎え撃つために黄金の拳を繰り出す。

「うおおおおおおおっ！」

アレクの仇をこの手で！

……。

……。

…。

『そなたはそなたらしく戦えばいい…』

……。

……。

…。

トリアイナを振るうポントスの背後に微笑を浮かべるアレクの姿が見えた。

私の拳とポントスのトリアイナが交差し、瓦礫の世界に光が満ちていく。

……。

……。

……。

……。

ポントスの胸に私の拳がめり込み、トリアイナは粉々に砕かれている。

「なぜ…わたくしを…殺さなかったのですか？」

私は力尽きて倒れてくるポントスを抱き留める。

ポントスは憑き物が落ちたかのように先ほどの荒々しい口調が消え、元の口調に戻っていた。

「これは決闘であって戦争ではない…」

「ふふっ…答えになってませんよ…」

ポントスは最後の力を振り絞って私を押さえ込むように覆い被さってくる。

納得する答えを出さないと私を解放しないつもりらしい。

「私が私であるためだ…」

……。

ポントスは暫し沈黙していたが、私を押さえ込んでいた力が緩まる。

「貴方が貴方であるため…ですか…ふふっ…ますます…貴方が欲しくなりましたね…」

ポントスは私に懐くように抱きついてきた。

「やはりわたくしは貴方と結婚したいです。貴方が欲しいです…」

私はポントスの直向きな真っ直ぐな求愛に思わず、顔を逸らしてしまう。

……。

とりあえず、しがみついてくるポントスを引きずり、ウラノスの方へと歩いていく。

「貴方は甘いですね。私達は敵だというのに…」

「そうかもしれないな…」

結局、アレクの仇を取ることは出来なかった。

それどころかポントスにまで好かれることになってしまった。

「テミスとヒュペリオンはティターンを代表する二強、今まで以上の苦戦は免れないと思います。わたくしは貴方の敵側ですが、個人的には貴方の武運を祈っていますよ」

「そうか…だったら…早く私の身体から離れてくれないか…重たい」

自分よりも体格が勝るポントスをしがみつかれたままでいるのだ。

かなりの重労働だ。

「そんなに釣れないことを言わないでください。それよりも女性に重たいと言うのは些か失礼だと思います。貴方以外でしたら処刑しているところでしたよ…」

「そ…それは悪かったな…」

またしても美女とは言え、敵に謝罪してしまうとは…。

私は戦い以外ではつくづく女に弱いようだ。

「いいえ、許しません。テテュスではありませんが、これはわたくしからのお仕置きです…ちゅ」

「むごっ！」

しがみついていた私を覆うようにポントスの唇が私のそれに覆い尽くしていく。

「あああああっ！」

テテュスの声が何故か響く中で私の唇はポントスに思うがままに蹂躙されてしまう。

「ぷちゅくちゅちゅぱちゅぱ」

離れようにも身体が正直なのか、私は快感に身を任せるように無抵抗になってしまっていた。

……。

「ちゅぱ…ふぅ…では、御武運を祈っておきますよ、ロスト君…」

ポントスは甘い吐息を私に吹きかけて、ウラノスとウレアの近くへと戻る。

アレクの仇である女にまで好かれてしまうとは…。

「うぬぬっ…後で絶対にお仕置きしてやるから！」

「ポントスは僕よりも押しが強いから気を付けないとね…」

テテュスは親の仇を見るような目で私を睨み、レアは腹黒い笑みを見せていた。

私は彼女達の殺気に敢えて気づかないように明後日の方向を見る。

彼女達が私に向けている感情は分かっている。

彼女達が敵側でなかったらこの上なく嬉しかったのだが…。

いずれ私は彼女達と戦わねばならない。

……。

クロノスは私の葛藤を見透かすように微笑んでいた。

「全く君は何処までも私を驚かせるね。けど、次に戦うのはテミスとヒュペリオン、私達ティターンの中でも抜きん出た実力者達だ。それにガイア四高弟最強で最もガイア様に近しい存在と呼ばれるティフォンもいる。もうすぐ彼女も来るはずだよ。ふふっ…果たして君に勝ち目はあるのかな？」

「私は立ちはだかる敵を上手く退かせるだけだ」

私は不敵な笑みを見せるクロノスを睨む。

「私は決して貴様の思い通りにはならないぞ、クロノス」

「さて、何のことなのかな？私には皆目見当が付かないよ」

クロノスは私の恫喝を涼しげに受け止めてくる。

「まあ、今はただ君には期待している、ということだけは言ってお

こうか…」

……。

クロノスの言葉を聞いて私を屈服させるためにこの戦いを催したわけではことを確信した。

必ず何かの狙いがあるはずだ。

私の中にある瘤が疼いてくる。

クロノスは必ず私に運命づける選択肢を迫ってくるだろう。

その選択肢で私の瘤が破裂し、運命が動き出すことなるのだ。

……。

「さあ、次の相手が君を待っているよ…」

……。

クロノス達の洗礼はまだ続く…。

第103話：Преступление и наказание

「次はいよいよ俺の出番だな。貴様の戦う姿を見て身体が疼いて仕方なかったぞ…」

ヒュペリオンが指を鳴らしながら私の下へと歩いてくる。

ついに屈辱を晴らすべき敵のうちの一神が出てきたか…。

「ロスト君、ヒュペリオンはティターンのみならず、エロスの軍隊の中でもかなりの手練れですから注意してください」

遠くからポントスの忠告が聞こえてくる。

「ここまで来たのだから負けないでよ！ロスト！」

「汝は我の飼い主殿なのだからな…」

「僕を楽しませたんだ。だからロストちゃんが負けるなんて有り得ないよ」

テテュス達は敵側にいるにも関わらず、すっかり私を応援してくれている。

敵側に応援されるとは何だか複雑な気分だ。

「随分もててるようだが、それは貴様が奴等よりも強かったからだ。俺達神とは自分よりも強い者に服従し、敬愛し、恋愛するものだ。貴様なら俺の目に叶う男になりそうだな…くっくっくっ…」

彼女には顎を外されたり、腹を突かれたり等と虐待された借りがある。

この決闘でその借りを倍返しにすると私は誓ったのだ。

だが、気合いを入れるもののやはり恐い。

ティターンの中でも最も体格が大きく、私よりも五倍ほどある巨大女。

タナトスに似た男口調に同じ褐色の肌で如何にも獰猛で野性的な雰囲気を帯びた女戦士。

彼女に比べれば私は子供のように小さいものだった。

この圧倒的な体格差でもかなりの脅威だ。

「俺を楽しませなければ許さないぞ、ロスト…」

何よりもタナトスに似た凄みのある口調や雰囲気が大いに苦手だった。

とにかく臆病を勇気に変えて、戦いに挑まねば…。

私は震える身体を押さえつけるように拳を構える。

「くっくっくっ…貴様には俺の本気を見せてやるぞ！」

ヒュペリオンは鎧と服を脱ぎ捨て、全裸になる。

……。

「ぐほっ！」

いきなり見せつけられた光景に私の鼻から欲望が吹き出てくる。

ヒュペリオンは体格は有り得ないほどに巨大ではあるが、美女であることには変わりない。

巨体の彼女が見せつける魅惑的な肉体に目眩すらも覚えてくる。

これは一体何のつもりだ？

色仕掛けが彼女の本気だというのか？

「俺の肉体美に見惚れるのは結構だが、これが俺の本気の戦闘体勢だ。見るがいい！ウリエル！」

ヒュペリオンの全身が炎に包まれて、いや、炎そのものになっている。

服を燃やさないために脱ぎ捨てたのか！

やはり本当の色仕掛けではなかったようだ。

少々残念な気がしてきたが、まあいい。

私は拳を構える。

「行くぞ！ロスト！」

炎になったヒュペリオンは駆けつけ、拳を振るってくる。

私は回避して、ヒュペリオンの溝に拳をめり込ませようと繰り出す。

だが、殴った感覚がまるでしない。

それどころか、焼け付くような痛みが拳にまとわりつくだけだ。

「ぐっ！」

「あはははっ！堪えないな！おらぁおおっ！」

ヒュペリオンの大木のような回し蹴りが迫ってくる。

速くて回避しきれない。

私は両腕を交差し、かつ瞬時に防御結界を展開して防ごうとするが、
ヒュペリオンの蹴撃はそれら全てを
弾き、私の身体に直撃してくる。

「ぐぼっ！」

ヒュペリオンの大木のような巨大な足が全身に激突し、私の身体が
瓦礫の山へと吹っ飛んでいく。

瓦礫に埋もれながらも止まることが無い吐血に喉を痛めてしまう。

何て威力の蹴撃なのだ…。

蹌踉ける身体に鞭打って立ち上がろうとしたときに殺気を感じ、倒れ込むようにして転がり込んでいく。

私の横たわっていた場所が爆砕され、余波が身体を打ち付けていく。

「くっくっくっ…勘が良い奴だな…」

ヒュペリオンが私が先ほどまでいた場所に向かって踵落としをしていたのだ。

速さも尋常ではない。

「何時までも逃げ続けるわけにはいかないだろう。さあ、どうする！ロスト！」

不意に地面が熱くなり、その場から離れる。

離れた瞬間に火柱が吹き上がり、私は戦慄を覚える。

ヒュペリオンは身体の一部を地面に潜り込ませて、私を攻撃する機会を伺っていたのか！

私は地上での戦いは不利だと思い、空中へと飛び立つ。

「馬鹿め！ラファエル！」

地上にいたヒュペリオンが旋風を起こして消えていく。

何処に行ったというのだ？

これは非常に不味い事態だ。

私は第六感を総動員させて、気配を探る。

……。

左だ！

身体を向けて、思い切り拳を繰り出していく。

だが、今度は拳に刃物で切り裂かれた激痛が纏い、さらに全身に裂傷と共に凄まじい衝撃を受けて、弾き飛ばされる。

「ぐあああああっ！」

弾き飛ばされながらも考える。

無闇に迎え撃っても返り討ちに合ってしまう。

ならば、奴の攻撃方法を分析することが先決だ。

奴は身体を全く別物に変身して攻撃してくる。

しかも、通常では殴れないような自然現象そのものになって…。

ならば、方法はただ一つ。

自然の摂理をねじ曲げる力をさらに高めていくことだ。

もはやここまでの次元となれば、最低限この力が無ければ、歯が立たない敵ばかりになっている。

ニュクスや先ほどまで戦ったテテュス達もこの力を使わなければ成す術も無くやられてしまっていた。

この力をさらに操作していき、彼女達との戦いを有利に進めねばならないのだ。

第六感を駆使し、ヒュペリオンの不可視の攻撃を避け続けていく。

「ちょこまかと逃げやがって、俺を退屈にさせるつもりなのか？ならば、死ねい！」

業を煮やしたのか、ヒュペリオンは裸体が姿を現し、腕に巨大な旋風を纏ってくる。

再び欲望が溢れる鼻を押さえてヒュペリオンを見据える。

炎の次は風と化して攻撃していたというのか…。

ヒュペリオンは腕を振るって竜巻を巻き起こす。

瓦礫が竜巻で舞い飛び、凶器となって飛来してくる。

防御結界を展開させながら瓦礫を回避し、強風を纏っているヒュペリオンの下へと接近していく。

「ついに来る気になったか！嬉しいぞ！ロスト！」

待ちこがれた恋人を誘うような男気のある笑みを浮かべてくるヒュペリオン。

身体は風から炎を纏い、拳を振るおうとしてくる。

今度こそ打ちのめしてやるぞ！

黄金の拳よ、唸れ！

ヒュペリオンの拳を回避しつつ、私は黄金の拳を繰り出す。

「ぐはっ！」

今度こそ手応えがあった。

ヒュペリオンの溝に私の拳がめり込んでいく。

だが、それでも炎を纏った者を殴ったことには変わりないのだ。

手に焼け付くような痛みが襲ってくる。

それでも私はヒュペリオンの腹部に何度も拳を浴びせる。

「ぐっ！やってくれるではないか！貴様！」

痛みに堪えながらヒュペリオンは私の身体に両腕を回して抱き締めてくる。

いや、締め上げてきたのだ。

「ぐわっ！離せ！」

「くっくっくっ…遠慮するな。俺の言葉通りに熱い抱擁を貴様に骨の髄まで感じさせてやる！ホーリー・シュライド！」

ヒュペリオンの身体はまさに灼熱の業火となって私を包み込んでいく。

「ぐあああああっ！」

タナトスの全身粉砕骨折の抱擁ではなく、全身火傷の抱擁ということなのか！

何とか振りほどこうと藻掻くがヒュペリオンの腕力は凄まじく私の身体がますます燃えさかる胸の谷間に押し込まれていく。

「はぁはぁ…いいぞ…もっと抵抗してみろ…俺を感じさせろよ…」

苦しむ私とは裏腹にヒュペリオンは恍惚とした声を出している。

ヒュペリオンは抵抗する私を抱き締めていることで感じているというのか！

これでは私が抵抗すればするほどますます強く抱き締めてくる。

熱さと火傷で意識が朦朧としていく。

いったいどうすればいい？

……。

村の学者が面白い物語を教えてくれた。

北風と太陽だ。

頑なに風を巻き起こす北風では旅人は上着を脱ごうとしない。

だが、暖かい太陽であれば…。

私はヒュペリオンの巨乳に身体を挟まれながらも拳を握りしめて、両側にある巨乳に指圧するように拳を押しつけていく。

「ううっ！な…何だ！この感覚は！うあ…ああっ…うぐっ！」

ヒュペリオンが身をよがらせている。

エリニュス直伝の指圧にヒュペリオンは感じているのだ。

僅かながら抱擁する力が緩んできた。

その僅かの力の緩みは私にとって充分すぎるほどの好機だった。

「うおおおおっ！」

裂帛の気合いと共に魔力を放出し、締め上げているヒュペリオンの巨体を弾き飛ばす。

「きゃああっ！」

ヒュペリオンは可愛らしい悲鳴を上げて、弾き飛ばされていく。

私はより一層気合いを入れて拳を握りしめる。

ヒュペリオンは自分の霰のない悲鳴や自分よりも小さいと思っていた奴に弾き飛ばされてさぞ屈辱的だろう。

私が受けた屈辱には遠く及ばないが、十二分に仕返しが出来たと思い、水に流そう。

だがら、次からは生き残るだけのために戦わねばならない。

おそらくヒュペリオンは烈火の如く怒り狂う。

ヒュペリオンはおそらくタナトスと似た精神世界に生きる女に違いない。

だから、タナトスは武人として戦っている時に自分の中にある女を除かれてしまったことで怒り狂うことだろう。

不意に悪寒が走ってくる。

これは一体…。

ヒュペリオンは瓦礫を殴り飛ばしながら、私の前に姿を現してくる。

「まさか俺よりも小さき者に弾き飛ばされる者をこの目にするとはな…くっくっくっ…」

「何がおかしい？」

これは怒りの空笑いなどではない。

ようやく巡り会えた何かに対する歓喜の笑み。

私は彼女に屈辱的経験をさせたはずだ。

何故、嬉しそうに笑っているのだろうか？

「俺は貴様に心底惚れたぞ！ポントスではないが、力づくで俺の者にしてやろう！」

ヒュペリオンは舌なめずりをして、地響きを立てるように悠然と私の方へと歩いてくる。

……。

これは非常に不味い。

彼女の笑みは大好物の草食動物を目にした肉食動物そのものと言っていいものだった。

ただでさえ知り合った女性はほとんどが肉食系だ。

彼女に屈服させられてしまえば、私は愛玩という名の虐待で潰されてしまうだろう。

それだけは断じて避けねばならない。

「できるものならやってみろ！」

「ならばやってやるぞ！ガブリエル！」

ヒュペリオンが手を地面に付けた瞬間に凍結して広がっていく。

空気が冷え、凍り付いた大地が私の足下に迫ってくる。

これでは私までもが凍り付いてしまう。

私は上空に飛び立ち周囲を見渡す。

いつの間にか吹雪が起きていたのだ。

視界を塞ぐほどの猛吹雪を前にヒュペリオンの姿を見失ってしまう。

余りの冷たさに感覚が鈍ってしまいそうだ。

私は防御結界を展開しようと思った矢先に思いとどまった。

ここで防御結界を使えば魔力が放出されて、みすみす敵に居場所を教えてしまうことになる。

『どうした？防御結界を使わないのか？』

白い世界の中でヒュペリオンの声が響き渡ってくる。

どうやら魔力を使わずとも既に居場所が察知されているらしい。

『くっくっくっ…さてと、俺の男を迎えに行くとするか…』

不意に殺気を感じ、感じた方向に合わせて身体を反らしていく。

今いた場所に巨大な手が掴みかかっている様子を見て背筋が震えてくる。

「ちっ…外したか」

吹雪が巻き起こる中で褐色の裸体を晒すヒュペリオンの身体はやけに鮮明に目立っていた。

またしても鼻から欲望が…。

それよりもこの猛吹雪の中で裸体を晒して寒くなのだろうか？

「ふふっ…俺の屈服すればこの身体は思いのままだぞ…」

ヒュペリオンは両手を広げて胸を惜しげもなく見せつけてくる。

「見くびらないでもらおうか。私は断じてそこまで落ちぶれてはいないぞ！」

あれは獲物に誘う美しき食虫植物だ。

誘いに乗ってはいけない。

「ふん、白々しいな。貴様の男はそうは言ってないように見えるがな…」

ヒュペリオンの視線が私の下半身に向いていることに気づき、思わず前屈みになってしまう。

屈辱を返したと思ったらまたやり返されてしまうとは…。

とにかく早く決着を付けねば、目に毒だ。

「決着を付けさせてもらうぞ！ヒュペリオン！」

私は拳を握りしめて、ヒュペリオンの懐へと突撃していく。

「ははははっ！貴様から俺の元へと来るのか！嬉しいぞ！」

ヒュペリオンは両手に氷の剣を生み出し、凄まじい速度で斬撃を繰り出してくる。

斬撃は真空破をも生み出すことで攻撃範囲が広いため、紙一重の回避は危険だ。

そのためなかなかヒュペリオンの懐に飛び込めないでいた。

ヒュペリオンは強い。

強大な魔力や技に依存しない地力の強さが備わっている。

さすがはティターンの中でも抜きん出た実力者と呼ばれるだけはある。

「どうした？俺の元の来るのではなかったのか？」

ヒュペリオンはせせら笑い、私が悪戦苦闘している姿を楽しんでいた。

おのれ…。

ヒュペリオンの斬撃は速くて重い。

まともに一撃でも喰らえば致命傷も負いかねない。

ならば、まともに受けないように最小限の被害で被って突っ込む。

防御結界を展開し、斬撃の嵐が吹き荒れるヒュペリオンの懐へと再度突撃していく。

「返り討ちにしてやるぞ！」

ヒュペリオンの斬撃が私を捉え、防御結界に激突していく。

防御結界を即座に砕けて私を捕らえようとするが、先ほどまでの速さも力も無い斬撃だ。

私は遅くなったヒュペリオンの斬撃を交わしつつも懐へと飛び込む。

避けて通れないのであれば敢えて攻撃を受け、威力を殺していく。

それが私の戦法だ。

懐に飛び込もうとする私を見て、ヒュペリオンは一瞬焦った表情するもののすぐに余裕の笑みを浮かべてくる。

何故、そこで笑うのだ？

まだ奥の手を隠し持っているのか？

「れろっ」

ヒュペリオンの口から巨大な舌が触手のように伸びていき、私の身体を捕らえていく。

「ぬおっ！」

巨大な舌は私の首に巻き付いて吊し上げていく。

虐待の時にやられてしまった触手舌だ。

『くっくっくっ…また貴様の顎が外れるほど蹂躙してやろうか？』

「もごっ！」

ヒュペリオンの舌先が私の口に入り、喉の奥まで突っ込まれていく。

「むがっ！」

またしても顎が外れてしまった…。

このままだと顎が外れやすくなってしまうな…。

……。

だが、私はただでは転ばない。

この窮地を脱出する術は貴様が教えてくれたのだからな…。

私の身体が燃えだしてくる。

ヒュペリオンが使った技ウリエルだ。

「うっ！」

私の口からヒュペリオンの舌が出ていく。

私の身体が炎に変わったことでヒュペリオンは目を見開き、即座に舌の拘束を解こうとしてくる。

だが、私は自分の顎を嵌めた後にヒュペリオンの舌を掴み取り、そのまま引っ張っていく。

「むぐうううっ！」

『離せぇえええええっ！』

「断る！はあああああっ！」

私はヒュペリオンの舌を振り回し、遠くへと投げ飛ばす。

ヒュペリオンが地面に激突したのか、地響きが起こってきた。

手にはヒュペリオンの唾液が生々しく残っている。

女性の舌を掴んで投げ飛ばすのは少々やりすぎただろうか？

だが、それ以上の仕打ちをポイベに喰らわせたのだから今更だろう。

「俺の舌をよくもやってくれたな…」

ヒュペリオンは虚ろな表情で私の下へと歩み寄ってくる。

「しかも二度も俺を弾き飛ばしてくれるとは…」

私は冷や汗をかき、ヒュペリオンの出方を伺った。

さすがのヒュペリオンも怒っただろう。

これからが本番だというのか…。

「ますます惚れたぞ！是が非でも俺の者にしてやる！」

ヒュペリオンは嬉々として私に突進し、巨大な拳を繰り出してくる。

今まで以上に速い一撃だ。

私は紙一重で回避するともう片方の拳が迫り、さらには蹴りまで放ってくる。

「ははははっ！これほど嬉しい気分になったのは久方ぶりだ！」

ヒュペリオンは笑いながら壮絶なまでに激しい連撃を繰り出してくる。

これは予想外の展開だ。

ヒュペリオンは舌を掴まれてぶん投げられるという屈辱的な攻撃をしたにも関わらず、逆に喜んできた。

しかも調子づいたことで攻撃の切れが増して、さらに厄介になってきている。

これでは怒り狂ってくれた方がまだ良かったというものだ。

私はヒュペリオンの連撃の嵐から逃れるべく一旦間合いから離れようとする。

「こんなに楽しいのに逃げるとは無粋だぞ！」

ヒュペリオンは間合いから離れようとする私の頭を鷲づかみをしてくる。

「ぐぅ！」

「くっくっくっ…無粋な貴様にはテテュスに見習ってお仕置きをしてやらねばな…」

ヒュペリオンはもう片方の掌から膨大な魔力を超圧縮させた人の頭ほどの光球を生み出し、私の胸に押しつけてきた。

「カマエル」

……。

「ぎゃあああああああああああっ！」

全身から血が吹き出し、声が枯れるほどの絶叫を上げてしまう。

内蔵が破裂したのか？

全身の骨が砕けてしまったのか？

余りの痛みに脳が破裂してしまうのではないかという激痛だった。

「貴様が悪いのだぞ。俺から逃げだそうとするからな…れろっ」

血塗れになった私の身体にヒュペリオンの舌が舐め回してくる。

「ちゅぱ…それにしても俺のカマエルを喰らっても尚五体満足でいられるとは大した奴だ…ちゅうう…これでも世界を荒廃化させるほどの魔力を圧縮させたものをぶつけたというのに…あむっ」

血塗れだった私の身体はヒュペリオンの唾液にまみれていく。

それにしても世界を破壊するほどの威力が私の身体の内部で爆発したというのか…。

いくら頑丈な身体を持っても中身から攻められてはどうしようもないな…。

だが、今の一撃で私の意識を刈り取れなかったのが、ヒュペリオンの運の尽きだ。

私は魔力を放出して、ヒュペリオンの手を弾き、地面に着地する。

「くっくっくっ…まだ抵抗するつもりなのか？」

「そうだ」

両の拳を出して、戦闘態勢を取る。

そろそろ決着を付ける時が来た。

「私にはまだ戦う相手がいるからな。いつまでも貴様の相手はしていられない…」

「言ってくれるな。そんな満身創痍の状態で何が出来るというのだ？もう一度お仕置きが欲しいと見えるな。欲しければくれてやるぞ！ロスト！」

ヒュペリオンは片手に先ほどの光球、もう片手には氷の剣を生み出して襲いかかってくる。

彼女の斬撃は相変わらず速くて重いものだ。

だが…。

「もう見切った…」

私はもう散々とヒュペリオンの攻撃を見てきたことで見慣れてしまった。

だから、もう彼女の攻撃を喰らうことは無い。

私が涼しげに攻撃を回避している様子にヒュペリオンは僅かながら焦りが見え始めてくる。

「何故だ？何故俺の攻撃が当たらない！」

ヒュペリオンは私の動きを止めるために地から氷を這わせ、火球を放ち、氷の剣を振るうが、いずれも空しく空振るだけ。

私は瞬時にヒュペリオンの間合いを詰め、腹部に拳を炸裂させる。

「あぐっ！」

ヒュペリオンの巨体は見事に私の拳で殴り飛ばされ、地響きが鳴る。

不意に空気の揺らめきを感じ、身体を横に反らす。

地面が鋭利な刃で切り裂かれて、亀裂が生じていく。

身体を風にして、素早さで勝負してきたか…。

私は後ろに向かって思い切り肘打ちを放つ。

「がはっ！」

肘は後ろから掴みかかろうとしたヒュペリオンの溝にめり込み、胃液が私の頭に降り注ぐ。

ヒュペリオンは蹌踉けながらも後ろに下がっていく。

「馬鹿な…俺が…手も足も出ないだと…」

「貴様は私を倒すために時間を掛け過ぎた。もう貴様の攻撃は見切った」

私は蹌踉けるヒュペリオンに無防備で見据えていく。

その私の姿にヒュペリオンの殺気が急激に膨らみ始める。

「おのれ…余裕のつもりか…その涼しげな顔をすぐに消し去ってやる！うおおおおおおおっ！」

ヒュペリオンは怒りの咆吼を上げ、全身が光り輝き出し、手には巨大な光の剣を生み出してくる。

ついに最後の一撃を放ってくるのか？

だが、もう遅すぎる。

私が見切ったというのは貴様のあらゆる攻撃も想定内で片づくことが出来るという意味だ。

今更、最強の技を出したところで無意味だ。

「ミカエル！」

ヒュペリオンは光の速さで駆け出し、光の剣で斬りかかってくる。

超光速による斬撃といったところか…。

だが、何とか見切れる程度の速さだ。

私は拳に握りしめてヒュペリオンを迎え討とうする。

これで終わりだ！

黄金の拳よ、唸れ！

私の拳は光よりも速く、ヒュペリオンの溝にめり込む。

「ごはあああああっ！」

ヒュペリオンの身体は輝きを失い、力無く項垂れていく。

今度こそ決まった…。

私はふとヒュペリオンを見る。

彼女は力尽きたのか、倒れようとしてくる。

それも自分の方に向かって…。

……。

急いで避けねば！

身体を動かした方向に運悪く力無く垂れていたヒュペリオンの腕に激突し、私はそのまま下敷きになってしまった。

「ぐえええええっ！」

ヒュペリオンの肉の中で私は悲鳴を響かせていった。

……。

……。

…。

私は息切れしながらもヒュペリオンの下から何とか這い出ていこうとする。

だが、後もう少しで抜け出せるところで私の身体が何かに掴まれてしまう。

「大丈夫か？ロスト」

目を覚ましたヒュペリオンが下敷きになっていた私を掴み上げてくれたようだ。

「大丈夫だ…」

「ふふっ…そうか。貴様は俺を完膚無きまでに叩きのめしたのだ。それなのに倒れた俺の下敷きなって死ぬなんて笑い話にもならないからな」

私を地面に降ろし、ヒュペリオンは地面に座り込んで私を見下ろしてくる。

「俺の負けだ、ロスト。俺を貴公の女にしてくれ」

……。

どう答えたらいいのでしょうか？

敵側の女に告白されてしまった…。

「貴公は強い。神の中では強者こそが正義なのだ。俺は強者である貴公に全てをくれてやる。身も心も何もかも全てを貴公に与える…ちゅ」

ヒュペリオンは指先で掴んだ私の顔に自らの唇を押しつけてきた。

顔がヒュペリオンの唇に包まれていく。

「ちゅぱ…後二神が貴公に戦いを挑んでくるが、気を付けろ。テミスはティターンの中でも一二を争う強者だ。そして、ティフォンは桁違いの化け物だからな…ちゅ」

……。

……。

…。

暫く私の顔を唇で挟み込んで満足したのか、私を解放してくれる。

戦う相手は残り二神。

私は次の対戦相手を見据える。

審判者テミス。

不気味な笑い声を上げながら全てを見据える裁きを下す者。

ティターン側での最後の対戦相手でヒュペリオンと同じく私に屈辱を与えた相手だ。

だが、もう屈辱を晴らす云々よりもそろそろ休みたい。

回復魔法の効果も悪くなっている。

ここまで五連戦までいったのだからな…。

「ひっひっひっ…やはりお前に裁きを下すのは私しかいないということだね。裁いてあげるよ。お前の罪をな…」

「逢って間も無い貴様に裁かれる覚えはないぞ」

私の答えにテミスは笑いを止めて、無表情となった。

テミスに纏っている雰囲気が張りつめてくる。

「ヒュペリオンはお前に戦闘能力を見切られて敗北した。故に見切られる前に短期戦でお前を裁き尽くす…」

テミスは上空に飛び、純白の翼は羽ばたかせる。

翼は雪のように白い羽を降らせ、幻想的な光景を作り出す。

「ホーリーランス」

テミスが散らした羽は次々と光の槍へと形を変えていく。

槍の数は上空一帯を覆い尽くす程のものだった。

無表情だったテミスの顔に再び不気味な笑みが浮かぶ。

「汝を磔刑に処す！」

無数にある光の槍が一斉に私に目掛けて降り注いでくる。

その光景は地上に降り注ぐ流星のような幻想的で恐ろしい光景だ。

とにかく避けなければ！

流星の雨をかいくぐるように駆け抜けていく。

だが、回避した光の槍はそのまま地面に激突することなく軌道を変えて私に迫ってくる。

走る方向を変えても光の槍は私の動きに応じて軌道を修正している。

私を貫くまで追い続けるというのか。

「私は審判者以外にも呼ばれている二つ名があってね…」

テミスの愉悦に満ちた声が聞こえてくる。

光の槍は私を貫くことこそが存在意義だと言わんばかりに追尾してくる。

「狩人さ…ひゃはははははっ！」

テミスの耳障りな笑いが響く中で私はひたすら逃げる。

私はテミスという狩人に狙われている獲物なのだ。

迫り来る光の槍を凌ぐために防御結界を展開させる。

だが、光の槍は結界を易々と破壊して迫ってくる。

右肩と左大腿に光の槍が突き刺さってしまう。

「ぐあああっ！」

「ひゃはははっ！罪からは逃れられないのだ！」

弱った獲物に獰猛な羽虫が集るように光の槍が迫ってくる。

激痛でのたうち回りたいのを我慢して必死に避け続けていく。

どうすればいい？

このままだと嬲り殺しにされてしまう。

血を流しながらも考える。

テミスの言う通り、確かに罪からは逃れられない。

だが、罪の無い者など果たしているのだろうか？

もし罪人が裁かれる運命であるならば、生きとし活ける者全てがテミスに裁かれることになる。

そんなこと私は…。

「断じて認めん！」

私は拳を振るって迫ってくる光の槍を打ち砕く。

「うおおおおっ！」

拳を連打して光の槍を次々と破壊してテミスの下へと駆け上がっていく。

テミスは翼を羽ばたかせて光の槍を生み出していく。

「罪から逃れようとするのか？咎人よ、大人しく私に裁かれるがいい…それが自然の在り方なのだ…ひゃはははっ！」

「言ったはずだ！貴様に裁かれる覚えは無いとな！」

私の拳に砕かれた光の槍の破片が集まり、巨大な光の槍が形作られる。

ティーの叩き潰すことに特化した極太のヴィマーナの槍とは違い、それは飽くまで貫くことに特化した細長い長槍。

「お前の罪を貫いてやるよ！ロンギヌス！」

「断じて御免被る！ヴィマーナ！」

天をも貫きそうな輝ける長槍と深紅の槍が激突する。

凄まじい余波が世界を軋ませていく。

「きゃはははっ！私には分かるぞ！お前は何時だって大切なことを仕方無いとして考えないようにしていた！真実から目を逸らしていた！それがお前の罪なのだ！」

テミスの言葉に息を呑む。

……。

『まあいい』

……。

『考えても仕方ない』

……。

私は何時だって…。

「気を強く持って！惑わされないで！」

テテュスの声が私の否定的な思考を遮断する。

そうだ。

今は彼女達の洗礼を受けている最中なのだ。

いや、ここからが本当の洗礼だというのか…。

「お前の中に有る瘤が疼いているだろう。疑問、焦燥、劣等、不安、恐怖、全ての負の感情が瘤を成長させる糧となっているのさ。お前ならば分かるはずだ！なあ、ロスト！」

ヴィマーナに亀裂が生じている。

私はテミスに自分の全てを見透かされて気圧されているというのか…。

「あはははははっ！そう、罪は誰しもが抱いているのだ！違いがあるとすれば、気づいているか、そうでないかだ！お前はどちらなのかな？」

「ぐっ！」

ヴィマーナが砕けようとしている。

私の意志が砕けてしまうように…。

「いいや、お前はどちらでもない。最も重く深い罪、気づいていて尚気づかない振りをしていることだ。貴様は重罪人だ！だから俺が裁いてやる！」

ヴィマーナが砕かれ、避けようとするが、長槍は軌道を変えて私に迫ってくる。

避けきれないのであれば、せめて急所を…。

僅かに身体を反らし、私は長槍に貫かれてしまう。

「ぐがあああああっ！」

物凄く痛い！

だが、私を貫いた以上これ以上の危害は無いはずだ！

「うおおおおおっ！」

私はそのまま長槍に伝うように真っ直ぐとテミスの下へ駈け上っていく。

「あはははっ！汝は罪を受け容れるのか！ならば、悔い改めよ！」

テミスは掌から波動を何度も放ってくる。

「罪は罰されるものではない！償うものだ！」

私は波動に呑まれながらもテミスの下へと向かっていく。

罪を受け容れれば奴は恐れる者ではないのだ。

「ははっ…ははは…償いに終わりは無い。永遠の続くものだ。罰されるよりも苦痛なのだぞ！それでも君は償うのかね？ひっひっひっ…ひゃはははははっ！」

「私の償いはどんな無様になろうとも恥を晒そうとも生き延びることだ！それが私のために犠牲になった者達への手向けであり、罰でもある！」

テミスは両掌を私に向け、魔力を凝縮させていく。

私は拳を握りしめ、力を溜める。

「では、汝の贖罪を見せよ！晒すのだ！そして、味わわせてくれ！貴様の罪の味を！あひゃはははっ！俺は審判を下す！受け取れ！ロスト！セクエンティア！」

テミスの両手から全ての罪を浄化していく波動が放出される。

黄金の拳よ、唸れ！

「あひゃひゃひゃひゃひゃひゃあああああああああっ！」

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおっ！」

……。

……。

……。

……。

……。

……。

……。

…。

「ふふっ…いいわ…ロスト…貴方は最高よ…この程度では断罪されないほどの深い罪を背負っている。その内に生きとし活ける者全ての罪を背負う救世主となれるかもしれないな…ははははっ…ごふっ」

テミスの吐血が私の顔にかかる。

私の拳はテミスの溝にめり込んでいた。

「私は神にはならない。私のロスト、馬鹿で臆病な元平民その他だ。今も昔もこれから先も…」

テミスは私の顔を掴み、血に塗れた唇を私の顔に押しつけていく。

「ちゅぱ…そう…これがお前の罪の味…ひっひっひっ…病みつきになるどの癖になる味だね…あははははははっ…」

そう言えば、テミスの口調は一人称と二人称が所々変わっている。

これはアーテの口調と同じだ。

だが、これほどの変わった口調は素で話すことは普通は有り得ないはず。

意識的に演技でもしなければ話せない口調だ。

もしかするとテミスはアーテと何らかの形で知り合っていたかも知れない。

「けど、最も罪深いのは自分の罪を罪だと思わないことだ。お前にはまだ見込みがある。だから、私は君を見守ろう。アパテーのようにならないでね…ちゅぱ」

テミスはもう一度口付けし、慈愛に満ちた微笑みを見せて姿を消していった。

何故、ここでアパテーの名前がここで出てくるのだろうか？

考えても分からない。

それにしてもエクリアは果たして無事なのか？

私がこうして洗礼を受けている間にもアパテーに何かをされているかもしれない。

何とかしなければ…。

……。

不意に拍手の音が聞こえてくる。

「見事だ。真に感服したよ。まさかヒュペリオンとテミスを打ち破るとはね。だけど、勝利の余韻を味わう暇は無いよ。ほら、彼女が君を求めてやってくるよ。地獄に誘うためにね…」

クロノスが拍手しながら不吉な予言を告げてくる。

不意に目眩がして膝を折ってしまう。

吐き気がしそうだ。

周囲を見渡せば、クロノスとウラノスを除く皆全員が震えていた。

この感覚は一体何なのだ？

大気が震える。

大地が揺れてくる。

この感覚は恐怖だ。

絶対的な死を予感させる恐怖。

地獄の使者が私を死に誘おうと迎えに来ているのだ。

「貴方には興味を抱いたのに残念です。けれど、もしかすると…」

ウラノスは僅かながら私に期待しているような眼差しを送ってくれる。

クロノスは最後の舞台を催すように両手を広げて見せた。

「最後の洗礼だ、ロスト」

……。

第１０４話：Ｔｈｅ　Ｕｌｔｉｍａｔｅ　Ｗｅａｐｏｎ

ついに最後の対戦相手が姿を現してくる。

圧倒的な威圧感と恐怖感を感じるが、今更怖じ気づくものでもない。

私は今まで沢山の怪物級の敵と戦ってきたのだ。

その度に何度も死ぬ思いをしてきた。

今度も何とかなるはずだ。

そう淡い期待をしていた。

だが…。

……。

何だ、この生き物は！

私が今視界に捉えているのは人らしき足の指。

正確には足の指の頭だ。

地面に這い蹲って見ているわけでも、顔面を足蹴にされているわけでもない。

直立不動で真っ正面の視線を向けて、足の指の頭が視界を埋めているのだ。

これは一体何を意味するのか？

私は背丈が小さい。

だから老若男女関係無く出会う者ほとんどが私よりも背丈が勝っていた。

目の前にいる生き物はそれら全てを凌駕する化け物だ。

『小さい…食べ応え…無さそう…』

目の前の生き物は何とも眠そうな声で私をそう評してくる。

だが、私は大いに反論してやりたい。

いや、反論させてもらう。

「貴様が大きすぎるのだ！この怪物女が！」

目の前にいる化け物こそがエロス軍の生ける最終兵器。

原初神ガイアに最も近しい存在だと畏怖される神。

ガイア四高弟最後の一神ティフォン。

私の視界には収まらないほどの巨大な女。

足下しか見えていないから美女かどうか分からないが、声からして美女だろう。

眠たそうな声だったが、耳心地が良い美声だったのだ。

とにかく首を限界まで反らして、彼女の顔を見てみよう。

……。

私は首を限界まで反らし、彼女の顔を見て時間が止まってしまう。

彼女の素顔を見て、私は更なる衝撃を受けてしまった。

似ている。

いや、瓜二つだった。

彼女、ティフォンの素顔はあの道化師と同じだったのだ。

私が道化師と呼ぶ女はただ一人しかいない。

アースガルズが崇める神にして世界の全てを嘲る道化師。

そして、全ての神の統べる女神。

原初神ガイア。

正確に言えば、オリュンポスの居城の中で見た、かつてのガイアの姿と瓜二つだったのだ。

軍服を纏い凛々しい雰囲気を出していた軍人であるガイアに…。

かつてのガイアと同じ姿で天をも貫くほどの巨大な身体。

ただし、髪と瞳の色は違っていた。

ガイアは緑の髪であるに対して、ティフォンは茶色。

瞳は右が枯葉を連想させる茶色で左が神々しき白銀。

口紅は青銅色等とガイアと比較してティフォンは暗い色で統一されていた。

これが四高弟最強にしてガイアに最も近しい者と呼ばれる存在なのか…。

『けど…とても美味しそう…』

頭上に何かが降ってきた。

生暖かくて粘り気が強く、異臭が漂う液体。

見上げているとガイアが口から涎を流していた。

凛々しい見た目に反して食い意地が汚いようだ。

私は頭にかかった涎を拭いながら周囲を見る。

いつの間にかテテュスがいなくなっていた。

ポントスやポイベ、ヒュペリオンまでいなくなっている。

「巻き添えにならないように退避させたのです」

私の視線に気づいたのか、ウラノスが答えてくれた。

私とティフォン以外に残っているのはウラノスとクロノスだけだった。

「私は最後まで見守らせてもらうよ。君の戦いぶりをこの目に焼き付けておきたいしね…」

「私も四高弟を纏める者として最後まで残ります。万が一ということもありますから…」

クロノスは楽しむためだということは分かるが、ウラノスの言うことは分からなかった。

何に対して、万が一なのだろうか？

私は視界に収まりきらない怪物女を見据える。

今はこの怪物女を倒すことだけを考えねば…。

「ティフォンはガイア様の血肉で誕生した、いわばガイア様の分身体だ。戦闘力や能力は限りなくガイア様に近いと言ってもいい」

クロノスはティフォンについて説明してくれる。

要するにガイアの劣化版のような存在だということか…。

だとすればガイアが二番目に苦戦した相手であると素直に頷けもす

る。

「何故、これほどまでに巨大なのだ？この体格だけでも反則ものだぞ」

ティフォンがガイアの劣化版だとして、余りにも巨大過ぎる。

本物に力が劣る分、体格で勝負するつもりなのか？

「ガイア様の血肉を維持するためにもこれだけの体格が必要だったわけだ」

クロノスの言葉を吟味して私は黙り込んでしまった。

ティフォンはピテスやヘメラと同じ造られし存在なのだ。

ヘメラはエリーを母体に造られし者。

ピテスはエロスの血肉を母体に生まれし者。

そして、ティフォンはガイアの血肉を母体として生まれた存在だったのだ。

「何のためにティフォンを造り上げた？」

「それはタルタロスに対抗するためさ。奴もガイア様に負けるまでは原初神と名乗っていた時代があってね。ほとんどの神々を眷属として従えていた奴に対抗するために造り上げた生体兵器なのだよ」

「ティフォンは真神戦争で血路を切り開くために獅子奮迅の如く活

躍しました。それこそガイア様と並び称される程に…」

ティフォンは真神戦争でガイアがタルタロスに対抗するために造り上げられた生体兵器だということなのか…。

「私達の戦う力の全てはガイア様から頂いたものだからね。ガイア様の分身体であるティフォンも同様に私達の力と技を全て使いこなすことができるのだよ。ふふっ…怖じ気づいたかね？」

「生憎、私はもう見た目から怖じ気づいてしまっている」

全然誇らしくないことを堂々と言い放つ。

これはもはや開き直らなければ、やってられないという状態だった故のことだ。

クロノスはティフォンはティターンや四高弟が持っている全ての力を使いこなすと言ったのだ。

「私は祈ります。貴方が無事に彼女の戦いに生き残れるように…」

「私も祈らせてもらおうかな。さてと、先ほども言ったようにここからが真なる洗礼だ。君が私達の主になる資格があるかどうかのな…」

クロノスは潤んだような目を向けて微笑んでくる。

私がティターンと四高弟の主になるかどうかだと？

唯でさえティフォンの存在で頭が一杯なのにいきなりティターンと

四高弟の主になるかどうかと言われても話についていけない。

『待って！やっぱりあたし達も立ち合わせてもらうわ！』

不意にこの場から去ったはずのテテュスの声が聞こえてくる。

『やはり審判者たる私がいなければ締まらないだろう？』

『俺の男の晴れ舞台から逃げ出すなんて女が廃るというものだ』

私を囲うように次々と去ったはずのティターンの女達が姿を見せてくる。

『結婚を申し込んでおきながら逃げるなんて卑怯な真似は出来ませんからね』

『面倒だけど良いものが見れそうだから思わず戻ってきたぜ』

四高弟の残り二神も舞い戻ってくる。

『貴重な実験体を観察出来る絶好の機会を逃すなんてありえないわ』

『ロストが傷ついた時に回復させるのは僕の役目…』

『私はただ何となく…のはず…』

『ロストには私達三千一神の世話をしてもらうように約束してもらったのだから』

『飼い主が戦っているのに我が逃げては一生の恥というものだ』

『僕の最高の遊び相手が最高の遊びを見せてくれる。まさに最高の舞台だよ』

『貴方にはまだ良い夢を見せて欲しいのよ…』

『お主の真価を見定めさせてもらうかのう…』

……。

ティターン神軍と四高弟全てが集結した瞬間だった。

『これで観客は揃ったわけだね。僕と君の戦いを見届ける者達が…。さあ、催してくれ、クロノス、ウラノス』

『承ったよ』

『承知しました』

ティフォンの声にクロノスとウラノスが了承し、私とティフォンを中心に円陣を組んでくる。

私の思考が追いつかない内に何だか話が勝手に進んでいる気がするが…。

『これは真なる神の候補を選定せし儀式』

『我等は承認する。最後の一神ティフォンに選定権を委ねることを…』

周囲に強大な魔力が漲り、空間が歪み始める。

『我等の歌で讃えよう！』

『神々に挑む蛮勇にして勇敢なる勇者を！』

『原初神ガイアの名の下に！』

『『『『『『『『『『『『『『『アレルイヤ！』』』』』』』』』』』』』』』

テミスがラッパを吹き鳴らし、ティターンと四高弟の斉唱が始まる。

朽ちた世界はひび割れ、崩れていく。

…………。

………。

……。

…。

ティターンと四高弟の美しき斉唱が響き渡っていた。

白百合が咲き誇り、花びらが雪のように舞い散る幻想的な世界。

それはヒュプノスが感情を壊したタナトスのために構築した疑似世界と似た雰囲気を漂わせる風景。

神々しき光の降り注ぐ至上の楽園。

幻想的な光景に見とれていると無粋な地響きが耳に聞こえてくる。

光を遮るように立ちはだかる巨神。

『この世界こそが聖なる決闘を飾る世界エリュシオン。君を食事するための僕の台所さ…』

ガイアと同じ顔でやや凛々しい風になった美声で説明してくるティフォン。

私は両の拳を構えて見せるが、ティフォンの巨体を前にしては余りにも弱々しすぎる気がしてしまう。

『焼き肉にして食べようか？それとも躍り食いが所望かな？君を徹底的に感じさせて食するのも乙というものだね。その場合は無抵抗でいてくれると嬉しいけど、そうはいかないだろう。君には守りたいものがあるはずだからね』

ティフォンは饒舌に語り始めてくる。

絶対的な強者の余裕というものなのだろう。

その余裕は私にとっては歓迎の至りだ。

なぜならば、油断を誘いやすいからな…。

『君はあの忌まわしきタルタロスを越える逸材だと僕は見ている。君の身体からは微かだけどガイアの匂いを感じるからね。ガイアは

君に期待しているのだろう。そして、僕達も君に大いに期待している。だから、最高の舞台を演出しようではないか、君と僕で…。全ての神々が見ているよ…』

ティフォンは世界を覆い尽くすのではないかというほどの巨大な翼を広げてくる。

翼は灰色だった。

『さあ、ロスト。僕に君の命の輝きを見せてくれ。君の輝きが果たして僕を目映くさせる程のものなのかを見定めさせてもらおうか！』

ティフォンの暴虐なる殺気が解放されると共に花びらが吹雪のように舞い散る。

ティターンと四高弟の斉唱も戦いの始まりを告げるように威圧的なものに変わっていく。

ティフォンは無造作に手を振るい、竜巻を起こしてくる。

「ラファエル！」

私もまた風となり嵐となり竜巻となって、対抗していく。

二つの竜巻がぶつかり合い、世界に嵐が吹き荒ぶ。

『僕にとってはただの風遊びさ。だけど、矮小な者には恐怖となる。これこそが強者の感覚だね！あはははは！』

ティフォンは手を何度も振って竜巻を巻き起こしていく。

無数の竜巻が私の竜巻を呑み込もうとする。

私にとって技や魔法がティフォンにとってはただの風遊びに過ぎないわけか！

同じ技で対抗しても力でねじ伏せらてしまう。

違う攻撃で対応しなければ！

「私は世の光！」

私は光となって竜巻の群れを駆け抜けていく。

光は風に作用されない。

ティフォンの指先から漆黒の光球が生み出される。

あの球体はまさか！

『ブラックホール…光をも呑み込む深遠なる闇…』

「うぐおおおっ！」

これはアレクの技！

そうか、エリニュスもまたガイアの弟子に当たる存在。

ならば、ティフォンが使えても不思議ではないということだ。

「ホワイトホール！」

全てを吸い込む闇と全てを弾く光が混ざり合っていく。

互いの反作用により、膨大なる力の余波が爆発的に撒き散らされる。

『うぐっ！』

「ぬおっ！」

ティフォンの巨体が蹌踉け、私は弾き飛ばされていく。

遠方へと飛ばされないように何とか踏ん張り、私はティフォンを見る。

ティフォンの巨大な手には僅かだが、血が流れていた。

『ふはははっ…僕に血を流させるなんて…タルタロスとガイアに続いて君が初めてだ！ヴィシュヌ！』

ティフォンは血に塗れた指先からポントスの技である巨大な光球を次々と放っていく。

ヴィシュヌはアーテのフレイを強化させた攻撃魔法だ。

通常の神ならば全力で放つ魔法を彼女は指先一つで行使するとは…。

ティフォンは私に地力の差をまざまざと見せつけてくる。

光球が着弾する度に大気が震え、大地が震える。

普通ならば世界が崩壊してもおかしくない攻撃だが、この世界は依然として維持されている。

確かにティフォンが台所と言うだけあって頑丈な造りを誇った世界のようだ。

ならば、こちらも遠慮はしない！

「スルト！フレイア！」

無数の漆黒の太陽と魔法陣がティフォンを包囲するように出現していく。

「喰らえっ！」

ティフォンに向かって太陽が群がり、魔法陣からは一斉に閃光が放たれていく。

爆風の嵐により、光が遮り、大地が砕け、世界は火の海と化す。

「ヴィマーナ！ブラフマストラ！」

巨大槍を召喚し、魔力を纏って私は爆炎の中にいるティフォンに向かって突貫する。

おそらくあの程度の攻撃では傷一つ付いていないだろう。

だから確実に手傷を負わせるには直接攻撃するしかない。

爆炎の中でティフォンの影が見え、それに向かって突っ込んでいく。

「うおおおっ！」

凄まじい音と共に巨大槍が動かなくなってしまう。

まるで何かに挟まれたようかのような音だった。

これはいったい…。

爆炎の中でティフォンの姿が鮮明に見え始まる。

そして、ティフォンの姿を見たときに私は化け物と戦っていることを改めて思い知らされる。

彼女は私の巨大槍を歯で噛んで受け止めていたのだ。

ティフォンは獰猛な笑みを浮かべて、巨大槍を噛み砕く。

『良い顔だ。恐怖に怯えた者を躍り食いすることが最高に美味しそうだからな。れろっ！』

「ぐおっ！」

ティフォンは舌を伸ばして私の身体を一舐めしてくる。

身体があっという間に唾液まみれになってしまう。

私は仕方なく服を脱ぎ捨てていく。

どうせぼろぼろで使い物にならなくなった服だ。

それにしてもヴィマーナを御菓子のように噛み砕くとはどこまで規格外なのだろうか…。

『ふふっ…期待通りの美味だ。テミスに見習って磔刑にして喰らうとしよう』

ティフォンは翼を羽ばたかせ、羽を散らしていく。

舞い散った羽は次々と巨大槍へと形作られていく。

あの技はテミスのホーリーランス、いや違う！

テミスがホーリーランスを収束させて造った長槍のロンギヌスだ。

ロンギヌスがホーリーランスのように大量に形作られている…。

『これが本当のホーリーランスだ。テミスはほんの一部分を借用していたに過ぎない…』

一本だけでも私を致命傷寸前に追い詰めたロンギヌス。

それが無数の数で存在し、私を貫こうと穂先を向けてきている。

さすがにこれだけの数相手に肉を切らせて骨を断つ戦法は不可能だ。

それどころか無為な玉砕で終わってしまう。

『ふふっ…回避しきれるかな？』

ロンギヌスが一斉に私に向かって迫ってくる。

これだけの数を喰らえば、確実に針鼠となってしまう！

逃げても追尾される。

ならば、全てを破壊するしかない。

『さあ、どうする？』

ティフォンはせせら笑ってくる。

落ち着け、ロスト。

今まで戦った者の技を端まで思い出すのだ。

……。

この技だ！

魔力を凝縮させた光球を生み出す。

「ブフラマー！」

『ふはははっ…その程度の魔力の洪水など僕にしてみればただの水遊びだ。それでどうするというのかな？』

ティフォンは魔力の洪水に浸りながらも笑みを絶やすことは無い。

ロンギヌスもまた洪水に呑まれながらも依然として私を追尾してきている。

だが、追尾してくるが速度が遅くなっている。

濃縮された魔力の洪水の中で消滅せずに追尾してくるのは驚嘆ものだが、追尾速度が鈍くなればいい。

後は…。

「ヴィシュヌ！」

巨大な光球を生み出して光の洪水に投げ込む。

狙いやすくなった的を纏めて破壊すればいい！

光の奔流が弾けだし、呑み込んでいた無数のロンギヌスの次々と砕けていく。

『ぬっ！』

ティフォンのせせら笑いが消えていく。

技の特性を知り尽くし、組み合わせて攻撃すればいくらでも危機を乗り越えることが出来る。

今まで戦ってきた者達の技を如何に駆使していくかが勝利の鍵となる。

全ての力を出し尽くしてティフォンを倒すのだ。

生き残るために脳細胞全てを使い切れ。

『小癪な真似をしてくれる！』

ティフォンは腕を一降りして魔力の洪水を爆風諸共掻き消し、同時に真空破などの余波も撒き散らしてくる。

防御結界で威力を緩衝させながら回避していく。

ティフォンのただの攻撃が殲滅魔法並の威力があることが厄介だな…。

『丸焦げにしてやるぞ！はあああっ！』

ティフォンの掌から極大の波動が放たれる。

攻撃範囲が広く、威力は殲滅魔法を軽く凌駕するものだ。

「ルシファー！アザゼル！」

出し惜しみしている余裕は無い。

徹底的に対抗しなければ一瞬でやられてしまう。

互いに放った波動がぶつかり合い、凄まじい爆発が起こる。

爆風に紛れて私はティフォンの懐に向かって飛翔していく。

黄金の拳よ、唸れ！

「はあああっ！」

ティフォンの胴体らしきものが見え、そこに向かって渾身の一撃を放つ。

『ぐふっ！』

ティフォンの呻く声が響いてくる。

これほどの巨体相手に一発や二発の打撃では堪えないだろう。

私は拳を連打し、ティフォンの胴体を徹底的に打ち込んでいく。

『ぐっ…おのれ！失せろ！』

「ごほぁ！」

頭上から昇天するのではないかという程の衝撃が襲い、地面に叩き付けられてしまう。

手で叩き落とされたのか…。

私の身体は地面の陥没し、痛みで身動き出来ない状態になってしまっている。

「ごほっ…がはっ！負けるわけには…ぐはああっ！」

地面に埋まっている私にさらに圧力がかかってくる。

ティフォンの巨大な足に踏みつけられている。

潰れてたまるか！

『くっ…なんて頑丈な奴なんだ、君は！僕が思いきり踏みつけているにもかかわらず頑強な金属を踏んでいるような感触だ…』

ティフォンは僅かながら畏怖を込めて言ってくる。

「ふふっ…私は…神々が鍛えし伝説の鉱石にも勝る丈夫な身体なのだ…」

痛みで顔が引きつるのをこらえて笑ってみせる。

喧嘩で減らず口は重要だ。

相手に戦闘の意志があると見せかけながらも体力温存の時間を作ることも出来る。

『くっ！減らず口を！』

「うあああああっ！」

ティフォンがさらに体重を掛けて踏みつけてくる。

我ながら本当に頑丈だとつくづく思う…。

だからこそ、勝機が見出せるのだ…。

全力で踏みつけても私の身体が壊せないということは確実に私の攻

撃が彼女の巨体に通用するということを物語っている。

『まさかこの僕にここまでの恐怖を与えてくるとな…。だが、これで君も終わりだ！』

ティフォンは翼から再び無数のロンギヌスを生み出し、それらを一つに融合していく。

彼女の身長に見合う黄金に輝く巨槍が生み出される。

『これこそがガイアが愛用していた神技の一つグングニルだ。これで君を貫いてあげるよ』

「ぐうぅ…ううあ…」

ティフォンは私の身体から足を除けて、槍を構える。

激痛で視界がぼやける中で太陽の如き輝くグングニルの穂先が見えてきた。

あんな巨大な物だと貫くどころか潰されてしまう…。

どうやらさらに警戒心を抱かせて全力を出してきたようだ…。

それでも考える時間は得られた…。

彼女が巨体であろうと関係無く手傷を負わせることが出来る方法が…。

「ごほっ…貫ける…ものなら…やってみろ…巨大女が…」

ティフォンは憤怒の形相を露わにし、グングニルを振り上げる。

『よく言った！ならば、貫いてみせよう！』

穂先が迫ってくる。

力を振り絞れ！

全細胞を覚醒させろ！

迫り来る槍を…。

『避けただと！』

「そんな馬鹿みたいな槍を受け止める馬鹿が何処にいる！」

爆発的に魔力を放出して、飛び立っていく。

横たわっていた場所には槍が突き刺さり、大地が崩れる。

拳に魔力を込めていく。

『ちっ！何処までも小賢しい奴だ！』

大地に突き刺さったグングニルを引き抜き、再び振りかぶろうとするティフォン。

胸ががら空きだ。

貴様を私とお揃いの血塗れにしてやるぞ！

「カマエル！さらに…」

黄金の拳よ、唸れ！

輝く拳がグングニルを振りかぶるティフォンの溝に炸裂していく。

『ぐっ…ぐぼあああああっ！』

ティフォンの全身から血飛沫が舞い、地上に血の雨が降り注がれていく。

いくら巨体で頑丈とはいえ、中身は関係無いだろう。

ヒュペリオンと同様に世界を破壊するほどの魔力を圧縮させた一撃を込めてティフォンの体内で爆発させた。

ティフォン程の巨体でも十二分に通用するはずだ。

『ごほっ…がはっ』

吐血が私の身体に降り掛かっていく。

さてと、手傷は負わせたものの、ここからが本番だろう。

血塗れになったティフォンは目が紅く染まっている。

『よくも…よくも…ここまで…許さない…。絶対に！絶対に！絶対に許さないぞ！ロスト！はあああっ！』

裂帛の気合いと共にグングニルを振るい、竜巻と稲妻を呼び寄せる。

稲妻が雨のように降り注ぎ、無数の竜巻が巻き起こり、世界を揺さぶっていく。

世界が無差別に破壊される。

これが神の怒りというのものか…。

大地の破片や稲妻が迫り、防御結界で凌いでいく。

『うおおおおおっ！ロストぉおおおおおおおおっ！』

ティフォンがグングニルを縦横無尽に振り回し、私を叩き潰そうとしてくる。

彼女がグングニルを振る度に氷や炎、風の刃などと殲滅魔法が繰り出されていく。

世界を覆い尽くすほどの弾幕を放たれ、回避する場所すら無い。

「ぐあああああああっ！」

ティフォンの猛攻により防御結界にあっという間に破壊され、私の身体に氷の矢が突き刺さり、稲妻に打たれていく。

『殺してやるぞ！徹底的に殺し尽くしてやるぞ！ロストぉおおおおっ！うおおおおっ！』

グングニルの穂先を私に向けて、魔力を収束させていく。
これは大技が繰り出される予兆だ。
空間に亀裂が走っていく。
『ヴィズル！』
グングニルから黄金に輝く波動が放たれていく。
「ミカエル！」
私は身体を輝かせ、黄金の波動を突っ切ってティフォンの下へと駆けていく。
ティフォンは黄金の波動に呑まれながらも突っ込んでくる私を見て、グングニルを突き付けようとする。
「ヴィーザル！ヴィマーナ！」
ヴィーザルを召喚し、迫ってくる穂先を叩き斬り、ヴィマーナを手に突貫を続けていく。
ティフォンは穂先が切断されたグングニルを投げ捨てて、両手で三角形を形取っていく。
『セラフィムゲート！』
三角形が純白に輝き、光が象った翼ある者、聖書に記されし天使が三体召喚されていく。

この土壇場で新手を呼んでくるとは！

三体の天使達は弓矢を一斉に構えてくる。

『『『セレスティアル・トリニティ』』』

先ほど放った以上の波動が放たれ、携えたヴィマーナとヴィーザルが砕かれ、光に呑まれていく。

「があああああああああっ！」

血飛沫を散らしながら私は地上へと再び叩き付けられてしまう。

「ごほっ…まさか攻撃が全て…凌がれてしまうとは…」

『『『バニッシュメント・トリニティ』』』

三体の天使達はさらに駄目押しと言わんばかりに視界を真っ白に染め上げる波動を地上に横たわっている私に放ってくる。

これがガイアに近しい存在と呼ばれるティフォンの底力だというのか…。

天使達が放った波動で天空に打ち上げられ、再び地上に叩きつけられていく。

「ごがあああああああっ！」

頑丈な身体であることは楽に死ねないということなのだな…。

原初神に近い者の強大な攻撃を受けながらも五体満足でいられるとは何処まで反則的なほどに生存能力が高いのだろうか…。

「ははっ…ははははっ…」

思わず笑いが込み上げてくる。

私は痛みに慣れてしまった。

私にとって痛みは生きていることを実感させるためだけの感覚に過ぎなくなってしまったのだ。

これは六連戦するという何度も過労死しても可笑しくない程の重労働を強いられて到達した境地だ。

「失敗したな…ティフォン…」

いや、ティターンと四高弟の連帯責任と言える失敗だろう。

もし、初っ端からティフォンに相手をさせていたら言葉通り死ぬほどの激痛に苛まれて悶絶死していたかもしれない。

だが、彼女達は勿体づけて主砲を後回しにしてしまった。

戦争では出し惜しみせずに全力で蹂躙して味方側の被害を最小限に押さえるものだ。

だが、彼女達は戦いをただの遊戯として捉え、獲物である私を結果として侮る形を取ってしまった。

痛みが私の意識を覚醒させ、神経を研ぎ澄ませていく。

喧嘩番長たる私を侮ったことを骨の髄まで思い知らせてやるぞ！

三体の天使達に再び魔力が収束されていく。

まずはあの雑魚共を叩き潰さないとな…。

『『『ジャジメント・トリニティ』』』

膨大な波動が放たれるが、もはや痛みに慣れた私にとって水遊び程度のものでしかない。

波動に呑まれながらも笑って突撃してくる私に畏怖をなしたのか、ティフォンの表情に焦りが浮かんでくる。

まずは邪魔な天使共を排除する！

「うおおおおおおおおっ！」

拳を振るって、三体の天使達を瞬く間に殴り砕いていく。

「万倍返しをしてやるぞ！ティフォン！」

そのまま勢いに乗るように再びティフォンの溝に拳を連打する。

『ぐあああああっ！がはっ！』

ティフォンの巨体が蹌踉めき、血を吹き出てくる。

そして、ティフォンの巨大な顎に向かって思い切り拳を突き上げていく。

『がはあああああっ！』

ティフォンの巨体が僅かながら宙に舞い、地上に叩きつけられる。

地上に倒れているティフォンの追い打ちを掛けようと殴りかかろうとするが、倒れているティフォンが足を振り上げ、私を蹴り飛ばす。

「ぐふっ！」

仰け反った私は即座に体勢を立て直すと同時にティフォンもまた立ち上がり、距離を取ってくる。

初めてティフォンに後退させることができたな…。

私はティフォンに向かって挑発的な笑みを見せつける。

ティフォンは苦虫を潰したような顔になり、上空へと飛んでいく。

『セラフィムゲート！』

今度は十体の天使達を召喚してくる。

何体召喚しようとも今の私の前ではもう雑魚に過ぎん！

十体の天使達はティフォンを身体を基盤にして複雑な陣形を取ってくる。

『ケテル』

『コクマー』

『ビナー』

『ケセド』

『ゲブラー』

『ティファレト』

『ネツァク』

『ホド』

『イェソド』

『マルクト』

天使達は各々に呪文を唱え、魔法陣を形成し、莫大なる魔力がティフォンを中心に収束されていく。

『ダアト、我に永遠の光を与え給え！セフィロト！』

ティフォンの魔力が急激に増してくるのが感じる。

まだ本気を出していなかったということなのか！

『サア、始メヨウカ?最後ノ決着ヲ…ハアアアアッ!』

「ぬおおおっ!」

光り輝くティフォンのかけ声が衝撃波となって私に打ち付けてくる。

身体の裂傷が刻まれ、新たな痛みを感じていく。

『顕現セヨ!ハデス!デメテル!ヘスティア!ヘラ!ポセイドン!』

世界が割れ、五つの絶大なる光がティフォンに纏い、翼が六対十二枚となっていく。

これは神降ろし…。

まさか複数同時に呼び寄せたというのか…。

『フハハハハッ!僕ハガイアスラモ凌イデイルノダ!刮目セヨ!真ニ偉大ナル力ヲ!』

十の魔法陣から極大の波動が発し、翼からは無数の巨槍が放たれていく。

視界に映るもの全てが破壊され、世界は無に還ろうしてくる。

「くっ!フレイア!ホーリーランス!スルト!」

こちらも閃光と光の槍、漆黒の太陽の嵐を解き放ち、対抗する。

世界は爆風と嵐にまみれていく。

『モハヤ僕ノ前デハ全テガ塵ニ等シイモノダ！無ヘ還レ！ビッグバン！』

まさかここでガイアの最強の技を使ってくるのか…。

私の放った攻撃が全て呑まれ、全てを始まりに還す爆撃が世界を軋ませていく。

「がああああああっ！」

全身から血を吹き出し、意識が飛びそうになってくる。

レアが放ったビッグバンとは比較にならないほどの絶大な威力。

慣れたはずの痛みが再び足枷となるほどのものだった。

意識を何とか繋ぎ止めながらも、いつの間にか斉唱が聞こえなくなっていることに気づく。

『きゃあああああっ！』

『まさか、ティフォンの力がここまで増したというのか！』

『これはもうガイア様と遜色無いほどの力…ぐあああああっ！』

ティターンと四高弟の斉唱が途切れ、変わりに悲鳴が木霊している。

まさか、エリュシオンが崩壊しかかっているというのか…。

『参った…このままだとオリュンポスも崩壊しかねないな…』

クロノスが緊張感の無い口調で絶望的な言葉を響かせてくる。

オリュンポスが崩壊すればエクリアまで危害が及ぶことになってしまう。

エクリアの人質に私は彼女達に囚われたのだ。

それがもしエクリアを死なせることになれば、私の今まで積み上げてきたもの全てが崩壊することを意味する。

アイリやロン、エリニュスを死なせてしまったこと。

多大な犠牲を払ってエロス軍を撤退させたこと。

その全てが無意味になってしまうのだ。

それだけは断じてあってはならない！

『このことは私達から言えた義理ではありませんが、どうかティフォンの暴走を止めて頂けないでしょうか…』

ウラノスが悲痛の思いで敵である私に懇願してきている。

誰に懇願されたり命令を下されなくても私はティフォンを必ず倒す！

『僕ハモウガイアヲ越エタ…果テ無キ光ヲ…アイン・ソフ・オウル』

十の魔法陣から放たれる波動が収束し、無限に輝く波動が放たれて

いく。

「ビッグバン！」

私はガイアの最強の技を放つ。

もう二度も喰らったことで身体が覚えている技だ。

『フッ…君モガイアノ技ヲ使ウトハネ…ダケド、僕ノ無限ノ光ノ前デハ儚イ一条ノ光ニ過ギナイ。掻キ消シテヤルヨ！ハアアアアッ！』

十の魔法陣と共にティフォンもますます強く輝き出し、放出される波動も強大になってくる。

もう私一人の命で済む決闘では無い。

守るべき者のために戦う戦争だ。

「故に負けるわけにはいかない！うおおおおおっ！」

私とティフォンの力が相殺され、膨大なる余波が世界を撒き散らされる。

余波で私の身体からは血が吹き出るのに対してティフォンは無傷。

『マサカココマデ追イ詰メルトハネ。ナラバ、君ノ戦法ヲ見習イ、同時ニ魔法ヲ展開シテ蹂躙スルトシヨウ！ウオオオオオオッ！』

十の魔法陣と六対十二枚の翼を輝かせ果てしなく力を高めていくティフォン。

「うくっうううっ！」

まだ力を高めようとするのか！

何処まで進化すれば気が済むのだ！

『果テ無キ光ヲ！アイン・ソフ・オウル！無へ還レ！ビッグバン！』

膨大なる二つの力が合わさり、三千世界をも吹き飛ばす程の力が放たれていく。

この攻撃を破ることが出来なければ、この世界を完全に消滅し、オリュンポスも崩壊してしまう。

これが正真正銘最後の一撃になる。

「ロキ！」

身体能力を高める。

「トリアイナ！ヴィマーナ！」

三つ又の矛と巨大槍を携える。

そして、ティフォンがロンギヌスからグングニルを形成させたように二つの獲物を融合させていく。

いや、まだだ。

魔力を撒き散らしてロンギヌスを形成し、次々と融合させる。

自分でも訳の分からないが、強大な武器を造り上げるのだ。

巨大な剣にも似た物を作り出し、迫り来る破壊の力を迎え撃とうする。

アーテのフレイを凌いだ時を思い出せ…。

……。

これで最後だ！

全精力を振り絞れ！

生命を燃やせ！

私の全身全霊全存在を掛けた正真正銘で全力全開の最大最強最後にして絶対無敵なる究極の終焉を飾る永久不滅の悠久の果てを越える神々しき力よ！

今ここに示すのだ！

「黄金の刃！」

私の黄金の刃はティフォンが放つ全ての破壊と創世を司る光を斬り払っていく。

黄金の輝きと纏った私はティフォンに向かって飛翔する。

『馬鹿ナ！ソノ力ハ原初神タル源ノ…クッ！』

ティフォンの前に配置されている十の魔法陣は主を守護すべく多重防御結界を展開させる。

『違ウ！コレハ原初ノ力ノ源デハナイ！ダガ、限リナク近イ！君コソガ僕ヨリモガイアニ近イ存在ダト言ウノカ！』

「うおおおおおっ！」

凄まじい爆音が両者の間から生じ、十の魔法陣が砕け、黄金の刃も塵となっていく。

『グッ！』

ティフォンは六対十二枚の翼を覆わせて、防御体勢を取る。

私の攻撃を凌ぐつもりでいるのか？

だが、もはや私にとっては紙屑に等しい盾に過ぎない！

最後はやはりこれで決めるのみだ！

黄金の拳よ、吠えろ！

ティフォンを守っている翼の壁を容易く突き破り、勝利に向かって突貫していく。

今度こそ終わりだ！

ティフォン！

「はあああああああああああああああっ！」

『ロストォオオオオオオオオオオオオッ！』

……。

……。

……。

……。

……。

……。

……。

『僕が…負けるとは…君こそが…ガイアに最も近い存在だった…ということ…なのか…』

私の黄金の拳に押されるようにティフォンは地上へと落ちていく。

『君の力を見届けた…見事だ…ロスト…』

ティフォンは盛大な音を響かせて地上を覆い尽くすように伸びていった。

……。

……。

…。

終わった…。

長かった戦いにやっと終止符を打つことが出来た…。

私は伸びてしまったティフォンの巨体の上で佇んでいた。

「どうやら洗礼を乗り越えたようだね。おめでとう、ロスト…」

「まさか、万が一ティフォンを倒すのではと思っていましたが、本当に実現させるとは大したものです…」

クロノスとウラノスの賞賛の言葉に思わず涙が出そうになる。

だが、賞賛の言葉よりも休息が欲しい。

私の細胞一つ一つが限界を訴えている。

これで戦いがまだ続くのであれば、往生際良く観念しよう。

私はもう寝る。

誰が何を言おうとも眠りにつく。

「ふふっ…遠慮無く休むといいよ。君はもう私達の主となる資格を

得たのだからね…」

「そうですね。彼はもう資格を得てしまった。彼はさらなる苦難に立たされることのなるでしょうね…」

クロノスとウラノスが何か重要なことを言ってるようだが、もはや吟味して考える元気も無い。

私はティフォンの巨体の上で力尽きるように倒れ込む。

打ち倒した美女の身体の上で寝るのもまた乙なものだ。

この肌触り、最高の寝布団だ。

『ふふっ…ゆっくりと眠るといいよ。僕の口の中でね…』

私の身体が掴まれ、何処かへと運ばれていく。

何処に運ばれるかはもうどうでもいい。

私はもう何処に運ばれようとも起きたりしないぞ。

『あむっ』

何だか生暖かい空気に湿った場所に放り込まれたような気がする。

何だか果てし無く妖しいが、今の私には気に止める元気が皆無だ。

身体が生暖かく湿った包まれていく。

濡れた布団だと思って気にしないでおこう。

『くちゅちゅぱ…美味しい…』

身体に心地よい按摩が与えられていく。

どうやら私は最高級のベッドに移動されたようだ。

クロノスもなかなか粋な計らいをしてくれる。

これで後はエクリアを解放してくれれば尚も良しだ。

『お休み、僕の聖上…ちゅぷちゅぱ…』

実に気持ちいい按摩だ。

身体が濡れているのは疲労回復するための薬でも塗ってくれているのだろう。

後は身を任せて意識を睡魔に委ねるとしよう。

……。

さとて、久しぶりに…。

……。

燃え尽きたな…。

第105話：Desire

身体が妙に熱い。

こんな感覚は初めてだ。

私は何処で寝ているのだろうか？

……。

まあいい。

そろそろ腹が減った所で眠欲よりも食欲が勝ってきた。

私は起き上がると視界が真っ暗になっていることに気づく。

まだ夜なのか？

身体がぬるぬるして熱いほどだ。

これは私の汗ではない。

……。

何処だ？

「私はいったい…」

『ふふっ…目が覚めた？』

頭が痛い程に声が響き、思わず顔をしかめる。

暗闇に染まっていた視界に光が刺す。

私は飛び起きて光に向かって駆けていく。

光に満ちた世界は足場が無かった。

「うおっ！」

落ちそうになった私の首根っこを何者かが掴んだ。

……。

意識が鮮明になってくる。

私は確かティターンと四高弟と壮絶な死闘を演じ、力尽きて眠ってしまったのだ。

そして、目が覚めて今に至っている。

私は首根っこを掴んでいる者を見るために後ろを振り向く。

巨大なガイアの顔が目の前にあった。

……。

いや、目の前にいるのはガイアではなくティフォンだ。

寝る前に散々と死闘を繰り広げた怪物級の巨大女の神。

「おはようございます」

とりあえず朝の挨拶をしましょうか…。

『ふふっ…おはよう…僕の愛しい聖上…んちゅううっ』

「むごっ！」

首根っこ掴まれた私はティフォンの巨大な唇に覆われ、全身を吸われる。

『ちゅぱちゅぱ』

私の身体がティフォンの唇に咀嚼されていく。

さすが巨体となる口付けも半端無く強烈なものだ。

『ちゅぱ…相変わらず聖上の身体は美味しいね…』

私の身体はティフォンの口紅と涎でまみれてしまう。

ティフォンは私を聖上と呼んでいたが、尊称のようなものなのか？

それにしても先ほどの口付けだけではここまでどろどろになったりはしないはずだ。

『聖上が初めてだよ。僕の口の中でぐっすりと眠ったのは…』

ティフォンは舌なめずりをしながら衝撃の事実を告げてくる。

……。

何ですと？

私はティフォンの口の中に眠っていたというのか！

軽く目眩がしてきたぞ…。

世界中何処を探しても女の口の中で寝た者はいないだろう。

私は人類至上始めての偉業を成したのかもしれない。

『ふふっ…何度も呑み込もうとする誘惑に駆られてしまったけど何とか我慢できて良かったよ…』

私は睡眠中に何度も九死に一生を体験したようだ。

『また僕の口の中で寝ても良いよ。僕はいつでも良いからね…』

ティフォンは唇を開け、舌を見せてくる。

……。

「考えておく…」

返事は濁しておこう。

毎回口腔内で就寝するのは覚悟が必要だ。

それよりも洗礼を乗り越えたのだ。

今、私がいる場所は庭園らしき所だった。

多分、オリュンポス城の中なのだろう。

今こそ私の要求が通る可能性があるかもしれない。

私は思いきって懇願することにした。

「エクリアに逢わせてくれないか？」

……。

私の懇願に今まで明るかった雰囲気が途端に暗くなる。

「悪いが、それは無理だ」

クロノスは苦々しげに答える。

「何故だ？」

「エクリアを捉えているのはアパテーです。アパテーはタルタロスは腹心、口惜しいですけど彼女の権限は私達より上なのです…」

理由をクロノスの代わりにウラノスが答えてくれる。

何て事だ。

彼女達と少し仲良くなったからエクリアに逢わせてくれるという期待が打ち砕かれてしまった。

「申し訳ないのう。儂等は彼女には逆らうことは出来ぬのじゃよ…」

「ごめん…期待に応えれなくって…」

「我は汝に役に立ちそうにない…無念だ」

イアペトスとテテュス、ポイベは申し訳無さそうに項垂れていた。

……。

彼女達の反応にどう返せばいいか分からない。

エクリアが囚われるように仕向けたのは彼女達なのだから…。

仲良くなってしまったが、私と彼女達の関係は以前として敵同士だ。

気を許してしまったのは不覚だったが、気をつけねば…。

「何故、矮小なる者を気にする必要がある？貴公は神にも勝る強大な力を持っているのだ。貴公の力で持ってすれば思うがままなのだぞ」

「君はもう少し自分の力の有用性を省みた方が良いよ。君の力は世界を変えることが出来る。それこそ君が思い描く理想の世界を実現させることも夢ではない」

「偉大なる力を持てあますのは罪深きこと。己の力を如何にするか

を?そして、お前が生きる世界を変革をもたらすといい…」

一方、ヒュペリオンとレアとテミスは私に力の有用性を説いてくれた。

「そうだよ。お前は凄い力を持ってるんだ。権力に捕らわれることなく好き勝手すればいいんじゃねえの?」

ウレアは私の顔を覗き込んで言ってくる。

「ウレアの言う通りだ。君は思うがままに力を振るえば全てを手に入れることが出来るのだよ…」

クロノスが私の手を取って引いてくる。

私は何処かに案内したいようだ。

「まずは服を着ようか。その身体では寒いだろう」

クロノスは私を好意的な態度で持てなそうとしてくる。

「ウラノス、ティフォン、お前達は準備でもしていろ」

ウラノスを初めとする一同は無言で頷き、姿を消していく。

私はクロノスと二人きりでオリュンポス城の中を歩き回ることになる。

……。

……。

…。

清潔感溢れ、如何にも絢爛豪華な色彩に彩られた城内。

装飾品と絵画が並ぶ回廊の中で私はクロノスの手に引かれて歩いていた。

「一つ言っておくよ。エロスはもうこの世界にはいない…」

……。

何だと？

私はその場に立ちつくしてしまう。

エロスが既にこの世界にいないとは…。

「エロスは何処に行ったのだ？」

私は思わずクロノスの胸ぐらを掴もうとして手が届かないから大木のような太股を鷲づかみにする。

私がこの世界に飛ばされてからというものの、エロスと決着を付けるという目的を挙げていたのだ。

その目的であるはずのエロスが既にこの世界にいないとなれば…。

「そう、君が求めている半身はいないのだよ。彼は君が元いた世界

へと旅立ったよ」

クロノスは私の激高に尚も涼しげに答えていた。

私はクロノスの太股から手を離し、背を向ける。

「ふふっ…何処に行こうというのかね？」

「エクリアを探す。まず、エクリアを救い出してそれから貴様等を倒す！」

駆けようとした私の手をクロノスの手が掴む。

「それで君は何を得られる？家族か？愛か？愛玩人形か？いずれにしろこの世界の住民でない君には関わり合いが無いだろう」

「私はこの世界で掛け替えのない絆を得られた。だから、それを守るために戦うのだ」

この世界で私はモイラやピテス、アイテル等と沢山の美女に巡り会うことが出来た。

そして、私は契りを結び守ると誓ったのだ。

だから…。

「元の世界に戻れば、君とは完全に関わり合いを絶つことになる。別離すると確定された絆の未来に何を拘る必要がある？」

「それは…」

私の単なる自己満足に過ぎない。

だが、関わり合いになった者達を守りたいと思う気持ちに嘘は無かった。

だからこそ反乱軍に関わり、旗頭としてエロス軍に戦いを挑んだ。

それに…。

「それに貴様等は次元や世界に左右されない超越者だ。だから、この世界で貴様等を倒せば、元の世界での戦いを有利に進めることが出来る。それに…」

私は言い淀んでしまう。

この世界で幾ら犠牲を払おうと元の世界に影響が無い平行世界で戦うからより都合が良いという理由。

それは私が考えていた最低の発想だった。

「君の考えていることは大体読める。そう気に病むことは無い。戦争とは如何に戦況を有利に進め、効率的に殺し合いをさせるかによるもの。君はそれを忠実に実行しているに過ぎない…」

クロノスは掴んだ私の手を引いて後ろから抱き締めてくる。

「ぐっ…離せ！」

私は後ろから抱擁するクロノスを振り払う。

振り払われたクロノスは飽くまで笑みを絶やさず私を見据えてくる。

「君は正しいことをしているのだよ。それなのに何故、罪悪に満ちた顔をするのかね？いや、君は既に分かっているはずだ。君を苛んでいる者の正体を…」

クロノスが一歩近づき、私は一歩下がっていく。

私はクロノスに気圧されているのか…。

クロノスは後ずさっている私を抱き締め、耳元に甘い吐息を吹きかけてくる。

「君は自分がエロスと同じ存在であると考えているからだ…」

私は耳元から囁くクロノスの言葉に硬直してしまう。

私はエロスと同じ存在。

私はエロス。

私は…。

「違う！私は彼奴のような欲望を無差別に撒き散らさない！」

抱きついてくるクロノスを振りほどこうとするが、彼女は私の頬に唇を這わせてきた途端に力が抜けてしまう。

「ちゅぱ…ふふっ…ほら、こうやって愛撫すれば君は抵抗出来なく

なる。君は欲情しているのだ。敵である私にな…ちゅぷ」

クロノスは私の頬から首筋にかけて唇を這わせ、舌で舐めてくる。

その甘美な感触に私の抵抗の意志が削がれてしまいそうになってしまう。

「ぐっ…そんなことは…」

「君の男は正直だがね。思えば、君は幾らでも私達を殺す機会はあったはずだ。いや、本気を出せば、私達ティターンと四高弟を皆殺しにすることも可能だったはず。何故、そうしなかったのだろうかね？」

クロノスは私を壁際に押しつけてくる。

私は抵抗せずに為すがままだ。

「君もまた美女であれば、敵も味方も関係無く愛でたいという欲望があったからだよ。だからこそ、私は君に直に触れ合える機会を与えてやった。洗礼という形で私達とね…」

「何だと？」

クロノスの言葉に私は驚愕してしまう。

あの洗礼は私を屈服させるためではなく、彼女達と触れ合いをさせるためだった？

「どういう意味だ！クロノス！」

「君にとって分かりやすい言葉で言えば肉体言語というやつかな。ふふっ…拳を交えることで私達と分かり合うことが出来ただろう。それに君は私達を打ちのめすことで征服感が沸き立ったはずだ…」

私はクロノスの言葉を吟味する。

最初、ここに連れてこられたときに私はクロノス達に虐待や陵辱を受けた。

それで私は彼女達に屈辱を倍返しにすることを心に誓った。

そして、洗礼を通して彼女達に復讐を果たして達成感を得ることが出来た。

さらに戦いを通して、彼女達と仲良くなった。

それら全てがクロノスの思惑通りだと言うのか?

いや、それよりもクロノスは肉体言語と言っていた。

その言葉は喧嘩する者同士での専門用語に他ならない。

それを何故、クロノスは知っているのだ?

「ふふっ…戦場で君は私達ティターンと遭遇し、ムネモシュネと戦っただろう。承知の通り、彼女は記憶を司る神でね。君の全ての過去と記憶はムネモシュネを通して全て把握しているのだ…」

ムネモシュネの戦いから既に脚本が出来上がっていたということな

のか…。

「君はかつて喧嘩番長と名乗り、無類の喧嘩好きで優越感に浸ることを趣向としていた。だが、所詮は子供のお遊びと冷めてしまい、平凡な日々に埋没して過ごすことを考え始めていた。だが、君は思いがけず最強の力を手に入れ、戦乱の渦に巻き込まれていく。最初こそ力の強大さと周囲の謀略に巻き込まれ、辟易していたが、多くの美女と出会い武勲を立てることで君は欲に目覚めてきた…」

……。

「君は心の奥底に秘めていた願望を少しずつ形にしようと野心に目覚めてきたのだ。すなわち酒池肉林、全ての美女を平伏させ、我が者にしようとする野望がね。だが、君は同時に恐れも生じてきた。全てはッ犠牲無くして手に入れることが出来ないという現実を知ったことで…」

私は美女と多く関係を結んできたが、同時に安息の日々から遠ざかっていた。

最強の力を持つが故に権力者に目を付けれ、人質を取られて従うことを強いられてしまった。

そして、引き返すことが出来ない血塗られた道を歩みつつあったのだ。

「そんな八方塞がりの状態で君は愛情を知った。君を無償で献身的に支えてくれる存在を知ったのだ…」

……。

エルとアビスの存在だ。

ヴァルキリアに囚われる切っ掛けを作ったのもまた彼女達なのだが、家族の暖かさを教えてくれたのも彼女達だった。

「君は美女を侍らすことと同時に家族、愛情を欲するようになった。それで君の中で葛藤、あるいは矛盾が生じて来たのだよ。美女の身体に対する性欲なのか？心に対する愛なのか？」

身体に対する性欲。

心に対する愛。

その二つが私の中で矛盾と葛藤を生じさせていただと？

「もし、君が女を性欲の捌け口としてしか見ていなかったら、疾の昔に敵対する国ヴァルキリアを攻め滅ぼし、その国の女共を犯し尽くしていたはずだ。そして、世界制覇に乗り出していたかもしれないね。かつてのカオスのように。いいや…」

……。

「エロスのようにな…」

……。

「私がエロスのようになっていただと？馬鹿な！私はただ彼女達と気持ちよく混じり合いことで十二分に満足する。男を絶滅させて人類滅亡にまで追い遣ったりまではしない！」

「果たしてそう言い切れるのかね？」

クロノスは笑みを消し、目を細めて私を見てくる。

私の全てを見透かすようなクロノスの目。

気を強く持たねば顔を逸らしてしまいそうな程の眼力だ。

「君は敵である私に欲情しただろう？いいや、私だけではない。洗礼で戦ったテテュス、ポイベ、レア、ヒュペリオン、テミス、ポントス、ティフォン、それどころか戦いに参加していない私達全てに欲情していなかったと言えるのか？」

私は言葉を失ってしまう。

欲情していないと言えば、嘘になる。

クロノスの言う通り、私は確かに敵側であるはずの彼女達全てに欲情していた。

「君は味方だろうと敵だろうと美女となれば見境無く欲情する。例え、自分の大切な者を奪った仇敵であろうと大量虐殺者であろうとな。それはまさしくエロスに類似する思考だ。敵であろうと味方であろうと光と闇、相反するもの全てに美を見出し、自分のものにしようとするエロスそのものだ」

……。

私は知らず知らずにエロスと同じ考えを持ってしまったというのか

…。

「だが、同じだとしても私はこんな世界を作ったりはしない！男は嫌いだが、殺したいほど憎んでいるわけではない！」

「忘れたか？男を虐殺したのはエロスではなくカオスだ。そして、エロスはカオスがそうなるように仕向けたのだ。結果的にな…」

結果的にか…。

カオスはエロスの愛を渇望していた。

だから、男を皆殺しにすればエロスが自分を愛してくれると思い、狂い始めることになる。

それが人類史上最も凄惨なる戦争である聖戦を引き起こすきっかけとなってしまった。

最終的には暴走してしまったカオスをエロスが封印することで第一次聖戦が終結に至った。

そして、カオスの意志を当時の腹心であったアパテーが引き継いで男は絶滅してしまい、この歪んだ世界が作られた。

「君は既にエロスと同じ道を歩んでいるのだよ。気づかないだけでね」

「私はエロスのように一部の女性を蔑ろにするような真似はしない。全てが私のとって大切な存在だ！」

クロノスは私の啖呵に対して、ため息をついてみせる。

本当に気づいていないのだなと嘲るように…。

「やはり気づいていないようだね。ならば、言い直そうか。君は既に第二のカオスというべき存在を造り上げているのだよ…」

「私が第二のカオスを既に造っているとはどういうことだ?」

私はいつ誰かを蔑ろにしたというのだ?

分からない。

一体誰を…。

「分からないのかね?」

クロノスは挑発的に笑みを浮かべて、私の顔を覗き込む。

私とクロノスは暫し沈黙して見つめ合う。

……。

やがて沈黙はクロノスのため息で破られることになる。

「どうしても分からないというのであれば、鍵となる言葉を与えてあげよう。カオスと第二のカオスにはある共通点がある。どちらも同じ忌まわしき者が側についていた。第二のカオスに至っては現在進行形で側についている。それが鍵だ」

忌まわしき者。

カオスの側にいる忌まわしき者は一人しか思いつかない。

それどころか話の途中に何度も名前が挙がっていた。

アパテーだ。

アパテーを忌まわしき者と仮定して、現在進行形で側についている者は…。

……。

まさか彼女が第二のカオスだというのか！

驚愕している私の顔を見て、正解だと言わんばかりに笑みを見せるクロノス。

「どうやら答えを導き出せたようだね。そう、君が考えている通りに彼女こそが第二のカオスだ。彼女、そう…」

……。

……。

…。

「アビス・パラディスムが第二のカオスだ」

……。

……。

…。

『言っておくけど、主の害悪になるようなことだったら私が許さないわよ』

……。

『ご免なさい。けど、もう耐えられないの！主が泥沼の世界で主が藻掻いて苦しむ姿に！ただでさえ、私と姉者のために主がヴァルキリアに囚われてしまっているのに…』

……。

『私のことは大丈夫だから…』

……。

『私はあんたがどちらを選んでも付いていく。だから、遠慮しないでね…』

……。

私は膝をついて俯いてしまう。

「私はアビスを蔑ろにしたつもりは無い！彼女が私の下から去ったのは不甲斐ない自分の代わりにエルを助けるために…」

そうだ。

アビスはエルを助けるために単身でヴァルキリアに潜入し…。

「違うね。君は大きな勘違いをしているよ…」

「どういうことだ?」

クロノスは私の手を取って立ち上がらせる。

「ここでは何だから部屋に行って続きを話そうか…」

私はクロノスに手を引かれるまま歩いていった。

……。

…。

案内された部屋は巨体のクロノスに応じた巨大な机とベッド等が立ち並んだ部屋だった。

「ここに座るといい」

私はクロノスに促されるままにベッドの端に腰をつける。

「私が何を勘違いをしていたというのだ?」

アビスはエルと助けるために単身に乗り込んだ。

そして、エルを失ったことで苦しんでいる私を救うために行ったのだとアレクは言っていた。

「アビスは姉を救うためだけではなく、エルを失ったことで苦しんでいる私を何とかするためにもヴァルキリアに乗り込んでいった。それが勘違いだというのか？」

「勘違いさ。いや、彼女自身が自分の想いを勘違いしていたと言うべきなのかな。君はアビスの気持ちを直接聞いたことがあるのかね？他者の言葉をそのまま受け取っただけだろう。そして、他者もまた彼女の言葉を表面上でしか受け取っていなかった。まあ、戦時中に悠長に相手の心理を探るほど余裕が無かったのかもしれないね…」

アビスが自分の想いを勘違いしていた？

言葉とは裏腹に何かを無意識に思っていたということなのだろうか？

「彼女はもっと君に見てもらいたかったのさ。君は攫われたエルのことばかりを考えて、側にいるアビスを見ようとしなかった。それが彼女の心を傷つけ、結果的に蔑ろにしていたのだよ」

……。

アビスはエルを助けることで自分を見てもらえると思ったのだ。

それは方法は違えど、エロスに愛されたいがために男を虐殺したカオスと確かに類似していた。

どちらにしろ、私が原因であることに変わりはない。

「アビスのひた隠しにしていた想いは直ぐさまタルタロスと呼応した。そして、彼女はタルタロスの心臓として身を捧げられたわけだ。ふふっ…その時に彼女の想いが聞こえてきたよ。君への悲痛なほどに一途な想いがね…」

エロスがカオスを狂わせたように私はアビスを狂わせてしまったのか…。

だから私はエロスと同じ道を歩んでいるということなのか…。

「アビスの強い想いがタルタロスの力を際限無く高め、原初神と同等あるいはそれ以上の力を持ったというわけだ。そして、その力でこの世界の君を殺し、第二次聖戦を勝利に導いてくれたのだよ。その後、彼女は殺した君の血肉を嬉々として貪り、心安らかにタルタロスと共に眠りについたのだ。彼女はタルタロスの中で今頃夢を見ているだろうね。君と共に生きる永遠なる奈落の世界を…」

……。

私は何としてもアビスをタルタロスから解放しなければいけない。

そして、彼女ときちんとした形で向き合わなければ…。

それが出来なければ私は本当にエロスと同じ道を辿ってしまうことになる。

「君は今アビスの責任を感じているだろう。だが、それは愛ではない。君は自分の領域を守りたいために彼女を媒体にしているに過ぎない。故に愛ではない。それでは君の言葉は奈落の底にいる彼女に

は届かないだろう。全てが無駄に終わる。いい加減に素直になりたまえ」

クロノスが不意に私を押し倒してくる。

私の両肩を鷲づかみし、ベッドに押さえつけていく。

「は、離…むぐっ！」

「ちゅうううっ…ちゅぱ…ふはははっ…どうした？抵抗したらどうかね。いや、本当は期待しているのだろう。快楽の園に導かれるのをな…ちゅうううっ」

クロノスは私に激しい口付けを浴びせかける。

「ぷはぁ…私は決してそんなことを…むぐっ！」

「ちゅうちゅうちゅぱ…まだそんな世迷い言を言っているのか！君が本当に嫌だというのであれば、私をはね除けてみせろ！どうせ期待しているのだろう…。ふはははっ…君の力は私よりも上だ。抵抗出来ないなんて言い訳は通用しないぞ！ちゅううっ！」

彼女の唇の熱さと柔らかさに抵抗する気力が失われていく。

私は確かに彼女から快楽を与えられることを期待してしまっている。

敵である彼女に私は欲情している。

「ちゅぱ…恥じることはない。君は本来の姿に戻っただけだ。君の夢は酒池肉林なのだろう。ここではそれが実現出来る。エロスが去

り、タルタロスが眠りについた今、君がこの世界の王となれるのだ。ティフォンを打ち負かした君に勝てる者などこの世界にはもはや存在しない…ちゅう」

この世界では私が最強。

「欲望を解き放て。強い想いを抱くのだ。それで君はより至上の存在へと生まれ変わる。そして、君が新たなるエロスとなり、全次元全世界を統べる王となるのだ…」

全てを統べる王。

私が新たなるエロス。

「君が目指す世界を見せてあげよう…」

クロノスは私を抱き上げ、部屋を出ていく。

……。

……。

…。

クロノスが案内した場所はオリュンポス城の玉座の間と呼ばれる場所。

玉座の間は何と全裸の女達に埋め尽くされていた。

全裸の女の中にはクロノスを除くティターンの全員と四高弟もいた。

ティフォンは巨大であることから天井を壊さないようにするために座り込んでいた。

これは一体…。

「ここにいる者全員が君の酒池肉林の構成員だ…」

私はクロノスの言葉に息を呑む。

全ての女が目映い程の美女だ。

ティターン神軍も四高弟も…

彼女達全てが私の…。

「そして、この玉座に座るのは君だ」

クロノスは私を玉座に座らせる。

全ての女の目線が玉座に座った私に集中していく。

私の中にある感情が芽生えていく。

それは黒くおぞましい感情。

思わず笑みが浮かびそうになってしまう。

……。

駄目だ！

これはクロノスの罠だ！

このままでは私が私で無くなってしまいそうだ！

「ロスト様、お慕い申し上げます…」

「ロスト様、万歳！」

「我が命はロスト様に捧げましょう」

「いと高きロスト様…」

「ああ…ロスト様…愛しゅうございます…」

……。

「うぐっ…」

目眩がしてくる！

頭が痛くなりそうだ！

私の中にある瘤が…。

誰か助けてくれ！

このままでは私は…。

そうだ！

私を王と崇めるならば…。

「そうだ！エクリアに逢わせろ！エクリアは何処にいる！それとレテシアがいるだろう。彼女も呼べ！これは王としての命令だ！」

エクリアがいれば、戸惑っている私に喝をいれてくれるはすだ。

それで悪夢が砕ける程に恐ろしい説教地獄を喰らわせてくれるのだ。

その後に説教地獄で落ち込んだ私を包容力有るレテシアに慰めてもらおう。

まさに完璧な連携だ。

それで私は完全に立ち直ることは出来るだろう。

そして、この城から脱出してみせるのだ！

「申し訳有りませんが、レテシアなる女は既に死にました」

……。

「何だと？」

……。

『申し訳有りませんが、レテシアなる女は既に死にました』

……。

頭の中でウラノスの言葉が反芻させる。

私は玉座から降りて、ウラノスの胸ぐらを掴み上げる。

ウラノスは胸ぐらを掴まれながらも無表情のままで私を見据える。

「何故、死んだのだ！答えろ！ウラノス！」

「アパテーの実験に身体が耐えれなかった…」

ウラノスの代わりに答えたのは今までほとんど言葉を交わしたことが無かったコイオスだった。

「アパテーも既にエロスと共に別世界へと発った…」

私の聞きたいことを先回りして答えたのはクレイオス。

「ご免なさい、僕では彼女を止めることが出来なかった…」

クレイオスは申し訳なさそうに項垂れる。

私はウラノスの胸ぐらを離し、その場に膝をつく。

「エクリアはどうした？彼女は無事なのだろうな…」

私の問いに誰も応えようとしない。

……。

「エクリアは無事です」

答えた者は意外な人物だった。

紅を基調とする鎧を身に纏い、肩まで切り揃えた暗褐色の髪を靡かせた美女。

……。

エル・パラディスム。

……。

彼女の神秘的な金目銀目に私の縋るような表情が映されている。

「エル…」

「私はエレボスです。ロスト様」

……。

エルの答えに愕然としてしまう。

やはりお前はもう…。

「エル…いや…エレボス。エクリアはどうしている?」

私の問いに無表情だったエルの顔が僅かながら戸惑いが浮かぶ。

「エクリアはもうロスト様の知っているエクリアではないかもしれません…」

……。

「ああ…ぁ…」

……。

エルの横には両手足に枷が嵌められ、首輪を付けた白髪の女が四つんばいになっていた。

前髪が顔を覆う程に伸びており、隙間から濁った瞳が見えている。

もしかして彼女こそが…。

「エクリア…なのか…」

「ああっ！あああっ…」

四つんばいになった女は私の存在に気づき、老婆のように痩せこけた手を伸ばしてくる。

「エクリアぁあああっ！」

私はエクリアの下に駆けつけて抱き締めていく。

何故だ？

どうしてエクリアはこんな状態に成り果ててしまっているのだ？

私はこの城に来て、まだ一日しか経っていないはずだ！

それなのに…。

……。

「アパテーはこの者を通常の三百倍の時間の流れを感じさせる空間に監禁したのじゃよ。故にこの者の中では既に一年は過ぎておるのじゃ…」

イアペトスはエクリアの身に何が起こったのかを説明してくれた。

私がクロノス達の洗礼を受けている間にエクリアは一年間アパテーに弄ばれていたというのか…。

……。

『閣下！お願いです。どうか小官を選んでください。小官はもう誰かと引き替えに助かりたくはないのです…』

……。

エクリアは私を裏切ったことを悔やんでいた。

……。

『小官はもう既に数え切れないほどの人達を犠牲にしてしまいました。これは小官の我が儘だということは重々承知しています。ですが…』

……。

だからこそ、彼女は進んで犠牲になる道を選んだ。

……。

『ありがとう…ございます…閣下。小官を選んでくれて…』

……。

そんな彼女を私は…。

……。

「ああぅ…」

……。

救うことが出来なかった…。

……。

「済まない…エクリア…本当に済まない…」

エクリアは私の腕の中でひたすら呻き声を上げる。

呻き声を上げるエクリアに私はただ抱き締めることしか出来なかった。

……。

『お前は思い知ることになるだろう。真の絶望というものを…。そして、お前は私と同じになっていくのだ。もう一人のエロスとしてな…』

脳裏に何故かエロスの声が鮮明に響いてくる。

エロス。

これが私に見せる真の絶望というものなのか…。

そして、私は貴様と同じエロスになってしまうのだろうか…。

……。

第１０６話：シュチニクリン

神々の王城オリュンポス。

その玉座の間では呻き声が空しく響き渡っていた。

……。

私はエクリアの身体に嵌められていた枷と首輪を外していく。

「彼女のことは僕に任せて…」

「断る。誰もエクリアには触れさせない」

クレイオスがエクリアの看護を申し出てくるが、私は拒絶をする。

私の拒絶で悲しげに俯くクレイオスに僅かながら罪悪感を抱いてしまうが、彼女もまたエクリアを人質に取る要因を作った仲間だ。

気を許すことは出来なかった。

「お願い、ロスト。僕は君を支えたいんだ…」

「クレイオス…」

彼女は何処か悲愴に満ちた目で私の顔を伺ってくる。

……。

「エクリアの看護をするのは飽くまで私だ。だが、助手がいてくれれば…」

「僕はロストの助手になる！」

クレイオスは元気よく答えてくれる。

「私も助手にさせてもらっても宜しいですか？」

コイオスもまた私に伺ってくる。

「分かった、コイオスも頼む…」

「ありがとうございます…」

コイオスはクレイオスだけでは心配と思い、クレイオスの助手として私の伺いを立てたのだろう。

助手はいらないつもりだったが、まあいい。

もし、エクリアに何か良からぬことをすれば全力で排除させてもらうだけだ。

「では、家臣を代表して不肖クロノスが貴方様への忠誠の証を立てましょう」

クロノスは私の前に跪いて手を取り、手の甲に自分の唇を押しつけてくる。

「んっ」

私の手の甲を覆うほど巨大な唇に押しつけられている光景はなかなかに圧巻なものだった。

クロノスの柔らかくて熱い唇の感触に疼くような甘さが手から伝ってくる。

……。

暫くして唇を離し、クロノスは満面の笑みを浮かべて私の顔を下から見上げていく。

「これで私は貴方様の血肉となりました。どうぞ、如何なる命をも下してください…」

唇の感触が残った手をさすりながら私はクロノスを見据える。

白々しいものだ。

おそらく私を自分の都合の良いように操っていくのだろう。

私の力を足がかりに自分の思う通りの世界を構築していくに違いない。

「私も少し宜しいでしょうか？」

私とクロノスの前に一歩前で出てきたのはエルだった。

「エル…エレボス…どうしたのだ？」

「私も忠誠の義を示しても宜しいでしょうか？」

笑みを浮かべていたクロノスは唖然とした表情でエルを見る。

クロノスだけではない。

ティターンと四高弟の皆が一斉にエルに注目してきたのだ。

エルはエレボスとしてタルタロスの眷属であるはずだ。

今はタルタロスは眠りにつき自由の身であるが、それでもタルタロスの眷属となっていることには変わりない。

その彼女が私に忠誠の義を示そうと言ってきているのだ。

誰もが驚きを隠せないだろう。

「タルタロス様は眠りにつかれました。そして、貴方様がこの城の主となられるのであれば、私は忠誠を誓いましょう」

エルは迷い無く玉座の間で言い放つ。

「本気で言っているのか？それはタルタロスに対する背信行為と見なされることもあるのだぞ」

「お前の主は飽くまで眠りについているだけ。それだけで二人も主を持つことはありえないね…」

テミスとヒュペリオンは苦言を出すが、エルの金目銀目はぶれなかった。

エルはタルタロスの完全な傀儡になっていないのか？

私の視線に気づいたのか、エルは何処か落ち着かない表情になる。

「私はただそうすることがロスト様をここに留まらせることになると思ったのです」

……。

本当にそうなのだろうか？

エルの真意は分からないが、私が王になることを前提に話が進められてしまう。

それに私も王であることを前提にエクリアを呼び出してしまった。

さらにエクリアの治療のためにクレイオスとコイオスに協力も受け容れてしまった。

そして、私を引き留めるためタルタロスの傀儡であるはずのエルが臣下になることを申し出ている。

「ふふっ…ははははははっ！」

「ロスト様？」

戸惑うエルを余所に私は思わず笑ってしまう。

皮肉なことだった。

私はまたしてもエルによって退路を塞がれてしまったのだ。

ヴァルキリアに行くときもエルの脅迫的とも言える説得に乗り、同行した。

そして、今もまた真意はどうあれエルに選択を迫られてしまっている。

どの道、私は傷ついているエクリアがいることで身動きが取れない。

エクリアが正気であるならば、私の枷になるくらいであれば見捨ててくださいと言うに違いないだろう。

だが、見ず知らずの者ならばともかく、身も心も交えた者を見捨てることは出来ない。

だから、私は…。

「エレボスの忠誠を受け容れよう」

「ふふっ…では、君は私達の王になることを了承してくれると考えてくれてもいいんだね？」

不敵に微笑んでくるクロノスに私は目を細めて睨み付ける。

「クロノス、貴様は誰に物を言っている？私は誰だ？」

クロノスは私の言葉により一層笑みを浮かべ、跪いてくる。

「ははっ！ご無礼を！偉大なる神々の王ロスト陛下！」

「我等一同陛下に永遠なる忠誠を！」

「「「「「「「「「「「「「「忠誠を！」」」」」」」」」」」」」」

クロノスに倣うように他のティターンや四高弟も跪く。

私は跪くクロノス達を見回し、大仰に頷いてみせる。

そして、一人立ちつくすエルを見据える。

「では、私に忠誠の証を立てろ、エレボス」

私はエルに向かって手を差し出す。

エルは無言で私の前にまで歩み、差し出した手を取ってくる。

「では、契約を…あむっ」

私の指先がエルの口の中に銜えられ、激痛が襲う。

エルが私の指を噛んできたのだ。

「んっ…ちゅぷ…あむっ」

エルは恍惚とした表情で血が滴る私の指先を舐め回し、自分の唇に押しつけてくる。

私の指先がエルの唇になぞられ、血の口紅が塗られていく。

……。

出会ったあの頃と同じだった。

初めてエルと契約を交わしたときもこうして指を噛まれ、私の指先で血の口紅を塗ってきた。

そして、エレボスになってもまた同じやり方で忠誠の証を立ててくれている。

思わず涙腺が緩みそうになってしまう。

エレボスになっても、エルである部分が残っていたのだ。

「これで私は陛下の物となります…ちゅ」

エルは私の血で濡れた唇で私のそれの重ねていく。

私はエルを抱き締めて夢中で唇を貪っていく。

エルの唇を堪能するのはどれぐらい振りなのだろうか。

皆が注目する玉座の間でも有るにもかかわらず、私は暫くの間、エルの唇の感触を堪能するのだった。

……。

……。

…。

私はエルを離した後に再び玉座に座り、周囲を見渡す。

全ての者が私の声を待ち望んでいるかのように私を見つめている。

優越感に溺れそうになる自分を必死に律して、私は王として最初の命令を下そうとする。

「全軍を全てこの地に集結させよ。外的がこの地に潜入しない限り、一切の攻撃を禁ずる。それとエクリアにはコイオスとクレイオス以外は一切の接触を禁ずる！エクリアに関してはコイオスとクレイオスに伺いを立てることも無しだ！良いな！」

王となったらからには権力を最大限に利用しなければな…。

ヒュプノスはエロス軍が本拠地に攻め入ることを一番に恐れていた。

そして、エロス軍に勝つためにはタルタロスやエロスがいる本拠地に進軍してから開戦させる必要があるとも言っていた。

だから、私は反乱軍が有利になるようにエロス軍を導いていけばいいのだ。

だが、例え王の命令と言えど良しとしない輩もいるだろう。

私はクロノス達を静かに見据える。

さて、どう出てくるのだ、クロノス。

「承りました、陛下」

クロノスは何も反論することなく頭を垂れてきた。

……。

何を企んでいる？

明らかに反乱軍が有利になるような形をエロス軍に強いる命令だったのに…。

「エクリア様の件については部下達に伝を回します。占領している領土からは直ちに全軍を撤退させましょう。これで宜しいでしょうか、陛下…」

「う、うむ。問題無い…」

クロノスが容易く命令に従うということは無いか別の利益を考えているということなのだろうか？

あるいは私を王であることから命令に従うことは当然だと割り切っているのだろうか？

出来れば後者が理由であって欲しい。

とりあえず、まずはエクリアの回復を待つとしよう。

エクリアが回復したら直ちに反乱軍の下に送り、戦の準備を整えるよう呼びかけてもらう。

そして、私の命令で本拠地に引きこもることになったエロス軍を攻め入れさせる。

それで私は最後にはクロノス達を裏切ってエロス軍は壊滅させていくのだ。

まさに完璧な流れだ。

しかし、余りにも捻りが無い作戦とも言える。

クロノス等が私の安易な作戦に素直に乗ることはおそらく無いだろう。

エクリアもクロノス達が素直に解放させてくれるとも思えない。

それに裏切ることも気が引けてしまうが、それはクロノス達も想定しているに違いない。

今の私が考えれる方法がこれしか無い。

元々平民その他である私は腕っ節以外では何も取り柄が無いのだ。

それにしてもヴァルキリアの回し者からアースガルズに渡り、歪んだ未来の飛ばされた挙げ句の果てが神々の王様にまでなるとはな…。

私の波瀾万丈の半生に新たな風穴が空いたと言うべきなのか…。

「配置されている隊に撤退するように伝達しろ！それとエクリア様の件は徹底して伝えるのだ！もし、この件で破る者がいれば連帯で

極刑をくれてやる！いいか！」

「ははっ！」

クロノスの命により、玉座の間の端に控えていた兵士が姿を消していく。

慌ただしくなった玉座の間は瞬く間に静まりかえっていく。

この沈黙は何とも恐ろしい気がするが、毅然と構えていなければ…。

「さて、早速ですが陛下にはお務めを果たして頂きます」

ウラノスは無表情で私に進言してくる。

「ほう、して余のお務めとやらは何だ？申してみよ…」

仮にも私は王であることから、酷いことを多分押しつけたりはしないだろう。

私は堂々とウラノスの言葉を待つ。

「我等家臣一同は陛下のお情けを頂きとう御座います。どうか我等の忠誠がより一層深まるために何卒お力添えを…」

ウラノスは恭しく頭を垂れて私に懇願してくる。

私の情けを頂きたいだと？

そんなことでいいのか？

寧ろ願ったり叶ったりだが、何か落とし穴があるかもしれない。

「な、情けとは具体的にどう行えば良いのだ？」

「それほど難しいことではありません。ただ陛下は我等の御奉仕に身を委ねていただければ結構です」

本当にそれだけなのか？

私は思わず唾を呑み込んでしまう。

「そう、陛下はただ快楽に身を任せていただければ宜しいです」

「我等一同、全身全霊を込めて陛下に御奉仕させていただきたい…」

「これで我等と陛下のより一層の結びつきが得られるのです…」

ウラノスに追従するようにクロノス、ヒュペリオン、テミスが進言していく。

これは本当にいいのか？

世の中にこれほど美味しい話があるのか？

私は乗ってもいいというのだろうか？

……。

「あい分かった。そなた等の思うがままにするが良かろう」

ここで断るには余りにも理由が無さ過ぎる。

もし、断れば王として資格無しとなって私の計画が台無しになるかもしれない。

クロノスは不気味な笑みを見せ、玉座に座る私の下に近づいてくる。

「陛下。お手を…」

私は頷くクロノスの手を取る。

「コイオスとクレイオスはエクリア様に付いて差し上げろ！さあ、陛下。我等が貴方様の夢である酒池肉林の世界へと誘いましょう…」

景色が歪み、世界が暗転していく。

……。

……。

…。

光輝く空の下に色彩豊かな花が咲き誇る園の上に私は立っていた。

そして、周囲を生まれたままの姿で立ち並ぶ美女達の姿が目に留まる。

その中心にはティターンと四高弟の姿もあった。

コイオスとクレイオスにはエクリアについてもらうということで同行はしていない。

特に全裸になっているティフォンの姿は圧巻の一言だった。

巨大な身体だから細かいしみが目立つかと思ったが、彼女の巨体は何処まで白く、雄大な雪山の如くそびえ立っているような迫力ある自然美が満ちあふれていた。

『僕の身体を気に入ってくれて嬉しいよ、聖上…』

私の視線に気づいたのかティフォンは顔を赤らめて僅かに顔を反らす仕草をしてくる。

その様子はとても激闘を演じてきた巨神とは思えないほど初々しいものだった。

やはり、引き受けるべきではなかったかもしれない。

このままだと感情移入してしまい、裏切ることが出来なくなってしまうではないか…。

「ふふっ…」

「くっくっくっ…」

「ひっひっひっ…」

クロノスとヒュペリオン、テミスが含み笑いをしていた。

彼女達だけではない。

全ての美女が不気味な笑みをみせている。

私は言いようの無い不安に駆られ、隣に立っているエルを見る。

彼女は何処か申し訳なさそうな目で私を見ていた。

無表情のウラノスが一歩前に出てくる。

「さあ、私達に全てを委ねてください。陛下はもう何も考えなくても宜しいのです」

ウラノスは初めて笑みを見せてくる。

私は嫌な予感がして彼女達に背を向けて走り出す。

「逃がさないよ、陛下…れろっ」

「ぬおっ！」

足に何か柔らかいものが巻き付き、私は躓いてしまう。

転んだ私は足に赤い物が巻き付いていることに気づく。

赤い物はクロノスの口から伸びていた。

これはクロノスの舌だというのか…。

地面に横たわっている私をティターンと四高弟の面々が見下ろして

くる。

「大人しく往生してください。これが王としての貴方様の責務なのですから…」

ウラノスは冷笑を浮かべて私に言い放ってくる。

「王の責務だと？私を性処理道具にするつもりなのだろう！」

私は笑みを浮かべて見下ろしてくる女達に反論していく。

「ふふっ…何を仰るか…。陛下も期待したからこそ王になることを決心なさったのでしょう。私達はただ陛下の期待に応えるだけのことです」

そんな私を飽くまでウラノスは冷笑を浮かべながら答えていく。

確かにウラノスの言う通り、何処か期待している部分が心の片隅にあったかもしれない。

だが、それでも…。

「陛下、君はここで沢山の美女達の御奉仕をたっぷり堪能していくことになる。これが君の夢だったのだろう。もうここが君の終着点となっていくのだよ…」

「安心しろ、陛下。俺が永遠に可愛がってやる。なぜならば、俺は誰よりも陛下をあいしているのだからな…」

「ひっひっひっ…これは私達を虜のした陛下に対する愛に満ちた処

罰だ。謹んで受け容れるが良いさ…」

私があれほど渇望していた夢が目の前にある。

いや、私が今まで死ぬ思いでここまで来たのも全ては酒池肉林のためではなかったのか？

だが、このまま身を任せてしまえば、二度とも取れなくなってしまう気もしてくる。

果たしてこのまま乗るべきなのか？

それとも…。

「陛下、もしここで私達の御奉仕を受けねば誰かが謀反を起こすかもしれないよ…ふふっ…」

クロノスは謀反を仄めかすことを言ってくる。

謀反とは当然クロノスが実行するに違いない。

これはもう私が引き返せないとクロノスは暗に言ってるのだ。

私にとって美味しい話だが、それ以上にエクリア、もしくは反乱軍の勝利のためだ。

「分かった…」

「ふふっ…では…」

クロノスが私の肩を掴み、地面に押し倒してきた。
そして、地面に横たわった私に美女達が集り始めてくる。
「御奉仕させてもらうよ…んちゅ」
「ちゅぱちゅぱ」
ヒュペリオンとテミスが続くように私の身体に唇と舌を這わしてくる。
思わず身もだえしそうになる所をテイアとイアペトスが両手と両足を掴んで拘束し、私の手と足に舌と唇を這わせてくるのだった。
身体中に美女達の肉が纏い、至上の快楽がもたらされていく。
彼女達の巨大な唇と舌で私の身体は瞬く間に唾液まみれになってしまう。
いよいよ私は酒池肉林の極地に相見えることになるのか…。
「むぐっ！」
「ふん！あんたなんかあたしの下の口でも舐めていればいいのよ！」
テテュスの声と共に私の顔が尻に挟まれていく。
……。
何となくだが、これは御奉仕されているというより奉仕を強要され

ているように思うのは気のせいだろうか？

私はとりあえず息をするためにも必死にテテュスの下の口を舐めていく。

「飼い主の身体を綺麗するのも我の務め。我の舌で拭き取ってくれようぞ…れろっ」

「もごっ！」

私の胸にざらざらとした感触の舌が舐め回してくる。

「わたくしも忘れてもらっては困りますよ、婿殿」

「強い男に奉仕するのは女の本懐だ。あたしが誠心誠意気持ちよくしてやるぜ」

ポントスとウレアの声が聞こえたと共に柔らかい舌の感触が私の身体を滑ってくる。

「ああん…」

「んんっ…ああっ…」

美女達の喘ぎ声の合唱が響き渡り、私の身体が美女達の舌で包帯を纏った木乃伊のように巻き付かれていく。

「前回はクロノスが頂いたということで今回は私が最初に頂きましょうか」

ウラノスの声と共に私の男の証が何かに挿入されていく。

これはウラノスの女の中に呑み込まれているのか…。

「はぁはぁ…凄い！私の中に貴方の男が貫いてくる！」

冷たい表情が多かったウラノスだが、彼女の中はやはり焼けるほどに熱かった。

ウラノスは恍惚とした声を上げながら私の上で踊るように腰を振ってくる。

不意に私の顔にのし掛かっている腰が上げられ、新鮮な空気を吸うのも束の間、テテュスの舌が私の頭に巻き付いてきた。

『今度はあんたの顔を舐め回してあげるわ。有り難く思いなさいよ』

巻き付いた舌の先が私の口に侵入し、蹂躙していく。

「私も口付けをさせてもらうわよ…れろっ」

「僕も君の中に入ってみたいからね…れろっ」

『ちょっとあんた達！』

テテュスの抗議を余所にムネモシュネとレアの舌も私の口の中に入ってくる。

「ごもっ！」

三人の舌が挿入されたことでまたしても顎が外れてしまう。

「次はわたくしの番ですね。ううっ！」

ウラノスが退けて、次はポントスが男の証を呑み込んでいく。

「これが婿殿の男なんですね。はあああぁ！」

「ふふっ…君にはこれから全員と一通り繋がってもらうよ。私達の忠誠の証としてね…」

クロノスの笑い声が響く中で私の全身は容赦無く愛撫されていく。

「次はあたしだね。メガイラが好いていた男の槍を体感させてもらうぜ！ふぅん！」

「もごごっ！」

快感に慣れ始めたと思いきや、新たな快感に呑まれて息つく暇も無かった。

「はああっ！さすがはあたし達よりも上位の雄なだけあっていくら締め付けても潰れることが無いな！これだったら遠慮無く楽しめるぜ！ふん！」

男の証がますます強く締め付けられていく。

「気持ちいいだろう。直に何もかもを忘れて快楽の海に溺れていくことになる…れろっ」

クロノスは私の耳元で囁き、舌先で耳の穴にねじこませていく。

もしかして、クロノスが私の言うことを容易く聞き入れたのは…。

「次は我が飼い主殿の雄を頂こうか…ふぬっ！」

「むごっ！」

ウレアが退けて、ポイベが今度は私の腰を跨いでくる。

このまま次々と取っ替え引っ替えに美女達が私の男を食い荒らしていくのか…。

「はあああっ…くっ…飼い主殿の雄は何と精強なのだ！癖になってしまいそうだぞ！飼い主殿！我に汝の餌を与えてくれ！ううっ！」

ポイベは盛りの付いた雌犬のように激しく私の男に食らいついてくる。

「ふふっ…手がお留守になっているわよ、陛下…ああん！」

「ほれ、しっかり儂等の奉仕を受け容れんか…んっ！」

私の両手と両足がテイアとイアペトスの女に呑まれていく。

もはや私の身体に美女の肉が触れていない場所は無いほどだ。

「次は俺が味わう番だ！」

ヒュペリオンの声と共に男の証が解放されたと思いきや、さらなる

肉壷に吸い込まれてしまう。

ヒュペリオンの身体はティフォンに次ぐ巨体だ。

彼女の荒腰に私の骨盤が悲鳴を上げていく。

「ははははっ！いいぞ！さすがは俺が認めた男のだけはある！俺は貴公を絶対に手放さないぞ！永遠に俺のものだ！はあああああっ！」

彼女の中に欲望が弾けていき、瞬く間に搾り取られてしまう。

「次は私が頂くよ…ぬっ！」

ヒュペリオンと入れ替わるようにテミスが跨り、私の男を搾り取っていく。

「審判者たる妾を貫くとは貴様は何て罪深い男なのだ！我が汝の罪を搾り取ってくれようぞ！ほあああっ！」

「おあっ！」

テテュス、ムネモシュネ、レアの舌から解放され呻き声を漏れてしまう。

『今度はあんたの血を頂くわよ…』

『私も頂こうかしら…』

『だったら僕も…』

三人の舌先が蛭の口のように開き、私の首筋や胸元に吸い付いてくる。

そして、甘い疼きと共に急速に身体から熱が奪われるような感覚に陥っていく。

彼女達から血を吸い上げられているのだ。

身体の体温が冷えていく感覚が心地良い。

だが、このままだと失血死してしまう恐れがある。

私の考えを読んだかのようにクロノスが私の頬に舌を這わせてくる。

「れろっ…心配いらないさ。君の身体は自分が思っているよりも頑強なのだよ。失血死するぐらいなら洗礼の時に君は既に死んでいるはずだからね…」

クロノスは私を安心させるように言って、舌先を私の口の中に挿入してくる。

『私は内側から君の体液を吸わせてもらうとするよ。これもまた病みつきになる程の気持ちよさだよ。たっぷり堪能してくれ』

私の顎が外れた口から体内へとクロノスの舌が侵入し、蠢いていく。

今度は内側から身体が冷たくなっていく。

クロノスは私の命そのものを吸ってきているのか…。

私は既に六発も出している上に四人から血や精気を吸われている。
普通ならば何度も死に絶えているだろう。
だが、私の生存能力は神の領域に達している。
クロノスの言う通り、そう簡単には死なない身体であるのだ。
「ちゅぱ…次は僕の番かな」
私の胸から血を吸っていたレアが舌を口の中に戻し、腰を上を跨いできた。
「では、俺も貴様の血を吸わせてもらおうかね…れろっ」
レアの吸ってた場所はテミスが代わりに舌先を伸ばして引き続き血を吸い始める。
「俺は貴公の下の口からまた吸わせてもらうとするか…れろっ」
私の股にヒュペリオンの熱い舌がうねってきている。
まさか、また私の下の口へと入るつもりなのか！
『抵抗しても無駄だぞ。貴公は舌一つで屈服するのだ』
ヒュペリオンの舌先が私の閉じている大腿を触れるか触れないかで沿わせてくる。
これはくすぐりだ。

くすぐって私の股を開かせるつもりなのだ。

『ふふっ…いつまで耐えられるか見せてもらおうか？』

私の大腿や男の付近に舌を吸い付かせたり、触れたり等と緩急自在にくすぐっていき、閉じていた大腿が緩み始めてしまう。

これは熟練の技術を思わせるヒュペリオンの舌使いだ。

素人同然の私には成す術も無く下の口を守っている門がこじ開けられてしまう。

『そろそろだな。貫かせてもらうぞ！』

ヒュペリオンが大腿の間隙を抜け、一気に私の下の口へと突貫してきた。

「むがあああああっ！」

ヒュペリオンの舌の侵入を許し、私の身体は硬直していく。

『ふふっ…たっぷりと吸い尽くして気持ちよくしてやるぞ…ははははっ！』

ヒュペリオンの舌が蠢き、私の命が吸われていく。

身体の熱が奪われる代わりに得も知れない快感が身体中に駆け巡る。

これがヒュペリオンがもたらす快感なのか…。

「僕のことを忘れてもらっては困るよ、陛下！はあああっ！」

レアの女が私の男の証を潰そうと狭まっていく。

「はぁ…あん…僕の中で…んっ…君の男が遊び回っているのを…うあっ…感じるよ！うっ！」

ヒュペリオンの舌とレアの女の連撃は凄まじいの一言だった。

私の下半身が二人の女から吸い尽くされていく。

『俺はこのまま暫く貴公の下の口を貪らせてもらうぞ…』

何て言うことだ！

ヒュペリオンの攻撃を受けたまま残りの敵の相手をしなければならないのか…。

「さてと、次は私がやらせてもらうわ。再び味見させてもらうわよ、陛下…」

今度はテイアが跨り、私の男を締め付けてくる。

「はあっ…はぁ…はぁ…それにしてもクロノス達の洗礼を無事に乗り越えるなんて大したものよ。やっぱり私が目に付けただけあるわね！ああん！」

そういえばテイアは私がクロノス達に壊されるかもしれないと言って、血を吸い尽くしてきたのだったな…。

「今度は貴方の精液を搾取させてもらうわよ！さあ、私の中で弾けなさい、陛下！」

一応、私は王であるのだがな…。

むしろテイアが女王の貫禄があるように思えてくるぞ。

「いいわよ…陛下…本当にいい！いいわ！」

「むぐっ！」

私の体液がテイアに搾り取られていく。

学者と言えどやはりティターンの名に連なる者。

大の男が泣き叫ぶような鬼腰だった。

私の身体が何だか軽くなっている気がする。

手鏡を見る暇があれば、自分の姿がどのようになっているのかを確認したいところなのだが…。

「いよいよあたしの番ね…」

テテュスが私の腰に乗り込んでくる。

後に控えているのはオケアノスとムネモシュネ、クロノス、ティフォン、イアペトスの五神か…。

よくぞここまで生き延びたと我ながら思う。

だが、後もう少しの辛抱だ。

「満足させないと愛の鞭でお仕置きだからね！んっくぅううっ！」

テテュスの中に私の男が収まり、馬車馬を急かすかのように腰を振ってくる。

「くっ！陛下の癖に何てものを持ってるのよ！このっ！」

何故、怒られなければならないのだ？

テテュスは八つ当たりするかのように私の男が締め上げていく。

とにかく反抗するよりも早く満足してもらって苦痛になる寸前の快楽地獄から抜け出さなければ…。

「あん！本当に…うぅ…あんたって…はぁ…底無しね…あああああっ！」

テテュスは絶叫を上げ、私は欲望を放出していく。

これで後五神だ…。

不意に下の口からヒュペリオンの舌がぬかれていく。

「少しいいか？」

敵が少なくなって意気込んでいる私にヒュペリオンが水を差してき

た。

クロノスもヒュペリオンの言葉に耳を傾けるためなのか、私の口から舌を抜いてくる。

「どうしたというのだ、ヒュペリオン」

いったい何だというのだ？

だが、これで少し休めるから感謝すべきなのだろう。

「どうせなら俺の弟子達も参加させようと思ってるのだが、いいか？」

ヒュペリオンの弟子達だと！

弟子達と言うことから弟子の複数形だ。

ただでさえティターン神軍と四高弟とで激戦中なのに更なる援軍がやってくるというのか…。

当然美女だろうと思うが、断じて御免被る。

私の身体は一つしかないのだ。

これ以上搾取されると骨すらも残らなくなりそうだ。

「謹んで断…」

「素晴らしいではないか。彼女達にも陛下への忠誠の証を立ててても

らうべきだ」

クロノスは諸手を上げて、ヒュペリオンの弟子達の参加を賛成してくる。

周囲を見渡すと他の者達も「それもそうね」と同意を示している。

おのれ…。

私を徹底的に嬲るつもりなのか…。

「ついでに私の部隊であるムーサも参加させてもいいかしら？」

ムネモシュネが自分の部隊の参加も要望してくる。

弟子達の次は部隊だと！

部隊と言えば、少なくても十人以上は考えられる。

本気で私を嬲り殺すつもりでいるのか、貴様等は！

「もう勘弁し…」

「もちろん陛下に忠誠を尽くすためのことだ。問題無いよ…」

先ほどから王である私を差し置いてクロノスが仕切るばかりではないか！

「陛下、これは少しでも不穏分子を無くするために必要なことです…」

ウラノスが無情な言葉を紡いでくる。

受け容れなければ王としての地位は安泰では無いと言いたいわけなのか…。

まあいい。

ここは前向きに考えて十数人の美女とさらに交わることが出来て幸運だと思えばいいのだ。

世の男共ならば求めて止まない場面に立ち会えて幸せだと考えればいい。

それでさらにエクリアと救い出し、反乱軍を勝利に導けると思えば、まさに至れり尽くせり。

私は生きながらに理想郷に迷い込んだ幸せ者なのだ。

だから、受け容れてやろうではないか！

「良かろう！いくらでも相手になってやるぞ！」

私は今こそ酒池肉林の王として三千世界の彼方に降臨していくのだ。

「そうなの？だったら、私の分身のオケアニス三千神も参加させてもらうわね」

……。

……。

……。

……。

…。

何ですと？

三千？

三千ですか？

三千なのか…。

……。

三千だと！

……。

『ええ、そうよ。私を含めて総勢三千一体が貴方のお世話をすることになるから宜しくね』

……。

そういえばオケアノスはオケアニス三千神の統括者だった。

さらにオケアノスから自分を含めて三千一体をお世話するように言われていたことを思い出す。

まさか、よりにもよってこの場面で三千神を参加させるというのか！

「いや、さすがに三千は…」

「陛下もやる気が出ているのだ。遠慮無く相手になってもらうといいよ…」

私の言葉を遮り、クロノスはこの上無く邪悪な笑みを見せてオケアノスの要望に同意する。

……。

冗談ではないわ！

私に救世主にでもなれとでもいうのか！

確かに美女に囲まれて腹上死になることこそが我が死に様だと思ってきたが…。

「陛下、君の地位を盤石にさせるためにも必要なことだよ。それに私達神は人とは違って給与は求めていない。求めているのは飽くまで主の命の液なのさ。これから私達の忠誠を高めるためにも君はひたすら身体を捧げるしかないということだよ…」

……。

私はクロノスが何故私を王として担ぎ上げ、反乱軍に有利になるような命令を素直に受け容れたのかが分かった気がした。

クロノス達は私を王という名の生贄として祭り上げ、終わり無き快楽の牢獄へと監禁するつもりだったのだ。

例え、反乱軍に優位な戦況を整えても最終的に私がクロノス達を裏切って敵対しない限り、エロス軍の勝利は不動のものだ。

そして、エクリアの存在が私の枷となり、抜け出すことも出来ない。

私はクロノス達の罠に見事にかかってしまったとわけなのか…。

膨大な数の魔力が集結してくるのが感じる。

上空には覆い尽くすほどの魔法陣が出現し、オケアノスの分身体であるオケアニス三千神が降臨しようとしていた。

さらにムネモシュネの私設部隊ムーサ、ヒュペリオンの弟子達らしき者達も姿を現している。

私はまさに戦場で孤立してしまった馬鹿で間抜けな兵士そのものだった…。

……。

酒池肉林の果てで腹上死となる夢。

このような形で夢が叶ってしまうかもれないとはな…。

だが、私にやるべきことがあるのだ。

エルとアビスを解放させ、エクリアを救出し、反乱軍を勝利に導かなければならない。

モイラやピテス達を守るためにも…。

それでも…。

私は空を見る。

上空にはオケアノスと同じ容姿の戦女神三千の堂々たる顔ぶれが勢揃いしている。

その異様なる光景を見るだけで戦意喪失になりそうだった。

「ふふっ…さあ、陛下。彼女達にも忠誠の証を…ふふっ…あははははっ！」

クロノスの嘲笑が私の絶望と共に響き渡っていく。

……。

第１０７話：しゅちにくりん

戦意喪失しながらも私は気づいてしまう。

私はこのような状態になることが分かっていたはずだ。

クロノスの言う通り、期待していたのだ。

だから、私は望んでしまった。

そして、正気を失ってしまっているエクリアを盾に欲望に堕ちてしまった。

エロスが言う真の絶望とは私もまたエロスであることを自覚してしまうことだったのだ。

私はこれまで散々たる思いで戦い抜き、生き残ってきた。

度胸も付いたし、頭もそれなりに働かせることが出来るようになったと思う。

だが、私という本質的なものは何も変わっていなかったことに気づかされる。

上空に浮かぶ三千の戦女神が降り立ち、私を中心に包囲陣を展開していく。

いよいよ私は本格的な淫獄へと堕ちていくのか…。

済まない、エクリア。

私は何処まで行っても欲望のままに生きるただの男だったようだ。

だが、それでも私はお前を必ず助けてみせる。

快楽に堕ちようとも最低限お前を解放させて反乱軍に送り届ける。

それで私は彼女達と共にこの世界から消え去っていく。

無論、エルとアビスも解放させて…。

この歪んだ未来に憂いを無くして旅立っていくのだ。

「オケアノス様、この私ステュクス以下三千神全員揃いました」

「ヒュペリオン師匠が一番弟子ヘリオス参りました！」

「二番弟子セレネ華麗に推参だよ！」

「三番弟子エオス参上したぜ！」

「ムネモシュネ隊長、我等ムーサ部隊只今到着しました！」

私を奈落の底に突き落とす女神達が揃ったか…。

……。

『貴様は私だ。エロスとして奴等を思うがままに蹂躙してやれ…』

……。

不意に頭から声が響いてくる。

この声は私。

私自身の声だ。

私は笑みを浮かべる。

そうだ、私が待ち望んでいた夢が目の前にあるのだ。

今更、後悔して何になる？

私は王なのだ。

ならば、全ての女は私に傅くべきだ！

私の中に巣くっていた瘤が弾けていく。

全ての欲望を解放させろ。

私こそが欲望の王だ。

全ての欲望は私のものとなる。

「ふぬっ！」

「きゃああっ！」

私は自分の身体に張り付いている女を弾き飛ばし、悠然と立ち上がってみせる。

「へ、陛下？」

突然の私の行動にクロノスが戸惑っている。

「陛下、君はただ何も考えずに私達の…」

「黙れ、クロノス…」

私の言葉にクロノスが口を閉じる。

「王とは常に攻めで行くものだ。余は貴様等の忠誠を一身受け容れ、そして、攻め立ててやろう。その時こそが貴様等が真に余の下に傅くことになるのだ…」

何て気分が良いのだろうか。

瘤が弾けてからというものの身体が羽のように軽く感じる。

私は近くにいるイアペトスの腕を取る。

「へ、陛下。儂に何を…」

「決まっているだろう。存分に可愛がってやるのだ！ぬおおおっ！」

自分よりも倍はある体格のイアペトスを抱え上げ、男の証で貫いていく。

「あぁっあああああっ！」

「うおおおおっ！」

イアペトスの絶叫が響く中で私は拘束で何度も貫いていく。

「貴様には爪で引っかかれた借りがあったな。万倍にして返してやるぞ！はあああっ！」

「後生じゃ！あうっ…堪忍して…くれ…あぁっ…あああああああっ！」

私の欲望が解き放たれ、イアペトスは断末魔の絶叫を上げて力尽きる。

周囲は静まりかえっていった。

「イアペトスが瞬殺されるだと？馬鹿な…」

クロノスは僅かながら後ずさっていた。

「どうした？私は貴様等の忠誠を存分に受け止めてやるぞ…」

気絶したイアペトスを横たわらせ、啖呵を切っていく。

今の私ならば、幾らでも相手に出来る気がしてくる。

……。

『思う存分に力を解き放て。貴様の欲望は無限だ…』

……。

私の欲望は無限だ。

「だったら、ヒュペリオン師匠の弟子である私達が参ります！」

「ちょっと大丈夫かな？相手はかなりの絶倫だよ…」

「大丈夫だ！三神がかりで攻めれば一網打尽に決まってるぜ！」

私を取り囲んでくるのはヒュペリオンの弟子だと自称する美女達。

ヘリオスは如何にも生真面目そうな美女は橙色の短髪に杏色の口紅を光らせる純白の法衣に黄金の鎧を身に纏っている女戦士。

セレネと名乗る美女は灰色の法衣に銀色の鎧を着飾っており、青褐色の口紅に青色の髪を靡かせていた。

エオスは黄金の髪を肩まで伸ばし、黄蘗色の口紅に塗り、黒色の法衣に青銅の鎧を装備した戦女神だ。

三神とも私よりも三倍ほどの背丈で高く、胸も大きい。

さらに黄金瞳を輝かせた雪のような白い肌を持った神秘的な絶世の美女達だった。

これほどの美女に囲まれれば、いつもの私であればたじろぐが今回はそうはいかない。

私は今気分が最高に乗ってきているのだ。

恐れるものなど無い。

「来るがいい…」

私の余裕の態度に三神は僅かながらもたじろぐが直ぐさま戦意を剥き出しにしてくる。

セレネは怖じ気づいていたが…。

「言ってくれますね…」

「何だか恐いです…」

「構うことはねえ。やっちまいな！」

三神は一斉に私に囲うように抱きついてくる。

小柄な私はたちまちの内に彼女達の肉に埋没してしまう。

「あむっぴちゃ」

「れろれろっ」

「ちゅぷちゅぱ」

三神とも私の身体の至る所に巨大な唇を這わせ、舌で舐め回してくる。

確かに気持ちいいが、師匠であるヒュペリオンやティターン神軍の面々には遠く呼ばないものだった。

実力を見切った私は一番活きの良いエオスを巨乳を鷲づかみにして、抱き寄せていく。

「なっ！俺達三神がかりの愛撫に怯まず反撃してくるなんて…」

「所詮は弟子程度の実力だな。私が天国に逝かせてやるぞ！」

私はエオスの胸に吸い付き、女の部分に指を入れて泣かせていく。

「ちゅぱ…エオスちゃんがやられてしまってる！師匠が敵わなかった相手に私達では…」

「んっ…何を言ってるのですか、セレネ！このままではエオスが倒されてしまいます！私達で援護するのですよ！」

ヘリオスは舌を伸ばし、ヒュペリオンと同じく私の下の口に中に挿入して精気を吸い始めていく。

セレネは私の首筋に舌を巻き付けて胸元に舌先を押しつけて血を吸ってくる。

私の身体を快楽を与えると同時に体力を奪ってエオスを救い出そうとするつもりか…。

だが、その程度の攻撃はもう何度も受けてきている。

今の私にとってはただ気持ちいい愛撫でしかない。

私は構わず体格で勝るエオスを抱き上げて、男の証で貫いていく。

「あぐっ！お、俺…初めて…なんだよ…だから…」

「安心しろ。優しく逝かせてやるぞ！」

欲望にまみれても私はそこまで落ちぶれればいない。

暫く痛みが治まるまで待つことにする。

「ああ…もういい。大丈夫だから…」

「そうか。すぐに楽にしてやる…」

私はエオスの呼吸に逢わせるように腰を何度も突き上げていく。

「ああっ…凄い…俺が…逝かされてしまう！あむっ」

エオスは涙を流しながら舌を出して私の胸に吸い付いてくる。

『もっともっと俺を貫いてくれ！陛下！俺はあんたに永遠の忠誠を！』

私はヘリオスの舌を噛み、腰を突きつける。

『くっ！これが甘噛みというものなのですか！だけど負けません！』

ヘリオスは舌を蠢かして私の精気を吸い尽くそうとしてくる。

この先三千体以上が待ちかまえているのだ。

とりあえずヒュペリオンので弟子達を全滅させよう。

『あああああっ！』

エオスは痙攣して力尽きていく。

私はエオスを横たわらせて、そのままヘリオスを抱き寄せる。

『私はエオスのようにはいきませんよ！えっ…この感じは…やっぱり降参…ああん！』

私はヘリオスの胸にエリニュス直伝の必殺指圧を喰らわせていく。

どうやらヘリオスは必死に強がっていただけでセレネと同じく臆病だったようだ。

何故だろうか、親近感が出てくる。

それが今の私には何故だが許せなかった。

だから、少々乱暴にやってやることにする。

ヘリオスの胸を荒々しく揉みほぐし、男の証を緩急織り交ぜて貫く。

相手に快感を慣れさせないようにして時には優しく、時には激しくでいくのだ。

『あああああっ…やっぱり私では…後は任せました…セレネ…』

『ええっ！そんな！先に逝かないでくださいよ！私一神でどうしろというんですか！』

セレネは私の胸元から血を吸いながらも涙目で私の腕の中で力尽きようとしていたヘリオスを見送っている。

『大丈夫です…貴方なら…きっと…あっさりと…苦しまずに…逝ける…はず…』

『もう私が負けることが前提で任せるんですか！私って一体…』

敗北者のように四つんばいで俯くセレネだったが、未だに私の胸元には舌先で押し当てて血を吸っている。

『へ、陛下…実は私…持病で…お腹の調子が…』

「私の血で腹を壊したのかもしれないな。だから、胸に押しつけている舌を離してもらおうか…」

セレネは私の言葉に涙を涙目になってくる。

『ええっ…けど…陛下の血はとっても美味しくて…』

「なるほど…腹を壊している癖に血は問題無く吸うことが出来るというわけか…」

下手な言い訳は見苦しいとはよく言ったものだ。

私は無言でセレネを抱き上げて、男の証を容赦無く貫いていく。

『ああっ！私の馬鹿！自分の食い意地の悪さを恨みたいです！けど、止められません…』

セレネは私の貫かれてよがりつつも全力で私の血を吸い尽くそうとしてくる。

色よりも食欲を優先させているつもりなのか…。

これほどの状況に己の欲望を見失わないとは何だ分からないが、許せなかった。

「うおおおおおっ！」

『あひゃあああああああっ！もうたまりません！』

私の渾身の一撃にセレネは逢えなく撃沈して力尽きていく。

だが、力尽きても無意識なのか、私の胸元からは血を依然として吸い続けていた。

何故か私に言いようのない敗北感が出てくる。

試合に勝って勝負には負けてしまったような感じだ。

私はセレネの舌を胸から引き抜こうとするが、何故か頑強に吸い付いていて離れなかった。

『むにゃむにゃ…美味しいです…』

どうやら私はセレネに一矢報いられてしまったようだ。

舌を切断すれば取れそうだと思うが、さすがに流血沙汰にはしたくはない。

私はそのままセレネの舌を放置して次の獲物を探し求めることにした。

「未熟とは言え、俺の弟子達がこうも呆気なく全滅してしまうとは…」

ヒュペリオンは畏怖に満ちた目で私を見てくる。

獲物は決まった。

私はセレネを引きずってヒュペリオンの下に近づいていく。

「えっ？陛下…」

「もう一度抱かせてもらうぞ！ヒュペリオン！」

私は自分の五倍ほどの体格を誇る巨女を押し倒し、男の証を突き刺していく。

「ぐっ…いいだろう。ほえ面をかかせてやるぞ！陛下！あむっ！」

「むごっ！」

ヒュペリオンの巨大な舌が私の顔に巻き付いて締め上げようとしてくる。

呼吸困難で力が抜けそうになると同時に舌の感触で快楽の海へと引きずり込まれそうになってしまう。

『たっぷりと可愛がってやる！』

ヒュペリオンの逞しい足が私の腰に巻き付き、逃がさんとばかりに私の背中に腕を回し、舌でぐるぐる巻きになった私の頭を自分の胸に押しつけていく。

これはヒュペリオンの完全拘束だった。

『くっくっくっ…俺の本気を見せてやるぜ！ウリエル！ガブリエル！』

「ぐおっ！」

ヒュペリオンの褐色の肌が水のように透明になり、私を包み込む。

適度に熱い風呂に浸かったような感覚に襲われてくる。

『俺の真のホーリー・シュラウドを特と味わえ！』

液状になったヒュペリオンの身体が私の身体に吸い付くように愛撫してくる。

「ふふっ…ヒュペリオンにこの技を出させるなんて大したものだよ。ホーリー・シュラウド。それは元々は攻撃用ではなく相手に快楽をもたらせるためのもの。君はもうヒュペリオンという快楽の檻から逃れることは出来ないよ。残念だったね…あははははっ！」

クロノスは有り難くもない解説をして、高笑いをしてくる。

おのれ、最後に必ず貴様を仕留めてやるぞ。

『今、抱いているのは俺だろう。俺だけを見ろ！』

「ぐぬぅ！」

ヒュペリオンは私の身体を掻き混ぜるかのように乱暴に抱き締め、全身を唇のような感触で吸い付かせていく。

このままではやられてしまう。

欲望の王たる私が屈するのはあってはならないのだ。

「むごぅ！」

私もまたヒュペリオンの胸を掻き混ぜ、とにかく突きまくっていった。

受け身になってしまったら負けだ。

とにかく無心になって相手を征服することだけを考えたらいい。

『小癪な！貴公の身体を骨の髄まで吸い尽くしてやる』

身体の至る所に針が刺さったかのような痛みが襲ってくる。

顔に巻き付いてる舌の隙間からよく見るとヒュペリオンの透明の身

体が少しずつ赤く染まっていた。

その赤く染まらせているのは私の血だ。

先ほどの針に刺されたような痛みは血を吸うために傷つけたものだったのか…。

まるで唇に吸われているかのような甘美な感触と身体が心地良く冷えてくる感覚がしてくる。

その変わりにヒュペリオンの身体がさらに熱くなり、冷えた私の身体を暖めていく。

「むおおおおっ！」

とにかく工夫も技術も何もない力任せで強引に押し進めるしかない。

体力ならば私は全次元全世界の神々相手でも負ける気はしないのだ。

……。

……。

…。

「あああああああああっ！」

ヒュペリオンは絶叫と共に私の顔から舌を離し、崩れ落ちていった。

私の身体はヒュペリオンから血を吸われてしまったことから血塗れ

になってしまっている。

気絶しても尚吸い続けていたセレネの舌も満腹になったのか、いつの間にか解放されていた。

「さあ、次は誰だ…」

「くっ！」

誰もが私の前から後ずさってきている。

クロノスも不敵な笑みを消し、後ずさろうとしていた。

「ふっ、まさかここまで化けてしまうとはな。だが、いくら君が欲望を秘めようともこれだけの数を裁くことは出来るというのかね？」

「私の欲望が尽きるまでやってみせるさ…」

欲望は決して尽きることはない。

なぜならば、生きること自体が欲望そのものだからだ。

そして、生きることに執着する私の欲望は最強だ。

だから、負けはしない。

私は次々襲いかかってくる美女達を貫き、欲望を吐き出していく。

もはや感情を赴くことなく、ただ快楽に身を任せていくだけだ。

「やってくれるわね。あの時の借りを返してもらうわよ！坊や！」

ムネモシュネは私設部隊ムーサと共に私に群がってくる。

ムーサ部隊はムネモシュネがそのまま子供になったような容姿で髪も口紅も同じだった。

だが、胸の方は些か発育不足で背も私と大差無い程のものだった。

彼女達もまたムネモシュネの分身体のようなものなのだろう。

「あたし達と遊ぼうよ、おじさん」

「きゃはははっ…もう逃がさないよ、おじさん」

色気だけは本体譲りだというわけか…。

それにしても…。

「死ぬまで可愛がってあげるわ、おじさん」

私はまだ若いというのにおじさんをこうも連呼されてしまうのは少し悲しいぞ。

「ふふふ…あはははははっ」

「きゃはははははっ…」

ムーサ達は無邪気に笑いながら私の身体に取り憑いて唇と舌を這わせ、私の両手両足を自分の女の中へと呑み込んでくる。

「ぐちゅちゅぷちゅうう」

「ちゅぱちゅぱちゅぱ」

私の精気と血が一斉に吸い抜かれていく。

先ほどまでに随分と吸われている気がするが一向に貧血等や意識不明にならないことから私の心臓は神の力が宿ってるのだと思う。

それにしても肉の磔をするつもりなのか…。

「ふふっ…今度こそ私の中で永遠に夢を見させてあげるわ！はああん！」

ムネモシュネは私の男の証を自分の女の中へと挿入させ、激しく腰を振ってくる。

さすがはティターンの中でも最も色気がある美女だ。

彼女の中は私が入るために存在しているような名器となっている。

だが、それでも…。

「うおおおおおおおっ！」

「ああん！何なの…この力は…まるで…あああああっ！」

光速で貫き続けて一気にムネモシュネを落としていく。

さらに私の手と足を呑み込んでいるムーサ達に対しても手足を光速に動かして忽ちの内に逝かせていく。

「隊長と四神が一気に倒されるなんて…おじさん、どれだけ絶倫なのよ！」

「私達なんかじゃ敵わないんじゃないの？」

「けど、気持ちよさそうだったわ…」

「とにかくクロノス様が怒るからみんなでかかるしかないよ」

「いくわよ、絶倫おじさん！」

怯んでいた残りのムーサ達も襲いかかってくるが、私は流れ作業のように次々とやっていく。

「あああああっ！」

「おじさぁあああああん！」

「こんなの勝てるわけないよぉおおっ！」

……。

……。

…。

「もうだめ…」

「おじさん、好き…んちゅ」

私は全身にムーサの口付けを受けながらも最後の一神を落としていく。

これでムネモシュネとムーサ部隊は壊滅させた。

後はクロノス、ティフォン、オケアノスとその分身体オケアニス三千神だ。

「次はティフォン、お前が行くのだ。陛下を絞り滓にしてやれ」

『ふふっ…僕なら聖上を逝かせることが出来ることを見せてあげるよ、クロノス』

クロノスに促されて、地響きを立てながら私の前に立ち塞がってくるティフォン。

いよいよ大物が出張ってくるのか…。

それどころかこれ程の巨体とどうやって交わるというのだ?

『まずは僕の口で君を愛撫してあげるよ』

ティフォンは私の身体を掴み上げ、唇の下へと近づけていく。

『聖上は僕のものだ…んんんっちゅぱ!んんんんっちゅううううっ!』

「むむんんんぅ！」

ティフォンの強烈な吸引で私の骨が軋み、皮が千切れそうになってしまう。

だが、それでも快楽を感じてしまうのだから、これも神の力だというのか…。

それにしても、このままだと私の身体が軟体動物になりかねない…。

『んんんちゅるるるっ』

ティフォンは私の頭から上半身を呑み込んでいき、しゃぶるようにして私の身体を口から出し入れしていく。

私の身体を男の証のように扱っているつもりなのか！

ティフォンの熱く柔らかい唇が私の全身をとろけさせるような感覚を与えてくる。

『ちゅばちゅぱ…気持ちいいでしょう。君はもう僕の飴玉さ…ちゅううっ』

「うぬっ…」

反撃しようにも相手が余りにも巨大であることから何をしていいのかが分からん！

『ちゅぱ…もっと味わってあげる。あむぅ』

「ぬおおっ！」

しゃぶるだけでは飽きたらず、ついには呑み込んでくるとは…。

『くちゅむちゅちゅぱ』

「ぐあああああっ！」

全身にまとわりつく粘膜の快感はともかく、揺さぶられることで関節が脱臼してしまいそうになる。

本当に私を飴玉同然に舐め回すつもりなのか！

心地よいが乱暴に舐め回されては身体が壊されてしまう。

私が何とか口の中から脱出しようとすることが、ティフォンに感づかれたのか咀嚼が止まる。

『ちゅぱ…んっ…済まない。乱暴にし過ぎたようだ。君は強大だが、平時では存外脆いものだったのだな。では、優しくしてあげよう…ちゅぷちゅぱ』

先ほどの激しかった咀嚼とは打って変わって優しい愛撫に変わり、痛みの伴わない快楽を味わうこととなった。

とりあえず身体を丸めて耐えるしかない。

……。

暫く愛撫が続き、ようやく口の中から出されることになった。

かなり精気を吸い取られてしまった気がする。

だが、それでも私の欲望は、生命力は決して尽きることはない！

口から吐き出された私はティフォンの唾液でふやけきっていた。

そんな私をティフォンは一舐めして微笑みかけてくる。

『ここからが本番だよ、聖上。今度は僕の下の口で可愛がってあげる…』

私はティフォンに掴まれて、そのまま下半身へと運ばれてしまう。

そこには瑞々しいほどに紅く濡れた肉の洞窟があった。

『僕の全てを感じとってくれ、聖上…はあああん！』

「ぐおおおっ！」

私はその肉の洞窟に詰め込められていく。

全身がティフォンの下の口の感触に支配されていく。

柔らかさと力強さで私の身体を容赦無く包み込み、理性さえも支配しようとする。

『あああっ…気持ちいいよ…君の身体全部が僕の女に入っている…ああん』

「くっ！こんな所で…」

昔の偉い人は言っていた。

酒は飲んでも呑まれるなと…。

快楽もまた然りだ。

私は無我夢中で四肢を動かして、肉の壁を掻き混ぜていく。

『はあああああっ…感じる！君が激しく暴れて感じてしまうよ！あううううっ！』

「ぐえええっ！」

ティフォンが自分の女に指を入れて私の身体を弄くり回してくる。

しかも乱暴にこね回してくるから少し痛い。

なるほど、ティフォンは私にもっと大暴れしてもらいたいようだ。

ならば、遠慮無く逝かせてもらうのみだ！

「おりゃあああああっ！」

『あうううううっ！』

……。

……。

……。

……。

…。

『あああああっ！』

ティフォンが断末魔の悲鳴を上げる。

大地に亀裂が走るほどの衝撃と共に倒れていく。

私は排泄物のように吐き出され、ぐったりとしてしまう。

さすが巨体なだけあって、通常の万倍も欲望を放ってしまう羽目になった。

「まさか、ヒュペリオンに続いてティフォンまでもが…エロスの力とはこれ程のものなのか…」

クロノスが畏怖したかのような目で私を見てくる。

私はそんなクロノスに近づいていく。

「どうした？もう打ち止めか？私はまだ平気だぞ…」

最初の内は自分でない欲望が駆け巡ったことで勢いに乗ってやってみた。

だが、ティフォンやヒュペリオンの奇天烈な交わりにより酔いが冷めてしまい、元の気分に戻ってきてしまった感じなのだ。

正直、ここで退いてくれると大変有り難いのだが…。

「ふっ…まだ、オケアノス率いる三千神がいるのだ。さすがの君もこれだけの数を相手には出来ないだろう！」

「あの…クロノス…もう他力本願なわけのね…」

オケアノスは取り乱しているクロノスに呆れていた。

一方、オケアニス達は私を取り囲んでくる。

「さて、約束通り私達のお世話をしてもらうわよ、陛下」

「約束した覚えは無いのだがな…」

オケアニスは迅速に私の四肢を取り押さえ、地面に押し倒してくる。

「釣れないこと言わないでよ。さあ…かかりなさい！」

「「「「「「「「「「「「「「「「畏まりました、オケアノス様」」」」」」」」」」」」」」」」

「ああん…御覚悟を…陛下…ちゅ」

「御奉仕致します…んっ」

「天国に逝ってください…あむっ」

砂糖菓子に集る蟻のようにオケアニス達が私の身体に張り付く。

そして、身体の至る所に上と下の口を付けて血や精気を吸引し始めてくる。

「ぬあああああっ！」

快楽が与えられると共に体力が根刮ぎ奪われていき、思わず私は悲鳴を上げてしまう。

「彼女達の一神一神の力は私と遜色ない実力者だから三千倍の快楽を与えてあげるわ…んちゅううう」

オケアノスは舌なめずりして、私の顔を覆うように唇を押しつけてくる。

「むちゅちゅぱ」

「ちゅうちゅうちゅう」

「ああん…気持ちいいですか？陛下…」

オケアニス達も倣うように全身を駆使して私を快楽の奈落へと突き落とそうとする。

「あはははっ！君は快楽に溺れ、堕ちていくのだ。そして、君は私の思い通りに動くエロスとして生まれ変わっていくのさ…ははははははっ！」

私を自分の思い通りに動くエロスに変えること。

それこそがクロノスの目的だったというのか…。

クロノス達はエロスとタルタロスには露程の忠誠を誓っていない。

だからこそ、私を自分達の切り札に仕立て上げて反逆するつもりだったわけか…。

「さあ、大人しくエロスに堕ちるといい。それで君が欲望の全てを司る神となるのだ。私達のためにな…あはははっ！」

クロノスの嘲笑が響く中で私は快楽の海に溺れないように必死に理性を維持させている。

ここでクロノスの思惑通りになれば、全てを失う。

エクリアも助けることが出来なくなる。

反乱軍のみんなの元に帰れなくなってしまう。

それにこれはもうみんなのためだけの戦いではない。

自分との戦いなのだ。

……。

『欲望に身を任せればいい…』

……。

黙れ！

私は私のままでこの危機を乗り越えてみせる！

私は貴様なぞに決してならないぞ！

エロス！

「はあああああああっ！」

「はぅ！」

「うぐっ！」

「これは…」

私の細胞の一つ一つが叫んでいる…。

私であり続けろと…。

エロスと同じ道を歩むなと…。

「馬鹿な！一気に十神がやられるとは…」

……。

私はロストだ！

馬鹿で臆病で元平民その他であるロストだ！

そして、喧嘩番長と名乗った男である！

「うおおおおおおっ！」

「何をしている！お前達！奴に休む暇を与えるな！」

「私達は今更ながら飛んでもない怪物に挑んでいたのかもしれないわね…」

私は今クロノス達に喧嘩を売られている。

喧嘩を売られたら、売り切りになるまで買い続けることこそが喧嘩番長の宿命だ！

私は次々と美女の屍を築き上げていく。

「クロノス、もしかして陛下なら…」

「まだまだだ！オケアノス！何としても奴を落とせ！」

息つく間も無く群がってくるオケアニス達。

多勢に無勢の状況だが、それこそが燃える展開だ！

「掛かってこい！貴様等！全員漏れなく返り討ちにしてくれるわ！」

私は子供の頃の乗りで迫り来る美女軍団に啖呵を切っていく。

「ちゅぱ…これは別の意味で覚醒させてしまったみたいね。私達を

気持ちよくさせてね、陛下…ちゅちゅぱれろっ」

オケアノスは楽しむように私の顔に唇を押しつけて舌で舐め回してくる。

「くっくっくっ…随分と大きく言ってくれるではないか、ロストぉおおおおっ！」

クロノスの激高した声が響き、それに呼応するように私の身体に限界までに美女達が張り付いてくる。

私は美女達一神一神を丁寧に相手して逝かせていく。

……。

……。

……。

……。

……。

……。

……。

……。

「馬鹿な！二千神以上も逝かされてしまうとは…」

「ちゅぱちゅぱ…大好きよ…陛下…んちゅう」

クロノスの唖然とした声を聞きながらとろけてしまったオケアノスの唇を一身に受け続ける。

私は止めに貫き連打をオケアノスに叩き込む。

「あああああっ！気持ち…良かったわ…へい…か…ああん…」

オケアノスは私の男を解放していって気絶していく。

「陛下…お慕いします…」

「もっと…お情けを…」

骨抜きになったオケアニス達も私にしなだれかかっている。

それにしても二千も逝かせたのか…。

我ながら神を遙かに凌ぐほどの生命力を持っているものだ…。

これだけならば三千世界全てを相手にしても持ちこたえれそうだな…。

「オケアノス、お前までもが…ええい！不甲斐ない者共だ！プロメテウス！エピメテウス！お前達も参加しろ！」

クロノスの両脇に二つの魔法陣が展開され、二人の美女が出現する。

彼女達は双子で背丈はヒュペリオンと同等の五倍で服装は紅い法衣に黄金の鎧を纏っており、髪はそれぞれ漆黒と純白の違いがあった。

漆黒の髪の方は留紺色の口紅で純白の髪の方は乳白色の口紅を塗っていた。

また新手の美女達を呼び寄せてきたというのか…。

「イアペトスの弟子が一神エピメテウス、参上仕った」

「同じくプロメテウス。クロノス、我等にもこのような乱痴気騒ぎに参加せよと申すのか？」

漆黒の髪がプロメテウスで純白の髪がエピメテウスのようだ。

それにしてもプロメテウスはクロノスの要請に対して余り乗り気ではなさそうだ。

普段なら落ち込む所だが、状況からしてみれば残念ながら有り難いとも言える。

そのまま立ち去ってくれれば尚も良いのだがな…。

「そう言うのであれば奴を見てみろ。三千世界を見渡してもこれほどの活きの良い雄はいないぞ。それでもお前は参加しないというのか？」

プロメテウスは私の方を鋭い眼光で見据えて軽く頷いてみせる。

「なるほど、確かに極上の雄のようだな。良かろう、我なりのやり方で味見させてもらうとする。だが、これはお前に命令されたからやるのではない。そこを勘違いしないでもらおうか…」

「構わないさ。やってくれるのであればな。エピメテウス、お前はこの城のいる女兵士達、さらに反乱軍の領土を監視してる全女兵士達全て、そう、エロス軍の女兵士達全てをここに招集させるよう呼びかけろ。奴を徹底的に嬲り落としやるためにな…」

……。

エロス軍の女兵士達全てをここに収拾させるだと…。

どうやら私はクロノスの中にある喧嘩魂を呼び起こしてしまったようだ。

それにしてもエロス軍全女兵士を私を落とすために投入するとは…。

クロノスは徹底的にやり尽くすつもりらしい。

エピメテウスは無言で頷き、魔法陣を展開させて消えていく。

世界各地に散らばっている女兵士全てを招集するために呼びかけに行ったのだろう。

「退け」

プロメテウスの一声で私に群がっていたオケアニス達が退いていく。

私は蹌踉ける身体に鞭打って何とか立ち上がってみせる。

「いきなりで済まないが、名乗らせてもらおう。我が名はプロメテウス。汝が呆気なく逝かせた不肖の師イアペトスの弟子に当たる者だ」

プロメテウスは侮蔑の目で気絶しているイアペトスを見る。

仮にも師匠である相手を害虫でも見るような目で一瞥するとはな…。

「ご丁寧な挨拶痛み入る。私の名はロストだ。今は喧嘩の最中だが、貴様も私に喧嘩を売るつもりで立ち塞がるのか？」

私の挑発にプロメテウスは不敵な笑みを讃えてくる。

プロメテウスの笑みを見て私は確信する。

この美女はどこまでも戦いの中で見出す生粋の戦士だ。

私は両の拳を構えてみせる。

「ふふっ…我は話の早い男は大好きだ。我は我よりも強き者にしか身体を開かぬ。テミスとヒュペリオン、ティフォンまでをも打ち倒した汝の力を見せてもらおうか…」

プロメテウスは殺気を解放させ、大気を震わせてきた。

彼女はどうやら予想の斜め上に有り難い存在だったようだ。

これで血や精気を回復させる暇を設けることが出来た。

それに腰を振るのも良いが、拳を振るうのもまた然りだ。

「援軍が来るまでまだ時間がある。それまで我と汝とでゆるりと戯れようではないか」

「望むとこ…ぐおっ！」

私は不意に来た激痛に思わず膝を折ってしまう。

「どうかしたのか？」

「いや、何でも…ない…」

千体以上もの美女相手に腰を振ってきたのだ。

腰痛を患ってもおかしくはない。

それにしてもまたしても腰痛に耐えながら戦うことになろうとはな…。

「そうか、ならば始めようか…」

「そ…そう…だな…うっ…」

全く何事も完璧に事は進まないものだ。

とりあえず腰痛を耐えながら喧嘩をしなければ…。

私にはまだまだ後が控えているのだからな…。

第１０８話：Ｇａｍｅ　Ｏｖｅｒ

腰を押さえながらも目の前の美女プロメテウスを見る。

彼女はヒュペリオンと同様に無骨な程に戦いの中に生きる女なのだろう。

「我は汝のような極上の雄に相見えることを楽しみにしていたぞ。クロノスの下らぬ策略もこの時ばかりは感謝したい程だ」

プロメテウスは身長以上に巨大な剣を生み出して構えてくる。

私も腰痛を鞭打って拳を構えた。

正直、喧嘩は嬉しいが少し休憩が頂きたいものだ。

そのためには態と負けて彼女の相方が呼びに行っている援軍が来るまでは骨休みをしたいのだが…。

「我には分かるぞ。汝もまた我と同じ精神世界に生きているものだと…。クロノスの策略で仕方無しにこのような乱痴気騒ぎに付き合わされているのだろう？」

……。

いや、半分以上は自分で望みましたとは言えない。

どうやら彼女は私のことを美化して見ているようだ。

「私はそんなものではない」

「ふっ、その謙虚な態度にも好意に値するものだ。良かろう、汝が我に勝利した暁にはこの身を捧げる。我の身を汝の好きなようにして構わぬぞ」

プロメテウスは唇を舌で湿らせ、胸を強調するように身体を反らして見せつけていく。

彼女の姿を見て、二千体以上もの美女と交じりながらも尚も私の男の証は元気になってきている。

「うっ…」

どこまで私は節操無しなのだ。

「では、まずは疑似世界を展開させようか。ここで戦えば、無様に逝かされているこの者達が巻き添えを喰うことになるからな…」

プロメテウスの前に紋章のような物が出現し、光り輝き始めて世界が暗転していく。

……。

……。

…。

そこは全てが灰色の世界だった。

空も水も土も建物も全て、そう、全てが灰色。
黒でもなく白でもない中途半端で、何処か落ち着きのないそんな世界。

「これこそが我の世界だ。招き寄せるのはガイア様を除いて汝が初めてだ」

「それは光栄の至りだな」

私は軽口を叩きながらもひたすら腰痛を回復させようと魔力を駆使していく。

「汝はティフォンすらも打ち負かしている。だが、我はクロノス等が謀略の限りを尽くしている間にもひたすら力を磨いていた。今ではイアペトスどころかクロノス等をも越えていると自負している。それを汝に見せてやろう！」

虚空に巨大な紋章が浮かび上がってくる。
これはプロメテウスが生み出したものなのか。

「汝に戒めを与えん！スティグマータ！」

紋章は波動となって私に迫ってくる。
いきなり殲滅魔法を繰り出してくるとは…。

しかもこの紋章は私がクロノス達に虐待された際にイアペトスに刻まれたものに似ていた。

やはりイアペトスの弟子というわけか…。

灰色の世界に歪みが生じて、存在する全ての物質が揺らいでいく。

確かに疑似世界を展開させねば今頃は大量虐殺者にでもなっていたのかもしれない。

私は防御結界を何重にも展開させて防ごうとするが、それすらも粉砕して波動は迫ってくる。

防げないのであれば気合いで耐えるしかない。

何とも最近は力や技よりも頑丈な身体に任せて強引に戦っているな…。

「ぬぐっ！」

全身に凄まじい激痛が走るが何とか意識を保っていく。

波動が消え去り、次に目にしたのは剣を振り下ろそうとするプロメテウスだった。

両断されてたまるものか！

伝家の宝刀真剣白刃取りを繰り出してプロメテウスの斬撃を見事に受け止めていく。

「くっ…ふふっ…スティグマータに耐えきって、尚かつ我の斬撃を素手で受け止めるとはな…」

「これぐらいの攻撃で死ぬぐらいならば、貴様等ティターンに何百回も殺されていたさ…」

プロメテウスは笑みを浮かべて、剣を受け止められた体勢で蹴りを繰り出してくる。

ティターンの巨体女に関しては獲物だろうと素手であろうと攻撃を喰らえば必死だ。

私はプロメテウスから距離を置くようにして回避する。

先ほどまで身体に染みついていた女の匂いがあっという間に血の匂いで締められたな…。

身体からは先ほどの攻撃で血が滴っている。

「どうやらティフォンやヒュペリオンを打ち負かしたのは本当のようだな。ならば、我が最大の技を見事凌いでみせよ！」

灰色の空が歪み、黒い穴が開き始める。

これは一体何が始まるというのだ？

「全てを浄化する硫黄を流して世界を滅ぼす…」

穴からは灼熱の溶岩が流れ込んでくる。

ポントスのブフラマーと似たような技か！

「エウカリスティア」

灰色の世界が灼熱の紅へと染まっていく。

灼熱の海を避けようとするところをプロメテウスが瞬時に近づいて私を羽交い締めにしてくる。

身体がプロメテウスの巨乳に挟まれるように包まれていく。

気持ちいいが彼女がこれからやろうとしていることを考えれば素直に喜ぶことが出来ない。

「くっ…離せ！」

「我のような美女相手に離せ等とはな。遠慮することは無い。共に灼熱の海の中で遊泳としゃれ込もうではないか！ロスト！」

プロメテウスはそのまま私を押さえて灼熱の風呂へと飛び込んでいく。

全身に焼け付くような熱さとプロメテウスの柔らかい胸の感触が相俟って何とも言えない気分にさせられてしまう。

だが、このままでは時間を掛けてしまえば確実に焼き尽くされてしまう。

普通であれば、ここで万事休すなのだろうが、私は違う。

『ふふっ…どうした？もう抵抗しないのか？まあ、今更我の抱擁から逃げたところで無駄だ。我のエウカリスティアは世界全てを満た

すまで溢れていく。故に逃げ場は無いぞ』

プロメテウスの念話が頭に響いてくる。

私もまた真似るように念話でプロメテウスの頭に響かせていく。

『それはどうかな？ウリエル！』

ならば、自身も炎と化せば問題無いはずだ。

『うぐあっ！』

炎の属性と化したはずなのに依然として身体が焼け焦げるように熱い。

これは一体どうしたというのだ…。

『愚かな、我がエウカリスティアはその程度で凌げるほど浅いものではない。これは浄化の炎だ。故に如何なる属性も例外は無い。汝はこのまま我が腕の中で燃え尽きてしまうのだ！』

プロメテウスの言う通り、確かに甘かったようだ。

ならば取るべき道はただ一つ。

私はプロメテウスの抱擁を力づくで解いて、腹部に拳をめり込ませていく。

『ぐふっ…まさか自分が燃え尽きる前に我を伸そうとするつもりなのか！』

『その通りだ！プロメテウス！』

プロメテウスは腹部を庇いながらも剣を振るってくる。

私は剣を鷲づかみにして再び腹部に拳を叩き込み、回し蹴りを脇に炸裂させていく。

『あぐっ…小癪な…小柄な分際でよくも…』

……。

……。

…。

今何て言った？

『私のことを小柄な豆粒と言ったのか？』

『えっ…そこまでは言ってないが、それがどうしたというのだ？』

……。

私の中は性欲を越えるもので支配される。

それは怒りだ。

過去、私を小人扱いしたものは例外無く完膚無きまでに伸していった。

例外無くだ！

それが例え神であろうとも…。

『骨の髄まで覚悟しろ…プロメテウス…』

『な、何だ…この殺気は！』

プロメテウスは私から距離を取ろうとしてくる。

そうさせないぞ！

私は瞬時にプロメテウスの背後に回り込む。

『馬鹿な！我がこうも容易く後ろを…ぐえええええっ！』

『喰らえ！東洋の神秘裸締めを！』

背後からしがみついてプロメテウスの首を決めていく。

我が怒りを思い知るがいい！

『貴様に選ばせてやる。先ほどの言葉を撤回するか、しないかだ。もし、撤回しないのであれば貴様には地獄を見てもらう。撤回するのであれば解放してやろう。撤回ならば腕を三回叩け。否であれば一回叩け…』

『ぐううっ…そんなこと…ぐえええええっ！』

プロメテウスが何かを言おうとしているところを首をさらに締め付けて黙らせる。

話せば終わりだ。

選択の余地は与えてやらないぞ。

『私が小さいのではない！貴様等が大きすぎるのだ！どうなんだ！分かっているのか！』

我ながら大人げないがもはや止まることは出来ない。

さあ、どうする、プロメテウス！

『あぐぐっ…』

『撤回か！否か！決めるがいい！プロメテウス！』

プロメテウスは手を動かし、そして…。

……。

……。

……。

……。

……。

…。

世界は紅から灰色に戻っていた。

プロメテウスは私の腕を三回叩き、小柄呼ばわりしていたことを撤回したからだった。

冷静に考えれば、余りにも大人げないことだったが、誰しも我を失ってしまう何かがあるはずだ。

私にとっては体型だったに過ぎない。

「汝の身体について馬鹿にして済まなかったな。許して欲しい…」

「い、いや…撤回してくれればそれでいいのだ…」

ここまで神妙に謝られてしまうと逆に申し訳ない気持ちになってしまう。

今後はもう少し自制出来るようにしなければな…。

「あ、あの…それでだが…汝は我に勝利したのだ。だから…」

プロメテウスが身体をもじもじさせて何かを言おうとしている。

私は何故かプロメテウスの態度に癒されていた。

今までかつてこれほどまでに初々しい態度を見せた美女はいただろうか？

「あの…いいのか?貴様はこういうことが…あまり…」

欲望にまみれていたはずの私が思わず怯んでしまった。

「汝が…良ければ…だが…我は…粗忽者故に…な…」

本当は休憩させてくれることを頼もうと思ったのだが、このような初々しい美女を前にして怯むなど男が廃るというものだ。

私は勇者になってみせる。

「私こそ…プロメテウスが良ければ今すぐにでも抱きたいと思っている」

「プロメと呼んで欲しい、ロスト」

私とプロメは互いに口付けを交わし合い、地面に横たわっていく。

プロメは仰向けになり、私は覆い被さる体勢となる。

「では、いくぞ…プロメ…」

「ああ、ロスト。汝の逞しくも雄々しい男で我を貫いてくれ…」

私は狙いを定めて、プロメの女に私の男を勢いを入れて貫いていく。

プロメの身体は仰け反り、私の身体に四肢を絡ませて掻き抱いてきた。

私もまたプロメの巨乳を掻き乱し、腰を激しく振るわせていくのだ

った。

「ああっ…ロスト…私の愛しい雄よ…れろっ」

プロメの舌が伸び、胸に埋めている私の頭に巻き付いてくる。

私と背丈が合わない故に繋がっている間は舌で愛撫されることになるが、今ではそれもまた良いとも思えてくる。

「ちゅぷぴちゃちゅぱ…」

プロメは熱心に私の頭を舐め回し、さらには首筋や胸元まで及ばせていく。

血だらけになっていた私の身体はあっという間にプロメの唾液まみれになっていった。

私はプロメの愛撫に負けまいと腰を光速で振るって何度も喘ぎ声を上げさせていく。

『ああ…気持ちいい！凄い…これが極上の雄の力なのか…これではもう汝無しでは生きられなくなる！』

ならば、私無しで生きられなくなるまでやるのみだ。

私はさらに腰を振る力を強くしていく。

酒池肉林の中でこれ程能動的な想いで攻めたのはプロメが初めてかもしれない。

『ああっ…愛してる！ロストのことを愛してるぞ！』

私もだ。

プロメ！

……。

……。

…。

『主…私は…あんたを…』

……。

……。

…。

不意に脳裏から別の声が響いてきた。

この声はいったい…。

いや、それよりはプロメだ。

私は最後の力を振り絞るべく腰を振っていった。

『あああああああああああっ！』

……。

……。

……。

……。

…。

私は元の美女の屍が築かれている世界へと戻っていた。

既に私を包囲するように黒装束集団が待機していた。

エロス軍の全女兵士をこの世界に集結させたというのだな。

「大丈夫だ。汝の力を持ってすれば物の数にもならぬはず…」

プロメは私に寄りかかるように抱きついてきている。

戦いを通して私はプロメに懐かれてしまった。

ピテスのように小柄でないことから移動する際にはプロメの身体を引きずってしまう形になってしまう。

「やはり姉者を落とされましたか、陛下…」

プロメテウスの双子の妹であるエピメテウスは私の前に跪いてみせる。

「姉者が従うのであれば、私も貴方様に従いましょう。ロスト陛下、姉者を末永く宜しくお願いします。ついでに私のことも宜しくお願いします。あっ、それと私のことはエピメとでも呼んでください」

ついでといいのだろうか？

なし崩し的にエピメとも友好関係を結ぶことが出来てしまったが…。

「それに私と姉者は感覚を共有していて二つで一つの神なのです。陛下の精強な男っぷりには感服致しました。兵士達に招集を呼びかけている間に何度濡れてしまったことか…」

戸惑っている私にプロメは不機嫌そうな声を出してくる。

「ロスト、個奴のことは気にしなくても良いぞ。我をからかうことを生き甲斐に思っている捻くれ者だからな…」

「何を仰るのか。私はただ姉者を愛しているだけで御座います。だけど…」

エピメは私の前に立ち、顔を寄せて甘い吐息を吹きかけてくる。

「ロスト陛下も同じく愛しますよ…んちゅ」

プロメの唇が私の顔に押しつけられていく。

「プロメ！」

「ちゅぱ…ふふっ…姉者の者は私の者ですよ」

なるほど、確かにエピメはプロメをからかうことが大好きなようだ。

「何時まで独占しているつもりだ。プロメテウス、エピメテウス…」

クロノスは腕を組んで不機嫌そうに言い放ってくる。

「ふっ、大分余裕が無くなっているな、クロノス。だが、焦ることはない。どうせ汝では我の愛しいロストには敵わないのだからな」

「姉者、本当のことを言ってはいけません。嘘を装って心の中で笑うことこそが正しい処世術なのですから」

クロノスは双子の言葉に怒りで肩を震わせている。

頼むからクロノスを余り怒らせないで欲しい。

しわ寄せは私に思い切り来るのだからな…。

「済まないが、我はここで失礼する。我はこのような祭りには興味は無いからな。後で二人だけ愛し合おう…ちゅう」

「私も余りこのような形は好みませんので。後で姉者と三人で愛し合いましょう…ちゅう」

私はプロメとエピメに頭を挟まれるように唇を押しつけられていく。

「ちゅぱ…では、また後で」

「ちゅぱ…がんばってください」

プロメとエピメは魔法陣を展開させてその場から消えていった。

……。

私は女兵士とオケアニスの大軍を背に悠然と立ちはだかるクロノスを見据えていく。

「覚悟してもらおうか、陛下。君には傀儡として私達に尽くしてもらわなければならないからね…」

「仮にも王である私が貴様等の傀儡になることは天地が裂けても有り得ないことだ。寝言は寝てから言え、クロノス」

私は王者らしく堂々と佇んでクロノスの言葉を両断してやる。

ここで弱みを見せてしまえば、畳みかけられるように付け込まれてしまう。

女兵士達は若干畏怖したかのように後ずさっている。

神々相手に絶倫している私と相手をしたくないのかもしれない。

まあ、それが普通の反応とも言えるだろう。

私は人外かあるいは人外じみた美女には何故か好かれるが、変わりに一般の女性から一切もてないのだ。

「何をしている！さっさと陛下を陵辱してやれ！」

女兵士達は首を横に振り、一人また一人と逃げていく。

そこまで私と相手するのが嫌だったのか…。

当然とは言え、やはりかなり傷つくものだ。

「私の言うことが聞けないのか！」

クロノスは逃げ出す女兵士に掌を向けて魔法弾を放とうとする。

役立たずは容赦無く殺すというわけなのか…。

「お待ち下さい」

だが、今にも女兵士達を始末しようとしていたクロノスに待ったをかけたものがいた。

今まで何もすることなく静観していたエルもといエレボスだった。

エレボスは魔力を込めていたクロノスの腕を掴んでいた。

「何のつもりだ？」

「彼女達はエロスあるいはタルタロス様の兵士であって貴方の兵士ではありません。ですから、無断で処分するようなことはなりません」

クロノスはエレボスの手を振り払うために力を入れようとするが、彼女がタルタロスの腹心であることを考慮してか、そのまま引き下がっていく。

「ならば、エレボス。お前が陛下と交わったらどうだ？陛下に忠誠を誓ったのだろ」

「それを判断するのは陛下であって私ではありません。陛下が望むのであれば、私は身体を開きます」

エレボスは私の方を視線を向けて近づいてくる。

……。

何なのだろうか？

エレボスは私の手前に立ち止まり、金目銀目に私の姿を映していく。

「陛下は私の身体をご所望なのでしょうか？」

……。

これは一体どのように答えることが正しいのだろうか？

「私は陛下が求めるのであれば、何時でもこの身を捧げる覚悟があります。ですが、このような乱痴気騒ぎで女を抱いて陛下は本当に満足されるのでしょうか？」

……。

「先ほど去られたプロメテウス殿とエピメテウス殿もそれを考慮して去ったのだと思われます。陛下が欲しいのは忠誠ですか？身体ですか？それとも愛なのですか？」

私はエルに説教をされているのか…。

そういえば最初に出会った頃に説教されたことを思い出す。

……。

『私は別に主殿の夢をただ否定している訳ではありません。ただ主殿は侍らした女の数だけ平等に愛し抜く御覚悟はあるのでしょうか？女をただの性欲処理として侍らすのであれば、命を持って否定させていただきます…』

……。

当時としてはかなり堪える言葉だった。

それが今こうして私は再びエルに説教されている。

何だか無性に嬉しくなった。

エルは例えエレボスになっていてもエルだったのだ。

「私は抱いた女に対しては責任は持つ。例え、千神だろうが万神だろうともな…」

「陛下の御言葉、しかと聞き入れました。さて、陛下の尊き御言葉を聞いても尚貴方達はこのような遊戯に付き合うというのですか？」

エルは私達を包囲しているオケアニス達に呼びかけていく。

エルの言葉を聞き、暫くして一神のオケアニスが跪いてきた。

彼女は確かオケアニス三千神の隊長のステュクス、オケアノスに次ぐ地位の者だ。

「いいえ、このステュクス。陛下の御言葉に心が討たれました。身を交えずとも私は永遠の忠誠を捧げ所存で御座います」

「私も誓います」

「誓います」

「永遠なる忠誠を…」

「捧げます…」

……。

残り千神のオケアニスが全て平伏してきた。

まさか、ここで一気に大逆転するとは…。

「どういうつもりだ！お前達！」

クロノスが平伏しているオケアニスに激高していく。

「どういうつもり？クロノス様、私達はただ陛下に忠誠を誓っただけに過ぎません」

「それ故にもう貴方の言葉に従う必要もありません」

「後は貴方だけで遊戯をしていてください」

「まあ、そういうことね。クロノス、私達はもう陛下に従うことにしたわ」

いつの間にか復活したオケアノスもまた私に従う意を示してきた。

……。

失脚寸前の独裁者の姿を垣間見た気がした。

「クロノス、ここはお主の負けじゃよ」

「潔く負けを認めることで罪は軽くなるものですな」

「いい加減に陛下の器を認めてもいいのではないのか？」

さらに復活したイアペトス、テミス、ヒュペリオンが口々にクロノスを説得しようとしてくる。

クロノスは三神の説得にも舌打ちせんとばかりに耳を貸さず、四高弟の方へと向く。

「ちっ！四高弟達よ。お前達はどうなのだ？」

「私達は既に陛下に打ち負かされました。神は強き者こそが尊ばれますからね」

ウラノスはクロノスの言葉を無情に交わしていく。

もはや彼女達もクロノスの遊戯に付き合う気は無いようだ。

『僕は聖上の御心に従うまでだよ』

「私は既に婿殿に全てを捧げています」

「あたしは面白そうだから陛下に従うよ」

他の三神もまた私に従うつもりらしい。

「テテュス、お前はどうなのだ？確かお前は陛下を屈服させてやりたかったのではないのか？」

クロノスはレアとポイベを見ずにテテュスに伺いを立ててきた。

レアは私を遊び相手だと認めていたし、ポイベに至っては飼い主だと思われている。

だから、彼女達が自分の言うことに従わないと思ったに違いない。

それに対してテテュスは私に悪態をつき、仲が悪いように見えた。

だから、テテュスなら自分の言うことを聞いてくれるとクロノスは思ったのだろう。

だが…。

「あたしはこんな遊びに付き合わなくても自分の手で何時か陛下を屈服させてみせるわよ。だから、もう終わりよ。後はクロノス、あ

んたの手で締め括ることね」

「テテュス、お前までもが…」

クロノスはムネモシュネを縋るように見る。

「私は陛下と共に良い記憶を見させてもらうことにしたの。ご免なさい、クロノス。私には貴方の期待に添えそうも無いわ」

ムネモシュネもまたクロノスの従わないことを言い放つ。

「私達も同じくです」

「ヒュペリオン師匠が認めたのでしたら私達も認めます」

ムネモシュネの私設部隊ムーサもヒュペリオンの弟子達もクロノスの申し出に対して拒絶を示してきた。

「くっ！どいつもこいつも…そうだ！コイオス！クレイオス！」

クロノスは天に向かって叫んでいく。

この場にいない残りのティターンに呼びかけているのだろう。

『僕に何か用なの？』

『私達は今忙しい…』

空からクレイオスとコイオスの声が響いてくる。

彼女達には確かエクリアの看病を言い付かっていた。

「お前達も手伝うのだ。陛下を屈服させ、思うがままにするためにも…」

もはやクロノスは冷静な思考を失っている。

今までここまで追い詰められたことが無かったのだろう。

空からはクロノスの呼びかけに対して何も返ってこない。

「どうした！お前達も陛下に忠誠を誓っていることで私に従わないというのか！」

クロノスはもはや形振り構わずに空に向かって狂ったように叫んでいく。

暫くして沈黙が続いてから空からクレイオス達の声が返ってきた。

『僕は陛下から助手としてエクリアの看病を言い渡されている。だからクロノスの要請には応えられない…』

『私もまた同じ。陛下からの命令を最優先にさせる…』

クレイオスとコイオスはそう言い、クロノスの呼びかけに応えることは無かった。

……。

私は空を仰ぎ見たままのクロノスを見る。

クロノスは孤立してしまったのだ。

東洋の諺で策士、策に溺れる、という言葉があったがクロノスはまさしくその諺を体現しているように見えた。

「クロノス殿、貴方の負けです。だから…」

エルはそう言って、クロノスに近づこうとする。

「五月蠅い！」

「きゃあっ！」

クロノスはエルを弾き飛ばし、憤怒の形相で私を見る。

私は弾き飛ばされたエルに駆けつけて抱き起こす。

「大丈夫か！エル！」

「エル？私のことを言ってるのですか…私は平気です。陛下のお手を患わすことは…うっ…」

エルの額から僅かながら血が流れていた。

……。

エルはエレボスであってエルではない。

だが、それでもエレボスの中には確かにエルであったころの面影が

残されていた。

多分、タルタロスが眠りに付いている影響でエルの側面が際立って現れたのだと思う。

だからこそ、説教されたのも何処か心地良く、かつての温もりが蘇ったように感じた。

私はエルを傷つけたクロノスを見据える。

「あははははっ！タルタロスの傀儡の分際で私に意見するからだ！君も一々彼女のことなど気にしなくてもいいのだよ。なぜならば、君は王なのだからね…」

……。

「彼女達に頼った私が愚かだったよ。そう、最初からこうすれば良かったね…」

クロノスは自分の背丈以上の大きさを誇る大鎌を生み出して、手に取っていく。

私はエルを地面に横たわらせてクロノスと向かい合う。

「私のこの手で君を屈服させてみせるよ。お前達、いいな…」

クロノスの呼びかけに今度は皆が頷き、私とクロノスを中心に円陣を組んでくる。

これはまさか…。

『これは真なる王を選定せし儀式』

『我等は承認する。ティターン神軍の主神にして原初神ガイアの副神クロノスに選定権を委ねることを…』

ティフォンの時と同じ、聖なる決闘の儀式の準備だ。

『我等の歌で讃えよう！』

『神々に挑む蛮勇にして勇敢なる勇者を！』

『原初神ガイアの名の下に！』

『『『『『『『『『『『『『『『『アレルイヤ！』』』』』』』』』』』』』』』』

テミスがラッパを吹き鳴らし、クロノスを除く全ての神々の斉唱が始まる。

世界が暗転していく。

……。

……。

…。

私とクロノスが別世界に降り立っていた。

聖なる決闘を催す世界エリュシオン。

神々の斉唱が響き渡る、果て無き光が降り注ぐ至上の楽園。

「今度こそ私の手で調教してあげるよ、陛下、いや、ロスト！」

クロノスが大鎌を私に向けてくる。

どうやらクロノスにも借りを返す時が来たようだ。

私に屈辱を与えてくれたことに対する借りだ。

そして…。

……。

『エル？私のことを言ってるのですか…私は平気です。陛下のお手を患わすことは…うっ…』

……。

エルを傷つけたことに対する借りもだ。

「クロノス、貴様との決着を付けてやるぞ」

私は両の拳を構える。

クロノスとの最終決戦の始まりだ…。

第１０９話：クロノス

クロノスは禍々しい大鎌を私に向けて対峙している。

「アパテーに見習って君の四肢を奪って可愛がるのもまた一興というものだろうね…」

いつもの不敵な笑みから獲物をこれから嬲ろうとする嗜虐的な笑いに変わっていた。

これこそがクロノスの本性なのだろう。

ついにクロノスとの決着を付けることになったわけだが、私はティフォンをも打ち負かしているのだ。

クロノスの実力がティフォンを遙かに凌ぐということはありえないはずだ。

油断せずに戦えば負けることは無いだろう。

「君は私がティフォンやプロメテウスより弱いから油断しなければ負けないとでも思っているのだろう。確かに地力ではヒュペリオンやテミスにすら及ばないかもしれん。だが、それは大きな間違いだ」

クロノスは大鎌を弄びながら世間話をするかのように話しかけてくる。

私はクロノスの余裕の笑みに何故だか、腰が退けてしまう。

クロノスは何らかの切り札を持っているのか…。

「地力を高める何かを持ってるということなのか？」

「その通りさ。だからこそ私はガイア様の副神にまで上り詰めれたのだ。見せてあげるよ、その力を…」

クロノスは翼を広げて、空へと飛び立っていく。

私もクロノスに続くように空へと飛んでいった。

「クリフォト」

クロノスの周囲に漆黒の巨大な魔法陣が幾つも出現してくる。

魔法陣の配列は異なっているが、ティフォンが使用したセフィロトに似たような技だ。

「ふふっ…コスモを形成する数多なる世界を我に集え。我は一にして全なり！グランドクロス！」

クロノスを中心に無数の魔法陣の配列が十字となっていく。

全ての魔法陣から放出される強大な魔力がクロノスへと収束している。

やはり力を増幅させる技か…。

だが、ティフォンも神降ろしで力を増幅させたりした状態でも勝っている。

だから…。

「何を呆けている？ロスト…」

いつの間にか私の間合いを詰めて、大鎌を振りかぶっているクロノスの姿があった。

速い！

振り下ろされる大鎌に対して、咄嗟に後ろに下がる。

「ぐっ！」

胸から血が噴きだし、激痛で身体が項垂れてしまう。

反射的に後ろに下がっていなければ、私は両断されていた。

「ふふっ…さすがに君を殺してしまえば、テミスから反逆罪を問われてしまうからね…」

手加減されていたわけなのか…。

何とも私は運が良いことだ。

だが、その手加減が命取りのなることを骨の髄まで思い知らせてやるぞ。

「次は本気でいくよ！」

クロノスはまたしても瞬時に私の前に現れて、大鎌を振り下ろそうとしてきた。

だが、それは予想通りのことだ。

濫用することになってしまうが、真剣白刃取りで止めてみせる。

「うっ！」

大鎌が振り下ろされた瞬間に私は先ほどと同様に後ろに下がっていた。

「私の本気の斬撃を避けるとはさすがはロスト陛下だね」

クロノスは邪悪な笑みを見せながら大鎌を弄んでみせる。

目で捉えられない程に速い斬撃だったため、白刃取りすることが出来なかったのだ。

「手強い…」

思わず呟いてしまう。

最強のティフォンは火力重視の戦法で攻めてきたが、クロノスは違う。

クロノスは色物ではない堅実な攻撃で攻めてくる類。

その手の者は弱点が無く、最も打ち勝つことが困難な者だ。

だが、まだ方法はある。

クロノスを中心に十字に配列されている魔法陣の群を破壊することが出来れば勝機は十二分にあるはずだ。

クロノスから距離を取りながら、膨大なる魔力を集中させて放出させようとする。

「ビッグバン！」

レアとティフォンが使っていた技で私が覚えてきた技の中で最大の威力を誇るものだ。

完全に倒せなくても動きを止めることは出来るだろう。

世界の破壊と再生を司る光の波動がクロノスを覆い尽くそうとしていく。

「私の前では如何なる力も無意味さ。クリフォト…」

クロノスの周囲に展開されている魔法陣が輝き、アレクのブラックホールのように私の放った波動を吸い込んでいく。

タルタロスに手傷を負わせたという技がクロノスが展開している魔法陣に吸収されるという奇天烈な光景に私は言葉を失う。

まさかガイアの最強の技やタルタロスを負傷させたやらと猛威を振るっていた技が呆気なく破れてしまうとは…。

「ふはははははっ！このクリフォトは私に向かってくる如何なる攻撃

をも無力化し、吸収するのだ！」

クロノスは高笑いをして大鎌を弄んで見せてくる。

これは非常に不味い風向きだ。

クロノスをティフォン以下として掛かれば確実に殺されてしまう。

最後の最後にして難敵が私の前に立ちはだかるというのか…。

「ならば、この攻撃も無力化してみるがいい！」

黄金の拳よ、唸れ！

拳を握りしめて、高笑いをするクロノスに向かって飛びかかっていく。

魔法や技が駄目ならば、素手による直接攻撃を叩き込んでみるまでだ！

「掛かってくるがいい！ロストよ！」

漆黒の魔法陣が輝きだし、黒の閃光を次々と放ってくる。

「くっ！」

閃光の嵐をかいくぐりながらも私は一直線にクロノスに向かって飛んでいく。

「このクリフォトの魔法陣全ては数多の世界にある生命を糧にして

いる。その全ての生命が私を集結しているのだよ。このようにね！」

クロノスは大鎌を振り下ろすと同時に超広範囲の波動を放ってくる。

これは…。

避けられない！

クロノスが放った波動は規模や速度、見た目からして私が先ほど放ったビッグバンに匹敵するほどのものだった。

とりあえず防御結界を何重に展開させて全力で防御するしかない！

だが…。

「ぐうあああっ…」

防御結界はあっという間に粉砕されてしまい、身体がばらばらにならないようにひたすら耐え抜くことになってしまった。

もはや私の防御結界はあっても仕方ない代物になりつつあるかもしれない。

私の最強の武器はやはり敵の技や魔法ではなく、己の身一つのみだ。

血塗れになりながらも五体満足で攻撃に耐えきる私にクロノスはますます嗜虐的な笑みを見せてくる。

「ふはははっ…まさかここまで君の身体が頑丈だとは思いもしなかったよ。ならば、私は君の身体の強度を限界まで確かめるまでだ！」

クロノスは再び大鎌を振り下ろして波動を放ってくる。
先ほどの波動よりもさらに凌ぐ威力を秘めたものだ。
今度は防御魔法を使わずにそのままクロノスに向かって突貫する。
攻撃は最大の防御、敵さえ沈黙させればどれだけ負傷しようと戦いが終われば問題ではない。
黄金の拳よ、唸れ！
肉を切らせて骨を断つ！
この一撃で終わらせてみせる！
拳を繰り出そうと迫っている私に対して戦闘態勢を取るまでもなく大鎌を弄んでいるクロノス。
私の行く手を遮るかのように漆黒の魔法陣がクロノスとの間に割って入ってくる。
ならば、魔法陣ごと砕いていくのみだ！
漆黒の魔法陣に黄金の拳が炸裂していく。
黄金の拳は魔法陣に亀裂を走らせてめり込んでいった。
「ふふっ…言ったはずだ。如何なる攻撃も無力化するとな…」

「何だと…うっ！」

クロノスの笑い声と共に脱力感が襲ってくる。

この感覚は私が殴った魔法陣から発しているものだ。

急いで拳を魔法陣から引き抜こうとするが、塗り固められたかのように腕が魔法陣から動かすことが出来ない。

「君に見せてあげるよ。グランドクロスの真の姿をね…」

両手が真横に引かれ、両足が垂直へと垂れていく。

身体が動けない！

周囲を見渡すと漆黒の魔法陣が私の周囲に群がり、ある形状へと融合していく。

これは先ほどの十字の配列ではない、正真正銘の十字架の形だった。

私は空に浮かぶ巨大な十字架に磔にされているというのか…。

「あははははっ！これこそが君達の世界で伝わる救世主を天に召した真なる磔刑だよ。このグランドクロスによって世界は絶えざる光が照らされるのさ！」

身体から力が絶え間なく力が吸い取られ、抜け出すことも出来ない。

身動きが取れない私にクロノスが近づいてくる。

「ははははっ…またしても君は私の前で囚われた姿を晒したわけだ。気分はどうかね？ロスト陛下…」

「貴様という女が何であるかが分かったぞ。相手を縛り付けてからでなければ大口を叩けない臆病な神様だということだ…ぐっ！」

私の悪態にクロノスは笑みを消し、無言で指先で私の顔面を殴りつけてくる。

普通に殴られただけだというのに異様な程の激痛が私の身体を苛んでいく。

これは一体どういうことだ？

「口の聞き方に気を付けたまえ。君の生殺与奪は私に握られているのだよ。なあ、ロスト…」

クロノスの大鎌で私の胸元をなぞるようにして薄皮を切っていく。

「ぐあああああっ！」

大した傷でも無いにも関わらず壮絶なほどの痛みが私に襲いかかってくる。

虫に指されたほどの痛みが気が狂いそうな程の激痛に変わっている…。

「今、君はまるで胸を裂いて内蔵を引きずりだしたかのような言葉通り、死ぬほどの痛みに苛まれているはずだろう。このグランドクロスは最強の拘束魔法であるのと同時に究極の拷問魔法でもあるの

だよ…」

「あぐぅあああああっ…あああああああああああっ！」

クロノスは嗜虐的な笑みを見せながら大鎌の切っ先を私の胸になぞり続けていく。

その度に私は顎が外れそうな程の絶叫を轟かせる。

「君は私の描いた台本を見事に逸脱してくれた。その償いを死ぬほど味わってもらうよ…」

大鎌の切っ先が僅かに深く胸の中へとめり込んでいく。

「ぐあああああああああっ！」

私は世界に響き渡らせるのではないかという程の絶叫を上げ続けていった。

……。

……。

……。

……。

…。

「はぁ…はぁ…」

「ほほう、気を狂わせることも無くここまで痛みに耐えきるとはね。大した者だよ、君は…。さすがは私が見込んだ王というだけはある…」

息切れする私に大鎌に血を滴らせながら感嘆の声を上げるクロノス。

「これで…はぁ…貴様の気が済んだわけか…何とも悪趣味なことだ…」

「その上まだ減らず口を叩ける元気が残ってるとは恐れ入るね。さてと…」

クロノスは私の顔を二本指で鷲づかみして顔を寄せ、甘い吐息を吹きかけてくる。

「ロスト、いい加減に私のものになったらどうだ？君はよくやった。この私をここまで怒らせ掻き乱してくれたのだからね。だけど、それもこれで終わりだ。今度こそは是が非でも私の軍門に下ってもらうよ」

「私を籠絡させてエロスとして覚醒させて、一体何を目指しているのだ？クロノス…」

私は物騒な女に好かれやすい体質であるが、正直クロノスが私にここまで執着する意味が見出せない。

クロノスは私の何を求めているというのだ？

「私はただ君を求めている。それだけさ。ガイア様が君に執着する

のと同様にね。そして、君こそ何故そこまであの人間共に執着するのかね？前に言ったが君は望めば全てを手に入れる力を持っているのだよ。性欲か？愛か？それが問題のはずだ。君の世界にとってはね…」

……。

「だが、君はヒュペリオン達を犯しているときに確かにエロスとなっていた。それは愛よりも性欲を取ったという意味に他ならない。もう君は後戻りは出来ないのだよ」

私は確かに欲望のままに身を任せてしまった。

だが、それで私がエロスになることはありえない。

「後戻りしようが、前のめりになろうが、私がロストであることには変わりない。残念だったな。私は貴様の思い通りには最後までならないぞ」

「いいや、私の思い通りになっているさ。何故ならば君は第二のカオス、即ちアビスを覚醒させてしまったのだからね。もう間もなくこの世界、いや、根元世界のほとんどが奈落の底に沈むことのなるだろう…」

アビスを覚醒させただと？

いったいどういう意味だ？

「ふふっ…どういう意味だという顔をしているね。タルタロスは世界の奈落そのもの。あらゆる者の負の感情、絶望感、無力感を誰よ

りも察知する負の上級神だ。そして、アビスはタルタロスそのもの。君の負の感情でアビスは目覚めたのだ…ちゅ」

クロノスの唇が私の顔を覆い尽くす。

その瞬間に何か脈打つような音が世界に響き渡る。

この生々しい音はいったい…。

「ちゅぱ…ほら、君に愛情表現をしたことで彼女が嫉妬しているのさ。もう君は奈落からタルタロスから逃れることは出来ない。私達と共に来るしか選択肢が残されていないのだよ」

「うぅ…ならば、貴様等と一緒にいてもタルタロスからは逃れることは出来ないのではないのか？」

クロノス等ティターン神軍が如何に強大であろうとタルタロスには及ばない。

そのクロノス等がタルタロスから逃れることは不可能のはずだ。

「問題無いさ。ガイア様が待つ世界へと逃げ込めば解決だ」

「ガイア…だと…」

まさか思いしない所でガイアの名が出てくるとは…。

「私達はガイア様を裏切ってしまったけど、それでも君を手土産にすればあの御方も喜んで受け容れてくれるだろう。それにこのことはガイア様にとっては想定内だったはずだ」

まさかガイアが私にこの歪んだ世界に送ったのは…。

「むしろこれこそがガイア様が望んだ道筋と言うべきかな？」

ガイアのいる場所以外に逃げ道を無くするためだったと思うのは考えすぎなのだろうか？

……。

『済まない、ロスト。君にはさらなる残酷な真実を見てもらうよ。全てに絶望し、僕だけしか見れないようにするためにね…』

……。

もしかして私は最初からガイアに嵌められてしまったのだろうか？

いや、何かがまだ引っかかっている。

「その顔からしてまだ納得していないようだね。ならば、もう一度説明させてもらおうか。私達は君をガイア様に導くために敢えてエロスとタルタロスの下についたのさ。このままだと君は確実にエロスかタルタロスに取り込まれてしまう。だから絶望を、現実を見せてやったわけだ。君が如何にエロスとなる可能性を秘めているかを、エロスと同じく第二のカオスに当たるタルタロスに狙われているかをね。君の安息の場所はもはやガイア様の側以外に無いのだよ」

……。

「だったら、エリニュスは…彼女達の犠牲は一体何になる！彼女達

もガイアの弟子だったはずだ！」

「彼女達には気の毒だったよ。だけどほら、君達の世界で良い言葉があったではないか。敵を騙すにはまず味方からと、もっとも君は敵ではないがね…」

エリニュスが気の毒だっただと…。

彼女達は私のために命をかけて付き従ってくれた。

それだけではない！

何もかも全てが私を欺くために戦争を引き起こし、私を引き込むために仕組まれていたことなのか…。

余りの全貌に目眩が起きてくる。

いや、今こうして話している間にも私の力は吸収され続けているのだ。

「君にはもう退路は残されてはいない。私と共にガイア様の下に行くしか道が残されていないのだよ」

「反乱軍は…エクリアはどうなる？」

私の問いにクロノスはため息を付いて首を横に振っていく。

「残念ながら彼らのことは諦めてもらうしかない。縁のある私達ならばともかくその他大勢を受け容れるほどガイア様は寛大ではないからね」

私の身の安全を保証する代わりにエクリア達を見捨てろということなのか…。

……。

ならば、私が選ぶ選択肢は既に決まっている。

「魅力的な提案だが、断らせてもらう…」

「何故だ?そこまで反乱軍に愛着があるというのかね?君は彼らとは同じ時を生きる者ではないはずだ」

再びクロノスが戸惑い始める。

私が断るとは思っても見なかったのだろう。

「感情を抜きに考えたとして、ガイアに匿われてもタルタロスの手から逃れられるとは思えないと思ったからだ」

「ガイア様は神の中の神、原初神だ。あの御方に不可能は無い…」

クロノスは苛立たしげに言い放ってくる。

私はクロノスの答えに対してため息を付くことで返していく。

「タルタロスは世界の奈落そのもの。そして、アビスという依り代を手に入れたことで原初神以上の力を手にしたという。そのタルタロスに果たしてガイアの力で逃れられるかが疑問だ。例え、逃れられたとしても後々に捕らえられる可能性がある」

何となくだが、アビスならば私が何処に逃げ延びようとも見つけ出される気がしてくる。

「ならば君はタルタロスと徹底抗戦をするつもりなのかね？君はタルタロスに勝てるというのか？原初神ですらない君が勝てるとは思えないがね…」

「だが、勝てる可能性がないわけではない。それにタルタロス以外にも同盟を結んでいるエロスもいる。タルタロスからは逃れられる可能性はあっても奴だけには逃れられる可能性は万一にも無い。なぜならば奴と私は繋がってるからな…」

そうだ、私はエロスと繋がっている。

奴との決着を付けない限り、私はその呪縛からは逃れられない。

「如何にエロスが強大とは言え、所詮は人だ。私達神々の及ぶ領域では無い！」

「その神ではないエロスと神であるタルタロスは対等に同盟を結んでいる。それにガイアですらも敵わなかったカオスすらも封印してみせている。それで分かるはずだ。エロスの力は神々以上のものだということがな…」

エロスの恐ろしさはガイアが認めるほどのものだ。

そして、ガイアはカオスに打ち負かされている。

それこそが私の中で引っかかっていたことだった。

「私でもそれぐらいの可能性は思いつくわけだ。ならば、ガイアとて承知しているはずだろう。そして、私がこのように反論することすらもガイアの想定内に入っていることも考えられる」

ガイアは私を取り込むためにこの世界に送ったわけではない。

クロノスもガイアの思惑を理解していないのだ。

「いい加減に認めたらどうだ？貴様はガイアの思惑なんて理解していない。ただ自分の欲望のために私を利用しようとしているだけだということをな！」

「その大口は私のグランドクロスを破ってから叩くのだな。君は成す術も無く…何だ？これは！」

私を拘束している十字架に亀裂がいつの間にか走っていることにクロノスは気づく。

どうやら反撃の時が近づいてきたようだな。

「数多の上級神ですらも容易く干物になるほどに力を吸い取るグランドクロスに亀裂とは君はいったい！」

「悠長に私に交渉を持ちかけたのが失敗だったな！」

私は力を解放し、力を限界まで吸収して飽和状態となっていたグランドクロスに止めを刺す。

グランドクロスは凄まじい爆発と共に崩壊していく。

「私のグランドクロスが…ぐぅ…あああああああっ！」

クロノスはグランドクロスと連結していたことで身体に強烈な反動が襲い、身体を掻き抱いて苦しんでいる。

苦しむクロノスを前に私は両の拳を構える。

「そろそろ終わりにしよう、クロノス」

「ぐっ…舐めるな…グランドクロスを失おうとも吸収した力まで失ったわけではないぞ！」

クロノスは残像が出るほどの速度で私に斬りかかろうとしてくる。

私は掠り傷を負いながらも何とかクロノスの斬撃を避け続ける。

空中で追いかけてくるクロノスを私が必死で逃げるという形が激しく展開されていく。

「おのれっ！君は十字架に力を吸収されて満足に動けないはずだ！それなのに何故そこまで動くことができる？」

クロノスは速度をさらに上げ、大鎌で私の身体を捉えようとする。

大鎌の切っ先が私の額を捉えようとする瞬間が何故か緩慢に見えてきた。

今度こそ伝家の宝刀を成功させるぞ！

「馬鹿な…」

「とったぞ！クロノス…」

私は両手を合わせてクロノスの斬撃を受け取めた。

今度こそ真剣白刃取りを成功させることが出来たのだ。

「くっ…力を吸収されても尚動ける程の生命力を持っていることは認めるとしても、それ以上の速さを持って私の攻撃を受け止めるとは有り得ない！」

「現実に有り得ているのだ！まずは現実を認めてから考えることを推奨するぞ！クロノス！」

私は蹴りをクロノスの腹部に喰らわせ、さらに回し蹴りを繰り出してクロノスを弾き飛ばしていく。

クロノスは地上に降り立ち、地面に膝を付いて蹲る。

「ぐふっ…私は…一体…誰と戦っているというのだ？」

私もまた地上に降り立ち、蹲るクロノスを見据えた。

「クロノス…」

「ガイア様は…君の中の…何を求めているのだ？」

クロノスは大鎌を杖にして立ち上がり、私を睨み付けていく。

「それはガイアにでも聞いてくれ」

「君は一体何者だ！答えろ！ロスト！」

クロノスは激高しながらも駆けつけて大鎌を振り回してくる。

攻撃が大降りになり、回避するのは容易くなっている。

だが、それ以上に形振り構わないことから一撃一撃の威力がさらに向上してきている。

油断していたら一撃の下で切り伏せられてしまうな…。

「君は私の理解を完全に越えている！だからなのか！だからガイア様は君を求めるというのか！」

「そんなことを聞かれても私にはさっぱり分からん！だが、一つだけ言えることがあるぞ！」

私が繰り出した拳とクロノスが振り下ろした大鎌が激突する。

爆発音と共に拳からは血飛沫が上げ、大鎌は硝子のように砕け散っていく。

「うぐっ…君は一体…何者だ！」

「答えてやろう…」

血に塗れた拳をさらに握りしめ、力を溜めていく。

「私は馬鹿で臆病な…」

黄金の拳よ！

「元平民その他の…」

唸れ！

「ロストだ！」

黄金の拳がクロノスの溝にめり込む。

「ぐふぁああっ！」

クロノスの吐血が私の顔に掛かっていく。

さらに残った片方の拳にも力を溜めていく。

これが…。

……。

『エル？私のことを言ってるのですか…私は平気です。陛下のお手を患わすことは…うっ…』

……。

もう片方の拳もクロノスの溝にめり込ませていく。

「ぐほぉあああっ！」

血がさらに私の身体に降り注いでくる。

「これがエルの分だ…」

「ロ…ス…ト…」

私は気を失って寄りかかってきたクロノスを受け止めるのだった。

……。

……。

……。

……。

…。

「君には完膚無きまでに負けたよ…」

地面に横たわっていたクロノスが目覚めたときの最初の一言が自らの敗北宣言だった。

最初に逢った頃のような不敵な笑みではなく全てから解放されたかのような満足げな笑顔を浮かべている。

纏め役のクロノスが敗北宣言したことで、ようやく本当の意味でティターンとの戦いが終結したわけか…。

全く持って長く、本当に長く苦しい戦いだったな…。

「ガイア様が何故君に執着しているのかは今でも分からない。けど、もうそんなことはどうでもよくなったよ…」

クロノスは立ち上がって私の元に近づいてくる。

思わず後ずさりそうになったが、敵対心が無いことから近づいてくるクロノスをただ見つめていた。

「君の言う通り、何者でもあろうと私を完膚無きまでに打ちのめし、心を鷲づかみにした者であることには変わりない」

クロノスはしゃがみ込み、私を抱き締めてきた。

私の身体がクロノスの巨乳に挟まれていく。

「陛下、ううん、ロスト。私を君の女にして欲しい…」

「クロノス…」

正直、彼女の申し出は非常に魅力的だった。

だが、タルタロスとアビスの件が私の中で重くのし掛かっている。

戦闘の最中にクロノスの口付けを受けたときにアビスの嫉妬だと思える鼓動の音が響いてきた。

だから、ここでクロノスを抱けば、さらにアビスを刺激することになってしまう懸念が付きまとっているのだ。

「クロノス、私は…」

「既に君はタルタロスの目に届く場所で沢山の女と交わっている。だから、今更取り繕っても仕方ないよ。だから…ちゅ」

クロノスは私の顔に自らの熱く濡れた唇を包み込むように押しつけてきた。

「ちゅちゅぱ…もう遅いのさ。彼女は既に目覚めているよ。だから、開き直って楽しまないと損だよ…ちゅううっ」

彼女はもう我慢出来ないと言わんばかりに激しく私の顔を唇で吸ってくる。

抵抗しようにも巨乳と背中に回されている腕で身体が包囲されていて動けない。

「むぐっ…タルタロスが目覚めてしまえば…厄介なのだろう！こんなことをしてる時では…むごっ！」

私の口、いや顔が再びクロノスの唇に塞がれてしまう。

「ちゅぱ…こんなこととは酷いね。でも、こんなときだからこそ私は君と絆を深めていきたいのだよ。これは必要な性交なんだ。だから私に全てを任せて欲しい」

まだ出会って日が浅いが、クロノスは危機的状況の中で冗談を言ったりはしない女だということは何となく分かった。

それでも…。

「私は、いや、私達ティターン神軍は全力で君を守る。君が大切にしているエクリアも…。かつてタルタロスと戦った時のガイア様と同様にね。だから、お願いだ。私を信じて抱いて欲しい…」

……。

クロノスは決して感情だけで物事を押し進める女ではない。

だから、これは彼女なりに何かを考えてのことなのだろう。

それに私だけではなくエクリアのことも守ると言ってくれた。

私は了承の意を持ってクロノスの胸を掴んでいく。

「ありがとう、ロスト。私は君の永遠の愛を誓おう…」

クロノスは抱き締めていた私をゆっくりと地面に横たわらせていく。

「ロスト、愛している…んちゅちゅぱ」

クロノスの唇が私の胸を覆い尽くし、激しく吸われていく。

私の身体は瞬く間にクロノスの竜胆色の口紅と唾液に塗りたくられてしまう。

「うぐっ…」

余りの快感に思わず身体が身悶えしていくが、クロノスはそんな私

を押さえて貪るように私の身体を舐め尽くしていく。

「ちゅぱ…ふふっ…まるで君を躍り食いしているようだ。いっそこのまま君を食べてしまうのも悪くないかもしれないね…」

「それは勘弁してくれ…」

震える私に嗜虐的な笑みを見せながらクロノスは舌を伸ばして私の首筋を舐め回してくる。

さらに彼女の大きくも病的なまでに白く儚い手が私の身体を余すところなく撫で回していく。

口の使い方といい触り方からしてクロノスはかなりの技巧派のようだ。

まだ繋がっていないにも関わらず私の男の証は弾けんばかりに欲望が溜まってきている。

「ふふっ…かなり溜まってきたね。けど、まだ耐えてもらうよ。私を散々に振り回してくれたのだからね…」

クロノスは焦らすように自分の尻や太股を男の証に擦りつけてくる。

私を嬲るつもりなのか…。

ならば、私はクロノスの胸を弄くり回すのみだ。

「んんっ…私に反撃するとは生意気だね。だったらこれでどうかな…グランドクロス」

私が横たわっている地面から十字架が浮き上がり、再び私を拘束してきた。

「何のつもりだ？」

「ふふっ…このグランドクロスは戦闘用のものでは無いから心配しないでくれたまえ。これは先ほどのものとはまた別物さ。それをこれから教えてあげるよ…」

クロノスが私の胸に指を這わせた瞬間に途方も無い快楽の渦が全身に行き渡ってきた。

「ぬおおおっ！これは一体…」

「先ほどは痛覚を鋭敏にさせるものだったけど、これは性感を鋭敏にさせるものだよ。こんな些細な刺激でも君は乙女のように泣き叫ぶことになるのさ…」

私の身体がクロノスの指先一つで狂おしいほどの快感に苛まれていく。

「私はこれでも根に持つ女でね。いくら君を愛すると言っても屈辱を味わったことを帳消しにすることは出来ないのだよ。だから、これは私のささやかな仕返しと思ってくれたまえ」

「何て執念深い…ぬあああああっ！」

クロノスは胸元を開け、今度は巨乳を私の頭から爪先まで這わせてくる。

苦痛にも勝る快感が私の身体を打ちのめしていく。
これはもはや拷問に近い快感地獄だ。

「ふふっ…どうだい？気持ちいいけど、辛いだろう。何だか君の苦しみ顔を見てだけで私も快感に打ち震えそうだよ…れろっ」

「ぐお…っあ…ぅ…」

声にならない悲鳴を上げてしまう。

クロノスは舌先で私の胸を突き始めてきたのだ。

彼女の舌に突かれることで焼き鏝を当てられたかのような熱い快感が私の胸に伝ってくる。

『さらに苦痛の伴った快楽を君に送ってあげるよ…』

彼女の舌先が蛭の口のように開いて私の胸元に吸い付いてきた。

「ぢゅうぢゅうぢゅるぢゅる」

脳が破裂しそうなほどの甘い疼きと快楽が私の身体を貫いてきた。
血を吸われているというのにこの快楽は一体何なのだ！

『ふふっ…伝承に記された吸血鬼は獲物から血を搾取と同時に至上の快楽をもたらせるという。君は今まさに私という吸血鬼から地獄の快楽をもたらされているのだよ。嬉しいかい？』

余りの快感に返事すら満足に出来ない。

彼女は舌を押しつけたまま唇を押しつけてきた。

クロノスの唇は私の胸が鬱血するほど強く吸い付き、痛いほどの快楽が押し寄せてくる。

『良い顔だね。これで私の溜飲が下がるというものだ。さてと、そろそろ止めを刺すとしようかね…』

私は戦いの時でも味わったことが無い恐怖を感じていた。

クロノスの言う止めが何であるかは容易に想像が付く。

唯でさえ脳が焼き切れるほどの快楽に苦しんでいるというのにこの上さらに止めを刺されたら…。

「待て…クロ…ノス…お前の気持ちは十二分に分かっ…ぐおおおおっ！」

クロノスの歯が私の胸を甘噛みしてくる。

もはや問答無用なのか！

私の男の証がクロノスの女に呑み込まれようとしている。

『これで君は私の…間違えた。私は君のものになるのだったね…』

本音が一瞬垣間見えたのは気のせいではないだろう。

クロノスの女に私の男が呑み込まれ、意識が一瞬飛び、欲望をクロノスの中へとあっさりと吐き出してしまう。

『ははっ…君の熱い想いが私の中に駆け巡ってくるよ。けど、当然これだけで私は満足しない。だから…』

クロノスは唇と胸で私の身体を激しくしごきながら腰を鬼のように動かしていく。

『君を休ませるわけにはいかないわけだ。私を満足させるまで寝かせないからね…ふふっ…あははははっ！』

「ぐっ…あうあああああっ！」

私は何度も欲望を吐き出し、その度にクロノスは恍惚とした顔となってさらに激しく腰を振ってくるのだった。

もしかしてこの快楽攻撃を戦闘中にやられていたら負けていたのではないのか？

私はクロノスに為すがままにされて言葉通り手も足も出ない状態に晒されてしまっている。

いくら戦闘時以外では一兵卒以下の実力しか出せないと言っても余りにも情けなさ過ぎる醜態だ。

『はぁ…はぁ…いいよ！これを私は求めていたのかもしれない…うぅん…ああぁん…最初からこうして君を籠絡すれば…はうぅ！』

どうやらクロノスも私と同じ考えを持つに至ってるいるようだ。

もし最初からこの快楽攻撃を喰らわされていたら私はクロノスの奴隷にされていたもしれない。

クロノスが頭に血を上らせて冷静さを欠いていたのが幸運だったな…。

……。

……。

……。

……。

…。

もう一体どれだけ欲望を吐き出したのか…。

クロノスは依然として腰を振り続け、私の体液を吸い続けていた。

私の身体は既に血を大半失って木乃伊状態になってる。

もしかしてガイアの副神になれたのは絶倫だったからではないかと思えるほどにクロノスは貪欲だった。

木乃伊となっている私の上でクロノスはますます美しさを増している。

『もっと…もっと私を満足させるんだ！』

「むぐっ…」

私の下の口の中にはクロノスの舌が挿入され身体の隅々までが吸い尽くされている。

さらにクロノスは私の顔を自分の胸に押しつけて無理矢理吸わさせれていた。

『ロスト！今だけは私だけのものだ！例えガイア様であろうとも渡しはしないぞ！はあああん！』

クロノスは私を腹上死させるつもりなのか！

戦闘の時よりも遙かに脅威だぞ！

「むごぅ…もうかんべ…むぐっ！」

『君は黙って私の胸でも吸って私を満足させればいいんだ！今まで散々と焦らされたんだ…まだまだ搾り取らせてもらうよ…覚悟するがいいさ…』

クロノスは身体全体で私の身体を咀嚼するように動き出していく。

私はクロノスという食虫植物に囚われた獲物の如く延々と食い尽くされてしまう。

……。

『私も主と…』

……。

『一つになりたいよ…』

……。

『ロスト…』

……。

不意に鼓動の音と共に何者かの声が響く。

この声は確か…。

『そろそろ潮時かな。余りやりすぎると彼女が早く動き始めてしまうからね。まだ足りないけど最後に美味しく頂かせてもらうよ…』

クロノスは私の身体の骨がひび割れるのではないかというほどに身体をきつく締め付けて腰を振ってくる。

「クロ…ノス…」

『ロスト…最後は一緒に逝って欲しい…君の絆を私に刻んでくれ！』

クロノスの狂おしいほどの想いを受け取り、私は最後の力を振り絞って腰を動かしていく。

「クロノス！うおおおおっ！」

「ロストっ！」

涙声を上げながら私の頭を掻きむしるように抱き締めていくクロノス。

私とクロノスは最高潮に達する。

「あああああっ！凄い！はぁん！激しすぎる！ありがとう！ロスト！くぅ…愛してる！愛してるよ！はあああああん！」

「うおおおおおおおおおっ！」

……。

……。

……。

……。

……。

……。

…。

私はクロノスの胸に抱かれた状態で眼を覚ます。

彼女は慈愛に満ちた眼差しを向けて私の髪を撫でてくれている。

「ありがとう、ロスト。神として生まれてこれほど充実した時は無かったよ…」

「クロノス…」

クロノスは私の髪に口付けて強く抱き締めてくる。

「私達は君と絆を結ぶことで永遠になれた。約束通り、私は、私達は全力で君とエクリアを守ろう」

「恩に着る、クロノス…」

私もまたクロノスを抱き締め返す。

クロノスを味方になってくれたことで私はエロス軍の大半を掌握することが出来た。

だが、それでも怪物の女王エキドナや最強の上級神タルタロスの存在があり、依然としてエロス軍は強大だ。

それにガイアの思惑などやアパテーとエロスの動向などと気になることは沢山あるが…。

……。

『主殿…』

……。

闇に囚われし姉。

……。

『主…』

……。

奈落に囚われし妹。

私にとっての運命の双子。

エルとアビスを救い出すことが最重要事項だ。

「ロスト陛下、心配なのは分かるが、今は体力を回復させるといい。必ず私達が何とかしてみせるから…」

「済まない、クロノス…」

謝る私にクロノスは苦笑し、私を優しく抱き締めてくる。

「元々私達が原因だから謝る必要は無い。これは償いさ。だから気にすることは無いのだよ、愛しいロスト…んっ」

今はクロノスの言う通り、体力を温存する時だ。

体力が全開したら必ずエルとアビスを取り戻す。

それが私にとって歪んだ世界での最後の戦いとなるだろう。

……。

ともあれ…。

今は疲れたから眠るとしようか…。

クロノスの唇の感触を顔で感じながら私は意識を閉じていく。

……。

燃え尽きたな…。

第１１０話：オリュンポスの休日

クロノス達ティターンに案内されるままに私はある部屋へと足を運ぶ。

後ろにはエレボスことエルが付いていた。

「この部屋にエクリアを住ませています。さあ、お入りを…」

クロノスは執事のように私に一礼してドアを開けて、私に入室を促してきた。

私を王として認めたのか、ティターンや四高弟は敬意を持った態度で接してくれる。

苦労した甲斐があったと言うべきなのか…。

戦場で出会ってからクロノス達には散々な目に逢わされてしまったからな。

ティターン神軍と四高弟に遭遇してからは強姦か死闘のどちらかしか無かった気がする。

生涯あれほど弾けて戦うことはもう二度と無いだろう。

部屋の扉を開け、ベッドに横たわるエクリアを見舞う。

ベットの端には甲斐甲斐しく看病するクレイオスとコイオスがいた。

私の命令にきちんと従ってくれているようだ。

「エクリアの様態はどうだ？」

「順調に回復している…」

「最近はもう叫び声を上げなくなってきたわ…」

コイオスはエクリアに食事を介助しながら報告してくれている。

エクリアはタナトスとは違い、まだ回復の見込みがあるとのことだ。

クレイオスはエクリアをアパテーが拷問した世界と同様の体感時間が限りなく通常世界よりも遅い所で治療をしているらしい。

私がクロノス達と死闘を演じてる間にエクリアの中の時間は既に一年は過ぎていた。

「エクリア…」

エクリアは私の存在に気づいたのか笑顔を浮かべて手を伸ばしてくる。

私はその手をただ握りしめた。

……。

『主…』

……。

また、声が聞こえてくる。

もうすぐタルタロスは完全に動き出してくるのだろう。

そうなれば私はアビスと対決しなければならなくなる。

「陛下、今後はどうなされるのですか？」

「エル…エレボス…」

私の背後に影のように付き従ってくるエレボス。

エレボスは暫定的に私に忠誠を誓っているが、タルタロスが動き出せば私に敵対することになるのだろう。

「それは後で考える」

「そうですか…」

もう既にやることは考えているが、それを敢えて今言う必要は無い。

私は暫くエクリアの手を握りしめた後に立ち上がり、部屋を退出しようとする。

「陛下…」

「何だ？」

部屋を出ようとした私をクレイオスが呼び止めてくる。

「後で僕の部屋に来て…」

「分かった」

私はクレイオスと短い言葉のやり取りをして部屋を後にした。

……。

……。

…。

一人になりたいことをエレボスに伝え、私はオリュンポスの城を一人で散策していた。

元は原初神ガイアが住んでいたというオリュンポス城。

ブリュンスタッドでなし崩し的に徴兵された私が今では神の中の神と謳われた者の城を歩き回っている。

全く本当につくづくと長生きしてみるものだ。

それにしてもアーテから最強の力を授かったとは言え、余りにも出来すぎのような気がしてくる。

かつて原初神ガイアに付き従い、真神戦争で活躍した伝説の神々ティターン神軍。

ガイアから見出され上級神の中でもさらに上位に位置する神々ガイ

ア四高弟。

いずれも戦いを挑まれ、私は死闘の末に何とか勝利を収めた。

そして、彼女達の忠誠を私は勝ち取ったのだ。

ガイアの弟子であり、破壊神ガイアの後継者と言われたアーテに力を授けられたとは言え、そこまでの戦績を得られるのだろうか？

そういえばガイアは私をはぐれ神と言っていた。

さらに私は神の子であるが、元来神の子は女性のみと伝えれている中で私は唯一の男性だ。

私は神々の中で想定外の異分子だということが考えられる。

『それは分からない。君だけは僕でも完全に見渡すことが出来ないのだよ。だからこそ、僕は君に惹かれたのもある。君の事がもっと知りたい。君がどんな結末を辿るのかを知りたいと…。僕は神降ろしで君に呼ばれる以前からずっと見ていたのさ。君が喧嘩番長と名乗って、子供達と仲良く戯れていた光景や力を手に入れたが故に苦悩する君の姿を…。もっとも、きっかけはアーテだったのだけどね…』

原初神ガイアですらも私を見渡すことが出来ないとも言っていた。

私は自分がロストであればそれで良いと思っていた。

だが、状況がもはやそれだけでは許されないような気がしてくる。

自分が何者であるかを見直していかなければならないのかもしれない。

歩く回っていると、いつの間にかオリュンポス城の屋上に辿り付いていた。

「綺麗な空だな…」

「そうね…」

私の独り言に答える声が聞こえ、背後を振り返る。

ティターンで頭脳担当にして学者のレイアだった。

「戴冠おめでとうとでも言うべきかしらね。ロスト陛下」

レイアが言うと皮肉に聞こえてしまうのは何故なのだろうか。

彼女とは実験と称して散々と体液を奪われてしまった記憶はまだ新しかった。

「前にも言ったわよね。一番危惧することは自分が仮面を被っているか、そうでないかが分からなくなること。今の貴方はどうなのかしら?」

レイアの質問に応えることが出来ない自分がいた。

私はティターンとの戦いの時に確かにエロスとなって欲望のままに彼女達を犯し抜いていたのだから…。

「まあ、いいわ。それと前に頂いた貴方の体液を分析してみたのだけど、面白いことが分かったわ」

私を焦らすように一息ついて、テイアは笑みを浮かべてくる。

テイアのついて面白いことは私にとって確実に面白くないことなのだろう。

だが、聞いておかなければならないような気がしてくる。

「それは一体何なのだ？」

「教えてあげてもいいけど、後で私に体液をまた提供してくれるかしら？」

テイアは少し顔を赤らめて聞いてくる。

それぐらいならばむしろこちらから望むことである。

「もちろんだ」

私はテイアの交換条件を即答で受け容れた。

もう私はティターンの荒腰には慣れた。

むしろ一対一で丹念に楽しみたいとも望んでいるのだ。

「ふふっ、嬉しいですね。では、愛しい陛下のために教えてあげますか…」

テイアは私を抱き寄せて、その場に座る。

ティターンであるテイアは私よりも遙かに身体が大きいことから少しばかり大きい人形を愛でるように私を抱き締めていた。

私の背中にはテイアの胸が柔らかく押しつけれていて心地良かった。

「結論から言わせますと貴方の血はガイア様と酷似しています、と言いたいのですが、逆です。ガイア様の血が貴方に酷似しています…」

「訂正する必要は無いのではないか？要するに私とガイアの血が似て…突っ込む所はそこではない！私とガイアは血が似ているとは本当なのか！」

私とガイアは家族だったとは新事実だ。

だとすれば、神々の陰謀か何かで私は人間の世界に入って…。

あたふたしている私をテイアは強引に押さえ込んでくる。

「落ち着くのよ！」

「むぎゅ！」

私の身体はテイアの巨体に埋め込まれ、窒息寸前になってしまう。

「貴方は神の子なのだからガイア様と血が似ているのは当然よ。問題は貴方の場合、ガイア様が貴方の血に似ているということなのよ」

ガイアの血が私の血に似ているだと？

私の血がガイアに似ていることと同じ意味ではないのか？

「つまり原初神であるガイア様が貴方の中から生み出された可能性があるということよ」

ガイアは私の娘だったのか！

確かに私は数多の美女と交わって欲望を吐き出してきた。

しかし、ガイアは少なくとも私が生まれる遙か以前に生きながらえていたはずだ。

そして、何よりも…。

「私は隠し子はいないのだが…」

それが一番重要だ。

「生命が子を成すこととは違うわ。聖書で神は自分の姿を似せて人を造ったと言うように神もまた然り。神もまたさらに上位の神から似せて造られた存在なのよ」

「生み出したことには変わりないのではない…ぬあっ！」

テイアがいきなり舌先を私の首筋に這わせてくる。

「人の世界ではある者の血肉を培養して、複製生物を誕生させる技術があった…」

「におっ！」

舌先がくぱっと口開き、私の首筋に吸い付く。

甘い疼きと共に私の中のものがテイアに吸われていく感覚に支配される。

『神もまた己の血肉を使って下位の神を生み出したのよ』

「だが…うぅ…ガイアよりも…っ…長生きは…していないぞ…」

私は身悶えしながらもテイアに反論する。

それにしても体格に劣る私がティターン相手にこのように愛撫されてしまうと大男に蹂躙されているか弱い少女のようになってしまう。

何とか男としての威厳を示したいものだが、戦闘時以外では一兵卒以下の力なので大した抵抗が出来ない体たらくだ。

『確かに貴方はそうですね。けど、ガイア様が生きる以前にもエロスや貴方とは異なる可能性がいたのかもしれません』

「私やエロス以外の可能性か…」

私は快感に身悶えるのを忘れてテイアの話を吟味する。

ガイアが生を得る遙か昔の世界にも私の可能性が存在していたとなると真神戦争以前ということになるな…。

もしかすると実は私は原初神にも匹敵する偉い神様だったという可能性もあるわけだ。

『何を考えているのですか？私の愛撫が気持ち良くないとでも？』

テイアは若干不機嫌な口調になっていた。

不味い！

これは急いで機嫌を直させなくてはならないぞ！

「いや、そんなことは無い。テイアの吸血行為は死ぬほど気持ちいいものだぞ」

言葉通りの意味で死ぬ程の気持ちよさだということはぼかしておこう。

『嬉しいことを言ってくれますね。でしたら、もっと吸って差し上げましょう』

私の体温がテイアの舌先に奪われていく。

血をさらに強く吸われているのだろう。

『ふふっ…ロストの血は本当に美味しいです…』

果たして私は生き残れるのか…。

……。

……。

……。

……。

…。

空が悲しいほどに綺麗だった。

今、私は城の屋上で木乃伊に成り果てている。

風が吹けば飛んでいきそうな程に干からびてしまっていた。

しばらくすれば回復すると思うが、常人ならば確実の死んでいるであろう程にテイアは私の血を貪っていった。

テイアの邪悪な笑顔を見て、私は誓う。

絶対に仕返しをしてやると…。

そう思っていた矢先に新たな気配を感じ、首を動かす。

「汝、そこで何をしておるのだ？」

私を見下ろしていたのは白い肌に艶めいた漆黒の髪、妖艶なる留紺色の口紅を塗った美女プロメ。

「今までの人生を省みていたところだ…」

「干からびている所からして、大方誰ぞかにつまみ食いをされたというところか…」

私の話を無視してプロメは勝手に解答を導き出してくる。

私の状態を一目見ただけで解答を導き出すとは、さすがは老成としたイアペトスの弟子というだけあると言っていいだろう。

それならば話が早い。

「仕方ない。我が汝を介抱してやる」

私が介抱してくれと懇願する前に察し、抱き上げてくれるプロメ。

性格破綻者が多いティターンの中でもプロメは数少ない良識者なのかもしれない。

「我の部屋で休むと良い」

木乃伊と成り果てている私はプロメの部屋へと運ばれるのだった。

……。

……。

…。

「汝ならばもう暫し経てば全快するであろうが、それまでここでくつろぐとよい」

プロメは私をベッドに横たわらせ、優しく私の頭を撫でてくる。

オリュンポス城に囚われて以来これほどまでに優遇してくれた女はいただろうか？

思わず涙が零れそうになってきた。

そういえば、クロノスの輪姦地獄の中でもプロメ等が乱入したお陰で私は体勢を立て直すことが出来たことを思い出す。

クレイオスとコイオスを除けば、プロメに一番恩恵を受けていたような気がする。

「感謝する、プロメ」

「気にすることはない。汝は我等の王だ。臣下が王の介抱することは至極当然のことであるぞ」

しかも私を本当に王として立ててくれている。

臣下らしい態度で接してくれたのはプロメだけだろう。

「しかし、汝にも落ち度がある。もう少し毅然とした態度で接せねば侮られてしまうぞ」

「面目無い」

プロメは目を細めて私の胸ぐらを掴んでくる。

「臣下に容易く謝罪してどうする！確かに汝に落ち度があると言え

ど何らかの形で体裁を保つのもまた王の在り方であるぞ！」

良識者であるが些か厳しそうな気がしてくる。

エクリアとはまた違う方向性で口うるさそうだな…。

「今こうして我も汝に無礼な態度で接している。ならば、王である汝は我を罰さねばならぬ！さあ、我に罰を与えるのだ！王よ！」

……。

あの、どのような罰を与えれば宜しいのでしょうか？

さっぱり分からんぞ！

いきなり怒ったと思えば、今度は罰を与えろなどと訳が分からん。

説教地獄を喰らわせるエクリアの方がまだ分かりやすい気がしてくるな…。

とりあえずプロメが私に王としてもっと威厳を持てと言いたいことは分かった。

「罰とは一体何をするものなのだ？」

とりあえず罰の定義について学ばねばな…。

プロメは私の質問の何故か肩を震わせていた。

何か笑える程に可笑しいことを言ったのだろうか？

「プロ…」

「愚か者がっ！」

プロメの怒声に一瞬城が揺れたのではないかと思った。

いや、実際城が揺れたのだろう。

部屋の壁に僅かながら亀裂が走っているのが見えた。

「その程度のことは自分で考えろ！」

「済みません…」

……。

「だから、謝るなと言っておろうが！」

……。

何だか腹が立ってきたぞ…。

分からないことを聞いて怒られて、謝ったらまた怒られて…。

どうすればいいのだ！

「さあ、さっさと我に罰を…」

「やかましい！プロメの話は全く分からん！いいから教えろ！これ

は命令だ…」

命令するのは余り好まないが、それ以上に面倒事を切り上げたい思いが強い。

もう身体も回復しつつある今、長居は無用だ。

私の言葉にプロメは唖然としたのか、やがて頭を垂れてくる。

「ははっ！申し訳ありません！しかし、それで宜しいのです。先ほどのような強きな態度を臣下にもう少し示すべきなのです、陛下…」

プロメは臣下らしい恭しい態度で私に説いてくれた。

もしかしてプロメは私を態と怒らせることで上に立つ者としての態度を促すようにしたのだろうか？

「さてと陛下、体調も回復していると見受けられますが、肩慣らしに我と手合わせをどうだ？」

「いや、私は実は潜在的に病を患っているからまたの機会に…」

プロメの求めを無視して立ち去ろうとした矢先に逞しい腕が私の首根っこを掴んでくる。

「待たれよ。ほほう、病を患ろうてはおらん様子に見えるのだがな…」

「気のせいだ…」

私はプロメを振り切って逃げようと足を動かすが、首根っこを掴まれているため不可能だった。

「ええい！いいから我に付き合わぬか！鍛錬も王足る者の責務であるぞ！」

「喧しい！私は鍛錬なぞにつき合わないぞ！」

途端に私の首根っこを掴んでいた手が放れる。

振り向くとプロメが何かを我慢しているかのように涙目になっていた。

「汝は我のことが…嫌い…なのか？」

「いや…それは…」

プロメは涙を流す勢いで震えた声を出してくる。

これは新手の精神攻撃なのだろうか？

私にどうしろというのだ？

「陛下…」

「うっ…」

……。

もはや、抗えないのか…。

「分かった。鍛錬しよう…」

「そうか！付き合ってくれるのか！嬉しいぞ、陛下！」

プロメは溢れるばかりの胸で私を抱き締めて喜びを表現してきた。

久々に頭蓋潰しが炸裂されられたか！

私は窒息するから抱擁を解けと言わんばかりにプロメの腕を何度も叩く。

だが、私の意図とは裏腹にプロメはますます力強く抱擁してきた。

「さすがは我が見込んだだけはある！我は汝を誇りに思うぞ！」

「むぐぅ！」

このままでは圧殺されてしまう！

火事場の馬鹿力を発揮しろ！

「ぬおおおおっ！」

プロメの殺人抱擁を無理矢理振りほどいて私は後ろに下がった。

そんな私をプロメは獰猛な笑みを浮かべて、いつの間にか手に持っていた剣を投げ渡してくる。

「早速鍛錬をするわけか。汝も気が早いものだな！」

「そんなつもりは…ぬおっ！」

プロメは魔力で剣を生み出して斬りかかってくる。

私はプロメの斬撃を受け取った剣で受け止める。

良識者ではあるが、かなり苛烈な性格のようだな。

「待て！話を聞け！私は…」

「決闘の最中に言葉はいらん！剣のみで語るがよい！はあああああっ！」

とにかく決着を付けない限りは話し合いは無駄だということなのか！

全く厄介なことだ…。

……。

……。

…。

暫く剣を打ち合って満足したのかプロメは汗を拭って私に満面の笑みを見せてくる。

「楽しかったぞ、陛下。それにしても汝は剣よりも素手での戦いの方が慣れておるようだな」

私はプロメと戦ってる最中に剣を使っての戦いが面倒になり、途中で素手で戦った。

「武器が無くなった時のことを思えば、素手が良いと思うが獲物を使う戦いも慣れておいた方が良い。それによって戦う術が広がるし、戦術を練る余地が出てくる」

プロメは教師が生徒を導くように私に戦いの心構えを説いてくれた。

実力では私の方が勝っているが、経験に置いてはプロメの足下にも及ばないことから傾聴に値するだろう。

「陛下、汝は多分今までの中でも最大級の敵と立ち向かうことになる。我等とは比較にならない程の強大な敵とのな…」

「プロメ…」

彼女の瞳に私の戸惑う姿が映り出す。

プロメは私に近づいて、抱き寄せてくる。

「強くなれ、誰にも負けないほどに強く…」

先ほどの殺人抱擁とは打って変わって優しく包み込むような抱擁だった。

まるで母親に抱かれているような気分になってくる。

思わず縋りたくなってしまった。

「確かに…強くならなければならないな」

昔のような戦場で逃げ回っていた頃の自分ではない。

地位も名誉も要らなかった私が今では女神達を統べる王になってしまっているのだ。

私はただ酒池肉林の主になりたかっただけだったというのに…。

「その意気だ。期待しているぞ、陛下…ちゅ」

プロメは私を抱き上げて唇を顔に押しつけてきた。

「ちゅぱ…陛下、我にもテイアと同じく汝の命の液を与えてくれないか？」

「私もお前を欲しいと思っていたところだ」

私はプロメをその場に横たわらせて、プロメは私を抱き寄せられていく。

プロメは私の身体に口付けの雨を降らせてきた。

全身にプロメの唇の感触を味わいながら、プロメの法衣を脱がせて掌に収まりきらない胸を揉みほぐしていく。

「ちゅぷ…はぁ…陛下…もっと我の胸を…ちゅぱ…乱暴にしてくれてもかまわん…あむっ！」

「うっ！」

プロメは私の身体を乱暴に甘噛みしながら自らの胸を押しつけてくる。

快楽で失いそうになる正気を必死に止めながら、元気になった男の証でプロメの女を貫いていく。

「はぅ！陛下…ロスト！」

「プロメ！」

私とプロメは互いに激しく求め合ったのだった。

……。

……。

……。

……。

…。

「美味しかったぞ、陛下…」

「そ、そうか…良かったな…」

艶めいた顔をして起き上がったプロメとは対称的に私はまたしても骨と皮だけに成り果ててしまっていた。

せっかく回復したというのに…。

プロメは私に手を差しのばして、立ち上がらせてくれる。

「また、こうして汝と剣を交えた後に身体も交えたい。これからも宜しく頼むぞ。我の愛しいロスト…ちゅううっ」

皮が剥がれるかも知れないほどの力強いプロメの唇の吸引を顔にしばし受けた。

「ちゅぼっ！では、また後ほどな」

プロメは私の身体の至る所に口紅の跡と吸引の痣を残して去っていった。

自前の手鏡を取り出して、自らが重病人のようにやつれている姿を確認してため息を付く。

「歩きながら体力回復させるか…」

その場に留まってしまえば、いくらでも標的になりそうな気がする。

さてと、何処に行って何をしたらいいやらか…。

私は宛もなくオリュンポス城を散策するのだった。

そして、辿り着いた先は礼拝堂だった。

神が住む城なのに祈りを捧げる場所が存在するとはな…。

それにしても気になるは私の姿に似た人物が磔になっている銅像が祭壇にあるのだが、ガイアの趣味なのか？

祭壇で傅いて祈りを捧げている女がいた。

「あれ？陛下ではありませんか。何をしているのですか？」

私の気配に気づいたのか女は立ち上がって振り向く。

灰色の法衣に銀色の鎧を纏い、青褐色の口紅を光らせ、青色の髪を肩まで伸ばしている美女。

ヒュペリオンの弟子である少し気が弱いが食い意地が張っている女神セレネだった。

彼女とはティターンとの総力戦で交わった中でヘリオスとエオスと三神で遭遇したことがあるが、一神で会ったのは初めてだ。

「何に祈りを捧げていたのだ？」

「ガイア様の想い人である神です」

私は磔になっている私に似た銅像を見る。

もしかしてガイアの想い人とはこの銅像の元になった者なのだろうか？

「ガイア様が原初神の座につく以前に存在していた偉大なる神、初代原初神です」

初代原初神だと?。

「その神の名前は何だ?」

「分かりません。初代原初神でガイア様が愛した御方ということしか知りません」

セレネは何処か潤んだ目で私を見つめながら話してくる。

何だか嫌な予感がしてきたので早々に話を切り上げて去った方がいいかもしれない。

「そうか、祈りの邪魔をして悪かったな。では、これで…」

「待ってください!」

背中に柔らかい物が押しつけられる感触を感じる。

背後からセレネに抱き締められてしまった。

「貴方様はどこかあの銅像のような神性を感じさせます。もしかして、ガイア様が愛した初代原初神の生まれ変わりなのかもしれません。だから、ガイア様は貴方を…」

「生まれ変わりかどうかはともかく今の私はただのロストだ。それ以上でもそれ以下でもない」

もしかすると初代原初神と私の間に何か因縁があるのかもしれない。

これでガイアに聞くことがまた一つ増えたわけか…。

「ごめんなさい、ロスト様。私ったら何て不敬なことを…」

私の背中でセレネが震えているのが感じられる。

本当に申し訳なく思っているのだろう。

食い意地がはっている以外では彼女もまた良識者なのかもしれない。

「気にしなくてもいい。それよりももう一つ聞きたい。ガイアは何代目の原初神だ?」

「三代目です」

三代目か…。

ならば、ガイア以前に原初神についていた神がもう一神いたということになる。

それもついでに聞くとしよう。

「二代目は誰だ?」

……。

セレネは沈黙し、身体を小刻みに震わせていた。

言い辛いことなのだろうか?

「二代目はだ…」

「タルタロスです…」

……。

「もう一度言ってくれ」

「タルタロスです」

……。

二代目がタルタロスだと？

だったら、ガイアは当時原初神だったらタルタロスに戦いを挑んでその地位を奪い取ったということなのか…。

「真神戦争が勃発した回数は三度。一度目は混沌とした神代の統一を目指した戦い、二度目は初代原初神とタルタロスの両者の軍勢が激突した戦い、そして、最後は原初神タルタロスとティターン神軍と四高弟を初めとしたガイア様の軍勢が激突した戦いでした」

二度目と三度目の戦いの経緯から初代原初神からタルタロスに成り代わっている。

これはつまり…。

「初代原初神はタルタロスに殺されてしまったのです。三度目になる第三次真神戦争はいわば愛する者を失ったガイア様による復讐戦争でもありました…」

まさか私に似た初代原初神がタルタロスに殺されていたとは…。

震えを感じてくる。

これはセレネの震えではない。

私自身が震えてしまってるのだ。

「初代原初神を殺したタルタロスにどうやって勝つことが出来たわけだ？」

初代原初神はガイアよりも偉大で強大な神だとすれば、それを殺したタルタロスの力もまた甚大だろう。

普通に考えれば、ガイアがタルタロスに勝つ見込みは無いと思うのだが…。

「単純なことです。タルタロスとの戦いで私達ティターンと四高弟、その他の多くの神々を総動員させて打ち勝ったのです。タルタロスは確かに強大でしたが、初代原初神との戦いで軍勢を全て失っていましたから…」

「つまりタルタロスは強大だったが、一神であったことから幾多の神々の協力を得て何とか打ち倒したわけなのか…」

私の言葉にセレネは重々しく頷く。

「ガイア様の復讐という大儀だけではありません。あのままタルタロスを放置していたら三千世界全てが奈落に呑み込まれてしまうところだったのです。だから、全ての世界の存亡を賭けた戦いでもあ

りました…」

タルタロスはこの世界の私を殺したことで強大だと思ってたが、まさかそこまで強大だったとはな…。

初代原初神を初めとした多くの神々を殺した強大無比なる神タルタロス。

私はそんな規格外の敵に挑もうとしているのか…。

「恐いのですか？ロスト様…」

「セレネ…」

セレネは震えている私を労るように優しく抱き締めてきた。

「ガイア様も当時はタルタロスに恨みを抱きながらも恐れていました。それでも勇敢に戦いを挑み、打ち勝つことができました。何故でしょうか？」

私を抱き締めるセレネの腕が僅かながら強まるのが感じる。

まるで自分の存在を誇示するかのように…。

そうか…。

「仲間がいたからか？」

「正解です。ご褒美に私が慰めてあげますよ」

セレネは私を押し倒して、唇を顔に押しつけてくる。

油断してしまったが、悪い気はしないのは何故だろうか？

「ちゅぱ…ロスト様には私達がついています。だから、ご自分の信じるままに進んでくださいませ…んちゅ」

セレネは私の顔に何度も唇を押しつけ、舌を出して首筋に吸い付いてくる。

結局はセレネのご馳走にされてしまう羽目になってしまったが、良い言葉を聞いたのだ。

それに快感が得られるし、体力は自然に全快するのだから特に問題があるわけでもない。

膨張した男の証を叩き込んでセレネをよがらせることにした。

『はぅううっ！やっぱり良いことを言うべきものですね！もっと私のご褒美を受け取ってください！ロスト様！』

むしろセレネがご褒美を私から受け取っているような気がするが、言及しないでおくとしよう。

私もご褒美を受け取っていることには変わりはないのだからな！

「ちゅぱ…ロスト様、美味しいです！もう私だけのものにしたいぐらいに…ちゅぷちゅぱちゅううっ！」

セレネは舌先で吸うのを止めて、唇でひたすら私の身体に吸い付い

てきた。

吸い付かれる度に脱力感を感じてくるが、もしかして精気を唇を通して吸っているのか！

男の証からも欲望以外にも人として生きる活力を吸われているような気がしてくるぞ！

「ちゅううっ！んちゅ！ちゅぱ！もう今晩の食事はロスト様で決まりです！もう逃がしませんよ！ちゅううううっ！」

「ぐっ…セレネ…」

やはりセレネはティターンで一番の大食らいだった。

ただでさえプロメに散々と吸い付かれてしまった身体にセレネが食い散らかすように貪ってきて少し身体が痛い。

だが、その痛みも快感に変わってしまう。

これもセレネの力なのだろうか。

まあいい。

タルタロスとの戦いの心構えを教えて貰えたのだ。

セレネのご褒美を限界まで楽しむとしよう。

「むちゅううっ！食べちゃいたいぐらいに愛してます！ロスト様！んちゅううっ！」

私の身体が無事に持てばいいのだが…。

……。

……。

……。

……。

……。

……。

……。

…。

「ちゅぱ…ろふろはま…おいひいれふ…ちゅるちゅる…」

「がほっ…」

寝ても尚私の身体に吸い付いてくるセレネ。

こうなってしまえば、生理的に満腹になるまで私の身体から離れようとしないだろう。

まるでセレネという寄生虫に取り憑かれてしまったみたいだ。

つくづくセレネとは戦場で出会わなくて良かった。

もし、出会っていたら呪いのように取り憑かれてしまって死ぬまで搾り尽くされていたかもしれない。

とにかく身体に寝ながら吸い付いているセレネを引きずってでも寝室に戻らなければな…。

他の女に見つかったどうなることやらか…。

「セレネ、ここで何をしていたのですか！あれ？ロスト様ではありませんか！どうしたのですか？」

「本当だ。ロスト様、ここで何してたんだ？それに…何でセレネがロスト様の身体に吸い付いてるんだよ…」

セレネと同じくヒュペリオンの弟子であるヘリオスとエオスに鉢合わせてしまうとは…。

「礼拝堂に寝ていたセレネを起こそうとしたら取り憑かれてしまったのだ」

私は嘘を言って、この場を去ろうとする。

何だか猛烈に嫌な予感がしたからだ。

「ロスト様、それは嘘ですね…」

ヘリオスは目を光らさせて私を睨んでくる。

何故、いきなり嘘が看破されてしまったのだ？

「身体中にセレネが吸い付いた痕が残っていますよ」

……。

身体中にはセレネの青褐色の口紅が至る所に塗りつけられている。

まさに反論の余地の無い動かぬ証拠だった。

「要するにセレネは自分だけでロスト様と楽しんでいて疲れて寝込んだこうなったってことか？」

「その通りです、エオス。私達は三位一体自分の者は皆の者でしたのに抜け駆けとは許し難いですね…」

礼拝堂の出口を塞ぐようにヘリオスが近づいてくる。

ヘリオスの目は凄まじい怒気に満ちていた。

思わず後ずさろうとしたところ、後頭部に柔らかい物が当たり、後ろを振り向くと獰猛な笑みを浮かべているエオスがいた。

「やっぱ俺達三神は平等に与えないといけねえよな…れろっ」

後ろから羽交い締めにして私の首筋を舐めてくるエオス。

「同感です。不公平は良くありませんよ、ロスト様…ちゅ」

ヘリオスは正面から抱きつき、お仕置きだと言わんばかりに唇で私

の顔を挟み込むように啄んできた。

「ちゅる…ろふろはま…」

セレネは今だに私の身体に取り憑いていた。

「れろっ…へへっ…覚悟しろよ…」

「ちゅぱ…ふふっ…往生してくださいね…ロスト様…」

二人に挟み込まれるように押し倒されて、貪られることになってしまった。

これが酒池肉林の主としての宿命なのか…。

だが、悪くはない。

こんな宿命ならばいくらでも受け容れるぞ！

三神の魅惑的な肉体を私は存分に堪能していった。

……。

……。

……。

……。

……。

…。

礼拝堂の中で私は三神の肉体に包まれながら横たわっていた。

……。

……。

…。

『主…ロスト…私も…私も…』

……。

……。

…。

そろそろアビスが痺れを切らせるときが近いのかもしれない。

彼女が本格的に動き出したときが、私にとって生涯最大の戦いを迎えることになるだろう。

この世界の私は既に彼女の手によって殺されてしまっている。

だが、私は絶対に殺されたりはしないぞ。

必ず生き延びてみせる。

そして、必ずアビスを救い出す。

……。

とりあえず…。

……。

燃え尽きたな…。

第111話：Fantasy Overture

私はいつの間にか見渡す限り真っ白の世界の上に立っていた。

ここは何処なのだろうか？

私は何故ここに立っているのだ？

『お願い…もし…私を…殺して…』

疑問が尽きない中で透き通るような美声が世界に響き渡ってきた。

私に話しかけてくる者は誰だ？

『私が解放されてしまえば…もう誰にも止められない…あの御方を取り込まない限り…』

あの御方とはいったい何者だ？

白の世界に人の輪郭が見えてくる。

純白の法衣に王者が纏うような絢爛豪華な黄金の鎧を纏わせた戦乙女。

私の頭二つ分高い背丈に褐色の肌、燃えるように紅い髪に青紫色の口紅を塗った絶世の美女。

何処か儚げで今にも消えてしまいそうな雰囲気を漂わせており、同時に完成された女の色香を放つ淑女。

その姿には見覚えがあった。

いや、見覚えどころではない。

私の近しい女であり、旦那様と呼んで慕ってくれた掛け替えの無い大切な人。

「お前は…タナトス…なのか？」

目の前の女性はタナトスと瓜二つだった。

だが、本当のタナトスはもう…。

『私はタナトスではありません。それは遥か先に生まれ出た子孫の名…』

目の前の女性は自分はタナトスではないと否定してきた。

確かに私の知っているタナトスはお世辞にも目の前にいる女性のような淑女のよ雰囲気ではない。

気が狂ってしまったタナトスと比較しても目が余りにも凛とし過ぎているように思える。

それにタナトスのことを遥か先の子孫だとも言っていた。

要するにこの美女はタナトスのご先祖だということになる。

タナトスのご先祖ということはヴァルキリアの…。

……。

まさか、この美女の正体はもしかすると…。

「お前は…カオス…ヴァルキリア…なのか？」

『はい…私はカオス・ヴァルキリアです…ロスト様…』

私の問いに美女は笑顔を浮かべて返してくれた。

やはり、タナトス似であることから何となくそうではないかと思ったのだが…。

そういえば私はまだ名乗っていないはずなのにカオスは私の名前を呼んでいた。

「なぜ、私の名前を知っているのだ？まだ名乗っていないはずなのに…」

『私はいつでも貴方のことを見ていました。貴方はあの御方と似ているのですから…』

また、あの御方という言葉が出てきたな…。

あの御方はどうやら私と似ているらしいようだ。

それで思いつく者はもはや一人しかいない。

「それほどまでに私はエロスと似ているというのか…」

『はい…考え方は違いますが、魂と言えばいいのでしょうか…ロスト様とエロスの魂は驚くほど類似しています…』

エロスに造られたピテスもまた私とエロスは似ていると言っていた。

魂が類似しているということは何らかの形で繋がりがあるということなのだろうか？

ガイアを生み出し、二代目原初神となったタルタロスに殺された初代原初神の存在。

テイアが言っていた私とエロスとは異なる可能性を持つ存在が鍵となっているのかもしれない。

『貴方はエロスとは違います…それはエロスの妻だった私が保証しますよ…ロスト様…』

「確かにエロスの妻だったお前に保証されれば心強いものだ」

私は笑みを浮かべてカオスの言葉に応える。

それにしても彼女は本当にあの第一次聖戦を引き起こして世界を恐怖に陥れた女傑なのか？

とてもではないが、そんな恐ろしいことをする女には見えないのだが…。

『大体ロスト様が疑問に思うことは分かります。こんな冴えない私が本当にあの恐ろしい聖戦を引き起こすことが出来るのかというこ

となのでしょう？』

自分で冴えない女だと自称するのはどうかと思うが、敢えて言及するまでもないだろう。

カオスは悲しげな顔を見せて俯いてくる。

『けど、事実です。私はエロスに愛されたいと思う一心でこの世界の男を虐殺していったのです。私はもう罪を償うことすら出来ません。出来るのはこうして永遠の牢獄に身を委ねることのみ…』

自分の罪を償いたい想いが私の中に伝わってくる。

カオスがしてきたことは許されるものではない。

だが、カオスがただエロスに愛されたいがために凶行を及ぶような女性には見えなかった。

カオスが狂わざるおえなかった何かがあるはずだ。

「私にはお前がエロスに尽くすためだけで世界を混沌に陥れるような恐ろしい女には見えない。何か訳があるのではないのか？」

『それについては今は答えれません。ですが…例え理由があるにせよ、私の罪は消えません…』

カオスは沈痛な面もちで私の問いに答えようとはしなかった。

理由が何で有れ、とりあえずは訳ありで凶行に及んだということは確信する。

それよりも私はカオスに手を伸ばしていく。

『ロスト様？』

「私はお前が…欲しい…」

……。

いきなり何を口走っているのだろうか？

宿敵とは言え、エロスの妻になっている女性を私は口説いてしまっている。

私ははいわゆる寝取りを敢行しようとしているのだろうか？

『私は…一応エロスの妻なのですが…それでも私を欲しいと言ってくださるのですか？』

「そうだ。私はカオスのことが欲しいと思っている」

クロノス達の情事以来なのだろうか？

私はもはや自分の欲望を抑えれなくなってしまっている。

やはり私はエロスのもう一つの可能性であることが思い知らされてしまうが、止められないのだ。

「お願いだ。私をエロスの次の二番目の夫だと認識してほしい。お前が欲しくてたまらないのだ」

いわゆる女性でいう側室でも構わないということだ。

だが、私は勿論側室の現状に甘んじるつもりは毛頭無い。

宿敵エロスを倒して、正室の座を射止めるつもりでいる。

「カオス！」

『きゃあっ！ロスト様…』

私は無理矢理カオスを抱き寄せるが、カオスは抵抗らしい振る舞いを起こさない。

『駄目です！ロスト様！私は一応人妻なのです！こんなことをしてしまえば貴方にも…』

カオスの顔を横に振って嫌がる姿は男の嗜虐心を大いに誘っており、襲ってくださいと言わんばかりの雰囲気を醸し出してる。

これは男を破滅に導くような天然の魔性の女だと思った。

儚げで成熟した人妻であるカオスは余りにも人外な魅力を持っている。

嵌ってしまえば全てが終わりそうな予感、もしくは私の生存本能が危険を告げてきたのだ。

「無理強いして済まなかった…」

私が離れようとした所をカオスが突然両腕を回して私を拘束もとい抱擁してきた。

『いいえ…私が悪いのです…だから…私が御奉仕を致します…んちゅ』

カオスは白の世界の中で私を押し倒し、顔に口付けの雨を降らせながらも服を脱がせにかかってきた。

私よりもカオスの方が遙かに乗り気でいると思うのは果たして気のせいなのだろうか？

『ちゅぱ…エロスと同じ…久しぶりの精気ですね…』

カオスは男の証を自分の女の中へと呑み込もうとしていく。

私よりも寧ろカオスの方が俄然積極的だった。

「うぐっ…」

カオスの中は優しく包み込むようでいて強烈な締め付けもある柔と剛が合わさったものだった。

『ごめんなさい…もう我慢できない！ああん！』

「ぐああっ！」

多分これは夢の中の出来事だ。

それなのにこの感触は生々し過ぎるぞ！

タナトスとほぼ同じ容姿をしたカオスが放つ鬼のような荒腰は心身共に堪える快楽だった。

『はぁ…はぁ…どうして私はロスト様に出会わなかったのでしょうか…もっと早く出会っていれば…私は…はああん！』

「あがぅ…」

早く出会っていたら、とっくの昔に腹上死となって冥府へと旅立っていたかもしれない…。

とにかく体力が持つまで鬼のように激しい快楽を受け容れることにしよう…。

……。

……。

……。

…。

『申し訳有りません…久しぶりの精気を前にしてつい…』

「そ…それについてはいい。それよりもどうしてカオスが私の夢の中に…」

げっそりとしながらも私は腰の上に座っているカオスを見る。

本当にタナトスと容姿が似ていると思う。

『私の封印が解かれようとしています。貴方がいた元の世界で…』

「そんな馬鹿な…」

カオスはエロスの力によって封印されていたはずだ。

何者かが封印を解こうとしているのだろうか？

「エロスはどうした？奴はお前が封印を解かれてしまえば困ってしまうはずだ！」

目の前のカオスはともかく、私が話に聞いたカオスはエロスを独占するために虐殺を行っていた。

世界に存在するもの全てを愛でたいエロスにとってはカオスは不都合な存在であるからこそ封印したのだ。

それを封印が解かれそうになっているカオスをエロスが見逃すはずがない。

『分かりません…ただ言えることはエロスが私の封印が解かれるのを黙認していることです…』

「それはいったい何故なのだ？」

カオスは沈痛な面もちで私に絶望の言葉を継げてくる。

……。

『アパテー』

……。

『エロスは何故かアパテーの行為を黙認しているのです…』

エロスの副官であり、絶大な発言力を持っていると言われている女性…。

『気を付けてください…彼女は全ての者の欲望を増大させる力を持っています…』

またしてもアパテーの名前を聞くことになるとは…。

もはやアパテーが一介の上級神であるとは思えない。

「アパテーとは一体何者なのだ?何故、奴は世界を破滅に導かせるように仕向けていく?」

『彼女は私によく尽くしてくれました…ですが、今思えば、私の下に付いたのも全てが己の目的のために他ならなかったのかもしれません…』

アパテーはカオスの意志を受け継ぎ、世界中の男を根絶やしにすることを望みとしていた。

そして、カオスの封印を解くことで人類の滅亡を押し進めている。

彼女の望みは全ての破滅なのだろうか？

アパテーは破滅を導くことを存在意義としているのだろうか？

『気を付けてください。彼女にはいくつもの顔があります。その顔の数は恐らく彼女自身すらも把握していないのかもしれません。なぜなら彼女は自分自身すらも含め、全てを欺いていますから…』

テイアもアパテーは世界の全てを欺いてると言っていた。

……。

『気を付けて。本当に恐ろしい嘘つきは無自覚に偽り、自分さえも騙すことが出来る者、素顔そのものが嘘という仮面で塗り固められてた者よ』

……。

嘘つきアパテー。

もしかするとエロスと同等に私にとって重要な存在なのかもしれない。

カオスは思案している私に微笑みかけ、立ち上がらせてくれた。

『ロスト様…私はここで失礼させていただきます…余り干渉し過ぎると封印が解ける時期を早めてしまうことになりますので…それと私以外にも貴方に面会を望む御方がいますことですし…』

「私に面会を望む者がいるというのか？」

カオスは私の問いに頷き、抱き締めてきた。

逞しい身体に反して柔らかい胸が私の頭を筒込んでくる。

『有り難うございます…ロスト様…こんな私を欲しいと言ってくれて…ちゅ』

私の唇にカオスの青紫色の唇が重なっていく。

『んっ…ちゅ…タルタロス、いいえ、貴方の想い人は私と同じく醜悪な姿と成り果てています…それでも貴方は彼女を救うつもりなのですか…』

「無論だ。アビスは私の大切な酒池肉林の構成員だからな…」

アビスが醜悪な姿になったとしたら、それは私の責任だ。

私がもう少しアビスと正面切って話し合っていれば…。

『自分を責めないでください…私は貴方との再会を待ち望んでいます…次に会う時は化け物の姿でしょうが…』

「アビスを救った後は同様にお前も助けてみせる。そして、エロスからお前を寝取ってやるぞ」

私は堂々と人妻に寝取ることを宣言してしまった。

だが、後悔は微塵もしていない。

考えてみればガイア四高弟もティターン神軍も全てエロスの軍勢にいた美女達だったのだ。

いまさら人妻ぐらいで恐れたりはしないぞ！

『楽しみにしています…どうか…私を寝取ってくださいませ…ロスト様…んちゅ…ちゅぱ』

最後にカオスは顔の至る所に口付けをし、微笑みながら消えていった。

『また…いつか…』

「近い内にまた会おう…」

カオスが消え、世界が暗転していく。

次は私に面会を望んでいる相手がいる世界へと飛ぶのだろう。

私に面会を望んでいるのは果たして誰のなのだろうか？

……。

……。

……。

……。

…。

そこはいつぞやの見たことがある風景。

星が煌めく夜空の下で桜の花びらが舞い散る幻想的な世界だった。

桜とはある東洋の国で有名な花の名前。

短い時を咲き誇り、儚く舞い散っていく花。

その木々が立ち並んでいる中で一人の女性が畏まっていた。

東洋に伝わる深紅の和服を着こなし、真紅の長髪を靡かせる妙齢の淑女。

「レテシア…」

アパテーに囚われて嬲り殺しにされてしまった女。

エルとアビスの親代わりであり、パラディスム歴代最強の頭領として慕われていた女傑。

その艶やかなる容姿はレテシアに酷似していた。

『いいえ…残念ながらそれがしはレテシア殿ではありませぬ…』

病的な程に白い肌に洋紅色の口紅と緋色の瞳が人間離れした妖しい色香を出している。

レテシアのおっとりとした口調とは似ても似つかない低音の美声。

老成とした雰囲気を漂わせ、歴戦の老兵士とも思わせる重厚な気配を醸し出していた。

「私はロストという。貴様は何者だ?何故、私の前に姿を見せているのだ?」

私はレテシアの死を看取っていないため、どのような死に様かは分からない。

だが、あのアパテーにやられたからには壮絶な姿で絶命してしまったのだろう。

『気を悪くされたのでしたら申し訳ありません。ですが、この姿は決して主レテシアの姿を真似ているわけではありませぬ…神降ろしの儀において限りなく術者と神と同調して引き合う中で術者の姿と酷似していることは珍しくもありません…』

今目の前にいる者は姿こそはレテシアに似ているものの本来の姿だということなのか。

それにしても目の前にいる女は先ほどレテシアのことを主と呼んでいた。

レテシアを主と呼ぶ者で思い浮かぶ者はだた一つだけだ。

『それがしは…ゲーラスと申す者…神降ろしにより主レテシアと契約を結んだ中級神でございます』

ゲーラス。

確か深紅の鎧に悪夢にでも出てきそうな程の恐い面をつけたレテシアの武具になっていた神だ。

そのゲーラスが私に一体何の用事なのだろうか?

『それがしが貴方様の前に参った理由は二つでございます。まず一つは主レテシアからの遺言です』

レテシアの遺言。

私は身体が震えてくるのを感じる。

アパテーから熾烈なる攻めを負っている最中で纏まられた彼女の遺言は私に何を伝えてくれるのか?

『「貴方様をお慕い申し上げていました。もし、生きていればパラディスムの頭領として迎えたい程です。ですが、もはや叶わぬ夢。ロスト殿…真に厚かましいのですが、最後にパラディスムの頭領としてではなく、一人の母としての私の願いをどうか聞き入れていただけないでしょうか?私の愛しい娘達エルとアビスを…どうか…宜しくお願いします」とこれがレテシアからの遺言です』

「確かに聞き届けた…」

レテシアはパラディスムの頭領としてではなく一人の女として母として私に全てを委ねてくれた。

言われずとも私はエルとアビスは必ず救い出してみせる。

レテシアの愛に報いるためにも…。

「もう一つの理由とは如何に？」

『もう一つは貴方様を新たな主と仰ぎ、永遠の忠誠を誓うことでございます…』

私がレテシアの力を受け継ぐということになるのか…。

特に迷うこともない、むしろ願ったり叶ったりだった。

レテシアの力を受け継ぎ、その力で必ずエルとアビスを救い出す。

『どうかそれがしを受け容れて頂けないでしょうか？』

「喜んで受け継ぐ。試練とかは無いのか？」

私の問いにゲーラスは首を横に振り、私の手を取って豊満な胸に抱き込む。

『ロスト様は上級神の中でも上位の力を誇る四高弟やティターンすらも凌ぐ実力を持っています。今更、中級神であるそれがしが試練を下すまでもないでしょう』

ゲーラスは私の手を引き寄せて、洋紅色の唇を重ねてきた。

さらに帯を解き、着物で私の身体を覆い尽くさせてくる。

『ちゅぱ…これはカオスの口紅…契約する前からそれがしに嫉妬させるとはロスト様は相当にお人が悪いですな…あむっ！』

「うぐっ…」

ゲーラスは私の身体に付いている青紫色の口紅の跡を見て憤慨したのか、身体の至る所に噛みついてきた。

噛みついた後には呪いが刻まれたかのように血の滲んだ洋紅色の口紅が痕を残している。

『憎たらしや…あむっロスト様…ですが…ちゅぱ…今だけはそれがしだけのものです…んっ…いいですね…ロスト様…んちゅ…』

ゲーラスの口付けの嵐に押されてなし崩し的に心身ともに契約を結ぶこととなった。

……。

……。

……。

…。

夢の世界のはずなのにこの脱力感はたまらなく辛いぞ…。

手鏡を見てみるとカオスとゲーラスの口紅が斑模様に塗りたくられ、骨と皮に成り果てている姿が映る。

淫魔に徹底的に搾り尽くされた犠牲者のような姿になっているな…。

『さてと、無事に契約を終えたところで如何致しますかな？ロスト様』

ゲーラスの艶やかな顔が何故か腹立たしいと思うのは気のせいだろうか？

『早くこれからの方針を決めたらどうなの？』

『そうですよ。もうそろそろ動いても良い頃ではないですか？』

いつの間にか懐かしい顔ぶれが私を取り囲んでいた。

第三次聖戦時に戦死したはずのアイリとロン。

『全く主はこれだから駄目のです。いい加減に殺しますよ』

『張り合いが無いのも考え物だね』

ティーにメイもいる。

『ここからが踏ん張り所でだぞ、ロスト…』

アレク…。

思わず涙が出てきそうになってくる。

「分かっている。ここから私の本当の戦いが始まるのだ」

私の答えにアレク達は頷き、私の手を取ってくる。

『儂等も近い内に力を貸すときがくる』

『迫り来る第四次真神戦争の時のために…』

『原初に生きる神との戦いに向けて…』

タルタロスとの決戦が近づいてきている。

今度こそは負けるわけにはいかない。

『今度は見事打ち勝つのよ。私の英雄殿』

『ロストさんでしたら必ず負けませんよ』

アイリとロンが背中を押してくれる。

『さあ、参りましょう。ロスト様…』

ゲーラスが手を差し伸べてくる。

私はその手を取り、白の世界を後にする。

……。

……。

……。

……。

……。

…。

心地よい朝だ。

身体に覆い被さっているセレネ達を押しのけて身支度と整える。

とりあえず身体を綺麗にしよう。

案の定、ただの夢では終わらなかったようで身体にはセレネ達の口紅の他にゲーラスとカオスの口紅の跡が追加されている。

まずは身体を清めねばならないな…。

……。

……。

…。

身支度を整えて、エクリアのいる部屋に向かった。

エクリアは言葉がまだ戻っていないものの確実に回復してきている。

これもクレイオスとコイオスの献身的な介護のお陰なのだろう。

「ロスト、エクリアは大分回復した」

「暫くすれば以前と同じ状態に戻れると思うわ」

彼女達には感謝してもしきれないほどだ。

「ありがとう、コイオス、クレイオス。さらに追加して頼みがあるのだが…」

「何？」

きょとんとした目で私を見つめてくるコイオスとクレイオス。

思えば初めて出会った時から友好的だったのが彼女達だった。

何故だが分からないが、何となくピテスと同じ匂いがしてくる。

テテュスもピテスの容姿に似ていたが、もしかすると彼女達はピテスの素体だったのかもしれない。

「エクリアをオリュンポスから連れ出して欲しい。その後どういった手段でもいいから反乱軍に引き渡してくれ」

「ロストはどうするつもり？」

私はクレイオスの問いに沈黙を持って応える。

これからタルタロスとの戦いを挑むための切っ掛けを作るとは言い辛い。

「タルタロスに戦いを挑むのね…」

コイオスは私のしようとしていることを察していたみたいだ。

「それは危険、タルタロスは私達ティターンとは次元が違う化け物。ガイア様ですらも二度と戦いたくない相手だと言わせた程の強大なる神」

「分かっている、クレイオス。だが、奴の中には私の大切な女性がいる。だから、逃げるわけにはいかないのだ」

昔に私ならば、命あってのものだと容易く逃げていたはずだった。

だが、私にはもはや逃げる選択肢は無いのだ。

「そう、分かった」

「けど、その代わり…」

クレイオスとコイオスが私を挟むように抱き締めてくる。

そう言えばまだこの二神とはまだ情事をしていなかったな。

私は為すがままに押し倒されていく。

クレイオスが下でコイオスが上となって横たわっている私を覆い被さっていた。

二神は私の身体を自らの胸でもみくちゃにしながら唇を痕が残るほど強く押しつけてくる。

身体に次々と水色と銀灰色の口紅が付けられていく。

「ちゅ…今までお預けされた分を…ちゅううぅ…取り戻す…ちゅぷ」

特にクレイオスの口付けは肉が剥がれるのではないかと言うほどに強く吸い付きだ。

「れろぅ…ロストは…大事な用事があるのだから…あむぅ…ちゅぱ…程々にね…ちゅるちゅる」

コイオスは控えるように言っているが、熱い舌で私を舐め溶かすのではないかと言うほどにしつこく舐め回してくる。

「うぐぅ…コイオスも…程々に…頼む…」

「当然のこと…ちゅる…私が本気を出せば……ちゅぱ…ロストは今頃…骨と皮しか残らないわ…」

コイオスは私の服を裂いて、男の証を鷲づかみにして自分の女の中に入れていく。

「ぬぐおっ！」

「それでも干からびるかもしれないね…」

コイオスは激しく腰を振るって私の欲望を搾り取っていく。

クレイオスは自らの巨乳の谷間に私の身体を挟み込んで圧殺しようとしてくる。

「僕のことも忘れないで…ロスト…れろっ」

胸に挟まれている私の頭に蛇のように伸ばしたクレイオスが舌が巻き付いて舐め回す。

私の顔は瞬く間に唾液まみれになり、胸が隙間無くへばり付いてくる。

昇天してしまいそうなほどの快楽で息が止まりそうになっていく。

「はぁん…暴れないで…あん…感じてしまうよ…」

クレイオスの魅惑的な声が鼓膜に響き、私の男の証はますます元気になってくる。

「ふふっ…元気になってるね…」

男の証の膨張に反応したのかコイオスはますます腰を鬼のように振るってきた。

「僕の胸でロストをとろけさせてあげるよ…ふぅん」

クレイオスは自分の胸で私の身体を揉みほぐすように動かしてくる。

唾液で濡れているためか、滑るように私の身体に胸が擦りつけられていく。

「気持ちいい？」

「あ、ああ…」

まさに絢爛豪華な肉の布団だ。

「そう…」

クレイオスの腕の締め付けが強まり、私の身体がますます胸の中へとめり込んでいく。

このままクレイオスの中に吸収されてしまうのではないかと思うほどにとろけそうだった。

「次はクレイオスの番ね…」

「このまま絞り尽くす…」

男の証がコイオスの中から解放され、クレイオスに向かい合うように体位変換させられる。

そして、今度はクレイオスの女の中に男の証が呑み込まれていく。

「うっ…あああん！」

クレイオスの逞しい両足が私の腰をへし折るのではないかというほどに激しく絡みつく。

「貴方の精気をもっと吸わせて…あむぅちゅぷちゅぱ」

コイオスは私の頭を振り向かせ、銀灰色の唇で私の顔を咀嚼するように吸い付いてくる。

まるで二神に食べられてしまっているような錯覚を覚えてしまう。

だが、食べられて本望だと思ってしまう程に気持ちいい。

「あああっ…ロスト！ロスト！僕の中に出して！はああん！」

「ちゅぱ…貴方を…ちゅぷちゅる…食べてしまいたい！ちゅうううっ！」

私は欲望をコイオスとクレイオスに絞り出し続けていった。

……。

……。

……。

……。

……。

…。

これでティターン神軍を全て制覇することが出来た。

その数三千二十六神。

ガイア四高弟を含めれば三千三十神。

人の一生で四桁ほどの美女と情事を交わすことは普通は有り得ない

と思う。

それでも実際に私は達成することが出来たのだ。

しかも常人ならば何百回も腹上死していたかもしれない程の壮絶な快楽地獄を乗り越えることで…。

もしかすると酒池肉林の夢が叶ったと言っても過言ではないのかもしれない。

だが、それほどの偉業を成し遂げても満足出来ない自分がいることに気付く。

おそらくエロスの影響によるものだと思われるが、それでも私の意志であることには変わりないのだ。

今後もさらなる規模の酒池肉林を求めるためにも私は生き延びねばならない。

そのためにはまず…。

『いよいよ出陣なされるのですかな、ロスト様』

背後には紅で統一された妙齢の美女が立っていた。

私はもたれ掛かっているコイオスとクレイオスをそっと横たわらせて立ち上がり、美女と向かい合う。

「コイオスとクレイオスがエクリアと共にオリュンポスを脱出したのを見届けた後に決行するつもりだ。ゲーラス」

『御心のままに…』

ゲーラスは跪いて頭を垂れていく。

戦士の休息は終わりを告げたのだ。

「エクリアが脱出したのを合図に私はエルに果たし合いを臨む」

『何処までもお供致します、我が主ロスト様…』

エルとアビスを取り戻すための戦い、すなわちこの歪んだ世界での最後の戦いが間も無く始まる。

タルタロスを倒し、モイラ達に降り掛かる脅威を全て取り除いてみせよう。

そして、元の世界へと必ず帰るのだ。

……。

第１１２話：ＥＬ

私の前にエクリアを背負ったコイオスとクレイオスがいた。

「僕達は行くから…」

「生きて再会を…」

コイオスとクレイオスは私の顔を挟むように唇を押しつけた。

「ああ…生きてまた逢おう…」

二人の唇の感触を堪能しながら私は別れの言葉を告げた。

「ちゅぱ…大好き…ロスト」

「んっ…愛してる…ロスト」

二神は唇を離し、空高く舞い上がって空間の裂け目、即ちオリュンポスの出口を潜っていった。

私の隣にクロノスとウラノスが立ってくる。

「ウラノス、エルをオリュンポス城の屋上に行くよう伝えてくれ。クロノス等は私の側に…」

「承知した」

ウラノスは一礼して姿を消し、私の隣はクロノスだけになる。

「早くも王としての貫禄が付いてきたみたいだな。あのウラノスを使いっ走りさせるなんてね」

私はクロノスの軽口に応えずに礼拝堂へと向かっていく。

精神統一するために形式的に神に祈りを捧げるのだ。

歩いている私の後にはクロノスに続いて、オケアノス、ムネモシュネ、ヒュペリオン、テミス等と続く美女の数が増えてくる。

「ひっひっひっ…いよいよいと高き神に挑むわけかね。勇気を賞賛すべきか、あるいは蛮勇を非難すべきか。選択肢に困るねえ…」

「どの選択肢を選ぼうとも俺はロスト陛下に付いていくだけだ。第三次真神戦争以来燃えそうだな…」

「夢を見るのは生者だけの特権。私としては無事に事が運べばいいと思ってるわ」

「私はまだ陛下の精気を食い足りないから絶対に事を運ぶようにしていくつもりよ」

「オケアノスはオケアニス達の編成を頼む。ムネはムーサ部隊を纏めてくれ。ヒュペリオンはイアペトスと共に弟子達を率いてくれ」

私は後ろに従っている美女達に振り向くことなく指示を出していく。

「分かったわ。また後で…んちゅ」

「承知した、ロスト陛下…ちゅ」

「分かったわ。坊や…ちゅううっ」

オケアノスとヒュペリオン、ムネモシュネもまた私の顔を包み込むように唇を押しつけて音も無く消えていく。

クロノスは布巾を取り出して私の顔を拭いてくれた。

顔が口紅まみれなれば格好が付かないための配慮なのかクロノスも従者として板に付いてきている。

「ふん、私達がロスト陛下を無事に導けばいいことよ。恐れることは無いわ」

「友達のロストちゃんのためなら何なりと…かな」

「飼い主の命に従うのみ」

テテュス、レア、ポイベ達も続いてくる。

大分賑やかになってきたようだ。

だが、景気づけには丁度良いのかもしれない。

……。

……。

…。

礼拝堂の祭壇にて私は跪いて祈りを捧げていく。

付いてきた彼女達も私に倣うように跪いて祈りを捧げる。

別に神を信仰しているわけではない。

ただ、気分を高めるための儀式のようなものだ。

ブリュンスタッドにいた頃はいつも神頼みしていたからな…。

祈るべき神は今では私の酒池肉林の構成員となってしまっている。

さらに言えば、私が神に崇められている。

本当につくづく長生きしてみるものだなと思う。

さてと、自分の中にいる神に祈りを捧げよう。

第三次聖戦時ではニュクスに囚われたアイリを救うことは出来なかった。

エリニュスとロンを犠牲にしてしまった。

それは戦場で起こったことから仕方ないと言えるのかもしれない。

だが、今度の戦いは違う。

エルとアビスを救うための戦いだ。

だからこそ、救うことが出来なければ終わりだ。

この世界の私が果たすことが出来なかったこと。

今度こそ取り戻してみせる。

私は立ち上がって礼拝堂を後にする。

テテュス達は私を追おうとはしなかった。

なぜならば、次に向かう所は私一人で行くべき場所だったからだ。

……。

……。

…。

オリュンポスの屋上に紅い鎧を纏って佇んでいる美女がいた。

「陛下…」

タルタロスの腹心であり、かつて私の運命を変えた女性。

エル・パラディスム。

彼女に出会わなければ、私はここまで辿り着くことがなかっただろう。

「エル、いやエレボス。私は貴様に果たし合いを臨む。剣を抜け」

「私は貴方様に忠誠を誓いました。それでも剣を抜けと仰るのですか？」

エレボスは金目銀目を私に向けてくる。

その瞳は僅かながら戸惑いに満ちていた。

「忠誠を誓った貴方様に剣を向けよと仰るのですか？」

「そうだ」

暫し互いの間に沈黙がもたらされる。

エレボスが縋るような目で私を見てくる。

私は不意に笑みを浮かべてしまう。

彼女のその目に私は惑わされて、ヴァルキリアの回し者になる等と大変な目に逢う羽目になってしまったのだ。

だが、それ以上に得るものも大きかった。

彼女が作る味噌汁を飲むことで家庭の団欒を知り、美女を愛することの大切さも教えてもらったのだ。

「実は先約が合ったこと思い出してな。私は貴様よりも前にある女と主従契約を交わしていたのだ。だから、貴様との主従関係は破棄する」

私は魔力を発してエレボスに敵意があることを示した。

「貴様の本当の主タルタロスを倒す。だから、その部下である貴様を倒す。それだけだ」

タルタロスの名が出てきたことで縋るような目をしていたエレボスから研ぎ澄まされた刃のような殺気が溢れ出してくる。

「陛下はタルタロス様に叛意をなさるおつもりですか？」

「如何にも…」

エレボスから魔力が発され、景色が歪んでくる。

パラディスムで歴代最強と歌われたレテシアを打ち倒し、ヨツンヘイムを滅ぼした鬼の力が解放されようとしている。

「では、私はタルタロス様に連なる闇として陛下、いいえ、ロスト。貴方を討ちます」

「エル、貴様に纏う闇を私が打ち払ってやる」

互いに魔力を開放させ、空間に歪みが生じてくる。

「火よ、土よ、水よ…」

「風よ、諸々の全てよ…」

私とエルは神降ろしの儀を発動させる。

私が降ろす神はエルとアビスを最後まで案じた掛け替えのない女が残したもの。

「「集え！我が身！神の御身とならん！」」

光り輝く空が暗雲に覆われていく。

「ゲーラスよ！降り立ち給え！」

「出でよ！アテナ！」

稲妻の雨が降り注ぎ、私のエルの脇に女神が降り立つ。

ゲーラス。

中級神で最強を誇る彼女は私と契約したことで上級神へと進化していた。

『今こそ主ロスト様の御力となりましょう…んっ』

私はゲーラスと口付けを交わして一つとなり、全身に真紅の鎧が覆っていく。

一方、エルの背後には西洋風の銀色の鎧に白銀の髪を靡かせた戦乙女アテナが降り立つ。

アテナもまた中級神であったもののタルタロスの力、すなわちエレボスの力により上級神に進化していた。

そして、エルも神を完全な姿に具現化させる程の魔力の持ち主とな

っていたのだ。

アテナはエルを愛おしげに後ろから抱き締め、銀の鎧と真紅の鎧が混じり合っていく。

互いに光を放ち、凄まじい魔力の放出により、激しい爆発が起こる。

……。

爆風が止み、煙が晴れてきた中で私とエルの姿が互いに見えてくる。

エルは無骨で夜よりも深く濃い漆黒の鎧を纏いアテナの顔を象った仮面を被って手には長槍を携えていた。

私は血を連想させる真紅の鎧を身に纏い鬼の仮面を被って手には薙刀を持っていた。

私とエルは同時に獲物を構える。

「ロスト…貴方を斬ります」

「かかってこい！エル！」

破片が飛び散る中で私とエルは空に飛び立ち、互いの刃を交差させていく。

甲高い金属音と風斬る音が無骨にオリュンポス城の空に響き渡る。

私とエルは同時に獲物を振りかぶっていく。

「血桜！」

「青嵐…」

互いに放った衝撃波がぶつかり合い、空間が軋んでいく。

「エル…」

思えばエルと過ごした時間はそれほど長くはなかった。

それでも…。

「タルタロス様に仇成す者に死を！雨露風雪乱舞！」

「ぐっ！」

エルが長槍を振るった瞬間に圧縮された水の飛礫と氷の刃の嵐が巻き起こり、鎧が砕けて私の身体に裂傷を刻みつけていく。

『ロスト様…申し訳有りません…』

「大丈夫だ。ゲーラス」

私は兜と仮面を脱いでエルを見つめていく。

彼女は確かに私に掛け替えのないものを残してくれた。

……。

『私は知っています。主殿が本当はとてもお優しいことを…』

……。

エルとアビスに出会ってなければ、私はエロスと同じ存在に成り果てていたのかもしれない。

氷と水の嵐を潜り抜けながらも私は必死にエルに向かっていく。

……。

『主殿、私は幸せです。このように主殿を世話で出来て、食事を用意して、そして、共に同じ布団で寝うることが出来て…。パラディスム家に生まれてから女の幸せを捨てたはずなのに…』

……。

私もエルに出会えたことが人生で最良の一つだと数えてもまだ足りない程だった。

血塗れになりながらも嵐を抜けて薙刀を振りかぶる。

「うおおおおおおおおおっ！」

「うぐぅ！」

振り下ろされた薙刀を苦悶の声を挙げて長槍で受け止めるエル。

私の獲物を受け止めているエルの腹に拳を叩き込んでいく。

「あぐっ！」

漆黒の鎧がひび割れ、後方へ吹っ飛んでいく。

私は薙刀を振るって吹っ飛んでいくエルにさらなる追撃をしかけようとする。

「ちっ！」

飛ばされながらもエルは追撃してくる私に穂先を向けてくる。

「絶！滅却！」

穂先から真紅の波動が放たれてくる。

波動の威力はおそらくレテシアの最強奥義である修羅雪と同等あるいはそれ以上に凄まじいものだろう。

だが、ティターンとの激戦を潜り抜けた私にはもはや有り触れた攻撃だ。

「この程度のもの、何とでもないわ！」

真紅の波動に構わず、エルに追撃を続行させる。

こんな力技など恐れるまでも無い。

私が苦手とするのは背後から突くような不意打ちを得意とする暗殺術。

すなわち元のエルが得意とした戦法だ。

「くっ！馬鹿な！」

エルは私の特攻に驚愕し、長槍を振るってくるが、私はそれを素手で鷲づかみして間合いを詰めていく。

「どうした？エル。元暗殺者にしては力技が過ぎるのではないか。寧ろ私にとっては大歓迎とも言える格好の獲物だな！」

私はエルの首根っこを掴んでアテナの仮面にむかって頭突きを炸裂させる。

「あぐぁああっ！」

エルはひび割れたアテナの面を庇うようにして手から魔力波を放とうとしてくる。

だが、私はいち早く腕を掴んで矛先を反らしていく。

魔力波が明後日の方向に放出される中、私はさらに頭を振りかぶってアテナの面に向かって頭突きを喰らわせる。

「ふぐあああっ！」

エルは仰け反りながらも私から距離を取ろうと後方へと下がっていく。

仮面の破片が散り、エルの金の瞳が亀裂の中から垣間見えてくる。

「はぁ…はぁ…タルタロス様の力を受け継いでいるはずなのに…何

故…これほどまでに…」

「貴様がもう少しエルの能力を活用させていたのであれば、もう少し私は苦戦していたのかもしれないな…」

エルはアビスとは違い、力ではなく技術で攻める類の戦士だ。

技術を用いる者は大抵は決め手が少ない、攻撃力が劣る者がほとんどだろう。

そんな技術の戦士であるエルに力で攻めさせようとは宝の持ち腐れも甚だしいものだ。

実力で劣る者であれば通用していただろうが、生憎私は四高弟とティターン神軍を屈服させる程の力を持っている。

「私は…タルタロス様の腹心…エレボスだ！」

エルは決死の覚悟で長槍を振るって私に斬りかかってくる。

縦横無尽に槍を振るうエルの連撃は恐るべきものだと言うべきなのだが、私は難なく回避していく。

煙幕や不意打ち等の捻りの無いエルの連撃など恐れるに足りないものだ。

頭上に長槍が通り過ぎたのを見計らって再び間合いを詰めて、三度目の頭突きをアテナの面にかましていく。

「ぎゃふっ！」

仮面は砕け散り、神秘的な金目銀目と艶やかな猩々緋の唇が見えてくる。

「うっ！」

エルは仰け反りながらも踏ん張って長槍で私の身体を薙ぎ払おうとしてくる。

私は薙刀を切り返して、長槍の柄を切断していく。

「まだまだです！オルトロス！」

エルは飛び退き、背後に巨大な魔法陣が出現する。

「「ギャオアアアアアアオオアアアアオオアッ！」」

甲高い咆吼と共に魔法陣の中から出現したのは二頭の首を持ち、髭と尾が蛇という異形の魔獣だった。

その魔獣には見覚えがあった。

戦場で死闘を繰り広げたニュクスが使役した地獄の番犬ケルベロスの弟に当たるオルトロスだ。

オルトロスは私に向かって灼熱感を漂わせる殺気を向けている。

私を兄の仇だと認識しているのだろう。

実際はニュクスが役立たずと言って私諸共殺したのだが…。

エルはオルトロスの背に騎乗し、脇差しを抜いて刃先を私がいる方向に向けてくる。

「殺しなさい！」

「「ゴオオオオオオオアアアアッ！」」

騎乗したエルの指示の下、オルトロスは二つの口から灼熱の獄炎と極大の波動を放出される。

さらに髭や尾となっている蛇の口から毒霧が吐き出されていく。

薙刀を回転させることで風圧を起こして、オルトロスの猛攻を凌いでいく。

エルはどうやら遠距離戦に持ち込んでいきたいようだ。

ならば、こちらも同じ戦法を取らせてもらうぞ！

「火よ、土よ、水よ、風よ、諸々の全てよ…」

オルトロスが吐き出す閃光や炎を避けながら、さらなる神降ろしの儀を始める。

「集え！我が身！神の御身とならん！」

ケルベロスとの戦いが戦果を挙げた私の掛け替えのない神を再び降ろす。

「ネメシス！」

『ロストさん…』

私を抱き締めるように現れた東洋風の美女。

ネメシスと同化して神として生まれ変わった女神。

元フェイロン共和国の英雄として讃えられたリー・ロンファンだ。

「ロン、力を貸してくれ…」

『はい！ネメシスの力よ！仇成す者全てを滅ぼす力を与え給え！八岐大蛇！』

ロンの身体が光輝いた瞬間に巨大な八つの首が生えた雷龍となり、オルトロスに対峙する。

「「ギャガアアアアアアアアアアッ！」」

オルトロスはもう一つの兄の仇が現れたことで威嚇するように咆吼を上げてくる。

だが、もはや私には負け犬の遠吠えとしてでしか聞こえない。

『弱い犬ほどよく吠えるといいますね…』

八岐大蛇となったロンはオルトロスに辛辣な言葉を放ち、八頭の口から青白い閃光を嵐のように放出させていく。

対してオルトロスも二頭と無数の蛇の口から炎や冷気、毒霧、波動等と弾幕の嵐を展開させる。

だが、数よりも質が遙かに勝ったのか、瞬く間にオルトロスの弾幕がロンの放つ嵐に押されていく。

『犬如きが龍に刃向かうなんて百億年早いというものですよ』

ロンは閃光を吐きながらも強引にめ寄って鋭い牙は次々とオルトロスの身体に突き立てていく。

「「グギャガアアアアアッ！」」

オルトロスは悲鳴のような咆吼を上げて反撃に噛みついてくるが、ロンは堪える様子も無く、構わず食いちぎろうとする。

「くっ！オルトロス！おのれっ！」

エルはオルトロスの背から飛び立ち、ロンの背中に乗っている私に斬りかかってくる。

私もまた薙刀を構えて斬りかかってくるエルに応戦していく。

エルは蹴撃と斬撃を織り交ぜた流れるような連撃が繰り出して、果敢に私を攻めてる。

一方でロンはオルトロスの首一つを食いちぎり、残った首をちぎろうと牙を立てようとしていた。

ロンとオルトロスがもつれ合う上で私とエルの斬り合いが繰り広げ

られていく。

「先ほどの攻撃よりは激しくなったが、それでも及ばないぞ！」

「黙りなさい！」

エルは渾身の斬撃を繰り出してきた。

私は定番になった伝家の宝刀である真剣白刃取りでエルの連撃を強制中断させる。

「くううううっ！」

「無駄だ」

私は剣をへし折って、エルを強引に抱き寄せていく。

「離しなさい！離せ…んんんっ！」

ティターンが散々やってきた精気を吸収する力だ。

「むむぅ…むごっ…あむっ」

「むぐぅ！」

舌を噛まれてしまった。

だが、それでもエルの中にある魔力、タルタロスに与えられた力毎根刮ぎ吸い尽くしていく。

おそらくエルの中にエレボスが寄生しているのだろう。

寄生するということはタルタロスと同様に確固たる実体が存在しないということだ。

ならば、力そのものを枯渇させれば寄生したエレボスを倒すことが出来るかも知れない。

舌を噛まれながらも私は構わず口付けを続けていく。

「ギャガハアアア…グゲガガガ…ガガッ…アアッ…」

オルトロスは残った片方の首もロンに食いちぎられ、沈黙しつつあった。

『ロストさん…がんばってください…』

ロンはオルトロスとの決着を付けつつ声援が送ってきた。

私はロンの声援に心の中で応え、エルとの熱い接吻を続行していく。

私とエルの唇の間から血が流れてくる。

「むごっむおおおおっ…もごもおおおおおおおおっ！」

激しく暴れ出すエルを必死に押さえつけて魔力を吸収していく。

『我ヲ…絞リ尽クスツモリカァアアアッ！』

脳裏に人ならざる者の声が響いてくる。

この声の主こそがエルに取り憑いているエレボスの本体なのだろう。
下手物を食べる趣味は無いのだが、エルを助け出すためだ。
『貴様は私の排泄物となって果てていくのだ。己の運命に嘆くのだな！』
悪役風に下品な言葉を脳裏に浮かべてエレボスに悪態を付く。
エルに取り憑いて好き勝手にやってきたのだ。
まさに相応しい結末だろう。
『嫌ダァアアアッ！タル…タロス様…オ助ケヲ…ヌアアアアアアアアッ！』
身体の中に陰気なものが入ってくるのを感じる。
だが、頑強な身体を誇る私は食中毒にはなったりはしない。
エルの身体に纏っていた漆黒の鎧が音を立てて崩れ始めていく。
私にとって母であり、姉であり、恋人でもあったエルを今度こそ取り戻す！
ニュクスとの戦いで犠牲になったアイリの二の舞にはさせたりはしないぞ！
私はエルと長い間唇を重ねたまま精気を吸い続けていった。

……。

……。

……。

……。

……。

……。

…。

「んはぁ…何…なんで…主…殿…」

エルは私の姿を見て、力が抜けたかのように私に身を委ねてくる。

ロンは沈黙したオルトロスを焼き尽くした後、役目を終えたと言わんばかりに消えていた。

私とエルはオリュンポスの屋上へと降りていく。

「長い間、悪夢を見てきたような気がします…」

「エル…」

エルは悲しげに微笑み、私の身体から離れようとする。

私はエルを逃がさないようにさらに強く抱き締めていく。

「私はもう主殿に愛される資格は無いのです。この身は余りにも血に汚れすぎています」

「それならば私とて同じ事だ。この手で愛する女に手を掛けてしまっているのだ」

私の告白にエルの身体が硬直していく。

「お前を助けたいと思った気持ちは勿論何よりも強いが、その償いをするためでもある。だから、私に愛される資格が無いと言わないでくれ。頼む…」

「主殿…」

エルは私の頬に手を添えてくる。

私はエルの手に自分の手を重ねていく。

「私はもう一度あの頃に戻りたいと思っている。お前達に味噌汁をご馳走してもらい家族のように笑い合ったあの日を…」

「私も戻りたいです。アビスと主殿と三人で過ごした輝ける日々を…」

私達はまだ欠片が揃っていない。

まだアビスが囚われてしまっている。

「私は全てを取り戻す。そのために…」

私はその場でエルを押し倒していく。

「あっ！何を？」

「お前をここで抱く」

有無を言わさずエルの胸をまさぐり唇を重ねていく。

エルは暴れようとするが、本気で拒もうとはしてこない。

「んっ…ちゅぱ…どういう…ことですか？主殿…あぅ…」

「申し訳ないが、必要なことだ。一応実益も兼ねているぞ」

実益とは勿論エルを抱けることだ。

もう何百年ぶりとも錯覚できる程に久しぶりだと思えてくる。

エルは私の頬を挟み込んで貪るように唇を合わせてきた。

「ちゅ…何か考えがあってのことですね…んっ…分かりました。主殿の御心のままに…」

私の意図を把握したかどうかはともかくエルは身を任せるように積極的に身体を私に擦りつけてくる。

それどころか私以上に激しく求め始めてきたのだった。

「はああ…主殿…私は…私は…はしたなくて申し訳有りません…」

エルは私の手をとって自分の胸を揉ませ、大腿をすり寄せて激しく私の男の証に摺り合わせてくる。

そう言えばエルも同じく私と情事を交わすのは久しぶりのことだった。

だからエルも溜まっているのだろう。

私はそんなエルを愛おしく思い、即座に男の証を不意打ちに貫いていく。

「あぅ！主…殿のものが…久しぶりに私の中に…あぁん！」

これは必要な情事なのだ！

だが、それ以上にエルが欲しくて堪らなかった。

私は夢中になって腰を振るっていく。

もうすぐだ。

多分、彼女は…。

……。

『やっぱり私よりも姉者の方がいいの？』

……。

突然響いてきた声にエルの身体が強張ってくる。

「この声はまさか…」

「やっと明確に反応したか、アビス…」

姉であるエルを相手にすれば、妹のアビスが必ず反応すると思ったが、どうやら当たりだったようだ。

我ながら褒められた方法では無いと思ったが、これもアビスを救うためだと開き直るしかない。

……。

≪抜かったか。我が心臓も存外我慢が効かぬものよ…≫

……。

アビスとは別の威圧的な野太い声が響いてくる。

これがタルタロスの声なのだろう。

「アビスを返してもらうぞ。タルタロス…」

≪ははははは…誰に物を言っておる?矮小なる個よ。我こそが偉大なるタルタロス。世界の深淵を司る古の神ぞ…≫

オリュンポス城が揺らいでいる。

「主殿…」

エルは服を着て私を守るようにして前に立っていく。

≪我が与えた闇を払ったというのか？脆弱なる個よ。ならば、用済みよ。心臓もそれを望んでいる…≫

漆黒に輝く触手が屋上の床から大量に出現し、エルを貫かんと群がってきた。

「血桜！」

私はエルを庇うように前に出て薙刀を振るって触手を弾いていく。

どうやら敵はアルゴスと同類の下手物のようだな。

「主殿！」

「アビスが本気で姉であるエルを殺そうとしているのか？応えろ！タルタロス！」

私の問いに応えるようにさらなる触手の群れが襲い掛かってくる。

もはや答える必要無いということなのか！

エルもいつの間にか銀色の甲冑を纏って長槍を振るって触手を斬り払っていた。

『もう我慢できない…』

＞グガガオガアアアアアアアッ！＜

アビスの怨嗟の声と獣の咆哮が二重に響き、触手の群れがますます容赦無く私とエルに向かって伸びてくる。

『誰にも渡さない！』

触手の先端から閃光が放たれてくる。

「秘奥義修羅雪！」

「雨露風雪乱舞！」

光と爆風がオリュンポス城の上空を席巻する。

『主ハ私ダケノモノダ！』

オリュンポス城に亀裂が走り、黒い物体が姿を見せようとしてきた。

かつてない威圧感が心身共に打ち付けてくる。

崩壊しつつあるオリュンポス城の中から大量の光球が飛び出してきた。

「陛下を殺らせるわけにはいかない！ティターン神軍全隊タルタロスを迎え討つ！」

クロノス等ティターン神軍がオリュンポス城から飛び出て、出現した黒の物体に相対していく。

「ガイア様の宿敵タルタロス！覚悟しろ！」

ガイアに忠実なる四高弟もまたタルタロスを包囲するように対峙する。

ガイア陣営総出演した光景はまさに絢爛豪華の一言だった。

≪ガイアに群がりし雌共よ、貴様等とは後で戯れてやる。その前に……≫

贓物のような巨大な漆黒の物体に亀裂が生じてくる。

亀裂は紫色に輝く禍々しき目だった。

その視線は銀色の鎧に身を包んだ戦乙女に向かれている。

タルタロスの狙いはエルだ！

「アビス…それほどまでに私のことを…」

『ソウヨ！私ハ姉者、イイエ、エル、オ前ガ憎イ！』

アビスの狂おしい程の憎悪が空間を歪ませていく。

『ガイアの分身として生を得た僕が怯えるなんて…』

ガイア陣営を代表する巨体女ティフォンが震えている姿を私は初めて見た気がした。

アビスの怨念はティターンも四高弟も震えてしまう程に凄まじいも

のなのか…。

『ケド…同時ニ姉者ヲ愛シテル…』

「アビス？」

先ほどの憎悪から一変して甘えたような声を出してくるアビスに茫然と立ち尽くすエル。

『主ノ次ニネ…ダカラ…』

紫色の瞳が輝き、エルの周囲に真紅の魔法陣が大量に出現してくる。

まさか…。

「やめろぉおおおおおおっ！」

私はエルの下へと猛然と駆けつけていく。

だが、行く手を阻むように触手が壁になるように群がってくる。

『私ト一ツニナロウ…姉者…』

真紅の魔法陣から触手が飛び出し、エルを絡め捕ろうとしてくる。

「くっ！アビス…」

エルは長槍を振るって触手を弾いていくが、それ以上に大量の触手が群がり、今にも囚われそうだった。

「クロノス！エルに加勢を…」

「駄目だ！そんな暇を与えてくれそうにない！」

ティターンと四高弟は魔力波を放ちながら必死にタルタロスが繰り出す触手に群れに応戦していた。

クロノス達は自分の身を守るのに精一杯の状態だ。

オリュンポス城は崩壊し、世界を覆う程の漆黒の巨体が姿を見せつつあった。

禍々しい鼓動が世界に響き、光に満ちていた世界が闇に覆われようとしている。

一方でエルは次第に真紅の魔法陣から伸びてくる触手の群れに追い詰められていた。

「目を覚まして！私を取り込んだところで…」

『良イノ…私ハ主ニ愛サレテイルオ前ト一ツニナリタイ…』

エルの振るう長槍は触手に弾かれてしまい、ついにタルタロスの触手に絡め捕られようとしていた。

加勢に行けないのであれば、タルタロスの動きを止めればいいのだ！

薙刀を振るって触手の壁を薙ぎ払い、紫色の輝きを放つタルタロスの目に向かって飛び立っていく。

アルゴスと同様にこの巨大な目玉が弱点に違いない！
行く手を阻もうとしてくる触手を薙刀を縦横無尽に振るってけちらし、タルタロスの目玉に辿り着く。
「止めろ！タルタロス！」
黄金の拳よ、唸れ！
拳を繰り出そうとした時、紫の瞳から人影が姿を現してくる。
雪のように白い肌に暗褐色の髪を靡かせた絶世の美女。
『私ヲ殴ルノ？主…』
アビスの悲しげな声が私の胸に突き刺さってくる。
「アビス！」
繰り出そうとした拳が止まってしまう。
戸惑う私にアビスは藍錆色の唇を邪悪に歪ませる。
『ヤッパリ主ハ優シイネ…アザゼル…』
紫の波動がタルタロスの目から放たれて私の身体を飲み込んでいく。
「がふっ！ア…ビ…ス…」
血飛沫をまき散らしながら弾き飛ばされてしまう。

『ダカラ…愛シテル…』

オリュンポス城の瓦礫にたたきつけられた私は触手に絡み付かれているエルの姿が目に映る。

タルタロスの目を背に姿を現しているアビスは恋人を迎えるように両手を広げエルを引き寄せていく。

「アビス…貴女も鬼に成り果ててしまったのね…」

エルは触手に引き寄せながらも刃先をアビスに向けていく。

アビスはエルの刀に貫かれても構わないと言わないばかりに構わず引き寄せてくる。

『姉者…私ヲ受ケ入レテ…』

エルの刀がアビスの胸を貫く寸前まで近づいてくる。

「アビス…私は…」

『姉者…』

葛藤しているのだろうか、エルとアビス二人の間だけ時間が止まっているかのように見えた。

そして、時間が動き始めたかのように刀を下ろし、倒れ伏す私に顔を向けて微笑むエル。

「エル！」

「主殿…申し訳ありません…私は…んっ！」

エルが何かを言おうとした所をアビスが抱きしめ口づけをしてくる。

口づけされたエルは壊れた人形のように動かなくなり、アビスに成すがままにされていく。

『チュ…フフッ…コレデ私達ハモウ離レルコトハナイワ…』

アビスはエルを抱きしめたままタルタロスの目の中へと入ろうとする。

『コレデ姉者ハ私ノモノ…私ト姉者ハ二度ト離レルコトハナイ…アハハハハッ！』

哄笑と共にエルはアビスと共にタルタロスの中へと取り込まれていく。

またしてもエルを救い出すことが出来なかった…。

≪『哀レナル双子ノ片割レ…輝ケル者ヨ…奈落ニ呑マレ果テルガヨイ…』≫

「エルぅうううううううっ！アビスぅうううううううっ！」

力無く項垂れる私はただ愛する者の名を空しく叫んでいく。

タルタロスの身体はさらに巨大化していき、神々の世界が奈落に呑

まれようとしていた。

もはや勝ったも同然と言わないばかりにタルタロスの鼓動が耳障りに響いてくる。

「ぐっ…」

私は血が滴っている身体を何とか立ち上がらせ、クロノス達が必死に応戦しているタルタロスを見上げる。

「このままでは終わりはしない…」

私は飛び立ってクロノス等の先頭に立っていく。

……。

私はまだ生きているのだ。

だから負けてはいない。

今度こそは負けない。

「タルタロス…」

私の手で貴様を必ず殺す…。

第113話：おちていく

オケアニス三千神が雪崩のように魔力波をタルタロスに放っていく。

「ブフラマー！」

「セクエンティア！」

ポントスとテミスは極大の波動を放ち、他の神々も一斉に大技を放つ。

各々が世界に甚大な被害を与える一撃を集中的に放ったのだ。

空間が軋むほどの激しい爆風が巻き起こってくる。

いくらタルタロスでも無事には済まないはずだろう。

最も無事に済まなければ、アビスとエルも危ういのだが…。

《その程度の力で我をどうにか出来ると思ったのか？》

爆風が止み、タルタロスの漆黒の巨体が見えてくる。

世界を滅ぼす各々の一撃もタルタロスは全く堪えた様子は無かった。

それどころか掠り傷すらも負っていない。

「物理攻撃を行うのだ！剣や槍で八つ裂きにしろ！」

クロノスの指示の下、ティターン神軍と四高弟がタルタロスを直接に攻撃しようと掛かっていく。

タルタロスは海藻のように触手を揺らめかせ、彼女達を迎え討とうとしてくる。

私も彼女達に続いて何としてもタルタロスの動きを止めてエルとアビスを助けなければ！

《薙ぎ払ってくれよう…マスティア…》

贓物から巨大な手が生え、禍々しき巨剣を携えてきた。

アビスが放ってきた紫の波動と言い、奴はニュクスと同じ技を使ってきている。

いや、ニュクスこそがタルタロスの技を借用していたと言うべきなのか…。

ニュクスの力は元々タルタロスの一部だったのだ。

贓物から生えた手は巨剣を振りかぶって凄まじい波動を放ち、群がる彼女達を弾き飛ばしていく。

「きゃあああっ！」

「何て力なの…」

タルタロスは巨剣を有り得ないほどの高速で振り回し、寄せ付けようともしなかった。

さらに触手の先端が剣や槍の形となり、オケアニス等を次々と貫いていく。

「貴方達！なんてことなの…」

オケアニスを統括するオケアノスは目の前の光景に唖然としていた。

オケアニス三千神は一神が一騎当千の実力者揃いである。

それが雑魚のように瞬く間に命を散らされているのだ。

「くっ！」

何を呆けているのだ、ロスト！

私が迎え入れた構成員等の命をこれ以上散らせるわけにはいかない！

「うおおおおおっ！」

薙刀を縦横無尽に振るって群がる触手を斬り払ってタルタロスに接近する。

アビスやエルを無傷なんて甘い考えは捨てろ！

この世界の私の二の舞になることは断じてあってはならないのだ！

「レアとティフォンは私に続け！」

レアは頷き、八尺瓊勾玉を取り出して私に続いていく。

「クロノス！イアペトス！お前達は奴の動きを止めるのだ！オケアニス隊は弾幕を展開して牽制しろ！」

「御意！」

「承知した！」

クロノスは大量の魔法陣を展開させ、上空に巨大な十字架を形作っていく。

一方でイアペトスは爪に魔力を伴わせ、虚空に紋様を描き始める。

クロノスとイアペトスが準備している合間にオケアニス等は息も付く暇を与えずありったけの魔力波をタルタロスにぶつけていく。

《小賢しい奴等よ！消し飛ぶが良い！ジャハナム！》

タルタロスは全身から熱線は放出し、弾幕を展開させるオケアニス諸共焼き尽くしていく。

「きゃあああああっ！」

「あついぃいいあああああっ！」

タルタロスによって描かれる壮絶なる地獄絵図。

やはりエルとアビスは殺すしか方法が無いのか…。

「汝に戒めを与えん！アトラス！」

「磔刑に処してやろう！グランドクロス！」

イアペトスが描いた紋様が全身に刃の如く刻まれ、さらにクロノスのグランドクロスによって磔にされるタルタロス。

《グオオオオオオオッ！》

タルタロスはクロノスとイアペトスが展開する戒めを破ろうと威圧的な咆吼を上げる。

逃げ出したい衝動に駆られながらも私は魔力を限界まで溜めようとしていく。

ティフォンは大量の魔法陣を展開させ、レアは愛器である八尺瓊勾玉にそれぞれ最大限に魔力を溜めている。

「閣下！私達は多重拘束世界を創造します！だから、限界までの力をぶつけてあげてください！」

ウラノスがウレアとポントスと共に魔力を溜めて、外界にオリュンポスを閉鎖させるためだけの世界を構築させようとする。

多重拘束世界とはモロスを監禁させる際に反乱軍が施した超一級の牢獄魔法だ。

ただし、牢獄としての役割だけでなく世界が崩壊させないようにするための予防措置とも言える魔法でもある。

タルタロスとの戦いでオリュンポスが崩壊しても余波が外界に漏れ

ないようにするための措置だ。

ウラノスは私の心情を汲み取ってくれたのだ。

これで何の躊躇いもなく力を限界まで解放することが出来るぞ！

ガイアの住処であるこのオリュンポスを軽く消滅させるぐらいの力で攻めなければ奴を止めることは出来ない。

喜ぶのも束の間、タルタロスは甚大なる力を放出し、クロノスとイアペトスの戒めを破ろうとしていた。

《愚者共メ！コノ程度デ我ヲ束縛デキルト思ッテオルノカ！》

イアペトスに刻まれた紋様は消し飛び、クロノスが繰り出したグランドクロスがひび割れてくる。

「馬鹿な！私のグランドクロスは魔力を吸収して無力化するものだ！それを力づくで破ろうとするとは…」

戦慄するクロノスとイアペトスを余所にテテュスとウレアは戒めを破ろうとするタルタロスに果敢に攻撃を喰らわせていく。

「愛の鞭を喰らいなさい！」

「カタストロフ・サン！」

爆風の嵐の中、タルタロスが戒めを破ろうと上げる咆吼は以前と響き渡っている。

グランドクロスを破ろうとしたタルタロスの身体に巨大な槍が突き刺さり、光の槍が雨のように降り注いでいく。

あの巨大な槍はロンギヌス、光の槍はホーリー・ランス。

審判者テミスの技だ！

「ひっひっひっ！戒めは審判者たる私の特許である！」

これで何とか間に合うぞ！

「レア！ティフォン！」

「分かっているよ！ロストちゃん！」

『喰らわしてあげるよ！こいつに！』

レアとティフォンの魔力を圧縮している光球が漆黒となり、私もそれに倣うように技を展開させていく。

かつてタルタロスに痛手を与えたガイアの最強の技を三倍の威力を持って喰らわてやる！

エル！

アビス！

瀕死の状態で生き残ることを切に祈っておくぞ！

「『「ビッグバン！」』」

漆黒の光がタルタロスの巨体を丸ごと覆い尽くし、終焉の爆炎が吹いてくる。

世界は暗雲とし、ひたすら破壊の嵐が吹き荒れていく。

……。

……。

……。

……。

……。

…。

光輝くオリュンポスは荒廃とした死の世界と成り果てていた。

荒廃しても未だにこの世界そのものが無事なのはウラノス等が展開してくれた多重拘束世界のお陰とも言える。

タルタロスは、エルとアビスはどうなったのだろうか？

さすがにガイアの最強の技を三人前で喰らったのだから無事ではないはずだ。

《ナルホド…サスガハカツテ我ニ手傷ヲ負ワセタ技ナダケアッテ大シタ威力ダ…》

爆風が止み、姿を現すタルタロス。

だが…。

「そんな…無傷だとは…」

『やはり奴は僕を遙かに越える化け物のようだね…』

レアはともかくガイアに最も近いティフォンですらも冷や汗を掻いたかのように額を拭っていた。

ガイアの最強の技であるビッグバンを三つ纏めて喰らっても尚無傷だという事実に戦慄を禁じ得なかったのだ。

《ドウヤラ我ハ我ガ思ッテイタヨリモ遙カニ強大ナ力ヲ得タヨウダ…コレモ我ガ得タ新タナル心臓ノオ陰ヤモシレヌナ…クックックッ…》

『主…酷イワネ…私デナカッタラ死ンデイタ所ヨ…』

タルタロスの紫の瞳の中に邪悪な笑みを浮かべるアビスがいる。

『ダカラ…仕返シシテアゲルワ…』

「危ない！ロストちゃん！」

不意にレアに突き飛ばされてしまう。

突き飛ばされながらも私は驚愕の光景を目にしてしまう。

「ロス…ト…ちゃん…」

「レアっ！」

タルタロスの触手がレアの胸を貫いていた。

レアは私に何かを伝えるかのように口を僅かに動かし、触手に引っ張られていく。

私はその手を掴もうと手を伸ばすがそれよりも早くレアがタルタロスに引き寄せられてしまう。

『コレデ邪魔ナ女ガ一人消エタワ…フフッ…』

「アビス…お前…」

引き寄せられたレアはそのままタルタロスの紫の瞳にいるアビスに抱擁される。

「レアぁあああっ！」

エルと同様にアビスは自らの身体に取り込もうとしているのだ。

救い出そうにも触手に阻まれてしまう。

さらに倒れ伏しているオケアニス等も触手で貫いて身体に取り込もうとしてくる。

『アンタガ愛シテイル女ハ全部私ト一ツニナルノヨ…ソレデモウ私

シカイナクナル…アハハハハッ！』

≪ナカナカノ美味ゾ。ヤハリ食スルノハ女神ニ限ル…我ガ力ガマスマス漲ッテクル…フハハハハッ！≫

アビスとタルタロスの嘲笑が二重に木霊していく。

「陛下、ここは退くべきです。このまま犠牲者を出し続ければ奴にさらなる力を与える恐れがあります！」

ウラノスが私の隣に寄って従者として進言してくる。

確かにウラノスの言う通り、下手に戦って犠牲者を出せばそれだけタルタロスに力を与えることに繋がってしまう。

「申し訳ありません。多重拘束世界を展開させたことが返って仇になってしまいました」

ウラノスが苦渋を滲ませて謝罪してくる。

ここから逃げるためには多重拘束世界を抜けねばならなくなったのだ。

「ウラノスだけの責任ではない。具体的にどれだけの世界を構築した？」

「二百ほど展開して、十三ほど残っています」

三人前のビッグバンを放って、百八十七の世界が崩壊し、十三の世界が健在だということか…。

十三程ならば、何とか逃げ切れるかもしれない。
方針が決まったからには善は急げだ！
「全軍に告げる！この世界から脱出するぞ！タルタロスから逃げろ！」
オケアニスやヒュペリオンは魔力波を放って牽制しつつ後退していく。
『逃ゲルツモリ？ケド、逃ガサナイワ。主ヲ愛スル女ナンテ皆死ネバイイノヨ！』
アビスの狂気に満ちた愛に私の背筋が凍っていく。
私はここまで狂ってしまう程にアビスを追いつめてしまったのか…。
『聖上に手出しはさせない！』
触手の群れを豪快に薙ぎ払うのはグングニルを持つティフォン。
「わたくしの愛する陛下に刃を向ける者には死を！」
トリアイナを構えてタルタロスの前に立ち塞がるポントス。
「一度あんたとは戦ってみたかったんだ！覚悟しな！タルタロス！」
ウレアもまた鉤爪を構えてタルタロスの前に立ち塞がっていく。

「殿は我等四高弟が務めます！陛下はティターンを率いて退却を！」

ウラノスの突然の申し出に私は言葉を失ってしまう。

彼女が言っていることは自分達が犠牲になるので逃げてくださいとのことだ。

「しかし、それではどちらにしても犠牲になることは変わりない。他に方法は…」

「ありません。犠牲無くして逃げられる程奴は甘くはありません。同じ犠牲者を出すのならティフォンを含む我等少数精鋭、即ちティターンよりも少数の犠牲で済みます。どうかご決断を…」

犠牲にする上で確かに最強の一角であるティフォンを含むガイア四高弟は少数精鋭であることから三千を超えるティターンよりも効率が良いだろう。

だが、四高弟もティターンも私の構成員には変わりないのだ。

苦悩する私の頬にウラノスは手を添えてくる。

「ご安心を…私達は既に繋がっています。ですから私達は永遠なのです。貴方様がいる限り…だから悲しまないで…」

いつの間にかウラノスに抱き締められていた。

彼女には初対面では冷たい目で見られていた。

だが、今ではこうして抱擁されている。

彼女の暖かさに涙が出そうになってきたが、必死に耐える。

今はまだ涙を流すべきではない。

全てはタルタロスを倒してからだ！

「ロスト陛下…」

「分かった。ここはウラノス達に任せる」

私はウラノスから離れてこの世界から離脱しようとする。

『逃ガサナイ…』

タルタロスは大量の触手を私に伸ばしてくるが、ティフォンが展開した十の魔法陣に防がれていく。

ティフォンが私を庇うように立ち塞がってくれたのだ。

『果て無き光よ！アイン・ソフ・オウル！』

無限に輝くが波動が放たれ、タルタロスの放った触手が焼き尽くされていく。

さすがはガイアに最も近い存在だと言われることあってタルタロスと対等に渡り合っている。

もしかするとティフォンならあるいは…。

『雌如キガ邪魔伊達シヨウトスルワケネ…ナラ惨タラシク殺シテヤルワ…』

私の僅かなる期待は瞬時に打ち砕かれることになる。

タルタロスの放った触手が硝子を突き破るかのようにティフォンが展開した魔法陣を容易く砕いたのだ。

さらにティフォンが放った波動で焼き尽くされたはずの触手も瞬時に再生され、ティフォンの身体の至る所を貫いてきた。

『ごほっ…僕では…足止めが精一杯か…』

ティフォンは全身から鮮血が噴き、吐血しながらもタルタロスを足止めしようと触手を引っ張ってタルタロスを自分に引き寄せようとする。

『離セ！コノ雌ガ！』

ティフォンは巨体を活かして触手に貫かれようと構わずタルタロスを押さえ込もうとする。

同時にタルタロスはティフォンを取り込もうとますます触手を絡みつけてくる。

このままではティフォンもタルタロスに吸収されてしまうではないか！

駆けつけようとした私を抱き締めるようにして止めたのはテイアだった。

「行ってどうするのよ！今の私達が戦っても奴が有利になるだけ…ティフォンの行為を無駄にさせないで！」

「くそっ！」

私は力を抜いて項垂れる。

かつてこれ程までの無力感を感じることはあっただろうか…。

『ウラノス！ウレア！ポントス！僕が奴の動きを止めている間に僕ごと攻撃を喰らわせるんだ！』

「有り難うございます…ティフォン…トラソルテオトル！」

「畜生めが！やってやるよ！クリミネイション・クライシス！」

「全ては愛するロストのために！ヴィシュヌ！」

三神はティフォンが押さえつけているタルタロスに向かって渾身の一撃を放つ。

共に戦った仲間ごと攻撃する心境は想像を絶するほどの苦痛を伴っているだろう。

凄まじい爆風が押し寄せる中で私は思わず目を逸らしてしまう。

「やりましたか？」

「これぐらいでくたばる程甘くねえだろう」

「けど、深手ぐらいは…」

だが、四高弟の目論見はタルタロスによってまたしても希望と共に打ち砕かれた。

爆風が止み、見えてきたのは血塗れになったティフォンと全く無傷のタルタロスだった。

「馬鹿な…」

ウラノスは魂が抜けたように身体をふらつかせて絶望の光景をただ眺めていた。

仲間を犠牲にさせてまで強行した攻撃もタルタロスには通用しなかったのだ。

『酷イワネ…味方ゴト私ヲ殺ソウトスルナンテ…デモ無駄ダッタケドネ…アハハハハハッ！』

「やってくれるじゃねえかよ！てめえ！」

ウレアは憤怒の形相で鉤爪を構えてタルタロスに向かって突撃する。

そんなウレアをタルタロスは嘲笑と共に触手を瞬時に延ばしていく。

ウレアは触手に胸を貫かれてしまう。

「がはっ…ち…畜生め…ごほっ…」

血塗れになったウレアは触手に貫かれたままタルタロスに引き寄せられていく。

『アハハハハッ！アンタノヨウナ猪女ナンカオ呼ビデハナイノヨ。死ンデシマエバ？ベリアル…』

「あぐうううっ！」

「きゃあああああっ！」

タルタロスは放った闇夜の獄炎に包まれて悲鳴を上げるウラノスとポントス。

アビスの嘲笑が耳障りに響き、私の中の何かが切れる。

「アビスぅうううううううっ！うおおおおおおおおっ！」

「落ち着くんだ！ロスト！」

タルタロスに向かって駆けようとする私をプロメが羽交い締めして止めてくる。

「ティフォンに犠牲は決して無駄ではない！彼女達の役目は飽くまでタルタロスの足止めだからだ！それれなのにお前が飛び出してはそれこそティフォンに犠牲が無駄になってしまうぞ！」

「くっ…」

どうしようもないほどの怒りが煮えたぎってくるが、無謀に突撃してしまえばティフォンとウレアの犠牲が無駄になってしまう。

「ティターン全軍退却だ！形振り構わず逃げろ！クロノス、誘導を頼む！」

「承った！」

「私は目眩ましを使うわ！全てを覆い隠す霧よ！」

クロノスがティターンを纏めて退却戦に持ち込む中でテイアは身体から霧らしきものを発散させていく。

一時的に空間を遮断して、魔力探知は断ち切るテイアの得意技の霧だ。

ティターン神軍が戦争時で奇襲する際に有用された戦略的秘技だと聞いたことがある。

「今の内だ！無様に這いずり回ってもいい！とにかく生き残れ！」

済まない、ウラノス、ティフォン、ポントス、ウレア。

タルタロスの魔の手から逃れて飛んでいる内にオリュンポスの輝ける空の彼方に黒い穴が見えてくる。

その穴がこの世界の出入り口に違いない。

「あの空間の狭間に飛び込め！」

クロノスの先導の下、ティターン神軍は次々と空間の狭間に飛び込んでいく。

十三階層から成る多重拘束世界の内の一つをまず乗り越えたのだ。

……。

……。

……。

……。

……。

…。

現在三階層。

残るは十階層。

私とティターン神軍は次の階層を目指してまっしぐらに駆け抜けている。

「脱落者はいないか？」

「ムーサ部隊が半壊！タルタロスに追いつかれて絡め取られました…」

「オケアニス部隊も二千神近く犠牲になりました…」

何て事だ…。

四高弟の殿が突破され、今も尚犠牲者が増え続けている。
もしここでタルタロスに追いつかれて全滅でもすれば全てが終わってしまう。
「陛下！タルタロスが追いついてくるぞ！」
イアペトスの焦った声で響いて思わず立ち止まりそうになる。
《貴様全員我ガ奈落ヘト呑マレ果テヨ！ルシファー！》
タルタロスの紫の瞳から強大な波動が放たれてくる。
「あたし達でおじさんを守るんだよ！」
「「「おう！」」」
半数になったムーサ部隊が防御結界を展開させてタルタロスの攻撃を必死に防ごうとしてくれる。
それでもタルタロスの容赦無い追撃によって結界が砕かれ、ムーサ達は次々と波動に呑み込まれてしまう。
「くっ！貴女達！よくも私の部隊を…」
「ムネ！」
ムネモシュネは自分の部隊を一方的にやられている様を見過ごせず、タルタロスに立ち向かっていく。

「坊やはそのまま突き進んで！ここは私が食い止めるわ！」

「ムネモシュネに任せて先に進むのだ！」

クロノス等に押されて私は次の階層へと目指していく。

……。

『また良い夢見せてね…ぼうや…』

……。

脳裏にムネの声が響き、後ろを振り向く。

ムネモシュネは笑顔を向けて手を振るい、タルタロスに向かって飛んでいった。

「ああ、いくらでも良い夢を見せてやるぞ…」

私は二度と振り返ることなく次の階層へと向かっていった。

……。

……。

……。

……。

…。

現在九階層。

残り四階層。

もはやティターン神軍の数は二桁しか残っていない。

この階層まで辿り着くのに数多くの犠牲を払っていった。

何度引き返してタルタロスに刃を向けようかと思ったことか。

それでもクロノスは断固として撤退するべきだと言い通し、ここまで辿り着いたのだ。

『《雨露風雪乱舞》』

タルタロスはエルの技で猛吹雪を起こし、テイアが展開した不可視の霧が吹き飛ばされてしまう。

『モウ逃ゲレラレナイワヨ…』

霧が払われ、タルタロスの姿が見えてくる。

《奈落ヘ還レ》

【主…愛シテイル…】

〈全テ…一ツニ…〉

（我コソガ真ニ偉大ナル神ゾ…）

思わず吐きそうになってしまう。

今まで犠牲になった者達が…。

オケアニス部隊が…。

ムーサ部隊が…。

ガイア四高弟が…。

見知らぬ女等が…。

大小様々な体格の女の上半身が触手と共に臓物から生やし、手には槍や剣等の武器を携えていた。

……。

今まで見てきた化け物共が子供のぬいぐるみだと思える程までにおぞましいものだった。

奇怪で醜悪な贓物に美女を彩らせ、美と醜を融合させたある種の統合性を感じさせる異形の姿。

無差別で混沌に満ちたその姿を統合するように贓物の中心にはアビスの上半身が生え、その下には巨大な紫の瞳が輝いている。

アビスの変わり果てた姿を見て、ある言葉が脳裏に浮かんできた。

酒池肉林。

私が欲望のままに目指していた夢。

タルタロスの姿はまさに私の欲望の要である酒池肉林を象徴していた。

酒池肉林の夢の下で犠牲になってしまった女達の怨念が具現化された怪物に見えてしまったのだ。

贓物から生えている女達は不気味な笑いを浮かべ、視線の全てを私に向けてくる。

……。

（ロスト…好キ…）

……。

〈抱キ締メテ…愛シテ…〉

……。

……。

『モウ…離サナイ…絶対ニ…』

……。

【ズット一緒ニ……】

……。

《奈落ノ果テマデ…永遠ニ離レナイ…》

……。

「愛シテルワ…主…」

……。

タルタロスに繋がった女達は口々に呪詛のように愛を私に囁いてくる。

恐い…。

死にたくない…。

逃げ出したい…。

生きたい…。

原始的な感情が最優先されてしまい、自分のために犠牲になった者達への弔いすらも消え失せてしまう。

これが真神戦争で猛威を振るった最強の上級神タルタロスなのか…。

ティターンや四高弟を屈服させたときの気合いなんて子供の背伸びとしか思えないほどだった。

さらに最初に相見えたときとは比較にならない程に力が強大化されている。

吸収したティターンや四高弟の力がそのままタルタロスに負荷されているということなのだろう。

つまり目の前の敵は一体でティターンの一神の三千倍以上の力を秘めているということになる。

はっきり言って勝ち目があるかどうか議論するのも馬鹿馬鹿しく思える圧倒的戦力差だ。

『《恐イノ？心配スルコトハナイワ…主。私ガ気持チ良ク愛シテアゲル。ソシテ…私ダケシカ見レナクナルノヨ…奈落ノ底デネ…アハハハハッ…》』

「アビス…」

世界を覆い尽くすほどに巨大化したタルタロスを前に逃げ場は無かった。

力の次元が違いすぎる…。

もはやこれまでなのか…。

……。

……。

…。

何を考えているのだ、ロスト！

私の生存能力は神以上ではなかったのか？

例え、相手が私よりも四桁以上の力を持っているとしても関係無い！

生きることこそが何よりも勝る力なのだ！

「陛下…もはや私達は生きて別世界に足を踏み入れるのは無理かもしれない…」

「だが、陛下だけならば…あるいは…」

クロノスとプロメは希望を見出すように私を見つめてくる。

そして、テイアが先ほどよりも濃い霧を発生させてタルタロスの視界を遮ろうとしていく。

『隠レン坊デモスルツモリナノ？ダッタラ…少シノ間ダケ猶予ヲ与エテヤルワ…』

《ドノ道お前達ハ全部奈落ニ呑マレルノダカラナ…》

テテュスは私の下に歩んできていきなり顔を覆うような口付けをしてきた。

「あんたにこれを預けるわ。無くしたら許さないからね…」

熱い口付けの後に預けられたのはテテュスが愛用している指揮棒いわゆる「愛の鞭」だった。

私は愛の鞭を受け取った後、今度はヒュペリオンが私の頭を丸呑みする等という口付けをしてきた。

「愛してるぜ…陛下…」

次にテミスが唇で私の頭を咀嚼するような口付けをしてくる。

「忘却は罪だ。私のことを忘れないでおくれ…」

ポイベやイアペトスも私の顔を舐め回したり、唇を押しつけたり等としてきた。

「飼い主を守ることが我の役目…」

「儂等は常に繋がっておる。案ずるな…」

プロメは私を抱き締め、耳元で囁いてきた。

「この世界から脱出できたらガイア様に会え。タルタロスを倒す鍵はガイア様が握っている」

「ガイアに逢えばタルタロスを倒せる方法が見つかるのか？」

私の問いにプロメは頷き、口付けをしてくる。

「ガイア様を初めとして我等はかつての真神戦争でタルタロスに刃を交え討ち取ったのだ。光明がある。信じろ」

真神戦争で二代目原初神タルタロスを打ち倒し、当代原初神となったガイア。

私をこの世界に送り込んだ道化師。

「何としてでもガイア様に逢え！そこから終わりが始まるはずだ！」

テイアから聞いた話だと私とガイアには何らかの因縁があるとのことだった。

全ての鍵はガイアが握っている。

「わかった…」

タルタロスから逃げ出し、必ずガイアに逢ってみせる。

「姉者だけ狡いです。頑張りますので勇気を…」

プロメが離れた後にエピメやヒュペリオンの弟子達も雪崩れ込むように口付けの嵐を見舞ってきた。

「これは別れではありません。誓いです」

「こんな美味な貴方を残して逝ったりしないよ」

「俺はまだ味わい足りねえからな…」

別れの口付けを終えた彼女達はテイアが展開した霧の先にいるタルタロスを見据えていく。

膨大な魔力の反応と共に霧が消し飛ばされていく。

《《《《別レノ挨拶ハ済マセタカ？ダガ、別レヲ悲シム必要ハ無イ。貴様等ハ全テ等シク奈落ヘト果テルノダカラナ…》》》》

『『『『ダケド…主ダケハ別ヨ…私ガ永遠ニ可愛ガッテアゲルカラ安心シテ…』』』』

タルタロスの威圧的な野太い声に対して、アビスは妖艶で抗いがたい甘美なる声で私を誘ってきた。

目の前にあるのは巨大で醜悪な贓物だというのにそれでもアビスの声が響くだけで否応無し性欲が駆られてしまう。

これが奈落へと堕ちようとする感覚なのか…。

不意に浮かんだアビスと一緒に堕ちてもいいという危険な思いを振り払う。

『サテト…マズハオ邪魔虫ヲ呑ミ込ンデカラ…主ヲ誘惑シヨウカナ…』

「飼い主に貴様の毒牙をかけさせはせぬぞ！ヨルムンガンド！」

ポイベは黄金の五頭竜に変身して、数多の女体を生やした贓物の身体に噛みついていく。

「ホーリーランス！」

「ガブリエル！」

テミスが雨のように大量の槍を放ち、ヒュペリオンはタルタロスの

身体を凍結させようとする。

ヒュペリオンの弟子達もそれぞれ剣や槍を持って斬りかかっていく。

「タルタロス覚悟！」

「陛下と姉者のために！」

テミスとヒュペリオンがタルタロスの動きを止め、正面からヘリオス達、側面からプロメとエピメと攻撃を繰り出していった。

『《馬鹿ネ…》』

ティターンの猛攻に対して、アビスは小馬鹿にしたように笑う。

『《ダッタラ…モウ終ワリニシテアゲルワ…》』

不意に世界の時が止まったかのような感覚に襲われた。

私の生存本能が警報を告げている。

「みんな、逃げ…」

……。

……。

…。

【｛［［〔〔（（《〈『「サタナイル」』〉》））〕〕］］｝】

……。

……。

…。

タルタロスの身体から極彩色の波動が放たれ、世界が塗りつぶされる。

世界が奈落に呑まれていく。

何もかも全てが果てていく。

「ア…ビ…ス…」

私の意識が瞬く間に奈落へと堕ちていく…。

『フフッ…一緒ニオチテネ…主…』

……。

……。

……。

……。

……。

……。

……。

……。

……。

…。

「愛シテル…」

第１１４話：光と影

落ちていく。

……。

墜ちていく。

……。

堕ちていく。

……。

「ソウ…オチテイクノ…私ト一緒ニ…」

……。

「主…もう離さないで…」

「アビス…」

私は灰色の世界でアビスと裸に抱き合っていた。

私とアビスはどこまで堕ちている。

「抱き締めてあげる…」

絡み付く足の感触が心地よい。

吸い付く唇の感触が気持ちいい。

包み込む胸の感触は最高だ。

私の全てをアビスに委ねられるのだ。

これほど幸せなことがあろうか。

……。

「主…ロスト…」

……。

「私と一緒に…」

……。

「落ちて…」

……。

「逝こう…」

「ああ…一緒に…逝…」

「なりません！主殿！」

沈みかけた思考が覚醒していく。

アビスと同じ声だ。

私とアビスしか存在しなかった灰色の世界にアビスと同じ顔をした女が現れる。

「しっかりしてください！主殿！貴方にはやらなければいけないことがあったはずです！」

アビスと同じ顔をした女は堕ちていく私に手を伸ばしてくる。

不意に何故か伸ばされた手を掴まなければならない気がしてきた。

「また私の邪魔をしようとするの、姉者。もううんざりなのよ。私は姉者の影なんかじゃないわ！」

アビスは私を渡さないと言わんばかりに強く抱きしめ、手を差し伸べる女を睨みつける。

「アビス、誰も貴女のことを影とは言っていません。私と貴女は常に一つだったはずです」

「いいえ、私は姉者の影よ！姉者はいつだって輝いていた。私はそんな姉者の影として今まで生きてきたの。でも、これからは違う。私こそが光となって主を照らしていくのよ…」

「アビス…」

アビスは狂おしいほどの愛を私に与えてくれる。

甘く心地よいはずだが、どこか悲しげな愛。

「主…私は主のためなら何だってやるわ。女を差し出せというのなら差し出すし、酒池肉林の夢だって叶えてみせるわ。ほら…」

『あぁん…ロスト…』

『愛してるわ…陛下』

『私を逝かせて…』

『ロストちゃん…』

『早く私を抱きなさいよ！』

灰色の世界に淫らな声が聞こえ始めてくる。

いつの間にか辺り一面に裸の女達が互いに抱き合い、喘ぎ声を出している光景が目に焼き付いていく。

女達の中にはその中には吸収されたティターンや四高弟達もいた。

「ほら、ここには主が求めているもの全てが揃っているよ。だから、もう面倒な戦いに首を突っ込む必要も無いのよ。エロスのこともガイアのことも忘れて私達とずっと一緒にいて…」

それは魅力的な提案だった。

元々私は喧嘩が好きであって殺し合いは好きではなかった。

それでもやってきたのは偏に酒池肉林の夢を叶えるためだったのだ。

夢が叶えば戦う必要は無い。

エロスとの因縁なぞどうでもいい。

一瞬でもそう思った。

だが…。

アビスに似た女は悲しげな顔で私を見つめていた。

……。

『私は別に主殿の夢をただ否定している訳ではありません。ただ主殿は侍らした女の数だけ平等に愛し抜く御覚悟はあるのでしょうか？女をただの性欲処理として侍らすのであれば、命を持って否定させていただきます…』

……。

かつてアビスに似た顔の女に説教されたことがあった。

……。

『そんな優しい主殿ですから、無作為な火遊びは容認できないのです。確かに一時は快楽に浸ることはできましょう。しかし、お優しい主殿は決して関係を持った皆を見捨てません。そして、その責任感に押し潰されてしまい、最後に苦しむのは結局は主殿なのです…。私は苦しむ主殿を見たくはありません…』

……。

愛することの大切さを教えてくれた。

だから、私は繋がった女のことは全力で愛していこうとして…。

「アビス、私を籠絡させようとはそうはさせんぞ。馬鹿なことは止めてエルと共に帰ろう」

「快楽に溺れてくれれば苦しまずに堕ちていけたのに…。だったら仕方ないよね…。主ガ悪イインダヨ…」

不意に胸に熱いような痛みを感じる。

「がほっ…」

アビスの顔が私の血で濡れていく。

私の胸にアビスのか細い手がめり込んでいた。

「アビ…ス…」

「主殿！」

私に駆けつけようとするエルに対し、アビスは笑みを浮かべて掌を向けてくる。

「きゃああっ！」

大砲でも撃ったかのような音と共にエルは吹っ飛ばされていく。

「エ…ル…がはっ！」

血反吐を吐く私をアビスは愛おしげに抱き締めてくる。

「モウ邪魔ハサセナイワ…コレデ主ハ私ノモノヨ…フフッ…」

アビスのよって血塗れになったエルが気がかりだ。

私の視線がエルに向けられていたことで憤慨したのかアビスはさらに私の胸を抉るようにしてくる。

「ぐふっ！あぐうああっ！」

「駄目ダヨ…主ハ私ダケヲ見レバイイノ…他ノモノニ目ヲ向ケルコトハ許サナイ…」

アビスは私を押し倒し顔を胸に寄せてくる。

「うぐああっ！」

胸の傷口にアビスの舌が捻り込んでくる。

生暖かい感触と共に激痛に苛まれてしまうのだった。

「レロォ…ピチャ…フフッ…主ノ血…美味シイワ…血モ肉モ命モ何モカモガ私ノモノ…姉者ニハ何一ツ分ケテアゲナイワ…アハハハハハッ！」

「あがあああっ…うがあああっ！」

アビスの顔は既に私の血で真っ赤に染まっていた。

これがかつて私を献身的に支えてくれたアビスのもう一つの顔なのか…。

「や…めろ…こんなことをしても…私はお前のものにはならないぞ…あぐっ」

タルタロスの心臓になっていることで欲望が剥き出しになっているに違いない。

少しでもアビスを正気に戻すために呼びかけねば…。

「フフッ…主ノ考エハ読メルヨ。ダケド、残念ネ。コレガ本当ノ私ナノ…」

「まさか…本当にお前は…」

血に塗れたアビスは悲しげな笑みを見せて、唇を寄せてくる。

血の味がする口付けだった。

『これが私の本当の姿だよ…主…』

……。

……。

……。

……。

……。

……。

……。

……。

……。

……。

私はいつも姉者の影にいた。

誰もが姉者を讃えている。

何故なの？

私よりもほんの少し早く生まれただけなのに…。

いいえ、私が力不足だからよ。

だから、私は頑張る。

いつか姉者に私の背中を見てもらえるように…。

……。

……。

…。

私しか知らない場所に何故か姉者がお見通しと言わんばかりに見つけ出してくる。

姉者は私が黙々と戦闘訓練している姿を感嘆するように見つめてきた。

「アビスは凄く頑張りますね。私もアビスを見習うようにしないといけませんね…」

「止めてよ。私はただ当然のことをしているだけだよ」

本当に止めて欲しい。

姉者は私の思惑を余所にいつも過剰に踏み込んでくる。

だから私と姉者は里でも評判の仲が良い双子として有名になってしまう。

私はその気は微塵も無いというのに…。

「それを当然と言えるアビスは本当に凄いのですよ。私はアビスが羨ましい…」

「姉者…」

何故だろうか？

その時見せた姉者の弱音が何故か心震えるような言葉に聞こえてしまった。

……。

……。

…。

あの日以来、姉者は見違える程に頭角を現していき、次期頭領最有力候補にまで選ばれていた。

悔しかったけど、誇らしくも思えた。

私が姉者を変えたからこそ得られた栄光なのだと思えたから…。

姉者の栄光は私の栄光。

姉者の喜びは私の喜び。

私と姉者は全てが繋がった双子なのだと思えて嬉しかった。

……。

……。

…。

その後、私も姉者に次ぐ実力者として名を馳せていき、次期頭領候補の次席となった。

「うかうかしているとアビスに負けてしまうかもしれませんね」

「姉者がうかうかしてなくても私が勝ってみせるんだからね」

私はとうとう姉者と同じ位置に立つことが出来たんだ。

何だか嬉しくなってしまう。

姉者に嫉妬することも無く、一人の女として素直に姉者を尊敬することも出来た。

もう私は姉者の存在無しでは語れない程に繋がっている。

だから、恐れるものは何も無い。

私達はパラディスムが誇る最強の双子なんだ。

……。

……。

…。

ある日、私と姉者にいよいよ任務を言い渡される。

ヴァルキリア帝国に間者として潜入する任務だった。

ヴァルキリアは史上でも類を見ない才媛と謳われるヒュプノスが軍師となってから急激に軍事を拡大させていたのだ。

その背後に何者かが糸を引いている可能性があると頭領と御館様が見ているらしい。

私と姉者はヴァルキリアに潜入し、暗部としてヒュプノスの配下につくことになった。

「エル、アビス。万一任務に失敗しても必ず生きて帰ってくるのよ」

「異な事を…。必ずや任務を果たしてみせます。頭領」

「それに姉者には私が付いているのだから失敗なんてしないよ」

深刻に受け応える姉者とは対称的に陽気に応える私。

最近の私の立ち位置は場を明るくすることだった。

姉者や頭領は尊敬しているけど、どうも深く考えすぎて内に篭もってしまいそうな危うさがある。

だけど、それもまた私の存在意義が実感出来るので嬉しくもあった。

「そうですね。私にはアビスが付いています。ですから、失敗することは有り得ません。どうかご安心してください」

姉者は私の態度に釣られるように笑顔を見せて頭領に応えていく。

「アビス、頼みましたよ」

「はい、頭領」

頭領も安堵するような微笑を浮かべてた。

私と姉者が揃えば出来ないことは無い。

……。

……。

…。

ヒュプノスとタナトス。

二人は私と姉者とはある側面で似ていた部分があった。

立ち位置からしてタナトスが私ならヒュプノスは姉者なんだろう。

違いがあると言えば、二人とも極端過ぎていた。

ヒュプノスは冷徹とも言える程に合理的で一言で言えば残忍になった姉者だった。

タナトスは理屈よりも力で示す類で感覚で物事を考える類、いわば私に少し似ているように見えたのだ。

「貴様が最近話題になっている冥府の御使いとして名を売っているパラディスムの者なのか」

「私が何と言われようとも貴女様には関わり無きこと。用件はそれだけですか？」

姉者とタナトス様はすこぶる仲が悪かった。

「この俺を相手に良い度胸だな。貴様なら少しは楽しめそうだぜ」

「任務中の私には娯楽は必要無いものなので一人で勝手に楽しんでくださいませ」

姉者とタナトス様は互いの獲物を振るって地形が変わる程にまた喧嘩を始めていた。

止める身にもなって欲しい。

だけど、姉者とタナトス様は喧嘩しているはずなのに何処か楽しげにじゃれ合っているかのように見えた。

それで私が止めに入ると双方共にあっさりと引いて場を収めてくれる。

まるで申し合わせたかのように…。

……。

……。

…。

ある日、ヴァルキリアに重大な事件が起こる。

ブリュンスタッドに戦を仕掛けたタナトス様は何と一騎打ちに敗れて捕虜になってしまったとのことだった。

私はともかく姉者はかなり衝撃を受けていたようだった。

何しろ喧嘩友達であるタナトス様が敵国に囚われてしまったのだから驚いて当然だろう。

さらにタナトス様の姉であるヒュプノスに呼び出され、任務を言い渡される。

「タナトスを打ち負かした者の名は最近ブリュンスタッドで英雄と持て囃されているロストという名の者だ。そやつを捕らえ、私の下に差し出すのだ」

「御意」

私と姉者はロストという男を捕獲する任務を受けることになった。

それが私と姉者の運命を大きく動かすことになるとはその時露ほどにも思わなかった。

私と姉者はヴァルキリアとブリュンスタッドの戦場に不可視の術を使用して身を潜めることになる。

そして、遂に目標を見つけ出す。

目標は戦場で無茶苦茶に魔法を駆使してヴァルキリア兵を薙ぎ倒していた。

さすがタナトス様を打ち負かすだけあって規格外の戦闘力の持ち主だ。

パラディスムでもこれ程の戦闘力を持つ者は見たことが無かった。

「姉者…」

「私達の任務は目標を抹殺することではありません。交渉すれば何とかなるかもしれません」

目標は狂戦士と交戦状態に入っていた。

「お前の腹を引き裂いて頂いてあげるわ！ひゃはあああああっ！」

狂戦士の一撃はタナトス様ほどではないにしろ、常人では成す術もなく斬り捨てられる速度と威力があった。

だけど、目標ロストは容易く狂戦士の斬撃を回避し、素手で無力化するに至っていた。

改めて恐るべき戦闘力であると実感し、思わず身震いしてしまう。

そんな私を安心させるように姉者は私の肩に手を置いて、ロストに向かって声を掛けていく。

「見事です。正規兵を物ともしない実力。さすがはタナトス様をうち負かしただけはあります…」

姉者の声が聞こえただけで、ロストは落ちていた矢を拾って私達の

方に向かって投げつけてくる。

私は姉者を庇うように何とか矢を叩き落とし、姉者の背後に隠れてロストとの交渉を見守ることにした。

ロストは姉者の交渉を蹴り、戦闘の意志を見せてくる。

やっぱりこの展開になってしまうのね。

私は姉者と連携して目標を討つことにした。

「致し方ないですね。ヒュプノス殿下は私にこうも命じしました。死体でも構わないと…」

姉者の言う通り、私達パラディスムは任務は絶対に完遂させるもの。

依頼主が戦乱を巻き起こしている者だとして変わらない。

それにこの目標は不遜にも姉者の素顔を見た上で交渉を蹴っていったのだ。

まさに万死に値する所行である。

タナトス様を倒した相手であろうとも私と姉者二人掛かりで掛かれば負けるはずがない。

そう確信して私は姉者と共にこの不届き者を抹殺しようと刃を向けた。

だけど…。

……。

……。

……。

……。

……。

……。

……。

「懐かしいわ。不届き者だと思った男に私と姉者が負けて、さらにロットなんて偽名を使って誤魔化そうともしていたしね。本当に主はどこまでも不届き者だったわ…」

唇を離し、懐かしげに微笑んでくるアビス。

「それでも運命を感じたわ。姉者を屈服させた男に出会えたのは初めてだったから。だから、私も姉者と同じく貴方に惹かれていったのかもしれない。ううん、私は姉者以外の人間に興味を持ったのよ」

アビスは潤んだ目で私を見つめてくる。

きっかけは戦場で二人を打ち負かしたことだが、アビスが執着していたエルを屈服させた意味が大きかったのかもしれない。

「きっかけは姉者だったかもしれないけど、そうね。私は貴方の強烈な個性に惹かれ、恋をしたのだと思うわ。今では姉者よりも貴方を手に入れたいと思っているしね…」

「私にとっては本当に運命の出会いだったからな…」

懐かしむ私に対し、アビスは次第に潤んだ目から暗い影を差してきた。

「だけど、お互いに辿るべきだった運命が狂わされて時でもあったかもしれない…」

アビスは再び私の頬を挟んで唇を近づけてくる。

「貴方に会わなければ私と姉者は…んんっ」

藍錆色の唇が私のそれに包み込むように重なっていく。

……。

……。

……。

……。

……。

……。

…。

「何故ですか！何故姉者が人質にならなければならなのですか！」

狂戦士達に絡め取られる姉者を見て、私は必死にヒュプノスに訴えた。

私と姉者はきちんと任務を果たして、何一つ落ち度は無かったはず。

それなのに…。

「貴様等はロストを繋ぎ止めるための鎖だ。本当は二人共捕らえるつもりだったが、片方残した方が亜奴の良心を刺激させることが出来よう…」

「それだったら私が…」

前に出ようとした私をヒュプノスの隣にいた狂戦士が私を殴り飛ばしていく。

「あぐっ！」

「日陰者無勢が私に指図するな！エルは切れ者故に何をしでかすか分かったものでは無いからな。故に貴様を残すことにしたまでだ…」

「アビス、私のことは大丈夫です。主殿を私の分まで支えるのです」

姉者は捕らえながらも気丈に振る舞って私を呼びかけてくる。

私と姉者はいつも一緒だったのに…。

だけど…。

……。

これで私は光になることが出来る。

……。

私は私だけで主を支えることが出来る。

……。

私は光となり影となって唯一の存在になれる。

……。

姉者、今までお世話になりました。

これからは私一人で主を支えて参ります。

だから安心して囚われていてください。

「ははははははっ…」

思わず笑いが漏れてしまった。

主はいつ帰ってくるのだろうか？

優しい主のことだから姉者が囚われてしまったことでさぞ落ち込ん

でしまうだろう。

だけど、心配することなんてない。

私が姉者の分まで慰めてあげればいいことだし…。

従者は私一人だけでもお釣りがくる程充分だ。

「早く帰ってこないかな、主…ふふっ…」

早く帰ってきて、主。

たっぷりと慰めてあげるから…。

……。

…。

慰めてあげようと思ったのに主は姉者の代わりを補充するようにケールという女性を連れて帰ってきた。

ケールは確かタナトス様と並ぶヴァルキリアの二枚看板の一人だ。

私が言うのも何だけど主は本当に物騒な女に縁があるみたい。

ヒュプノスも主のことを気に入っているようだったし…。

まあいいわ。

姉者さえいなければ他のどんな女が増えようとも私の立ち位置が変わることはない。

ケールとは仲良くしていくのもいいだろう。

私は物分かりが良い女であることを主に示しすこともやぶさかではないしね。

いずれ主に最も必要な女が誰なのかを教えてあげるのも悪くないわ。

……。

……。

…。

主にとって姉者の存在は思ったよりも根深いものだったらしい。

まるで姉者が最後に残した呪いのようだ。

忌々しい。

姉者はもうヒュプノスの単なる人形に成り果てているというのに主はまだ姉者に執着している。

私だけでは不十分だというの？

ヒュプノスもわざわざ人形になった姉者を見せつけてくれるなんて余計なことをしてくれたものだ。

だったら私も動き出さないといけない。

私と主の確かなる絆を作って捕らえてやるわ。

主の指を取って強引に噛みついていく。

「これはパラディスム家の掟とは関係無い。私があんたと契約したいと思ったから。これは私自身の掟に基づく契約よ」

主は押しに弱いから私が強引に進めてしまえば断れないはず。

「さあ、私の唇をあんたの血で染め上げて。私がロストの者であるという証を刻む想いを込めて…」

私を主の色に染め上げて。

姉者への想いを塗る潰していくように…。

「これは従者以上に深淵で神聖なる証、私はあんたの伴侶になったのよ…」

まさか主が既婚者で相手がタナトス様だということには驚いたけど、当人の彼女は行方不明だ。

「どうするのよ！私、タナトス様に殺されたくないわ！」

タナトス様はヒュプノスが姉者を人質にした所行を知れば私に負い目を持つはず。

だから私は何の気兼ねもなく主の隣に寄り添うことができるわけだ。

エクリアやケールもどさくさに紛れて主と契約を結んでくるけど、恐れることもない。

姉者以外の女に負ける気はさらさら無いのだから…。

……。

……。

…。

主がヴァルキリアの死者としてアースガルズに出立することになった。

最初は見送るつもりだったけど、アースガルズで私と姉者に続く実力者であるクロエが介入するとの情報を得た。

さらに洗脳された姉者がヨツンヘイムを襲撃した情報も入り、急遽私もアースガルズに出立することに決めた。

クロエが主に余計なことを言って、姉者に意識を向けさせる恐れがあったからだ。

私はアースガルズで主が控えている場所を突き止め、無理矢理に押し掛けてやった。

戸惑う主に姉者の話をして、揺さぶりを掛けてやって私という存在を刻みつけてやる。

久しぶりに逢ったのだから主にはたっぷり奉仕をしてもらってもいいだろう。

私は主を思う存分に堪能した後に状況を確認していく。

まさかとは思ったけど、やっぱり主は新しい女を侍らしていた。

名前はリー・ロンファンというフェイロン共和国で女英雄として名を馳せている女だった。

不遜にも主のことを「父様」と呼んでいた。

だけど、その不遜な態度も私のことを姉様と呼んでくれたので許すことにした。

それに何故か、ロンの姿が無邪気に姉者を慕っていた頃の私と重なって見えてしまう。

主に近づく女は全て敵だと認識していたけど、ロンだけは嫌いになれなかった。

問題のクロエだけど、案の定ヨツンヘイムや姉者のことを洗いざらい吐いて主はより一層姉者を意識するようになってしまった。

私としたことが何たる失態だ。

しかも主はクロエどころか後から付いてきた頭領すらも酒池肉林の構成員に入れようとしてくる始末だった。

姉者以外の女に負けるつもりはないけど、姉者に縁がある女達が脇を固めてくるのは不味い。

彼女達は口々に姉者が心配であることを口にしているのが問題だ。

それにとんだお邪魔虫達も姿を見せてきた。

主がブリュンスタッドで知り合っていた女達と再会したようだった。

別に脅威とも思えないけど、昔の知り合いということで私の知らない主を知っていることが気に入らない。

私の思惑とは別にクロエを無事に助け出して主はアースガルズの王になるかどうかの誘いを掛けられている。

ヴァルキリアを取るか、アースガルズに留まるかの運命の選択を強いられていたのだ。

ここでさり気なく自分の存在を誇示しておく必要があるかもしれない。

「言っておくけど、主の害悪になるようなことだったら私が許さないわよ」

主を気遣う健気な従者という立ち位置で他の女達に牽制してやるんだ。

「ご免なさい。けど、もう耐えられないの！主が泥沼の世界で主が藻掻いて苦しむ姿に！ただでさえ、私と姉者のために主がヴァルキリアに囚われてしまっているのに…」

自分だけが損得勘定無しで主に従う女であることを軽く思い知らせるためにもね。

これで主の中で私の株がより一層高まっていくわ。

「さすがは俺の旦那様だな。惚れ直したぜ！」

タナトス様は主の対する評価が高まったのか情熱的な接吻を与えていた。

その代わり他の女達の主への評価が高まったのは少し気に入らなかったけど…。

ともあれ主はヴァルキリアに囚われているとは言え、ケールや姉者のことがあるそう簡単にモーモスの薦めには応じないだろう。

だけど、ここでオイジュスが思いも寄らない方法で主の心を揺さぶってきた。

「私は神の前で偽りを装う者に祝福を授けることが許されないのです。民を裏切ることにもなります。もし、経歴を明かし、祝福を受け取って頂ければ、私は貴方様に何処へなりとも付き従いましょう」

さらにどちらを選んでも主に付いていくとも宣言もして…。

姉者ほどでは無いにしろ、オイジュスは要注意の女かもしれない。

清楚な顔をしてかなり計算高い女のようだ、油断は出来ないわね。

それにしても姉者以外の女には負けないつもりでも余りのも多くの女が集まってきている。

さらにクロエや頭領のような姉者を擁立しつつも自己主張も忘れない等と手強い女達もいる。

中でも姉者以外で一番警戒すべき相手はクロエだ。

クロエもまた姉者に憧れていた女であり、どこか私と立ち位置が似ていたのだ。

油断していると私の立ち位置がいつクロエに取って代わられるか分かったものではない。

だからクロエには特に警戒しないといけない。

私こそが主の一番でなければならないのだから…。

……。

……。

…。

ある日、主はモーモスと共に森から帰ってくるのを見かけた。

しかもモーモスとも親密そうな関係になっているときている。

全く主は何処までも女に関しては油断ならない男だった。

これは少々お仕置きもとい調教しないとして立場を分からせる必要があるかもしれない。

「ケール、主を丁重に連行、いえ、運んでくださりますか？」

「畏まりました、アビスお嬢様」

丁度ケールもいることだし、誰が一番主を愛しているか男の証にたっぷりと教えてあげた。

……。

……。

…。

モーモスが主に王になることを薦めて早一週間。

荘厳な祝典を始めるかのような厳粛な雰囲気を神武闘式の会場に漂っていた。

「私はアースガルズの王となる！」

私は顎が外れる程に不意を突くようなモーモスの宣言を唖然して聞き入ってしまった。

それから日を改め、アースガルズは何時しか戴冠式の準備に勤しむことになってた。

モーモスの王位継承の宣言はアースガルズ全土に激震を走らせてい

たけど、誰も異議を唱える者はいなかったのだ。

モーモスは元々アースガルズを代表する女英雄である。

異国の英雄である主が王になるよりとむしろ諸手をあげて賛成する等と熱狂的な支持を持って迎えられていた。

けど、それはまだ別にどうでもいいことだ。

問題は…。

「そして、黒騎士ロース、いや、今は亡きブリュンスタッドの英雄ロスト殿には聖騎士を授与することを宣言する。異議があるものは申し出よ！」

まさか、王になることを薦めていたモーモスが王となり、さらに主を王直属の聖騎士に任命してくるなんて…。

「ロスト様、どうか聖騎士としてモーモス陛下を、そして、私を支えてください…」

「はっ！身命を賭して全うしとうございます！」

主が何だか遠くに行ってしまいそうな気がした。

新王モーモスと聖女オイジュスの腹心となったことで主はアースガルズという強力な後ろ盾を手に入れることが出来た。

主は本格的にヴァルキリアと敵対する意志を見せてきたのだ。

『私は何としてもエルを助けてみせる…』

戴冠式に出席する前に主が私に言った言葉。

これも全て姉者を救い出すために…。

けど、それも良いかもしれない。

もう私は主とは姉者ですらも足下に及ばない程の絆を深めてきたのだ。

姉者を救い出したことで本格的に私だけを見てくれる日がそう遠くない未来に訪れるだろう。

私はもう姉者に完全に勝てるまでの下準備は整えたのだ。

恐れることは何も無い。

大丈夫だ。

そう思っていたはずなのに…。

……。

……。

……。

……。

……。

……。

…。

「そう思っていたはずのに…私の立場を揺るがす女達が主の前に現れたのよ…」

アビスは憤怒の形相で自分の暴露話をしてくる。

それにしてもあれほど慕っていたと思っていたエルをアビスに敵対心を持っていたとは…。

私はエルとアビスの何を今まで見てきたというのだろうか…。

「貴方の身にいったい何が…起きたというのですか…アビス…」

「エル、無事だったのか…」

身体を引きずりながらもアビスに真意を聞きだそうとしてくるエル。

エルの表情は苦しげで今でも消えてしまいそうな程に儚いように見えた。

「まだ意識が保っていられるなんてさすがは姉者だね。理由はやっぱり私は姉者の影でしかないんだと思い知らされたというのかな…」

苦しげなエルに嘲るような笑みを見せるアビス。

結局私はエルの言うように関係を持った女達を本気で愛そうとはしなかったのか？

私は私なりに愛していたと思っていたが、全ては幻だったのか？

……。

分からない。

余りに色々なことを知りすぎたことで私の脳の処理が追いつかないでいる。

とにかくアビスがいう自分の立場を揺るがす程の女達とは一体何者なのかを聞かなければ…。

私は今までアビスと腹を割って話そうとはしなかったのだ。

だから今度こそアビスの話を全て聞き入れていかなければならない。

私とアビスの間にある因縁に決着を付けるためにも…。

第115話：従者

果たしてアビスの過去に何があったのか？

何が彼女を奈落の神となるきっかけとなったのかを私は知らなければならない。

「私は自分を過大評価し、姉者以外の女達を過小評価してしまったのよ。だから、私は…んっ」

アビスの藍錆色の唇が私の唇を包み込み、視界が真っ白になっていく。

私は引き続きアビスの過去の映像を観賞することになる。

……。

……。

……。

……。

……。

……。

……。

……。

…。

「主が神降ろしの儀を行ったの？」

「はい、アビス姉様。クロエ姉様から神武闘式でのお詫びを兼ねて戦力向上とのことで手ほどきを受けたと言っていました」

迂闊だった。

同じ里出身で気心が知れているということで油断しすぎていた。

クロエはアースガルズに甚大な被害をもたらしたとのことで被害者等に献身的な奉仕を行っていることは聞いていた。

しかも白の聖女オイジュスと対なる黒の聖女とまで讃えられていることも聞いた。

まさかこのような形で先手を打たれてしまうとは…。

「主は今どこにいるの？」

「はい、クロエ姉様が通っている教会に父様は一緒に行っています」

クロエは黒の聖女としての立ち位置を自分で確立させて主の側にいる。

それなのに私は姉者のお下がりのような形で従者という立ち位置に甘んじている。

血の契約で伴侶となったが、心情的にはまだ従者の域は越えてないだろう。

私と主の付き合いは身体は触れ合っても心の触れ合いはまだそれほどまで達してはいない気がする。

其れで果たして良いのかと私の中で問いかけられていた。

けど、それでも私は主の唯一の従者にして一番近しい者なんだ。

いずれ本当の意味で従者の枠を越えて伴侶として主を支えれるようになってみせる。

これは私にだけ与えられた聖域。

誰にも侵されるざる私の聖域。

その聖域がまさかこれ程までに脆く儚いものだったなんて…。

……。

……。

…。

主がアースガルズで構えている家に帰ってきたのは夕方になってからだった。

主の傍らにはまた見知らぬ女、しかも三人が我が物顔で陣取っている。

彼女達は一体何者なのだろうか？

「主、この女達は誰なの？」

主は悪戯が見つかった子供のように言い訳がましく三人の女達を紹介していく。

赤い髪の如何にも戦いに生きているような雰囲気を持つ女の名はメガイラ。

青い髪の冷徹な眼差しを醸し出す女軍人の名はティーシポネー。

緑の髪の老成とした熟練の女戦士の名はアレークトー。

どれもが一癖も二癖もあり、一筋縄ではいかない女達だと見て取れた。

「私は主の従者を務めてるアビス・パラディスムよ。あんた達は？」

「おい、あんたがロストの従者だって？冗談も休み休みに言えよ」

「そうですね。貴女如きがロスト様の従者だと名乗られていてはわたくし達の品性も疑われてしまいます。ロスト様、矮小なる者に身の程を教えても宜しいですか？宜しいですよね？でないと殺しますよ…」

私の問いを無視して侮辱とも取れる言葉を言ってくる失礼極まりない女達。

無礼な女達への怒りが募って思わず私の殺気が漏れてしまう。

「おい、あたい達に喧嘩を売ってるのか？なかなかの殺気だけど所詮は人間無勢取るに足らん弱々しい殺気だね」

「余りにも弱い殺気に殺す気が失せてしまいましたね。先ほどの無礼は許してあげますから疾く去りなさい」

余りの言いように私も殺気を飛ばすよりも呆れる気持ちが高まってしまった。

ロンやエクリア、ケール等と色んな女達が主の側にいようと取るに足らないと思っていたけど、今回は勝手が違っていた。

私に明らかに敵対意志を見せつけているという点だった。

「メイ、ティー。アビスは私の大事な女だ。もし、今後アビスに侮った態度で接するのであれば、天に送り返してやるぞ」

「ご、ごめん、ロスト…」

「申し訳有りません、ロスト様…」

主は私のために女達の態度を窘めてくれた。

私は主にとって大切な女だという実感を感じさせられ、私は優越感に浸ることが出来た。

女達には様を見ろという目で見つめてやる。

赤と青の髪の女達はそんな私を悔しそうな目で見ていたのに対し、緑の髪の女は悔しがることなく頭を下げてきた。

「妹達の無礼、真に申し訳なかった。儂はガイア様の親衛隊エリニュスの隊長であり、この愚妹等の姉であるアレークトーと申す者だ。気軽にアレクとでも呼んでくれていい」

嫌悪剥き出しだった二人とは対照的にアレークトーと名乗った女性は紳士的な対応をしてくれた。

私は差し出してくれたアレクの手を取って握手に応じてしまう。

アレクはどこか姉者のように見えてしまう。

だからなのだろうか、先ほどの無礼な二人よりもよほど厄介な存在のように思えた。

「儂等は神降ろしで久しぶりに現世に降り立ったことから何分常識や作法には疎い。従者の先輩たるアビス殿にはご指導願いたいが、どうであろうか？」

アレクは姉者の似ていることも相俟って嫌な女でないことから無下にすることは出来なかった。

それよりも神降ろしと言ってたけど、アレク達三人は神だということなの？

「そんなことよりもあんた達は主が呼んだ神なの？」

せっかく真摯に私に関わろうとしてくれたアレクに失礼極まってしまったけど、それ以上に神であるかどうかが気になってしまった。

私の失礼な対応にアレクは特に気分を害した様子も無く、逆に申し訳無いように頭を下げてきた。

「自己紹介が不十分であったことをお詫びする。私達は確かにロスト殿から呼び降ろされた上級神だ」

言葉を失うとはまさにこのことだった。

主は常人であれば絶対不可能とされていた上級神をしかも三体呼び寄せる偉業を成していたんだ。

しかも本体を実体化させるという離れ業もやっているときている。

神を真の姿に実体化させるのは人では有り得ない程の膨大な魔力を要する。

下級神ですらも真の姿を形作るためには世界有数の魔術師でもやっとのことだったと聞いたことがあった。

全く主は何処まで規格外なんだろうか…。

「儂等の自己紹介を終えたところで改めてお願いしてもいいだろうか？」

アレクは私を伺うような目で見つめてきている。

少し可愛いかなと思ってしまう自分がいたことに驚いてしまった。

「う、うん、別にいいけど…私はアビス…アビス・パラディスム」

「心より感謝する。さすがはロスト殿の従者、出来た女だ」

手放しで褒められてしまいむず痒い感覚に襲われてしまう。

何だか姉者に褒められたようでくすぐったく感じてしまった。

私はアレク等エリニュスと行動を共にすることなる。

これが私とアレクとの出会いだった。

……。

……。

……。

……。

……。

……。

……。

……。

…。

アビスの口付けを受けながら私は内心驚いていた。

まさか、この世界の私はガイアやエリスではなくエリニュスを神降ろしをして契約を結んでいたというのか。

やはりこの世界の私と今の私とでは辿ってきた道筋は違ってきているようだ。

そう言えば、アレクからは第二次聖戦時では私の私兵として共に戦っていたことは聞いていた。

そして、タルタロスとの最後の戦いの時でも…。

「んちゅぱ…主、他の女のことを考えてるわね。唾液の分泌が僅かだけど苦みが感じてきた…」

「唾液の味で分かるものなのか…」

アビスは妖艶な微笑を浮かべてお強請りするように唇を差し出してくる。

「今度は主から唇を重ねてきて…」

私は一瞬視線をエルに向けてしまう。

彼女はただ私とアビスが抱き合っている姿を見るだけだった。

エルもまたアビスと同化していることから映像は見えているはずだ。

アビスの藍錆色の唇が官能的に私を誘ってくる。

考えてみれば唇を重ねなくても私もまたアビスと同化しかかっていることから映像が見えてくるはずだ。

だが、ここは敢えてアビスの言うことを聞いた方がいいだろう。

まずは真実を聞き出してからのことだ。

本当はアビスの蠱惑的な唇と重なりたいがための言い訳に過ぎないが致し方ない。

アビスは私の思惑を察したかのように微笑を浮かべて、無防備に唇を差し出してくる。

私は緊張しながらも自分からアビスの唇に重ねていく。

アビスの柔らかさと共に過去の記憶が映像として流されていく。

……。

……。

……。

……。

……。

……。

……。

……。

……。

…。

「やはりエクリアが裏切ったというのか。いや、裏切ったのは私の方だったのだろうか？」

「主は元々ブリュンスタッドの兵士だったのだから裏切ったというのは当て嵌まらないと思うわ」

主は元々私と姉者の命を助けるためにヴァルキリアに動向して済し崩し的に従っていたに過ぎないんだ。

だから主は何一つ気に病む必要は無いはずだった。

だけど、ヴァルキリアを裏切ったことよりも気がかりなことがあったからなんだろう。

「エルは無事なのか？」

やっぱり主は姉者のことを気がかりにしていた。

今まで押し殺していた思いがエクリアが離反したことで吐露されているんだ。

「ロスト殿、気を落としている場合ではないぞ。ヴァルキリアがアースガルズに挙兵しているとの情報もある。さらにビフレスト皇国がアースガルズに進軍しているとの情報もあった」

ヴァルキリアのみならず、ビフレストまでもがアースガルズに進撃するなんて…。

ビフレストはヴァルキリアが唯一勝てなかった国だということは聞いたことがあった。

けど、他国に決して侵略をしようとしなかったことから「眠れる獅子」とも呼ばれていて脅威ではなかったはずだった。

それが沈黙を破ってアースガルズに攻め入ろうとしている。

これは一体何の悪夢なの…。

震える私を主は力強く抱き締めてくれた。

「大丈夫だ。私は何としても生き残る。それは皆も含めてだ」

何て頼もしいんだろう。

主は最初はどこか臆病で馬鹿な所があったけど、戦いを乗り越えていくごとに自信の現れが出ている感じだった。

改めて私は理想の主に巡り会えて幸せだと実感してくる。

だけど…。

「そして、必ずエルを助け出してみせるぞ」

私は主に抱かれながらも胸を痛くなるのを感じる。

主が強くなったのは囚われてしまった姉者が原因なのかもしれない。

姉者は遠く離れても尚主に多大な影響を与えてるんだ。

何だか切なくなってしまって主の腕から離れてしまった。

「アビス…」

「ごめん…主…」

本当はあのまま抱きついて慰めてもらいたかったのに何で素直になれないんだろう。

私は逃げるように主の下から去ってしまった。

……。

……。

…。

アースガルズの庭園は綺麗で何処かヨツンヘイムの里を思い出して

くる。

けど、もうすぐここは戦場になって無惨な光景に代わってしまうのだろう。

だけど、あんまり危機感を感じないのは何故なのか？

主だったら何とかしてくれるという安心感なの？

それとも…。

「ここにおられたか、アビス」

不意に聞き覚えがある声が私を呼びかけてくる。

「アレク…様」

アレクは少し怒ったような顔をして私に近づいてきた。

「こら、アレクで良いと前に申したであろう。儂とそなたは同じロスト殿の従者。いわば同志のようなものだ」

私はいつの間にかアレクとは親友と呼んでもいいぐらいに親しくなっていたのだ。

ティーシポネーとメガイラとも初対面の印象は最悪だったけど、話してみると面白くてすぐに打ち解けることが出来た。

彼女達からも愛称のティーとメイと呼ぶことが出来る仲になっていた。

「そうですよ。悪いのは全部ロスト様なのです。貴女は何も悪くはありません」

一番親しくなれたのは「殺す」が口癖のティーだったのかもしれない。

隙有れば抱き締めたり、接吻してきたり等と過剰な愛情表現もしてくる程だったのだ。

ティーに抱き締められながらも私は自分の立ち位置について振り返ってみる。

主を献身的に支える女房的な役割をやってきたけど、何か物足りない気がしてきていた。

主は常に戦場に赴いて戦ってきている。

私はただ主の帰りを待つ主婦のような役割だ。

果たして私のやっていることは主の従者として適切だったのだろうか？

「アビス、余り深く考えすぎたらいけませんよ…んっ…」

「ティー…」

ティーは慈愛に満ちた眼差しを向けて私の額に口付けをしてくる。

何だか頭領に抱きしめれた時以来の安心感だった。

「ティー姉さんの言う通りだ。あたい達は共にロストの従者を務める仲なんだしな…ちゅ」

メイも私を労るように抱き締めて口付けをしてくれる。

本当に何て出来た神様達なんだろうか。

同じ従者だと彼女達は言ってくれるけど、彼女達とでは比べることが失礼な程に私は従者として劣ってしまってる。

彼女達も悩んでいることがあるはずなのに私を気遣ってくれているのだ。

「覚えておくのだ。そなたにはそなたの良い所がある。ロスト殿はそなたを何時だって必要としてくれているのだ」

アレクの言葉が身に染みてくる。

その言葉を私は今まで聞きたかったのかも知れない。

けど、やっぱり…。

「ありがとう、アレク…」

「構わぬよ。儂等はそなたの親友なのだからな…んっ」

アレクは親愛の証として唇を私のそれに重ねてくる。

女同士の口付けだけど、私は心地よく受け容れた。

……。

……。

…。

その後、私達は新国王モーモスの呼びかけにより玉座の間にて軍事会議に出席することになった。

従者である私とエリニュスは末席で話を聞くことになる。

国王となったモーモスが軍事会議を開き、首脳に現状を説明していく。

「エクリアの裏切りにより、我がアースガルズは窮地に立たされてしまった。現状ではビフレストは無敵の女将軍モロスが直接指揮を執って進軍している。一方でヴァルキリアは斥候の情報だとおよそ一万ほどの狂戦士を率いて進撃しているらしい。指揮を執っているのはアパテー…」

「アパテーだと！」

モーモスの説明にいち早く反応したのは老成としたアレクだった。

冷静沈着であるはずのアレクがらしくもなく取り乱している。

「まさかあの狂女が…」

「嘘だろ…」

メイとティーもまたアパテーの名を聞いてただ事でないと分かる程に狼狽していた。

アパテーの名前が出たことで反応していたけど、一体何者なのか？

「陛下の前だ。控えろ、アレークトー殿」

モーモスの側近である幕僚が窘めてくるがアレクを鼻で笑って答えてくる。

「儂が控える相手はただ一人ロスト殿のみぞ。そちらこそ控えるがよい。儂は上級神である。人間の王如きに下げる頭は持ち合わせておらぬわ！」

「良い。これよりエリニュス殿は盟友として迎える。アレークトー殿、非礼をお詫びする。どうか意見を聞かせて頂けないだろうか？」

モーモスは国王でありながらアレク等に頭を下げてお願いしてくる。

「陛下、頭をお上げになっ…」

「お黙りなさい」

幕僚達は何か言おうとするが、オイジュスが睨みを聞かせてためか、沈黙する。

普通はモーモスが睨みを利かせてオイジュスが宥める役が似合うと思ったけどそうでもないようだ。

オイジュスは聖女の皮を被ったとんだ食わせ者の女なのかもしれない。

「モーモス陛下、そなたの誠意を受け容れよう。儂こそ少々短慮であったようだ。許して欲しい」

アレクもまたモーモスを認めたのか神でありながらも人間に頭を下げることでモーモスの面子を立てていった。

主は完全に置いていかれているのか、アレク等に全て丸投げしている。

まあ、元々主は考えるのが苦手だったからね。

けど、主が丸投げにしてるのもアレク達に絶対的な信頼を寄せているからなんだろう。

何だか胸が痛かった。

従者でも伴侶でも何でもない、ただ側にいるだけの女だ。

私は姉者以外の女には負けないつもりでいるはずだった。

けど、アレクには負けそうだと思っている私がいる。

伴侶ではないけど、少なくとも従者としては…。

「アパテーは恐怖に怯える姿を見ることを好む最悪の上級神だ。太古により封じられし忌まわしき神の眷属でもあったが、まさかヴァルキリアに関与していたとはな…」

「忌まわしき神とやらも関与している可能性があるのか？」

アレクの説明にモーモスはさらに質問してくる。

ただでさえ狂戦士等と恐ろしい奴等がいるというのにさらに忌まわしき神が関与しているなんて考えたく無いことだ。

「その可能性はあるが、先ほど言った通り忌まわしき神は封印されていて身動き取れない状態だ。上級神は基本的により強大な神の命令しか聞かないからな。アパテーを従わせる者、即ち忌まわしき神と同等かそれ以上の力を持つ者が背後にいる可能性がある…」

「とにかくそのアパテーとやらがモロス将軍並に厄介であることは分かった。さらにヴァルキリアには忌まわしき神、あるいはそれに相当する化け物がいることも…」

「問題は化け物が率いるヴァルキリアとビフレスト両陣営から挟み撃ちにされていて、戦力をどう分断させて迎え撃つかが鍵となるわね」

モーモスとアレクの話に元ブリュンスタッドの女将軍アイリウスが介入してくる。

「ビフレストの英雄モロスはタナトスと共に戦ったことがある僕から言わせてもらうと間違いなく一騎当千という言葉が生温い程に強大な敵だったことは断言するよ。僕とタナトスを含むヴァルキリア軍は実質モロス将軍一人に壊滅されたようなものだからね…」

「忌々しい限りだが、ケールの言う通りだ。ビフレストというより

はモロス一人に負けたようなものだ。次相見えても勝てる気がしないぜ…」

ヴァルキリアが誇る二枚看板がお手上げと言わんばかりにモロス将軍の強さを口々に語ってきた。

会議はモロスの強大さに暫し沈黙していた。

ただでさえエクリアの裏切りで混迷状態だというのに敵の戦力の恐ろしさを認識させられて打つ手が分からない状態なんだ。

「厄介な女に目を付けられてしまったものだ…」

主はまるでモロスに逢ったことがあるような口振りで恐れているようだけど、何か因縁があるのだろうか？

それよりもアイリウス将軍の言う通り、どうヴァルキリアとビフレストの挟撃を如何に打開するかだけど…。

「質問なんですけどアパテー率いるヴァルキリア、モロス将軍率いるビフレスト、どちらの方が戦いにくいですか？」

アイリウス将軍と同じブリュンスタッド出身のエリアルト将軍が質問を投げかけてくる。

ヴァルキリアとビフレスト、どちらの方が厄介なのかと。

「ヴァルキリアはアパテーに関しては詳細不明だけど、狂戦士部隊に関しては僕とタナトスは嫌という程に思い知らされているよ。それにヴァルキリアと交戦したブリュンスタッドのお二方もご存じだ

と思うよ。彼女達は一人一人が僕やタナトスの劣化版だと考えてくれたらいい。つまり並の兵士では一人討ち倒すのに多大な人数を犠牲にさせるほどの手練れだということさ…」

「さらに言えば、軍隊としての質はアースガルズは愚か、ビフレストよりも遙かに上だと言うことは確かだな。だが、ビフレストのモロスはそれにお釣りが出る程強大無比だ。なんせ俺とケール、狂戦士部隊というヴァルキリアで考える限りの最強編成で挑んだにも関わらずモロス一人に惨敗したわけだからな…」

「つまりデイモスに関しては不明だが、狂戦士部隊よりもモロス一人の方が遙かに強大だということだな。アレク殿、汝等は上級神であると聞いたが、汝等であればモロスに勝てそうか？」

モーモスはタナトスとケールの話を吟味して、再びアレクに質問してくる。

アレクは首を横に振って応えた。

「儂等ではモロスには勝てぬ」

「モロスの正体は神でありながら人として生きているはぐれ上級神なんだよ」

「さらに言えば太古の時代から生きる死と運命を司る神だ。わたくし等とは格が違います」

アレクだけでなくティーやメイも苦しげにモロスには勝てないことを告げてきた。

だったら…。

「だったら主だったらモロスに勝てるの？」

私は思わず口に出してしまった。

一同が主に注目してくる。

「ぬっ！」

主は挙動不審になって自分を注目してくる人達を見回す。

「無論、儂等三人掛かりですらも撃退したロスト殿であれば十二分に勝機はある」

アレクは私の問いに笑みを浮かべて応えてくる。

「なら決まりね。ロストを率いる少数部隊でビフレストを迎え撃つ。他は全部ヴァルキリアに当たらせればいいわ」

アイリウスはアレクの言葉に便乗するように戦力分担の策を披露していく。

けど、主一人でビフレストに当たらせるなんて…。

「ビフレストは実質モロス将軍一人で成り立っているようなもの。だったらこちらも最強の戦士を一人ぶつけていけばいい。モロスさえ何とかすれば後は何とでもなるでしょう。だけど、ヴァルキリアに関しては不確定要素が多いわ。アパテー然り、その背後にいる存在のことも。もしかすると思わぬ伏兵が潜んでいる可能性がある。

だから、ロストを除くアースガルズの戦力全てをヴァルキリアに投入するべきよ」

「けれど、ビフレストももしかすると背後に何者かが潜んでいる可能性が無いとは限りません。守護神であるモロスが本国を差し置いて前線に出てくるのですから…」

アイリウスの提案に反論したのは頭領レテシア様だった。

確かに滅多に前線に出ないモロスがいきなり行動を起こしたんだ。

何者かが糸を引いてる可能性があるとも考えられる。

「どちらかと言えば今回の件はヴァルキリアにあると考えるのが妥当だ。発端はエクリアの裏切り、そして、ヴァルキリアの進軍と同時にモロス将軍の遠征。それぞれの時期が余りにも重なりすぎている。おそらくエクリア等がビフレストに情報を流したことでビフレストが動き出したと考えるのが自然だろう。ビフレストはヴァルキリアの策に引きずり出されたわけだ」

モーモスはビフレストの進撃やエクリアの裏切りの全てがヴァルキリアの何者かが仕組んだことと考えてる。

今回の一件に関して仕組んだのはヒュプノスかもしれないけど、指示を仰いだのは私やケールも知らない正体不明の者かもしれない。

忌まわしき神と同等の力を持つ者、それこそアパテーを従わせる程の者が背後で糸を引いてるのだろう。

それにアパテーの件についてアレク達はまだ何かを隠しているよう

に思えた。

「私はアイリの言う通りの作戦に従う」

今まで黙って聞いていた主がアイリウスの作戦を支持してきた。

あの滅多なことで危険なことをしないと思っていた主が自分で進んで危険な役割を引き受けるなんて…。

「主！危険だよ！」

「いや、モロスとはアースガルズに来て間もなくで逢って、借りが出来たのでな。いわば因縁というものだ…」

主は目を泳がせながら如何にも後ろめたいことがありそうな感じで言ってくる。

まるで悪いことをしてしまったから必死に弁解しているように見えた。

「どの道、私以外では誰もモロスを止められないのだろう。エリニュスですらも勝てないとなればな…」

「確かにそうね。モロス将軍との間で何があったのかは大方予想は付くけど、ロスト以外ではモロスに対抗出来ないということは確かね…」

アイリウスは主の全てを悟った上で弁護している様子があった。

私の知らない主を彼女達は沢山知っている。

何だか置いていかれてしまってるような気がして、寂しくなってきた。

こんな時に姉者がいてくれたら…。

……。

私は何て事を考えてしまってるのだろうか…。

もう姉者には頼らないと思ってきたのに…。

「アビスはアレク達と共にヴァルキリアを迎え討て。もしかするとエルが戦場に出てくるかもしれないからな…」

「姉者が…」

姉者はヒュプノスに洗脳されて完全にヴァルキリアの先兵になっているのだから戦場で姿を現す可能性は十二分にある。

「今度はお前がエルを助ける番だ…」

「主…」

そう言えば、アースガルズに訪問したときに主に今度は私が姉者を助けることを誓ったのだった。

主はあの時のことをちゃんと覚えてくれていたんだ。

そうだ、今まで頼りっぱなしだった姉者を私の手で助け出すことが

出来れば何かが変わるかもしれない。

私だけの何かが手に入るかもしれない。

だったら私は姉者を見事に助け出し、主の帰りを待てばいいんだ。

「必ずモロスを倒してお前達と合流してみせる。だからアビスはエリニュスと共にいてくれ」

「分かったわ。必ず迎えに来てね、主…んちゅ」

私は願いを込めて主の頬に口付けをする。

自分を勝利の女神だなんて自惚れていないけど願掛け程度にはなると思った。

「方針は決まったようだが、ヴァルキリア戦に挑む者達に言っておく。アパテーには絶対に手を出すな。奴は多分、道化師のような派手な姿をしていて仮面を被っているはずだ。奇天烈な服装を纏っている者はまずアパテーだろう。奴と遭遇したら何もせずに逃げろ。奴は儂等エリニュスが迎え討つ」

アレクが皆に念入りにアパテーに手出し無用であることを伝えてくる。

アパテーが恐ろしい存在だということは何となく分かったが、アレクの表情は尋常ではなく真剣だった。

どちらかというとモロスよりもアパテーの方をよほど警戒しているようにも見える。

「分かってるよ。上級神の相手は上級神にお願いする方がいいだろうしね」

「俺も身の程を知らないわけではない。貴様等に任せるしかないだろう」

ケールとタナトスは反対することなく同意してくる。

タナトスは粗野に見えて意外と状況把握は長けているらしい。

「私はアレークトー殿の様子からしてむしろモロスよりもアパテーの方を警戒するように思えますけど、ロスト様をビフレストに回して問題無いのですか？」

レテシア様はアレク達の態度がおかしいと気付いたのか疑問を投げかけてくる。

やっぱりアレク達のアパテーの対する警戒が余りにも過剰なのが気になったのだろう。

「要らぬ心配を掛けてしまっているだろうが、これは儂等の私怨だ。奴には多大な借りがある。今はそれ以上は聞かないで欲しい。頼む」

「分かりました…」

神でありながら頭を下げて頼んでくるアレクにレテシア様もさすがにそれ以上追求することが出来ず引き下がっていった。

モーモスはそんなアレク達のやり取りを見届けて手を叩き、軍事会

議をお開きにする合図を行う。

「これにて会議は終了する。各自英気を養って欲しい」

私は主に付いていくように玉座の間を後にした。

……。

……。

…。

主は控え室に戻ってから私を抱き締めてくれる。

「アビス、アレク達と共にヴァルキリアのことは頼んだぞ。エルのことも…」

「うん、分かってる。姉者のことは私に任せて…

そうだ、今度は私が助けることで私の存在を姉者に認めてもらう。

そうなれば私はもう姉者のついでとして見られないようになるんだ。

その時こそ真の意味で私と主の契約が成り立っていく。

形だけではない、本当の意味の契約が…。

「アレク、メイ、ティー、アビスのことは頼んだぞ」

主のお願いにエリニュス一同は意気揚々に頷いて見せていた。

「承知した。命に代えてもアビスは守ってみせるぞ」

「ロスト様に言われずとも可愛いアビスは全力で守り通してみせます。本当に殺しますよ？」

「アビスはあたい達の大先輩なんだから必ず守ってやるよ」

三人共如何にも私を守ると言わんばかりに抱きついてくる。

少し苦しかったけど、心地良くもあった。

こんな頼もしいみんなが私には付いてくれているのだ。

アレクのことは有能な従者として羨ましいと思ったけど、やるべきことは見つかったんだ。

もう私は姉者の影で怯えていた頃とは違う。

必ず姉者を助け出してみせて、それを証明するんだ。

私が私であることを見せつけるためにも…。

……。

……。

……。

……。

……。

……。

……。

……。

……。

「そして、私は戦場で出会ったのよ。失望と不正を司る悪魔の道化師に…」

アビスは妖艶に微笑み、口付けを私に与えてくる。

官能的で冷たい唇の感触が私を縛り付けていく。

その様子をエルは悲しげに見つめていることに気付きながらも私はアビスの接吻を受け容れる。

真実に辿り着くまで…。

第１１６話：血戦

もうすぐアースガルズの命運をかけた戦が始まる。

主はほぼ単身でビフレスト軍率いるモロスを迎え討って、私達アースガルズ全軍がヴァルキリア軍を激突する。

どちらも激戦になるのは必至なんだろう。

私は戦場で姉者と相見えたら果たしてどうするのだろうか？

姉者はレテシア様すらも退けた程に強大な力を得たとクロエから聞いている。

果たして私が姉者に勝てるのか？

もしかして私は…。

止めよう。

最悪の事態を考えすぎて萎縮してしまっては戦場で良い的になってしまうだけだ。

私は兵舎に赴いてアレク達の軍編成を見守っていく。

アースガルズ軍総大将は新国王モーモス陛下が務め、副官に歴戦の老騎士アルバート・フォンベルク卿が付く形となった。

近衛将軍としてメイが受け持ち、双翼として右府将軍をアレクと左

府将軍にティーが配置された。

客将としてタナトス、エリー、アイリ、ロン、ケール、主と義兄弟の契りを交わしたグレイブ殿下がそれぞれの部隊を持つ。

ちなみに私はアレクの直属の偵察部隊隊長としての地位を頂いた。

クロエとレテシア様は私を補佐する副隊長として付いてくれる。

「皆の者、初戦だが、この戦いでの行く末に全てが掛かっていると言っても過言ではない。勝てないまでも負けなければ我等の勝利だ」

モーモス陛下は諸将に檄を飛ばしていく。

さすがアースガルズの英雄として名を連ねただけあって堂々とした振る舞いだ。

既に王者としての貫禄を見せつけてるようであった。

「だが、負けない戦をやって退けても何度も戦を仕掛けられてしまえばどうなる？やがて疲弊し、遠くない将来に敗北は必至だ」

「問題の先送りとも言えるわね」

一方でタナトスとアイリの意見は厳しい。

彼女達は戦場を幾度も駆け抜けていることで耳を傾けざる終えない説得力を持っているだろう。

特にアイリはヴァルキリアによって国を攻め滅ぼされていることか

ら追求が厳しいのも無理はないと言える。

「確かにその可能性は無きにしも非ずだ。ヴァルキリアに関してはな…」

「ビフレストはそうでもないでも無いじゃろう。あの国はモロス一人により持ち堪えておるものじゃ」

モーモス陛下に追従する形に副官のフォンベルク卿が答えてくる。

「ふっ、つまりロストがビフレストをどうにかすれば我等がヴァルキリアに完全勝利する道が開けるというわけだな」

気障に答えるのは主と義兄弟に契りを交わしたグレイブ殿下だった。

彼は最初は主とは犬猿の仲だと聞いてたけどクロエの件で主の男っぷりに惚れて急速に親交を深めていったという。

特に女を侍らしたりすることに関しては本当の兄弟であるかのように意気投合してしまったらしい。

いわゆる助平兄弟ってやつだ。

その助平兄弟の傍らはアルセイヌ軍を率いて同盟軍として共に戦ってくれのが心強いと言えばそうだけど…。

「その通りだ。反ヴァルキリア同盟諸国の盟主たるビフレスト皇国さえどうにか出来れば周辺諸国が一斉に我等に味方に付いてくれる。完全なるヴァルキリア包囲網が完成するわけだ」

グレイブ殿下の説明に付け加えるようにモーモス陛下が言ってくる。
ビフレストさえ倒せば勢力図の均衡を崩したアースガルズに雪崩れ込むように周辺諸国が味方に付くだろうとの見解だ。
「つまり今回で隊長がモロス将軍を倒して凱旋するまで何とか持ち堪えれば勝ちということですね」
エリーは我が意を得たとばかり手を叩いて答えた。
それに対してロンも納得したように頷いてくる。
「アビス殿はアレク殿の指示に従い、戦況を視察報告を行って欲しい。必要とあれば独自の判断で動いてくれ」
「承知しました」
モーモス陛下の申し出に私は恭しく頭を垂れていく。
「ロスト殿が帰還するまでが正念場ですね」
「ロストならば必ず戻ってくる。モロス将軍になんか負けるはずがない」
クロエもレテシア様も主のことを信じて疑わないようだ。
私も主が必ず戻ってくることを信じている。
主はどんなに危機に陥ろうと必ず勝利を収めてきたんだから。

「私は祈ることしか出来ない無力な女ですが、それでも生きて帰ってくることを祈り続けています」

「必ず生きて帰る。そのための戦いだ」

盲目の聖女オイジュスに元騎士だったモーモス陛下が抱き合っている。

二人は聖女と騎士以前に共に育った親友だと聞いたことがあった。

モーモスもオイジュスに劣等感を抱いて対立したこともあったと主から聞いたことがある。

けど、今の二人は誰が見ても掛け替えのない親友同士そのものに見えてくる。

オイジュスが祝福を歌を紡いでくる。

ついにヴァルキリアとの戦争が始まるんだ…。

……。

……。

…。

レムリア平原。

かつて伝承で神々が地上に降りて戦った際に戦場になったという逸話があった。

その戦場に今私達アースガルズ軍と敵側のヴァルキリア軍が相対している。

私達偵察部隊は見晴らしの良い頂きで戦況を見守り、格部隊長に報告していくことが任務だ。

その際に罠を巡らし、隙有らば敵将を暗殺することも含まれている。

ヴァルキリアの総大将はヒュプノスの代理人にして副官であるエクリア。

その直属の指揮官がアレクが要注意とアースガルズに促していたアパテーだった。

アパテーらしき者は今のところヴァルキリア軍に見かけなかった。

奴は道化師のような派手な衣装をしていることからすぐに分かるとのことだ。

それよりも…。

「狂戦士達が大人しすぎる…」

私も姉者と共にヴァルキリアに従軍していたからこそ分かる。

狂戦士等は連携や戦術とはおよそ無縁の人の形をした野獣だったはずだ。

それなのに欲望に満ちた奇声一つあげずに黙々と陣形を整えている

のが気に掛かってしまう。

ヴァルキリアは戦争する度に戦力を増強させていく節があった。

今回も何かしらの仕掛けがあるのかもしれない。

メイ率いる部隊が進軍し、ヴァルキリア軍もそれに倣うように動き始めていく。

メイ部隊はともかく狂戦士達で構成されたヴァルキリアが一糸乱れない布陣で動いている。

何だか嫌な予感がした。

今回のヴァルキリア軍もまた一段と危険な匂いがする。

「始まりますね」

レテシア様の呟きと共に開戦を告げるラッパが戦場に響く。

「あたいに続け！」

近衛将軍メイの掛け声と共にアースガルズ兵がヴァルキリア軍に雪崩れ込んでいく。

戦争が始まったんだ。

メイが先鋒を切り崩し、それに追随するように兵達が猟犬の如く食いついていく。

だが、相手は獲物になるような可愛げのある兎ではない。
猛然と喰らい返す獅子だ。
狂戦士共は猛反撃を行い、アースガルズ兵を蹴散らしていく。
「メイ殿の部隊は囮、敵を引き付ける役目ですね。引き付けたところでアレク殿とティー殿の部隊で挟撃し、孤立させると言った所ですか…」
「そうね。だけど、そう簡単に食い付くかしらね…」
クロエはアースガルズの戦術を解説するが、レテシア様はその戦術に懐疑的である。
レテシア様もヨツンヘイムで狂戦士兵を見たことがあるはずだ。
だから、今回のヴァルキリア兵の様子がおかしいことも気付いているだろう。
クロエが説明した通り、狂戦士部隊のメイの部隊に食らい付いた。
そして、食らい付いた部隊にアレクとティーの部隊が挟撃し、狂戦士部隊は孤立化していく。
予定通りだったが、ヴァルキリアはさらなる伏兵を潜めていたのか、食らい付いた部隊の数倍の軍勢で挟撃しているエリニュスの部隊を喰らい尽くそうとしてくる。
「狂戦士が戦術を駆使しているなんて…」

ヒュプノスは狂戦士にさらなる可能性を付加させたのか…。

一人一人が一騎当千の実力を誇る狂戦士が戦術を駆使したとなれば一片の隙も無くなってしまう。

『アースガルズの陣が押されてしまっています！』

レテシア様は直ちに念話でモーモス陛下に伝える。

『相分かった！直ちにエリニュス殿等に援軍を向かわせろ！タナトス将軍！』

『心得た！』

タナトス隊はエリニュス隊を救出に向かっていく。

『グレイブ殿は敵の攪乱をしてタナトス隊の援護を！アイリウス将軍お呼びエリアルト将軍は伏兵を迎え撃て！』

『承知！』

『御意！』

『分かりました！』

伏兵はエリアルト隊とアイリウス隊が迎え撃つ形で援軍を送っている。

グレイブ殿下率いる部隊は遊撃隊として戦場を掻き乱してヴァルキ

リア軍を翻弄していく。

『儂等は本陣を固めるのじゃ！羽虫一匹も逃すではないぞ！』

モーモス陛下がいる本陣にはフォンベルク卿が率いる精鋭部隊が固めていた。

「モーモス陛下に知らせる必要がありますね」

戦場は荒れ始め、アースガルズ軍とヴァルキリア軍は悲鳴を響かせ、血を舞い散らせながらも入り乱れていく。

こうなれば念話が入り交じって個々で伝えるのは困難となっていく。

一刻も早く本陣に戻り、モーモス陛下に直接報告して作戦を立て直すことが先決だ。

私達偵察部隊が本陣へと戻ろうとした矢先だった。

『そうはいかないよおぉ！君達は僕に捕まって糧にされてしまうのさ！大いなる実験のためにね！ひゃはははぁあああっ！』

突然奇声が響き、私達は辺りを見渡す。

黒と白を基調とした雑伎団が着るような派手な衣装。

目を細くして薄く笑っている白い仮面。

小馬鹿にしたような芝居じみた仕草。

およそ戦場には似合わない奇天烈な格好でいるが、身に纏っている殺気が唯の不気味な道化師でないことを告げている。

……。

『アパテーには絶対に手を出すな。奴は多分、道化師のような派手な姿をしていて仮面を被っているはずだ。奇天烈な服装を纏っている者はまずアパテーだろう。奴と遭遇したら何もせずに逃げろ』

……。

アレクの言葉を思い出す。

この不気味な道化師は間違いなくアパテーだ。

クロエとレテシア様も気付いたのか無言で頷き、逃げる算段を考えていく。

「ひゃはははっ！その顔は僕が何者かを悟っているね！そうさ！僕こそが泣く子も黙るヴァルキリア軍最恐の狂科学者アパテーさ！それにしても如何かな？僕が手塩にかけて作った逝かれた兵隊共の素晴らしい戦い振りは！余りの素晴らしさに漏れてしまったかい？ははははははっ！僕は漏れるのを我慢して溜まっていって困っていたところだよ！だけど、我慢は良く無い！溜まっているものはきちんと吐き出してすっきりさっぱりさせないと病気になっちゃうよねえ！病気を甘く見てはいけないよ！古来より敵の刃や魔法を全く寄せ付けなかった英雄も病気だけは一般人と変わらず苦しんで逝ってしまった場合が多かったからね！真に最強の敵は実は内なる所に潜んでいるのだよ！つまり病気を蔓延させる細菌なのさ！だから僕はこの戦場でちょっとした実験をやっている。ほら、もうすぐ実験の成

果が現れ始めることだよ。伝説の英雄ですらも容易く死に至らしめる小さい悪魔が刃を向けてくる様をじっくりと見物するといいさ…」

声質からして仮面の道化師が女であることが分かる。

美声ではあるが、下劣な言い回しが全てを台無しにしてしまっていた。

それにしても長々と喋ってきたけど、聞き捨てならないことを確かに言っていた。

実験の成果がもう少しで現れるって、まさか！

アースガルズ軍が戦っている戦場に視線を向けて唖然とする。

「何なのこれは？身体から血が噴き出ている…」

戦場がアースガルズ兵の血によって真紅に染まっていく。

「ぎゃあああああっ！」

「血が止まらないよ！」

「嫌だ…こんな死に方なんて嫌だぁあああああっ！」

まさに阿鼻叫喚という言葉が嫌と言うほど似合ってしまう光景だ…。

アースガルズの陣形はあっという間に乱れていき、ヴァルキリア兵が容赦無く畳みかけてくる。

恐るべき攻撃だが、タナトスやアイリウス等将軍やそれに準ずる高等兵士達は以前として血を流すことなく動けている。

ある程度の魔力耐性があれば効き目は薄いのだろう。

だが、大半は血を流して苦しんでおり、もはや戦争どころではない様子だ。

もはやこれは戦争なんかじゃない！

ただの虐殺だ！

「ひゃはははっ！戦場に咲き誇る紅い華は何て美しいことか！この絶景が見れただけでも実験をやった甲斐があったというものだよ！見るがいい！紅く彩る命の花びらを！聞くがいい！最後に絞り出す魂の叫びを！汗を流せ！涙を流せ！血を流せ！諸人の華やかなる戦慄の舞踏を刮目せよ！これこそが命の輝き！魂の芸術だ！」

早く目の前の生きた狂気から逃げ出さないと毒されてしまう！

私とクロエはアパテーの視界に映らない場所へと退避しようとした矢先、レテシア様が何故かその場に残って薙刀を構えていた。

「レテシア様！」

「アビス、クロエ、そのまま下がって！ごほっ！」

レテシア様が戦場で苦しんでいるアースガルズ兵と同様に身体から血が噴き出しながらも薙刀を震っていた。

アパテーとレテシアの間にある空間に亀裂が生じていく。

「ふふっ…空間断裂で私がばらまく細菌を空間ごと遮断したわけかね。無粋だねぇ。進化には痛みを伴い血が流れるのが定めだ。君達はそれを拒んだのだよ！進化を拒んだわけだ！即ち停滞を望んだことになる！ならば生きている意味があるのだろうか？停滞した者はもはや淘汰される以外に未来は無い！ゆえに死を持って世界から淘汰されたまえ！ひゃはははははっ！私が手伝ってあげよう！私の細菌はまさに進化を促す天使だ！天使の行進が空間断裂如きに妨げられたりはしないものさ！空間ごと君達を淘汰してあげるよ…」

亀裂がレテシアがいる方向へと拡大している。

アパテーの細菌が浸食しているのか！

「お母さん！」

クロエは感情が高ぶってしまったためなのか、幼少の頃から呼んでいた言葉でレテシアを呼びかけていた。

そんなクロエを見てレテシアは優しく微笑み、薙刀を再度振るって周囲が炎へと包まれていく。

「支配されそうだった空間そのものを燃焼させる咄嗟の機転、さすがはパラディスム歴代最強の頭領と謳われるだけはあるねえ。レテシア・パラディスム。くっくっくっ…思ったよりも楽しめそうで嬉しいよ…」

アパテーの笑みが止まったと同時に強大な威圧感を感じ始める。

享楽的な振る舞いをしても上級神だと思い知らされる圧倒的な威圧感だ。

「私が奴を食い止めます！今の内に陛下の下に！早く！」

「させないよ！君達はここで僕の実験台に成り果てるんだ！」

アパテーが放つ魔力波が燃焼された空間ごと吹き飛ばし私達も鈍器で打たれたかのような衝撃が襲ってくる。

「きゃああっ！」

「うぐっ！」

「あうっ！」

これが上級神の力というの…。

上級神の圧倒的なる力に私達は成す術も無く蹴散らされていく。

「君達は僕が求める神の子だから絶対に逃がしはしない。ふふっ…あの御方の復活の糧になってもらうためにもね…」

倒れ伏す私達に微笑みながら歩んでくるアパテー。

果たして私達はこの残酷な道化師の饗宴から逃げ出すことが出来るのか？

けど、私にはまだやることが残ってるんだ…。

主…。

姉者…。

私に力を…。

「では、眠ってもらおうか?それとも抵抗できないように四肢をもいだ方がいいかな?いや、そうしよう!そうするべきだ!僕の必要なのは魂と血肉なんだから手足が少々無くても全然問題ならないからね!それがいい!何て素晴らしく効率的手段なんだろうか!こんな発想が出来た自分を褒めてやりたいぐらいだ!あはははははっ!そういうことだから大人しくしてね。何、痛いのは暫くの間だけさ。ほんの長い間発狂するぐらいの痛みに苛まれるけど、別に良いよね?進化の過程に置いて痛みはお約束だ。痛みを乗り越えてこそ神に近づく道へと辿る権利が手に入れられるのだよ。その代わりに我慢してくれると嬉しいな。たまに失敗することもあるけど、無駄にはならないよ。君達はそれでも進化の過程において尊い糧になったことには違いないからね。だから安心して僕に全てを委ねておくれ。パラディスムの諸君…」

恐い…。

こんな奴の実験体になんかなりたくない…。

助けて…。

助けてよ、主…。

ロスト…。

「アビス！クロエ！」

不意にレテシア様が叫んで長刀を振るって衝撃波を私とクロエに放ってくる。

咄嗟のことで反応できなかった私とクロエはそのまま吹き飛ばされていく。

「残念、二人外してしまったか…」

「あぐあああっ！」

アパテーの心底残念そうな声が響いた瞬間にレテシア様の悲鳴が響いてくる。

レテシア様の左腕が落ち、無くなった肩の付け根から血が大量に噴出している光景に目を奪われしまう。

「母さん！」

「来ては駄目です！貴方達だけでも！あぐっ！」

アパテーが手を振り下ろした瞬間に残った右腕も落ちて血が噴き出ていく。

「感動的な名場面だねえ。こういう展開を私は見たかったのだよ！やはり演劇よりも真に迫っていて良いものだ！これだから実験は止められないのさ！あはははははっ！」

「アパテー！」

「駄目です！アビス様！」

怒りに我を失ってアパテーに飛びかかろうとした私をクロエは止めに入ってくる。

「お母さんが命がけで作った逃げる機会なんです！それを無駄にしてしまったら…」

クロエが涙目で突貫しようとする私に思いとどまらせようとしてくる。

悔しいけど、私達では上級神には勝ち目が無い…。

逃げるしか術が無いんだ…。

「どうしたのかね？せっかく君達の母上が作った絶好の機会だ。母上を見捨てて疾く逃げたまえ…」

「くっ！」

落ち着いてアビス、これは私達を捕らえるためのアパテーの安い挑発よ。

そんなことは分かっている！

だけど…。

「早く！早く逃げるのです！」

両手をもがれても懸命に私達に逃げることを促す母さん…。

それを楽しそうに眺めてくるアパテー。

「さあ、どうする？アビス・パラディスム。君の選択に期待しようか…」

私は…。

私は…。

「ごめんなさい！母さん！」

逃げ延びる！

「アビス様！」

私はクロエの手を引いてアパテーの視界から離脱しようと駆け抜ける。

「ははははっ！悲しいほどに賢明な判断だ、アビス…それでこそあの御方の心臓になりうる候補、神の子だと言えよう。もしかすると君こそが最有力候補かもしれないね…」

あの御方の心臓？

神の子？

最有力候補？

アパテーが何を言ってるのか全然分からないけど、今は逃げるのが先決！

身体の周囲に防御結界を構築して戦場を駆けていく。

……。

……。

…。

戦場は今や地獄絵図と化している。

援軍に行ってるタナトスの部隊も陣形が乱れていき、完全に乱戦状態へと突入している。

グレイブ隊も戦場を掻き乱すだけの機動力は無くなっていた。

エリニュス隊はヴァルキリア軍と壮絶なまでに互いの血肉を貪るように激突している。

「アレク…みんな…」

このままでは例えこの戦いを乗り切っても後が続かなくなってしまう。

ヴァルキリアはまだ後方に余力を残しているというのに…。

「主…早くきて…」

主は今頃はモロス率いるビフレスト皇国軍と激戦を繰り広げているのだろう。

ほぼ単身で戦いを挑んでいるのだからそう簡単には決着は付くはずがないが、それでも縋りたくなってしまう。

不意に戦場でさらなる異変を私は目にしていく。

アパテーがばらまいた細菌のためか、アースガルズ兵のみならず魔力耐性がある狂戦士等も少しずつだが、身体から血が噴きだしていた。

けど、狂戦士等はそんなことお構いなしにひたすら敵をアースガルズ兵を切り刻むことに腐心している。

まるでそうすることが当然であると操られた人形のように無表情で…。

「アビス様！彼女達に何かが取り憑いています！これは…」

驚愕しているクロエの言葉に私もまた狂戦士に取り憑いている何かを感じ取ろうとする。

「これは…なんてことなの…」

余りにも馬鹿馬鹿しい程に強大な力がアパテーの細菌をも物ともせず突き動かしていたのだ。

「全ての狂戦士に神が降ろされているなんて…」

何故、今まで気付かなかったのだろうか？

私と姉者がヴァルキリアに潜入して気付く機会は幾らでもあったはずなのに…。

それにこれ程までの規模の神を降ろし、尚かつ制御するなんて人の力を遙かに越えてしまっている。

上級神でもこれだけの力は振るえないだろう。

もし、そうであればアレク達がとっくにやっていることだ。

一つだけ分かったことは世界に戦乱をもたらしているヒュプノスとは比較にならない程の強大な敵がヴァルキリアの背後にいるということだ。

何しろアパテーのような危険極まりない上級神を前線に出ているのだ。

背後にはそれ以上の強大な敵がいても何ら不思議ではない。

このことを早くみんなに伝えないと…。

……。

『フレアー』

……。

殺気を感じて私とクロエは横に飛んでいく。

私達がいた場所に爆炎が生じて一瞬にして地面が抉り取られていった。

この技は姉者の神アテナの必殺技フレアーだ。

私は短刀を殺気を感じた虚空へと投げつける。

金属音と共に空間が捲れ、その奥に銀色の鎧を纏った者が姿を現す。

アテナを神降ろしをして融合している姉者だった。

「姉者…」

姉者は無言で刃を私達に向けてくる。

身体から血が噴きだしていないところから姉者には細菌の効果は及んでいないらしい。

「アビス様」

「ごめん、クロエ。あんたは陛下に下に行って。私は…」

私は姉者と対峙する。

「姉者とここで止めてみせる」

「しかし、エル様は…」

姉者はレテシア様ですらも叶わなかった実力者だ。

けど、私も姉者に負けないぐらいに実力は付けてきた。

「私はもう姉者の影なんかじゃない！それを証明してみせる！出でよ！ペルセポネ！」

青銅色の鎧を身に纏い、長槍を持った戦女神が現る。

「我が力となれ！」

戦女神ペルセポネが私の身体に融合し、青銅の鎧と長槍を備わっていく。

銀色の戦女神と青銅の戦女神が長槍を携えて向かい合う。

「お願い！行って！」

「くっ…分かりました…」

離脱しようとするクロエに視線を向け、飛び出そうとする姉者の前に私は立ち塞がっていく。

「私から視線を外すなんて随分と余裕だね。姉者！」

「アビス…パラディスム…」

姉者は私の姿に反応したのか、戸惑った様子を見せてきた。

私はクロエは気配が周囲から消えるのを確認して姉者に獲物を向ける。

姉者も私に倣うように獲物を向けてくる。

お互いに向かい合ったまま動かない。

思えば神降ろしをした状態で姉者と向かい合うのは初めてだった。

故郷ヨツンヘイムを滅ぼし、レテシア様をもねじ伏せた姉者の神アテナ。

それに対するのは私が降ろした神ペルセポネ。

どちらも同じ中級神で力は互角。

ならば後は術者の力量が問題なだけ。

「決着を付けよう！姉者、いえ、エル・パラディスム！」

「アビス…アビス！貴方を…捕らえる！それが…私の使命！」

私と姉者は申し合わせたかのように同時に動いて槍を何合も打ち合っていく。

「やあああっ！」

「はあああっ！」

洗脳されても姉者の実力は微塵も色褪せていない。

むしろ遠慮が無くなった分さらに鋭くなっているような気もしてくる。

まるで合わせ鏡のように互いが繰り出す刃が合わさっていく。

私には姉者の攻撃が手に取るように分かってしまう。

けど、それは姉者とて同じ事だ。

「たあああっ！ソウルクラッシュ！」

「うぐっ！」

私が放つ渾身の一撃を姉者は受け止めるが体勢が崩れていく。

そこにさらなる必殺の一撃を放とうとしたときに姉者はお見通しと言わんばかりに手を翳していく。

「イージス」

「ぐっ！」

強固な防御結界が展開され、自身に攻撃の反動が襲ってくる。

私の身体から血飛沫が上がり、姉者は畳みかけるように猛然と反撃をしてくる。

「こんなんで…やられる私なんかじゃないわ！インフィニティーバースト！」

「イージス！がはっ！」

零距離から放った私の波動は先ほどの防御結界を突き抜けて姉者に直撃する。

自分が放った技の衝撃により私は弾き飛ばされ、地面に叩きつけられていく。

「くっ…私は負けない…」

咳き込みながら立ち上がり、前を見据える。

そこには血塗れになっている姉者がいた。

「ア…ビ…ス…」

「姉者…」

やっぱり私達は双子なんだと思ってしまう。

同じ男を好きになり、同じように傷ついて同じ目でお互いを見つめ合っている。

けど…。

これでもう終わり…。

私と姉者の道は完全に分かたれることになる…。

「ごめん、私の力では姉者が救えない…」

本当にそうなんだろうか？

「だから、私は姉者を倒すしか…」

主だったら何が何でも救うのだろう。

どれだけ傷ついても…。

「御覚悟を…」

私は違う。

私はただ姉者の影から解放されたくて…。

だから…。

「姉者…」

私の槍が姉者に向かって突き進んでいく。

もう止まることが出来ない！

……。

『アビスは凄く頑張りますね。私もアビスを見習うようにしないといけませんね…』

……。

目に熱い何かが溢れてくる。

……。

『それを当然と言えるアビスは本当に凄いのですよ。私はアビスが羨ましい…』

……。

視界が歪んでいく。

……。

『うかうかしているとアビスに負けてしまうかもしれませんね』

『姉者がうかうかしてなくても私が勝ってみせるんだからね』

……。

身体が急に重くなってくる。

何故？

……。

『アビス』

……。

何故？

何故、私は姉者を嫌いになれないのか…。

必死に姉者の嫌な部分を思い出そうとしても出来ない。

それは当然だった。

だって、姉者はいつも私に優しく微笑んでいてくれたから…。

何でこんな時に気付いてしまったの？

もう少し早く気付いていれば…。

私が姉者のの胸を貫こうとした瞬間に体感時間が麻痺してしまう。

これはいったい何なの！

『ひゃはははははっ！何て旨味がある葛藤を秘めた神の子なのだろうか？まさに君の苦悩に乾杯とも言える美酒！僕は君の虜になってしまったよ！君に比べれば先ほど捕らえたばかりの獲物共が不味く見えてしまうほどだ！さてと、このまま姉妹同士で殺し合っては面白くない。君の姉もまた惹き付ける輝きを秘めているからね。だから、これはご褒美さ…』

無意味に長い台詞の羅列が耳障りに響いてくる。

この声はアパテー！

「ぐっ！」

身体が弾かれ、何とか受け身を取って体勢を立て直して前方を見据える。

視線の先には姉者を抱きかかえたアパテーの姿があった。

「君とエルが殺し合う運命を帳消しにしてあげよう。その代わり君はあの御方の心臓となり、愛する者を殺す運命へと辿ることになるがね。くははははっ！もう運命の歯車は既に動き始めている！君の居場所はアースガルズには有りはしない！淘汰され、私の下に縋ってくることだろうよ！」

「姉者を返せぇえええっ！」

こんな奴に姉者を好きにさせてたまるか！

血塗れになっている身体を奮い立たせてアパテーの方へと駆けていく。

「そう言えば忘れていたよ。不純物を取り除かないとね…」

アパテーが虚空に向かって鷲掴みするような仕草をした途端に首に強烈な圧迫感を感じていく。

私は不可視の力で中空に吊り上げられていく。

「あね…じゃ…」

アパテーに抱きかかえられている姉者を見て目頭が熱くなってくる。

何て無力なんだろうか…。

姉者に勝つために積み上げてきたものが何一つこの邪悪な道化師に通用しないのだ。

「ほら、君の身体を巣くう汚らわしい寄生虫を取りだしてあげるよ」

私の身体から青銅の鎧を纏った戦女神ペルセポネが出てくる。

アパテーに引きずり出されてしまってるんだ！

まさか神降ろしで融合した者を強引に引きはがすことが出来るなんて…。

「アビ…ス殿…」

ペルセポネが私に助けを乞うように手を伸ばしてくる。

「くっ！ペルセポネ！」

私はその手を掴もうと腕を伸ばそうとする。

里を出る前から共に乗り越えてきた戦友であるペルセポネ。

彼女を助けないと！

「アビ…あああああああっ！」

手を伸ばしていたペルセポネの身体が突如業火に包まれていく。

「寄生虫は焼却しないといけないよね！くははははははっ！」

あれほど美しかったペルセポネの姿が業火によって焼けただれ、亡者のような絶叫を上げている。

灰となって崩れていくペルセポネの姿を私はただ見つめる事しかできなかった。

「これで君は清らかなる奈落の巫女へと戻っていくのだ！ひゃははははっ！」

首の圧迫感は消え、虚空で高笑いをするアパテーを見る。

よくも、ペルセポネを…。

「アパテーぇえええええっ！」

「駄目駄目、無力な君の攻撃なんて可愛い猫がじゃれつくようなものさ」

飛びかかる私をアパテーは掌を押すようにして向けただけで弾き飛ばしていく。

「がふっ！」

受け身も取れずに地面に蹲る私をアパテーはますます嘲笑う。

ペルセポネを失い、姉者もまた奪われようとしている中で私は何と無力なのか…。

「暫しの間、ご機嫌よう、アビス・パラディスム。君の愛しい姉は

他の神の子共々僕が責任を持って世話するから安心しなさい。あはははははっ！」

「姉者ぁあああああっ！」

アパテーは高笑いをしながら姉者と共に虚空へと消えていく。

手を伸ばそうにも身体が言うことを聞かず、成す術もなく見届けるしかなかった。

『そうそう、細菌はもう撤去したから安心すると良いさ。それと僕の所に来たくなったら神降ろしの儀を行うといい。いつでも君の下へと馳せ参じてあげよう…』

最後にアパテーの声が脳裏に不気味に響いてきたのだった。

その後、私はタナトスとアイリ、エリー、レテシア様がヴァルキリアに捕らわれてしまったことを知ることになる。

……。

……。

……。

……。

……。

……。

…。

「丁度その時に主はビフレストを制圧しモロスを屈服させたことが知れ渡ったことでヴァルキリア軍は撤退していったわ。けど、別にビフレストが制圧されたことで反ヴァルキリア同盟が動き出すことを恐れてのことではなかった。ただタナトス、アイリウス、レテシア様という神の子を回収したことで任務を果たしたから用済みということで去っただけ…」

アビスは自嘲じみた笑みを見せてくる。

そんなアビスに私はかける言葉が見つからなかった。

この世界の私もまたヴァルキリアの戦いに間に合うことが出来ず、タナトス達を救うことが出来なかったのだ。

それにしてもまさかアパテーが暗躍していたとはな…。

アビスが見せてくれた記憶の中の登場したアパテーは言動といい、姿といい、全てがガイアを彷彿させるものだった。

アパテーはガイアが率いる四高弟とティターン神軍をエロス軍に寝返らせために仲介したとアレクは言っていた。

もしかするとガイアとアパテーは何かしらの因縁があるのかもしれないな…。

「無力な自分を責めたけど、それ以上に邪魔な女共が消えたことに喜んでいた自分に絶望してしまったのよ…」

「アビス…」

アビスは私を見て不気味に微笑んでくる。

まるで今までのことは実は大したことはないのだと種明かしするように…。

「けど、困ったことに主はますます私を見てくれなくなったの。捕らわれている姉者を始め、側にいない女共のことばかり！だからね…」

私の頬を挟み込み狂気に満ちた笑顔を見せてくるアビス。

「私も主の前から居なくなることにしたのよ。それが終わりの始まり…」

……。

『彼女はもっと君に見てもらいたかったのさ。君は攫われたエルのことばかりを考えて、側にいるアビスを見ようとしなかった。それが彼女の心を傷つけ、結果的に蔑ろにしていたのだよ』

……。

クロノスの言葉を思い出す。

側にいて支えてくれたアビスの気持ちを考えなかったが故に起きてしまった悲劇。

私がアビスを第二のカオスへと造り上げてしまったしまったのだと…。

「さてと、私と主が永遠の絆を結ぶ物語の始まるわよ…んっ」

アビスは私を押し倒して貪るように口づけてくる。

まるで終わってしまうことを惜しむように…。

「ちゅぱっ…あはははははっ…ちゅる…終わりの始まりよ…んちゅ」

顔と言わず、首筋、胸とアビスの唇が吸い付いつかれる。

身体がアビスの色へと染まろうとしていく。

私はただアビスの口付けを受け続けるしかない。

残酷なる運命を知らしめられる覚悟を持って…。

アビスの過去の幻影はまだ続いていくのだった。

……。

……。

…。

第１１６話：血戦（後書き）

戦争の描写は難しいっすね…。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9867r/

馬鹿で臆病で最強の生き残り奮闘記

2011年11月17日02時36分発行